

茨城県教育財団文化財調査報告第49集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書18

南三島遺跡 3・4区(II)

平成元年 3月

住宅・都市整備公団 つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第49集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書18

みなみ みしま
南三島遺跡3・4区(II)

平成元年3月

住宅・都市整備公団 つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団

序

住宅・都市整備公団は、竜ヶ崎市北部台地上にニュータウンの建設を進めてまいりましたが、その建設予定地内には数多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されておりました。財団法人茨城県教育財団は、住宅・都市整備公団と埋蔵文化財発掘調査事業についての委託契約を結び、記録保存のための調査を続け、これまでに36遺跡の調査を終了し、17冊の報告書と2冊の概報を刊行してまいりました。

南三島遺跡3・4区は、昭和59年度から昭和61年度にかけて調査を実施し、縄文時代から平安時代にかけてのきわめて貴重な資料が発見され、その成果の一部は、縄文時代編として既に刊行いたしました。本書は、弥生時代以降編として昭和62年度から昭和63年度にかけて整理したものであります。前刊書とともに、本書が郷土の原始・古代史の解明に、また、広く教育文化向上の一助となることを希望してやみません。

なお、発掘調査・整理を進めるにあたり、委託者の住宅・都市整備公団からいただいた御協力に対し、厚く感謝申し上げます。また、茨城県教育委員会・竜ヶ崎市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導・御協力をいただいたことに、心より感謝の意を表します。

平成元年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 磯田 勇

例 言

- 1 本書は、住宅・都市整備公団の委託により、財団法人茨城県教育財団が、昭和59年度から昭和61年度にかけて調査を実施した竜ヶ崎市羽原町に所在する南三島遺跡3・4区の、弥生時代以降に関わる遺構と遺物についてまとめた埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 南三島遺跡3・4区の調査・整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	竹内 藤 男 川又 友三郎 磯田 勇	～昭和61年 3月 昭和61年 4月～昭和63年 5月 昭和63年 6月～
副 理 事 長	川又 友三郎 磯田 勇 小林 元	～昭和61年 3月 昭和61年 4月～昭和63年 3月 昭和63年 4月～
常 務 理 事	綿引 一 夫 萩原 藤之助 滑川 貞 雄	～昭和60年 3月 ～昭和61年 3月 昭和61年 4月～
事 務 局 長	小林 洋 堀井 昭 生 坂場 庸 克	～昭和60年 3月 ～昭和62年 3月 昭和62年 4月～
調 査 課 長	青木 義 夫	昭和59年 4月～
企 画 管 理 班	班 長 市毛 洋 一 〃 北 畠 健 〃 水 飼 敏 夫 主任調査員 加藤 雅 美 〃 山 本 静 男 係 長 田 所 多佳男 〃 園 部 昌 俊 主 任 山 崎 初 雄 主 事 鈴 木 三 郎 〃 海老沢 一 夫 〃 大曾根 徹 〃 富 永 明 〃 大 部 章	～昭和60年 3月 ～昭和62年 3月 昭和62年 4月～ ～昭和61年 3月 昭和61年 4月～ 昭和60年 4月～昭和62年 3月 昭和63年 4月～ 昭和60年 4月～ ～昭和60年 3月 ～昭和60年 3月 ～昭和61年 3月 昭和62年 4月～昭和63年 3月 昭和61年 4月～

調 査 班	班 長	安 蔵 幸 重	昭和59年度
	〃	倉 本 富美男	昭和60年度
	〃	沼 田 文 夫	昭和61年度
	主任調査員	山 本 静 男	昭和60年度 3・4 区調査
	〃	佐 藤 正 好	昭和59年度 3 区調査
	〃	斉 藤 弘 道	昭和60年度 3・4 区調査, 昭和61年度 3・4 区(I)整理・執筆
	〃	小 山 映 一	昭和60年度 3・4 区, 昭和61年度 4 区調査 昭和62・63年度 3・4 区(II)整理・執筆
	〃	高 村 勇	昭和61年度 4 区調査
	調 査 員	根 本 康 弘	昭和59年度 3 区調査
〃	吉 川 明 宏	昭和61年度 4 区調査	
整 理 班 長		倉 本 富美男	昭和62年度
		沼 田 文 夫	昭和63年度

- 3 本書は、発掘調査担当者の協力を得て、小山映一が執筆・編集を担当した。
- 4 本書の作成にあたり、石器の石質鑑定について茨城県立土浦工業高等学校長蜂須紀夫氏に、墨書土器について茨城キリスト教大学学長志田諄一氏に、中世の陶器について茨城県立歴史館後藤道雄氏にそれぞれ御指導を得た。
- 5 本書に使用した記号等については、第3章第1節2の記載方法の項を参照されたい。

目 次

序

例 言

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査方法	2
第3節 調査経過	5
第2章 位置と環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	10
第3章 遺構と遺物	16
第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法	16
1 遺跡の概要	16
2 遺構・遺物の記載方法	17
第2節 竪穴住居跡と出土遺物	25
1 弥生時代	25
(1) 3区	25
2 古墳時代	34
(1) 3区	34
(2) 4区	173
3 奈良・平安時代	210
(1) 3区	210
(2) 4区	278
4 竪穴遺構	364
(1) 3区	364
(2) 4区	368
第3節 土坑	370
1 粘土貼り土坑	370

(1) 3区	370
(2) 4区	371
2 墓壙及び墓壙と思われる土坑	376
(1) 3区	376
(2) 4区	378
第4節 地下式坑	405
(1) 3区	405
(2) 4区	407
第5節 井戸状遺構	413
(1) 3区	413
(2) 4区	416
第6節 溝	418
(1) 3区	418
(2) 4区	434
第7節 その他の遺構	455
1 炭窯	455
2 性格不明の遺構	456
第8節 遺構外出土の遺物	458
第9節 土器以外の出土遺物	461
1 土製品	461
2 石器・石製品	467
3 金属製品	469
4 古銭	471
5 墨書・刻書	472
第4章 まとめ	474
第1節 土器について	474
第2節 集落の変遷	490
終章 むすび	509

插图目次

第 1 图	小調査区名称图	2	第 34 图	第30号住居跡出土遺物実測图	59
第 2 图	南三島遺跡 1～7 区配置图・大 調査区名称图	3	第 35 图	第31号住居跡実測图・出土遺物位置图	60
第 3 图	南三島遺跡土層柱状图	4	第 36 图	第31号住居跡出土遺物実測图(1)	62
第 4 图	南三島遺跡周辺地形及び周辺遺 跡位置图	14	第 37 图	第31号住居跡出土遺物実測图(2)	63
第 5 图	南三島遺跡 3・4 区遺構分布图	19・20	第 38 图	第31号住居跡出土遺物実測图(3)	64
第 6 图	第25号住居跡実測图	26	第 39 图	第32号住居跡実測图	67
第 7 图	第25号住居跡出土遺物実測・拓 影图	27	第 40 图	第32号住居跡出土遺物実測图	68
第 8 图	第27号住居跡実測图	28	第 41 图	第33号住居跡実測图	70
第 9 图	第27号住居跡出土遺物実測・拓 影图	28	第 42 图	第33号住居跡出土遺物実測图	71
第 10 图	第29号住居跡実測图	29	第 43 图	第36号住居跡実測图	73
第 11 图	第29号住居跡出土遺物実測・拓 影图	30	第 44 图	第36号住居跡出土遺物実測图	75
第 12 图	第53号住居跡実測图	31	第 45 图	第38号住居跡実測图	78・79
第 13 图	第53号住居跡出土遺物実測・拓 影图	32	第 46 图	第38号住居跡出土遺物位置图	80
第 14 图	第94号住居跡実測图	33	第 47 图	第38号住居跡出土遺物実測图(1)	81
第 15 图	第94号住居跡出土遺物実測・拓 影图	34	第 48 图	第38号住居跡出土遺物実測图(2)	82
第 16 图	第 1 号住居跡実測图	35	第 49 图	第38号住居跡出土遺物実測图(3)	83
第 17 图	第 1 号住居跡出土遺物実測图(1)	36	第 50 图	第39号住居跡実測图	86
第 18 图	第 1 号住居跡出土遺物実測图(2)	37	第 51 图	第39号住居跡出土遺物実測图	87
第 19 图	第 5 号住居跡実測图	40	第 52 图	第40号住居跡実測图	89
第 20 图	第 5 号住居跡出土遺物実測图	41	第 53 图	第40号住居跡出土遺物実測图	90
第 21 图	第 7 号住居跡実測图	43	第 54 图	第41号住居跡実測图	92・93
第 22 图	第 7 号住居跡出土遺物実測图	44	第 55 图	第41号住居跡出土遺物実測图	93
第 23 图	第13号住居跡実測图	46	第 56 图	第42号住居跡実測图	95
第 24 图	第13号住居跡出土遺物実測图	47	第 57 图	第42号住居跡出土遺物実測图	96
第 25 图	第14号住居跡実測图	48	第 58 图	第43号住居跡実測图	97
第 26 图	第14号住居跡出土遺物実測图	49	第 59 图	第43号住居跡出土遺物実測图(1)	99
第 27 图	第15号住居跡実測图・出土遺物位置图	50	第 60 图	第43号住居跡出土遺物実測图(2)	100
第 28 图	第15号住居跡出土遺物実測图	51	第 61 图	第44号住居跡実測图	102
第 29 图	第19号住居跡実測图	53	第 62 图	第44号住居跡出土遺物実測图	103
第 30 图	第19号住居跡出土遺物実測图	54	第 63 图	第50号住居跡実測图	105
第 31 图	第21号住居跡実測图	56	第 64 图	第50号住居跡出土遺物実測图	106
第 32 图	第21号住居跡出土遺物実測图	57	第 65 图	第52号住居跡実測图	107
第 33 图	第30号住居跡実測图	58	第 66 图	第52号住居跡出土遺物実測图	108
			第 67 图	第55号住居跡実測图	110
			第 68 图	第55号住居跡出土遺物実測图	110
			第 69 图	第57号住居跡実測图	112
			第 70 图	第57号住居跡出土遺物実測图	112
			第 71 图	第59号住居跡実測图	113
			第 72 图	第59号住居跡出土遺物実測图	114
			第 73 图	第60号住居跡実測图	116

第74図	第60号住居跡出土遺物実測図……………116	第116図	第114号住居跡実測図……………168
第75図	第61号住居跡実測図……………118	第117図	第114号住居跡出土遺物実測図……………169
第76図	第61号住居跡出土遺物実測図……………119	第118図	第115号住居跡実測図……………170
第77図	第62号住居跡実測図……………120	第119図	第115号住居跡カマド実測図……………171
第78図	第62号住居跡出土遺物実測図……………121	第120図	第115号住居跡出土遺物実測図……………172
第79図	第63号住居跡実測図……………123	第121図	第116号住居跡実測図……………173
第80図	第65号住居跡実測図……………124	第122図	第8号住居跡実測図……………174
第81図	第65号住居跡出土遺物位置図……………125	第123図	第8号住居跡出土遺物実測図……………175
第82図	第65号住居跡出土遺物実測図……………126	第124図	第9号住居跡実測図……………176
第83図	第67号住居跡実測図……………128	第125図	第9号住居跡出土炭化材・遺物 位置図……………177
第84図	第67号住居跡出土遺物実測図……………129	第126図	第9号住居跡出土遺物実測図(1)……………179
第85図	第68号住居跡実測図……………130	第127図	第9号住居跡出土遺物実測図(2)……………180
第86図	第68号住居跡出土遺物実測図(1)……………132	第128図	第15号住居跡実測図……………181
第87図	第68号住居跡出土遺物実測図(2)……………133	第129図	第15号住居跡出土遺物実測図……………182
第88図	第71号住居跡実測図……………135	第130図	第20号住居跡・カマド実測図……………184
第89図	第71号住居跡出土遺物実測図……………135	第131図	第20号住居跡出土遺物実測図……………185
第90図	第73号住居跡実測図……………137	第132図	第23号住居跡実測図……………186
第91図	第73号住居跡出土遺物実測図……………138	第133図	第23号住居跡カマド実測図……………187
第92図	第75号住居跡実測図……………139	第134図	第23号住居跡出土遺物実測図……………188
第93図	第75号住居跡出土遺物実測図……………140	第135図	第24号住居跡実測図……………190
第94図	第76号住居跡実測図……………142	第136図	第24号住居跡出土遺物実測図……………191
第95図	第77号住居跡実測図……………143	第137図	第25号住居跡実測図……………193
第96図	第77号住居跡出土遺物実測図……………144	第138図	第25号住居跡出土遺物位置図……………194
第97図	第95号住居跡実測図……………145	第139図	第25号住居跡出土遺物実測図……………195
第98図	第95号住居跡出土遺物実測図……………146	第140図	第32号住居跡実測図……………198
第99図	第98号住居跡実測図……………147	第141図	第32号住居跡炉跡実測図……………198
第100図	第98号住居跡出土遺物実測図……………148	第142図	第32号住居跡出土遺物実測図……………198
第101図	第99号住居跡実測図……………149	第143図	第35号住居跡・カマド実測図……………200
第102図	第99号住居跡出土遺物実測図……………150	第144図	第35号住居跡出土遺物実測図……………201
第103図	第104号住居跡・カマド実測図……………152	第145図	第36号住居跡・カマド実測図……………202
第104図	第104号住居跡出土遺物実測図……………153	第146図	第36号住居跡出土遺物実測図……………203
第105図	第107号住居跡実測図……………155	第147図	第39号住居跡実測図……………204
第106図	第107号住居跡出土遺物位置図……………156	第148図	第39号住居跡カマド実測図……………205
第107図	第107号住居跡出土遺物実測図(1)……………157	第149図	第39号住居跡出土遺物実測図……………205
第108図	第107号住居跡出土遺物実測図(2)……………158	第150図	第44号住居跡実測図……………207
第109図	第107号住居跡出土遺物実測図(3)……………159	第151図	第44号住居跡出土遺物実測図(1)……………208
第110図	第108号住居跡実測図……………162	第152図	第44号住居跡出土遺物実測図(2)……………209
第111図	第108号住居跡カマド実測図……………163	第153図	第2号住居跡・カマド実測図……………211
第112図	第108号住居跡出土遺物実測図……………164	第154図	第2号住居跡出土遺物実測図……………211
第113図	第112号住居跡実測図……………165	第155図	第4号住居跡・カマド実測図……………212
第114図	第112号住居跡カマド実測図……………166	第156図	第6号住居跡・カマド実測図……………214
第115図	第112号住居跡出土遺物実測図……………167		

第157図	第6号住居跡出土遺物実測図……………215	第198図	第101号住居跡・カマド実測図 ……264
第158図	第11号住居跡・カマド実測図……………217	第199図	第101号住居跡出土遺物位置図 ……265
第159図	第11号住居跡出土遺物実測図……………218	第200図	第101号住居跡出土遺物実測図 ……266
第160図	第12号住居跡・カマド実測図……………219	第201図	第102号住居跡・カマド実測図 ……268
第161図	第12号住居跡出土遺物実測図……………220	第202図	第102号住居跡出土遺物実測図 ……269
第162図	第23号住居跡・カマド実測図……………222	第203図	第103号住居跡実測図 ……271
第163図	第23号住居跡出土炭化材・遺物 位置図……………223	第204図	第103号住居跡出土遺物実測図 ……271
第164図	第23号住居跡出土遺物実測図……………223	第205図	第110号住居跡出土遺物実測図 ……272
第165図	第26号住居跡・カマド実測図……………225	第206図	第110号住居跡・カマド実測図 ……273
第166図	第26号住居跡出土遺物実測図……………226	第207図	第111号住居跡出土遺物実測図 ……274
第167図	第37号住居跡出土遺物実測図……………226	第208図	第111号住居跡・カマド実測図 ……275
第168図	第37号住居跡・カマド実測図……………227	第209図	第113号住居跡・カマド実測図 ……277
第169図	第45号住居跡・カマド実測図……………229	第210図	第113号住居跡出土遺物実測図 ……278
第170図	第45号住居跡出土遺物実測図……………230	第211図	第1号住居跡実測図……………279
第171図	第51号住居跡・カマド実測図……………231	第212図	第1号住居跡カマド実測図 ……280
第172図	第51号住居跡出土遺物実測図……………232	第213図	第1号住居跡出土遺物実測図……………281
第173図	第64号住居跡・カマド実測図……………234	第214図	第2号住居跡実測図……………283
第174図	第64号住居跡出土遺物位置図……………235	第215図	第2号住居跡カマド実測図 ……284
第175図	第64号住居跡出土遺物実測図(1)……………236	第216図	第2号住居跡出土遺物実測図……………285
第176図	第64号住居跡出土遺物実測図(2)……………237	第217図	第10号住居跡実測図……………287
第177図	第66号住居跡・カマド実測図……………239	第218図	第10号住居跡カマド実測図 ……288
第178図	第66号住居跡出土遺物実測図……………240	第219図	第10号住居跡出土遺物実測図……………289
第179図	第70号住居跡・カマド実測図……………242	第220図	第11号住居跡実測図……………291
第180図	第70号住居跡出土遺物実測図……………243	第221図	第11号住居跡出土遺物実測図……………291
第181図	第78・82号住居跡実測図……………245	第222図	第12号住居跡・カマド実測図……………293
第182図	第78号住居跡カマド実測図 ……246	第223図	第12号住居跡出土遺物実測図……………294
第183図	第78号住居跡出土遺物実測図……………246	第224図	第13号住居跡・カマド実測図……………295
第184図	第82号住居跡出土遺物実測図……………247	第225図	第13号住居跡出土遺物実測図……………296
第185図	第84号住居跡・カマド実測図……………248	第226図	第14号住居跡・カマド実測図……………297
第186図	第85号住居跡・カマド実測図……………250	第227図	第16号住居跡・カマド実測図……………298
第187図	第91号住居跡実測図……………251	第228図	第16号住居跡出土遺物実測図(1)……………300
第188図	第91号住居跡カマド実測図 ……252	第229図	第16号住居跡出土遺物実測図(2)……………301
第189図	第91号住居跡出土遺物実測図……………253	第230図	第17号住居跡・カマド実測図……………303
第190図	第92号住居跡・カマド実測図……………254	第231図	第17号住居跡出土遺物実測図……………304
第191図	第92号住居跡出土遺物実測図……………255	第232図	第18号住居跡・カマド実測図……………306
第192図	第93号住居跡・カマド実測図……………257	第233図	第18号住居跡出土遺物実測図……………307
第193図	第93号住居跡出土遺物実測図……………257	第234図	第21号住居跡・カマド実測図……………309
第194図	第97号住居跡・カマド実測図……………259	第235図	第21号住居跡出土遺物実測図……………309
第195図	第97号住居跡出土遺物実測図……………260	第236図	第22号住居跡・カマド実測図……………311
第196図	第100号住居跡・カマド実測図 ……261	第237図	第22号住居跡出土遺物実測図……………312
第197図	第100号住居跡出土遺物実測図 ……262	第238図	第26号住居跡出土遺物実測図……………313
		第239図	第26号住居跡・カマド実測図……………314

第240図	第27号住居跡・カマド実測図……………315	第280図	第54号住居跡・カマド実測図……………363
第241図	第27号住居跡出土遺物実測図……………316	第281図	第54号住居跡出土遺物実測図……………363
第242図	第28号住居跡実測図……………317	第282図	3区第1号竪穴遺構実測図……………364
第243図	第28号住居跡カマド実測図……………318	第283図	3区第2号竪穴遺構実測図……………365
第244図	第28号住居跡出土遺物実測図……………319	第284図	3区第2号竪穴遺構出土遺物実測図……………366
第245図	第29号住居跡・カマド実測図……………320	第285図	3区第3号竪穴遺構実測図……………368
第246図	第29号住居跡出土遺物実測図……………321	第286図	4区第1号竪穴遺構実測図……………369
第247図	第30号住居跡・カマド実測図……………323	第287図	3区粘土貼り土坑実測図……………371
第248図	第30号住居跡出土遺物実測図……………324	第288図	4区粘土貼り土坑実測図(1)……………375
第249図	第31号住居跡・カマド実測図……………325	第289図	4区粘土貼り土坑実測図(2)……………376
第250図	第31号住居跡出土遺物実測図……………326	第290図	3区墓壇及び墓壇と思われる土坑実測図……………378
第251図	第33号住居跡・カマド実測図……………328	第291図	4区墓壇及び墓壇と思われる土坑実測図(1)……………379
第252図	第33号住居跡出土遺物実測図……………328	第292図	4区墓壇及び墓壇と思われる土坑実測図(2)……………380
第253図	第34号住居跡カマド実測図……………329	第293図	第111号土坑出土遺物実測図……………381
第254図	第34号住居跡実測図……………330	第294図	3区土坑実測図(1)……………387
第255図	第34号住居跡出土遺物実測図……………331	第295図	3区土坑実測図(2)……………388
第256図	第37号住居跡・カマド実測図……………334	第296図	3区土坑実測図(3)……………389
第257図	第37号住居跡出土遺物実測図……………335	第297図	3区土坑実測図(4)……………390
第258図	第38号住居跡・カマド実測図……………336	第298図	3区土坑実測図(5)……………391
第259図	第38号住居跡出土遺物実測図……………337	第299図	3区土坑実測図(6)……………392
第260図	第40号住居跡カマド実測図……………338	第300図	3区土坑実測図(7)……………393
第261図	第40号住居跡実測図……………339	第301図	3区土坑実測図(8)……………394
第262図	第40号住居跡出土遺物実測図……………340	第302図	3区土坑実測図(9)……………395
第263図	第41号住居跡・カマド実測図……………342	第303図	4区土坑実測図(1)……………398
第264図	第41号住居跡出土遺物実測図……………343	第304図	4区土坑実測図(2)……………399
第265図	第42号住居跡・カマド実測図……………344	第305図	4区土坑実測図(3)……………400
第266図	第42号住居跡出土遺物実測図(1)……………345	第306図	4区土坑実測図(4)……………401
第267図	第42号住居跡出土遺物実測図(2)……………346	第307図	4区土坑実測図(5)……………402
第268図	第43号住居跡・カマド実測図……………348	第308図	3区土坑出土遺物実測図……………403
第269図	第45号住居跡・カマド実測図……………349	第309図	4区土坑出土遺物実測図……………404
第270図	第46号住居跡実測図……………351	第310図	3区第1・2号地下式坑実測図……………406
第271図	第46号住居跡カマド実測図・炭化材・出土遺物位置図……………352	第311図	4区第1号地下式坑実測図……………408
第272図	第46号住居跡出土遺物実測図……………353	第312図	4区第2号地下式坑実測図……………409
第273図	第47号住居跡・カマド実測図……………355	第313図	4区第3号地下式坑実測図……………410
第274図	第47号住居跡出土遺物実測図……………356	第314図	4区第4号地下式坑実測図……………412
第275図	第49号住居跡・カマド実測図・炭化材・出土遺物位置図……………358	第315図	4区地下式坑出土遺物実測図……………413
第276図	第49号住居跡出土遺物実測図……………359	第316図	3区第1・2・3号井戸状遺構実測図……………415
第277図	第52号住居跡・カマド実測図……………361		
第278図	第53号住居跡・カマド実測図……………362		
第279図	第53号住居跡出土遺物実測図……………362		

第317図	3区井戸状遺構出土遺物実測図	416	第342図	4区第15・17号溝実測図	450
第318図	4区第1・2号井戸状遺構実測 図	417	第343図	4区第16号溝実測図	451
第319図	4区井戸状遺構出土遺物実測図	418	第344図	4区溝出土遺物実測図(1)	453
第320図	南三島遺跡3・4区溝配置図	419	第345図	4区溝出土遺物実測図(2)	454
第321図	3区第1号溝実測図	420	第346図	炭窯実測図	455
第322図	3区第2・3号溝実測図	422	第347図	性格不明の遺構実測図	456
第323図	3区第4号溝実測図	423	第348図	性格不明の遺構出土遺物実測図	457
第324図	3区第5号溝実測図	425	第349図	3区遺構外出土遺物実測図	458
第325図	3区第6号溝実測図	426	第350図	4区遺構外出土遺物実測図	460
第326図	3区第7・8号溝実測図	428	第351図	土器分類図(1)	475
第327図	3区第9・10・11号溝実測図	429	第352図	土器分類図(2)	479
第328図	3区第12・13号溝実測図	431	第353図	土器分類図(3)	480
第329図	3区第14号溝実測図	432	第354図	土器分類図(4)	481
第330図	3区溝出土遺物実測図	433	第355図	土器分類図(5)	482
第331図	4区第1号溝実測図	435	第356図	土器分類図(6)	483
第332図	4区第2号溝実測図	436	第357図	土器分類図(7)	485
第333図	4区第3号溝実測図	438	第358図	土器分類図(8)	486
第334図	4区第4号溝実測図	439	第359図	土器分類図(9)	488
第335図	4区第5号溝実測図	440	第360図	弥生時代後期・古墳時代前期住 居跡分布図	491
第336図	4区第6・9・10号溝実測図	442	第361図	古墳時代中期・後期住居跡分布 図	496
第337図	4区第7号溝実測図	443	第362図	奈良時代住居跡分布図	504
第338図	4区第8号溝実測図	444	第363図	平安時代住居跡分布図	505
第339図	4区第11号溝実測図	447	付 図	南三島遺跡遺構配置図	
第340図	4区第12・14号溝実測図	448			
第341図	4区第13号溝実測図	449			

表 目 次

表1	南三島遺跡周辺遺跡地名表	15	表12	3区墨書・刻書一覧表	472
表2	南三島遺跡3区土坑一覧表	383	表13	4区墨書・刻書一覧表	473
表3	南三島遺跡4区土坑一覧表	395	表14	3区弥生時代住居跡一覧表	492
表4	3区土製品一覧表	461	表15	3区古墳時代住居跡一覧表	497・498
表5	4区土製品一覧表	466	表16	4区古墳時代住居跡一覧表	498
表6	3区石器・石製品一覧表	467	表17	3区奈良・平安時代住居跡一覧表	506
表7	4区石器・石製品一覧表	468	表18	4区奈良・平安時代住居跡一覧 表	507・508
表8	3区金属製品一覧表	469	表19	3区竪穴遺構一覧表	508
表9	4区金属製品一覧表	470	表20	4区竪穴遺構一覧表	508
表10	3区古銭一覧表	471			
表11	4区古銭一覧表	471			

写真図版目次

- P L 1 遺跡遠景
- P L 2 遺跡全景・上物除去・試掘・遺構確認・
調査風景
- P L 3 3区第1・2・4号住居跡
- P L 4 3区第5・6・7号住居跡
- P L 5 3区第11・12・13号住居跡
- P L 6 3区第14・19・21号住居跡
- P L 7 3区第23・25・26号住居跡
- P L 8 3区第27・29・31号住居跡
- P L 9 3区第32・33・36号住居跡
- P L 10 3区第37・38・39号住居跡
- P L 11 3区第40・41・42号住居跡
- P L 12 3区第43・44・45号住居跡
- P L 13 3区第50・51・55号住居跡
- P L 14 3区第57・59・60号住居跡
- P L 15 3区第61・63・64号住居跡
- P L 16 3区第65・67・66・68号住居跡
- P L 17 3区第70・71・73号住居跡
- P L 18 3区第75・76・78・82号住居跡
- P L 19 3区第84・92・93号住居跡
- P L 20 3区第94・95・97号住居跡
- P L 21 3区第99・101・103号住居跡
- P L 22 3区第104・107・112号住居跡
- P L 23 3区第114・115号住居跡, 第2号竪穴遺構
- P L 24 4区第1・2・8号住居跡
- P L 25 4区第9・10・11号住居跡
- P L 26 4区第12・13・14号住居跡
- P L 27 4区第15・16・17号住居跡
- P L 28 4区第18・20・21号住居跡
- P L 29 4区第22・23・24号住居跡
- P L 30 4区第25・26・27号住居跡
- P L 31 4区第28・29・30号住居跡
- P L 32 4区第31・32・33号住居跡
- P L 33 4区第34・35・36号住居跡
- P L 34 4区第37・38・39号住居跡
- P L 35 4区第40・41・42号住居跡
- P L 36 4区第43・44・45・46号住居跡
- P L 37 4区第47・52・53号住居跡
- P L 38 3区第6・23・64号住居跡カマド
- P L 39 3区第66・70・91号住居跡カマド
- P L 40 3区第101・104・112号住居跡カマド
- P L 41 4区第10・16・17号住居跡カマド
- P L 42 4区第18・22・23号住居跡カマド
- P L 43 4区第26・27・28号住居跡カマド
- P L 44 4区第40・42・47号住居跡カマド
- P L 45 3区第1・2号住居跡遺物出土状況
- P L 46 3区第6・7・11号住居跡遺物出土状況
- P L 47 3区第15・19・30号住居跡遺物出土状況
- P L 48 3区第31・32号住居跡遺物出土状況
- P L 49 3区第38・39号住居跡遺物出土状況
- P L 50 3区第60・68号住居跡遺物出土状況
- P L 51 3区第101・107号住居跡遺物出土状況
- P L 52 4区第1・9号住居跡遺物出土状況
- P L 53 4区第9・16号住居跡遺物出土状況
- P L 54 4区第23・24・25号住居跡遺物出土状況
- P L 55 4区第38・44号住居跡遺物出土状況, 第
46号住居跡炭化材出土状況
- P L 56 3区第9・43・122号土坑(墓壇)
- P L 57 4区第87・98・111号土坑(墓壇)
- P L 58 4区第117号土坑(墓壇)・コーナー部の
窪みとピット, 第124号土坑(墓壇)
- P L 59 3区第97号土坑確認状況・完掘状況, 第
98号土坑粘土貼り切断状況
- P L 60 4区第90・95・96号土坑(粘土貼り)
- P L 61 4区第99・112・114号土坑(粘土貼り)
- P L 62 4区第121・123・154号土坑(粘土貼り)
- P L 63 3区第1号地下式坑, 4区第1号地下式
坑・遺物出土状況
- P L 64 4区第1号地下式坑馬骨出土状況, 第2
号地下式坑・遺物出土状況
- P L 65 4区第3号地下式坑, 第4号地下式坑開
口部・完掘状況
- P L 66 3区第1・2号井戸状遺構, 4区第1号
井戸状遺構
- P L 67 3区第2・3・7・14号溝
- P L 68 3区第5号溝, 4区第1号溝
- P L 69 4区第1号溝・遺物出土状況
- P L 70 3区出土土器(1)
- P L 71 3区出土土器(2)
- P L 72 3区出土土器(3)

P L 73	3 区出土土器(4)	P L 86	3 区出土土器(17)
P L 74	3 区出土土器(5)	P L 87	4 区出土土器(1)
P L 75	3 区出土土器(6)	P L 88	4 区出土土器(2)
P L 76	3 区出土土器(7)	P L 89	4 区出土土器(3)
P L 77	3 区出土土器(8)	P L 90	4 区出土土器(4)
P L 78	3 区出土土器(9)	P L 91	4 区出土土器(5)
P L 79	3 区出土土器(10)	P L 92	4 区出土土器(6)
P L 80	3 区出土土器(11)	P L 93	4 区出土土器(7)三筋壺, 内耳土器
P L 81	3 区出土土器(12)	P L 94	3・4 区墨書・刻書土器
P L 82	3 区出土土器(13)	P L 95	3・4 区土製品, 石製品
P L 83	3 区出土土器(14)	P L 96	3・4 区鉄製品
P L 84	3 区出土土器(15)	P L 97	4 区古銭, 4 区第25号住居跡出土炭化米
P L 85	3 区出土土器(16)		

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

住宅・都市整備公団は、竜ヶ崎市街地の北部台地上に「竜ヶ崎ニュータウン建設計画」を進めている。この計画は、事業名を「北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整理事業」と称し、当初日本住宅公団が計画し、昭和46年1月に決定されたものである。その後、昭和51年4月に、同事業は宅地開発公団茨城開発局が引き継いだ。昭和56年10月に、宅地開発公団と日本住宅公団が統合し、新たに「住宅・都市整備公団」として発足したため、従来の契約によって生じた権利義務は、そのまま新公団が継承し今日に至っている。

「竜ヶ崎ニュータウン計画」は、年々増大する首都圏の住宅用地の需要に対し、潤いのある生活環境を備えた住宅用地を大量に供給するとともに、地域社会と有機的に結合した調和ある開発を目指している。

土地区画整理事業が実施される地域は、北竜台のこしげしん でん小柴新田町とかしわだ柏田町の全域、わかしば若柴町、いなりしん稲荷新田町、なれうま駒馬町、みなみなかじま南中島町、べつしよ別所町の一部で326.6ha、龍ヶ岡のかいばらづか貝原塚町、はばら羽原町、やしろ八代町、ながみね長峰町の各一部で344.9haの計671.5haである。開発前の現況は、北竜台においては山林原野が約70%、耕地が約24%を占め、龍ヶ岡においては山林原野が約50%、耕地が約40%を占めていた。

茨城県教育委員会は、昭和45年に竜ヶ崎市教育委員会と開発区域内の埋蔵文化財の分布調査を実施し、その結果に基づき、22遺跡について文化財保護の立場から必要な措置を講ずるため協議を重ねた。さらに、その後の分布調査や、造成工事により遺跡の追加発見があり、現在では⁽¹⁾36遺跡となっている。県教育委員会は、これらの遺跡について関係機関と再三協議を行い、36遺跡の内31遺跡については現状保存が困難であるため記録保存の措置を講ずることになった。

茨城県教育財団は、昭和52年度に当時の宅地開発公団と「北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整理事業の施行に係る埋蔵文化財発掘調査」の業務委託契約を締結して以来、竜ヶ崎ニュータウン内の埋蔵文化財の発掘調査を実施してきた。南三島遺跡は、昭和56年4月から遺跡を1～7区に区分し継続調査を進めてきた。3・4区の調査は、昭和59年12月から昭和61年7月にかけて実施し、この調査をもって南三島遺跡全域の調査を終了した。

なお、3・4区の発掘調査は、茨城県教育財団本部調査課調査第2班（昭和61年度は調査第1班）が担当した。

注

(1) 竜ヶ崎ニュータウン建設計画区域内に所在する遺跡の名称と位置については、第4図を参

照されたい。なお、これらの遺跡は、Rの頭文字を付し略号としている。現在はR33まで付されているが、R6がAとBに分かれ、R28がR28、R28A、R28Bに分かれているため遺跡数は36となっている。

参考文献

- (1) 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書10 南三島遺跡1・2区』 茨城県教育財団 昭和59年8月
- (2) 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書11 南三島遺跡6・7区』 茨城県教育財団 昭和60年10月
- (3) 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書12 南三島遺跡5区』 茨城県教育財団 昭和61年3月
- (4) 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書16 南三島遺跡3・4区(I)』 茨城県教育財団 昭和62年12月

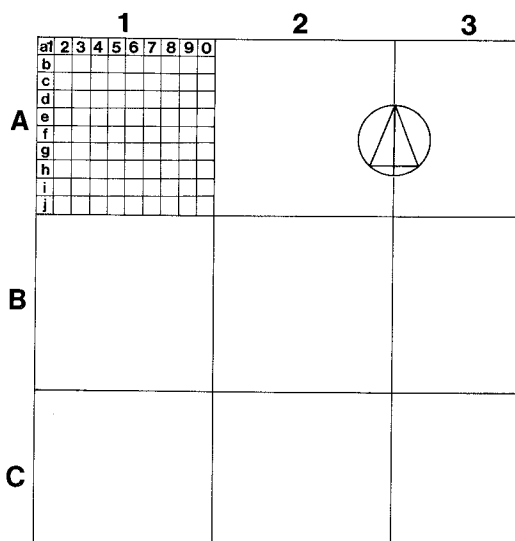
第2節 調査方法

1 地区設定 (第1・2図)

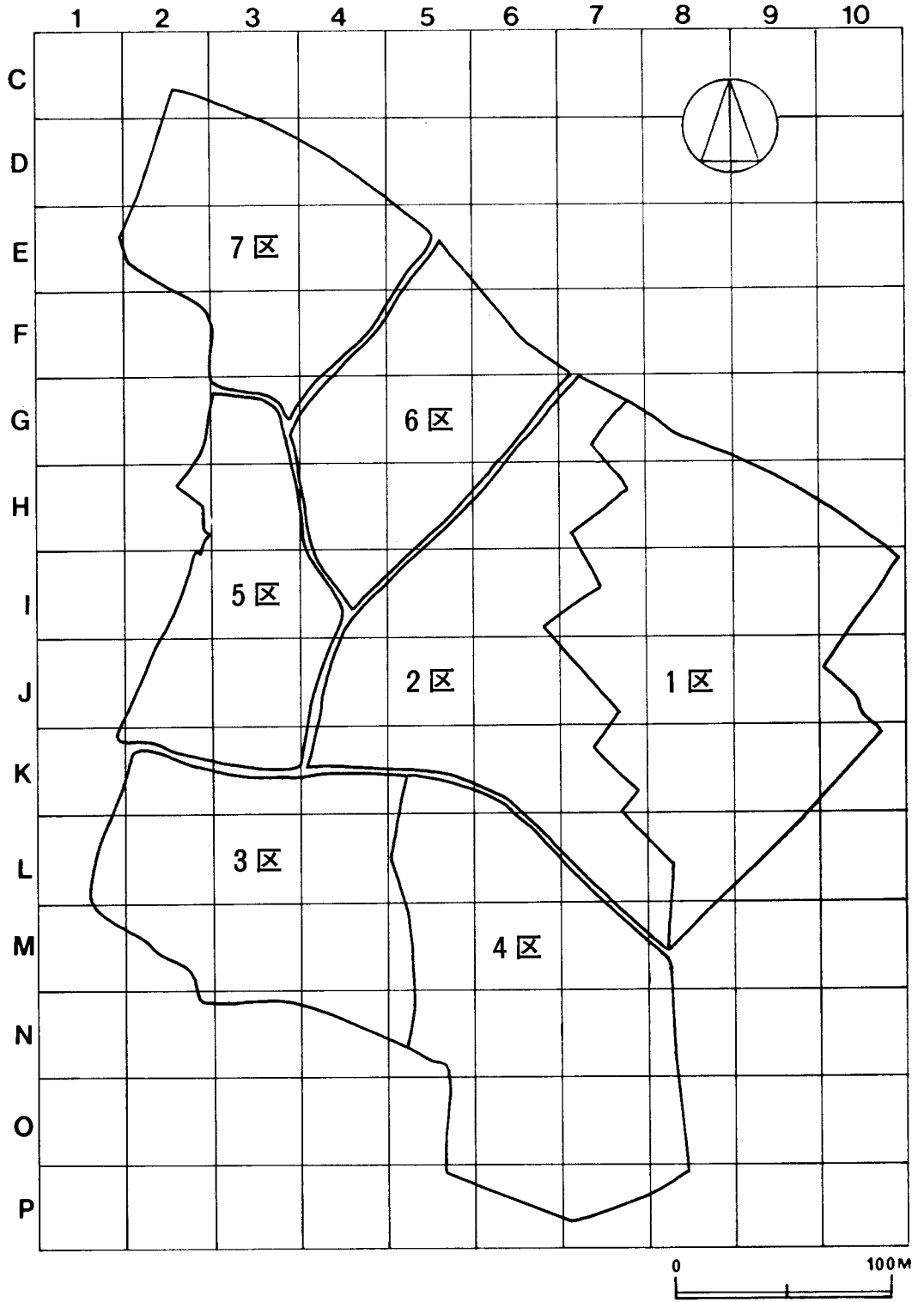
南三島遺跡は、総面積100,000m²を越す広大な遺跡のため、全体を1～7区に分けて調査を実施してきた。

当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系、X座標-8,540m、Y座標+33,500mの交点を基準点とした。まず、上記の基準点から40m四方の大調査区を設定し、さらに、その大調査区を東西・南北に10等分して4m四方の小調査区(グリッドと呼称)を設定した。すなわち、40m四方の大調査区の中に4m四方の小調査区を100個設定したわけである。

大調査区は、基準点から北方へ320m、西方へ400mの点を起点として南へ大文字のアルファベットで「A」・「B」・「C」……とし、東へ「1」・「2」・「3」……とし、A1区・B2区等と呼んだ。小調査区は、同様に北から南に小文字のアルファベットで「a」・「b」・「c」……「i」・「j」とし、西から東へ小文字で「1」・「2」・「3」



第1図 小調査区名称図



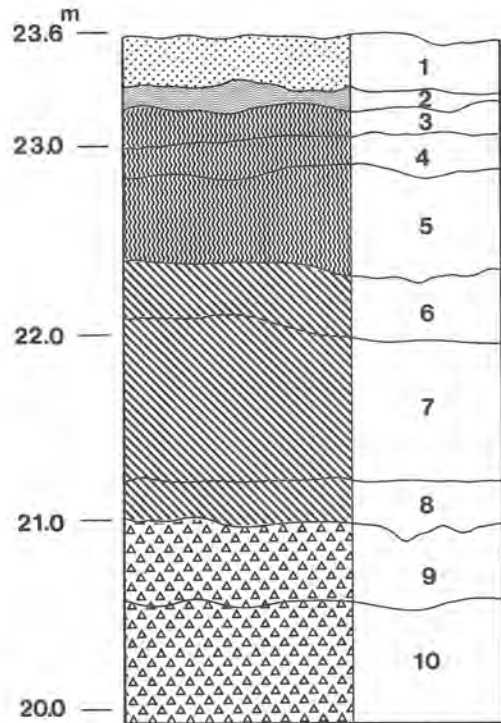
第2図 南三島遺跡1～7区配置図・大調査区名称図

……「9」・「0」とし、大調査区の呼称と合わせて「A1a1」・「B2c3」のように表記した。

2 層序の検討 (第3図)

当遺跡3・4区の基本層序は、第3図で示したように、色調や含有物の相違及び粘性などから10層に区分し、耕作土層(第1層)・ソフトローム層(第3・4・5層)・ハードローム層(第6・7層)・常総粘土層(第9・10層)の4つに大別することができる。常総粘土層は、2～3mの厚さを有し竜ヶ崎砂層へと接続する。なお、耕作土とソフトローム層間、ハードローム層と常総粘土層間には、漸移層(第2・8層)が形成され、第9層には東京パミス(TP)の存在が確認される。

当遺跡における遺構の掘り込みは、ほとんどが第6層までであるが、地下式坑などは第10層に達するものもあった。



第3図 南三島遺跡土層柱状図

3 遺構確認

3区における遺構確認は、全調査区に4m四方のグリッドを設定して表土除去を行い、遺構・遺物を確認する方法をとった。その結果、多量の遺構と遺物が検出され、8分の1の試掘を終了した段階で重機を導入し、全調査区の約80%の表土除去を実施した。調査区の南と西に残された2か所の未承諾地についても、遺構の存在が予測できたため、それぞれ地権者の承諾が得られた段階で表土除去を実施し、全域の遺構の確認調査を進めた。

4区における遺構確認は、全調査区に幅2mのトレンチを設定して試掘を行い、遺構・遺物の存在を確認する方法をとった。その結果、全域から遺構の分布が確認されたため、8分の1の試掘を終了した段階で重機による表土除去を実施し、その後、遺構の確認調査を進めた。

上記の遺構の確認調査により、3区からは住居跡約110軒、土坑約500基、溝14条、貝ブロック10か所を、4区からは住居跡約50軒、土坑約170基、溝20条、貝ブロック2か所を検出した。なお、地下式坑や井戸については、遺構確認時で土坑との区別が困難であったため、すべて土坑として

数えた。

4 遺構調査

住居跡の調査は、長軸方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトをそれぞれ設け、4区に分けて掘り込む四分分割法を基本とした。地区の名称は北から時計回りに1～4区とした。土坑の調査は、長径で2分する二分分割法を用い、地下式坑・井戸などもそれに準じた。溝の調査は、適宜な箇所土層観察用ベルトを設けて掘り込みを実施した。

土層については、色相、各種含有物の含有状態、粘性、硬さ、締まり具合、吸水性等を観察して分類の基準とした。遺物の取り上げについては、住居跡、土坑、溝の各区と、遺物番号、出土位置、レベル等を記録して収納した。

遺構や遺物の出土状況等の平面実測は、前述の地区設定に基づき水系方眼地張測量で行った。土層断面や遺構断面の実測は、標高を測定し、水平にセットした水系を基準として実測した。縮尺は、1/20を基本としたが、カマド及び部分的な微細図については1/10の縮尺で作成した。

記録の過程は、土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成を基本とした。図面や写真に記録できない事項に関しては、野帳及び調査記録カードに記録し、さらに遺構カードに整理した。

第3節 調査経過

南三島遺跡3区は、昭和59年12月19日に発掘調査を開始し、昭和61年3月26日に調査を終了した。同遺跡4区は、昭和60年4月25日に発掘調査を開始し、昭和61年7月31日に調査を終了した。以下に、その経過について概要を3・4区に分けて月毎に記載する。

3区の調査経過

〈昭和59年度〉

- 12月 19日から調査を開始し、エリア内の除草作業を実施する。24日からグリッド発掘による遺構確認作業を開始するが、翌25日には、発掘器材の点検及び整理等をおこない年末年始の休暇に入る。
- 1月 7日より調査を再開する。9日から23日にかけてグリッド発掘を継続し、竪穴住居跡など多数の遺構を確認する。
- 2月 4日午後より重機を導入し、表土除去作業を開始する。あわせて遺構確認作業をおこなう。

3 月 5日に表土除去作業，12日には遺構確認作業を終了する。15～16日にかけて遺構配置図の作成をおこなう。竪穴住居跡52軒の他多数の土坑・溝・貝ブロックを検出し，昭和59年度の調査を終了する。

〈昭和60年度〉

4 月 10日から本年度の調査を開始する。翌日から遺構の再確認作業を実施する。24日～26日にかけて西部未表土除去地区の試掘をおこなう。30日から調査区北端に位置するK2区の遺構調査を開始する。

5 月 住居跡1～6号，土坑1～113号の調査をおこなう。農繁期のため作業員の出勤率が悪く遺構調査に時間がかかる。

6 月 住居跡13号，土坑165号，溝1～5号までの調査をおこなうが，雨天の日が多く，調査は遅れがちである。平安時代の住居跡11号の上には，同時期の住居跡12号が貼り床をして構築されている。17日から重機を導入し，西部未表土除去地区（L1・L2・M2区）の表土除去をおこなう。

7 月 15日の梅雨明け宣言以降，晴天が続き作業員の出勤率も向上する。住居跡28号，土坑204号までと溝3・5号の調査をおこなう。住居跡23号から掘り込みを開始して間もなく多量の炭化材と焼土，ロームブロックが検出され，火災住居として調査を進める。なお，26日から学生アルバイト5名を雇用する。

8 月 晴天が続き，調査は順調に進む。住居跡44号，土坑255号までと，溝5号の調査をおこなう。火災住居跡23号からは，ピット上に炭化材が直立して発見された。なお，13日～18日は盆休業として現場を閉鎖した。

9 月 学生アルバイトも学校にもどり，出勤状況はやや低調となるが，気候は比較的安定しており調査は順調に進む。住居跡59号，土坑273号までと，溝2～4号の調査をおこなう。調査区の南部から一辺10mを越える大形住居跡38号と41号が検出され，出土遺物から和泉期の住居と判断される。

10 月 今月は，曇や雨の日が多い。住居跡74号，土坑314号，溝6号までの調査をおこなう。22日からは，調査区南東端で確認された大形の住居跡73号の掘り込みを開始し，和泉期の住居跡であることが判明する。

11 月 上旬は，雨天の日が多く調査は遅れぎみであったが，中旬以降晴天の日が続き，調査は順調に進行する。住居跡83号，土坑392号，溝10号までの調査をおこなう。

12 月 今月も天候に恵まれ，住居跡89号，土坑465号，溝14号までの調査をおこなう。27日発掘器材の整理を行い，翌日から年末年始の休暇に入る。

1 月 6日から調査を開始する。翌日から未表土除去部分の伐開を開始し，22日から重機に

よる表土除去、遺構確認作業に入ったため、月前半は、4区の調査に主力を置き、3区は12月までの調査の補足をおこなう。月末の29日になり、住居跡90号から調査を再開する。なお、30日には柳澤清一氏を講師に招き、「縄文時代中・後期の土器編年について」の班内研修を実施する。

- 2 月 中・下旬にかけて雪に見舞われ、調査は難航する。住居跡106号、土坑490号までの調査をおこなう。14日には、住居跡97号の北側の周溝内から「富壽神宝」（818年初鑄）が出土した。なお、15日の土曜日には現地説明会を雨の中で実施する。
- 3 月 先月の遅れを取り戻すべく、最終日まで懸命の調査を続ける。調査区の南西部は、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての住居跡が多く検出される。26日、住居跡118軒、土坑536基、溝14条及び縄文時代の埋甕18基を調査し、南三島遺跡3区の調査を完了する。

4 区の調査経過

〈昭和60年度〉

- 4 月 25日から3区の遺構確認調査と並行して、調査区の伐開と焼却作業を開始する。
- 5 月 1日に発掘調査前の全景写真を撮影し、杭打ち作業をおこなう。13日からトレンチ試掘を開始する。各トレンチより住居跡や溝・土坑と思われる落ち込みを確認し、24日に試掘を終了する。
- 7 月 15日から重機による表土除去作業を開始し、同時に遺構確認作業も実施する。
- 8 月 6日に表土除去作業を終了する。12日には、遺構確認作業を終了し、住居跡約50軒、土坑約170基、溝20条、貝ブロック2か所を確認する。
- 1 月 7日から遺構調査を実施し、住居跡1～5号、土坑1～38号、溝1～4号などの調査をおこなう。住居跡1・2号は、奈良時代の住居跡で多量の須恵器が出土した。
- 2 月 住居跡6・7号、土坑39～53号および性格不明遺構の調査をおこなう。25日には、本年度分（K5・6区・L5～7区・M5区）の調査を終了し、残りの期間を3区の調査に専念する。

〈昭和61年度〉

- 4 月 11日、住居跡8号から調査を開始する。住居跡は15号まで、土坑は80号までの調査を進めるとともに、N・M5～7区の遺構確認を実施する。
- 5 月 住居跡の調査を重点的におこない、住居跡50号までの掘り込みと、土坑81～87号の調査を進める。住居跡32・33・35・43号は、古墳時代前期から平安時代にかけての住居跡で、互いに切り合っており、特に、第35・43号は、住居跡35号の上に貼り床をして住居跡43号が構築されていることが判明した。
- 6 月 住居跡のカマド調査、平面実測、断面図作成などをおこない、住居跡53号まで調査を

終了させる。土坑も179号まで調査を進め、後半からは溝の掘り込み、土層断面図、平面図の作成をおこなう。

- 7 月 土坑および溝の写真、図面の作成を中心に作業を進め、住居跡48軒、土坑173基、地下式坑4基、井戸1基、溝17条の調査を終了する。24日に調査終了後の全景を航空写真撮影し、26日には現地説明会を開催し、31日付をもって4区の調査を完了する。なお、28日には、鈴木敏弘氏を講師として招き、「古墳時代以降の住居跡の時期と集落の変遷」をテーマに班内研修会を実施する。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

南三島遺跡3・4区は、茨城県竜ヶ崎市羽原町字鹿島原1354番地ほかに所在する。

竜ヶ崎市は、茨城県の南部に位置し、東部は江戸崎町・新利根村、西部は茎崎町・伊奈村・藤代町・取手市、南部は利根町・河内村、北部は牛久市と接している。昭和62年11月30日に発足した「つくば市」は、本市の北方約20kmに位置している。市域は、東西に約12km・南北に約9kmの広がりをもつ、面積は約75km²である。人口は53,038人（昭和64年1月1日）で、市街地を中心に居住しているが、北部台地上に建設が進められている「竜ヶ崎ニュータウン」には既に約5200人が居住しており、首都圏のベッドタウンとして人口は増加傾向にある。

市街地は、常磐線佐貫駅から南東に走る関東鉄道竜ヶ崎線竜ヶ崎駅を西端とし、東西約2kmにわたって形成されている。市民の生活は、常磐線沿線に発達した千葉県や東京の都市との結び付きを強めつつある。

古鬼怒川と小貝川によって形成された広大な沖積地は、ほとんどが水田として利用され県下有数の穀倉地帯となっている。米作は北部台地上の畑作と共に市の主要な産業となっている。近年、北部台地上に工業団地が建設されつつあり、ニュータウンへの人口流入とも相まって工場の進出も目立っている。

市域の地形は、南部の低地と北部の台地に大別され、北西部には牛久沼が位置している。北部台地は、筑波台地から連なる稲敷台地の南端にあたり、台地面は標高23～27mの平坦地であるが、縁辺部は侵食谷によって刻まれ複雑な地形を形成している。稲敷台地は、海成の成田層上に形成され、上位に竜ヶ崎砂礫層、常総粘土層が重なり、更に東京浮石を含む関東ローム層が2～3mの厚さで堆積している。なお、成田層には海産の貝、サンゴの他、ナウマン象の化石を含む化石床が存在する。なかでも半田層は、竜ヶ崎市半田町を模式地とし、海進の絶頂期に形成され、暖流系の貝類を多出する化石床として著名である。

南三島遺跡3・4区は、竜ヶ崎市街地の北方約2kmの稲敷台地南縁辺部に位置する。台地は、南東に開く樹枝状の侵食谷によって幾筋にも開析されている。遺跡の位置する台地は、半島状を呈し、北部は急傾斜して約12.5m下の谷へ落ち込んでいる。南部も急傾斜をもって約20m下の沖積地へ継続している。

南三島遺跡の調査総面積は100,311m²であり、1～7区に分割して調査が進められてきた。今回の調査対象面積は、3区が13,600m²、4区が16,811m²の計30,411m²である。現況は3・4区とも畑地である。

第2節 歴史的環境

霞ヶ浦と利根川に挟まれた稲敷台地南部は、県内でも有数の遺跡分布地として早くから考古学界的注目を浴びてきた地域である。明治12年の陸平貝塚(美浦村)の発掘⁽¹⁾、同26年の椎塚貝塚(江戸崎町)の発掘⁽²⁾など、多くの研究者がこの地を訪れ学史に数々の業績を残している。中でも、佐々木忠次郎と飯島魁によって実施された陸平貝塚発掘は、日本人による初めての学術的な貝塚調査であり、日本考古学の黎明を告げるものであった。竜ヶ崎市内においても、明治37年の愛宕山古墳⁽³⁾の発掘など、早くから考古学的な研究が進められている。

当遺跡の所在する竜ヶ崎市羽原町付近は、大化以前「筑波国」に属していたが、大化改新の地方行政組織の改革に伴い「常陸国・筑波郡」となった⁽⁴⁾。さらに、白雉四年(653)小山上物部河内と大乙上物部会津等の申請により「信太郡」⁽⁵⁾が成立すると、当地方は信太郡に属することとなる。承平年間(931~937)に編纂された和名類聚抄に「稲敷郷」の名がみえるが、江戸時代に編纂された新編常陸国誌では「稲敷郷」の範囲を「屋代、龍ヶ崎、長峰、薄倉、貝原塚、羽原別所、駒馬、中島、若柴の諸村」と規定している。これらのことから、霊亀元年(715)の郷里制施行以後、奈良・平安時代を通じて当地方は「信太郡稲敷郷」に属していたものと推定できる。平安時代末になると、信太郡は小野川を境に「西条」と「東条」に分割され、西条は仁平元年(1151)に池禅尼によって立荘され「信太荘」⁽⁶⁾となり、東条は建長八年(1256)に熊野神社によって立荘され「東条荘」⁽⁷⁾となった。当遺跡が所在する羽原町は、弘安二年(1279)の太田文に「河内郡羽原郷」とみえるところから、鎌倉時代には河内郡に属していたことがわかる。なお、当遺跡に隣接する八代町は、当時東条荘に属していた。その後、東条荘を含めた小野川以南の地域が総て河内郡に編入されるのは、豊臣政権下で実施された文禄検地以後のことである。

次に、竜ヶ崎市内の遺跡について、周辺地域の歴史的環境を織り混ぜ時代ごとに概観するが、先土器時代と縄文時代については既刊「南三島遺跡3・4区(I)」⁽⁸⁾に記されているので、本稿では割愛した。

弥生時代の遺跡としては、桜川村に所在する殿内遺跡⁽⁹⁾が著名であり、縄文式土器から弥生式土器への変換期に多くの問題を投げかけている。竜ヶ崎市内においては、外八代遺跡⁽¹⁰⁾、屋代A遺跡⁽¹¹⁾、屋代B遺跡⁽¹²⁾、尾坪台遺跡⁽¹³⁾、長峰遺跡⁽¹⁴⁾、南三島遺跡⁽¹⁵⁾、長峰向須賀遺跡⁽¹⁵⁾の7遺跡が確認され、そのうち竜ヶ崎ニュータウン内に所在する6遺跡が調査されている。屋代B遺跡や外八代遺跡からは中期後葉の宮ノ台式土器に比定される土器も少量出土しているが、これまでに調査された遺跡のほとんどは後期に位置付けられるものである。特に昭和55年度に調査された屋代A遺跡からは、大形住居跡3軒を含む28軒の住居跡が検出され、継続する屋代B遺跡の24軒と合わせると当地方では出色の後期集落としてとらえることができる。

古墳時代の遺跡としては、4世紀後半に位置付けられる桜川村の原一⁰⁶号墳や、同村浮島の尾島祭祀遺跡⁰⁷が著名である。奈良時代の浮島の様子を記述した風土記の一節に「九ツノ社有り」とあるが、近年当財団が実施した尾島貝塚の調査結果からも、当地域が古墳時代中期から有数の祭祀場であったことが窺える。竜ヶ崎市内の古墳時代の遺跡は、前期で12か所、中期で5か所、後期で5か所が確認あるいは調査されている。前期の遺跡には、4基の方形周溝墓が検出され大羽谷津遺跡の墓域として捉えられた廻り地A遺跡⁰⁸や、動物形土製品を出土した松葉遺跡⁰⁹があり、当遺跡の西方3～4kmに位置している。中期以降遺跡数はやや減少する傾向がみられるが、中期の住居跡47軒が検出された平台遺跡⁰⁹では、一辺が9mを越す大形住居跡の存在も確認されている。後期の遺跡では、屋代A遺跡、屋代B遺跡、外八代遺跡のほか、愛宕山古墳や長峰古墳群が存在する。外八代遺跡では、35軒もの住居跡が検出され3期以上に区分されるとしているが、近接する長峰古墳群との関係も考慮されなければならない。

奈良時代になると、文献資料からも当地方の様子が知られるようになる。前述の常陸風土記には、浮島の村に9つの社と15の戸が存在しており、そこに住む人々は製塩を業としていたことが記述されている。また、当時の駅家「榎浦津」は、当遺跡から東へ10kmほど離れた江戸崎町羽賀君山に比定する説⁰¹があり、付近には、やはり奈良時代の下君山廃寺⁰²が存在する。竜ヶ崎市八代町に所在する稲塚⁰³を、風土記に記載されている「飯名社」に比定する説⁰⁴もある。市内で調査された奈良時代の遺跡は、屋代B遺跡と南三島遺跡⁰⁵だけであるが、今後、調査が進むことによって遺跡数が増えることも予想される。

市内で調査された平安時代の遺跡は、中根台B遺跡⁰⁵、屋代B遺跡、外八代遺跡、南三島遺跡の4か所である。11軒の住居跡が検出された外八代遺跡からは、「仁万」の墨書が記された土器7点⁰⁶が出土している。なお、平安時代の駅家「榛谷駅」⁰⁶は、その所在地に竜ヶ崎市半田町宮脇を比定する説⁰⁷もある。

竜ヶ崎市内には、鎌倉時代以降の遺跡も数多く存在する。特に、中世の城郭跡は17か所ほどが確認されており、当教育財団でも、外八代城跡、屋代城跡、長峰城跡などを調査している。また、地下式坑は、屋代A遺跡、屋代B遺跡、外八代遺跡、南三島遺跡等で調査されている。なかでも、当遺跡7区で調査された地下式坑からは、寛永通宝を含む131枚の古銭が出土し、地下式坑の使用年代を探る上で貴重な資料となっている。なお、前清水遺跡で土坑として報告されているもののうち第4・14号土坑などは、形態からみて地下式坑と判断できるものである。

注

- (1) I. IJIMA. AND C. SASAKI. 「OKADAIRA SHELL MOUNDS AT HITACHI」
 (『TOKYO DAIGAKU SCIENCE DEPARTMENT』MEMOIR VOL.1. PART 1)

TOKYO DAIGAKU 明治16年

- (2) 八木奘三郎・下村三四吉「常陸国椎塚介墟発掘報告」『東京人類学会雑誌』第8巻87号 明治26年
- (3) 大野延太郎「常陸国龍ヶ崎発見の埴輪土偶に就て」『東京人類学会雑誌』第20巻第229号 明治38年
- (4) 大化二年の大化改新の詔による。常陸風土記，日本記，續日本記などに関連記事あり。
- (5) 「常陸風土記」
- (6) 龍ヶ崎市教育委員会「龍ヶ崎の中世城郭跡」 昭和62年
- (7) 同上
- (8) 茨城県教育財団「南三島遺跡3・4区(I)」茨城県教育財団文化財調査報告 第44集 昭和62年
- (9) 杉原荘介，戸沢充則，小林三郎「茨城県殿内（浮島）における縄文・弥生両時代の遺跡」考古学集刊 第四巻第三号 昭和44年
- (10) 茨城県教育財団「外八代」茨城県教育財団文化財調査報告 II 昭和54年
- (11) 茨城県教育財団「成沢・屋代A」茨城県教育財団文化財調査報告 XIV 昭和56年
- (12) 茨城県教育財団「屋代B I」茨城県教育財団文化財調査報告 第33集 昭和60年
茨城県教育財団「屋代B II」茨城県教育財団文化財調査報告 第40集 昭和61年
- (13) 茨城県教育財団「尾坪台・十三塚」茨城県教育財団文化財調査報告 第39集 昭和61年
- (14) 昭和61年～昭和62年度にかけて茨城県教育財団が調査を実施した。
- (15) 長峰遺跡の南方300mの沖積低地中の微高地にある。「茨城県遺跡地図」茨城県教育委員会に所載
- (16) 茂木雅博「浮島原一号墳」日本考古学年報26 昭和47年
- (17) 亀井正道「常陸浮島の祭祀遺跡」国学院雑誌59—7 昭和33年
- (18) 茨城県教育財団「廻り地A」茨城県教育財団文化財調査報告 XV 昭和56年
- (19) 茨城県教育財団「松葉」茨城県教育財団文化財調査報告 I 昭和53年
- (20) 茨城県教育財団「平台」茨城県教育財団文化財調査報告 第19集 昭和57年
- (21) 茨城県史編集委員会「茨城県史 原始・古代編」 昭和60年
- (22) 同上
- (23) 龍ヶ崎市八代町3903に所在する。残丘である。
- (24) 中山信名「新編常陸國誌」信田郡稻敷郷の条に所載
- (25) 茨城県教育財団「町田・仲根台」茨城県教育財団文化財調査報告 第25集 昭和58年
- (26) 「延喜式」に所載

- (27) 茨城県史編集委員会 「茨城県史 原始・古代編」 昭和60年
- (28) 「外八代遺跡」として昭和53年度に茨城県教育財団が調査を実施し、茨城県教育財団文化財調査報告Ⅱが刊行されている。
- (29) 「屋代B遺跡」として昭和58年度から昭和61年度にかけて調査を実施し、茨城県教育財団文化財調査報告 第33・40・48集が刊行されている。
- (30) 「長峰遺跡」として昭和62年度に調査が実施され、昭和63年度から整理が進められている。



第4図 南三島遺跡周辺地形及び周辺遺跡位置図

表1 南三島遺跡周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	種類	遺跡の時代				番号	遺跡名	種類	遺跡の時代				
			先土器	縄文	弥生	古墳				その他	先土器	縄文	弥生	古墳
R1	長峰城跡	城館跡			●		R28-A	仲根台塚群	塚群(3・4号)					
R2	長峰遺跡	集落跡・古墳群			●		R28-B	仲根台B遺跡	集落跡		●			●
R3	十三塚塚群	塚群				●	R29	廻り地B遺跡	集落跡	●				
R4	尾坪台遺跡	集落			●		R30	白蔵寺遺跡	包蔵地					
R5	外八代遺跡	集落跡・城館跡			●		R31	簿倉古墳	塚					●
R6-A	屋代A遺跡	城館跡・集落跡			●		R32	稲荷峰古墳	塚					●
R6-B	屋代B遺跡	城館跡・集落跡		●	●		R33	山王台遺跡	集落跡					●
R7	稲荷塚古墳群	古墳群			○		1	金塚遺跡	集落跡	○				○
R8	南三島遺跡	集落			●		2	林遺跡	集落跡					○
R9	ダシゴ塚	塚				○	3	若柴城跡	城館跡					
R10	町田塚群	塚群			●		4	宿畑遺跡	集落跡					○
R11	かがみ塚	塚				○	5	稲荷古墳	古墳					○
R12	高井城下城跡	城館跡・寺院跡					6	永山前遺跡	集落跡					
R13	前清水遺跡	集落跡・貝塚・塚群		●	●		7	仲根台遺跡	集落跡・古墳	○				○
R14	塚下遺跡	塚群・他			●		8	奈戸岡古墳群	古墳群					○
R15	町田遺跡	集落		●	●		9	堂ノ下貝塚	貝塚群	○				
R16	行部内遺跡	集落跡・貝塚					10	馴馬城跡	城館跡					○
R17	大羽谷津遺跡	集落			●		11	愛宕山古墳	古墳					○
R18	廻り地A遺跡	集落		●	●		12	奈戸岡祭祀遺跡	祭祀跡					○
R19	平台遺跡	集落			●		13	西花輪貝塚群	貝塚群	○				
R20	成沢遺跡	集落			●		14	貝原塚城跡	城館跡					○
R21	松葉遺跡	集落跡・塚群			●		15	向井原遺跡群	集落跡	○				○
R22	庚申塚遺跡	集落			○		16	西平遺跡	集落跡	○				
R23	沖餅遺跡	集落	●		●		17	馬込稲荷遺跡	集落跡	○				
R24	赤松遺跡	集落		●	●		18	要害山館跡	城館跡					○
R25	打越A遺跡	集落		●			19	半田遺跡	集落跡					○
R26	打越C遺跡	集落		●			20	登城山館跡	城館跡					○
R27	ウツブタ遺跡	集落		●			21	向須賀遺跡	包蔵地	○				○
R28	仲根台塚群	塚群(1・2号)		●										●

●は発掘調査を実施した遺跡等である。

第3章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法

1 遺跡の概要

南三島遺跡3・4区は、総面積が100,311㎡にも及ぶ南三島遺跡の南端に位置する。当調査区の面積は、3・4区合わせて30,411㎡である。

南三島遺跡は、縄文時代早期から近世に及ぶ大規模な複合遺跡であり、これまでに調査された1・2・5・6・7区のおよそ70,000㎡からは、竪穴住居跡379軒、土坑2189基、炉穴73基、埋甕遺構39基、地下式坑14基、溝45条、井戸2基、地点貝塚56地点、屋外炉5基等が検出されている。

当調査区は、南三島遺跡の最終調査であり、昭和59年12月から昭和61年7月にかけて調査を実施した。それによって、隣接する1・2・5区と同様、縄文時代早期から近世にかけての遺構や遺物が数多く検出されている。3・4区から検出された遺構の内訳は次の通りである。

	<3区>	<4区>	
住居跡	114軒	52軒	
縄文時代	34軒	7軒	
弥生時代	5軒	0軒	
古墳時代	47軒	11軒	
奈良・平安時代	28軒	34軒	
竪穴遺構	3基	1基	
土坑	517基	175基	(土坑は、3区で535号、4区で182
炉穴	9基	0基	号まで附番して調査をしたが、
埋甕遺構	18基	0基	整理の段階で、3区18基、4区
地下式坑	2基	4基	7基をそれぞれ欠番とした。)
溝	14条	17条	
井戸	3基	2基	
地点貝塚	25基	3基	
その他	1基	2基	

これらの遺構のうち、縄文時代の住居跡41軒、土坑500基、炉穴、埋甕遺構、地点貝塚については既刊書「南三島3・4区(I)」で報告しているのので、ここでは弥生時代以降の遺構と遺物について概要を記述する。

弥生時代の遺構は、調査区の南西端に集中して検出されているが、掘り込みも浅く遺物数も極めて少量である。

古墳時代の遺構は、前期・中期・後期それぞれの時期の住居跡が検出されたが、中核は五領期

にあり3・4区合わせて40軒検出され、竜ヶ崎ニュータウン内では最大の遺跡である。特に、4区の25号住居跡から出土した多量の手捏土器と炭化米は注目される。また、中期の和泉期では一辺が10mを越す大形の住居跡3軒が検出されている。

奈良時代から平安時代にかけての遺構は、調査区の西端から南縁にかけて帯状に分布している。奈良時代に位置付けられる住居跡は29軒検出され、数多くの須恵器が出土している。平安時代に位置付けられる住居跡は33軒検出され、中でも富壽神宝を出土した3区の第97号住居跡は特筆に値する。また、「幡」や「万」・「人」等の墨書や刻書をもつ土器が3区から39点、4区から18点出土している。

中世以降の遺構は、土坑、地下式坑、溝、井戸などである。これらも、奈良・平安時代の遺構と同様の分布状態を示している。4区の南端に位置する窪み地帯は、地下式坑や粘土貼りの土坑・長方形の土坑が集中していることから中世の墓域としてとらえられる。

2 遺構・遺物の記載方法

本書における遺構・遺物の記載方法は、下記の要領で統一した。

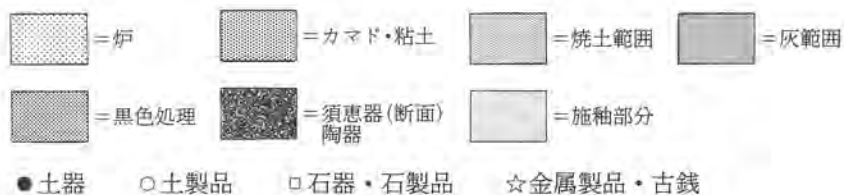
(1) 使用記号

本書で使用した遺構・遺物に関する記号は、次のとおりである。

住居跡	SI	井戸	SE	ピット	P	土器	P	石器 (含石製品)	Q
竪穴遺構	ST	地下式坑	SY			土製品	DP	金属製品	M
土坑	SK	溝	SD			拓本土器	TP		

(2) 遺構の表示

本書で使用した遺構遺物等の実測図中の表示は、次のとおりである。



(3) 遺構番号について

遺構番号については、調査の過程で種類別・調査順に番号を付したが、整理にあたり遺構でない判断したものは欠番とした。

(4) 土層の分類について

各遺構における堆積土の土層については、調査時に、含有物・色調・粘性・締まり具合などを観点として線引きし観察記録を行ったが、整理の段階で色調と含有物について下記のように整理

し記号化した。なお、色調については「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著・日本色研事業株式会社発行)を使用した。

番号	土色名	色相	明度/彩度
1	褐色	Hue	7.5YR $\frac{3}{3}\frac{4}{4}\frac{6}{6}$
		Hue	10 YR $\frac{3}{4}\frac{4}{6}$
2	暗褐色	Hue	7.5YR $\frac{3}{3}\frac{3}{4}$
		Hue	10 YR $\frac{3}{3}\frac{3}{4}$
3	極暗褐色	Hue	7.5YR $\frac{3}{3}$
4	黒褐色	Hue	7.5YR $\frac{3}{1}\frac{3}{2}\frac{2}{2}$
		Hue	10 YR $\frac{3}{1}\frac{3}{2}\frac{2}{2}\frac{3}{3}$
		Hue	5 YR $\frac{3}{1}\frac{3}{2}\frac{2}{2}$
5	黒色	Hue	7.5YR $\frac{3}{1}\frac{1}{1}$
		Hue	10 YR $\frac{3}{1}$
6	明褐色	Hue	7.5YR $\frac{5}{6}\frac{5}{6}$
7	にぶい褐色 (にぶい黄褐色)	Hue	7.5YR $\frac{5}{3}\frac{5}{4}$
		Hue	10 YR $\frac{5}{4}\frac{4}{2}$
8	灰褐色 灰黄褐色	Hue	7.5YR $\frac{5}{2}\frac{5}{2}\frac{3}{2}$
		Hue	5 YR $\frac{5}{2}\frac{4}{2}\frac{5}{2}$
9	褐色	Hue	10 YR $\frac{5}{2}$
		Hue	7.5YR $\frac{4}{1}\frac{5}{1}$
		Hue	10 YR $\frac{5}{1}$
10	橙黄色	Hue	5 YR $\frac{4}{1}\frac{5}{1}$
		Hue	7.5YR $\frac{5}{6}\frac{6}{8}$
11	にぶい橙黄色 (にぶい黄橙黄色)	Hue	5 YR $\frac{5}{3}\frac{5}{4}$
		Hue	5 YR $\frac{5}{4}$
		Hue	10 YR $\frac{7}{2}\frac{6}{2}$
12	明褐色	Hue	7.5YR $\frac{7}{2}$
13	灰白色	Hue	7.5YR $\frac{7}{2}$
		Hue	10 YR $\frac{7}{1}\frac{7}{2}\frac{7}{1}$
14	黄褐色 (にぶい黄色)	Hue	2.5YR $\frac{7}{4}\frac{5}{4}$
15	黄灰色	Hue	2.5YR $\frac{7}{1}$
16	暗灰黄色 赤褐色	Hue	2.5YR $\frac{7}{2}$
		Hue	5 YR $\frac{7}{6}\frac{7}{8}$
17	暗赤褐色	Hue	2.5YR $\frac{7}{6}\frac{7}{4}$
		Hue	5 YR $\frac{7}{2}\frac{7}{3}\frac{7}{4}\frac{7}{6}$
18	極暗赤褐色	Hue	2.5YR $\frac{7}{2}\frac{7}{3}\frac{7}{4}$
		Hue	5 YR $\frac{7}{3}\frac{7}{4}$
19	明赤褐色	Hue	2.5YR $\frac{7}{2}\frac{7}{3}\frac{7}{4}$
		Hue	5 YR $\frac{7}{6}\frac{7}{6}$
20	にぶい赤褐色	Hue	2.5YR $\frac{7}{6}\frac{7}{6}$
		Hue	5 YR $\frac{5}{3}\frac{5}{4}\frac{5}{3}\frac{4}{4}$
21	橙黄色	Hue	2.5YR $\frac{5}{3}\frac{4}{5}\frac{5}{3}$
		Hue	5 YR $\frac{5}{6}\frac{6}{6}\frac{7}{8}$
22	灰赤色	Hue	2.5YR $\frac{5}{8}$
		Hue	5 YR $\frac{5}{2}$
23	暗灰赤色	Hue	2.5YR $\frac{5}{2}$
		Hue	5 YR $\frac{5}{1}$
24	赤色	Hue	10 R $\frac{5}{8}\frac{4}{6}\frac{6}{8}$
		Hue	2.5YR $\frac{5}{1}$
25	暗赤色	Hue	10 R $\frac{3}{4}\frac{3}{6}$
26	暗赤褐色	Hue	10 R $\frac{3}{2}$
27	極暗褐色	Hue	10 R $\frac{3}{2}\frac{2}{3}$
28	赤黒色	Hue	10 R $\frac{3}{1}$
		Hue	2.5YR $\frac{3}{1}$

記号	含有物
a	ローム土 (ソフトローム土を含む)
b	ローム粒子
c	ロームブロック (ハードロームブロックを含む)
d	ローム小ブロック (ハードローム小ブロックを含む)
e	ローム大ブロック (ハードローム大ブロックを含む)
f	焼土粒子
g	焼土ブロック
h	炭化粒子
i	炭化物 (木炭も含む)
j	灰
k	攪乱
l	黒色土粒子 (黒色粘土粒子)
m	粘土
n	粘土粒子
o	粘土ブロック
p	砂粒
q	礫
r	骨粉 (骨片を含む)
多少を表す記号	
a''	多量, 極多量
a'	中量
a	少量, 極少量
多少は「r」をもって表現する。	



第5図 南三島遺跡3・4区遺構分布図

(5) 遺構実測図の作成方法と掲載方法

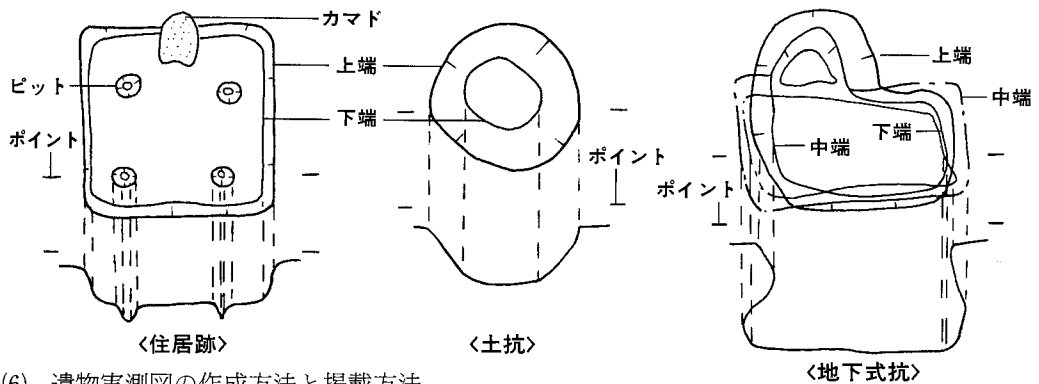
○各遺構の実測図は、縮尺 $\frac{1}{50}$ の原図を浄書して版組し、それをさらに $\frac{1}{3}$ に縮少して掲載することを基準とした。

○カマドは縮尺 $\frac{1}{50}$ の原図をトレースして版組し、それをさらに $\frac{1}{3}$ に縮少して掲載した。

○実測図中のレベルは標高であり、m単位で表示した。

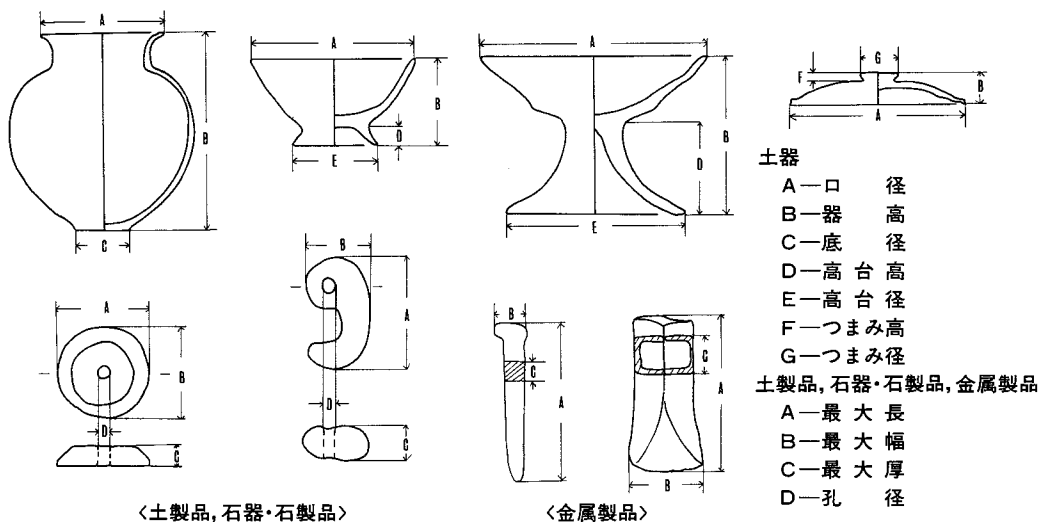
○遺構からの出土遺物は、遺構の平面図及び断面図中にその位置をドットで表示し、接合できたものは実線で結んだ。なお、出土遺物に付した数字は遺物実測図及び拓影図の番号と符号する。

実測図例



(6) 遺物実測図の作成方法と掲載方法

○土器の実測図は、原則として中心線の左側に外面、右側に内面と断面を図示した。なお、遺物の法量については、次のように計測した。



○土器拓影図は、右側に断面を図示した。表裏双方の拓影を掲載する場合には、断面を中央に配し、左側を外面、右側を内面とした。

○遺物は、原則として実測図を浄写したものを写に縮小して掲載した。しかし、種類や大きさによりそれ以外の縮尺を使用したものもある。

(7) 表の見方

〈住居跡一覧表〉

住居跡 番号	位 置	長軸方向 (主軸方向)	平 面 形	規 模		床 面	柱穴数	炉・カマド	覆土	出土遺物	時期	備 考
				長軸×短軸(m)	壁高(cm)							

○住居跡番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用したが、整理の途中で住居跡でないと判断したものについては欠番とした。

○位置は、小調査区（グリッド）名で表示した。なお、複数の調査区にまたがる場合は、遺構の占める面積の割合が最も大きい調査区名を表示した。

○方向は、長軸ないし長径が座標北からみてどの方向にどれだけ傾いているかを、「N-15°-E」（座標北から東へ15度傾く）のように角度で表示した。

○平面形は、現存している形状の上端面で判断した。

○規模の欄の長軸・短軸は、平面上の上端面の計測値であり、壁高は、残存壁高の計測値である。なお、平面形が楕円形の場合は長径・短径を表示した。

○床面は、「平坦」、「凹凸」「ゆるい起伏」の三つに分け、文字で表記した。

○柱穴数の欄は、平面図中に表示されたピットの中から、その住居跡に伴うと思われる柱穴の本数を表示した。

○炉・カマドは、その種類を表し、炉やカマドをもたないものは空欄とした。

○覆土は、自然堆積のものは「自然」、人為的堆積のものは「人為」、不明のものについては「不明」と表記した。

○出土遺物は、主な遺物の種類とその出土点数を記した。

○時期は、住居跡の所属時期を出土遺物から推定可能な範囲で表記した。なお、不明のものについては空欄とした。

○備考は、重複関係等について記した。

○表記事項のうち「()」で記したものは、推定値である。

〈土坑一覧表〉

土 坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平 面 形	規 模		壁 面	底 面	覆土	形 態	出土遺物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)						

○土坑番号は、調査の段階で付した番号をそのまま使用したが、整理の段階で地下式坑や井戸


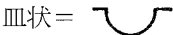
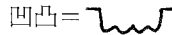
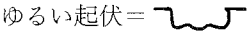
に分類できたものについては欠番とした。

○壁面は、底面からの立ち上がり状態によって次のとおり分類表記した。

垂直＝およそ80°～90°の傾き ゆるやかに外傾＝およそ60°未満の傾き

外傾＝およそ60°～80°の傾き 内傾＝90°以上の傾き 袋状＝開口部がくびれている

○底面は、次のとおりに分類して表記した。

平坦＝  皿状＝  凹凸＝  ゆるい起伏＝ 


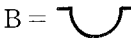
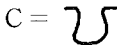
○土坑の形態分類については、次のとおりに表した。

・平面形

I＝円形 II＝楕円形 III＝隅丸方形・方形 IV＝隅丸長方形・長方形

V＝不定形

・断面形

A＝  B＝  C＝ 

・規模（長径・長軸）

1＝1 m 未満 2＝1m 以上 2 m 未満 3＝2 m 以上

・深さ（底面から確認面までの垂直線の長さ）

a＝50cm 未満 b＝50cm 以上 100cm 未満 C＝100cm 以上

以上のものを組み合わせて、「IA2b」のように表記した。

※ 上記以外の項目については、住居跡一覧表の記載方法に準じた。

〈出土土器観察表〉

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考

○図版番号は、実測図中の番号である。

○法量は、A—口径、B—器高、C—底径、D—高台高、E—台部径、F—つまみ高、G—つまみ径を示す。現存値は（ ），復元推定値は〔 〕を付して記した。

○なお、弥生式土器の観察結果は表によらず、文章にて記述した。

○備考の欄は、土器の残存率、P 番号、写真図版番号等を記述した。

〈石器・石製品一覧表〉

図版番号	器種	台帳番号	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石質	出土地点	備考

〈土製品一覧表〉

図版番号	器種	台帳番号	長さ×幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点	備考

〈金属製品一覧表〉

図版番号	器種	材質	台帳番号	長さ × 幅 × 厚さ (cm)	重量 (g)	出土地点	備考

〈古銭一覧表〉

図版番号	名称	素材	初铸年	西暦	铸造地	出土地点	台帳番号	備考

〈墨書・刻書一覧表〉

No	出土地点	釈文	種別	器形	器質	文字の位置	図版番号	備考

○図版番号は、実測図中の番号である。

○法量は、「(6)遺物実測図の作成方法と掲載方法」の項で示したものに従った。その際、欠損品の残存値は（ ）を付して記した。

○備考の欄は、遺物の特記すべき内容、写真図版番号等について記載した。

(8) 遺構・遺物の解説について

○調査区域内における住居跡のおおまかな位置については、3区は小調査区L3h4区から、4区はN6b8区からみて、「本跡は調査区の西部」というように記載した。

○近接する住居跡については、同時代あるいは同時期のものを記述した。ただし、あてはまる住居跡が近くにない場合には、時代（時期）を明記して記述した。

○長軸・短軸は住居跡の上端で、床面積は下端で計測した数値である。

○南三島遺跡の覆土には、基本的に少量のローム粒子、炭化粒子、焼土粒子を含んでいるため、それらについては特に記載しなかった。

○土器以外の遺物の解説については、第3章 第9節「土器以外の出土遺物」に観察表のかたちでまとめて掲載した。

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

1 弥生時代

(1) 3 区

第25号住居跡（第6図）

本跡は、調査区の西部 L2h3区を中心に確認された住居跡で、第53号住居跡の東6 m ほどに位置し、本跡の南20m には第94号住居跡が存在している。

平面形は、長軸5.97m、短軸4.98m ほどの隅丸長方形を呈し、各辺はわずかに外側へ張り出している。長軸方向はN-50°-Wを指し、床面積は25.6m²である。短辺にあたる北西と南東の壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、長辺にあたる北東と南西の壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。壁高は23~40cmで、東部が高くなっている。壁面はハードローム層まで掘り込み、よく締まっている。床面は、壁際から中央部に向かって緩やかに傾斜し、全体として浅い皿状を呈している。ピットは4か所確認された。各ピットは、上端の直径28~40cm、深さ51~74cmで、規則的に配置されていることから4本とも支柱穴と思われる。炉は、床面を15cmほど掘り窪めた地床炉で、中央部からわずかに北西に寄って位置し、P₁とP₄を結んだ線にその西縁が接している。炉の平面形は長径120cm、短径56cmの楕円形状を呈し、長径方向はN-58°-Wを指している。炉床は、一部に木根による攪乱を受けているが、西側を中心にかなり強く焼き締まりレンガ状を呈している。従って本跡の使用期間は長かったものと思われる。入口部は、炉の位置等から南東壁側にあったものと推定される。

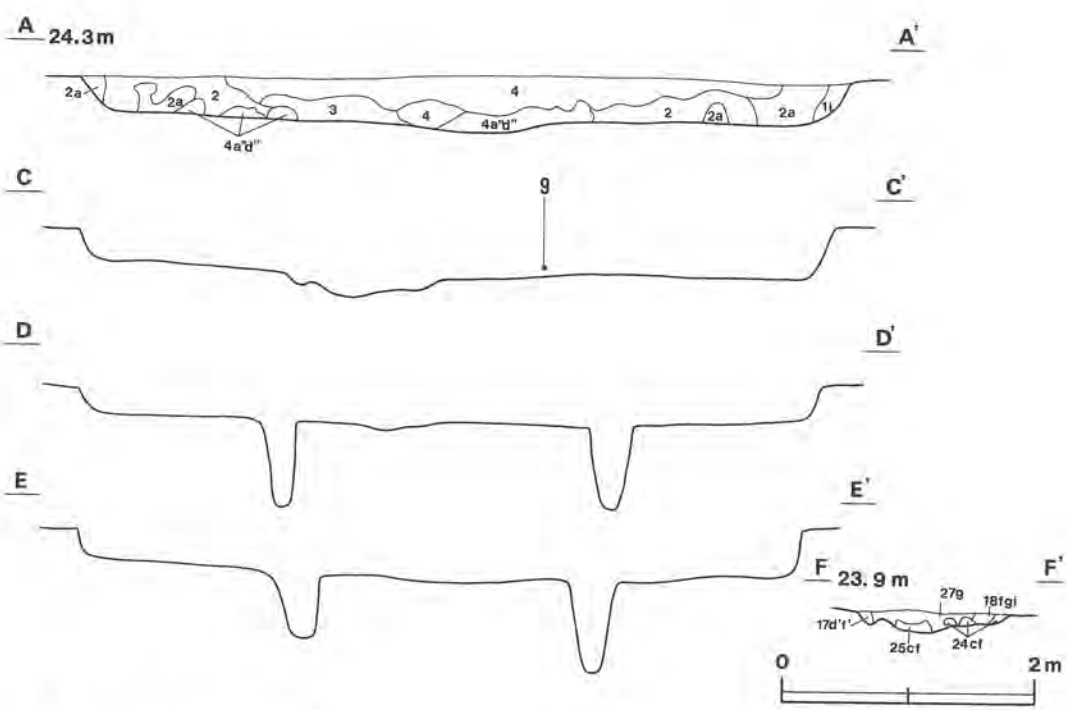
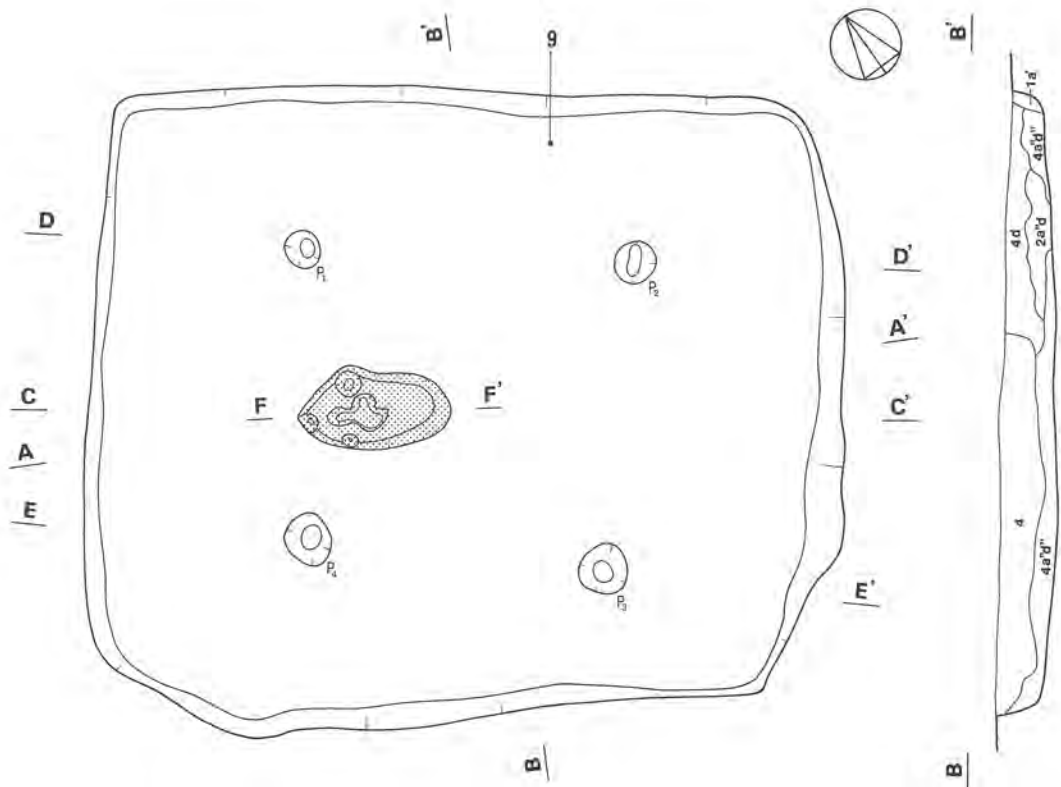
覆土は黒褐色土で、下層にはローム小ブロックを多量に含んでいる。自然堆積層と思われる。

遺物は、覆土中から弥生式土器片44点、土師器片55点が出土している。弥生式土器片は、覆土の下層に集中しているが、第7図1・2は炉の南側の床面から出土したものである。

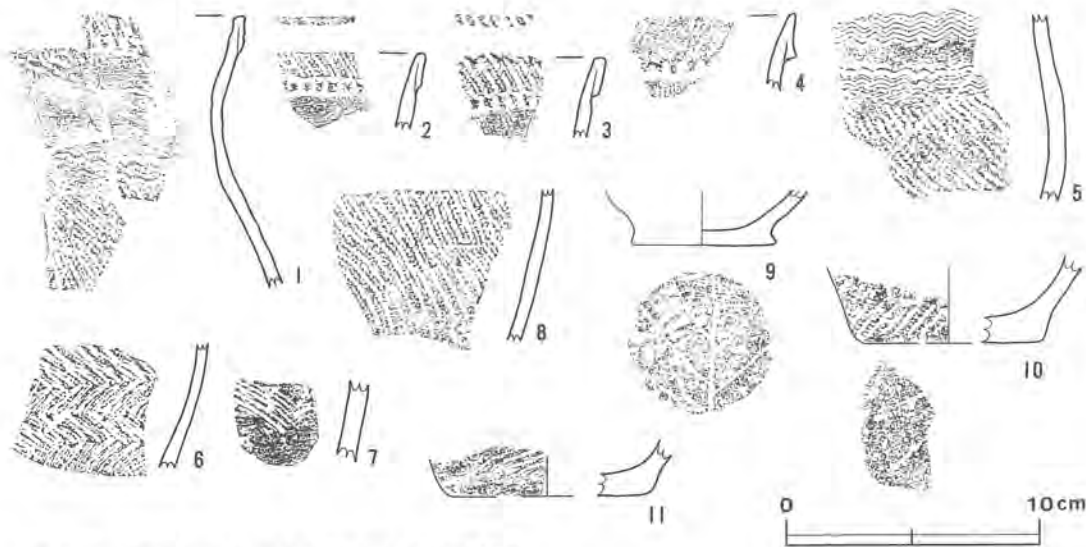
本跡は、遺物や遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

弥生式土器解説（第7図）

1~4の口縁部は、いずれも複合口縁である。口縁部の外面には付加条縄文が、折り返し下端部には刺穴が連続して施されている。1の頸部は無文で、胴部との境には結束回転文（4条）が横位に施されている。4の頸部には、櫛描直線文が垂下している。5~8は、頸部あるいは胴部片で、5には横位の櫛描波状文、6には羽状縄文、7には櫛描弧線文、8には付加条縄文が施文されている。9~11は底部片で、9・10の底面には木葉痕が観察できる。



第 6 图 第25号住居跡実測図



第7図 第25号住居跡出土遺物実測・拓影図

第27号住居跡 (第8図)

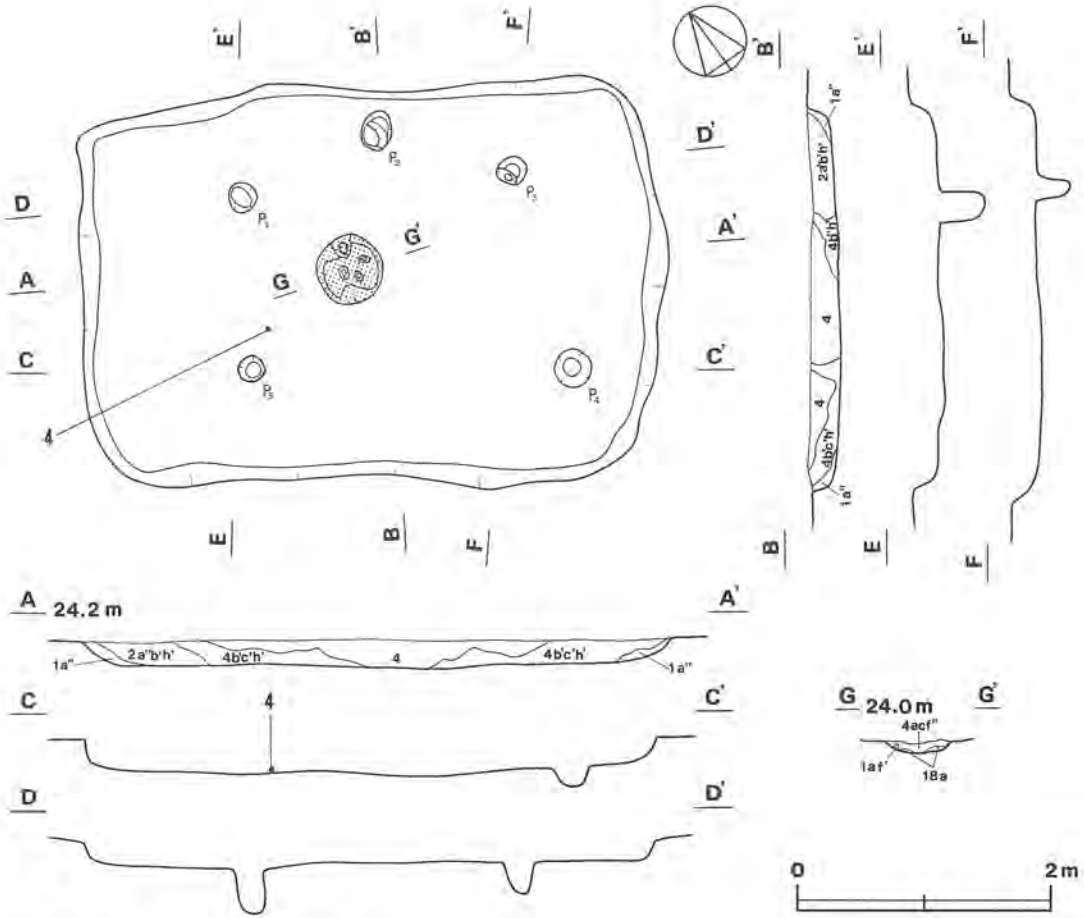
本跡は、調査区の南西部 M1a9区を中心に確認された住居跡で、西コーナー部と床面の北西部は、縄文時代の第211号土坑と第230号土坑をそれぞれ掘り込んでいる。本跡の南東9 m には第29号住居跡が、南東15m には第94号住居跡が存在している。

平面形は、長軸4.59m、短軸3.08mの隅丸長方形状を呈し、短辺はわずかに外側へ張り出している。長軸方向はN-52°-Wを指し、床面積は12.1m²である。壁はロームで、60~75度の傾きで外傾して立ち上がっている。壁高は23~30cmで、壁面には木根による攪乱がみられる。床は、緩やかに起伏しており、南西壁際の一部にわずかな高まりがみられる。床面は、炉周辺が硬く踏み締まっているほかは、やや軟弱である。ピットは5か所確認したが、P₅は第211号土坑の覆土中にあり、土坑調査中に確認されたものである。ピットの規模は、上端の直径が21~28cm、深さが17~35cmの範囲にある。支柱穴は、ピットの配置からしてP₁・P₃~P₅の4本と推定されるが、P₄は他の柱穴に比べ10cm以上も浅く、柱穴として機能したか否か疑問である。北東壁際に存在するP₂は、底面が凹凸しており本跡に関わる可能性は少ない。炉は、床面を浅く掘り窪めた地床炉で、直径55cmほどの円形状を呈し、床面の中央から50cmほど北西に寄って位置している。炉床は、良く焼けてブロック状を呈している。入口部は、炉の位置から南西壁側にあったものと推定される。

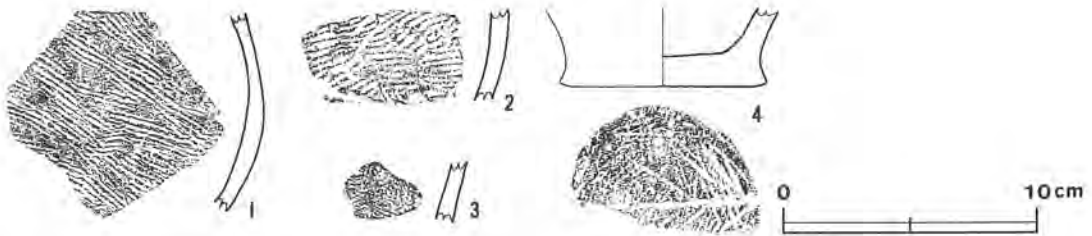
覆土は、黒褐色土で、レンズ状に堆積している。自然堆積層と思われる。

遺物は、覆土中から土師器の甕形土器胴部片1点、礫2個が出土し、炉の西側の床面直上から第9図4の弥生式土器底部片が出土している。

本跡は、遺物や遺構の形態等から弥生時代後期の住居跡と思われる。



第 8 図 第27号住居跡実測図



第 9 図 第27号住居跡出土遺物実測・拓影図

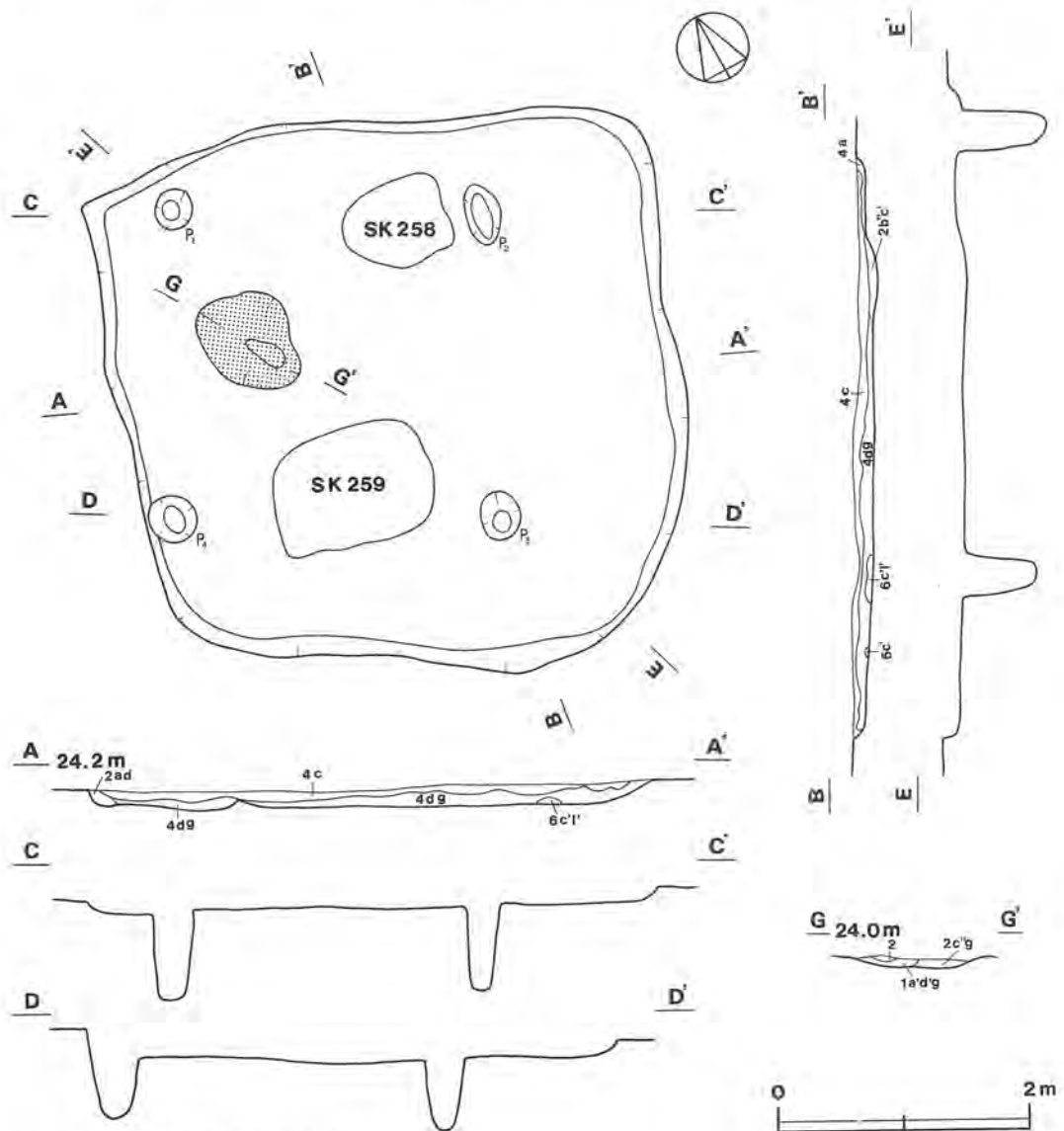
弥生式土器解説 (第 9 図)

1～3は胴部片で、1・3には撚糸文が、2には2種類の縄文(単節RLとLR)が施文されている。4は底部片で、底面に木葉痕が観察できる。

第29号住居跡（第10図）

本跡は、調査区の西部 L1h7区を中心に確認された住居跡で、西壁は調査区外の農道に接している。本跡の東方 8 m には第53号住居跡が、南東10m には第27号住居跡が存在している。

平面形は、長軸4.60m、短軸4.32mの隅丸方形形状を呈するが、南東壁は僅かに外側へ張り出している。長軸方向はN-62°-Wを指し、床面積は16.5m²である。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。壁面は、壁高が5~19cmと浅い上に、木根による攪乱を受けているため不明確な部分が多い。床面は、細かな凹凸がみられるがほぼ平坦であり、全体的に硬く締まっている。特に北東コーナー部から南壁の中央にかけての幅50cm、長さ 2 m の範囲は極めて硬く踏み締まっております。



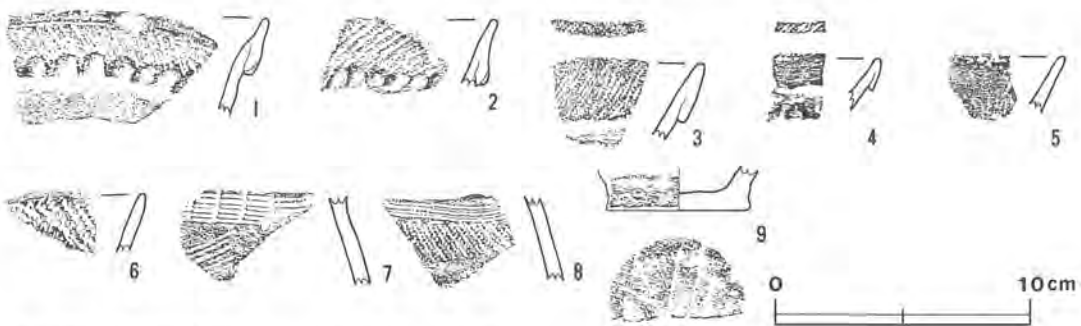
第10図 第29号住居跡実測図

入口部にあたるのではないかと推定される。ピットは4か所確認した。上端の直径は30~50cm、深さは50~65cmの規模を有することから、いずれも支柱穴と思われる。形状は、 $P_1 \cdot P_3 \cdot P_4$ は上端、下端とも円形状を呈するが、 P_2 は長径50cm、短径30cm（上端）ほどの楕円形状をしている。このような形状の柱穴は、同台地上の弥生時代の住居跡にまま見られるものであるが、本跡において東コーナー部の1本だけが、なぜ楕円形状を呈するのかは不明である。炉は床面を浅く掘り窪めた地床炉で、中央部から北西に1.2mほど片寄り、 P_1 の近くに位置している。炉の東側は一部攪乱により削られているが、本来は長径108cm、短径50cmほどの楕円形を呈していたものと推定される。炉床は、火熱を受けてレンガ状に赤化しており、長期間使用されたものと思われる。

覆土は、黒褐色土で、下層には少量の焼土小ブロックが含まれている。自然堆積層と思われる。

遺物は、覆土中から弥生式土器片15点、土師器片12点、須恵器片9点、礫1個が出土している。第11図の9は東壁側の覆土下層より出土した弥生式土器の底部片である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から弥生時代後期の住居跡と思われる。



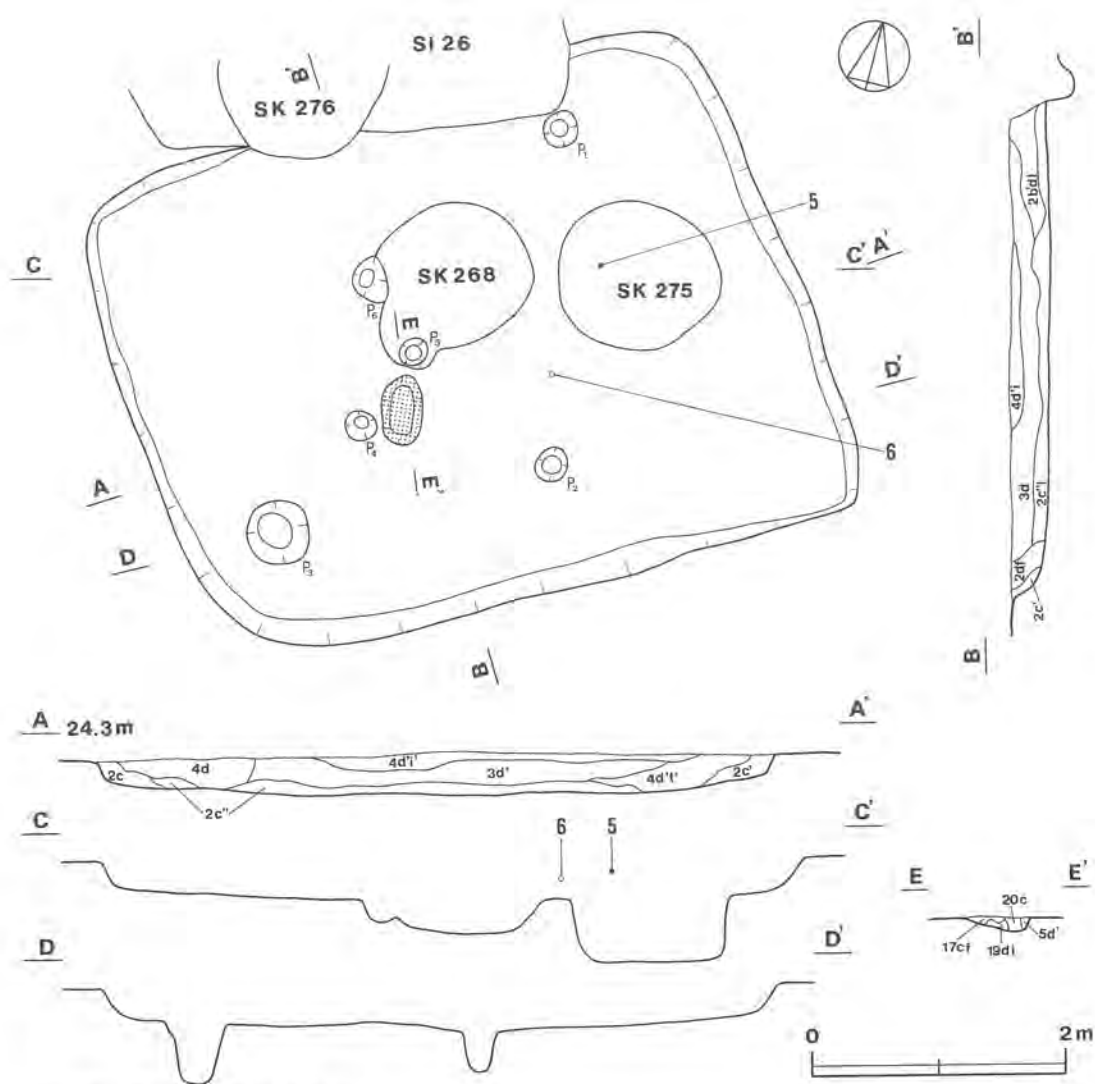
第11図 第29号住居跡出土遺物実測・拓影図

弥生式土器解説（第11図）

1~6は口縁部片で、1~4が複合口縁、5・6は単口縁である。1・2の口縁部外面には付加条縄文が施され、折り返し部の下端には指による押圧が連続して加えられている。3の口縁部外面には撚糸文が、6の口縁部外面には縄文（単筋RL）が施されている。4・5は無文で、口唇部に刻み加えられている。7・8は頸部片で、7には簾状文が、8には櫛描直線文がそれぞれ横位に施されている。9は底部片で、底面に木葉痕が観察できる。

第53号住居跡（第12図）

本跡は、調査区の西部L110区を中心に確認された住居跡で、北壁は8世紀の第26号住居跡に掘り込まれ、北壁際は縄文時代の第276号土坑を、床面は時期不明の第268・275号土坑を掘り込んでいる。本跡の北東5mには第25号住居跡が、南西8mには第27号住居跡が存在している。



第12図 第53号住居跡実測図

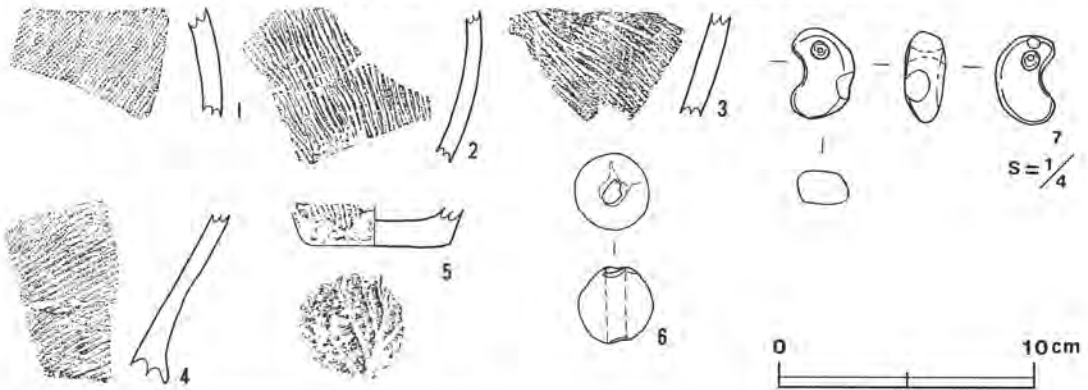
平面形は、長軸5.35m、短軸4.15mの隅丸長方形状を呈するが、北西コーナー部はやや丸みを欠いている。長軸方向はN-58°-Eを指し、床面積は18.4m²である。壁はロームで、南壁は65~70度、その他は30~45度の傾きで緩やかに立ち上がっている。壁高は、20~29cmである。床面は、第25号住居跡と同様に壁際から中央部に向かって緩やかに傾斜し、全体として皿状を呈している。床面は、ロームで、やや軟弱である。ピットは6か所確認したが、上端の直径は55cm、深さは48cmほどの規模を有する。P₃以外は、掘り込みが浅く、底面も凹凸していることから柱穴とは考えられない。炉は床面を10cmほど掘り窪めた地床炉で、中央部から60cm南に寄り、P₄の近くに位置している。平面形は、長径55cm、短径33cmの楕円形状を呈し、長径方向はN-10°-Wを指している。炉内には焼土ブロックや炭化材を含む暗褐色土が堆積しているが、炉床の焼き締まりや赤化

は観察できず、本跡の使用は短期間であったものと推測される。入口部は、柱穴が不明確であるため断定できないが、炉の位置等から北東壁側が想定できる。

覆土は、上層から黒褐色土・極暗褐色土・暗褐色土の3層で、自然堆積層と思われる。

遺物は、遺構中央部に多く、覆土中から弥生式土器片9点、土師器片68点、須恵器片1点、勾玉1点、球状土錘1点が出土している。7の勾玉はP₃に近い覆土中層から出土したものである。

本跡は、遺構の形態や所在する位置等から、弥生時代後期の住居跡と思われる。



第13図 第53号住居跡出土遺物実測・拓影図

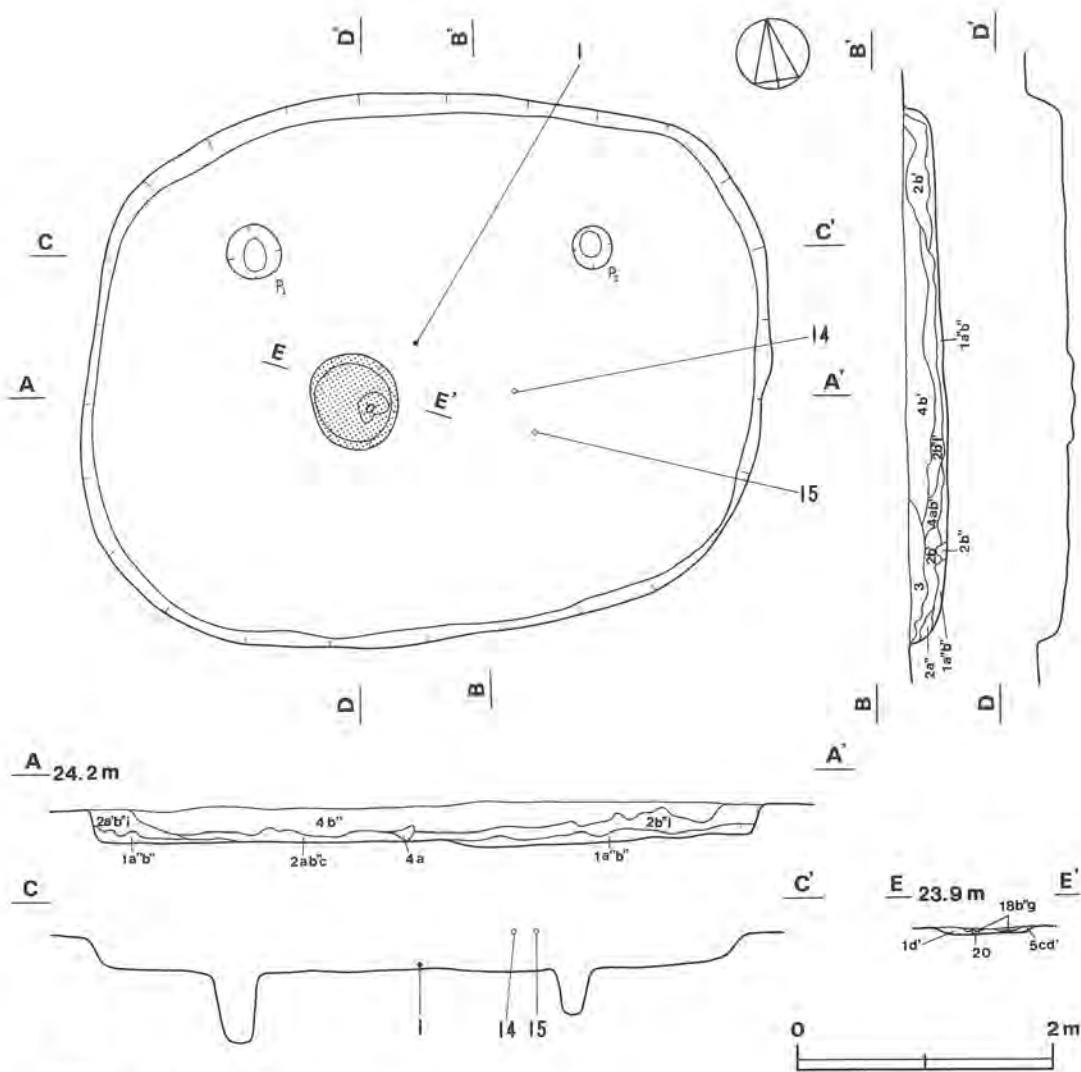
弥生式土器解説（第13図）

1～4は胴部片で、1・4には付加条縄文が、2・3には撚糸文が施文されている。5は底部片で、底面に木葉痕が観察できる。

第94号住居跡（第14図）

本跡は、調査区の南西部 M2d₄ 区を中心に確認された住居跡で、本跡の北方10m には第25号住居跡が、北西9 m には第27号住居跡が存在している。

平面形は、長径5.34m、短径4.30mの楕円形状を呈し、長径方向はN-78°-Wを指している。床面積は18.6㎡である。壁はロームで、60～70度の傾きで外傾しながら立ち上がっている。壁高は25～29cmで、壁面は良好に残っている。床はロームで、やや軟弱である。床面は、第25号住居跡と同様に壁際から中央部に向かって緩やかに傾斜し、全体として皿状を呈している。ピットは、床の北側に2か所確認した。2本とも上端は直径30～40cm、深さ38～58cmの規模を有することから支柱穴と思われる。南側の床面からは、再度の調査にもかかわらずピットは確認できなかった。炉は、床面を5cmほど掘り窪めた地床炉で、中央よりやや南西寄りに位置している。平面形は、直径70cmの円形状を呈している。炉内には、焼土小ブロック少量を含む暗赤褐色土が堆積しているが、炉床の焼き締まりや赤化は観察できず、使用頻度はあまり高くなかったと思われる。入口部は、炉の位置等から東壁側が想定される。



第14図 第94号住居跡実測図

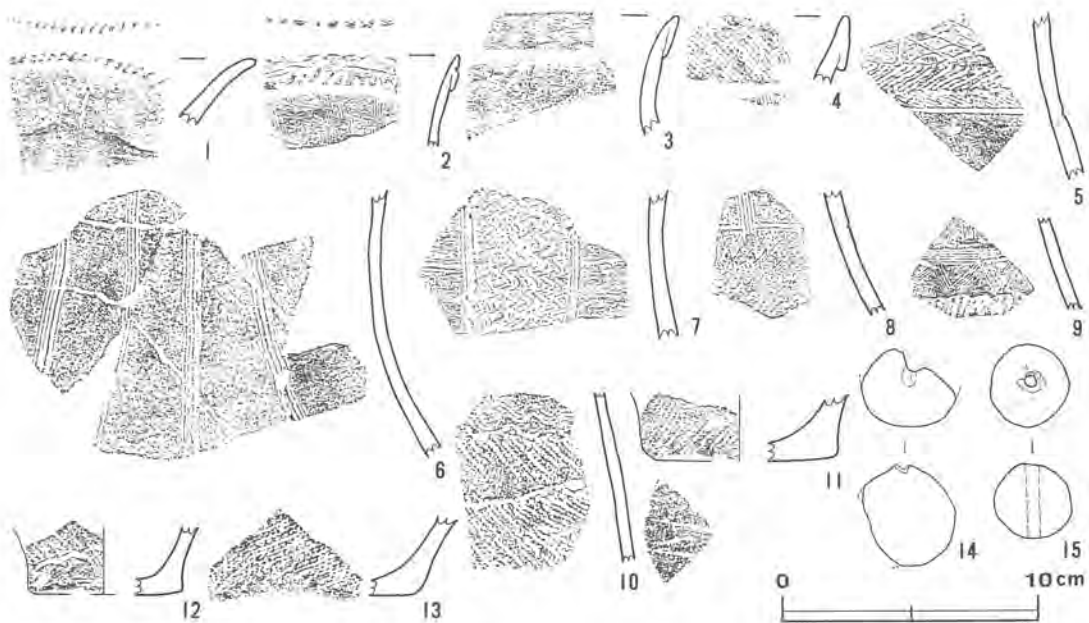
覆土は、上層から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の3層で、自然堆積層と思われる。

遺物は、覆土の上・中層に多く、弥生式土器片29点、土師器片28点、球状土錘2点が出土している。中央部の床面からは、第15図1の弥生式土器片が出土している。

本跡は、遺物や遺構の形態等から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

弥生式土器解説（第15図）

1～4は口縁部片で、1は単口縁、2～4は複合口縁を呈している。1・2・4の口唇部には刻みが施されている。2の口縁部には一条の沈線が巡り、2・4の頸部には櫛描直線文が垂下している。5～10は頸部片で、5は縦位の沈線区画内を格子目文で充填し、その下位には羽状縄文（無節）を横走させている。6～10には、櫛描による直線文・波状文・山形文等が施されている。



第15図 第94号住居跡出土遺物実測・拓影図

11～13は底部片で、11の底面には木葉痕が観察できる。

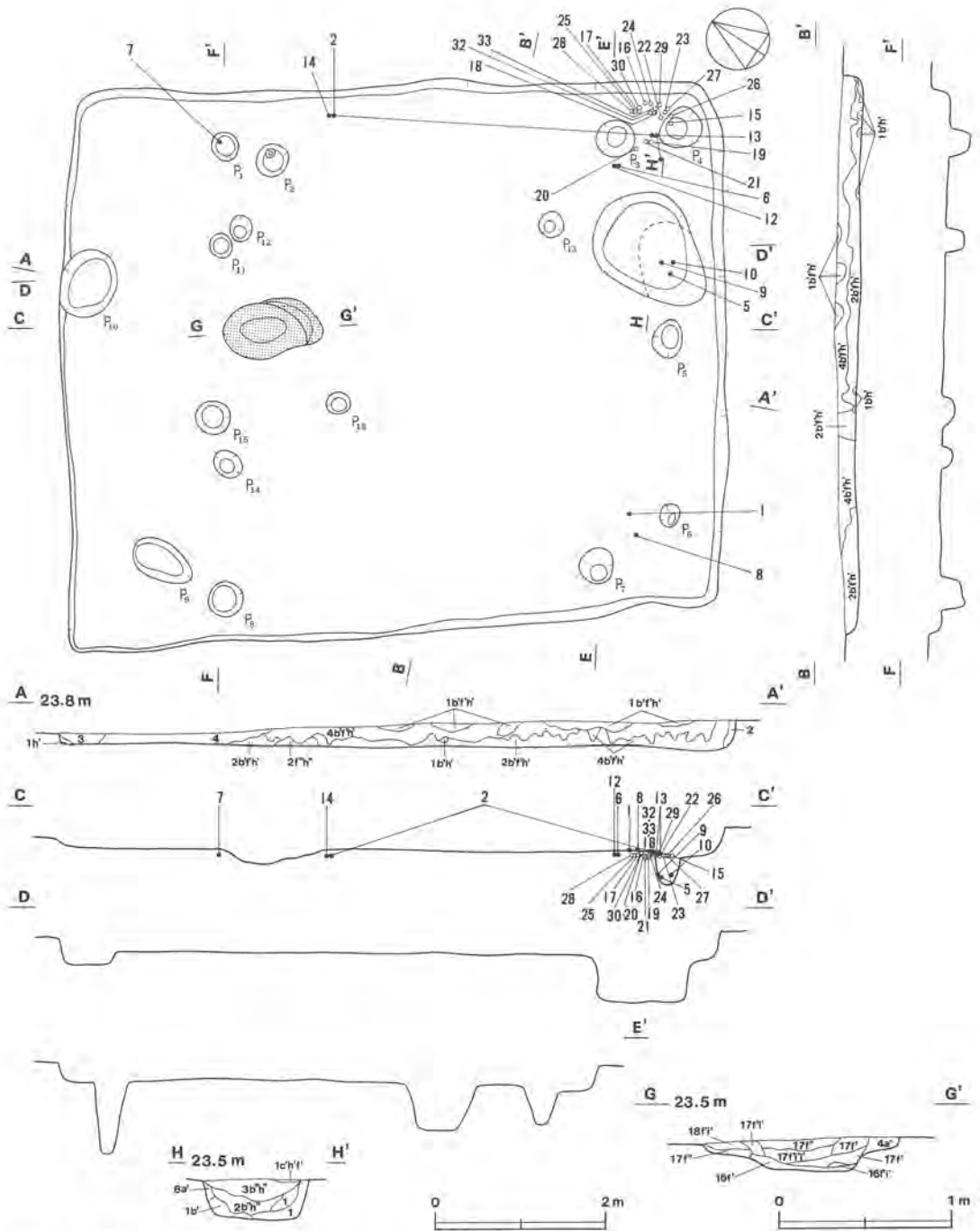
2 古墳時代

(1) 3 区

第1号住居跡 (第16図)

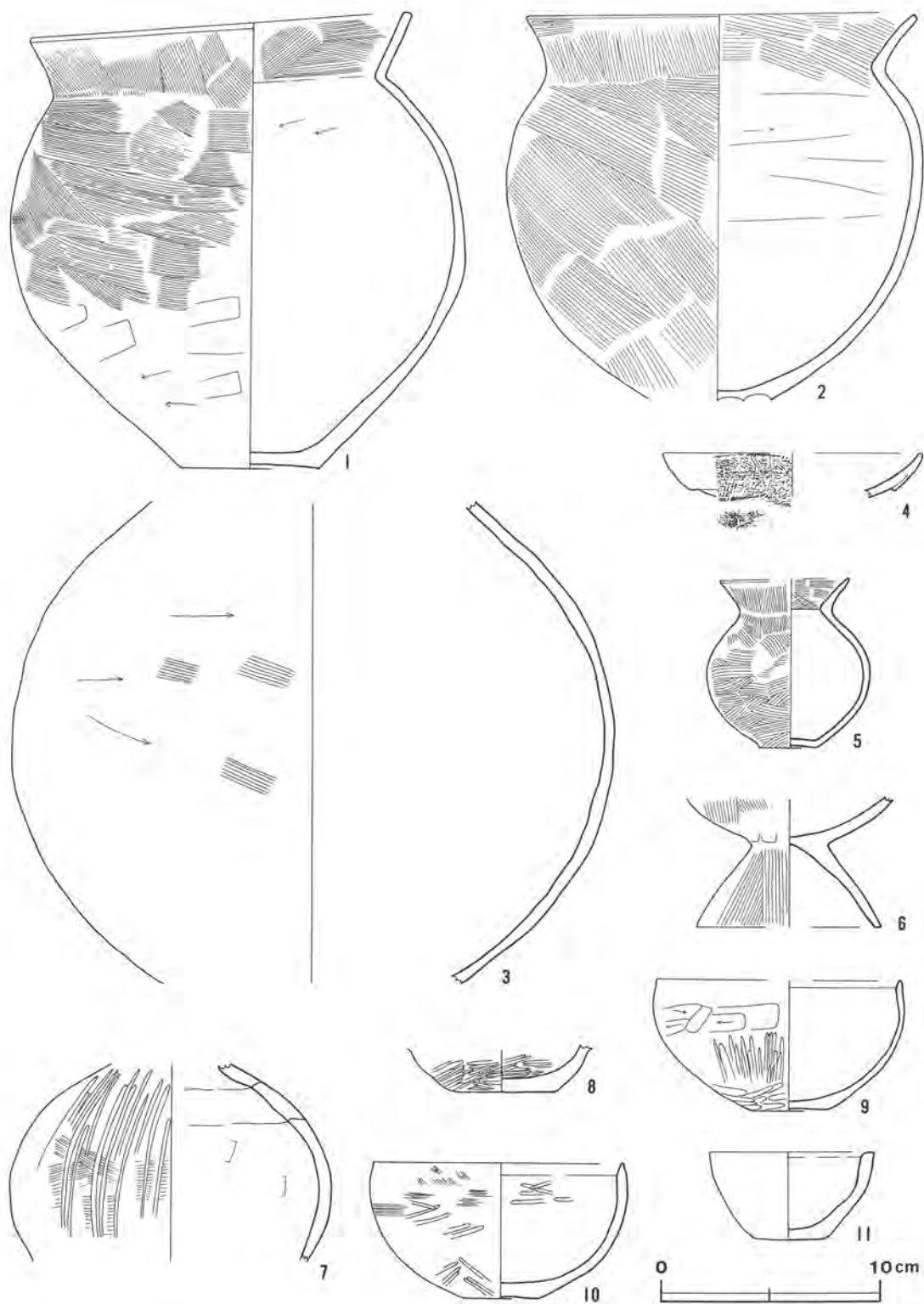
本跡は、調査区の北部 K3g₁区を中心に確認された住居跡で、北東壁は縄文時代後期の第34号住居跡を、北西壁から南西壁にかけては同じく縄文時代の第60・63・67・68・88・119号土坑の一部を掘り込んでいる。なお、本跡の東方4 mには第7号住居跡が、南方12mには第13号住居跡が存在している。

平面形は、長軸7.75m、短軸6.47mの長方形状を呈し、長軸方向はN-32°-Wを指している。床面積は46.2m²である。壁はロームで、垂直に立ち上がっているが、北東から南西にかけての壁面は前述の縄文時代の住居跡や土坑の覆土を壁としているため検出が困難であり、推定に頼る部分も多かった。壁高は18～20cmの範囲で、比較的浅く、壁溝は確認できなかった。床面は平坦で、中央部は極めて硬く踏み締まっているが、壁際から幅70～100cmほど内側は、一般に軟弱である。ただ、南東壁の中央部は壁近くまで硬く踏み締まっていることから、ここが本跡の入口部にあたるものと推定される。ピットは16か所確認したが、P₃・P₅・P₇以外は小規模で、覆土の締まりも弱く、柱穴を想定することは難しい。柱穴と思われるP₃・P₅・P₇は、いずれも上端の長径

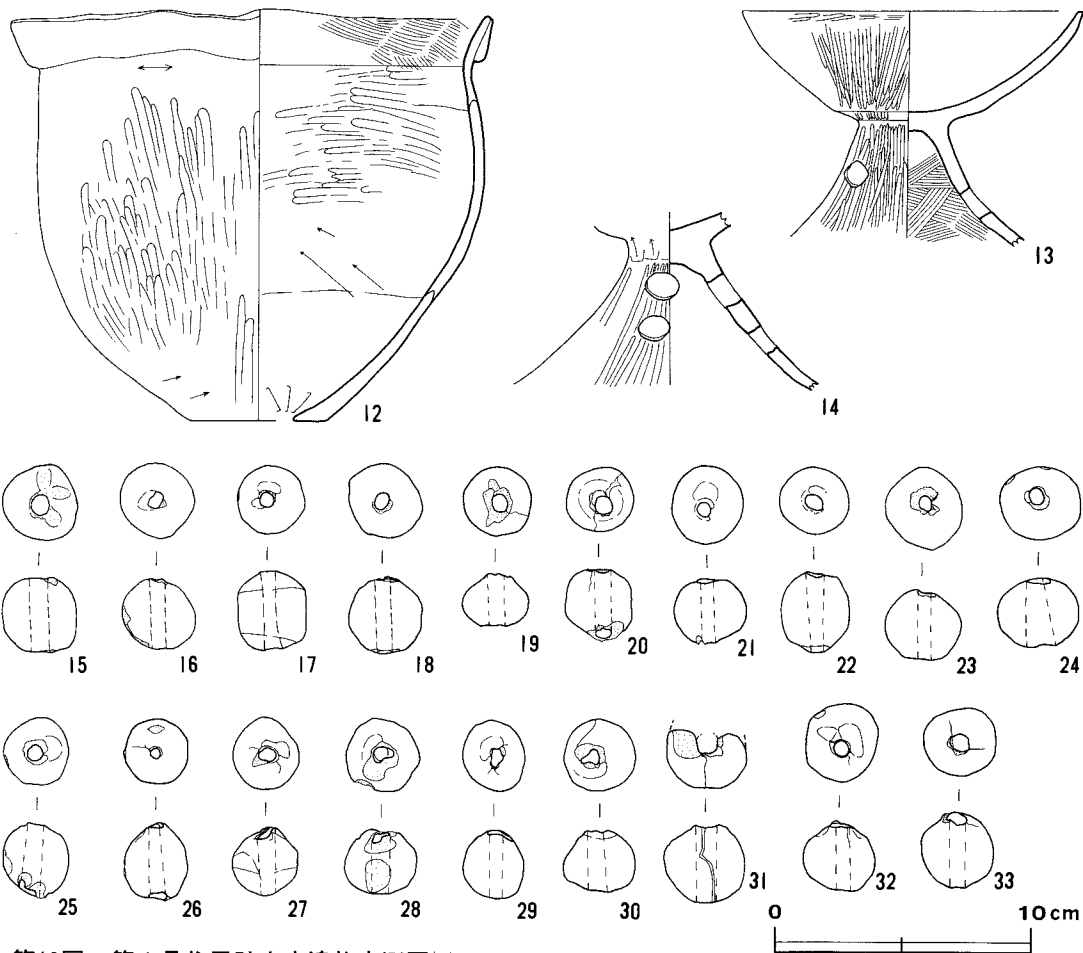


第16図 第1号住居跡実測図

が40cmの円筒形状を呈し、深さは $P_3 \cdot P_5$ が40cm、 P_7 が80cmである。これら3本のうち、 P_5 は配列から考えて入口部あるいは貯蔵穴に関係する柱穴であり、残りの2本が本跡の支柱穴と思われる。 $P_3 \cdot P_7$ に対応する柱穴は、配列から考えれば P_1 と P_8 が該当するようと思われるが、前述のように小規模であるなどの理由から断定はできない。貯蔵穴は、南東コーナー部に位置している。調査



第17图 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第18図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

時には長軸1.6mの楕円形状に掘り込んだが、確認面の一部に踏み締まった層が存在することや、同一色調の土層も詳細に観察すると、土師器片を含む西側と、縄文式土器片のみを含む東側とに区分できることから、本跡の貯蔵穴は縄文時代の土坑の一部を掘り込んで作られ、本来の規模は、図面上に破線で表示した程度のもと思われる。底面の形状などの検証はできなかった。炉は、床面を20cmほど掘り込んだ地床炉で、中央から70cmほど北に寄って位置している。平面形は、長径110cm、短径75cmの楕円形状を呈し、長径方向は本跡の長軸方向とほぼ一致する。炉内には、焼土を多量に含む赤褐色土が堆積し、炉床もレンガ状に焼変していることから、本跡は長期間使用されたものと推定される。

覆土は、上層に締まりの弱い黒褐色土、下層に締まりを有する暗褐色土が堆積している。自然堆積層であるが、耕作により攪乱を受けている。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片672点、球状土錘22点が出土している。東コーナー部の床面には、第17図2の台付甕形土器や第18図13の高环形土器が破片で、第18図12の甑形土器

がほぼ完形のまま正位で出土したほか、第18図15～33ほかの球状土錘22個が直径50cmの範囲に集中して出土している。第17図1の甕形土器は南西コーナー部近くの床面に横位で、5の小型壺形土器、9・10の埴形土器と直径6cmの粘土塊は貯蔵穴の覆土下層から出土している。これらの出土遺物は、すべて本跡に伴うものと考えられる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。

第1号住居跡出土土器観察表

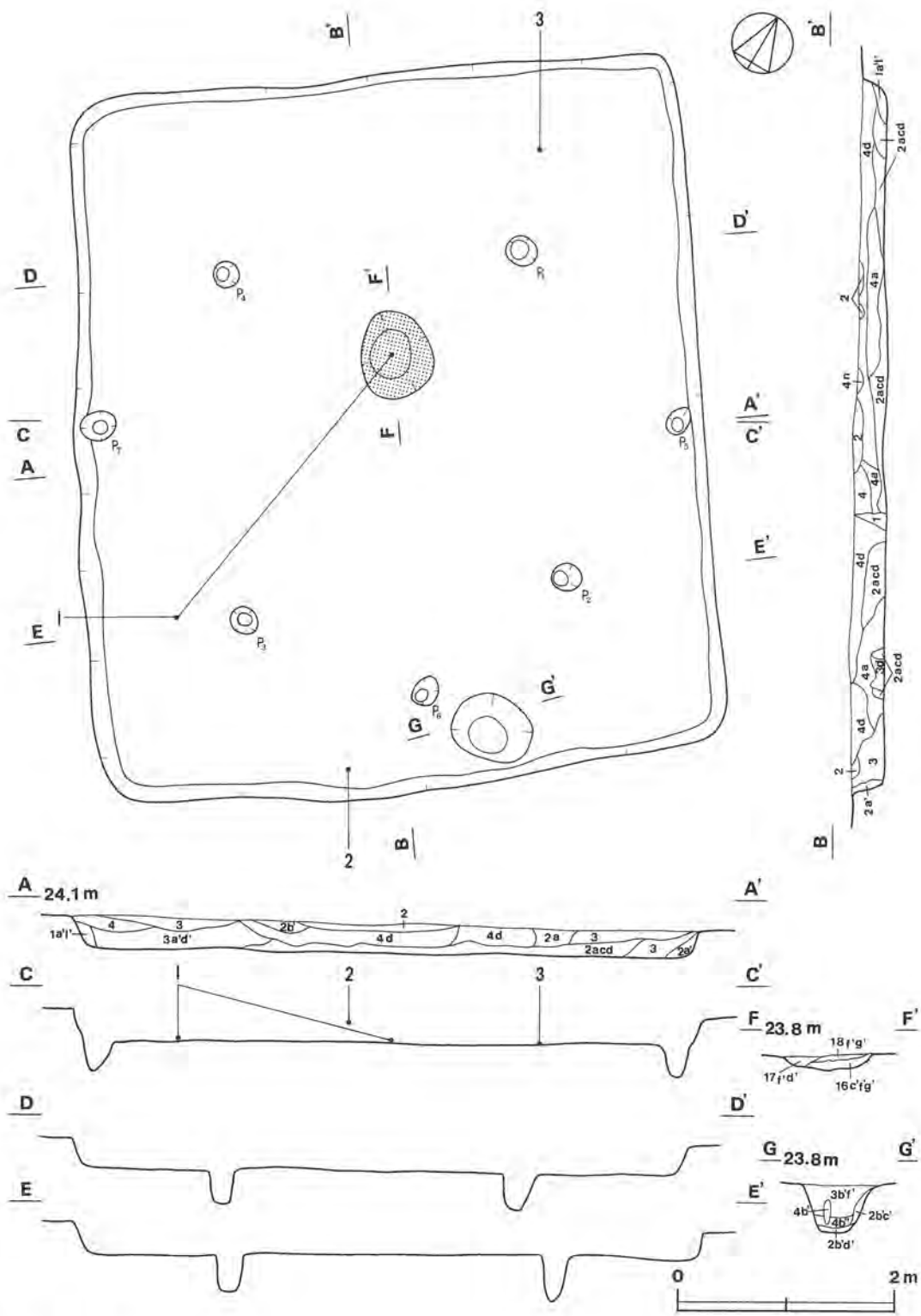
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図 1	甕形土器 土師器	A 17.8 B 21.4 C 6.4	胴部は外傾して立ち上がり、中位から内彎する。最大径を中位に持つ。口縁部は、頸部から「く」の字状に外傾する。	口縁部外面は斜位のハケ目整形。胴上半部から中央部にかけて横位のハケ目整形。胴下半部は篋ナデ整形。	砂粒 褐色 普通	95% P 3 PL70
2	台付甕形土器 土師器	A 18.1 B (18.7)	脚台部欠損。胴部は外傾して立ち上がり、中位以上で強く内彎する。最大径を中位に持つ。口縁部は外反して開く。	口縁部内・外面と胴部外面はハケ目整形。胴部内面は横位の篋ナデ整形。	砂粒 にぶい褐色 普通	90% P 2 PL71
3	壺形土器 土師器	B (22.4)	胴部片。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。	外面は横位のナデ整形。わずかにハケ目痕を残す。	砂粒 橙色 普通	30% P 1
4	壺形土器 土師器	A (12.0) B (2.1)	胴部以下欠損。口縁部は複合口縁で、外傾して開く。	口縁部。頸部外面に羽状縄文を施文。頸部外面と口縁部内面は赤彩。	砂粒 浅黄橙色・赤色 普通	15% P 10
5	小型壺形土器 土師器	A 5.9 B 7.8 C 2.7	上げ底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は、頸部から「く」の字状に外傾する。	口縁部から胴上半部にかけて縦位のハケ目整形。胴中央部以下横位のハケ目整形。口縁部内・外面は赤彩。	砂粒 にぶい黄橙色 良好	90% P 4 PL82
6	台付甕形土器 土師器	B (6.0) E (8.4)	脚台部片。脚台部は「ハ」の字状に開く。胴下半部は内彎して立ち上がる。	胴下半部・脚台部とも縦位のハケ目整形。	砂粒 明赤褐色 普通	20% P 7 2次焼成、スス付着
7	埴形土器 土師器	B (9.2)	胴部片。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。	外面はハケ目整形後、縦位の篋磨き。赤彩。内面は横位の篋ナデ整形。輪積痕を残す。	砂粒 明赤褐色 普通	20% P 5
8	埴形土器 土師器	B (2.1) C 4.8	体部は内彎気味に立ち上がり、頸部から外反する気配をみせるが、上位を欠損する。	内・外面とも横位の篋磨き。内・外面とも赤彩。	砂粒・バミス 赤色 良好	70% P 14
9	埴形土器 土師器	A (10.7) B 6.1 C 3.4	上げ底。底部から内彎して立ち上がる。口縁部はつまみ上げられて直立し、内面に稜を持つ。	口縁部は横ナデ整形。体部下半は縦位の篋磨き。内面はナデ整形。口縁部に赤彩痕が残る。	砂粒多量・バミス 橙色 普通	70% P 11

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図 10	碗形土器 土師器	A 11.5	上げ底。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部はつまみ上げられて直立し、内面に稜を持つ。	内・外面とも横位の篋磨きが施されるが、外面には横位のハケ目整形痕が残る。内・外面とも赤彩。	砂粒多量・パミス 赤色 普通	80% P12 PL78
		B 6.3				
		C 3.8				
11	碗形土器 土師器	A (7.5)	体部は外傾して立ち上がり、上位は直立し口縁部に至る。	内・外面とも横位または斜位の篋磨き。内・外面とも赤彩。	砂粒・パミス 赤色 良好	80% P13
		B 4.1				
		C 3.2				
第18図 12	甑形土器 土師器	A 14.0	底面に径5.5cmの穿孔あり。胴部は内彎ぎみに立ち上がり、胴中位以上は直立する。口縁部は複合口縁で、外傾して開く。	口縁部貼り付け。胴部外面は縦位の篋磨き。胴部内面は上半部が篋磨き、下半部は寛ナデ整形。	砂粒 橙色 普通	60% P6 PL76
		B 16.3				
		C 5.5				
13	高坏形土器 土師器	A 13.4	脚部は「ハ」の字状に開き、裾部は緩やかに広がる。中央に3孔が穿たれる。坏部は下位に稜を持ち、内彎して立ち上がり、口縁部は強く内彎する。	外面と坏部内面は篋磨き。脚部内面は横位のハケ目整形。坏部内・外面、脚部外面は赤彩。	砂粒 赤色 良好	70% P8 PL79
		B (9.1)				
		D (4.7)				
		E (9.2)				
14	高坏形土器 土師器	B (7.1)	坏部欠損。脚部は「ハ」の字状に開く。裾部以下欠損。脚部には上下に2孔ずつ3組の計6孔が穿たれる。	脚部外面は縦位の篋磨き、内面は横ナデ整形。	砂粒多量・雲母 橙色 普通	40% P9 PL79
		D (6.0)				
		E (12.0)				

第5号住居跡 (第19図)

本跡は、調査区の北西部 L2b8 区を中心に確認された住居跡で、北コーナー部と南東壁の一部は縄文時代の土坑4基を掘り込んでいる。本跡の西6mには第21号住居跡が、南西7mには第19号住居跡が存在している。

平面形は、長軸6.66m、短軸5.81mの方形状を呈し、長軸方向はN-31°-Wを指している。床面積は34.5㎡である。壁は、ロームで良く締まり、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は26~28cmで、壁面の残存状況は良好である。壁溝は、第1号住居跡と同様に検出できなかった。床面は平坦で、支柱穴と思われるP₁~P₄に囲まれた内側は、極めて硬く踏み締まっている。壁際から1.2~1.5m内側は全般に軟弱であるが、南東壁側は、壁際まで踏み締まっていることからこの部分が本跡の入口部にあたるものと思われる。ピットは7か所確認した。いずれのピットも円形状を呈し、上端の直径は25~28cm、深さは30~45cmと比較的小規模であるが、検出時の覆土の状況や、配置等から考えて、7本とも本跡に伴う柱穴と思われる。柱穴の配置から考えると、P₁~P₄が支柱穴で、P₅・P₇は補助的な役割を果すものと思われる。P₆は入口部あるいは貯蔵穴に関係する柱穴である可能性が高い。貯蔵穴は、南東壁際の東寄りに位置している。貯蔵穴の平面形は、上端の長径75cm、短径60cmの楕円形状である。深さは48cmで、底面は直径35cmの円形状を呈している。



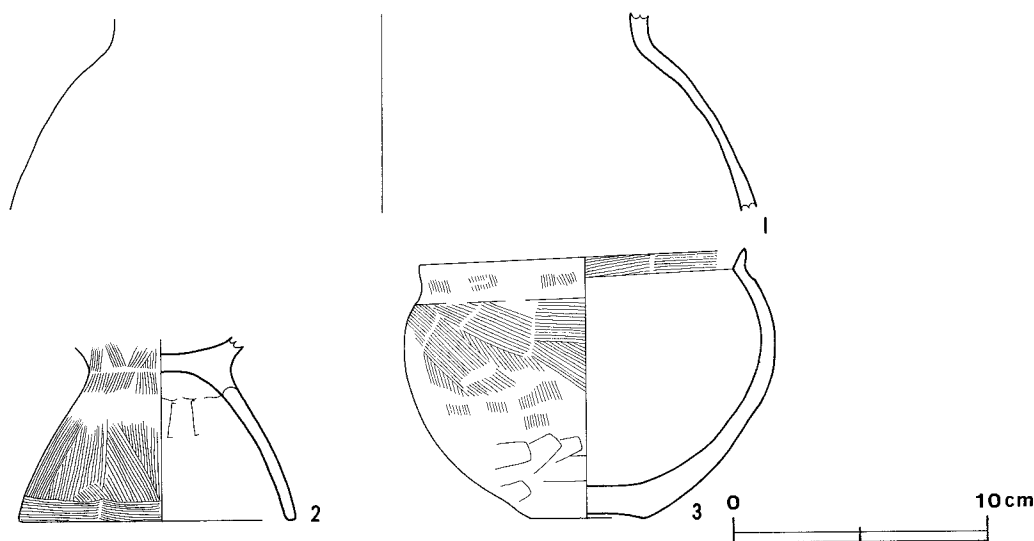
第19图 第5号住居跡実測图

貯蔵穴内の覆土は、上位に黒褐色土、下位には暗褐色土がレンズ状に堆積している。炉は、底面を20cmほど掘り込んだ地床炉で、中央から北西に70cmほど寄って位置している。平面形は、長径80cm、短径65cmの楕円形状を呈し、長径方向は本跡の長軸方向とほぼ一致する。炉内には、焼土を多量に含む赤褐色土が堆積し、南東部には、口縁部の一部と底部を欠損した甕形土器が正位の状態出土している。炉床は、焼き締まっている。

覆土は、上層に締めりを持つ黒褐色土、下層に締めりの弱い暗褐色土が堆積する自然堆積層で、所々に耕作による小規模な攪乱がみられる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片288点、後世に流れ込んだと思われる須恵器片5点が出土している。第20図3の鉢形土器は北コーナー部の床面近くから正位で、2の台付甕形土器の脚部は南東壁際の覆土中層から横位で出土している。1の甕形土器胴部片は、炉の中央部に半円形に立てられていた土器片とP₃付近の床面から出土した土器片が接合したもので、本跡に伴う遺物と考えられる。

本跡は、出土遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第20図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20図 1	甕形土器 土師器	B (7.9)	頸部片。頸部は胴上半部から垂直に立ち上がる。	外面は横位の篋磨き。器面にはパミス粒が浮き出している。	パミス多量 明褐色 普通	10% P16

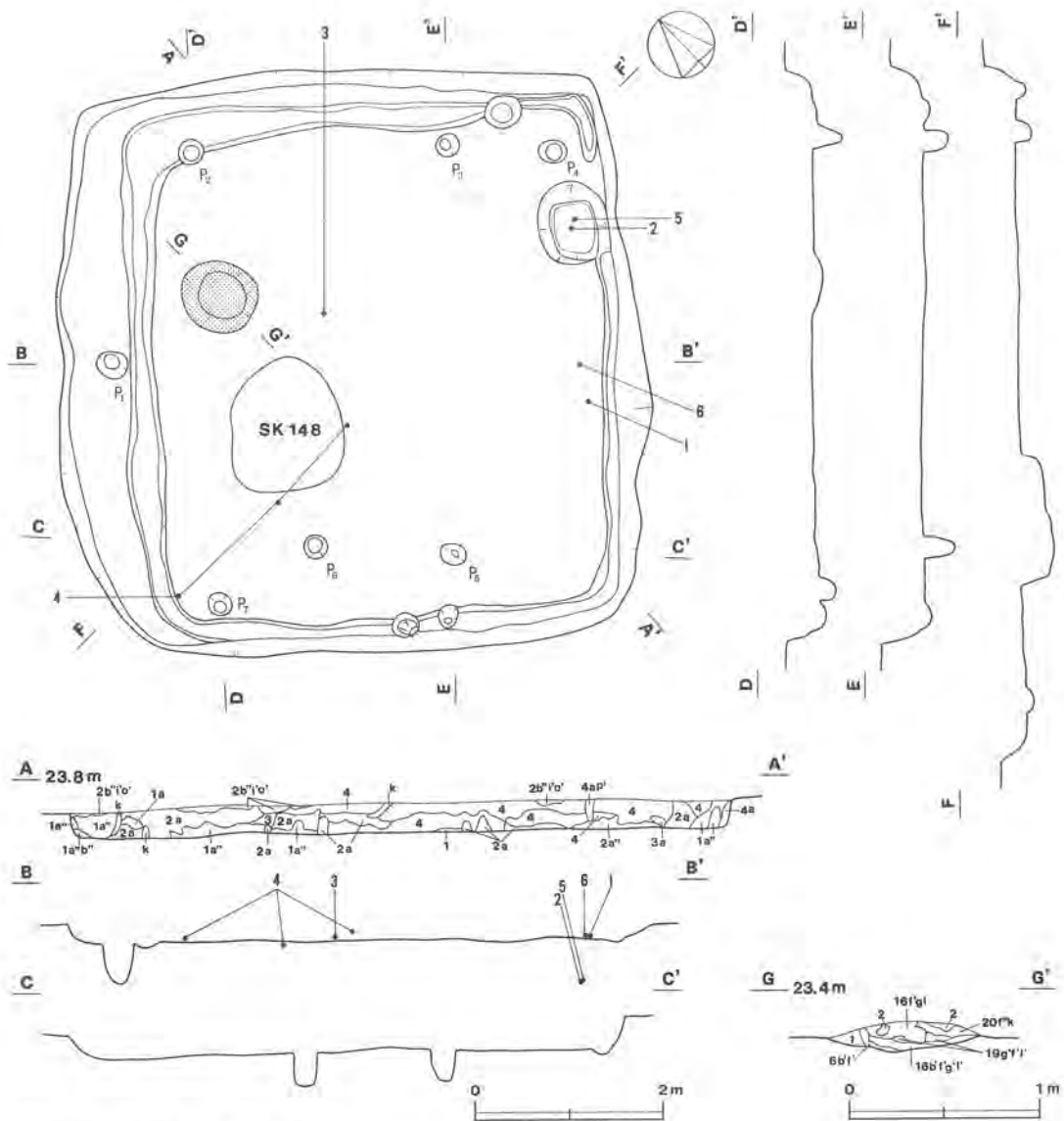
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20図 2	台付甕形土器 土師器	B (7.3) E (10.9)	脚台部片。脚台部は接合部から「ハ」の字状に開き、下位は内彎する。	外面はハケ目整形。内面は横位の篋ナデ整形。	砂粒・パミス 明赤褐色 普通	20% P17
3	鉢形土器 土師器	A 13.1 B 10.4 C 4.5	上げ底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を上位に持つ。頸部は外傾し、口縁部は直立する。口縁内面に稜を有する。	口縁部外面は横ナデ整形。胴部外面は上半部がハケ目整形。下半部は篋削り。内面は篋ナデ整形。	砂粒・パミス 橙色 普通	90% P15

第7号住居跡（第21図）

本跡は、調査区の北部 K3h4 区を中心に確認された住居跡で、西コーナー一部から北西壁の一部にかけては第3号溝に掘り込まれ、床面には縄文時代の土坑が3基確認された。本跡の西4mには第1号住居跡が、南東23mには第33号住居跡が存在している。

平面形は、一辺が6.3mの方形状を呈し、主軸方向はN-48°-Wを指している。床面積は、33.1㎡である。壁はロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は37～39cmであるが、西コーナー一部から北西壁の一部については、床面や残存する壁などから推定した。壁溝は、貯蔵穴付近を除いて周回している。南西側と南東側を巡る壁溝は壁直下に、北西側と北東側を巡る壁溝は壁際より70cmほど内側に掘られていることから、住居跡が拡張された可能性も考えて調査を進めたが、張り床などの痕跡をみいだすことはできなかった。床面は、全体的に緩やかな起伏を有し、他に比べ東部がわずかに高くなっている。床中央部と貯蔵穴の南西部以外は、特に踏み締まった所もなく全体的にやや軟弱な床質である。貯蔵穴の南西部は、壁際まで硬く踏み締まっており、この部分が本跡の入口部と推定される。床面には、耕作による小規模な攪乱も多く、ピットの確認は困難であったが、7か所を掘り込んだ。いずれも円筒形状を呈するもので、P₁・P₂・P₇は上端の直径25～33cm、深さ33～43cmの規模を有する。その他のピットは、それよりやや小規模である。配置・規模などから検討したが、いずれが主柱穴かを断定することはできなかった。貯蔵穴は、東コーナー部に近い南東壁際に位置し、平面形は、長軸90cm、短軸75cmの長形状を呈する。深さは50cmで、底面は方形状を呈し平坦である。貯蔵穴内には、暗褐色土、極暗褐色土、褐色土がレンズ状に堆積している。炉は、床面を10cmほど掘り込んだ浅い地床炉で、中央より北西に1.5m片寄り、北コーナー部に近接している。平面形は、直径80cmの円形状を呈し、炉内には焼土及び焼土ブロックが多量に堆積している。しかし、炉床は、それほど焼き締まっていないことから、本跡の使用期間は案外短かったのではないかとと思われる。

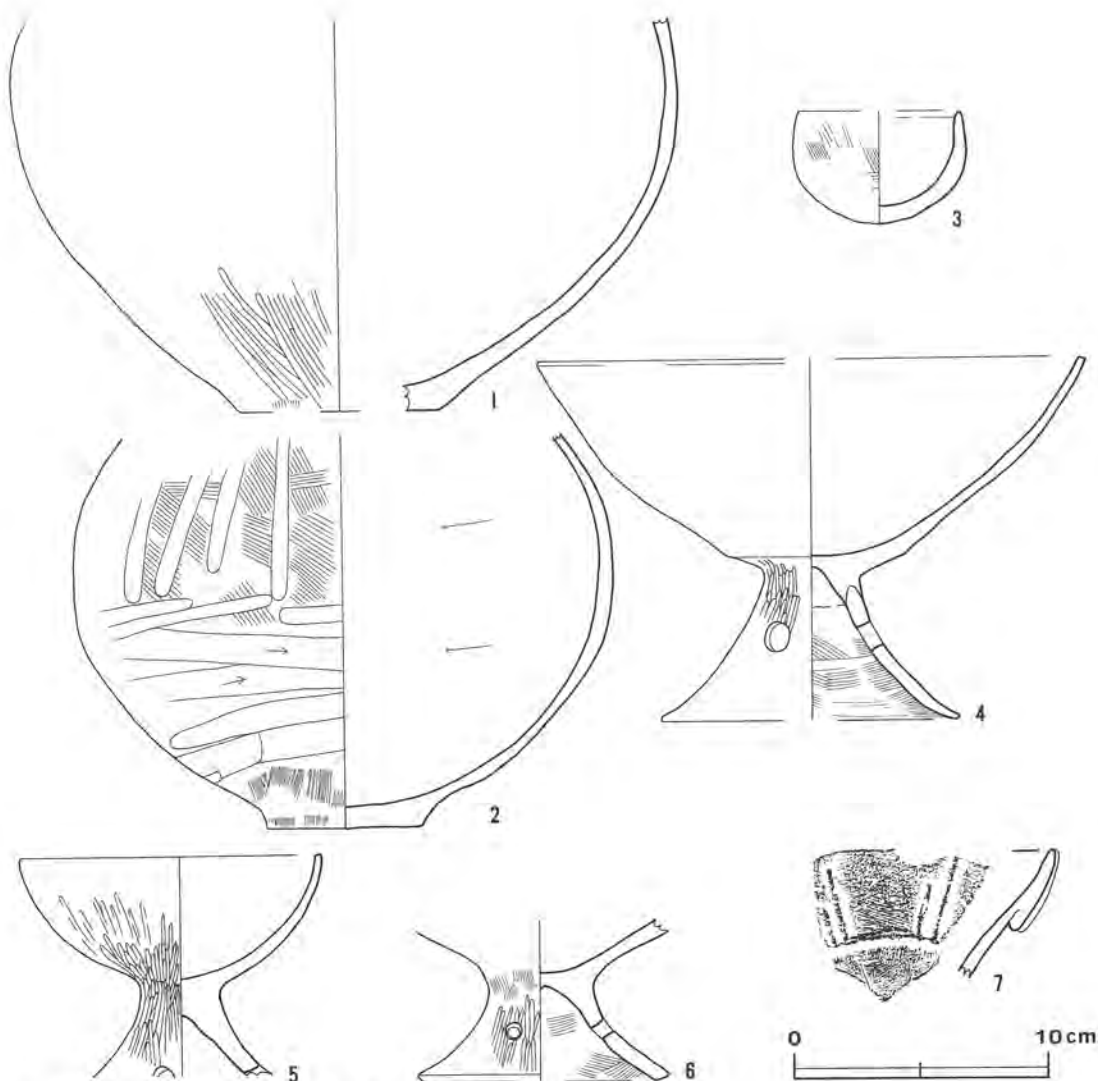
覆土は、黒褐色土と暗褐色土が交互に堆積する自然堆積層であるが、床面にまで達する攪乱も数か所認められた。



第21図 第7号住居跡実測図

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片327点、礫2個が出土している。南東壁際の床面から第22図6の高環形土器が倒立の状態、1の甕形土器が破片で出土している。中央部床面から3の埴形土器が破片で出土している。4の高環形土器は、中央部床面から北西壁付近の床面にかけて出土した3点の破片と、覆土中・下層から出土した3点の破片が接合したものである。貯蔵穴の底部から、2の壺形土器と5の高環形土器が出土している。これらの土器は、いずれも本跡に伴う遺物である。なお、覆土中層から7の棒状浮文をもつ土器の口縁部片が1点出土しているが、本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第22図 第7号住居跡出土土遺物実測図

第7号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第22図 1	甕形土器 土師器	B (15.2) C (7.8)	胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。上半部欠損。	外面は縦位の磨き。内面は横ナデ整形。	長石多量 にふい橙色 普通	30% P23
2	壺形土器 土師器	B (15.5) C 6.2	頸部以上欠損。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。	外面は磨削り。内面は横ナデ整形。	砂粒・スコリア 橙色 普通	40% P18 PL77
3	埴形土器 土師器	A 6.4 B 4.5	丸底。体部は底部から内彎して立ち上がり、全体が半球状を呈する。口縁内面に稜を有する。	外面はハケ目。内面は横ナデ整形。	砂粒 にふい橙色 普通	70% P22

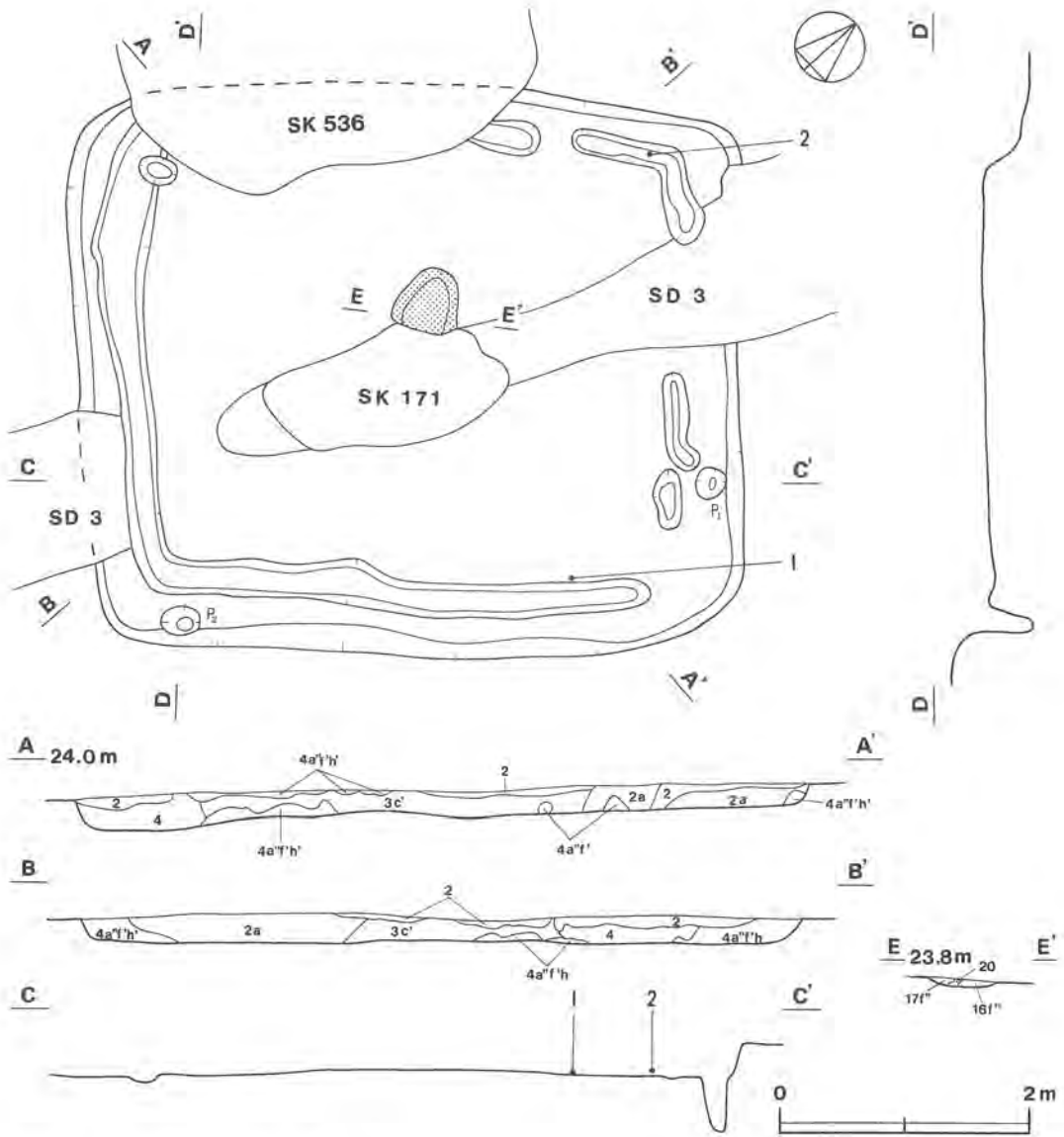
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第22図 4	高坏形土器 土師器	A (21.5) B 14.5 D 5.7 E (12.0)	脚部は「ハ」の字状に開き、上位に3孔が穿たれる。坏部は下位に稜を持ち、内彎しながら緩やかに立ち上がる。	外面はハケ目整形後、縦位の筥磨き。外面と坏部内面は赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	40% P19 PL79
5	高坏形土器 土師器	A (12.0) B (8.7) D (3.4)	脚部は「ハ」の字状に開き、中央部に3孔が穿たれる。坏部は内彎して立ち上がり、半球状を呈する。	外面は縦位の筥磨き。坏部内面はナデ整形。外面と坏部内面は赤彩。	砂粒 赤色 普通	60% P20 PL79
6	高坏形土器 土師器	B (6.4) D 4.0 E 10.0	脚部は「ハ」の字状に開き、中央部に3孔が穿たれる。坏部は外傾して立ち上がり、上位を欠損する。	外面は縦位の筥磨き。脚部内面は横位のハケ目整形。外面と坏部内面は赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	40% P21

第13号住居跡（第23図）

本跡は、調査区の北西部 L3b1区を中心に位置し、第3号溝を調査中に確認された住居跡である。床面の中央部を第3号溝が南北に掘り込んでいるほか、第171・536号土坑が床面の一部や北西壁の一部を掘り込んでいる。本跡の西5mには第5号住居跡が、北16mには第7号住居跡が存在している。

平面形は、長軸5.20m、短軸4.50mの長形状を呈し、長軸方向はN-40°-Eを指している。床面積は21.3m²である。壁はロームで、垂直に立ち上がっているが、前述の溝や土坑によって掘り込まれているため、平面形状や壁面は推定に頼る部分も多い。壁高は20~31cmである。壁溝は比較的浅く、壁際より20cmほど内側を周回し、残存床面のほとんどの部分で確認できたが、東コーナー部と北西壁際の一部では、床面が残っているにもかかわらず検出できなかった。床はロームで、中央部から各壁際に向かって極めて緩やかに傾斜している。床面は、中央部以外は軟弱で、出入口部の確認はできなかったが、強いていえば炉の位置等から、南東壁側が想定される。ピットの確認は、第7号住居跡と同様に困難であったが、精査の結果2か所を検出した。平面形は上端の直径が25cmの円形状を呈し、深さは40cmである。2本とも壁溝の外側に掘られ、上端は壁の下端と接しており、支柱穴と思われる。貯蔵穴はない。炉は、床面を8cmほど掘り窪めた浅い地床炉で、住居跡のほぼ中央に位置している。炉の南東部は、第171号土坑によって掘り込まれているため形状や規模は明らかではないが、残存部分から推定すると長径60cm、短径50cmの楕円形状を呈するものと思われる。炉内には、焼土層が薄く堆積しているが、炉床はあまり焼き締まっていないことから、本跡の使用期間は比較的短いものであったと推定される。

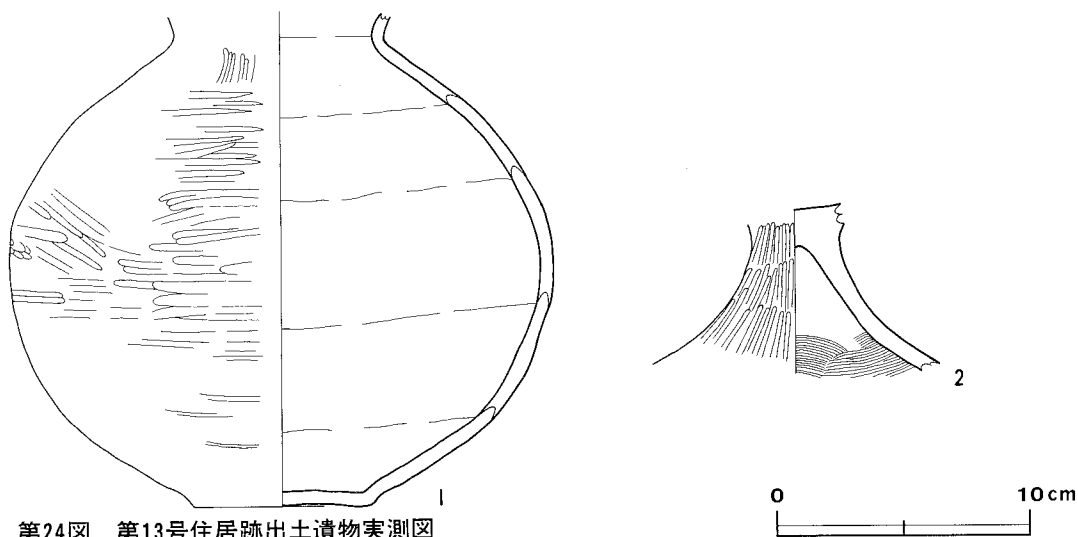
覆土は、上位に暗褐色土、下位に黒褐色土が堆積している。自然堆積層であるが、後世の溝・土坑・耕作等により攪乱を受けている。



第23図 第13号住居跡実測図

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片128点、礫1個と、後世の流れ込みと思われる陶器片4点が出土している。第24図1の壺形土器は東コーナー部の床面から押し潰された状態で、2の高坏形土器は北コーナー近くの北西壁際から横位で出土し、共に本跡に伴う遺物と考えられる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第24図 第13号住居跡出土遺物実測図

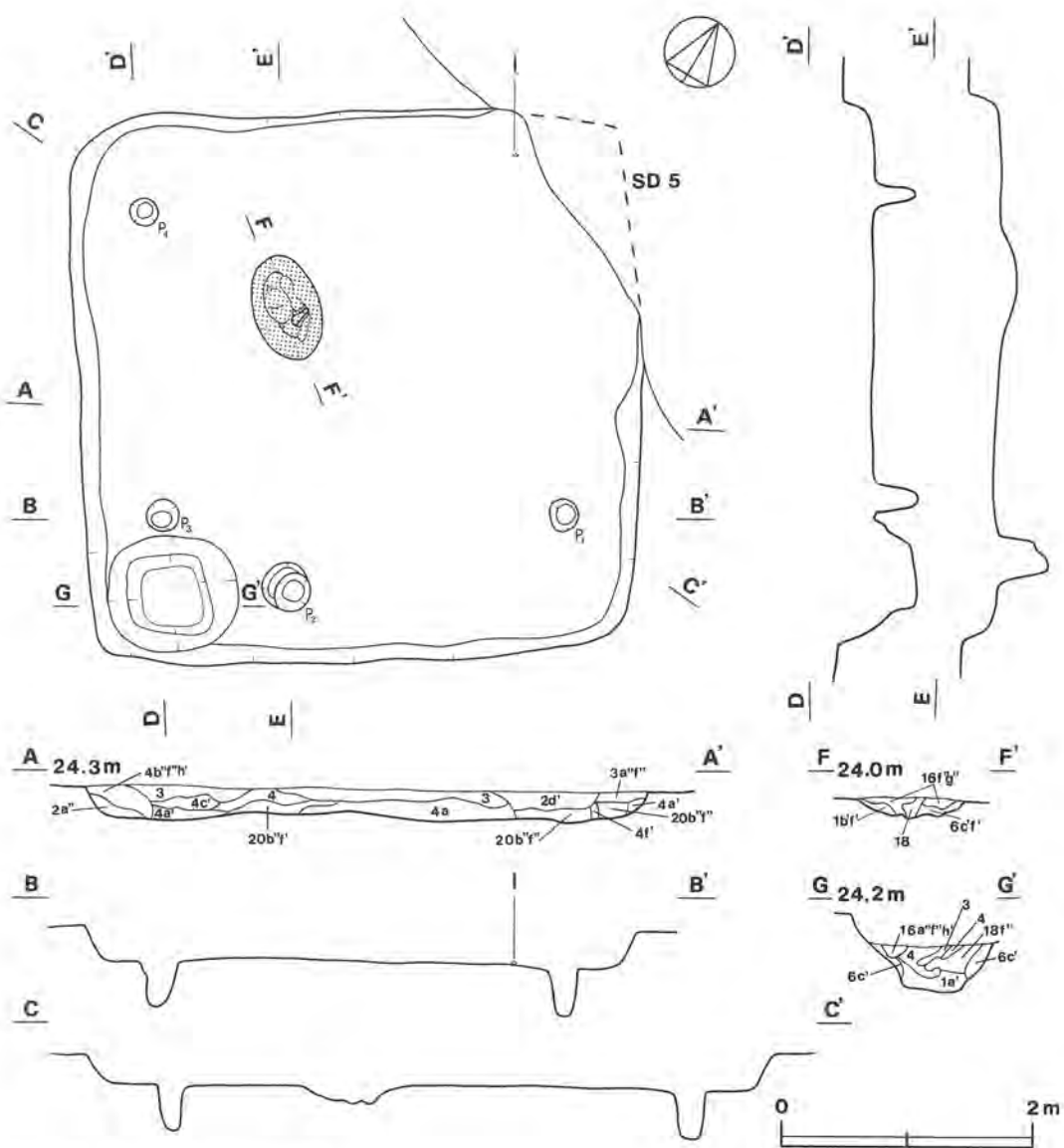
第13号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第24図 1	壺形土器 土師器	B (19.5) C 7.0	口縁部欠損。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。	外面は横位の篋削り。内面はナデ整形。外面は赤彩。	砂粒 赤褐色 良好	70% P24 PL76
2	高坏形土器 土師器	B (6.6)	脚部片で、裾部を欠損する。脚部は「ハ」の字状に開くが無孔である。	外面は縦位の篋磨き。内面はハケ目整形。外面は赤彩。	砂粒 赤褐色 良好	40% P25

第14号住居跡 (第25図)

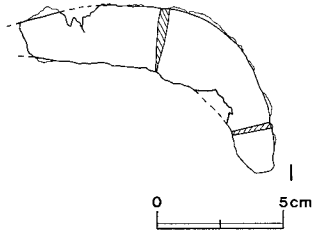
本跡は、調査区の西部 L2i9区を中心に確認された住居跡で、北コーナー一部は東西に走る第5号溝によって掘り込まれている。本跡の北西14mには第19号住居跡が、南東14mには第15号住居跡が存在している。

平面形は、一辺が4.4mの隅丸方形状を呈し、主軸方向はN-32°-Wを指している。床面積は17.3㎡である。壁は、ロームで締まりは弱く、45度ほどの角度で外傾して立ち上がっている。壁高は24~26cmである。床面は、緩やかな起伏を有し、中央部に比べ壁際はやや低くなっており、特に東コーナー部付近は、9cmも低まっている。炉と貯蔵穴をむすぶ区間は、2mの幅で極めて硬く踏み締まっており、ここが当時の生活上特に使用頻度の高い場所であったことを物語っている。そのほかの床面は軟弱であり、床面の状況から入口部を確認することはできなかった。ピットは、4か所検出されている。P₁・P₃・P₄は、それぞれ東・南・西のコーナー部近くに位置し、規模も上端直径が30cm、深さ35~40cmとほぼ同じであることから、主柱穴と思われる。P₂は南コーナ



第25図 第14号住居跡実測図

一部に位置する貯蔵穴の東側に接して確認され、他の3本のピットよりやや大き目である。配置から考え、 P_2 は、同時期の第1号住居跡の P_5 等と同様、入口部あるいは貯蔵穴に関係する柱穴と思われる。貯蔵穴は、確認面で直径1mの円形状を呈するが、中ほどから方形状となり、そのまま垂直に落ちて一辺45cmの平坦な底面が形成されている。深さは35cmである。炉は、床面を15cm掘り込んだ地床炉で、中央より70cmほど東に寄って位置している。平面形は、長径90cm、短径55cmの楕円形状を呈し、長径方向は本跡の主軸方向とほぼ同一である。炉内の覆土や炉床はほとんど焼けていないことから、本跡の使用期間は短かったものと推定される。なお、柱穴の配置や炉・



第26図 第14号住居跡
出土遺物実測図

貯蔵穴の位置などからして、入口部は南東壁に作られていたものと思われる。

覆土は、上層に締まりを有する極暗褐色土、下層に締まりを有する黒色土が堆積している。自然堆積である。なお、床面には炭化材や焼土が散乱しているが、遺物はほとんどないことから住居が廃絶されて間もなく焼失したものと思われる。

遺物は極めて少なく、床面や覆土中から土師器片24点、鉄製品2点、礫1個を出土しただけである。床面から出土した土師器片には、ハケ目が施された甕形土器の口縁部片や、赤彩された器台形土器の接合部片などがあるが、いずれも小片で実測は不可能であった。第26図1の鉄鎌は、北コーナー部に近い北西壁際の覆土下層から出土したものであるが、本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から、古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。

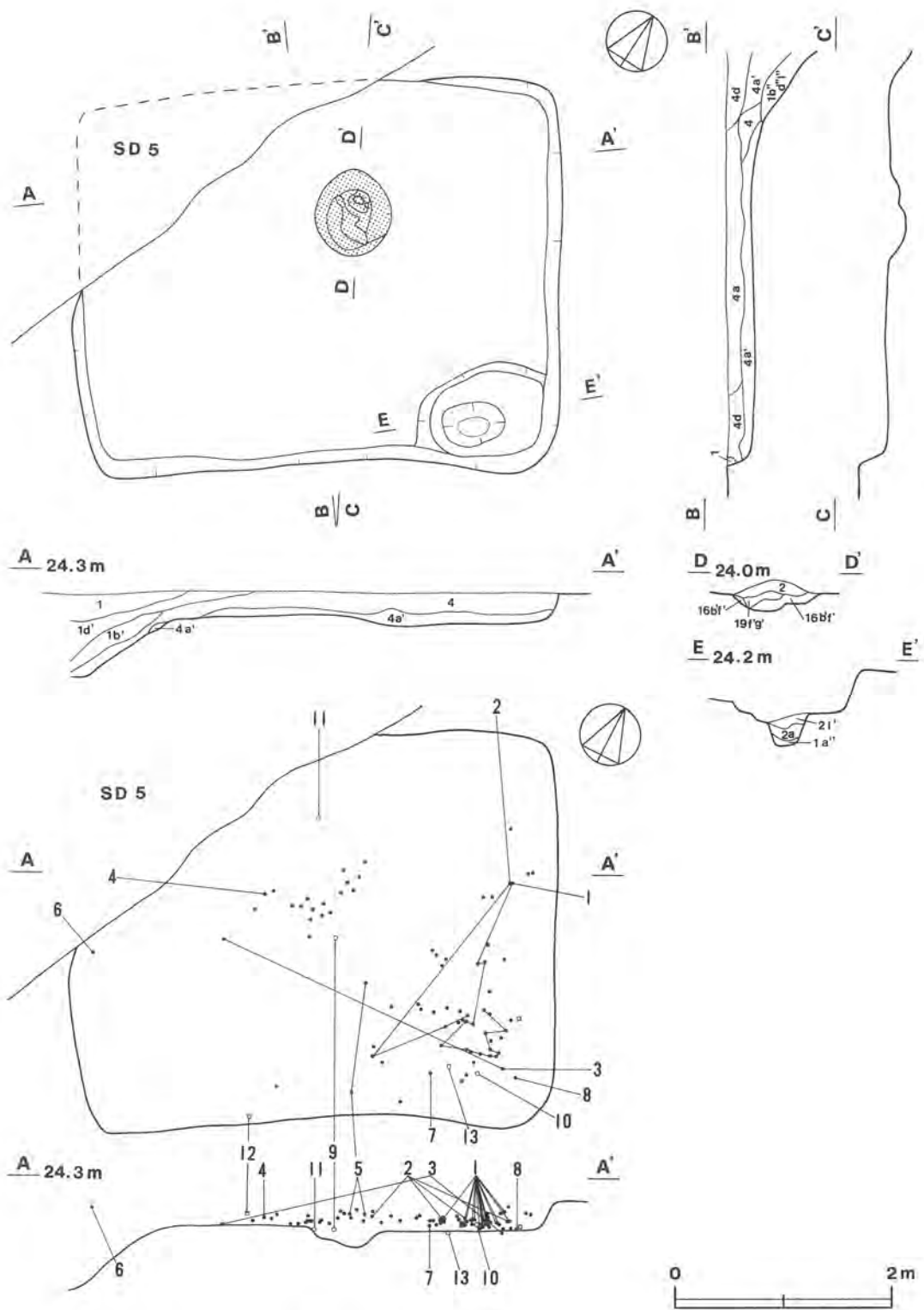
第15号住居跡（第27図）

本跡は、調査区の南西部 M2c0区を中心に確認された住居跡で、西コーナー部から北西壁の一部にかけてと、床面の一部を第5号溝によって掘り込まれている。本跡の北西13mには第14号住居跡が、南西13mには第95号住居跡が存在している。

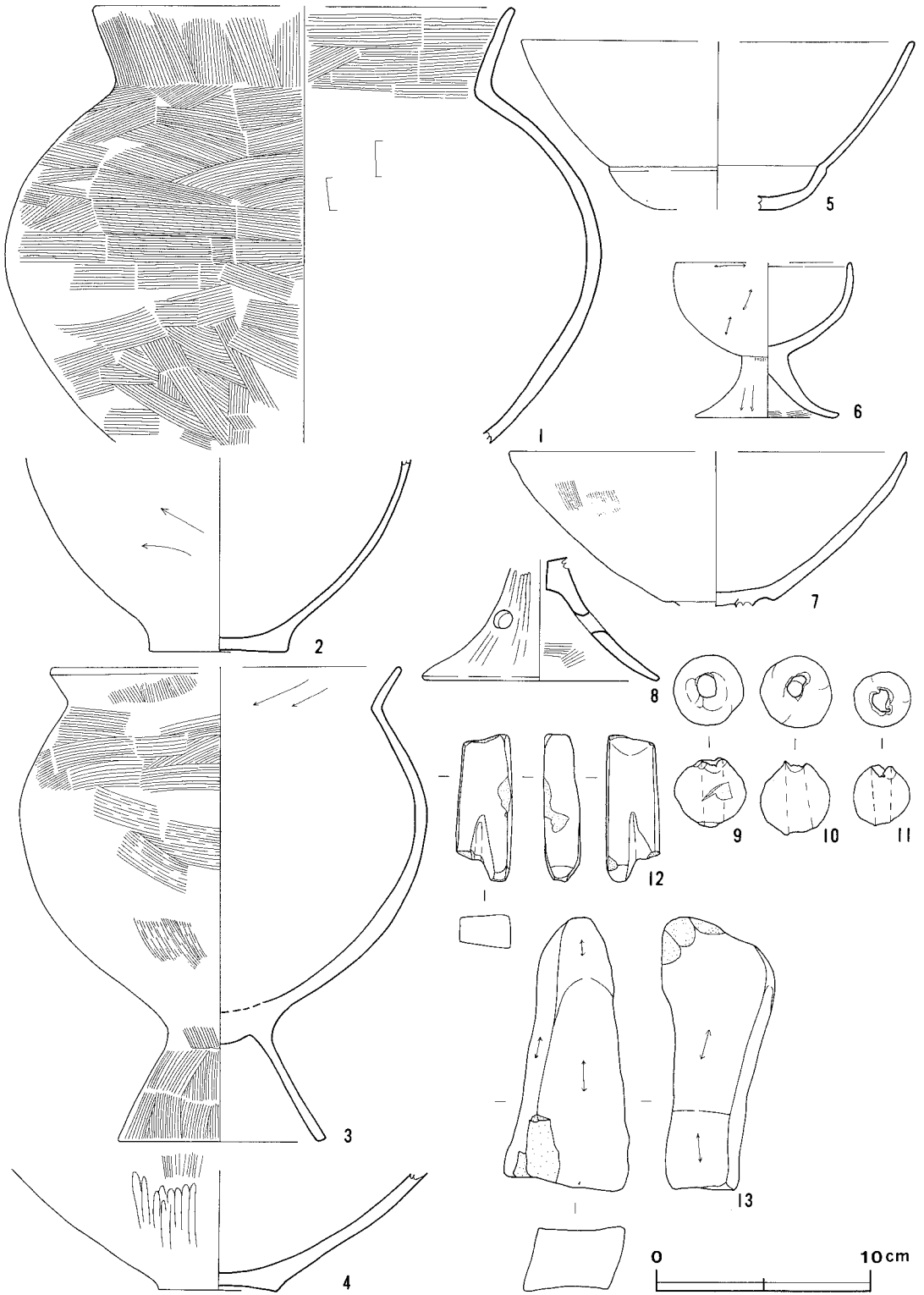
平面形は、長軸4.5m、短軸2.6mの長方形状を呈し、長軸方向はN-32°-Wを指している。床面積は14.4m²である。壁はロームで、60度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は20~37cmで、南東壁が高くなっている。壁溝は、存在しない。床は、ロームで平坦であるが、特に踏み締まった所などは観察できない。ピットは、1か所も確認できなかった。貯蔵穴は、東コーナー部に位置し、二段の掘り込みを有する。上段は、深さ10cmほどの浅いもので楕円形状を呈している。二段目は、一段目のほぼ中央に掘られており、上端の長径55cm、短径40cmの楕円形状を呈し、底面は平坦である。床面からの深さは、40cmである。貯蔵穴内の覆土は、自然堆積である。炉は、床面を15cm掘り下げた地床炉で、中央から50cmほど北へ寄って位置している。平面形は、長径80cm、短径70cmの楕円形状を呈し、長径方向は本跡の長軸方向とほぼ一致する。炉内の覆土に、焼土は少ないが、炉床は硬く焼けて凹凸が激しい。入口部は、南東壁側にあったと思われる。

覆土は締まりを有する黒褐色土で、上・下層とも含有物に大きな違いはみられない。均一な土層で、自然堆積層と思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片377点、球状土錘15点、砥石2点と、後世に流れ込んだと思われる須恵器片26点が出土している。東コーナー部の貯蔵穴覆土中からは、第28図3の台付甕形土器、7の高坏形土器、8の器台形土器、10の球状土錘、13の砥石が出土している。



第27图 第15号住居跡実測図・出土遺物位置図



第28图 第15号住居跡出土遺物実測図

これらの出土位置等を検討した結果、すべて一段目の掘り込み上に完形あるいは半完形で出土しており、本来この場所に置かれてあったものと思われる。

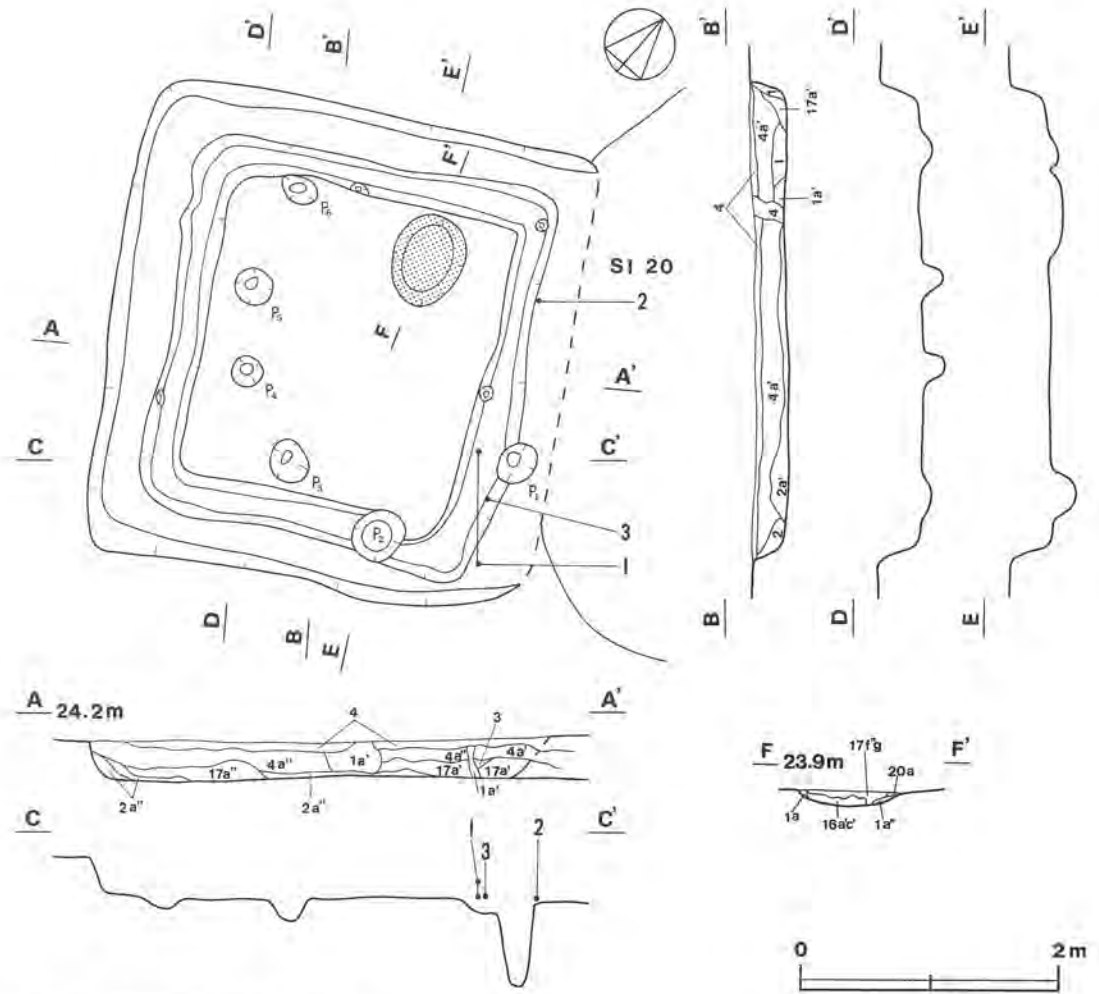
本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。

第15号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第28図 1	甕形土器 土師器	A 19.5 B (20.5)	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり球形状を呈する。最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外傾して開く。	口縁部外面は斜位のハケ目整形。口縁部内面と胴部外面は横位のハケ目整形。	バミス多量 橙色 不良	40% P26 PL70
2	甕形土器 土師器	B (9.1) C (6.5)	胴部は内彎して立ち上がる。胴中位以下欠損。	内・外面ともナデ整形。	砂粒 褐色 普通	30% P27
3	台付甕形土器 土師器	A (16.3) B 22.4 D 5.1 E 9.7	脚台部は「ハ」の字状に開く。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を上位に持つ。口縁部は「く」の字状に外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面と胴部外面はハケ目整形。脚台部外面は縦位のハケ目整形。内面はナデ整形。	砂粒・バミス 明赤褐色 普通	70% P29 PL71
4	壺形土器 土師器	B (5.7) C 5.5	上げ底。胴部は外傾して立ち上がるが、中位以上を欠損する。	外面は縦位の篋磨き。赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	30% P28
5	高環形土器 土師器	A (18.4) B (7.9)	脚部欠損。坏部は内彎して立ち上がるが、下位は塊状に膨む。	口縁部外面は横ナデ整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	20% P32
6	高環形土器 土師器	A (8.2) B 7.3 D 2.9 E 6.7	脚部は「ハ」の字状に開き、裾部で緩やかに外反する。無孔。坏部は内彎して立ち上がり、半球状を呈する。	坏部内・外面はナデ整形。脚部外面は縦位の篋磨き。裾部は横位のナデ整形。内・外面とも赤彩。	砂粒・バミス 明赤褐色 普通	70% P30 PL79
7	高環形土器 土師器	A (17.7) B (7.2)	脚部欠損。坏部は内彎しながら大きく開く。	坏部外面はハケ目整形後粗雑な篋磨き。内面は篋磨き。内・外面とも赤彩。	砂粒・バミス 赤褐色 普通	20% P31
8	器台形土器 土師器	B (5.8) E 11.0	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開くが、下位から裾部にかけて緩やかに外反する。脚部中位に3孔が穿たれる。	外面は縦位の篋磨き。内面は横位のハケ目整形。内・外面とも赤彩。	バミス多量 赤褐色 普通	50% P34 PL81

第19号住居跡 (第29図)

本跡は、調査区の西部 L2e6区を中心に確認された住居跡で、北東壁は縄文時代中期の第20号住居跡を掘り込んでいる。本跡の北10mには第22号住居跡が、南東15mには第14号住居跡が存在している。



第29図 第19号住居跡実測図

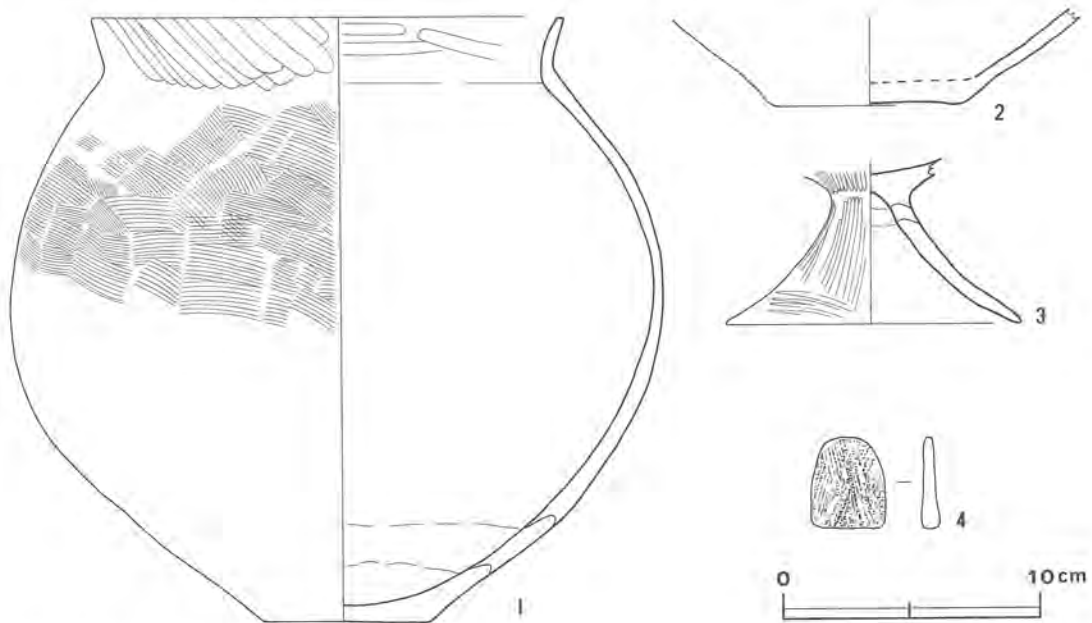
平面形は、一辺3.7mの方形状を呈し、主軸方向はN-25°-Wを指している。床面積は11.9㎡である。北東壁以外の壁はロームで、65度の角度を持ち外傾して立ち上がっている。北東壁は、第20号住居跡の覆土と区別し難かったが、本跡の覆土中層に焼土粒子・炭化粒子を多量に含むことと、壁の立ち上がりがわずかに確認できたことから範囲を推定した。壁溝は、幅25~35cm、深さ10~15cmの幅広のもので、壁際から30cmほど離れて全周する。床はほぼ平坦で、壁溝の内側は硬く締まっている。特に炉の周辺から南東壁にかけては硬く踏み締まっており、この方向が本跡の入口部にあたるものと思われる。ピットは、6か所確認したが小規模であり、いずれが支柱穴にあたるかは判別できなかった。なお、北東壁際に検出したP₁は、規模や配置から考えて第20号住居跡の柱穴と思われる。炉は、床面を10cm掘り込んだ地床炉で、中央から1mほど北に寄り、全体としてかなり北西壁近くに位置している。平面形は、長径75cm、短径55cmの楕円形状を呈し、

長径方向は本跡の主軸方向とほぼ同一である。炉内には、焼土粒子・焼土ブロック・炭化粒子を多量に含む赤褐色土が堆積しており、炉床は焼き締まっている。

覆土は、上層に黒褐色土、下層に褐色土が堆積しているが、中層以下には、焼土粒子・炭化粒子を多量に含む層を部分的に挟んでいる。自然堆積であるが、床面には火熱を受け赤化している場所が数か所認められるほか、焼土や炭化材が多量に散乱していることから、本跡は居住期間中あるいは廃絶されて間もなく焼失したと思われる。

遺物は、覆土中から土師器及びその破片104点、用途不明の土製品1点と、後世に流れ込んだと思われる須恵器片1点が出土している。本跡に伴う遺物は、東コーナー部付近の覆土下層から出土した第30図1の甕形土器と3の高环形土器が主なもので、これらは周溝確認面の焼土中に直径70cmの範囲で破片が散乱していたことから、焼失時に破損したものと考えられる。2の甕形土器底部と4の土製品は共に覆土下層から出土したもので、本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第30図 第19号住居跡出土遺物実測図

第19号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第30図 1	甕形土器 土師器	A 18.5 B 24.0 C 6.6	胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から外傾して「く」の字状に開く。	口縁部外面は斜位の篋ナデ整形。胴上半部は横位のハケ目整形。口縁部外面は斜位の篋ナデ整形。	砂粒 明赤褐色 普通	90% I'35 PL70

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第30図 2	甕形土器 土 師 器	B (3.7) C 7.2	底部片。上げ底。胴下半部は外傾して立ち上がる。	外面は篋ナデ整形。内面は剝落が著しい。	長石多量 赤褐色 普通	10% P37
3	高坏形土器 土 師 器	B (6.5) D 5.2 E 11.6	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。	脚部外面は縦位の篋磨き。裾部は横位の篋磨き。脚部内面は横位のナデ整形。外面は赤彩。	砂粒 赤褐色 良好	60% P36

第21号住居跡 (第31図)

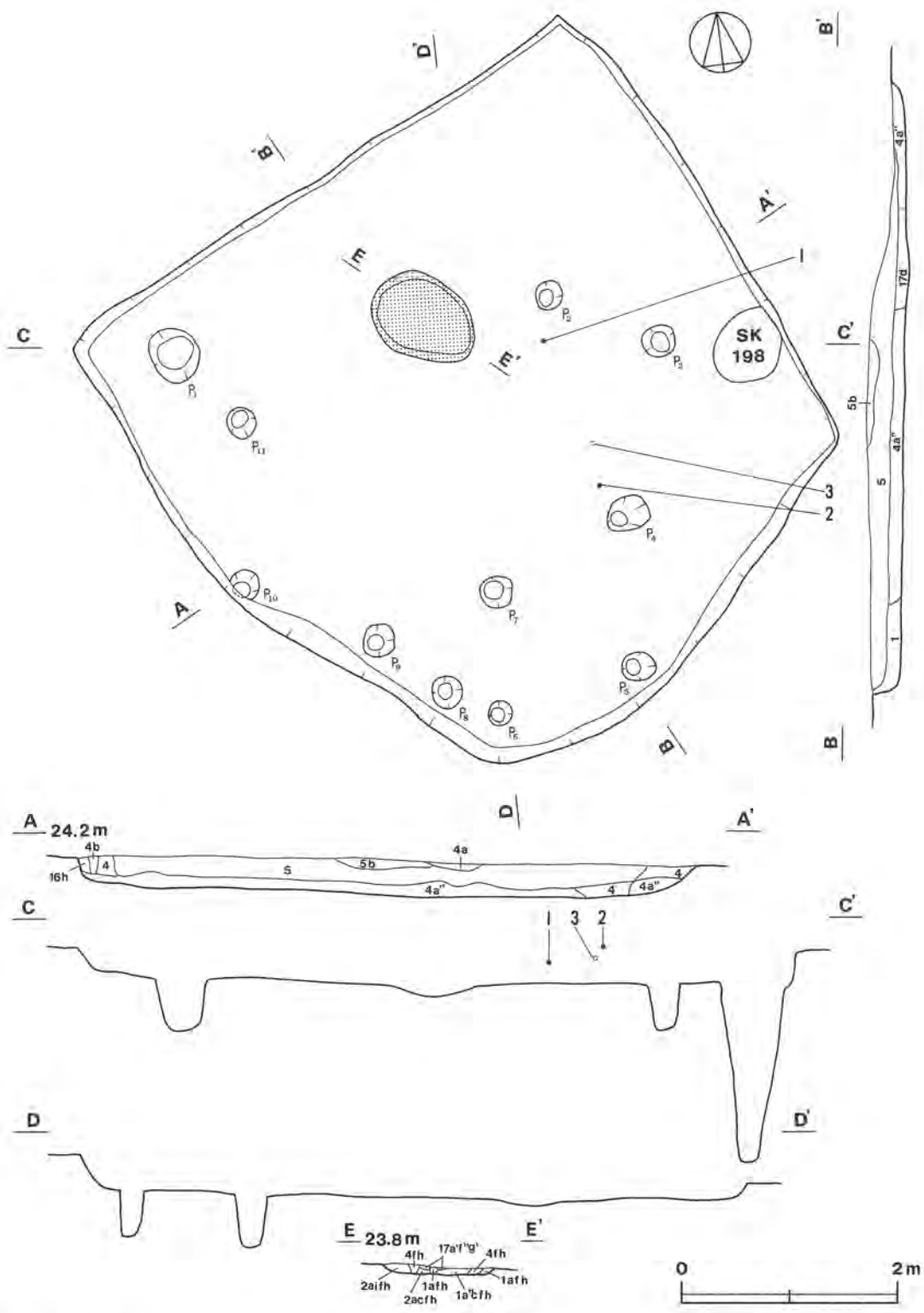
本跡は、調査区の北西部 L2b5 区を中心に確認された住居跡で、縄文時代後期の第22号住居跡と第198号土坑を掘り込んで作られており、北西壁の一部は第3号井戸によって掘り込まれている。本跡の北東22mには第1号住居跡が、東6mには第5号住居跡が存在している。

平面形は、一辺5.5mほどの方形状を呈し、主軸方向はN-30°-Wを指している。床面積は31.5㎡である。南東壁と南西壁の一部は第22号住居跡の覆土で、他の壁はロームである。壁高は28cmほどで、ほぼ垂直に立ち上がっている。床は、第22号住居跡の覆土に貼り床をして形成しているが、北西部を除いて貼り床のほとんどが消失している。土層を観察すると、第22号住居跡の床面から10cmほど上位には明らかに本跡の覆土が堆積しており、床面はほぼ平坦であったものと推定される。ピットは、本跡の推定範囲から9か所を確認しているが、P₁以外はすべて第22号住居跡の柱穴である。P₁は、上端直径30cm、深さ50cmほどの円筒形状を呈している。炉は、中央より1mほど北西に寄った位置に存在しているが、第22号住居跡と本跡の範囲内には、これ1基しか確認されなかったため、どちらの住居跡に所属するものか明言できない。ただ、縄文時代の炉に比して浅い地床炉であることや、平面形が楕円形状を呈すること、本跡の炉と仮定した場合中央よりやや北西に寄って位置することなどは、当遺跡における古墳時代前期の住居跡の一般的な特徴を示しており、この炉が本跡に所属する可能性は高いといえる。炉の規模は、長径96cm、短径74cmで、長径方向は本跡の主軸方向とほぼ一致する。炉床には、部分的にレンガ状の焼き締まりが観察できる。

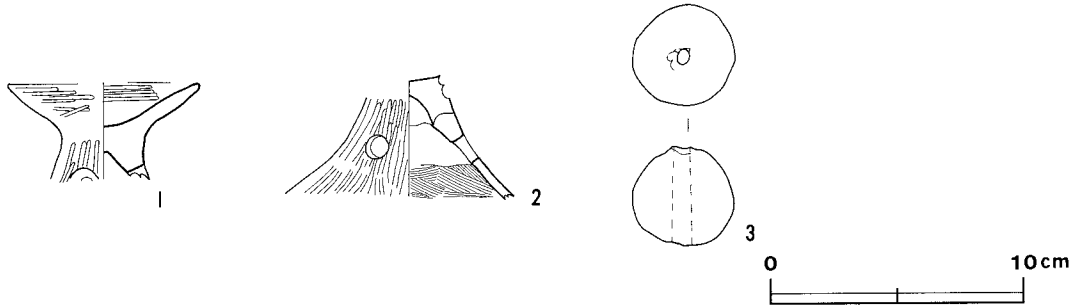
覆土は、締まりの弱い黒色土であるが、土層に大きな乱れは認められず、自然堆積層と思われる。

遺物は、覆土中から土師器片56点、球状土錘1点が出土している。第32図1の器台形土器坏部片や2の高坏形土器脚部片、3の球状土錘等は中央部の覆土中・下層から出土したもので、本跡との関係は不明である。その他、覆土下層からは、ハケ目を有する小破片が多く出土している。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第31图 第21号住居跡実測図



第32図 第21号住居跡出土遺物実測図

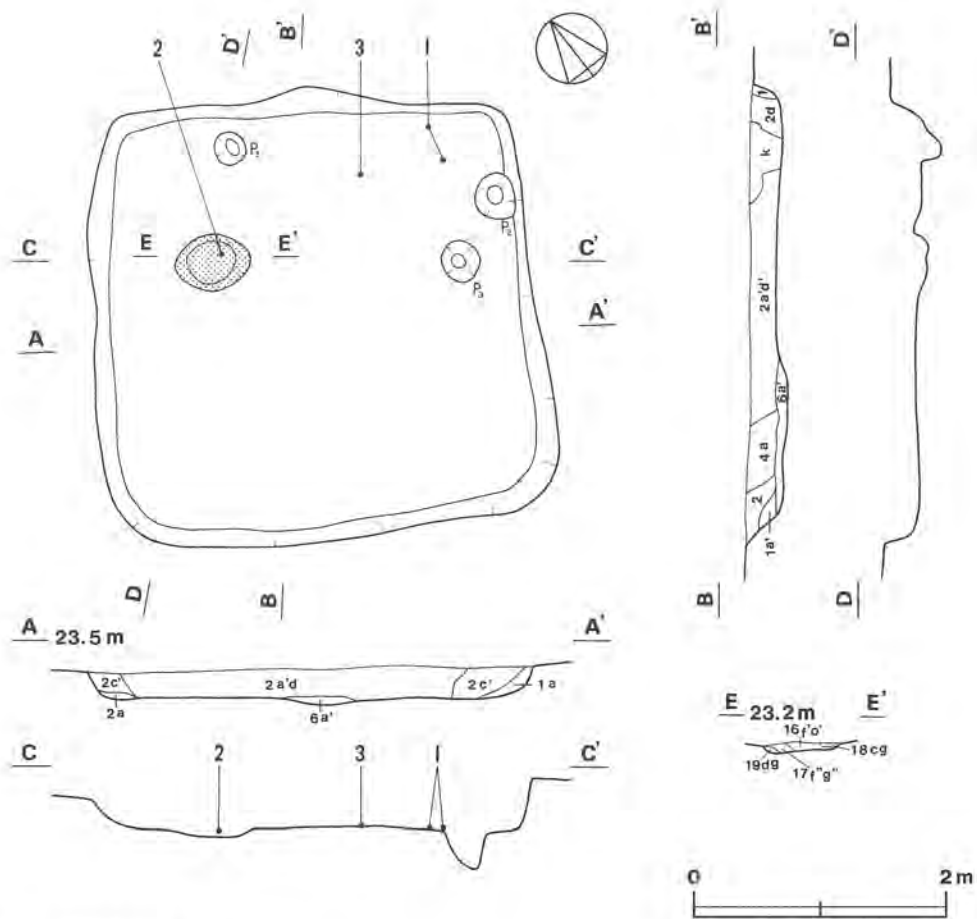
第21号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第32図 1	器台形土器 土師器	A (7.8) B (3.8)	脚部は「ハ」の字状に開き、3孔が穿たれる。下位欠損。器受部は内彎して立ち上がるが、接合部の中央孔は無い。	器受部内・外面は横位の篋磨き。脚部外面は縦位の篋磨き。器受部内面は赤彩。	砂粒少量 褐色 良好	60% P38
2	高坏形土器 土師器	B (4.6)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開き、上位に3孔が穿たれる。下位は欠損。	外面は縦位のハケ目整形後、縦位の篋磨き。内面は横位のハケ目整形。外面は赤彩。	砂粒少量 赤褐色 普通	40% P39

第30号住居跡 (第33図)

本跡は、調査区の北東端 K4g2 区を中心に確認された住居跡で、北東壁際の床面は時期不明の第254号土坑によって掘り込まれている。本跡の南4～5 m には第31・76号住居跡が、東12m には第32号住居跡が存在している。

平面形は、一辺3.5m の方形状を呈し、主軸方向はN-55°-Wを指している。床面積は10.2㎡である。壁はロームで、床面から10cmほどは緩やかに外傾し、その上は垂直に立ち上がる。壁高は20～27cmである。床は平坦で、中央部は硬く踏み締まっているが、壁際から60cmほど内側は全般に軟弱である。北の壁際は、比較的硬く踏み締まっているが、炉との位置関係から入口部を想定することは難しい。むしろ、南東壁側にあったと考える方が妥当と思われる。ピットは3か所確認し、P₁は上端直径30cm、深さ20cm、P₂は上端直径35cm、深さ22cm、P₃は上端直径30cm、深さ32cmと規模に多少のバラツキはあるものの、確認状況からいずれも本跡に伴うものと思われる。配列から考えて P₁・P₃は柱穴、P₂は、やや小規模ではあるが貯蔵穴の可能性が高い。炉は、床面を10cmほど掘り下げた地床炉で、中央より90cmほど北へ寄り、全体として北西壁近くに位置している。平面形は、長径60cm、短径45cmの楕円形状を呈し、長径方向は本跡の主軸方向と同一である。炉内には、焼土粒子・焼土ブロックを多量に含む暗赤褐色土が堆積し、炉床もレンガ状に焼き締



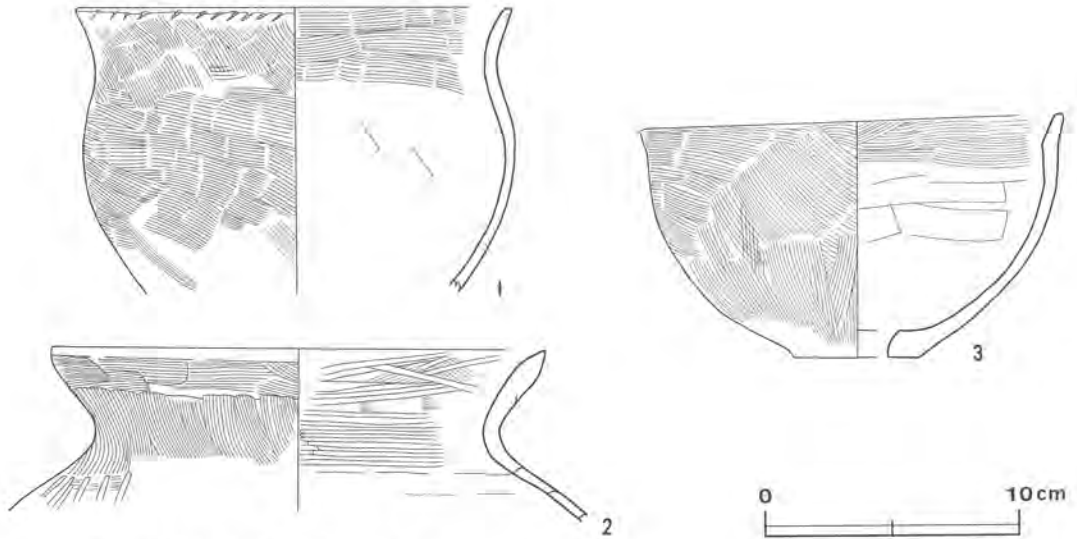
第33図 第30号住居跡実測図

まっていることから、本跡は長期にわたって使用されたことが推定される。

覆土は、中央部が黒褐色土で、壁近くには暗褐色土が流れ込むような状態で堆積している。自然堆積層である。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片136点、小礫6個を出土している。本跡に伴う遺物は東コーナー部に集中しており、第34図1の甕形土器と3の甑形土器が完形のまま床面から正位で出土しているほか、多くの土師器片が床面から出土している。炉の覆土中には2の壺形土器上部片が正立しており、これも本跡に伴う遺物と思われる。その他、ハケ目を有する埴形土器口縁部片、赤彩が施された高坏形土器の脚部片等も出土しているが、いずれも覆土中から出土した小破片であるため本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第34図 第30号住居跡出土遺物実測図

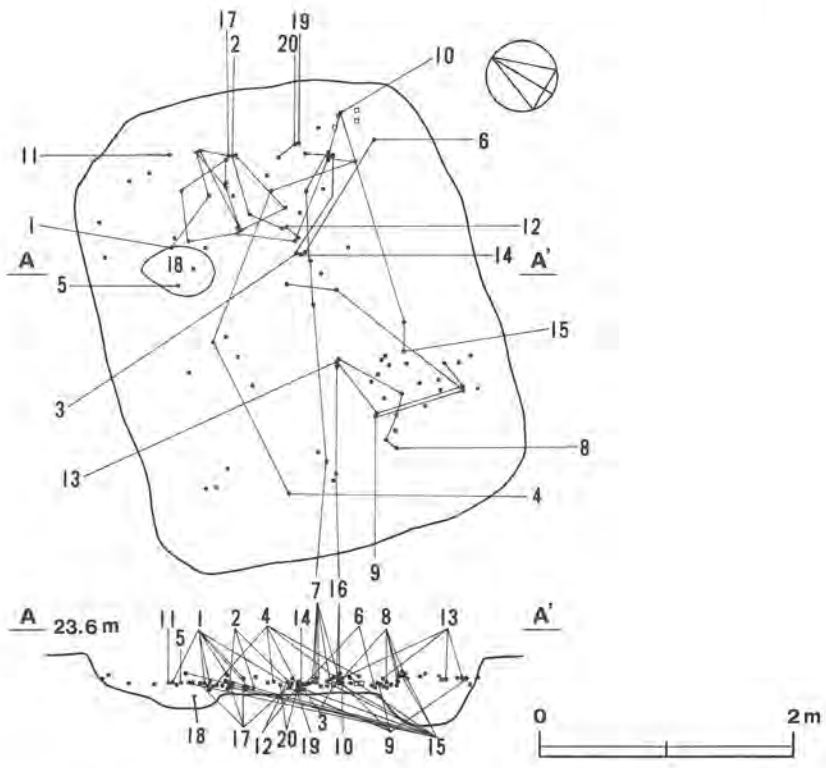
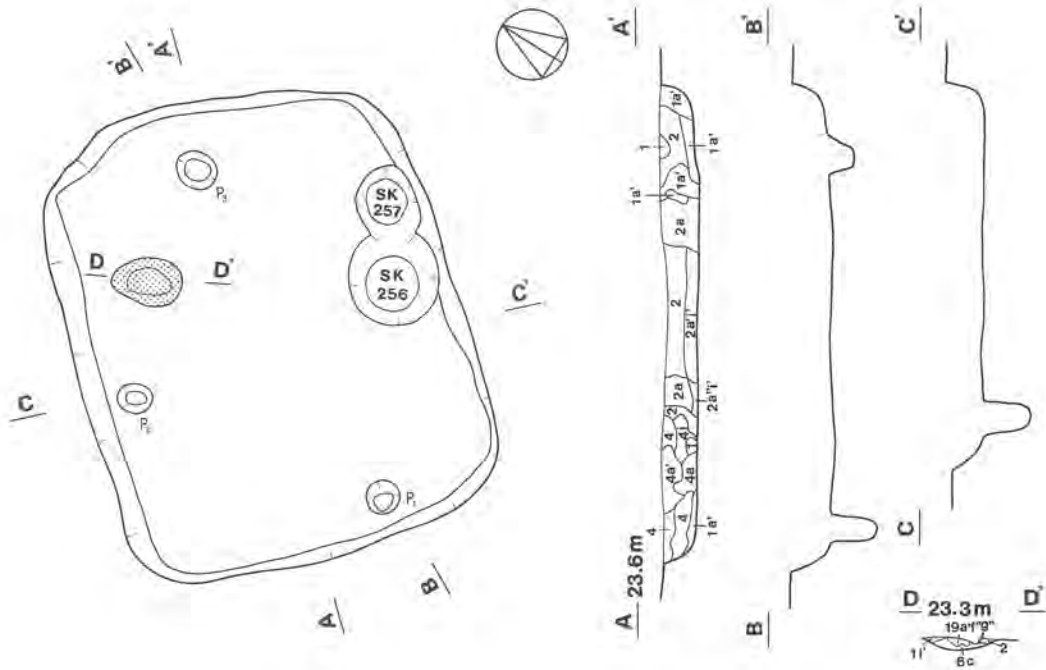
第30号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第34図 1	壺形土器 土師器	A 17.2 B (11.4)	胴下半部以下欠損。胴部は内彎し、上位に最大径を持つ。口縁部は緩やかに外反する。	口唇部にキザミ目が施され、口縁部外面は縦位のハケ目整形。胴部は丁寧な斜位のハケ目整形。	砂粒 橙色 普通	80% P40 PL70
2	壺形土器 土師器	A (19.6) B (5.5)	口縁部は複合口縁状であるが、整形時にナデられて単口縁となる。外反して立ち上がり、口唇部付近で直立する。	口縁部外面はハケ目整形。口唇直下は横ナデ。胴部内・外面は篋磨き。器内・外面は赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	20% P41
3	甔形土器 土師器	A 16.8 B 9.7 C (4.9)	底部に径2.4cmの孔が穿たれ、胴部は内彎して立ち上がる。口縁部は外反し、口縁内面に稜を持つ。	口縁部から胴中央部にかけて斜位のハケ目整形。下半部は縦位のハケ目整形。内面は横位の篋ナデ整形。	砂粒・スクリア 橙色 普通	90% P42 PL76

第31号住居跡 (第35図)

本跡は、調査区の北東端 K4g2 区を中心に確認された住居跡で、西コーナー部は縄文時代後期の第80号住居跡を掘り込んでおり、南東壁際は第256・257号土坑によって掘り込まれている。本跡の北4mには第30号住居跡が、西4mには第76号住居跡が存在している。

平面形は、一辺3.5mほどの隅丸方形形状を呈し、主軸方向はN-55°-Wを指している。床面積は9.5㎡である。壁は、西コーナー部以外はロームで、南東壁はほぼ垂直に、他は65~70度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は30cmである。床はロームで、ほぼ平坦であるが、壁近くで



第35图 第31号住居跡実測図・出土遺物位置図

は緩やかな傾斜をもって高まっている。床面は、全体的に締まっているが、特に強く踏み締められた箇所は認められない。ピットは、北西、北東、南西の壁近くに3か所確認された。P₁・P₂は上端直径25cm、深さ40cm、P₃は上端直径30cm、深さ20cmの規模を有する。配列から、3本とも支柱穴と思われる。貯蔵穴は、調査時には確認できなかったが、位置や規模から推定して、南東壁際に位置する第256・257号土坑がそれに該当する可能性が強い。この2つの土坑は、本跡の床面精査時に確認したが、プランが不明瞭であったため土坑として掘り込んだものである。第256号土坑は上端直径70cmの円形状を呈し、第257号土坑は上端直径60cmのやはり円形状を呈する。深さは、前者が57cm、後者はやや浅く54cmである。土層から、当初第257号土坑が掘られ、それを埋め戻してその西側に第256号土坑を掘り込んだものと推定される。第257号土坑の覆土は、上・下層とも暗褐色土、第256号土坑は上層に褐色土と暗褐色土、下層に明褐色土が堆積している。炉は、床面を10cmほど掘り込んだ地床炉で、中央から1mほど北に寄り、北西壁に近接して位置する。平面形は、長径60cm、短径40cmの楕円形状を呈し、長径方向は本跡の主軸方向とほぼ同一である。炉内には、焼土粒子を含む明褐色土が堆積しているが、炉床はそれほど焼き締まっていないことから本跡の使用期間は短かったものと思われる。入口部は、炉や柱穴の配置から南東あるいは南西壁側が想定される。

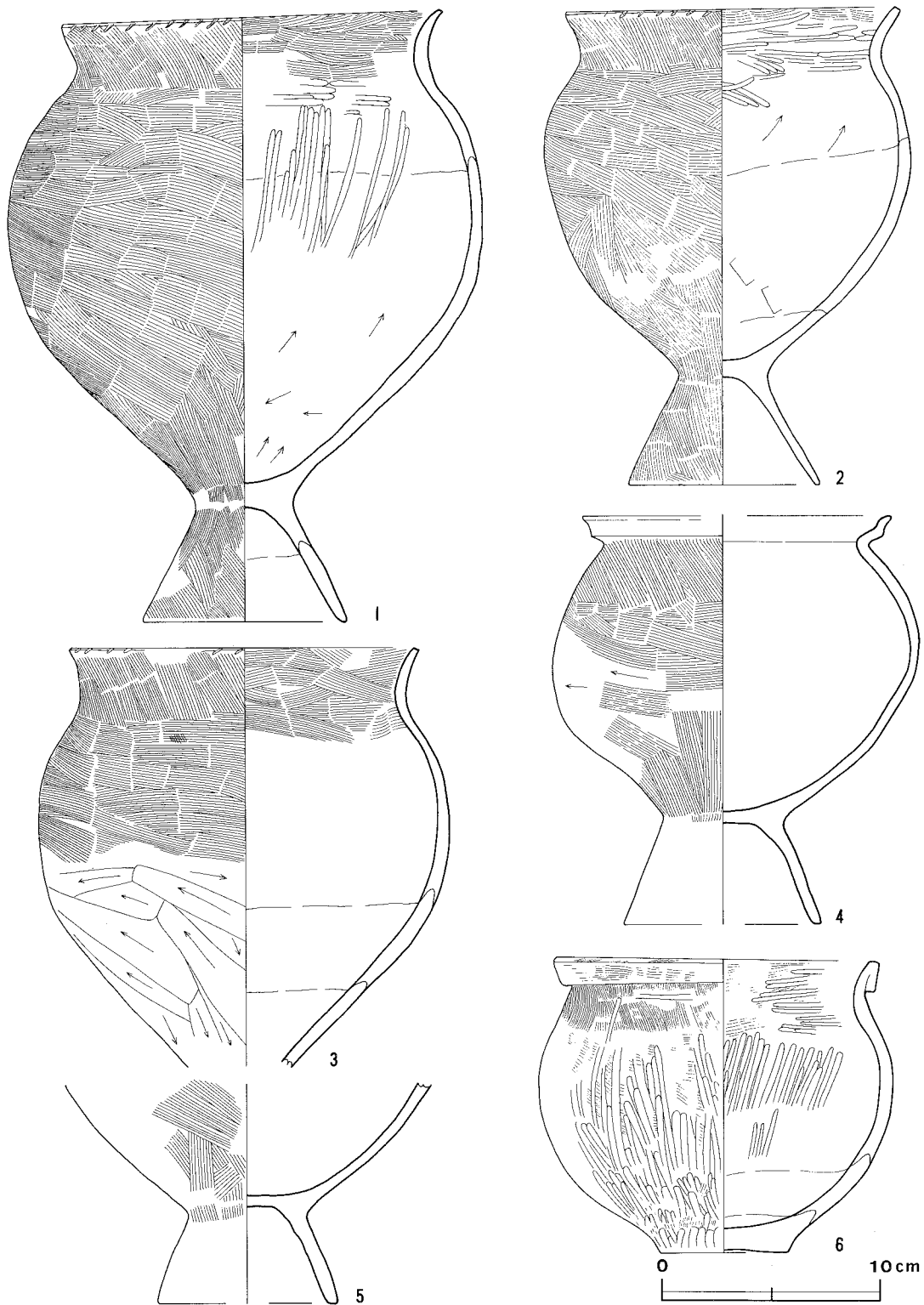
覆土は、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積している。自然堆積層であるが、所々に耕作による攪乱を受けている。なお、床面に焼土や炭化材が散乱していることから、居住期間中、あるいは廃絶されて間もなく焼失したものと思われる。

遺物は、覆土中から土師器片523点が出土している。東側の覆土下層に集中して出土しているが、本跡に伴うと確信できるのは炉の覆土中に正立していた第38図18の甑形土器上部片だけである。そのほかの遺物は、大部分が床面から5～15cm上位の覆土中に破片で出土している。それらの破片は原形に近い状態にまで復元できるものが多いことから、住居が焼失した後に一括して投棄された可能性が高い。

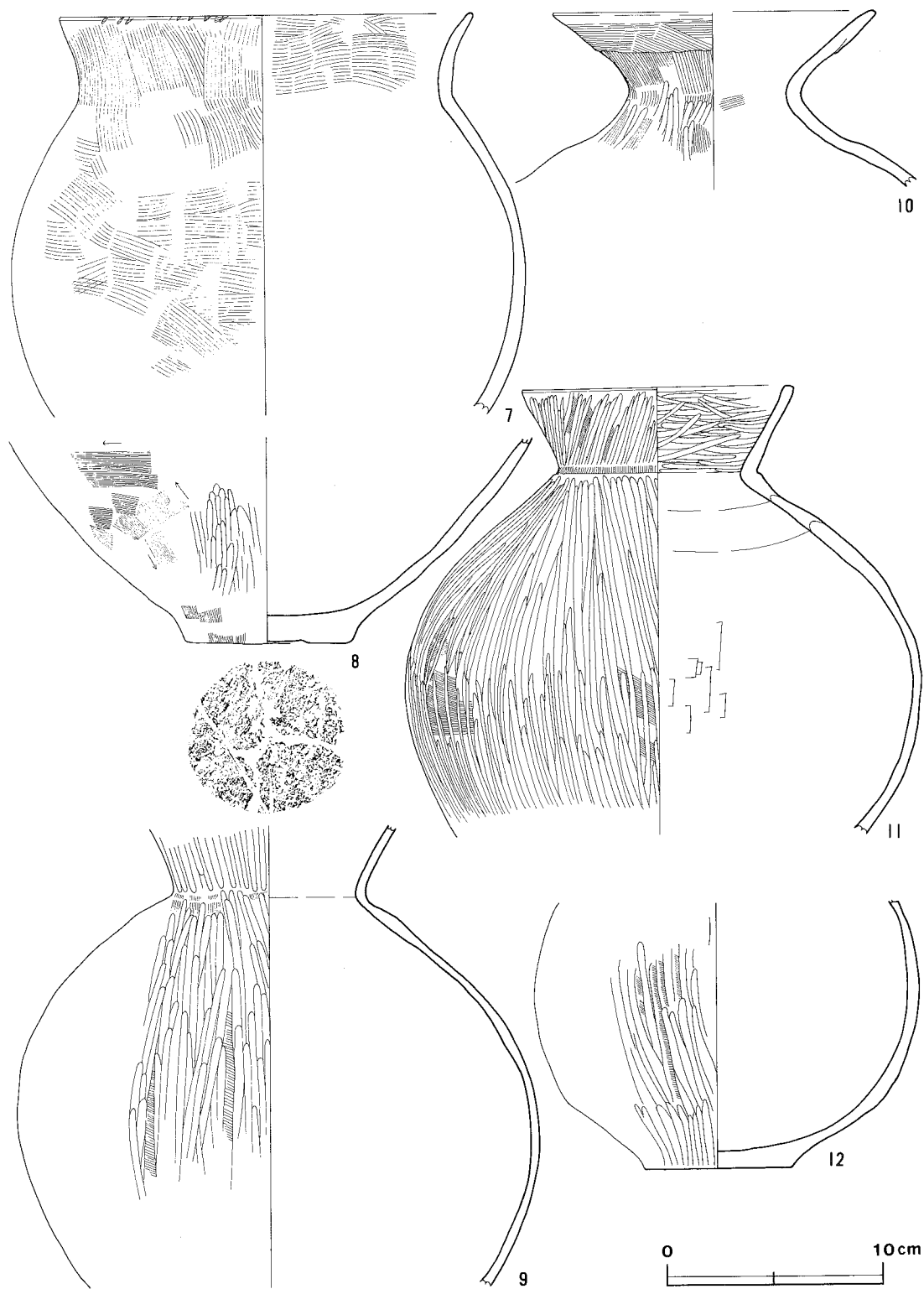
本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。

第31号住居跡出土土器観察表

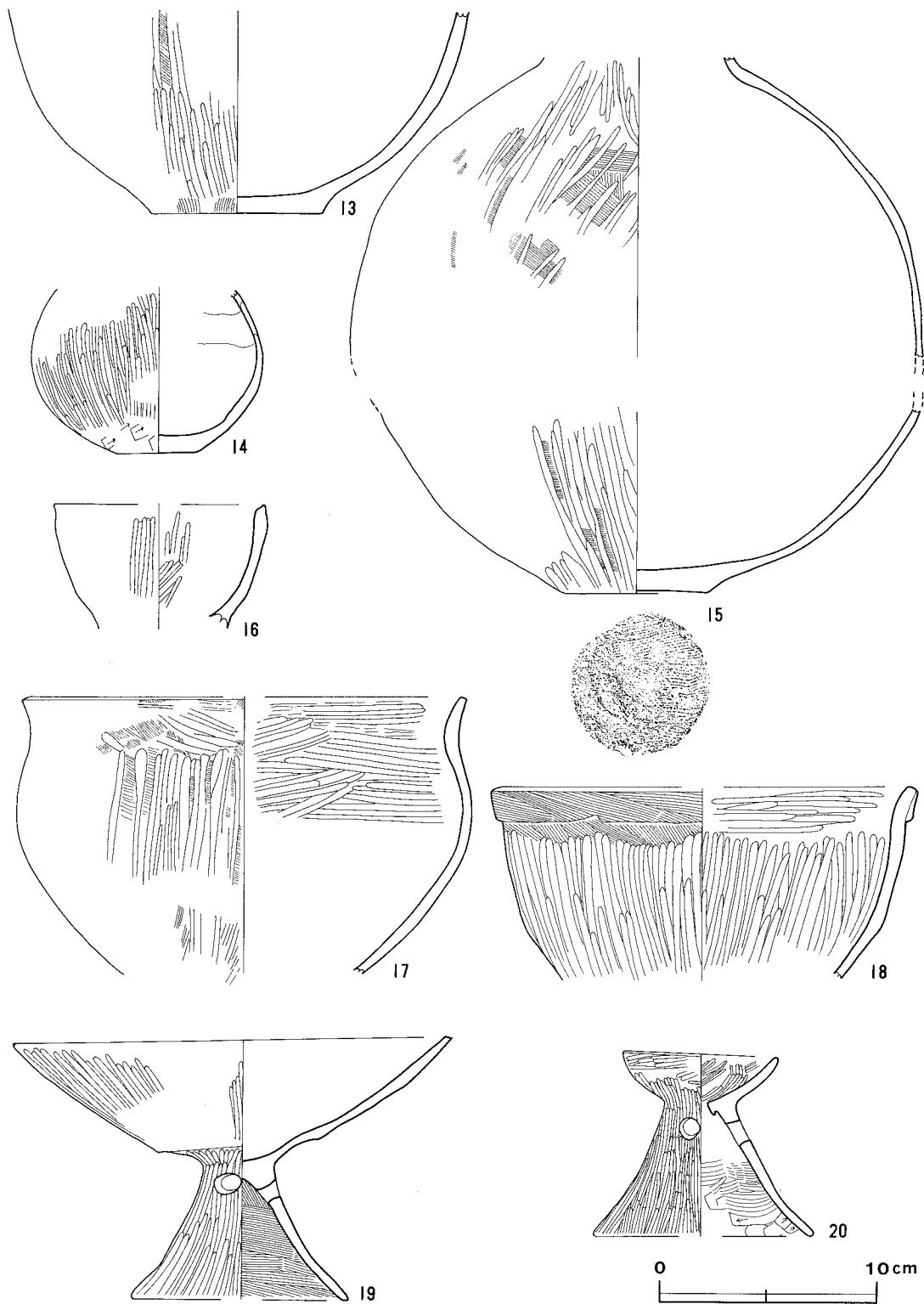
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第36図 1	台付甕形土器 土師器	A 17.6 B 28.5 D 5.8 E 9.6	脚台部「ハ」の字状に開く。胴下半部は外傾して立ち上がり、中位以上は内彎する。胴部最大径を上位に持つ。	口唇部にキザミが施される。外面と口縁部内面に丁寧なハケ目整形。胴部内面は暗文状の瓷磨き。	砂粒・スコリア 橙色・内面は赤色 良好	80% P54 PL71



第36图 第31号住居跡出土遺物実測図(1)



第37图 第31号住居跡出土遺物実測図(2)



第38图 第31号住居跡出土遺物実測図(3)

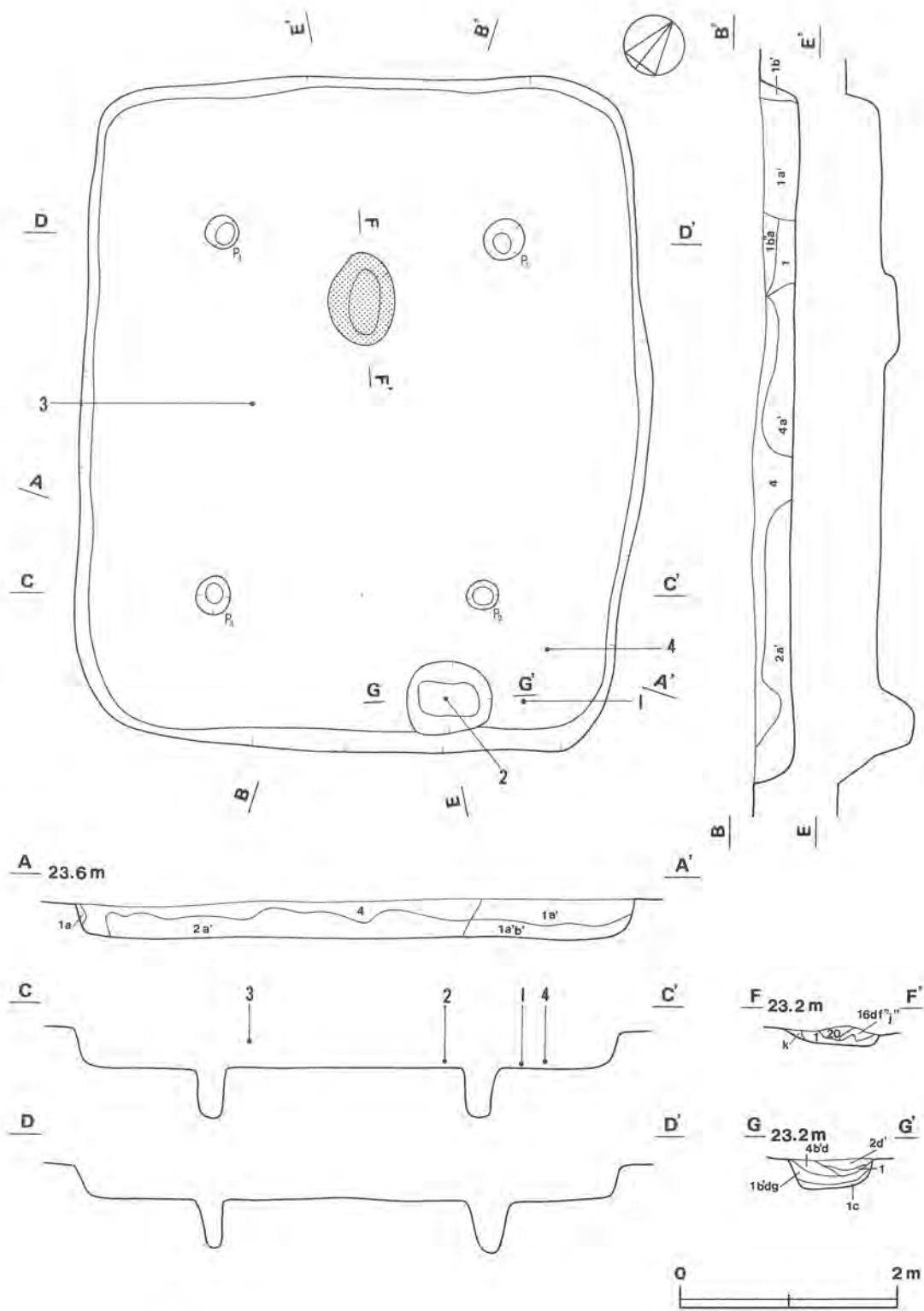
図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第36図 2	台付甕形土器 土 師 器	A 15.4 B 22.3 D 5.4 E 8.8	脚台部は「ハ」の字状に開く。胴下半部は外傾して立ち上がり、最大径を上位に持つ。	口唇部にキザミが施される。外面は丁寧なハケ目整形。口縁部内面は横位の筥磨き。	砂粒・礫 橙色 良好	60% P55 PL71
3	台付甕形土器 土 師 器	A 16.3 B (19.7)	脚台部欠損。胴下半部は外傾して立ち上がり、中位から内彎する。胴部最大径を上位に持つ。	口唇部にキザミが施される。口縁部外面は縦位のハケ目整形。胴下半部は斜位の筥削り。	砂粒 赤褐色 普通	70% P53 PL71
4	台付甕形土器 土 師 器	A [14.2] B 19.2 D 5.0 E [9.0]	脚台部は「ハ」の字状に開くが、やや内彎する。胴下半部は外傾して立ち上がり、最大径を上位に持つ。口縁部はS字状を呈する。	口縁部内・外面横ナデ整形。胴部外面はハケ目整形。脚台部内・外面はナデ整形。	石英極めて多量 明赤褐色 普通	70% P56 PL71
5	台付甕形土器 土 師 器	B (10.2) D 4.7 E [8.4]	脚台部は「ハ」の字状に開くが、やや内彎する。胴下半部は内彎して立ち上がる。胴上半部欠損。	胴下半部外面はハケ目整形。脚台部内・外面はナデ整形。	石英極めて多量 明赤褐色 普通	30% P57
6	甕形土器 土 師 器	A 15.6 B 13.8 C 5.8	胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は複合口縁で、外反して開く。	口縁部外面は横位のハケ目整形。頸部は縦位のハケ目整形。その他は内・外面とも筥磨き。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	90% P48 PL70
第37図 7	甕形土器 土 師 器	A 19.4 B (20.0)	胴下半部以下欠損。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に立ち上がる。	口唇部にキザミ目。口縁部縦位のハケ目整形。胴部は横位又は斜位のハケ目整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	30% P49
8	甕形土器 土 師 器	B (9.7) C 8.7	胴中位以上欠損。胴部は内彎して立ち上がる。	外面はハケ目整形。部分的に筥磨き。底部木葉痕。	砂粒 赤褐色 普通	20% P51
9	壺形土器 土 師 器	B (22.8)	胴下半部以下欠損。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外傾して開く。	外面はハケ目整形後、縦位の筥磨き。内・外面は赤彩。	砂粒 明褐色 普通	40% P43 PL76
10	壺形土器 土 師 器	A [15.2] B (6.8)	胴部以下欠損。複合口縁で、「く」の字状に外傾して開く。	口縁部外面は横位のハケ目整形。頸部は縦位のハケ目整形。外面と口縁部内面は赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	30% P46
11	壺形土器 土 師 器	A 12.8 B (21.2)	胴下半部以下欠損。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。頸部に段を有し、口縁部は「く」の字状に外傾して開く。	外面はハケ目整形後、縦位の筥磨き。口縁部内面は横位の筥磨き。外面と口縁部内面は赤彩。	砂粒・パミス 暗赤褐色 普通	40% P44 PL76
12	壺形土器 土 師 器	B (12.6) C 7.0	胴下半部は外傾して立ち上がり、中位から内彎する。胴部最大径は中央部下位に持つ。	外面は縦位の筥磨き後、赤彩。内面は横位の筥ナデ整形。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	30% P47
第38図 13	壺形土器 土 師 器	B (9.5) C 8.0	平底。胴部は球形状を呈する。	胴部外面はハケ目整形後、縦位の筥磨き。内面は剝落が著しい。	砂粒 にぶい褐色 普通	20% P52

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第38図 14	壺形土器 土 師 器	B (7.7) C 3.8	胴部は球形状を呈し、上位を欠損する。	胴部外面は丁寧な篋磨き。下半部は篋削り。外面は赤彩。	砂粒 赤褐色 良好	60% P 60
15	壺形土器 土 師 器	B (25.0) C 6.5	上げ底。胴部は底部から強く内彎して立ち上がり、球形状を呈する。	外面はハケ目整形後、縦位の篋磨き。赤彩。内面は篋ナデ整形。	砂粒 赤褐色 普通	60% P 45
16	卍形土器 土 師 器	A [9.8] B (4.8)	頸部以下欠損。口縁部は内彎気味に開き、口唇部近くで外反する。	内・外面とも篋磨き。	砂粒 にぶい褐色 良好	30% P 59
17	鉢形土器 土 師 器	A [20.8] B (12.9)	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を上位に持つ。口縁部は外反する。	内・外面とも篋磨き後、赤彩。外面と口縁部内面にはハケ目痕が残る。	砂粒 暗赤褐色 良好	40% P 50
18	甗形土器 土 師 器	A [19.8] B (9.0)	胴下半部欠損。胴部は内彎して立ち上がる。口縁部は複合口縁で、わずかに外傾する。	口唇部と口縁部は横位のハケ目整形。内面と胴部外面は丁寧な篋磨き。	砂粒 明赤褐色 良好	40% P 58
19	高坏形土器 土 師 器	A 20.5 B 12.4 D 6.0 E [10.2]	脚部は「ハ」の字状に開き、裾部はやや広がる。上位に3孔が穿たれる。坏部は下位に稜を持ち、大きく外傾して開く。	外面と坏部内面は縦位の篋磨きで、赤彩。脚部内面は横位のハケ目整形。	砂粒・スコリア 赤褐色 良好	70% P 61 PL79
20	器台形土器 土 師 器	A 7.4 B 8.8 D (6.3) E (10.3)	脚部は「ハ」の字状に開き、裾部はやや広がる。上位に3孔が穿たれる。器受部は内彎しながら開き、接合部に中央孔を持つ。	外面と坏部内面は篋磨き後、赤彩。脚部内面はハケ目整形。	砂粒・スコリア 赤褐色 良好	80% P 62 PL81

第32号住居跡 (第39図)

本跡は、調査区の北東端 K4f6区を中心に確認された住居跡で、北コーナー部は2区(昭和57年度調査)に延びている。本跡の南西10mには第30・31号住居跡が、北7mには2区の第84号住居跡が存在している。

平面形は、長軸6.26m、短軸5.23mの隅丸長方形状を呈し、長軸方向はN-36°-Wを指している。床面積は28.2㎡である。壁はロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は35~38cmで、壁溝は存在しない。床面は平坦で、主柱穴の内側が特に踏み締まっているほか、貯蔵穴の西側も壁際まで硬く踏み締まり、この部分が本跡の入口部にあたると思われる。ピットは、4か所確認され、上端の直径はP₃の30cmからP₁の40cmまでとややバラツキはあるが、深さはいずれも40cmを越し、底面の直径はほぼ20cmで統一性がある。配列も、各コーナー部の内側1.3~1.5mに規則的であることから、4本とも主柱穴と思われる。貯蔵穴は、南東壁際の東コーナー部寄りに位置している。平面形は、掘り込み面が長軸70cm、短軸65cmの方形状を呈し、底面は長軸55cm、短軸30cmの長方形状を呈している。深さは30cmで、底面は平坦である。貯蔵穴内には、上層に黒褐色土が中・



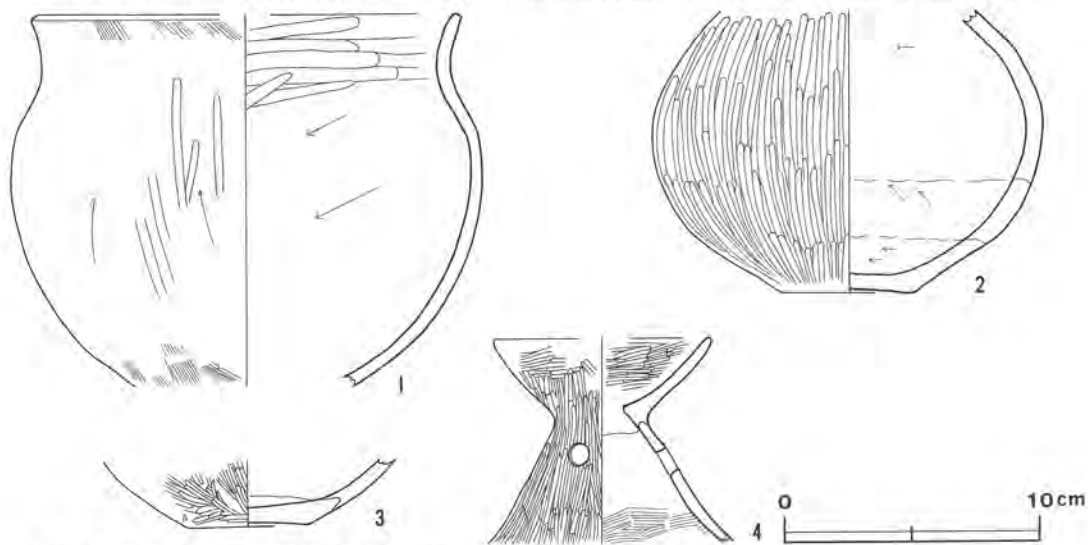
第39图 第32号住居跡実測図

下層に褐色土がレンズ状に堆積している。なお、貯蔵穴の北西部の床面には、幅15cm、高さ3cmの高まりが貯蔵穴の長軸に平行して80cmほど続いている。この高まりは、貯蔵穴と床面を区画し、貯蔵穴に異物が入り込むことを防ぐ役割を果していたと推定される。炉は、床面を17cmほど掘り込んだ地床炉で、中央から長軸線にそって北西へ1mほど寄って位置している。平面形は、長径65cm、短径50cmの楕円形状を呈し、長径方向は本跡の長軸方向と同一である。炉内には、焼土粒子・焼土ブロックを含む赤褐色土が堆積している。炉床はレンガ状に焼き締まり凹凸が激しいことから、本跡は長期間使用されたものと思われる。

覆土は、上層に締まりの弱い黒褐色土、下層にはやはり締まりの弱い暗褐色土が堆積している。自然堆積層であるが、所々に床面まで達する攪乱を受けている。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片210点、後世に流れ込んだと思われる須恵器片2点が出土している。第40図1の甕形土器、4の器台形土器は東コーナー付近の床面から一部が欠損した状態で、2の壺形土器は貯蔵穴の覆土下層から頸部より上が欠損した状態で出土しており、本跡に伴う遺物と思われる。3の壺形土器底部は中央部の覆土中層から出土したもので、本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第40図 第32号住居跡出土遺物実測図

第32号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 1	甕形土器 土師器	A (17.0) B (14.7)	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を上位に持つ。口縁部は外反する。	内・外面とも磨きで、外面にはハケ目整形痕を残す。	砂粒・スコリア 橙色 良好	50% P64 PL70

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 2	壺形土器 土師器	B (11.2) C 5.2	上げ底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。頸部以上欠損。	外面は縦位の丁寧な篋磨き後、底面まで赤彩。内面は篋ナデ整形が施される。	砂粒・スコリア 赤褐色 良好	70% P63 PL76
3	壺形土器 土師器	B (2.6) C 4.7	上げ底。胴下半部は内彎して立ち上がる。	外面は篋磨き。底面にはハケ目痕が残る。	砂粒 橙色 良好	20% P65
4	器台形土器 土師器	A 8.6 B (8.4) D 5.2	脚部は「ハ」の字状に開き、裾部はやや広がる。上位に3孔が穿たれ、器受部は外傾して開き、接合部に中央孔を持つ。	口縁部外面は横ナデ整形。その他の外面と坏部内面は篋磨き後、赤彩。脚部内面はハケ目整形。	砂粒 赤褐色 普通	70% P66 PL81

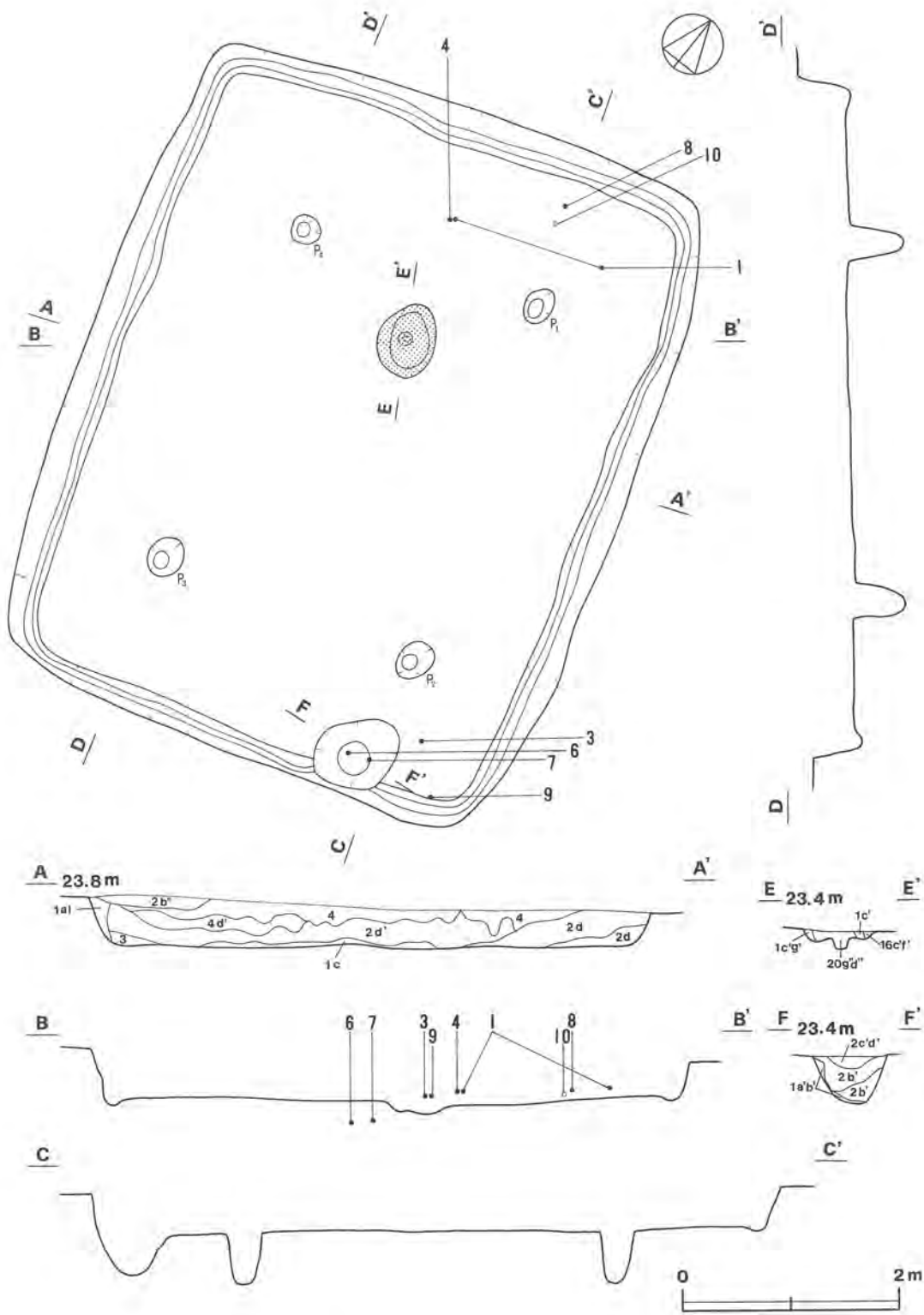
第33号住居跡 (第41図)

本跡は、調査区の中央からやや北東に寄った L3d9区を中心に確認された住居跡である。本跡の西24mには第13号住居跡が、北東16mには第76号住居跡が存在している。

平面形は、長軸6.4m、短軸5.2mの長方形を呈し、長軸方向はN-16°-Wを指している。床面積は25.9㎡である。壁は、硬く締まったロームで、垂直に立ち上がっている。壁高は35～43cmで、当遺跡の同時期の住居跡では深い方である。壁面には攪乱もなく、残存状況は良好である。壁直下には、幅12～13cm、深さ3～8cmの壁溝が貯蔵穴の部分を除き全周している。床はロームでほぼ平坦であるが、炉の東側にかぎっては周囲より10cmほど低くなっている。床面は全体的に締まっているが、特別強く踏み締まった箇所などはみられない。ピットは4か所確認した。上端直径は25～35cm、底面の直径は15cm、深さは45～48cmと4本とも同様の規模を有し、規則的に配列されていることから、4本とも支柱穴と判断した。貯蔵穴は、南壁際の東コーナー寄りに位置している。平面形は、上端の直径が70cmの不整形円形であるが、底面に向かって徐々にすぼまり、底面は直径30cmの円形状を呈している。深さは45cmで、暗褐色土がレンズ状に堆積している。炉は、床面を10cmほど掘り下げた地床炉で、中央から長軸線にそって、80cmほど北に寄って位置している。平面形は、長径70cm、短径55cmの楕円形状を呈し、長径方向は本跡の長軸方向とほぼ同一である。炉内には、焼土粒子・焼土ブロックを多量に含む赤褐色土が堆積している。炉床は全体的に強く焼き締まっており、特に西側はレンガ状を呈している。入口部は、貯蔵穴や炉の配置などから南壁側に存在したものと推定される。

覆土は、上層に締まりの弱い黒褐色土、下層に締まりを有する暗褐色土が堆積し、北や東の壁際には、ローム小ブロックを含む暗褐色土や極暗褐色土が流れ込むように堆積している。自然堆積層であるが、覆土の一部には床面にまで達する攪乱が認められる。

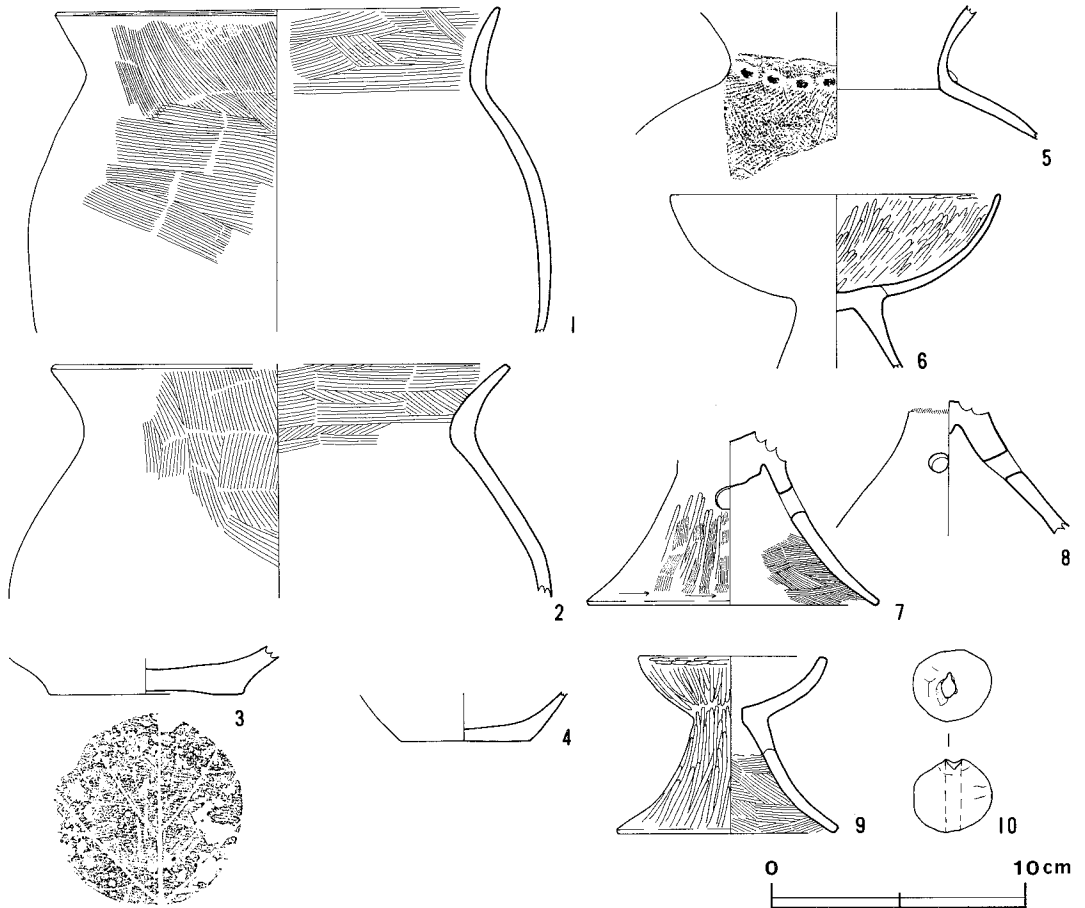
遺物は、北壁付近と南コーナー部付近に多く、床面や覆土中から土師器及びその破片270点、球状



第41图 第33号住居迹实测图

土錘1点が出土している。P₂の北40cmには直径55cm、厚さ10cmの粘土塊が床面に密着して出土している。第42図1・4の甕形土器とその底部、8の高坏形土器脚部は、北壁側の床面近くから、3の甕形土器底部と9の器台形土器は南東コーナー部の床面から出土しており、いずれも本跡に伴う遺物と思われる。6・7の高坏形土器は貯蔵穴の中層から出土しており、本跡が廃絶された後に流れ込んだ可能性が高い。なお、2・5は覆土中から出土したもので、本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第42図 第33号住居跡出土遺物実測図

第33号住居跡出土土器観察表

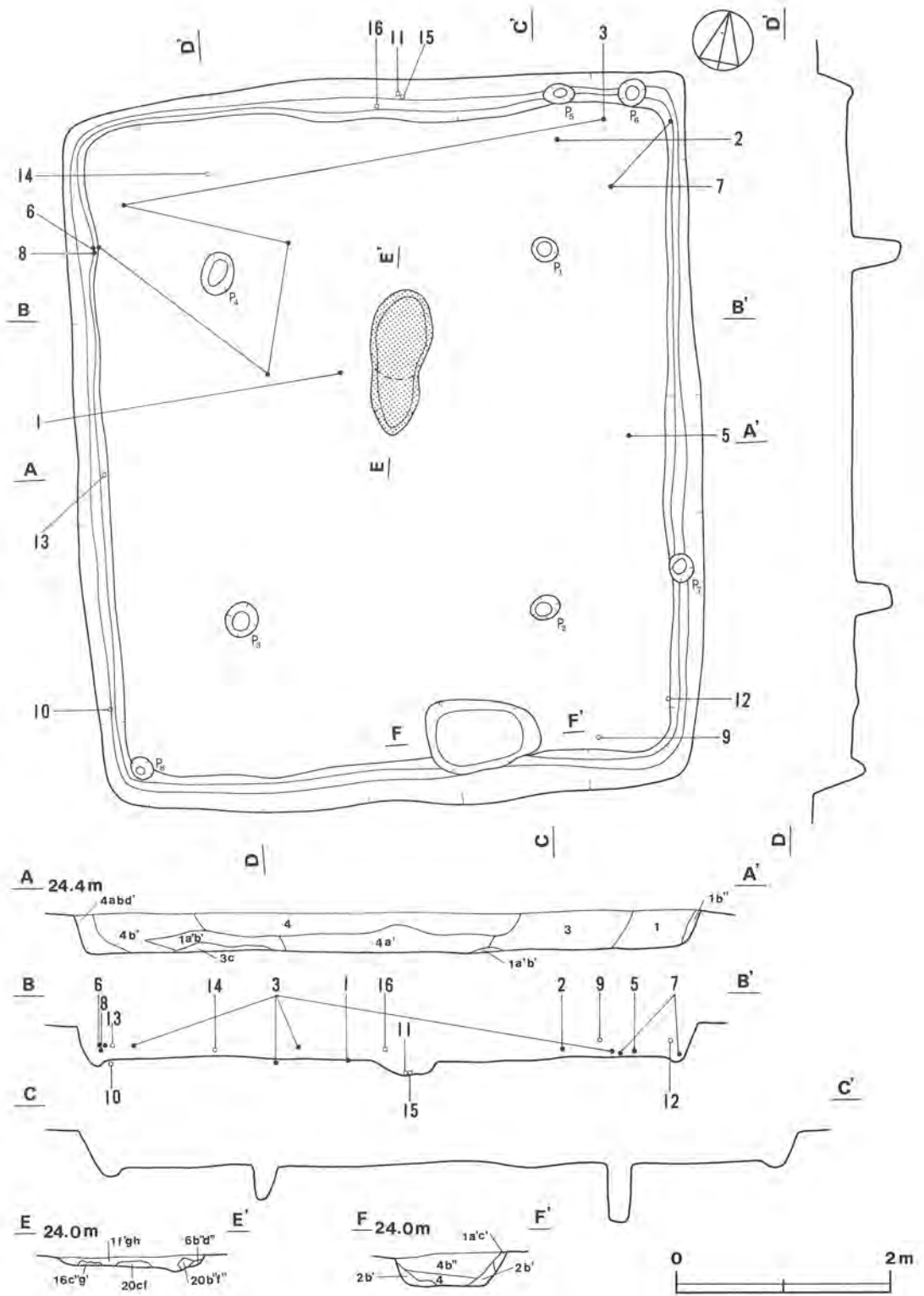
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図 1	甕形土器 土師器	A (17.8) B (12.9)	胴下半部以下欠損。胴部は球形状を呈し、口縁部は「く」の字状に開く。	外面と口縁部内面はハケ目整形。	砂粒 明褐色 普通	30% P67

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図 2	甕形土器 土師器	A {18.0} B (9.4)	胴中位以下欠損。口縁部は「く」の字状に開く。	外面と口縁部内面はハケ目整形。	砂粒 黒褐色 普通	10% P68
3	甕形土器 土師器	B (1.9) C 7.8	底部片。上げ底	底部木葉痕。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	10% P71
4	甕形土器 土師器	B (1.9) C 5.2	底部片。平底。胴部は外傾して立ち上がる。	外面は横位の篋ナゲ整形。	長石多量 にぶい褐色 普通	10% P70
5	壺形土器 土師器	B (4.9)	頸部片。頸部に円形浮文が巡る。	口縁部は縦位の篋磨き後、赤彩。胴部上半部には羽状縄文を施文。	砂粒 にぶい褐色 普通	10% P69
6	高坏形土器 土師器	A 13.3 B (7.0) D (2.7)	脚部は「ハ」の字状に開き、下位は欠損。坏部は内彎して立ち上がり、半球状を呈する。	外面及び坏部内面は篋磨き。	パミス多量 にぶい赤褐色 不良	70% P72 PL79
7	高坏形土器 土師器	B (7.0) E 11.7	脚部は「ハ」の字状に開き、上位に3孔が穿たれる。坏部欠損。	外面はハケ目整形の後、縦位の篋磨き。内面は横位のハケ目整形。	砂粒 橙色 良好	40% P73
8	高坏形土器 土師器	B (5.4)	脚部は「ハ」の字状に開き、上位3孔が穿たれる。裾部及び坏部欠損。	外面は縦位の篋磨き。	砂粒・スコリア 赤褐色 不良	30% P74
9	器台形土器 土師器	A 7.7 B 7.2 D 4.7 E {8.9}	脚部は「ハ」の字状に開き、裾部はやや広がるが、無孔である。器受部は内彎して開き、接合部に中央孔を持つ。	外面と器受部内面は篋磨きの後、赤彩。脚部内面はハケ目整形。	砂粒 赤褐色 普通	80% P75 PL81

第36号住居跡（第43図）

本跡は、調査区の南東部 M4f1区を中心に確認された住居跡である。本跡の東 4 m には第54号住居跡が、北 6 m には第40号住居跡が存在している。

平面形は、長軸6.76m、短軸5.85mの長方形状を呈し、長軸方向はN-18°-Wを指している。床面積は31.6m²である。壁はロームで、65度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は31～35cmで、壁直下には幅10～15cm、深さ5～10cmの壁溝が全周している。溝底は、凹凸が激しい。床はロームで、支柱穴に囲まれた範囲と貯蔵穴周辺が硬く締まっている。特に貯蔵穴の西側は壁際まで硬く踏み締まっていることから、ここが本跡の入口部にあたると思われる。ピットは、8か所確認された。P₁～P₄は、上端の長径25～30cm、深さ36～54cmの規模を有し、各コーナー部から1.5mほど内側に規則的に配列されており、支柱穴と思われる。P₅～P₈は、壁溝中に存在してい



第43图 第36号住居跡実測图

るが本跡との関係は不明である。貯蔵穴は、南壁際の南東コーナー寄りに位置している。平面形は長軸110cm、短軸65cmの長方形状を呈し、深さ30cmほどで、底面は平坦である。貯蔵穴内には、締まりの弱い黒褐色土が堆積している。炉は、南・北2つの地床炉が、切り合って検出された。南側の炉は、北側の炉に長径方向の一部を切られており、本来は長径80cm、短径47cmの楕円形状を呈するものと思われる。北側の炉は、長径85cm、短径58cmの楕円形状を呈する。土層から、南側の炉が廃棄された後、それに接して北側の炉が作られたことがわかる。長径方向は、両炉ともN-8°-Wを指している。炉の深さは、南側の炉が10cm、北側は15cmほどで、炉内には焼土粒子を多量に含む赤褐色土が堆積している。特に北側の炉は、焼土が多く、少量ではあるが灰も出土した。炉床は、両炉とも硬く焼き締まりレンガ状を呈することから、使用期間は長かったものと推定される。

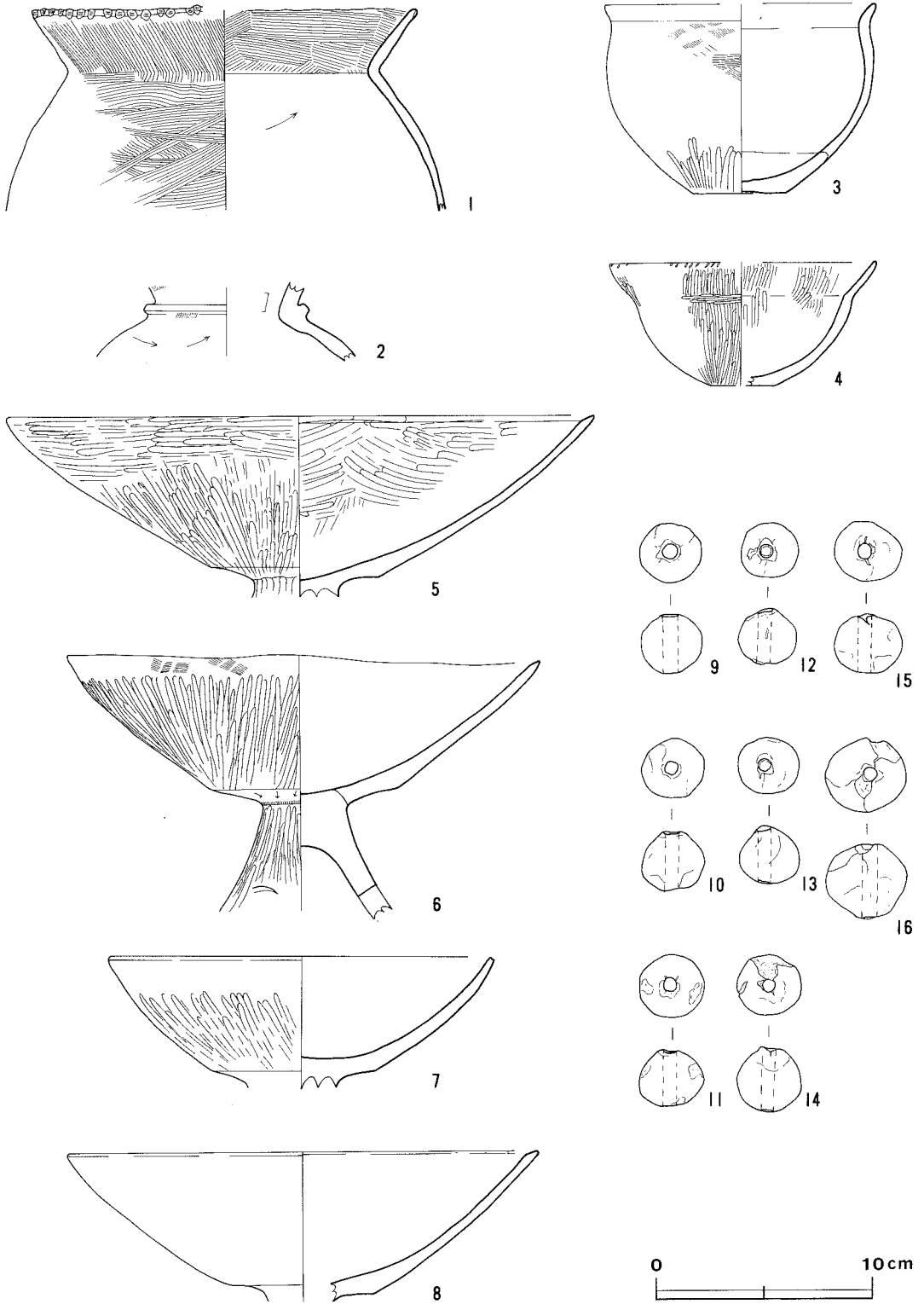
覆土は、上・下層とも締まりの弱い黒褐色土が堆積している。自然堆積層である。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片554点、球状土錘8点が出土している。本跡に伴う遺物は、北東と南東のコーナー部に多い。第44図2の壺形土器口縁部片、7の高坏形土器は北東コーナー部、6・8の高坏形土器は西壁際、1の甕形土器は炉の西側からそれぞれ出土している。これらの土器はいずれも覆土下層からの出土であり、出土状況から本跡に伴うものと思われる。炉中には、2種類の甕形土器口縁部片が立てられている。南東コーナー部からはハケ目が施された甕形土器片が多く出土しているが、小片であるため実測は不可能であった。貯蔵穴の下層からも甕形土器胴部片が出土しているが、周囲の土器が流れ込んだものと思われる。また、9～16の球状土錘の出土位置が床面から覆土上層にかけてであることや、3の小型鉢形土器は5mほど離れて出土した破片が接合していることから、攪乱を受けたものと考えられる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。

第36号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図 1	甕形土器 土師器	A (17.8) B (9.3)	胴中央以下欠損。口縁部は「く」の字状に外傾して開く。	口唇部はキザミが施され、外面と、口縁部内面にハケ目整形。	砂粒 灰褐色 普通	20% P77
2	壺形土器 土師器	B (3.7)	頸部片。頸部に隆帯が巡る。	外面はナデ整形。部分的にハケ目痕が残る。	砂粒・スコリア 橙色 良好	10% P76
3	小型鉢形土器 土師器	A (12.5) B 8.9 C 4.2	胴部は内彎して立ち上がり、最大径を上位に持つ。口縁部は「く」の字状に外傾して開く。	胴上半部はハケ目整形、下半部は篋磨き。内・外面に赤彩の痕跡がみられる。	砂粒 赤褐色 不良	60% P82



第44图 第36号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第44図 4	塊形土器 土 師 器	A [12.5]	体部は内彎して立ち上がる。口縁部は「く」の字状に立ち上がり、内面に稜を持つ。	口唇部にキザミが施され、内・外面は丁寧な篋磨き。	砂粒 にふい橙色 良好	30% P83 PL78
		B 5.8				
		C [3.0]				
5	高坏形土器 土 師 器	A 27.2	脚部欠損。坏部は下位に稜を持ち、外傾して開く。	内・外面とも篋磨き。内面は赤彩。	砂粒 にふい褐色 普通	60% P78 PL79
		B (8.8)				
6	高坏形土器 土 師 器	A 21.9	脚部は「ハ」の字状に開き、3孔が穿たれる。下位は欠損する。坏部は下位に稜を持ち、外傾して開く。	外面と坏部内面は篋磨き後、赤彩。	砂粒 赤褐色 良好	70% P79 PL79
		B (12.0)				
		D (5.0)				
7	高坏形土器 土 師 器	A 17.6	脚部欠損。坏部は下位に鈍い稜を持ち、内彎して開く。	内・外面に篋磨き。内面は赤彩。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	60% P80
		B (6.1)				
8	高坏形土器 土 師 器	A 21.7	脚部欠損。坏部は下位に鈍い稜を持ち、外傾して開く。	内・外面は篋磨き後、赤彩。	砂粒 赤色 良好	60% P81
		B (6.9)				

第38号住居跡（第45・46図）

本跡は、調査区の中央からやや南のM3c5区を中心に確認された大形の住居跡で、東壁際で縄文時代中期の第266号土坑を、西床面でやはり縄文時代中期の第265号土坑を掘り込んでおり、南壁の南東コーナー寄りの部分は、幅1mの範囲で農耕による攪乱を受けている。本跡の南西22mには、本跡とほぼ同時期の大型の住居である第107号住居跡が、東5mには第39号住居跡が存在し、さらに東14mには、やはり同時期の大型の住居である第41号住居跡が存在している。

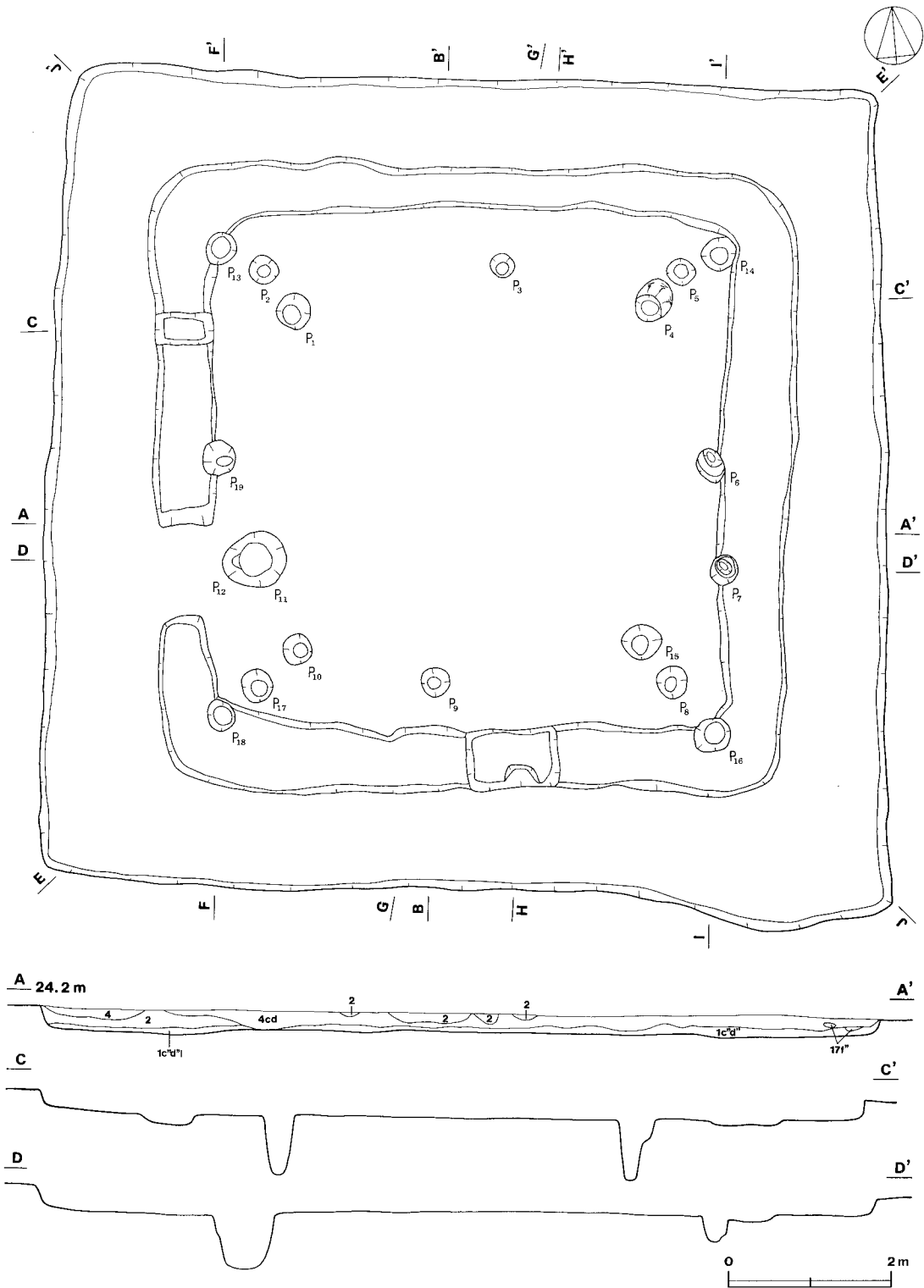
平面形は、長軸10.8m、短軸9.2mの方形状を呈し、長軸方向はN-7°-Eである。床面積は100.6㎡で当遺跡では最大の住居跡である。本跡と同様の規模を有する住居跡は第41・73・107号住居跡の3軒が確認されている。壁は締まりの弱いロームで、70度ほどの角度で外傾して立ち上がっている。壁高は、22～35cmで西側がやや高くなっている。周溝は、幅50～90cm、深さ10～15cmの幅広のもので、壁際より1.1～1.2m内側を周回するが、西壁側では1.2mほど途切れている。周溝の底はハードロームで、凹凸が激しい。溝底には、南側に一辺110cm、深さ20cmの方形の掘り込みが、西側には、長軸40cm、短軸30cm、深さ20cmの長方形の浅い掘り込みが存在する。床はソフトロームで、総体的に軟弱であるが、北東コーナー部から東壁にかけての幅2m、長さ4mの範囲は硬く締まっている。ピットは、19か所確認され、配列や覆土の状況等からP₁₁を除く18本が本跡に伴う柱穴と判断される。北東コーナー部のP₄・P₅・P₁₄、南東コーナー部のP₈・P₁₅・P₁₆、南西コーナー部のP₁₀・P₁₇・P₁₈、北西コーナー部のP₁・P₂・P₁₃は、コーナーを結ぶ対角線上に

20～40cmの間隔をおいて直線的に並んでいる。これらのピットは、上端の直径が35～48cm、深さが62～78cmで、それぞれのピットが、本跡の上屋を支えるのに十分な規模であることから、12本とも支柱穴と思われる。しかし、これらが一時期に使用されたものか、住居の建て替えに伴い順次掘り込まれたものかの検証はできなかった。北壁側のP₃とそれに対応する南壁側のP₉、東壁側のP₆・P₇とそれに対応する西壁側のP₁₂・P₁₉は、上端直径が30～35cm、深さが25～35cmで、それぞれが支柱穴に次ぐ重要な役割を持つ柱穴であったと思われる。P₁₁は、上端直径が80cm、深さが68cmで、調査時には本跡に伴う柱穴と考え掘り込みを進めたが、他の柱穴に比して規模・形状とも異なることや、本跡の柱穴と見なされるP₁₂を掘り込んでいることから、本跡とは無関係に後世に掘り込まれたものと推定される。炉や貯蔵穴はない。入口部は、平面形から周溝が途切れる西側の陸橋部が考えられるが、P₁₂の存在や床面が軟弱で踏み締まっていないなどの問題点もあり、断定することはできない。

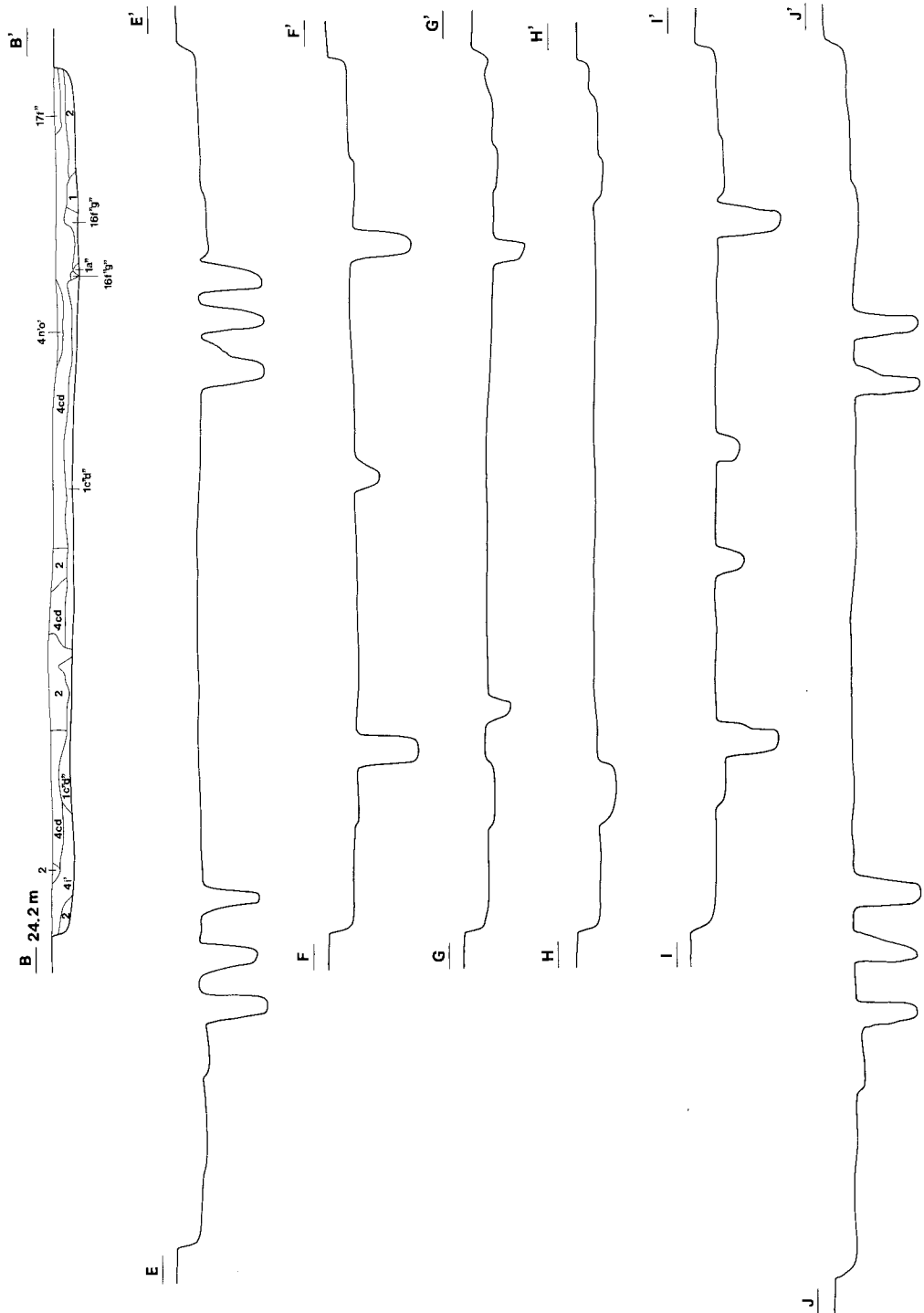
本跡は、一辺が10mを越す大形の住居跡であるため、南北に3本、東西に3本のベルトを設け、16区に分割して調査を進めた。覆土は基本的に上・下2層からなり、上層に黒褐色土、下層に締まりの弱い暗褐色土が堆積している。なお、壁際を中心とする床面には焼土が多量に堆積していることから、本跡は焼失住居であることが確認された。焼失の時期は、焼土層の下に褐色土が堆積していることから、本跡廃絶後と思われるが、完形の土器類が多量に出土していることを考えるとあるいは何らかの理由で長期間使用が途絶えていた時期であったかも知れない。

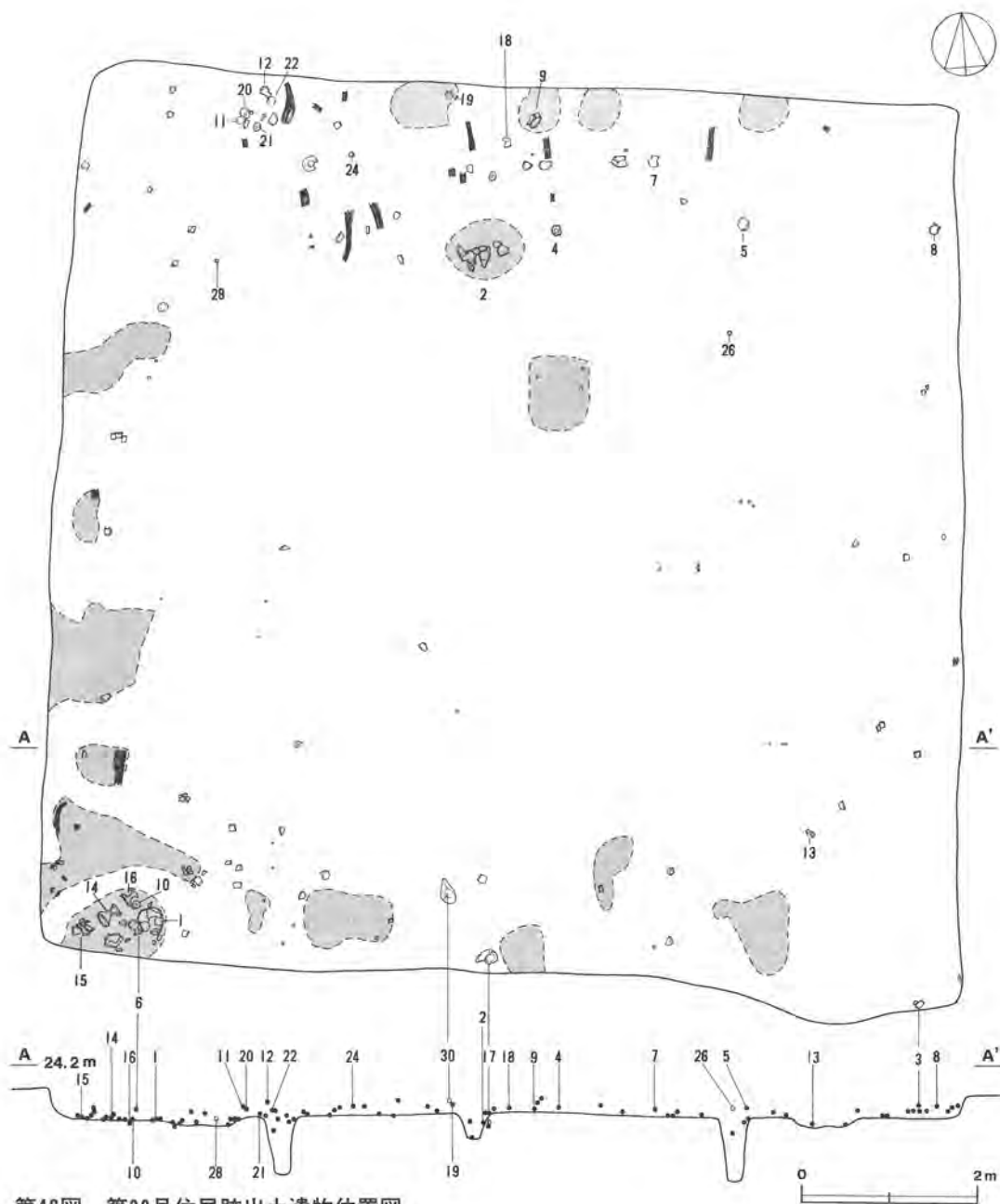
遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片137点、手捏土器6点、球状土錘1点、砥石に利用したと思われる土師器片1点、滑石製の紡錘車1点、石製模造品の断片1点、台石1点が出土している。本跡に伴う遺物は周溝の外側から多く出土しており、特に北壁際と南西コーナー部に集中している。北壁際では、焼土や炭化材とほぼ同じレベルに甕形土器2点、壺形土器3点、埴形土器3点、高坏形土器5点、甕形の土師器1点、埴形土器1点、手捏土器6点が出土している。第47図2・4・7・9・11第48図12・18・19・20・21・22・24が上記の土器にあたる。これらは、棚等に乗っていたものが焼失時に落ちこんだような状態で出土しており、いずれも本跡に伴う遺物と思われる。南西コーナー一部では、第47図1の壺形土器と6・10の埴形土器が並んで倒れており、その西側には第48図14・16の高坏形土器が坏部を南西に向け一列に並んで倒れ、さらに14に近接して、15の高坏形土器が床面に横位で潰れていた。これらの土器は、本来床面に立っていたものが焼失時に倒れたものと思われる。そのほか28の紡錘車が北西コーナー近くの床面から、台石が南壁近くの床面から、27の球状土錘がP₄の覆土上層から出土している。29の石製模造品の断片は中央部の覆土中から出土しているが、本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物や遺構の規模・形態等から古墳時代中期の和泉期に比定される遺構と思われる。



第45图 第38号住居跡実测图

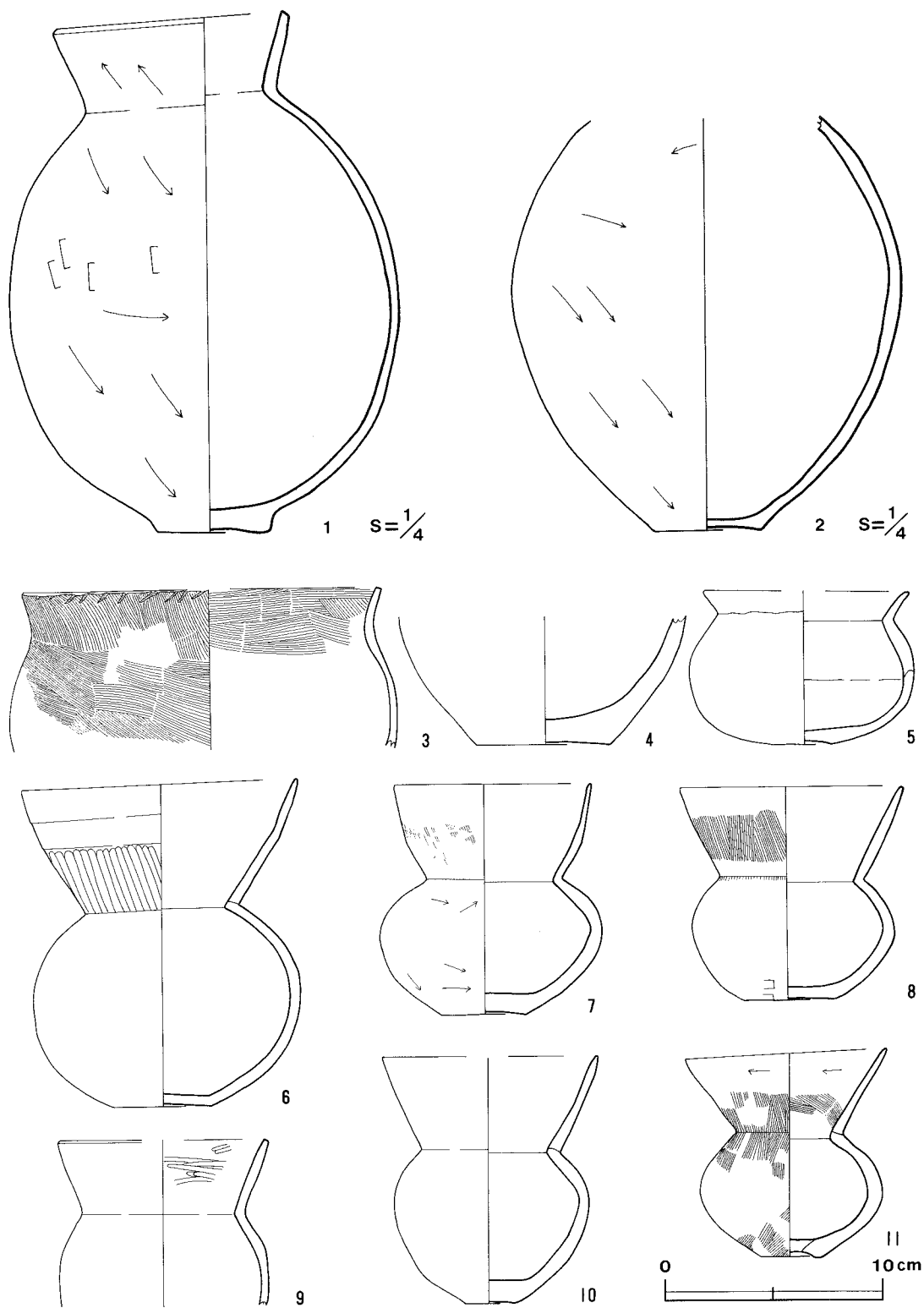




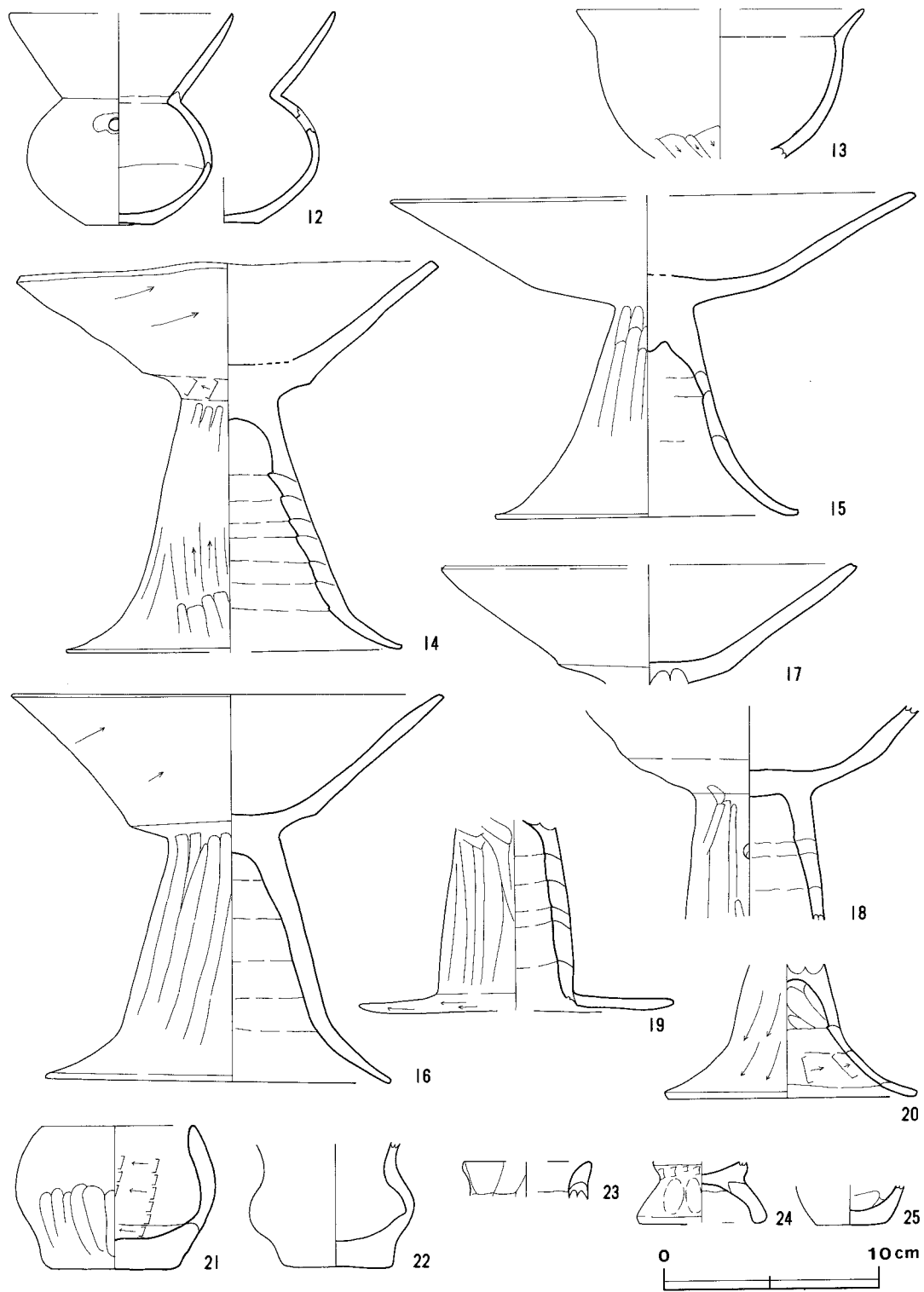
第46図 第38号住居跡出土遺物位置図

第38号住居跡出土土器観察表

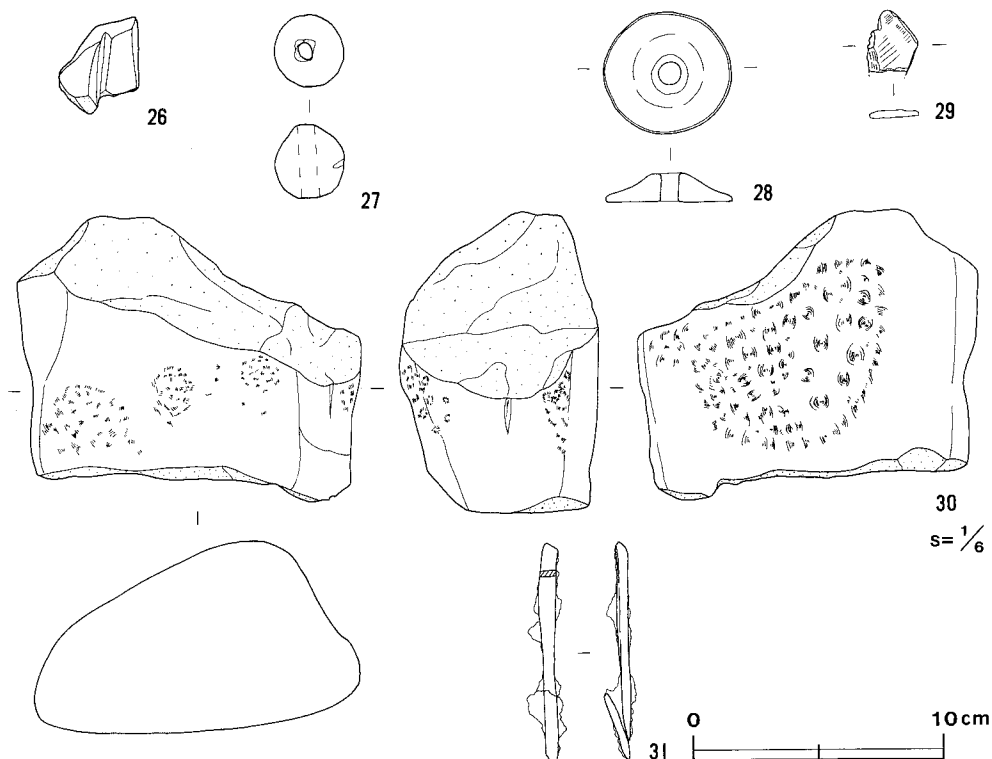
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 1	甕形土器 土師器	A 14.7 B 32.6 C 7.1	平底。胴部は長胴化し、内湾して立ち上がる。胴部最大径を中位に持つ。	内・外面とも不定方向のナデ整形。	砂粒 にふい褐色 普通	90% P84 PL73



第47图 第38号住居跡出土遺物実測図(1)



第48图 第38号住居跡出土遺物実測図(2)



第49図 第38号住居跡出土遺物実測図(3)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 2	甕形土器	B (25.8)	上げ底。胴部は長胴化し、内彎して立ち上がる。胴部最大径を中位に持つ。	内・外面とも不定方向のナデ整形。	砂粒・スコリア 明褐色 普通	40% P85
	土師器	C 6.6				
3	甕形土器	A [15.8]	胴部は内彎し、口縁部は緩やかに外反する。	口唇部にキザミが施され、外面と口縁部内面はハケ目整形。	砂粒 明赤褐色 普通	40% P86
	土師器	B (7.5)				
4	甕形土器	B (6.0)	胴部は内彎して立ち上がるが、中位以上を欠損する。	内・外面ともナデ整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	30% P87
	土師器	C 6.4				
5	壺形土器	A [9.5]	上げ底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。広口である。	外面は丁寧な篋ナデ整形。内面はナデ整形。	砂粒 明赤褐色 普通	90% P88 PL77
	土師器	B 7.1				
	土師器	C 2.0				
6	罎形土器	A 13.0	上げ底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は内彎して開き、中位に稜を持つ。	口縁部上位は内・外面とも横ナデ整形。口縁部外面下位と胴部外面は篋磨き。	砂粒 橙色 普通	95% P93 PL77
	土師器	B 15.3				
	土師器	C 4.6				
7	罎形土器	A 9.2	上げ底。胴部は球形状を呈し、最大径を上位に持つ。口縁部は内彎する。	口縁部内・外面は横ナデ整形。胴部外面は丁寧な篋ナデ整形。	砂粒・雲母 橙色 普通	95% P90 PL77
	土師器	B 10.8				
	土師器	C 4.0				

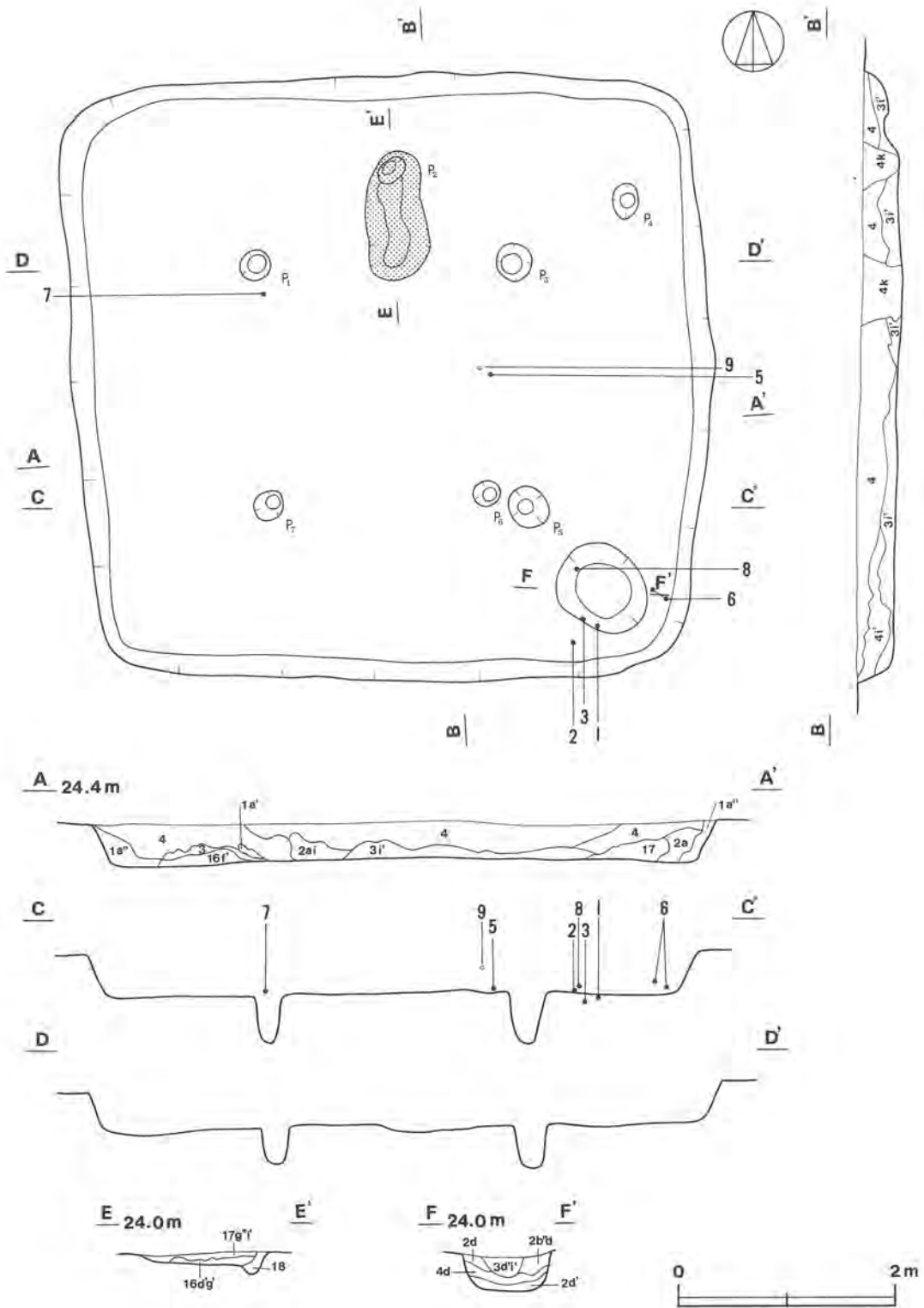
図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第47図 8	埴形土器 土 師 器	A 10.3	上げ底。胴部は球形状を呈し、最大径を上位に持つ。口縁部は外傾して開く。	外面は丁寧なナデ整形。口縁部にハケ目痕を残す。胴下半部は篋削り。	砂粒・雲母にぶい黄橙色不良	90% P89 PL77
		B 10.0				
		C 4.1				
9	埴形土器 土 師 器	A〔9.8〕	胴下半部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾して開く。	内・外面とも丁寧なナデ整形。	砂粒 橙色 普通	30% P94
		B〔7.8〕				
10	埴形土器 土 師 器	A〔10.1〕	上げ底。胴部は球形状を呈し、最大径を上位に持つ。口縁部は外傾して開く。	器面は剥落が著しく、整形技法は不明である。	砂粒 赤褐色 不良	90% P92 PL77
		B 11.6				
		C 2.3				
11	埴形土器 土 師 器	A 9.2	上げ底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は直線的に開く。	口縁部外面は、上位が横ナデ整形、下位から胴部上半分にかけてはハケ目整形。	砂粒 にぶい橙色 良好	95% P91 PL77
		B 9.8				
		C 2.7				
第48図 12	埴形土器 土 師 器	A〔10.5〕	上げ底。胴部は球形で、最大径を中位に持ち、上半部に径6mmの孔が穿たれる。口縁部は外傾して大きく開く。	口縁部外面は横ナデ整形。器内・外面は著しく剥落する。	砂粒 赤褐色 普通	70% P108 PL77
		B 10.0				
13	埴形土器 土 師 器	A〔13.4〕	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く外傾する。	外面は底部付近篋削り。体部内面は横位の篋ナデ整形。	砂粒 橙色・内面黒色 良好	40% P95
		B〔7.0〕				
14	高環形土器 土 師 器	A 19.8	脚部は円筒形状で、裾部は緩やかに広がる。坏部は下位に稜を持ち、直線的に外傾する。	坏部は器面が剥落する。脚部は縦位の篋削り。裾部は横位のナデ整形。	砂粒 橙色 普通	80% P99 PL80
		B 18.2				
		D 12.0				
		E〔15.6〕				
15	高環形土器 土 師 器	A〔24.4〕	脚部は円筒形状で、裾部は外反する。坏部は大きく開き、口縁部は外反する。	口縁部内・外面と裾部は横ナデ整形。脚部は縦位の篋削り。	砂粒・スコリア 橙色 普通	70% P97 PL80
		B 15.2				
		D 10.0				
		E 14.2				
16	高環形土器 土 師 器	A 20.3	脚部は円筒形状で、裾部で緩やかに広がる。坏部は下位に稜を持つ、外反して開く。	坏部は篋ナデ整形。脚部は縦位の篋削り。裾部は横ナデ整形。	砂粒 橙色 普通	90% P96 PL80
		B 18.3				
		D 11.9				
		E 16.1				
17	高環形土器 土 師 器	A〔19.4〕	脚部欠損。坏部は下位に稜を持ち、外傾して開く。	外面は斜位の篋磨き。	砂粒 赤色 普通	30% P98
		B〔5.5〕				
18	高環形土器 土 師 器	B〔9.7〕	脚部は円筒形状で、中位に1孔が穿たれる。裾部欠損。坏部は下位に稜を持つが、上位欠損。	脚部は縦位の篋削り。	砂粒 赤褐色 良好	40% P101 PL80
		D〔6.5〕				
19	高環形土器 土 師 器	B〔9.0〕	坏部欠損。脚部は円筒形状で、裾部は直角に近い角度で大きく開き、末端はわずかに外反する。	脚部は縦位の篋削り。裾部は横位のナデ整形。	砂粒 橙色 良好	30% P100
		E〔14.6〕				
20	高環形土器 土 師 器	B〔6.2〕	脚部片。脚部は円筒状であるが、下位で「ハ」の字状に開き、裾部はさらに緩やかに広がる。坏部欠損。	外面は縦位の篋ナデ整形。裾部は横ナデ整形。内面は丁寧な指ナデと横位の篋ナデ整形。	砂礫・石英 橙色 良好	40% P102 PL80
		E 11.5				

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第48図 21	手捏土器 (埴形) 土師器	A 7.1	平底。胴下半部は引き締まり、 中位以上は内彎して立ち上がる。	粗雑なナデ整形で、外面に指圧 痕が残る。内面は横位の筥ナデ 整形。	砂粒 淡橙色 普通	100% P104 PL82
		B 6.7				
		C 5.8				
22	手捏土器 (壺形) 土師器	B (5.9)	平底。胴下半部は引き締まり、 中位は球形状に張る。口縁部欠 損。	粗雑なナデ整形で、指圧痕が残 る。	砂粒 にぶい橙色 普通	90% P103 PL82
		C 5.1				
23	手捏土器 (坏形) 土師器	A 6.0	底面欠損。口縁部は外反する。	粗雑なナデ整形で、内・外面に 指圧痕が残る。	砂粒 にぶい赤褐色 不良	40% P105
		B (1.8)				
24	手捏土器 (高环形) 土師器	B (2.9)	脚部は「ハ」の字状に開く。胴 部以上欠損。	粗雑なナデ整形で、内・外面に 指圧痕が残る。	砂粒・スコリア にぶい橙色 不良	70% P106
		D 2.1				
		E (6.2)				
25	ミニチュア 土器 土師器	B (1.9)	平底。体部は内彎して立ち上 がる。	内・外面ともナデ整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	40% P107
		C (3.2)				

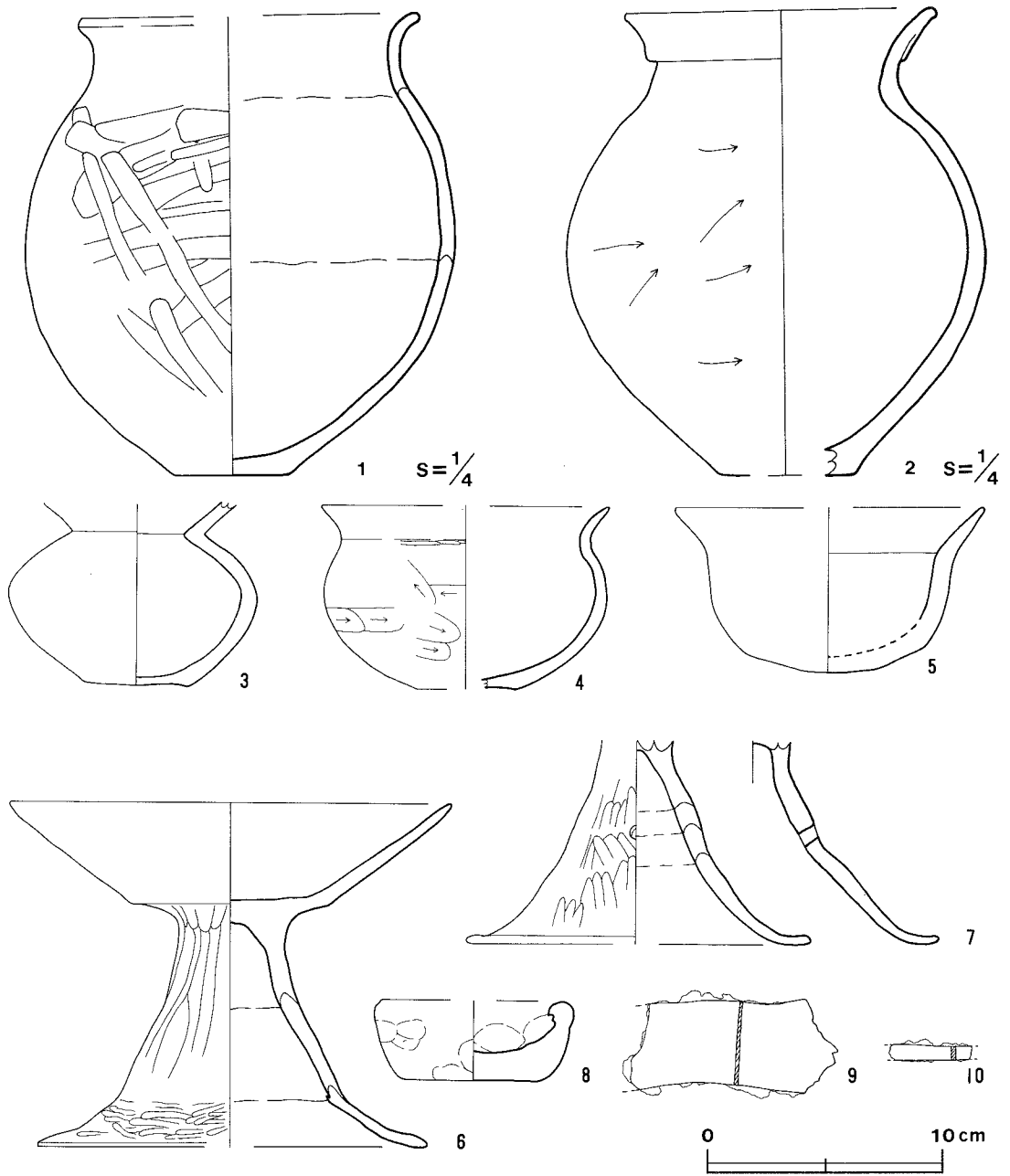
第39号住居跡 (第50図)

本跡は、調査区の中央からやや南西に寄った M3c8区を中心に確認された住居跡で、北西コーナ一部は縄文時代中期の第49・69号住居跡を掘り込んでいる。本跡の西5mには大形の第39号住居跡が、南6mには第50号住居跡が存在している。

平面形は、長軸5.96m、短軸5.60mの方形状を呈し、主軸方向はN-3°-Wを指している。床面積は27.7㎡である。壁はロームで締まっており、60~70度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は32~40cmで、当遺跡では割合に深い方である。床もロームで、平坦である。床面は全体的に締まっているが、特に硬く踏み締まった部分はみられない。ピットは、7か所確認され、P₁・P₃・P₅・P₇は、上端直径30~38cm、深さ35~50cmで規則的に配列されていることから主柱穴と思われる。P₄とP₆は、上端直径25cm、深さ26cmとやや小規模であるが、どちらも本跡に伴う柱穴である。P₂は、炉床に検出されたもので、確認面に焼土が堆積していることから、本跡が掘り込まれる以前に掘られたピットと思われる。貯蔵穴は、南東コーナ一部に位置している。平面形は、直径80cmほどの円形状を呈し、深さは37cmである。底面は平坦で、貯蔵穴の覆土は自然堆積である。炉は床面を12cmほど掘り下げた地床炉で、中央から主軸線上にそって120cmほど北に寄り、P₁とP₃を結ぶ線上を越え、北壁から50cmの位置まで近接している。平面形は、長径120cm、短径50cmの極端に細長い楕円形を呈し、長径方向は、本跡の主軸方向とほぼ同一である。炉内には、焼土粒子・焼土ブロックを多量に含む赤褐色土が堆積し、炉床はよく焼けている。入口部は、炉や貯蔵穴の位置から南壁側を想定した。



第50图 第39号住居跡実測图



第51図 第39号住居跡出土遺物実測図

覆土は、上層に黒褐色土、下層に極暗褐色土が堆積し全体に締まりは弱い。自然堆積であるが、一部に床面まで達する攪乱がみられる。また、床面に焼土や炭化材が多量に散乱していることから、居住期間中に焼失したと思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片390点、手捏土器1点、鉄製品2点が出土してい

る。本跡に伴う遺物は南東コーナー部に集中しており、第51図1と2の甕形土器がほぼ完形のまま横位で並んでいたほか、第51図3の埴形土器、第51図6の高环形土器、第51図8の手捏土器が床面や床面に近い覆土中から出土している。なお第51図5の塊形土器は床面に正位で出土したものである。炉の東部床面には、第51図7の高环形土器脚部が正位で出土している。これらの土器は、出土状況等から考え、すべて本跡に伴うものと思われる。第51図9・10の鉄製品は覆土の中層から出土したもので、本跡には伴わない。

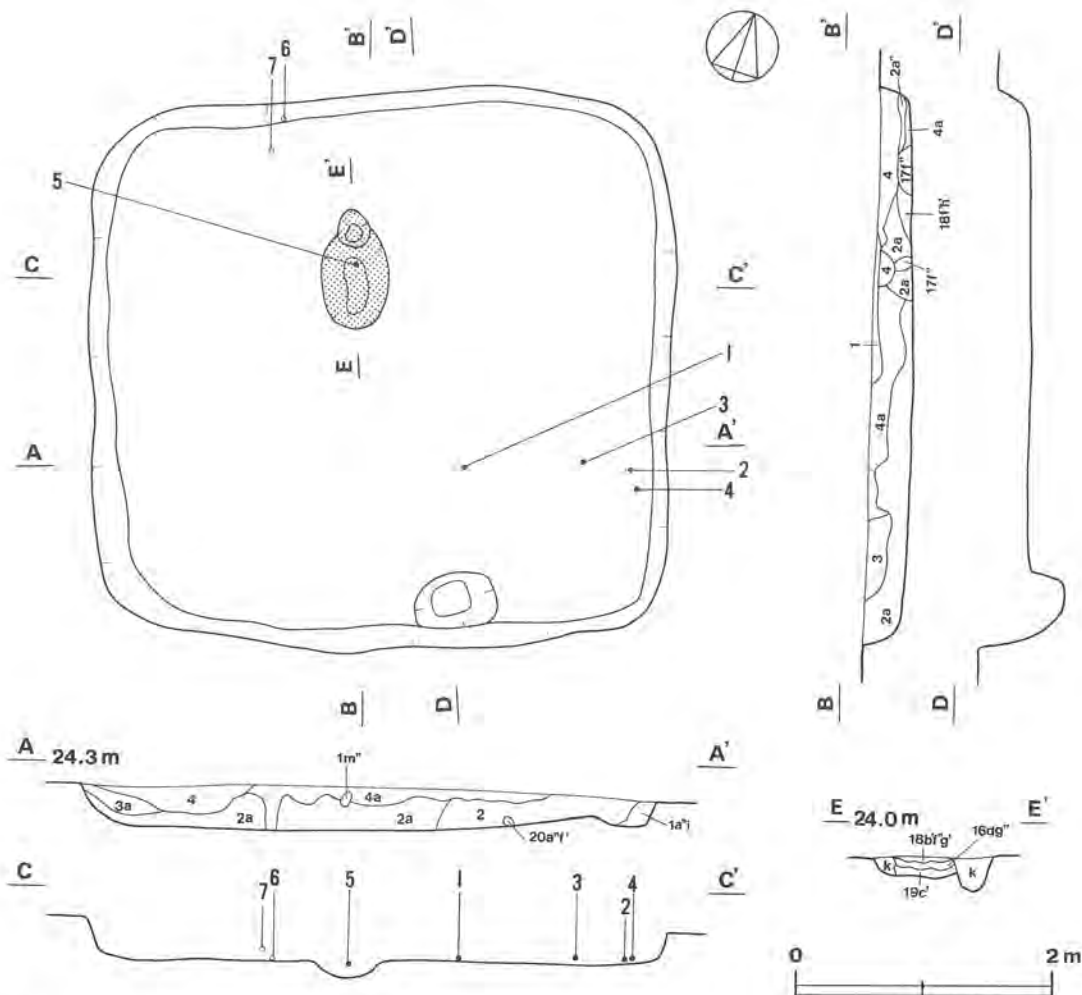
本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代中期の和泉期に比定される住居跡と思われる。

第39号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第51図 1	甕形土器 土師器	A [19.5] B 22.6 C 6.6	胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は内傾して立ち上がり、上位で強く外反する。	口縁部は横位のナデ整形。胴部は篋削り。	砂粒 褐色 普通	60% P109 PL73
2	甕形土器 土師器	A [18.2] B 26.9 C [8.0]	胴下半部は外傾して立ち上がり、中央部から内彎する。胴部最大径を中位に持つ。口縁部は複合口縁で、強く外反する。	口縁部上位は横ナデ整形。胴部は篋ナデ整形。	砂粒 褐色 普通	90% P110 PL73
3	埴形土器 土師器	B (7.9) C 4.6	胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部以上欠損。	器外面は丁寧に磨かれているが、剝落が著しい。	砂粒 褐色 普通	70% P113
4	鉢形土器 土師器	A [12.4] B 8.0 C [4.3]	胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反する。	胴部外面は篋削り、内面は篋ナデ整形。	砂粒・スコリア 橙色 普通	50% P112
5	塊形土器 土師器	A [13.2] B 7.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外傾する。	口縁部は横ナデ整形。他は不定方向のナデ整形。	砂粒・スコリア 橙色 普通	80% P111 PL78
6	高环形土器 土師器	A [19.2] B 15.0 D 10.2 E [16.6]	脚部は円筒形状で、裾部は緩やかに広がる。坏部は下位に稜を持ち、外傾して開く。	口縁部外面は横ナデ整形。脚部は篋削り。裾部は篋磨き。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	70% P114
7	高环形土器 土師器	B (8.8) E [15.0]	坏部欠損。脚部は「ハ」の字状に開き、裾部は外反する。中位に径6mmの孔が穿たれる。	外面は縦位の篋削り。内面は篋ナデ整形。	砂粒・スコリア にぶい橙色 良好	40% P115
8	手捏土器 (坏形) 土師器	A [8.7] B 3.6 C 5.7	平底。胴部は外傾して立ち上がる。	粗雑なナデ整形で内・外面に指圧痕を残す。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	50% P116 PL82

第40号住居跡 (第52図)

本跡は、調査区の南東部 M2c1区を中心に確認された住居跡で、北壁の中央部から南西コーナー部にかけては、南北に走る第6号溝によって掘り込まれている。本跡の西6mには古墳時代中期の第39号住居跡が、南6mには第36号住居跡が存在している。



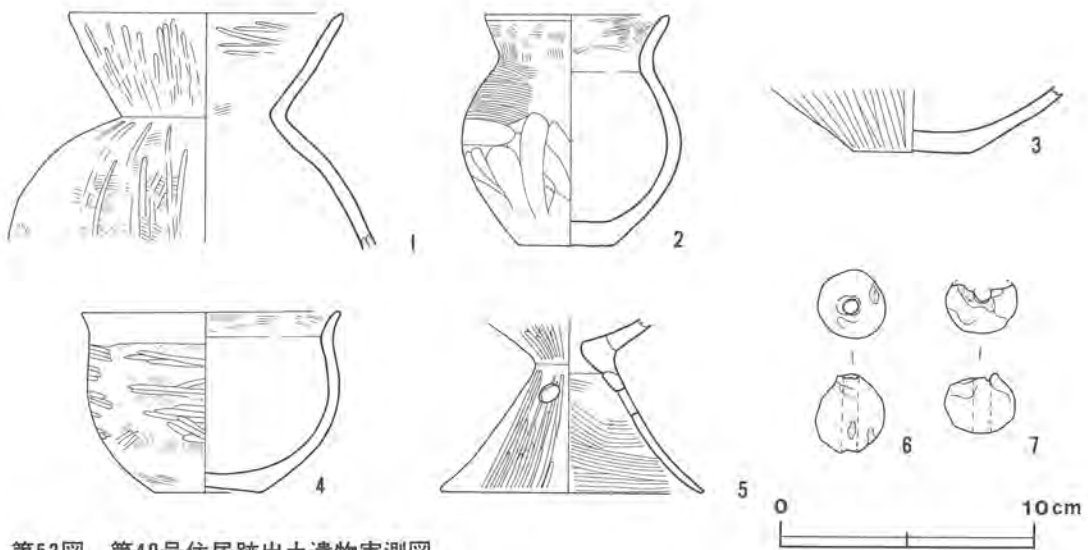
第52図 第40号住居跡実測図

平面形は、長軸4.53m、短軸4.47mの方形状を呈し、主軸方向はN-22°-Wを指している。床面積は16.6㎡である。壁は締まりの弱いロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は25~30cmで、溝によって掘り込まれた部分を除いて残存状況は良好である。床は平坦なロームで、全体的に締まっている。炉の南側から南壁際にかけては、極めて硬く踏み締まっていることから、本跡の入口部は南壁側に存在したと思われる。ピットは検出できなかった。貯蔵穴は南壁側に存在するが、やや東に寄って位置している。平面形は、長軸65cm、短軸45cmの長方形を呈する。深さは26cmで、貯蔵穴内の覆土は自然堆積である。炉は、床面を15cmほど掘り込んだ地床炉で、中央から80cmほど北西に寄って位置している。平面形は、長径80cm、短径50cmの楕円形状を呈するが、南北両端は攪乱を受けている。炉の長径方向は、本跡の主軸方向と同一である。炉内には多量の焼土が堆積するが、炉床はそれほど焼き締まっていない。

覆土は自然堆積で、上層に暗褐色土、下層には、焼土ブロックや炭化材を含む暗褐色土が堆積している。焼土ブロックや炭化材は、床面に達していないことから廃絶後に火を受けたものと考えられる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片88点、球状土錘2点が出土している。本跡に伴う遺物は南東コーナー部に多く、第53図2の小型壺形土器と4の塊形土器は完形のまま壁際に並び正位で出土した。3の壺形土器片や1の壺形土器片も、南東コーナー部の床面近くから出土している。その他、5の器台形土器が炉確認面に横位で、6・7の球状土錘が北壁際の床面と壁面から出土している。これらの遺物は、出土状況からすべて本跡に伴うものと考えられる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から、古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第53図 第40号住居跡出土遺物実測図

第40号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第53図 1	壺形土器 土師器	A 10.8 B (9.3)	胴中央部以下欠損。胴部は球形状を呈し、口縁部は「く」の字状に外傾して開く。	外面と口縁部内面はハケ目整形後、艶磨き。赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	50% P117
2	小型壺形土器 土師器	A 7.2 B 9.2 C 3.7	胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外傾して開く。	口縁部内・外面と胴上半部外面はハケ目整形。下半部は指によるナデ整形。	砂粒 にひ褐色 普通	100% P119 PL82
3	壺形土器 土師器	B (2.4) C 4.7	平底。胴部は外傾して開く。	外面は縦位の艶磨き後、赤彩。	砂粒・バミス 赤褐色 普通	10% P120

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第53図 4	埴形土器 土師器	A 10.2	上げ底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外反し、体部との境に接合痕を残す。	口縁部は横ナデ整形、体部はハケ目整形の後、横位の篋磨き。	砂粒 にふい褐色 普通	95% P121 PL78
		B 7.2				
		C 4.1				
5	器台形土器 土師器	B (6.9)	脚部は「ハ」の字状に開き、上位に3孔が穿たれる。脚部下位はやや広がる。器受部は外傾して開き、中央孔が穿たれる。	器受部内・外面と脚部外面は篋磨き後、赤彩。脚部内面はハケ目整形。	砂粒少量 赤褐色 不良	70% P122 PL81
		D 5.5				
		E 10.4				

第41号住居跡 (第54図)

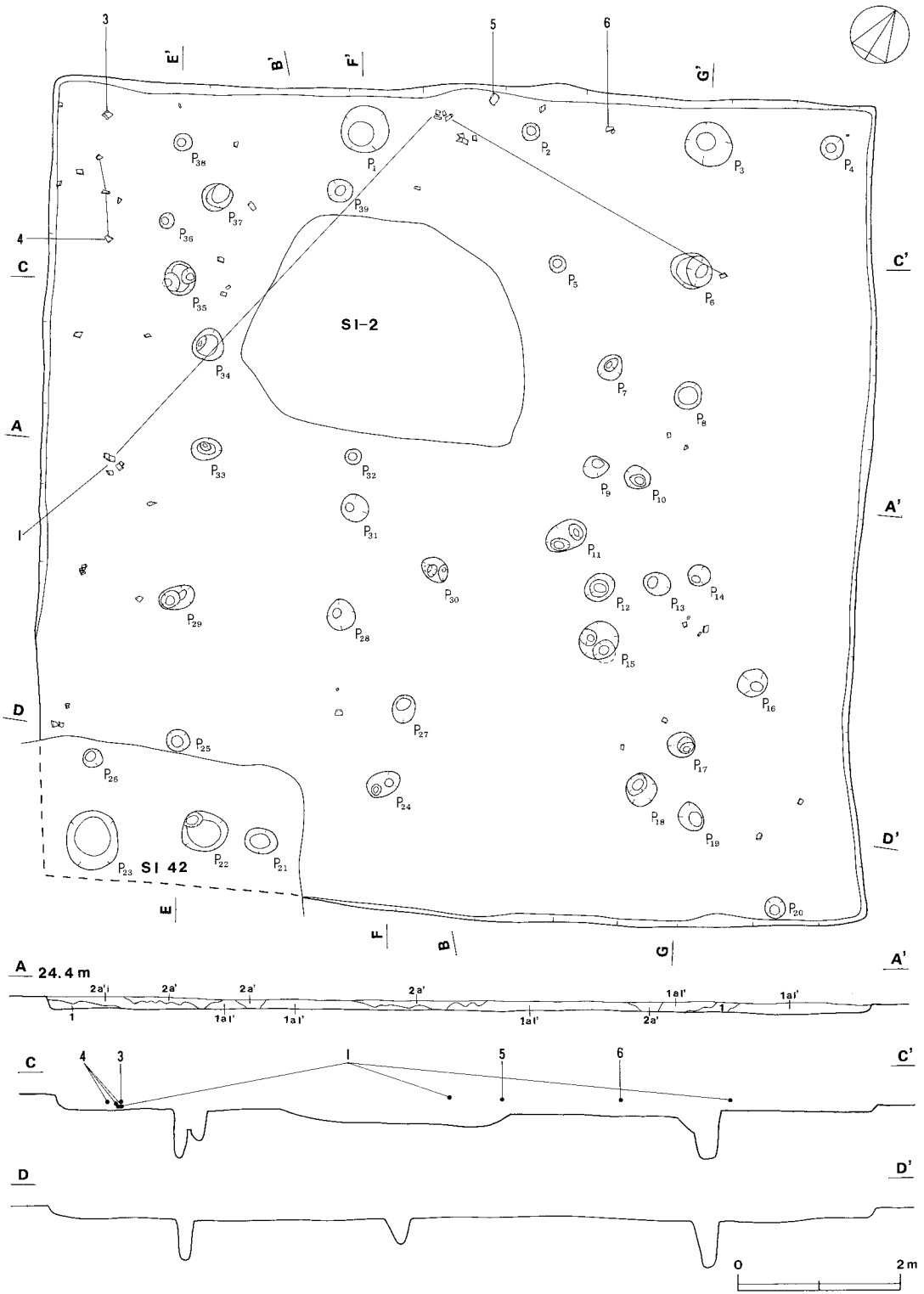
本跡は、調査区の南東部M4f4区を中心に確認された一辺10mを越す大形の住居跡で、北西コーナー部付近は縄文時代中期の第286号土坑を、南西コーナー部と床面の北部は、それぞれ古墳時代前期の第42号住居跡を掘り込んでいる。本跡の北西15mには第39号住居跡が、さらに5m先には本跡と同時期の大型の住居である第38号住居跡が存在している。

平面形は、長軸10.4m、短軸10.1mの方形状を呈し、長軸方向はN-28°Wを指している。床面積は100.4m²である。壁は締まりの弱いロームで、65~70度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は12~20cmと浅く、所々に耕作による攪乱を受けている。床はロームで、起伏は少なく全体的に軟弱な床面である。ピットの確認は困難であったため、可能性を持つ33か所を掘り込んだが、ピットの配列や規模からP₁・P₃~P₆・P₉・P₁₁・P₁₅・P₃₇が本跡に伴う柱穴と思われる。その他のピットについては不明である。P₁・P₃は、上端直径が55cm、深さが55cmとほぼ同様の規模で、北壁際に3.6mの間隔で並んでいる。P₄・P₆・P₃₇は北東、南東、北西のコーナー部に位置し上端直径22~28cm、深さ35cmである。南西コーナー部にも対応するピットの存在が予想されたが、第42号住居跡の覆土中に位置するため検出できなかった。P₅・P₉・P₁₁・P₁₅は上端直径35~45cm、深さ50~68cmの規模を有し方形に配列されている。炉や貯蔵穴は検出できなかった。

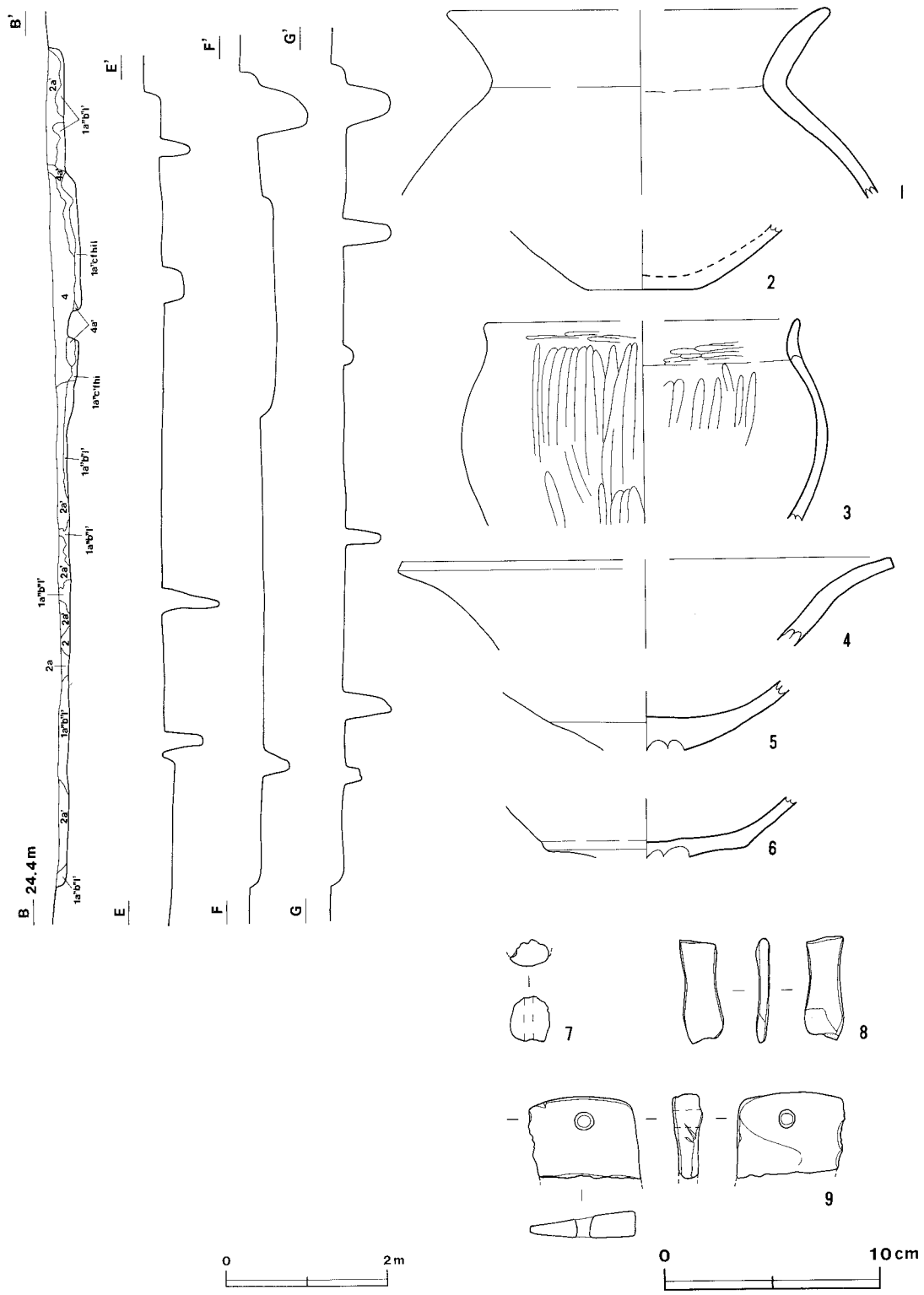
覆土は、基本的には一層で、締まりの弱い褐色土が堆積している。農耕による攪乱を受けているが、自然堆積層と思われる。

遺物は、床面や覆土から土師器及びその破片301点、球状土錘片1点、用途不明の土製品1点、砥石1点と、後世に流れ込んだと思われる須恵器片7点が出土している。床面積が広い割には復元できる遺物が少ない上に、攪乱の影響が強く、本跡に伴う遺物か否かの判別は困難であった。本跡の西コーナー部から北西壁際にかけて、第55図4~6など4点の高坏形土器や1・2の甕形土器が破片で出土しているが、これらの土器の出土層位も上層から下層までと様々であった。

遺物の出土状況や遺構の形態にやや不明瞭な点を残すものの、本跡は古墳時代中期の和泉期に比定される遺構と思われる。



第54图 第41号住居跡実測图



第55图 第41号住居跡出土遺物実測図

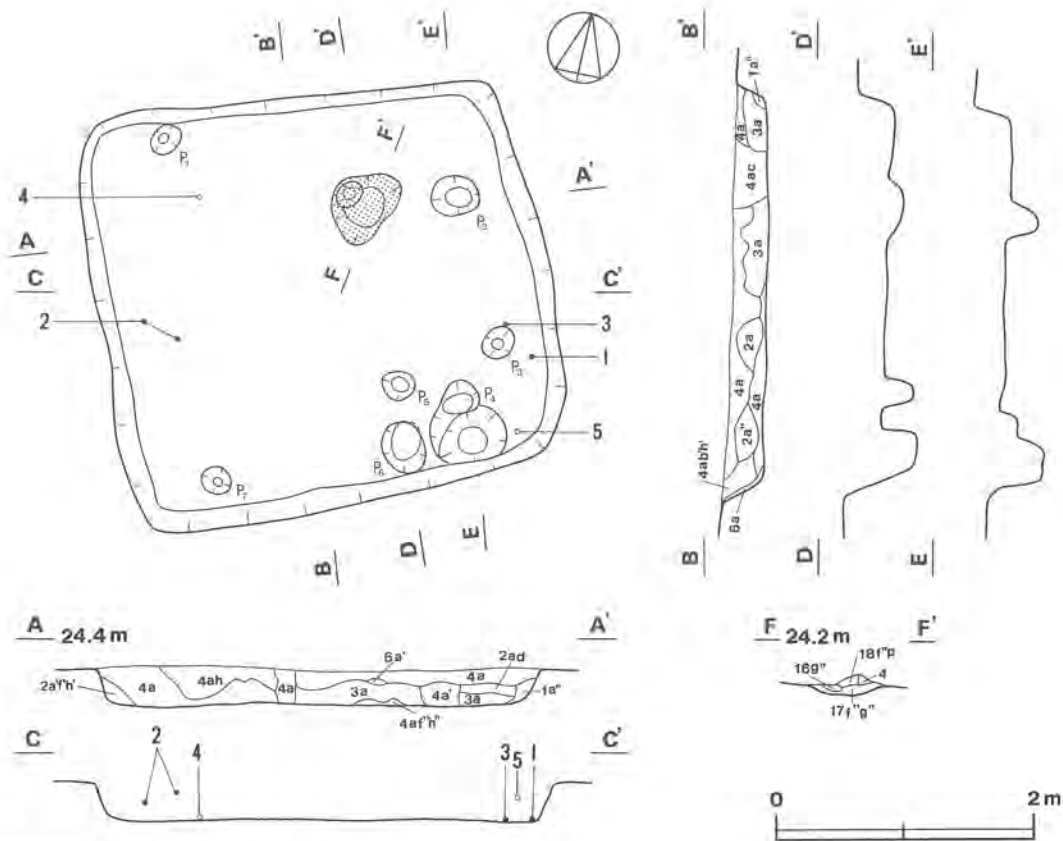
第41号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第55図 1	甕形土器 土師器	A (17.8) B (9.0)	胴中位以下欠損。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ整形。胴部は縦位の籠ナデ整形。	砂粒 におい橙色 普通	15% P123
2	甕形土器 土師器	B (2.7) C 5.3	底部片。平底。胴部は内彎して立ち上がる。	外面はナデ整形。内面は剥落が著しい。	砂粒 におい橙色 普通	20% P124
3	鉢形土器 土師器	A (14.8) B (9.5)	胴下半部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を上半部にもつ。口縁部は外反する。	内・外面とも篋磨き後、赤彩。	砂粒 明赤褐色 普通	30% P125
4	高環形土器 土師器	A (23.2) B (4.2)	坏部片。坏部下位に欠損する。口縁部は外反して開く。	内・外面とも横位のナデ整形。	砂粒 橙色 良好	20% P128
5	高環形土器 土師器	B (2.9)	坏部片。坏部下位に鈍い稜を持つ。上位は欠損する。	内・外面とも篋磨き。	砂粒・スコリア におい橙色 良好	20% P127
6	高環形土器 土師器	B (2.8)	坏部片。坏部下位に段を持ち、内彎しながら開くが、上位は欠損する。	内・外面とも篋磨き。底部に糊殻の圧痕が残る。	砂粒 におい橙色 良好	20% P126

第42号住居跡 (第56図)

本跡は、調査区の南東部 M4h4区を中心に確認された住居跡で、北半分は古墳時代中期の第41号住居跡によって確認面から15cmの深さで掘り込まれている。本跡の北4mには第54号住居跡が、北西3mには第36号住居跡が存在している。

平面形は、長軸3.55m、短軸3.22mの方形状を呈し、長軸方向はN-34°-Wを指している。床面積は9.6㎡である。壁は、良く締まったロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は、35cmであるが、北西壁側は、第41号住居跡に掘り込まれているためやや浅くなっている。床は平坦で、全体的に硬く締まっている。特に炉の西側の床面と、炉から東コーナー部にかけての床面の踏み締まりは強い。ピットは7か所を掘り込んだ。支柱穴はP₁~P₃・P₇の4か所と思われる。支柱穴の上端直径は23~30cm、深さは22~41cmである。P₅とP₆も本跡に伴う柱穴と考えられる。P₄は覆土の状況から考えて本跡に伴う可能性は少ない。貯蔵穴は、東コーナーに近い南東壁際に位置している。平面形は、直径60cmの円形状を呈し、深さは33cmである。貯蔵穴内の覆土は自然堆積である。炉は、床面を8cmほど掘り下げた地床炉で、中央から60cmほど北に寄って位置している。平面形は、直径50cmの円形状を呈し、北側は攪乱されている。炉内には焼土が多量に堆積



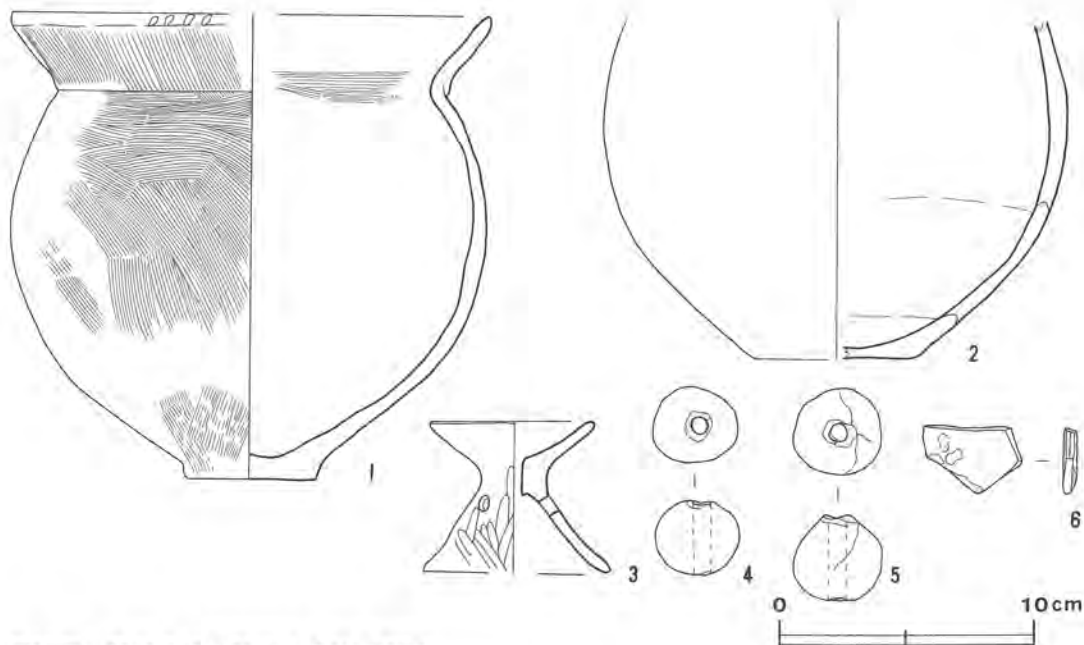
第56図 第42号住居跡実測図

し、炉床もレンガ状に焼き締まっている。入口部は、床面の状況から南東壁側が想定される。

覆土は自然堆積で、上層に黒褐色土、下層に極暗褐色土が堆積している。なお、床面に焼土、炭化材が散乱していることから、本跡は居住期間中に焼失したものと思われる。

遺物は、覆土中から土師器及びその破片190点、球状土錘2点、用途不明の土製品1点、鉄滓1点と、後世に流れ込んだと思われる須恵器片3点が出土している。本跡に伴う遺物は第57図1の甕形土器と3の器台形土器である。2点とも東コーナー部近くの床面から、甕形土器は正位で、器台形土器は横位で出土しているが、本来は壁際に立てられていたものと思われる。2の甕形土器底部、4・5の球状土錘、6の土製品、鉄滓などは覆土上・中層から出土したもので、本跡との関係は不明である。なお、覆土上層には和泉期の土器片も多く混入している。

本跡は、遺物や遺構の形態等から、古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第57図 第42号住居跡出土遺物実測図

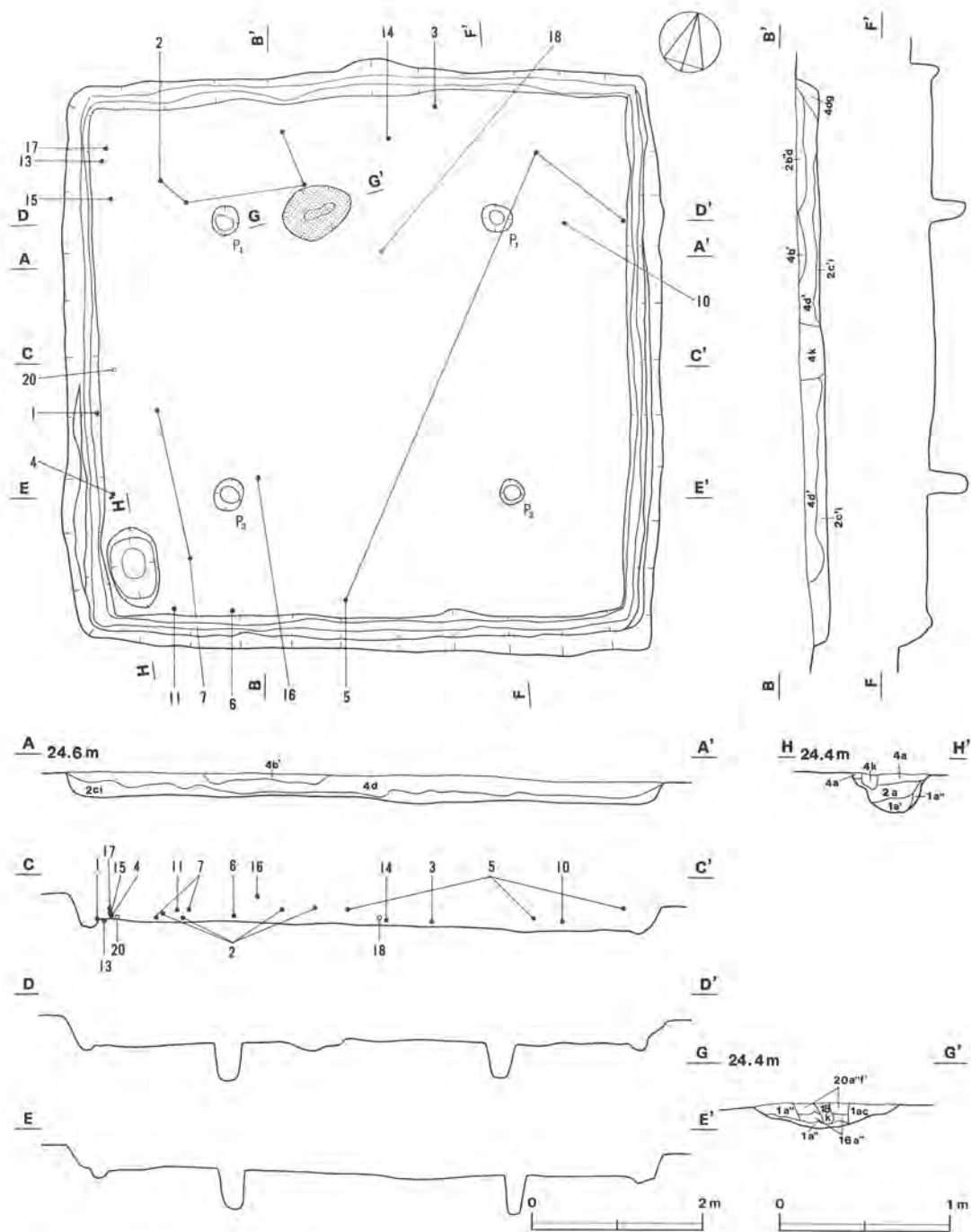
第42号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第57図 1	甕形土器 土師器	A [18.7] B 18.5 C 5.0	胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。口縁部は外反して開き、頸部に接合痕を残す。	口唇部にキザミが施され、口縁部外面は縦位のハケ目整形。胴部外面は斜位のハケ目整形。内面はナデ整形。	スコリア 橙色 普通	60% P129 PL70
2	甕形土器 土師器	B (13.5) C [6.3]	平底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。頸部以上欠損する。	内・外面とも横ナデ整形。	細砂粒・スコリア 橙色 普通	30% P130
3	器台形土器 土師器	A 6.4 B 6.0 D 4.2 E 7.4	脚部は「ハ」の字状に開き、上位に3孔が穿たれる。器受部は外傾して開き、接合部に中央孔を持つ。	器受部内・外面と、脚部外面は寛磨き後、赤彩。脚部内面は横位のナデ整形。	細砂粒 明赤褐色 良好	95% P131 PL81

第43号住居跡 (第58図)

本跡は、調査区の南部 M3is区を中心に確認された住居跡で、北壁は、古墳時代前期の第52号住居跡を掘り込んでいる。本跡の北3mには第50号住居跡が、南東16mには第62号住居跡が存在している。なお、大形の住居である第41号住居跡が本跡の東16mに、同じく第38号住居跡が北西14mに位置している。

平面形は、長軸7.20m、短軸6.80mの方形状を呈し、長軸方向はN-25°-Wを指している。床



第58図 第43号住居跡実測図

面積は37.8m²と比較的規模が大きい。壁はロームで締まりが弱く、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は25cmほどで、壁際には幅20cm、深さ5~10cmの壁溝が全周している。床は緩やかに起伏し、北西コーナー付近は僅かに低まっている。床面の締まりは全体に弱いが、P₃の西側から貯

蔵穴の東側にかけては硬く踏み締まっており、この場所の使用頻度が高かったことを表している。ピットは4か所で、規模は上端直径が30～35cm、深さが41～48cmである。配置や規模から、4本とも支柱穴であると思われる。貯蔵穴は、南西コーナー部に位置する。平面形は、長径1m、短径55cmの南北に長い楕円形状を呈し、深さは45cmである。貯蔵穴内の覆土は自然堆積である。貯蔵穴の北と東の床面には、幅20cm、高さ3～4cmの周堤が巡っている。炉は、床面を15cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1.5mほど北に寄り、P₁とP₂を結ぶ線上に位置している。平面形は、長径85cm、短径50cmの東西に長い楕円形状である。炉内の堆積土に含まれる焼土は少量で、炉床もほとんど焼き締まっておらず、それほど長期にわたって使用されたとは考えられない。入口部は、炉や貯蔵穴の配置から南壁際が想定される。

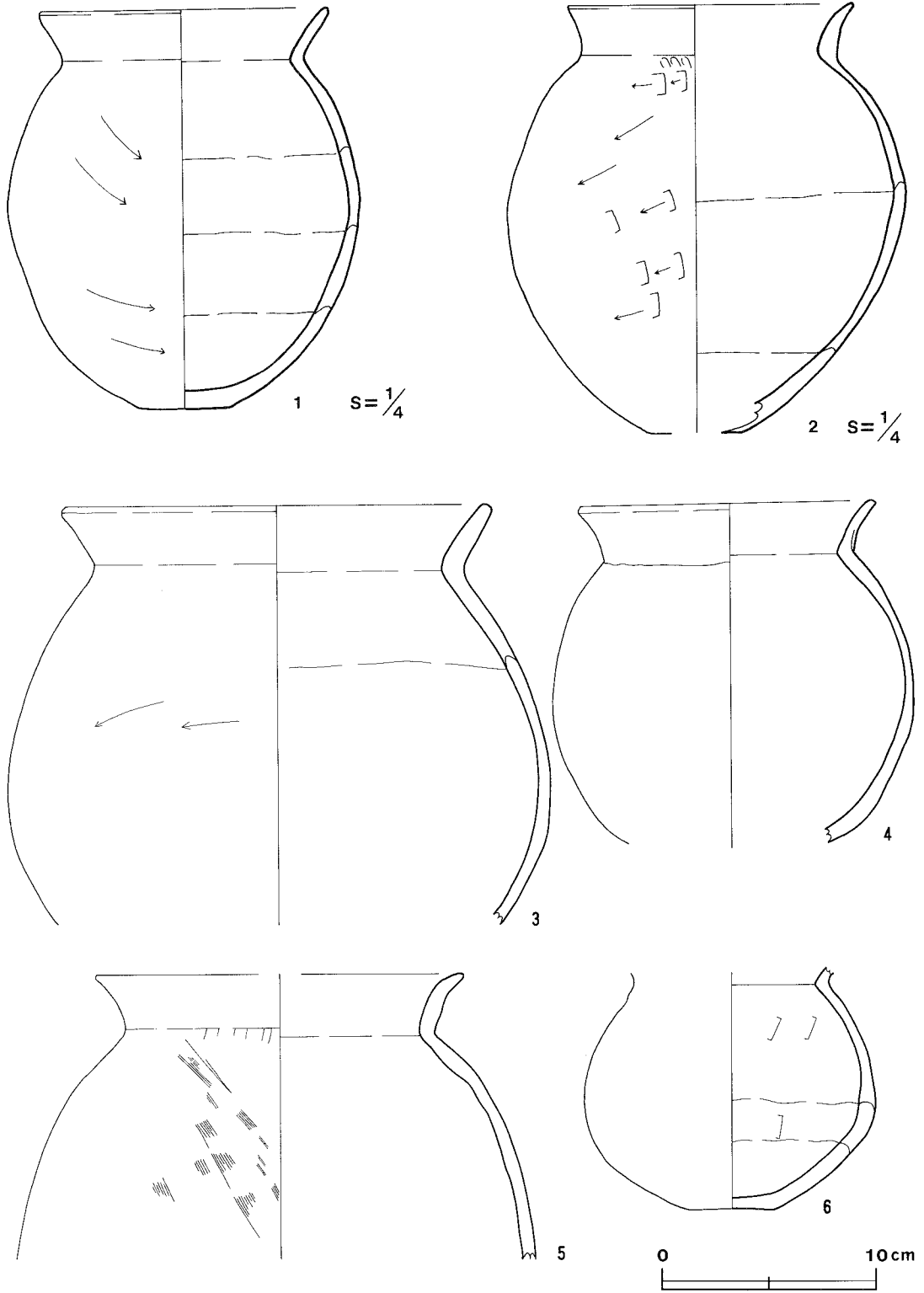
本跡は、比較的大形の住居跡であるため東西と南北に2本ずつの土層観察用のベルトを設け、全体を9区に分けて掘り込んだ。中央部に位置する5区は、床面近くにまで達する大きな攪乱を受けているが、その他の区には大きな攪乱はなく、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積している。本跡の覆土は、自然堆積と思われる。

遺物は、土師器及びその破片439点、球状土錘1点、用途不明の土製品1点、砥石1点が出土している。本跡に伴う遺物は、貯蔵穴の周辺と北壁側に多く散在している。貯蔵穴の東側の床面近くから第60図11の甕形土器と第59図6の壺形土器が完形のまま横位で、貯蔵穴の北側の床面から第59図1・4の甕形土器と第60図7の壺形土器が横位で出土している。北壁側の床面近くから、第59図2・3の甕形土器が潰れた状態で、第60図10の埴形土器がほぼ完形のまま横位で出土しているほか、第60図13・15の高環形土器の破片が6個体分ほど散乱して出土した。

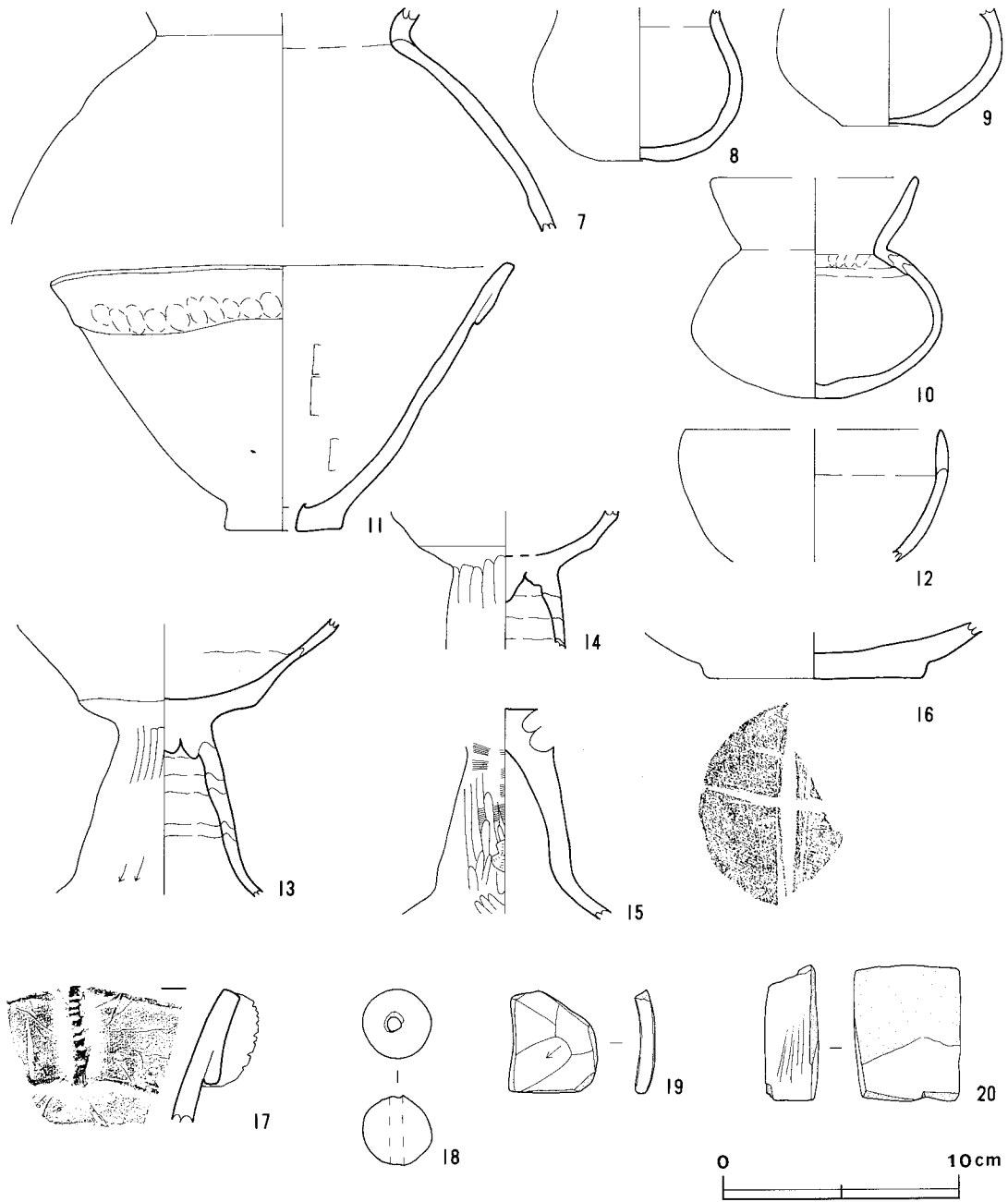
本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代中期の和泉期に比定される住居跡と思われる。

第43号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第59図 1	甕形土器 土師器	A 17.9	胴部は長胴化し、底部から内彎して立ち上がる。胴部最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部外面は横ナデ整形。胴部内・外面は篋ナデ整形。	砂粒 明赤褐色 普通	100% P137 PL73
		B 25.1				
		C 5.6				
2	甕形土器 土師器	A 17.6	胴部は長胴化し、底部から内彎して立ち上がる。胴部最大径を中位に持つ。口縁部は垂直に立ち上がり、上位で外反する。	口縁部は横ナデ整形。胴部外面は篋削り。	砂粒 明赤褐色 普通	80% P138 PL73
		B 26.7				
		C (5.4)				
3	甕形土器 土師器	A 20.2	胴部は球形状を呈するが、下半部以下を欠損する。口縁部は「く」の字状に外傾して開く。	内・外面ともナデ整形。	細砂粒 にぶい橙褐色 普通	60% P139 PL73
		B (19.8)				



第59图 第43号住居跡出土遺物実測図(1)



第60図 第43号住居跡出土遺物実測図(2)

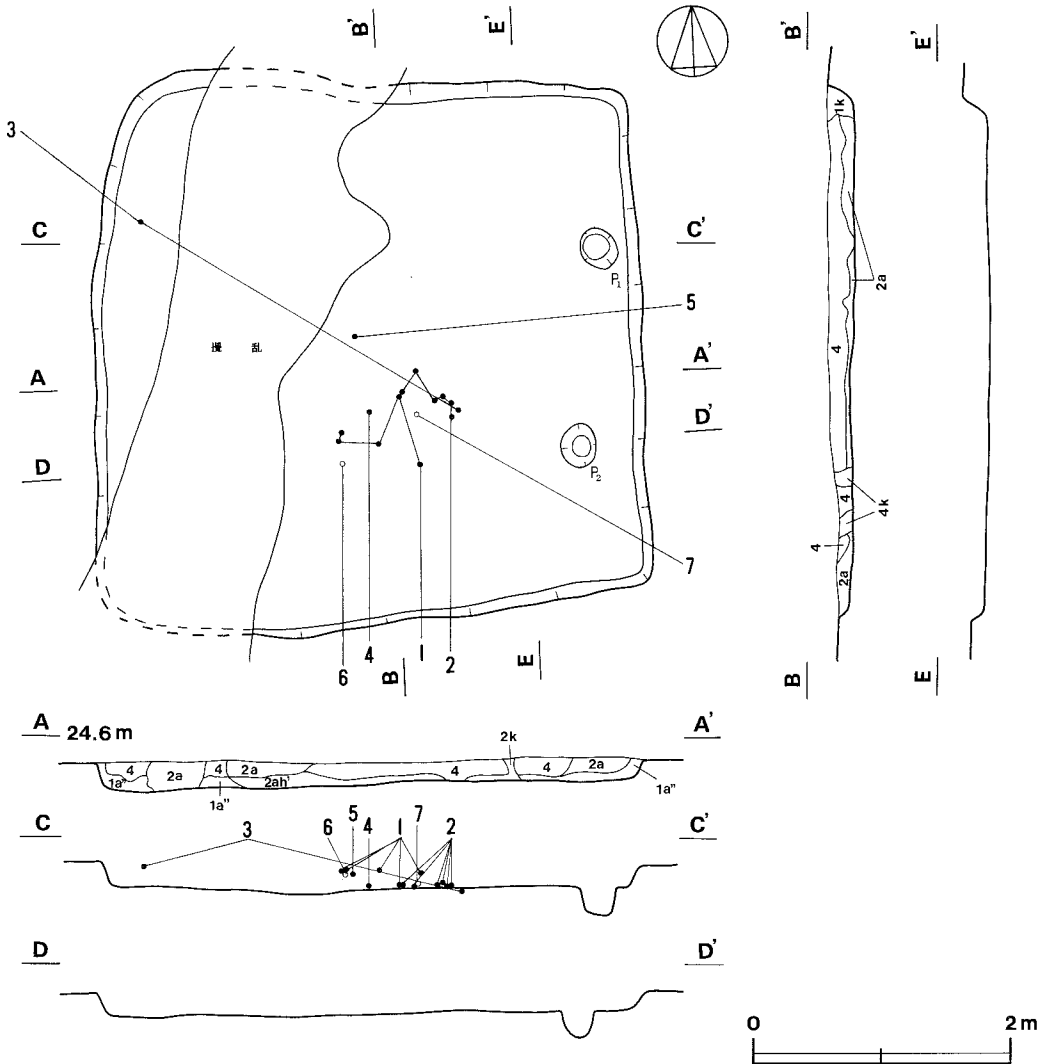
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第59図 4	甕形土器 土師器	A 13.8 B (16.1)	底部欠損。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面は横ナデ整形。頸部外面に接合痕を残す。胴部は荒いナデ整形。	細砂粒 褐灰色 普通	60% P140

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第59図 5	甕形土器	A (17.2)	胴中央部以下欠損。胴部は球形状を呈し、口縁部は「く」の字状に開くが、上位で外反する。	口縁部は横ナデ整形。胴部外面は筥ナデ整形後、まばらに筥磨き。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	30% P134
	土師器	B (13.5)				
6	壺形土器	B (11.6)	胴部は球形状を呈し、最大径を中位よりやや下位に持つ。口縁部欠損する。	外面は剝落が著しく、整形技法は不明。内面は横位の筥ナデ整形。	砂粒・スコリア にぶい橙色 不良	80% P132 PL77
	土師器	C 4.0				
第60図 7	壺形土器	B (9.3)	胴下半部と口縁部を欠損。胴部は内彎する。	内・外面ともナデ整形。器面の剝落が著しい。	砂粒・スコリア にぶい褐色 不良	30% P133
8	小型壺形土器	B (6.5)	上げ底。胴部はナスビ形で、下半部は強く彎曲する。胴部最大径を中位に持つ。	内・外面ともナデ整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	40% P136
	土師器	C 3.2				
9	小型壺形土器	B (5.1)	上げ底。胴部は中位が強く張り出した球形状を呈する。胴上半部以上欠損する。	外面は筥磨き。内面は剝落が著しい。	砂粒 にぶい橙色 良好	30% P135
	土師器	C 4.0				
10	埴形土器	A (8.9)	丸底。胴部は中位が強く張り球形状を呈する。口縁部は内彎気味に開く。	口縁部内・外面は横ナデ整形。胴部外面は剝落する。	細砂粒 にぶい橙色 普通	90% P143 PL77
	土師器	B 9.6				
11	甗形土器	A 19.6	平底。底部は引き締まり、底面に径10mmの孔を持つ。胴部は外傾して開き、口縁部は折り返され複合口縁となる。	口縁部上位は横ナデ整形。下位は連続して指圧される。胴部外面は縦位のナデ整形、内面は横位の筥ナデ整形。	細砂粒・スコリア 橙色 普通	100% P142 PL76
	土師器	B 11.7				
	土師器	C 5.0				
12	壺形土器	A (10.9)	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	内・外面とも粗雑なナデ整形。	細砂粒 にぶい黄褐色 普通	30% P147
	土師器	B (5.7)				
13	高坏形土器	B (12.0)	脚部は円筒形状を呈し、裾部は緩やかに広がるが、大部分を欠損する。坏部は下位に稜を持つが、上位を欠損する。	外面は筥削り。坏部内面は筥磨き。脚部内面には輪積痕を残す。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	60% P144
	土師器	D (7.5)				
14	高坏形土器	B (5.9)	脚部は円筒形状を呈するが、下位を欠損する。坏部は下位に稜を持ち、外傾して開く。	外面は筥削りが施され、脚部内面には輪積痕を残す。	砂粒 にぶい橙色 普通	40% P146
	土師器	D (3.5)				
15	高坏形土器	B 9.1	脚部片。脚部は円筒形状を呈し、下位に径12mmの円形の窪みを持つ。裾部は緩やかに広がるが、先端部を欠損する。	外面は筥削り後、横ナデ整形。内面はナデ整形により輪積痕を消す。	砂粒 橙色 普通	40% P145
	土師器					
16	壺形土器	B (2.4)	底部片。底部は平底で、突出する。	内・外面ナデ整形。底部には砥石として利用された溝が、十文字に残る。	砂粒 橙色 普通	10% P148
	土師器	C (9.2)				
17	壺形土器	B (6.0)	口縁部片。複合口縁で、口縁部には耳状の突起が縦位に貼り付けられる。	ナデ整形。突起の縁にはキサミを施す。	砂粒 淡赤褐色 普通	5% P141

第44号住居跡 (第61図)

本跡は、調査区の南部 M3j7区を中心に確認された住居跡で、西部は南北に走る農耕時の溝によって攪乱を受けている。本跡の東方4 mには第55号住居跡が、北8 mには第52号住居跡が存在している。

平面形は、長軸4.32m、短軸4.22mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-87°-Wを指している。床面積は16.7m²である。壁はロームで、55度の角度で外傾しながら立ち上がっている。壁高は15cmほどで、壁の南東コーナー部と西辺の一部が攪乱を受けているほか、北辺と南辺は農耕の溝によって壊されている。床面は平坦であるが、農耕による攪乱を所々に受けており、中央部の一



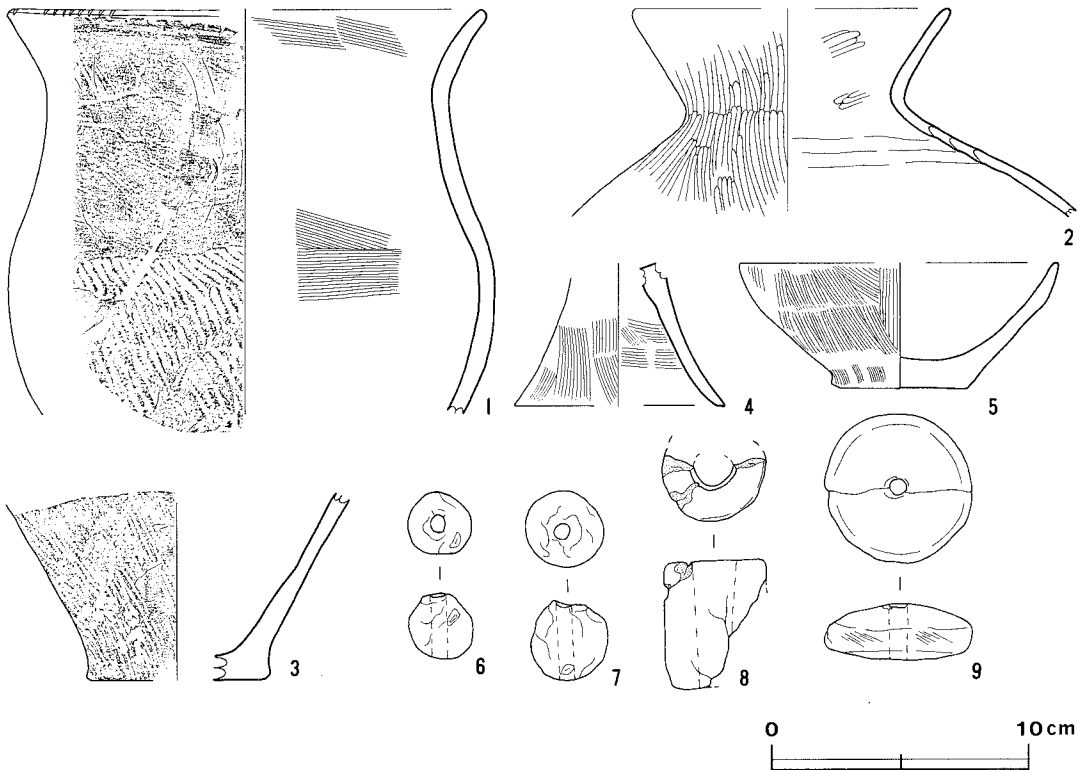
第61図 第44号住居跡実測図

部を除いては踏み締まりなどは確認できない。ピットは東側に2か所確認したが、西側のピットは、床面が農耕時の溝で攪乱されているため検出できなかった。2本のピットは、上端の直径が25~30cm、深さが20cmであり、2本とも支柱穴と思われる。炉は検出できなかったが、攪乱部に存在したものと思われる。入口部は、住居跡の長軸方向から東壁側が想定される。

覆土は、上層の黒褐色土、下層の暗褐色土の二層に区分され、全体的に締まりは弱い。所々に攪乱を受けているが、基本的には自然堆積と思われる。

遺物は、床面や覆土中から弥生式土器片6点、土師器及びその破片42点、球状土錘2点、管状土錘1点、紡錘車1点が出土している。第62図4の台付甕形土器の脚部、2の壺形土器は中央部の床面から、6・7の球状土錘は覆土下層から出土しており、本跡に伴う遺物と考えられる。5の塊形土器は覆土の中層から出土したが、器形の特徴等から本跡に伴う可能性が高い。1・3の弥生式土器は覆土の上層に出土していることから、本跡に伴う可能性は少ないと思われる。8の管状土錘や9の紡錘車は、中央部の覆土中から出土したもので本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第62図 第44号住居跡出土遺物実測図

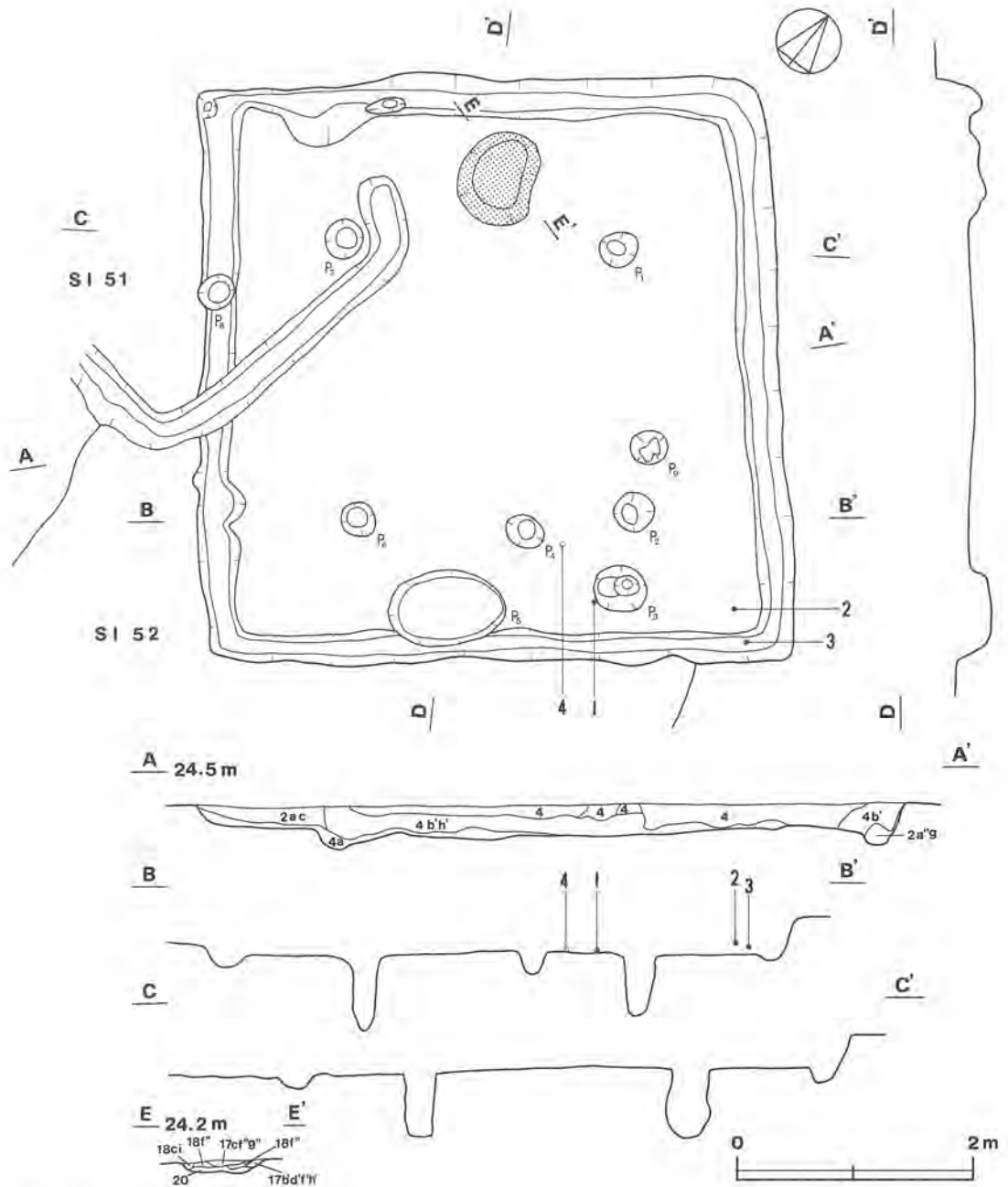
第44号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第62図 1	壺形土器 弥生式土器	A (19.0)	胴中央部以下欠損・胴上半部は強く内彎し、頸部から口縁部にかけては緩やかに外反する。	口唇部にキザミが施され、頸部に無文帯を持つ。胴上半部以下に縄文(単節LR)が施文される。	スコリア 橙色 普通	30% P272 PL70
		B (16.0)				
2	壺形土器 土師器	A (12.5)	胴下半部欠損。胴上半部は内彎し、口縁部は「く」の字状に開く。	外面は丁寧な縦位の笥磨き。内面は横ナデ整形で輪積痕が残る。	スコリア にぶい橙色 普通	30% P271
		B (8.3)				
3	壺形土器 弥生式土器	B (7.2)	底部は外反気味に突出する。胴部は外傾して立ち上がり、中央部以上を欠損する。	胴部外面には燃糸文(RL)がまばらに施文される。底部木葉痕。	細砂粒 灰褐色 良好	15% P274
		C (7.0)				
4	台付甕形土器 土師器	B (5.7)	脚台部片。脚台部は「ハ」の字状に開く。	外面は縦位の、内面は横位のハケ目整形。	細砂粒 赤褐色 普通	20% P276
		E (8.4)				
5	塊形土器 土師器	A (12.4)	底部引き締まる。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに内彎する。	外面はハケ目整形。内面はナデ整形。	雲母 明赤褐色 普通	40% P273
		B 5.0				
		C 5.0				

第50号住居跡 (第63図)

本跡は、調査区の南部M3f8区を中心に確認された住居跡で、南側は古墳時代前期の第52号住居跡を掘り込み、西側は9世紀代の第51号住居跡によって床面近くまで掘り込まれている。本跡の南2mには第43号住居跡が、東17mには大形の住居である第41号住居跡が存在している。

平面形は、一辺5mほどの正方形で、主軸方向はN-38°-Wを指している。床面積は、23.1㎡である。壁は締まりのあるロームで、60~65度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は27~30cmである。北西壁の西部から南西壁の中ほどにかけては、第51号住居跡によって切られ、南西壁の一部は第51号住居跡のカマドによって床面まで掘り込まれている。壁直下には、幅20cm、深さ10cmほどの壁溝が全周し、北側の壁溝は、第51号住居跡の貼り床の下から検出されている。床はロームで、全体的に締まりを有し平坦であるが、特に強く踏み締まっている所は無い。ピットは9か所掘り込んだが、配置や規模からP₁~P₇が本跡に伴う柱穴で、P₈とP₉は第52号住居跡に伴うものと考えられる。P₁・P₂・P₆・P₇は、上端直径30~35cm、深さ51~62cmと、ほぼ同様の規模で、方形に配列されていることから主柱穴にあたると思われる。P₃とP₄は、南壁近くに位置し、25cm前後の浅い掘り込みであることから内部施設に関わる柱穴と思われる。P₅は、南壁の中央よりやや西寄りに位置し、上端の長径が100cm、短径が50cmの楕円形を呈するもので、形状等から貯蔵穴と判断した。炉は、床面を10~14cmほど掘り込んだ地床炉で、中央から主軸線にそって1.7mほど北に寄り、全体として北西壁に近接した位置にある。平面形は、長径80cm、短径50cmの楕円



第63図 第50号住居跡実測図

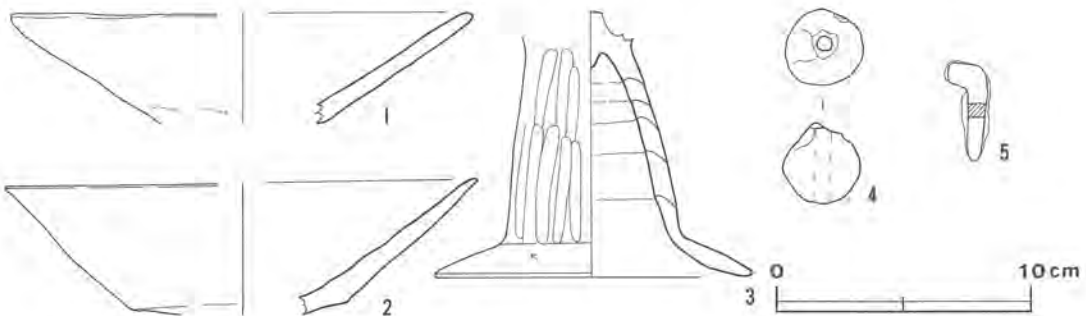
形状を呈し、長径方向は、本跡の主軸方向とほぼ一致する。炉内の覆土に焼土は少なく、炉床もあまり焼き締まっていないことから使用期間は短かったものと思われる。入口部は、ピットや貯蔵穴、炉の位置から考えて、北東あるいは南西壁側にあったものと思われる。

覆土は自然堆積で、上・下層とも黒褐色土が堆積している。なお、最下層には焼土ブロックや

炭化材を多量に含む黒褐色土が堆積している。焼土は床面にまで達していることから、居住期間中あるいは廃絶されて間もなく焼失したものと思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片484点、球状土錘1点、器種不明の鉄製品1点と、後世に流れ込んだと思われる須恵器片6点が出土している。床面からは第64図1の高坏形土器と4の球状土錘のほか土師器片4点が出土しており、本跡に伴う遺物と判断される。2・3の高坏形土器は、床面に広がる焼土層の上位から出土したもので、本跡に伴うものが焼失時に落ち込んだものか、焼失して間もなく投棄されたものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代中期の和泉期に比定される住居跡と思われる。



第64図 第50号住居跡出土遺物実測図

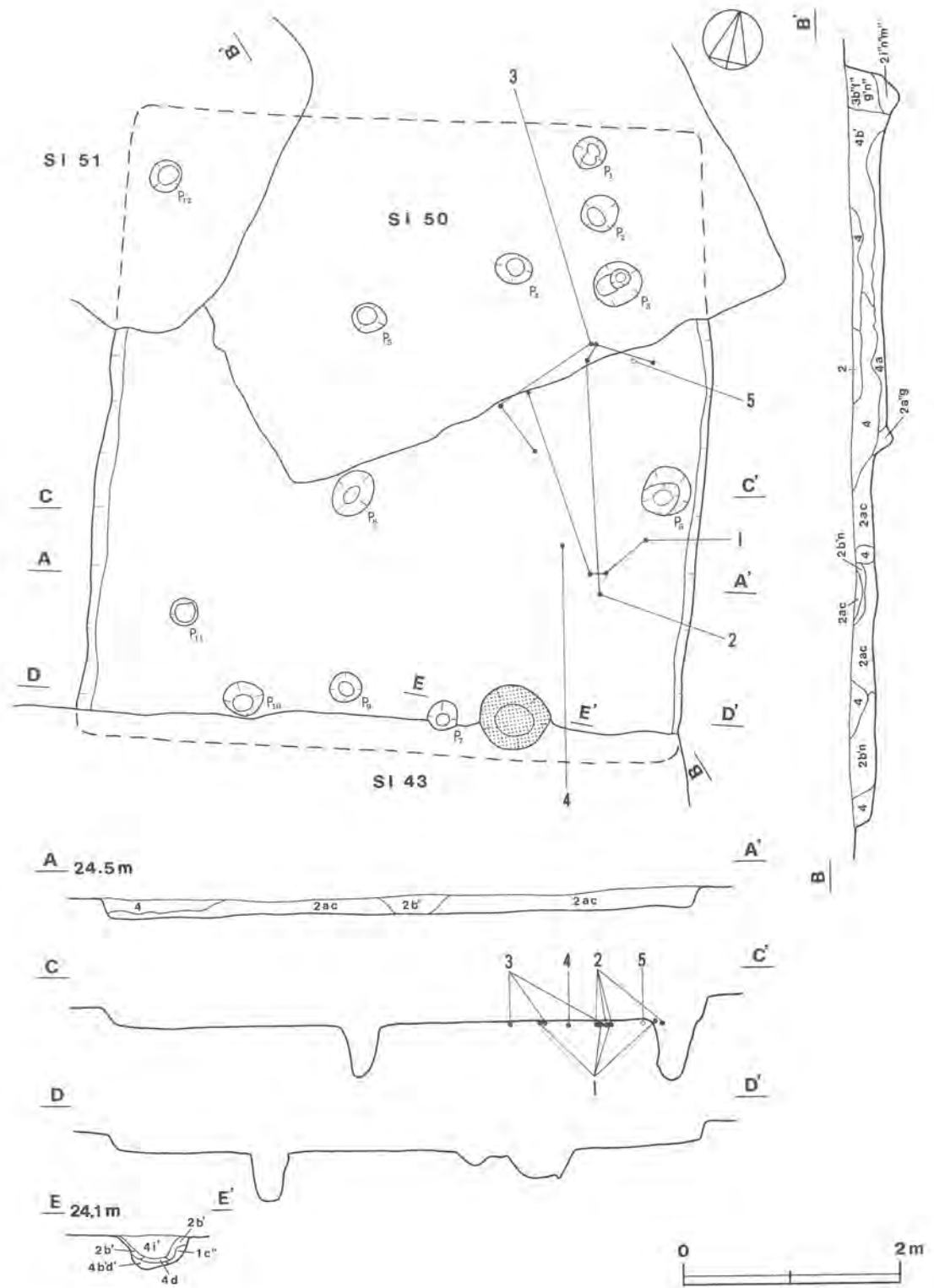
第50号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第64図 1	高坏形土器 土師器	A [18.2] B (4.4)	坏部片。坏部下位に稜を持ち、 外傾して開く。	内・外面とも丁寧な篋ナデ整形。	細砂粒 赤褐色 普通	30% P149
2	高坏形土器 土師器	A [18.7] B (5.3)	坏部片。坏部下位に稜を持ち、 外傾して開く。	内・外面とも篋ナデ整形。	細砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	40% P150
3	高坏形土器 土師器	B (10.5) C 12.5	脚部片。脚部は円筒状を呈し、 裾部は大きく開く。	外面は篋削り。内面には輪積痕 を残す。	細砂粒・スコリア 黒色 良好	50% P151 PL80

第52号住居跡 (第65図)

本跡は、調査区の南部M3g8区を中心に確認された住居跡で、北部は、古墳時代中期の第50号住居跡と、9世紀代の第51号住居跡によって、南部は古墳時代中期の第43号住居跡によって掘り込まれている。本跡の東8mには第36号住居跡が、南東12mには第73号住居跡が存在している。

平面形は明らかでないが、残存する壁や柱穴等から推定して、一辺5.6mほどの方形状を呈するも



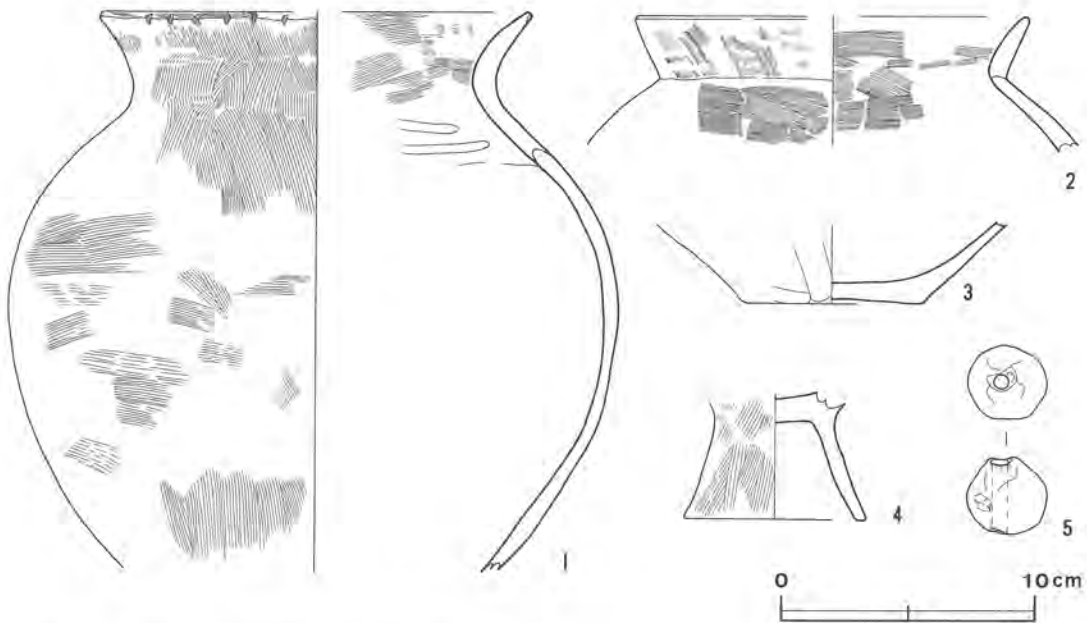
第65图 第52号住居跡実測图

のと思われ、主軸方向はN-15°-Wを指すものと推定される。残存床面積は16.4㎡であるが、本来は29㎡ほどの規模であったものと思われる。東と西の壁の一部が残存し、壁面は65~70度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は20cmである。床面は平坦で、全体的によく締まっている。本跡の推定範囲内に12か所のピットを確認した。そのうちP₂~P₉は、第50号住居跡に伴うものと判断した。配列等から考えて、P₁・P₆・P₁₁・P₁₂が本跡の支柱穴にあたると考えられる。P₁・P₁₁・P₁₂の上端直径は27~30cm、深さは20cmである。P₆の上端直径は40cm、深さは58cmである。P₇は、貯蔵穴と床面を区画する周堤内にあることから、貯蔵穴に伴う施設の柱穴と思われる。P₉とP₁₀は、ほぼ同規模で、壁際に並んでいることから本跡の入口部に関する柱穴とも考えられる。P₈は、形状等から本跡に伴わないものと判断される。貯蔵穴は、南壁の南東コーナー寄りに位置し、直径60cmの円形状を呈する。深さは27cmで、覆土は自然堆積である。貯蔵穴の北部から西部にかけての床面には、高さ3~4cmの周堤がL字状にめぐり、貯蔵穴と生活床面を区画している。炉は、床面の北半分が失われているため確認できなかった。

覆土は、締まりの弱い暗褐色土である。木根による攪乱を受けているが、自然堆積と思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器片96点、球状土錘1点が出土している。本跡に伴う遺物は東側に集中しているが、第66図5の球状土錘以外はすべて破片であった。1・2・3の甕形土器や4の台付甕形土器の脚部は、いずれも床面出土の破片が接合したものである。

本跡は、遺物や遺構の形態等から、古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第66図 第52号住居跡出土遺物実測図

第52号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第66図 1	甕形土器 土師器	A (17.0) B (22.0)	胴下半部以下欠損。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口唇部にキザミ。口縁部内・外面と胴部外面はハケ目整形。胴部内面は篋ナデ整形。	スコリア 橙色 普通	30% P152
2	甕形土器 土師器	A (15.5) B (5.1)	胴中位以下欠損。口縁部は「く」の字状に外傾し、頸部に接合痕を残す。	内・外面ともハケ目整形。	細砂粒 橙色 普通	10% P153
3	甕形土器 土師器	B (3.2) C 7.0	底部片。上げ底。	外面は底部まで篋ナデ整形。	細砂粒 赤褐色 普通	10% P155
4	台付甕形土器 土師器	B (5.1) E 7.1	脚台部片。脚台部は「ハ」の字状に開く。	外面は縦位のハケ目整形。内面は篋ナデ整形。	細砂粒・パミス 赤褐色 普通	20% P156

第55号住居跡 (第67図)

本跡は、調査区の南端 M3j8区を中心に確認された住居跡で、第63号住居跡の直上に形成されている。本跡の西方4 mには第45号住居跡が、北には古墳時代中期の第43号住居跡が近接して存在している。

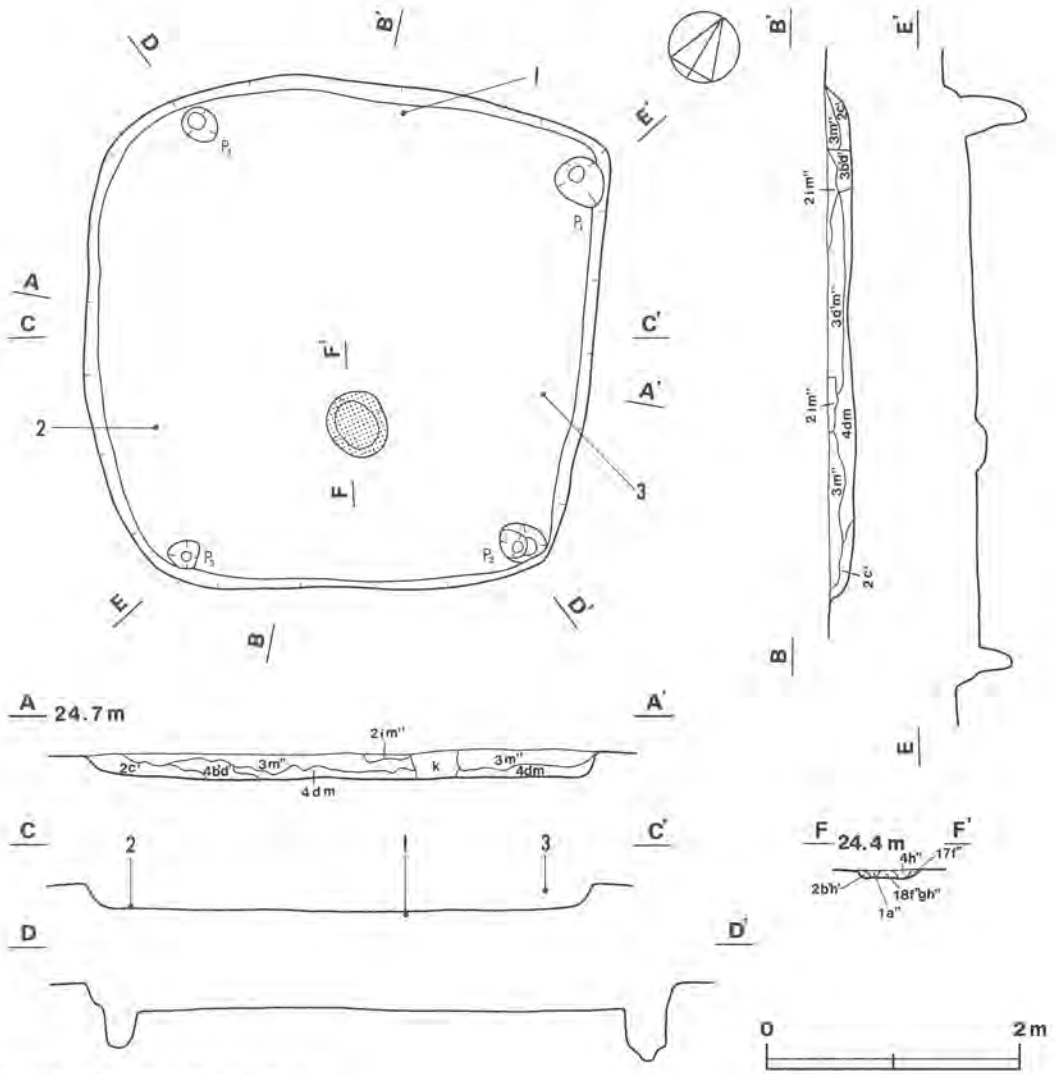
平面形は、長軸4.04m、短軸4.02mの正方形で、主軸方向はN-23°-Wを指している。床面積は13.7m²である。壁はロームで、60度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は20cmほどで、南東コーナーは床面まで達する攪乱を受けている。従ってこの部分の形状は、他のコーナー部から推定した。床面は、壁際から20~30cm内側までがローム、中央部が黒褐色土の貼り床でほぼ平坦である。貼り床の下には、第63号住居跡が検出された。ピットは、各コーナー部の壁寄りに4か所確認された。これらは、4本とも主柱穴と思われる、上端の長径は20~40cm、深さは30~50cmである。床面の中央部からわずかに南東方向に寄った位置には、焼土粒子や焼土小ブロックを含む暗赤褐色土が堆積する場所が確認されている。調査の結果、炉床の焼き締まりは確認できなかったが、深さ6cmほどの掘り込みを有していることから、本跡の炉と判断した。炉床の状態から、使用期間は短かったと思われる。入口部は、炉の位置等から南西あるいは北東方向が想定される。

覆土は、上層に締まりの弱い極暗褐色土、下層に締まりのある黒褐色土が堆積している。床面にまで達する攪乱もみられるが、基本的には自然堆積と思われる。

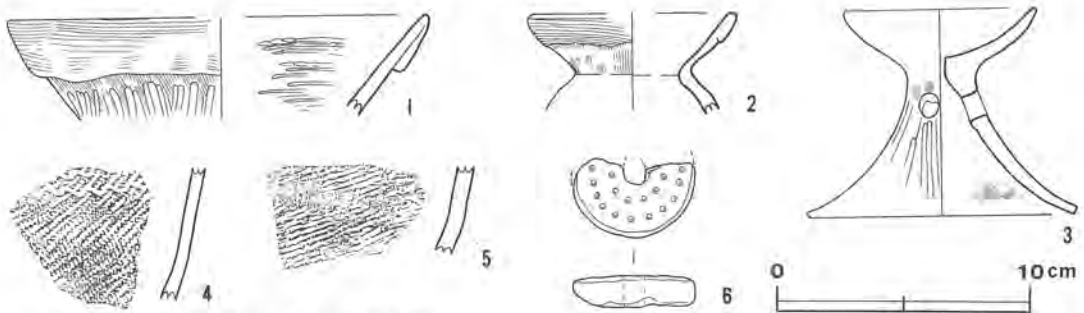
遺物は、床面や覆土中から弥生式土器片9点、土師器及びその破片48点、紡錘車1点が出土している。第68図2の小型壺形土器と1の壺形土器はそれぞれ西壁際と北壁際の床面から、3の器台形土器は東壁際の床近くから出土しており、共に本跡に伴う遺物と考えられる。6の紡錘車や

弥生式土器片は、覆土中から出土したもので本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第67図 第55号住居跡実測図



第68図 第55号住居跡出土遺物実測図

第55号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第68図 1	壺形土器 土師器	A (16.8) B (4.0)	口縁部片。口縁部は複合口縁で、外傾して開く。	外面はハケ目整形後、篋磨き、内面は篋磨き。	細砂粒 赤褐色 良好	20% P166
2	小型壺形土器 土師器	A (8.4) B (4.0)	胴中央部以下欠損。口縁部は「く」の字状に立ち上がり、上位で折り返され複合口縁となる。	外面はハケ目整形。口縁部上位と、口縁部内面は赤彩。	細砂粒 橙色 普通	30% P165
3	器台形土器 土師器	A 7.3 B 8.3 D 5.9 E 10.7	脚部は「ハ」の字状に開き、上位に3孔が穿たれる。坏部は内彎して開き、中央孔が穿たれる。	坏部内・外面はナデ整形。脚部外面は縦位の篋磨きで、脚部内面はナデ整形。	細砂粒・パミス 赤褐色 普通	80% P167 PL81

第57号住居跡 (第69図)

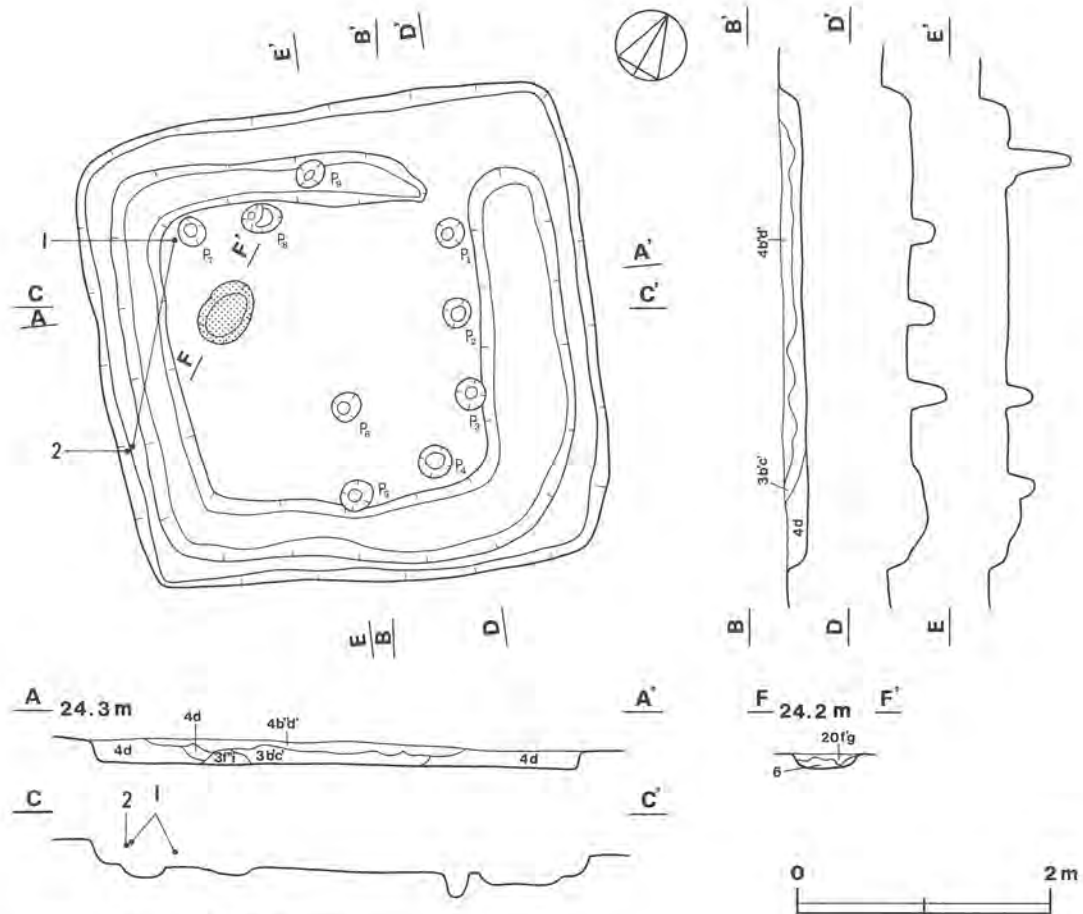
本跡は、調査区の南東部M4g7区を中心に確認された住居跡である。本跡の南3mには第60号住居跡が、西3mには第41号住居跡が存在している。

平面形は、長軸3.92m、短軸3.75mの方形状を呈するが、西と東のコーナー部は、やや丸味を帯びている。長軸方向はN-52°-Wを指している。床面積は13.1m²で、当調査区の住居跡としては小規模である。壁はロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は17~20cmである。壁から15cmほど内側を幅広の周溝が巡っている。周溝の規模は、上幅30~60cm、深さ10cmで、北コーナー部では30cmほど切れている。溝底は緩やかに彎曲している。床はロームで平坦であるが、全体に軟弱である。ピットは、9か所確認された。ピットの上端直径は22~24cm、深さは20~44cmである。これらのピットが、本跡に伴うかどうかは、床面が軟弱でピットの配列が不規則であったため判断できなかった。床面の西部には、直径40cmの円形状に焼土化している部分があるが、炉と断定できるほどの掘り込みや、焼き締めは観察できなかった。

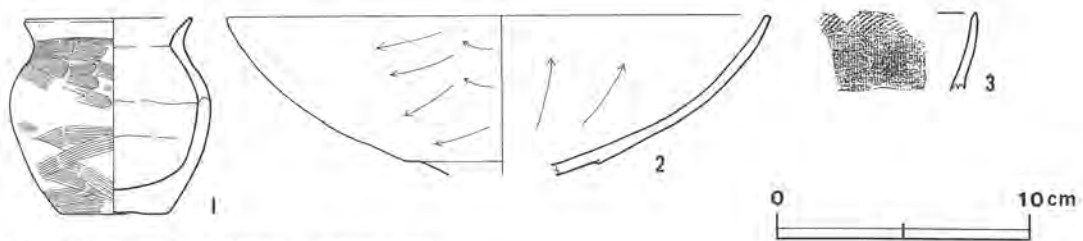
覆土は、上層に黒褐色土、下層に極暗褐色土が堆積している。両層とも締めりは弱い、自然堆積層と思われる。

遺物は、覆土中から弥生式土器片2点、土師器及びその破片114点が出土している。第70図1の小型甕形土器は西コーナー近くの床近くに正位で、2の高坏形土器の坏部は南西壁際から破片で出土しており、本跡に伴う遺物と思われる。その他、ハケ目が施された甕形土器の破片や台付甕形土器の脚部片等も出土しているが、出土層位は弥生式土器片を含めて覆土の上層から中層にかけてがほとんどであり、流れ込みによるものも多いと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第69図 第57号住居跡実測図



第70図 第57号住居跡出土遺物実測図

第57号住居跡出土土器観察表

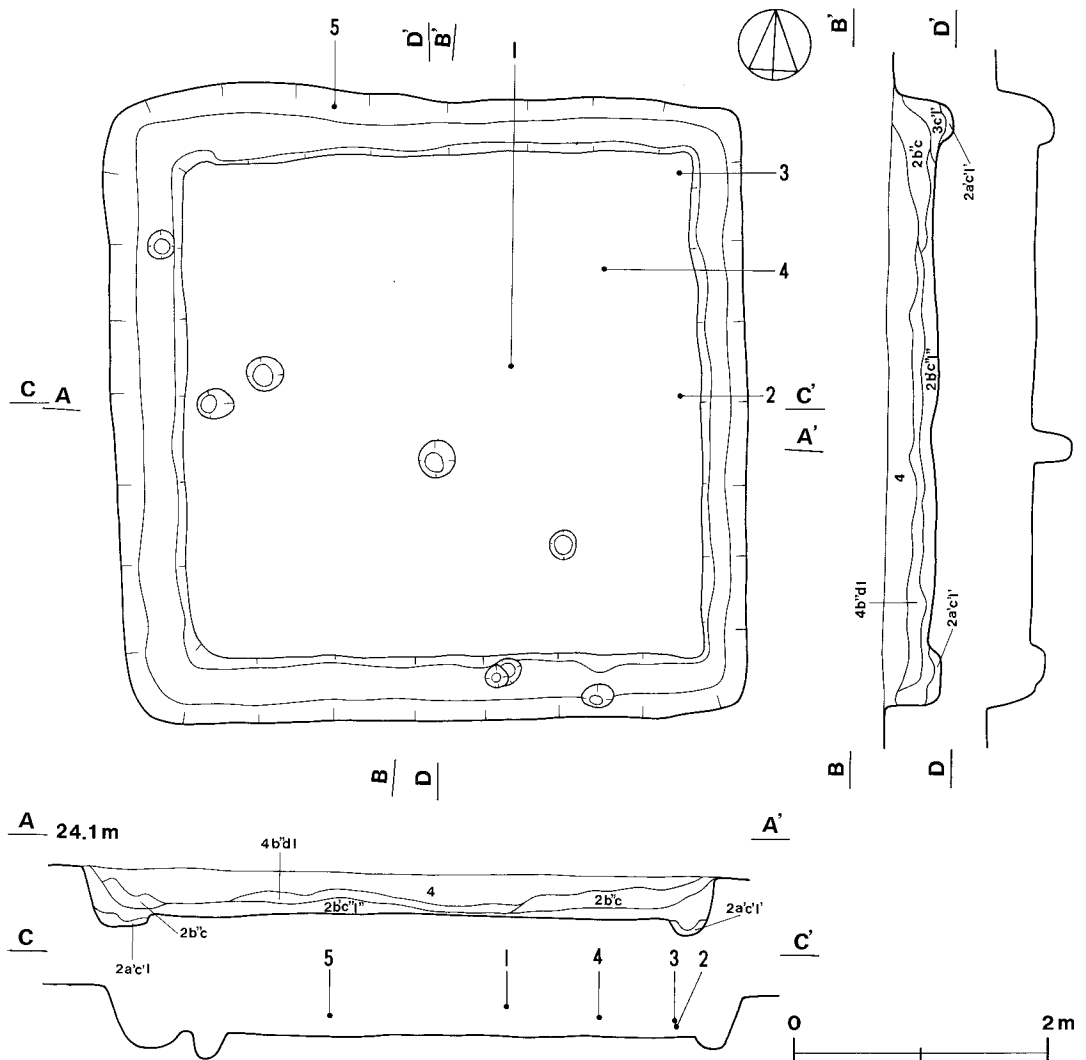
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第70図 1	小型碗形土 器 土師器	A 6.6 B 7.8 C 4.2	胴下半部は直線的に外傾し、上半部で内彎する。胴部最大径を上半部に持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部外面はナデ整形。胴部外面はハケ目整形。	細砂粒 赤褐色 普通	100% P168 PL82

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第70図 2	高環形土器 土師器	A 22.0 B (6.3)	坏部片。坏底部に段を持ち、内 彎して大きく開く。	内・外面とも篋磨き後、赤彩。	細砂粒 明赤褐色 普通	50% P169

第59号住居跡 (第71図)

本跡は、調査区の南東部M4g₀区を中心に確認された住居跡で、本跡の西8mには第57号住居跡が、さらに3m先には大形の第41号住居跡が存在している。また、南には古墳時代前期の第65号住居跡が位置している。

平面形は、一辺5mほどの方形状を呈し、主軸方向はN-0°を指している。床面積は21.1m²と、



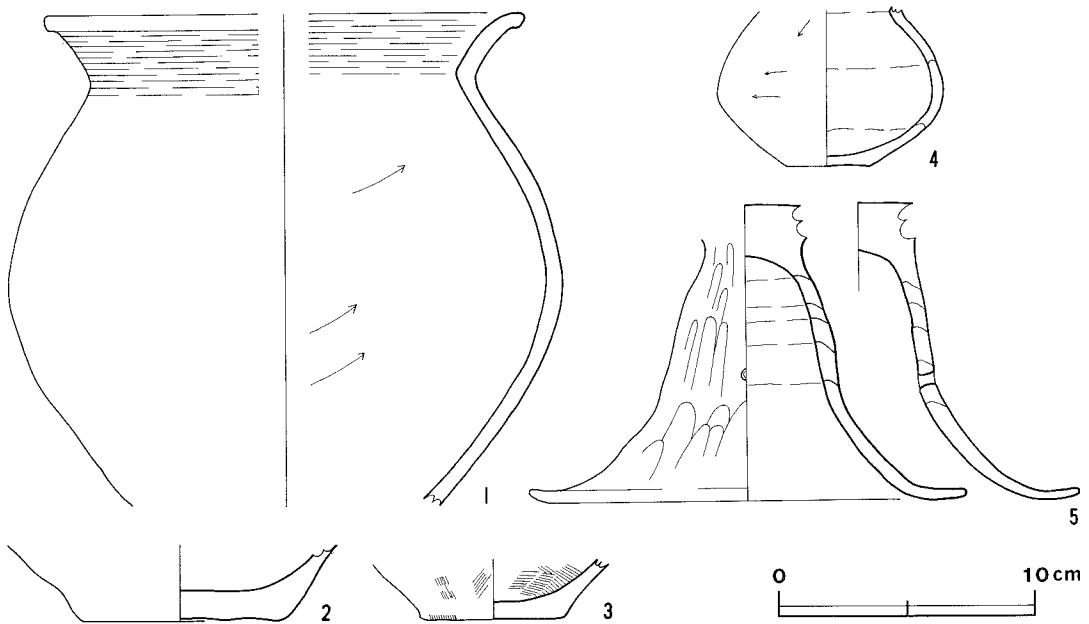
第71図 第59号住居跡実測図

同時期の住居跡としては、やや小規模である。壁は硬く締まったロームで、垂直に立ち上がっている。壁高は34cmと深めであり、下部はハードローム層を掘り込んでいる。壁直下には、上幅25～35cm、深さ10cmの幅広の壁溝が全周している。溝底はハードロームで、凹凸が激しい。床はロームで、緩やかに起伏している。全体的に締まりは弱く、ハードロームブロックが浮き出している。ピットは、7か所を掘り込んだが、いずれも小規模で、配列も不規則であることから本跡に伴うものとは思われない。貯蔵穴や、炉は検出できなかった。

覆土は自然堆積で、上層に締まりの弱い黒褐色土、下層に締まりを有する暗褐色土がレンズ状に堆積している。

遺物は、覆土中から土師器片148点が出土している。第72図1の甕形土器、4の小型壺形土器、2・3の甕形土器底部は遺構の東側から破片で、5の高环形土器の脚部は北壁際から倒立の状態出土しているが、出土層位はいずれも覆土中層であることから、本跡が埋没する過程で一括して投棄されたものと思われる。

本跡は、遺物の特徴や出土状況等から古墳時代中期の和泉期に比定される遺構と思われる。炉を持たないことから住居跡以外の性格も考えられるが、住居跡としての形態と規模を備えているため、ここでは住居跡として扱った。



第72図 第59号住居跡出土遺物実測図

第59号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図 1	甕形土器 土師器	A (18.7) B (19.5)	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外傾し、口唇部付近で強く外反する。	口縁部内・外面は横ナデ整形。胴部内・外面は篋ナデ整形。	細砂粒 橙色 普通	40% P171
2	甕形土器 土師器	B (3.0) C 7.7	底部片。底部は引き締まる。平底。	内・外面とも粗いナデ整形。	細砂粒 にぶい赤褐色 普通	20% P173
3	甕形土器 土師器	B (2.4) C 5.7	底部片。平底。	内・外面ともハケ目整形。	細砂粒 にぶい赤褐色 普通	20% P172
4	小型壺形土器 土師器	B (6.3) C 3.3	胴部は中位が強く張り出した球形形状を呈する。口縁部欠損。	外面は、縦位又は横位の篋磨き。	細砂粒 橙色 良好	70% P170
5	高坏形土器 土師器	B (11.8) E (17.2)	脚部片。脚部は円筒形状で、中位に径7mmの1孔が穿たれる。裾部は大きく開き、末端で外反する。	外面は縦位の篋削り。裾部は内部に輪積痕を残す。	細砂粒 にぶい赤褐色 良好	50% P174 PL80

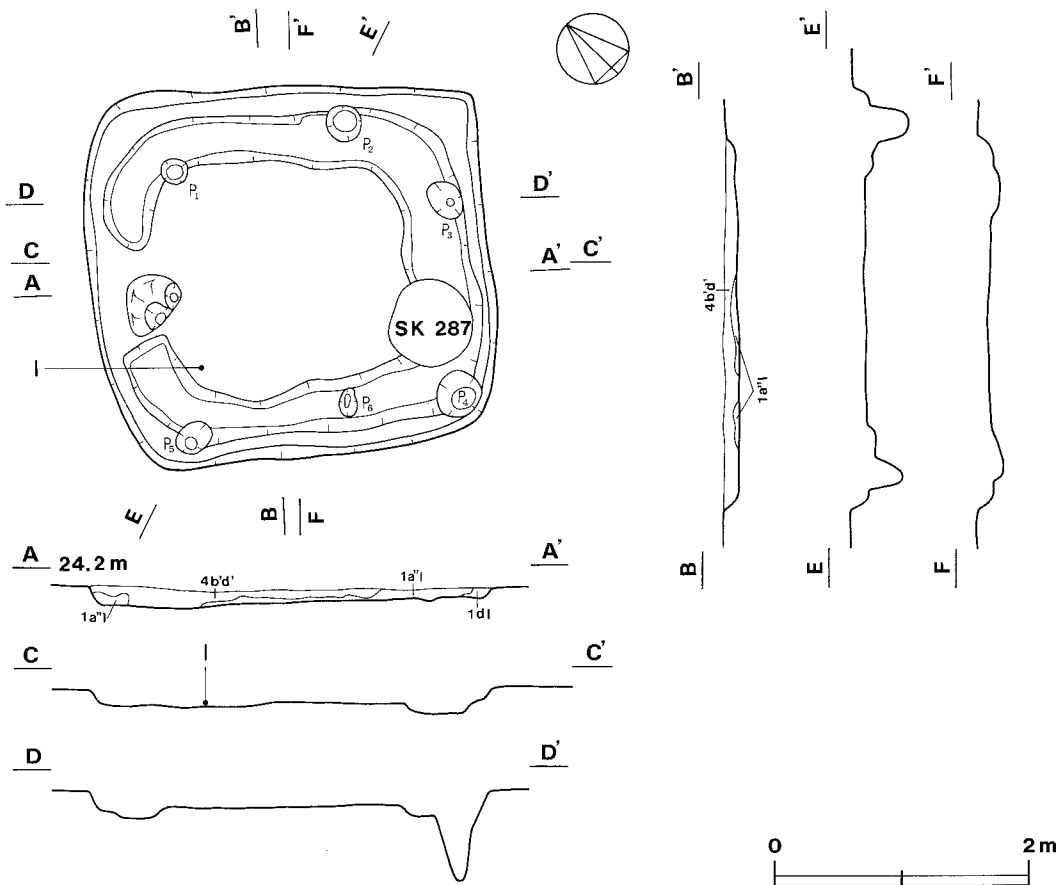
第60号住居跡 (第73図)

本跡は、調査区の南東部M4i7区を中心に確認された住居跡で、床面の南東部は縄文時代中期の第287号土坑を掘り込んでいる。本跡の北3mには第57号住居跡が、東6mには古墳時代前期の第65号住居跡が存在している。

平面形は、長軸3.15m、短軸2.95mの隅丸方形形状を呈し、長軸方向はN-50°-Wを指している。床面積は8.0㎡と小規模である。壁は締まりの弱いロームで、60度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は10cmと浅く、東コーナー部は耕作による攪乱を受けている。隣接する第57号住居跡と同様、上幅35~45cm、深さ10cmの幅広の周溝が壁際より10~15cm内側を周回し、北西壁側で切れている。床はロームで、中央部がわずかに高まり周溝に向かって緩やかに傾斜していく。床面は全体的に軟弱である。ピットは、周溝に沿って6か所検出されており、これらは覆土の状況等から本跡に伴う可能性が高い。貯蔵穴や炉は存在しない。入口部は、柱穴の配置から南西壁側が想定される。

覆土は、自然堆積で、上層に締まりの弱い黒褐色土、下層に締まりを有する褐色土が堆積している。

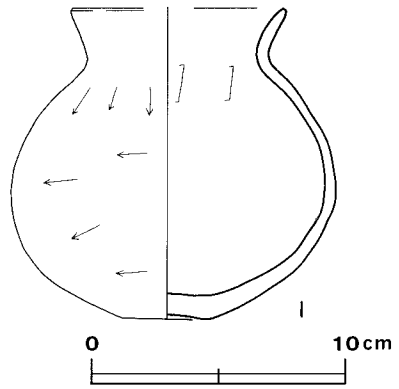
遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片8点が出土している。第74図1の壺形土器は、ほぼ床面から正位で出土しており、本跡に伴う遺物と考えられる。その他の遺物は、赤彩された



第73図 第60号住居跡実測図

高坏形土器の小破片4点，ハケ目が施された甕形土器の小破片3点である。

本跡は，遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される遺構と思われる。炉を持たないことや遺構の規模が小さいことなどから住居跡以外の性格も考えられるが，第57号住居跡と同様の形態を持つことから，ここでは住居跡として扱った。



第74図 第60号住居跡出土遺物実測図

第60号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第74図 1	壺形土器	A [8.5]	上げ底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外反して開く。	外面は篋削り後、丁寧なナデ整形。	砂粒・バミス 明赤褐色 普通	95% P175 PL76
	土師器	B 12.4				
		C 3.5				

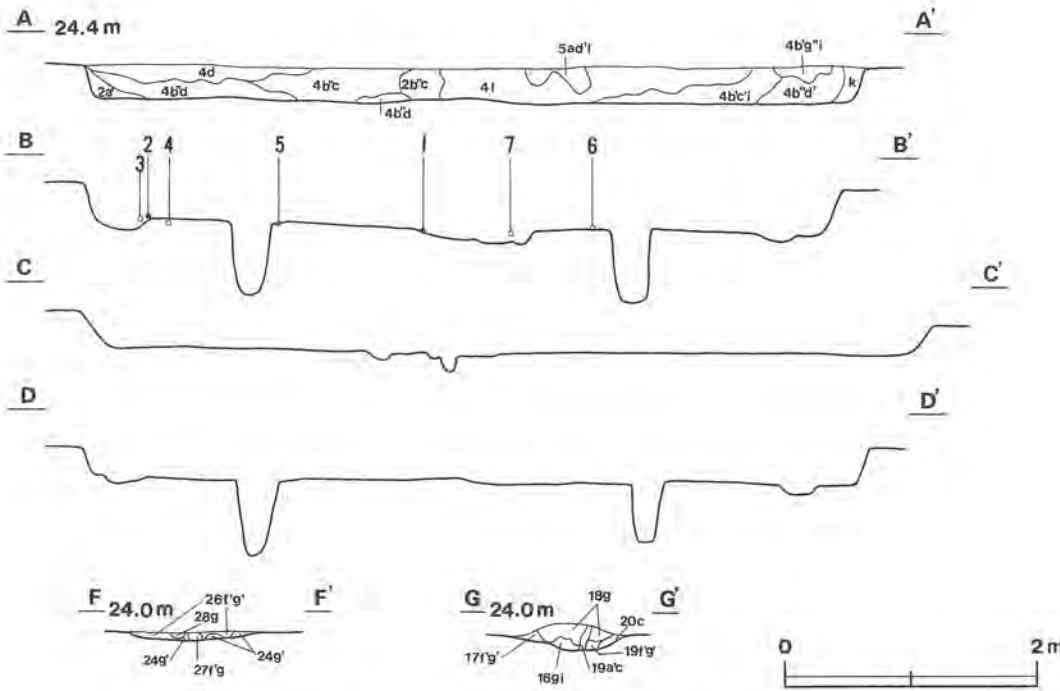
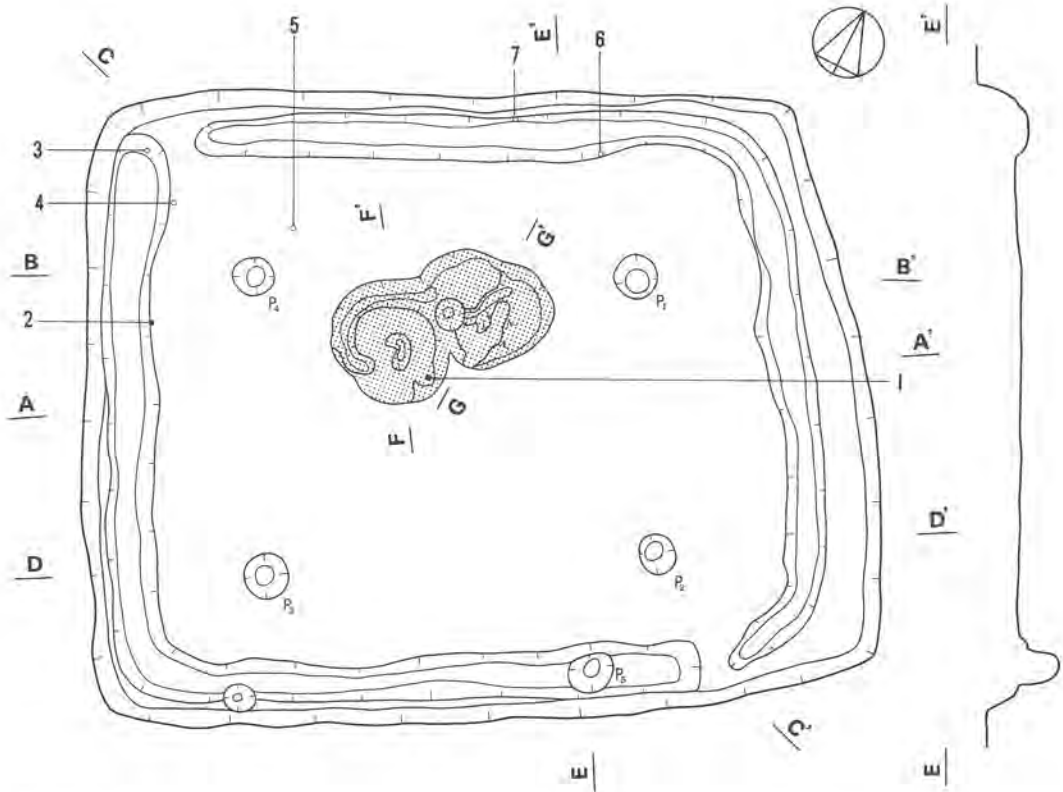
第61号住居跡 (第75図)

本跡は、調査区の南東部M4j5区を中心に確認された住居跡である。本跡の北7mには第42号住居跡が、北東8mには第60号住居跡が存在している。

平面形は、長軸6.28m、短軸5.02mの長方形状を呈し、長軸方向はN-60°-Wを指している。床面積は25.5m²である。壁はロームで、60~70度の角度で外傾して立ち上がっている。西壁の一部は、長さ1.3mにわたって攪乱を受けているが、その他の部分の残存状況は良好である。壁高は29cmで、壁際より5~30cm内側の床面を周溝が巡っている。周溝の規模は、上幅30~40cm、深さ10cmで、北西コーナー部と南東コーナー部付近の2か所が切れている。床はロームで、平坦である。全体的に締まっているが、炉の西側と南壁側は特に硬く踏み締まっている。ピットは5か所確認された。P₁~P₄は、上端直径30~35cm、深さ47~60cmで、方形に配列されていることから、4本とも支柱穴と判断される。南壁際に存在するP₅も、覆土の状況等から本跡に伴う柱穴と考えられる。なお、P₅は、その北側の床面が極めて硬く踏み締められていることから、入口部に関する柱穴と推定される。貯蔵穴は存在しない。炉は、地床炉が2か所検出された。2つの炉は、それぞれが直径1mの円形状を呈するもので、ほぼ東西に相接して並んでいる。西側の炉は16cmの掘り込みを有し、炉内には上層に暗赤褐色土、下層に焼土を多量に含む赤褐色土が堆積する。しかし東側の炉は、ほとんど掘り込まれていないため、両炉の前後関係は不明である。ただ、両炉とも炉床はレンガ状に焼き締まり残存状況が良好であることや、炉の上面に貼り床の形跡が無いことなどから、2つの炉が同時期に使用された可能性もある。入口部は、炉の位置や、床面の状況から南壁側にあったものと思われる。

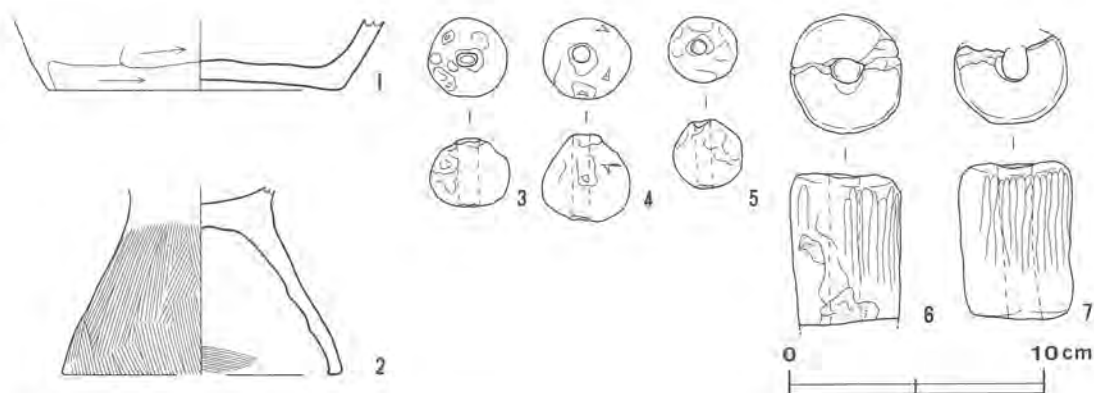
覆土は、壁際からローム粒子を多量に含む黒褐色土が流れ込むように堆積し、その上に締まりの弱い黒褐色土が堆積している。自然堆積層であるが、耕作による攪乱もみられる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片504点、球状土錘3点、管状土錘2点が出土している。第76図1の甕形土器底部は西側の炉の確認面から、2の台付甕形土器脚部は西壁側の床面から出土している。3・4・5の球状土錘と6・7の管状土錘は、北壁側の床面から出土している。これらは、すべて本跡に伴うものと思われる。その外にも床面からはハケ目が施された甕形土器胴部片、赤彩が施された高坏形土器や器台形土器の破片など30点が出土しているが、いずれも小片で実測はできなかった。



第75图 第61号住居跡実測图

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第76図 第61号住居跡出土遺物実測図

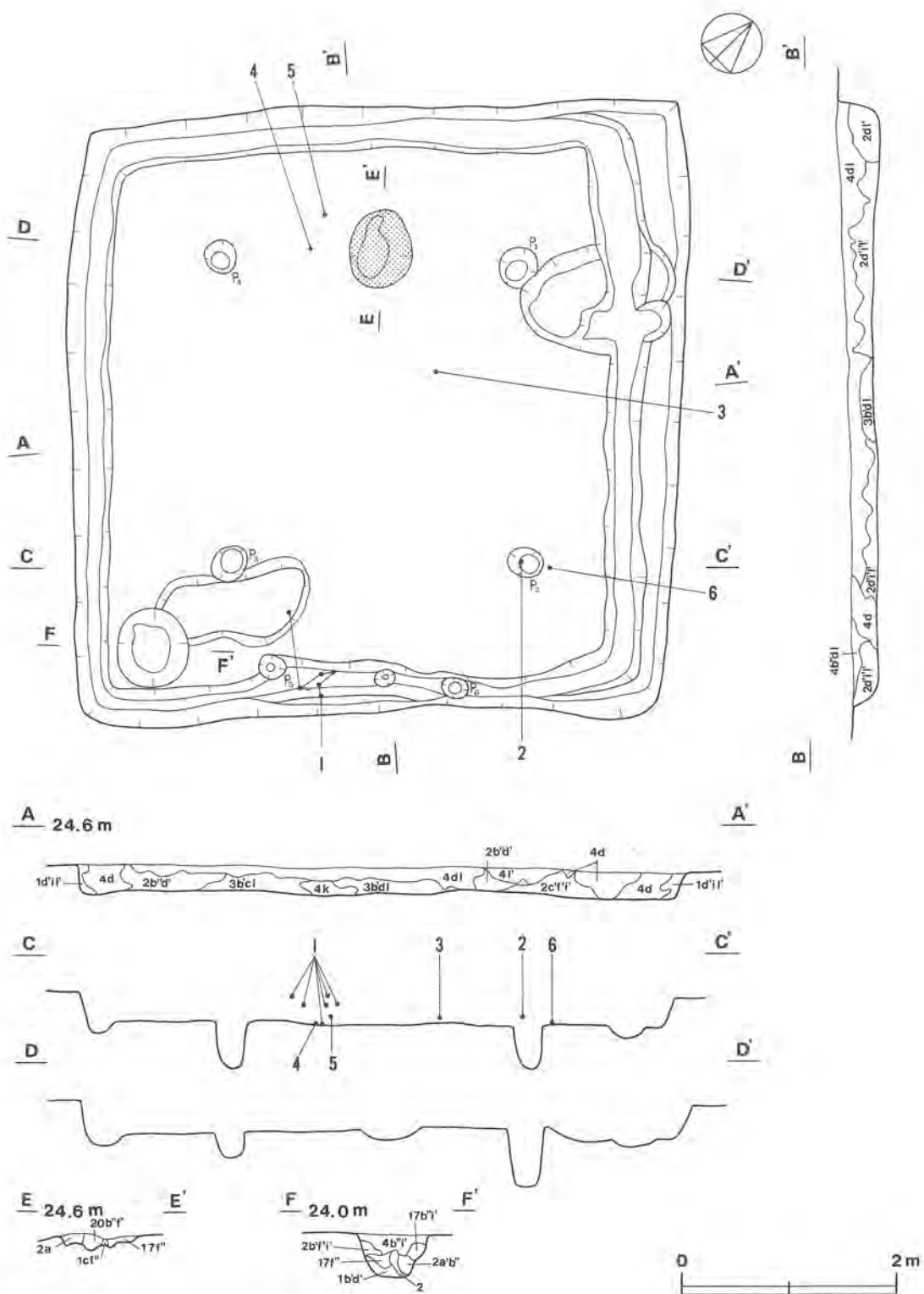
第61号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第76図 1	甕形土器 土師器	B (2.8) C 11.4	底部片。上げ底。	胴下半部は横位の窠削り。	砂粒 橙色 良好	20% P176
2	台付甕形土器 土師器	B (7.4) E (10.8)	脚台部片。脚台部は「ハ」の字状に開き、下位で内彎する。	外面はハケ目整形。内面は上位がナデ整形で、下位はハケ目整形。	砂粒 にぶい橙色 良好	30% P177

第62号住居跡 (第77図)

本跡は、調査区の南東端 N4b3区を中心に確認された住居跡である。本跡の北14m には大形の第41号住居跡が、北西16m には第43号住居跡が存在している。

平面形は、一辺5.6mほどの方形状を呈し、主軸方向はN-45°-Wを指している。床面積は28.6 m²である。壁はロームで、南西側は垂直に、他の壁は65~70度の角度で外傾して立ち上がっている。壁直下には壁溝が全周しているが、北東側の溝だけは、壁際より25cmほど内側に掘られている。壁溝の規模は、上幅15~25cm、深さは6~12cmで、溝底は凹凸が激しい。床はロームで、起伏を有し、貯蔵穴の北東部では他の面より6cmほど高まっている。床面は貯蔵穴の北東部と、炉の南東部が部分的に踏み締まっている外は、全体的に軟弱である。ピットは、床面に4か所と壁溝中に2か所の計6か所が確認された。床面に存在する P₁~P₄は、上端直径が30~35cm、深さが24~55cmで、方形に配列されていることから支柱穴と判断した。P₅・P₆は、貯蔵穴北東の壁溝中に1.5mの間隔で並ぶことから入口部に関係する柱穴である可能性もある。P₅・P₆の規模は、



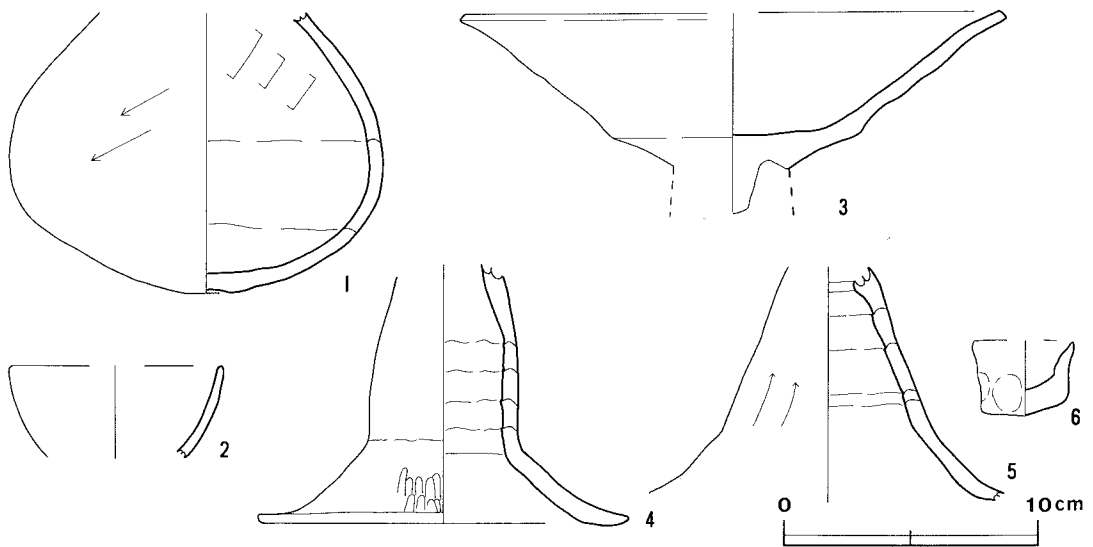
第77图 第62号住居迹实测图

上端直径が25cm、深さが16cmである。貯蔵穴は、南コーナー部壁溝の内側に位置している。平面形は、上端直径70cmの円形状を呈するが、底面は方形状であることから、本来は方形に掘られたものと推定される。貯蔵穴の覆土は、上層に黒褐色土、中層に暗褐色土、下層に褐色土が自然堆積している。炉は、床面を10cm掘り下げた地床炉で、中央から中軸線上にそって1.7m北西に寄り、P₄とP₅を結ぶ線上に位置している。炉内の覆土に焼土は少なく、炉床もあまり焼けていないことから、使用期間は短かったものと思われる。入口部は、炉や柱穴の配置等から南東壁側が想定される。

覆土は自然堆積で、上層に締まりの弱い黒褐色土が堆積し、下層には焼土やローム粒子を多量に含む暗褐色土が堆積している。床面には焼土が堆積し、炭化材も散乱していることから、本跡は居住期間中、あるいは廃絶後間もなく焼失したものと思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片375点、手捏土器1点が出土している。北西壁側の床面近くには第78図4・5の高坏形土器脚部が正位で並んでいるほか、高坏形土器の破片数点が出土している。3の高坏形土器坏部は中央部の床面から、2の埴形土器と6の手捏土器は東コーナー部の床面から出土しており、これらの遺物は本跡に伴うものと考えられる。なお貯蔵穴の東側にも1の壺形土器等数多くの土器片がまとめて出土しているが、出土層位が覆土中層であるため本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代中期の和泉期に比定される住居跡と思われる。



第78図 第62号住居跡出土遺物実測図

第62号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第78図 1	壺形土器 土師器	B (11.1) C 1.9	上げ底。胴部は球形状を呈し、最大径を下位に持つ。口縁部欠損。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・スコリア にぶい橙色 良好	70% P179
2	塊形土器 土師器	A (8.5) B (3.6)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	内・外面はナデ整形。	細砂粒 にぶい赤褐色 普通	30% P183
3	高坏形土器 土師器	A [21.1] B (6.1)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、口縁部は外反する。接合部はソケット状を呈する。	口縁部は横ナデ整形。その他は丁寧なナデ整形。	細砂粒 明赤褐色 良好	30% P180
4	高坏形土器 土師器	B (10.3) E 14.6	脚部片。脚部は円筒形状で裾部は大きく開き、末端でわずかに外反する。	外面は篋削り整形。内面に輪積痕が残る。	砂粒 暗赤褐色 良好	50% P181 PL80
5	高坏形土器 土師器	B (9.3) E [13.9]	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開き、裾部でさらに大きく開く。末端で欠損する。	外面は縦位の篋削り整形。内面に輪積痕が残る。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	40% P182
6	手捏土器 (塊形) 土師器	A [4.0] B 3.0 C 3.5	丸底。胴部は外傾して立ち上がり、塊状を呈する。	内・外面に指圧痕が残る。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	70% P184 PL82

第63号住居跡 (第79図)

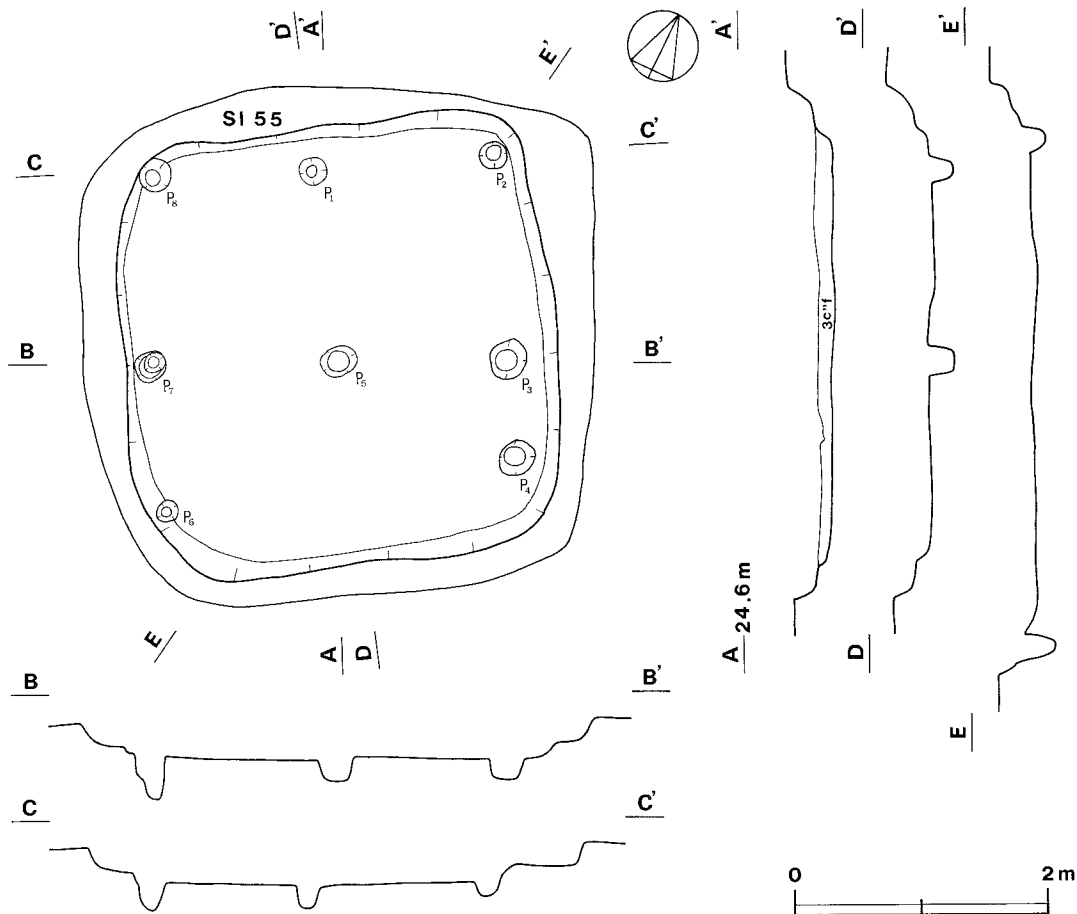
本跡は、第55号住居跡の貼り床の下に存在し、調査区の南端M3j8区を中心に確認された住居跡である。第55号住居跡の調査中に検出され、本跡の東2mに第75号住居跡が存在している。

平面形は、長軸3.48m、短軸3.42mの隅丸方形状を呈し、主軸方向はN-32°-Wを指している。床面積は、10.7㎡である。壁はロームで、45度の傾きで外傾して立ち上がっている。残存壁高は10cmであるが、壁上部は第55号住居跡によって掘り込まれているため、本来は30cmほどあったものと推定される。床はロームで平坦であるが、あまり締まっていない。ピットは、壁際に7か所と中央に1か所の計8か所を確認した。いずれも深さ20cm内外の浅いもので、支柱穴とその他の柱穴との区別はつげがたい。本跡に伴う炉は検出されなかった。入口部の断定はできない。

覆土は、下層のみが残存しており、締まりのある極暗褐色土層である。土層に乱れなどは認められないが、覆土が薄いため堆積状況は不明である。

遺物は、床面からハケ目が施された甕形土器の破片が3点だけ出土している。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。

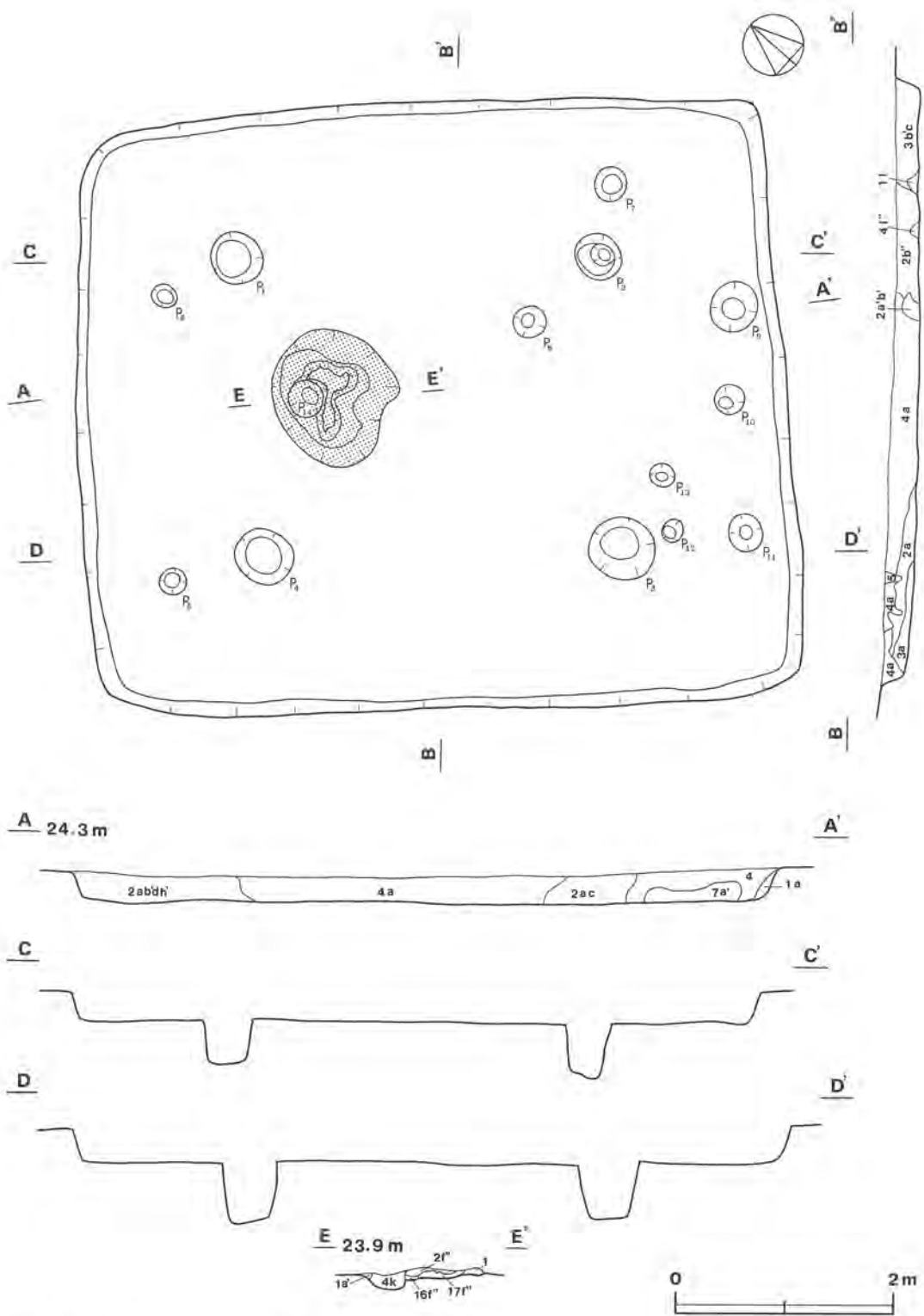


第79図 第63号住居跡実測図

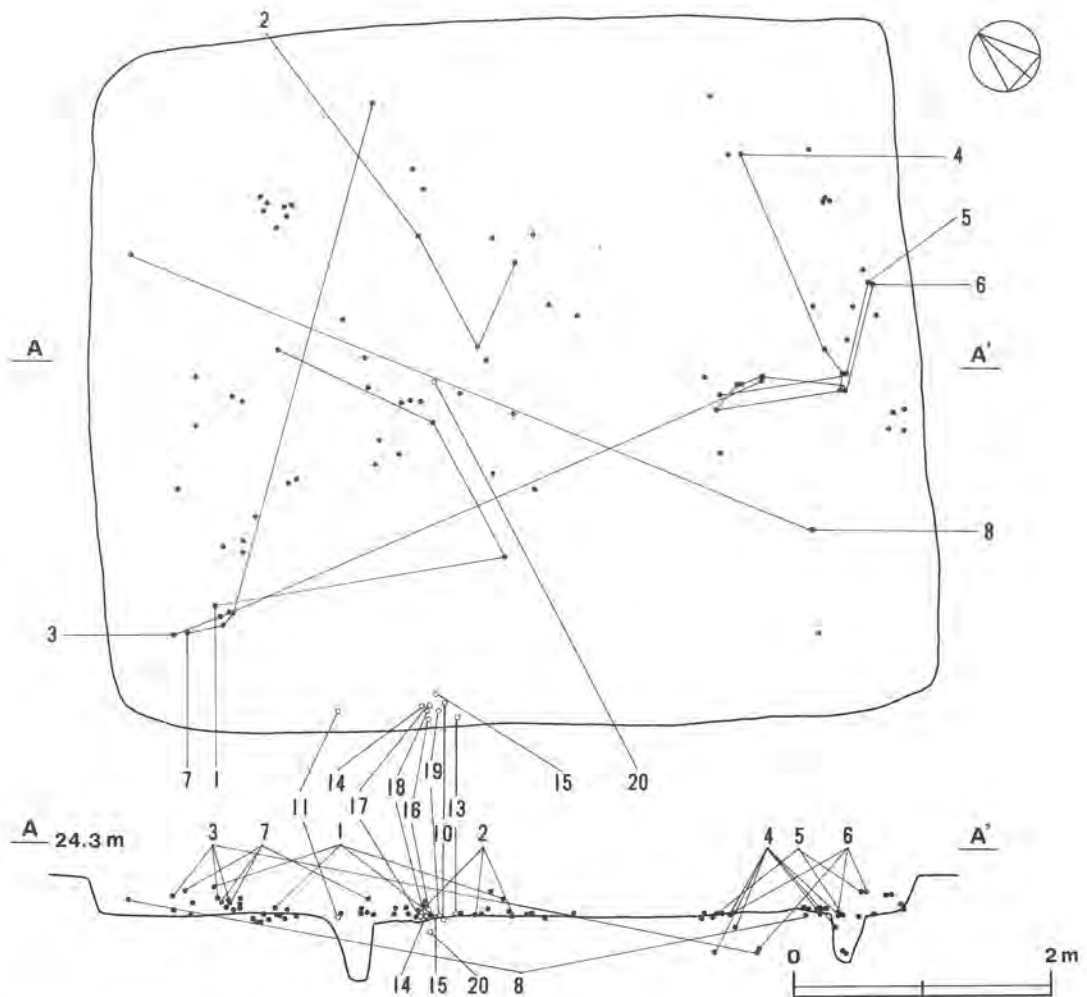
第65号住居跡 (第80・81図)

本跡は、調査区の南東部M4i0区を中心に確認された住居跡である。本跡の西14mには第61号住居跡が、南4mには第68号住居跡が存在している。

平面形は、長軸6.54m、短軸5.57mの長方形状を呈し、長軸方向はN-42°-Wを指している。床面積は32.9m²である。壁はロームで、70度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は30~35cmで、所々に耕作による攪乱を受けている。壁溝は掘られていない。床はロームで、緩やかに起伏している。支柱穴に囲まれた内側は硬く踏み締まっているが、外側は軟弱である。ピットは14か所掘り込んだが、P₁~P₄以外はすべて後世の攪乱と思われる。P₁~P₄は、上端直径40~55cm、深さ42~56cmで、方形に配列されていることから、4本とも支柱穴と判断される。貯蔵穴は存在しない。炉は地床炉で、床面から5cmほど窪んでいるが、それは使用によって生じた凹みと考えられ、本来は掘り込みを持たない炉であったと推定される。平面形は直径1.2mの円形状を呈し、



第80图 第65号住居跡実測图

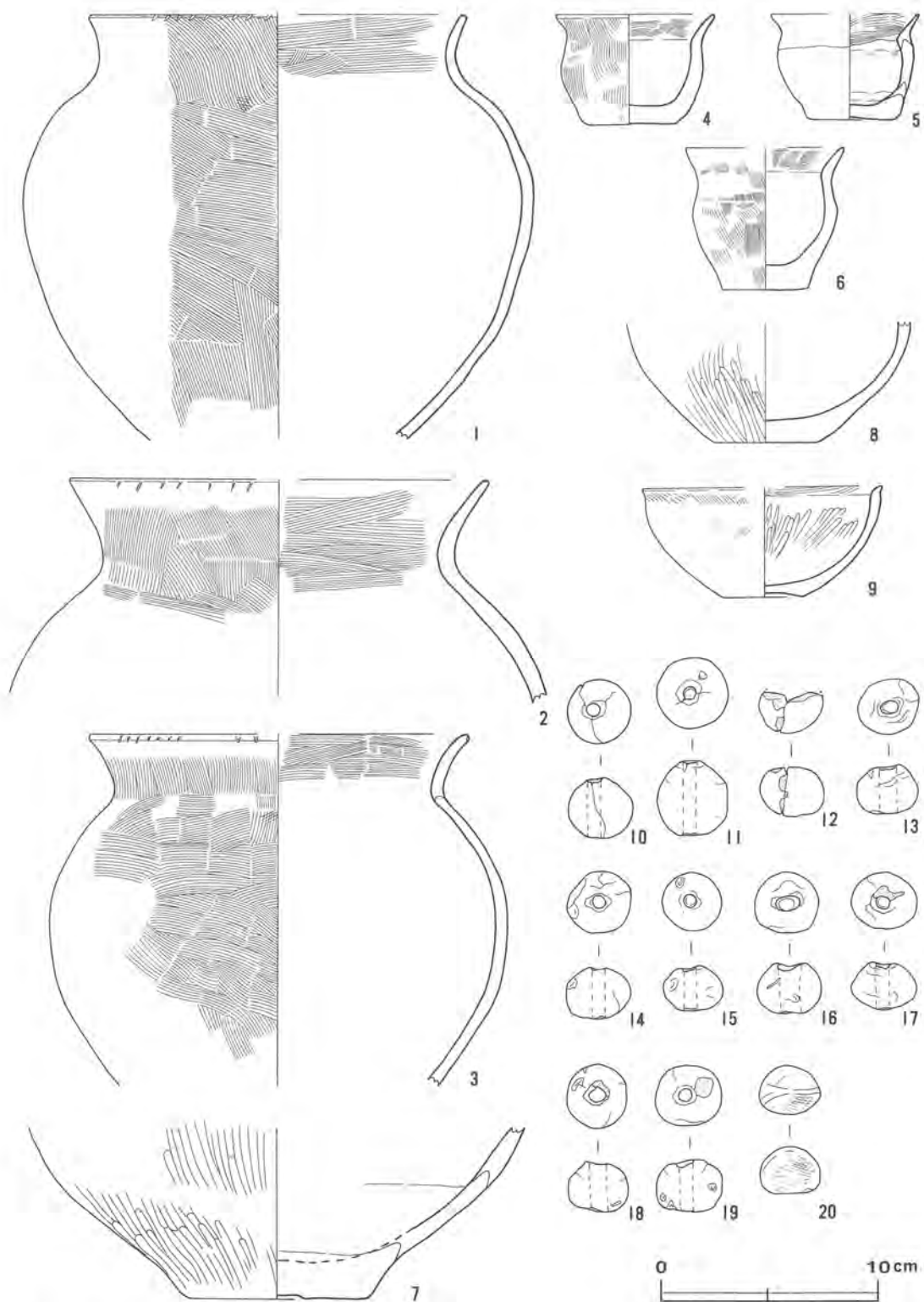


第81図 第65号住居跡出土遺物位置図

中心から長軸線上にそって70cmほど北西に寄って位置している。炉中には、焼土を多量に含む赤褐色土や暗赤褐色土が堆積し、炉床は強く焼き締まっている。入口部は、炉や支柱穴の配置から南東壁側にあったものと思われる。

覆土は、壁際から極暗褐色土や暗褐色土が流れ込むように堆積し、中央部には締まりを有する黒褐色土が堆積している。自然堆積層と思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片413点、球状土錘10点、用途不明の土製品1点が出土している。南東壁近くの床面に第82図4・5の小型甕形土器が、南西壁際に10～19の球状土錘がまとまって出土しているほかは床面全域に土器片が散乱し、1・3の甕形土器、7・8の壺形土器等は広い範囲にわたって接合関係を有している。出土層位も床面から覆土上層部にまで及んでいることから、攪乱の影響を受けているものと思われる。炉中からは、20の土製品や甕形



第82図 第65号住居跡出土遺物実測図

土器胴部片など9点が出土している。これらの土器及び土製品は、すべて本跡に伴うものと考えられる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。

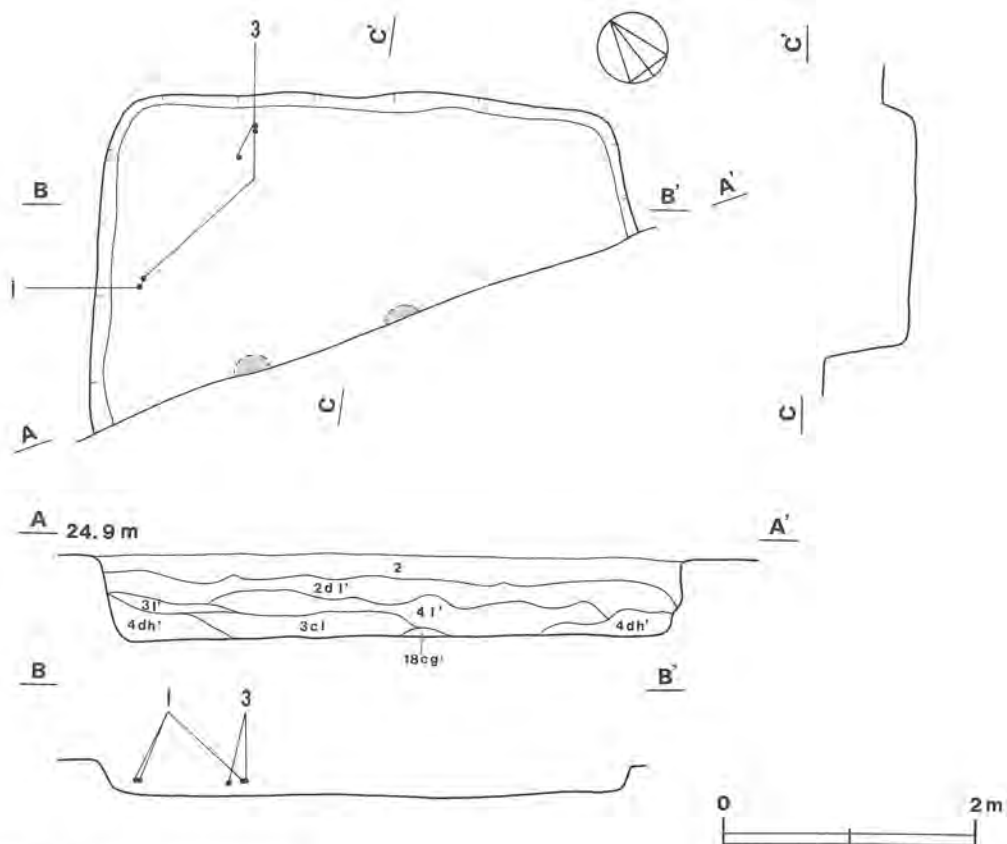
第65号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第82図 1	甕形土器 土師器	A (17.6) B (19.9)	底部欠損。胴部は外傾して立ち上がり、上半部で強く内彎する。胴部最大径を上半部に持つ。口縁部は直立し、上位で外反する。	口唇部にキザミが施され、口縁部内・外面と胴部外面はハケ目整形。	細砂粒 明赤褐色 良好	40% P186 PL70
2	甕形土器 土師器	A (19.6) B (10.3)	胴下半欠損。口縁部は垂直に立ち上がった後、強く外傾して開く。	口唇部から口縁部上位にかけて横ナデ整形後、キザミが施される。	砂粒 橙色 普通	20% P188
3	甕形土器 土師器	A (17.7) B (16.5)	底部欠損。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口唇部にキザミが施され、口縁部外面は横ナデ整形。胴部外面はハケ目整形。	砂粒 明赤褐色 普通	30% P187 PL70
4	小型甕形土器 土師器	A 7.5 B 5.2 C 4.2	胴部は内彎して立ち上がり、最大径を上半部に持つ。口縁部は外傾して開く。	外面と口縁部内面はハケ目整形。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	100% P190 PL82
5	小型甕形土器 土師器	A (7.8) B 5.0 C 4.0	胴部は内彎して立ち上がり、最大径を上半部に持つ。口縁部は外傾して開き、頸部に接合痕を残す。	口縁部内面はハケ目整形。その他は粗雑なナデ整形。	砂粒 明赤褐色 普通	70% P192 PL82
6	小型甕形土器 土師器	A (7.4) B 6.7 C 4.0	胴部は外傾して立ち上がり、上半部で内傾する。胴部最大径を上半部に持つ。口縁部は外傾して開く。	口縁部外面は横ナデ整形。口縁部内面と胴部外面はハケ目整形。	砂粒 明赤褐色 普通	70% P191 PL82
7	壺形土器 土師器	B (8.0) C 8.5	上げ底。底部は引き締まり、胴部は内彎して立ち上がる。胴上半を欠損する。	胴部外面は篋磨き後、赤彩。底部木葉痕。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	30% P189
8	壺形土器 土師器	B (5.6) C 4.9	胴部は内彎して立ち上がり、中位以上を欠損する。	胴部外面は縦位の篋磨き後、赤彩。内面は篋ナデ整形。	砂粒 赤褐色 良好	30% P185
9	壺形土器 土師器	A (11.0) B 5.2 C 3.8	上げ底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外反し、内面に稜を持つ。	口縁部内面はハケ目整形。その他は内・外面とも篋磨き後、赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	70% P193 PL78

第67号住居跡 (第83図)

本跡は、調査区の南東端N4c4区を中心に確認された住居跡で、その南半分は調査区外へ延びている。本跡の北9mには第61号住居跡が、西7mには第71号住居跡が存在している。

平面形は、南半分が調査区外に延びているため明かではないが、残存する北東壁から推定して、



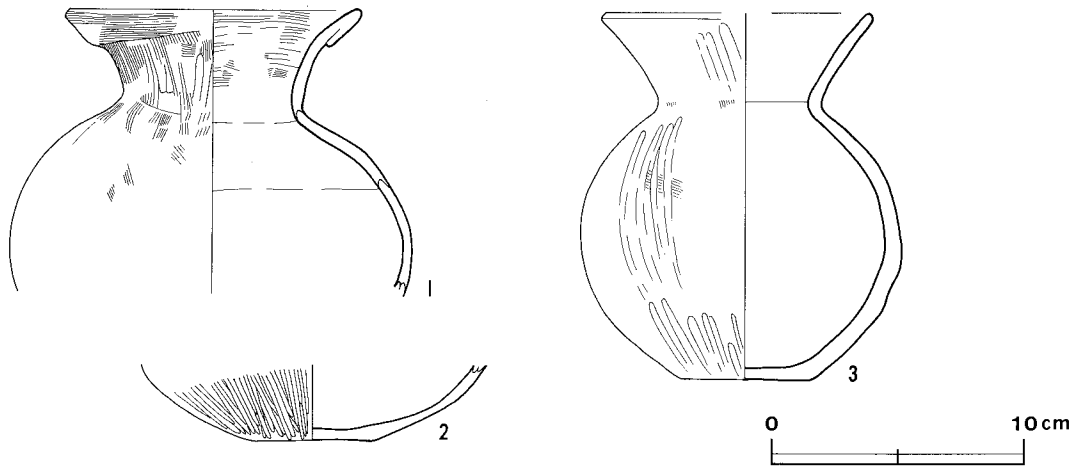
第83図 第67号住居跡実測図

一辺が4.2mほどの方形あるいは長方形を呈し、長軸方向はN-51°-Wを指すものと思われる。調査した床面積は6.8m²であるが、総床面積は16m²ほどあるものと思われる。壁は、締まりの弱いロームで、60度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は30~33cmであるが、壁溝は存在しない。床はロームで、ほぼ平坦である。壁に近い部分は軟弱であるが、中央部は硬く踏み締まっている。調査区内の床面から柱穴や貯蔵穴は検出できなかった。炉も確認できなかったが、調査区外との区画線上の2か所に焼土が認められる。

土層観察用ベルトを調査区外との区画線上に設けたため、本跡の土層は表土層から観察できた。上層は、耕作土と締まりの弱い暗褐色土の2層より成っている。3層以下は、本跡の覆土であり、上位には黒褐色土が、下位には極暗褐色土が堆積し、ともに締まりは弱い。壁際には、黒褐色土が流れ込むように堆積しており、自然堆積層と思われる。

遺物は、覆土中から土師器及びその破片33点が出土している。第84図3の埴形土器、1・2の壺形土器は床面近くから潰れた状態で出土したもので、本跡に伴うものと考えられる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第84図 第67号住居跡出土遺物実測図

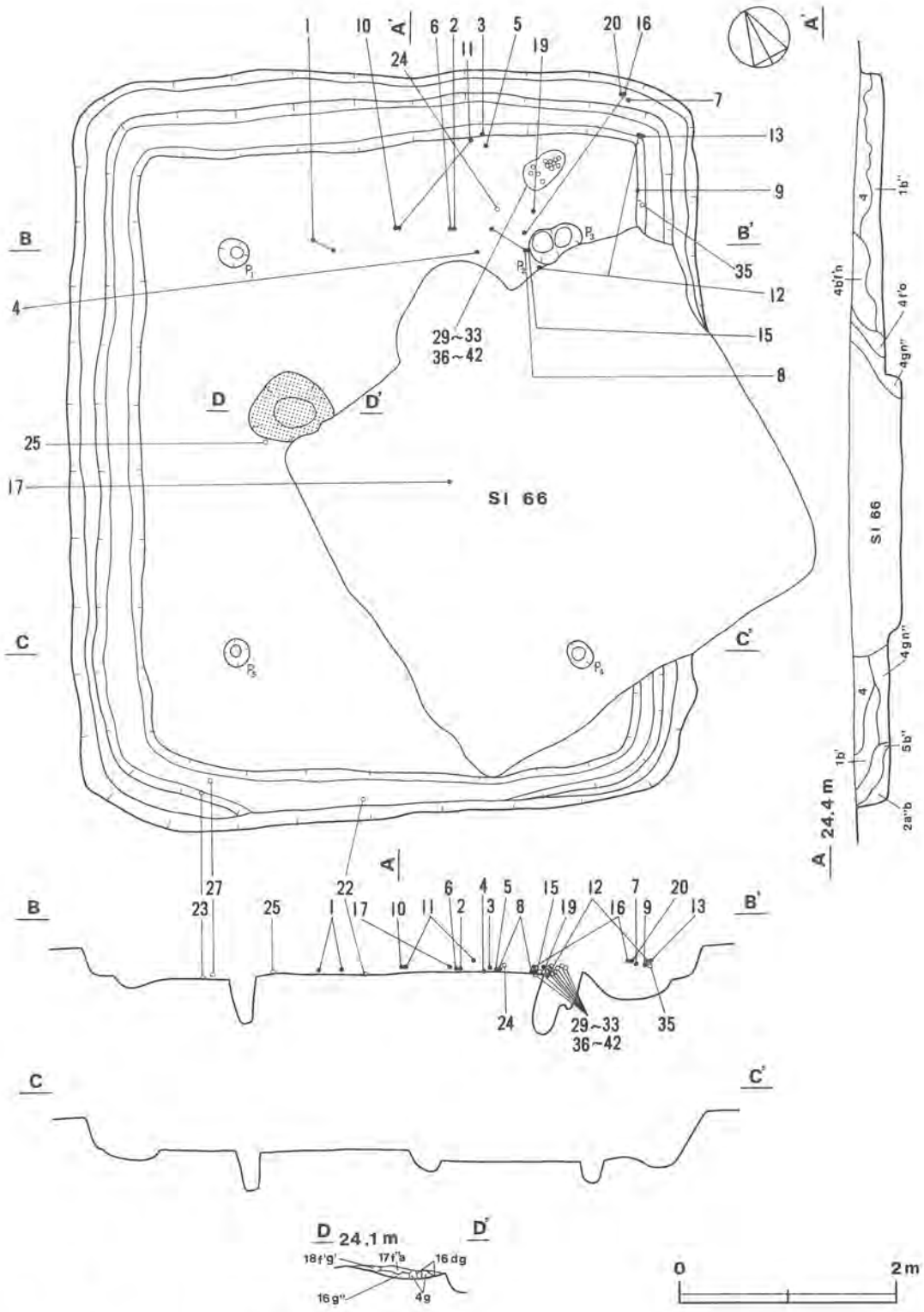
第67号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第84図 1	壺形土器 土師器	A 11.8 B (11.4)	胴部は球形状を呈し、下半部を欠損。口縁部は複合口縁で、外反して開く。	口縁部内・外面は横位のハケ目整形。胴部外面はハケ目整形後、縦位の篋磨き。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	40% P195 PL76
2	壺形土器 土師器	B (3.0) C 5.0	底部片。平底で、胴下半部は内彎して立ち上がる。	外面は縦位の篋磨き後、赤彩。	砂粒・スコリア 赤色 普通	20% P196
3	甗形土器 土師器	A [10.9] B 14.6 C 5.2	胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外傾して開く。	外面は縦位の篋磨き。部分的にハケ目整形。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	60% P194 PL76

第68号住居跡 (第85図)

本跡は、調査区の南東端N4c0区を中心に確認された住居跡で、中央部から南東壁にかけて8世紀の第66号住居跡によって掘り込まれている。本跡の西5mには第77号住居跡が、北5mには第65号住居跡が存在している。

平面形は、長軸6.80m、短軸5.80mの長方形状を呈し、長軸方向はN-27°-Eを指している。床面積は、37㎡ほどあったものと推定される。壁は締まりのあるロームで、60~70cmの角度で外傾して立ち上がっている。壁高は25cmで、壁南東部以外は攪乱もなく残存状況は良好である。壁際から15cmほど内側には、周溝が周回しているが、南東壁側が失われているため全周するか否かは不明である。なお、南西側の周溝は壁の直下を巡っている。周溝は、上幅35cm、深さ10~15cmの規模で、溝底は緩やかに彎曲している。床はロームで、緩やかに起伏している。炉を中心



第85图 第68号住居跡実測図

とする支柱穴の内側は硬く踏み締まっているが、支柱穴の外側は軟弱である。ピットは、5か所を確認した。P₁～P₃・P₅は、残存する床面上に確認され、上端の直径は23～27cm、深さは38～56cmである。P₄は、第66号住居跡の床面から検出されたため確認時の深さは20cmであるが、本来は35cmを越えると思われる。これらのピットは方形に配列されていることから、すべて支柱穴であると判断した。なお、北東部に並立するP₂・P₃は、形態、規模ともほぼ同様であることから、立て替えられた可能性もある。炉は、床面を15cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1mほど北西に寄って位置している。平面形は直径70cmの円形状を呈し、炉内の覆土中に焼土は少ない。炉床は強く焼き締まりレンガ状を呈することから、本跡は長期間使用されたものと思われる。入口部は、炉や柱穴の配置から南東壁側が想定される。

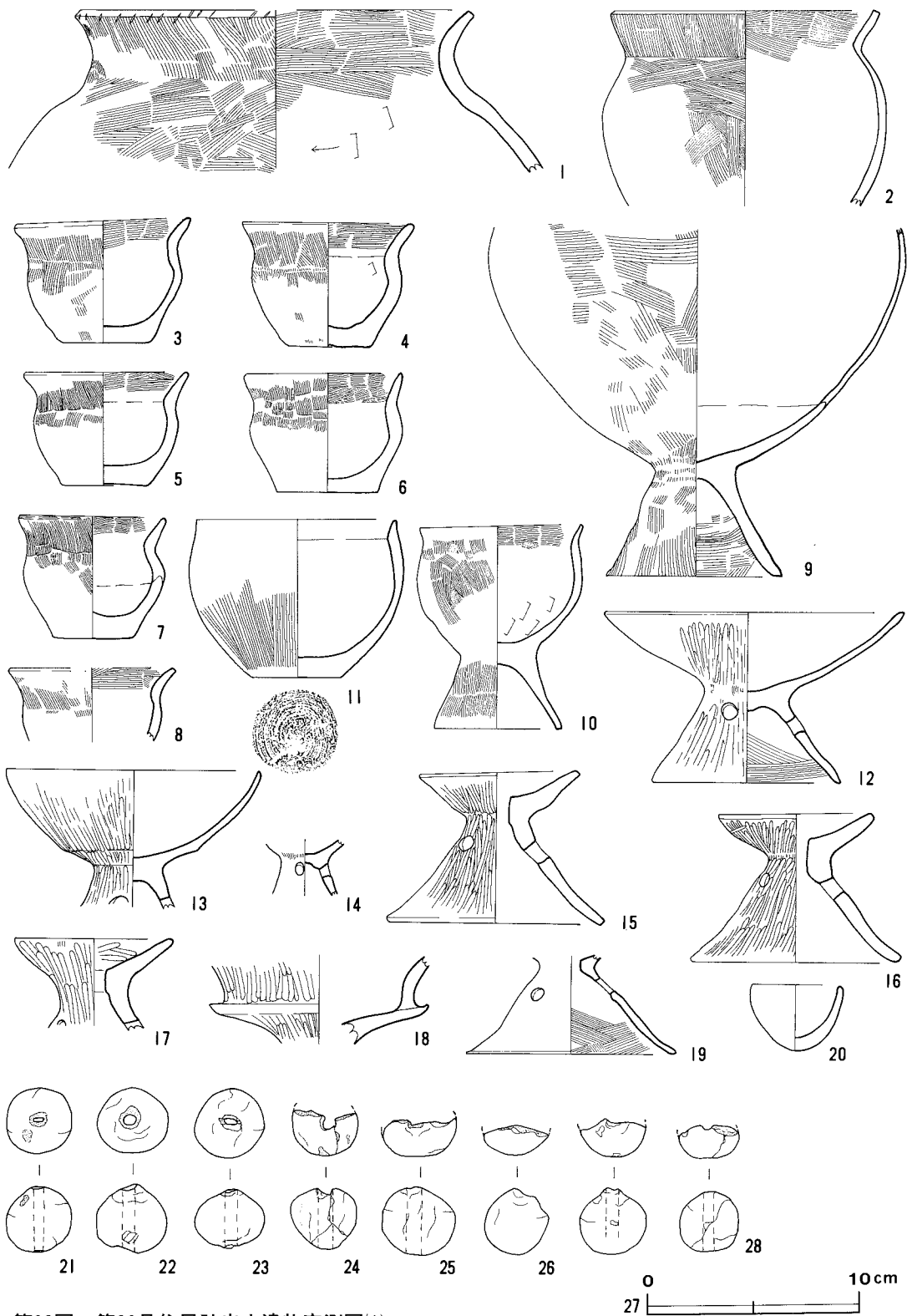
覆土は2層からなり、上層に黒褐色土が、下層に褐色土が堆積している。自然堆積層と思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片166点、手捏土器2点、球状土錘9点、管状土錘14点が出土している。遺物の多くは東コーナー付近に集中しており、第86・87図9の台付甕形土器や29～42の管状土錘、24の球状土錘が床面から出土している。また2の甕形土器や12・13の高坏形土器は破片で、15・16・19の器台形土器、3・7の小型甕形土器、10のミニチュア土器はほぼ完形のまま床面近くから出土している。なお、西コーナー部の床面から甕形土器の破片や、第86図22・23・27の球状土錘が出土している。これらはすべて本跡に伴う遺物と考えられる。

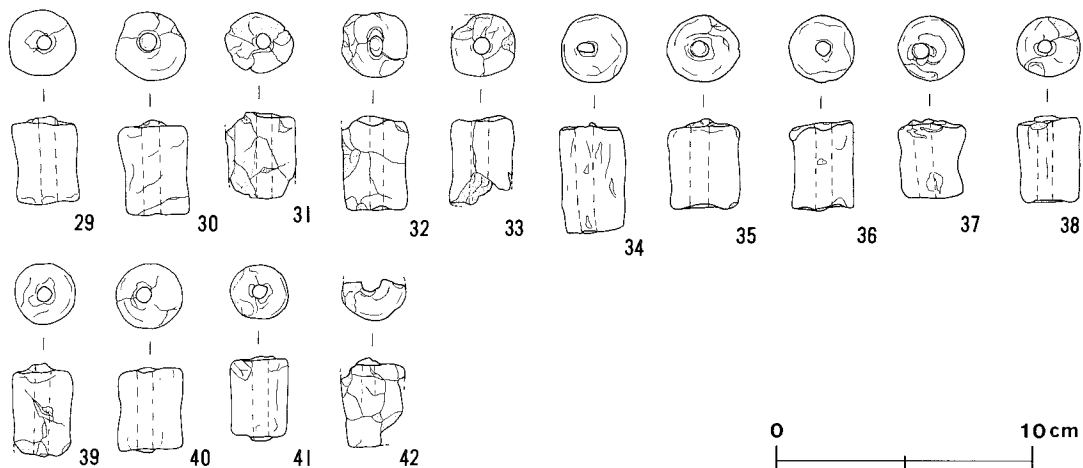
本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。

第68号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第86図 1	甕形土器 土師器	A 19.0	胴中位以下欠損。頸部は内傾し、口縁部は強く外反する。	口唇部はキザミが施される。口縁部内・外面と胴部外面はハケ目整形。	細砂粒 灰褐色 普通	20% P197
		B (7.5)				
2	甕形土器 土師器	A 12.8	胴部は内彎し、最大径を上位に持つ。口縁部は内彎気味に開く。	口縁部内・外面と胴部外面はハケ目整形。	砂粒 暗褐色 普通	40% P198
		B (9.3)				
3	小型甕形土器 土師器	A 7.9	胴部は外傾して立ち上がり、最大径を上位に持つ。口縁部は外反して開く。	口縁部内・外面と胴上半部外面はハケ目整形。口唇部付近は横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	95% P200 PL82
		B 6.0				
		C 4.0				
4	小型甕形土器 土師器	A 7.9	胴部は外傾して立ち上がり、最大径を上位に持つ。口縁部は外反して開く。	口縁部内・外面と胴部外面の上半部はハケ目整形。口唇部付近は横ナデ。	砂粒 橙色 普通	95% P201 PL82
		B 5.9				
		C 4.0				
5	小型甕形土器 土師器	A 7.8	胴部は外傾して立ち上がり、最大径を上位に持つ。口縁部は外傾して開く。	口縁部内・外面と胴部外面上半部はハケ目整形。口唇部付近は横ナデ。	砂粒 橙色 普通	100% P202 PL82
		B 5.4				
		C 4.0				



第86图 第68号住居跡出土遺物実測図(1)



第87図 第68号住居跡出土遺物実測図(2)

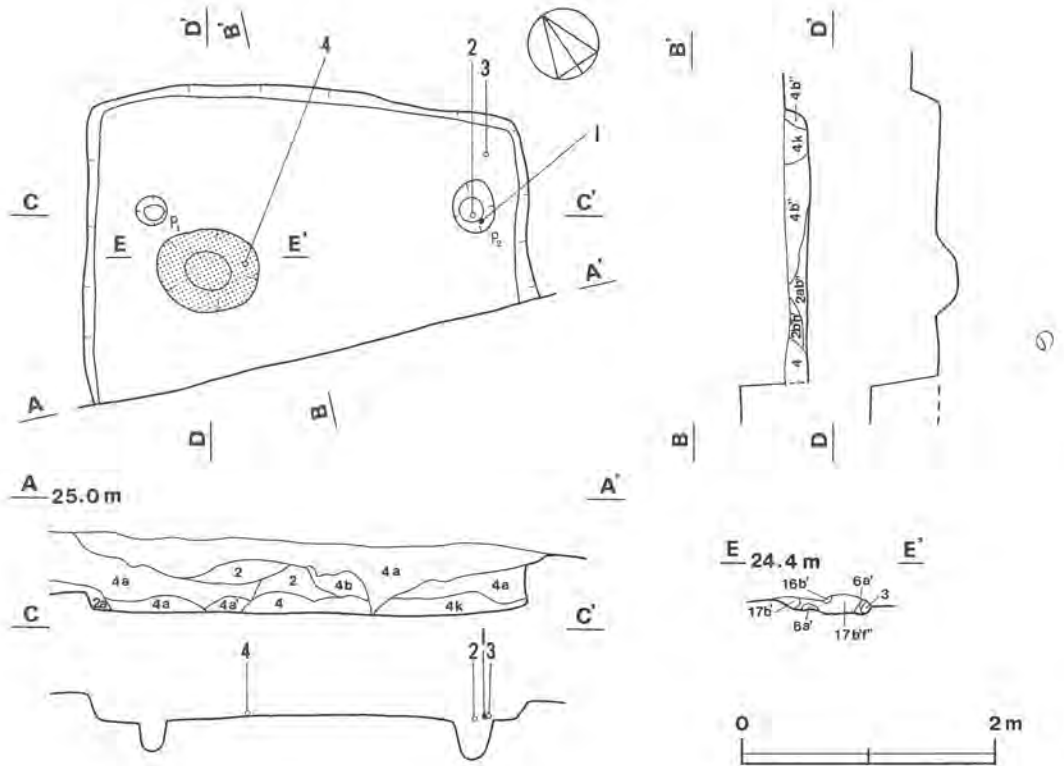
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第86図 6	小型甕形土器 土師器	A 7.6	胴部は外傾して立ち上がり、最大径を上位に持つ。口縁部は外傾して開く。	口縁部内・外面と胴部外面上半部はハケ目整形。口唇部付近は横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	100% P203 PL82
		B 5.7				
		C 6.8				
7	小型甕形土器 土師器	A 7.0	胴部は外傾して立ち上がり、最大径を上位に持つ。口縁部は外傾して開く。	口縁部内・外面はハケ目整形。	砂粒 橙色 普通	100% P204 PL82
		B 5.9				
		C 3.8				
8	小型甕形土器 土師器	A (7.9)	胴下半部欠損。胴上半部は内彎し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面と胴部上半部はハケ目整形。口唇部直下は横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	30% P205
		B (3.5)				
9	台付甕形土器 土師器	B 16.5	脚台部は「ハ」の字状に開く。胴部は内彎して立ち上がるが、上半部欠損。	外面と、脚台部内面はハケ目整形。	バミス多量 明赤褐色 不良	40% P206 PL71
		D 5.0				
		E 8.3				
10	ミニチュア土器(台付甕形) 土師器	A (7.7)	脚部は「ハ」の字状に開く。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	外面と口縁部内面は荒いハケ目整形。胴部内面は篋ナデ整形。	砂粒 橙色 普通	80% P207 PL82
		B 9.7				
		D 3.6				
		E 6.0				
11	碗形土器 土師器	A 9.4	体部は内彎して立ち上がり、口縁部で外反し、内面に稜を持つ。	内・外面ともナデ整形で、胴部外面にハケ目整形痕が残る。	砂粒 にぶい橙色 普通	100% P199 PL78
		B 7.5				
		C 4.1				
12	高環形土器 土師器	A 15.3	脚部は「ハ」の字状に開き、上位に3孔が穿たれる。坏部はわずかに内彎しながら大きく開く。	外面と坏部内面は縦位の篋磨き後、赤彩。脚部内面は横位のハケ目整形。	砂粒 赤褐色 普通	80% P208 PL79
		B 8.4				
		D 4.0				
		E 9.6				
13	高環形土器 土師器	A 12.1	脚部下半欠損。脚部上位に3孔が穿たれる。坏部は下位に稜を持ち、内彎して開く。	外面は縦位の、内面は不定方向の篋磨き後、赤彩。	細砂粒 赤色 良好	60% P209
		B (6.5)				
		D (1.4)				
14	高環形土器 土師器	B (2.7)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開き、上位に3孔が穿たれる。中位以下欠損。	外面はハケ目整形後、赤彩。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	30% P211
		D 1.7				

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第86図 15	器台形土器 土師器	A 7.6	脚部は「ハ」の字状に開き、上位に3孔が穿たれる。坏部は外傾して開き、中央孔が穿たれる。	外面と器受部内面は篋磨き後、赤彩。脚部内面はナデ整形。	砂粒・スコリア 赤褐色 良好	100% P212 PL81
		B 7.2				
		D 5.0				
		E 10.4				
16	器台形土器 土師器	A 7.4	脚部は「ハ」の字状に開くが、中位にわずかな膨みを持つ。脚部上位に3孔が穿たれる。坏部は内彎して開き、中央孔が穿たれる。	外面と器受部内面は篋磨き後、赤彩。脚部内面はナデ整形。	砂粒・スコリア 明赤褐色 良好	100% P213 PL81
		B 7.1				
		D 4.5				
		E 10.0				
17	器台形土器 土師器	A 7.6	脚部上位に3孔が穿たれるが、中位以下を欠損する。器受部は接合部から緩やかに外反して立ち上がる。接合部に中央孔が穿たれる。	外面と器受部内面は篋磨き後、赤彩。	細砂粒 明赤褐色 良好	40% P215
		B (4.1)				
		D (2.1)				
18	装飾器台形土器 土師器	B (3.9)	器受部片。器受部底面は円板状を呈し、外側に張り出す。体部は底部から外傾して立ち上がるが、上位を欠損する。	内・外面とも丁寧な篋磨き後、赤彩。	細砂粒 にぶい赤褐色 良好	20% P210 PL81
		B (4.7)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開き、上位に3孔が穿たれる。接合部に中央孔が穿たれる。	外面はナデ整形後、赤彩。内面は横位のハケ目整形。	バミス 赤褐色 不良	60% P214 PL81
19	器台形土器 土師器	D 4.2	丸底。砲弾状を呈する。	内・外面ともナデ整形。	細砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	95% P216 PL82
		E 9.9				
20	ミニチュア土器(埴形) 土師器	A 4.3 B 3.1				

第71号住居跡 (第88図)

本跡は、調査区の南東端 N4b1区を中心に確認された住居跡で、南東壁は縄文時代中期の第72号住居跡を掘り込み、南半分は調査区外へと延びている。本跡の北西 5 m には第75号住居跡が、東 7 m には第67号住居跡が存在している。

本跡は北半分のみ調査であるため、その平面形は明らかではないが、残存する壁面等から一辺が3.5m ほどの方形状を呈するものと思われる。主軸方向も明らかではないが、北東壁の方向は N-55°-W である。調査できた床面積は6.1m²であるが、本来は11m²ほどの規模であったものと思われる。壁は締まりの弱いロームで、70~75度の角度で外傾して立ち上がっている。北東壁の中央部は、耕作による攪乱を受けている。壁溝は存在しない。床はロームで、平坦である。炉の東から中央部に向かったの床面は極めて硬く踏み締まっているが、壁際から50~70cm内側までの床面は軟弱である。ピットは、2か所確認した。P₁の上端直径は23cm、深さは24cmであり、P₂の上端直径は32cm、深さは30cmである。両ピットの規模は若干異なるものの、北と東のコーナー部に位置していることから、2本とも支柱穴と判断した。炉は、床面を10cmほど掘り下げた地床炉で、北コーナー部に寄って位置している。平面形は、長径78cm、短径65cmの楕円形状を呈する。

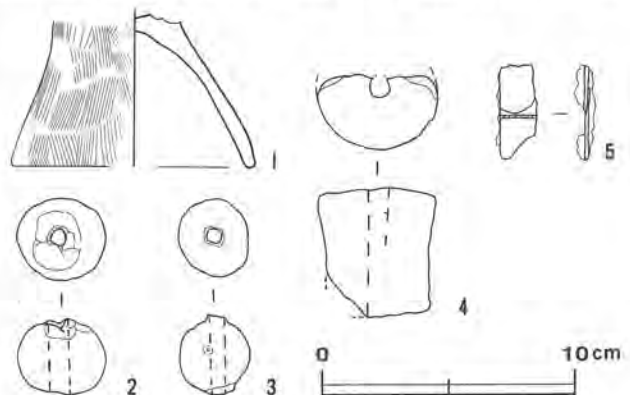


第88図 第71号住居跡実測図

長径方向はN-55°-Wを指し、本跡の北東壁の方向と同一である。炉内には焼土を含む暗赤褐色土が堆積しているが、炉床の焼き締まりはそれほど強くない。入口方向は、南東あるいは南西方向が想定されるが、推定の域を出ない。

覆土は、上層から下層に至るまで黒褐色土で、部分的にロームを含み斑状を呈している。木根による攪乱が著しく明確ではないが、人為堆積の可能性が高い。

遺物は、床面や覆土中から土師器片29点、球状土錘2点、管状土錘1点、鉄製品1点、自然礫2個を出土している。第89図1の台付甕形土器の脚部は南東壁際の床面から横位で出土したが、これに接合する土器片は見当らなかった。4の管状土錘は、炉の確認面から出土している。5の鉄製品は東側の覆土中から出土したもので、本跡との関係は不明である。



第89図 第71号住居跡出土遺物実測図

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。

第71号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第89図 1	台付甕形土器 土師器	B (6.0) D 5.8 E (9.6)	脚台部片。脚台部は「ハ」の字状に開き、裾部でわずかに内彎する。	外面は縦位のハケ目整形。内面は篋ナデ整形後、赤彩。	砂粒にぶい橙色 普通	20% P217

第73号住居跡 (第90図)

本跡は、調査区の南東端 N4e9 区を中心に確認された比較的大形の住居跡で、その南半分は調査区外へと延びている。本跡の北21m には第59号住居跡が、西19m には第62号住居跡が位置している。なお、同時期の大型住居である第41号住居跡は、北西32m に存在している。

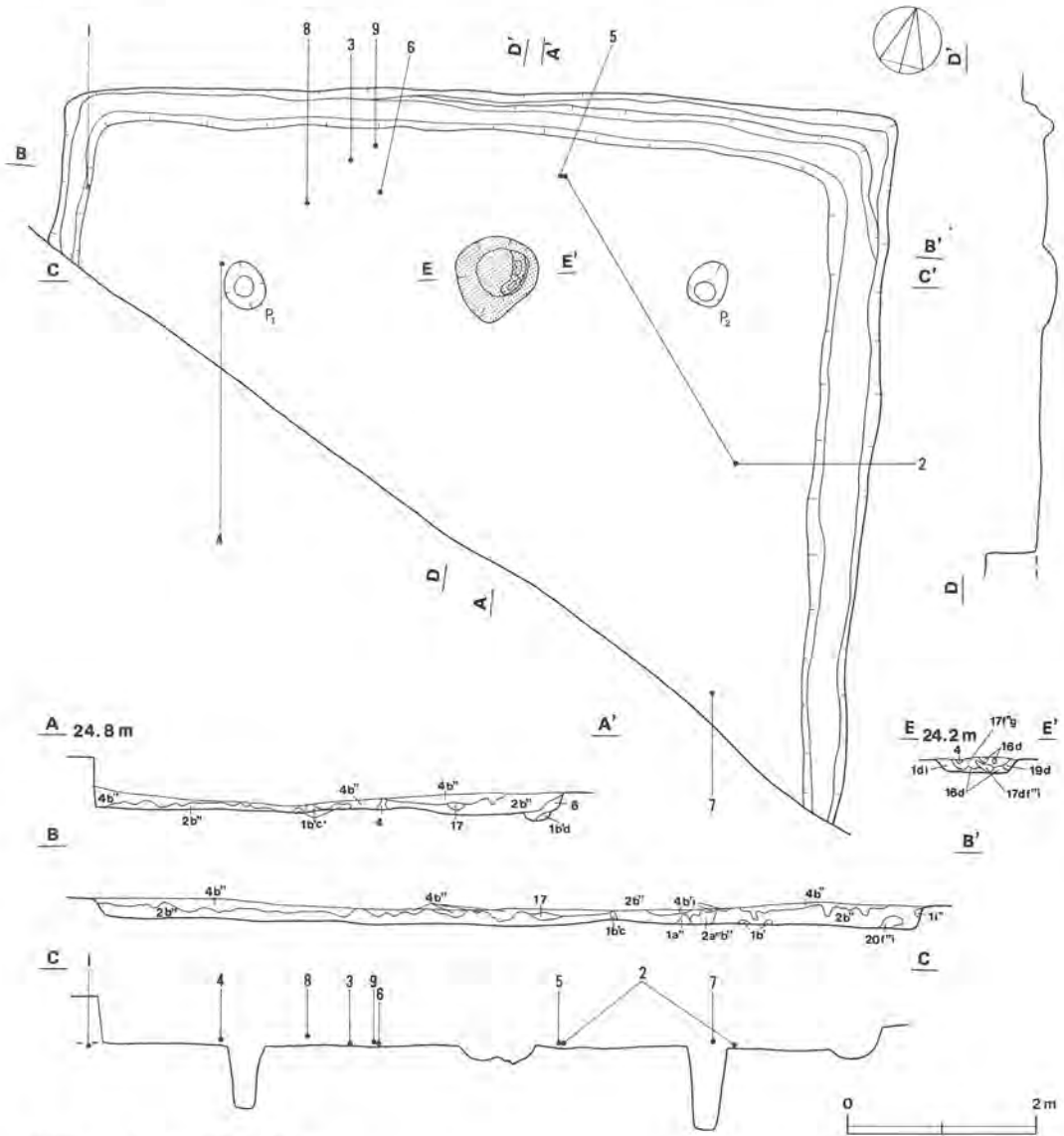
平面形は、本跡の南半分が調査区外に延びているため明確ではないが、一辺が8.7m ほどの方形状を呈し、主軸方向はN-15°-Wを指すものと推定される。調査した床面積は39.4m²であるが、本来は74m²ほどであったものと思われ、第38・41・107号住居跡に次ぐ大規模な住居跡である。壁は締まりの弱いロームで、60~70度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は20cmで残存状況は良好である。壁溝や周溝は認められない。床はロームで、平坦である。特に踏み締まった所もなく、全体に軟弱な床面である。ピットは、調査範囲から2か所確認されている。上端直径は40cm、深さは69~88cmの規模であり、北東と北西コーナー近くに位置している。両ピットの規模と、配列に規則性が窺えることから、2本とも支柱穴の一部であると判断した。調査範囲に貯蔵穴は存在しない。炉は、床面を15cmほど掘り込んだ地床炉で、中央から極端に北に寄り、P₁とP₂を結ぶ線上に位置している。平面形は直径88cmの円形状を呈している。炉内の覆土は、上層に焼土少量を含む暗赤褐色土が、下層に赤褐色土が堆積している。炉床は、ほとんど焼けていないため使用頻度は低かったものと思われる。

覆土は自然堆積で、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積しているが、上・下層とも締まりは弱い。

遺物は、床面や覆土中から弥生式土器片16点、土師器及びその破片280点が出土している。弥生式土器片は覆土の上層から中層にかけて出土していることから、本跡が埋没する過程で流れ込んだものと思われる。本跡に伴う遺物は各壁際から出土している。北壁際は比較的遺物が多く、第91図6の塊形土器が完形で出土しているほか、3の小型壺形土器底部、5の埴形土器下半部、8・9の高坏形土器脚部等も出土している。東壁際の床面近くからは2の壺形土器底部や7の高坏形土器坏部が出土している。南壁際の床面近くにも多くの土師器片が散在していたが、実測可能なも

のはなかった。西壁際の床面からは1の小型甕形土器が完形のまま横位で出土している。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代中期の和泉期に比定される住居跡と思われる。

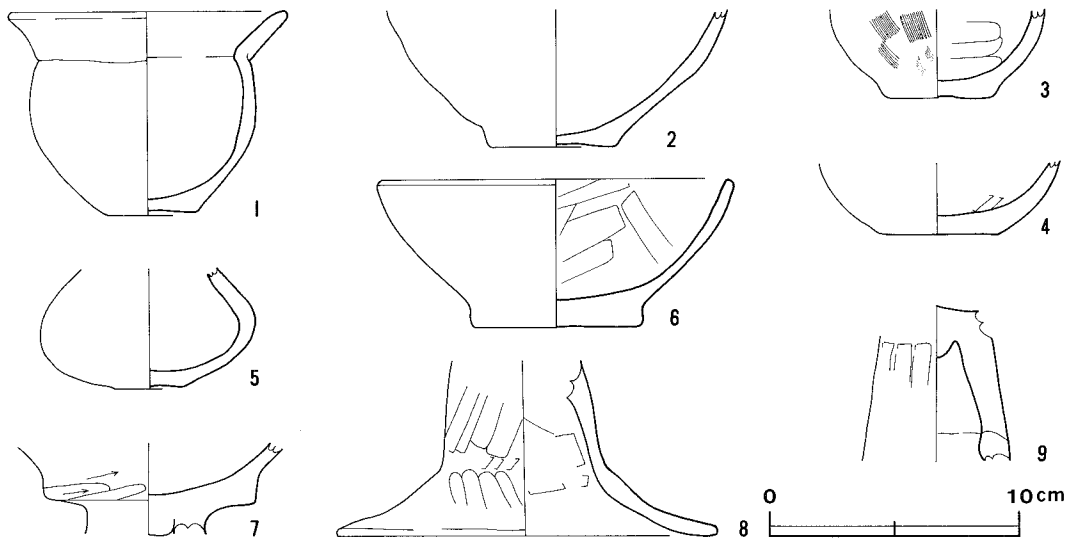


第90図 第73号住居跡実測図

第73号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第91図 1	小型甕形土器 土師器	A 11.3 B 8.2 C 4.0	上げ底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を上位に持つ。口縁部は外反して開き、頸部に接合痕を残す。	内・外面とも丁寧なナデ整形。	砂粒にふい橙色普通	100% P222 PL77

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第91図 2	壺形土器 土師器	B (5.5) C 5.0	上げ底。胴部は内彎して立ち上がり、上半部を欠損する。	内・外面とも篋ナデ整形。	細砂粒 褐灰色 不良	20% P 219
3	小型壺形土器 土師器	B (3.6) C 3.9	上げ底。底部引き締まり、胴部は強く内彎して立ち上がる。胴上半部を欠損する。	外面はハケ目整形。内面はナデ整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	20% P 221
4	壺形土器 土師器	B (2.9) C 4.4	胴部は内彎して立ち上がり、上半部を欠損する。	内・外面とも篋ナデ整形。	細砂粒 灰黄褐色 普通	20% P 220
5	埴形土器 土師器	B (4.9) C 2.7	上げ底。胴部は中央部が強く張り出し、偏平な球形を呈する。口縁部を欠損する。	外面は剥落が著しく整形技法不明。内面は篋ナデ整形。	スコリア にぶい橙色 不良	60% P 223
6	埴形土器 土師器	A [14.2] B 6.0 C 6.7	底部は引き締まる。体部は内彎して立ち上がり口縁部に至る。	内・外面とも粗雑な篋ナデ整形。	砂粒 赤橙色 普通	80% P 227 PL78
7	高坏形土器 土師器	B (3.7)	坏部片。坏部下位は引き締まり、平底となる。接合部はソケット状を呈する。	内・外面ともナデ整形。	砂粒・スコリア 橙色 普通	20% P 224
8	高坏形土器 土師器	B (7.1) E 15.4	脚部片。脚部は円筒形状で、裾部は大きく開く。	外面は篋削り。内面は篋ナデ整形。裾部外面は横ナデ。	砂粒 明赤褐色 良好	30% P 225
9	高坏形土器 土師器	B (6.2)	脚部片。脚部は円筒形状を呈する。下位は欠損する。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	20% P 226

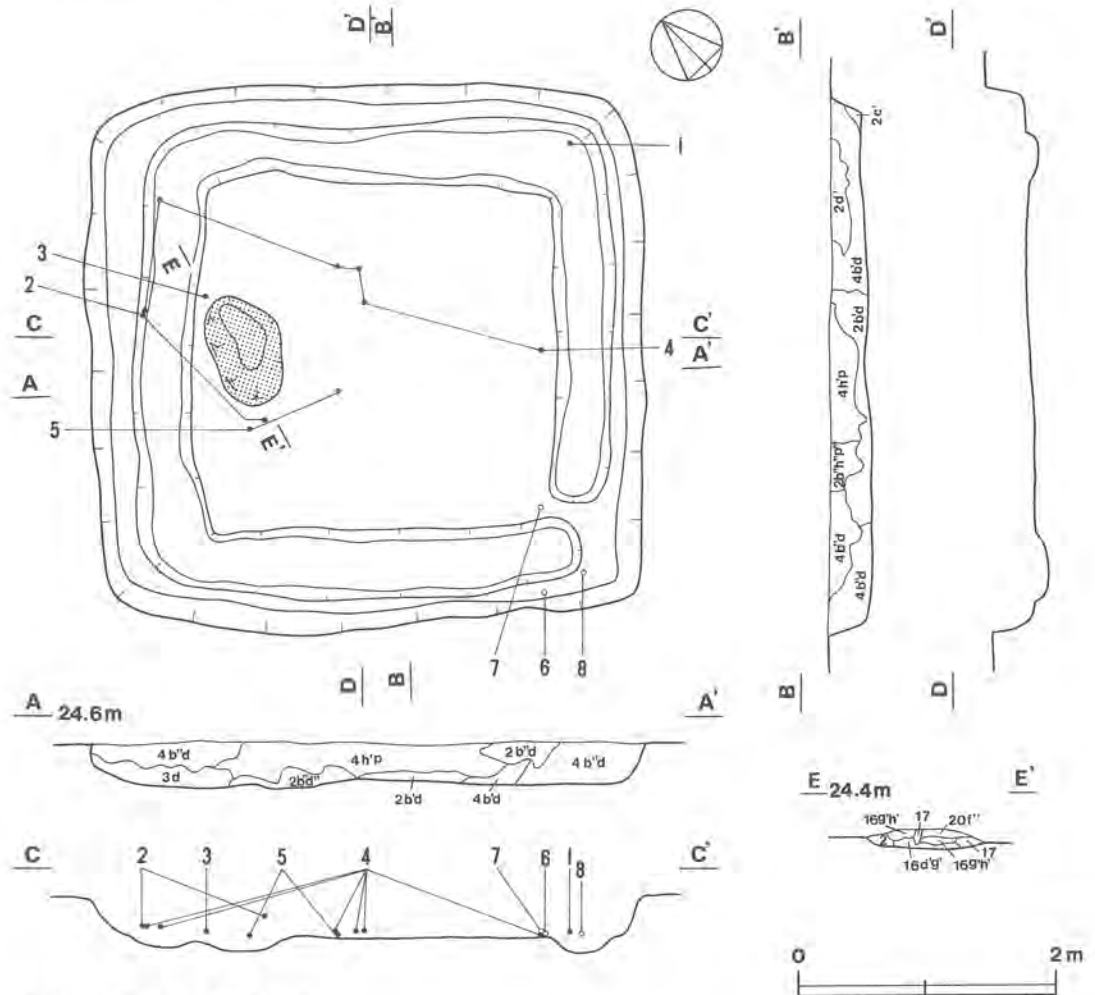


第91図 第73号住居跡出土遺物実測図

第75号住居跡 (第92図)

本跡は、調査区の南東部 N3a0区を中心に確認された住居跡で、北西壁から南西壁にかけては、当調査区を南北に縦断する第6号溝に1 mほどの幅で掘り込まれている。本跡の北12mには第36号住居跡が、西2 mには第55・63号住居跡が存在している。

平面形は、一辺4.3mの方形状を呈し、主軸方向はN-47°-Wを指している。床面積は15.7㎡と、やや小規模である。壁は締まりの弱いロームで、北東壁はほぼ垂直に、その他は60~70度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は30~34cmである。壁際から8~20cm内側の床面には、周溝が周回している。周溝はほぼ全周するが、南コーナー部は部分的に切れている。周溝の上幅は40~55cm、深さは6~10cmである。床はロームで、ほぼ平坦である。床面は全体的に踏み締まっている。ピットや貯蔵穴は無い。炉は、床面を8cmほど掘り込んだ浅い皿状の地床炉で、中央から長軸線にそって90cmほど北西に寄り、全体として北西壁の近くに位置している。平面形は、



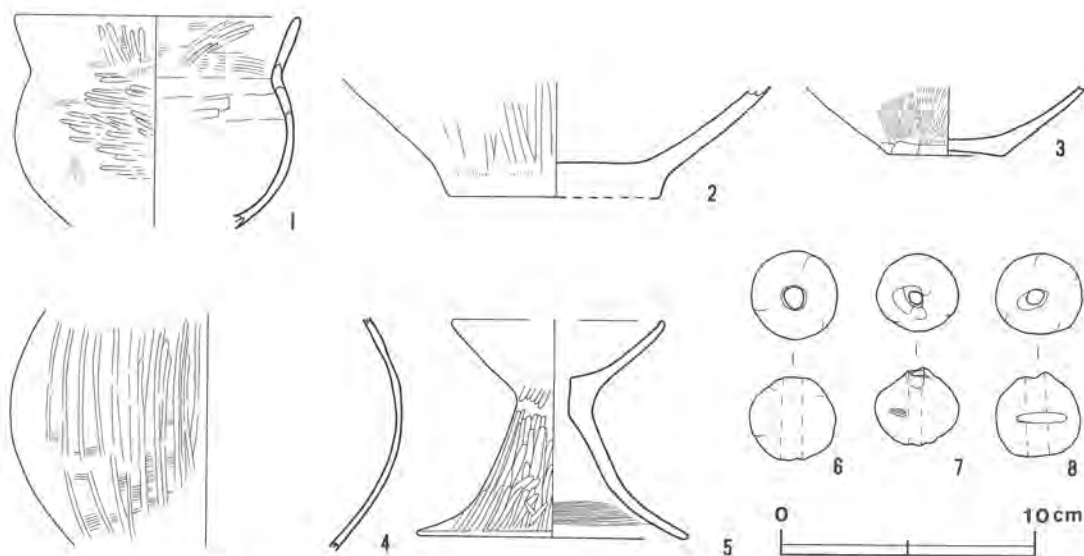
第92図 第75号住居跡実測図

長径90cm, 短径55cmの楕円形状を呈し, 長径方向はN-26°-Eを指している。炉内には, 焼土や焼土ブロックを含む赤褐色土が堆積しているが, 炉床の焼き締まりは弱いことから, 使用期間は短かったものと思われる。入口部は炉の位置から考えて, 南東壁側が想定される。

覆土は, 全体的に締まっており, 上層に黒褐色土, 下層に暗褐色土が堆積する。自然堆積であるが, 攪乱が著しい。

遺物は, 床面や覆土中から土師器及びその破片61点, 球状土錘3点が出土している。第93図1の小型甕形土器は東コーナー部の床面近くからほぼ完形で, 2・3の甕形土器底部は北西壁際の覆土下層から出土している。5の器台形土器は, 炉の東側の床面上から出土している。4の壺形土器胴部片は, 北西壁際の覆土下層から出土した破片と中央部や南東壁際の床面から出土した破片とが接合したものである。球状土錘は, 3点とも南コーナー部の覆土下層から出土している。これらの遺物は, すべて本跡に伴うものと考えられる。

本跡は, 遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第93図 第75号住居跡出土遺物実測図

第75号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第93図 1	小型甕形土器 土師器	A 11.3 B (8.4)	底部欠損。胴部は球形形状を呈し, 最大径を上位に持つ。口縁部は外傾して開く。	口縁部内・外面と胴部外面は寛磨ぎ, 胴部内面は寛ナデ整形。内・外面とも赤彩。	砂粒 にぶい赤色 良好	70% P229 PL82

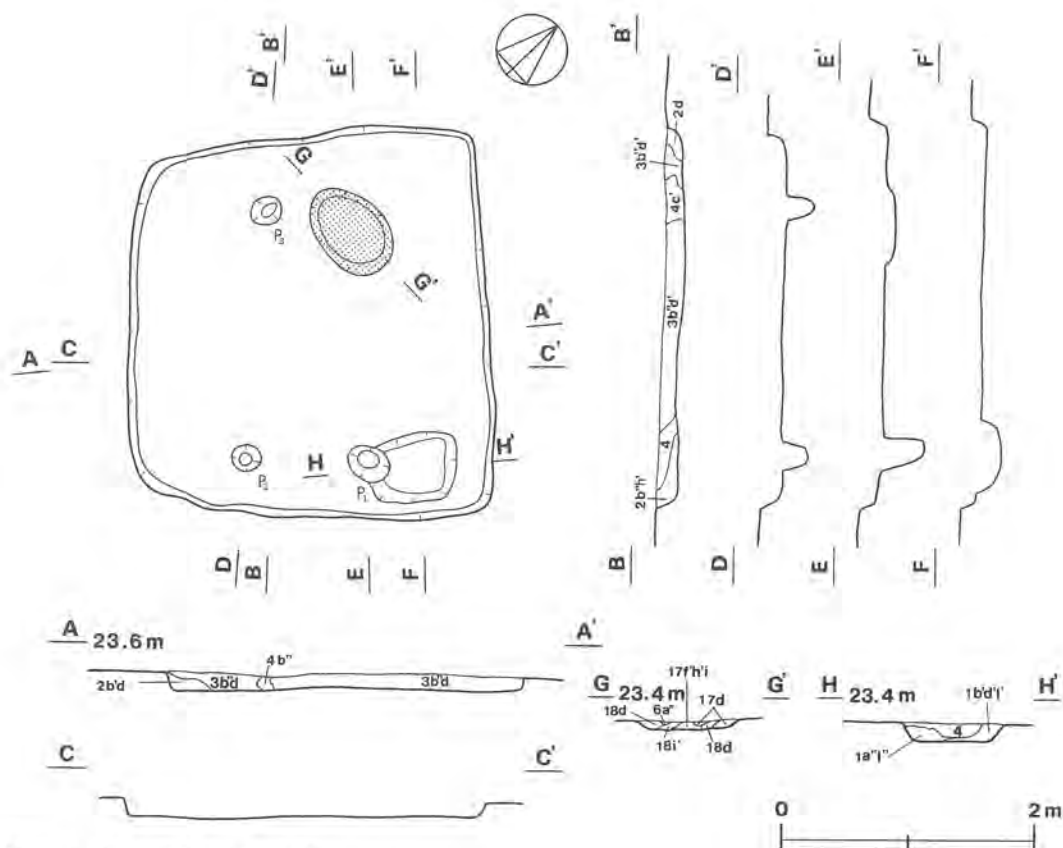
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第93図 2	甕形土器 土師器	B (4.5) C [8.2]	平底。底部は引き締まる。	外面は縦位の篋磨き。	細砂粒 明褐色 良好	20% P230
3	甕形土器 土師器	B (2.7) C 4.5	底部片。上げ底。胴部は内彎して立ち上がる。	胴部外面はハケ目整形。底部との境は横位の篋削り。	砂粒 明赤褐色 普通	20% P231
4	壺形土器 土師器	B (18.4)	胴部片。胴部は球形状を呈する。底部と口縁部は欠損。	外面は縦位の篋磨き。内面は横位の篋ナデ整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	30% P228
5	器台形土器 土師器	A [8.3] B 8.6 D 5.7 E 10.7	脚部は「ハ」の字状に開き、裾部は緩やかに広がる。器受部は内彎気味に開き、接合部に中央孔が穿たれる。	外面は縦位の篋磨き。脚部内面は横位のハケ目整形。内・外面とも赤彩。	砂粒・スコリア 赤褐色 良好	70% P232

第76号住居跡 (第94図)

本跡は、調査区の北東部K4ii区を中心に確認された住居跡で、北東部は、縄文時代後期の第80号住居跡を掘り込んでいる。本跡の北6mには第30号住居跡が、東3mには第31号住居跡が存在している。

平面形は、長軸3.0m、短軸2.84mの方形状を呈するが、南西壁は、相対する北東壁より30cmほど短くなっている。主軸方向はN-41°-Wを指している。床面積は7.7㎡で、当調査区の同時期の住居跡の中では最も小規模である。壁は締まりのあるロームで、70~75度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は11~14cmで、壁面は耕作による攪乱を受けている。壁溝は存在しない。床はロームで、平坦である。全体的に硬く踏み締められ、炉の南側にあたる中央部は特に硬く踏み締まっている。ピットは3か所を掘り込んだが、貯蔵穴に接したP₁以外は、小規模で底面も凹凸が激しいため本跡に伴う柱穴とは思われない。P₁は、上端直径25cm、深さ34cmの規模で、貯蔵穴に近接し、底面も平坦であることから、貯蔵穴に関係する施設の柱穴と思われる。貯蔵穴は、東コーナー部に位置し、平面形は長軸70cm、短軸52cmの長方形状を呈する。深さは18cmと浅く、内部の覆土は自然堆積である。床面の北部には、焼土を含む暗赤褐色土が堆積している場所が認められた。平面形は長径76cm、短径53cmの楕円形状を呈し、5cmほどの掘り込みを有するが、底面はまったく焼けていない。ここを炉と断定するには疑問が残るが、土層には攪乱もないことから、本跡に伴う燃焼施設ということで、本稿では一応「炉」として扱うこととする。いずれにせよ、使用頻度はかなり低かったものと思われる。入口部は、炉や貯蔵穴との位置関係から南東あるいは南西壁方向が想定される。

覆土は自然堆積で中央部には締まりの有る極暗褐色土が、壁際には暗褐色土が流れ込むように



第94図 第76号住居跡実測図

堆積している。

遺物は、床面や覆土中から土師器片88点が出土しているが、実測可能なまでに復元できるものは1点もなかった。本跡に伴うと思われる破片は北側の床面を中心に11点ほど出土しており、そのほとんどは篋磨きが施された壺形土器の胴部片やハケ目が施された甕形土器胴部片である。

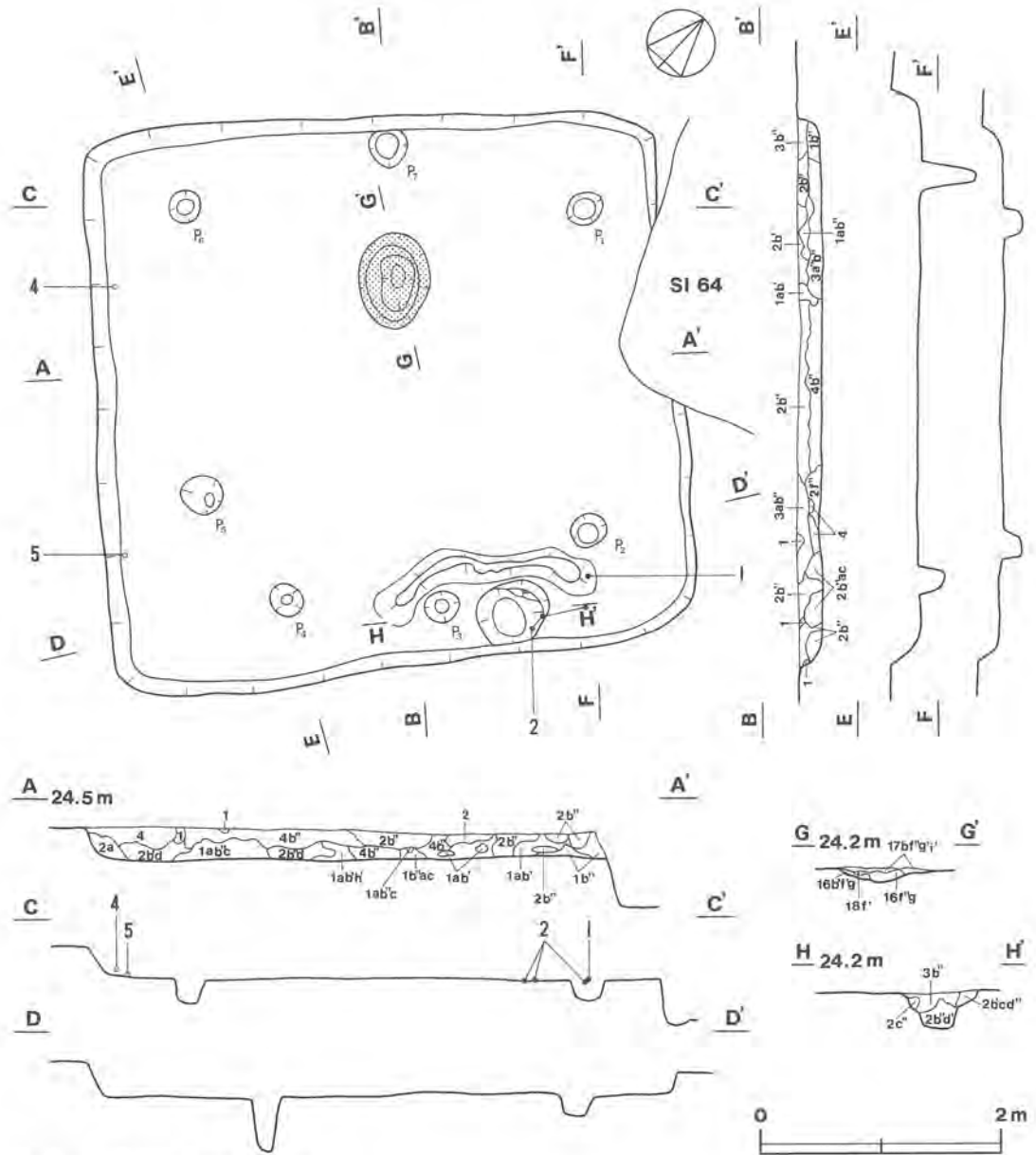
本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。

第77号住居跡 (第95図)

本跡は、調査区の南東部 N4b7区を中心に確認された住居跡で、北東壁は8世紀代の第64号住居跡に、南コーナー部は同じく8世紀代の第82号住居跡によって掘り込まれている。本跡の北西9mには第61号住居跡が、東5mには第68号住居跡が存在している。

平面形は、長軸4.87m、短軸4.60mの方形状を呈し、長軸方向はN-47°-Eを指している。床面積は19.8m²である。壁は締まりの弱いロームで、60度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は20cmであるが、北東壁の一部と南コーナー部については不明である。壁溝は存在しない。床はロームで、平坦である。床面の中央部は叩き締められたように固まっているが、支柱穴

の外側は軟弱である。ピットは7か所確認され、いずれも本跡に伴うものと考えられる。 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_4 \cdot P_5$ は支柱穴と思われる。 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_6$ の上端直径は25cm, 深さは17~23cmほどで, P_5 の上端直径は35cm, 深さは60cmである。 P_7 は、支柱穴に次ぐ重要な柱穴と思われ、上端直径は35cm, 深さは22cmほどである。 P_3 は、貯蔵穴を囲む周堤の内側に位置することから、貯蔵穴に関する施設の柱穴と思われる。 P_4 は、床面が近くまで踏み締まっている事などから、入口部に関する柱穴と推定される。貯蔵穴は、南東壁際に位置し、平面形は円形状である。上端直径は55cm, 深さは



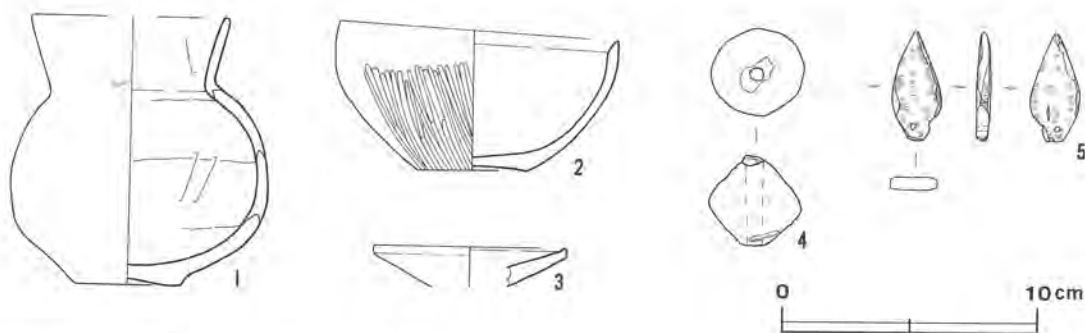
第95図 第77号住居跡実測図

35cmである。貯蔵穴の南西20cmにはP₃が近接し、これらの北西には、高さ3～4cm、幅25cm、長さ1.9mの周堤が床面と貯蔵穴施設とを区画している。炉は、床面を10cmほど掘り込んだ地床炉で、中央から1mほど北西に寄って位置している。平面形は楕円形で、長径は80cm、短径は60cmである。炉の長径方向は、本跡の短辺の傾きと同一であり、この方向が本跡の主軸線にあたると思われる。炉内には多量の焼土が堆積している。炉床は強く焼き締まりレンガ状を呈し、長期にわたって使用されたことが窺える。入口部は、南東壁側にあったものと推定される。

覆土は、全体的に締まりが弱く、上層に暗褐色土、下層に黒褐色土が堆積している。自然堆積であるが、大部分が攪乱を受けている。

遺物は、床面や覆土中から土師器とその破片113点、球状土錘1点、滑石製の剣形模造品1点、後世の流れ込みと思われる須恵器片5点が出土している。本跡に伴う遺物は、貯蔵穴周辺の床面に多く、第96図1の小型壺形土器や2の塊形土器が潰れた状態で出土している。南西壁際の床面には4の球状土錘と5の剣形模造品が出土しており、これも本跡に伴うものと思われる。また、炉の北西側の床面には高坏形土器の坏部片がまとまって出土しているが、実測可能なまでには復元できなかった。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第96図 第77号住居跡出土遺物実測図

第77号住居跡出土土器観察表

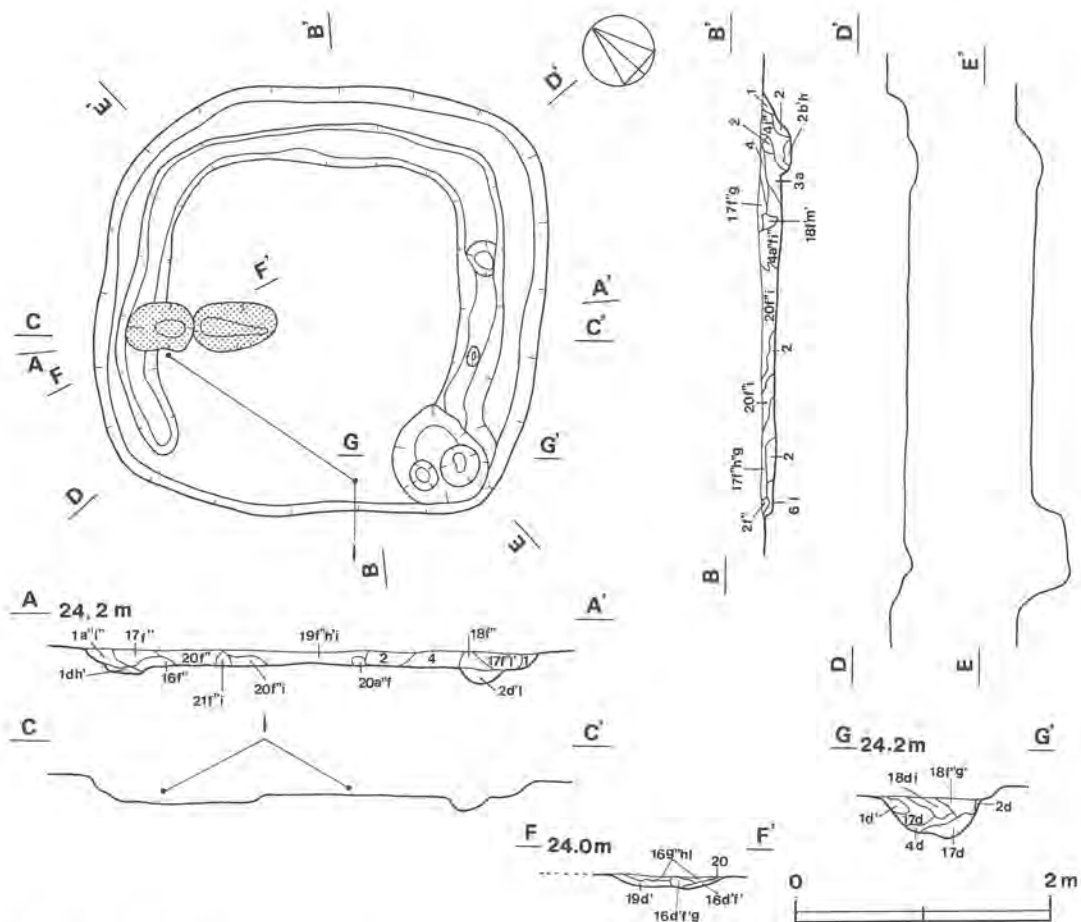
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第96図 1	小型壺形土器 土師器	A [7.8]	上げ底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	外面と口縁部内面にハケ目整形痕が残る。胴部内面は篋ナデ整形。	砂粒 橙色 普通	70% P233 PL76
		B 10.7				
		C 4.2				
2	塊形土器 土師器	A 10.9	上げ底。体部は外傾して立ち上がり、上位で強く内彎する。口縁部内面に稜を持つ。	口縁部は横ナデ整形。体部外面は篋磨き。内・外面とも赤彩。	細砂粒 赤褐色 普通	90% P236 PL78
		B 5.3				
		C 4.1				

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第96図 3	器台形土器 土師器	A 7.7 B (1.6)	器受部片。器受部は皿状を呈し 口縁部は直立する。接合部を欠 損する。	内・外面ともナデ整形後、赤彩。	砂粒・雲母 赤褐色 普通	30% P235

第95号住居跡 (第97図)

本跡は、調査区の南西部M2e4区を中心に確認された住居跡である。本跡の北東20mには第15号住居跡が、東2mには第107号住居跡が存在している。

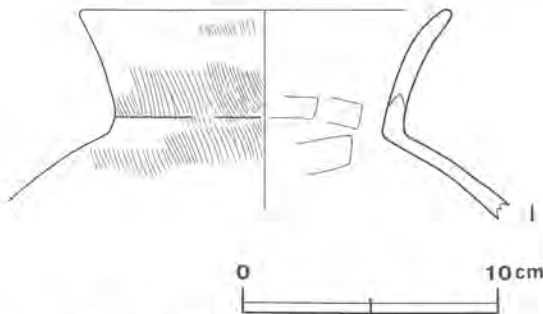
平面形は、長軸3.45m、短軸3.35mの隅丸形状を呈し、長軸方向はN-36°-Wを指している。床面積は11.3m²と小規模である。壁は縮まりの弱いロームで、55~60度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は13cmと浅いが、壁面は良く残っている。周溝は壁際から20cmほど内側に掘られているが、南西壁側には存在せず、平面形は「コ」の字状を呈している。床はロームで、緩や



第97図 第95号住居跡実測図

かに起伏し、特に踏み締まった部分もない。床は全体的に軟弱である。本跡に伴うピットは検出されなかった。貯蔵穴は、南コーナー部に位置する。平面形は円形状を呈し、上端直径は70cm、深さは30cmである。貯蔵穴の底面から南壁にかけては、部分的に攪乱を受けている。炉は、床面を10cmほど掘り込んだ地床炉で、中央から70cmほど北西に寄った位置にある。炉の北西部は攪乱を受けているため平面形等は明確でないが、残存部の形態から推定して、長径65cm、短径35cmの楕円形状を呈していたと思われる。炉内には多量の焼土粒子が堆積しているが、炉床はそれほど焼けていない。炉の使用期間は短かったものと思われる。入口部は、南東壁側、あるいは南西壁側が想定される。

覆土の堆積状況は、覆土が薄い上に焼土ブロックや炭化材が多量に混入しているため、明らかではない。焼土ブロックや炭化材は床面にも多量に散在していることから、本跡は居住期間中、あるいは廃絶後まもなく焼失したものと思われる。



第98図 第95号住居跡出土遺物実測図

遺物は、床面や覆土中から土師器片32点が出土している。本跡に伴うと思われる遺物は少なく、第98図1の壺形土器口縁部片が西コーナー部の焼土中に正位で出土しているほか、ハケ目や篋磨きが施された土師器の小破片が4点出土しただけである。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。

第95号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第98図 1	壺形土器 土師器	A 14.7 B (8.3)	胴下半部欠損。胴上半部は内彎し、口縁部は外反して開く。	外面はハケ目整形で、口唇部直下は横ナデ。	長石にぶい橙色良好	30% P237

第98号住居跡 (第99図)

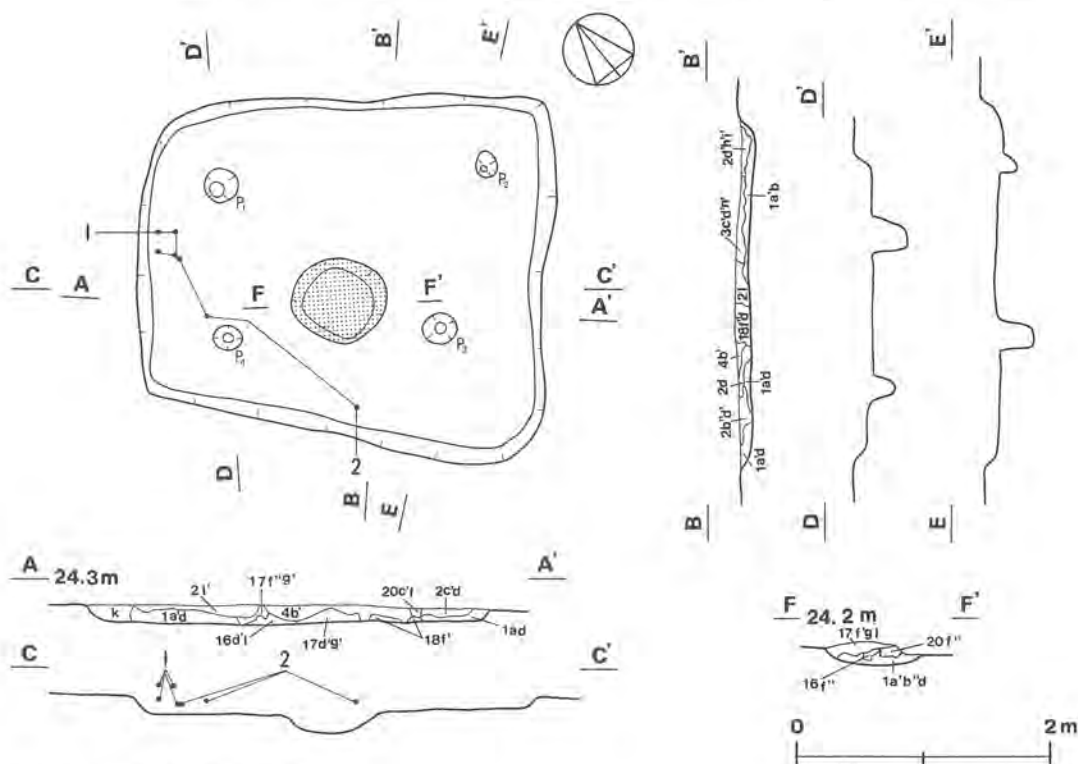
本跡は、調査区の南部 M3h3区を中心に確認された住居跡で、南コーナー付近の床面は縄文時代中期の第480号土坑を、北コーナー付近の床面は本跡より古い時期の第282・283号土坑を掘り込んでいる。本跡の西8mには第99号住居跡が、南6mには第114号住居跡が存在している。

平面形は、長軸3.20m、短軸2.70mの台形状を呈するが、南・北のコーナー部は丸味を帯びている。長軸方向はN-45°-Wを指す。床面積は7.7㎡で、比較的小規模である。壁は締まりの弱いロームで、北壁と南壁は70度の角度で外傾し、西壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。壁

高は13cmと浅いが、攪乱は少ない。壁溝は存在しない。床は、南・北のコーナー付近を除いてはロームであり、緩やかに起伏している。北コーナー部に所在する第282・283号土坑上には、貼り床が認められる。床面は全体的に軟弱である。ピットは4か所確認した。各ピットの先端直径は20~25cm、深さは15~31cmで、規模的にはやや不揃いの感はあるが、方形に規則的な配列が認められることから、4本とも本跡の支柱穴と判断した。貯蔵穴は存在しない。炉は、床面を10cmほど掘り下げた地床炉で、中央からわずかに南西に寄って位置している。平面形は円形状を呈し、直径は70cmである。炉内には焼土が多量に堆積しているが、炉床はあまり焼き締まっていないことから、使用期間は短かったものと思われる。入口部は、炉の位置等から北東壁側あるいは南東壁側にあったものと思われる。

覆土は自然堆積で、上層に締まりの弱い黒褐色土、下層に締まりを有する褐色土が堆積している。

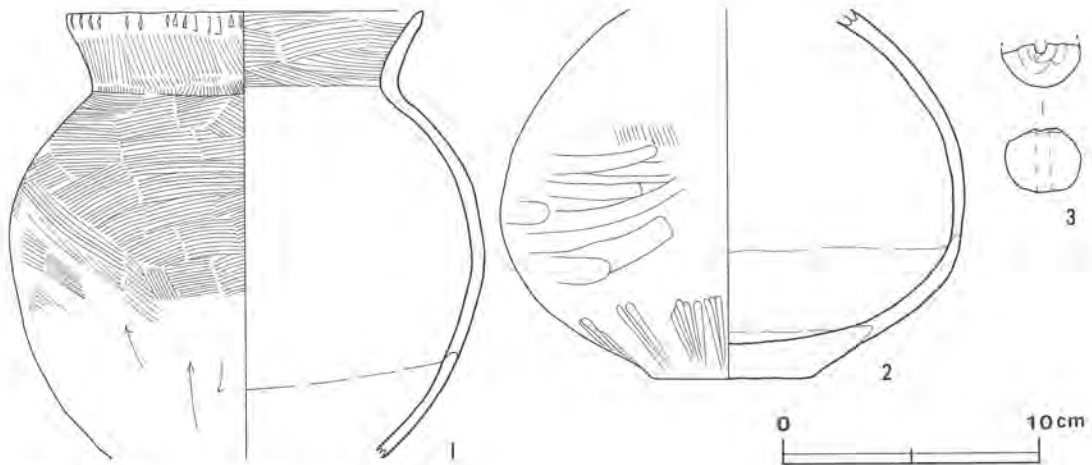
遺物は、覆土中から土師器及びその破片194点、球状土錘1点が出土している。第100図1の甕形土器は北西壁側の覆土下層から出土した。2の壺形土器は、北西壁側と南西壁側の覆土下層から出土した破片が接合したものである。床面から8~10cmほど上位の覆土下層には、この他にもハケ目や篋磨きが施された土師器片が遺構全面にわたって多量に出土している。これらの遺物は、



第99図 第98号住居跡実測図

床面には全く出土していないことから、本跡が廃絶され埋没する過程の早い時期に投棄されたものと思われる。なお、3の球状土錘は南側の覆土中から出土したものである。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第100図 第98号住居跡出土遺物実測図

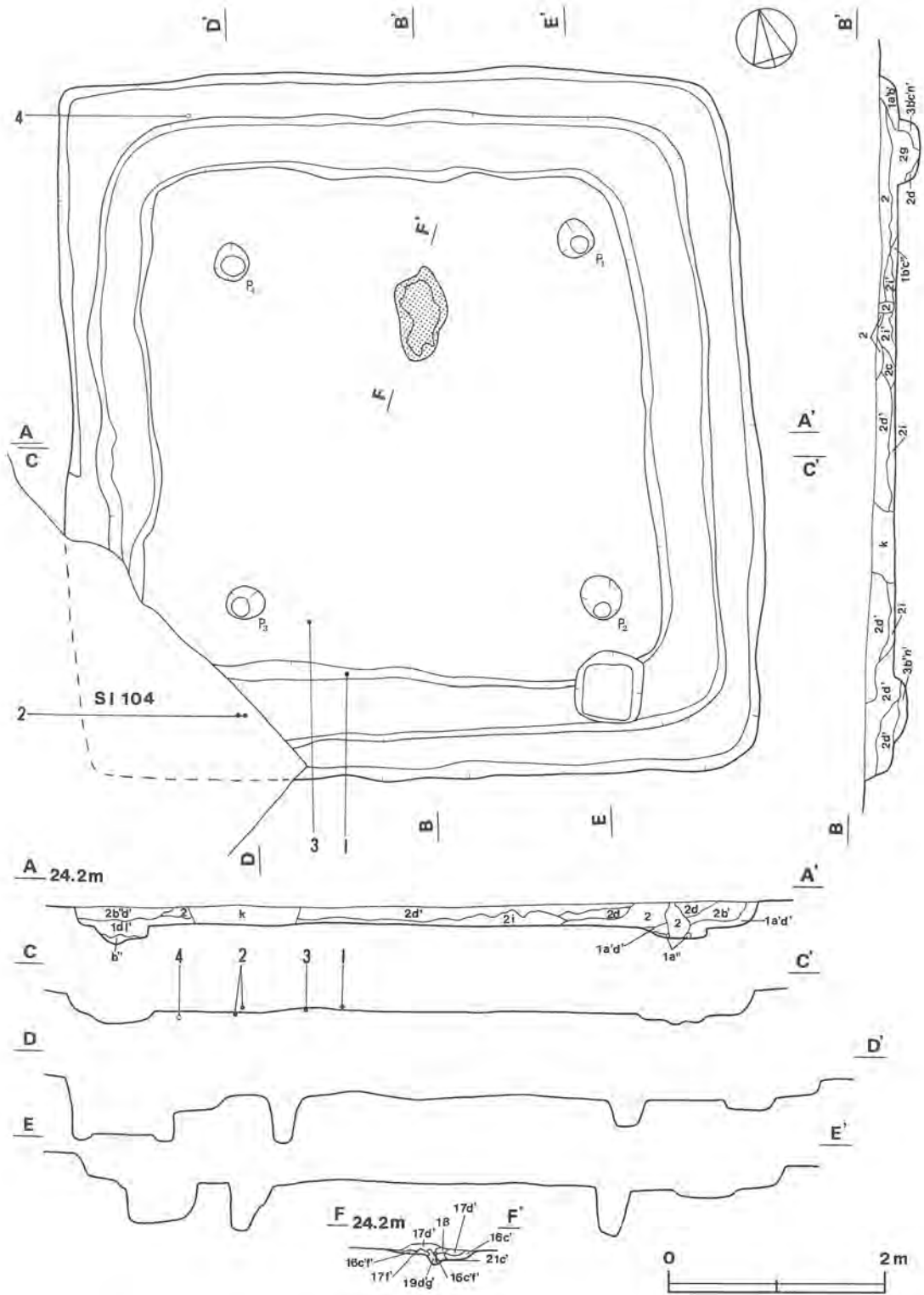
第98号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第100図 1	甕形土器 土師器	A 14.0 B (17.7)	底部欠損。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外傾して開く。	口唇部にキザミが施される。口縁部内・外面と胴部の上半分はハケ目整形。	細砂粒 橙色 普通	70% P239 PL70
2	壺形土器 土師器	B (14.7) C 6.4	上げ底。胴部は球形状を呈し、最大径を下位に持つ。口縁部を欠損する。	胴上半部から中央部にかけては横位の篋削り。下半部は縦位の篋磨き。	細砂粒 赤褐色 普通	70% P238

第99号住居跡 (第101図)

本跡は、調査区の南端 M2h0区を中心に確認された住居跡で、南西コーナー部は古墳時代後期の第104号住居跡に、床面の南部と南壁の一部は時期不明の第492・496号土坑によって掘り込まれている。また、床面の一部と貯蔵穴は、それぞれ縄文時代中・後期の第497・493・495号土坑を掘り込んでいる。

平面形は、長軸6.78m、短軸6.38mの方形状を呈し、長軸方向はN-15°-Eを指している。床面積は41.5m²と、やや大規模である。壁は締まりのあるロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は20cmで、所々に木根による攪乱がみられる。周溝は、壁際より30cmほど内側を巡っているが、南西コーナー部が第104号住居跡によって掘り込まれているため、全周するの否かは不



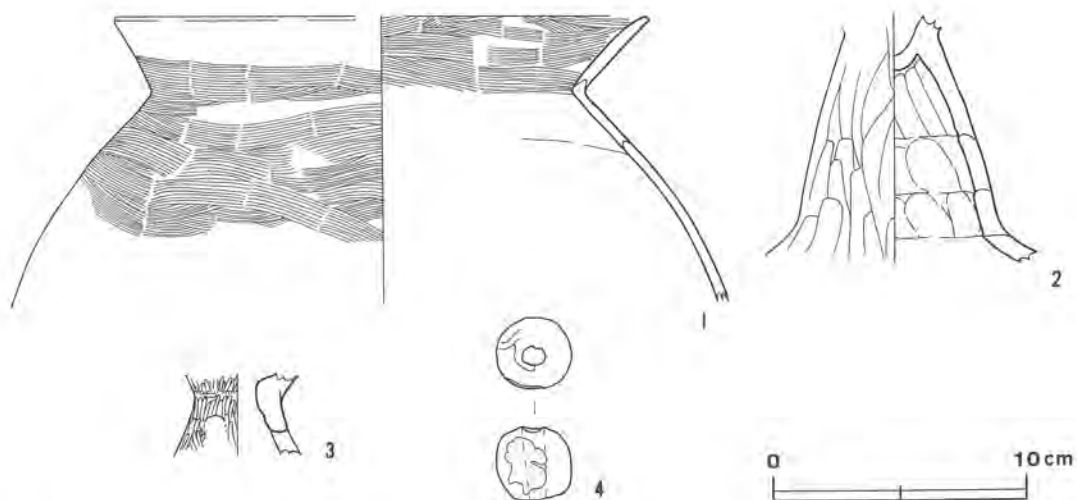
第101图 第99号住居跡実測图

明である。しかし、周溝の上幅は50～60cm、深さは10～15cmであるなど、第61号住居跡や第75号住居跡と同様の規模や形態であることから、南西コーナー部で周溝が切れる可能性が高い。床は、基本的にはロームであるが、第493・497号土坑の覆土上に形成されていたり、第492号土坑に掘り込まれたりしているため、起伏の激しい部分もある。床面は全体的によく締まっている。特に炉の南側は硬く踏み締められている。ピットは、4か所確認した。ピットの上端直径は35～40cm、深さは29～47cmである。深さにおいてやや不揃いの点はあるものの、方形に配列されていることから、4本とも支柱穴と判断される。貯蔵穴は、南東コーナー部に近い南側の周溝中に位置する。一辺60cmの方形状を呈し、深さは40cmである。貯蔵穴内の覆土は自然堆積である。炉は、床面を10cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1.2mほど北東に寄った位置にある。炉内には焼土ブロックを含む赤褐色土や暗赤褐色土が堆積し、炉床はレンガ状を呈していることから、長期間使用されたものと推定される。入口部は南壁側を想定した。

覆土は、上・下層とも暗褐色土であるが、上層はハードローム小ブロックを少量含み締まっている。自然堆積層であるが、所々に攪乱を受けている。

遺物は、床面や覆土中から土師器片110点、球状土錘1点を出土している。床面から、ハケ目が施された甕形土器や台付甕形土器の破片、篋磨きや赤彩が施された壺形土器片や高坏形土器の破片など16点が出土している。第102図1の甕形土器は、南壁側の床面上から潰れた状態で出土し、3の器台形土器脚部は、その北方50cmから出土したものである。4の球状土錘は北西コーナーに近い北壁際の床面から出土している。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第102図 第99号住居跡出土遺物実測図

第99号住居跡出土土器観察表

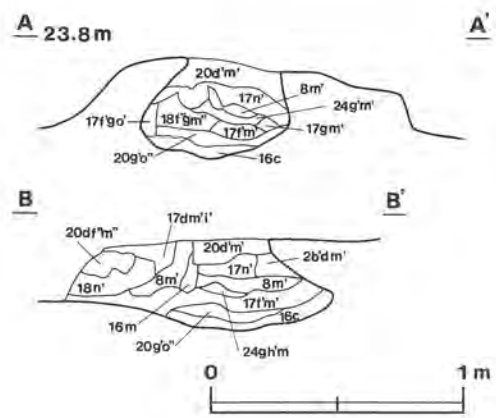
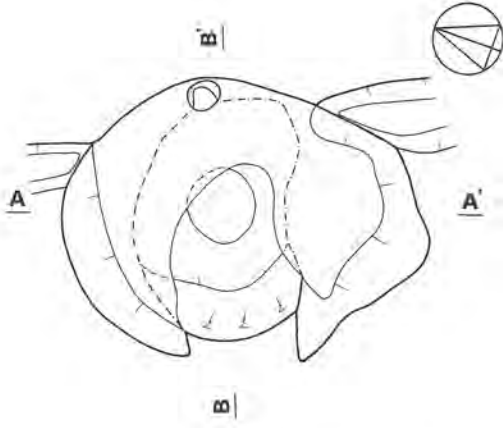
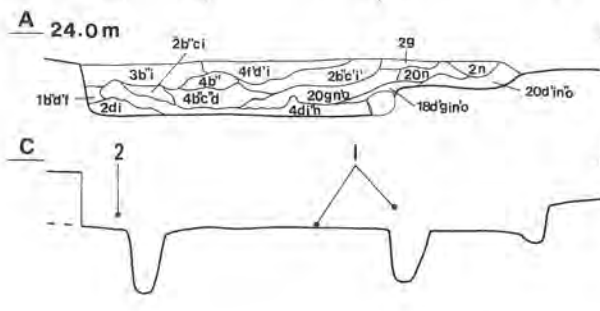
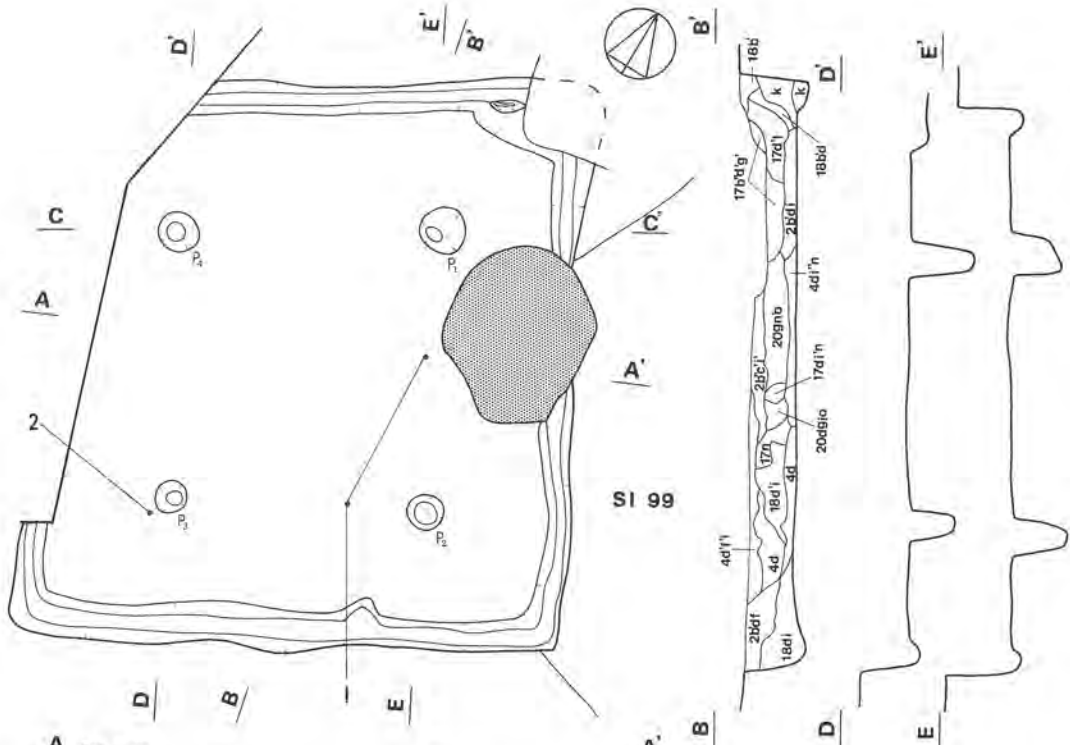
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第102図 1	甕形土器 土師器	A 21.3 B (11.5)	胴下半部欠損。胴上半部は内湾し、口縁部は「く」の字状に外傾して開く。	口縁部内・外面、胴部外面とも横位のハケ目整形。	砂粒 明褐色 普通	30% P240
2	高環形土器 土師器	B (10.1)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開くが、その角度は小さく円筒形に近い。裾部は大きく広がるが、大部分を欠損する。	外面は篋削り。内面は上位が指ナデ整形。下位に輪積痕を残す。	砂粒 橙色 普通	40% P241
3	器台形土器 土師器	B (3.3)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開き、上位に3孔が穿たれる。接合部に中央孔が穿たれる。	外面と器受部内面は篋磨き後、赤彩。	砂粒・スコリア 赤褐色 良好	30% P242

第104号住居跡 (第103図)

本跡は、調査区の南端 M2i9 区を中心に確認された住居跡で、北コーナー部は耕作による攪乱を受けている。西コーナー部は第5号溝に掘り込まれ、住居跡の南西部は調査区外に延びている。なお、カマドの所在する北東壁の一部は古墳時代前期の第99号住居跡を掘り込んでいる。

平面形は、一辺4.4mの方形状を呈し、主軸方向はN-60°-Eを指している。調査した床面積は17.4m²であるが、本来は18.5m²ほどあるものと思われる。壁は、南東側が第99号住居跡の覆土であるほかは、締まったロームである。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は35~53cmで、住居跡の掘り込みは比較的深い。カマド部を除く壁面直下には、上幅20~25cm、深さ6~12cmの壁溝が周回している。壁溝の底面はハードロームで、凹凸が激しい。床は、緩やかな起伏を有し、壁際まで突き固められている。特にカマドの前面は、踏み締まりが加わり極めて硬く締まっている。ピットは、4か所確認した。上端直径は25~35cm、深さは36~53cmの規模を有し、方形に配列されていることから、4本とも主柱穴であると判断した。カマドは、北東壁の中央からわずかに北に寄った位置に付設され、天井部は大部分が崩落している。カマドの全長は105cm、横幅は140cmで、主軸方向はN-65°-Eを指している。焚口部の幅は45cmである。燃焼部は、長さ85cm、幅60cmの規模を有し、壁面を奥に10cmほど掘り込んでいる。煙道部は、奥壁の一部をわずかに掘り窪めて構築している。袖部と天井部は、砂質の粘土で構築されている。袖部の厚さは20cmほどであるが、内部は剝落している。カマド内には、上層に粘土を多量に含む暗赤褐色土が、下層に焼土ブロックを含む赤褐色土が堆積している。火床は、床面を12cmほど掘り込み、レンガ状に焼き固まっている。

覆土は自然堆積で、上層に黒褐色土が、中層には暗褐色土が堆積している。下層には、焼土や炭化材を含む黒褐色土が堆積し、それらは床面にも散乱していることから、本跡は居住期間中に

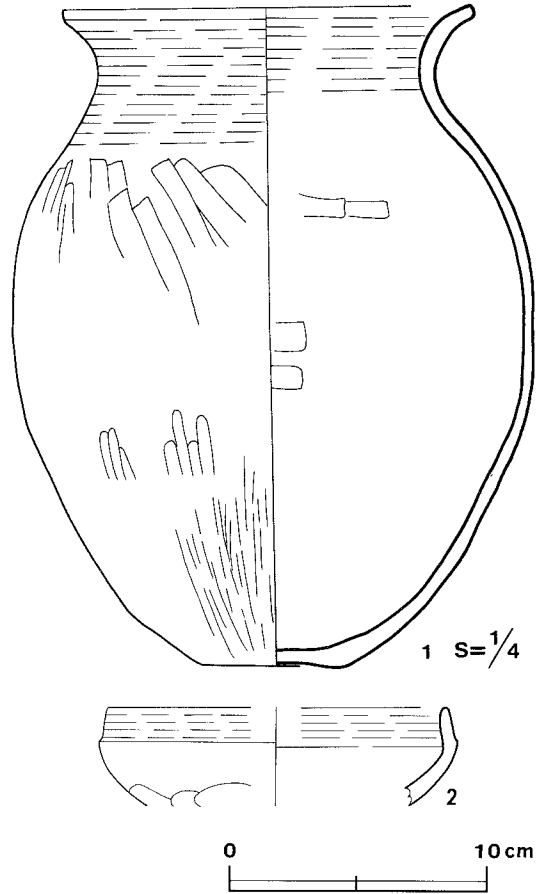


第103図 第104号住居跡・カマド実測図

焼失したものと思われる。

遺物は、覆土中から土師器片98点が、カマド内から土師器の甕形土器胴部片3点が出土している。カマド前の床近くからは第104図1の甕形土器が横位で、南東壁側の床近くからは2の坏形土器がやはり横位で出土しており、これらは本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代後期の鬼高期に比定される住居跡と思われる。



第104図 第104号住居跡出土遺物実測図

第104号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第104図 1	甕形土器 土師器	A 21.4	上げ底。胴部は長胴形で、最大径を上位に持つ。口縁部は外反し、末端は直立する。	口縁部内・外面横ナデ整形。胴部外面下位は篋磨き。	砂粒 浅黄橙色 普通	50% P394 PL74
		B (34.8)				
		C 7.6				
第104図 2	坏形土器 土師器	A 13.4	底部欠損。体部は内彎して開き、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は内傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ整形。底部篋削り。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	15% P395 PL83
		B (3.9)				

第107号住居跡 (第105・106図)

本跡は、調査区の南西端 M2f7区を中心に確認された大形の住居跡で、北東壁の北部は8世紀代の第102号住居跡に、南西壁付近は時期不明の第533・534・535号土坑によって掘り込まれている。また、東側の床面は、縄文時代中・後期の第531・532号土坑を掘り込んでいる。本跡の西1.5mには第95号住居跡が、南東5mには第99号住居跡が存在し、さらに北東20mには本跡と同規模の第

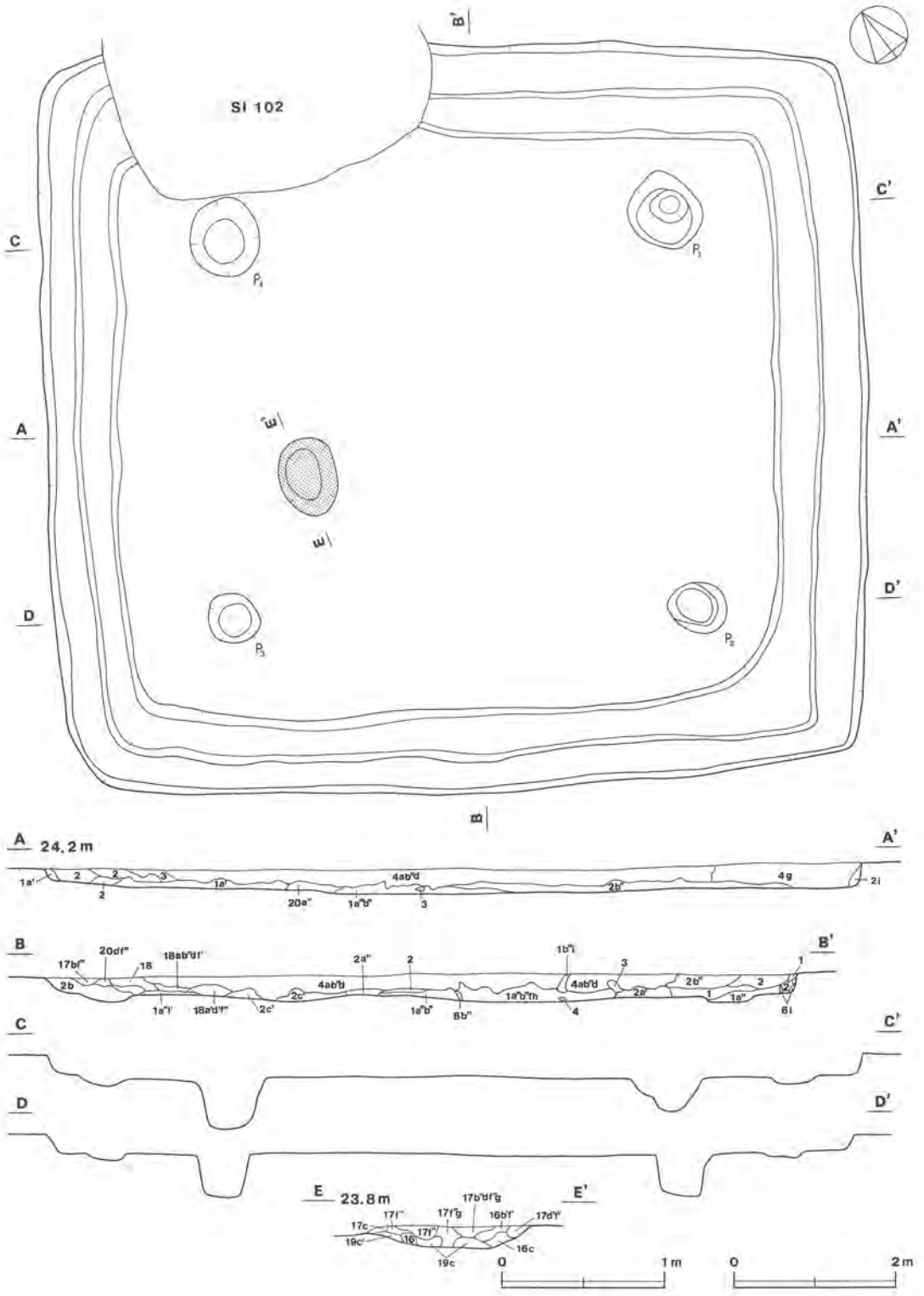
38号住居跡が存在している。

平面形は、長軸10.2m、短軸9.3mの方形状を呈し、長軸方向はN-52°-Wを指している。床面積は92.0m²で、当遺跡では第38・41号住居跡に次ぐ大規模な住居跡である。壁は締まりの弱いロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は30cmで、壁面の残存状況は良好である。周溝は、壁際より35～45cm内側を巡っているが、北東壁の北部は第102号住居跡によって掘り込まれているため、全周するか否かは不明である。周溝の上幅は60～70cmと幅広で、深さは6～15cmであるが、南西側は浅くなっている。溝底は緩やかに彎曲し、凹凸は少ない。床はロームで、中央部は平坦であるが、周溝の外側は緩やかに立ち上がり壁面に継続している。全体的に締まりの弱い床面で、特に強く踏み締まった部分などはみられない。ピットは4か所確認した。各ピットは、上端直径60～90cm、深さ43～64cmの規模を有し、規則的に配列されていることから、4か所とも本跡の主柱穴と思われる。貯蔵穴は存在しない。炉は、床面を10cmほど掘り下げた地床炉で、中央から2.7mほど西に寄り、全体として西コーナー寄りに位置している。平面形は、長径100cm、短径70cmの楕円形状を呈し、長径方向はN-60°-Eを指している。炉内には焼土を多量に含む赤褐色土が堆積している。炉床も硬く焼き締まっていることから、比較的長期間使用されたものと思われる。入口部は、炉や柱穴の配置から南東壁側を想定した。

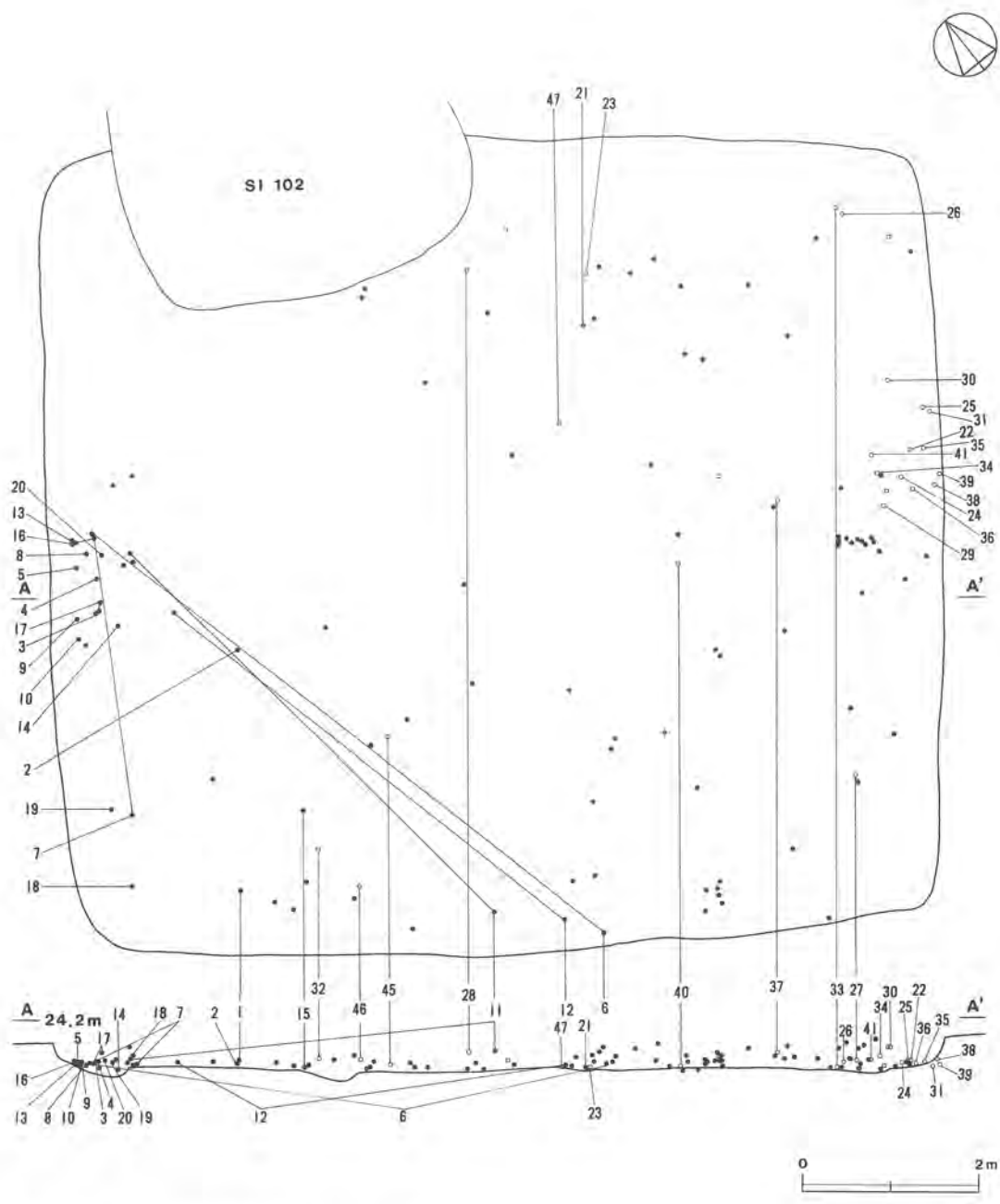
覆土は自然堆積で、上層に締まりの弱い黒褐色土、下層に締まりのある暗褐色土や褐色土が堆積している。また、床面から10cmほど上層には、焼土粒子や炭化物を多量に含む層を挟むことから、本跡は廃絶後に焼失したものと思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片1002点、手捏土器2点、ミニチュア土器1点、球状土錘24点、管状土錘1点、滑石製の有孔円板1点、後世の流れ込みと思われる須恵器片29点が出土している。本跡に伴うと思われる遺物は遺構全域に散在しているが、完形に近い状態にまで復元できる土器類は北西壁際と南西壁際から集中して出土している。特に北西壁際の床面では、12個の土器が長さ1.6m、幅0.7mの範囲にまとまって出土している。それらの土器の出土位置は第106図の通りであり、第107～109図の9・10の壺形土器と20の手捏土器が正位で、4の甕形土器と8の台付甕形土器は倒立の状態出土している。14・17の埴形土器はそれぞれ横位で出土し、3・5・7の甕形土器は横位のまま潰れた状態で出土している。7の破片上には16の埴形土器と、13の埴形土器が覆い被さっていた。また、南コーナー部の床面近くからは、19の器台形土器、18の高坏形土器、15の埴形土器が、南西壁際の床近くからは6の甕形土器、11の壺形土器、46の管状土錘が出土している。球状土錘の出土地点は遺構全域に広がっているが、南東壁際の焼土中からは直径1.5mほどの範囲に11点まとまって出土している。47の有孔円板は中央部の床面近くから出土したもので、やはり本跡に伴うものと考えられる。

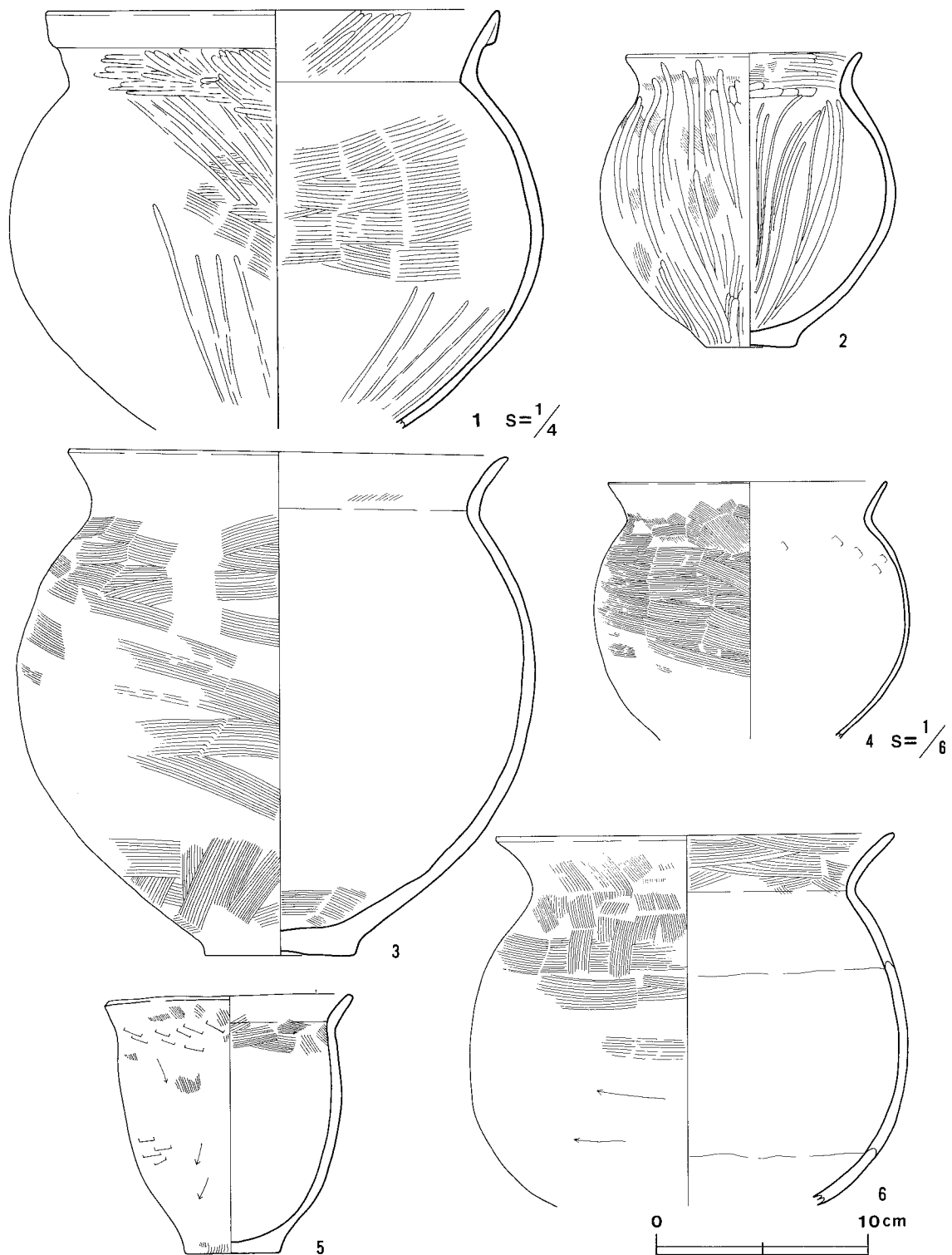
本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



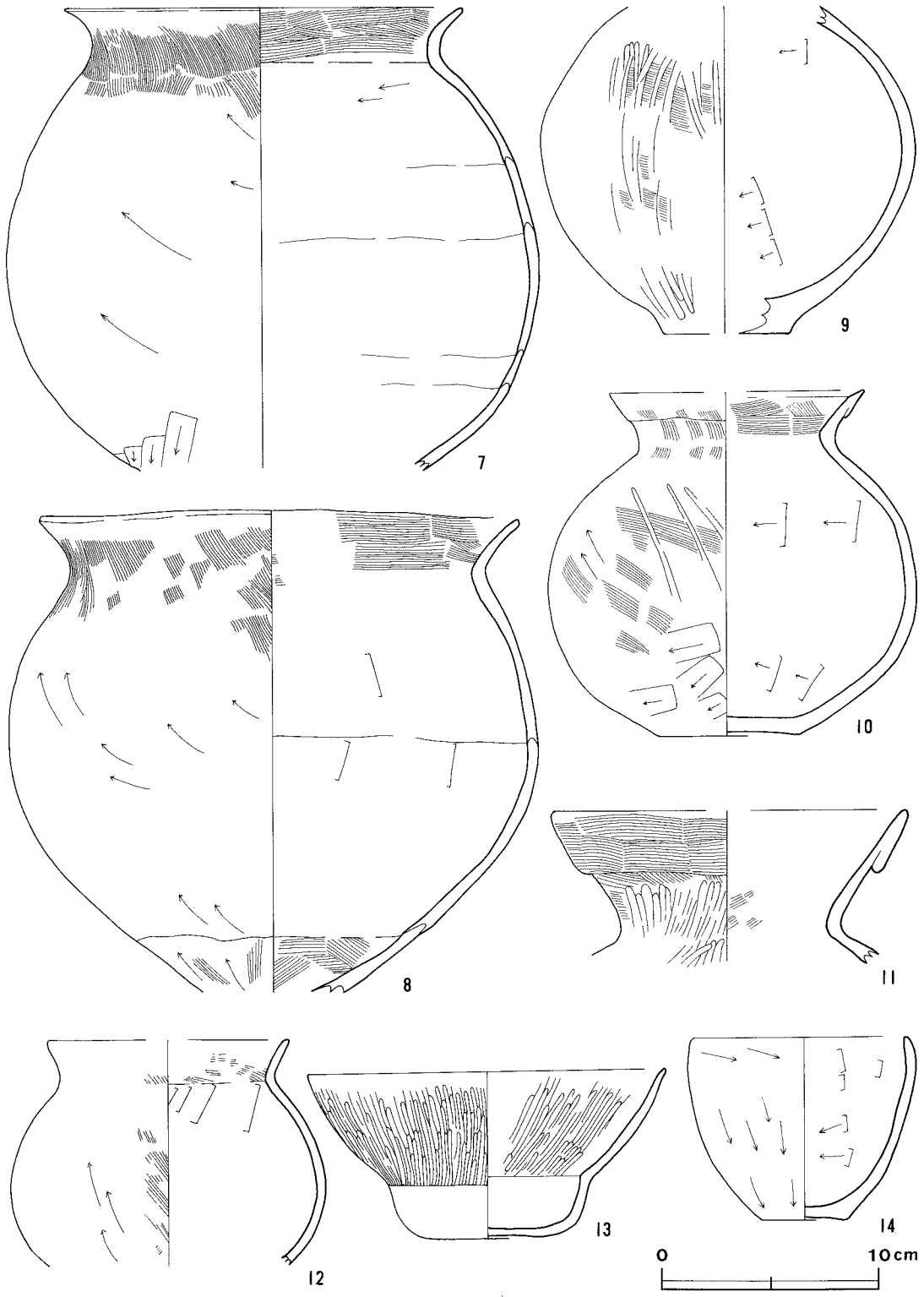
第105图 第107号住居跡実測図



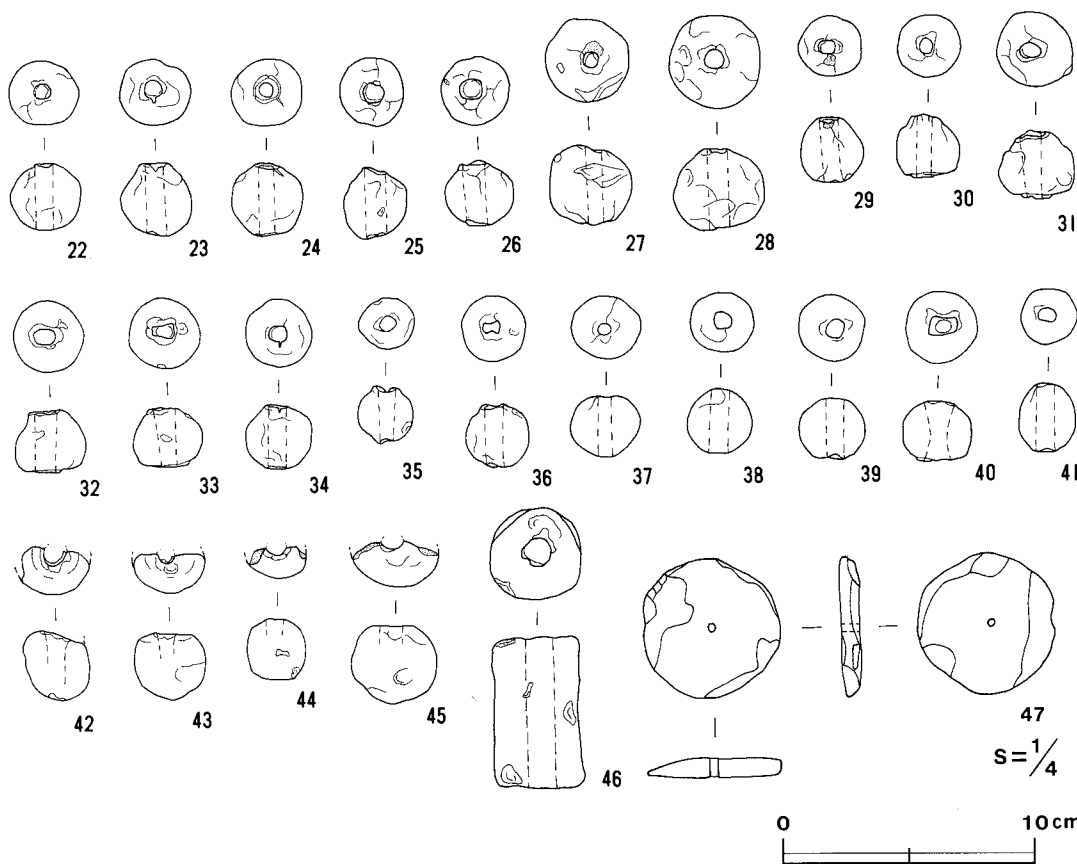
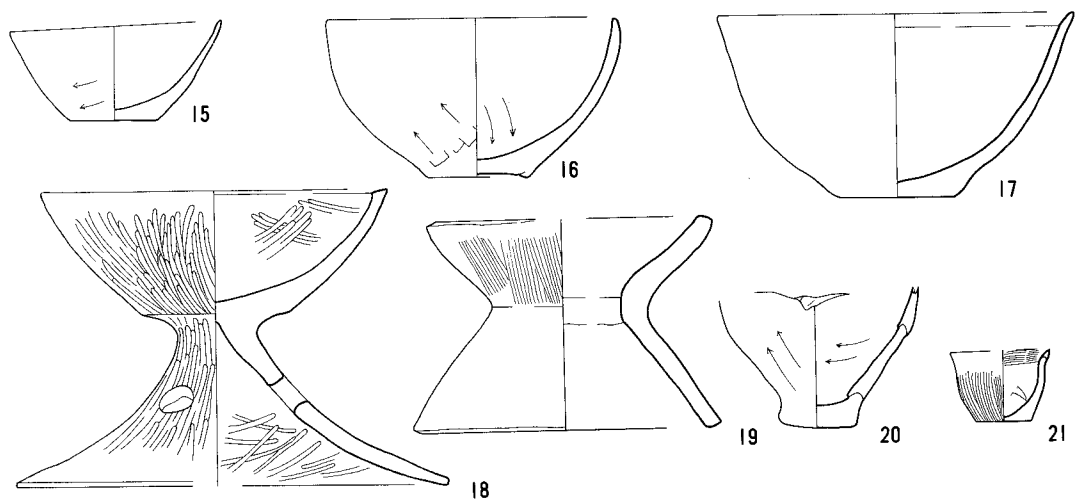
第106图 第107号住居跡出土遺物位置図



第107图 第107号住居跡出土遺物実測図(1)



第108图 第107号住居跡出土遺物実測図(2)



第109图 第107号住居跡出土遺物実測図(3)

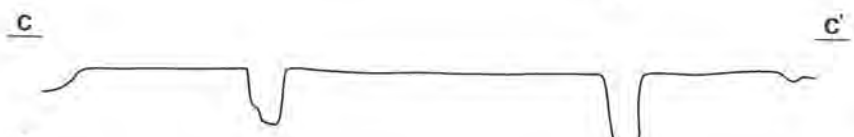
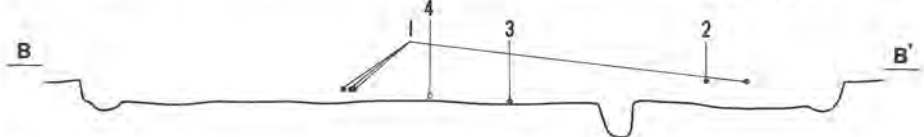
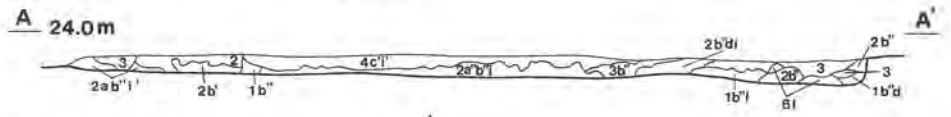
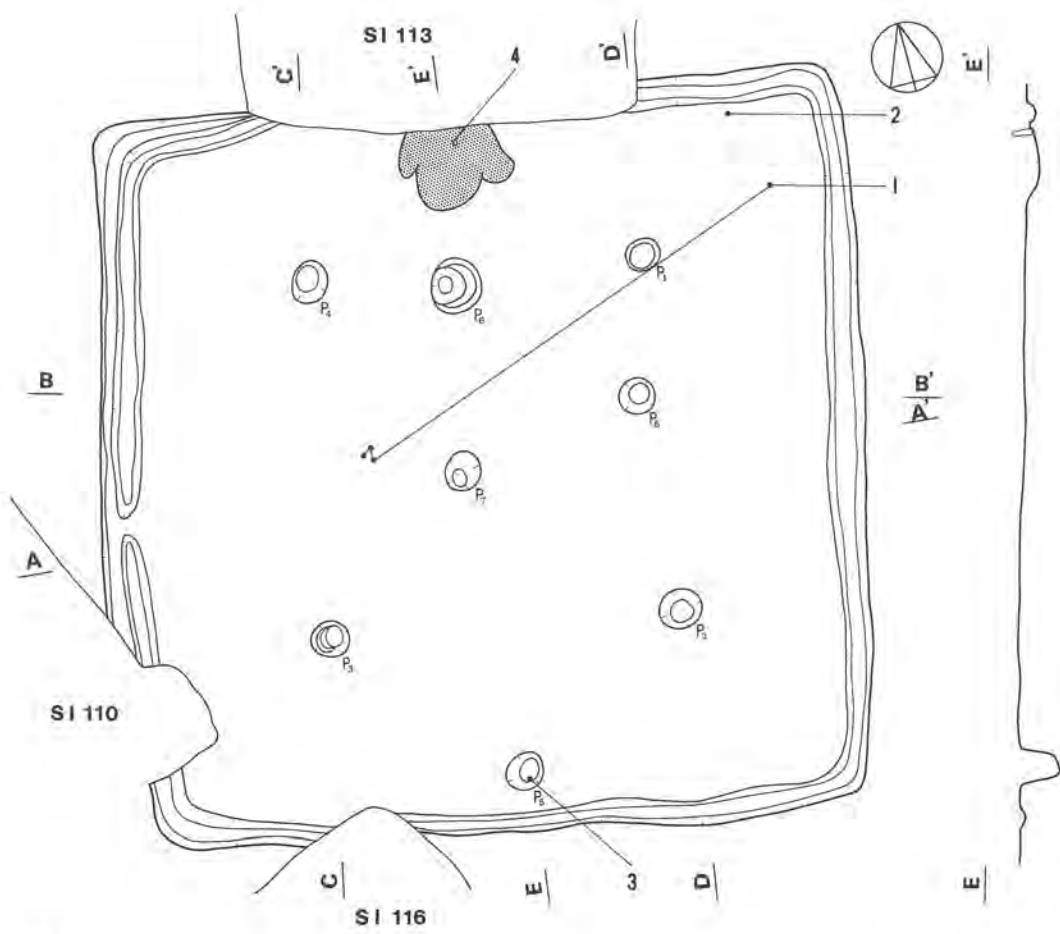
第107号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第107図 1	甕形土器 土師器	A 28.4 B (26.5)	底部欠損。胴部は外傾して立ち上がり、中位から強く内彎し、最大径を中位に持つ。口縁部は複合口縁で、「く」の字状に外傾して開く。	口縁部外面は横ナデ。頸部外面と口縁部内面は篋磨き。胴部内・外面はハケ目整形の後、まばらな篋磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	60% P249 PL72
2	甕形土器 土師器	A 10.2 B 16.1 C 4.4	上げ底。胴部は外傾して立ち上がり、上位で強く内彎し、最大径を上位に持つ。口縁部は外反して開く。	外面はハケ目整形の後、縦位の篋磨き。内面は口縁が横位、胴部は縦位の篋磨き。	砂粒・パミス 明赤褐色 良好	90% P251 PL72
3	甕形土器 土師器	A 20.8 B 24.3 C 7.1	胴下半部は外傾して立ち上がり、上位で強く内彎する。胴部最大径を上位に持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ整形。胴部外面はハケ目整形。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	80% P246 PL72
4	甕形土器 土師器	A 26.6 B (24.5)	底部欠損。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外反して開く。	口縁部内・外面は横ナデ整形。胴部外面はハケ目整形、内面は斜位の篋磨き。	砂粒・パミス にぶい褐色 普通	70% P247 PL72
5	甕形土器 土師器	A 11.8 B 12.3 C 4.4	胴下半部は内彎気味に立ち上がり、上半部で直立する。口縁部は外傾して開く。	内・外面とも篋ナデ整形。胴部外面と、口縁部内面はわずかにハケ目痕が残る。	パミス多量 にぶい褐色 不良	90% P253 PL82
6	甕形土器 土師器	A 18.9 B (17.7)	底部欠損。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外反して開く。	口縁部内・外面と胴上半部はハケ目整形。外面の口唇部直下は横ナデ。	砂粒・パミス 橙色 普通	60% P250
第108図 7	甕形土器 土師器	A 18.5 B (21.8)	底部欠損。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁は頸部で垂直に立ち上がった後、強く外傾して開く。	口縁部内・外面はハケ目整形。胴部外面は粗いナデ整形。	パミス にぶい橙色 不良	70% P248 PL72
8	台付甕形土器 土師器	A (22.4) B (22.6)	脚台部欠損。胴下半部は外傾して立ち上がり、中位以上は内彎し、胴部最大径を中位に持つ。口縁部は外反して開く。	口唇部直下は横ナデ整形。口縁部内・外面と胴上半部外面及び下半部内面はハケ目整形。	砂粒・パミス にぶい橙色 不良	70% P255
9	壺形土器 土師器	B (15.4) C 5.7	底部は引き締まる。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は欠損する。	外面は縦位の篋磨き。内面は篋ナデ整形。底部には焼成後に1孔が穿たれる。	砂粒・パミス にぶい橙色 良好	80% P244
10	壺形土器 土師器	A (11.8) B 16.3 C 6.5	上げ底。胴部は球形状を呈し、中位に最大径を持つ。口縁部は複合口縁で、外傾して開き、内面に鈍い稜を持つ。	口縁部は内・外面とも横位のハケ目整形。胴部外面は上半部がハケ目整形。下半部は篋削り。	砂粒・パミス 橙色 普通	80% P243
11	壺形土器 土師器	A 16.5 B (7.3)	口縁部片。口縁部は複合口縁で、外傾して開く。	口縁部外面はハケ目整形。頸部外面は篋磨き。	砂粒・パミス にぶい橙色 良好	20% P245

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第108図 12	壺形土器 土 師 器	A {11.3}	底部欠損。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外傾して開く。	口縁部は横ナデ整形。その他は篋ナデ整形で、胴部外面にわずかにハケ目痕が残る。	砂粒・パミス 橙色 良好	40% P252 PL72
		B (10.6)				
13	坩形土器 土 師 器	A 16.8	上げ底。胴部は内彎して立ち上がる。口縁部は胴部の1.5倍以上の高さを有し、外傾して開く。	内・外面とも極めて丁寧な篋磨き。	砂粒 にぶい橙色 良好	95% P254 PL77
		B 7.9				
		C 3.8				
14	坩形土器 土 師 器	A 9.9	上げ底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は内傾する。	内・外面とも丁寧な篋ナデ整形。	砂粒・パミス 橙色 良好	100% P259 PL78
		B 8.6				
		C 4.0				
第109図 15	坩形土器 土 師 器	A 8.5	体部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。口縁部はわずかに内彎する。	口縁部内・外面横ナデ整形、その他は内・外面ともナデ整形。	砂粒 にぶい褐色 良好	90% P261
		B 4.0				
		C 3.4				
16	坩形土器 土 師 器	A 11.5	上げ底。底部は引き締まる。体部は内彎して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部内・外面は横ナデ整形。体部内・外面は斜位の篋ナデ整形。	パミス にぶい褐色 普通	100% P260 PL78
		B 6.3				
		C 4.1				
17	坩形土器 土 師 器	A 14.2	底部は引き締まり、胴部は内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反し、内面に鈍い稜を持つ。	口縁部は横ナデ整形。その他は内・外面とも篋磨き。	パミス にぶい橙色 普通	90% P258 PL78
		B 7.3				
		C 4.5				
18	高坏形土器 土 師 器	A 13.8	脚部上位は「ハ」の字状に開き、中位に3孔が穿たれる。中位以下は緩やかに広がり、裾部は大きく開く。坏部は坩状を呈し、下位に稜を持つ。	口縁部は横ナデ整形。その他は内・外面とも丁寧な横ナデ整形。	砂粒・スコリア 橙色 良好	80% P256 PL79
		B 11.7				
		D 6.7				
		E (17.2)				
19	器台形土器 土 師 器	A (11.4)	器受部口径と脚部径の差が小さく、全体として鼓形に近い形状を呈する。接合部に径の大きい中央孔を持つ。	器受部外面は縦位のハケ目整形。その他は内・外面とも粗雑なナデ整形。	砂粒 明褐色 普通	70% P257 PL81
		B 8.4				
		D 5.0				
		E 12.3				
20	手捏土器 (坩形) 土 師 器	A (8.0)	丸底。底部は引き締まる。体部は外傾して立ち上がり、上位で直立気味となる。	内・外面とも粗雑なナデ整形で、輪積痕を残す。	パミス にぶい褐色 不良	90% P262 PL82
		B (5.5)				
		C 3.2				
21	ミニチュア 土器(甕形) 土 師 器	A (4.1)	胴部は外傾して立ち上がり、上位で内彎する。胴部最大径を上位にもつ。口縁部は内彎して開く。	口縁部外面は横ナデ整形。口縁部内面と胴部外面はハケ目整形。整形は丁寧である。	砂粒 にぶい橙色 良好	60% P263
		B 2.8				
		C 2.2				

第108号住居跡 (第110・111図)

本跡は、調査区の南部 N2a0 区を中心に確認された住居跡で、北壁側は 9 世紀代の第113号住居跡に、南西コーナー部は 8 世紀代の第110号住居跡によって掘り込まれている。なお、南壁の一部は、時期不明の第116号住居跡を掘り込んでいます。本跡の北西 4 m には、第104号住居跡が、東 4 m には第115号住居跡が存在している。



第110图 第108号住居跡実測图

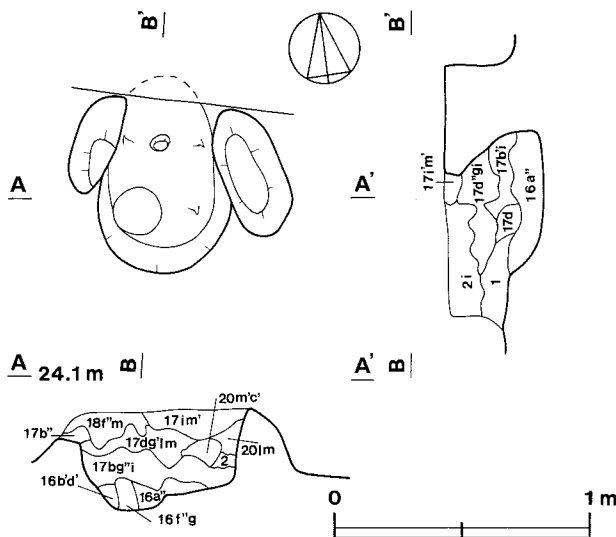
平面形は、一辺6.1mの方形状を呈し、主軸方向はN-11°-Eを指している。床面積は33.4m²である。南壁は、住居跡の掘り込みがローム面で止まっているため検出できなかったが、壁下に巡る周溝から本跡の範囲を把握した。残存する壁は、締まったロームで、垂直に立ち上がっている。壁高は、最も高い所で20cmである。壁溝は、幅25cm、深さ5~10cmの規模で全周している。床は平坦であるが、時期不明の第524・528~530号土坑によって大部分が掘り込まれている。カマド前面と、床面の東側の2か所に踏み締まった場所がみられるものの、そのほかの床面は軟弱である。ピットは、8か所を掘り込んだが、本跡に伴うものはP₁~P₅の5本である。P₆~P₈は覆土の状態や配置から考えて本跡に伴うものとは考えられない。P₁~P₄が主柱穴で、上端の直径は27~34cm、深さは43~61cmである。P₅は配列等から考えて、入口部施設に伴う柱穴と思われる。P₅の規模は、上端直径25cm、深さ32cmである。カマドは、北壁の中央部に付設され、煙道や燃焼部の一部は第113号住居跡によって掘り込まれている。天井部や袖部の残存状況が悪いため、規模等については不明な点が多い。カマドの全長は1m、横幅は90cmであろうと推定される。主軸方向はN-5°-Eを指している。燃焼部は長さ80cm、幅60cmであろうと思われる。火床は、床面を12cmほど掘り込み、レンガ状に焼き締まっている。焚口部から50cm奥には支脚が直立している。

覆土は自然堆積で、上層に黒褐色土が、下層に暗褐色土が堆積している。覆土の締まりは弱く、土坑によって攪乱されている。

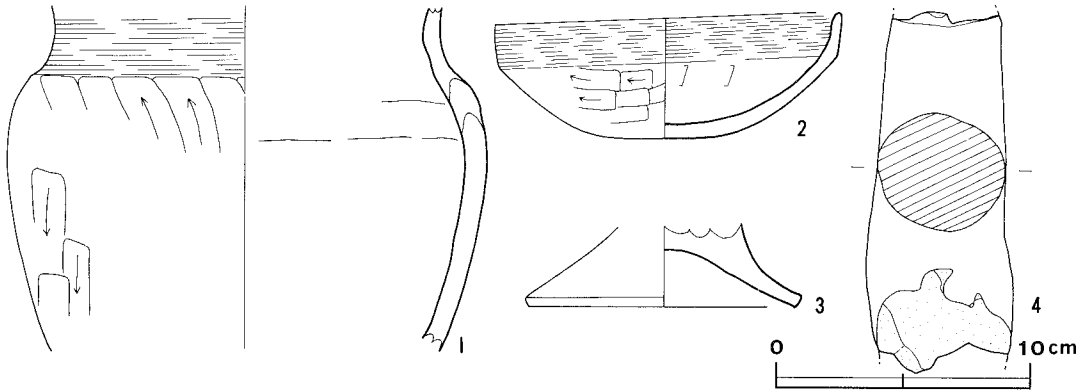
遺物は、覆土中から土師器片190点が出土しているが、小片で磨滅しているものが多く、本跡に伴うものは少ないと思われる。第112図1 甕形土器は、中央部の床面近くから出土した土器片が接合したものである。2の坏形土器はカマド東の北壁際から完形のまま正位で、3の高坏形土器脚

部はP₅の確認面に倒立の状態而出土している。これらの土器は、出土状況等から本跡に伴うものと考えられる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代後期の鬼高期に比定される住居跡と思われる。



第111図 第108号住居跡カマド実測図



第112図 第108号住居跡出土遺物実測図

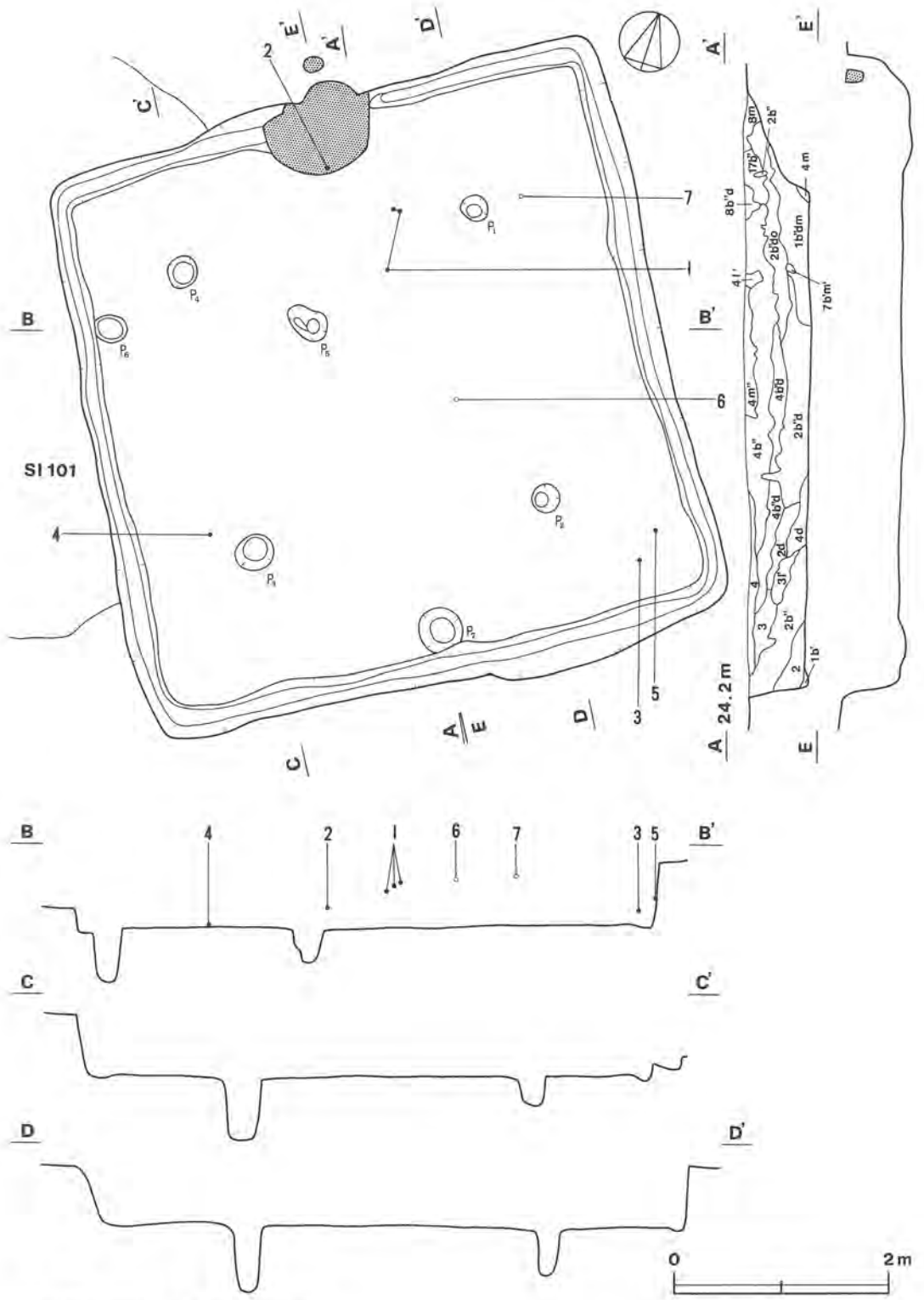
第108号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第112図 1	甕形土器 土師器	B (13.7)	底部欠損。胴部は外傾して立ち上がり、頸部との境に稜を持つ。口縁部は外反して開き上位は欠損。	口縁部外面は横ナデ整形。胴部外面は縦位の窠ナデ整形。	砂粒 にぶい褐色 普通	20% P282
2	环形土器 土師器	A 13.6 B 5.1 C 4.0	体部は内彎して立ち上がり、口縁との境に稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ整形。体部外面は窠削り。体部内面は窠ナデ整形。	砂粒・スコリア 黒褐色 良好	100% P285
3	高环形土器 土師器	B (3.2) E 10.8	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。	内・外面ともナデ整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	30% P284

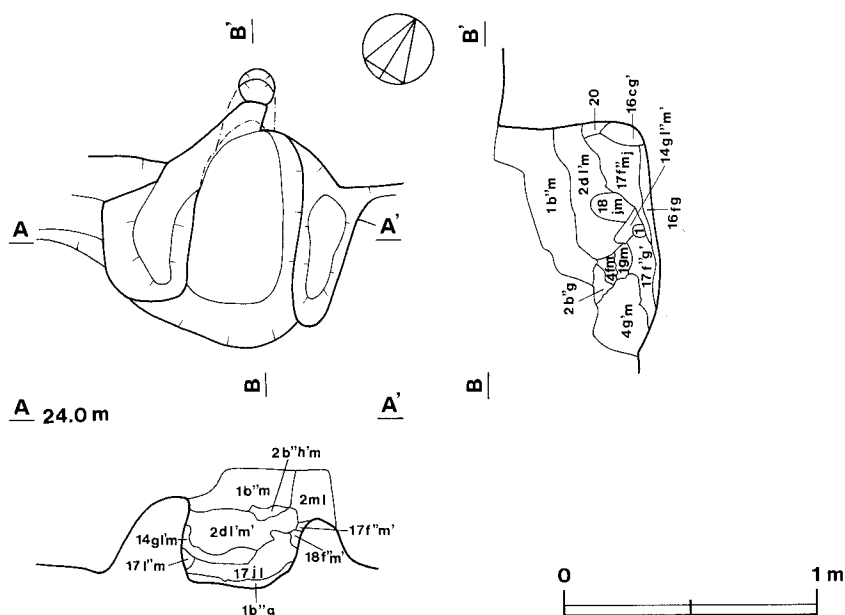
第112号住居跡 (第113・114図)

本跡は、調査区の南部 M3e1区を中心に確認された住居跡で、西側 3分の1 を 9～10世紀代の第101号住居跡によって掘り込まれている。本跡の南12m には第104号住居跡が、北東 4 m には 9～10世紀代の第97号住居跡が存在している。

平面形は、一辺5.4m の方形状を呈し、主軸方向は N-33°-W を指している。床面積は 27.5m² である。壁は締まりのあるロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は 50～65cm と高く、第101号住居跡によって掘り込まれた部分でも、20cm の壁高を残している。壁直下には、幅 25cm、深さ 7～10cm の壁溝が、カマドの部分を除いて全周している。床はロームで、平坦である。本跡の床は、意識的に突き固められたものと思われ、壁際まで硬く締まっている。カマドの前方から南東壁近くまでの床面は、踏み締まりが加わり更に硬化している。ピットは、本跡の範囲内に 7 か所を確認した。配置から考えて P₁～P₄ が支柱穴と考えられる。P₁～P₄ の上端直径は 25～30cm、深さは 25～60cm である。P₆ も本跡に伴う柱穴と考えられる。P₆ の上端直径は 30cm、深さは 51cm で



第113图 第112号住居跡実測图



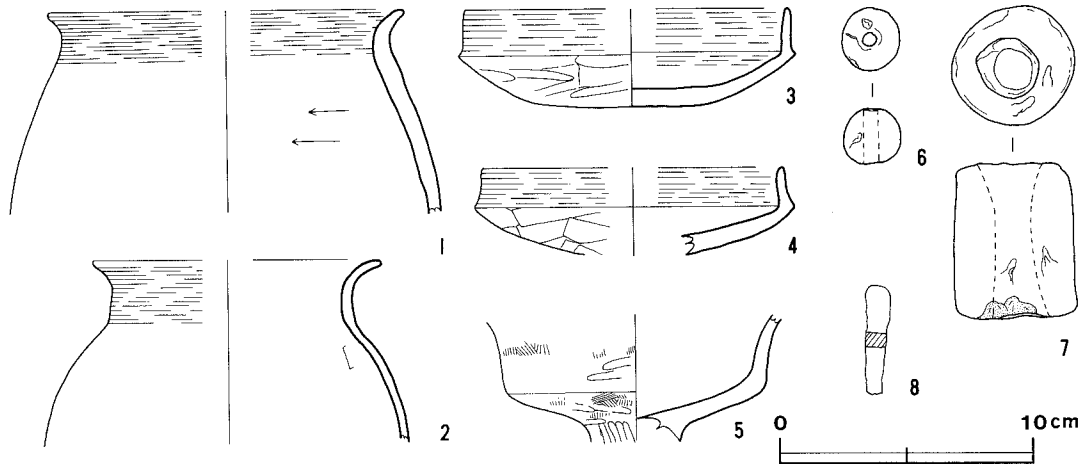
第114図 第112号住居跡カマド実測図

ある。P₇は、南東壁際に位置し、規模も、上端直径40cm、深さ12cmと、他の柱穴と異なることから入口部施設に伴う柱穴と判断した。なお、P₅は第101号住居跡に伴うものであらうと思われる。カマドは、北西壁の中央部に付設されているが、天井部の大部分は崩落している。カマドの規模は、全長111cm、横幅100cmで、主軸方向はN-27°-Wを指している。焚口部の幅は45cmである。燃焼部の規模は、長さ90cm、幅45cm、高さ40cmで、壁面を22cmほど奥に掘り込んでいる。煙道部は、奥壁をさらに20cmほど掘り込んで構築している。袖部と天井部は、砂質の粘土によって構築されている。カマド内には、上層に粘土を含む褐色土が、中層には粘土ブロックや焼土ブロックを含む黒褐色土が、下層には灰や焼土を多量に含む暗赤褐色土が堆積している。火床は、床面を10cmほど掘り込んでいるが、ほとんど焼けていない。

覆土は、西側が第101号住居跡に掘り込まれている外は自然堆積で、上層から黒褐色土、暗褐色土、褐色土の順でレンズ状に堆積している。床面には焼土や炭化材が多量に散乱していることから、本跡は居住期間中、あるいは、廃絶後間もなく焼失したものと思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片249点、球状土錘1点、管状土錘1点が出土している。カマド周辺と南東壁側に比較的多くの遺物が散在している。カマドの覆土上層からは第115図2の甕形土器が横位で出土したが、胴下半部は見当らなかった。1の甕形土器はカマド近くの覆土上層から出土したもので、本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代後期の鬼高期に比定される住居跡と思われる。



第115図 第112号住居跡出土遺物実測図

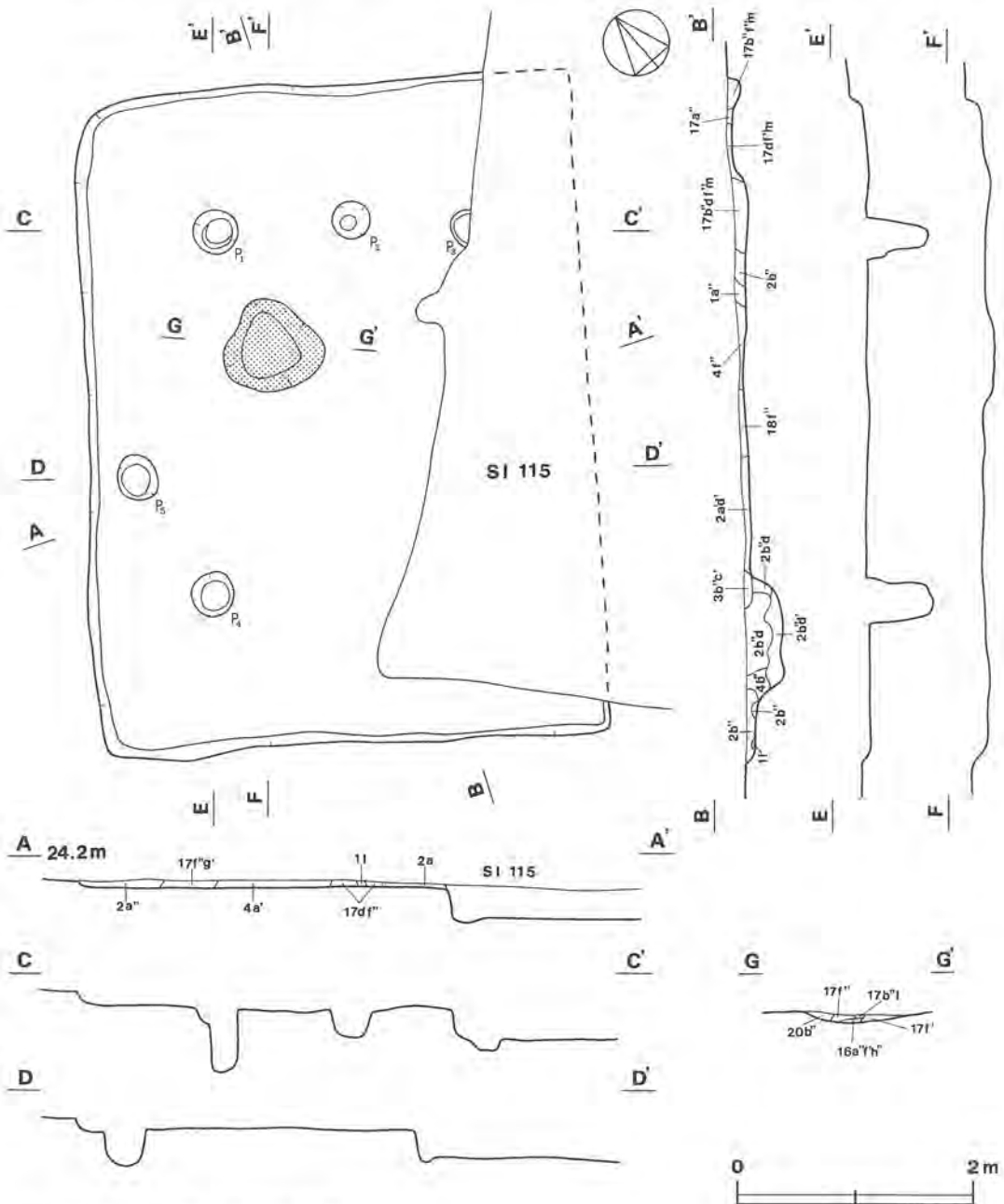
第112号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第115図 1	甕形土器 土師器	A 14.1 B (8.0)	胴下半部欠損。胴上半部は内傾し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面は横ナデ整形。胴部内・外面は篋ナデ整形が施される。	細砂粒 にぶい橙色 良好	30% P287
2	甕形土器 土師器	A (22.9) B (14.4)	胴下半部欠損。胴上半部は内彎し、頸部は直立して立ち上がる。口縁部は強く外反する。	口縁部から頸部にかけて横ナデ整形。胴部内・外面はナデ整形。	長石 にぶい黄橙色 普通	50% P286 PL74
3	坏形土器 土師器	A 13.0 B 3.9 C 5.0	体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は直立して立ち上がる。	口縁部内・外面と体部内面上位は横ナデ整形。体部外面は篋削り。	砂粒 褐色 良好	40% P290 PL83
4	坏形土器 土師器	A 11.9 B (3.5)	底部欠損。体部は緩やかに内彎して立ち上がり、口縁部との境に鋭い稜を持つ。口縁部は内傾して立ち上がる。	口縁部内・外面は横ナデ整形。体部外面は篋削り。	スコリア にぶい橙色 普通	20% P291
5	高坏形土器 土師器	B (5.0)	坏部片。坏底部は接合部から緩やかに外傾して立ち上がり、体部は坏底部との境に鈍い稜をもち、直立して立ち上がる。	外面はハケ目整形後、部分的に篋磨き。内面は篋磨き。坏底部外面と、坏内面は赤彩。	砂粒 明赤褐色 良好	30% P289

第114号住居跡（第116図）

本跡は、調査区の南端 M3j2区を中心に確認された住居跡で、東側は古墳時代後期の第115号住居跡に掘り込まれている。本跡の北 8 m には第98号住居跡が、北西 6 m には第99号住居跡が存在している。

平面形は、長軸5.58m、短軸4.32mの長方形を呈し、長軸方向はN-38°-Eを指している。床

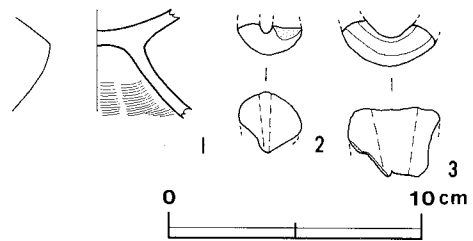


第116図 第114号住居跡実測図

面の3分の1ほどは第115号住居跡によって切られているため、残存床面積は15.4㎡であるが、本来は23㎡ほどの規模であったものと考えられる。残存部の壁はロームで、垂直に立ち上がっている。壁高は10cmで農耕による攪乱を強く受けている。壁溝は存在しない。床は締まったロームで、特に柱穴に囲まれた範囲は硬化している。床面は、平坦であるが、小さな凹凸がみられる。ピットは5か所確認した。上端直径は、各ピットとも35cmほどであるが、深さはP₁とP₄が55cm、その他は24cmと、やや不揃いである。しかし、いずれも柱穴として十分な規模であることから、5本とも本跡に伴う柱穴であると判断した。配列から考えてP₁~P₄が主柱穴で、P₅は主柱穴に次ぐ重要な柱穴であったと思われる。なお、主柱穴は南コーナー部にも存在したと思われるが、第115号住居跡によって掘り込まれているため確認できなかった。炉は、床面を10cmほど掘り込んだ地床炉で、中央より70cmほど北西に寄り、P₁の近くに位置している。炉内には、焼土を多量に含む暗赤褐色土が堆積し、炉床もレンガ状に焼き締まっていることから、長期間使用されたものと思われる。入口部は、南東壁あるいは南西壁側であろうと思われる。

覆土は、焼土や炭化材を含む黒褐色土である。堆積状況は、覆土が薄いため明らかではないが、床面にも多量の焼土や炭化材が散乱していることから、居住期間中、あるいは廃絶後間もなく焼失したものと思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器片79点、球状土錘1点、管状土錘1点が出土している。床面の中央部からは、ハケ目が施された甕形土器胴部片が出土しているが実測は不可能であった。第117図1の高環形土器片、2の球状土錘、3の管状土錘等は、覆土中から出土したもので出土位置等は明確ではない。



第117図 第114号住居跡出土遺物実測図

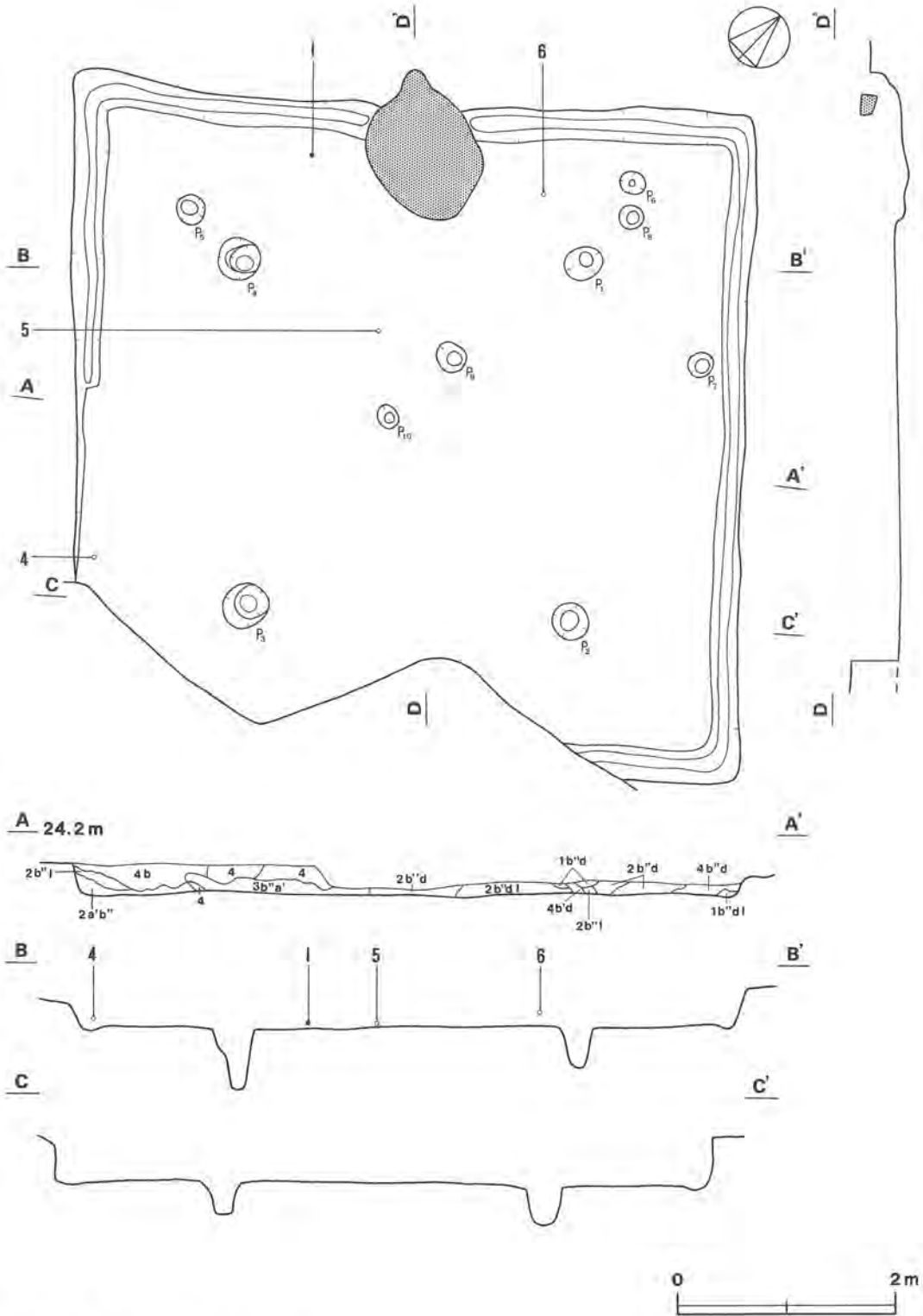
本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。

第114号住居跡出土土器観察表

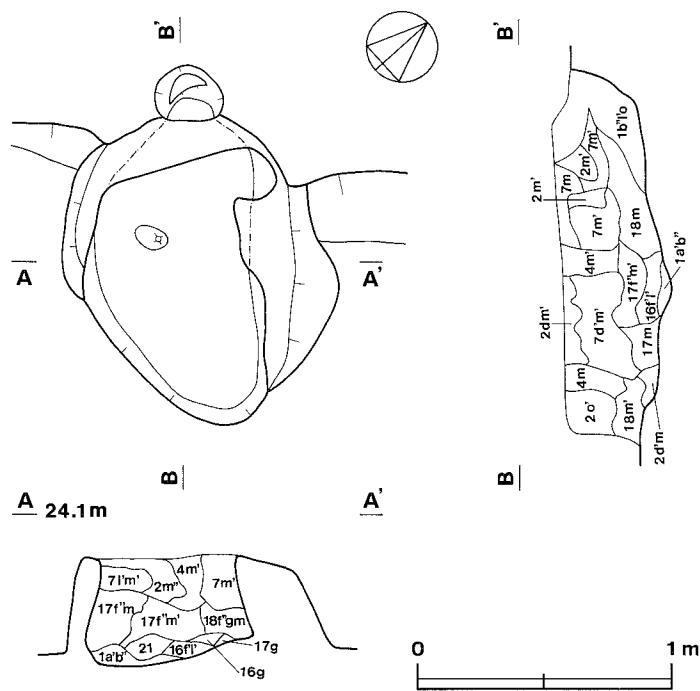
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第117図 1	高環形土器 土師器	B (4.3)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開くが、中位以下を欠損する。	外面は丁寧な篋磨き後、赤彩。 内面はハケ目整形。	スコリア 極暗赤褐色 良好	20% P264

第115号住居跡 (第118・119図)

本跡は、調査区の南端 N3a3 区を中心に確認された住居跡で、東側の一部には平安時代の第111号住居跡が存在し、本跡の覆土上に貼り床をして床面を形成している。南側は遺跡外の道路下へ



第118图 第115号住居跡実測图



第119図 第115号住居跡カマド実測図

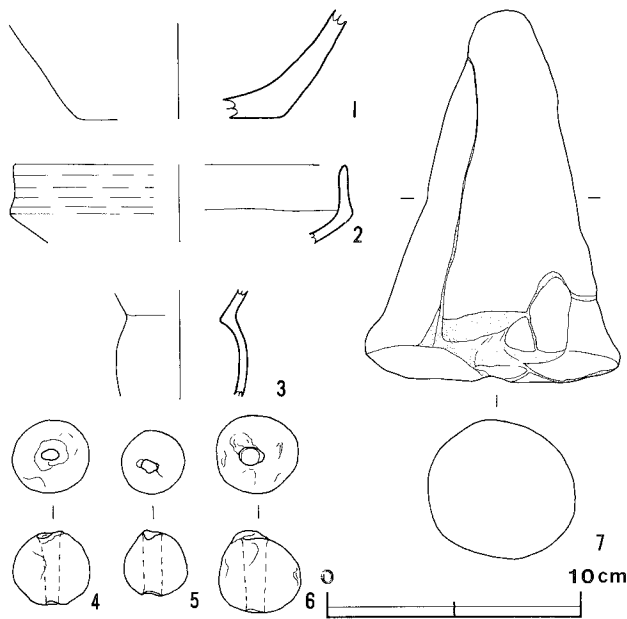
が、南西壁の南側では検出できなかった。床は、強く突き固められたロームである。床面は平坦で、カマド前面は踏み締まりも加わり一層硬化している。ピットは、本跡の調査範囲から10か所確認した。配置や規模から、 $P_1 \sim P_4$ が支柱穴と思われる。 $P_1 \sim P_4$ の上端直径は35~40cm、深さは35~58cmである。 $P_5 \sim P_7$ も本跡に伴う柱穴と考えられ、上端直径は20~25cm、深さは19~22cmである。 P_8 は、規模や覆土等から考えて、本跡に伴うものではないと判断した。 P_9 と P_{10} は、第111号住居跡の柱穴である。カマドは、北西壁の中央部に付設され、天井部は大部分が崩落している。カマドの規模は、全長113cm、横幅105cmで、主軸方向は $N-54^{\circ}-W$ を指している。焚口部の幅は、30cmと思われる。燃焼部は、長さ115cm、幅60cm、高さ35cmで壁面を15cm掘り込んでいる。焚口部から70cm奥には、支脚が直立している。煙道部は、奥壁からさらに17cm掘り込み円筒状に構築されている。袖部と天井部は砂質の粘土で構築している。袖部の内側は焼けて赤化している。カマド内の覆土は大きく2層に分かれ、上層には粘土粒子が、下層には焼土が多量に含まれている。火床は床面を15cmほど掘り込んでいる。火床はほとんど焼けていない。

覆土は、第111号住居跡に掘り込まれている部分以外は自然堆積である。上層には黒褐色土が、下層には極暗褐色土が堆積している。

遺物は、床面や覆土中から土師器とその破片168点、球状土錘3点が出土している。本跡に伴う遺物はカマド周辺に比較的多く散在しているが、実測可能な遺物は少ない。第120図1の甕形土器

と延びており、この方向の壁は一部しか検出できなかった。なお、西側は古墳時代前期の第114号住居跡を掘り込んでいる。本跡の北西18mには第112号住居跡が、西5mには第108号住居跡が存在している。

平面形は、一辺6.15mの方形形状を呈し、主軸方向は $N-44^{\circ}-W$ を指している。床面積は35 m^2 ほどと思われる。壁は締まりのあるロームで、垂直に立ち上がっている。壁高は、30cmで壁直下には壁溝が周回している。壁溝は、上幅20cm、深さ5cmの規模である



第120図 第115号住居跡出土遺物実測図

底部はカマド南西部の床近くから、
4～6の球状土錘はカマド前面や南
西壁際の床面近くから出土したもの
である。2の坏形土器片は東コーナ
一部の覆土下層から出土したもので、
本跡に伴う可能性が高い。

本跡は、遺物や遺構の形態等から
古墳時代後期の鬼高期の住居跡と思
われる。

第115号住居跡出土土器観察表

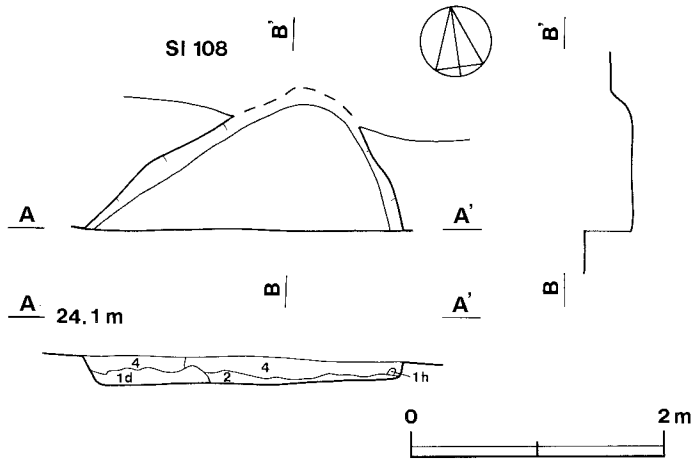
図版番号	器種	量法 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第120図 1	甕形土器 土師器	B (3.7) C [7.9]	底部片。平底。	器面の剝落が著しく、整形技法は不明。底部木葉痕。	砂粒、雲母に ぶい橙色不良	10% P292
2	坏形土器 土師器	A [13.0] B (3.1)	底部欠損。体部と口縁部の境に稜を持ち、口縁部は直立する。	口縁部は横ナデ整形。	砂粒 黒褐色 普通	5% P293
3	ミニチュア 土器(甕形) 土師器	B (4.2)	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反して開く。	内・外面とも粗雑なナデ整形。	砂粒 にぶい褐色 普通	20% P294

第116号住居跡 (第121図)

本跡は、調査区南端N2b0区に確認された住居跡であるが、住居跡の大部分が調査区外の道路下へと伸びているため、北コーナー部の1.4㎡だけを調査した。本跡の北側は、古墳時代後期の第108号住居跡に、北西壁側は8世紀代の第110号住居跡によって掘り込まれている。北東8mには、古墳時代前期の第114号住居跡が存在している。

調査した範囲から推定すると、平面形は方形状、又は長方形を呈するものと思われる。壁は締まりの弱いロームで、65～75度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は15～20cmである。床はロームで軟弱である。

覆土は、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積し、上・下層とも締まっている。自然堆積と



第121図 第116号住居跡実測図

(2) 4 区

第 8 号住居跡 (第122図)

本跡は、調査区の西部 N5d6区を中心に確認された住居跡である。本跡の西20m には 3 区の第68号住居跡が、南15m には第15号住居跡が存在している。

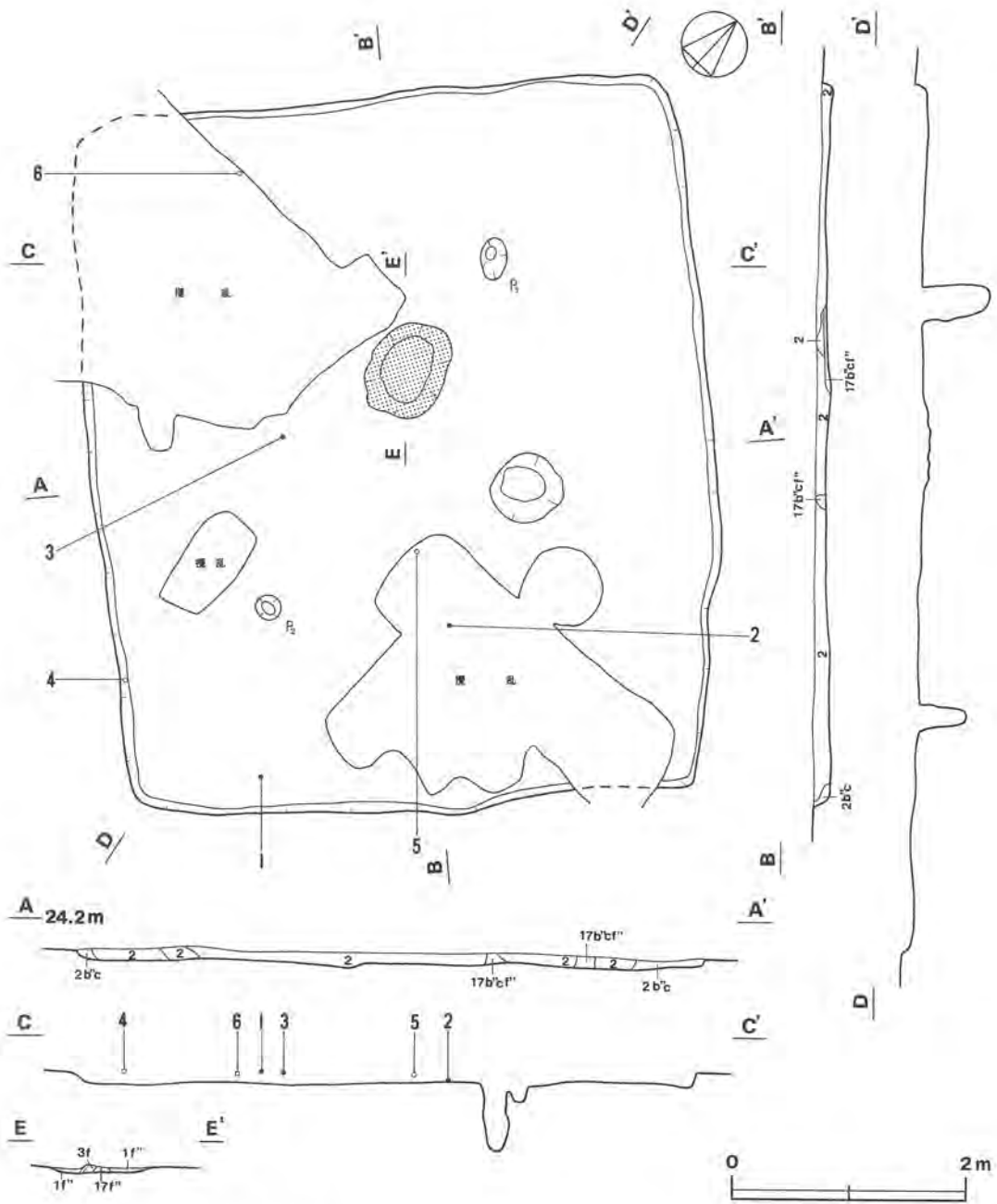
平面形は、長軸6.16m、短軸5.35mの長方形状を呈し、長軸方向はN-43°-Wを指している。床面積は30.0m²である。壁は、締まりのあるロームであるが、西コーナー部付近は攪乱を受け失われている。壁面はほぼ直立し、壁高は浅く5~10cmである。床はロームで、極めて硬く踏み締まっている。床面の3分の1以上が農耕により攪乱されている。ピットは2か所確認した。2本のピットは、床面の北と南に位置し、上端直径22cm、深さ40cm以上の規模を有することから、本跡の支柱穴と思われる。東と西の柱穴については、攪乱を受けているため不明である。炉は、床面を5cmほど掘り下げた地床炉で、中央から長軸線上にそって50cmほど北西に寄って位置している。炉の平面形は直径70cmの不整円形である。炉内には焼土を多量に含む赤褐色土が堆積している。炉床もレンガ状に焼き締まっていることから、長期にわたって使用されたものと思われる。入口部は、炉の配置から南東壁側が想定される。

覆土は、焼土を含む暗褐色土が堆積しているが、攪乱が著しく堆積状況は不明である。床面には焼土が堆積しており、本跡は、居住期間中に焼失したものと思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器片78点、球状土錘2点、石製品2点、鉄製品3点が出土している。本跡は、前述のように覆土も床面も攪乱が激しいため、本跡に伴う遺物か否かの判断は困難である。南コーナー部近くから出土した第123図の1の台付甕形土器脚部や南西部から出土した高坏形土器脚部、南西壁際から出土した4の球状土錘等の出土層位は、いずれも床面が残存

思われる。

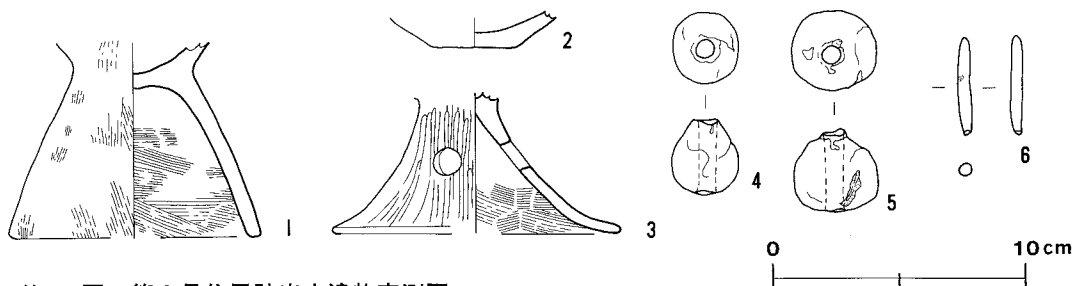
本跡は、出土遺物が無く、住居跡のごく一部を調査しただけであるので、時期等は不明であるが、切り合い関係から古墳時代中期以前のものと思われる。



第122図 第8号住居跡実測図

する部分の覆土中であることから本跡に伴うものと思われる。5の球状土錘、6の針状の石製品は床面西部の攪乱部分から出土しものであるが、遺物の特徴から本跡に伴う可能性が高い。なお、鉄製品や砥石は覆土中から出土したもので、本跡に伴う遺物とは考えられない。

本跡は、出土遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第123図 第8号住居跡出土遺物実測図

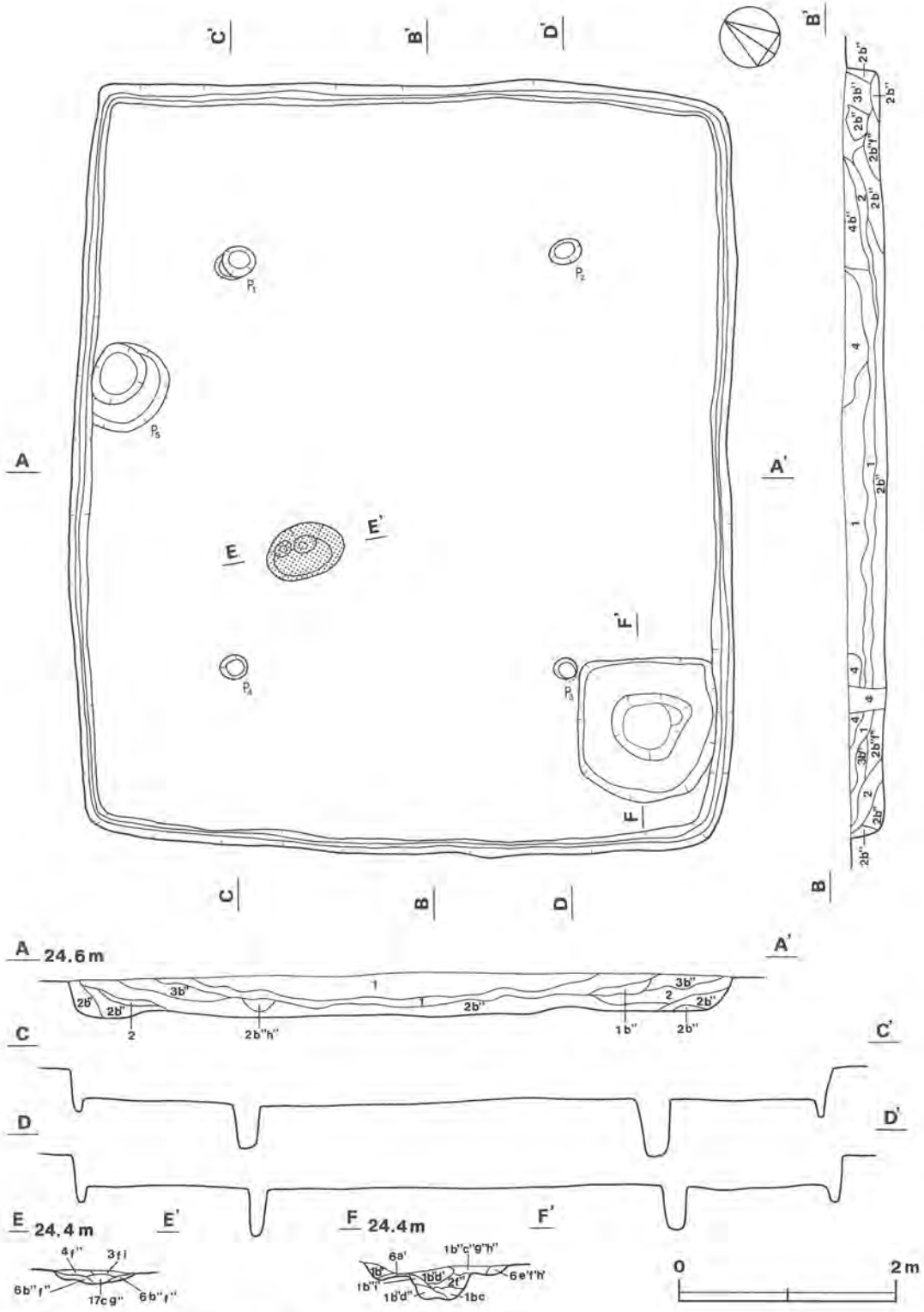
第8号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第123図 1	台付甕形土器 土師器	B (7.8) D 6.5 E 10.0	脚部片。脚台部は「ハ」の字状に開く。	外面は縦位のハケ目整形, 内面は横位のハケ目整形。	砂粒・パミスにふい橙色普通	20% P 2
2	壺形土器 土師器	B (1.5) C 3.4	底部片。平底。	内・外面とも篋磨き, 外面は赤彩。	砂粒明褐色普通	15% P 1
3	高環形土器 土師器	B (5.6) D 5.0 E (11.4)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開き, 中位に3孔が穿たれる。裾部は緩やかに広がる。	外面は縦位の篋磨き, 内面はハケ目整形。	砂粒橙色普通	40% P 3

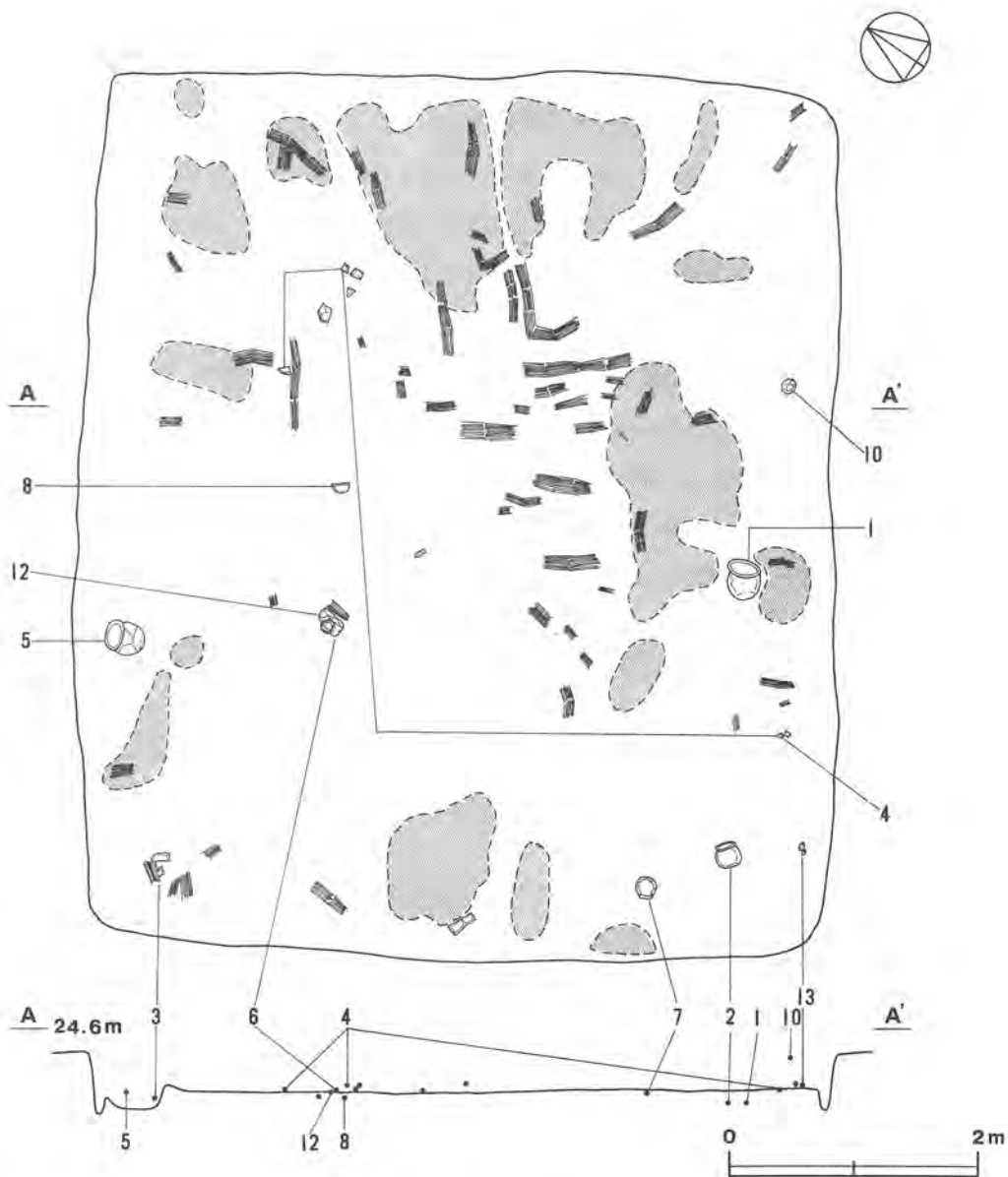
第9号住居跡 (第124・125図)

本跡は、調査区の南西部N5j0区を中心に確認された住居跡である。本跡の北西4mには第15号住居跡が、南13mには第24号住居跡が存在している。

平面形は、長軸7.10m、短軸6.04mの長形状を呈し、長軸方向はN-57°-Eを指している。床面積は40.7㎡である。壁は、締まりのあるロームで、垂直に立ち上がっている。壁高は28~30cmで、壁下には壁溝が全周している。壁溝の上幅は10cm、深さは15cmで、他の住居跡の壁溝に比べ狭く深目である。床はロームで、緩やかに起伏し、壁際まで硬く踏み締まっている。ピットは5か所確認した。P₁~P₄は、方形に配列されていることから、本跡の主柱穴と判断した。P₁~P₄の上端直径は22~30cm、深さは41~54cmであり、床面積が大きい割には小規模である。貯蔵穴は、南コーナー部と、北西壁際の2か所に存在している。南コーナー部の貯蔵穴は2段に掘り込まれている。上段は10cmほどの浅い掘り込みで、一辺1.2mの方形状を呈している。下段は、直径60cmの円形状を呈し、床面からの深さは35cmである。貯蔵穴内の覆土は自然堆積である。北西壁際に位置する貯蔵穴 (P₅) は、上端直径55cm、深さ16cmの椀状を呈している。貯蔵穴としては小規模であり、位置的にも異例であるが、掘り込みの全体が硬く締まり、幅20cm、高さ6cmほどの周堤



第124图 第9号住居跡実測図



第125図 第9号住居跡出土炭化材・遺物位置図

が巡ることから貯蔵穴と判断した。炉は、床面をわずかに掘り窪めた地床炉で、中心から1.3mほど北コーナー部に寄って位置している。炉の平面形は長径72cm、短径55cmの楕円形状を呈し、長径方向はN-43°-Wを指している。炉内には焼土粒子を含む黒褐色土や暗赤褐色土が堆積しているが、それほど焼土化していない。炉床の焼き締まりもみられないことから、使用期間は短かったものと思われる。

覆土は、上・中層に黒褐色土が、下層には焼土や炭化材を多く含む暗褐色土がレンズ状に堆積

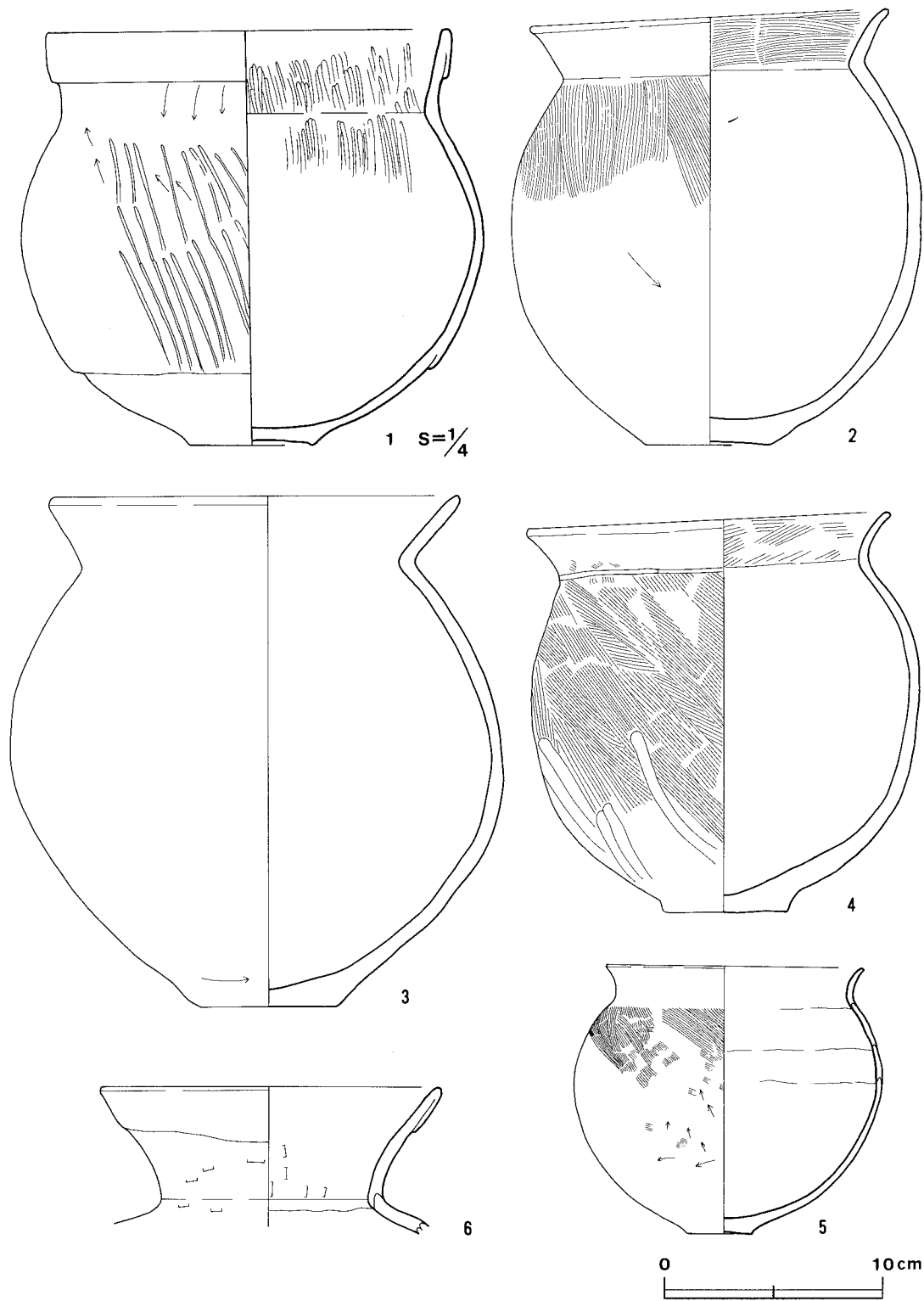
している。焼土や炭化材が床面にまで達していることや、完形の土器類が床面上に散乱していることから、本跡は居住期間中に焼失したものと思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片137点、ミニチュア土器1点、後世に流れ込んだと思われる須恵器片13点が出土している。貯蔵穴が位置する南コーナー部とそれに続く南東壁際に比較的多くの遺物が出土し、第126・127図2の甕形土器と13のミニチュアの高坏形土器脚部が貯蔵穴一段目の掘り込みの覆土中から、7の甕形土器が貯蔵穴の北側の床面から正位で出土している。南東壁際の床面からは、1の甕形土器が横位で、10の埴形土器が伏せた状態で出土している。そのほか、炉中から6の壺形土器口縁部と、12の高坏形土器脚部が、炉の東の床面から8の埴形土器が横位で出土し、北西壁際の床面には5の甕形土器が横位で潰れていた。4の甕形土器は、北側の床面にまとまって潰れていた土器片と南コーナー部床面から出土した土器片が接合したものである。これらの土器は、全て本跡に伴うものと思われる。

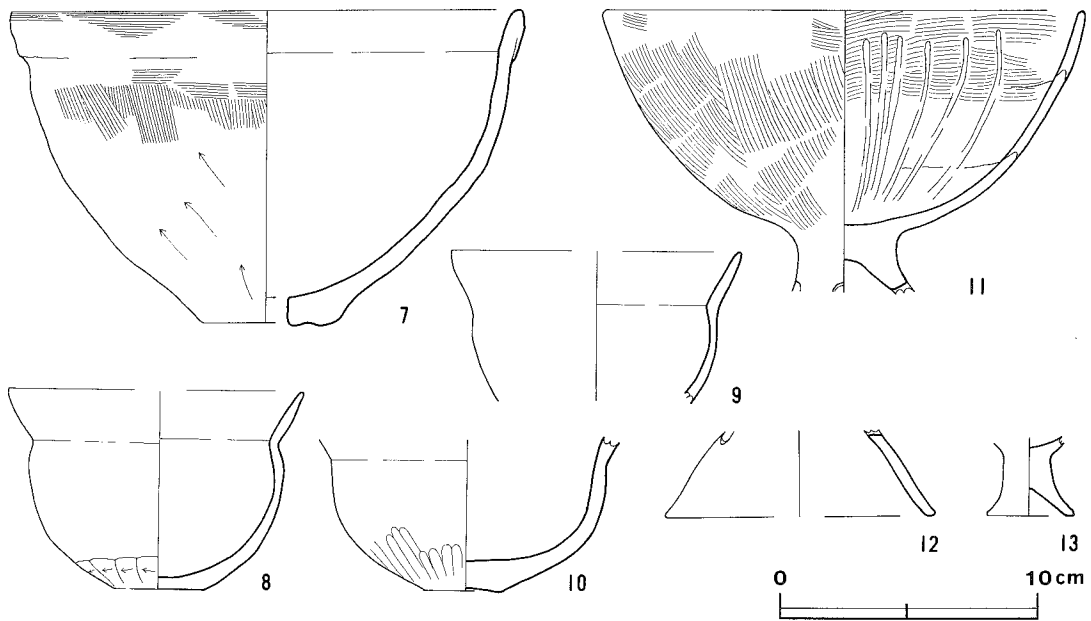
本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。

第9号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第126図 1	甕形土器 土師器	A 25.0 B 25.7 C 7.8	上げ底。胴下半部に段をもつが、全体的に球形状を呈し、最大径を上半部に持つ。口縁部は複合口縁で、外傾して開く。	複合口縁外面は横位のナデ整形。その他、内・外面は篋磨き。	砂粒 明赤褐色 良好	100% P5 PL87
2	甕形土器 土師器	A 16.8 B 20.4 C 5.8	上げ底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中央部に持つ。口縁部は外傾して開き、口唇部で外反する。	口縁部内・外面は横ナデ整形。胴部外面はハケ目整形。	砂粒 明赤褐色 普通	100% P7 PL87
3	甕形土器 土師器	A 19.2 B 23.9 C 6.4	胴下半部は内彎して立ち上がり、中央部が強張り出す。胴部最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内・外面は横ナデ整形。胴部内・外面はナデ整形。	砂粒 赤褐色 普通	80% P9
4	甕形土器 土師器	A 16.7 B 18.7 C 5.7	胴部は球形状を呈し、最大径を中央部に持つ。口縁部は外反して開く。	口縁部外面は横ナデ整形。胴部外面はハケ目整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	80% P8 PL87
5	甕形土器 土師器	A 23.6 B 25.5 C 6.1	上げ底。胴部は球形状を呈し、最大径を上半部に持つ。口縁部は強く外反する。器形は著しく歪む。	口縁部内・外面は横ナデ整形。胴部上半部はハケ目整形。胴下半部と内面は篋ナデ整形。	砂粒・パミス にぶい橙色 良好	90% P6
6	壺形土器 土師器	A 16.0 B (6.9)	胴下半部欠損。口縁部は複合口縁で、外反して開く。	複合口縁部は横ナデ整形。頸部は縦位の丁寧な篋ナデ整形。	パミス にぶい赤褐色 良好	30% P4



第126図 第9号住居跡出土遺物実測図(1)



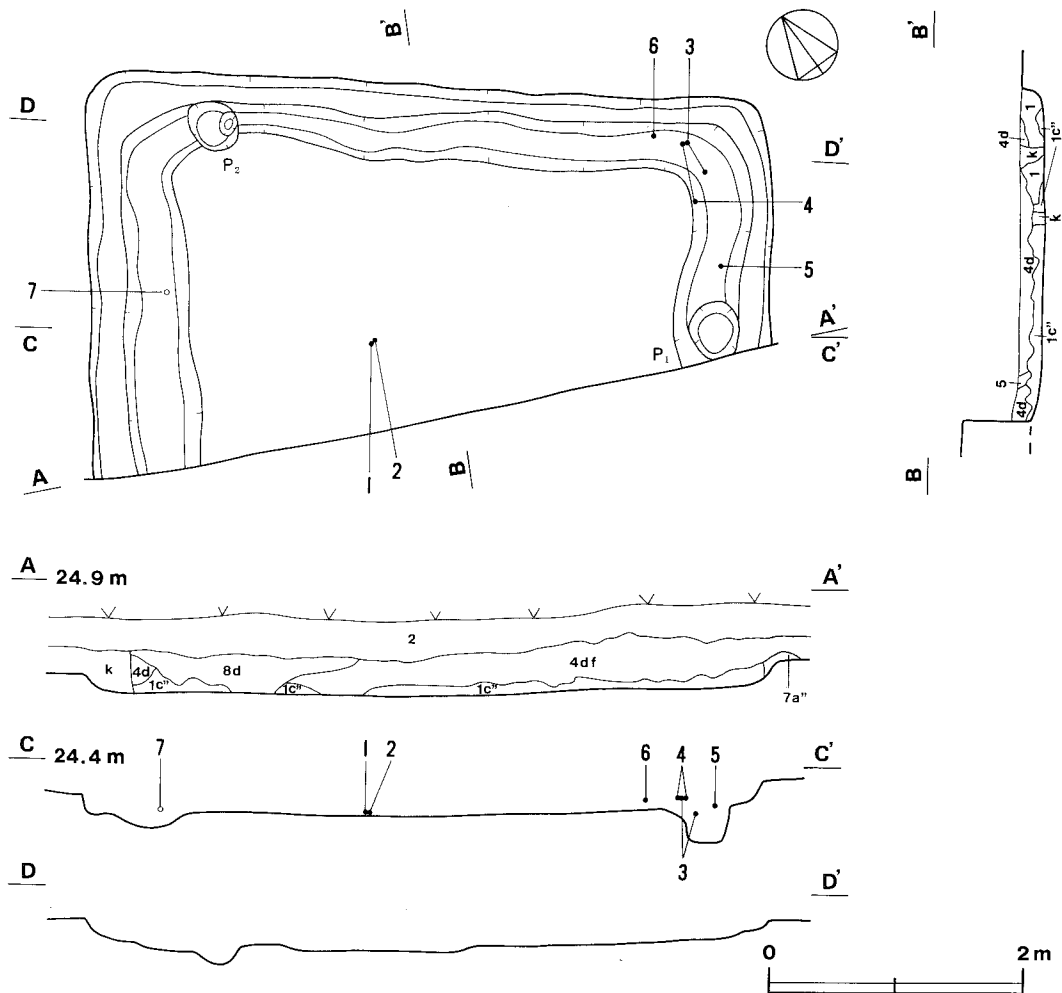
第127図 第9号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第127図 7	甑形土器 土師器	A 20.1 B 12.6 C 5.5	底部は引き締まり、中央に径1.8cmの孔が穿たれる。胴部は内彎して開き、口縁部は複合口縁となる。	内・外面はナデ整形。胴部外面にハケ目痕を残す。	砂粒 橙色 普通	100% P13 PL88
8	埴形土器 土師器	A [11.2] B 7.9 C 3.4	体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外傾して開き、内面に稜を持つ。	口縁部外面は横ナデ整形。胴部はナデ整形で、下位は篋削り。内面は丁寧な磨き。	石英 明赤褐色 普通	60% P15
9	埴形土器 土師器	A [11.5] B (6.0)	体部下半以下欠損。体部は内彎し、口縁部は外傾して開き、内面に稜を持つ。	外面はナデ整形が施され、内面は丁寧な磨き。	砂粒 にぶい橙色 不良	30% P16
10	埴形土器 土師器	B (6.2) C 3.0	上げ底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外反するが、上位を欠損する。	外面は縦位の篋磨き。内面は篋ナデ整形。内面は赤彩。	砂粒 橙色 普通	80% P14
11	高坏形土器 土師器	A 18.8 B (11.2) D (2.5)	脚部は「ハ」の字状に開き、上位に3孔が穿たれるが、下半部は欠損。坏部は埴状を呈する。	外面は縦位のハケ目整形。内面は横位のハケ目整形の後、篋磨き。	砂粒 橙色 普通	70% P10
12	高坏形土器 土師器	B (3.4) E 10.8	脚部片。脚部は内彎して開き、上位に3孔が穿たれるが、上位を欠損する。	外面は縦位ナデ整形。内面は横位の篋ナデ整形。	砂粒 橙色 不良	30% P11
13	ミニチュア土器(高坏形)土師器	B (3.1) E 3.5	脚部片。脚部は円筒形状を呈し、裾部は緩やかに開く。	外面は縦位の篋磨きが施され、全面に彩色の痕跡がみられる。	砂粒・パミス 橙色 普通	50% P12

第15号住居跡 (第128図)

本跡は、調査区の南西部 N5i8区を中心に確認された住居跡で、住居跡の南半分は調査区外に延びている。また、北西コーナー部から床中央にかけては時期不明の第16号溝によって掘り込まれている。本跡の北15mには第8号住居跡が、東5mには第9号住居跡が存在している。

本跡の平面形は、調査した範囲から推定して一辺5.3mほどの方形、あるいは長方形状を呈し、長軸方向はN-56°-Wを指すものと思われる。調査した床面積は13.3m²であるが、総床面積は27m²を越すものと思われる。壁はロームで、締まりは弱い。壁高は15~20cmで、65度の角度で外傾して立ち上がっている。壁際から10~25cm内側の床面には周溝が巡っている。周溝の上幅は40cm、深さは10cmである。床はロームで、全体的に軟弱である。床面は東側がやや高まっている。ピットは2か所確認した。P₁は、東側の周溝中に位置し、上端直径は40cm、深さは30cmである。



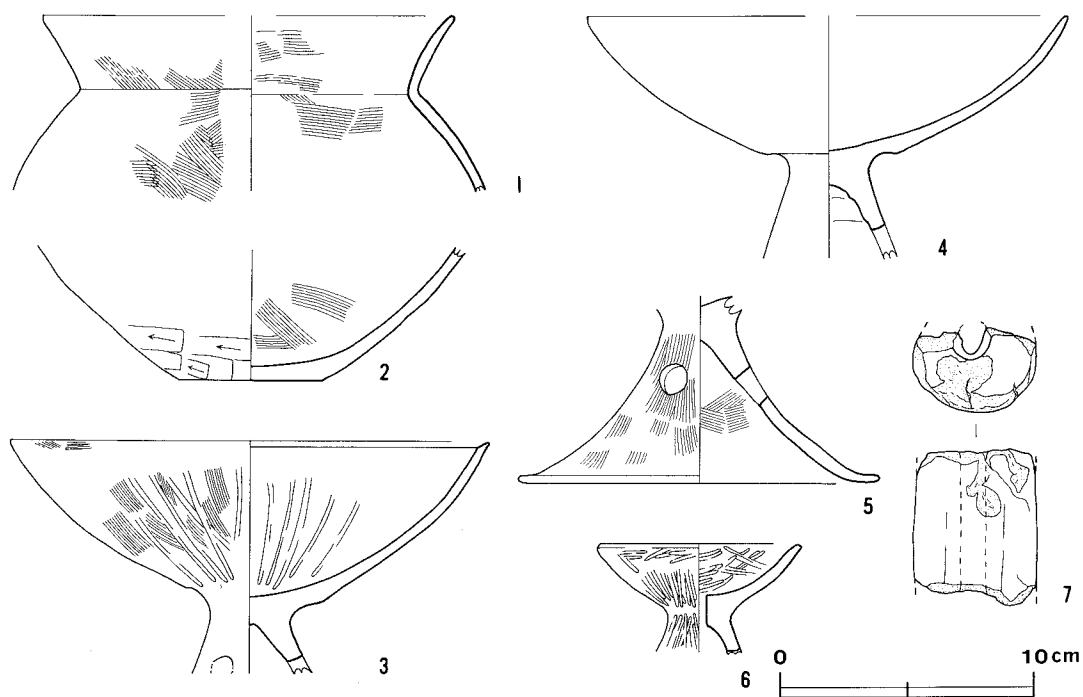
第128図 第15号住居跡実測図

底面は平坦で、覆土も良好であることから、P₁は本跡に伴う柱穴と思われる。P₂は、小規模で掘り方も不良であることから本跡に伴うものとは思われない。調査した範囲内に、炉や貯蔵穴は存在しない。

覆土は自然堆積で、上層に黒褐色土が、下層には褐色土が堆積する。上・下層とも締まりは弱い。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片21点、管状土錘1点が出土している。東コーナー部の周溝確認面には第129図3～5の高环形土器と6の器台形土器の破片がまとめて出土しているが、完形にまで復元できるものは1点もなかった。1・2の甕形土器は中央部の床面から、7の管状土錘は北西側の周溝確認面から出土している。これらの土器は本跡に伴うものと考えられる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第129図 第15号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第129図 1	甕形土器 土師器	A (18.2) B (7.0)	口縁部片。口縁部は外反して開く。	口縁部内・外面は横ナデ整形。	砂粒 浅黄橙色 不良	10% P25

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第129図 2	甕形土器 土 師 器	B (5.2) C 5.6	底部片。平底。胴下半部は内彎 気味に大きく開く。	外面はナデ整形。底部は篋削り、 内面はハケ目整形。	砂礫 灰褐色 不良	20% P17
3	高坏形土器 土 師 器	A 19.0 B (9.2) D (2.3)	脚部は「ハ」の字状に開き、上 位に3孔が穿たれるが、下位を 欠損する。坏部は下位に稜を持 ち、内彎して立ち上がる。	外面と坏部内面は篋磨きされた 後、赤彩。	砂粒 明赤褐色 良好	70% P18 PL89
4	高坏形土器 土 師 器	A [18.9] B (9.6) D (4.0)	脚部は「ハ」の字状に開き、上 位に3孔が穿たれるが、下位を 欠損する。坏部は下位に稜を持 ち、内彎して立ち上がる。	外面と坏部内面は篋磨き後、赤 彩。脚部内面に輪積痕が残る。	スコリア 橙色 普通	40% P19
5	高坏形土器 土 師 器	B (7.4) E 14.2	脚部片。脚部は「ハ」の字状に 開き、上位に3孔が穿たれる。 裾部はやや外反気味となる。	外面は縦位のハケ目整形。内面 横位のハケ目整形。	砂粒多量 橙色 普通	50% P20 PL89
6	器台形土器 土 師 器	A 8.1 B (4.3) D (1.4)	脚部は「ハ」の字状に開く。上 位に3孔が穿たれ、下位を欠損 する。器受部は内彎して開き、 接合部に中央孔を持つ。	外面と器受部内面は篋磨き。	スコリア 明褐色 良好	60% P21

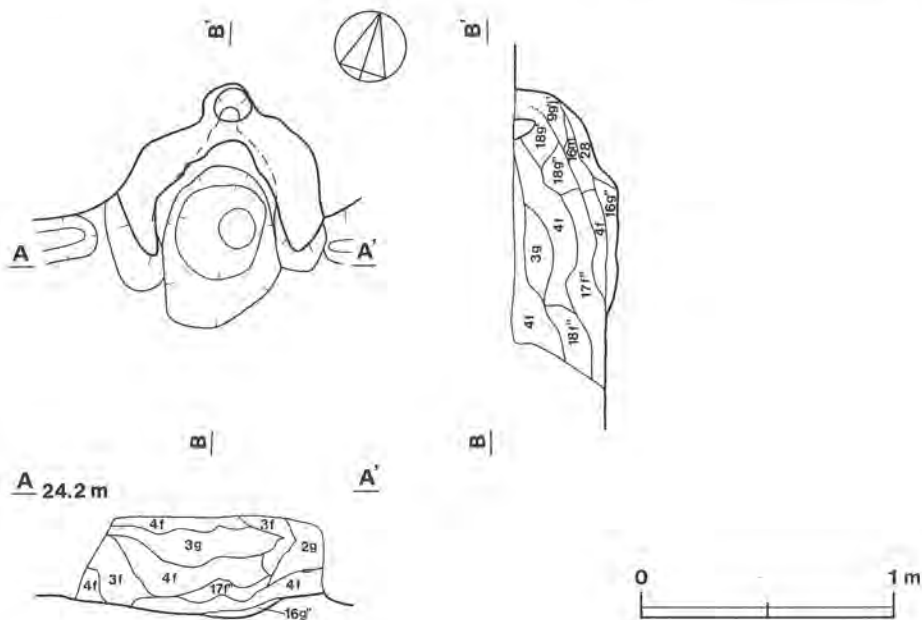
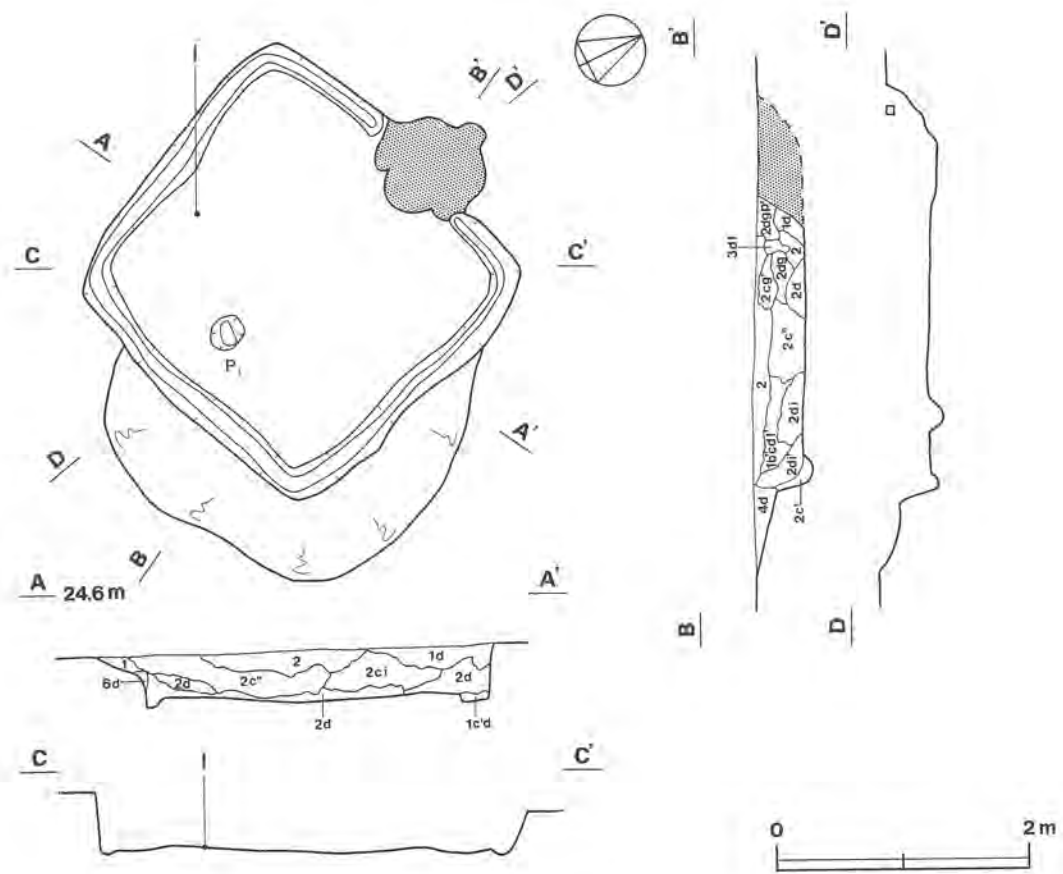
第20号住居跡 (第130図)

本跡は、調査区の南西部 N6g5区を中心に確認された住居跡である。本跡の東 9 m には第23号住居跡が、南 5 m には第40号住居跡が存在している。

平面形は、長軸2.76m、短軸2.66mの方形状を呈し、主軸方向はN-21°-Wを指している。床面積は6.5㎡である。壁はロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。北壁と西壁の壁高は39~43cmであるが、東壁と南壁は、第130図にみられるごとく住居外から続く掘り込みによって25cmも低くなっている。壁直下には上幅10~15cm、深さ5~10cmの小規模な壁溝が全周している。床は貼り床で、壁際まで硬く踏み締まり、床面は起伏している。ピットは、南壁際に1か所を確認した。上端直径は25cm、深さは11cmで、入口部施設に関する柱穴と思われる。カマドは北壁の中央部から東へ寄った位置に付設されており、天井部は崩落している。カマドの全長は100cm、横幅は85cmである。燃焼部の規模は、長さ80cm、幅50cmで、壁面を35cm奥へ掘り込んでいる。煙道部は、奥壁をさらに20cmほど円筒状に掘り込んで構築している。袖部・天井部と煙道の上部は砂質の粘土によって構築され、内面は赤褐色に変色している。カマド内には焼土ブロックを含む暗褐色土が主に堆積し、火床は床面からわずかに掘り込まれ、レンガ状に焼き固まっている。

覆土は、締まりの弱い暗褐色土で、大・小のロームブロックを多量に含むことから、人為的に埋め戻されたものと思われる。第130図にみられる住居跡の東から西にかけての掘り込みは、そのために削り取られた可能性が高い。

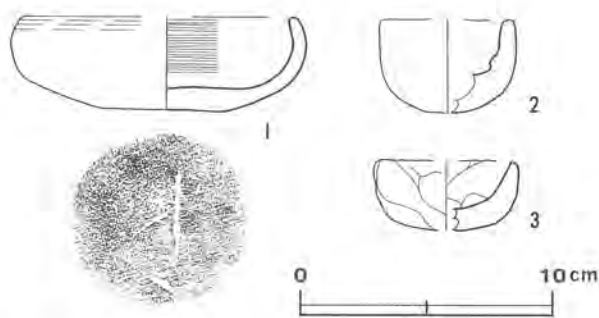
遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片170点、須恵器片11点、手捏土器の破片5点が出



第130図 第20号住居跡・カマド実測図

土している。遺物の多くは覆土の上層から下層にかけて出土しており、第131図1の坏形土器は西壁際の下層から、2・3の手捏土器は北西部の中層から破片で出土したものである。これらの遺物は、その出土状況から本跡に伴うものとは考えにくく、埋め戻しの際に混入した可能性が高い。

本跡の時期は、判定する資料が乏しいため明確にはできないが、出土遺物から、一応古墳時代後期以降として位置付けておきたい。



第131図 第20号住居跡出土遺物実測図

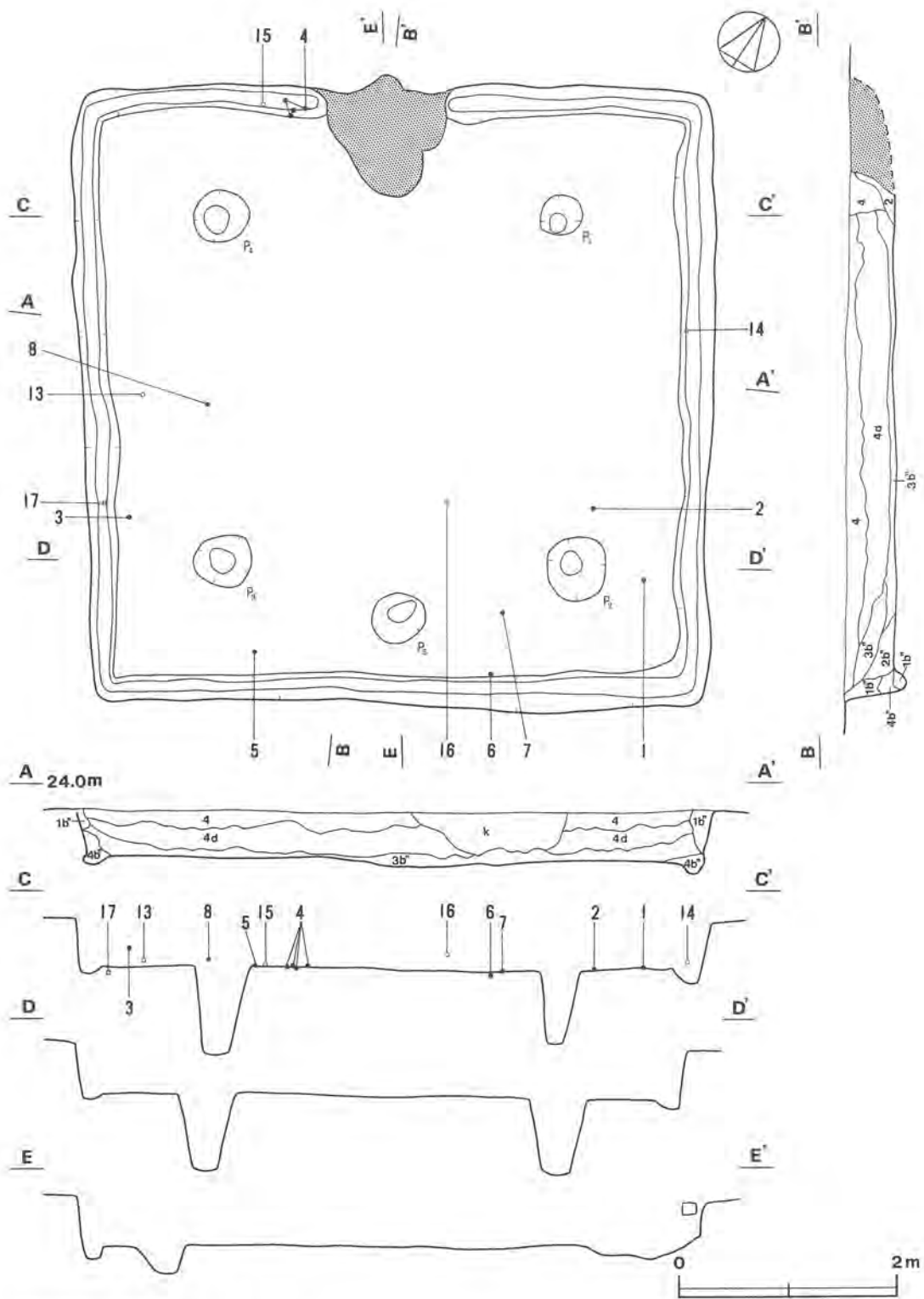
第20号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第131図 1	坏形土器 土師器	A [10.7] B 3.8 C 4.8	平底。体部は内彎気味に大きく開き、上位で強く内彎し、口縁部に至る。	口縁部内・外面は横ナデ整形。体部外面は篋削り。内面は篋磨き。底部木葉痕。	砂粒 にふい褐色 普通	60% P144
2	手捏土器 (堦形) 土師器	A [5.4] B 3.8 C [1.6]	半球状を呈する。	手捏成形。内面は指ナデ整形。	砂粒 にふい橙色 普通	40% P145
3	手捏土器 (堦形) 土師器	A [5.8] B 2.9	半球状を呈する。	手捏成形。外面に指紈痕。内面は指ナデ整形。	砂粒 にふい橙色 普通	45% P146 PL90

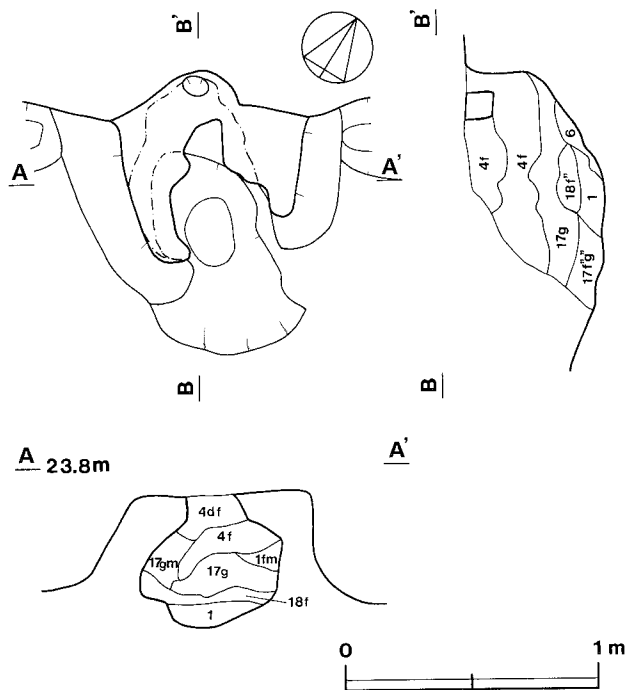
第23号住居跡 (第132・133図)

本跡は、調査区の中央部 N6g9区を中心に確認された住居跡である。本跡の西9 mには第20号住居跡が、南8 mには第22号住居跡が存在している。

平面形は、長軸5.8m、短軸5.72mの方形状を呈し、主軸方向はN-35°-Wを指している。床面積は31.0m²である。壁は締まったロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は46cmと高く、壁直下には上幅20cm、深さ10~13cmの壁溝が全周している。床はロームで、支柱穴の内側は硬く踏み締まっている。床面は平坦で、カマドの前方には直径1 mの攪乱坑が存在する。ピットはP₁~P₅の5か所を確認した。支柱穴と思われるP₁~P₄は、上端直径が40~55cm、深さが68~83cmの大規



第132图 第23号住居跡実測図



第133図 第23号住居跡カマド実測図

褐色に焼き固まっている。

覆土は、上層に黒褐色土、中層にロームブロックを含む黒褐色土、下層に極暗褐色土が堆積している。自然堆積層と思われる。

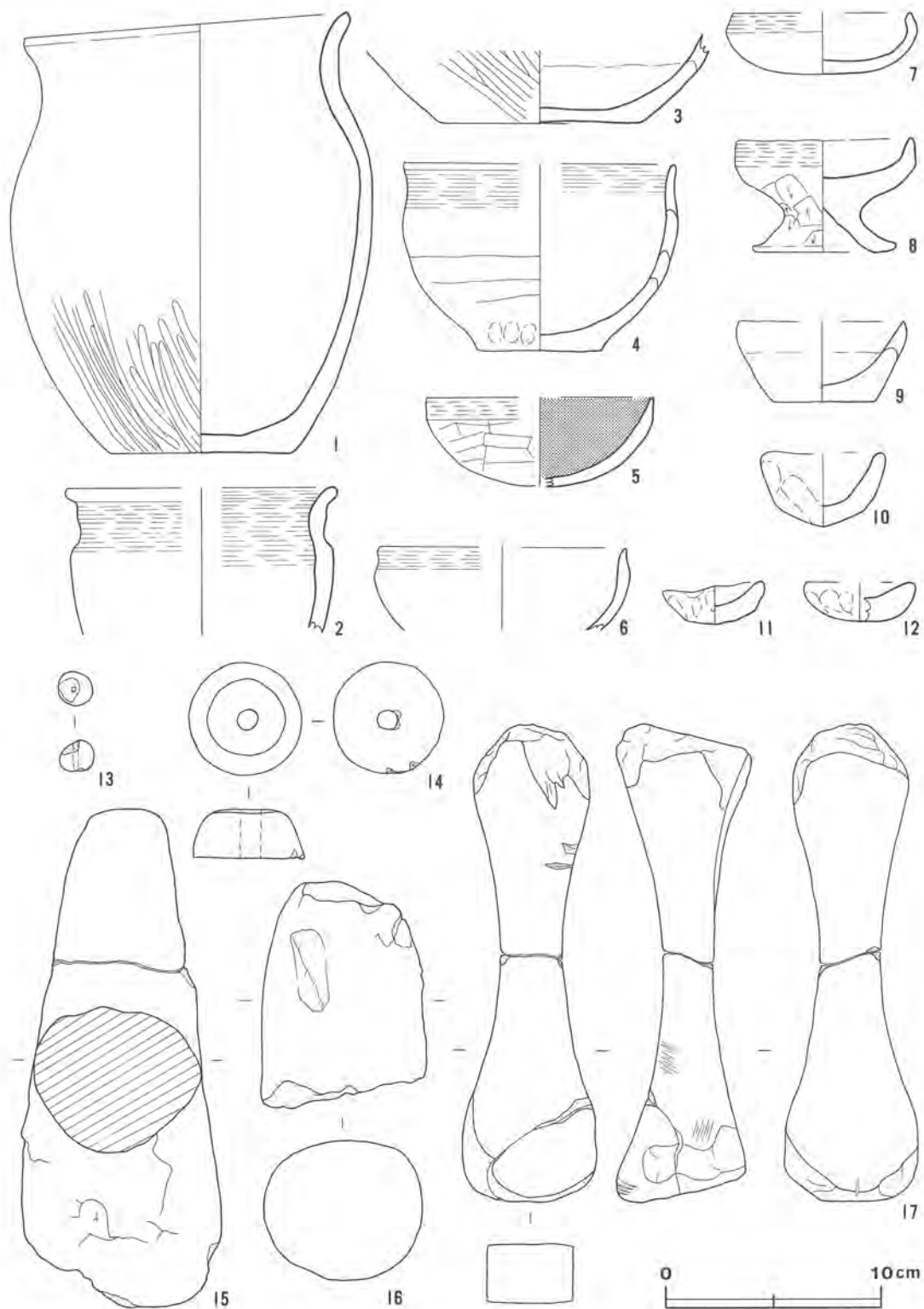
遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片209点、須恵器片2点、手捏土器4点、土製品（紡錘車・球状土錘・支脚）4点、砥石1点と、カマド内から土師器片8点が出土している。本跡に伴う遺物は遺構全体に散在している。カマド西側の壁溝から第134図の支脚が、南東コーナー付近の床面から、1・2の甕形土器、6・7の環形土器が出土している。西側の床面には完形の8の高環形土器が正位で、壁際には17の砥石が完形のまま出土している。なお、14の紡錘車は東壁溝中から出土したもので、これも本跡に伴う遺物であるが、13の球状土錘は覆土中の出土品で本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物や、遺構の形態等から古墳時代後期の鬼高期の住居跡と思われる。

第23号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第134図 1	甕形土器 土師器	A 15.1 B 20.5 C 8.5	胴部は内彎して立ち上がり、最大径を上位に持つ。口縁部は外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ整形。胴下半部から底面まで篋削り。	長石 に お い 橙 色 普 通	90% P69 PL87

模なもので、方形に配列されている。南壁際に位置する P₅ は、上端直径が 50cm、深さが 27cm で、入口部施設に関する柱穴と思われる。カマドは、北西壁の中央部に付設されており、天井の一部と東袖の一部は崩落している。カマドの全長は 113cm、横幅は 95cm である。燃焼部の規模は長さ 100cm・幅 55cm、高さ 45cm で、壁面は掘り込んでいない。煙道部は奥壁を 15cm ほど U 字形に掘り窪めて構築している。袖部・天井部及び煙道の上部は砂質粘土によって構築され、内部には焼土ブロックや木灰を多量に含む暗赤褐色土が主に堆積している。火床は、床面から 15cm 掘り込まれ、赤



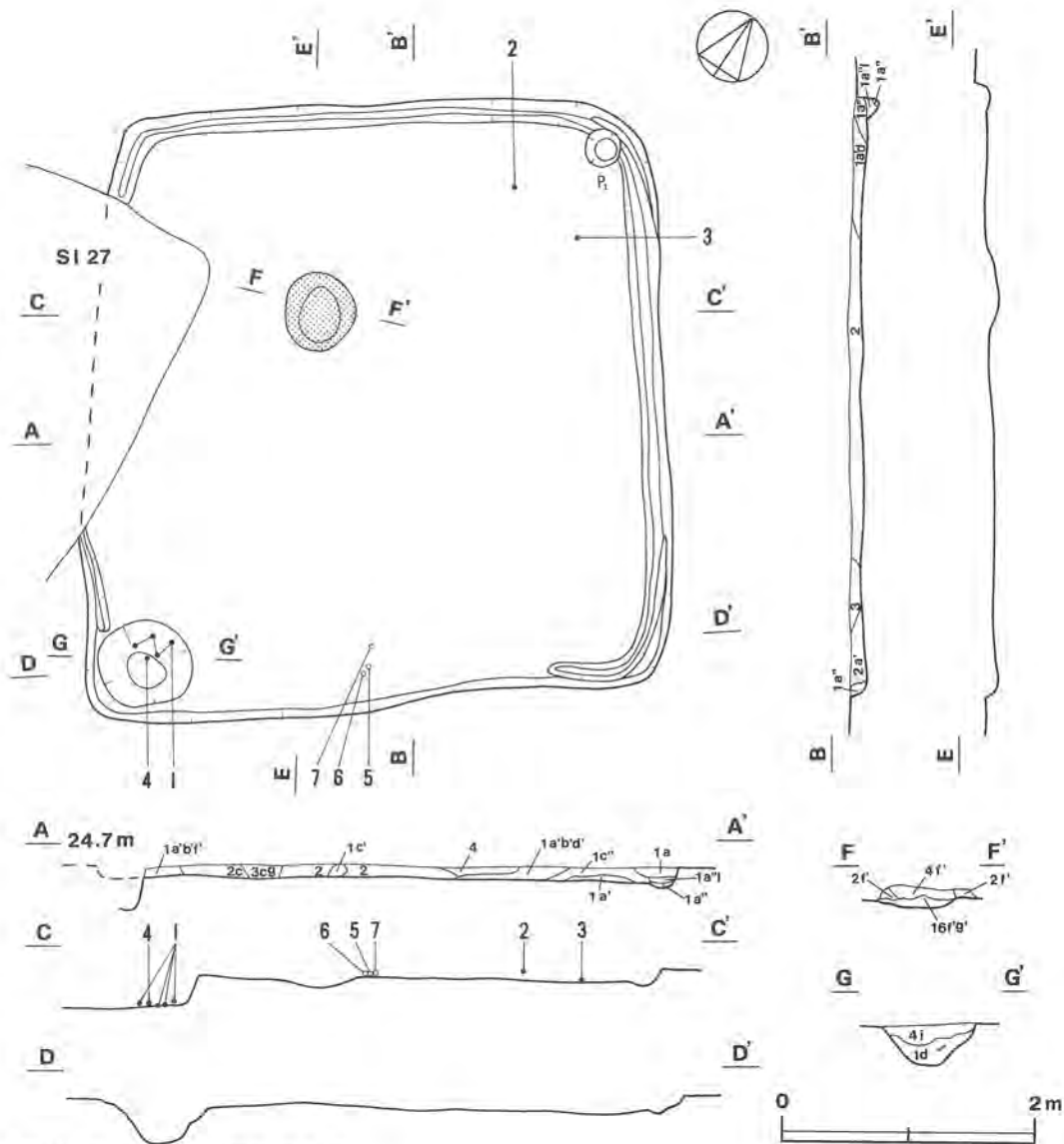
第134图 第23号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第134図 2	甕形土器 土師器	A (12.4) B (6.8)	胴部中位以下欠損。頸部は直立し、口縁部は外反する。	口縁部から頸部にかけての内・外面横ナデ整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% P71
3	甕形土器 土師器	B (4.2) C 9.4	わずかに上げ底。胴下半部は内彎して立ち上がるが、上位を欠損する。	胴下半部から底面まで篋削り。	雲母 灰褐色 普通	20% P72
4	鉢形土器 土師器	A (13.0) B 8.6 C 5.7	底部は引き締まる。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面は横ナデ整形。胴部外面はナデ整形。輪積痕が残る。底面は篋削り。	細砂粒 明褐色 良好	50% P73
5	坏形土器 土師器	A (10.6) B 4.2	丸底。体部は底部と共に内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面は横ナデ整形。体部外面は篋削り、内面は丁寧な篋磨き。	砂粒 灰褐色 普通	50% P75 内面黒色処理
6	坏形土器 土師器	A (11.5) B (3.8)	底部欠損。体部は内彎して開き、口縁部は内傾する。	口縁部は横ナデ整形。	砂粒 褐灰色 普通	30% P79
7	坏形土器 土師器	A (8.2) B 2.9	丸底。体部は底部と共に内彎して立ち上がり、口縁部は内彎する。	口縁部外面と坏内面は横ナデ整形。体部下半は篋削り。	砂粒 灰褐色 普通	30% P78
8	高坏形土器 土師器	A 8.3 B 5.2 D 2.5 E 6.8	脚部は「ハ」の字状に開き、裾部は外反する。坏部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面は横ナデ整形。坏底部から脚部上位にかけては篋削り。	細砂粒 灰褐色 普通	90% P74 PL89
9	手捏土器 (坏形) 土師器	A (7.6) B 3.8 C 5.1	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	粗雑な整形で、外面に輪積痕を残す。底部木葉痕。	細砂粒 橙色 不良	40% P82
10	手捏土器 (坏形) 土師器	A (6.0) B 3.5	丸底。坏状を呈する。	粗雑な整形で、外面に指圧痕を残す。	細砂粒 灰褐色 不良	50% P81
11	手捏土器 (坏形) 土師器	A (4.8) B 2.0	丸底。坏状を呈する。	粗雑なナデ整形で、外面に指圧痕を残す。	細砂粒 灰褐色 不良	60% P80
12	手捏土器 (坏形) 土師器	A (5.3) B 1.7	丸底。坏状を呈する。	粗雑な整形で、外面に指圧痕を残す。	細砂粒 灰褐色 不良	30% P83

第24号住居跡 (第135図)

本跡は、調査区の南西部 O5e9 区を中心に確認された住居跡で、西側の一部は 8 世紀代の第 27 号住居跡によって掘り込まれている。本跡の北 12m には第 9 号住居跡が、南東 11m には第 25 号住居跡が存在している。

平面形は、長軸 4.85m、短軸 4.63m の方形状を呈し、長軸方向は N-36°-W を指している。床面積は 20.0m² である。壁はロームで、60~65 度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は 8 cm である。壁直下には壁溝が周回しているが、南東壁側には検出できなかった。壁溝の上幅は 12



第135図 第24号住居跡実測図

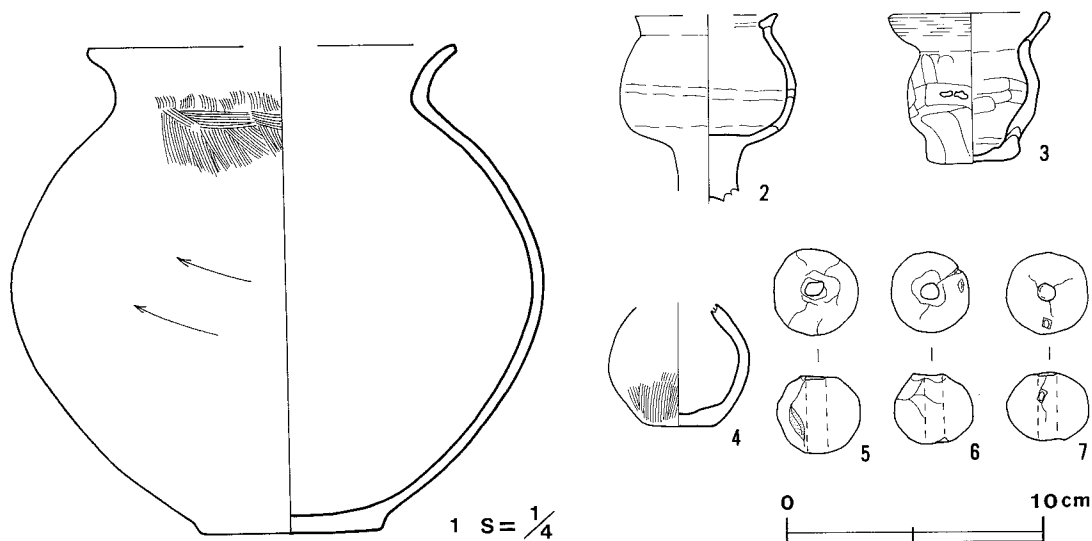
cm、深さは5cmである。床はロームで、緩やかに起伏し軟弱である。ピットは、北コーナー部に1か所だけ確認した。ピットの上端直径は30cm、深さは24cmである。覆土の状況から、本跡に伴う柱穴と思われる。貯蔵穴は、南コーナー部に位置している。貯蔵穴の平面形は上端直径75cmの円形状を呈し、深さは34cmで椀状に掘られている。貯蔵穴内の覆土は自然堆積で、上層に黒褐色土が、下層には褐色土が堆積している。炉は、床面を5cmほど掘り下げた地床炉で、中央より90cmほど西コーナー部に寄っている。炉の平面形は、上端直径55cmの円形状を呈している。炉内には焼土を多量に含む赤褐色土が堆積しているが、炉床はほとんど焼き締まっていない。炉の使

用期間は短かったものと思われる。

覆土は1層で、締まりの弱い暗褐色土が堆積している。覆土の厚さは10cmほどであり、堆積状況については不明である。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片156点、手捏土器2点、球状土錘2点が出土している。北コーナー部の床面近くからは第136図2と3の手捏土器が完形に近い状態で出土しているほか、南東壁際からは5～7の球状土錘が出土している。1の甕形土器と4のミニチュア土器(壺形)は、貯蔵穴の覆土中に流れ込むような状態で出土しており、本跡が埋没する過程で貯蔵穴の北側にあった土器が落ち込んだものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。



第136図 第24号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第136図 1	甕形土器 土師器	A 19.3 B 25.5 C (9.4)	胴部は内彎して立ち上がり、中央部が強く張る。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ整形。胴部上半部はハケ目整形。下半部はナデ整形。	砂粒・パミスにぶい橙色普通	50% P23
2	手捏土器 (台付甕形) 土師器	A (5.6) B (7.3)	脚台部は棒状で裾部が開くが、下半は欠損。胴部は球形状を呈し、口縁部は外反して開く。	粗雑な整形で、外面に輪積痕が残る。	パミス多量 橙色不良	70% P27 PL90
3	手捏土器 (甕形) 土師器	A 6.2 B 6.0 C 3.6	底部は引き締まり突出する。胴部は球形状に膨らみ、口縁部は内彎気味に開く。	粗雑なナデ整形で、胴中央部は横位の寛削り。	パミスにぶい橙色普通	80% P26 PL90

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第136図 4	ミニチュア 土器(壺形) 土師器	B (4.9) C 2.7	胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。口縁部を欠損する。	胴部は上位はナデ整形。下位は縦位のハケ目整形。	スコリア 橙色 普通	80% P22 PL90

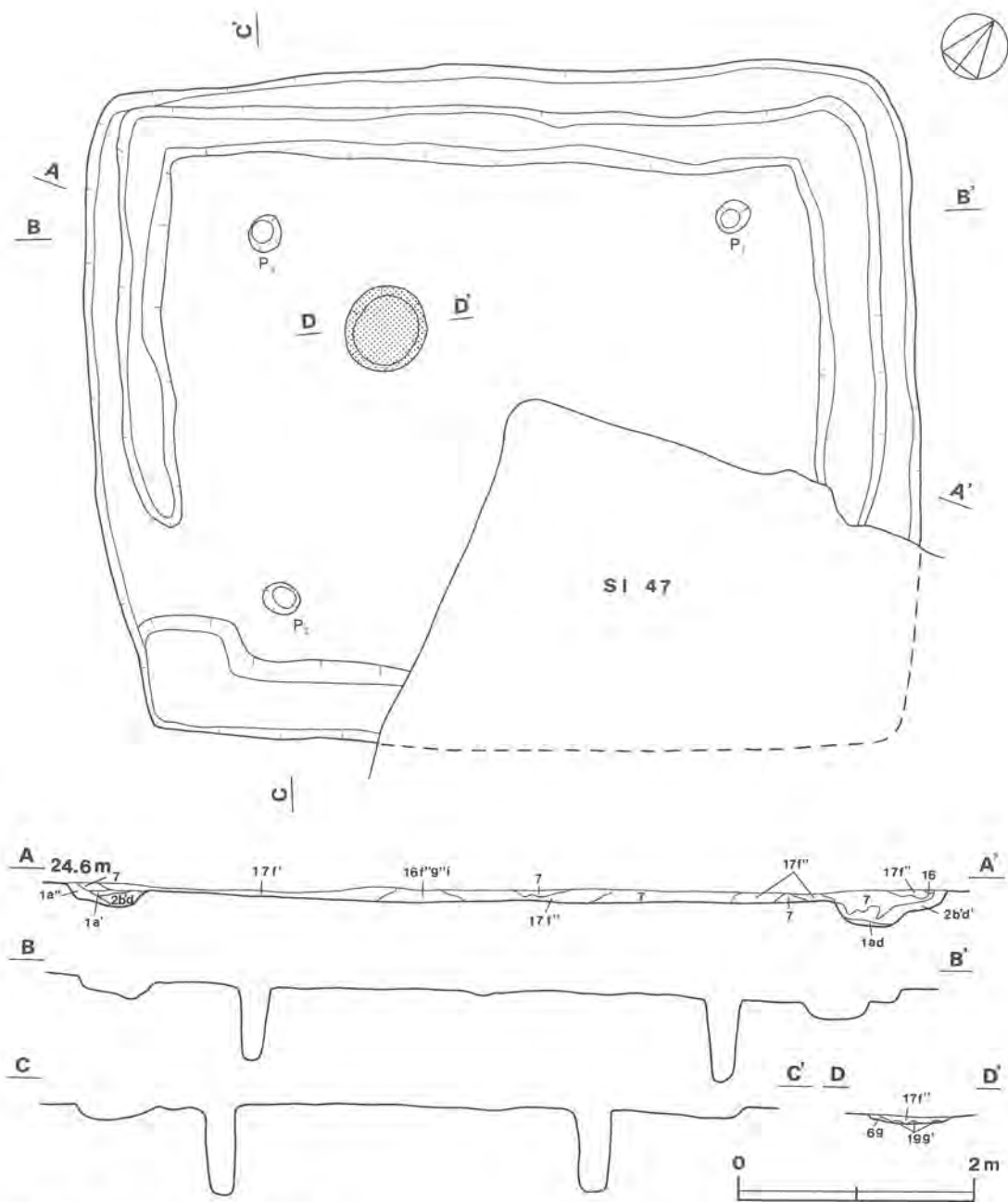
第25号住居跡 (第137・138図)

本跡は、調査区の南部O6g3区を中心に確認された住居跡で、東側は8世紀代の第47号住居跡によって掘り込まれている。本跡の北12mには第32号住居跡が、西11mには第24号住居跡が存在している。

平面形は、長軸6.96m、短軸5.72mの長形状を呈するが、北コーナー部はやや丸味を帯びている。長軸方向はN-51°-Eを指している。床面積は37.5㎡である。壁はロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は7~10cmである。壁際から20cmほど内側を周溝が周回しているが、南西壁の南側では75cmほど切れている。周溝の上幅は50cm、深さは10~15cmであり、他の住居跡と比べ幅広で、やや深目である。床は、壁際に至るまで極めて硬く踏み締まり、細かなひび割れを生じている。床面は、やや凸凹している。ピットは3か所確認した。3本のピットは、各コーナー付近の床面に位置し、上端直径25~30cm、深さ70~75cmとほぼ同様の規模を有することから、すべて支柱穴と思われる。なお、東コーナー部に存在したと考えられるピットは、その部分が、第47号住居跡によって掘り込まれているため検出できなかった。炉は、床面を5cmほど掘り窪めた地床炉で、中央から1.2m西コーナー部に寄った位置にある。炉の平面形は、直径70cmの円形状を呈し、炉内には焼土を多量に含む暗赤褐色土が堆積している。炉床もレンガ状に焼き締まっていることから、長期間使用されたものと思われる。

覆土の厚さは10cmほどで、焼土や炭化材を多量に含む暗赤褐色土や暗褐色土がブロック状に堆積している。焼土や炭化材は、床面にも多量に散乱している。床面には、焼けて赤化した箇所も数か所認められることから、本跡は居住期間中に焼失したものと思われる。

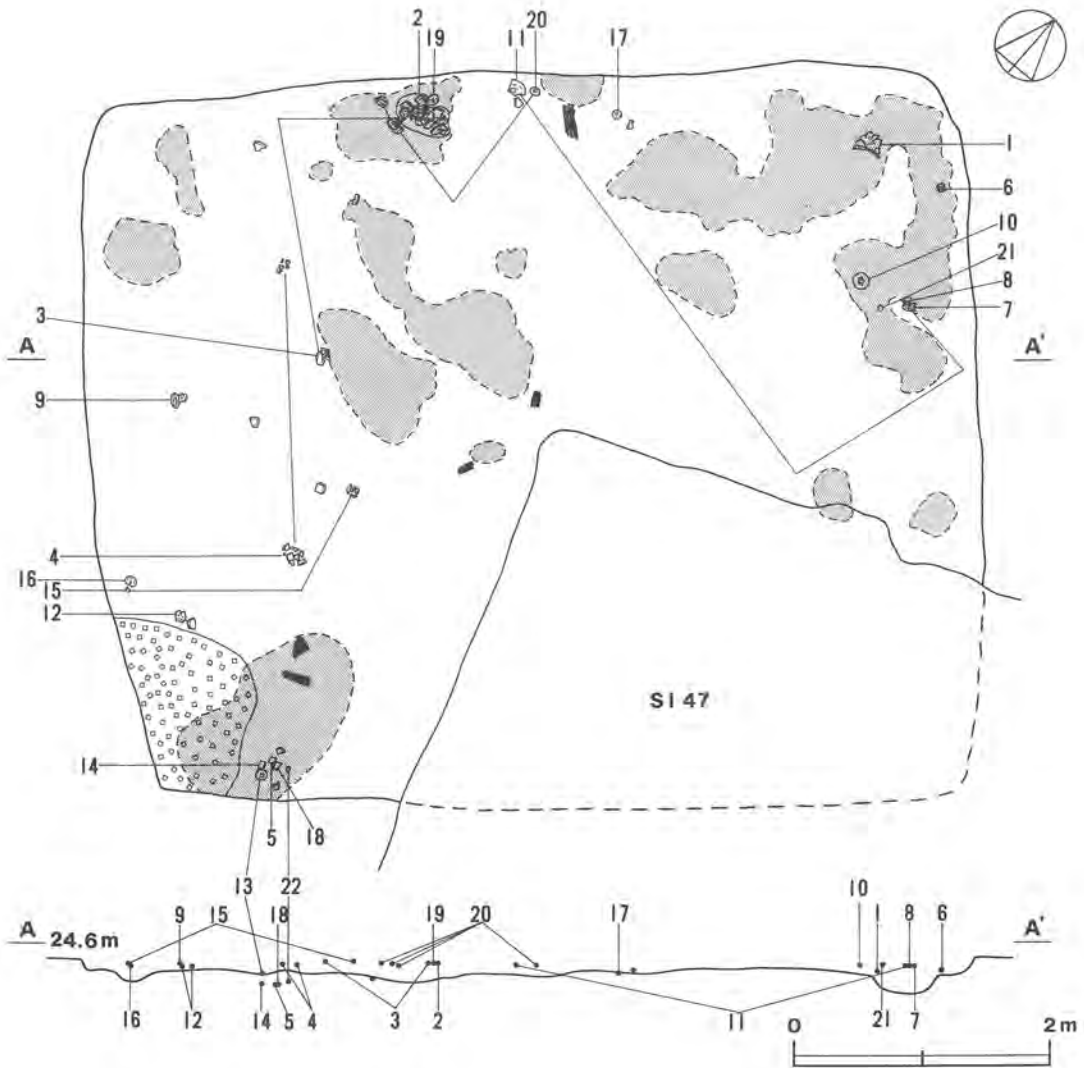
遺物は、床面や覆土中から土師器とその破片139点、手捏土器10点、球状土錘3点、炭化米少量(PL97)、小礫多量が出土している。土器類は各壁際から多く出土しているが、南東壁側は第47号住居跡によって掘り込まれているため確認できない。北西壁際の床面には、第139図2の甕形土器、3の壺形土器、11・17・19・20のミニチュア土器や手捏土器が横位あるいは倒立の状態で散乱している。北東壁際の床面から7・8の高坏形土器や10の器台形土器、6の壙形土器が破片で、南西壁近くの床面からは4の壺形土器、12の手捏土器、15・16のミニチュア土器が完形あるいは半完形で出土している。9の炉器台形土器も南西壁近くの床面近くから横位で出土したが、接合する脚部片は発見できなかった。小礫は南コーナー部床面の直径1mほどの範囲に約500個が集中して出土



第137図 第25号住居跡実測図

しており、本跡に伴うものと思われる。これらの礫の大きさは直径1～1.5cmである。炭化米は約100粒を採集したが、床面全体に散乱しており、特に集中して出土する場所などは認められない。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われるが、他の住居跡に比して手捏土器の出土量が多いことや、南コーナー部に小礫が多量検出されたこと、

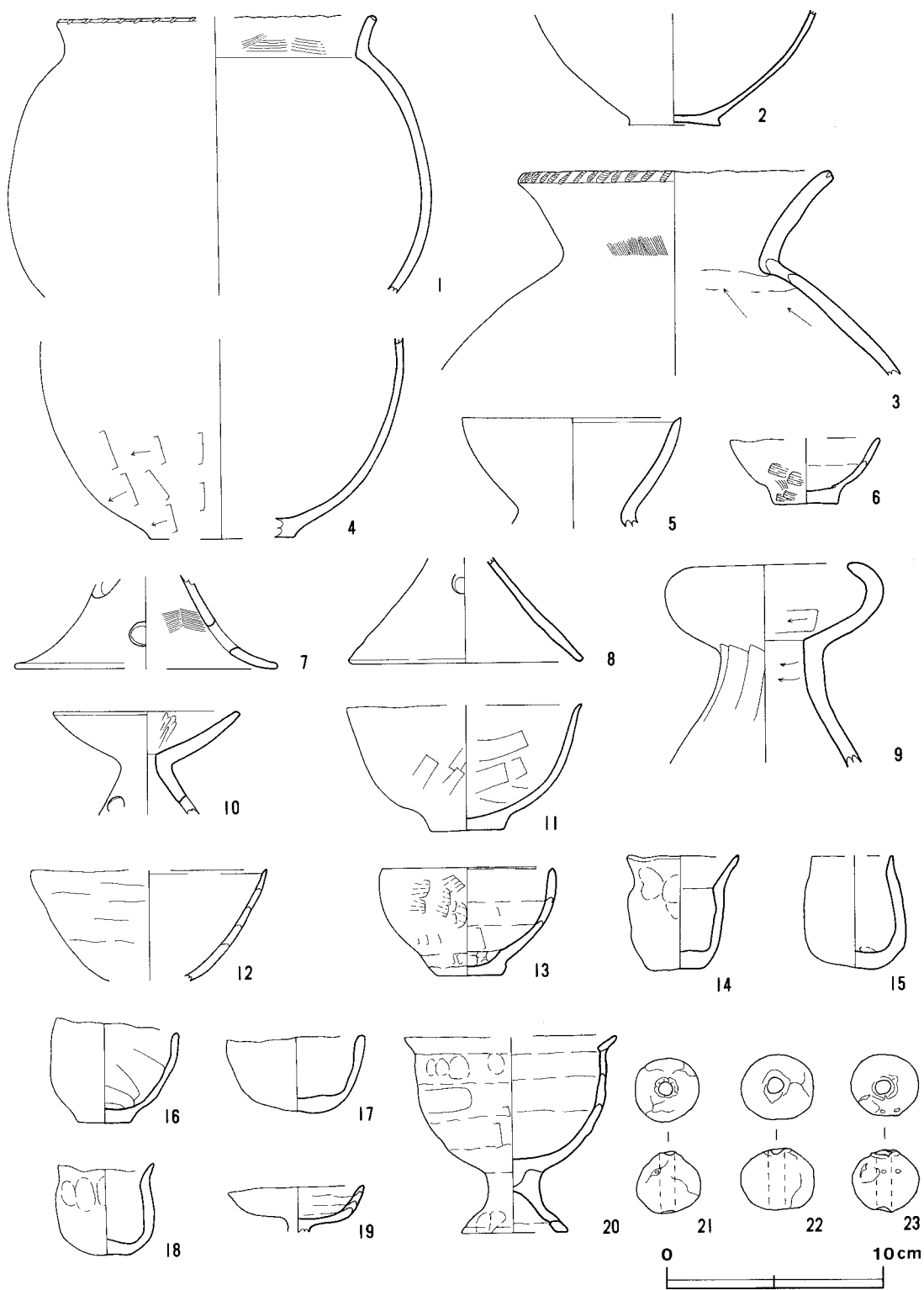


第138図 第25号住居跡出土遺物位置図

床面に炭化米が散乱していることなど一般の住居跡とは異なる点が多いことから、祭祀的な性格をもつ住居跡と考えられる。

第25号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第139図 1	甕形土器 土師器	A. [15.2] B (13.1)	胴下半部以下欠損。胴部は内彎する。口縁部は短く、外反して開く。	口唇部にキザミが施される。口縁部内・外面は横ナデ整形。胴部内・外面はナデ整形。	バミス多量にぶい橙色不良	40% P31 PL87



第139图 第25号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第139図 2	甕形土器 土師器	B (10.7) C (8.6)	上げ底。胴下半部は内彎して立ち上がり、上半部は欠損。	内・外面ともナデ整形。	パミス多量 橙色 不良	30% P30
3	壺形土器 土師器	A 14.7 B (9.7)	胴下半部欠損。胴上半部は内彎し、口縁部は外反して開く。	口唇部にキザミが施される。口縁部外面は横ナデ整形。胴部外面はナデ整形。	パミス多量 橙色 良好	40% P29
4	壺形土器 土師器	B (9.4) C (6.7)	底部は突出する。胴部は強く内彎し球形状を呈するが、上半部を欠損する。	内・外面とも篋ナデ整形。	パミス多量 灰褐色 不良	40% P32
5	埴形土器 土師器	A 10.3 B (5.0)	口縁部片。口縁部は内彎気味に立ち上がる。	内・外面は篋磨き後、赤彩。	砂粒・パミス 赤色 普通	30% P42
6	埴形土器 土師器	A [6.9] B 3.1 C 2.9	底部は引き締まり突出する。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。薄手である。	外面は粗雑なハケ目整形。内面は横位の篋ナデ整形。内・外面に輪積痕を残す。	砂粒・パミス 明褐色 普通	50% P47
7	高坏形土器 土師器	B (4.4) E [12.4]	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開き、上・下位に3孔ずつ計6孔が穿たれる。裾部は緩やかに広がる。	外面は縦位の篋ナデ整形。内面はハケ目整形。	砂粒・パミス 明赤褐色 良好	30% P38
8	高坏形土器 土師器	B (5.0) E 11.1	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開き、上位に3孔が穿たれる。	外面は縦位の篋磨き。内面は横位の篋ナデ整形。	パミス多量 ぶい褐色 普通	40% P37
9	炉器台形土器 土師器	A 7.7 B (9.5) D (5.6)	脚部は円筒形状を呈し、中位以下は角度を変えて開くが、下位を欠損する。器受部は強く内彎し、口径はせばまる。	器受部外面は粗雑なナデ整形。内面は篋ナデ整形。脚部外面は縦位の篋削り。	パミス多量 赤褐色 普通	70% P40 PL89
10	器台形土器 土師器	A 8.9 B (4.9) D (2.4)	脚部は「ハ」の字状に開き、上位に3孔が穿たれる。坏部は内彎気味に立ち上がり、接合部に中央孔を持つ。	外面と器受部外面は篋磨き。	砂粒 ぶい赤褐色 良好	70% P41
11	手捏土器 (埴形) 土師器	A [11.0] B 5.9 C 3.5	底部は引き締まり突出する。体部は内彎して立ち上がり、口唇部は外反する。薄手である。	外面は粗雑なナデ整形で、輪積痕を残す。内面は篋ナデ整形。	パミス ぶい赤褐色 不良	50% P43 PL90
12	手捏土器 (埴形) 土師器	A [11.2] B (5.2)	底部欠損・胴部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。薄手である。	内・外面ともナデ整形で、輪積痕を残す。	砂粒 褐色 普通	30% P48
13	手捏土器 (埴形) 土師器	A [7.9] B 5.1 C 3.0	底部は引き締まり突出する。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。薄手である。	外面は粗雑なナデ整形で、篋痕や指圧痕を残す。内面は横位の篋ナデ整形であるが、輪積痕を残す。	パミス多量 橙色 不良	70% P44 PL90
14	ミニチュア 土器(甕形) 土師器	A 5.3 B 5.4 C 2.5	胴部は筒状を呈し、口縁部は外傾して開く。	粗雑な整形で、胴部外面に指圧痕を残す。	パミス ぶい橙色 不良	70% P33 PL90
15	ミニチュア 土器(甕形) 土師器	A [3.8] B 5.4 C 2.5	丸底。胴部は内傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	粗雑な整形で、内面に指圧痕を残す。	パミス ぶい橙色 普通	80% P35 PL90

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第139図 16	ミニチュア 土器(碗形) 土師器	A 5.8	底部は引き締まり突出する。体部は下位から内彎して立ち上がり、口縁部に至る。薄手である。	内・外面とも粗雑なナデ整形で、指圧痕を残す。	砂粒 明褐色 不良	100% P45
		B 4.7				
		C 2.6				
17	ミニチュア 土器(碗形) 土師器	A 6.4	丸底。胴部は底部から内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	内・外面とも粗雑なナデ整形。	パミス 褐色 普通	100% P46
		B 3.5				
18	ミニチュア 土器(甕形) 土師器	A 4.5	丸底。胴部は内傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	粗雑な整形で、外面に指圧痕を残す。	パミス にぶい赤褐色 普通	100% P34 PL90
		B 4.3				
		C 2.7				
19	ミニチュア 土器(高環形) 土師器	A 6.4	脚部は棒状を呈すると思われるが、接合部から欠損する。坏部は内彎して立ち上がる。	外面は粗雑なナデ整形。内面は篋ナデ整形。	パミス にぶい橙色 普通	50% P39
		B (2.2)				
20	ミニチュア 土器(台付 甕形) 土師器	A 10.0	脚部は円柱状で、裾部は内彎して開く。胴部は碗状を呈し、最大径を上位に持つ。口縁部は外反して開く。	粗雑な整形で、外面に指圧痕。内面に輪積痕を残す。	砂粒 にぶい橙色 普通	80% P36
		B 9.3				
		D 2.8				
		E 4.9				

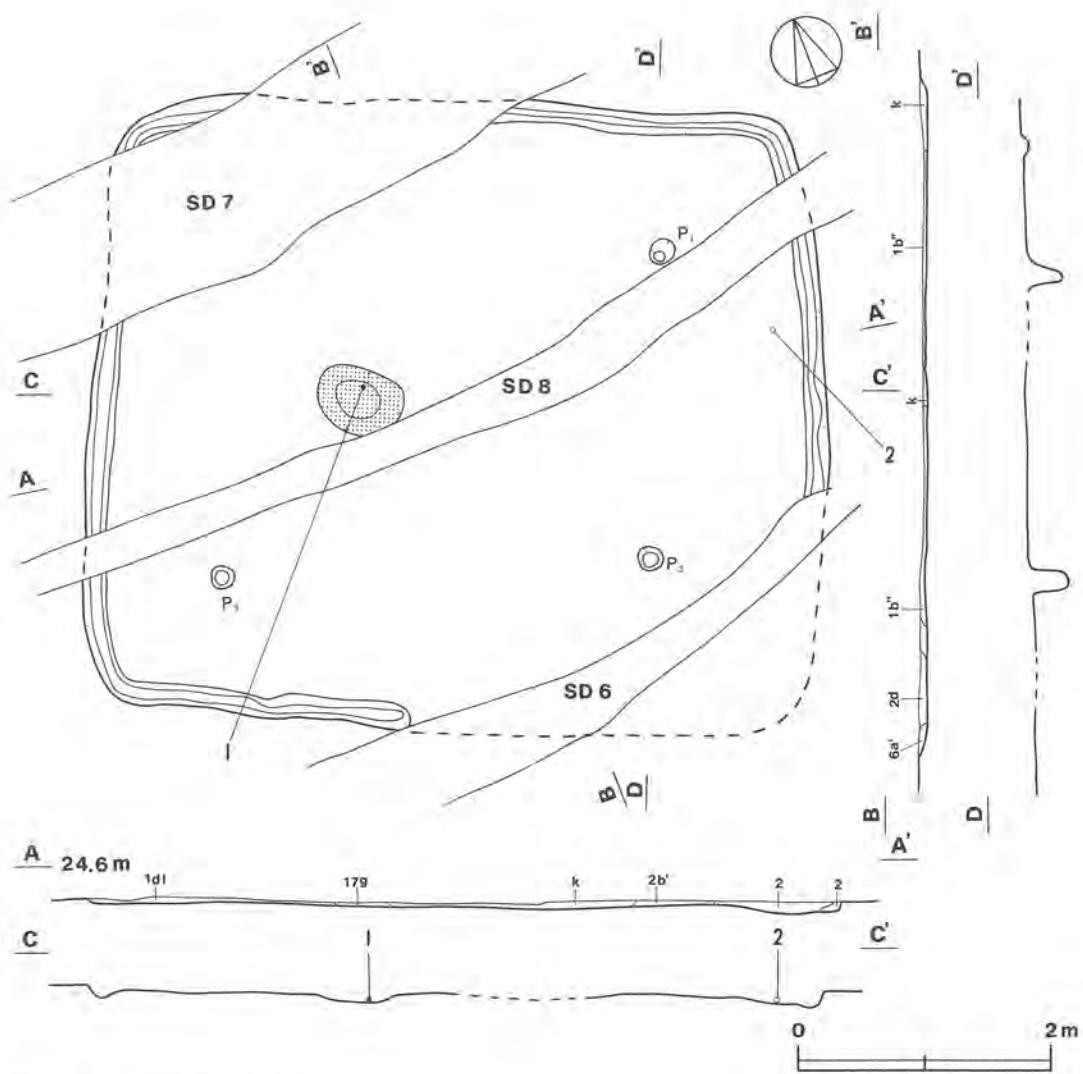
第32号住居跡 (第140・141図)

本跡は、調査区の南西部 O6b₄区を中心に確認された住居跡で、床面は東西に延びる第6・7・8号溝によって掘り込まれている。なお、南東コーナー部は9～10世紀代の第33号住居跡によって掘り込まれている。本跡の北西11mには第9号住居跡が、南10mには第25号住居跡が存在している。

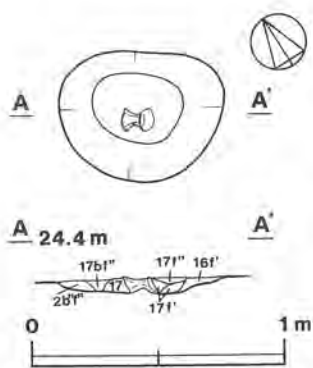
平面形は、長軸5.87m、短軸4.93mの長方形状を呈し、長軸方向はN-66°-Wを指している。床面積は26.5m²である。壁はロームであるが、掘り込みが極めて浅い上に、溝による攪乱が著しいため、壁面の立ち上がり等については不明である。壁高は2～4cmで、壁際には壁溝が周回している。壁溝の規模は、上幅20cm、深さ5cmである。床面は、3本の溝によって東西に掘り込まれている。残存する床はロームである。中央部と北東コーナー部は硬く踏み締まっているが、その他は軟弱である。ピットは、北東・南東・南西のコーナー部で確認したが、北西部は第7号溝に掘り込まれているため検出できなかった。3本のピットは、ほぼ方形に配列されていることから支柱穴と判断した。ピットの規模は、上端直径18～20cm、深さ23～30cmである。炉は、床面を5cmほど掘り下げた地床炉で、中央から80cm西に寄って位置している。炉の平面形は長径70cm、短径50cmの楕円形状を呈し、長径方向はN-53°-Wを指している。炉内には焼土が多量に堆積しているが、炉床はあまり焼け締まっていない。入口部は、炉の配置等から東壁側を想定した。

覆土は、暗褐色土が堆積しているが、極めて薄いため堆積状況等は不明である。

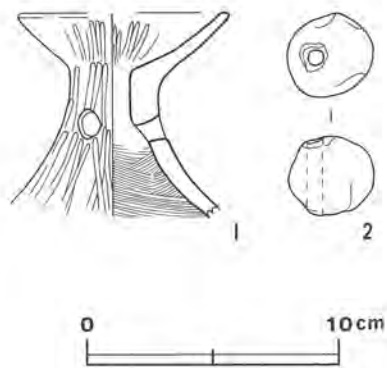
遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片16点、球状土錘1点が出土している。東壁際の床面からは第142図2の球状土錘や赤彩が施された碗形土器の口縁部片、ハケ目が施された甕形土器の胴部片が出土しているが、球状土錘以外は小片で実測できなかった。1の器台形土器は、炉



第140图 第32号住居跡実測図



第141图 第32号住居跡
炉跡実測図



第142图 第32号住居跡
出土遺物実測図

の底面から横位で出土したものである。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の五領期に比定される住居跡と思われる。

第32号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第142図 1	器台形土器 土師器	A (8.4) B (8.1) D (5.1)	脚部は「ハ」の字状に開き、上位に3孔が穿たれる。器受部は外傾して開く。	外面と器受部内面は磨き後、赤彩。脚部内面はハケ目整形。	砂粒 明赤褐色 普通	70% P49 PL89

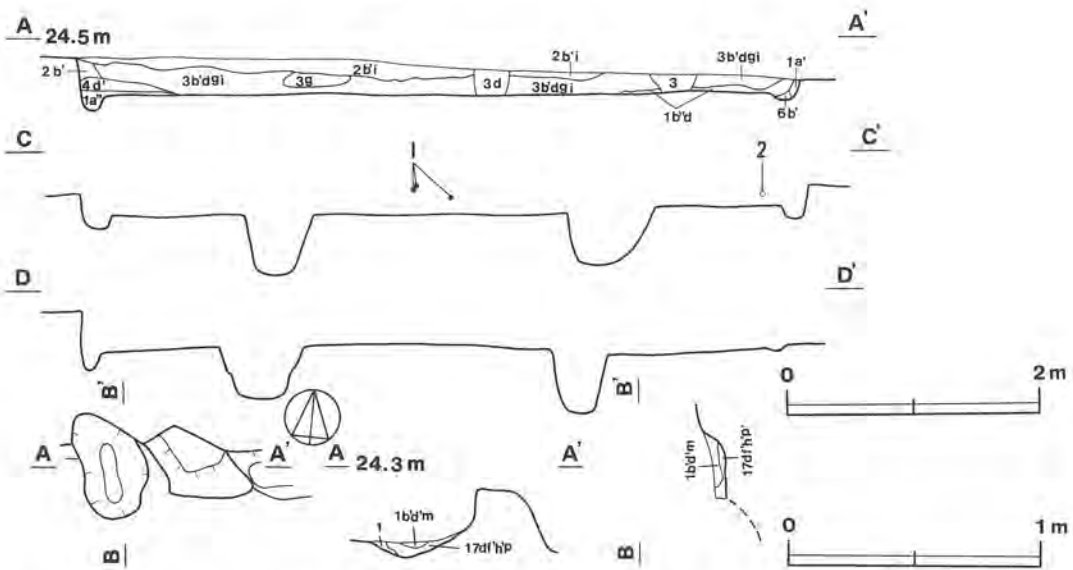
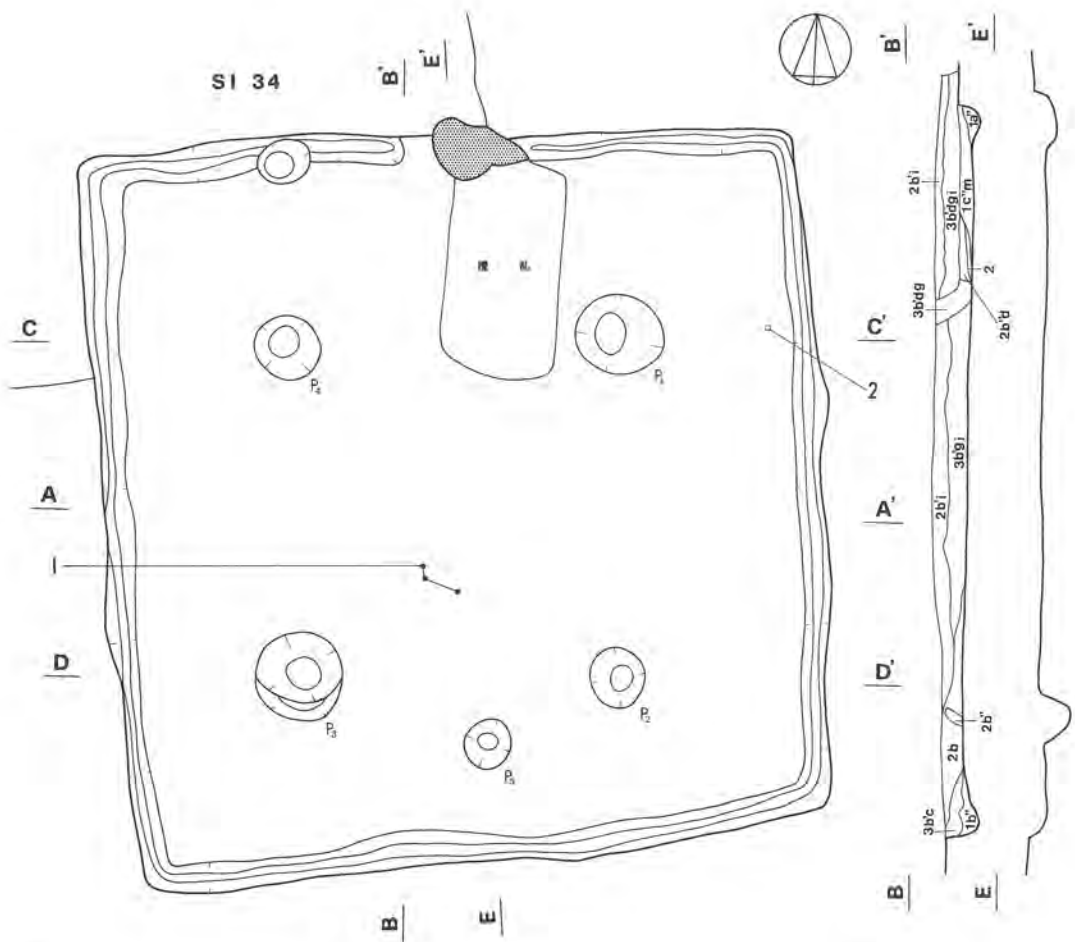
第35号住居跡 (第143図)

本跡は、調査区の南部 O6d7区を中心に確認された住居跡で、北西部の壁と覆土は8世紀代の第34号住居跡によって掘り込まれている。本跡の北11mには8世紀代の第40号住居跡が、西36mには第39号住居跡が存在している。

平面形は、一辺5.70mほどの方形状を呈し、主軸方向はN-11°-Wを指している。床面積は30.2㎡である。北西コーナー部の壁は第34号住居跡によって15cmほど掘り込まれ、残存壁高は5~8cmである。南東コーナー部は傾斜地にあたり、壁は検出できなかった。その他の壁は締まりのあるロームで、垂直に立ち上がり、壁高は20~23cmである。壁直下には壁溝が周回するが、カマドの部分は切れている。壁溝の規模は、上幅が20cm、深さが10~15cmである。床はロームで、緩やかに起伏し、床中央と南壁側はやや高くなっている。カマドの前方は長軸1.8m、短軸90cmの長方形に攪乱されている。床面の踏み締まりはそれほど強くない。ピットは5か所確認された。P₁~P₄の上端直径は45~70cm、深さは41~49cmで、方形に配列されていることから、これらは支柱穴と思われる。P₅は入口部に関係する柱穴と思われ、上端直径は38cm、深さは26cmと小規模である。カマドは、北壁の中央部に付設されていたが、第34号住居跡の掘り込みによって大部分が破壊され、火床と西袖部の一部が残存するだけである。火床は長径41cm、短径21cmの不整楕円形で、床面から10cm掘られ、焼き締まっている。西袖部は砂質の粘土で構築され、厚さは30cmである。火床と西袖部の向きから、カマドの主軸方向はN-21°-Wを指し、掘り方は北壁を20cm以上掘り込んでいたと思われる。入口部は、P₅の位置から南壁中央部付近と思われる。

覆土は自然堆積で、上層に暗褐色土が、下層には極暗褐色土が堆積し、共に締まりは強い。なお、北西コーナー部付近の床面から10cm上位には、東西3m、南北1.5mにわたって第34号住居跡の貼り床がみられる。

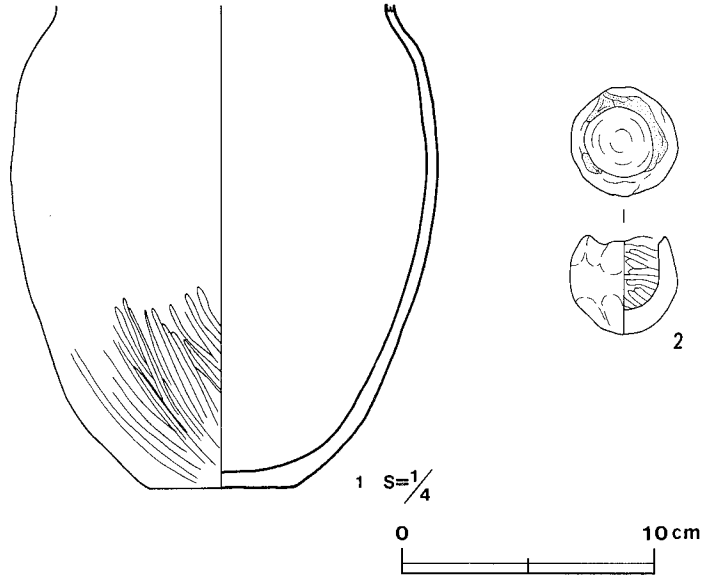
遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片145点、覆土中から須恵器片22点が出土している。中央部の床面近くから第144図1の甕形土器が潰れて出土している。そのほか、小破片の中には模倣坏の口縁部小片が数点出土しており、これらの土器は本跡に伴うものと考えられる。須恵器片



第143図 第35号住居跡・カマド実測図

は、覆土の上層から中層にかけて出土したもので、本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代後期の鬼高期の住居跡と思われる。



第144図 第35号住居跡出土遺物実測図

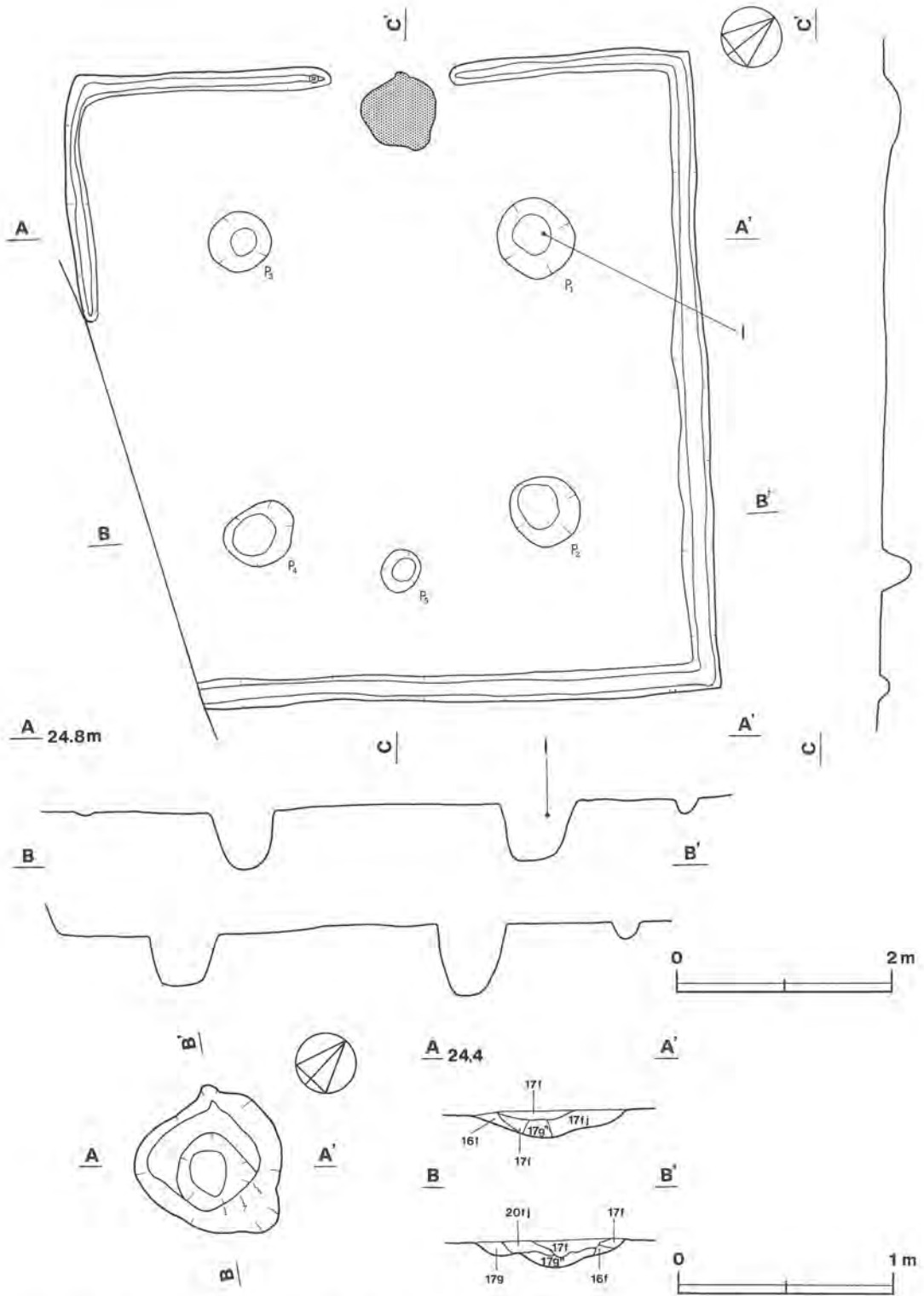
第35号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第144図 1	甕形土器 土師器	B (30.0) C 9.0	胴部は内彎して立ち上がり、最大径を上位に持つ。頸部以上欠損。	胴部外面は中央部から底部にかけて斜位の篋削り。	砂粒 にぶい褐色 普通	60% P62

第36号住居跡 (第145図)

本跡は、調査区の南西端 O5j9区を中心に確認された住居跡で、南コーナー部は調査区外に延び、南東部はほぼ同時期の第43号住居跡に掘り込まれている。本跡の東 4 m には第31号住居跡が存在している。

平面形は、長軸6.0m、短軸5.8mの方形状を呈し、主軸方向はN-55°-Wを指している。床面積は32.0㎡と推定される。本跡は、掘り込みが極めて浅く、壁の観察はできなかった。調査区外に延びる南コーナー部を除き、上幅20cm、深さ10cmの壁溝が周回している。床はロームで、全体的に硬く締まり平坦である。ピットは、P₁~P₅の5か所を確認した。支柱穴と思われるP₁~P₄は、上端直径が60~70cm、深さが48~65cmで方形に配列されている。南東壁側に位置するP₅は、上端直径35cm、深さ31cmとやや小規模であり、入口部施設に関する柱穴と思われる。カマドは、北西壁の中央部に位置しているが、袖部と天井部はすべて消失し、燃焼部の掘り込みの一部が確認されただけである。掘り込み内には、焼土や木灰を含む赤褐色土が主に堆積し、底面は強く焼けてレンガ状を呈している。

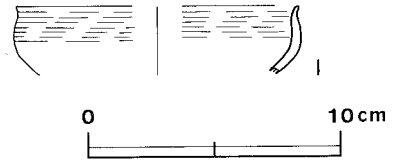


第145図 第36号住居跡・カマド実測図

覆土は観察できなかった。

遺物は極めて少なく、床面や覆土中から土師器及びその破片9点、須恵器片2点が出土しただけである。第146図1の坏形土器は、北側に所在するP₁の覆土上層から出土したもので、本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代後期の鬼高期の住居跡と思われる。



第146図 第36号住居跡
出土遺物実測図

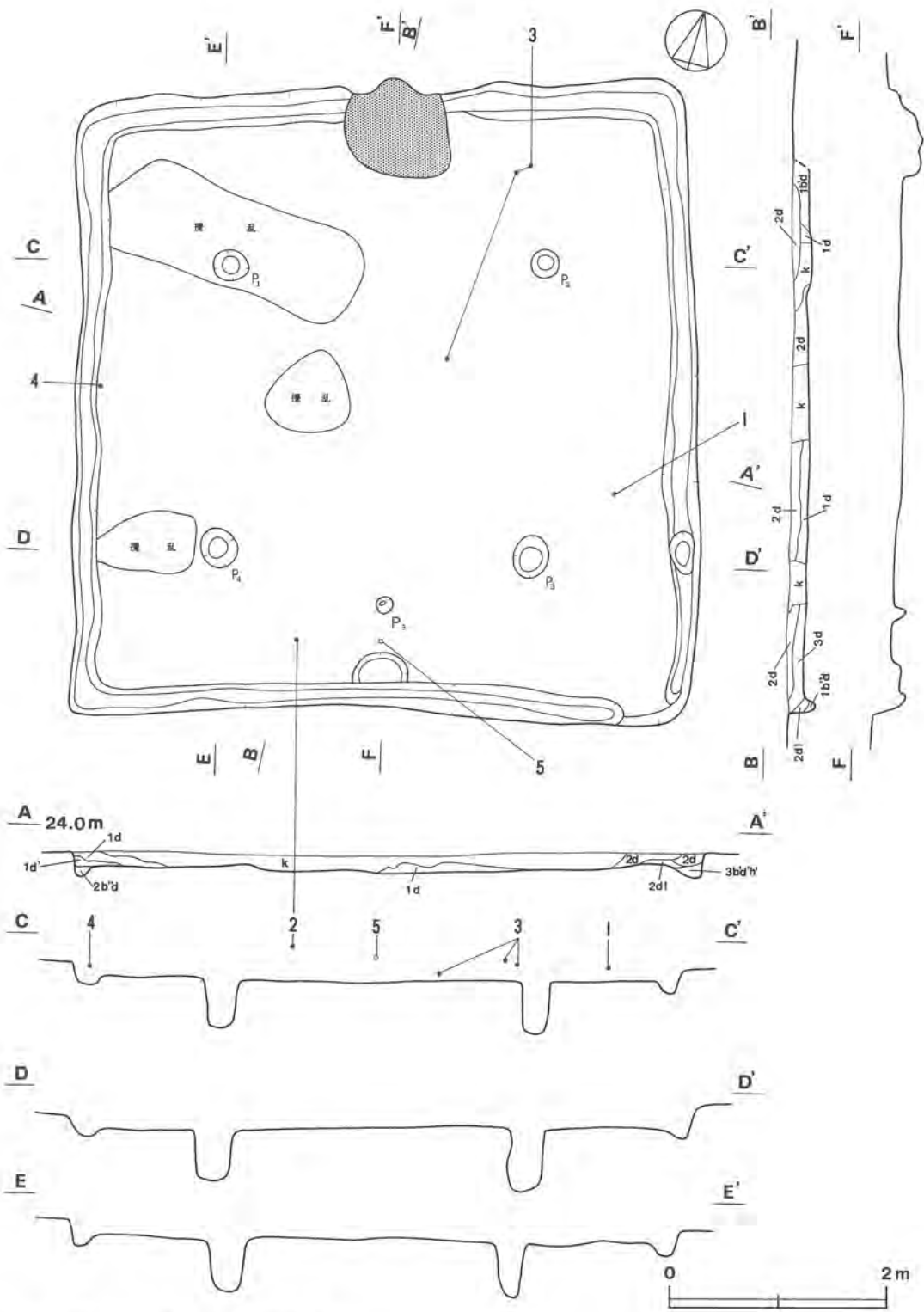
第36号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第146図 1	坏形土器 土師器	A (11.3) B (2.7)	底部欠損。体部は内彎して開く。 口縁部は内傾し、端部で外反する。	口縁部内・外面横ナデ整形。体 部外面篋削り。	砂粒 灰褐色 普通	10% P182

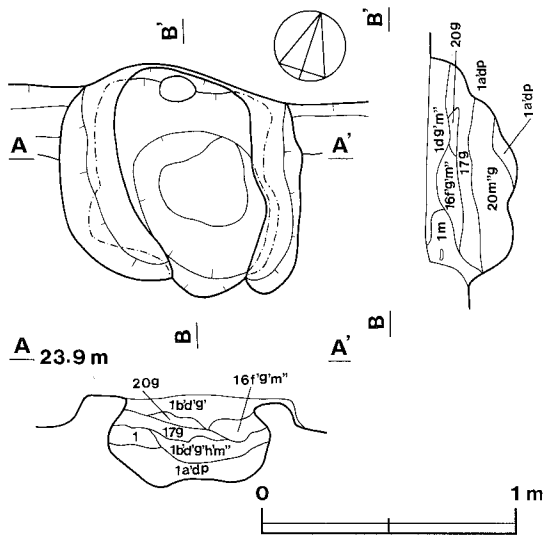
第39号住居跡 (第147・148図)

本跡は、調査区の南東部 O7e7区を中心に確認された住居跡である。本跡の北西20m には9～10世紀代の第49号住居跡が、西37m には第35号住居跡が存在している。

平面形は、長軸5.82m、短軸5.77mの方形状を呈し、主軸方向はN-15°-Wを指している。床面積は31.3m²である。壁は締まりのあるロームで、70度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は20cmであるが、北西と南西のコーナー部の壁は攪乱により失われている。壁直下には壁溝が周回しているが、南東コーナー部では、長さ40cmほど切れている。壁溝の上幅は20～25cm、深さは5～10cmである。床は硬く締まったロームで、P₂とP₃の間は70cmの幅で特に踏み締まっている。北西コーナー付近は幅0.8m、長さ2.5mの長方形状に攪乱されているほか床中央部やP₃の西側にも直径50～80cmの円形状の攪乱が認められ、床面は凹凸が激しい。ピットは5か所確認した。P₁～P₄は、方形に配列され、上端直径は25～30cm、深さは47～60cmの規模を有することから主柱穴と思われる。P₅は、上端直径が15cm、深さが14cmの小規模なもので、南壁中央部近くに位置することから入口部に関わる柱穴と思われる。なお、P₅の南35cmには周溝と接して深さ8cm、半径25cmの半月状の窪みが存在し、これも入口部に関係するピットと思われる。カマドは、北壁の中央部に付設されているが、天井部や袖の上部は失われている。カマドの規模は全長・横幅とも95cmで、主軸方向はN-23°-Wを指している。焚口部の幅は30cmである。燃焼部の規模は、長さ80cm、幅65cmで、壁面を15cmほど掘り込んでいる。煙道部は奥壁の中央部をわずかに掘り窪めて構築している。袖部は砂質の粘土によって構築され、内側は変色している。カマド内には、上層に粘土を多量に含む褐色土が、下層には焼土や焼土ブロックを多量に含む赤褐色土が堆積して



第147图 第39号住居跡実測图



第148図 第39号住居跡カマド実測図

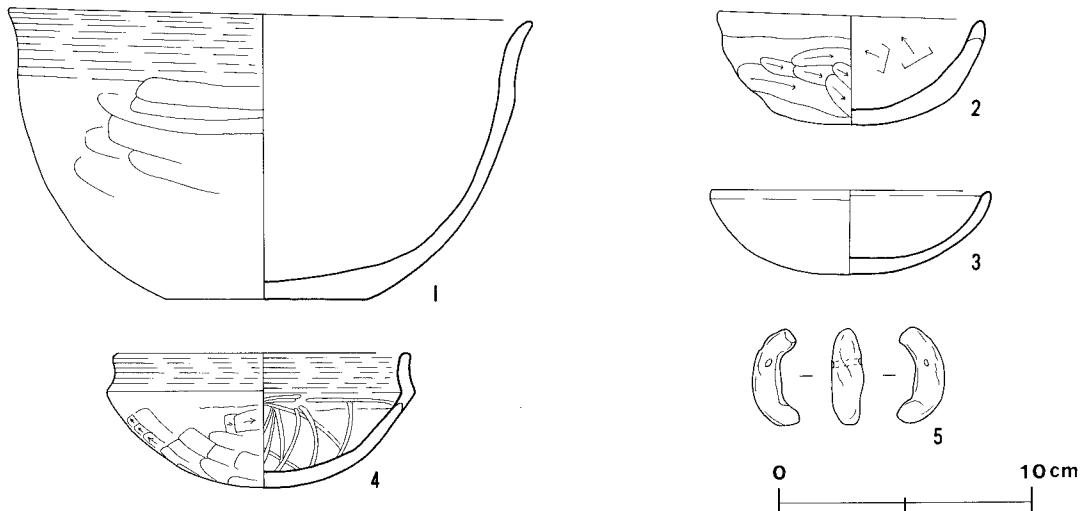
出土しているが、覆土が攪乱されているため出土層位は上層から下層にまたがっている。5の土製の勾玉は、南壁際の覆土上層から出土したもので、本跡との関係は不明である。鉄滓は中央部の床面近くから出土している。

本跡の遺物は、出土層位が覆土の上層から下層にまでまたがっているため、本跡との関係は不明な点が多いが、所謂模倣坏が多いことや遺構の形態等から古墳時代後期の鬼高期に比定される住居跡と思われる。

いる。火床は長径60cm，短径50cmの楕円形状を呈し，床面を18cm掘り下げている。火床は強く焼き締まっている。入口部は，P₅が位置する南壁側に存在したと思われる。

覆土は自然堆積と思われる，上層に暗褐色土，下層に褐色土が堆積している。

遺物は，床面や覆土中から土師器とその破片67点，土製の勾玉1点，鉄滓2点と後世の流れ込みと思われる須恵器片2点が出土している。カマドの東側から第149図3の坏形土器が破片で，東壁際から1の鉢形土器が，南壁際から2の坏形土器が完形で，西壁際から4の坏形土器がやはり完形で



第149図 第39号住居跡出土遺物実測図

第39号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第149図 1	鉢形土器 土師器	A 20.8	胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面は横ナデ整形。胴部内・外面は丁寧な篋ナデ整形。	砂粒 褐色 良好	70% P64
		B 11.4				
		C 7.8				
2	坏形土器 土師器	A 10.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面は横ナデ整形。体部外面は篋削り、内面は篋ナデ整形。	細砂粒 にぶい褐色 普通	90% P65 PL91
		B 4.4				
		C 4.4				
3	坏形土器 土師器	A 11.0	丸底。体部は底部と共に内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	内・外面ともナデ整形。	雲母 にぶい橙色 不良	90% P67
		B 3.4				
4	坏形土器 (模倣坏) 土師器	A 11.8	丸底。体部は底部と共に内彎して立ち上がり半球状を呈する。口縁部は体部との境に稜を持ち、外反気味に直立する。	口縁部内・外面は横ナデ整形。体部外面は篋削り、内面は暗文状の篋磨き。	細砂粒 にぶい褐色 良好	100% P66 PL91
		B 5.3				

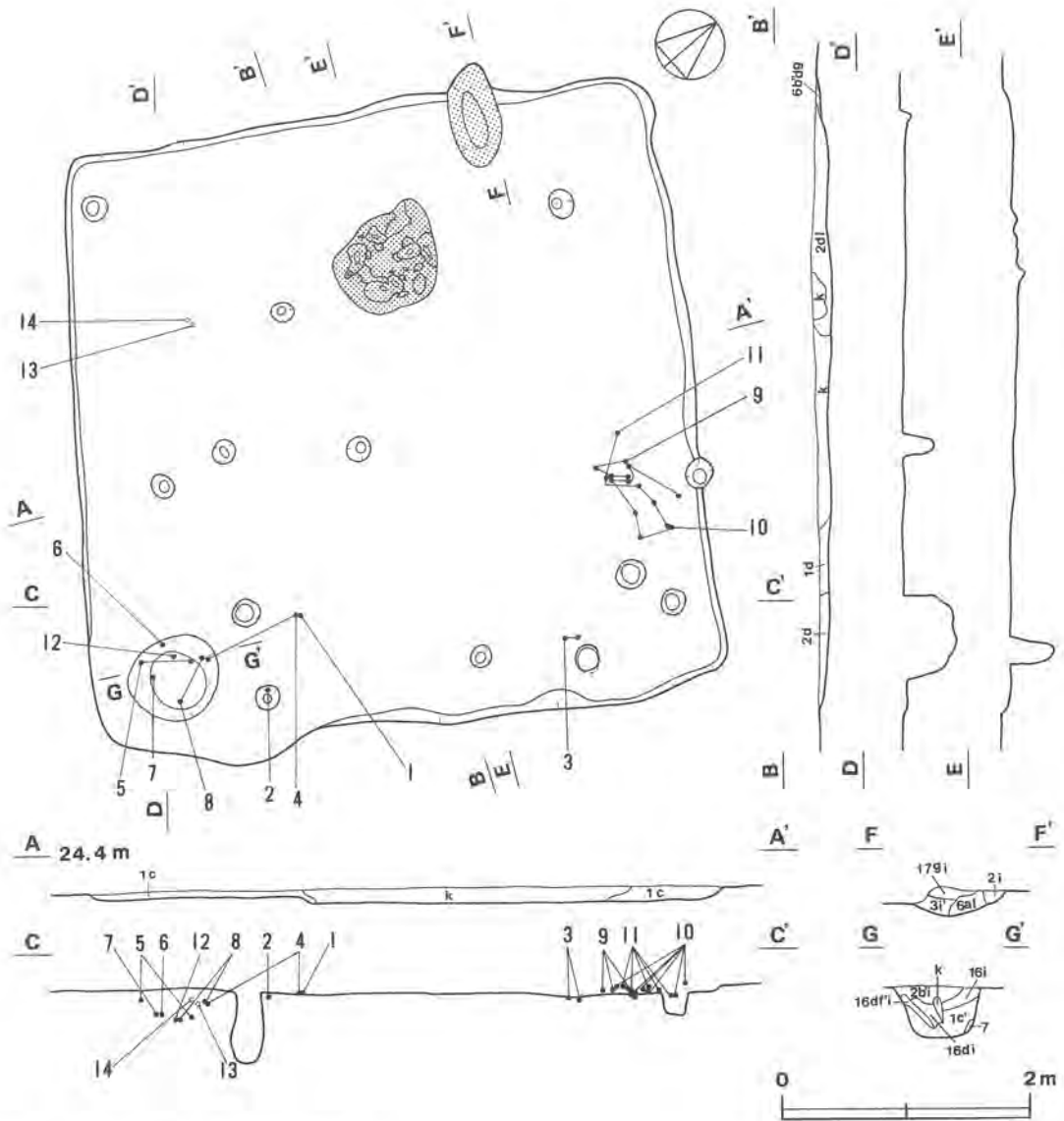
第44号住居跡（第150図）

本跡は、調査区の南東端 O7h0区を中心に確認された住居跡である。本跡の北西 9～11m には、8 世紀代の第39・45号住居跡が、南西18m には、同じく 8 世紀代の第52号住居跡が存在している。本跡の周辺は遺構の密度が低く、本跡と同時期の住居跡は存在しない。

平面形は、長軸5.09m、短軸4.98m の方形状を呈し、長軸方向は N—53°—W を指している。床面積は23.5m²である。壁は締まったロームであるが、本跡の掘り込みが極めて浅いため立ち上がり等については不明である。壁高は 5～10cm である。床は硬く締まったロームであるが、起伏が激しく、一部には焼けて赤化した所もみられる。ピットの確認は困難であったため、可能性を持つものはすべて掘り込み、13か所のピットを確認した。いずれのピットも小規模で、配列も不規則であるため、本跡に伴うものかどうかは不明である。貯蔵穴は、南コーナー部に位置している。平面形は上端直径68cmの円形状を呈し、深さは43cmである。貯蔵穴内の覆土は自然堆積で、下層から中層にかけては焼土や炭化材を含んでいる。炉は地床炉であるが、掘り込みはない。平面形は直径75cmの不整形円形を呈し、中央から1.7m 北西に寄り、全体として北西壁の近くに位置している。炉床は硬く焼き締まり凹凸が激しいことから、長期間使用されたものと思われる。入口部は、炉の配置や床面の踏み締まり等から南東壁側が想定される。

覆土は、暗褐色土や褐色土がブロック状に堆積しているが、浅いため堆積状況は不明である。なお、床面には焼土や炭化材が散乱し、貯蔵穴の底面には完形の遺物が出土していることなどから、本跡は居住期間中に焼失したものと思われる。

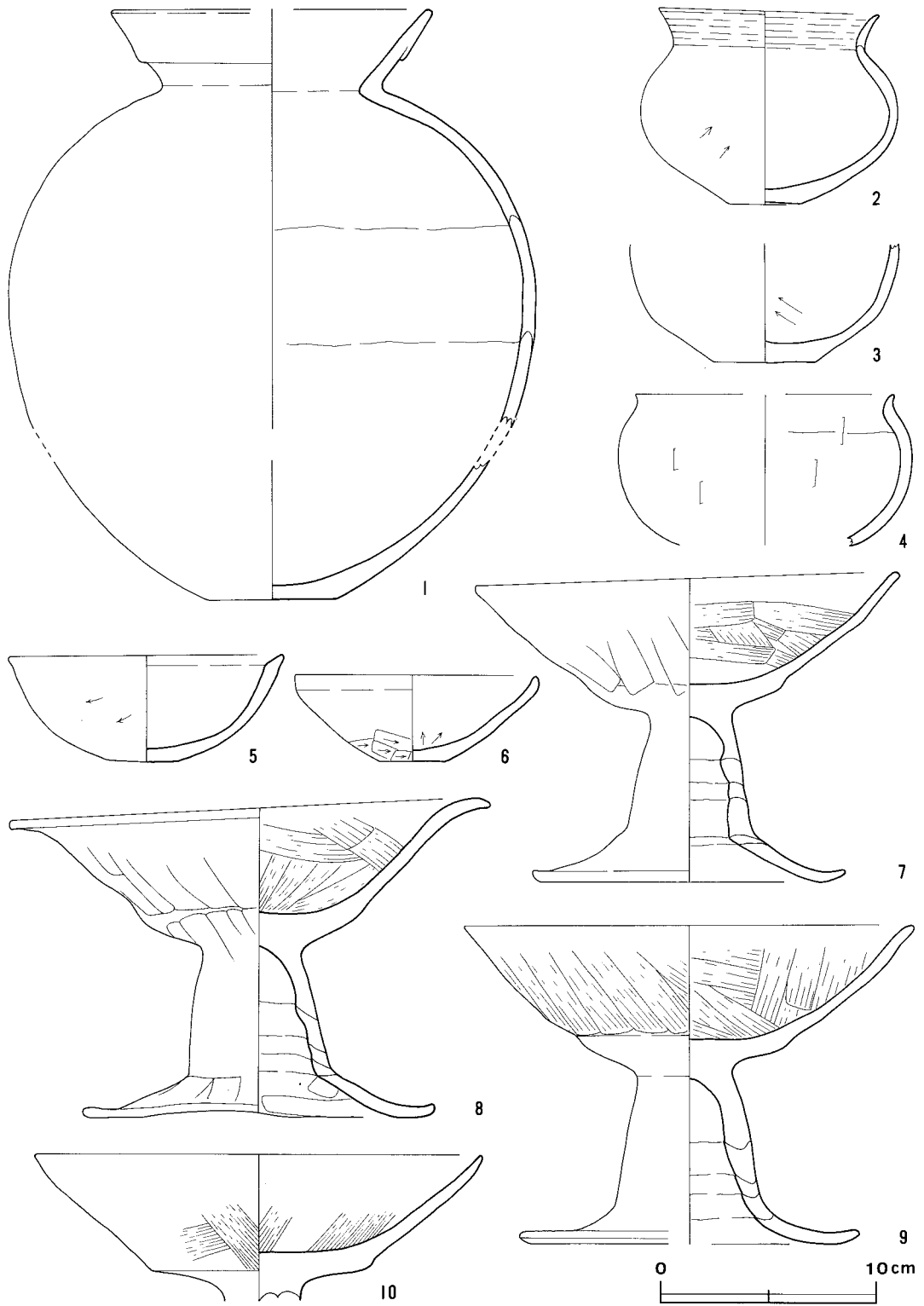
遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片43点、鉄製品 1 点が出土している。本跡に伴う遺物は北東壁際の一画と、貯蔵穴及びその周辺部に集中している。北東壁際の床面からは第151・



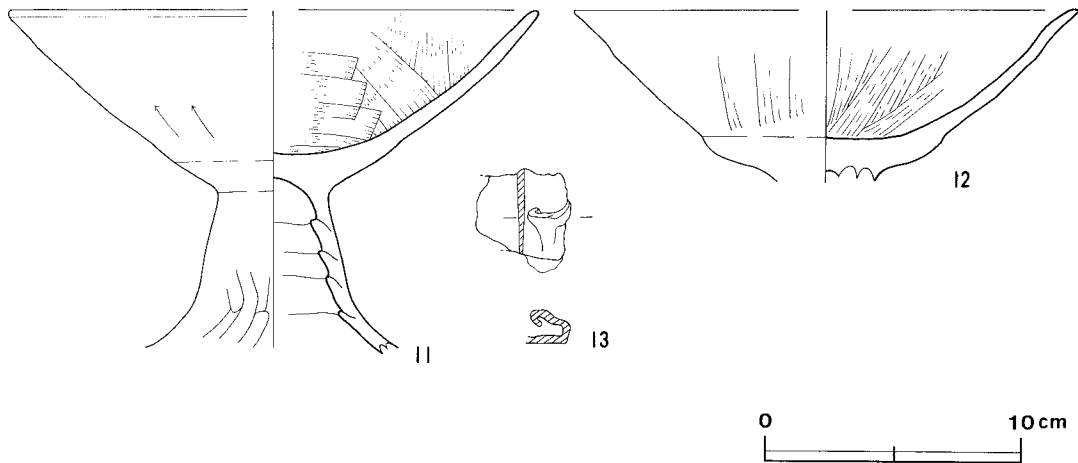
第150図 第44号住居跡実測図

152図の9と10の高坏形土器が破片で出土し、その南方から3の壺形土器が同じく破片で出土している。貯蔵穴の底面から、7・8の高坏形土器が完形で、覆土中から6の埴形土器がやはり完形で、12の高坏形土器と5の埴形土器が破片で出土している。貯蔵穴周辺の床面には2の壺形土器が完形のまま正位で出土したほか、1の壺形土器、4の鉢形土器が破片で出土している。なお、13の鉄製品は西コーナー部近くの床面から出土しており、本跡に伴う可能性が高い。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代中期の和泉期に比定される住居跡と思われる。



第151图 第44号住居跡出土遺物実測図(1)



第152図 第44号住居跡出土遺物実測図(2)

第44号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第151図 1	壺形土器 土師器	A [15.0]	胴部は球形状を呈し、最大径を上位に持つ。口縁部は複合口縁で、強く外傾して開く。	口縁部内・外面は横ナデ整形。胴部内・外面はナデ整形。	砂粒 橙色 普通	60% P50
		B (26.1)				
		C 5.0				
2	壺形土器 土師器	A 10.3	上げ底。胴部は内彎して立ち上がり、中位で強く張る。口縁部は外反して開く。	口縁部内・外面は横ナデ整形。胴部内・外面はナデ整形。	砂粒 にぶい褐色 良好	100% P51
		B 9.0				
		C 2.9				
3	壺形土器 土師器	B (5.5)	胴部は内彎して立ち上がるが、上半部は欠損する。	外面はナデ整形。内面は篋ナデ整形。	細砂粒 明赤褐色 普通	20% P53
		C 4.6				
4	鉢形土器 土師器	A 12.0	底部欠損。胴部は強く内彎し、最大径を上位に持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ整形。胴部内・外面は横位の篋ナデ整形。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	40% P52
		B (7.0)				
5	碗形土器 土師器	A 13.0	底部は小さい。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外傾し、内面に稜を持つ。	口縁部と内面は横ナデ整形。体部は横位の篋ナデ整形。	スコリア 橙色 普通	100% P60
		B 5.0				
		C 3.3				
6	碗形土器 土師器	A 11.4	底部は小さい。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面は横ナデ整形。体部外面下位は篋削り。	砂粒 明褐色 良好	80% P61
		B 4.0				
		C 3.0				
7	高坏形土器 土師器	A 19.8	脚部は円筒形で、裾部は大きく開き、末端で外反する。坏部は坏底部が膨らみ、内彎気味に立ち上がり口縁部に至る。	口縁部内・外面と裾部内・外面は横ナデ整形。坏部内・外面は篋ナデ整形。脚部内面には輪積痕が残る。	砂粒 浅黄褐色 良好	100% P55
		B 14.5				
		D 8.0				
		E 14.6				
8	高坏形土器 土師器	A 22.5	脚部は円筒形で、裾部は大きく開き、末端で外反する。坏部は坏底部が膨らみ、体部口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面と裾部内・外面は横ナデ整形。坏部内・外面は篋ナデ整形。脚部内面には輪積痕が残る。	砂粒・スコリア にぶい橙色 良好	100% P54 PL89
		B 15.0				
		D 8.0				
		E 16.5				

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第151図 9	高坏形土器 土師器	A 21.0 B 14.8 D 8.0 E 15.8	脚部は円筒形で、裾部は大きく開き外反する。坏部は下位に鈍い稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面は横ナデ整形。その他の内・外面とも丁寧な筧ナデ整形。脚部内面には輪積痕を残す。	砂粒 にぶい橙色 普通	80% P56 PL89
10	高坏形土器 土師器	A (21.0) B (6.8)	脚部欠損。坏部は下位に鈍い稜を持ち外傾して立ち上がる。口縁部は内彎する。	口縁部内・外面は横ナデ整形。その他は内・外面とも筧ナデ整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	50% P58
第152図 11	高坏形土器 土師器	A (20.8) B (13.7) D (6.5)	脚部は円筒形状で、裾部は大きく開くが末端が欠損する。坏部は下位に鋭い稜を持ち、外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面は横ナデ整形。その他は内・外面とも丁寧な筧ナデ整形。脚部内面には輪積痕を残す。	砂粒 にぶい橙色 普通	70% P57 PL89
12	高坏形土器 土師器	A 20.0 B (6.8)	脚部欠損。坏部は下位に段を持ち、外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ整形。その他は内・外面とも筧ナデ整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	40% P59

3 奈良・平安時代

(1) 3 区

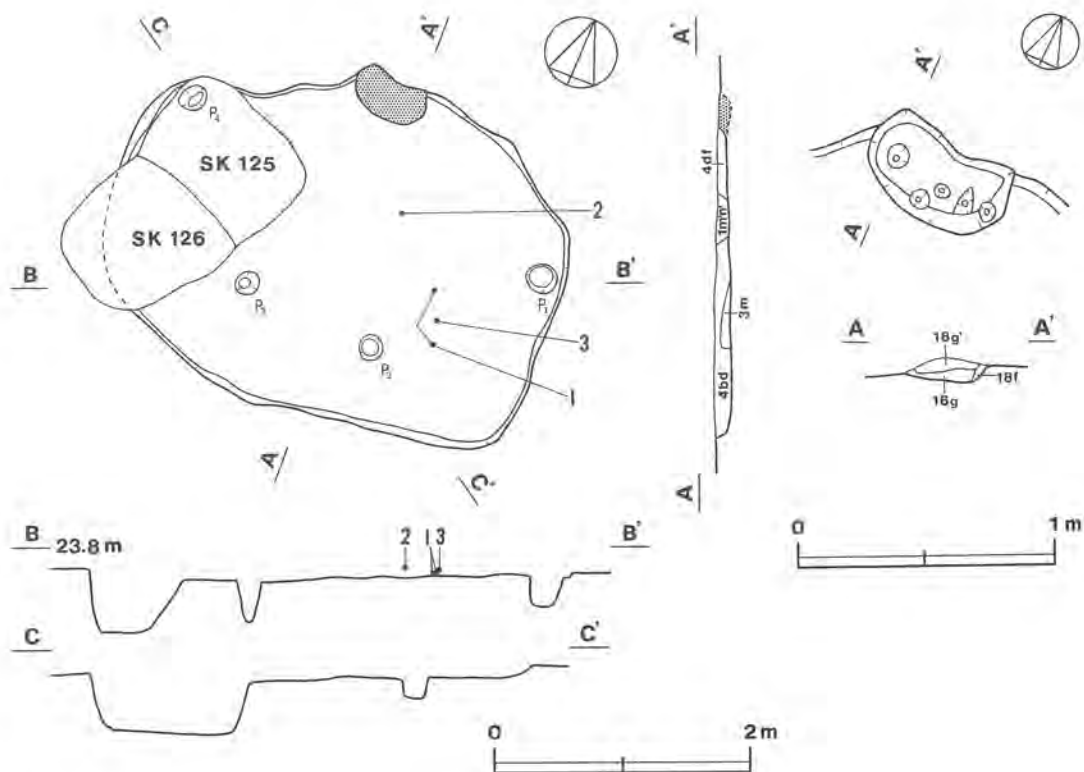
第2号住居跡 (第153図)

本跡は、調査区の北西部 K2j9区を中心に確認された住居跡で、西側の床面は第125・126号土坑によって掘り込まれ、東壁は縄文時代中期の第3号住居跡を掘り込んでいる。本跡の南西6mには第4号住居跡が、南15mには第6号住居跡が存在している。

平面形は、長径3.64m、短径2.73mの楕円形状を呈し、主軸方向はN-0°を指している。床面積は7.9m²である。壁はローム土で、45~80度の角度で立ち上がっているが、掘り込みは浅く、壁高は10cmである。床はローム土で、緩やかに起伏し、中央部が硬く踏み締まっている。ピットは4か所確認され、P₁とP₄は北側の壁際に、P₂とP₃は南側の床面に並んでおり、いずれも本跡に伴う柱穴と思われる。ピットの規模は、上端の直径が18~25cm、深さが16~38cmである。カマドは、北壁の中央部に付設されていたものと思われるが、天井部や袖部は崩壊し、長軸60cm、短軸60cmの楕円形状の掘り込みだけが残存している。火床は、ほとんど焼けていないことから、使用期間は短かったものと思われる。

覆土は、締まりのある黒褐色土が堆積しているが、本跡の掘り込みが浅いため堆積状況は不明である。

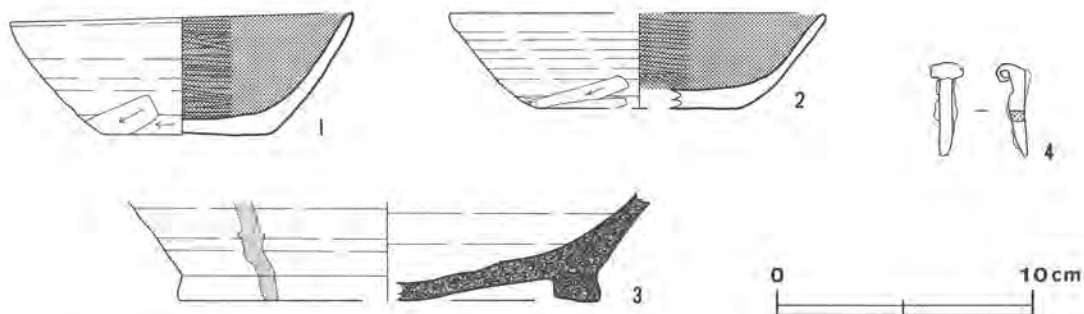
遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片102点、須恵器片10点、灰陶磁器片3点、支脚の断片1点、鉄製品(釘)1点が出土している。本跡に伴う遺物は遺構の東部に集中しており、そ



第153図 第2号住居跡・カマド実測図

こから出土した須恵器片のなかには叩き目を持つ甕胴部片や、甑の底部片等が含まれている。東部の床面から第154図1の坏（土師器・内黒）が正位で、3の壺（灰釉陶器）底部が破片で出土しカマド前面の覆土下層からは、2の坏（土師器）が潰れた状態で出土している。なお、4の鉄製品は、西側の覆土中から出土したもので、本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物等から9～10世紀代の住居跡と思われる。



第154図 第2号住居跡出土遺物実測図

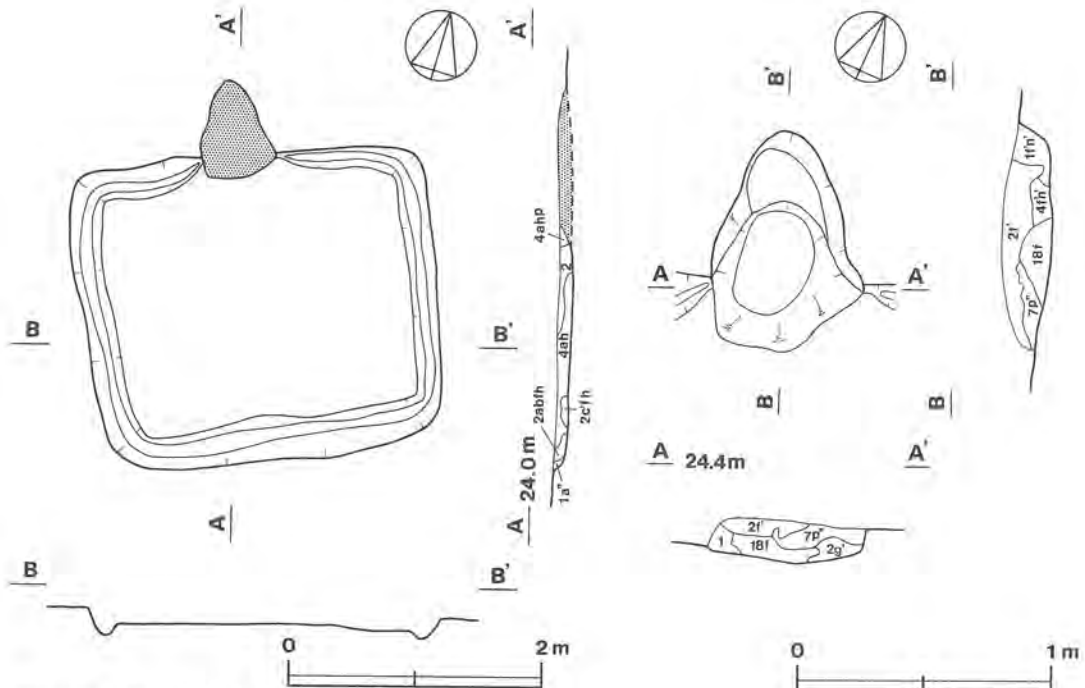
第2号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第154図 1	杯 土師器	A 13.6 B 4.8 C 6.7	底部は上げ底。体部は内彎して開き、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部外面下端を寛削り。内面は寛磨き。底面は一定方向の手持ち寛削り。回転方向は右。	砂粒 にぶい褐色 普通	80% P297 PL83 内面黒色処理
2	杯 土師器	A [15.0] B 3.8 C [8.0]	平底。体部は内彎気味に開き、上位でさらに外傾して口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部外面下端は寛削り。内面は寛磨き。底面は手持ち寛削り。	砂粒・雲母 にぶい褐色 良好	30% P298 内面黒色処理
3	壺 灰釉陶器	B (4.3) C [16.4]	底部片。底面は突出する。高台は厚く、体部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形。高台は貼り付けで、下端を内削ぎする。	— 灰白色 良好	10% P299 外面に灰釉付着

第4号住居跡 (第155図)

本跡は、調査区の北西部 L2a7 を中心に確認された住居跡で、北壁部は縄文時代の第130・137・138号土坑を掘り込んでいる。本跡の北東6mには第2号住居跡が、南2mには第11・12号住居跡が存在している。

平面形は、長軸2.8m、短軸2.5mの方形状を呈し、主軸方向はN-25°-Wを指している。床面積は5.6m²である。壁はロームで、50~60度の角度で立ち上がっているが、掘り込みは浅く、壁



第155図 第4号住居跡・カマド実測図

高は10～15cmである。床はロームで緩やかに起伏し、カマド前面から南壁際にかけては、1.5mほどの幅で硬く踏み締まっている。ピットは検出できなかった。カマドは北壁の中央部に付設されているが、天井部や袖部は崩壊し、掘り方と火床だけが残存している。掘り方の規模は、全長89cm、横幅60cmで、壁面を60cm奥に掘り込み、燃焼部と煙道部が作られている。主軸方向は本跡の主軸方向と同一である。覆土には焼土のほか、カマドの構築材料と思われる砂質の粘土塊が混入している。火床は、床面からわずかに窪み、あまり焼けていない。

覆土は、締まりを有する黒褐色土であるが、本跡は掘り込みが浅いため堆積状況等については不明である。

遺物は、覆土中から土師器片7点が、カマド内から土師器片2点が出土しただけである。それらの破片の中には、内面黒色処理が施された坏や甕の口縁部が含まれており、本跡に伴うものと思われるが、いずれも小片であるため実測はできなかった。

本跡は、遺物や遺構の形態等から9～10世紀代の住居跡と思われる。

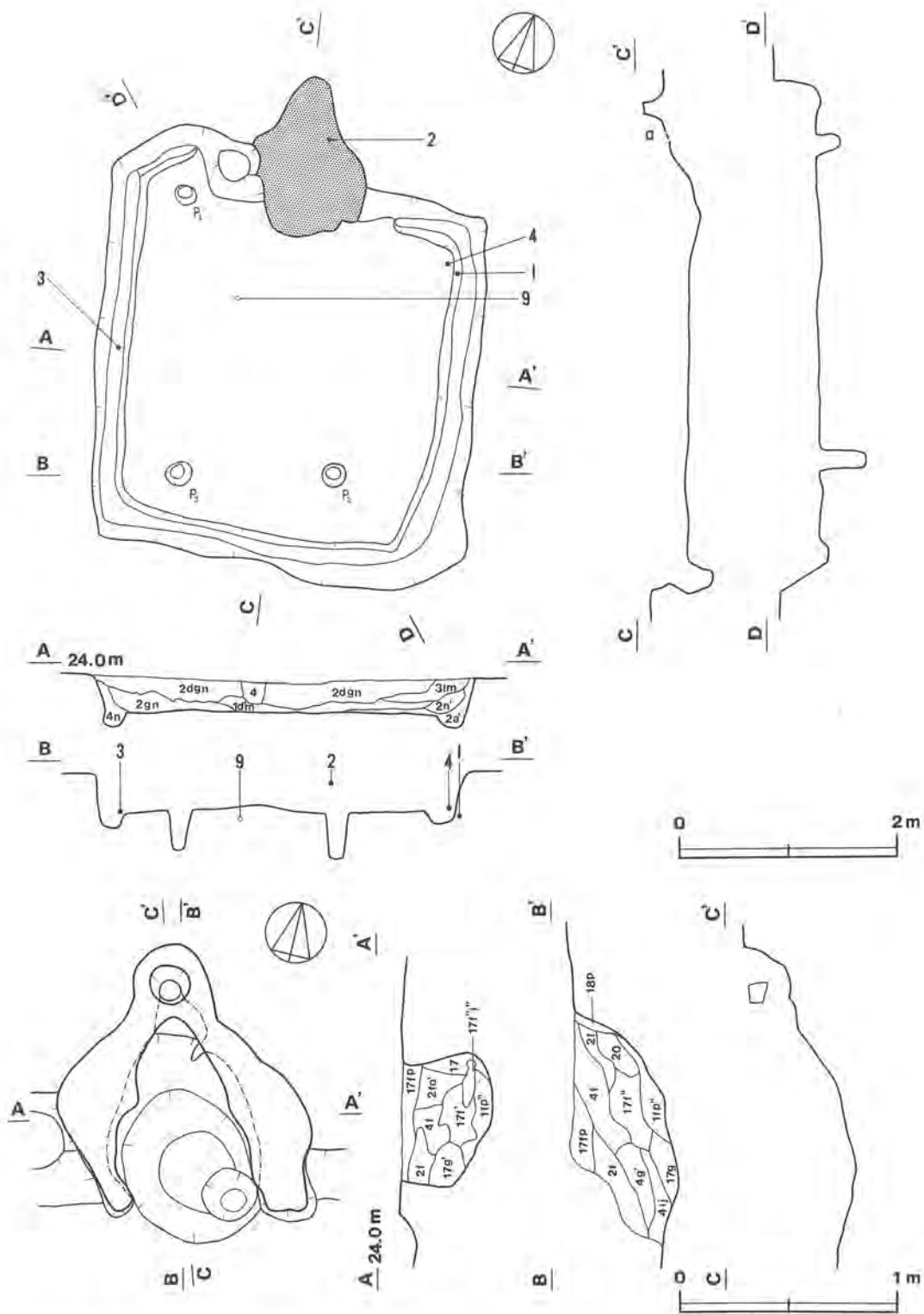
第6号住居跡（第156図）

本跡は、調査区の北西部L2d9区を中心に確認された住居跡で、南壁は古墳時代前期の第17号住居跡を掘り込んでいる。本跡の北西6mには第11・12号住居跡が、北14mには第2号住居跡が、存在している。

平面形は、基本的に長軸3.7m、短軸3.5mの方形状を呈するが、北壁の一部は40cmほど外側に張り出している。主軸方向はN-15°-Wを指し、床面積は10.2㎡である。壁は締まったロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は35～40cmで、北壁際を除いて、上幅20cm、深さ10cmの壁溝が周回している。床は貼り床で、緩やかに起伏している。床面は隅々まで締まっており、カマドの前方から南壁際にかけては一層硬化している。ピットは3か所を確認した。上端直径は22～25cm、深さは24～45cmで、北東コーナーを除く各コーナー部に位置していることから、これらは本跡の支柱穴にあたるものと思われる。カマドは、北壁の中央部に付設されているが、天井部は崩落している。カマドの全長は140cm、横幅は90cmである。燃焼部の規模は、長さ100cm、幅70cmで、壁面を30cm奥に掘り込んでいる。煙道部は、奥壁をさらに35cmほど掘り込んで作られている。天井部、袖部と煙道の周囲は砂質の粘土によって構築している。カマド内には、焼土や焼けた砂を含む暗赤褐色土が主に堆積しているが、袖部の壁面は崩落したためか、焼けた所はみられない。火床は、床面から10cmほど掘り込まれ、レンガ状に焼き固まっている。

覆土は、上層に砂質の粘土粒子を含む暗褐色土、下層にローム小ブロックを含む褐色土が堆積している。締まりは弱いが、自然堆積層と思われる。

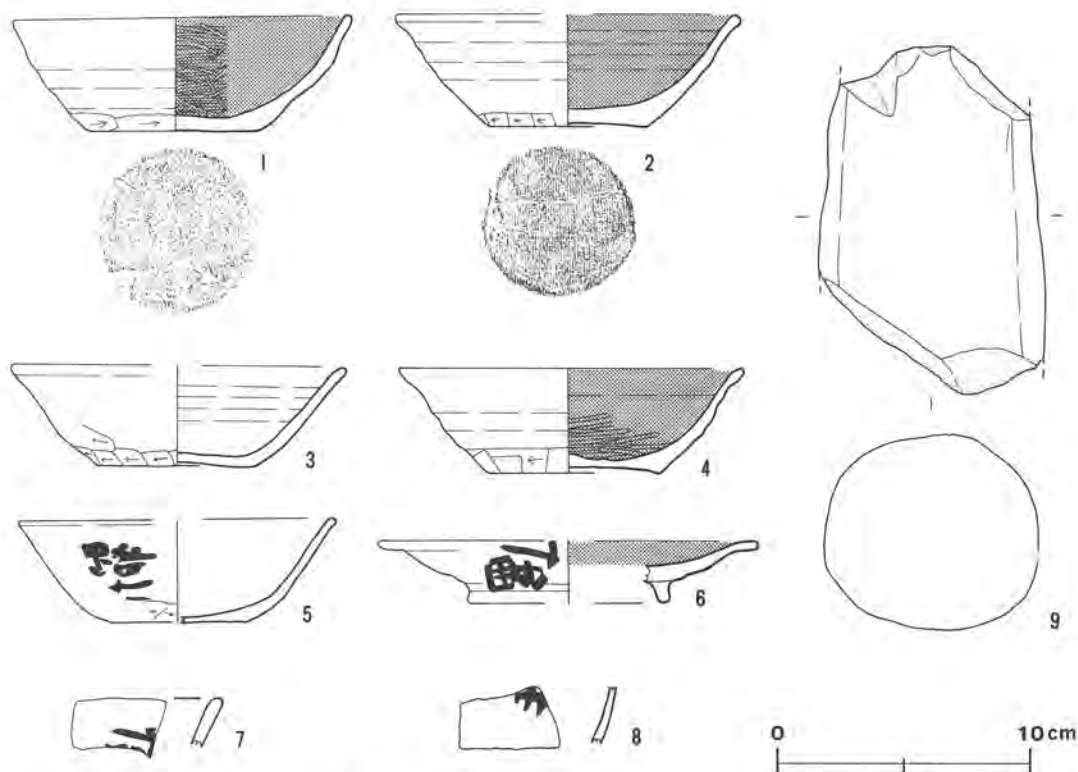
遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片256点、須恵器片53点、支脚1点と、カマド内か



第156図 第6号住居跡・カマド実測図

ら土師器片5点が出土している。本跡に伴う遺物は遺構の東半分に多く散在しており、土師器片では、内黒の坏の破片、須恵器片では叩き目を持つ甕の胴部片が含まれている。北東コーナー部の床面からは完形の第157図1・4の坏（土師器）が正位で、カマド前方の床面からは9の支脚が横位で出土している。また、北部の覆土中からは墨書を持つ土器4点が出土しており、6の高台付皿（土師器）や7の坏（土師器）には「幡」、5の坏（土師器）片には「路□」と読める文字が記されている。8の坏（土師器）片の墨書は欠損しており判読は不可能である。これらの墨書土器も本跡に伴う遺物と考えられる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から9～10世紀代の住居跡と思われる。



第157図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土土器観察表

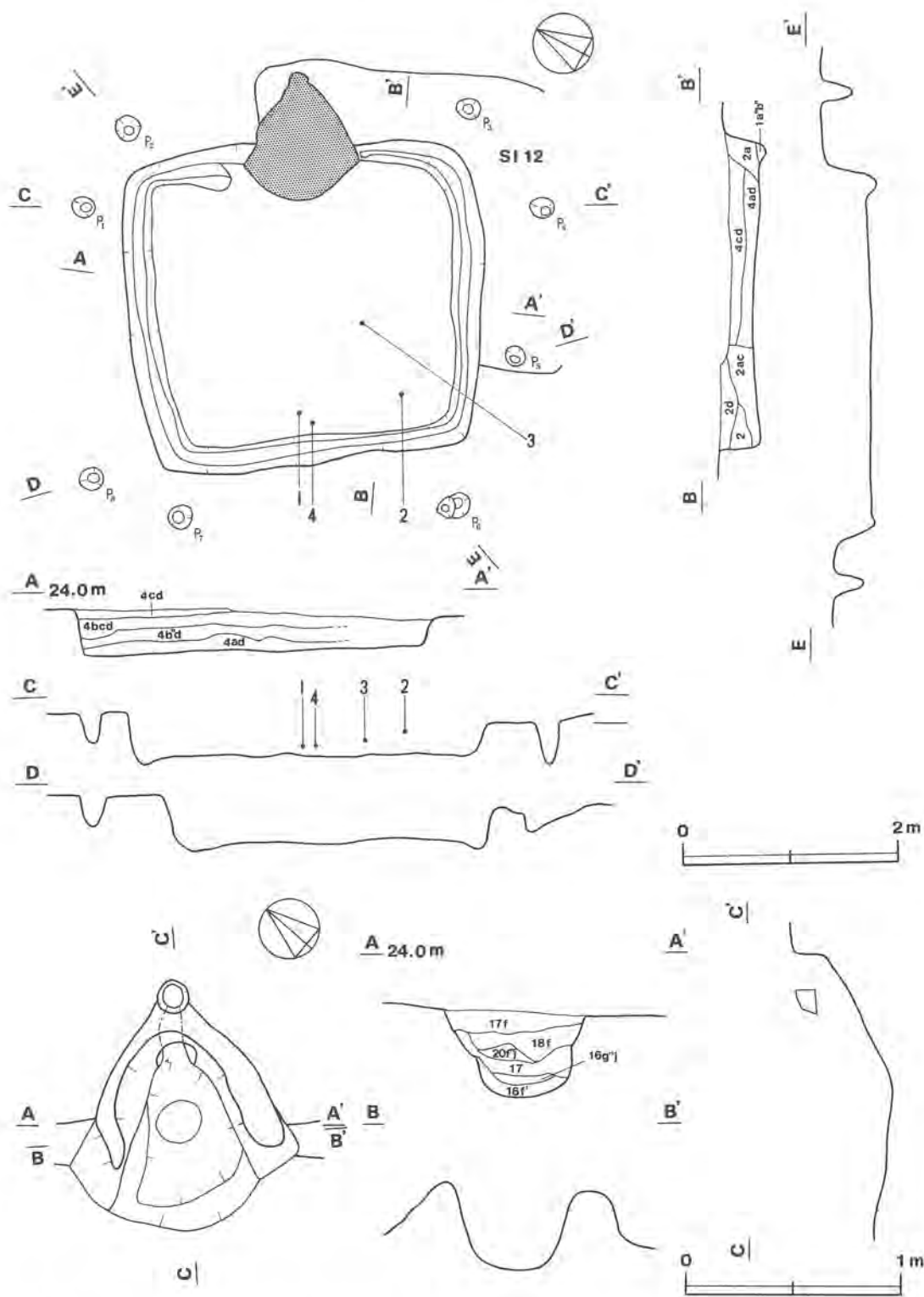
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第157図 1	坏 土師器	A 13.5 B 4.6 C 6.9	平底。体部は内彎気味に開き、口縁部に至る。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り、内面は粗い篋磨き。底面は一定方向の手持ち篋削り、回転方向は右。	砂粒にふい・橙色 普通	98% P300 PL83 内面黒色処理

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第157図 2	坏 土師器	A 13.7 B 4.5 C 6.4	上げ底。体部は内彎気味に開き、口縁部で外反する。口唇部は膨らみを持ち、丸い。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り、内面底部は粗雑な不定方向の篋磨き。底面は手持ち篋削り。回転方向は右。	砂粒 橙色 普通	40% P301 PL83 内面黒色処理
3	坏 土師器	A [13.0] B 4.0 C 6.2	上げ底。体部は内彎気味に開き、口縁部で外反する。口唇部は膨らみを持ち、丸い。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り。底面は回転篋切り後、一定方向の手持ち篋削り。回転方向は不明。	砂粒・雲母 黄灰色 普通	40% P302 PL83 スス付着
4	坏 土師器	A 13.7 B 4.1 C 6.8	上げ底。体部は内彎気味に開き、口縁部で外反する。口唇部は膨らみを持ち、丸い。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り。内面は篋磨き。底面は一定方向の手持ち篋削り。	砂粒 にぶい褐色 普通	70% P303 PL83 内面黒色処理
5	坏 土師器	A [12.6] B 4.1 C [5.4]	平底。体部は内彎して開き、口縁部は外反する。口唇部は膨らみを持ち、丸い。	水挽き成形。外面下端は篋削り。底部は手持ち篋削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	15% P417 体部に墨書「路□」
6	高台付血 土師器	A [15.2] B 2.5 D 0.9 E [8.0]	底部欠損。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は丸い。体部は内彎気味に大きく開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。高台は貼り付け。	砂粒 にぶい橙色 普通	15% P304 PL85 内面黒色処理・ 体部に墨書「幡」
7	坏 土師器	B (2.0)	口縁部片。口縁部は外反し、口唇部は丸い。	水挽き成形。内面篋磨き。	砂粒 橙色 普通	5% P416 PL94 内面黒色処理・ 墨書「幡」
8	坏 土師器	B (2.3)	体部片。内彎する。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	5% P418 内面黒色処理・ 墨書(文字不明)

第11号住居跡 (第158図)

本跡は、調査区の北西部 L2b7 区を中心に確認された住居跡で、本跡の上層には、やはり 9～10 世紀代の第12号住居跡が、北 2 m には第 4 号住居跡が存在している。

平面形は、長軸3.30m、短軸3.05m の方形状を呈し、主軸方向はN-56°-Eを指している。床面積は7.8m²である。壁は締まったロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は30～40cmで、壁直下には上幅20cm、深さ10cmの壁溝がカマドの部分を除いて周回している。床は貼り床で、壁際まで突き固められているが、カマドの前面は踏み締まりも加わり一層硬化している。床面は起伏が激しい。ピットは 8 か所を確認したが、いずれも本跡を取りまくような形で、掘り込みの外側に存在している。これらのピットの上端直径は20cm、深さは18～33cmと小規模であるが、配置等から本跡の上屋を支える柱穴と思われる。カマドは、北東壁の中央部に付設されているが、天井部は崩落している。カマドの全長は120cm、横幅は85cmである。燃焼部の規模は、長さ80cm、幅50cmで、壁面を35cm奥に掘り込んでいる。煙道部は、奥壁をさらに30cmほど円筒状に掘り込んで構築されている。袖部、天井部と煙道の一部は砂質の粘土によって構築されており、内壁は赤く変色



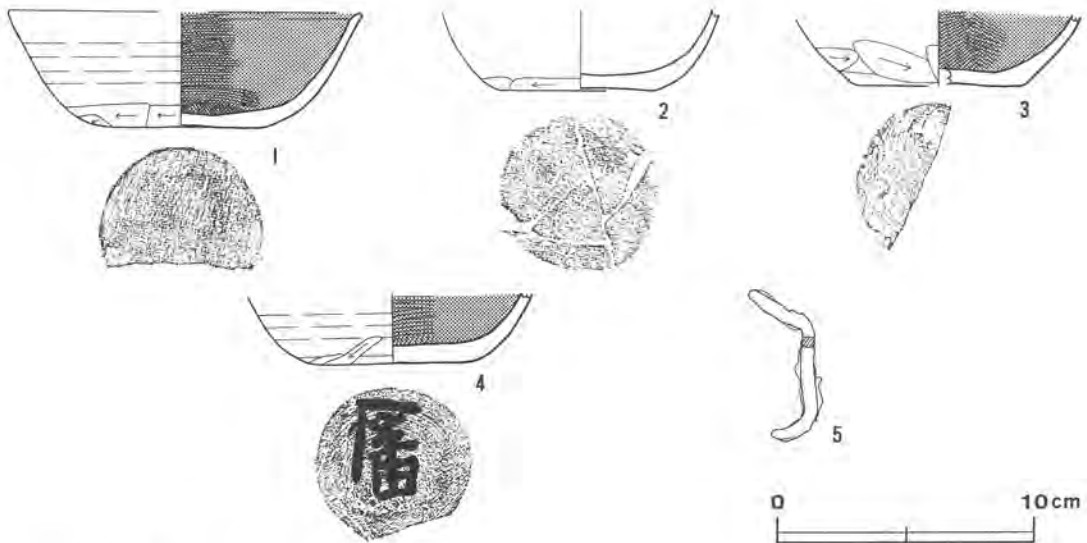
第158図 第11号住居跡・カマド実測図

している。カマド内には、焼土や焼土ブロック、炭化物、木灰等を含む赤褐色土と暗赤褐色土が主に堆積している。火床は、床面からわずかに窪み、レンガ状に焼き固まっている。

覆土は、ロームブロックを多量に含む暗褐色土が一様に堆積している。人為的に埋め戻されたものと思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片131点、須恵器片16点、鉄製品(釘)1点と、カマド内から土師器片4点が出土している。本跡に伴う遺物は、南西部に集中しており、土師器片には内面黒色処理が施された坏や、高台を持つ坏の破片が、須恵器片には叩き目を持つ甕の胴部片が含まれている。南西壁際の覆土下層からは、第159図1・2・4の坏(土師器)が、中央部の覆土下層からは3の坏(土師器)がそれぞれ破片で出土しており、4の底部には「一幡」と読める墨書が記されている。

本跡は、遺物や遺構の形態等から9～10世紀代の住居跡と思われる。



第159図 第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土土器観察表

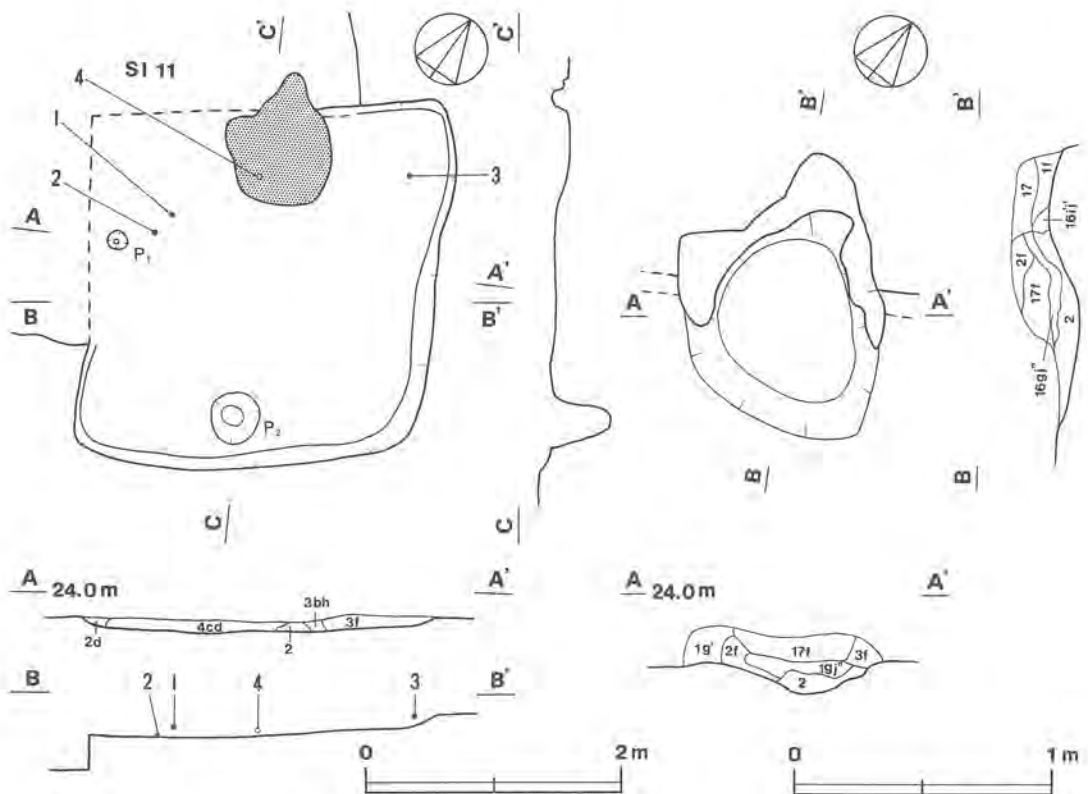
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第159図 1	坏 土師器	A [14.0] B 4.6 C [6.6]	平底。体部は内彎して開き、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り。内面は横位の篋磨き。底面は一定方向の手持ち篋削り。	砂粒 に お い い 黄 橙 色 普 通	40% P305 PL83 内面黒色処理

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第159図 2	坏 土師器	B (3.2) C (6.2)	平底。体部は内彎気味に開く。 上位を欠損。	水挽き成形。体部外面下端は篋 削り。底面は不定方向の手持ち 篋削り。	砂粒 浅黄橙色 普通	40% P306
3	坏 土師器	B (2.6) C (6.6)	上げ底。体部は内彎して開く。 中位以上を欠損。	水挽き成形。下端は篋削り。体 部内面は横位の篋磨き。底部は 回転糸切り。回転方向不明。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	10% P307 内面黒色処理
4	坏 土師器	B (2.7) C 6.2	上げ底。体部は内彎して開く。 上位を欠損。	水挽き成形。体部外面下端篋削 り。底部回転糸切り後、周囲を 手持ち篋削り。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	15% P308 内面黒色処理・ 底部墨書「一掃」

第12号住居跡 (第160図)

本跡は、調査区の北西部 L2b7 を中心に確認された住居跡で、床面の一部は9～10世紀代の第11号住居跡の覆土を掘り込んでいる。本跡の北2mには第4号住居跡が、西12mには第84号住居跡が存在している。

平面形は、長軸2.80m、短軸2.72mの方形状を呈し、主軸方向はN-30°-Wを指している。床



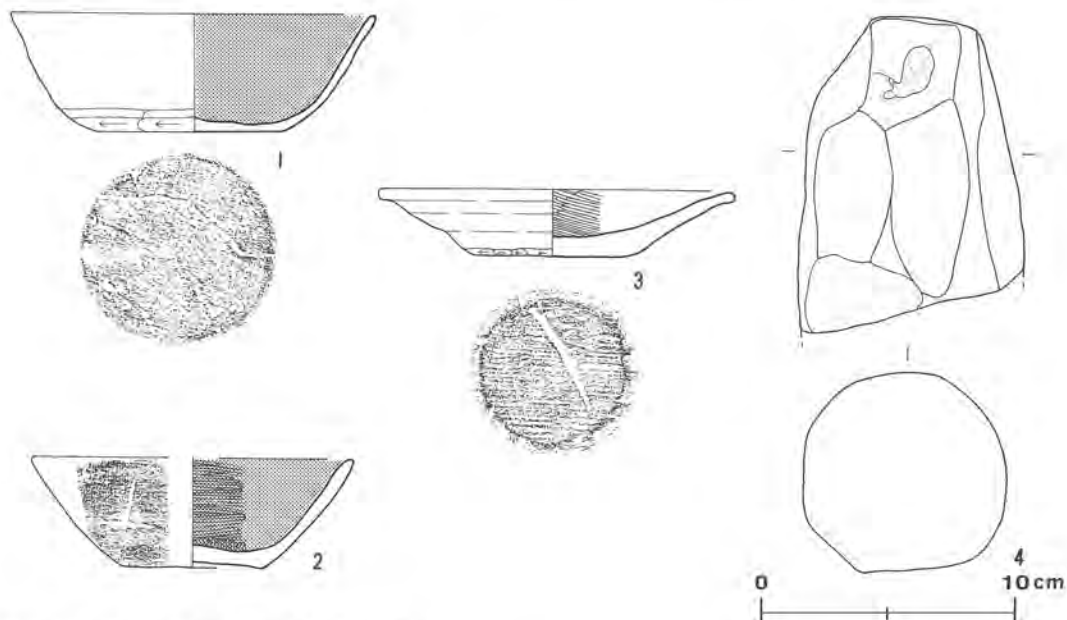
第160図 第12号住居跡・カマド実測図

面積は6.4㎡である。北西壁と南西壁の一部は第11号住居跡の覆土であるため検出できなかった。その他の壁はロームである。壁高は10cmと浅く、壁面の状況については不明な点が多い。床の北西部は第11号住居跡の覆土上に貼り床され、硬く突き締められている。東側と南側の床はロームで、総体的に軟弱である。ピットは2か所を確認したが、2か所とも本跡に伴う柱穴と考えられる。P₁は、上端直径が20cm、深さが24cmで、第11号住居跡の覆土中に掘られている。P₂は、上端直径が40cm、深さ48cmで、南東壁際に位置することから入口部に関する柱穴と思われる。カマドは、北西壁の中央部に付設されているが、天井部と袖部のほとんどが崩壊している。カマドの全長は110cm、横幅は80cmで、壁面を30cmほど奥に掘り込み、内部には焼土ブロックや灰を含む暗赤褐色土が主に堆積している。火床は、床面からわずかに掘り込まれているが、あまり焼き固まっていない。

覆土は、ロームブロックを含む黒褐色土が堆積しているが、本跡の掘り込みが浅いため堆積状況等については不明である。

遺物は、覆土中から土師器及びその破片28点、須恵器片7点と、カマド内から土師器片1点、須恵器片3点が出土している。本跡に伴う遺物はカマド周辺に散在しており、そこから出土した須恵器片には叩き目を持つ甕の胴部片が含まれている。カマド東側の下層からは第161図3の皿(土師器)が伏せた状態で出土している。カマド西側の床面からは、1・2の坏(土師器)が潰れた状態で出土し、2の体部には、「人」と読める刻書が確認されている。

本跡は、遺物や遺構の形態等から9～10世紀代の住居跡と思われる。



第161図 第12号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第161図 1	坏 土師器	A 14.5 B 4.6 C 7.6	平底。体部は内彎気味に開き、口縁部はやや外反する。口唇部は尖る。	水挽き成形。体部外面下端と底面は回転篋削り。	スコリア・砂粒・雲母 にぶい橙色 不良	80% P311 PL83 内面黒色処理
2	坏 土師器	A [12.8] B 4.9 C 5.6	上げ底。体部は内彎して開き、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部下端は篋削り。内面は篋磨き。底面は一定方向の篋削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	40% P310 PL83 内面黒色処理・ 体部刻書「人」
3	皿 土師器	A 14.0 B 2.7 C 5.8	平底。体部は外傾して大きく開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。内面は篋磨き。底面は一定方向の手持ち篋削りで、体部との境を面取りする。	砂粒 にぶい橙色 良好	70% P309 PL84

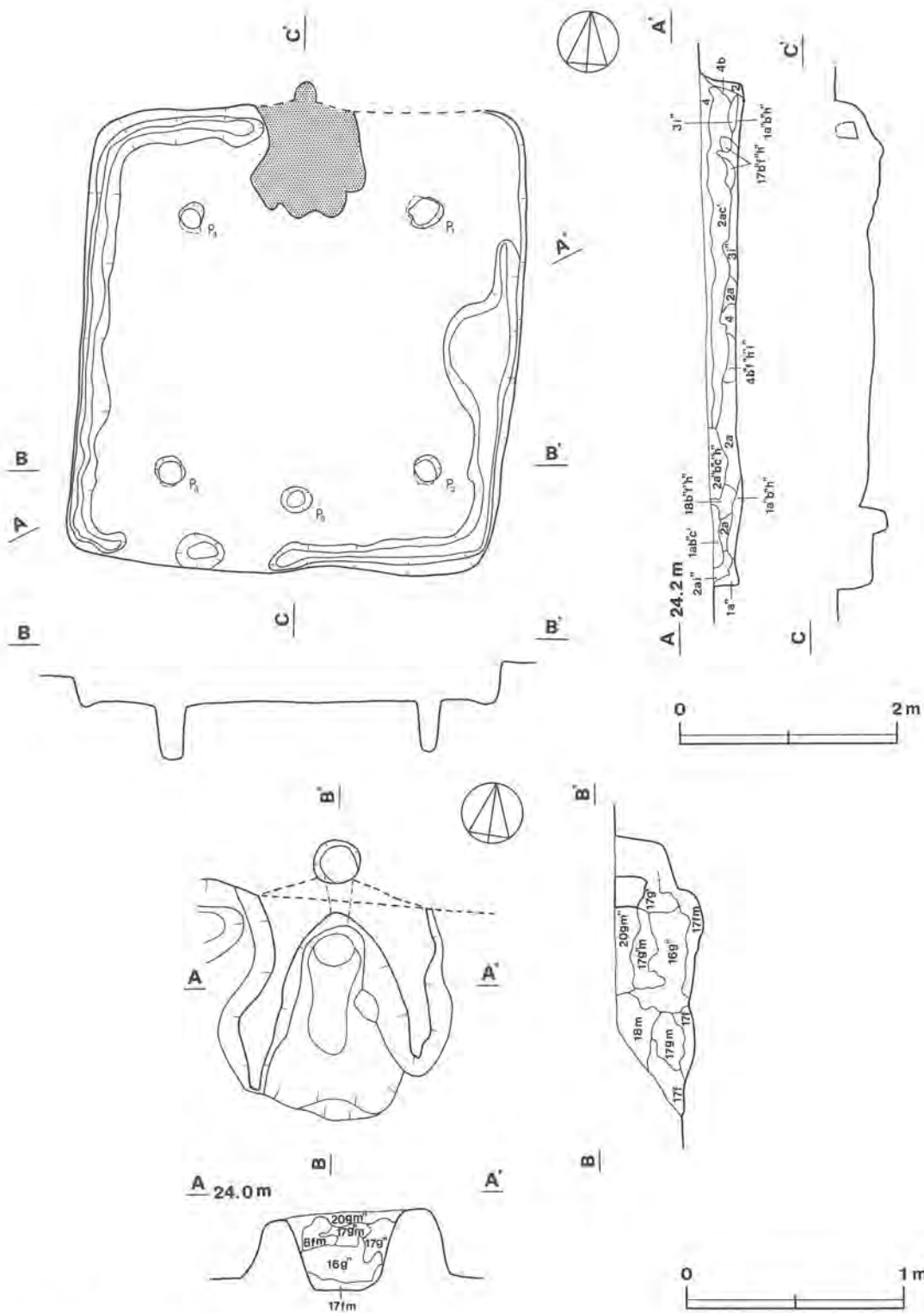
第23号住居跡 (第162・163図)

本跡は、調査区の西部 L1c0区を中心に確認された住居跡である。本跡の北東10mには第84号住居跡が、南14mには第23号住居跡が存在している。

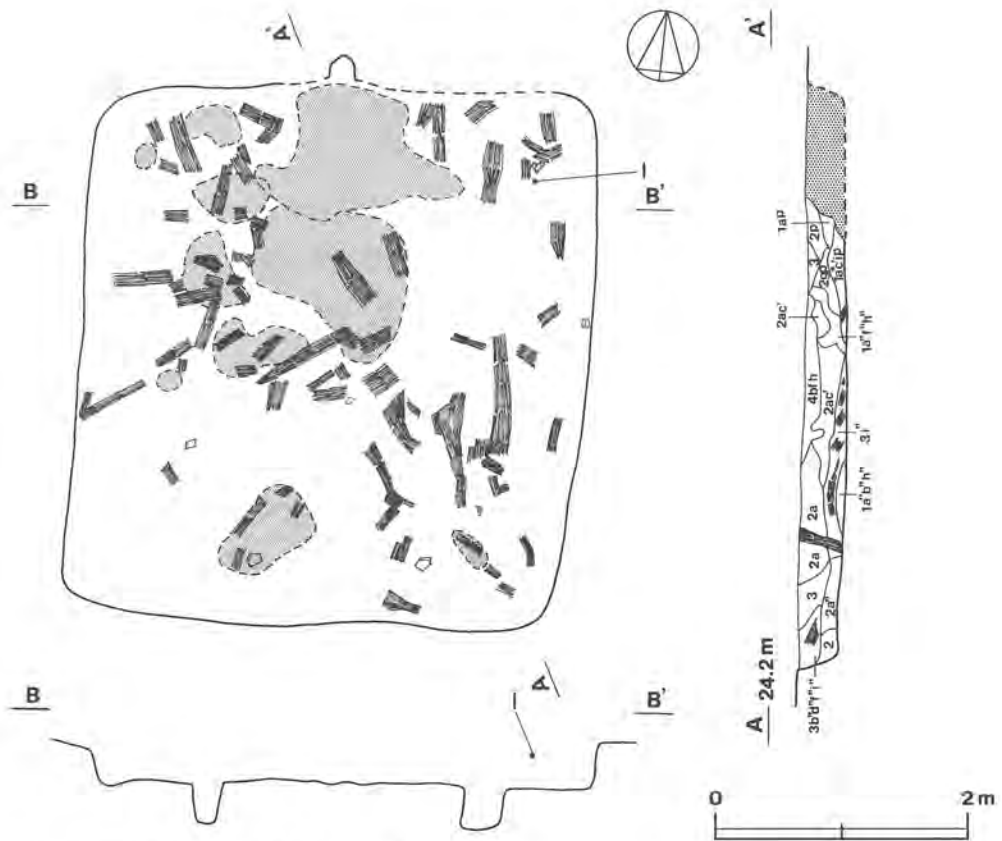
平面形は、長軸4.3m、短軸4.0mの方形状を呈し、主軸方向はほぼ北を指している。床面積は15.2㎡である。壁は締まったロームで、垂直に立ち上がっている。壁高は30～40cmで、北東コーナー部と南壁を除く各壁際には、上幅20cm、深さ5cmの壁溝が周回している。床は壁際まで硬く締まったロームで、起伏が激しい。ピットは5か所を確認している。P₁～P₄は主柱穴で、上端直径が20cm、深さが30～45cmで、方形に配列されている。P₅はやや浅く、南壁際に位置することから入口部に関係する柱穴と思われる。カマドは、北壁の中央部に付設されているが、天井部は崩落している。カマドの全長は120cm、横幅は105cmである。燃焼部の規模は、長さ90cm、幅40cmで、壁面を掘り込んでいない。煙道部は、奥壁を30cmほど円筒状に掘り込んで構築されている。天井部や袖部は砂質の粘土によって構築されているが、袖部からは、補強のために粘土に混ぜたとと思われる切葉状の物質も検出された。袖の内面には赤褐色に変色し、カマド内には焼土や炭化材を含む暗赤褐色土が主に堆積している。火床は、床面からわずかに窪み、レンガ状に焼き固まっている。

覆土は、上層に黒褐色土、中層以下には暗褐色土が主に堆積しているが、各層とも焼土やロームブロック・炭化材を多量に含んでいる。焼土や炭化材は床面にも散在していることから、本跡は居住期間中に焼失したものと思われる。

遺物は極めて少なく、床面や覆土中から土師器片23点、須恵器片2点及び、後世に流れ込んだと思われる陶器片1点と、カマド内から支脚の断片5点が出土している。本跡に伴う遺物は遺構全体に疎に散在しており、土師器片には胴下半部に篋磨きが施された所謂常陸型甕の破片と思われるものが含まれている。第164図1の甕(土師器)は、カマド東側の中層から出土したもので



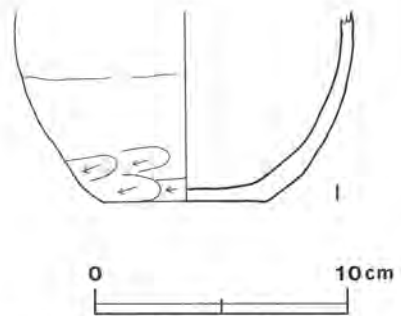
第162図 第23号住居跡・カマド実測図



第163図 第23号住居跡出土炭化材・遺物位置図

本跡に伴う遺物と考えられる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から8世紀代の住居跡と思われる。



第164図 第23号住居跡出土遺物
実測図

第23号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第164図 1	甕 土師器	B (7.5) C 6.6	胴部は内彎して立ち上がるが、 中位以上を欠損。	胴部内・外面ともナデ整形で、 外部下端は横位の篋削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	40% P312 PL74

第26号住居跡（第165図）

本跡は、調査区の西部 L1h0区を中心に確認された住居跡で、南壁の一部は弥生時代の第53号住居跡を掘り込んでいる。本跡の北14mには第23号住居跡が、南東18mには第93号住居跡が存在している。

平面形は、長軸3.65m、短軸3.50mの方形状を呈し、主軸方向はN-28°-Wを指している。床面積は10.0㎡である。壁はロームで、垂直に立ち上がっている。壁高は35cmで、壁直下には、上幅25cm、深さ10cmの壁溝が全周している。床は貼り床で、平坦である。床面は壁際まで硬く締まっているが、カマドの前方部は踏み締まりも加わり一層硬化している。ピットは4か所確認したが、いずれも小規模で配列も不規則であり、本跡との関係は不明である。カマドは、北壁の中央部に付設されているが、大部分は崩落している。カマドの全長は120cmで、横幅は80cmほどと推定される。燃烧部の規模は長さ90cm、幅40cmで、壁面を20cm奥へ掘り込んでいる。煙道部は、奥壁をさらに30cmほど掘り込んで構築されている。袖部と天井部は砂質の粘土で構築されており、内面は焼けて変色している。カマド内には、焼土・炭化物・木灰等を含む暗赤褐色土が主に堆積している。火床は、床面からわずかに窪み、レンガ状に焼き固まっている。

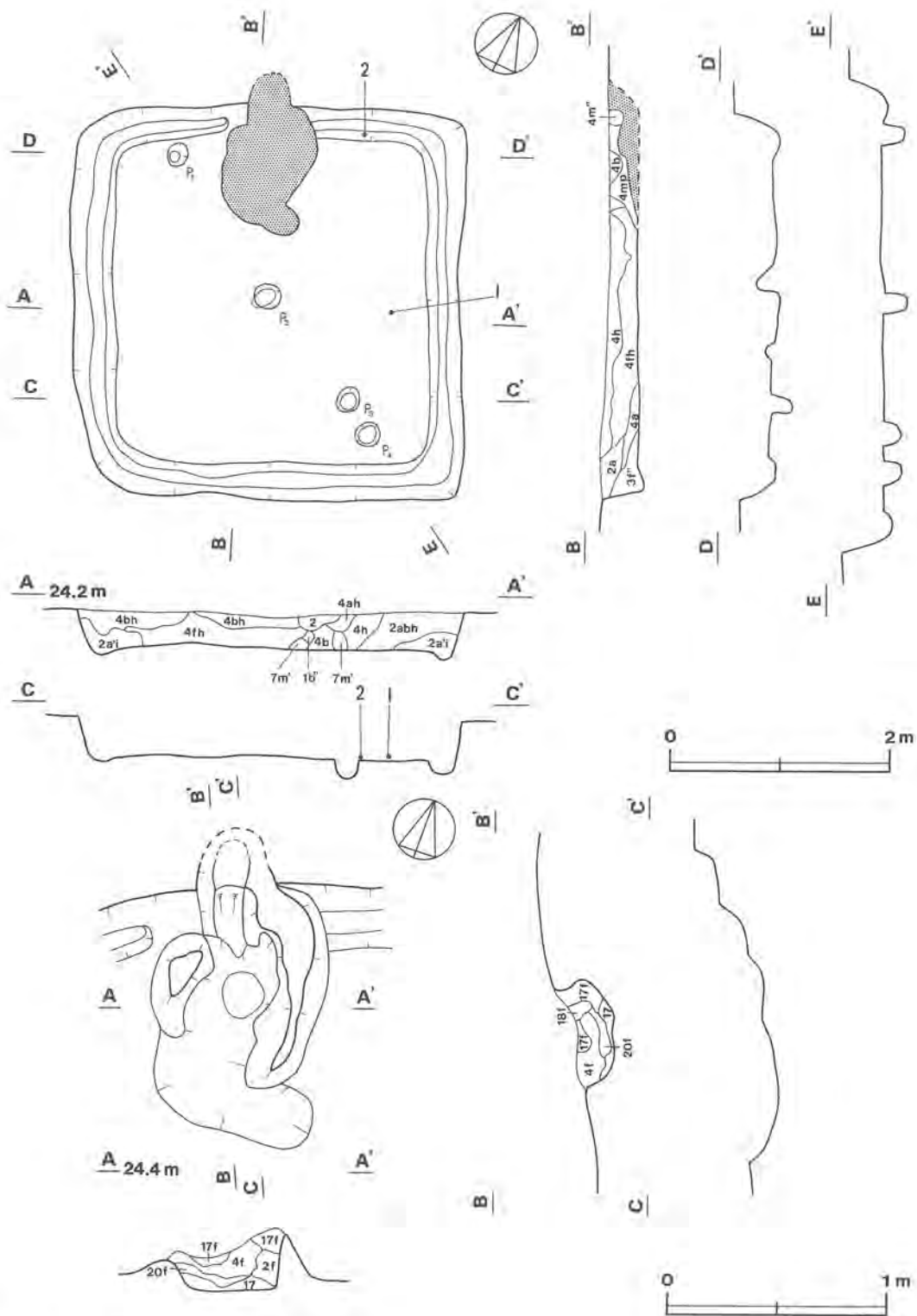
覆土は、上・下層とも黒褐色土が堆積している。自然堆積層と思われる。

遺物は極めて少なく、床面や覆土中から土師器及びその破片28点、須恵器及びその破片2点、砥石1点と、カマド内から土師器片3点が出土している。本跡に伴う遺物は中央部とカマド周辺に散在しており、土師器片には胴下半部に篋磨きが施された甕の破片も含まれている。第166図1の甕は、北部の覆土下層から出土し、2の坏（須恵器）はカマド東側から正位で出土している。なお、3の砥石は、南側覆土中から出土したもので、本跡との関係は不明である。

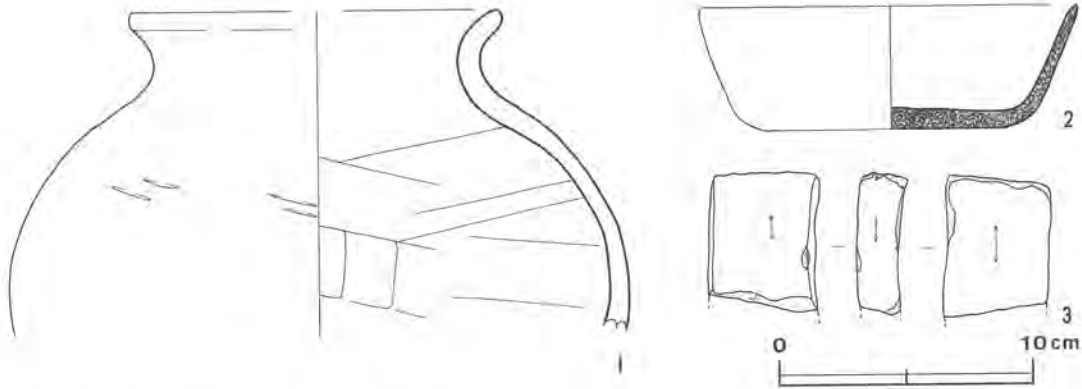
本跡は、遺物や遺構の形態等から8世紀代の住居跡と思われる。

第26号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第166図 1	甕 土師器	A [14.6] B (12.8)	胴部下半を欠損。胴部は膨みを持つ。口縁部は強く外反し、端部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ整形。胴部外面上位に篋当て痕。内面は横位の篋ナデ整形。	砂粒・雲母・ス コリア にぶい橙色 良好	10% P314 PL74
2	坏 須恵器	A 14.8 B 4.9 C 9.1	平底。底部と体部との境は丸味を持つ。体部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。底部回転篋削り。回転方向は左。	砂粒・雲母・長 石 黄灰色 普通	90% P313 PL85



第165図 第26号住居跡・カマド実測図



第166図 第26号住居跡出土遺物実測図

第37号住居跡 (第168図)

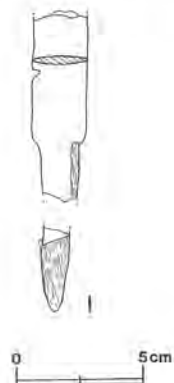
本跡は、調査区の南東部 M4is区を中心に確認された住居跡である。本跡の北西20m には第51号住居跡が、南東20m には第64号住居跡が存在している。

平面形は、一辺が3.4m の方形状を呈し、主軸方向はN-8°-Eを指している。床面積は9.8㎡である。壁はロームで、70~80度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は45cmで、壁直下には上幅15cm、深さ10cmの壁溝が全周している。床は貼り床で、壁際まで硬く締まり、平坦である。ピットは、カマド西側の壁溝中に2か所を確認したが、覆土の状況等から本跡に伴うものとは考えられない。カマドは、北壁に付設されているが、極端に北東コーナーに寄って位置している。カマドの全長は100cm、横幅は80cmである。燃焼部の規模は長さ80cm、幅50cmで、壁面を25cm掘り込んでいる。煙道部は、奥壁をさらに10cmほど掘り窪めて構築されている。裾部・天井部及び煙道の一部は砂質の粘土で構築されている。カマド内には、焼土を含む暗赤褐色土が主に堆積している。火床は、ほとんど掘り込まれていないが、レンガ状に硬く焼き固まっている。

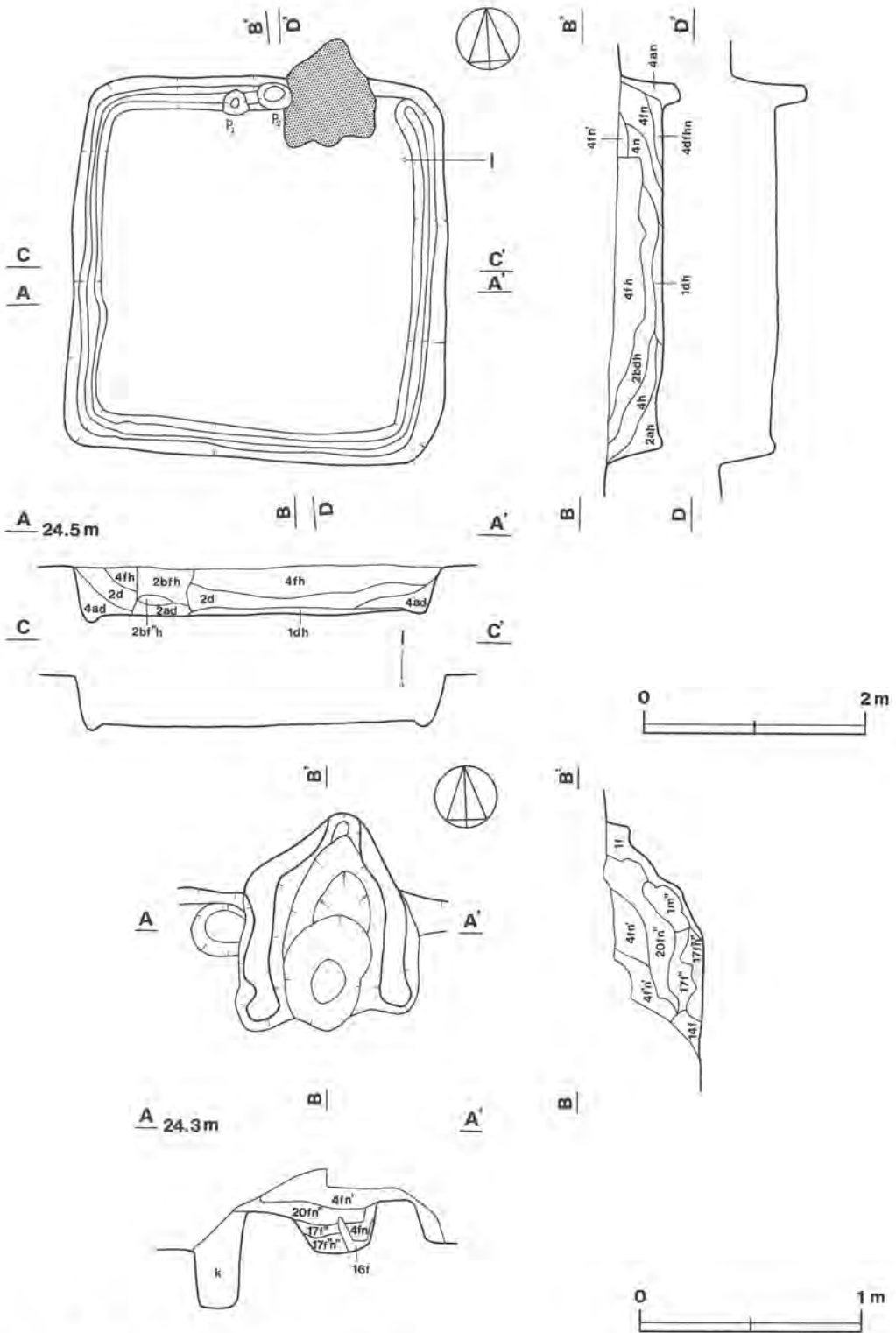
覆土は、上層に黒褐色土、中層に暗褐色土、下層に褐色土がレンズ状に堆積している。締まりは弱い、自然堆積層と思われる。

遺物は少なく、覆土中から土師器片94点、須恵器片5点、鉄製品(刀子)1点、球状土錘の断片1点が出土している。本跡に伴う遺物は、遺構全体に疎に散在しているが、土器類はいずれも小片であるため実測はできなかった。第167図1の刀子は東壁際から出土したもので、本跡に伴う遺物と考えられる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から9~10世紀代の住居跡と思われる。



第167図
第37号住居跡
出土遺物実測図



第168図 第37号住居跡・カマド実測図

第45号住居跡（第169図）

本跡は、調査区の南部 M3h6区を中心に確認された住居跡である。本跡の北東 4 m には第51号住居跡が、南 4 m には第100号住居跡が存在している。

平面形は、一辺が3.4m の方形状を呈し、主軸方向はN—17°—Eを指している。床面積は9.6㎡である。壁はロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は30～40cmで、北壁を除く壁直下には上幅20cm、深さ10～20cmの壁溝が周回している。床は貼り床で、壁際まで硬く締まり、中央部が窪んでいる。本跡に伴うピットは、南壁際に 1 か所を確認した。ピットの上端直径は45cm、深さは20cmで、配置等から入口部に関する柱穴と思われる。カマドは、北壁に付設されているが、やや西に片寄って位置している。カマドの遺存状態は悪く、裾部がわずかに残存するのみである。カマドの全長は100cm、横幅は90cmと推定され、主軸方向は北を向いている。燃烧部の規模は長さ70cm、幅50cmで、壁面を30cmほど奥に掘り込み、奥壁をさらに30cmほど円筒状に掘り込んで煙道部が構築されている。裾部は藁状の物質を含む砂質の粘土で構築され、カマド内には焼土や木炭を含む暗赤褐色土が堆積している。火床は、ほとんど掘り込まれていないが、レンガ状に焼き固まっている。

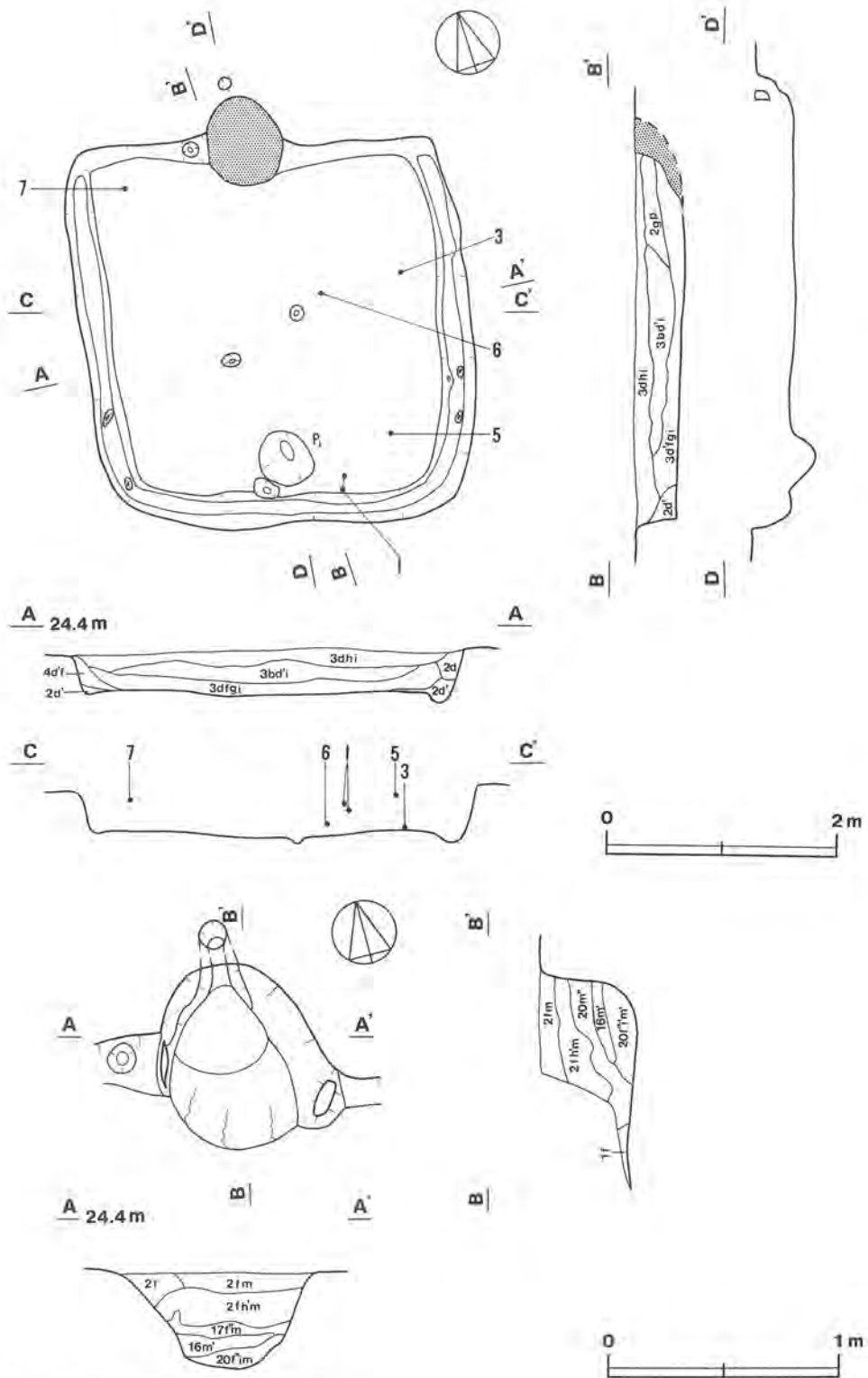
覆土は、上層に極暗褐色土、下層に暗褐色土が堆積している。自然堆積層と思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片252点、須恵器片27点と、カマド内から土師器片9点、須恵器片1点が出土している。本跡に伴う遺物は遺構全体に散在しており、中央部からは第170図6の高台付皿（土師器）が、東側の床面からは3の坏（須恵器）が出土している。また、南東コーナー部からは5の高台付皿（土師器）や、1の坏（土師器）が、北西コーナー部からは7の高台付皿（土師器）が出土している。これらの遺物の出土層位は覆土上層から床面にかけてであるが、住居跡の掘り込みが浅いことから、すべて本跡に伴う遺物と思われる。なお、2の坏（土師器）と4の高台付坏（須恵器）は住居跡外から出土したものであるが、表土除去の際に本跡の覆土上層から移動したものと判断し、本跡の遺物として取り扱った。

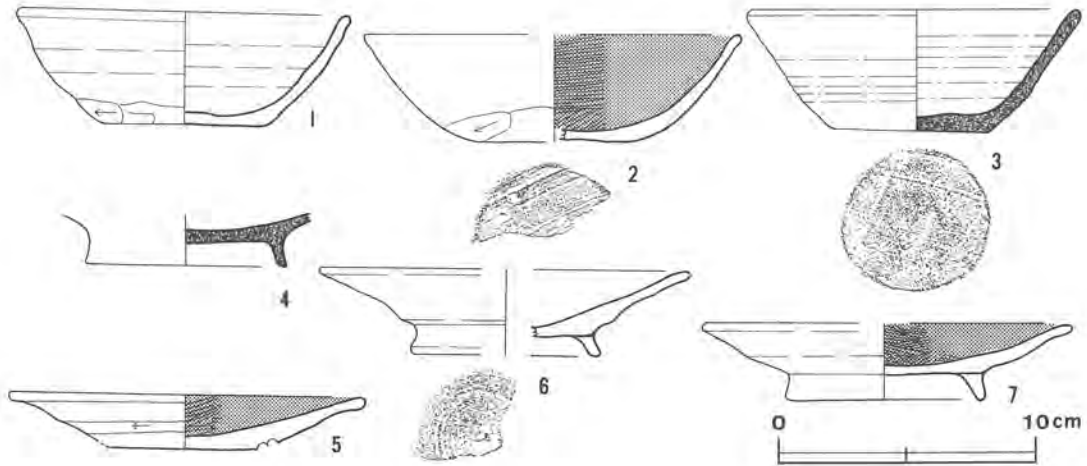
本跡は、遺物や遺構の形態等から9～10世紀代の住居跡と思われる。

第45号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第170図 1	坏 土師器	A 13.1	平底。体部は内彎して開き、口縁部は外反する。口唇部はわずかに膨らみ、やや尖る。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り。底部は手持ち篋削り。	砂粒・雲母 褐色 良好	80% P317 PL83
		B 4.6				
		C 6.4				
2	坏 土師器	A [14.8]	上げ底。体部は内彎して開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部下端は篋削り。内面は篋磨き。底部は一定方向の手持ち篋削り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	30% P320 内面黒色処理
		B 4.3				
		C [6.2]				



第169図 第45号住居跡・カマド実測図



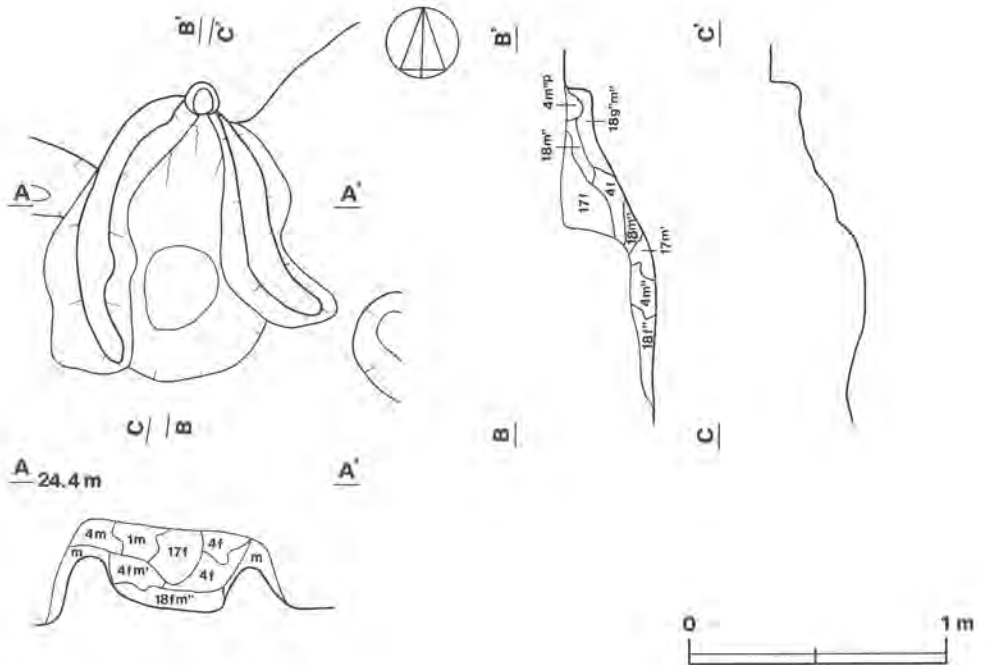
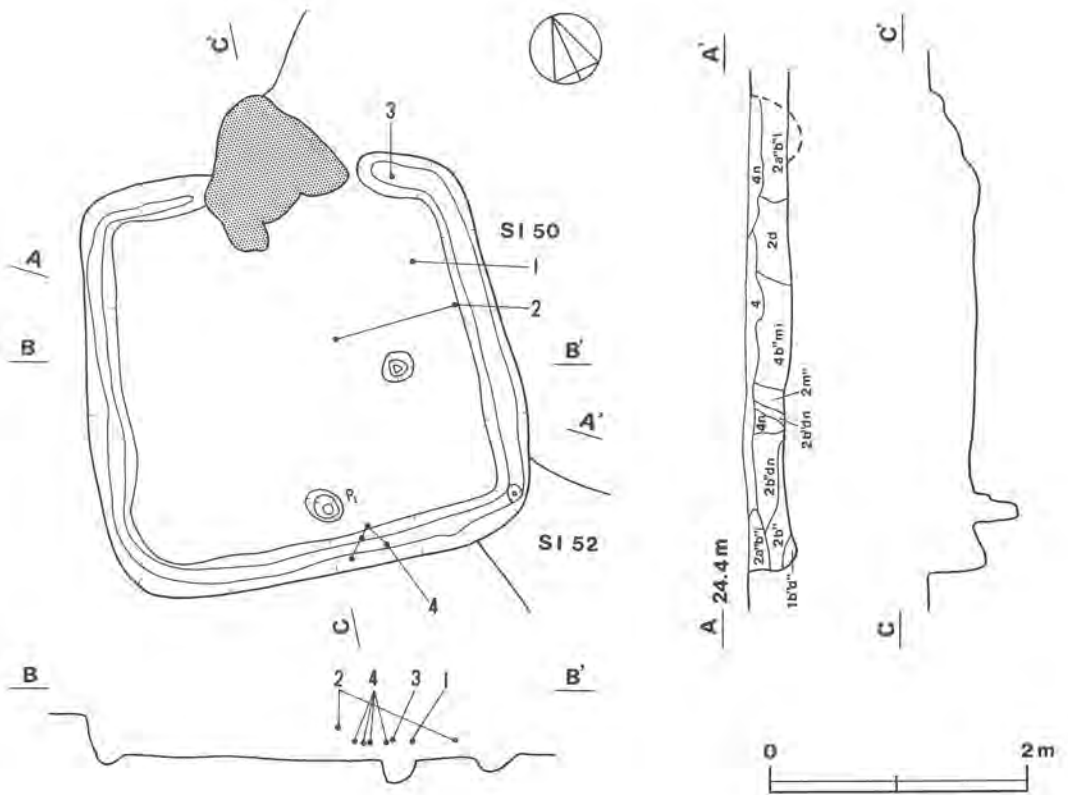
第170図 第45号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第170図 3	須恵器 環	A 12.7 B 4.8 C 6.0	平底。体部は外傾して開き。口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部外面下端横位の篋削り。底部は手持ち篋削り。	砂粒 黄灰色 良好	100% P315 PL86
4	須恵器 高台付環	B (2.1) D 1.0 E 8.0	平底。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は丸味を持つ。	底部は回転篋削り。高台は貼り付けで、端部はわずかに内削ぎ。	砂粒 灰白色 良好	10% P321
5	土師器 高台付皿	A 14.1 B 2.1	平底。高台部欠損。体部は外傾して大きく開き、口縁部は外反する。口唇部は膨みを持ち、丸い。	水挽き成形。体部下端に一条の回転篋削り。内面は不定方向の篋磨き。底面は回転篋削り。回転方向は右。	砂粒 にぶい橙色 普通	90% P316 PL85 内面黒色処理
6	土師器 高台付皿	A [14.6] B 3.4 D 0.8 E [7.4]	平底。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は丸い。体部は大きく開き、口縁部でわずかに外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。高台は貼り付け。底部は回転篋削り。回転方向は右。	砂粒 灰白色 普通	30% P318 二次焼成
7	土師器 高台付皿	A [14.5] B 3.1 D 1.1 E 7.8	平底。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は丸い。体部は内彎気味に大きく開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部内面は篋磨き。高台は貼り付け。底部は回転篋削り。回転方向は右。	砂粒 にぶい褐色 普通	20% P319 内面黒色処理

第51号住居跡 (第171図)

本跡は、調査区の南部 M3f7区を中心に確認された住居跡で、東壁は古墳時代前・中期の第50・52号住居跡を掘り込んでいる。本跡の北西15m には第97号住居跡が、南西 5 m には第45号住居跡が存在している。

平面形は、長軸・短軸とも3.3mで、北辺が南辺より30cmほど短い方形状を呈している。主軸方向はN-15°-Eを指し、床面積は8.9㎡である。西壁と南壁はロームで、垂直に立ち上がっている。



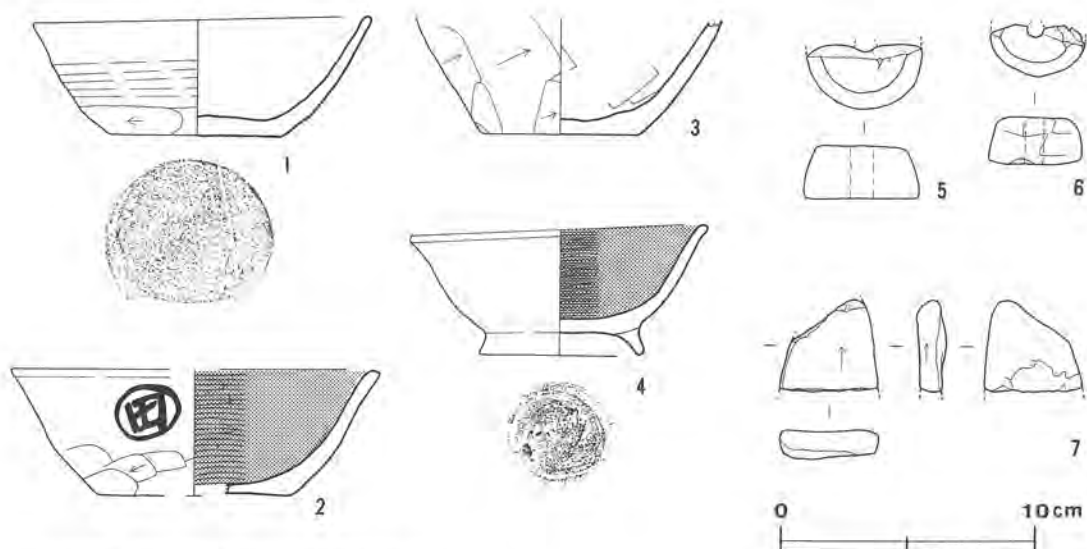
第171図 第51号住居跡・カマド実測図

るが、北壁の一部と東壁は第50・52号住居跡の覆土を掘り込んでいる。壁高は35cmで、壁直下には上幅20cm、深さ10cmの壁溝が全周している。床は貼り床で、壁際まで締まっている。本跡に伴うピットは、1か所を確認した。上端直径は25cm、深さ35cmで、南壁際に位置することから入口部に関する柱穴と思われる。カマドは、北壁の中央部に付設されているが、天井部は崩落している。カマドの全長は120cm、横幅は110cmで、主軸方向はN-5°-Eを指している。燃焼部の規模は長さ100cm、幅45cmで、壁面を40cmほど掘り込んでいる。煙道部は、奥壁をわずかに掘り込んで構築されている。袖部は砂質の粘土によって構築され、一部には糞状の物質も混入している。カマド内には、焼土を多量に含む暗褐色土が主に堆積している。火床は、床面から15cmほど掘り込まれ、焼けてレンガ状を呈している。

覆土は、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積している。自然堆積層と思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器片189点、須恵器片40点、土製の紡錘車2点、球状土錘1点、砥石1点、礫1個と、カマド内から土師器片7点、須恵器片2点が出土している。本跡に伴う遺物は遺構中央から北東部に多く散在しており、厚手の甕（須恵器）の破片が多量に含まれているが、実測可能なまでには復元できなかった。北東コーナー部から東壁にかけての下層には、第172図1・2の坏（土師器）と3の甕（土師器）が、南壁際の中層には4の高台付坏（土師器）が出土している。これらの土器は破片で出土したものが復元されたもので、2の坏体部には「田」の墨書が確認されている。5・6の土製の紡錘車と7の砥石は、東側の中層から下層にかけて出土したもので、これも本跡に伴う可能性が高い。

本跡は、遺物や遺構の形態等から9～10世紀代の住居跡と思われる。



第172図 第51号住居跡出土遺物実測図

第51号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第172図 1	坏 土師器	A 13.4	平底。体部は内彎して開き、口縁部はやや外反する。口唇部は平坦である。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り。底部は一定方向の手持ち篋削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	60% P323 PL84
		B 4.8				
		C 6.8				
2	坏 土師器	A [14.6]	平底。体部は内彎して開き、口縁部は外反する。口唇部は平坦。	水挽き成形。体部下端は篋削り。内面は篋磨き。底部は回転糸切り後、一定方向の手持ち篋削り。	砂粒・スコリア にぶい黄橙色 普通	30% P324 PL84 内面黒色処理・ 墨書「㊤」
		B 5.6				
		C [7.6]				
3	甕 土師器	B (4.6)	平底。胴部は外傾して立ち上がるが、中位以上を欠損。	胴部外面下位は横位の篋削り。内面は横位の篋ナデ整形。底部は一定方向の手持ち篋削り。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	10% P325
		C 6.2				
4	高台付坏 土師器	A 11.8	平底。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は丸い。体部は内彎気味に開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。内面は篋磨き。底部は回転篋切り。高台は貼り付け。	砂粒 にぶい橙色 普通	98% P322 PL84 内面黒色処理
		B 5.2				
		D 0.9				
		E 6.4				

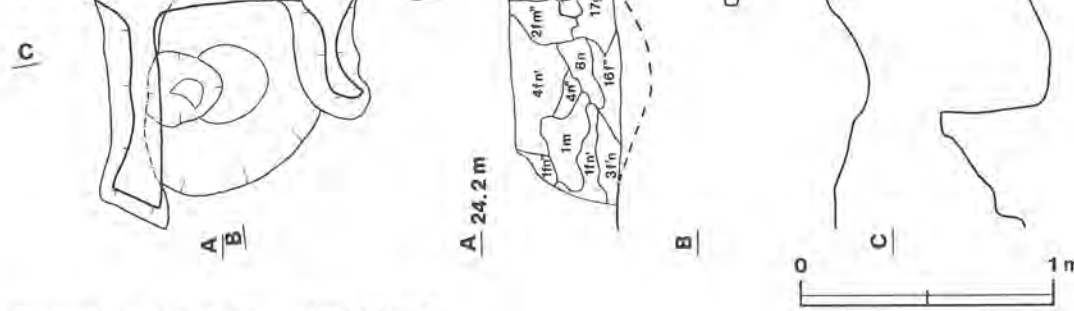
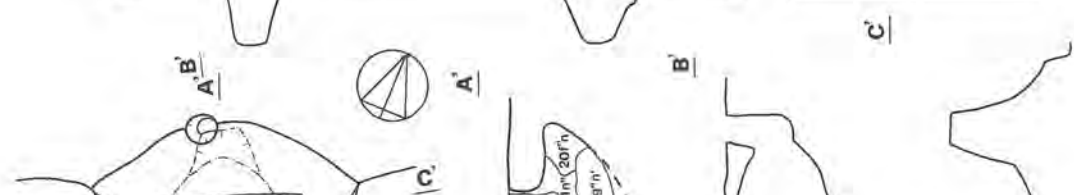
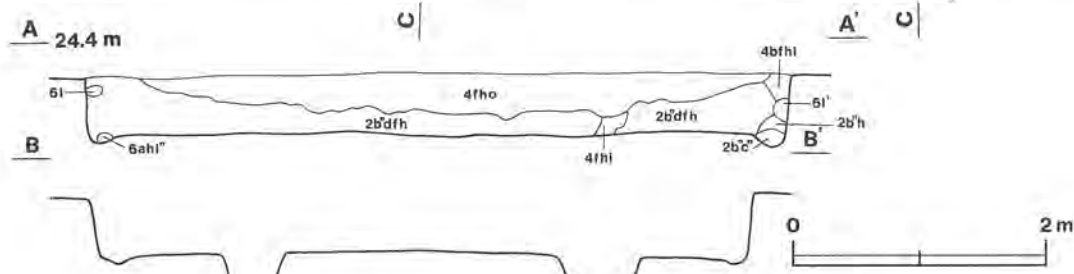
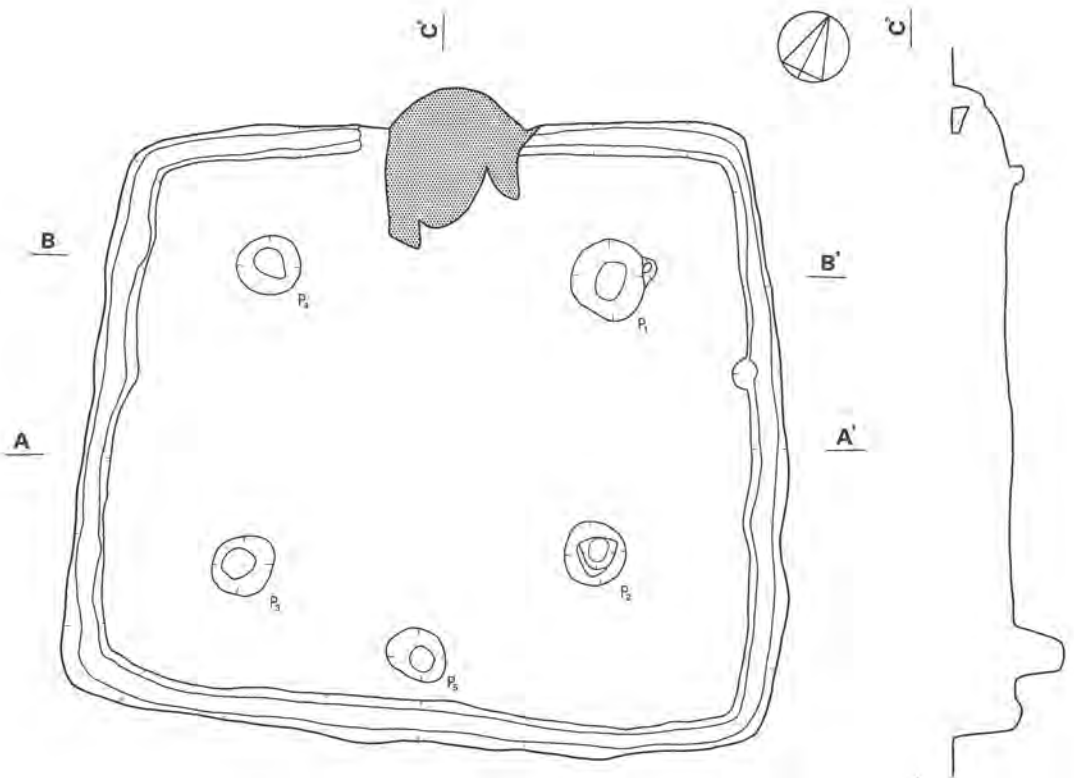
第64号住居跡 (第173・174図)

本跡は、調査区の南東部 N4as区を中心に確認された住居跡で、南西コーナ一部は古墳時代前期の第77号住居跡を掘り込んでいる。本跡の南東7mには第66号住居跡が存在している。

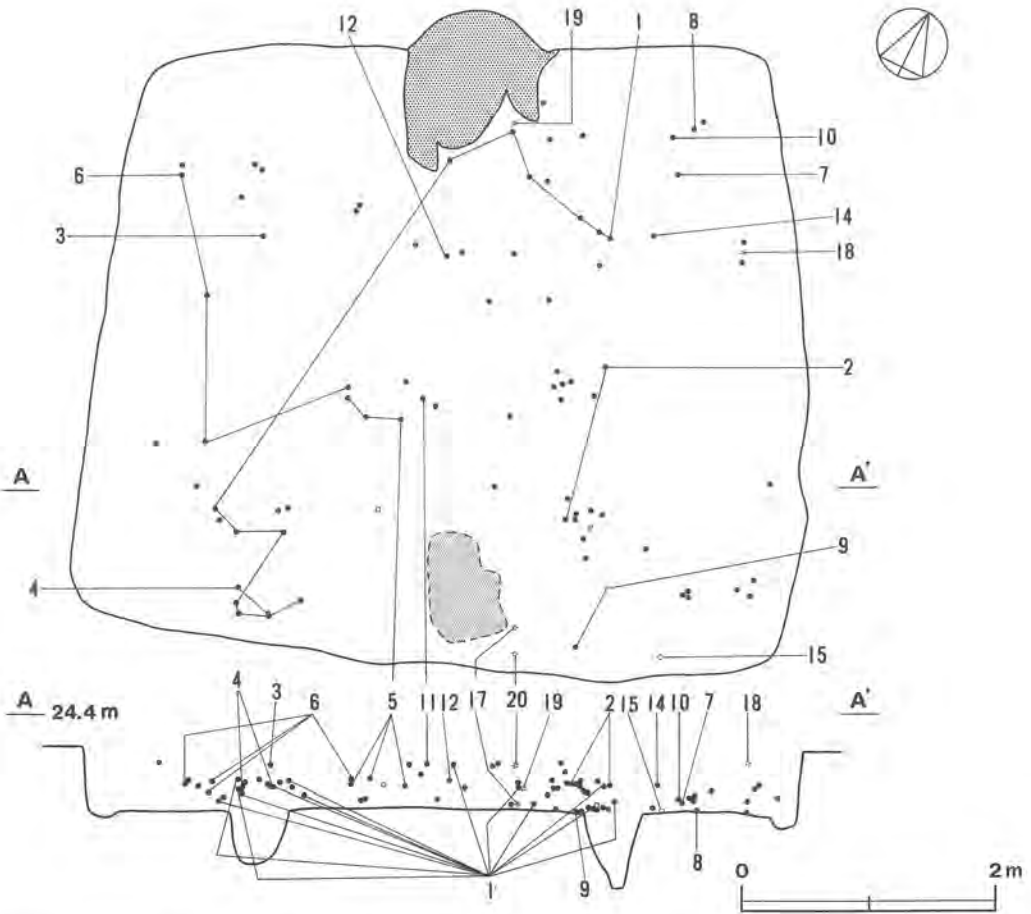
平面形は、長軸5.55m、短軸4.90mで、北辺が南辺より60cmほど短い台形状を呈している。主軸方向はN-25°-Wで、床面積は24.2㎡である。壁はロームで、垂直に立ち上がっている。壁高は40~50cmで、壁下には上幅20cm、深さ5~10cmの壁溝が全周している。床は貼り床で、壁際まで硬く締まり、ほぼ平坦である。ピットは5か所を確認した。規模は上端直径が50~60cm、深さが45~65cmと比較的大規模で、P₁~P₄が支柱穴、P₅が入口部に関する柱穴と思われる。カマドは、北壁の中央部に付設されているが、天井部は崩落し、東袖部もほとんどが欠損している。カマドの全長は110cmで、横幅は120cmと推定される。燃焼部の規模は長さ95cm、幅90cmで、壁面をわずかに掘り込んでいる。煙道部は、奥壁をさらに15cmほど掘り込んで作られている。袖部や天井部、煙道部の一部は砂質の粘土によって構築されカマド内には焼土を多量に含む暗褐色土や赤褐色土が堆積している。火床は、床面から15cmほど掘り込まれ、赤褐色に焼き固まっている。

覆土は、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積している。締まりは弱いが自然堆積層と思われる。

遺物は比較的多く、床面や覆土中から土師器及びその破片464点、須恵器及びその破片63点、土製の紡錘車1点、鉄製品4点が出土している。出土遺物の多くはカマドの東側から南壁にかけて散在しており、カマド東側からは第175・176図の7・8・10の坏(須恵器)や18の鉄鏃が、南壁際からは9の坏(須恵器)や15の紡錘車・20の棒状鉄製品が出土している。また、中央部からは、2の甕(土師器)や5の塊(土師器)、11の高台付坏(須恵器)、12の蓋(須恵器)が出土している。こ



第173図 第64号住居跡・カマド実測図



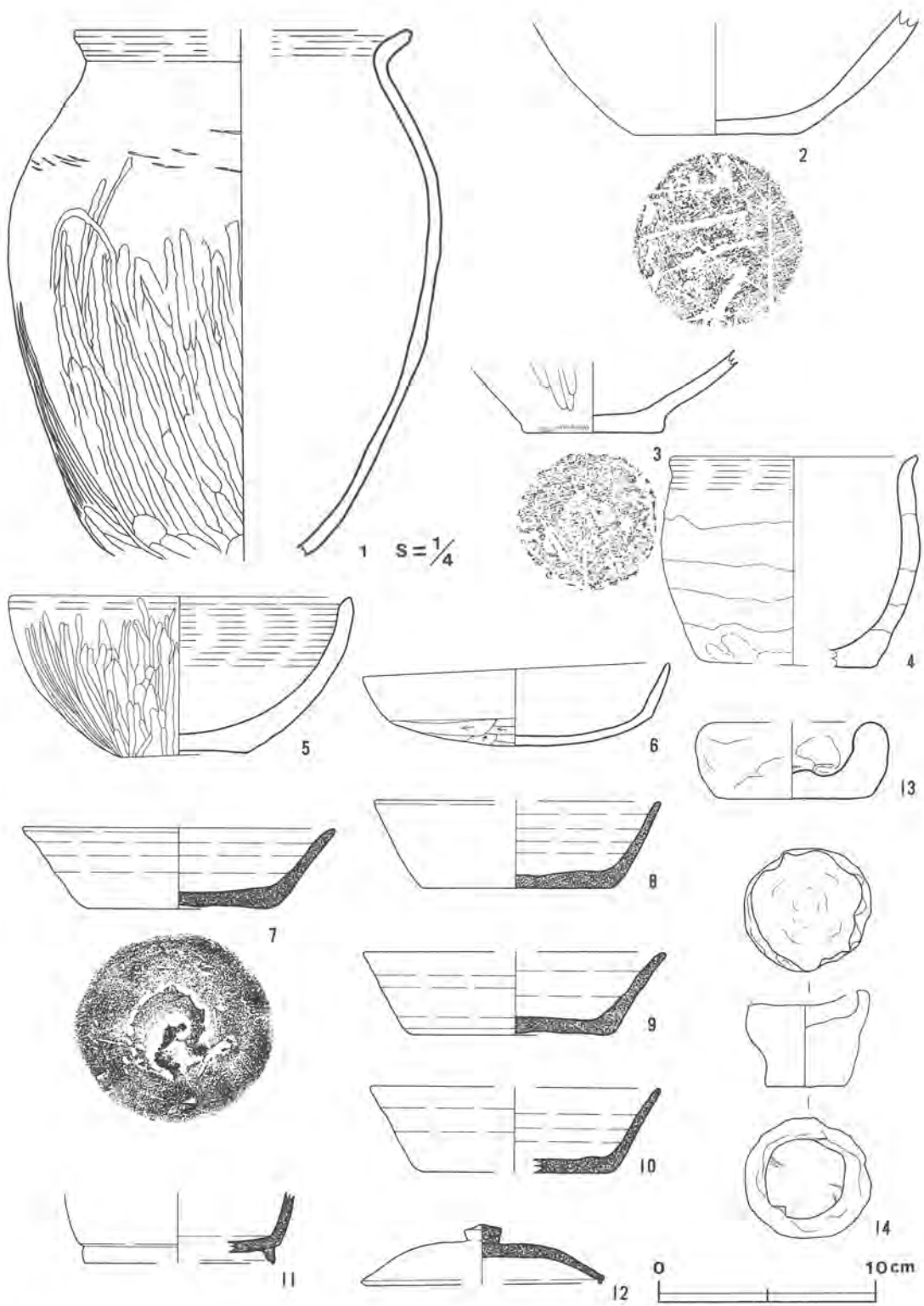
第174図 第64号住居跡出土遺物位置図

これらの遺物の出土層位は、床面から覆土上層にかけての広範囲にわたっているが、土器の形態等に時期差が認められないことから、すべて本跡に伴う遺物と考えられる。

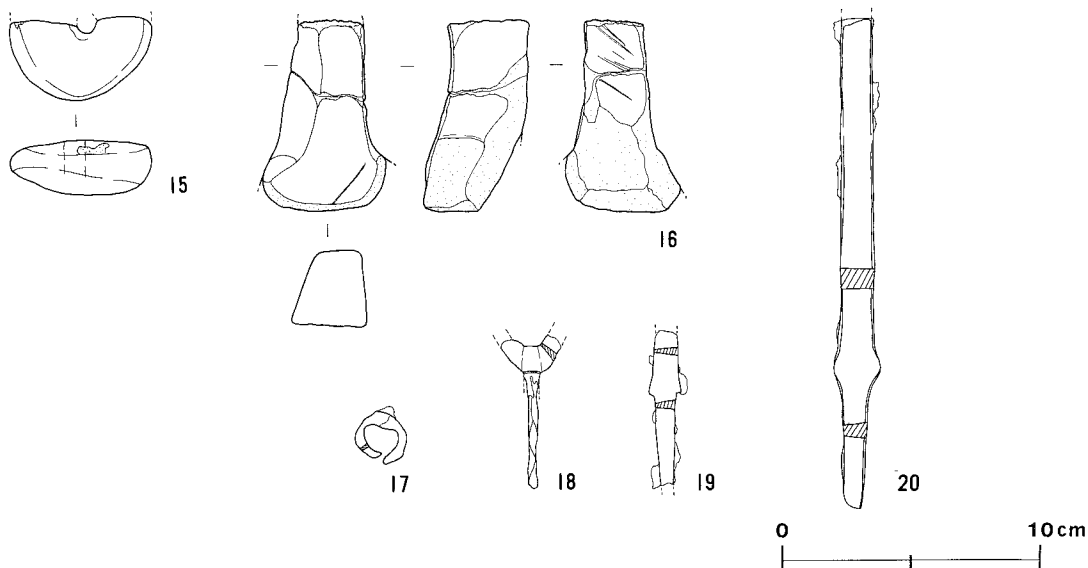
本跡は、遺物や遺構の形態等から8世紀代の住居跡と思われる。

第64号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第175図 1	甕 土師器	A [20.6] B (33.4)	底部欠損。胴部は外傾して立ち上がり、上位で内彎する。胴部最大径を上位に持ち、口縁部は「く」の字状に外傾する。	口縁部内・外面とも横ナデ整形。胴部外面以下は斜位の筥磨き。	砂粒・雲母・砂礫 にふい橙色 普通	80% P326 PL74
2	壺 土師器	B (5.8) C 7.5	胴部下位は内彎気味に大きく開くが、中位以上を欠損。	胴部内・外面とも筥ナデ整形。底部木葉痕。	砂粒・雲母・長石 黒褐色 良好	20% P328



第175図 第64号住居跡出土遺物実測図(1)



第176図 第64号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第175図 3	甕 土師器	B (3.3) C 6.4	底部は引き締まり突出する。胴部下位は内彎気味に開くが、中位以上を欠損。	胴部外面下位は縦位又は斜位の篋磨き。底部木葉痕。	砂粒・雲母・長石にぶい橙色普通	10% P327
4	小型甕 土師器	A 11.4 B 9.8 C [7.5]	胴部は外傾して立ち上がり、上位はやや内傾する。胴部最大径を中位に持つ。口縁部は外反する。	口縁部から頸部にかけての外面は横ナデ整形、胴部外面は粗雑なハデ整形で輪積痕や指圧痕が残る。	砂粒 明赤褐色 普通	30% P330 PL75
5	埴 土師器	A 15.8 B 7.4 C 6.0	上げ底。体部は内彎して開き、口縁部に至る。	口縁部内面内削ぎ、口縁部及び体部内面上半部は横ナデ整形。体部外面は縦位の篋磨き。	砂粒・礫 明赤褐色 普通	85% P329
6	坏 土師器	A 14.3 B 4.0	丸底。体部は内彎気味に開き、口縁部に至る。器高は低い。	口縁部内・外面とも横ナデ整形。底部は不定方向の手持ち篋削り。	スコリア・砂粒 明赤褐色 普通	55% P331 PL83
7	坏 須恵器	A [14.5] B 3.8 C 5.2	底部は上げ底で、厚い。体部は外傾して立ち上がる。口縁部はやや外反し、口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は回転篋切りで、体部との境を面取りする。回転方向は右。	砂粒・雲母・長石 黄灰色 普通	80% P334 PL85
8	坏 須恵器	A [13.3] B 4.1 C 8.8	平底。体部は外傾して開き、口縁部はやや外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は回転篋切り後、不定方向の手持ち篋削り。回転方向は右。	砂粒・長石・雲母 灰色 普通	40% P332
9	坏 須恵器	A 14.0 B 3.9 C 9.1	底部は上げ底で、やや厚い。体部は外傾して立ち上がる。口縁部はわずかに外反し、口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は回転篋切りで、体部との境を面取りする。回転方向は右。	砂粒・雲母 黄灰色 良好	80% P335

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第175図 10	坏 須恵器	A (13.6) B 4.0 C 9.2	平底。体部は外傾して開く。口縁部はわずかに外反し、口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は回転篋切り後、不定方向の手持ち篋削り。回転方向は右。	砂粒・雲母・石英・長石 浅黄色 良好	20% P336
11	高台付坏 須恵器	B (3.3) D 0.8 E (8.8)	底部は丸味を持つ。高台は貼付けで、接地面は尖る。体部は直立気味に立ち上がる。	水挽き成形。底部は回転篋削り。高台は貼り付けで、端部は内削ぎされる。回転方向不明。	砂粒 灰黄色 良好	10% P333 外面に灰軸かかる
12	蓋 須恵器	A (11.0) B 2.8 F 0.7 G 1.8	つまみは柱状で、頂部は突出する。天井部は丸味を持ち、屈曲して口縁部に移行する。口縁部は強く屈曲し、内傾する。	水挽き成形。天井部外面上位は回転篋削り。天井部外面下位と内面はナデ整形。回転方向は右。	砂粒 灰色 良好	70% P337 PL85 内面に灰軸かかる
13	手握土器 (坏形) 土師器	A (9.0) B 3.6 C (7.2)	平底。体部は内彎気味に開き、坏状を呈する。	手握整形で、内・外面に指圧痕を残す。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	20% P339

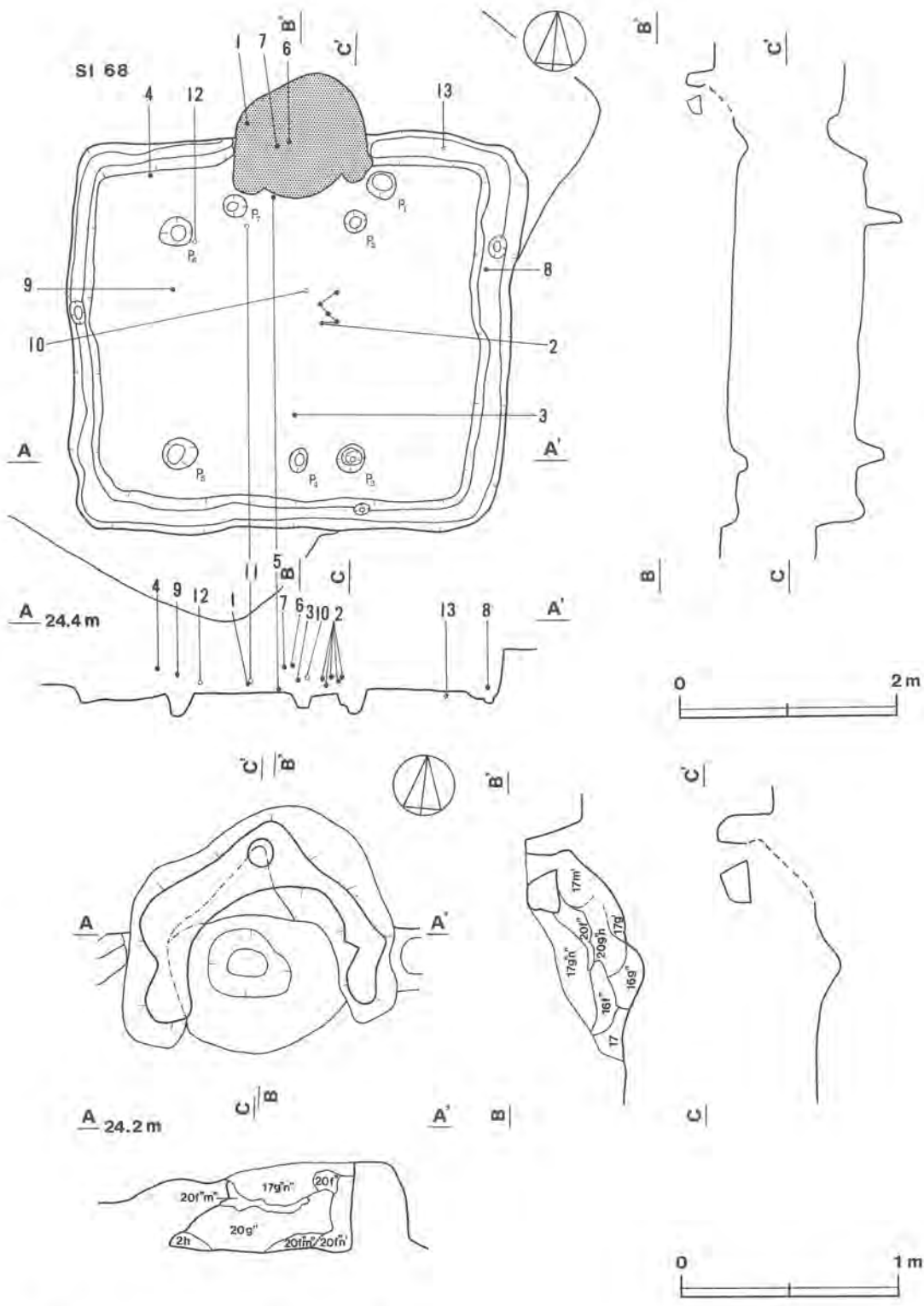
第66号住居跡 (第177図)

本跡は、調査区の南東部 N4c0区を中心に確認された住居跡で、古墳時代前期の第68号住居跡を掘り込んでいる。本跡の北西7mには第64号住居跡が、東7mには第70号住居跡が存在している。

平面形は、長軸4.08m、短軸3.70mの方形状を呈し、主軸方向はN-6°-Wを指している。床面積は13.1m²である。壁は、垂直に立ち上がっているが、南東コーナー部を除き、壁の上位は第68号住居跡の覆土である。壁高は30~40cmで、壁直下には上幅20~30cm、深さ3~5cmの浅い壁溝が全周している。床は、貼り床で壁際まで硬く締まり、ほぼ平坦である。ピットは7か所を確認した。ピットの規模は、上端直径が20~30cm、深さが20~26cmで、方形に配列されるP₂・P₃・P₅・P₆が支柱穴で、南壁際に位置するP₄は入口部に関する柱穴と思われる。P₁とP₇は、規模や配置等から考えて本跡に伴うものとは考えられない。カマドは、北壁の中央部に付設されているが、天井部は崩落している。カマドの全長は110cm、横幅は130cmである。燃焼部の規模は、長さ70cm、幅80cmで、煙道部は、奥面を30cmほど掘り込んで構築されている。カマド全体が砂質の粘土によって構築されているが、これは第68号住居跡の覆土中に本跡のカマドが構築されているため弱さを補うものであったと思われる。カマド内には、焼土や焼土ブロックを多量に含む赤褐色土が堆積し、袖部内面も赤く変色している。火床は、床面から10cmほど掘り込まれ、レンガ状に焼き固まっている。

覆土は、上層に褐色土、下層に黒褐色土が堆積している。自然堆積層である。

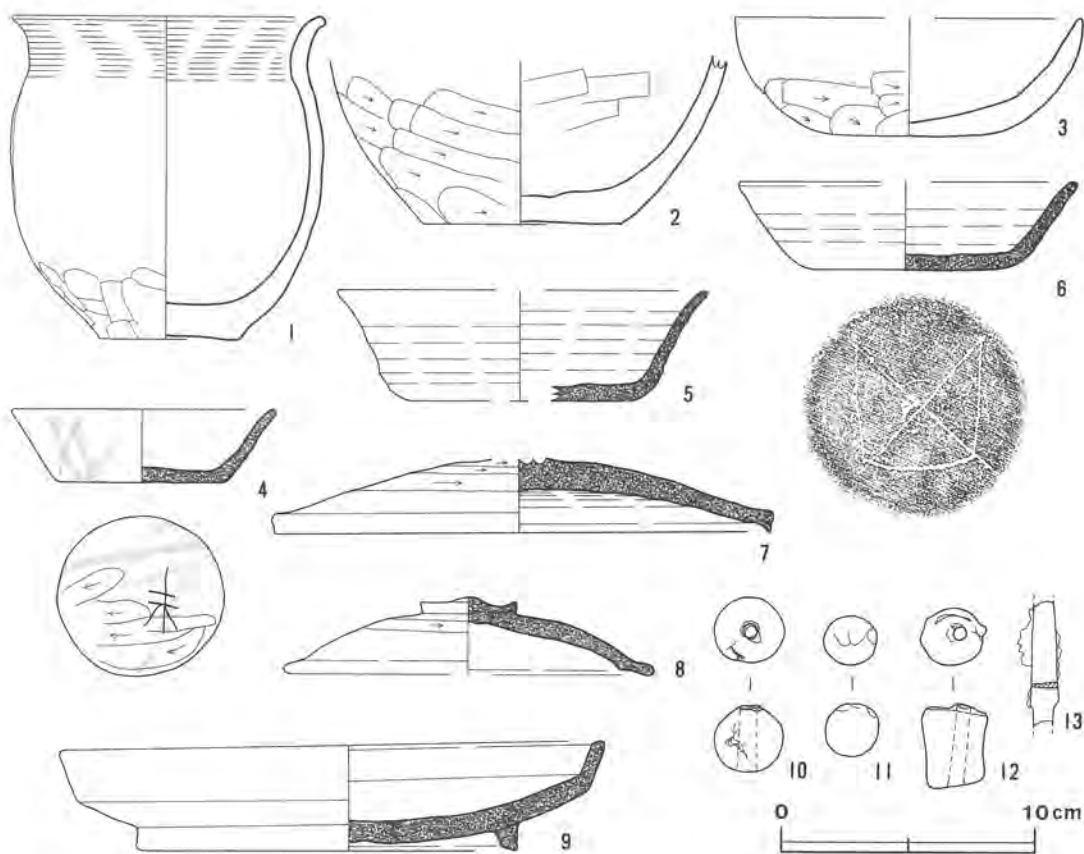
遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片162点、須恵器及びその破片74点、球状土錘2点、管状土錘1点、鉄製品(刀子)1点が、カマドの袖部上から第178図6の坏(須恵器)と7の蓋(須恵器)が出土している。遺物は遺構全体に散乱しており、覆土中から出土した土師器片の中には



第177図 第66号住居跡・カマド実測図

本跡に掘り込まれている第68号住居跡（古墳時代）のものも混入している。本跡に伴う遺物は、カマド前方から5の坏（須恵器）や9の盤（須恵器）、2の甕（土師器）等が、北西コーナー部からは4の坏（須恵器）が出土し、東壁際からは8の蓋（須恵器）が、遺構南側の覆土中層からは3の坏（土師器）が出土している。なお、13の刀子は北東コーナー部の壁溝中から出土したもので、これも本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から8世紀代の住居跡と思われる。



第178図 第66号住居跡出土遺物実測図

第66号住居跡出土土器観察表

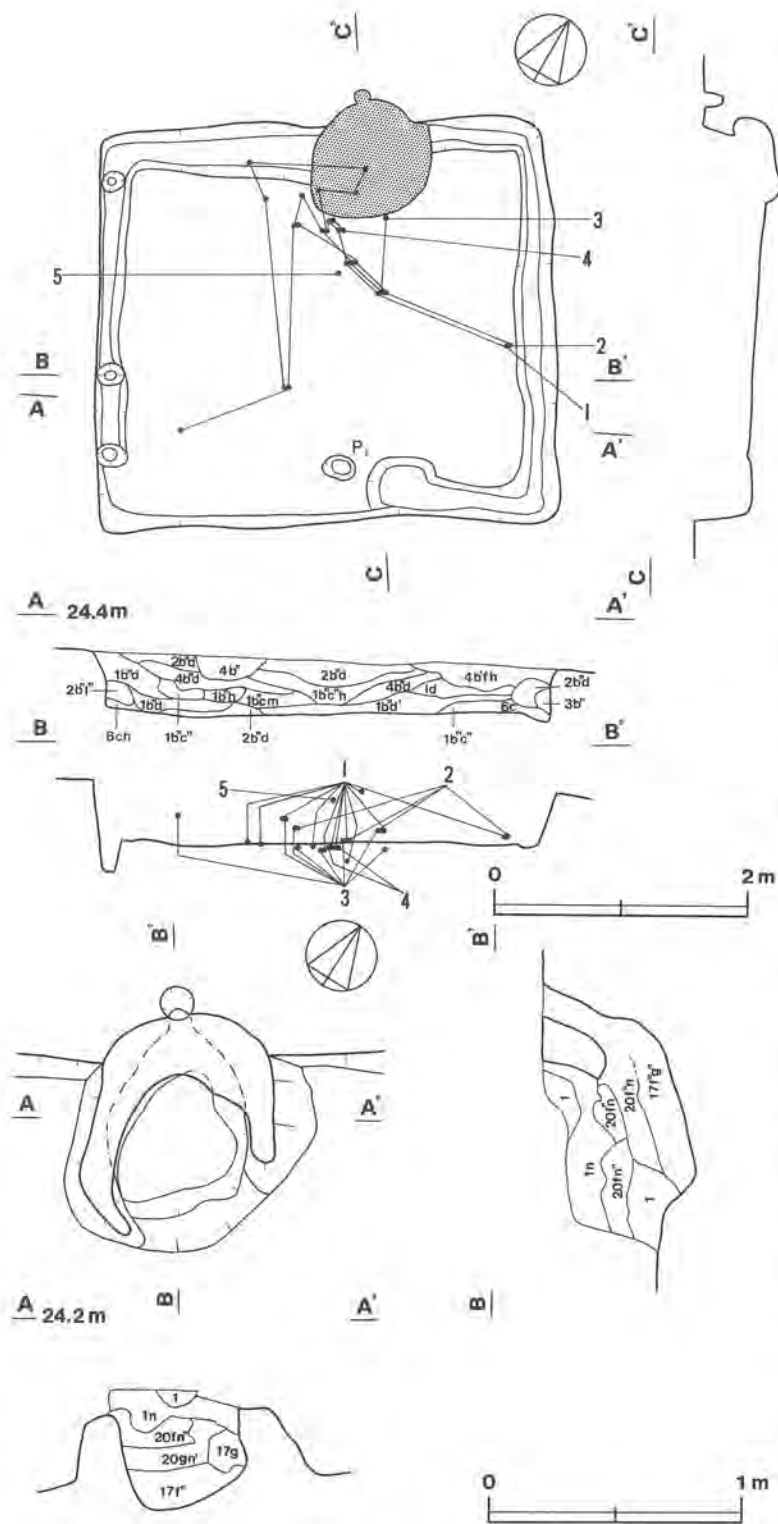
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第178図 1	小型甕 土師器	A 12.2 B 12.8 C 5.5	上げ底。胴部は内湾気味に外傾し、最大径を上位ち持つ。口縁部は外反する。	口縁部から頭部にかけての内・外面は横ナデ整形。胴部外面下位は横位又は斜位の篋削り。	砂粒にぶい・橙色普通	60% P340 PL75

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第178図 2	小型甕 土師器	B (6.5) C 7.8	底部は上げ底。胴部は内彎して立ち上がる。中位以上は欠損。	胴部外面下位は斜位の篋削り。内面は篋ナデ整形。	砂粒・雲母・長石にぶい橙色普通	20% P 341
3	坏 土師器	A 13.8 B 4.7	平底。体部は内彎して開く。口縁部は直立し、口唇部は丸味を帯びる。	口縁部外面と、体部内面は横ナデ整形。体部から底部にかけては、不定方向の手持ち篋削り。	砂粒・石英にぶい橙色普通	50% P 342
4	坏 須恵器	A 10.4 B 2.9 C 6.4	平底。体部は外傾して開き口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は回転篋切り後、一方向の手持ち篋削り。回転方向は不明。	砂粒 灰オリーブ色 良好	100% P 343 PL86 底部に刻字「未」あり。火襷かかる
5	坏 須恵器	A [14.6] B 4.4 C [8.6]	平底。体部下端は丸味を持ち、中位以上は外反して開く。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部内・外面に水挽き痕明瞭に残る。体部と底部との境は篋削り。底部は手持ち篋削り。回転方向は不明。	砂粒 灰黄色 普通	40% P 345 PL85
6	坏 須恵器	A 13.4 B 3.5 C 8.2	平底。底部と体部との境は丸味を持ち、体部は内彎気味に開く。口縁部はやや外反し、口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は回転篋切り後、不定方向の丁寧な篋ナデ整形。	砂粒・スコリアにぶい黄橙色 良好	90% P 344 PL86 刻印「凶」あり
7	蓋 須恵器	A 19.9 B (2.9)	つまみ欠損。天井部は丸味を持ち、段を持って口縁部に移行する。口唇部は端折れ風につまみ出される。	水挽き成形。天井部上位は回転篋削り。回転方向は右。	砂粒にぶい橙色普通	95% P 347 PL85
8	蓋 須恵器	A [14.6] B 3.1 F 0.7 G 3.9	つまみは環状で、中央部は周囲よりやや高まる。天井部は内彎し、軽い段を持ち口縁部に至る。内面にかえりを持つ。	水挽き成形。天井外部上面は回転篋削り。	砂粒・雲母 灰白色 普通	10% P 348
9	高台付盤 須恵器	A 21.6 B 4.4 D 1.2 E 15.1	底部は丸味を持つ。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は丸い。体部は底部から連続して開き、口縁部は体部との境に稜を持ち外傾する。	水挽き成形。体部外面下端から底部にかけては回転篋削り。高台は貼り付けて、端部は内削ぎ。回転方向は右。	砂粒 明褐色 普通	80% P 346 PL86

第70号住居跡 (第179図)

本跡は、調査区の南東端 N5c3区を中心に確認された住居跡で、東コーナー部は第11号溝に接している。本跡の西 7 m には第66号住居跡が、北東11m には 4 区の第13号住居跡が存在している。

平面形は、長軸3.65m、短軸3.20m の方形状を呈し、主軸方向は N-30°-W を指している。床面積は 9.8㎡である。壁はロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は 40~50cm で、南東壁際の一部を除く壁直下には上幅 20cm、深さ 5 cm の壁溝が周回している。溝底は凹凸が激しく、部分的に深さ 20cm ほどのピット状の窪みもみられる。床は、荒掘りをした上に貼り床をしている。床面は緩かに起伏し、壁際まで極めて硬く締まっている。ピットは南東壁際に 1 か所を確認した。



第179図 第70号住居跡・カマド実測図

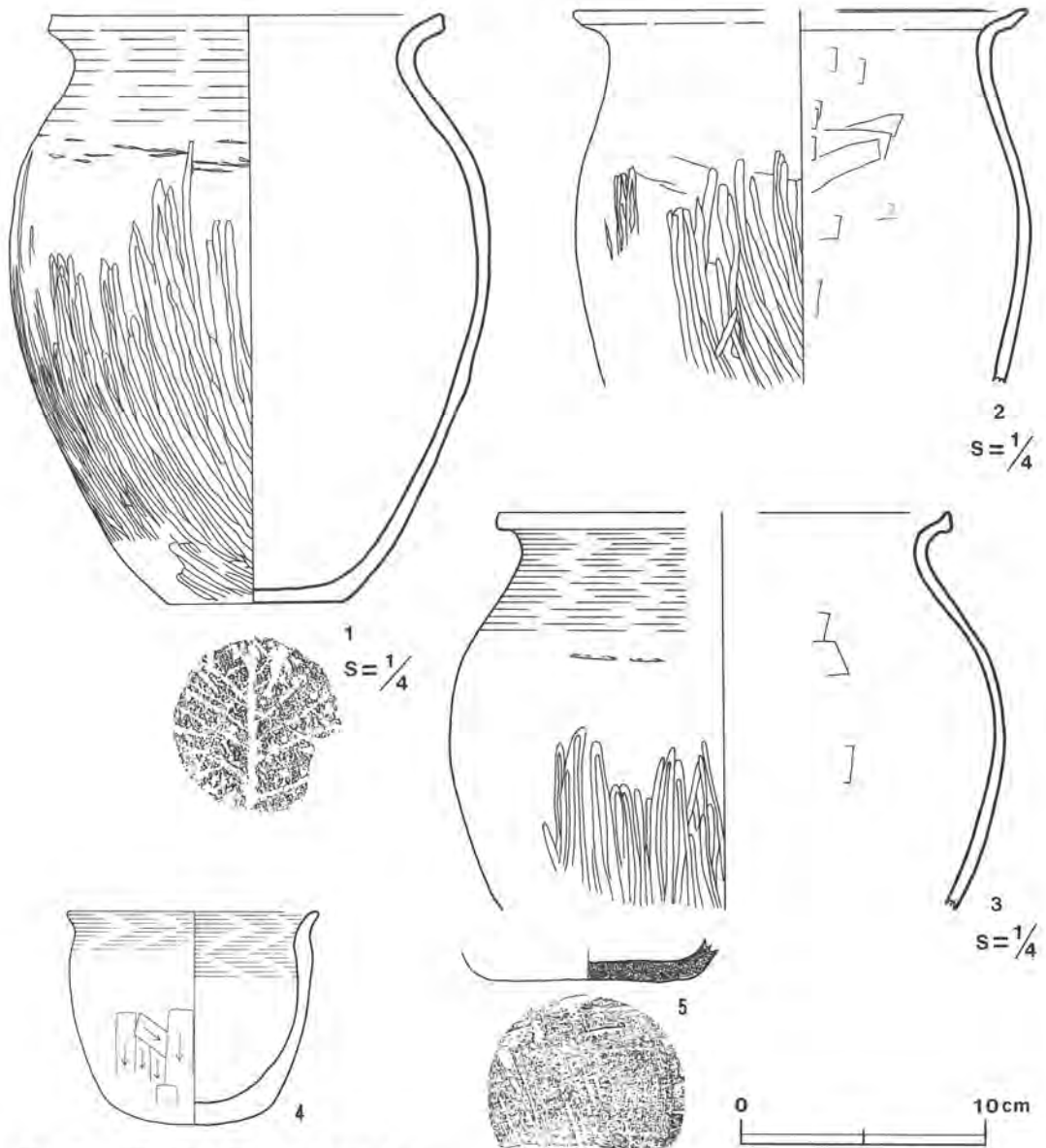
上端直径が20cm、深さが9cmの小規模なもので、配置から入口部に関する柱穴と思われる。カマドは北西壁の北コーナー寄りに付設されているが、天井部は大部分が崩落している。カマドの全長は101cm、横幅は90cmである。燃烧部の規模は、長さ90cm、幅50cmで、壁面を15cmほど奥に掘り込み、煙道部は、奥壁を円筒状に15cm掘り込んで構築されている。袖部・天井部と煙道部の一部は砂質の粘土によって構築され、カマド内の覆土上層には砂質粘土を多量に含む褐色土が、下層には焼土ブロックを多量に含む暗赤褐色土が堆積している。火床は、床面から15cmほど掘り込まれ、レンガ状に焼き固まっている。

覆土は、上層に暗褐色土、下層にロームブロックを含む褐色土が堆積している。締まりは弱い、自然堆積と

思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片77点、須恵器片9点と、カマド内から土師器の甕片7点が出土している。本跡に伴う遺物は、カマド前方の床面に集中しており、第180図1・2・3の甕（土師器）がそれぞれ潰れた状態で出土しているほか、5の坏（須恵器）底部片も出土している。なお、覆土中から出土した土器類のなかには、環状のつまみを持つ須恵器の蓋も含まれている。

本跡は、遺物や遺構の形態等から8世紀代の住居跡と思われる。



第180図 第70号住居跡出土遺物実測図

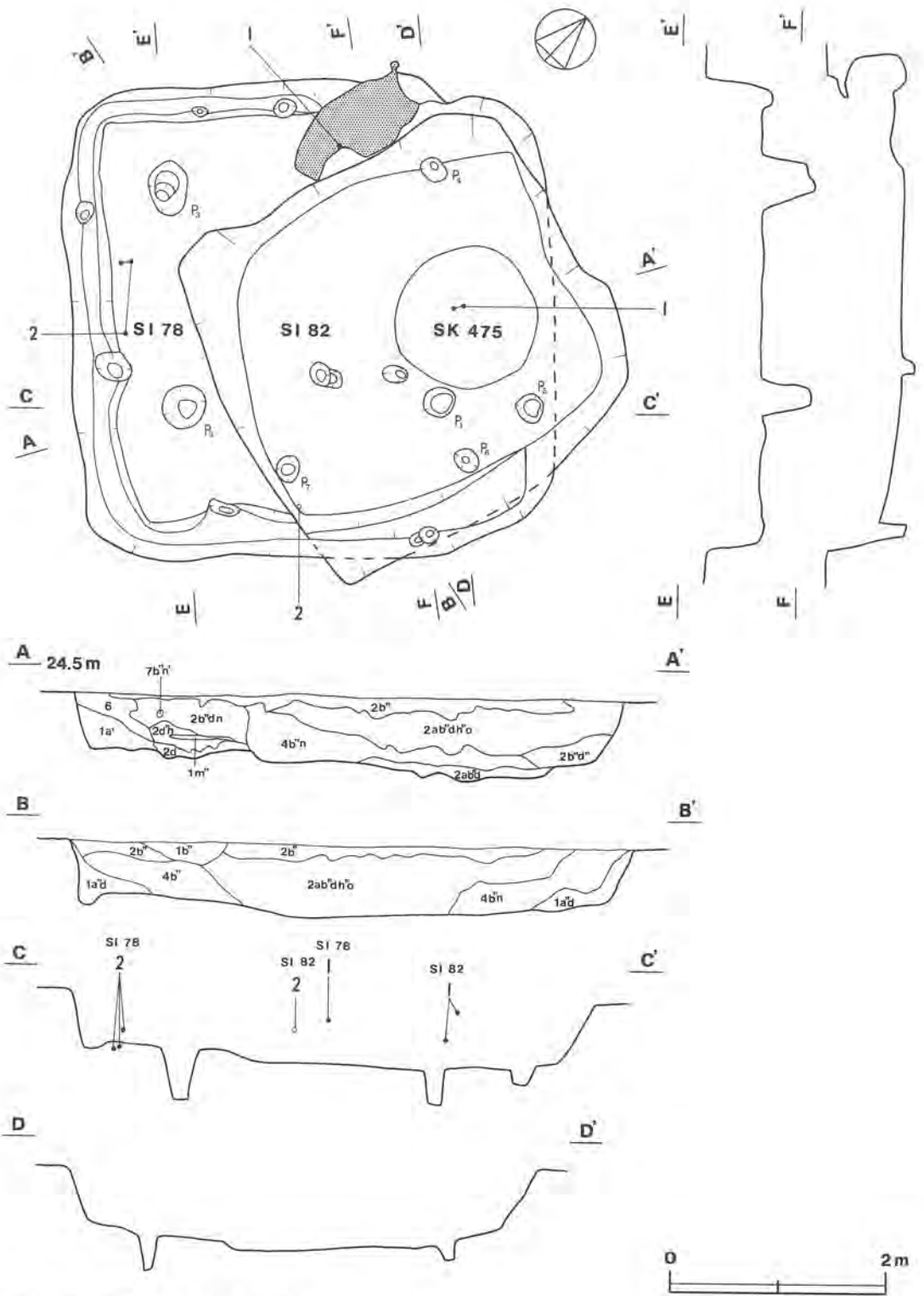
第70号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第180図 1	甕 土師器	A 20.2 B 32.1 C 9.5	胴部は長胴形で、最大径を上位に持つ。口縁部は強く外反し、端部をつまみ上げる。	口縁部から頸部にかけては横ナデ整形。胴部外面上位に筥当て痕、下位は斜位の筥磨き。底部木葉痕。	砂粒・雲母・長石 灰褐色 普通	80% P349 PL75
2	甕 土師器	A 24.4 B (20.5)	胴部は長胴形で、下位を欠損。胴部最大径を上位に持つ。口縁部は外反し、端部を外側につまみ出す。	胴部外面中位以下は斜位の筥磨き。内面は横位の筥ナデ整形。	砂粒・雲母・長石 石英・スコリア 明赤褐色 普通	60% P350 PL75
3	甕 土師器	A (24.4) B (21.5)	胴部は長胴形で、下位を欠損。口縁部は強く外反し、上端をつまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ整形。胴部外面中位以下は縦位の筥磨き、内面は横位の筥ナデ整形。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	20% P351 PL75
4	鉢 土師器	A (10.3) B 8.7 C (6.0)	丸底。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面は横位の横ナデ整形。胴部外面は縦位の筥削り。底面は不定方向の筥削り。	砂粒・スコリア (内)赤褐色(外)暗褐色 良好	70% P353 PL75
5	坏 須恵器	B (1.5) C 8.2	底部片。平底。体部下端は丸味を持つ。	水挽き成形。底部は一定方向の手持ち筥削り。	砂粒・雲母・長石 灰色 良好	10% P352 刻書「大」

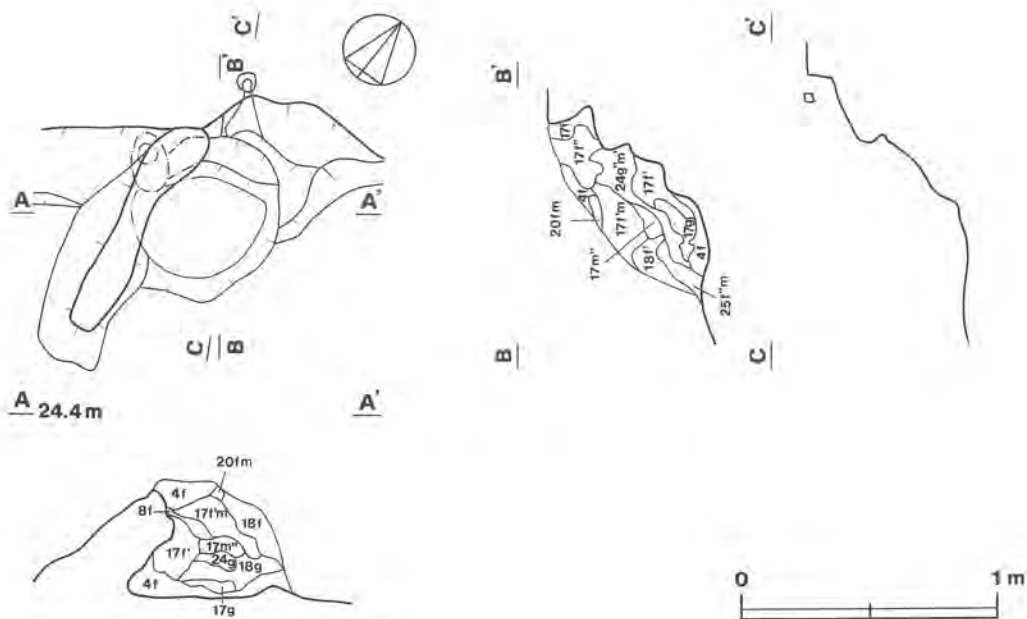
第78号住居跡 (第181・182図)

本跡は、調査区の南東部 N4c7区を中心に確認された住居跡で、東側は9世紀代の第82号住居跡によって床面まで掘り込まれている。本跡の北6 mには第64号住居跡が、東9 mには第66号住居跡が存在している。

平面形は、長軸4.41m、短軸4.30mの方形状を呈し、主軸方向はN-47°-Wを指している。床面積は15.5m²と推定される。北東壁は第82号住居跡の掘り込みによって消失しているが、その他の壁はロームである。壁高は54cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁直下には上幅20~25cm、深さ5~10cmの壁溝が周回している。床も、第82号住居跡によって大部分が掘り込まれ、北西壁側と南西側の一部が残存するだけである。残存する床面はロームで、凹凸が激しい。本跡に伴うと思われるピットはP₁~P₃の3か所を確認した。上端直径は30~40cm、深さは20~45cmで、東・西・南のコーナー部に位置することから支柱穴と思われる。カマドは、北西壁に付設されているが、極端に北コーナー部に寄って位置している。カマドの東半分は第82号住居跡によって削り取られているため、詳細は不明である。カマドの全長は130cmほどで、燃烧部は壁面を掘り込んでいない。煙道部は、奥壁を25cmほど円筒状に掘り込んで構築されている。残存する袖部は、砂質の粘土によって構築され、内壁は赤褐色に変色している。カマド内には、焼土を多量に含む暗赤褐色土が主に堆積しており、火床はレンガ状に焼き固まっている。



第181図 第78・82号住居跡実測図

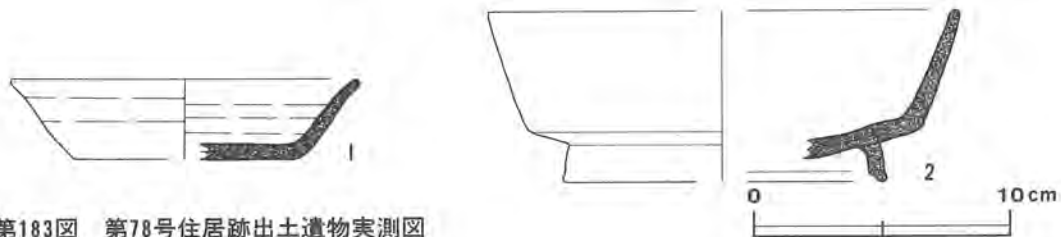


第182図 第78号住居跡カマド実測図

覆土は、上層に暗褐色土、下層に黒褐色土がレンズ状に堆積する自然堆積層であるが、大部分を第82号住居跡によって掘り込まれている。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片593点、須恵器及びその破片149点と、カマド内からは土師器の甕胴部片9点が出土している。出土遺物の大部分は、覆土の上・中層から出土したもので、中には須恵器の蓋や盤の小片も混入している。第183図1の坏(須恵器)はカマド前方の覆土中層から、2の高台付坏(須恵器)は南西壁側の床面から出土したものであり、本跡に伴う可能性が高い。

本跡は、遺物や遺構の形態等から8世紀代の住居跡と思われる。



第183図 第78号住居跡出土遺物実測図

第78号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第183図 1	坏 須恵器	A 13.7 B 3.2 C (8.8)	平底。体部は外傾し、口縁部はわずかに外反する。口唇部やや膨らみ、丸い。	水挽き成形。底部回転筒切り後、手持ち筒削り。回転方向は右。	砂粒 灰色 良好	60% P354

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第183図 2	高台付坏 須恵器	A [18.6] B 6.8 D 1.5 E [12.6]	底部は丸味を持つ。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は尖る。体部下位は底部から連続して開く。中位以上は外傾して立ち上がる。口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は回転篋削り。高台は貼り付けて、下端内面は内削ぎされる。	砂粒 灰色 普通	30% P 355 PL86

第82号住居跡 (第181図)

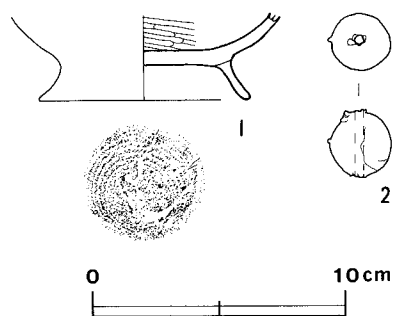
本跡は、調査区の南東部 N4c7 を中心に確認された住居跡で、9世紀代の第78号住居跡と古墳時代前期の第77号住居跡を掘り込んでいる。本跡の北 4 m には第64号住居跡が、西 9 m には第66号住居跡が存在している。

平面形は、一辺が3.6m ほどの方形状を呈し、主軸方向は N-13°-E を指している。床面積は 10.0m² である。北壁と東壁は締まったロームで、西壁と南壁は第68号住居跡の覆土を掘り込んで作られているため検出できなかった。北壁と東壁の壁高は50~60cmで、60~75度の角度で外傾して立ち上がっている。床はロームで、緩やかに起伏しているが、それほど締まってははいない。ピットは4か所確認した。ピットの規模は上端直径が25cm、深さが20~38cmで、配列は不規則であるが、覆土から考えて本跡に伴うものと思われる。炉やカマドは検出されなかった。

覆土は、暗褐色土で締まりは弱い。自然堆積層と思われる。

遺物は極めて少なく、覆土中から土師器片26点、須恵器片14点、球状土錘1点が出土しただけである。出土遺物は遺構全体に散在しているが、出土層位はほとんどが上層から中層にかけてであり、本跡に伴う遺物は少ない。第184図1の高台付塊(土師器)は中央部の、2の球状土錘は南コーナー部のそれぞれ中層から出土したもので、これらは本跡が埋没する過程で流れ込んだものと思われる。

本跡は伴出遺物がないため時期を明確にできないが、1の高台付塊等が覆土中から出土していることや、第78号住居跡を掘り込んでいること等から考えて9~10世紀代の住居跡と推定される。



第184図 第82号住居跡出土遺物実測図

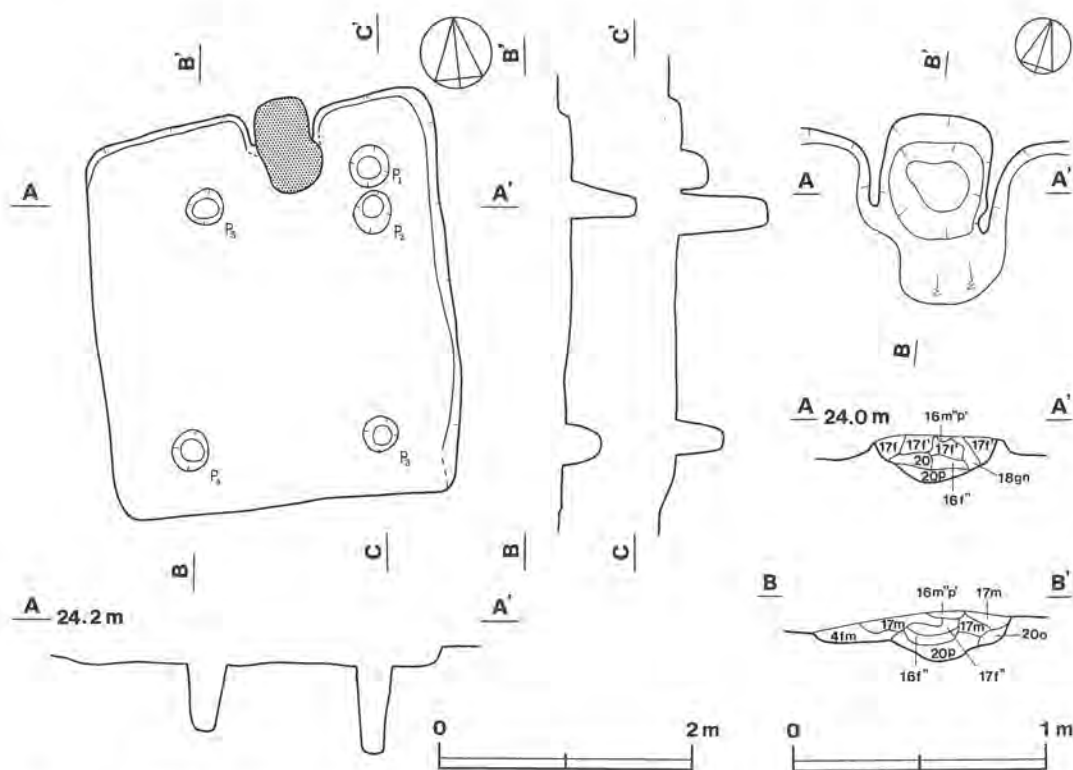
第82号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第184図 1	高台付埴土師器	B (3.3) D 1.4 E (8.4)	底部片。底部はわずかに突出する。高台は高めて、「ハ」の字状に開く。接地面は丸い。体部は内彎して開く。	水挽き成形。体部内面は横位の寛磨き。底部は回転糸切り後、周囲をナズる。高台は貼り付け。	砂粒 黄灰色 普通	15% P356

第84号住居跡 (第185図)

本跡は、調査区の北西部 L2b3区を中心に確認された住居跡で、南側の床面は縄文時代の第441号土坑を掘り込んでいる。本跡の北 2 m には第85号住居跡が、東12m には第11号住居跡が存在している。

平面形は、長軸3.15m、短軸2.85m の方形状を呈し、主軸方向はN-5°-Wを指している。床面積は8.0m²である。本跡は掘り込みが浅いため、西壁と南壁は検出できなかった。北壁と東壁は締まりの弱いロームである。壁高は10~15cmと低く、その傾き等については不明である。床はロームで、カマドの前方は極めて硬く締まっているが、その他は軟弱である。ピットは5か所確認した。P₂~P₅は、上端直径が30~35cm、深さは30~72cmで、方形に配列されていることから支柱



第185図 第84号住居跡・カマド実測図

穴と思われる。P₁は、P₂の北側に接して検出されたが、深さが22cmと浅いため、補助的な柱穴と思われる。カマドは、北壁の中央からわずかに東に寄って位置している。天井部は消失し、袖の一部と、燃焼部の掘り込みのみが残存している。カマドの全長は75cm、横幅は60cmと推定される。燃焼部の掘り込みは、長さ70cm、幅40cmで、壁面をわずかに掘り込んでいる。袖部は砂質の粘土によって構築され、カマド内には焼土を含むにぶい赤褐色土が堆積している。火床は床面から15cmほど掘り込まれているが、あまり焼けていない。

覆土は、締まりのある暗褐色土が薄く堆積しているが、堆積状況等については不明である。

遺物は極めて少なく、覆土中から土師器片4点、須恵器片3点と、カマド内から土師器片5点が出土しただけである。覆土下層から出土した遺物は、内面黒色処理が施された土師器の坏破片や、須恵器の坏口縁部片で、カマド内から出土した土師器片は甕の胴部片である。これらの土器はいずれも小片であるため実測はできなかったが、出土層位等から本跡に伴う遺物と考えられる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から9～10世紀代の住居跡と思われる。

第85号住居跡（第186図）

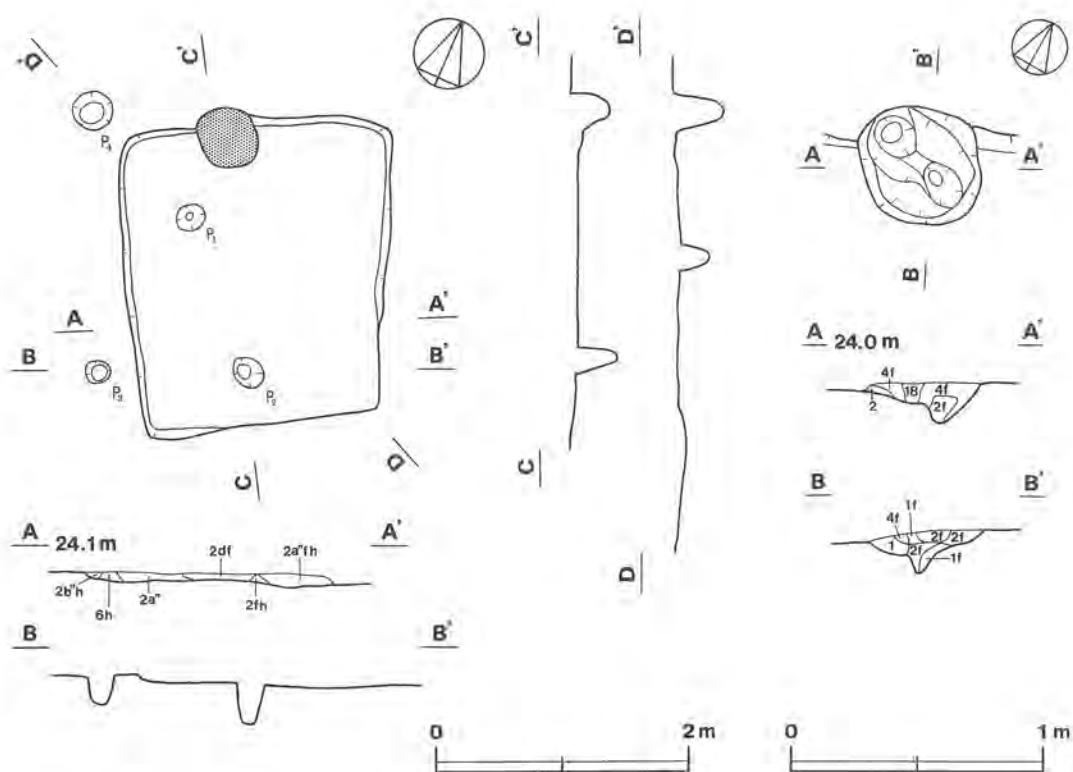
本跡は、調査区の北西L3a3区を中心に確認された住居跡で、床面の一部は縄文時代の第464・465号土坑を掘り込んでいる。本跡の南2mには第84号住居跡が、東14mには第4号住居跡が存在している。

平面形は、長軸2.45m、短軸2.1mの長方形を呈し、主軸方向はN-27°-Wを指している。床面積は4.4m²である。本跡は掘り込みが浅いため、東コーナー部付近の壁面は検出されなかった。その他の壁も、壁高が5cmと浅いため、立ち上がりの状況等については不明である。床面はロームで、中央部以外はあまり締まっていない。ピットは、床面に2か所、屋外に2か所の計4か所を確認した。床面に存在するP₂は、上端直径が25cm、深さが32cmで、南東壁際に位置することから入口部に関する柱穴と思われる。P₁・P₃・P₄の上端直径は20～30cm、深さは25～40cmである。これらのピットも覆土や配置等から本跡に伴う柱穴と考えられる。カマドは北西壁の西コーナー部に寄りに位置しているが、裾部や天井部は全て崩壊しており、直径50cmの円形状の掘り込みが残存するだけである。掘り込みの深さは5cmで、内部には焼土少量を含む暗赤褐色土が堆積している。火床はほとんど焼けていない。

覆土は、締まりのある暗褐色土で、掘り込みが浅いため堆積状況については不明である。

遺物は極めて少なく、覆土中から土師器片4点が出土しただけである。それらの土器片はいずれも小片で、著しく磨滅しているため、本跡に伴うものとは考えられない。

本跡の時期は、遺物から明らかにすることはできなかったが、住居跡の形態や所在する位置等から考えて、第84号住居跡と同様9～10世紀代の住居跡と思われる。

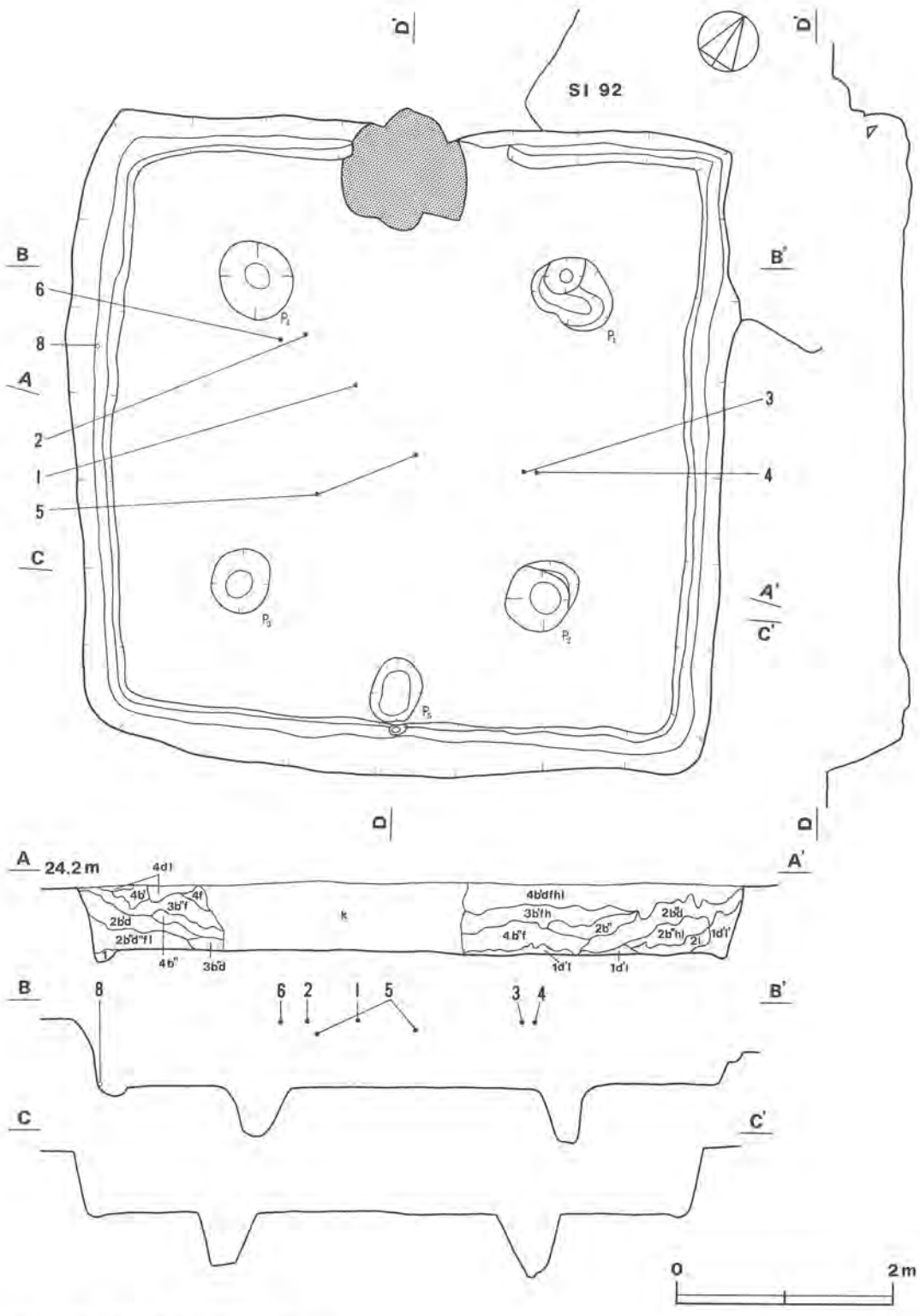


第186図 第85号住居跡・カマド実測図

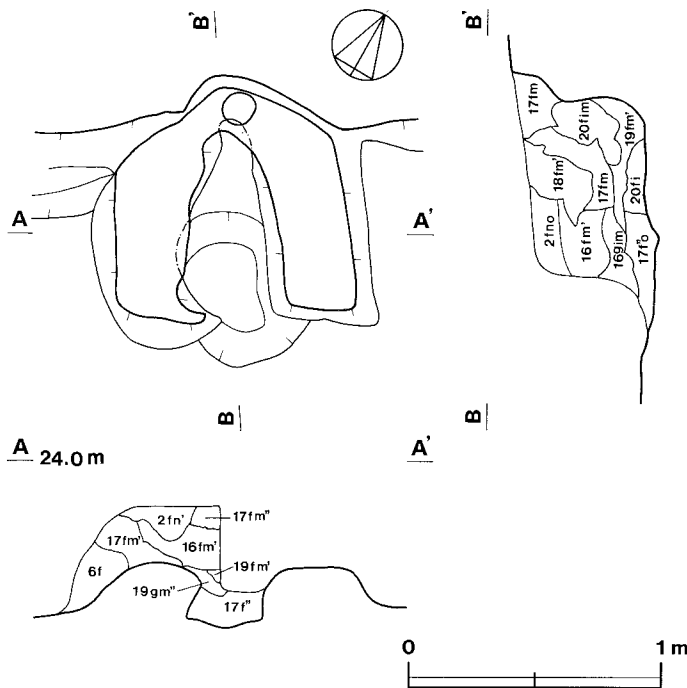
第91号住居跡 (第187・188図)

本跡は、調査区の西部L2j7区を中心に確認された住居跡で、北コーナーの壁面は同時代の第92号住居跡により掘り込まれている。本跡の西26mには第26号住居跡が、南12mには第102号住居跡が存在している。

平面形は、一辺6mの方形状を呈し、主軸方向はN-35°-Wを指している。床面積は30.1m²である。壁は締まったロームで、70度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は60~70cmと深く、壁直下には上幅20cm、深さ5~10cmの壁溝が全周している。床は貼り床で壁際まで硬く締まり、平坦である。ピットは5か所を確認した。P₁~P₄は、上端直径が50~70cm、深さが50~57cmと大規模で方形に配列されていることから支柱穴、P₅は掘り込みが浅く、南壁際に位置することから入口部に関する柱穴と思われる。カマドは、北西壁の中央部に付設されているが、天井部は崩落している。カマドの規模は全長・横幅とも110cmである。燃焼部は長さ95cm、幅35cmで、壁面を掘り込んでいない。煙道部は、燃焼部の最奥から垂直に立ち上がっている。袖部・天井部・煙道部は、それぞれ砂質の粘土によって構築され、カマド内には焼土ブロックを多く含む暗赤褐色土



第187图 第91号住居跡実测图



第188図 第91号住居跡カマド実測図

が南東壁際の下層から、8の球状土錘が南西壁際の下層から出土している。なお、中央部の覆土中から2の高台付坏（土師器）、4・6の坏（土師器）、1の鉢（土師器）、5の坏（須恵器）が出土している。

本跡は、覆土下層から出土した遺物や遺構の形態等から9～10世紀代の住居跡と思われる。

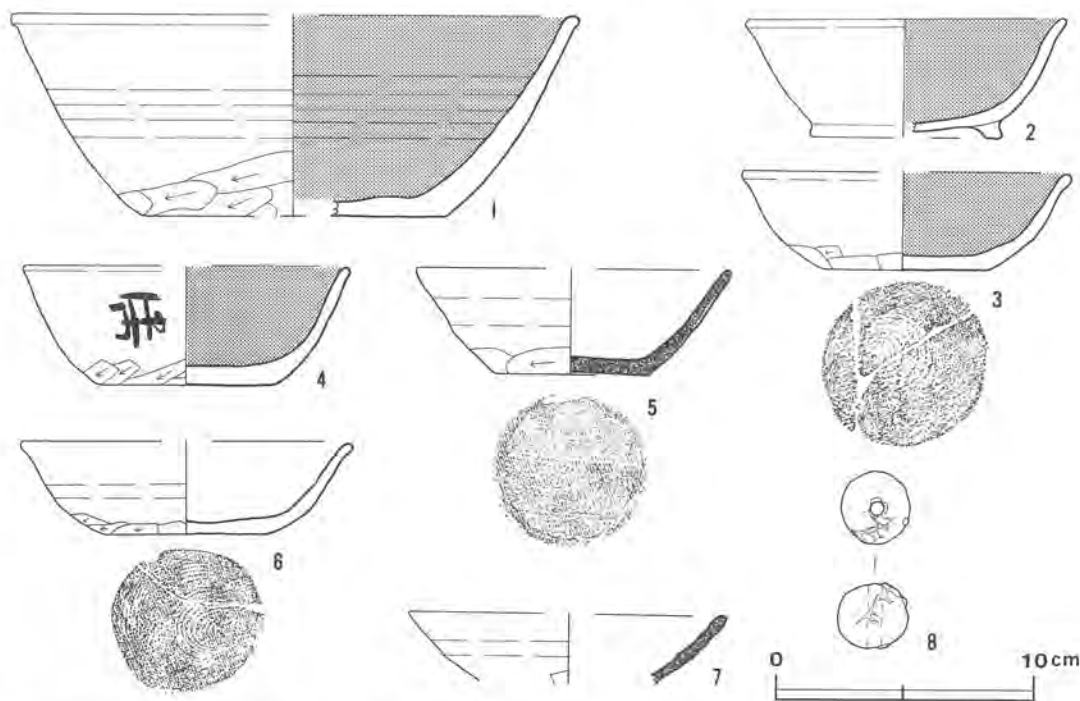
が主に堆積している。火床は床面から5cmほど掘り込まれ、赤く焼き固まっている。

覆土は、上層から黒褐色土、暗褐色土、褐色土がレンズ状に堆積しており、自然堆積層と思われるが、南側は床面直上まで達する大きな攪乱を受けている。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片148点、須恵器及びその破片43点、球状土錘1点、貝（ヤマトシジミ）1点、礫4個が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、第189図7の坏（須恵器）

第91号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第189図 1	鉢 土師器	A [22.4] B 8.0 C [12.0]	平底。体部は内灣気味に開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部下端は篋削り。内面は篋磨き。底部は二方向の手持ち篋削り。	砂粒 にぶい褐色 良好	25% P360 内面黒色処理
2	高台付坏 土師器	A 12.5 B 4.8 D 0.6 E [7.3]	底部は丸味を持つ。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は平坦である。体部は内灣して開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。内面は篋磨き。高台は貼り付け。底部は回転篋削り。	砂粒・スコリア にぶい褐色 良好	85% P357 PL84 内面黒色処理
3	坏 土師器	A [13.0] B 3.9 C 6.4	平底。体部は内灣して開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部下端は篋削り。内面は篋磨き。底部は回転糸切り後、周囲を手持ち篋削り。	砂粒 明赤褐色 普通	30% P358 内面黒色処理



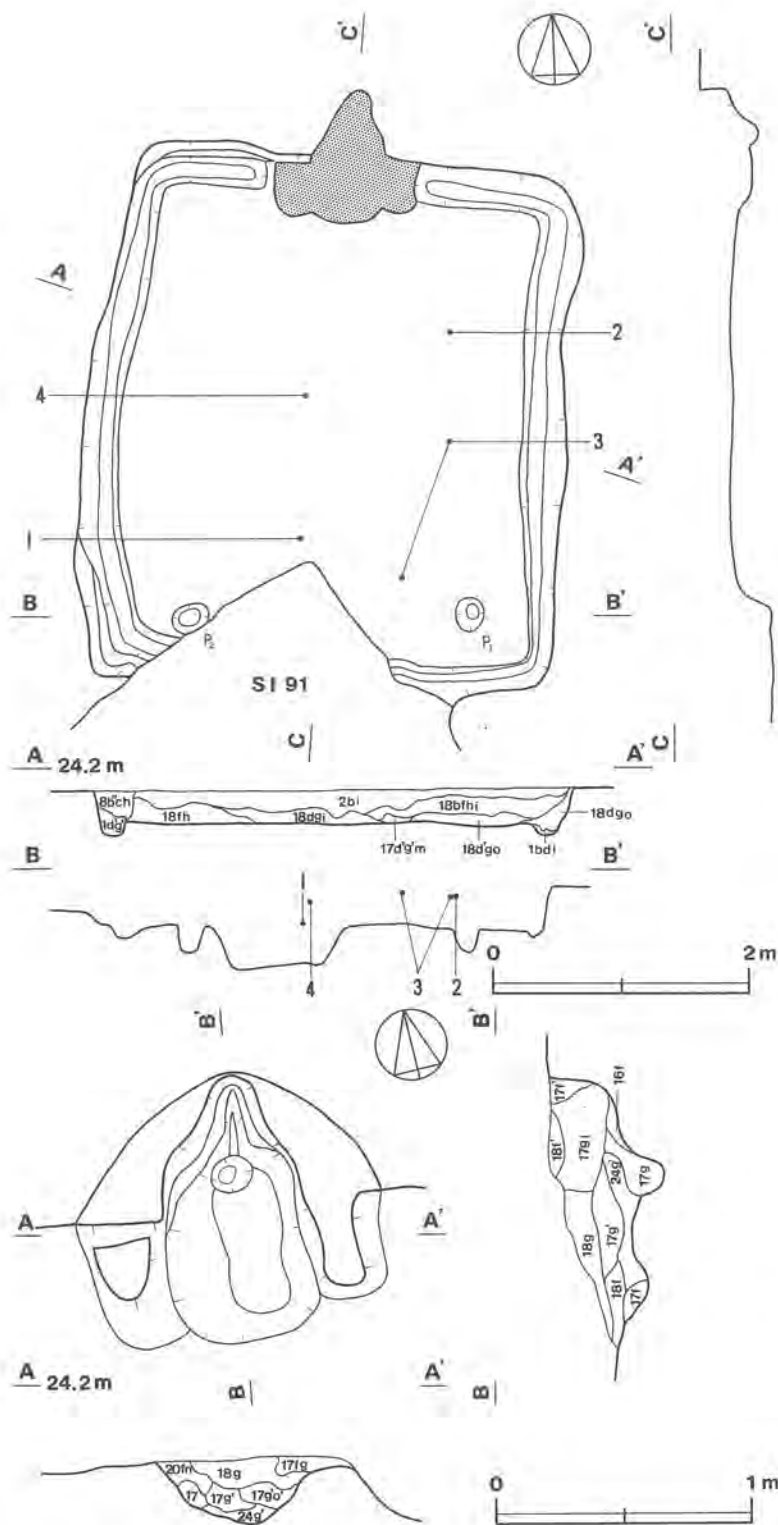
第189図 第91号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第189図 4	土師器 杯	A [13.0] B 4.7 C [7.0]	底部は上げ底。体部は内彎して開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部下端は篋削り。内面は篋磨き。底部は回転糸切りで、体部との境を篋削り。	砂粒 にふい橙色 普通	10% P359 内面黒色処理・ 墨書「幡」か
5	須恵器 杯	A [12.5] B 4.2 C 6.0	上げ底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り。底部は一定方向の手持ち篋削り。	砂粒・石英 にふい赤褐色 普通	60% P362 PL86
6	土師器 杯	A [13.2] B 3.7 C 6.0	底部は上げ底。体部は内彎して開き、口縁部は外反する。口唇部は膨らみ、丸い。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り。底部は回転糸切り後、部分的に手持ち篋削り。	砂粒 橙色 普通	30% P361
7	須恵器 杯	A [12.6] B (2.7)	底部欠損。体部は内彎して開き口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り。	砂粒・雲母 橙色 良好	5% P447

第92号住居跡 (第190図)

本跡は、調査区の西部 L2i7区を中心に確認された住居跡で、南壁の一部は第91号住居跡を掘り込んでいる。本跡の北20mには第6号住居跡が存在している。

平面形は、長軸4.2m、短軸3.8mの方形状を呈し、主軸方向はN-7-Eを指している。床面積は13.6㎡である。壁は締まりの弱いロームで、65度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は



第190図 第92号住居跡・カマド実測図

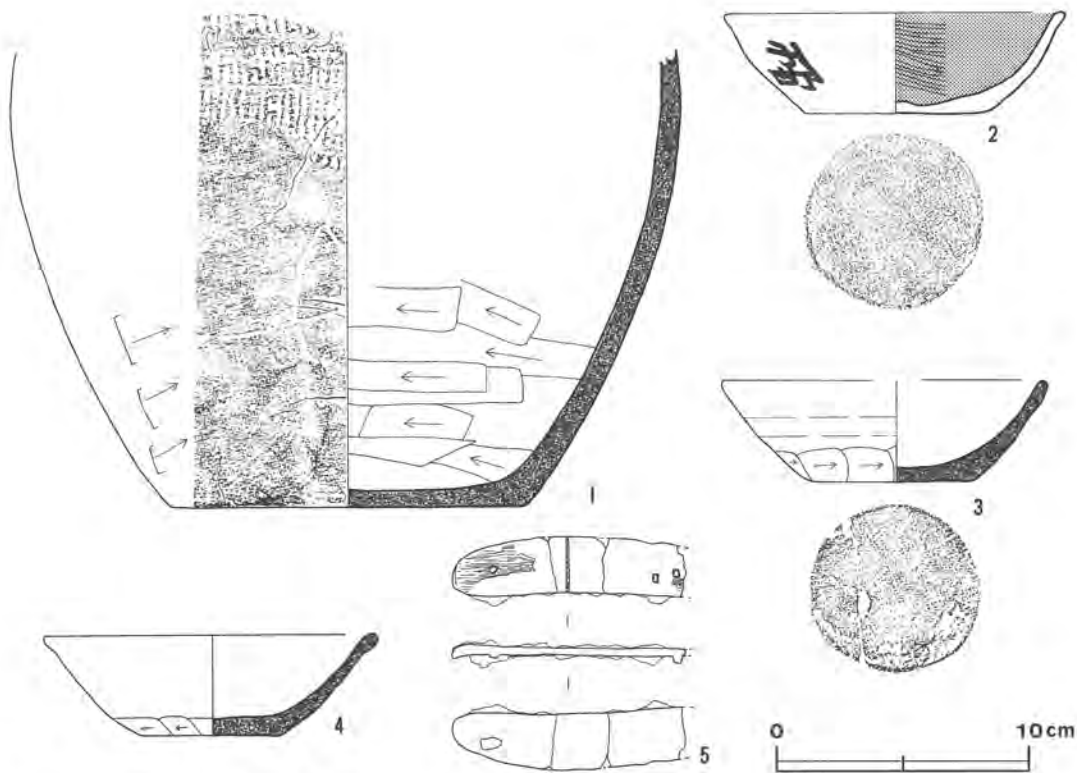
25~40cmで、壁直下には上幅20cm、深さ5~10cmの壁溝が全周している。床は貼り床で、中央部は硬く踏み締まっている。ピットは2か所を確認した。南壁の東端と西端に位置し、規模は上端直径が20cm、深さが20cmである。覆土や配置から、2か所とも本跡に伴う柱穴と思われる。カマドは、北壁の中央部からわずかに西に寄った位置に付設され、天井部や袖部の上部は欠損している。カマドの全長は110cm、横幅は115cmである。燃焼部の規模は長さ75cm、幅50cmで、壁面を25cm奥に掘り込んでいる。煙道部は、奥壁をさらに30cmほど円筒状に掘り込んで構築されている。袖部や煙道部は砂質の粘土によって構築されているが、床面に砂質の粘土が多量に散乱していることから、住居廃絶後間もなく崩壊したものと

と思われる。カマド内には、焼土ブロックを含む暗赤褐色土が多量に堆積している。火床は、床面から10cmほど掘り込まれ、レンガ状に焼き固まっている。

覆土は、上層に暗褐色土、下層に極暗赤褐色土が堆積し、両層ともよく締まっている。自然堆積層と思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片249点、須恵器及びその破片35点、鉄製品1点、礫2点が出土している。本跡に伴う遺物は、遺構の中央部から東部にかけて散在し、中央部の床面には、第191図1の甕（須恵器）と4の坏（須恵器）が、東側には2の坏（土師器）と3の坏（須恵器）が半完形の状態で出土している。北東部からは5の鉄製品が出土している。なお、2の坏体部には「一幡」と読める墨書が記されている。

本跡は、遺物や遺構の形態等から9～10世紀代の住居跡と思われる。



第191図 第92号住居跡出土遺物実測図

第92号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第191図 1	甕 須恵器	B (18.0) C 14.1	平底。胴部は内彎気味に外傾し、膨らみを持つが上位を欠損。	胴部外面中位は平行叩き目。下位は斜位又は横位の篋削り。胴部内面は篋ナデ整形。	砂粒・雲母 赤灰色 良好	40% P364 PL75

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第191図 2	坏 土師器	A 13.6 B 4.0 C 7.0	平底。体部は内彎気味に開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部下端は篋削り。内面は篋磨き。底部は一定方向の手持ち篋削り。	砂粒・雲母・ス コリア にふい黄橙色 良好	80% P363 PL84 内面黒色処理・体 部に墨書「一幡」
3	坏 須恵器	A 13.0 B 4.0 C 6.4	上げ底。体部は内彎気味に開き、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り。底部は二方向の手持ち篋削り。	砂粒 にふい黄色 普通	75% P365 PL86
4	坏 須恵器	A 13.4 B 4.0 C 5.6	平底。体部は内彎して開き、口縁部は外反する。口唇部は膨らみ、丸い。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り。底部は一定方向の手持ち篋削り。	砂粒・長石 黄灰色 良好	60% P366

第93号住居跡 (第192図)

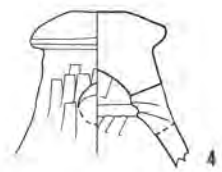
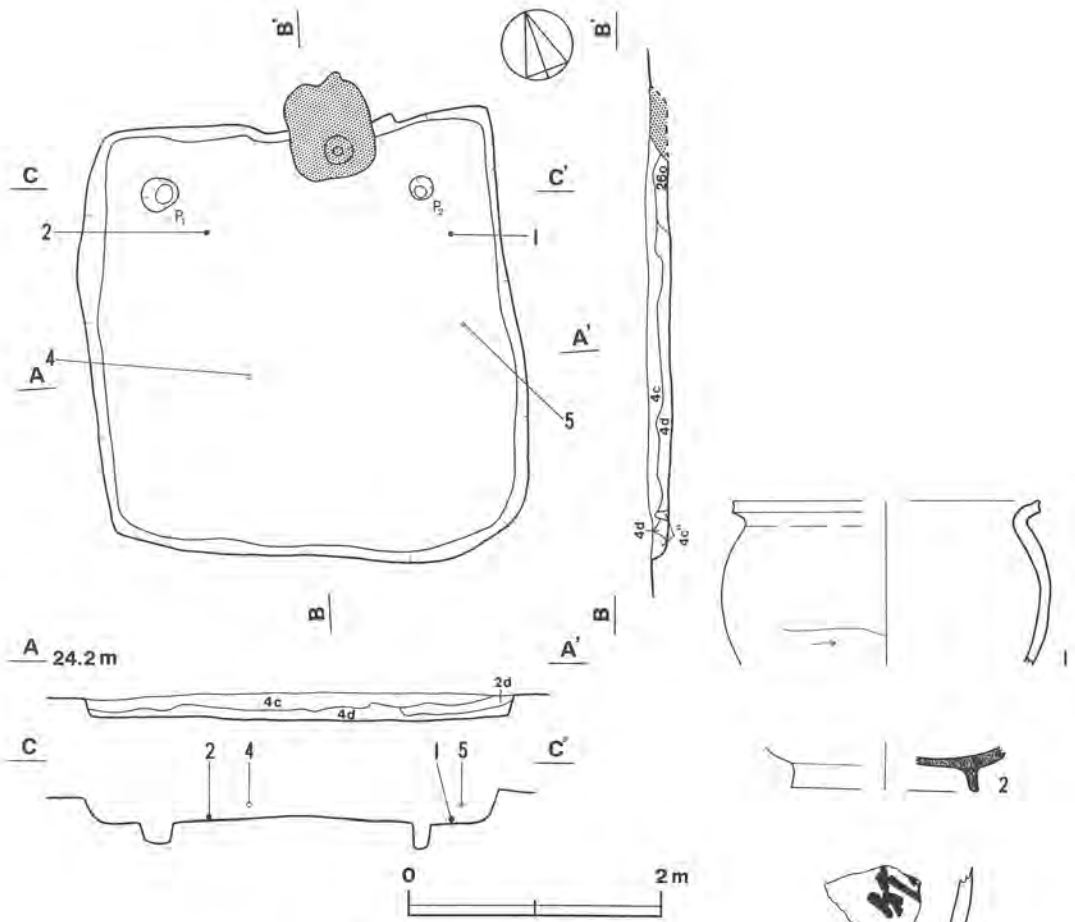
本跡は、調査区の南西部 M2b4区を中心に確認された住居跡で、南東コーナ部は縄文時代中期の第105号住居跡を掘り込んでいる。本跡の北東10m には第91号住居跡が、北西10m には第26号住居跡が存在している。

平面形は、一辺3.4m ほどの方形状を呈し、主軸方向はN-18°-Eを指している。床面積は10m²である。壁は締まりの弱いロームで、竹根による攪乱を受けている。壁面は50~75度の角度で立ち上がり、壁高は10~15cmと低い。床面も竹根の攪乱を受け、壁際は軟弱であるが、その他は硬く踏み締まっている。ピットは、北壁際の東端と西端に2か所確認され、上端直径はP₁が30cm、P₂が18cmで、深さは両方とも20cmである。覆土や配置から、2か所とも本跡に伴う柱穴と思われる。カマドは、北壁に付設されているが、やや東側に片寄って位置している。袖部・天井部とも消失し、燃焼部の掘り込みだけが残存している。カマドの全長は85cmと推定される。燃焼部は長さ73cm、幅65cmで、壁面を40cm奥に掘り込み、煙道部は奥壁をわずかに掘り窪めて構築されている。カマド内には、焼土ブロックを含む暗赤色土が堆積しており、砂質の粘土が多量に含まれていることから、カマドは砂質の粘土で構築されていたと思われる。火床は、床面から13cmほど掘り込まれ、あまり焼けてはいない。

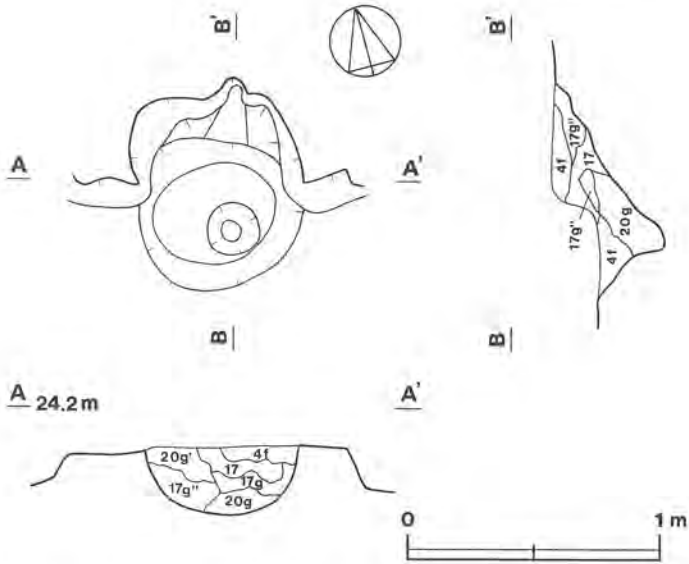
覆土は黒褐色土で、上層はやや締まりが弱い。土層に乱れがないことから自然堆積層と思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器片205点、須恵器片6点、支脚1点、鉄製品(刀子)1点が出土している。本跡に伴う遺物は、遺構の全体に散在しているが、実測可能なものは、東側の床面から第193図1の甕(土師器)の破片と5の刀子が、北部の床面から2の高台付坏(須恵器)の破片が、中央部の覆土下層から4の支脚断片が出土しただけである。なお、3の墨書土器片は、南側の覆土中から出土したが、大半を欠損しているため解読は不可能であった。

本跡は、遺物や遺構の形態等から9~10世紀代の住居跡と思われる。



第193図 第93号住居跡
出土遺物実測図



第192図 第93号住居跡・カマド実測図

第93号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第193図 1	甕 土師器	A (12.7) B (6.8)	胴部下位欠損。胴部は膨らみを持つ。口縁部は強く外反し、端部をつまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ整形。胴部外面中位は篋削り。	砂粒・雲母 暗赤褐色 普通	10% P367
2	高台付坏 須恵器	B (1.9) D 1.0 E (7.8)	底部片。平底。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は尖る。	水挽き成形。高台は貼り付けで下端を内削ぎする。底面は回転篋削り。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	10% P368
3	坏 土師器	B (3.3)	体部片。	水挽き成形。	砂粒・雲母・長石 暗灰黄色 普通	5% P420 PL94 体部に墨書「惣」か

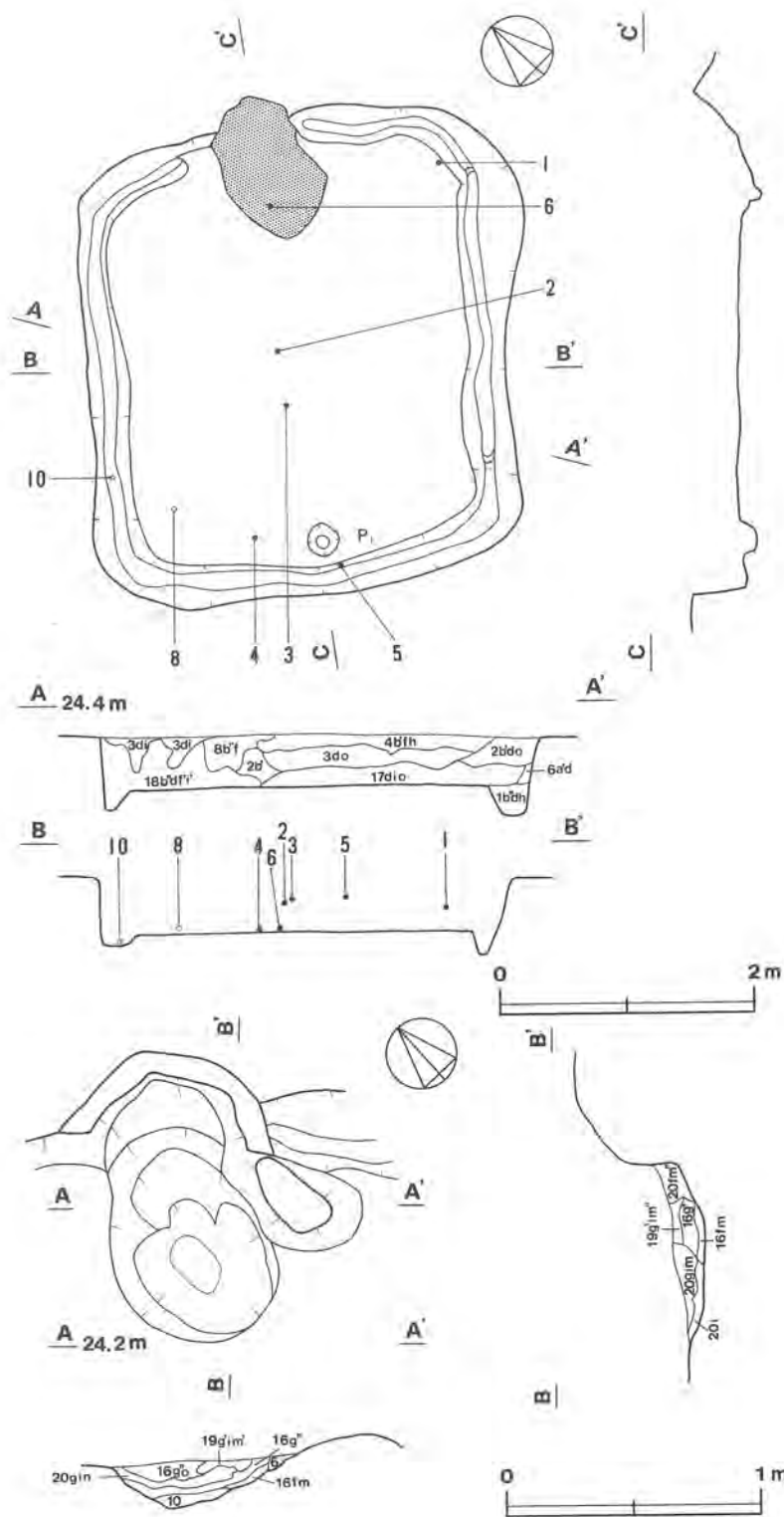
第97号住居跡 (第194図)

本跡は、調査区の南部M3e3区を中心に確認された住居跡で、南西壁の一部は第487号土坑によって掘り込まれている。本跡の西6mには第101号住居跡が、南東12mには第45号住居跡が存在している。

平面形は、長軸3.85m、短軸3.30mの長方形状を呈し、主軸方向はN-41°-Eを指している。床面積は10.0m²である。壁は締まりのあるロームで、垂直に立ち上がっている。壁高は40cmで、壁直下には上幅20cm、深さ5~10cmの壁溝が全周している。床は貼り床で、壁際まで硬く締まっているが、カマドの前方は踏み締まりも加わり一層硬化している。床面は平坦である。ピットは南西壁際に1か所を確認した。上端直径は25cm、深さは13cmで、配置等から入口部に関する柱穴と思われる。カマドは、北東壁に付設されているが、やや北コーナー部に寄って位置し、天井部や袖部の上部は崩壊している。カマドの全長は120cmで、横幅は130cmほどあったものと推定され、主軸方向はN-29°-Eを指している。燃焼部の規模は長さ105cm、幅60cmで、壁面を15cm奥に掘り込み、煙道部は奥壁をわずかに掘り窪めて構築されている。袖部は砂質の粘土によって構築され、カマド内には焼土ブロックや焼けた砂質の粘土等を含む赤褐色土が主に堆積している。火床は、床面から10cmほど掘り込まれ、レンガ状に焼き固まっている。

覆土は、上層に黒褐色土、中層に極暗褐色土、下層に暗赤褐色土がレンズ状に堆積している。自然堆積層であるが、床面に焼土が多量に散乱することから、本跡は居住期間中あるいは廃絶後間もなく焼失したものと思われる。

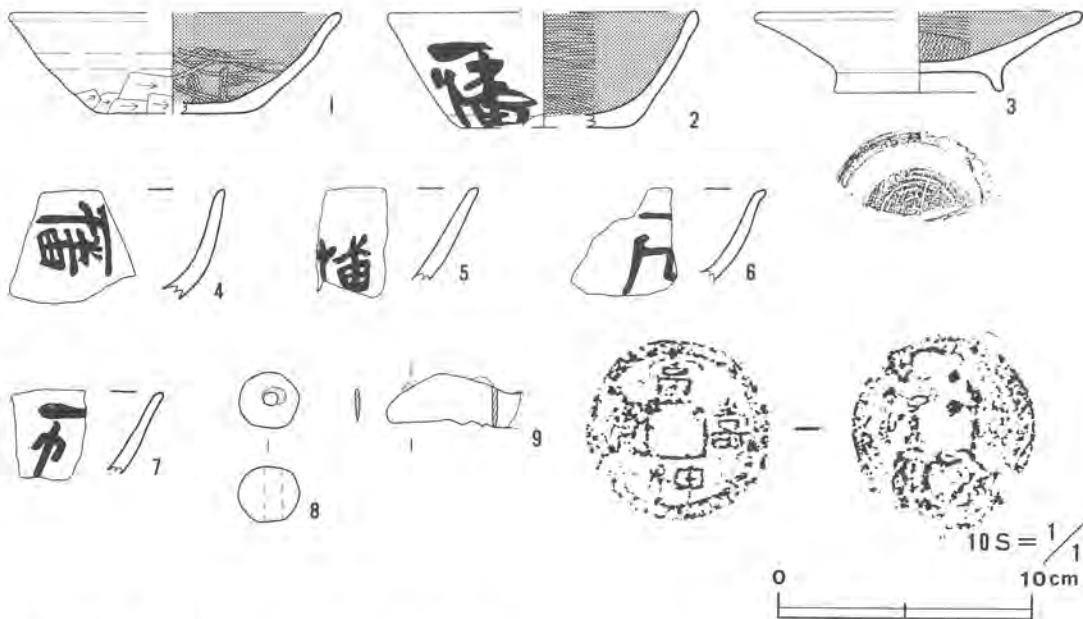
遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片594点、須恵器片87点、球状土錘1点、鉄製品(鎌か)1点、古銭(富壽神宝)1点と、カマド内から土師器片3点、須恵器片1点が出土している。本跡に伴う遺物は遺構の中央部から南西部にかけて集中しており、出土した土師器片の中には第195図2・4~7のように「一幡」又は「幡」の墨書を持つ坏の破片5点が含まれている。4の



坏（土師器）と8の球状土錘は南西壁側の床面から、10の「富壽神宝」と9の鉄製品（鎌）は北西側の壁溝中から互いに密着して出土しており、これらは本跡に伴う可能性が極めて高い。東コーナー部から出土した1の坏（土師器）や、中央部から出土した3の高台付皿（土師器）などはいずれも中層から出土したものであるが、同層位には、床面から出土したと同様の「幡」字の墨書を持つ2・5の坏（土師器）破片が出土していることから、これらも本跡に伴う遺物と判断した。

本跡は、伴出した古銭「富壽神宝」（弘仁9年初鑄）の鑄造年代や、土器・遺構の特徴等から9～10世紀代の住居跡と思われる。

第194図 第97号住居跡・カマド実測図



第195図 第97号住居跡出土遺物実測図

第97号住居跡出土土器観察表

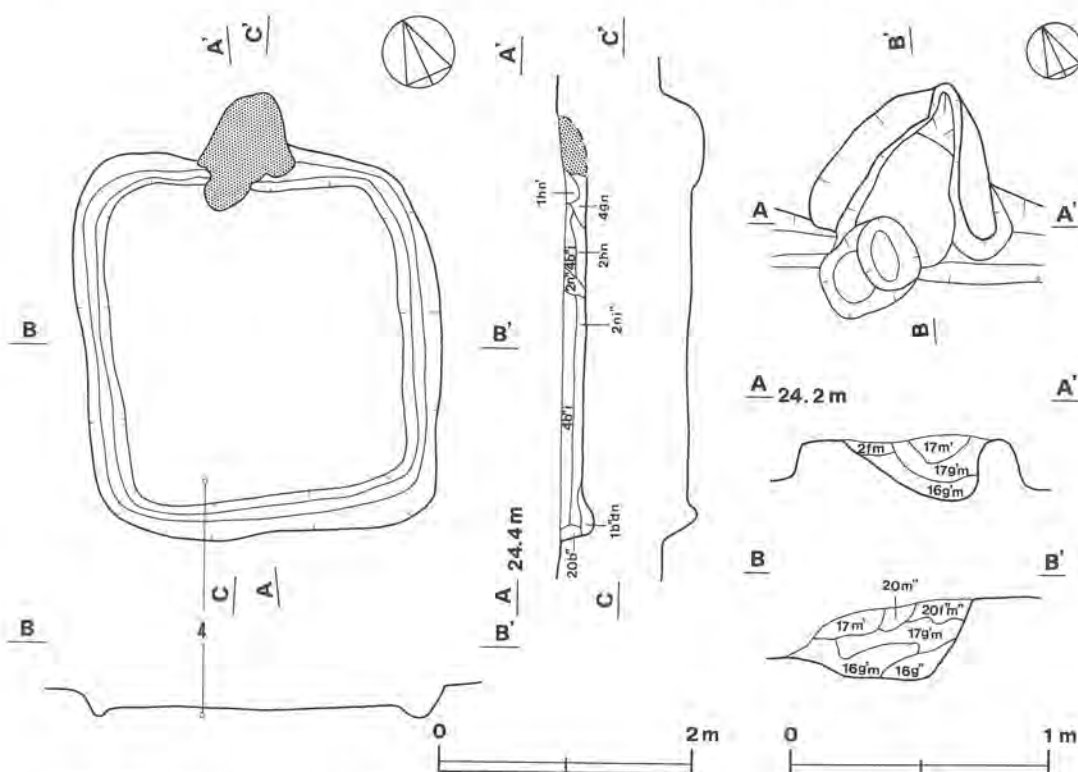
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第195図 1	坏 土師器	A [13.2] B 4.0 C [6.0]	平底。体部は内彎して開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部下端は篋削り。内面は篋磨き。底部は手持ち篋削り。	砂粒 にぶい褐色 良好	40% P369 内面黒色処理
2	坏 土師器	A [12.2] B 4.6 C [6.6]	平底。体部は内彎して開き、口縁部はわずかに外反する。口唇部は膨らみ、丸い。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り。内面は篋磨き。底部は手持ち篋削り。	砂粒 にぶい橙色 良好	20% P421 内面黒色処理・ 墨書「一幡」
3	高台付皿 土師器	A [12.9] B 3.2 D 0.9 E [5.8]	平底。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は丸い。体部は外傾して大きく開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。内面は篋磨き。高台は貼り付け。底部は回転篋削り。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	50% P370 PL85 内面黒色処理・ 底部に刻書「人」
4	坏 土師器	B (4.2)	体部片。体部は内彎して開き、口縁部はわずかに外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部下端篋削り。内面は篋磨き。	砂粒・スコリア 浅黄橙色 良好	10% P423 PL94 内面黒色処理・ 墨書「一幡」
5	坏 土師器	B (3.6)	口縁部片。口縁部は体部から連続して開く。口唇部は丸い。	水挽き成形。内面篋磨き。	砂粒・スコリア 善母 にぶい橙色 良好	5% P424 内面黒色処理・ 墨書「幡」
6	坏 土師器	B (3.7)	体部片。体部は内彎して開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。	砂粒 淡黄色 普通	10% P425 内面黒色処理・ 体部に墨書文字 不明「一幡」か

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第196図 7	坏 土師器	B (3.2)	口縁部片。口縁部は外反し、口唇部は丸い。	水挽き成形。内面篋磨き。	砂粒 に多い橙色 良好	5% P422 PL94 内面黒色処理・ 墨書「一福」か

第100号住居跡 (第196図)

本跡は、調査区の南部M3i₆区を中心に確認された住居跡である。本跡の北4mには第45号住居跡が、南西4mには第111号住居跡が存在している。

平面形は、長軸3m、短軸2.85mの方形状を呈し、主軸方向はN-25°-Eを指している。床面積は6.8m²である。壁はロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は10~20cmと低く、壁直下には上幅20cm、深さ10cmの壁溝が全周している。床は貼り床で、壁際まで硬く締まり平坦である。ピットは確認されなかった。カマドは、北東壁の中央部に付設されているが、天井部は崩落し、焚口部は攪乱を受けている。カマドの全長は85cm、横幅は75cmと推定され、主軸方向はN-42°-Eを指している。燃焼部の規模は長さ65cm、幅35cmで、壁面を35cm奥に掘り込み、焚口部は他の住居跡のカマドに比べて著しく壁際近くに位置していたと思われる。煙道部は、奥壁をさらに20



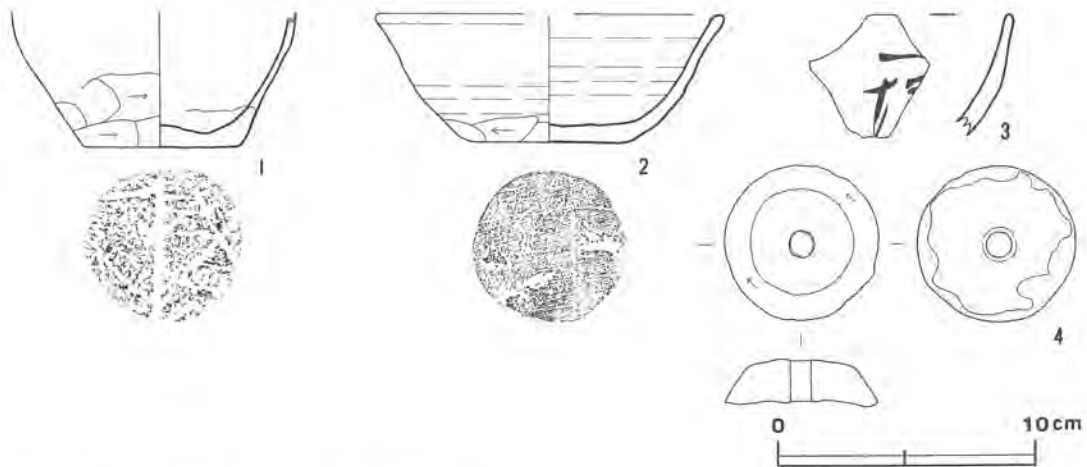
第196図 第100号住居跡・カマド実測図

cmほど円筒状に掘り込んで構築されている。袖部から煙道部の上位にかけては、砂質の粘土によって構築され、カマド内には焼土ブロックを含む暗赤褐色土が主に堆積している。火床は、床面から10cmほど掘り込まれ、赤褐色に変色している。

覆土は、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積している。自然堆積層である。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片133点、須恵器片21点、紡錘車（須恵器）1点、礫1個が出土している。本跡に伴う遺物は、遺構全体に散在しており、覆土中から出土した須恵器片の中には叩き目を持つ甕胴部片も含まれている。南東コーナー付近の床面からは第197図2の坏（土師器）と1の甕（土師器）が正位で、南壁際の床面からは4の紡錘車（須恵器）が出土している。なお、3の墨書土器片は、中央部の覆土中から出土したが、文字の半分を欠損しているため解読は困難であった。

本跡は、遺物や遺構の形態等から9～10世紀代の住居跡と思われる。



第197図 第100号住居跡出土遺物実測図

第100号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第197図 1	小型甕 土師器	B (5.3) C 6.2	胴部は内彎して開くが、中位以上を欠損。	胴部外面下位は横位の斲削り。内面は横位の篋ナデ整形。底部木葉痕。	砂粒・雲母 褐灰色 普通	20% P372
2	坏 土師器	A (13.6) B 5.1 C 6.0	平底。体部は内彎して開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部外面と内面は横位の篋ナデ整形。体部外面下端は斲削り。底部は一定方向の手持ち斲削り。回転方向は右。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	50% P371

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第197図 3	坏 土師器	B (4.8)	体部片。体部は内彎して開き、 口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。内面は寛磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% P426 内面黒色処理・ 墨書「一幡」か

第101号住居跡 (第198・199図)

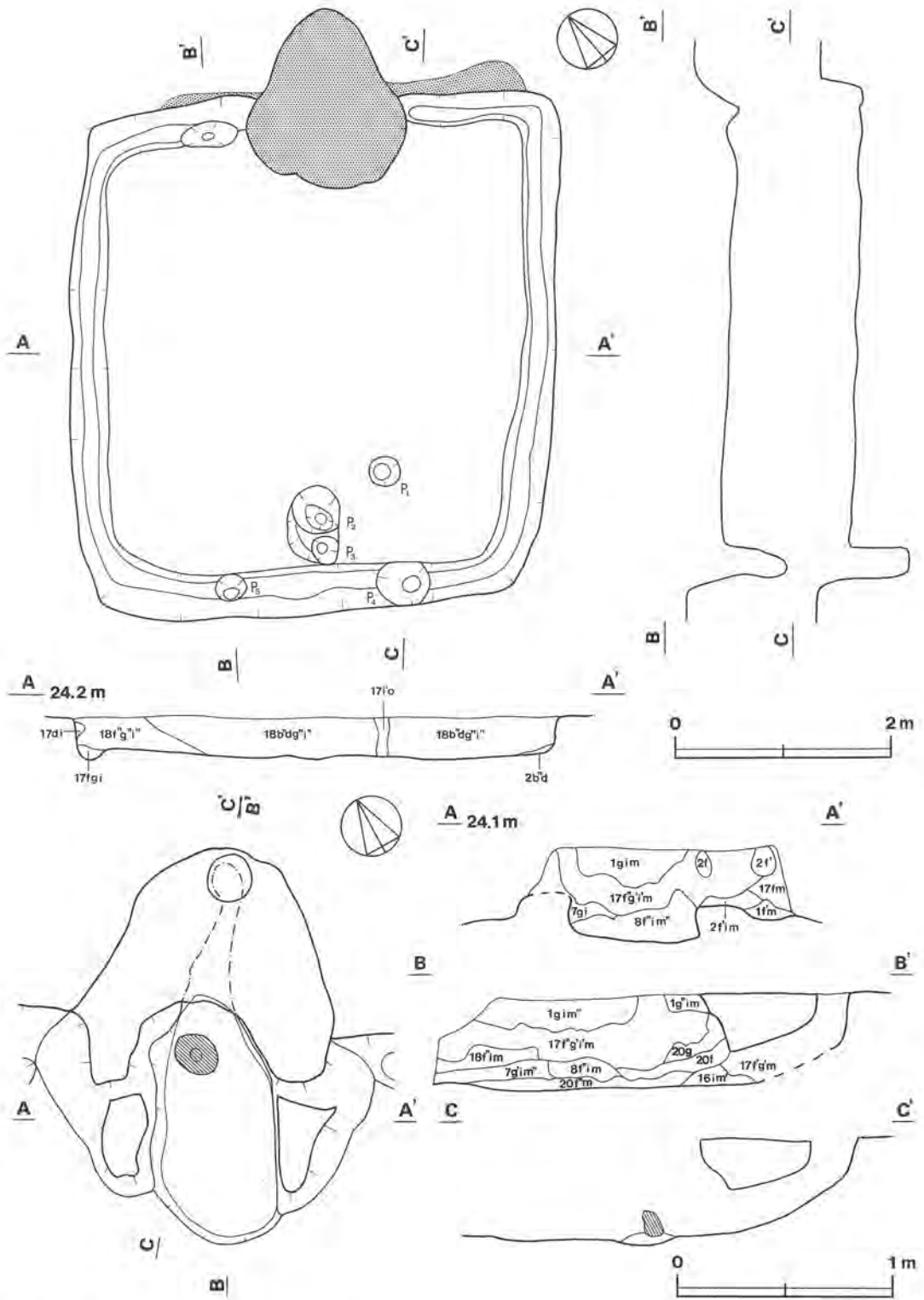
本跡は、調査区の南部 M3e1 区を中心に確認された住居跡で、東部は古墳時代後期の第112号住居跡を覆土下層まで掘り込んでいる。本跡は西 8 m には第102号住居跡が、東 6 m には第97号住居跡が存在している。

平面形は、長軸4.85m、短軸4.5m の方形状を呈し、主軸方向はN-35°-Eを指している。床面積は17.8㎡である。壁は締まったロームであるが、北東壁と南東壁の一部は第112号住居跡の覆土中にあるため明確にできなかった。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁直下には上幅20cm、深さ5~10cmの壁溝が全周している。床は貼り床で、壁際まで硬く締まり、床面は平坦である。ピットは、5か所を確認した。規模は上端直径が30~45cm、深さが28~56cmで、5本とも南西壁際に位置している。ピットの規模や配置から考えて、P₂~P₅の4本は入口部に関する柱穴の可能性もある。カマドは、北東壁の中央部に付設されているが、天井の一部は崩落している。カマドの全長は185cm、横幅は150cmである。燃焼部の規模は、長さ115cm、幅60cmで、焚口部から70cm奥に支脚が直立し、奥壁は壁面に接している。煙道部は、奥壁をさらに70cmほど円筒形状に掘り込んで構築されている。袖部・天井部・煙道部は砂質の粘土によって構築され、カマド内には焼土ブロックを多量に含むにぶい赤褐色土が主に堆積している。火床は、床面とほぼ同じ高さで、焼けて赤褐色に変色している。

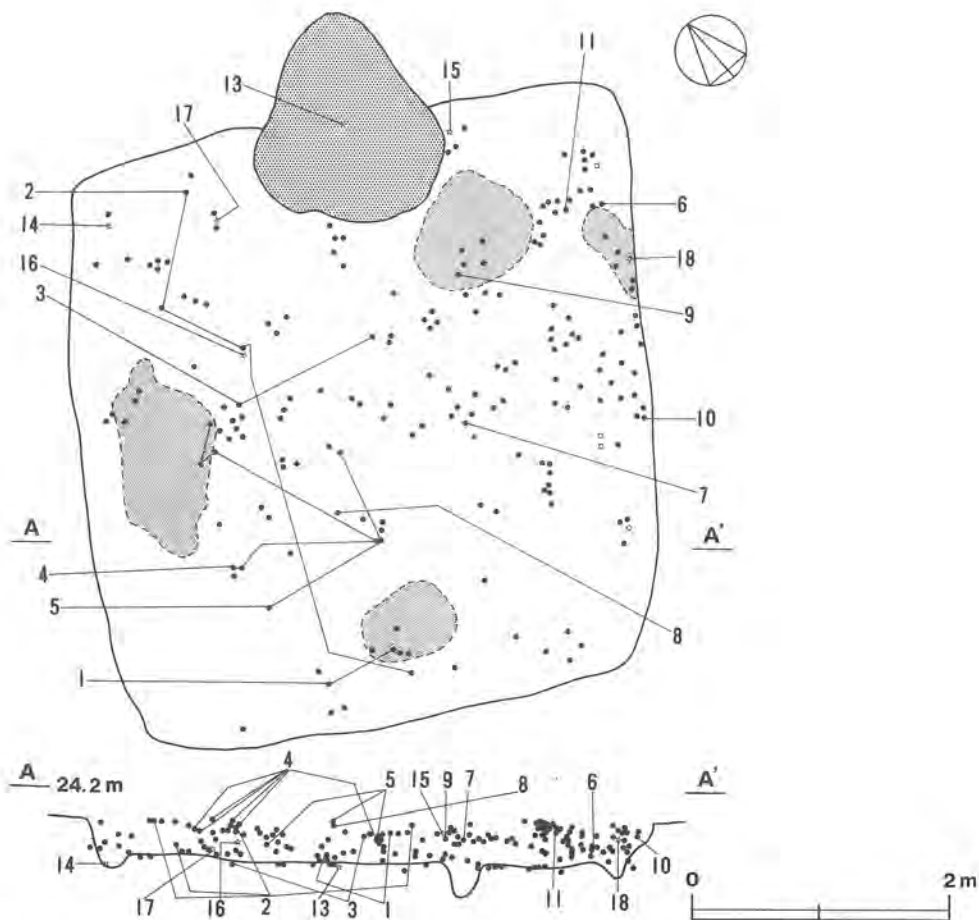
覆土は、焼土粒子や炭化材を含む極暗赤褐色土が一様に堆積している。締まりは弱く、人為堆積層であるが、床面に焼土が散乱していることから、焼失後に埋め戻されたものと思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片571点、須恵器及びその破片339点、灰釉陶器3点、鉄製品6点と、カマド内から土師器片33点、須恵器片3点が出土している。本跡に伴う遺物は遺構全体に散在しており、中央部からは第200図3の高台付埴(灰釉陶器)や7・5の坏(土師器)が、南東部からは6の坏(土師器)や10・11の高台付皿(土師器)が出土し、北西部からは4の坏(土師器)や12の高台付皿(土師器)が出土している。なお、鉄製品の多くは遺構の北部に集中し、北コーナー部から14・17の釘や16の器種不明の鉄製品が、北東壁際から15の鉄鏃が出土している。

本跡は、遺物や遺構の形態等から9~10世紀代の住居跡と思われる。



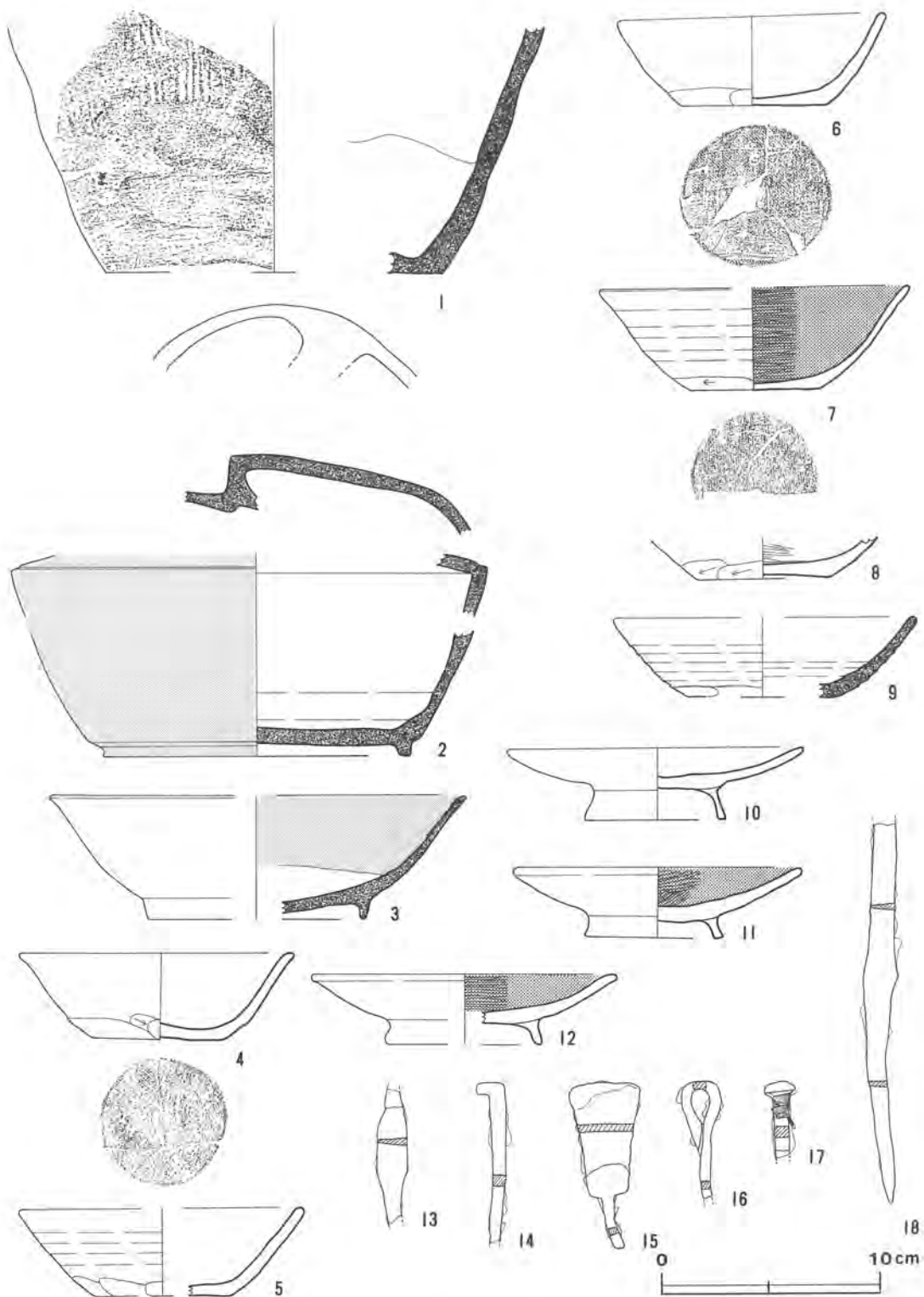
第198図 第101号住居跡・カマド実測図



第199図 第101号住居跡出土遺物位置図

第101号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第200図 1	甗 須恵器	B [11.5] C [15.8]	底部は五孔式で、胴部は内彎気味に開く。中位以上を欠損。	胴部中位は縦位の平行叩き目。胴部下位は横位の寛割り。内面は横ナデ整形。	長石・石英にぶい橙色普通	10% P383
2	平瓶 灰袖陶器	D 0.6 E 14.4	胴部片。底部は平底。高台は低く、「ハ」の字状に開き、接地面は平坦。胴部は内彎気味に外傾し、上位は稜を持って強く内傾し、天井部を形成する。	水挽き成形。高台は貼り付け。	— 灰白色良好	30% P396 外面に灰袖かかる
3	高台付壺 灰袖陶器	A [19.4] B 5.8 D 1.0 E [10.6]	底部は丸味を持つ。高台は内傾し、接地面は丸い。体部は内彎して開き、口縁部は外反する。口唇部は薄く、丸い。	水挽き成形。体部外面下位と底面は回転寛割り。高台は貼り付け。内面に重ね焼きのあと残る。	— 灰白色良好	40% P384 PL86 内面に灰袖を刷毛がける。



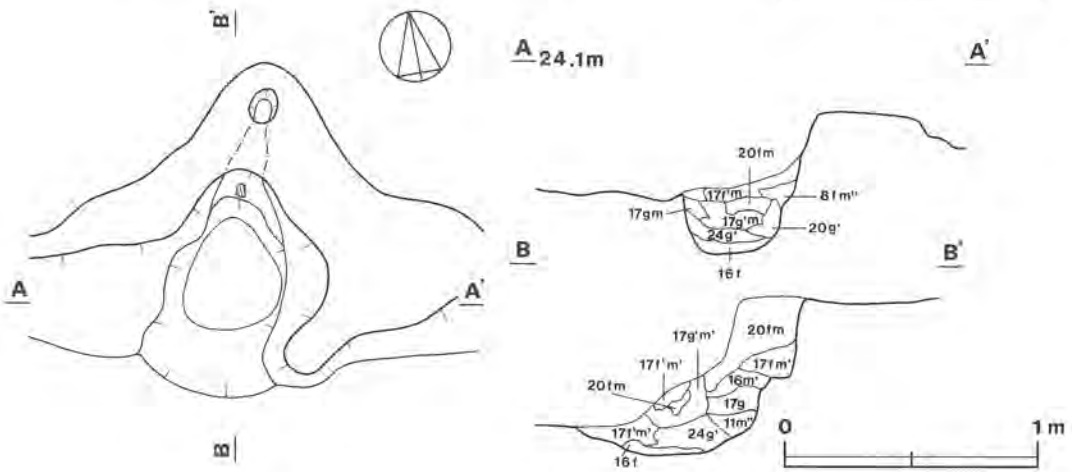
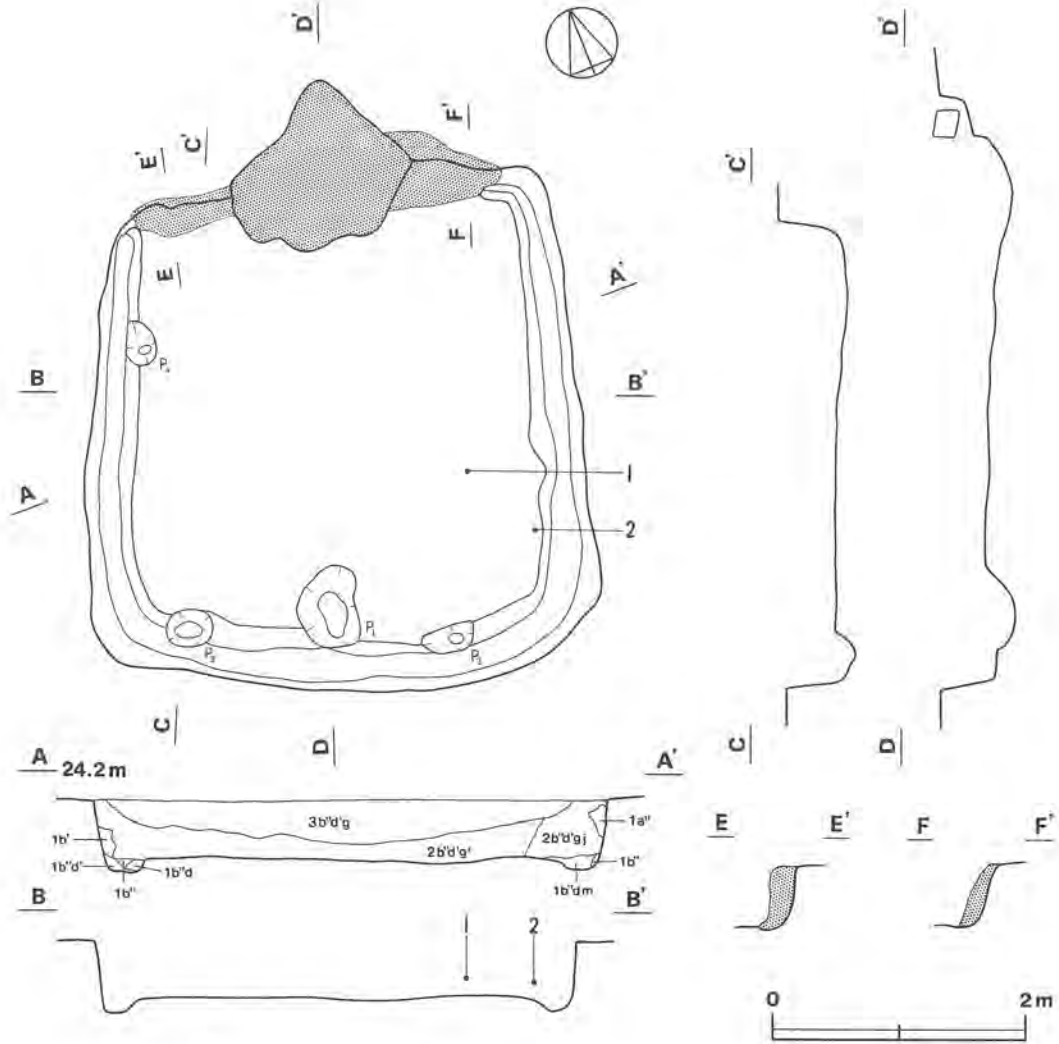
第200図 第101号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第200図 4	坏 土師器	A 13.0	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り。底部は糸切り後、周囲を手持ち篋削り。	砂粒 橙色 普通	90% P373 PL84
		B 4.2				
		C 6.2				
5	坏 土師器	A [13.4]	平底。体部は内彎して開き、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り。内面は横ナデ整形。底部は一定方向の手持ち篋削り。	砂粒・雲母 橙色 良好	20% P377
		B 4.1				
		C [6.4]				
6	坏 土師器	A 12.4	平底。体部は内彎して開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り。底部は糸切り後、手持ち篋削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	90% P374 PL84
		B 4.3				
		C 6.9				
7	坏 土師器	A [14.4]	平底。体部は内彎して開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部下端は篋削り。内面は篋磨き。底部は一定方向の手持ち篋削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	30% P375 内面黒色処理
		B 5.0				
		C 6.0				
8	坏 土師器	B (1.9)	上げ底。体部は内彎して開く。中位以上を欠損。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り。内面は篋磨き。底部は糸切り後、一定方向の手持ち篋削り。	砂粒 橙色 普通	30% P378
		C 6.2				
9	坏 須恵器	A [14.0]	平底。体部は内彎して開き、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り。内面は横ナデ整形。底面は手持ち篋削り。	砂粒・細砂・雲母 灰色 普通	20% P376
		B 3.7				
		C [7.0]				
10	高台付皿 土師器	A 13.8	平底。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は平坦。体部は内彎気味に大きく開き、口縁部に至る。	水挽き成形。底部は回転篋削り。回転方向は右。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	80% P381
		B 3.4				
		D 1.4				
		E 6.6				
11	高台付皿 土師器	A 13.4	平底。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は平坦。体部は外傾して大きく開き、口縁部に至る。口唇部は丸い。	体部外面横ナデ整形。内面篋磨き。高台は貼り付け。	砂粒・雲母 橙色 良好	98% P379 PL85 内面黒色処理
		B 3.4				
		D 1.0				
		E 6.5				
12	高台付皿 土師器	A [14.2]	平底。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は丸い。体部は内彎気味に大きく開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。内面は篋磨き。高台は貼り付け。底部は回転篋削り。	砂粒・雲母 橙色 良好	60% P380 PL85 内面黒色処理
		B 3.3				
		D 1.2				
		E [7.2]				

第102号住居跡 (第201図)

本跡は、調査区の南西部 M2es区を中心に確認された住居跡で、南側は古墳時代前期の第107号住居跡を、北壁の一部は縄文時代の第525号土坑をそれぞれ掘り込んでいる。本跡の北12mには第91号住居跡が、東10mには第101号住居跡が存在している。

平面形は、北辺が南辺より60cm短い台形状で、長軸は4.20m、短軸は3.88mである。主軸方向はN-21°-Eを指し、床面積は12.9㎡である。壁は締まったロームであるが、北側の壁面には、カマドの構築材料と同質の砂質粘土が10~18cmの厚さで貼られている。壁面は垂直に立ち上がり、壁高は40~45cmである。北壁側を除く壁際には、上幅20~30cm、深さ10cmの壁溝が周回している。床は貼り床で、平坦である。ピットは4か所を確認した。P₁は上端直径が50cm、深さが24cmで、南壁際に位置することから、本跡の入口部に関する柱穴と思われる。P₂~P₄は上端直径が23~29

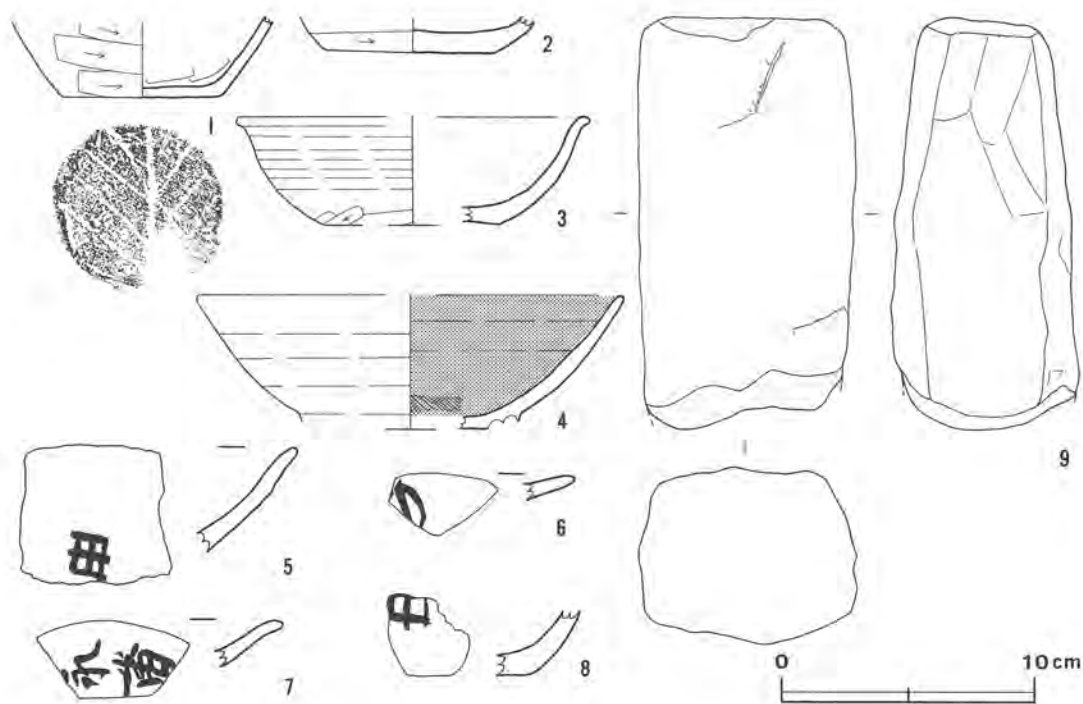


第201図 第102号住居跡・カマド実測図

cm、深さが7~10cmと小規模で、壁際に位置することから、補助的な柱穴と思われる。カマドは、北壁の中央部に付設されているが、天井部は崩落している。カマドの全長は135cm、横幅は115cmである。燃烧部は長さ90cm、幅40cmで、壁面を40cm奥へ掘り込み、最奥には支脚(第202図9)が据え付けられている。煙道部は、奥壁をさらに30cmほど円筒状に掘り込んで構築されている。裾部、天井部、煙道の上部は砂質の粘土によって構築され、内壁は赤く変色している。カマド内には焼土ブロックを多量に含む赤色土が主に堆積している。火床は床面から15cmほど掘り込まれ、レンガ状に焼き締まっている。

覆土は、上層に極暗褐色土、下層に暗褐色土が堆積している。自然堆積層と思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片213点、須恵器片119点、支脚1点が出土している。本跡に伴う遺物は、北西部と南部に多く散在している。覆土中から出土した土師器片には第202図5~8の墨書を持つ土師器片が含まれ、「田」・「永」・「幡」等の文字や「㊦」の記号が確認されている。1の甕(土師器)と3の坏(土師器)・4の高台付坏(土師器)は、東壁側の覆土下



第202図 第102号住居跡出土遺物実測図

層から破片で出土したものである。

本跡は、遺物や遺構等から9～10世紀代の住居跡と思われる。

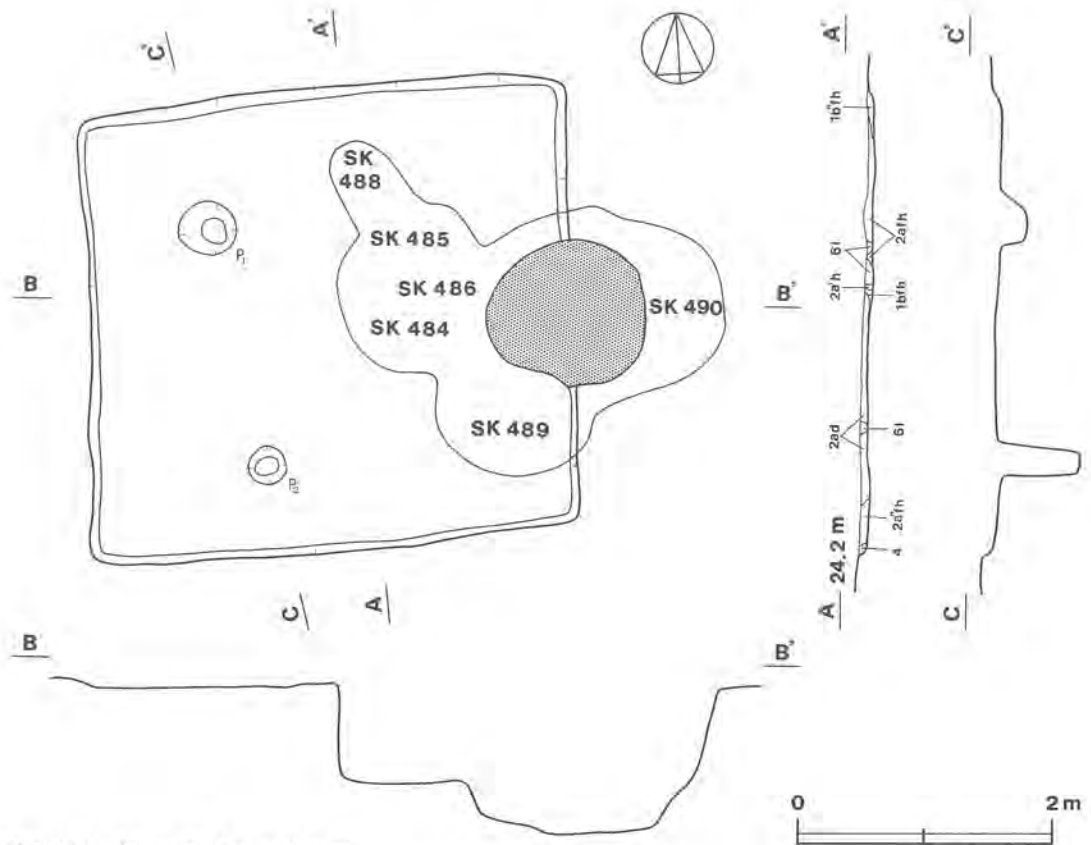
第102号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第202図 1	甕 土師器	B (3.0) C 6.4	胴部は外傾して立ち上がる。中位以上を欠損。	胴部外面下位は横位の篋削り。底部木葉痕。	長石・石英にぶい橙色普通	10% P 385
2	坏 土師器	B (1.3) C 6.7	底部片。平底。	内面は篋磨き。体部外面下端と底面は回転篋削り。	砂粒にぶい橙色普通	30% P 387
3	坏 土師器	A (14.0) B 4.3 C (7.0)	上げ底。体部は内彎して開き、口縁部は強く外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り。底部は糸切り後、篋削り。	砂粒浅黄色普通	25% P 386
4	高台付坏 土師器	A (17.0) B (5.3)	平底。高台欠損。体部は内彎して開き、口縁部に至る。	水挽き成形。内面は篋磨き。高台は貼り付け。底面は回転篋削り。	砂粒にぶい褐色良好	30% P 388 内面黒色処理
5	坏 土師器	B (4.2)	体部片。体部は内彎して開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部下端は篋削り。内面は篋磨き。	砂粒にぶい橙色普通	10% P 428 PL94 内面黒色処理・墨書「田」
6	皿 土師器	B (1.1)	口縁部片。口唇部は丸い。	内面篋磨き。	砂粒橙色普通	5% P 427 内面黒色処理・墨書「ㇿ」
7	皿 土師器	B (2.2)	口縁部片。口縁部は外反し、口唇部はやや尖る。	水挽き成形。内面は篋磨き。	砂粒にぶい橙色普通	5% P 429 PL94 内面黒色処理・墨書「永番」
8	坏 土師器	B (3.2)	底部片。平底。	水挽き成形。体部下端は篋削り。内面は篋磨き。	砂粒にぶい橙色普通	5% P 430 内面黒色処理・墨書(文字不明)

第103号住居跡 (第203図)

本跡は、調査区の南部 M3f2区を中心に確認された住居跡で、床中央から東壁にかけては縄文時代の第484～486・488～490号土坑を掘り込んでいる。本跡の北4 mには第97号住居跡が、西4 mには第101号住居跡が存在している。

平面形は、長軸3.75m、短軸3.7mの方形状を呈し、主軸方向はN-90°-Eを指している。床面積は12.9㎡である。壁は締まりの弱いロームで、壁高は10cmと低いため、立ち上がり等については不明である。床はロームで、中央部は硬く踏み締まり、土坑の覆土上には貼り床がされている。ピットは床面の西側に2か所を確認した。上端直径は30～40cm、深さは25～60cmで、2本



第203図 第103号住居跡実測図

とも本跡に伴う柱穴と思われる。カマドは、東壁の中央からわずかに南に寄った位置に付設されていたと思われるが、すべて崩壊し、焼土と砂質の粘土が直径1 mの範囲に散在しているのが認められただけである。火床部も確認できないことから、本跡の使用期間は短かったものと思われる。

覆土は、締まりの弱い暗褐色土であるが、本跡の掘り込みが浅いため、堆積状況等については不明である。

遺物は極めて少なく、床面や覆土中から土師器片22点、須恵器片3点が出土しただけである。本跡に伴う遺物の中には、内面黒色処理が施された坏（土師器）や甕の胴部片が含まれているが、いずれも小片で実測可能なまでに復元できたものは1点もなかった。第204図1の墨書土器は坏の体部片で、中央部の覆土中から出土したが、文字の大半を欠損しているため解読は不可能であった。

本跡は、遺物等から9～10世紀代の住居跡と思われる。



第204図
第103号住居跡
出土遺物実測図

第103号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第204図 1	坏 土師器	B (2.4)	体部片。	水挽き成形。体部内面は篋磨き。	砂粒 淡橙色 普通	5% P431 内面黒色処理・ 墨書「幡」か

第110号住居跡 (第206図)

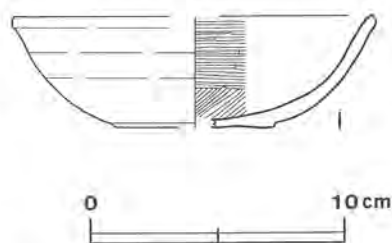
本跡は、調査区の南部 N2a9 区を中心に確認された住居跡で、東側は古墳時代の第108号住居跡を掘り込み、西側と南側は調査区外へ延びている。本跡の北東 4 m には第113号住居跡が、東14m には第111号住居跡が存在している。

平面形は、住居跡の大部分が調査区外にあるため不明であるが、調査区内に存在する壁溝から推定して、平面形は方形あるいは長方形を呈し、主軸方向は N-70°-E を指すものと思われる。調査できた床面積は 14.3m² である。壁は欠損しており、上幅 30~40cm、深さ 10~15cm の壁溝のみが残存している。床は貼り床で、壁際まで硬く締まり、平坦である。ピットは、4 か所を確認した。P₄ は本跡に伴う柱穴と考えられ、上端直径は 30cm、深さは 20cm である。P₁~P₃ は規模や配置・覆土等から考えて、後世の攪乱坑と思われる。カマドは、東壁の中央部付近に付設されているが、残存状況は悪く、燃烧部の掘り込みと袖の一部が検出されただけである。燃烧部の掘り込みは、長さ 105cm、幅 75cm、深さ 10cm で、焚口部から 70cm 奥には支脚が直立している。カマド内には焼土を多量に含む赤褐色土が堆積しており、火床は焼けて赤化している。

本跡は、ローム土層にまったく掘り込んでいないため、覆土の観察はできなかった。

遺物は、床面から土師器片 18 点、須恵器片 (甕胴部片) 1 点が出土しただけである。いずれも本跡に伴うものと思われ、土師器片には高台付の坏が含まれている。第205 図 1 の高台付坏 (土師器) は、カマド西方の住居跡外から出土したものであるが、表土除去の際移動したものと考え、本跡に伴う遺物として扱った。

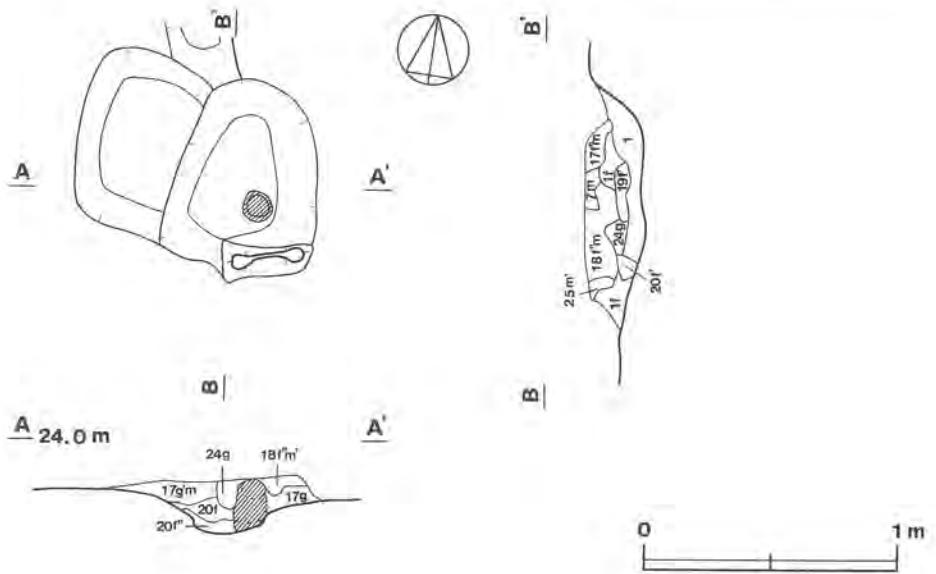
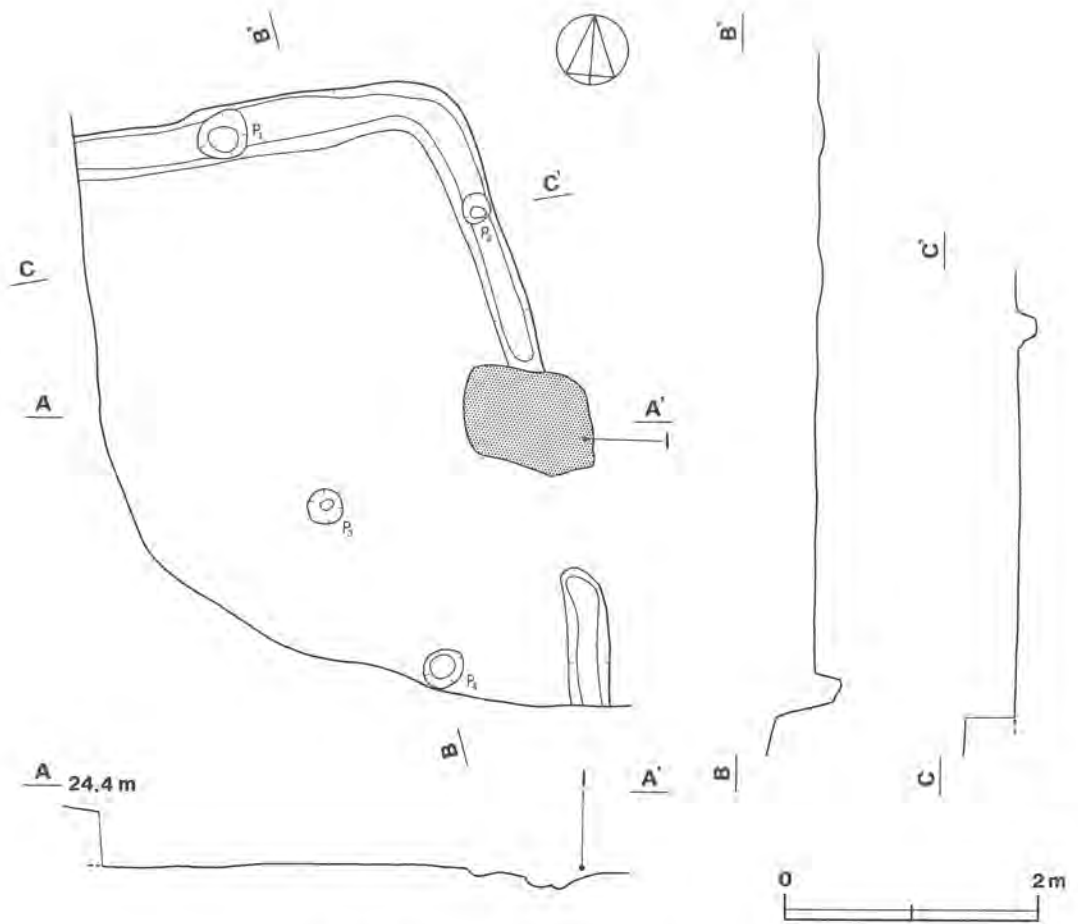
本跡は、遺物等から 9~10 世紀代の住居跡と思われる。



第205図 第110号住居跡出土遺物
実測図

第110号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第205図 1	高台付坏 土師器	A [14.4] B 4.4 C [6.2]	平底。高台は低く、接地面は丸い。体部は内彎して開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。内面は篋磨き。高台は貼り付け。底部は回転糸切り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 不良	40% P390 PL84



第206図 第110号住居跡・カマド実測図

第111号住居跡（第208図）

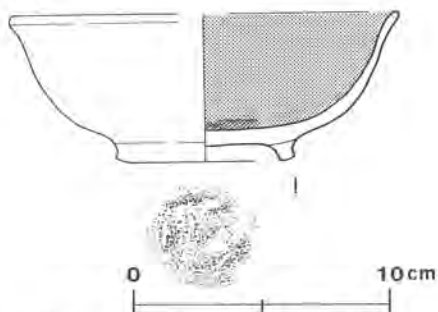
本跡は、調査区の南部 M3a₄区を中心に確認された住居跡で、古墳時代後期の第115号住居跡の覆土を掘り込んでいる。本跡の北東 3 m には第100号住居跡が、西 9 m には第113号住居跡が存在している。

平面形は、長軸4.4m、短軸4.1mの方形を呈し、主軸方向はN-83°-Wを指している。床面積は14.9m²である。壁は北東コーナー部はロームであるが、他は第115号住居跡の覆土である。壁高は20cmで、65度の角度で外傾して立ち上がっている。床は、第115号住居跡の覆土上に貼り床され、緩やかに起伏している。ピットは4か所を確認した。上端直径が20~40cm、深さが16~25cmで、方形に配列されていることから、4本とも支柱穴と思われる。カマドは、東壁の中央部に2基が接して確認されたが、残存状況は極めて悪い。北側のカマドは、袖の一部と掘り方のみが残存しており、全長が90cm、横幅が70cmと推定される。なお、燃焼部の規模は長さ65cm、幅55cmで、壁面を30cm奥に掘り込み、焚口部から50cm奥には支脚が直立している。煙道部は、奥壁をさらに20cmほど掘り込んで構築されている。南側のカマドは、北袖と掘り方の一部を残して攪乱されているため、規模などの詳細については不明である。両カマドとも、袖部は赤褐色に変色した砂質粘土である。カマド内には焼土ブロックや木灰を含む暗赤褐色土が主に堆積しているが、北側のカマドの覆土中からは、焼けて細かく砕けた獣骨片が多量に検出された。北側のカマドの火床は、床面から10cmほど掘り込まれ、レンガ状に焼き固まっている。

覆土は、締まりの弱い黒褐色土である。自然堆積層であると思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器片150点、須恵器片7点と、カマド内から土師器（甕）片5点が出土している。本跡に伴う遺物は、遺構の北側に多く散在しており、土師器片には坏の高台部も多く含まれている。第207図1の高台付坏（土師器）は、北壁側の床面から出土したものである。

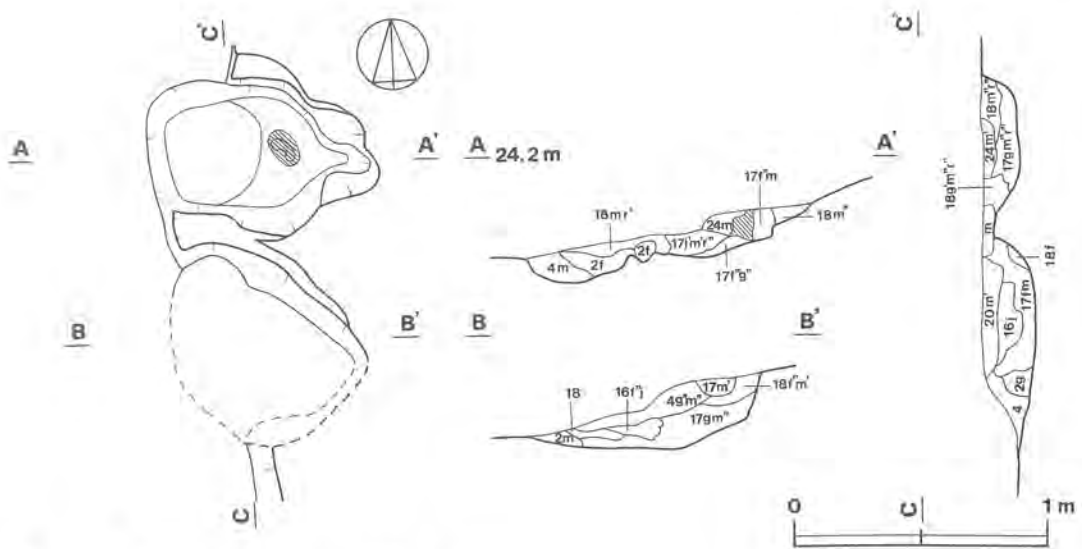
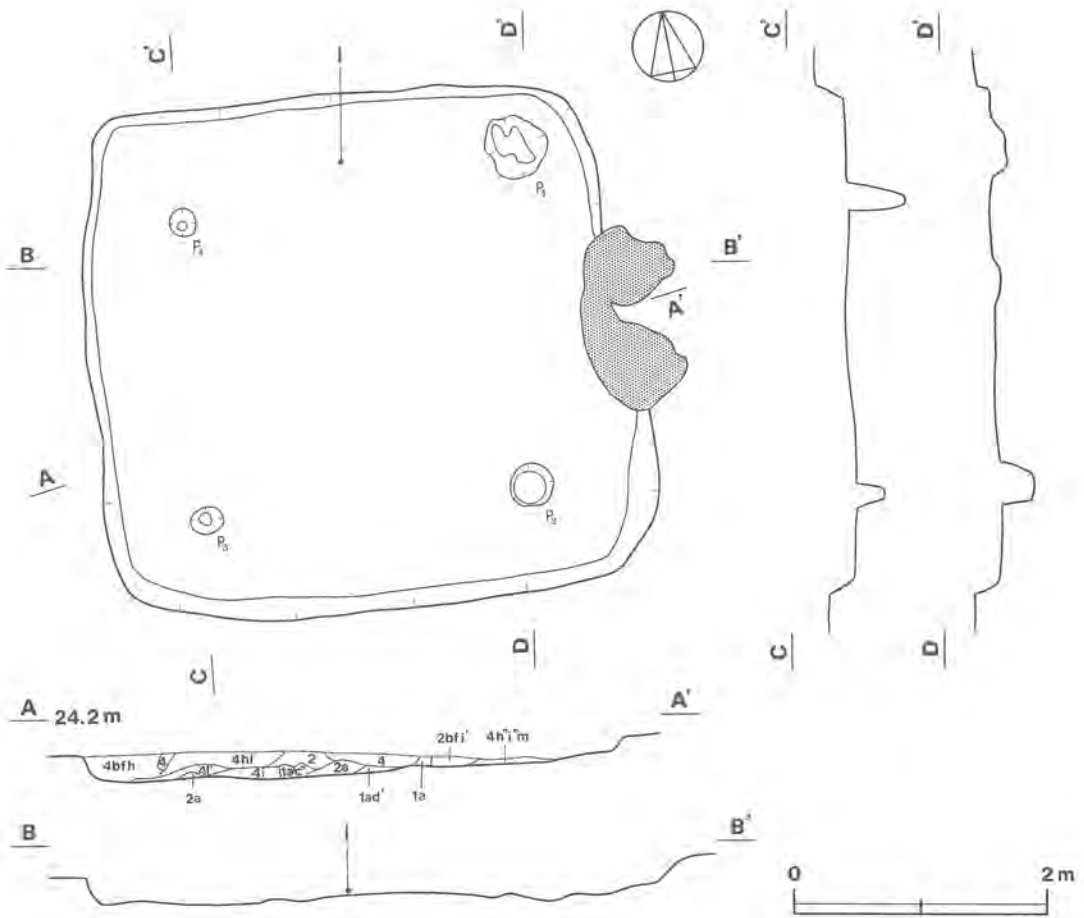
本跡は、遺物や遺構等から9~10世紀代の住居跡と思われる。



第207図 第111号住居跡出土遺物実測図

第111号住居跡出土土器観察表

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第207図 1	高台付坏 土 師 器	A (15.4) B 5.9 D 0.8 E 7.0	平底。高台は低く、「ハ」の字状に開く。接地面は平坦。体部は内灣して開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。内面は鋭磨き。高台は貼り付け。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	30% P 391 内面黒色処理



第208図 第111号住居跡・カマド実測図

第113号住居跡（第209図）

本跡は、調査区の南部 M3a1区を中心に確認された住居跡で、カマドの部分は縄文時代の第527号土坑を、南側は古墳時代後期の第108号住居跡を掘り込んでいる。本跡の北14mには第101号住居跡が、東9mには第111号住居跡が存在している。

平面形は、長軸3.23m、短軸2.7mの隅丸長方形状を呈し、主軸方向はN-77°-Wを指している。床面積は7.6㎡である。南側の壁は第108号住居跡の覆土であるが、その他は締まったロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は13~16cmで、壁直下には壁溝が全周している。床は貼り床で、壁際まで硬く締まり、緩やかに起伏している。ピットは4か所を確認した。ピットの規模は、上端直径が18~25cm、深さが17~23cmで方形に配列されていることから、4本とも主柱穴と思われる。カマドは東壁に付設されているが、南に片寄って位置している。残存状況は悪く、天井部や袖部はほとんど欠損している。カマドの全長は115cmと推定される。燃焼部の規模は長さ90cm、幅55cmと推定され、壁面を40cm奥に掘り込んでいる。焚口部から70cm奥には第210図3の支脚が直立し、煙道部は、奥壁をさらに20cmほど掘り込んで構築されている。カマド内には、焼土を多量に含む暗赤褐色土が主に堆積しているが、砂質粘土も多量に含まれることから、裾部や天井部は砂質の粘土によって構築されていたものと思われる。火床は、床面から10cm掘り込まれ、硬く焼き固まっている。

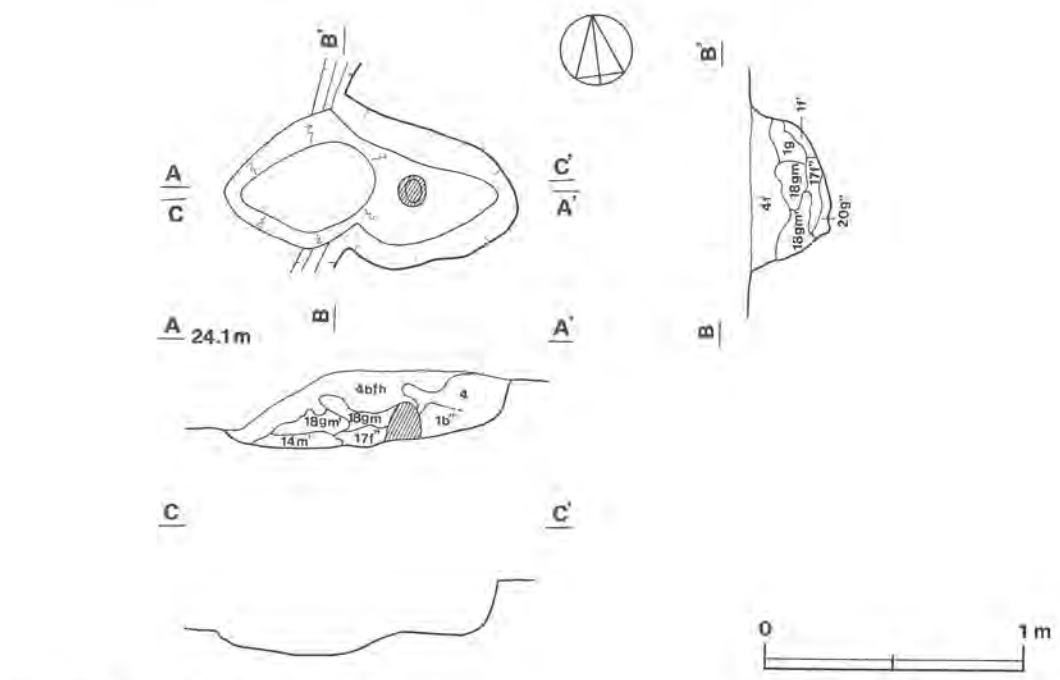
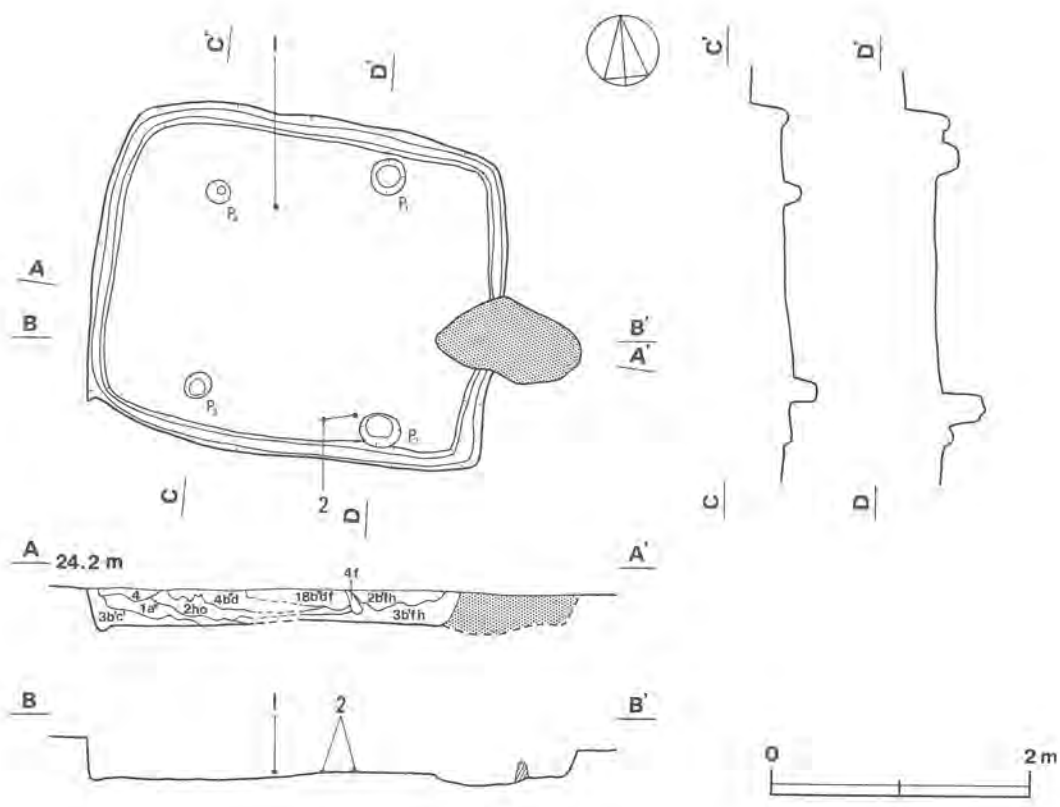
覆土は、上層に暗褐色土、下層に極暗褐色土が堆積している。部分的に攪乱されてはいるが、自然堆積層と思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及び土師器片145点、須恵器片23点、礫2個が出土している。本跡に伴う遺物は、土師器・須恵器とも甕の胴部片が多く、主にカマドの前方に散在している。第210図1の小形の鉢（土師器）は北側の床面から倒立の状態、2の高台付坏（土師器）は南壁側の床面から破片で出土したものである。2個の礫は、それぞれカマド前方の床面と南壁際の覆土中から出土したもので本跡との関係は不明である。

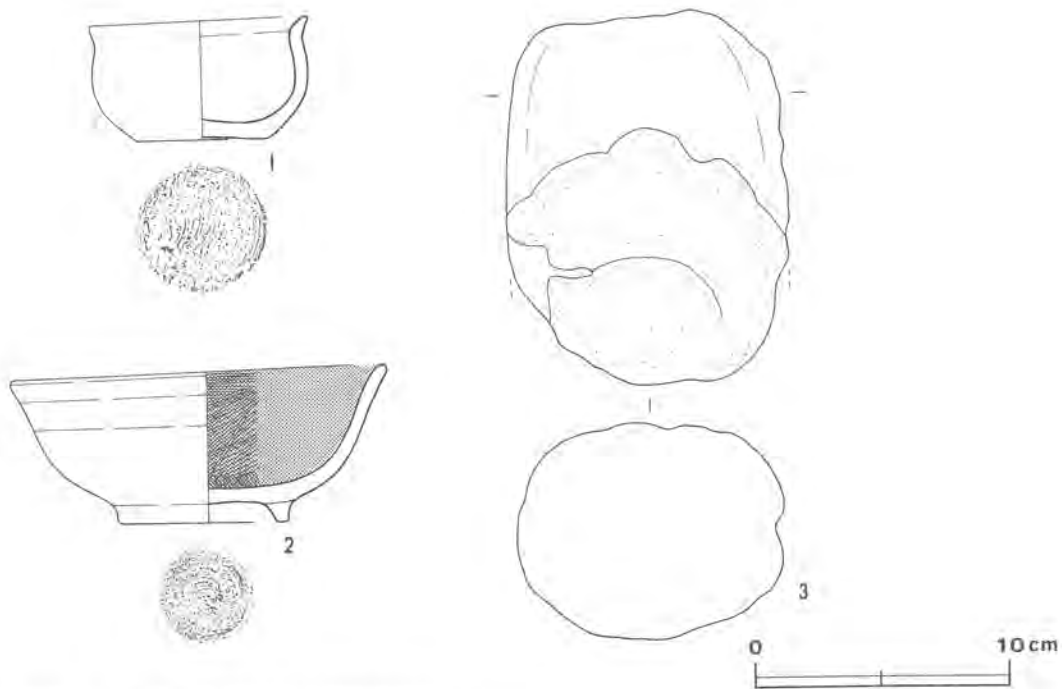
本跡は、遺物や遺構の形態等から9~10世紀代の住居跡と思われる。

第113号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第210図 1	小型鉢 土師器	A 8.5	上げ底。胴部は内彎して外傾し、 口縁部は外反する。	胴部内・外面横ナデ整形。底部 は回転糸切り。	砂粒 にふい橙色 普通	95% P392
		B 4.9				
		C 5.2				
2	高台付坏 土師器	A 15.0	平底。高台は「ハ」の字状に開 き、接地面は平坦。体部は内彎 して開き、口縁部はわずかに外 反する。口唇部はやや尖る。	水挽き成形後、体部内・外面と も篋磨き。高台は貼り付け。底 部は回転篋削り。	砂粒 赤色 普通	70% P393 PL84 内面黒色処理
		B 7.2				
		D 0.8				
		E 6.7				



第209図 第113号住居跡・カマド実測図



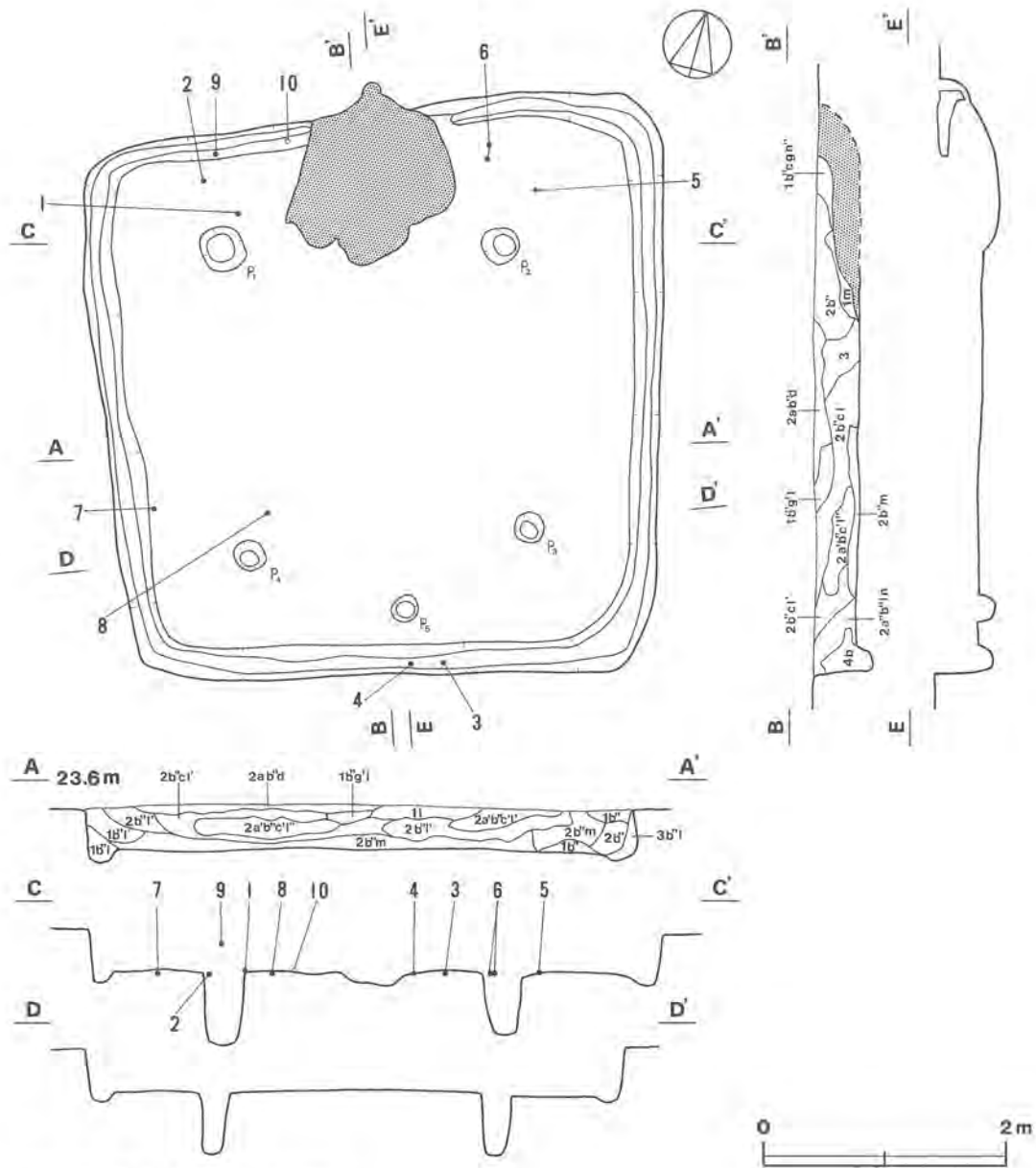
第210図 第113号住居跡出土遺物実測図

(2) 4 区

第1号住居跡 (第211・212図)

本跡は、調査区の北西部 M5g₉区を中心に確認された住居跡である。本跡の南西6 mには第2号住居跡が、南9 mには第10号住居跡が存在している。

平面形は、長軸4.74m、短軸4.57mの方形状を呈し、主軸方向はN-23°-Wを指している。床面積は19.0m²である。壁は締まったロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は38cmで、壁直下には上幅20cm、深さ10cmの壁溝が全周している。床は壁際まで締まっているが、中央部は踏み締まりも加わり一層硬化している。床面は緩やかに起伏している。ピットは5か所を確認した。P₁~P₄の規模は上端直径が25~35cm、深さが50~60cmで、P₅の規模は上端直径が20cm、深さは12cmである。P₁~P₄は方形に配列されることから支柱穴、P₅は南壁際に位置することから入口部に関する柱穴と思われる。カマドは、北壁の中央部に付設されている。カマドの残存状況は良好であるが、天井の一部は崩落している。カマドの規模は全長145cm、横幅135cmである。燃焼部の規模は長さ120cm、幅50cmである。燃焼部は壁面を掘り込まない。煙道部は、壁面をわずかに掘り窪めて構築されている。裾部・天井部と煙道の一部は砂質の粘土によって構築され、内面は赤褐色に変色している。カマド内には焼土を多量に含むにふい赤褐色土が主に堆積している。火床は床面

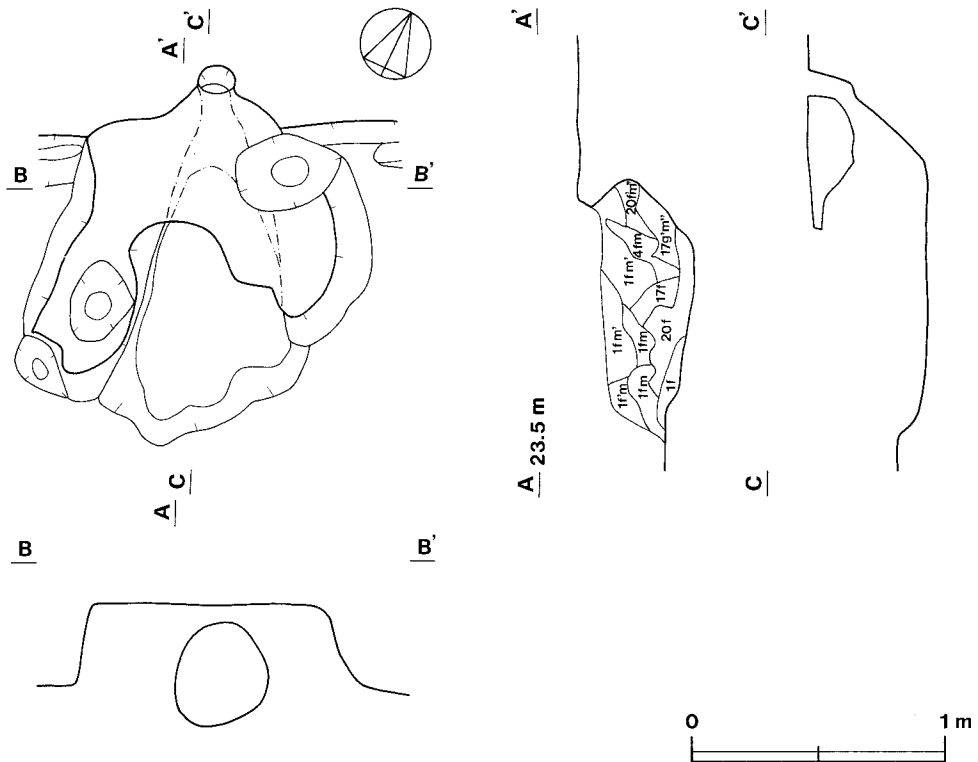


第211図 第1号住居跡実測図

から15cmほど掘り込まれ、レンガ状に焼き固まっている。

覆土は、締まりのある暗褐色土で、中層にはロームブロックを多く含んでいる。自然堆積層と思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片87点、須恵器及びその破片14点、支脚1点と、カマド内から土師器片8点が出土している。本跡に伴う遺物は、カマドの周辺に多く散在しており、土師器片には底部に木葉痕を持ち、胴下半部に縦位の篋磨きが施された甕も含まれている。



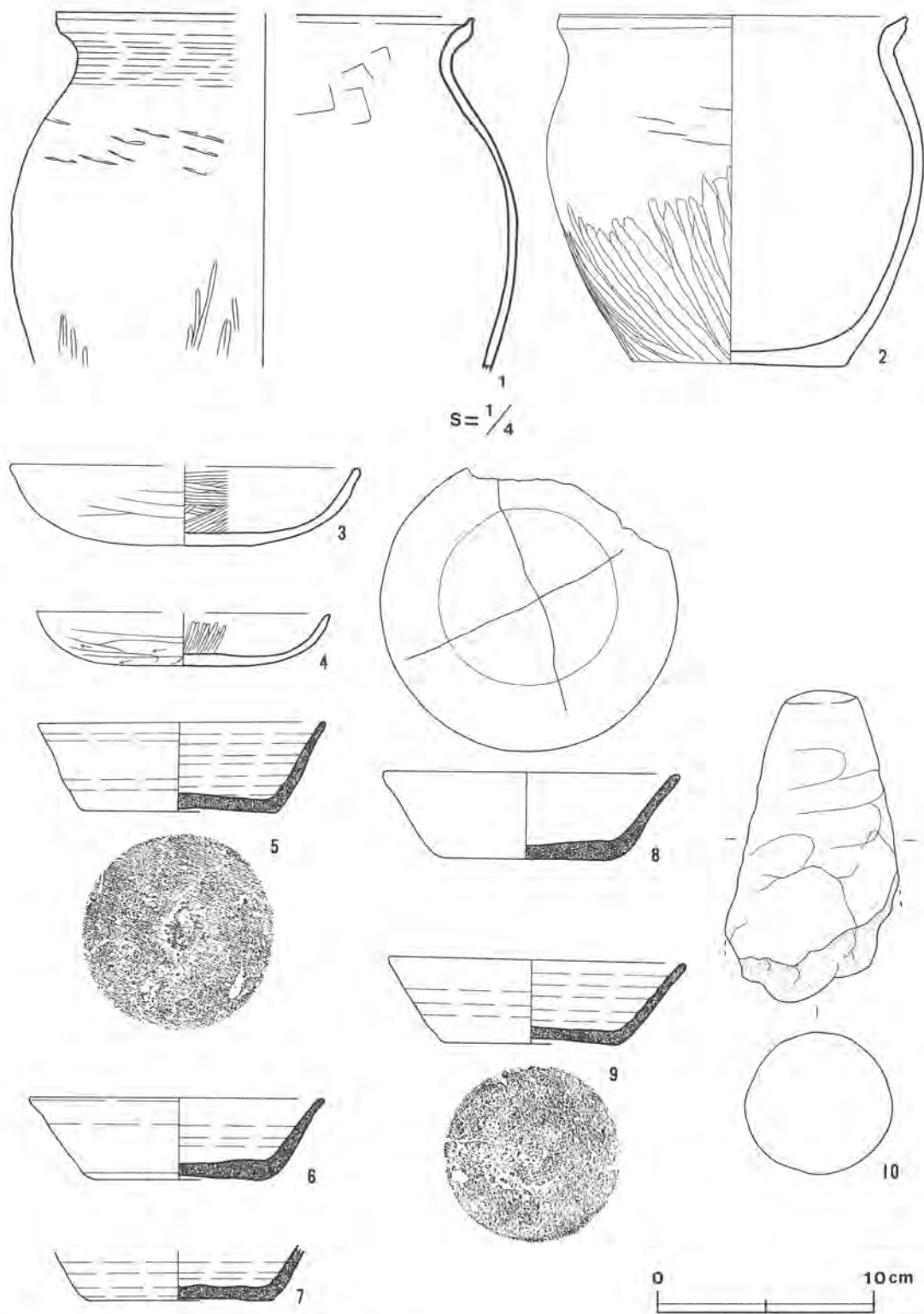
第212図 第1号住居跡カマド実測図

カマドの西側から第213図1・2の甕（土師器）、9の坏（須恵器）と10の支脚が、カマドの東側から5・6の坏（須恵器）が出土している。なお、南部の床面からは、3・4の坏（土師器）や7・8の坏（須恵器）が出土しており、これも本跡に伴う遺物と思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から8世紀代の住居跡と思われる。

第1号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第213図 1	甕 土師器	A (25.8) B (21.7)	胴部下半を欠損。胴部は膨らみ、最大径を上位に持つ。口縁部は外反し、端部を上方につまみ上げる。	口縁部外面は横ナデ整形。胴部外面上位に篋当て痕、下位は縦位の篋磨き。内面は横位の篋ナデ整形。	砂粒・雲母 橙色 普通	20% P87
2	甕 土師器	A 15.1 B 15.1 C 9.9	上げ底。胴部は内彎気味に外傾し、最大径を上位に持つ。口縁部は外反し、端部を外上方につまみ上げる。	口縁部は横ナデ整形。胴部上位に篋当て痕、下半部は斜位の篋磨き。底部木葉痕。	砂粒 橙色 普通	75% P86 PL87



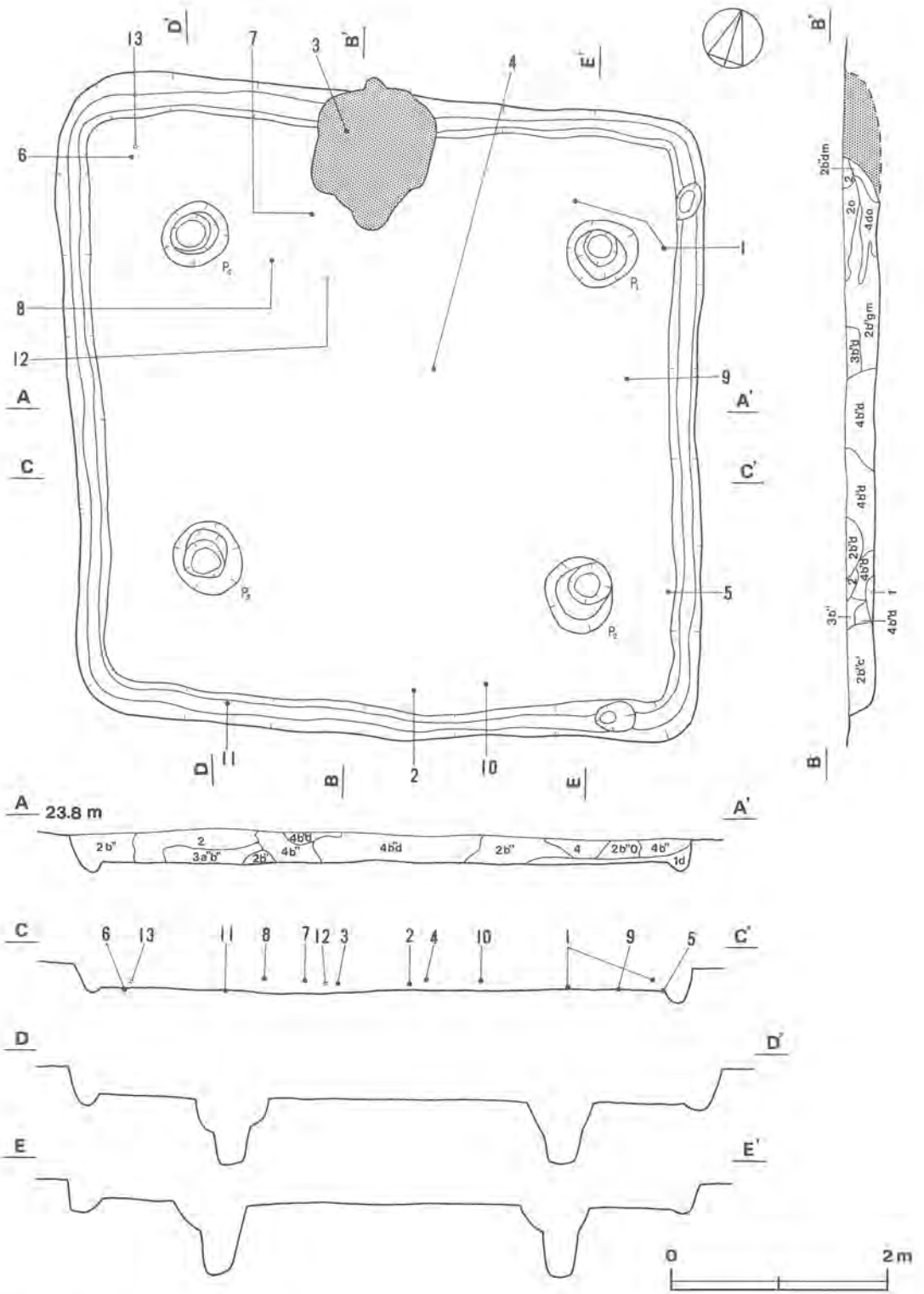
第213图 第1号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第213図 3	坏 土師器	A [16.3] B 3.7	丸底。体部は丸味を持ち、底部から連続して立ち上がる。口縁部はやや外傾して開き、口唇部は丸い。	外面は横位の手持ち篋削り。内面は篋磨き。内・外面とも赤彩。	砂粒 明赤褐色 不良	25% P88
4	坏 土師器	A [13.6] B 2.5	丸底。体部は丸味を持ち、底部から連続して立ち上がる。口縁部は外傾して開き、口唇部は尖る。	口縁部外面は横ナデ整形。体部外面は横位、底部は不定方向の手持ち篋削り。内面は放射状の篋磨き。	砂粒・スコリア 赤色 良好	45% P89
5	坏 須恵器	A 13.4 B 4.3 C 8.9	上げ底。体部は外傾して開き、口縁部に至る。口唇部は薄く、丸い。	水挽き成形。底部は回転篋切り後、周囲を手持ち篋削り。回転方向は右。	雲母・砂粒・長石 灰色 良好	90% P90
6	坏 須恵器	A 13.8 B 3.8 C 7.8	上げ底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は回転篋切り後、一定方向の手持ち篋削り。底部と体部の境を篋削りにより面取りする。回転方向は右。	雲母 灰黄色 不良	85% P93
7	坏 須恵器	B (2.6) C (8.5)	上げ底。体部は外傾して立ち上がるが、上位を欠損。	水挽き成形。底部は一定方向の手持ち篋削り。	石英 暗灰黄色 普通	40% P94
8	坏 須恵器	A 13.1 B 4.1 C 7.6	平底。底部と体部との境は丸味を持ち、体部は外傾して開き、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は回転篋切り後、周囲を手持ち篋削り。回転方向は右。	砂粒・雲母・長石 黄褐色 不良	90% P91 PL92 内面に刻文「×」
9	坏 須恵器	A 13.9 B 4.0 C 8.2	上げ底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は回転篋切り後、一定方向の手持ち篋削り。回転方向は右。	砂粒・長石 暗灰黄色 良好	65% P92 PL92

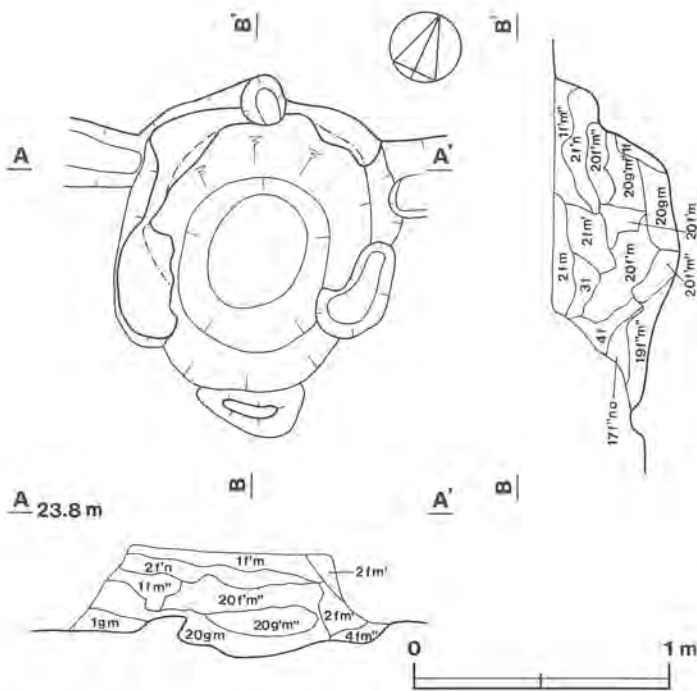
第2号住居跡 (第214・215図)

本跡は、調査区の西部 M5j7区を中心に確認された住居跡で、壁や床面は第12～20・23号土坑に掘り込まれている。本跡の北東6mには第1号住居跡が、南西4mには第13号住居跡が存在している。

平面形は、長軸5.95m、短軸5.71mの方形状を呈し、主軸方向はN-23°-Wを指している。床面積は31.7㎡である。壁は締まったロームで、70度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は27cmで、壁直下には上幅20～25cm、深さ10cmの壁溝が全周している。床は貼り床で、全体的に締まっており、カマドの前方から南壁際に至るまでは特に硬化している。床面はほぼ平坦であるが、土坑により攪乱されている。ピットは4か所を確認した。規模は上端直径が65cm、深さが58～66cmで、方形に配列されることから4本とも支柱穴と思われる。カマドは、北壁の中央部に付設されているが、裾部と天井部のほとんどが欠損している。カマドの全長は125cmで、横幅は110cmと推



第214图 第2号住居跡実測図



第215図 第2号住居跡カマド実測図

る攪乱を所々に受けている。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片177点、須恵器及びその破片67点、鉄製品2点と、カマド内から土師器片8点、須恵器片2点が出土している。本跡に伴う遺物は遺構全体に散在しており、北西コーナー部から第216図6の坏（須恵器）と13の用途不明の鉄製品が、東壁際の床面から5の坏（須恵器）と9の蓋（須恵器）等が出土している。南壁際の床面から2の坏（須恵器）と11の蓋（須恵器）がそれぞれ正位で出土している。また、カマド内から3の坏（須恵器）が完形で出土している。

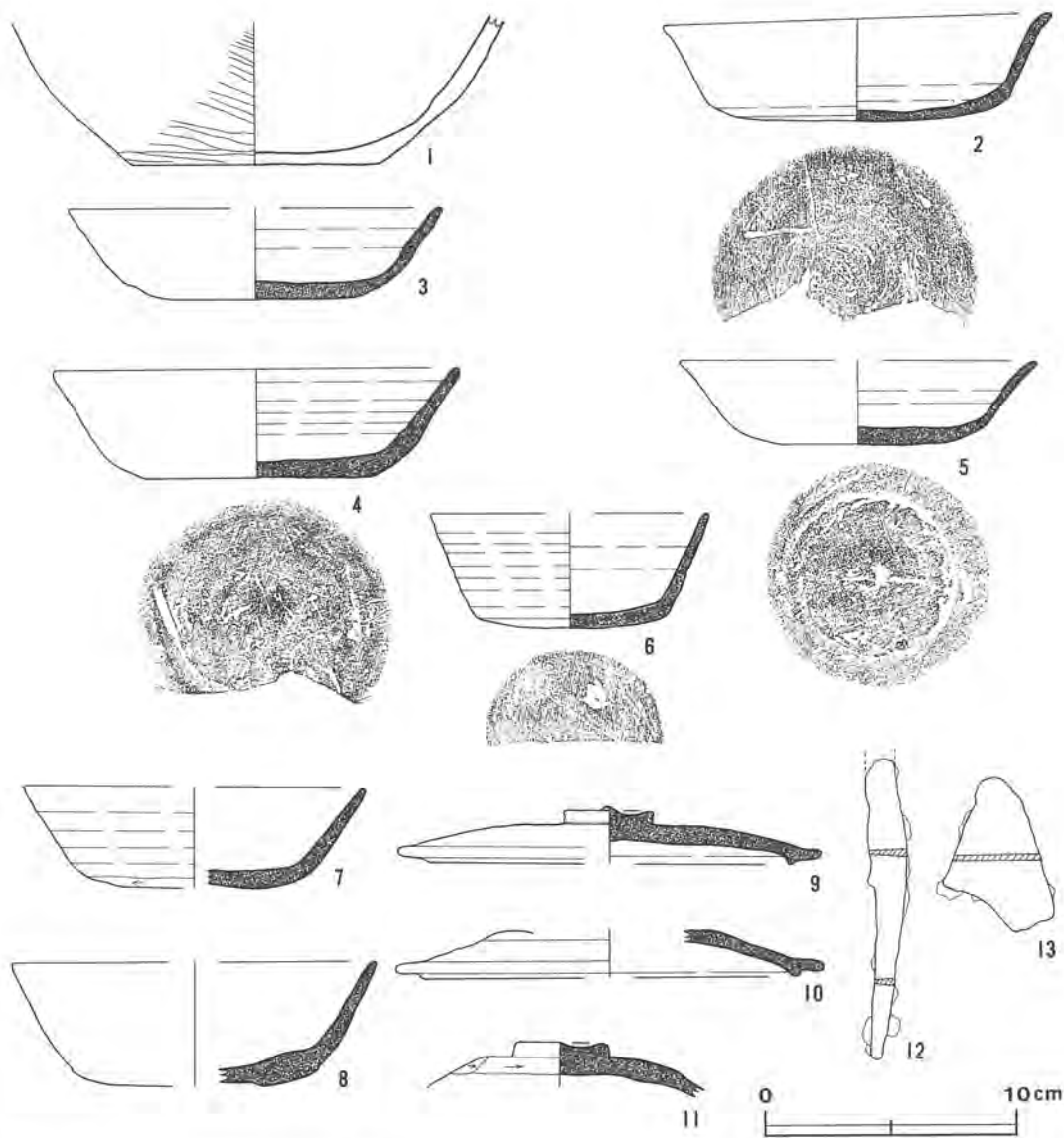
本跡は、遺物や遺構の形態等から8世紀代の住居跡と思われる。

第2号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第216図 1	甕 土師器	B 5.7 C 10.0	胴上半部欠損。胴部は内彎気味に外傾する。	胴部下位は斜位の窪磨き。底部木葉痕。	砂粒にぶい橙色普通	10% P95
2	坏 須恵器	A 15.6 B 4.4 C 10.0	丸底。体部下端は丸味を持ち、それ以上は外反して立ち上がる。口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は回転篋削り。回転方向は右。	砂粒・雲母・長石にぶい黄褐色普通	50% P96

定される。燃烧部の規模は長さ110cm、幅50cmで、壁面をわずかに掘り込み、煙道部は、奥壁を20cmほど掘り窪めて構築されている。残存する西側の裾部と煙道の一部は、砂質粘土によって構築されている。カマド内には、焼けた砂質の粘土や焼土ブロックを含むにぶい赤褐色土が主に堆積している。火床は床面から15cmほど掘り込まれ、レンガ状に焼き固まっている。

覆土は、基本的に締まりを持つ暗褐色土である。自然堆積層と思われるが、土坑によ



第216図 第2号住居跡出土遺物実測図

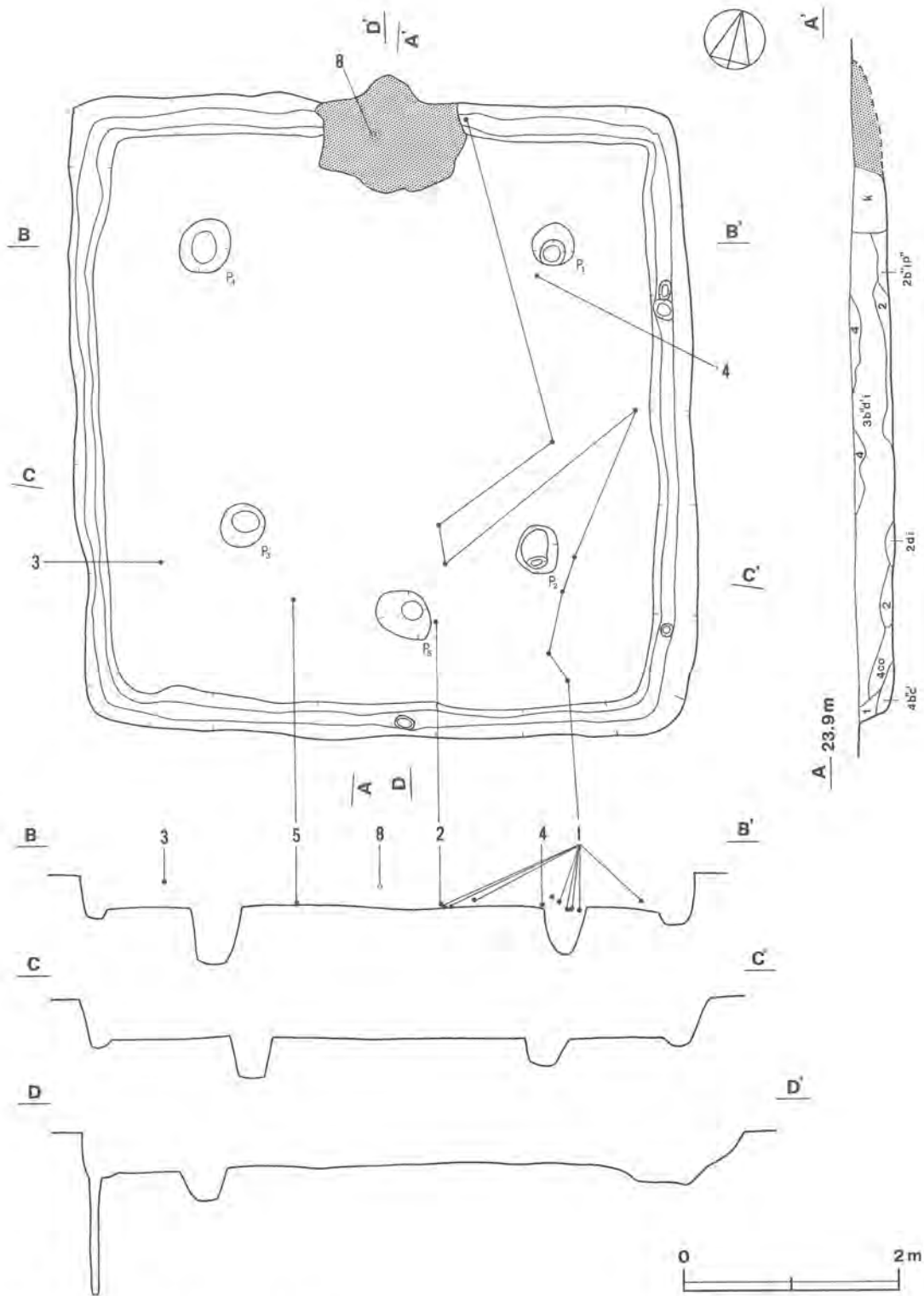
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第216図 3	須恵器	A [15.0] B 3.7 C [6.2]	丸底。体部下位は丸味を持ち、それ以上は外反気味に立ち上がる。口唇部はやや尖る。	水挽き成形。底部は回転篋切り後、回転篋削り。回転方向は右。	砂粒・雲母・長石にふい褐色普通	65% P97
4	須恵器	A [16.2] B 4.4 C 9.0	平底。体部下位は丸味を持ち、それ以上は外反気味に立ち上がる。口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は手持ち篋削り。回転方向は右。	砂粒・雲母・礫灰白色普通	45% P98

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第216図 5	坏 須恵器	A [14.2]	丸底。体部下端は丸味を持ち、 それ以上は外反して立ち上がる。 口唇部はやや尖る。	水挽き成形。底部は回転篋切り。	砂粒・雲母 にふい黄色 不良	50% P99
		B 3.4				
		C 8.0				
6	坏 須恵器	A [11.1]	丸底。体部は外傾して立ち上がり、 口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は手持ち篋削り。	砂粒 黄灰色 良好	45% P102 PL92
		B 4.7				
		C 7.4				
7	坏 須恵器	A [13.6]	丸底。体部下端は丸味を持ち、 それ以上は外反気味に立ち上がる。 口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は回転篋削り。 回転方向は右。	砂粒・雲母・長石 灰黄色 普通	40% P100
		B 4.0				
		C [8.6]				
8	坏 須恵器	A [14.6]	丸底。体部は外傾して立ち上がり、 口縁部に至る。口唇部はや や尖る。	水挽き成形。底部回転篋削り。 回転方向は右。	砂粒・雲母 灰黄色 普通	30% P101
		B (5.0)				
		C [10.0]				
9	蓋 須恵器	A [17.0]	つまみは環状で、中央部が高ま る。天井部は緩やかに内彎し段 を持って口縁部に移行する。内 面にかえりを持つ。	水挽き成形。天井部上位は回転 篋削り。つまみは貼り付け。回 転方向は右。	砂粒 橙色 普通	40% P103 PL92
		B 2.3				
		F 0.7				
		G 3.6				
10	蓋 須恵器	A [17.0]	つまみ欠損。天井部の上位は平坦で、 以下は外反気味に開く。 内面にかえりを持つ。	水挽き成形。天井部に篋切り痕 を残す。	砂粒・雲母 黄灰色 普通	25% P105 PL92
		B (1.9)				
11	蓋 須恵器	A [11.1]	つまみは環状で、中央部の高ま りは低い。天井部の上位は平坦 で以下は丸味を持つ。口縁部を 欠損。	水挽き成形。天井部上位は回転 篋削り。つまみは貼り付け。回 転方向は右。	砂粒・長石 黄灰色 普通	60% P104
		B (2.1)				
		F 0.6				
		G 3.8				

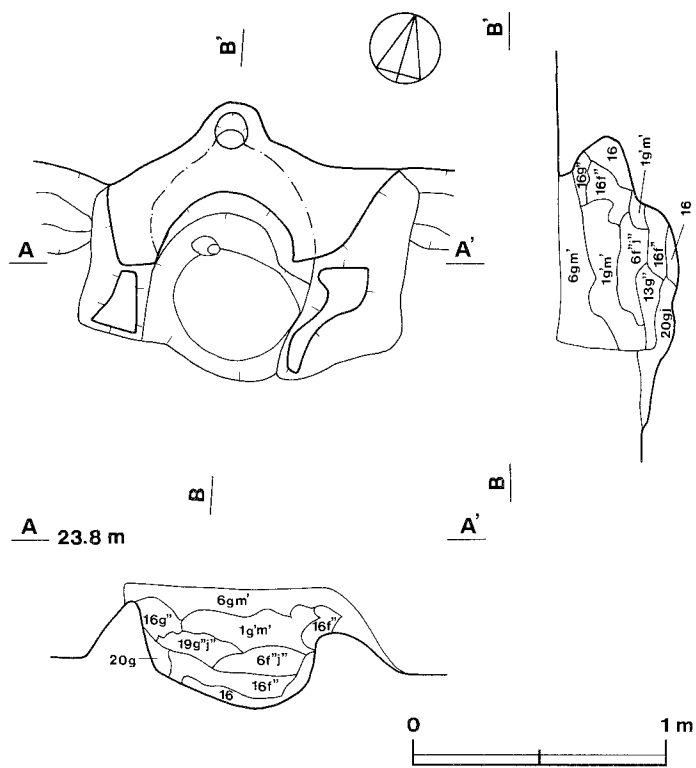
第10号住居跡（第217・218図）

本跡は、調査区の西部 N5a9 を中心に確認された住居跡である。本跡の北西 4 m には第 2 号住居跡が、南西 3 m には第 12 号住居跡が存在している。

平面形は、長軸 6 m、短軸 5.73 m の方形状を呈し、主軸方向は N-19°-W を指している。床面積は 30.2 m² である。壁は締まったロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は 37 cm で、壁直下には上幅 20~30 cm、深さ 10 cm の壁溝が全周している。東側の壁溝中には 3 か所、南側の壁溝中には 1 か所の小ピットが確認されている。小ピットの上端直径は 10~18 cm で、深さは東側の 3 か所が 15 cm 前後と浅いのに対し、南側の 1 か所だけは 112 cm と異常に深い。これらは覆土の状況から本跡に伴うものと考えられる。床は貼り床で、壁際まで硬く締まっている。床面は、ほぼ平坦で、カマドの前面は長さ 160 cm、幅 50 cm の長方形に攪乱を受けている。ピットは P₁~P₅ の 5 か所を確認した。規模は上端直径が 40~50 cm、深さが 27~53 cm である。方形に配列されている P₁~P₄ が支柱穴で、南壁際に位置する P₅ は入口部施設に関する柱穴と思われる。なお、支柱穴のうち北側に位置する P₁・P₄ は、南側に位置する 2 本より 10 cm 以上深く掘られている。カマドは、北壁の中央



第217图 第10号住居跡实测图



第218図 第10号住居跡カマド実測図

部に付設されている。天井部は崩落し西側の袖の先端部は攪乱を受けている。カマドの全長は110cm、横幅は130cmである。燃烧部の規模は長さ90cm、幅65cmで、壁面をわずかに掘り込む。煙道部は、U字形に掘り込んで構築されている。袖部・天井部及び煙道の上部は砂質の粘土によって構築され、カマド内の覆土は焼土ブロックや木灰等を含む赤褐色土が主に堆積している。火床は、床面から17cm掘り込まれ、レンガ状に焼き固まっている。

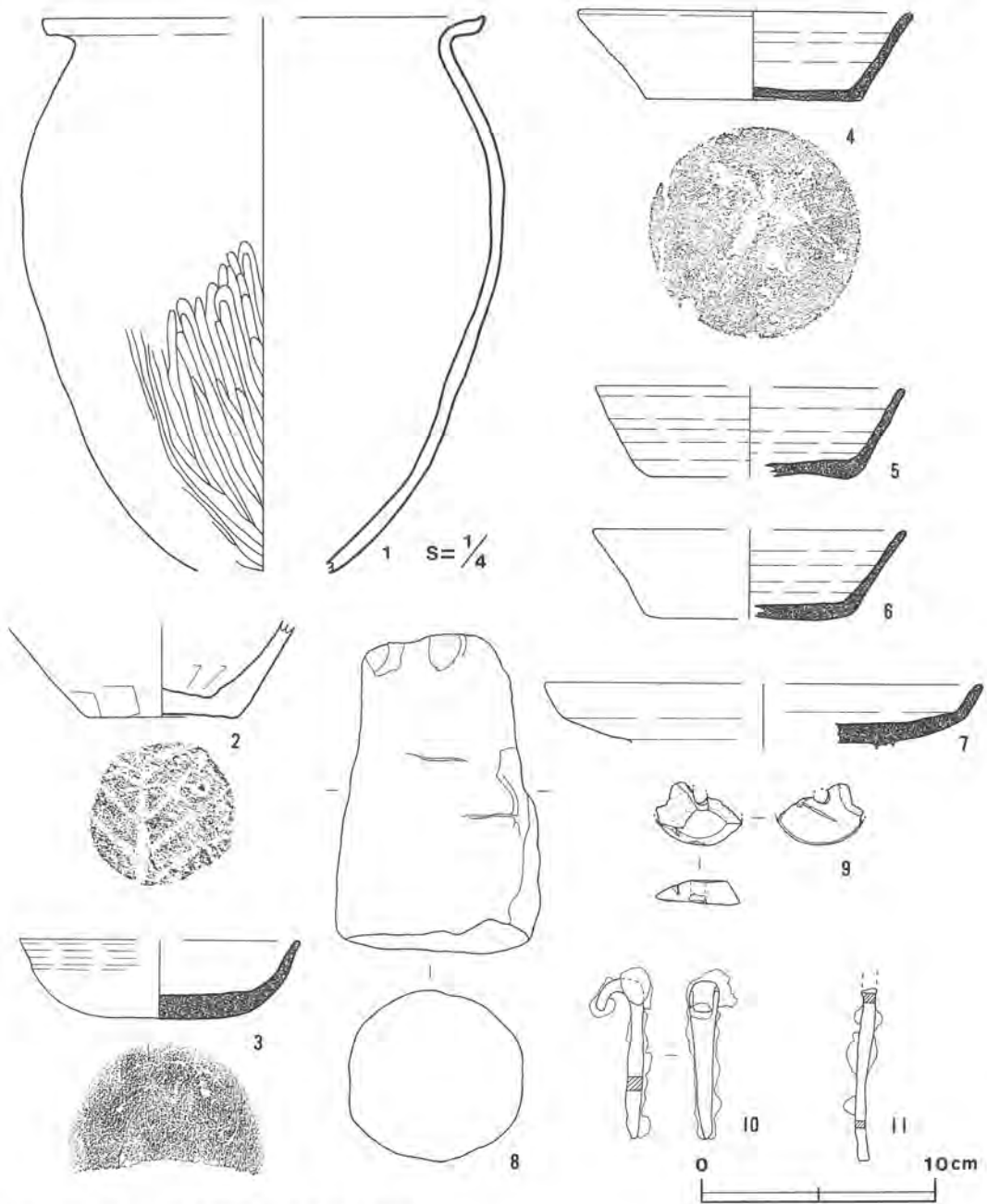
覆土は、上層に黒褐色土、中層に極暗褐色土、下層に暗褐色土が堆積しており、全体的に締まりは弱い。自然堆積層と思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及び土師器片506点、須恵器片154点、支脚1点、鉄製品(釘)2点、石製の紡錘車1点が出土している。本跡に伴う遺物は遺構全体に散在しており、須恵器には叩き目を持つ甕胴部片や盤の破片も含まれている。中央部の下層から第219図10・11の鉄製品が、北東部の床面から4の坏(須恵器)が正位で出土している。南東部の床面からは、2の甕(土師器)が、南西部の床面からは3・5の坏(須恵器)が出土している。

本跡は、遺物や遺構の形態等から8世紀代の住居跡と思われる。

第10号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第219図 1	甕 土師器	A (24.8) B (31.8)	底部欠損。胴部は長胴形で、最大径を上位に持つ。口縁部は強く外反し、端部は直立する。	口縁部内・外面は横ナデ整形。胴部外面下半部は斜位の篋磨き。	砂粒・雲母・長石 橙色 普通	40% P106



第219図 第10号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第219図 2	甕 土師器	B (3.9) C 6.4	上げ底。胴部は外傾して立ち上がる。中位以上を欠損。	胴部下位は横位の篋削り。内面は篋ナデ整形。底部木葉痕。	砂粒・スコリア に よ り 橙 色 普 通	10% P107

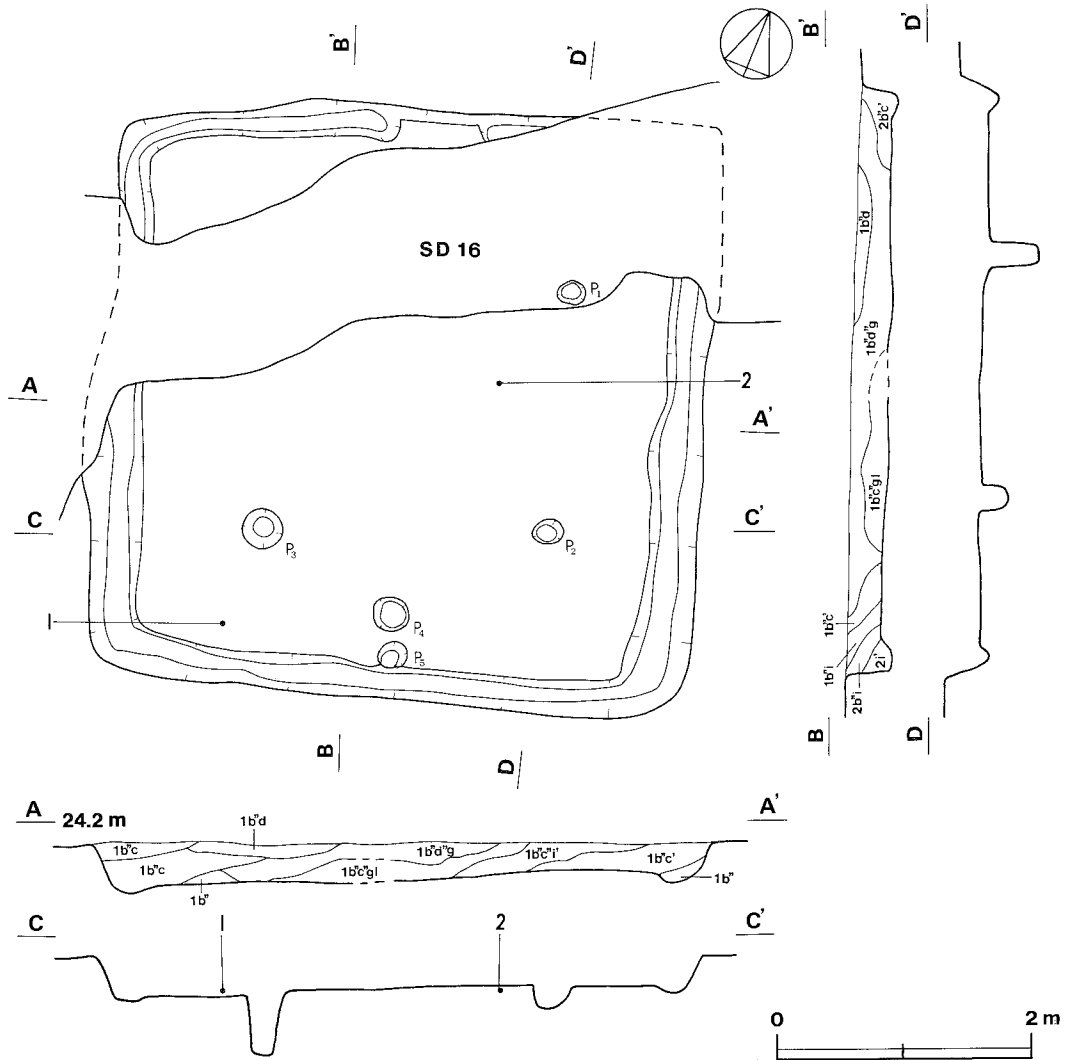
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第219図 3	坏 須恵器	A [12.0] B 3.4 C 5.0	底部は分厚く、丸底。体部は丸味を持ち、底部から連続して立ち上がる。口縁部は外反して開き、口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は回転篋削り。	砂粒 灰黄色 良好	50% P113
4	坏 須恵器	A 14.3 B 3.9 C 9.2	平底。体部と底部との境に鋭い稜を持つ。体部は外反して立ち上がり、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は手持ち篋削り。	砂粒・パミス 灰色 普通	80% P109 PL92
5	坏 須恵器	A [13.4] B 3.9 C [8.6]	平底で、底面は凹凸が激しい。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は手持ち篋削り。	砂粒 灰黄色 良好	20% P111
6	坏 須恵器	A [13.4] B 3.9 C [9.0]	丸底。体部と底部との境に鋭い稜を持つ。体部は外反して立ち上がり口縁部に至る。	水挽き成形。底部は不定方向の手持ち篋削り。	石英・長石 灰色 良好	40% P112
7	盤 須恵器	A [18.8] B (2.8)	底部、高台部を欠損。体部は内彎気味に大きく開く。口縁部は稜を持って体部と分かれ、外傾して開く。口唇部はやや尖る。	水挽き成形。体部下位から底部にかけては回転篋削り。回転方向は右。	砂粒 黄灰色 普通	10% P114

第11号住居跡（第220図）

本跡は、調査区の西部 N5e8 を中心に確認された住居跡で、北部は北東—南西に延びる第16号溝によって大きく掘り込まれている。本跡の北 4 m には第12号住居跡が、東 9 m には第 9 号住居跡が存在している。

平面形は、長軸4.78m、短軸4.72mの方形状を呈し、主軸方向はN—4°—Wを指している。床面積は、18.0m²ほどと思われる。壁はロームで、75度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は23～27cmで、北壁際の65cm幅を除いて、壁直下には上幅15～20cm、深さ10cmの壁溝が周回している。床面の西部から北東コーナー部にかけては、第16号溝により1.1～1.4mの幅で掘り込まれている。残存する床面は、平坦で硬く締まっている。ピットはP₁～P₅の5か所を確認した。支柱穴はP₁～P₃で、上端直径が25～30cm、深さが23～52cmである。北西部の床面は第16号溝に掘り込まれているため柱穴の確認はできなかったが、本来はこの部分にも柱穴が存在し、支柱穴は方形に配列されていたものと思われる。P₄・P₅は、南壁際の床面に南・北に並んで位置しており、入口部の施設に関する柱穴と思われる。上端直径は2本とも25cmで、深さはP₄が32cm、P₅が14cmで、南側の柱穴が浅くなっている。カマドは、壁溝が切れる北壁の中央部に付設されていた可能性が高いが、第16号溝や農耕による攪乱を受けているため、確認することはできなかった。

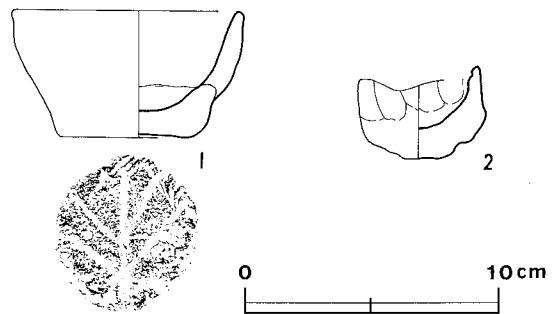
覆土は、ロームブロック・炭化材・焼土等を多量に含む褐色土が一様に堆積している。人為的な



第220図 第11号住居跡実測図

埋め戻しが行われ、炭化材や焼土はその際に投げ入れられたものと思われる。

遺物は極めて少なく、床面や覆土中から土師器及び土師器片23点、手捏土器1点、球状土錘片1点が出土しただけである。本跡に伴う遺物は、南西コーナー付近の床面から出土した第221図1の塊（土師器）と、2の手捏土器だけである。なお、球状土錘の小片は覆土中から出土したもので、本跡



第221図 第11号住居跡出土遺物実測図

に伴うか否かは不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から 8 世紀代の住居跡と思われる。

第11号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第221図 1	埴 土師器	A [9.2] B 5.0 C 5.2	底部は引き締まり突出する。体部は内彎して開き、口縁部に至る。	口縁部は横ナデ整形。体部内・外面は粗雑なナデ整形で、内面に輪積痕を残す。底部木葉痕。	砂粒 にぶい黄橙色 不良	80% P232
2	手捏土器 (埴形) 土師器	A 4.8 B 3.7	半球状を呈し、肉厚である。	手捏成形で、内・外面に指圧痕が残る。	砂粒 橙色 普通	100% P233 PL90

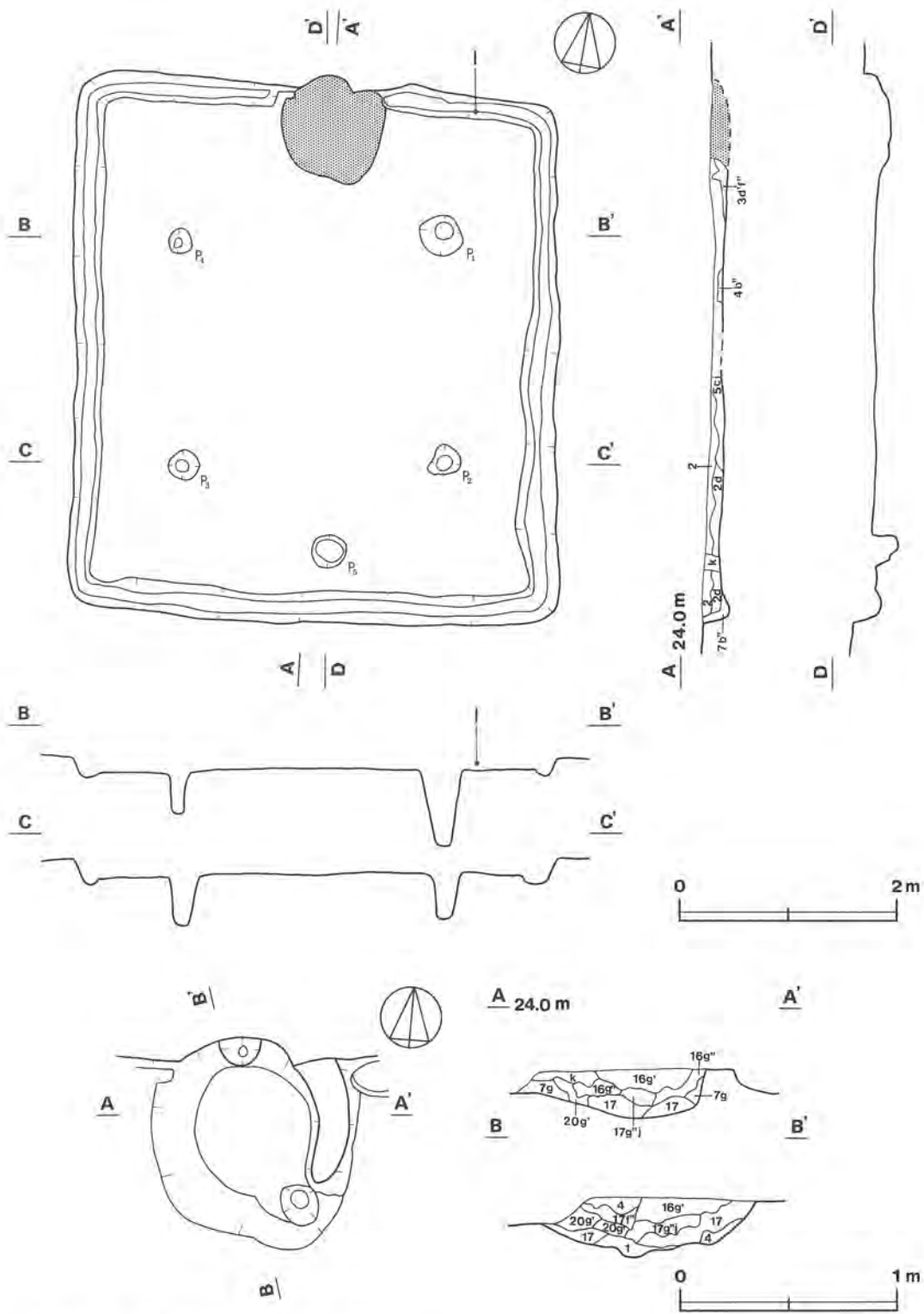
第12号住居跡 (第222図)

本跡は、調査区の西部 N5c8区を中心に確認された住居跡である。本跡の北東 3 m には第10号住居跡が、南14m には第14号住居跡が存在している。

平面形は、長軸4.48m、短軸4.41m の方形状を呈し、主軸方向はN-5°-Wを指している。床面積は19.8m²である。壁は締まりの弱いロームで、壁高は10cmと低いため、立ち上がりの状況等については不明である。壁直下には、上幅15~20cm、深さ5~8cmの浅い壁溝が全周している。床はロームで、カマドの前面から南壁際にかけては硬く踏み締まっている。床面は平坦であるが、所々に攪乱を受けている。ピットはP₁~P₅の5か所を確認した。主柱穴と思われるP₁~P₄は、上端直径が22~35cm、深さが40~71cmで、方形に配列されている。P₅は、上端直径が30cm、深さが28cmと浅く、南壁際に位置することから入口部施設に関する柱穴と思われる。カマドは、北壁の中央部に付設されている。天井部と西袖部を欠損し、焚口部は直径20cmのピットによって攪乱を受けている。カマドの全長は90cm、横幅は100cm、主軸方向はN-18°-Wを指すものと推定される。燃烧部の規模は長さ85cm、幅70cmと推定され、壁面は掘り込んでいない。煙道部は、奥壁をわずかに掘り窪めて構築されている。残存する東側の袖部は砂質の粘土によって構築され、カマド内には焼土を多量に含む暗赤褐色土が主に堆積している。火床は、床面から10cm掘り込まれ、レンガ状に焼き固まっている。

覆土は、ロームブロック少量を含む黒色土であるが、掘り込みが浅い上に攪乱が多いため、堆積状況については不明である。

遺物は、床面や覆土中から土師器片93点、須恵器片4点、手捏土器1点と、カマド内から土師器片9点、須恵器片6点が出土している。本跡に伴う遺物は東と南の壁際に散在しているだけであるが、その中には底部に木葉痕を持ち、胴下半部に篋磨きが施された甕(土師器)の破片や、



第222図 第12号住居跡・カマド実測図

内側に返りを持つ蓋（須恵器）の破片が含まれている。第223図1の手捏土器はカマド東側の壁溝上から出土したもので、本跡に伴う遺物と考えられる。



本跡は、遺物や遺構の形態等から8世紀代の住居跡と思われる。

第223図
第12号住居跡
出土遺物実測図

第12号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第223図 1	手捏土器 (塊形) 土師器	A 3.5 B 2.4	半球状を呈し、肉厚である。	手捏成形で、内面に指圧痕が残る。	砂粒・スコリア 明赤褐色 良好	100% P115 PL90

第13号住居跡（第224図）

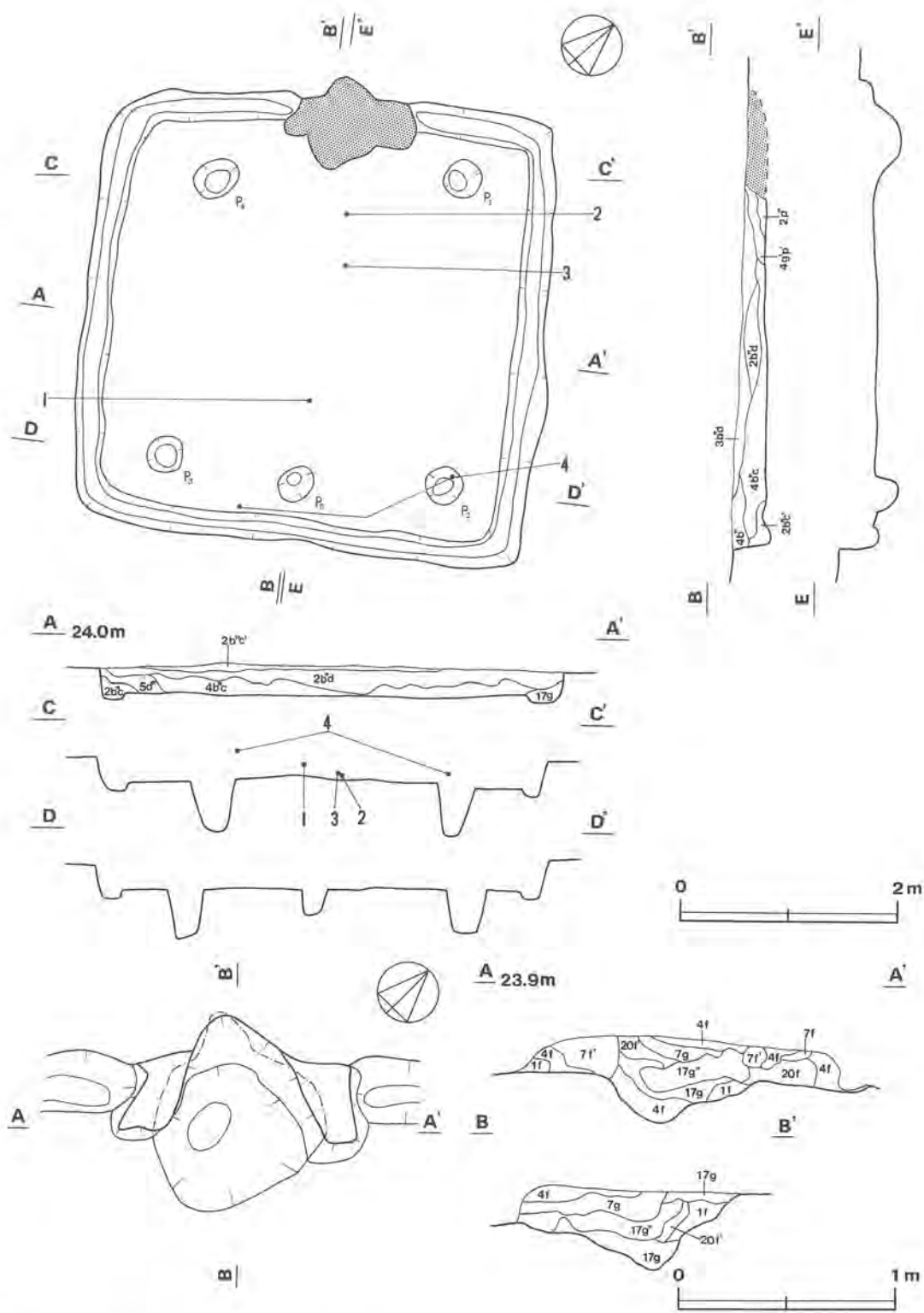
本跡は、調査の西部 N5a5 区を中心に確認された住居跡である。本跡の東 4 m には第 2 号住居跡が、南東 8 m には第 12 号住居跡が存在している。

平面形は、一辺が 4.24m の方形状を呈し、主軸方向は N-39°-W を指している。床面積は 15.5 m² である。壁はロームで、75度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は 22~25cm で、壁直下に上幅 16~26cm、深さ 5~10cm の壁溝が全周している。床は壁際まで硬く締まったロームで、床面は細かく起伏している。ピットは P₁~P₅ の 5 か所を確認した。支柱穴と思われる P₁~P₄ は、上端直径が 35~40cm、深さが 45~50cm とほぼ同規模で、方形に配列されている。P₅ は、上端直径が 35cm、深さ 27cm で、南東壁際に位置することから入口部施設に関する柱穴と思われる。カマドは、北西壁の中央部に付設されているが、天井部と袖部の先端は崩壊している。カマドの全長は 90cm、横幅は 110cm である。燃焼部の規模は長さ 70cm、幅 70cm で、壁面は掘り込んでいない。煙道部は奥壁を 20cm 掘り込み、壁の外側に位置している。袖部は砂質の粘土によって構築され、カマド内には焼土を多量に含む暗褐色土が主に堆積している。火床は、床面から 20cm 掘り込まれ、レンガ状に焼き固まっている。

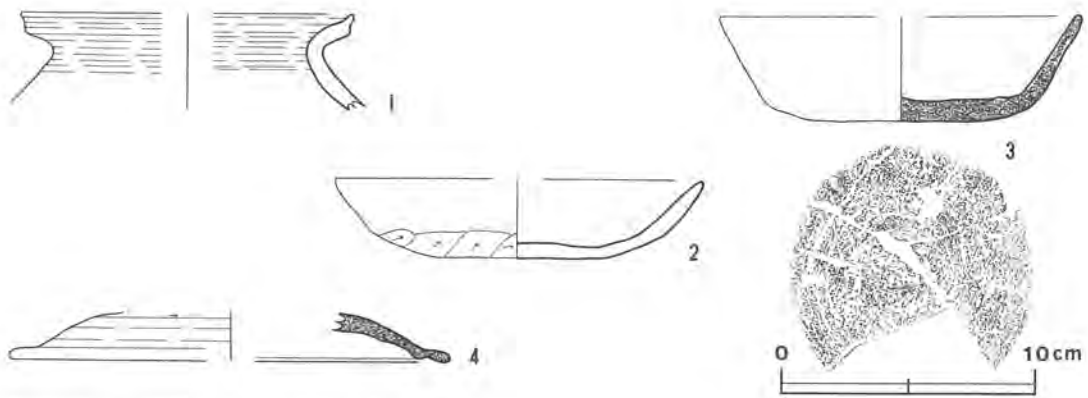
覆土は、上層に暗褐色土、下層に黒褐色土が堆積している。自然堆積層と思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片 250 点、須恵器及びその破片 31 点が出土している。本跡に伴う遺物は、カマド前方と南壁側に多く散在しており、土師器片には胴下半部に篋磨きが施された甕等が含まれている。第 225 図の 2 の坏（土師器）と 3 の坏（須恵器）は、カマド前方の床面から、1 の甕（土師器）と 4 の蓋（須恵器）は南壁側から出土したものである。

本跡は、遺物や遺構の形態等から 8 世紀代の住居跡と思われる。



第224図 第13号住居跡・カマド実測図



第225図 第13号住居跡出土遺物実測図

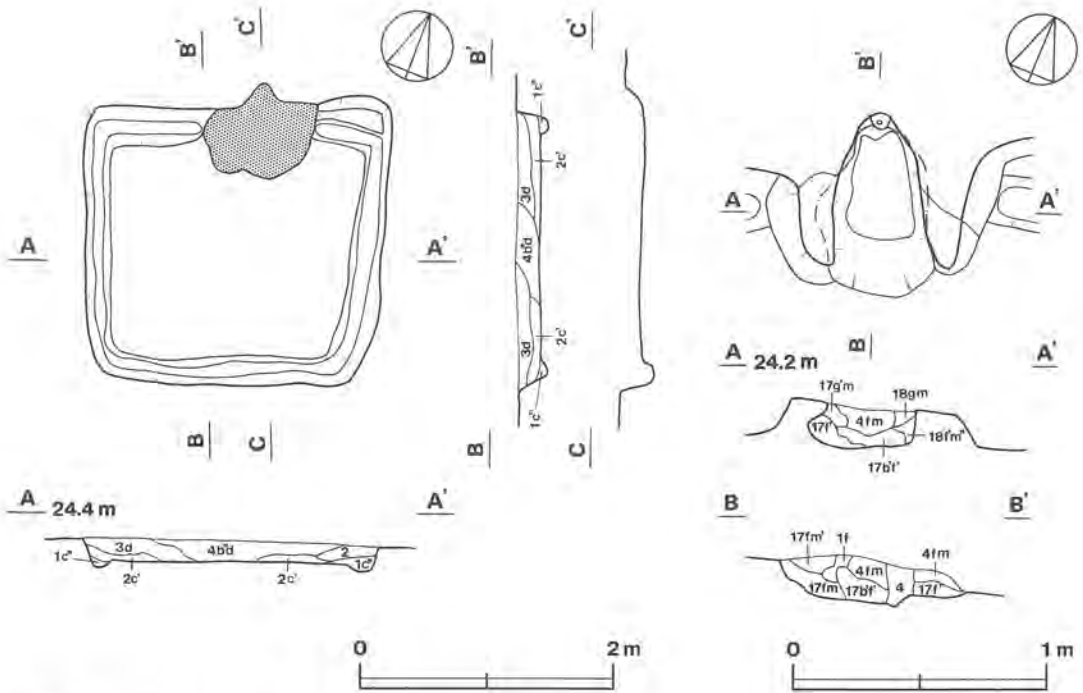
第13号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第225図 1	甕 土師器	A (13.1) B (3.7)	口縁部片。口縁部は強く外反し、 端部を外上方へつまみ上げる。	口縁部内・外面は横ナデ整形。	砂粒 橙色 普通	10% P116
2	坏 土師器	A (14.4) B 3.2	丸底。体部は内彎気味に開き、 口縁部に至る。口唇部はやや尖 る。	体部及び底部は不定方向の手持 ち篋削り。	砂粒・スコリア 橙色 普通	20% P117
3	坏 須恵器	A (14.4) B 4.2 C 7.0	丸底。体部は外傾して開き、口 縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は回転篋削り。	砂粒・長石 黄灰色 普通	40% P118
4	蓋 須恵器	A (17.4) B (1.9)	つまみ欠損。天井部は丸味を持 ち、段を持って口縁部に移行す る。内面にかえりを持つ。	水挽き成形。天井部上位は回転 篋削り。	砂粒・雲母 灰色 良好	10% P119

第14号住居跡 (第226図)

本跡は、調査区の南西部 N5g8区を中心に確認された小形の住居跡である。本跡の北14m には第12号住居跡が、東10m には第17号住居跡が存在している。

平面形は、南辺が北辺より15cmほど長い方形状を呈し、長軸は2.31m、短軸は2.2m である。主軸方向はN-20°-Wを指し、床面積は4.1㎡である。壁は締まりの弱いロームで、75~80度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は20cmと低く、壁直下には上幅20cm、深さ10cmの壁溝が全周している。床は、軟弱なロームで、平坦である。ピットは検出できなかった。カマドは、北壁の北東コーナー部寄りに付設されている。天井部は全て欠損している。カマドの全長は75cm、横幅は80cmである。燃焼部の規模は長さ65cm、幅40cmで、壁面を12cm奥に掘り込み、煙道部は奥壁をさらに10cmほど掘り窪めている。袖部は砂質の粘土によって構築されており、東側の袖の一部



第226図 第14号住居跡・カマド実測図

は、壁部を半島状に掘り残して利用している。カマド内には暗赤褐色土が主に堆積しているが、覆土中に含まれる焼土の量は少ない。火床は、床面からわずかに掘り込まれ、あまり焼けていない。

覆土は、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積している。自然堆積層と思われる。

遺物は、出土していないため本跡の時期は明らかではないが、遺構の形態等から8～10世紀代の遺構と推定される。

第16号住居跡（第227図）

本跡は、調査区の西部 N6d₃ 区を中心に確認された住居跡で、北西部は第17号溝によって掘り込まれている。本跡の北西11mには第10号住居跡が、南西7mには第17号住居跡が存在している。

平面形は、長軸5.13m、短軸4.9mの方形状を呈し、主軸方向はN-26°-Wを指している。床面積は23.2m²である。壁はロームで、70度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は20cmで、壁直下には上幅15～20cm、深さ10cmの壁溝が全周している。床は貼り床で、壁際まで硬く締まっており、P₁～P₄に囲まれた範囲は踏み締まりも加わり、一層硬化している。床面は、緩やかに起伏し、西コーナー部からカマドの前部にかけては、第17号溝によって攪乱を受けている。ピットはP₁～P₅の5か所を確認した。規模は上端直径が25～50cm、深さは30～50cmで、方形に配列さ

れている P₁～P₄が支柱穴、南壁際に位置している P₅が入口部施設に関する柱穴と思われる。カマドは、北西壁の中央部からわずかに北に寄って位置しており、天井部は崩落している。カマドの全長は80cm、横幅は110cmである。燃焼部の規模は、長さ・幅とも70cmで、壁面は掘り込んでいない。煙道部は壁面をわずかに掘り込んで構築されている。袖部と天井部は砂質の粘土によって構築され、カマド内には焼土を多量に含む暗赤褐色土が主に堆積している。火床は、床面と同じ高さで、硬く焼き固まっている。

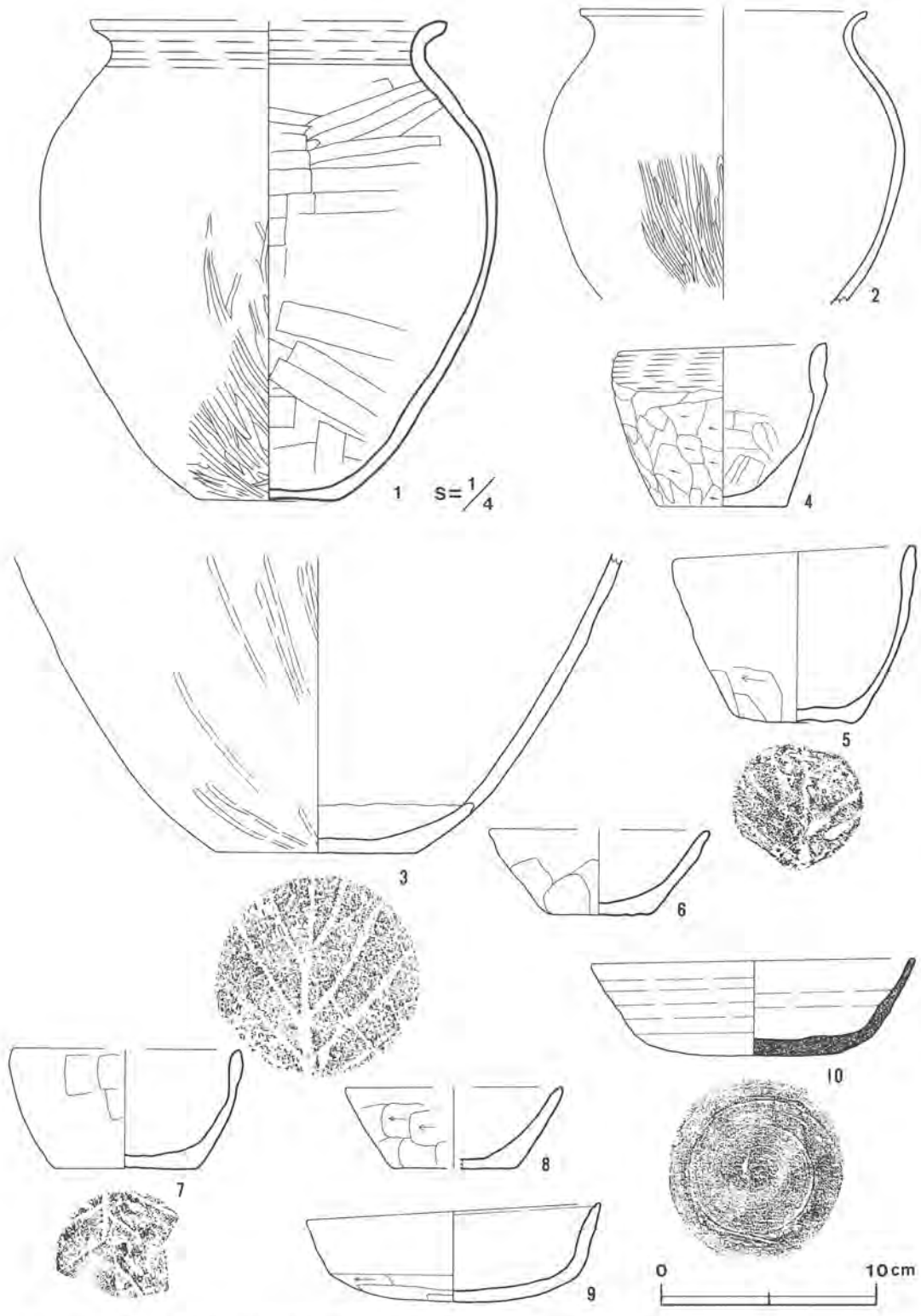
覆土は、上層に暗褐色土、中層に黒褐色土、下層に暗褐色土がレンズ状に堆積している。自然堆積層と思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及び土師器片108点、須恵器及び須恵器片29点と、カマド内から土師器片2点が出土している。本跡に伴う遺物は、北と東のコーナー部に多く集中しており、土師器には底部に木葉痕を持ち胴下半部に篋磨きが施された甕の破片が多く含まれている。中央部の床面から第222図13の蓋が、カマドの西側から第228図3の甕（土師器）が出土し、北コーナー部の床面から4・5の鉢（土師器）や第229図11の坏（須恵器）が出土している。東コーナー部からは2の甕（土師器）、6・9の坏（土師器）、10・12の坏（須恵器）、14の蓋（須恵器）が出土している。なお、1の甕（土師器）は、北コーナー部とそこから3.8mほど離れた南西部床面から出土した破片が互いに接合したものである。

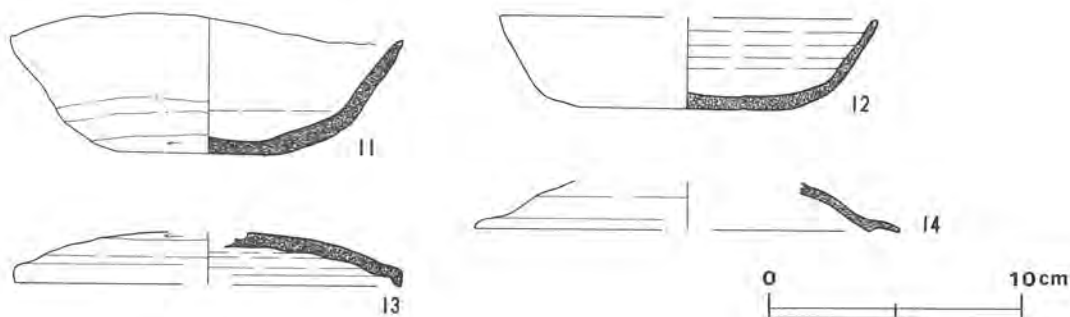
本跡は、遺物や遺構の形態等から8世紀代の住居跡と思われる。

第16号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第228図 1	甕 土師器	A 21.9 B 29.8 C 8.4	胴部は長胴形で、最大径を上位ち持つ。口縁部は外反し、端部は直立する。	口縁部は横ナデ整形。胴下半部は縦又は斜位の篋磨き。内面は横位の篋ナデ整形。底部木葉痕。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	40% P120
2	甕 土師器	A 26.4 B (29.8)	底部欠損。胴部は長胴形で、最大径を上位に持つ。口縁部は外反し、末端は直立する。口唇部をわずかにつまみ上げる。	胴部外面上位に篋当て痕、下半部は斜位の篋磨き。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	50% P121
3	甕 土師器	B 13.7 C 9.4	胴部は内甕気味に開くが、上半部を欠損。	胴下半部外面は斜位の篋磨き。底部木葉痕。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	30% P122
4	鉢 土師器	A 9.5 B 7.5 C 6.0	胴部は外傾して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面は横ナデ整形。胴部外面は横位の篋削り、内面は指ナデ整形。底部木葉痕。	砂粒 褐色 普通	95% P123
5	鉢 土師器	A 11.4 B 8.3 C 6.7	平底。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	胴部外面下位は篋削り。底部木葉痕。	砂粒 暗褐色 普通	60% P124



第228図 第16号住居跡出土遺物実測図(1)



第229図 第16号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第228図 6	坏 土師器	A (10.2) B 4.0 C 4.6	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面は横ナデ整形。体部外面は篋削り。底部木葉痕。	砂粒 灰褐色 普通	25% P126
7	鉢 土師器	A (10.6) B 5.6 C (6.6)	上げ底。胴部は内彎して開く。口縁部内面は膨らみ、厚い。	胴部外面は篋削り。底部木葉痕。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	30% P125
8	坏 土師器	A (10.2) B 3.8 C (5.8)	平底。胴部は内彎気味に開き、口縁部に至る。	胴部外面は篋削り。底部木葉痕。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	20% P127
9	坏 土師器	A 13.7 B 4.6 C 11.5	丸底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。口唇部は尖る。	水挽き成形。底部不定方向の手持ち篋削り。	砂粒・スコリア 橙色 普通	80% P128 PL91
10	坏 須恵器	A 15.0 B 4.6 C 9.2	丸底。体部下端は丸味を持つ。それ以上は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は回転篋削り。回転方向は左。	砂粒 灰白色 普通	75% P130
第229図 11	坏 須恵器	A (15.5) B 5.5 C 2.4	丸底。体部下端は丸味を持つ。それ以上は外反気味に立ち上がり、口縁部に至る。口唇部はやや尖る。全体の形は著しく歪む。	水挽き成形。底部は回転篋削り。回転方向は右。	長石 灰色 良好	85% P129 PL92
12	坏 須恵器	A (15.0) B 2.7 C 8.2	平底。体部下端は屈曲し、外傾して立ち上がる。口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は回転篋切り後、回転篋削り。回転方向は右。	砂粒・雲母 黄灰色 普通	40% P131
13	蓋 須恵器	A (15.4) B (2.1)	つまみ欠損。天井部は丸味を持つ。口縁部は折り返され、開き気味に垂下する。	水挽き成形。天井部外面上位は回転篋削り。回転方向は右。	砂粒・雲母 黄灰色 良好	10% P132
14	蓋 須恵器	A (16.8) B (1.9)	口縁部片。口縁部は内彎して開く。内面に断面三角形のかえりを持つ。	水挽き成形。	砂粒・雲母 黄灰色 良好	10% P133

第17号住居跡（第230図）

本跡は、調査区の南西部N6f区を中心に確認された住居跡である。本跡の北東7 mには第16号住居跡が、北西9 mには第11号住居跡が存在している。

平面形は、長軸4.1m、短軸3.73mの方形状を呈し、主軸方向はN-8°-Wを指している。床面積は12.8㎡である。壁はロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は47cmで、壁直下には上幅20cm、深さ5cmの浅い壁溝が全周している。床はロームで、壁際まで踏み締まり、床面は平坦である。ピットはP₁~P₆の5か所を確認した。規模は上端直径が25~35cm、深さはP₁~P₄が35~55cm、P₅が15cmで、P₁~P₄は方形に配列されていることから支柱穴、P₅は南壁際に位置することから入口部施設に関する柱穴と思われる。カマドは、北壁の中央部に付設されており、天井部は崩落している。カマドの全長は115cm、横幅は120cmで、主軸方向はN-18°-Wを指している。燃焼部の規模は、長さ90cm、幅50cmで、壁面は掘り込んでいない。煙道部は、奥壁を40cmほど円筒形状に掘り込んで構築されている。袖部・天井部及び煙道の上部は、砂質の粘土によって構築され、カマド内には、焼土ブロックを多量に含む暗赤褐色土が主に堆積している。火床は、床面から10cm窪み、レンガ状に焼き固まっている。

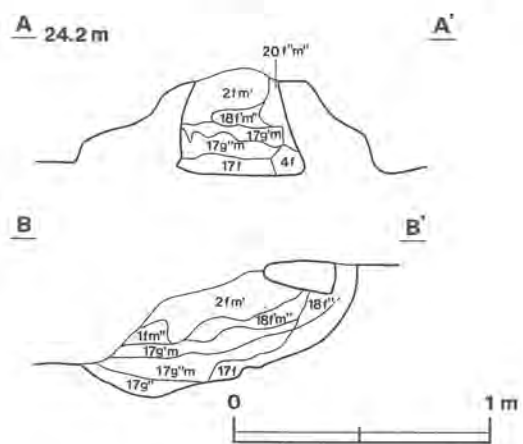
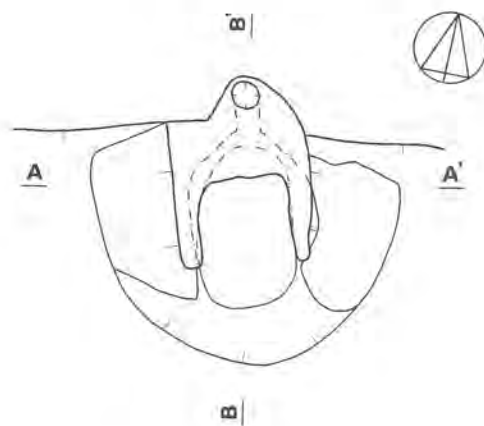
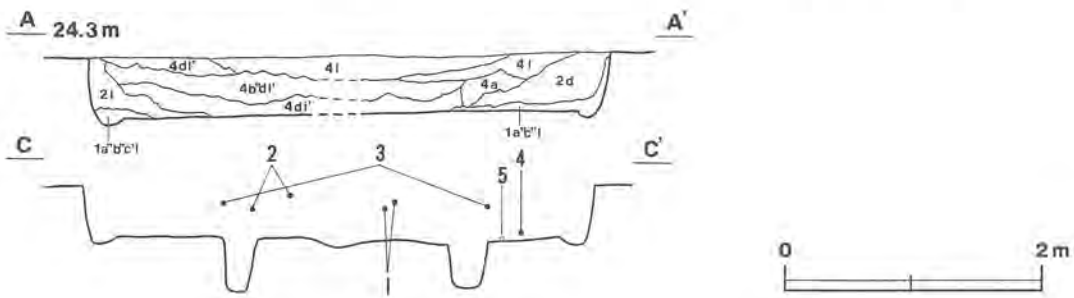
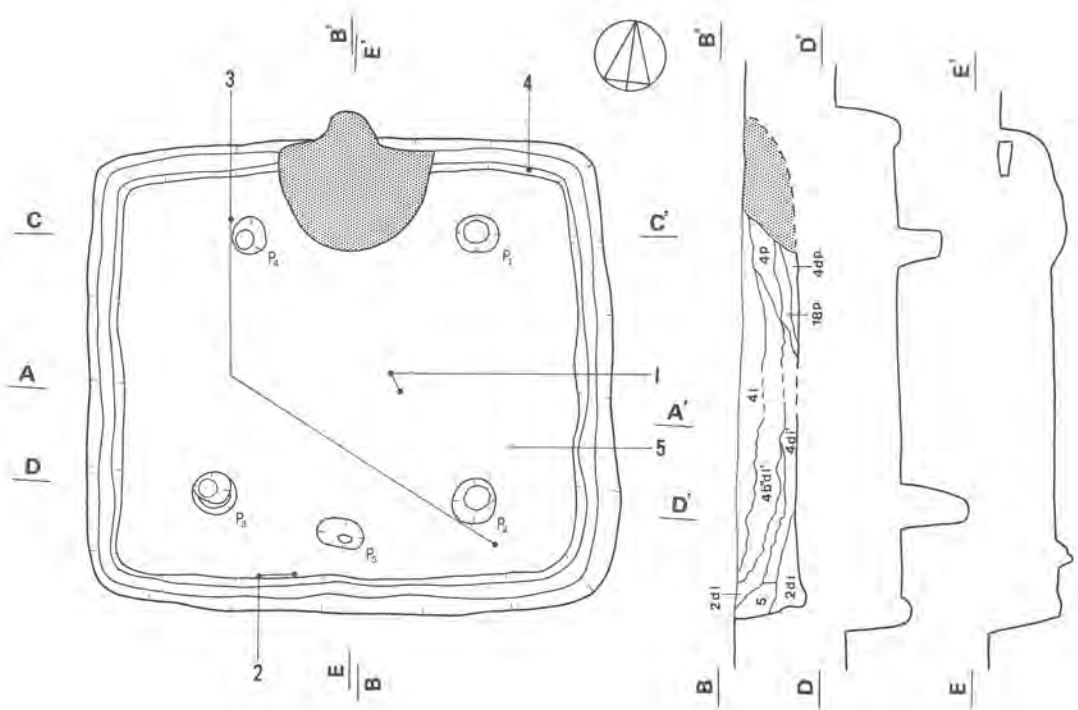
覆土は、上層から下層まで黒褐色土で、中層にはロームブロック多量を、下層には焼土粒子多量を含んでいる。自然堆積層と思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片117点、須恵器及びその破片22点、鉄製品（釘）1点が出土している。遺物の多くは覆土中層から出土しており、胴下半部に篋磨きが施された土師器の甕破片が主である。第231図4の坏（須恵器）は北東コーナー部の下層から、5の釘は東壁近くの床面から出土したもので、いずれも本跡に伴う遺物と思われる。カマド西側から出土した3の甕（土師器）や中央部から出土した1の甕（土師器）、南壁際から出土した2の甕（土師器）は、いずれも中層から上層にかけての出土であり、本跡に伴う可能性は高いが断定はできない。

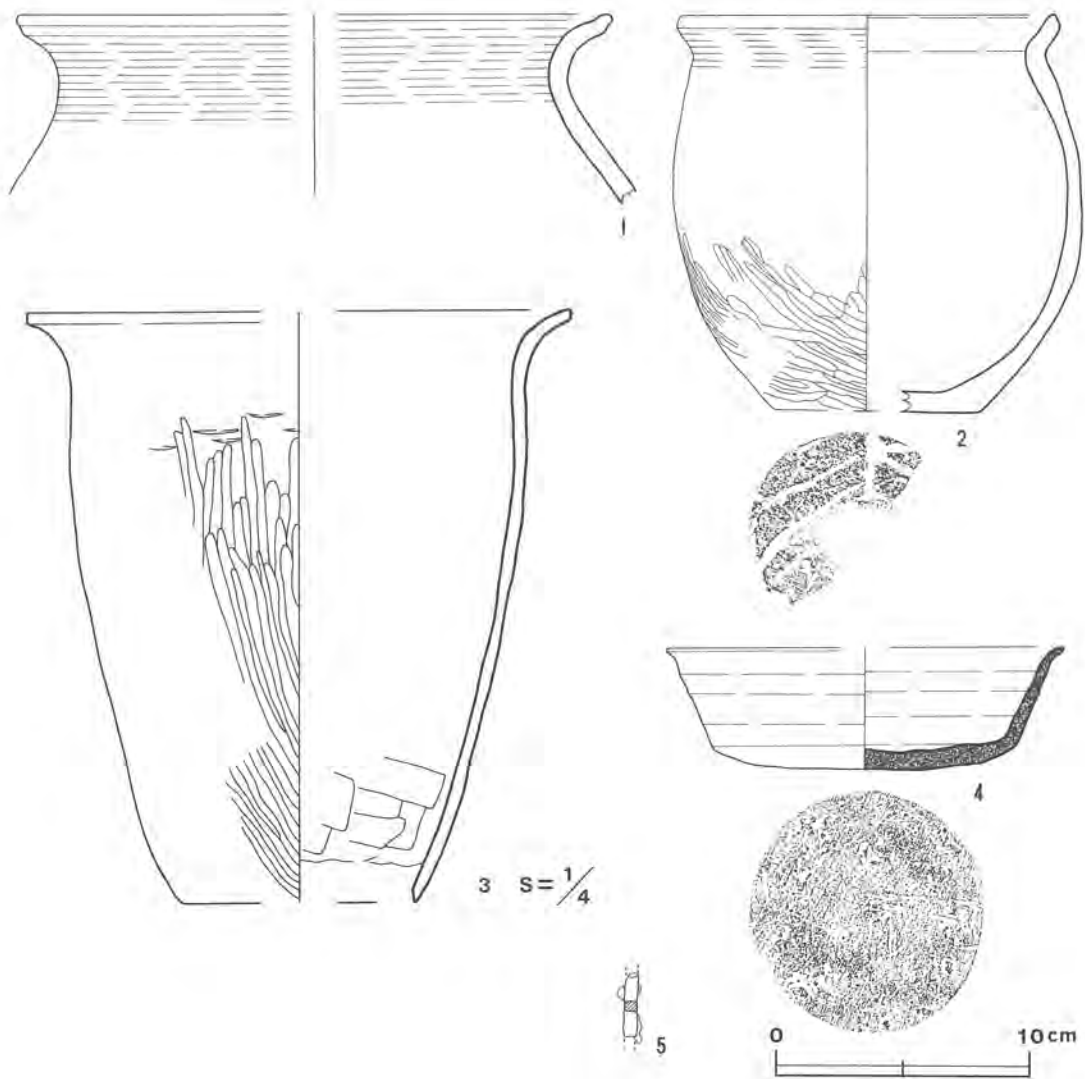
本跡は、遺物や遺構の形態等から8世紀代の住居跡と思われる。

第17号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第231図 1	甕 土師器	A [23.4] B (7.1)	口縁部片。口縁部は外反し、端部を外上方につまみ出す。	口縁部内・外面は横ナデ整形。	砂粒・雲母・長石 スコリア にぶい橙色 良好	20% P135
2	甕 土師器	A 14.7 B 15.7 C [8.2]	胴部は内彎気味に外傾し、最大径を中位に持つ。口縁部は外反して開き、端部は直立する。	内・外面ともナデ整形で、胴部外面下半部は斜位の篋磨き。底部木葉痕。	長石 橙色 普通	60% P134



第230図 第17号住居跡・カマド実測図



第231図 第17号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第231図 3	甌 土 甌 器	A [28.4] B 31.3 C [12.2]	底部は開口する。胴部は長胴形で、底部から直線的に立ち上がる。口縁部は外反し、端部を外上方につまみ出す。	口唇部内・外面は横ナデ整形。胴部は斜位の筥磨きで、上位に筥当て痕を残す。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	20% P136
4	坏 須 恵 器	A [15.6] B 4.8 C 9.6	丸底。体部下端は屈曲し、外反気味に立ち上がる。口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は回転筥切り後、不定方向の手持ち筥削り。回転方向は右。	砂粒・雲母 にぶい黄色 普通	70% P137 PL92

第18号住居跡（第232図）

本跡は、調査区の南西部 N6h1 区を中心に確認された住居跡である。本跡の北 6 m には第17号住居跡が、南東 6 m には第21号住居跡が存在している。

平面形は、長軸4.21m、短軸3.76m の方形状を呈し、主軸方向はN-80°-Eを指している。床面積は14.2㎡である。壁はロームで、60~70度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は20cmで、壁直下には上幅20~25cm、深さ5cmの浅い壁溝が全周している。床はロームで、カマドの前面から南壁際にかけては硬く踏み締まり、床面は平坦である。ピットはP₁~P₄の4か所を確認した。P₁~P₃は上端直径が30cm、深さが35~60cmで、南東コーナーを除く各コーナー部に位置しており、支柱穴と思われる。P₄は上端直径30cm、深さ28cmで、東壁際に位置することから入口部施設に関する柱穴と思われる。カマドは、西壁の中央部からわずかに北に寄って位置しており、天井部は崩落している。全長・横幅とも90cmで、主軸方向はN-95°-Wを指している。燃焼部の規模は、長さ65cm、幅50cmで、壁面は掘り込んでいない。煙道部は、奥壁を円筒状に25cmほど掘り込んで構築されている。カマド内には、焼土を多量に含む暗褐色土が主に堆積している。火床は、床面から15cm掘り込まれ、レンガ状に焼き固まっている。

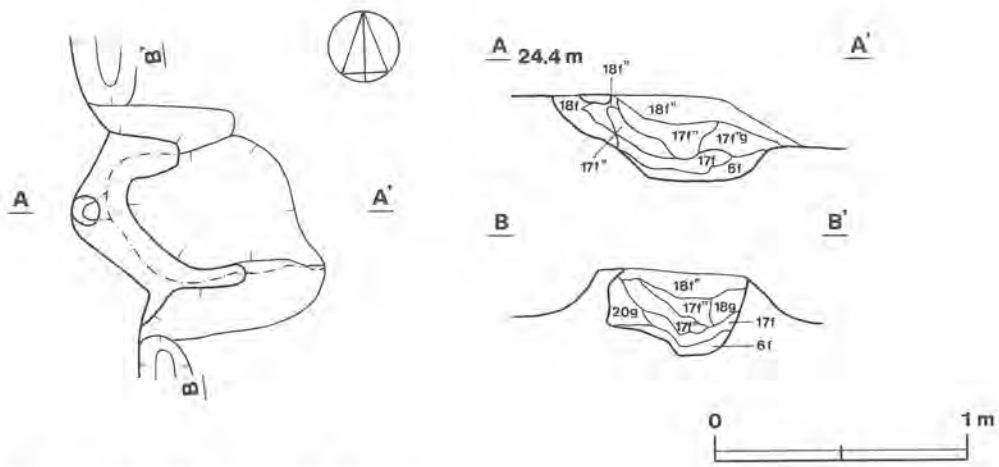
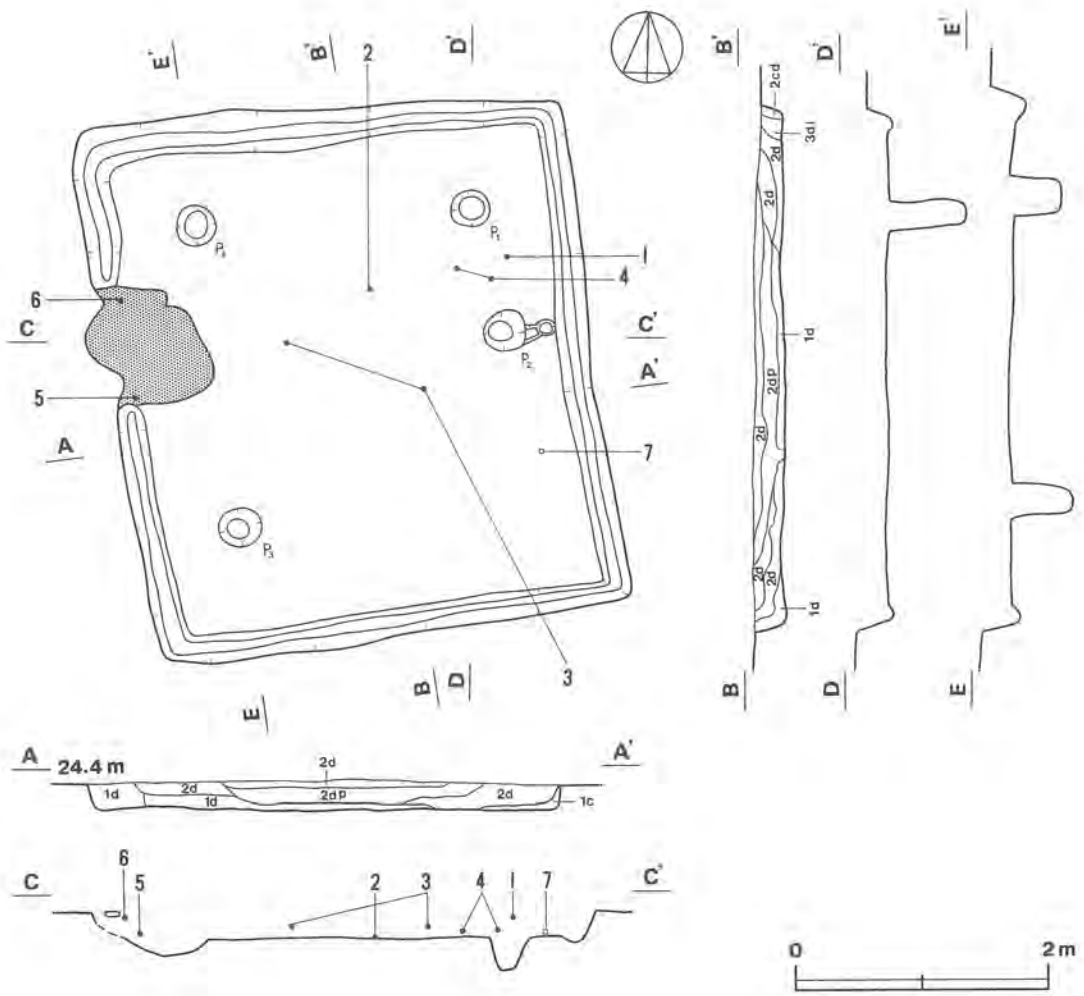
覆土は、上層に暗褐色土、中層に粘土粒子を含む暗褐色土、下層に褐色土が堆積している。自然堆積層と思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片66点、須恵器及びその破片4点、砥石1点と、カマド内から土師器片1点が出土している。本跡に伴う遺物は、主にカマド周辺から対面の東壁際にかけて集中しており、カマド近辺から第233図6の坏（土師器）、5の壺（須恵器）が、中央部から2・3の甕（土師器）、4の甑（土師器）が出土し、東壁際から7の砥石が出土している。

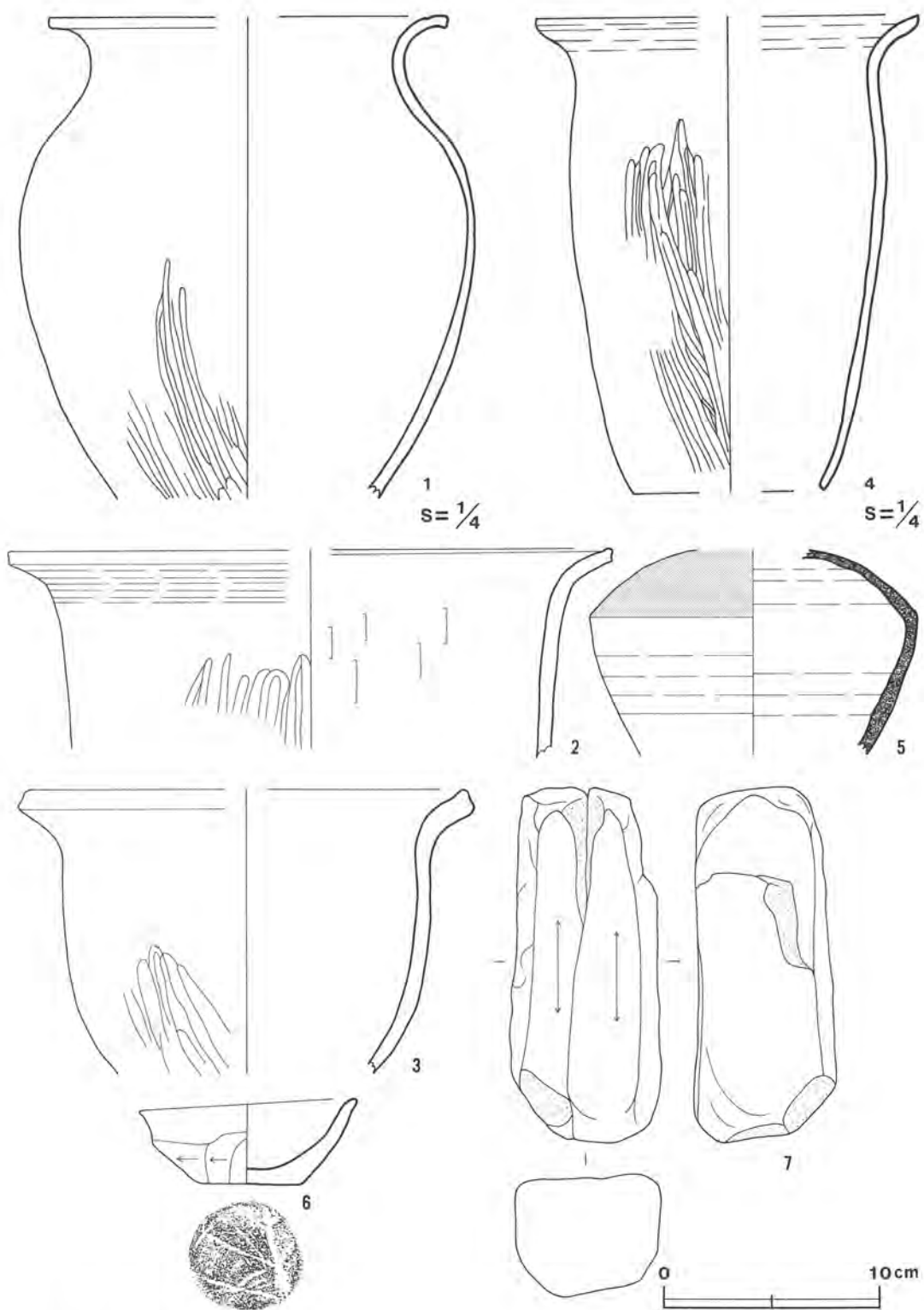
本跡は、遺物や遺構の形態等から8世紀代の住居跡と思われる。

第18号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	量目 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第233図 1	甕 土師器	A (24.6) B (29.7)	胴部は最大径を上位に持ち膨らむ。口縁部は外反する。	胴部外面上位に篋当て痕。下半部は縦位の篋磨き。	長石・石英 にぶい橙色 普通	40% P138
2	甕 土師器	A (27.9) B (9.2)	口縁部片。口縁部は外反し、端部をわずかにつまみ上げる。	口縁部は横ナデ整形。胴部外面篋磨き。内面は横位の篋ナデ整形。	雲母・長石 にぶい橙色 普通	10% P139
3	壺 土師器	A (20.0) B (13.2)	底部欠損。胴部は膨らみを持つ。口縁部は外反し、端部をわずかにつまみ上げる。	胴下半部は斜位の篋磨き。	長石・雲母 にぶい褐色 不良	15% P141



第232図 第18号住居跡・カマド実測図



第233图 第18号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第233図 4	甌 土師器	A [21.4] B 29.0 C [8.6]	底部に開口する。胴部は長胴形で、膨らみは少ない。口縁部は外反し、端部をつまみ上げる。	口縁部内・外面は横ナデ整形。胴部外面は縦位の篋磨き、内面は横位の篋ナデ整形。	長石・雲母 にぶい橙色 不良	30% P140
5	壺 須恵器	B (9.5)	胴部片。胴部は内彎気味に開くが、稜を持って胴部上位に移行し、天井部を形成する。頸部以上と底部は欠損。	水挽き成形。	— 灰白色 良好	20% P143 胴部上位に灰釉 かかる。
6	坏 土師器	A 10.1 B 4.1 C 4.6	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部は横ナデ整形。体部外面は篋削り。内面は篋ナデ整形。底部は篋削りで、木葉痕が残る。	砂粒・スコリア にぶい赤橙色 普通	85% P142

第21号住居跡 (第234図)

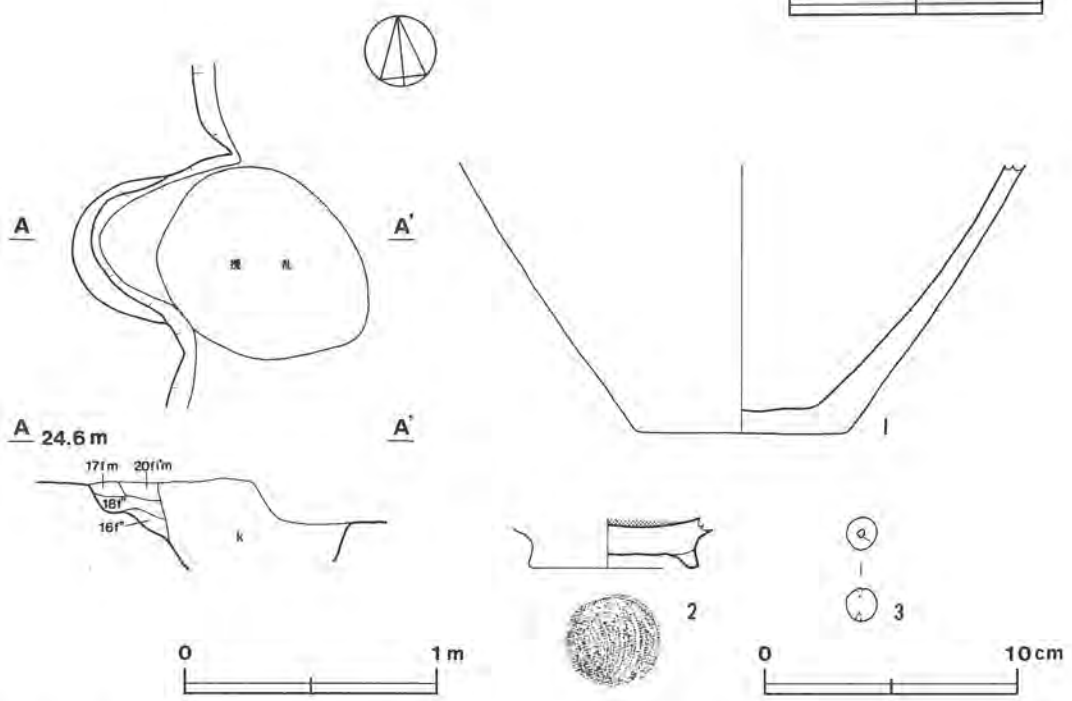
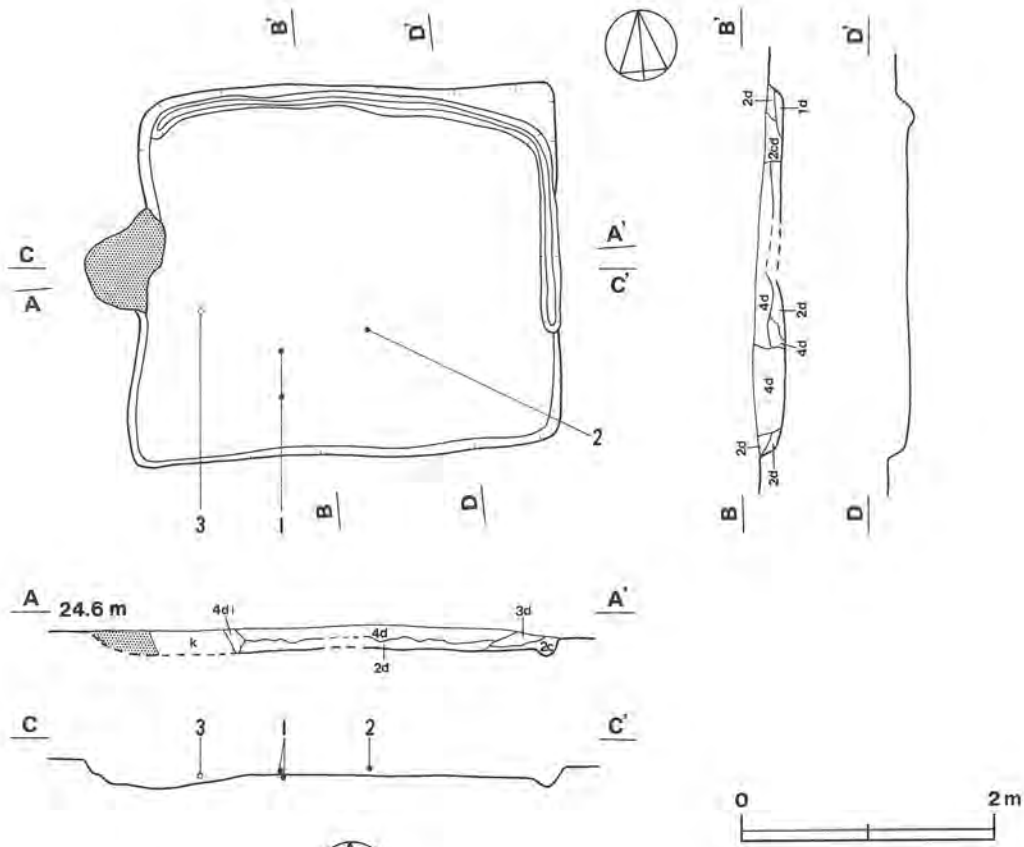
本跡は、調査区の南西部 N6j4 区を中心に確認された住居跡である。本跡の東壁に接した位置には第40号住居跡が、西 6 m には第18号住居跡が存在している。

平面形は、長軸3.32m、短軸2.94m の方形状を呈し、主軸方向は N-77°-W を指している。床面積は8.8㎡である。壁は締まりの弱いロームである。壁高は12~15cm と低いので、立ち上がり等については不明である。北壁際と東壁際の一部には、上幅15cm、深さ5cm の小規模な壁溝が周回している。床はロームで、締まりが弱く、床面は緩やかに起伏している。ピットは、北西コーナー部に1か所を検出した。上端直径は25cm、深さは12cm の浅いものであるが、覆土等から考え、本跡に伴う柱穴と思われる。カマドは、西壁の中央部に付設されているが、袖部・天井部とも崩壊しているほか、燃焼部の大部分が攪乱を受けている。規模・覆土等に不明な点が多いが、燃焼部は壁面を30cmほど掘り込み、煙道部は奥壁をわずかに掘り窪めて構築されている。火床部は確認できなかった。

覆土は、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積しており、全体的に締まりは弱い。自然堆積層と思われる。

遺物は極めて少なく、床面や覆土中から土師器片22点、須恵器片4点、球状の土製品1点と、カマド内から土師器片2点が出土している。本跡に伴う遺物は南側の床面に多く散在しており、そこからは第235図1の甕(土師器)胴下半部が潰れた状態で、2の高台付坏(土師器)底部が正位で出土している。なお3の球状の土製品は、カマド前方の床面から出土し、本跡に伴うものと思われるもので、両端の孔が貫通しておらず、その用途は不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から9~10世紀代の住居跡と思われる。



第234図 第21号住居跡・カマド実測図

第235図 第21号住居跡出土遺物実測図

第21号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第235図 1	甕 土師器	B (10.7) C (8.2)	平底。胴部は外傾して開くが、 上位を欠損。	外面は横位の篋削り。内面は篋 ナデ整形。	砂粒・礫 橙色 普通	20% P147
2	高台付坏 土師器	B (2.0) D 0.6 E 6.8	底部片。底部は突出し、部厚い。 高台は「ハ」の字状に開く。	内面篋磨き。底部は糸切り後、 周囲をナデる。	砂粒・雲母 橙色 普通	20% P148 内面黒色処理

第22号住居跡 (第236図)

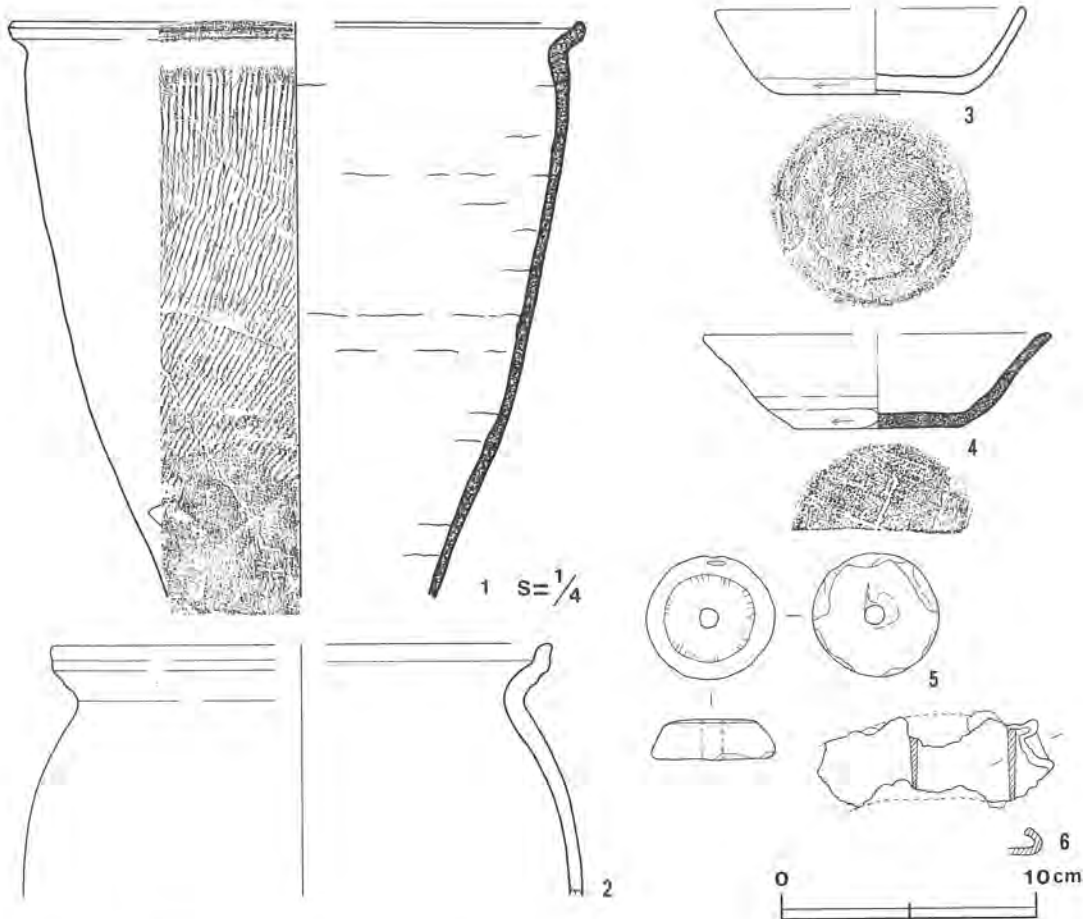
本跡は、調査区の南部 N6j9区を中心に確認された住居跡である。本跡の東 7 m には第41・49号住居跡が、北 8 m には第23号住居跡が存在している。

平面形は、長軸3.21m、短軸3.05mの方形状を呈し、主軸方向はN-16°-Eを指している。床面積は7.4m²である。壁は締まったロームで、75~80度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は47cmで、壁直下には上幅20cm、深さ5cmの壁溝が全周している。床は貼り床で、カマドの前面は特に硬く踏み締まっており、床面は起伏が激しい。ピットはP₁~P₃の3か所を確認した。上端直径は20~30cm、深さは22~47cmで、南壁側に位置するP₃は入口部施設に関する柱穴と思われる。その他のピットの性格については不明である。カマドは、北西コーナー部に位置しているが、天井部は崩落している。カマドの全長は101cm、横幅は115cmで、主軸方向はN-28°-Wを指している。燃焼部の規模は長さ80cm、幅60cmで、コーナー部の壁をわずかに掘り込み、煙道部は奥壁をさらに20cmほど円筒状に掘り込んで構築されている。袖部は砂質の粘土によって構築され、カマド内には焼土のほか炭化物や木灰を多量に含む赤褐色土が主に堆積している。なお、火床部と覆土中には獣骨の細片が2点検出された。火床は、床面から10cm掘り込まれ、赤褐色に変色している。

覆土は、上層に暗褐色土、中層にロームブロックを少量含む暗褐色土、下層に褐色土が堆積し、部分的に攪乱を受けている。自然堆積層と思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片70点、須恵器及びその破片11点、石製品（紡錘車）1点、鉄製品（鎌）1点が出土している。本跡に伴う遺物は遺構全体に散在している。カマド前方から出土した第237図2の甕（土師器）や遺構の南東部から出土した1の甕（須恵器）、3の坏（土師器）等は、農耕による攪乱のため覆土の上層から下層にかけての広い範囲から出土した破片が接合したものである。また、北部の壁溝中から5の紡錘車が、北東コーナー部の床面から6の鎌が出土し、南壁際からは4の坏（須恵器）が出土している。

本跡は、遺物や遺構の形態等から9~10世紀代の住居跡と思われる。



第237図 第22号住居跡出土遺物実測図

第22号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第237図 1	甕 須恵器	A [29.6] B (30.3)	底部欠損。胴部は内彎気味に外傾する。口縁部は外傾し、端部を上方につまみ上げる。	口縁部は横ナデ整形。胴部外面は平行叩き目整形で、下位は横位の篋削り。	砂粒 黄灰色 普通	40% P151
2	甕 土師器	A [19.8] B (10.0)	胴下半部欠損。胴部は膨らみを持つ。口縁部は外反し、端部をつまみ上げる。	外面はナデ整形。内面は横位の篋ナデ整形。	砂粒・長石・スコリア・雲母 灰褐色 良好	20% P149
3	坏 土師器	A [12.2] B 3.4 C 7.6	上げ底。体部は内彎気味に開き、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部下端回転篋削り。底部は回転糸切り後、周囲を回転篋削り。回転方向は右。	砂粒・スコリア・長石・雲母 にぶい赤褐色 良好	60% P150

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第237図 4	坏 須恵器	A [13.6] B 3.7 C 6.4	平底。体部は内鬨気味に開き、口縁部はわずかに外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部下端は篋削り。底部は一方向の手持ち篋削り。	砂粒 灰色 普通	40% P152 底部に刻書「人」か

第26号住居跡 (第239図)

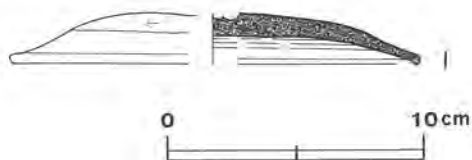
本跡は、調査区の南西部 O5d₉ 区を中心に確認された住居跡で、北西コーナー部と東壁の一部は第6号溝に掘り込まれている。本跡の北東6mには第29号住居跡が、南3mには第27号住居跡が存在している。

平面形は、長軸3.86m、短軸3.51mの方形状を呈し、主軸方向はN-19°-Wを指している。床面積は12.4m²である。壁はロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は26~30cmで、壁直下には上幅15~20cm、深さ5cmの浅い壁溝が周回している。床はロームで、中央部は硬く踏み締まり、床面は細かく凹凸している。ピットはP₁~P₅の5か所を確認した。規模は上端直径が25~30cm、深さが16~18cmで、方形に配列されているP₁~P₄が主柱穴、南壁際に位置しているP₅が入口部施設に関する柱穴と思われる。カマドは、北壁の中央部に付設されているが、天井部は崩落し、袖部の先端は欠損している。カマドの全長は112cm、横幅は115cmである。燃燒部の規模は長さ84cm、幅55cmで、壁面は掘り込んでいない。煙道部は奥壁をU字形に掘り窪めて構築されている。袖部・天井部及び煙道の上部は、砂質の粘土によって構築され、カマド内にはロームブロックを含む暗赤褐色土が主に堆積している。火床は、床面から5cmほど掘り込まれ、赤褐色に変色している。

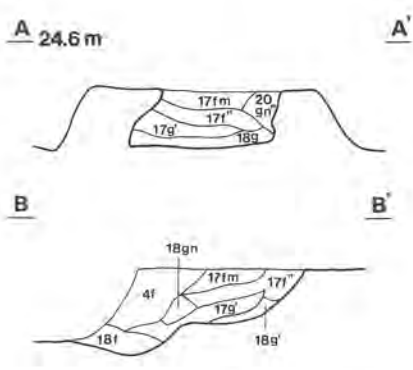
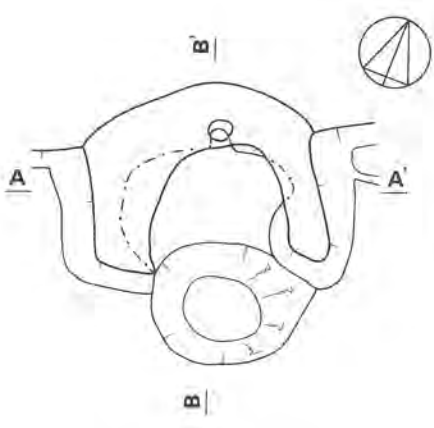
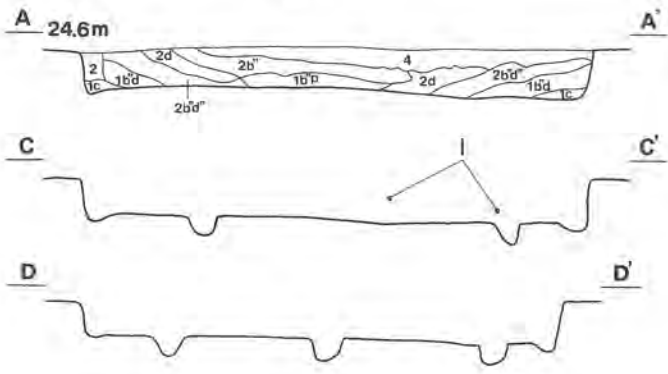
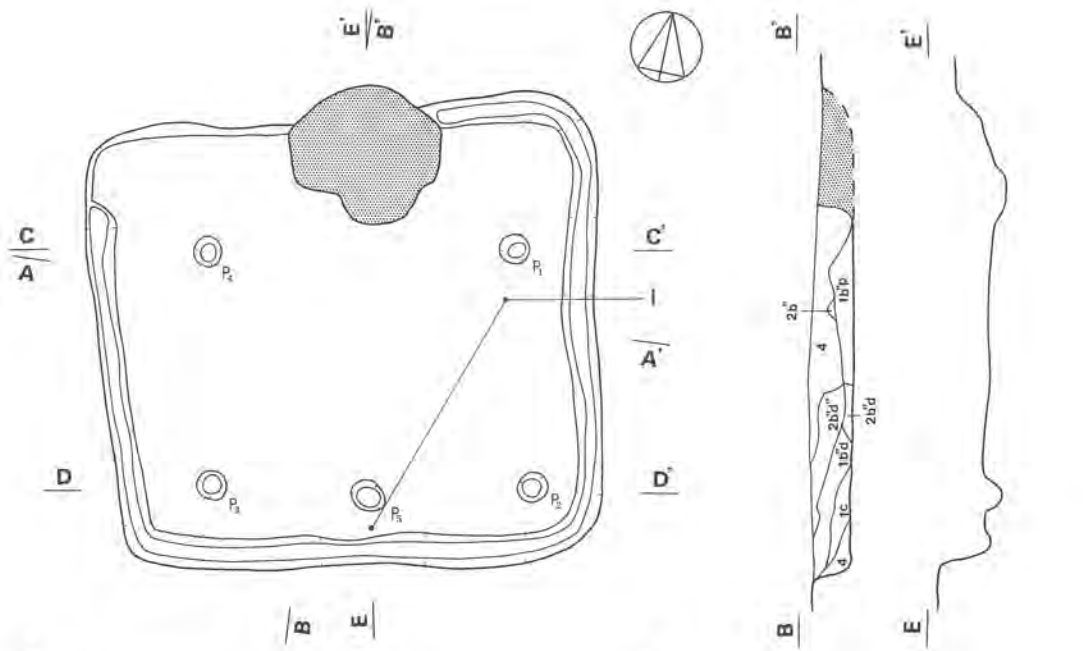
覆土は、上層に黒褐色土、中層に暗褐色土、下層に褐色土が堆積している。自然堆積層と思われる。

遺物は極めて少なく、床面や覆土中から土師器片33点、須恵器片17点と、カマド内から土師器片5点が出土している。本跡に伴う遺物は床面に少量散在する程度で、土師器片の中には胴下半部に篋磨きが施された甕の破片が含まれている。第238図1の蓋(須恵器)は、南壁際と東壁際の床面から出土した破片が接合したものである。

本跡は、遺物や遺構の形態等から8世紀代の住居跡と思われる。



第238図 第26号住居跡出土遺物実測図



第239図 第26号住居跡・カマド実測図

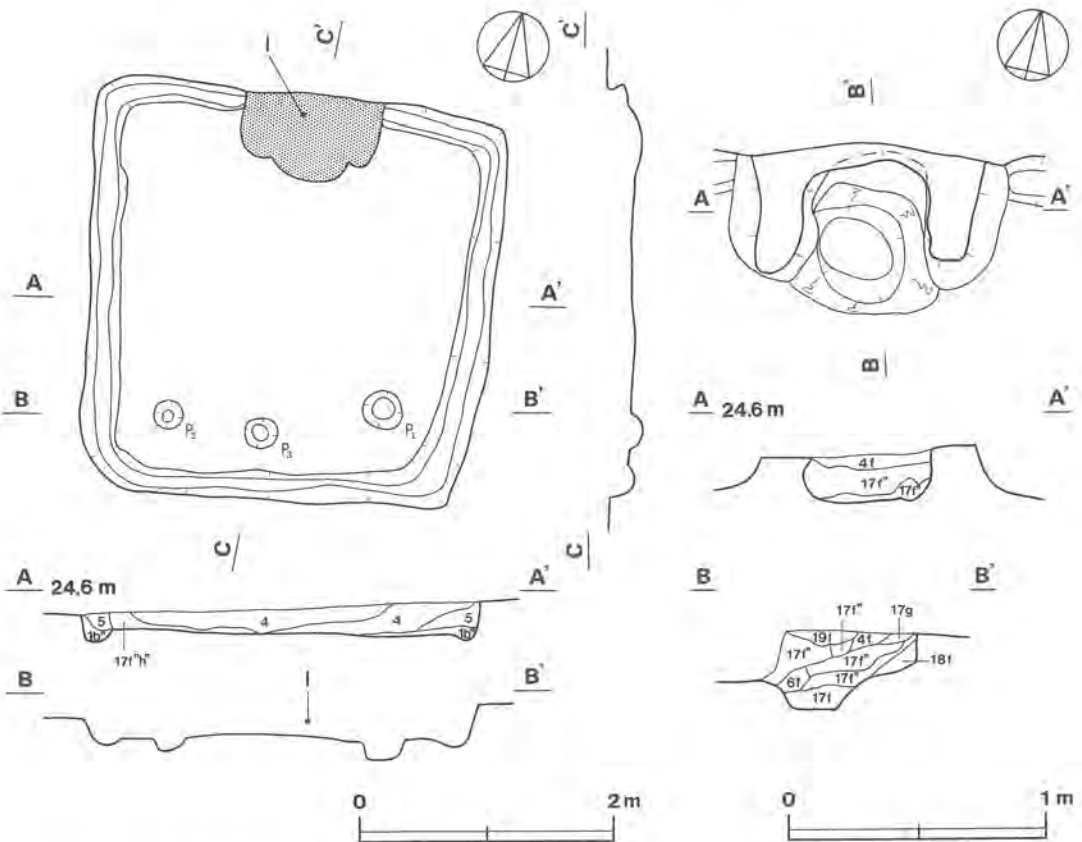
第26号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第238図 I	蓋 須恵器	A (16.2) B (3.0)	つまみ欠損。天井部は上位に平坦部を持ち内彎する。口縁部は短く、末端は鋭く折れ曲がる。	水挽き成形。天井部外面は篋削り。回転方向は右。	砂粒 灰白色 普通	50% P153

第27号住居跡 (第240図)

本跡は、調査区の南西部 O5es 区を中心に確認された住居跡で、東側は古墳時代前期の第24号住居跡を掘り込んでいる。本跡の北 3 m には第26号住居跡が、南東 3 m には第28号住居跡が存在している。

平面形は、長軸3.26m、短軸3.15mの方形状を呈し、主軸方向はN-13°-Wを指している。床面積は8.6㎡である。壁は締まりの弱いロームで、70~80度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は12~24cmで、壁直下には上幅20cm、深さ5~10cmの壁溝が全周している。床はロームで、全体的に硬く締まり、起伏が激しい。特に、カマドの前方から南壁際にかけては踏み締まりも加



第240図 第27号住居跡・カマド実測図

わり一層硬化している。ピットは $P_1 \sim P_3$ の 3 か所を確認した。ピットの規模は、上端直径が 23~33 cm、深さが 12~16 cm で、南壁際に位置する P_3 は入口部施設に関する柱穴と思われ、 $P_1 \cdot P_2$ も配列や覆土等から考えて本跡に伴う柱穴と推定される。カマドは、北壁の中央部に付設されており、天井部は崩落している。カマドの全長は 69 cm、横幅は 105 cm である。燃焼部の規模は長さ 62 cm、幅 47 cm で、壁面は掘り込んでいない。煙道部は、燃焼部から直接立ち上がっている。袖部は、砂質の粘土によって構築され、カマド内には焼土を多量に含む暗赤褐色土が主に堆積している。火床は、床面から 10 cm 掘り込まれ、レンガ状に焼き固まっている。

覆土は、上・下層とも黒褐色土がレンズ状に自然堆積している。床面に焼土や炭化材が散乱していることから、本跡は居住期間中あるいは廃絶後間もなく焼失したと思われる。

遺物は極めて少なく、床面や覆土中から土師器片 30 点、須恵器片 4 点と、カマド内から土師器片 7 点が出土している。本跡に伴う遺物は北側に多く、土師器片では胴下半部に篋磨きが施された甕の破片が、須恵器片では叩き目を持つ厚手の甕胴部片等が含まれている。第 241 図 1 の盤(須恵器)は、カマドの上から破片で出土したもので、これも本跡に伴うものと思われる。



第 241 図 第 27 号住居跡出土遺物実測図

本跡は、遺物や遺構の形態等から 8 世紀代の住居跡と思われる。

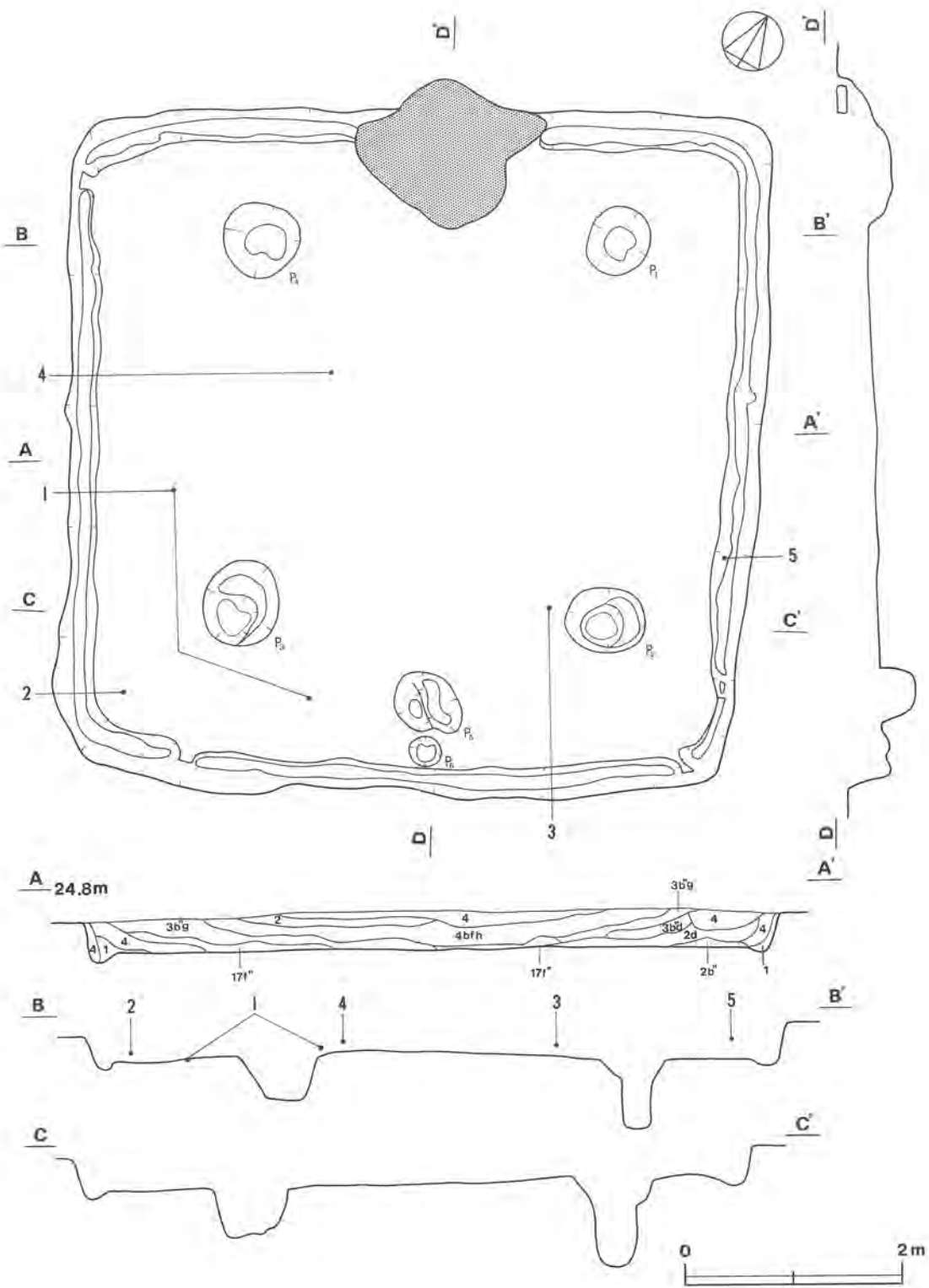
第 27 号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第 241 図 1	盤 須恵器	B (3.1) D 1.2 E 10.8	底部片。平底。高台は内傾気味に垂下し、接地面は尖る。	水挽き成形。高台は貼り付けて、下端を内削ぎする。回転方向は左。	砂粒 灰色 良好	40% P154

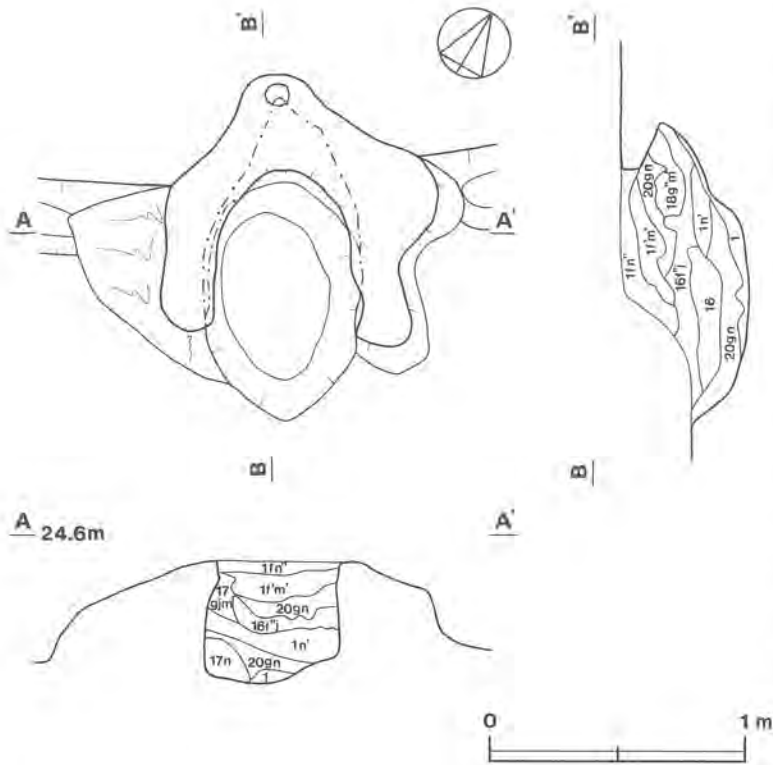
第 28 号住居跡 (第 242・243 図)

本跡は、調査区の南西部 O5g0 区を中心に確認された住居跡である。本跡の北西 3 m には第 27 号住居跡が、東 3 m には第 30 号住居跡が存在している。

平面形は、長軸 6.45 m、短軸 6.3 m の方形状を呈し、主軸方向 N-30°-W を指している。床面積は 36.9 m² である。壁は締まったロームで、75~80 度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は 30 cm で、壁直下には上幅 20 cm、深さ 5 cm の壁溝が断続的に周回している。床はロームで、全体的に硬く締まり、床面は緩やかに起伏している。ピットは $P_1 \sim P_6$ の 6 か所を確認した。 $P_1 \sim P_4$ は主柱穴と思われ、上端直径が 65~70 cm、深さが 42~84 cm で方形に配列されている。 P_5 と P_6 は、南東壁際に並んで位置している。 P_5 は上端直径が 55 cm、深さが 35 cm、 P_6 は上端直径が 30 cm、深さ 8 cm



第242图 第28号住居跡実測图



第243図 第28号住居跡カマド実測図

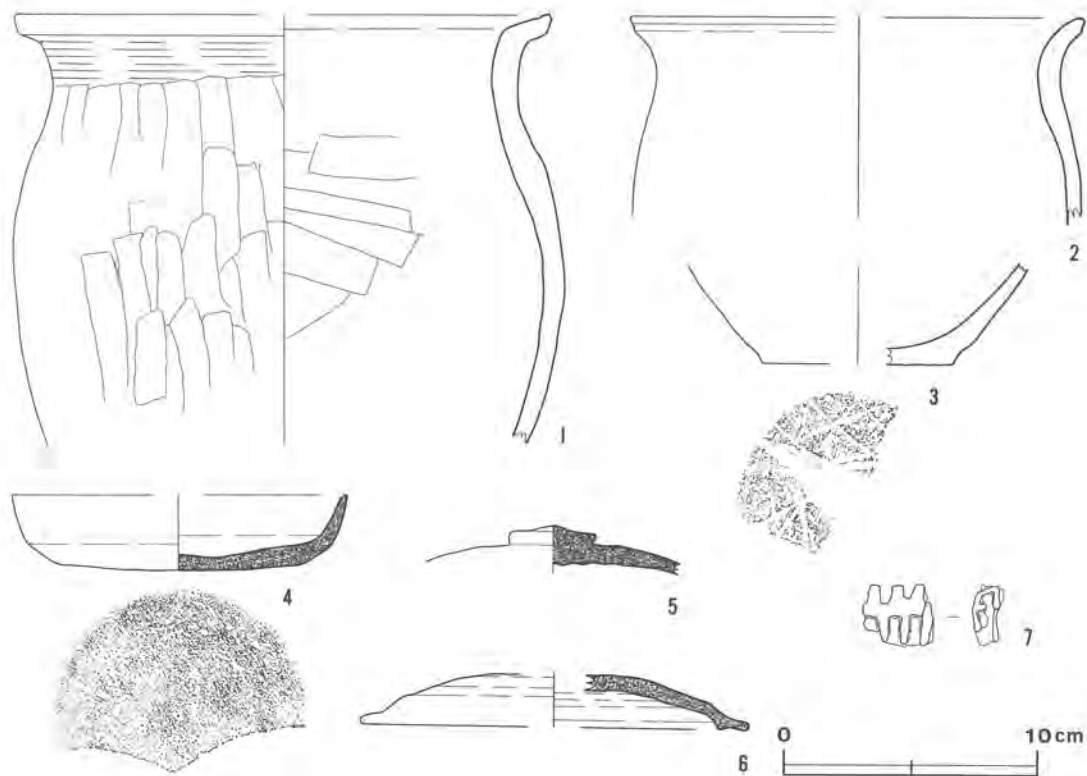
で、規模は異なるが2か所とも入口部施設に関する柱穴と思われる。貯蔵穴は、東コーナー部に位置し、上端直径が90cmの不整円形状を呈し、深さは20cmである。貯蔵穴内には暗褐色土や褐色土が堆積し、底面はやや凸凹している。カマドは、北西壁の中央部に付設されており、天井部は崩落している。カマドの全長は138cm、横幅は110cmである。燃烧部の規模は長さ95cm、幅62cmで、壁面は掘り込ん

でいない。煙道部は、奥壁をさらに40cmほど掘り込んで構築されている。袖部・天井部及び煙道の上部は砂質の粘土によって構築され、袖部の内面は赤く変色している。カマド内には焼土や木灰を含む赤褐色土が主に堆積している。火床は、床面から20cm掘り込まれ、レンガ状に焼き固まっている。

覆土は、上層に黒褐色土、中・下層には焼土ブロック等を含む極暗褐色土が自然堆積している。また、床面には焼土や炭化材が多量に散乱していることから、本跡は焼失後に埋没したものと思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片493点、須恵器片59点、鉄製品（器種不明）1点が出土している。本跡に伴う遺物は主に各壁際に散在しており、土師器の甕の破片が多量に出土しているが、実測可能なまでに復元できたものは少なかった。中央部の下層から第244図4の坏（須恵器）が、北東壁溝の中層から5の蓋（須恵器）がそれぞれ破片で出土している。南西壁側の下層から2の甕（土師器）が、南西壁側の床面からは1の甕（土師器）が横位で出土している。なお、7の鉄製品は南西部の覆土中から出土したもので、本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から8世紀代の住居跡と思われる。



第244図 第28号住居跡出土遺物実測図

第28号住居跡出土土器観察表

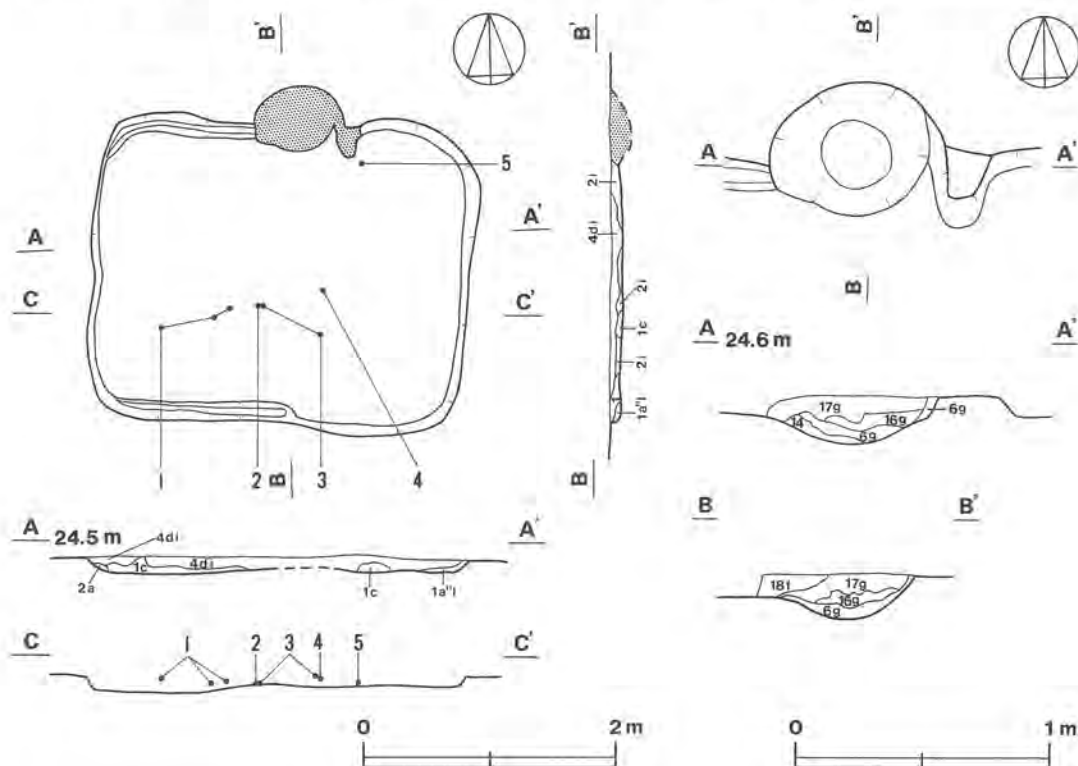
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第244図 1	甕 土師器	A [21.0] B (18.0)	胴下半部欠損。口縁部は強く外反し、端部は直立する。	口縁部内・外面は横ナデ整形。胴部外面は縦位の寛ナデ整形、内面は横位の寛ナデ整形。	砂粒・長石 灰褐色 普通	40% P155
2	甕 土師器	A [17.8] B (7.9)	胴部中位以下を欠損。口縁部は外反し、端部を外上方につまみ上げる。	口縁部外面は横ナデ整形。頸部内面は横位の寛ナデ整形。	砂粒・雲母・長石 におい橙色 普通	10% P156
3	甕 土師器	B (3.9) C [7.6]	平底。胴部は外傾して立ち上がるが、上半部を欠損。	胴部内・外面はナデ整形。底部木葉痕。	砂粒・雲母・長石 におい褐色 普通	10% P157
4	坏 須恵器	A [13.2] B 3.0 C 9.6	丸底。体部下端は丸味を持ち、それ以上は外傾して立ち上がる。器高は低い。	水挽き成形。底部は回転篋削り。回転方向は右。	砂粒・雲母 灰白色 普通	50% P159
5	蓋 須恵器	B (1.9) F 0.7 G 3.4	つまみは環状で、中央部はわずかに高まる。天井部は丸味を持つ。	水挽き成形。つまみは貼り付け。天井部は回転篋削り。回転方向は右。	長石 におい褐色 良好	10% P161

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第244図 6	蓋 須臾器	A (15.4) B (2.1)	つまみ欠損。天井部は上位に平坦部を持ち内彎する。口縁部は外側に開き、内面にかえりを持つ。	水挽き成形。天井部上位は回転鉋削り。回転方向は右。	石英・雲母 橙色 普通	25% P160

第29号住居跡 (第245図)

本跡は、調査区の南西部O6b1区を中心に確認された住居跡で、西壁から東壁にかけてを東西に延びる第7号溝によって掘り込まれている。本跡の北9mには第18号住居跡が、南西6mには第26号住居跡が存在している。

平面形は、長軸2.97m、短軸2.4mの長方形状を呈し、主軸方向はN-6°-Eを指している。床面積は6.3m²である。壁は締まりの弱いロームで、壁高が5~10cmと低いため、壁の立ち上がり等については不明である。壁溝は、上幅が15cm、深さが5cmで、北壁際と南壁際の一部に確認されている。床はロームで、中央部は硬く締まっている。床面は起伏が激しく、中央部と西壁側はかなり低くなっている。ピットは検出できなかった。カマドは北壁の中央部に位置しているが、東袖部と燃焼部の一部を除いてすべて消失している。燃焼部の掘り込みは、直径52cmの円形状を呈し、

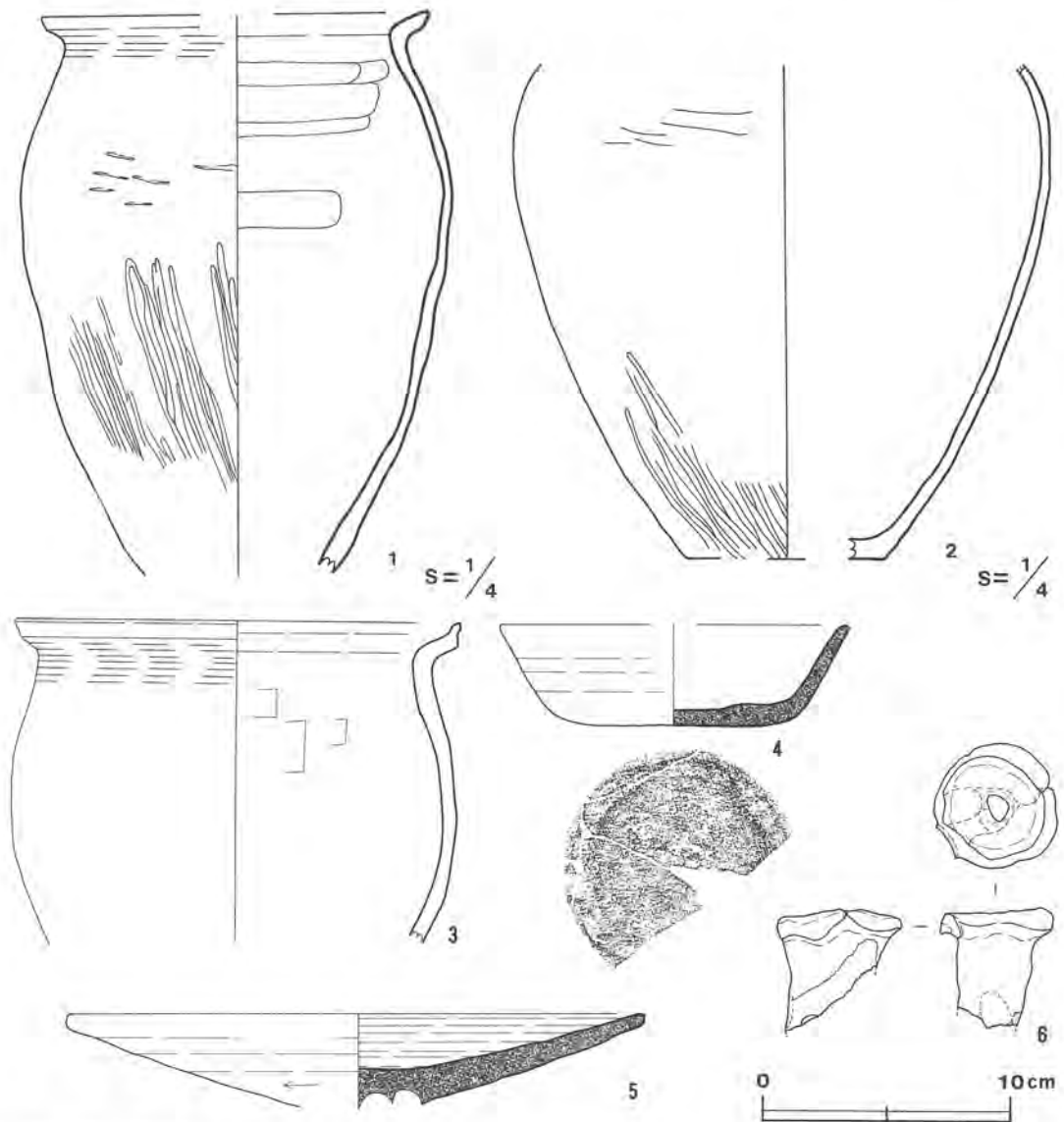


第245図 第29号住居跡・カマド実測図

壁面から奥へ30cm掘り込んでいる。掘り込み内には、焼土を多量に含む赤褐色土が主に堆積し、袖部の構築材料である砂質粘土も赤褐色に変色している。火床は、床面から10cmほど掘り込まれ、赤褐色に変色している。

覆土の堆積は薄く、上層に黒褐色土、下層に褐色土が堆積している。自然堆積層と思われる。

遺物は比較的少なく、床面や覆土中から土師器及びその破片82点、須恵器片7点、手捏土器1点が出土している。本跡に伴う遺物は中央部に集中しており、中央部から第246図1・3の甕（土師器）が横位で出土しているほか、2の甕（土師器）、4の坏（須恵器）、6の土製品も出土している。また、カマド東側の床面から5の高盤（須恵器）が出土している。



第246図 第29号住居跡出土遺物実測図

本跡は、遺物や遺構の形態等から8世紀代の住居跡と思われる。

第29号住居跡出土土器観察表

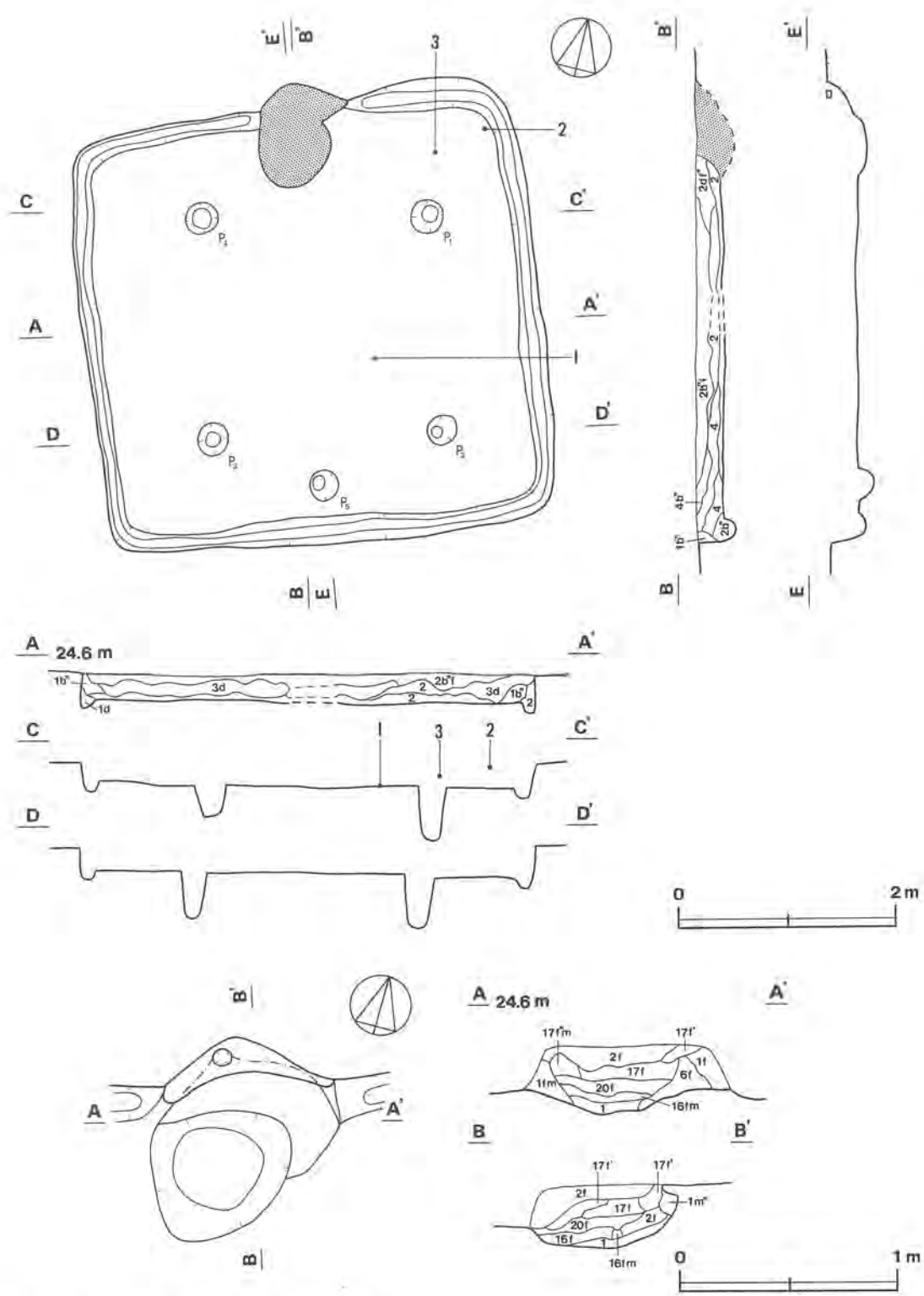
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第246図 1	甕 土師器	A [20.8] B (29.1)	底部欠損。胴部は長胴形で、最大径を上位に持つ。口縁部を外側につまみ出す。	口縁部は横ナデ整形。胴部外面上位に篋当て痕、下半部は斜位の篋磨き。内面は横位の篋ナデ整形。	砂粒・雲母にぶい 橙色 普通	40% P162
2	甕 土師器	B (26.4) C [10.6]	上げ底。胴部は長胴形で、最大径を上位に持つ。頸部以上を欠損。	胴部外面上位に篋当て痕、下位は斜位の篋磨き。	砂粒・雲母にぶい 橙色 普通	40% P163
3	甕 土師器	A 18.0 B (12.9)	胴部の大半を欠損。胴部は内彎し、最大径を中位に持つ。口縁部は外反し、端部を外上方へつまみ上げる。	口縁部内・外面は横ナデ整形。胴部外面下位は横位の篋削り。内面は横位の篋ナデ整形。	砂粒・雲母 橙色 普通	50% P164 PL88
4	坏 須恵器	A [14.2] B 4.1 C [8.6]	丸底。体部下端は丸味を持ち、それ以上は外傾して立ち上がる。口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は回転篋切り後、不定方向の手持ち篋削り。	砂粒 灰白色 良好	50% P166 PL92
5	高盤 須恵器	A 23.3 B (3.8)	胴部欠損。体部は外傾して大きく開く。	水挽き成形。回転方向は右。	砂粒 黄灰色 普通	40% P165

第30号住居跡 (第247図)

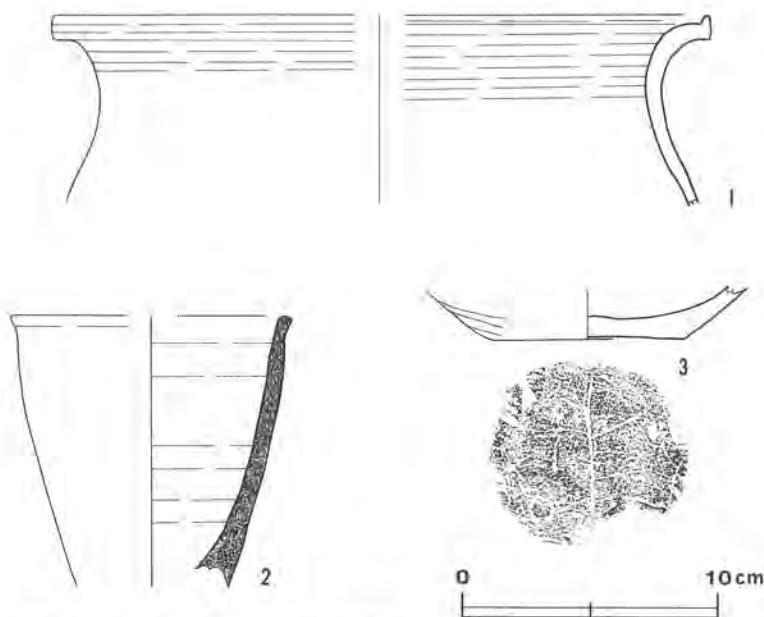
本跡は、調査区の南西部O6e2区を中心に確認された住居跡で、本跡の西9mには第27号住居跡が、南西3mには第28号住居跡が存在している。

平面形は、長軸4.25m、短軸4.08mの方形状を呈し、主軸方向はN-21°-Wを指している。床面積は16.0㎡である。壁はロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は20~25cmで、壁直下には上幅15cm、深さ10cmの壁溝が全周している。床は貼り床で壁際まで硬く締まり、床面はほぼ平坦である。ピットはP₁~P₅の5か所を確認した。主柱穴と思われるP₁~P₄は上端直径が30cm、深さが45~53cmで方形に配列されている。南壁際に位置するP₅は、上端直径が25cm、深さが15cmとやや小規模であり、入口部施設に関する柱穴と思われる。カマドは、北壁の中央部に付設されているが、煙道部と、燃焼部の掘り込み以外は全て消失している。燃焼部の掘り込みは直径85cmの不整形形状を呈し、壁面をわずかに掘り込んでいる。掘り込み内の覆土は焼土を多量に含む赤褐色土が主である。煙道部は、奥壁をわずかに掘り窪めて構築され、上部を砂質の粘土で囲んでいる。火床は、床面から10cmほど掘り込まれ、赤褐色に変色している。

覆土は、暗褐色土や黒褐色土が交互に層を成して堆積している。攪乱も少なく、自然堆積層と思われる。



第247図 第30号住居跡・カマド実測図



第248図 第30号住居跡出土遺物実測図

(土師器)は北東コーナー部の下層から、2の播鉢(須恵器)は北東コーナー部の中層から出土しており、いずれも本跡に伴う遺物と考えられる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から8世紀代の住居跡と思われる。

遺物は比較的少なく、床面や覆土中から土師器及びその破片126点、須恵器片10点が出土している。本跡に伴う遺物は遺構の東側に多く散在しており、土師器片の中には底部に木葉痕を持ち、胴下半部に篋磨きが施された甕の破片が含まれている。第248図1の甕(土師器)は中央東寄りの床面から、3の甕

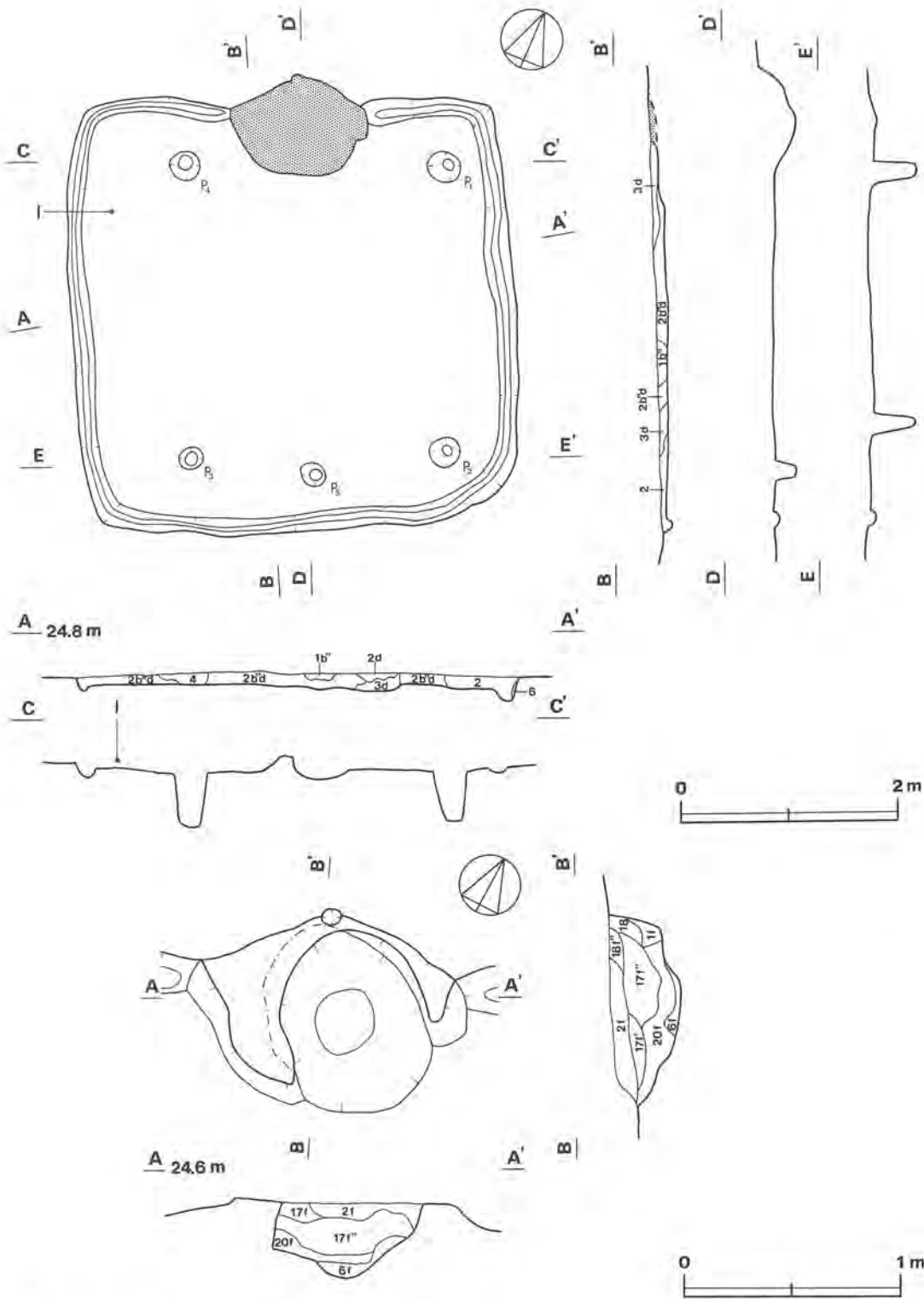
第30号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第248図 1	甕 土師器	A [25.8] B (7.8)	口縁部片。口縁部は強く外反し、末端は直立する。口唇部をつまみ上げる。	口縁部内・外面は横ナデ整形。	砂粒・雲母・長石 スコリア 明褐色 普通	10% P167
2	播鉢 須恵器	A [11.2] B (10.8)	底部欠損。体部は内彎気味に立ち上がり、筒状を呈する。口縁部はやや外反し、口唇部は平坦。	水挽き成形。	砂粒 灰白色 良好	10% P169 内・外面自然釉 付着
3	甕 土師器	B (2.0) C 7.6	底部片。胴部下端は大きく開いて立ち上がる。	胴部下端篋磨き。底部木葉痕。	砂粒 に白い橙色 普通	10% P168

第31号住居跡 (第249図)

本跡は、調査区の南部O6j1区を中心に確認された住居跡で、本跡の北8mには第28号住居跡が、南西4mには第43号住居跡が存在している。

平面形は、長軸4.11m、短軸4.05mの方形状を呈し、主軸方向はN-27°-Wを指している。床



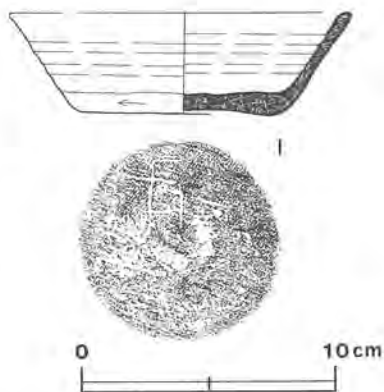
第249図 第31号住居跡・カマド実測図

面積は14.3㎡である。本跡は、ローム層を掘り込んでいないため、壁はほとんど検出できなかった。本跡の範囲は、方形に周回する壁溝によって確認した。壁溝の上幅は20cmで、深さは5～8cmである。床はロームで、全体的に硬く締まり、床面は緩やかに起伏している。ピットはP₁～P₅の5か所を確認した。支柱穴と思われるP₁～P₄は、上端直径が22～30cm、深さが40～54cmで、方形に配列されている。南東壁際に位置するP₅は、上端直径が20cm、深さが20cmとやや小規模で、入口部施設に関する柱穴と思われる。カマドは、北西壁の中央部に付設されているが、天井部が崩壊するなどその残存状況は悪い。カマドの全長は95cm、横幅は115cmである。燃焼部の規模は長さ85cm、幅65cmで、壁面を20cmほど奥に掘り込んでいる。煙道部は奥壁をわずかに掘り窪めて構築されている。袖部と煙道の一部は砂質の粘土によって構築され、カマド内には焼土を多量に含む暗赤褐色土が主に堆積している。火床は、床面から25cmほど掘り込まれ赤褐色に変色している。

覆土は、褐色土や暗褐色土が堆積している。覆土が極めて薄いため、堆積状況については不明である。

遺物は少なく、床面や覆土中から土師器片28点、須恵器片10点と、カマド内から土師器片3点、須恵器片1点が出土しただけである。本跡に伴う遺物は西コーナー部付近に少量散在しており、第250図1の坏（須恵器）は西側の覆土下層から完形で出土したものである。また、同所から甕（須恵器）の破片も出土している。

本跡は、遺物や遺構の形態等から8世紀代の住居跡と思われる。



第250図 第31号住居跡出土遺物実測図

第31号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第250図 1	坏 須恵器	A 13.5 B 4.1 C 7.8	上げ底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部下端は篋削り。底部は回転篋切り後、手持ち篋削り。	砂粒 にぶい黄色 普通	70% P170 PL92

第33号住居跡（第251図）

本跡は、調査区の南部 O6c4区を中心に確認された住居跡で、北西コーナー部から北壁の一部にかけては第6号溝に掘り込まれ、北東コーナー部は8世紀代の第34号住居跡を掘り込んでいる。本跡の北10mには第21号住居跡が、南6mには第46号住居跡が存在している。

平面形は、長軸3.25m、短軸2.9mの方形状を呈し、主軸方向はN-86°-Wを指している。床面積は7.6㎡である。壁はロームであるが、壁高が16cmと浅いため立ち上がり等については不明である。南東コーナー部を除く壁直下には、上幅15cm、深さ5～10cmの壁溝が周回している。床はロームで、壁際まで硬く締まり、床面はほぼ平坦である。ピットは検出できなかった。カマドは、北壁の北東コーナー部寄りに位置しているが、残存状況は悪く、燃焼部の掘り込みを確認したのみである。燃焼部の掘り込みは、直径110cmの不整形形状を呈し、深さは20cmである。掘り込み内には、焼土や炭化物を含む暗赤褐色土が堆積している。また、覆土中に砂質の粘土が多量に混入しており、袖部や天井部は砂質の粘土によって構築されたものと思われる。火床は、赤褐色に変色している。

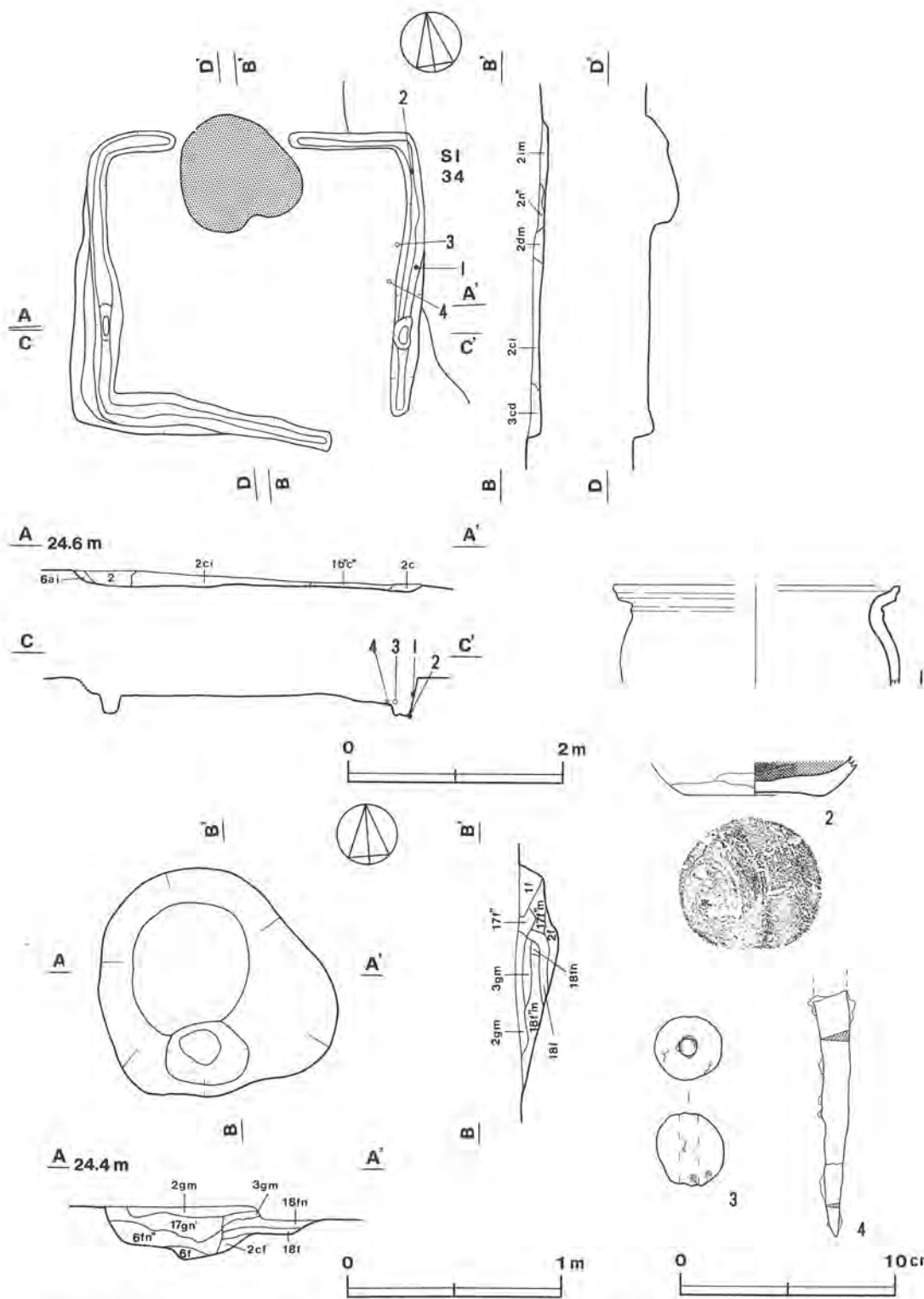
覆土は、暗褐色土が堆積している。覆土が薄いため、堆積状況は不明である。

遺物は比較的少なく、床面や覆土中から土師器及びその破片81点、須恵器片11点、球状土錘1点、鉄製品（刀子）1点が出土している。本跡に伴う遺物は遺構の東壁際に少量散在しており、床面や覆土下層から第252図1の小型甕（土師器）、2の坏（土師器）、3の球状土錘、4の刀子等が出土している。

本跡は、遺物や遺構の形態等から9～10世紀代の住居跡と思われる。

第33号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第252図 1	小型甕 土師器	A [13.4] B (4.5)	口縁部片。口縁部は外反し、端部を外上方につまみ上げる。	口縁部内・外面は横ナデ整形。	砂粒・雲母にぶい橙色良好	10% P171
2	坏 土師器	B (1.5) C 6.6	底部片。上げ底。	底部糸切り後、周脣を手持ち篋削り。	砂粒 浅黄橙色 普通	15% P172 内面黒色処理



第251図 第33号住居跡・カマド実測図

第252図 第33号住居跡
出土遺物実測図

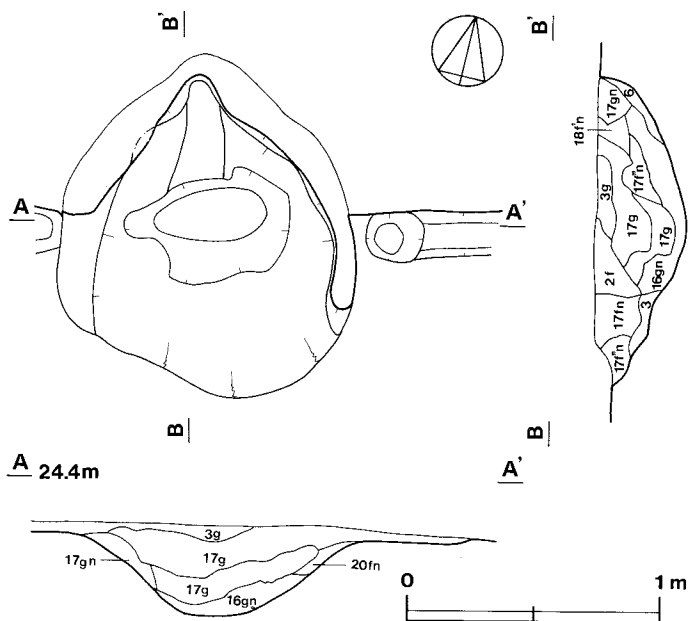
第34号住居跡 (第253・254図)

本跡は、調査区の南部 O6c5区を中心に確認された住居跡で、東壁の一部は9世紀代の第33号住居跡によって掘り込まれ、南東コーナー部は古墳時代後期の第35号住居跡の覆土を掘り込んでいる。本跡の南4mには第46号住居跡が存在している。

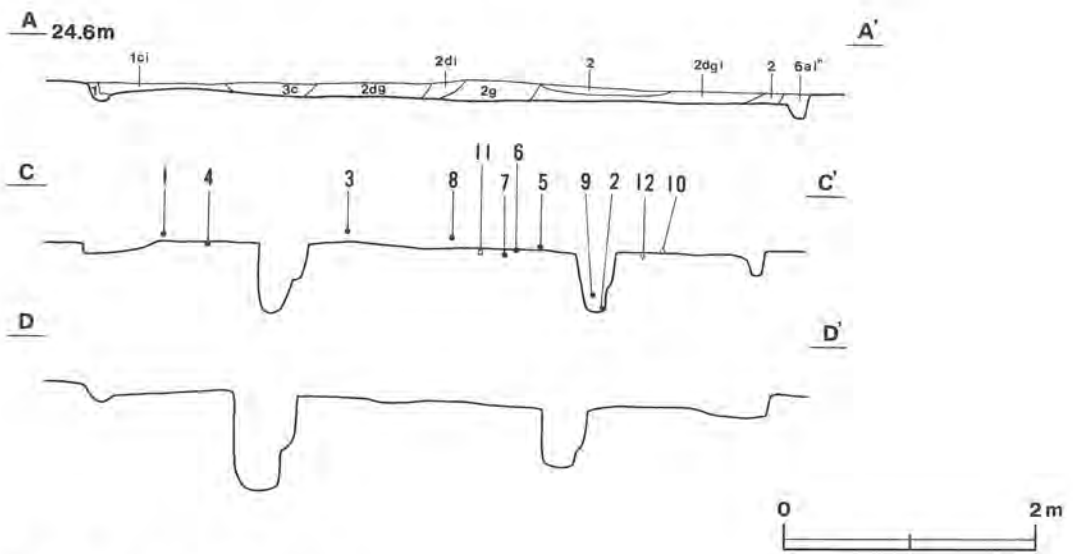
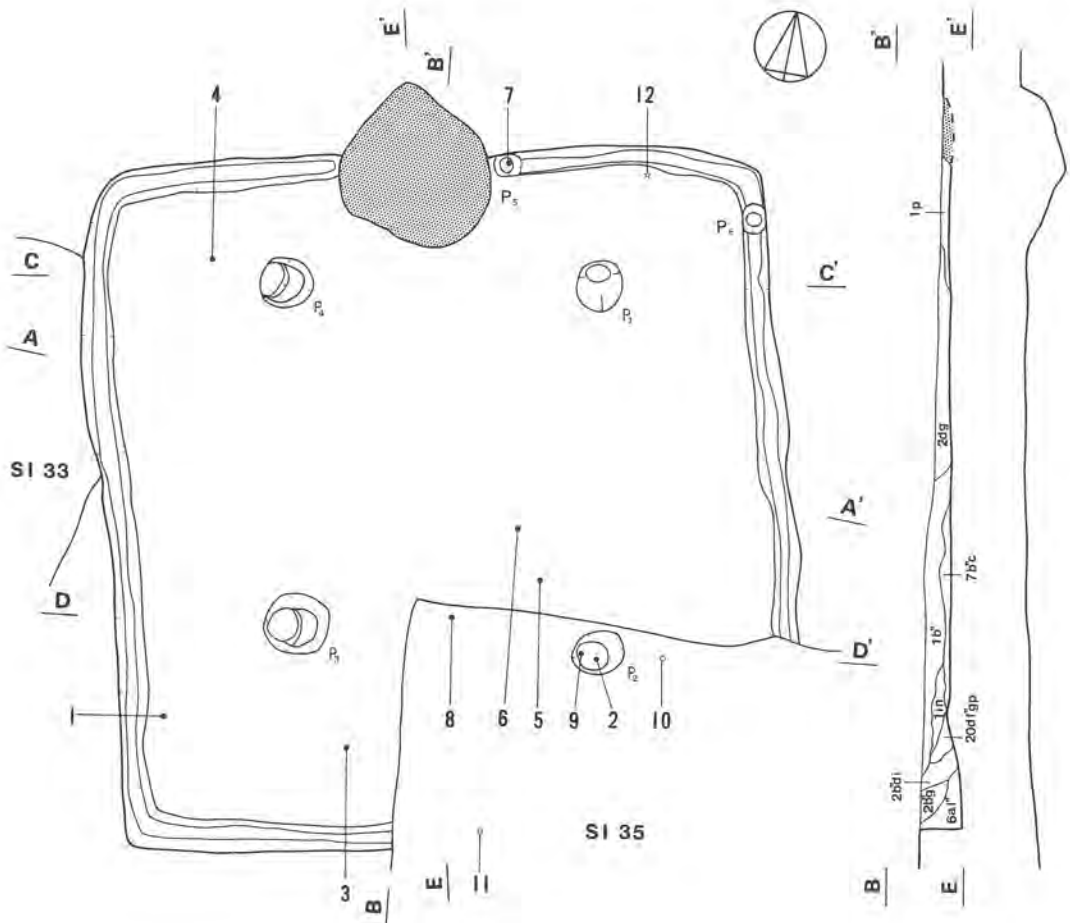
平面形は、長軸5.55m、短軸5.43mの方形状を呈し、主軸方向はN-15°-Wを指している。床面積は29.0m²である。壁はロームであるが、壁高が8~14cmと低いため、立ち上がり等については不明である。第35号住居跡を掘り込んでいる南東コーナー部を除く壁直下には、上幅15cm、深さ10cmの壁溝が周回している。床は貼り床で、全体的に硬く締まっている。床面は起伏しており、西壁の一部とその壁際の床面は第33号住居跡に掘り込まれている。ピットはP₁~P₆の6か所を確認した。P₁~P₄は上端直径が40~45cm、深さが50~80cmで、方形に配列されていることから、4本とも支柱穴と思われる。P₅とP₆は、上端直径20cm、深さ10cmの小規模なピットで、壁溝中に掘り込まれており、性格は不明である。カマドは、北壁の中央部に付設され、天井部や袖部の大部分は崩壊している。カマドの全長は136cm、横幅は120cmである。燃焼部の規模は長さ110cm、幅90cmで、壁面を奥へ30cm掘り込んでいる。煙道部は奥壁をU字形に掘り窪めて構築されている。袖部や煙道の上部は砂質の粘土によって構築され、カマド内には焼土ブロックを含む暗赤褐色土が堆積している。火床は、床面から35cmも掘り込まれ、赤褐色に変色している。

覆土は、暗褐色土が堆積している。自然堆積層と思われるが、掘り込みが浅いため詳細については不明である。

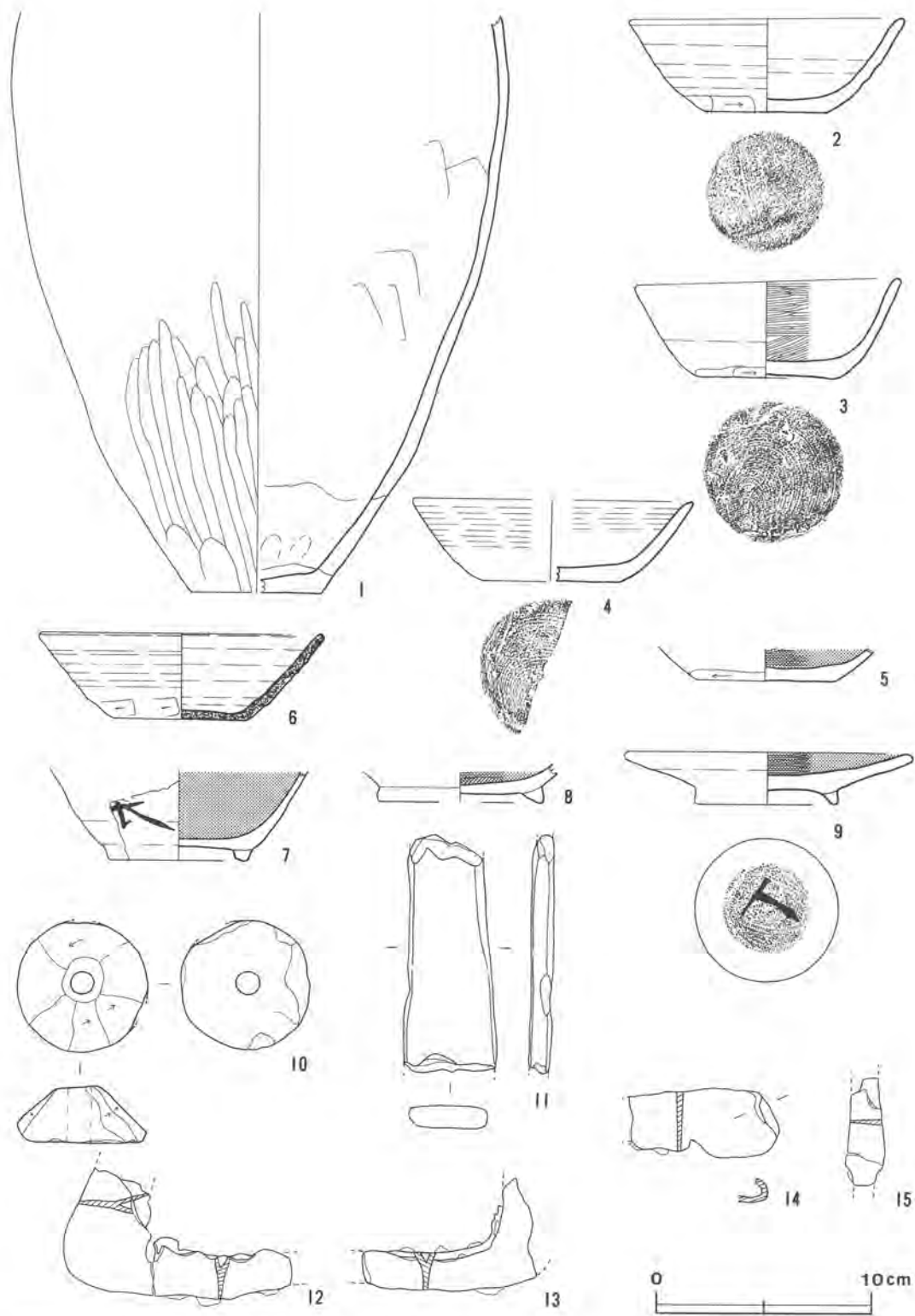
遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片354点、須恵器及びその破片143点、土製の紡錘車1点、鉄製品(鉄先、鎌、刀子)4点、礫1個と、カマド内から土師器片29点が出土している。本跡に伴う遺物の多くは遺構の南部に集中しており、同所から第255図1の甕(土師器)、3・5・8の坏(土師器)、6の坏(須恵器)、10の紡錘車等が出土している。また、同地区に所在するP₂の下層から2の坏(土師



第253図 第34号住居跡カマド実測図



第254图 第34号住居跡実測图



第255图 第34号住居跡出土遺物実測図

器)と底部に「人」の墨書を持つ9の高台付皿(土師器)が完形のまま流れ込んだような状態で出土している。遺構北部の床面から4・7の坏(土師器)と12・13の鉢先が出土しており、これも本跡に伴うものと思われる。なお、7の体部にも墨書が認められたが、欠損や器面の剝落がひどいため解読は困難であった。

本跡は、遺物や遺構の形態等から9～10世紀代の住居跡と思われる。

第34号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第255図 1	甕 土師器	B (27.0) C (6.0)	胴部は長胴形で、膨らみは少ない。胴部上位を欠損。	胴下半部は縦位の篋磨き。	砂粒・雲母・長石 石英・スコリア にぶい橙色 普通	20% P180 外面に焼土附着
2	坏 土師器	A 12.9 B 4.5 C 5.8	平底。体部は内彎して開き、口縁部はやや外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部下端は篋削り。底部は一定方向の手持ち篋削り。回転方向は右。	砂粒 にぶい橙色 普通	100% P173 PL91
3	坏 土師器	A 12.5 B 4.8 C 6.5	上げ底。体部は内彎して開き、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部下端は篋削り。内面篋磨き。底部は回転糸切り後、周囲を軽く篋削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	80% P174 PL91
4	坏 土師器	A (13.0) B 3.8 C (6.4)	上げ底。体部は内彎して開き、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は回転糸切り。	砂粒・雲母 褐灰色 普通	20% P175 底部に刻文
5	坏 土師器	B (1.5) C 6.5	底部片。上げ底。	底部は一定方向の手持ち篋削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% P176 内面黒色処理
6	坏 須恵器	A 13.1 B 4.0 C 6.3	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部下端は横位の篋削り。底部は一定方向の手持ち篋削り。	砂粒 灰白色 普通	70% P181
7	高台付坏 土師器	B (4.2) D 0.6 E 6.6	上げ底。高台は低く、内傾気味に垂下する。接地面は丸い。体部は内彎して立ち上がるが上位を欠損。	水挽き成形。内面には篋磨き。高台は貼り付け。底部は回転糸切り。	砂粒 浅黄橙色 普通	40% P177 内面黒色処理・ 体部に墨書(文字不明)
8	高台付坏 土師器	B (1.8) D 0.8 E (7.6)	底部片。平底。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は丸い。	内面篋磨き。高台は貼り付けで、下端は内削ぎ。底部は回転糸切り。	砂粒・雲母 淡橙色 良好	20% P179 内面黒色処理
9	高台付皿 土師器	A 13.5 B 2.4 D 0.7 E 6.7	平底。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は丸い。体部は外傾して開き口縁部に至る。	水挽き成形。内面篋磨き。高台は貼り付け。底部回転篋削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	70% P178 PL94 内面黒色処理・ 底部に墨書「人」

第37号住居跡（第256図）

本跡は、調査区の南部 O6g₆区を中心に確認された住居跡で、南西コーナー部は同時期の第38号住居跡と切り合っているが、両者の新旧関係は覆土が薄いため不明である。本跡の北 2 m には第46号住居跡が存在している。

平面形は、長軸4.4m、短軸4.38mの方形状を呈し、主軸方向はN-22°-Wを指している。床面積は16.5m²である。壁はロームであるが、遺存状況が悪く南側半分は確認できなかった。壁高は、最も良好に残存している部分でも12cmと低く、立ち上がり等については不明である。南半分を除く壁直下には、上幅15cm、深さ5cmの浅い壁溝が周回している。床の南半分は傾斜地に構築されていたため流失したものと思われる、北半分の床のみが残存している。残存する床は貼り床で硬く締まり、起伏が激しい。ピットはP₁~P₅の5か所を確認した。主柱穴と思われるP₁~P₄は、上端直径が27~40cm、深さが45~73cmで方形に配列されている。南壁際に位置するP₅は、上端直径が27cm、深さが16cmとやや小規模で、配置等から入口部施設に関する柱穴と思われる。カマドは、北壁の中央部に付設されており、天井部や袖部の大部分が崩壊している。カマドの全長は90cm、横幅は100cmほどである。燃焼部の規模は長さ70cm、幅63cmで、壁面は掘り込んでいない。煙道部は検出できなかった。袖部や天井部は砂質の粘土によって構築され、赤褐色に変色している。カマド内には、焼土や木灰を含む赤褐色土が主に堆積している。火床は、床面から20cm掘り込まれ、赤褐色に変色している。

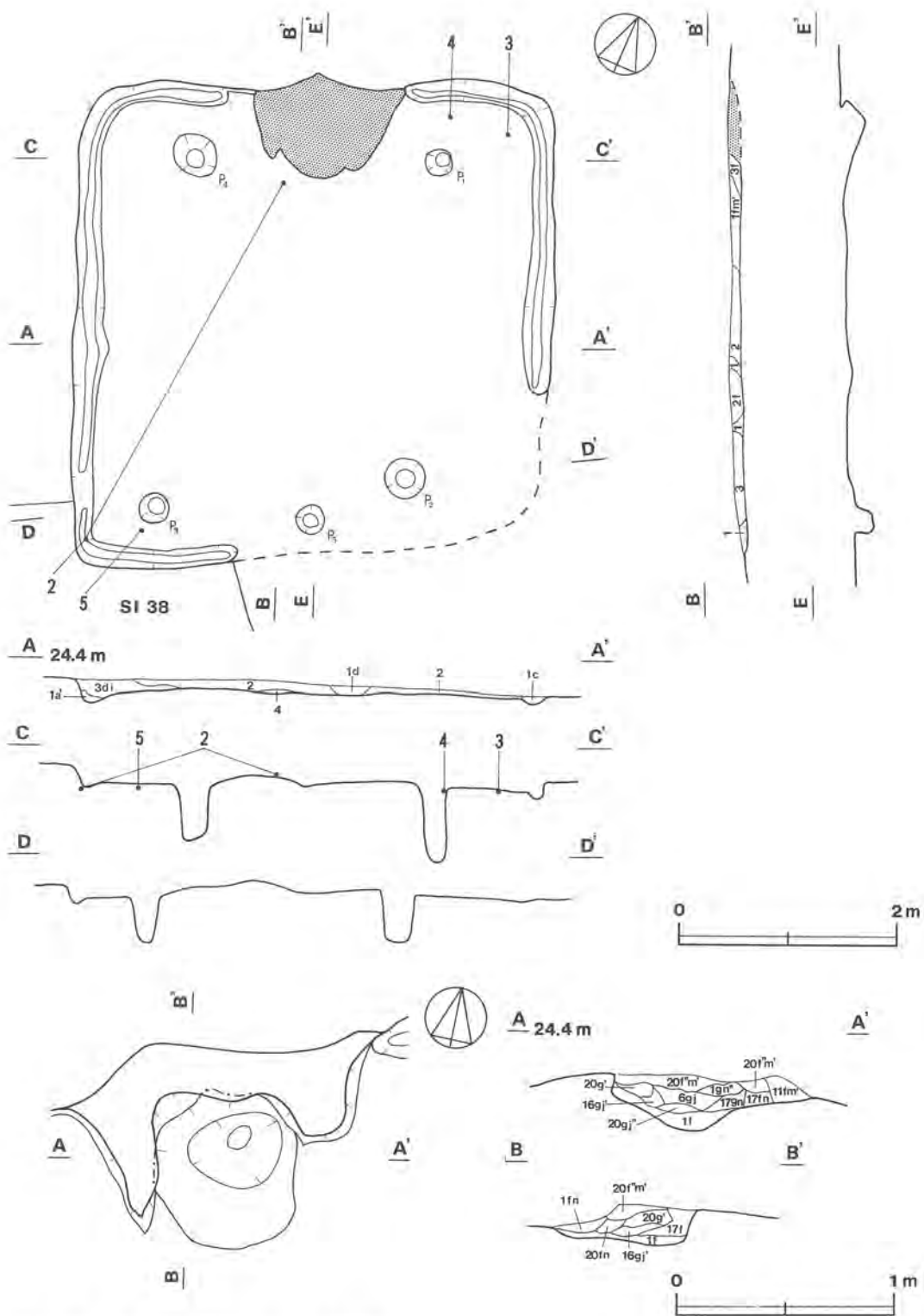
覆土は、暗褐色土で良く締まっている。掘り込みが浅いため、堆積状況については不明である。

遺物は少なく、床面や覆土中から土師器片46点、須恵器及びその破片61点、砥石1点が、カマド内から土師器片6点、須恵器片3点が出土している。本跡に伴う遺物は、北東と南西のコーナー部に集中しており、北東コーナー部の床面から第257図3・4の坏（須恵器）が、南西部の下層から1の坏（須恵器）と5の高台付皿（須恵器）が、それぞれ破片で出土している。2の坏（須恵器）は南西コーナー部から出土した破片と、そこから3.8m離れたカマド前方の床面から出土した破片が接合したもので、北西部の覆土下層から出土した6の砥石と共に、これらは本跡に伴う遺物と考えられる。

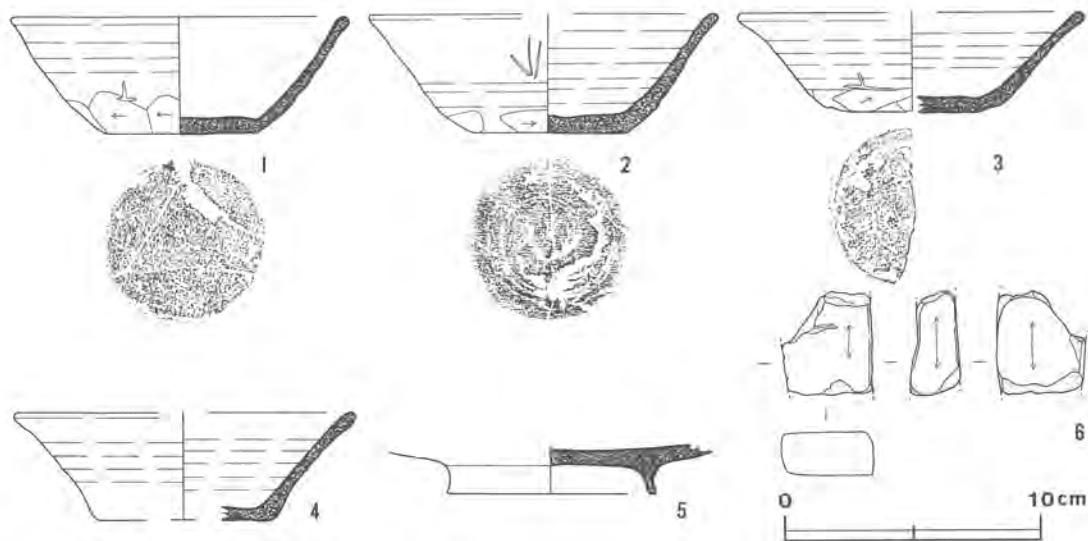
本跡は、遺物や遺構の形態等から9~10世紀代の住居跡と思われる。

第37号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第257図 1	坏 須恵器	A 13.3	平底。体部は内灣して開き、口縁部は外反する。口唇部は膨らみ、丸い。	水挽き成形。体部外面下端は横位の篋削り。底部は一定方向の手持ち篋削り。回転方向は右。	長石 暗灰黄色 普通	80% P183 体部に刻書「人」
		B 4.7				
		C 6.0				



第256図 第37号住居跡・カマド実測図



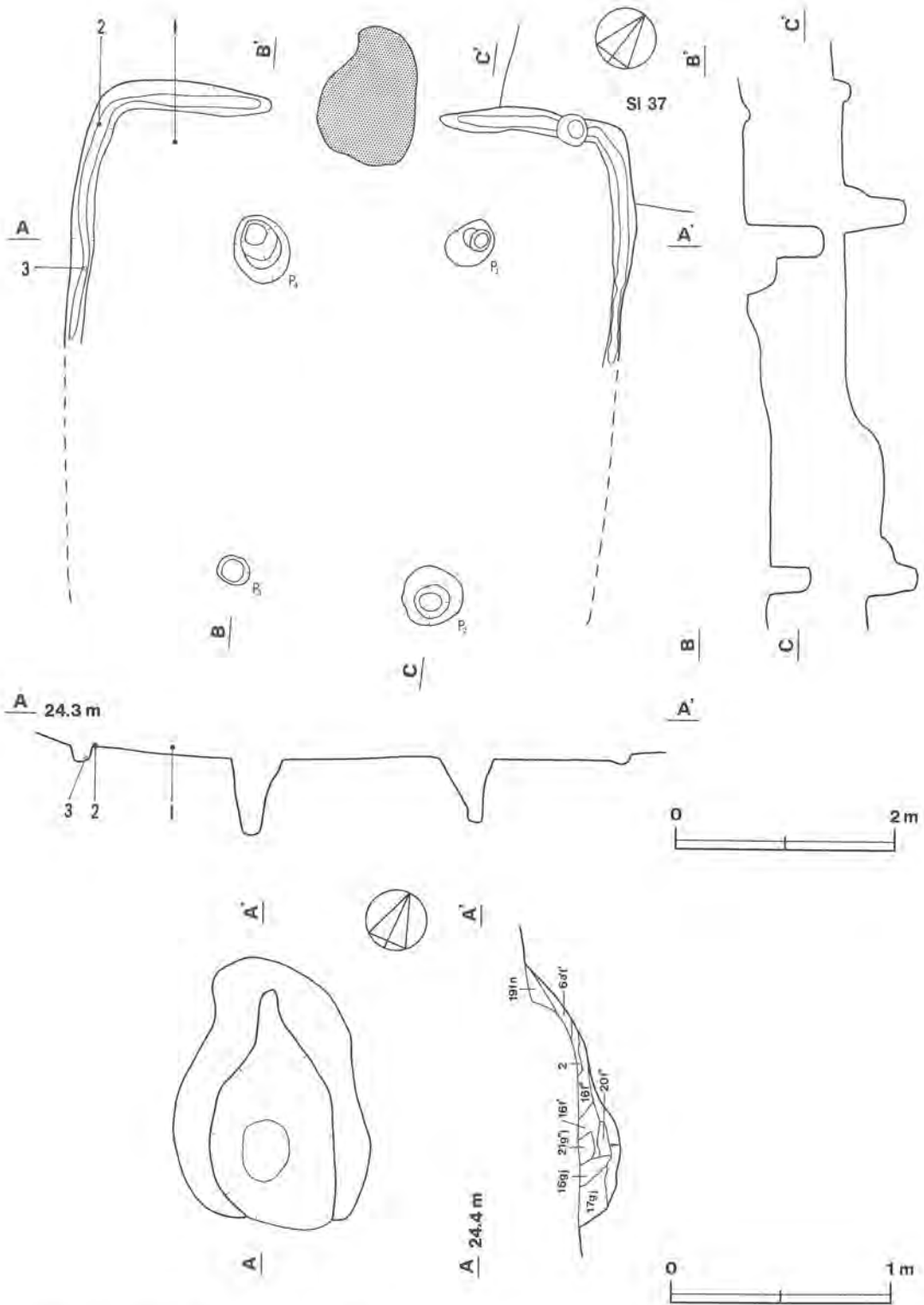
第257図 第37号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第257図 2	坏 須恵器	A [13.8] B 4.8 C 6.0	平底。体部下端は丸味を持ち、それ以上は外反して立ち上がる。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部下端は篋削り。底部は回転篋切り。	砂粒・雲母 灰白色 良好	70% P184 体部に刻文「人」
3	坏 須恵器	A [13.8] B 4.0 C [5.0]	平底。体部下端は丸味を持ち、それ以上は外反して立ち上がる。口唇部は膨らみ、丸い。	水挽き成形。体部下端は横位の篋削り。底部は篋切り。	砂粒・雲母 にぶい黄色 良好	40% P185 体部に刻文「人」
4	坏 須恵器	A [13.5] B 4.3 C [6.8]	平底。体部は強く外反して開き、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は手持ち篋削り。	砂粒・雲母 例黄褐色 例オリーブ黒色 良好	30% P186
5	高台付皿 須恵器	B (1.9) D 1.2 E 8.3	平底。高台は外反気味に垂下し、接地面は平坦。体部は底部から連続して大きく開くが、大部分を欠損。	水挽き成形。高台は貼り付け。底部は回転篋削り。	砂粒・雲母 灰色 良好	10% P187

第38号住居跡 (第258図)

本跡は、調査区の南部 O6h6 区を中心に確認された住居跡で、北コーナー部は、同時期の第37号住居跡と切り合っているが新旧関係は不明である。南側は第4号地下式坑と第125号土坑に掘り込まれているほか、傾斜面に位置しているため、床面の一部は流出している。本跡の北6mには第46号住居跡が、北西3mには第47号住居跡が存在している。

平面形は、一辺が5.2mほどの方形状を呈し、主軸方向はN-35°-Wを指すものと思われる。残存する床面積は11.0m²である。北西壁以外の壁は、ほとんど消失している。残存する壁はローム



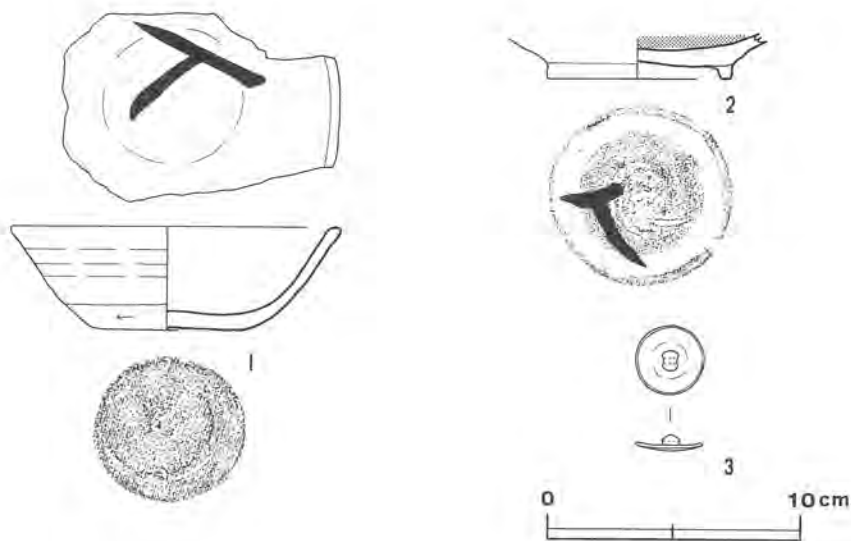
第258図 第38号住居跡・カマド実測図

で、壁高は20cmである。壁直下には、上幅20cm、深さ10cmの壁溝が周回している。残存する床は、壁際まで硬く締まったロームである。ピットはP₁～P₄の4か所を確認した。4か所とも支柱穴と思われ、北側に位置するP₁・P₄は、上端直径が45cmと50cm、深さが61cmと75cmである。南側に位置するP₂・P₃は、やや浅目であるが、床面流失以前はP₁・P₄と同規模であったものと思われる。カマドは、北西壁の中央部に付設されているが、燃烧部の掘り込みを除いてほとんどが消失しており、袖部は砂質粘土の痕跡を残すのみである。カマドの全長は120cmで、横幅は90cmほどである。燃烧部の規模は長さ80cm、幅60cmで、壁面を30cm奥に掘り込み、煙道部は奥壁をさらに25cm掘り込んで構築されている。掘り込み内には焼土や木灰を多量に含む赤褐色土が主に堆積している。火床は、床面から15cm掘り込まれ、硬く焼けている。

覆土は、部分的にしか堆積していないため詳しい観察はできなかった。

遺物は少なく、床面や覆土中から土師器及びその破片14点、須恵器片10点、青銅製の小型素文鏡1点と、カマド内から土師器片1点が出土している。本跡に伴う遺物は西コーナー部に集中しており、床面から第259図1の坏（土師器）、2の高台付坏（土師器）底部片が出土し、それぞれの底部には「人」の墨書が確認されている。3の小型素文鏡は、北西側の壁溝中から出土したもので、本跡に伴う可能性が高いと考えられる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から9～10世紀代の住居跡と思われる。



第259図 第38号住居跡出土遺物実測図

第38号住居跡出土土器観察表

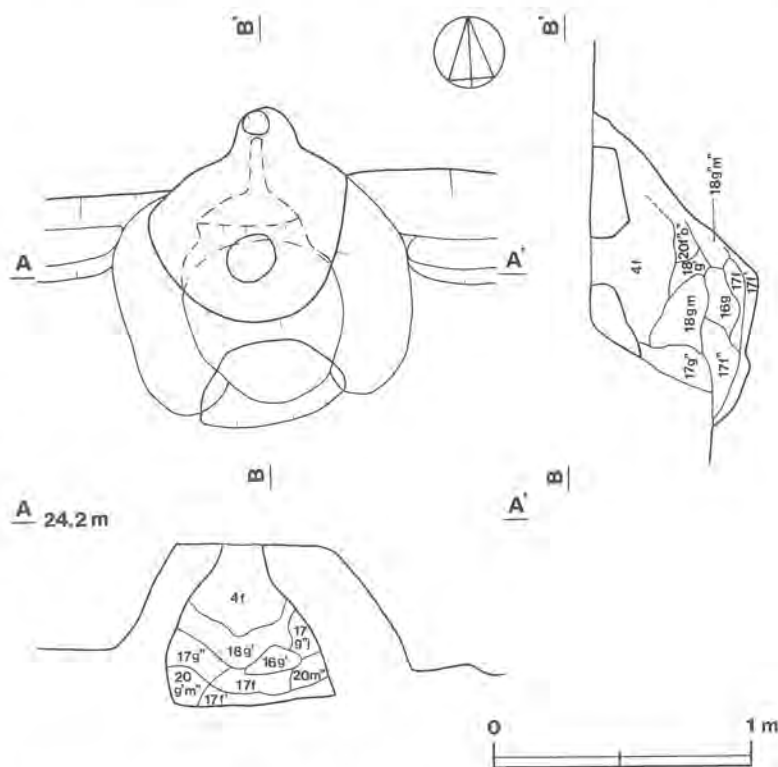
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第259 1	坏 土師器	A 13.0 B 4.1 C 5.9	平底。体部は内彎して開き、口縁部はわずかに外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部外面下端と底面は回転篋削り。回転方向は右。	砂粒 橙色 普通	60% P188 底部内面に墨書「人」
2	高台付坏 土師器	B (1.8) D 0.6 E 7.4	底部片。平底。高台は低く、「ハ」の字状に開き、接地面は平坦。	水挽き成形。内面磨き。高台は貼り付け。底部は回転系切り後、回転篋削り。	砂粒 にふい橙色 良好	40% P189 PL94 内面黒色処理・底部に墨書「人」

第40号住居跡 (第260・261図)

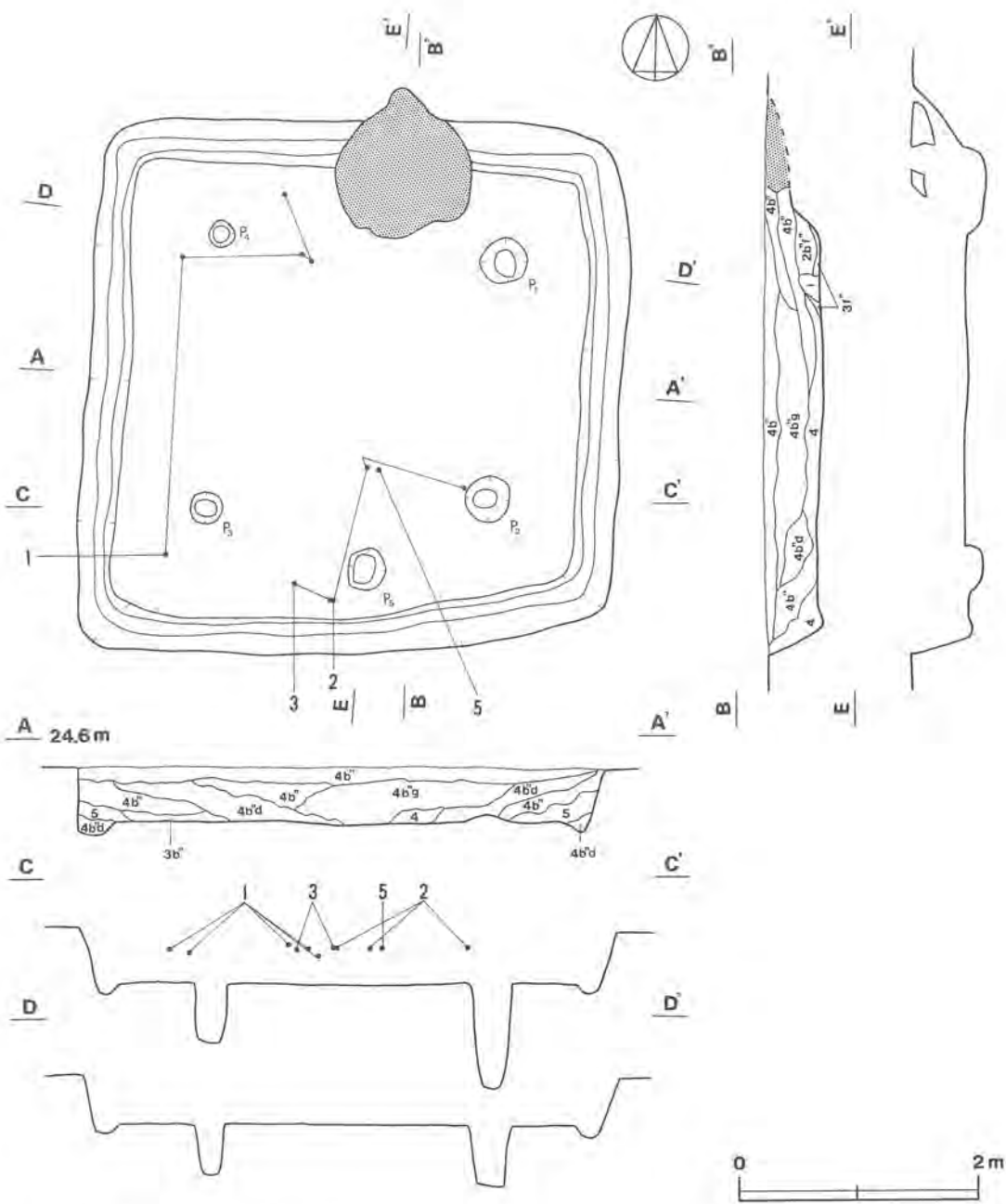
本跡は、調査区の南西部 N6is 区を中心に確認された住居跡である。本跡の西壁に接した位置には第21号住居跡が、北 4 m には第20号住居跡が存在している。

平面形は、長軸4.55m、短軸4.5mの方形状を呈し、主軸方向はN-0°を指している。床面積は16.5m²である。壁は締まったロームで、75~80度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は42cmで、壁直下には上幅20cm、深さ10cmの壁溝が全周している。床は貼り床で全体的に硬く締まり、床面は平坦である。ピットは5か所を確認した。主柱穴と思われるP₁~P₄は、上端直径が22~36cm、深さが45~92cmで、

方形に配列されている。南壁際に位置しているP₅は、上端直径が30cm、深さが18cmで、入口部施設に関する柱穴と思われる。カマドは、北壁の中央からわずかに東に寄った位置に付設され、ほぼ完全な状態で残存している。カマドの全長は126cm、横幅は115cmである。燃焼部の規模は、長さ90cm、幅55cm、高さ45cmで、壁面までは掘り込んでいない。煙道部は奥壁



第260図 第40号住居跡カマド実測図



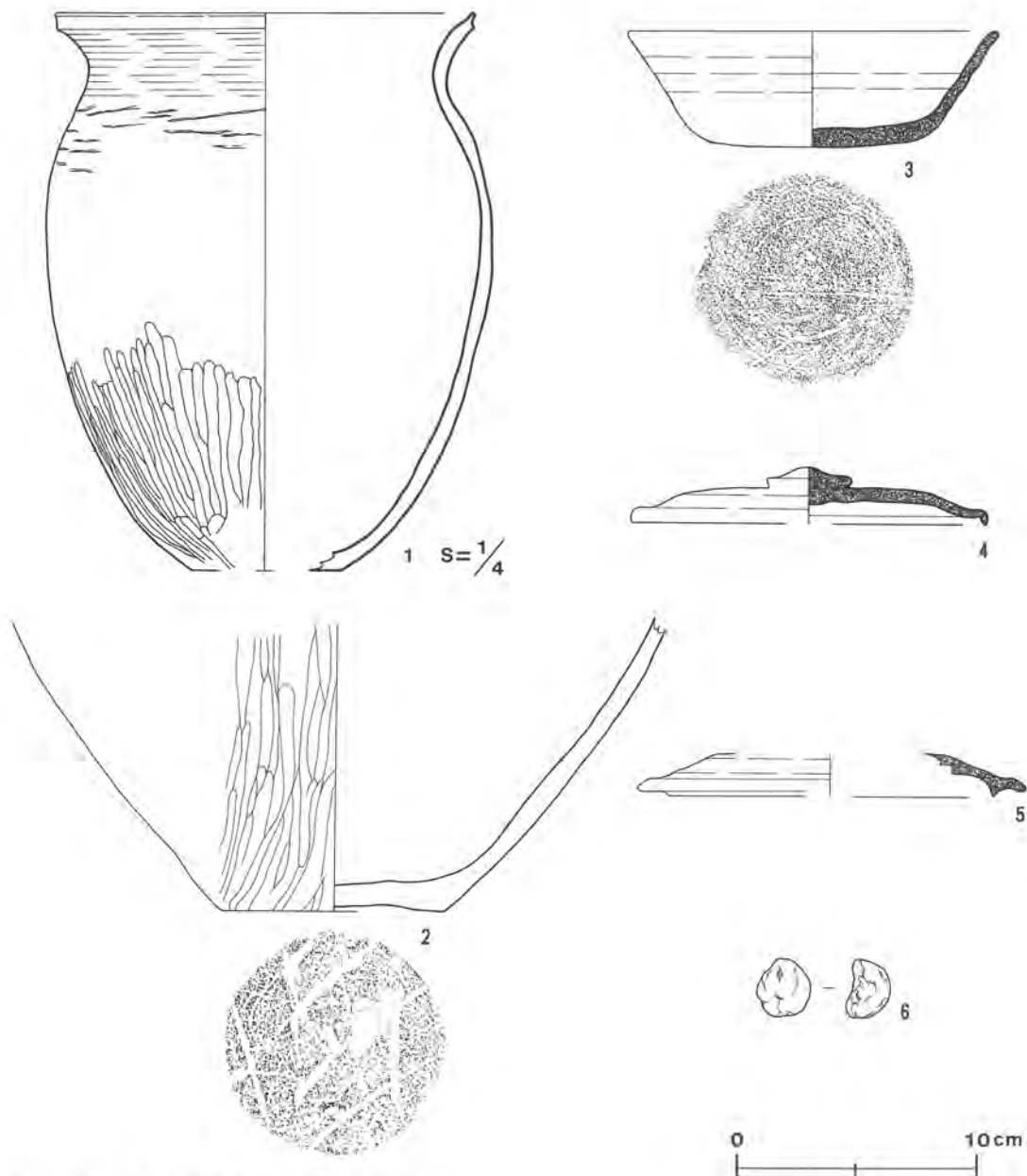
第261図 第40号住居跡実測図

をさらに35cmほど円筒形状に掘り込んで構築されている。袖部、天井部及び煙道の上部は砂質の粘土によって構築され、内側は赤く変色し、カマド内には焼土を多量に含む赤褐色土が主に堆積している。火床は、床面から15cm掘り込まれ、赤褐色に変色している。

覆土は、全体的に黒褐色土で、中層にはロームブロックが堆積している。なお、床面には焼土

や炭化材が散乱していることから、本跡の焼失後に自然堆積したものと思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片209点、須恵器及びその破片8点、土製品1点と、カマド内から土師器片8点が出土している。土師器片では甕胴部片が多く、遺構全体に散在している。カマドの西側から第262図1の甕（土師器）が出土している。4・5の蓋（須恵器）、3の坏（須恵器）、2の甕（土師器）は、南側の覆土中層から破片で出土したものである。これらの土器が本跡に伴うか否かは不明であるが、出土層位から考えて本跡との時期差は少ないものと考え



第262図 第40号住居跡出土遺物実測図

られる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から 8 世紀代の住居跡と思われる。

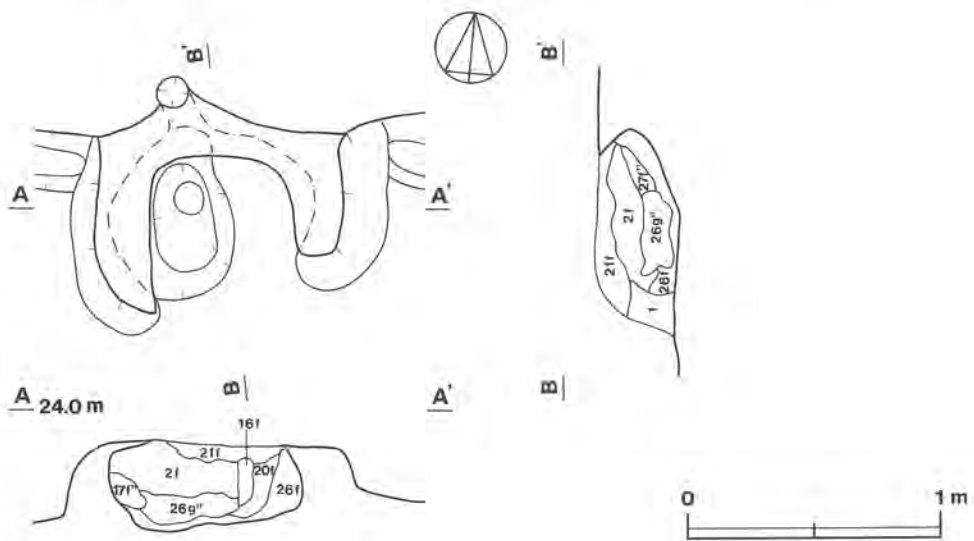
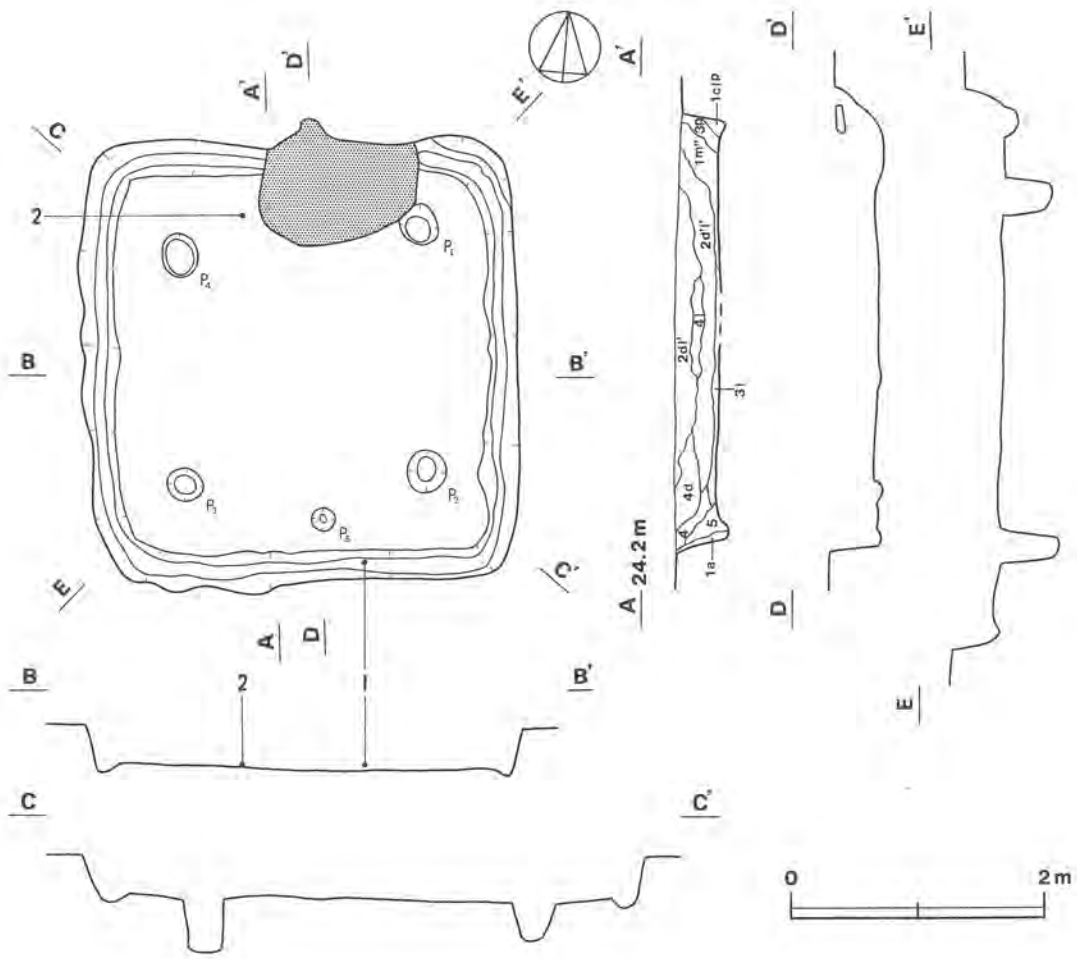
第40号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第262図 1	甕 土師器	A 23.2	胴部は長胴形で、最大径を上位 に持つ。口縁部は外反し、端部 を外上方につまみ上げる。	口縁部から頸部にかけての外 面は横ナデ整形。胴部外面は上位 に篋当て痕、下半部は縦位の篋 磨き。底部木葉痕。	砂粒・雲母・長石 にぶい褐色 良好	70% P190 PL88
		B 31.2				
		C (8.2)				
2	甕 土師器	B (12.0)	胴部は内彎気味に外傾して立ち 上がるが、上半部を欠損。	胴下半部は縦又は斜位の篋磨 き。底部木葉痕。	砂粒・雲母・長石 灰褐色 良好	40% P191
		C 9.3				
3	環 須恵器	A 15.4	丸底。体部下端は丸味を持ち、 それ以上は外傾して立ち上がる。 口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は回転篋削り。 回転方向は左。	砂粒・雲母・ス コリア 暗灰黄色 良好	70% P192 PL92
		B 4.9				
		C 8.0				
4	蓋 須恵器	A (15.0)	つまみは環状で、中央部の高ま りが強い。天井部は上位に平坦 部を持ち内彎する。口縁端部を 強く折るかえす。	水挽き成形。天井上位は回転篋 削り。つまみは貼り付け。回転 方向は右。	砂粒・雲母 にぶい黄色 良好	25% P194
		B 2.4				
		F 0.9				
		G 3.6				
5	蓋 須恵器	A (16.2)	天井部上位を欠損。口縁部はや や内彎気味で、口唇部は丸い。 内面にかえりを持つ。	水挽き成形。	砂粒・礫 明褐色 普通	55% P193
		B (1.8)				

第41号住居跡 (第263図)

本跡は、調査区の南東部 N7i2区を中心に確認された住居跡である。本跡の南西 7 m には第22号住居跡が、南 2 m には第49号住居跡が存在している。

平面形は、長軸3.53m、短軸3.47mの方形状を呈し、主軸方向はN-6°-Wを指している。床面積は9.8㎡である。壁はロームで、垂直に近い角度で立ち上がっている。壁高は33~37cmで、壁直下には上幅15~20cm、深さ5~10cmの壁溝が全周している。床は、壁際まで硬く締まったロームで、緩やかに起伏している。ピットはP₁~P₅の5か所を確認した。支柱穴と思われるP₁~P₄は、上端直径が30cm、深さが31~48cmで、方形に配列されている。P₅は、南壁際に位置し上端直径が20cm、深さが5cmと小規模で、入口部施設に関する柱穴と思われる。カマドは、北壁の中央部からわずかに東に寄った位置に付設されており、天井部は崩落している。カマドの全長は100cm、横幅は125cmで、主軸方向はN-17°-Wを指している。燃焼部の規模は、長さ80cm、幅80cmで、壁面は掘り込んでいない。煙道部は奥壁をさらに20cmほど円筒形状に掘り込んで構築している。袖部・天井部と煙道の一部は砂質の粘土によって構築され、カマド内には焼土を多量に含む暗赤褐色土が主に堆積している。火床は、床面から8cmほど掘り込まれ、赤褐色に変色している。



第263図 第41号住居跡・カマド実測図

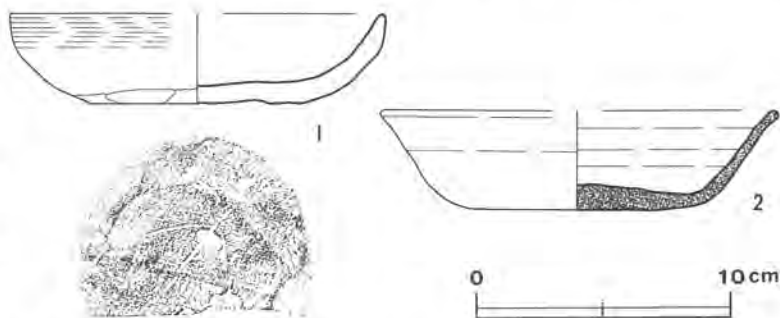
覆土は、上層に暗褐色土、中層に黒褐色土、下層に暗褐色土と極暗褐色土が自然堆積している。なお、床面に焼土や炭化材が散乱していることから、本跡は居住期間中あるいは廃絶後間もなく焼失したものと思われる。

遺物は極めて少なく、床面や覆土中から土師器及びその破片 8 点、須恵器 1 点が出土しただけである。第264図 2 の坏

(須恵器) はカマド西側の床面から正位で、

1 の坏 (土師器) は南側の壁際から伏せた状態で出土したもので、

2 点とも本跡に伴う遺物と考えられる。



第264図 第41号住居跡出土遺物実測図

本跡は、遺物や遺構の形態等から 8 世紀代の住居跡と思われる。

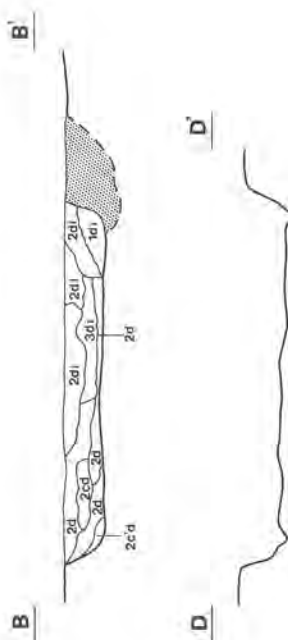
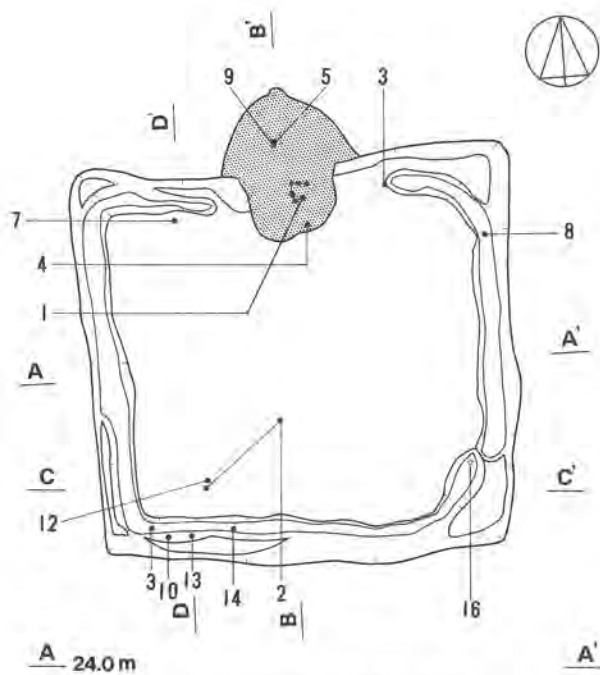
第41号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第264図 1	坏 土師器	A [14.8] B 3.6 C 8.4	丸底。体部は、底部から連続し、内彎気味に開く。口縁部は直立し、口唇部は尖る。	口縁部横ナデ整形。底部は不定方向の手持ち篋削り。	砂粒・スコリアにぶい橙色良好	60% P195 底部に刻文「↓」
2	坏 須恵器	A [15.6] B 4.0 C [7.0]	平底。体部下端は丸味を持ち、それ以上は、外反気味に立ち上がり、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は回転篋削り。回転方向は右。	石英・雲母・長石 灰黄色 良好	60% P196

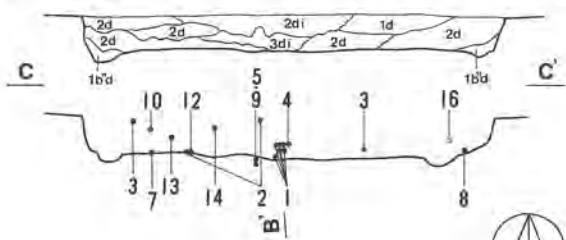
第42号住居跡 (第265図)

本跡は、調査区の南東部 N7h7 区を中心に確認された住居跡で、本跡の西15m には第41号住居跡が、南33m には第45号住居跡が存在している。

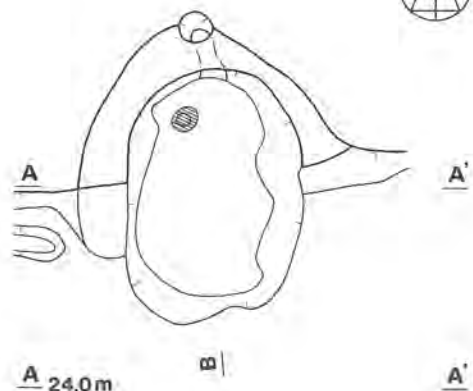
平面形は、長軸3.33m、短軸3.25m の方形状を呈し、主軸方向は N-0° を指している。床面積は 8.8m² である。壁はロームで、65~70度の角度で外傾して立ち上がっている。壁下には、上幅 20cm、深さ 5cm の浅い壁溝が全周している。床は、壁際まで硬く締まったロームで、凹凸が激しい。柱穴は検出できなかった。カマドは、北壁の中央部に付設されており、天井部と袖部の大部分が崩壊している。カマドの全長は 120cm、横幅は 110cm と推定される。燃焼部の規模は、長さ 100cm、



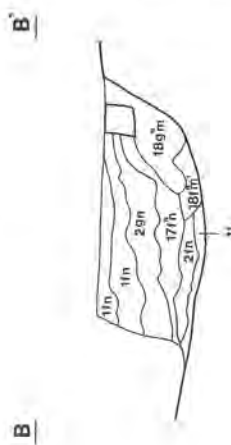
A 24.0m



0 2m

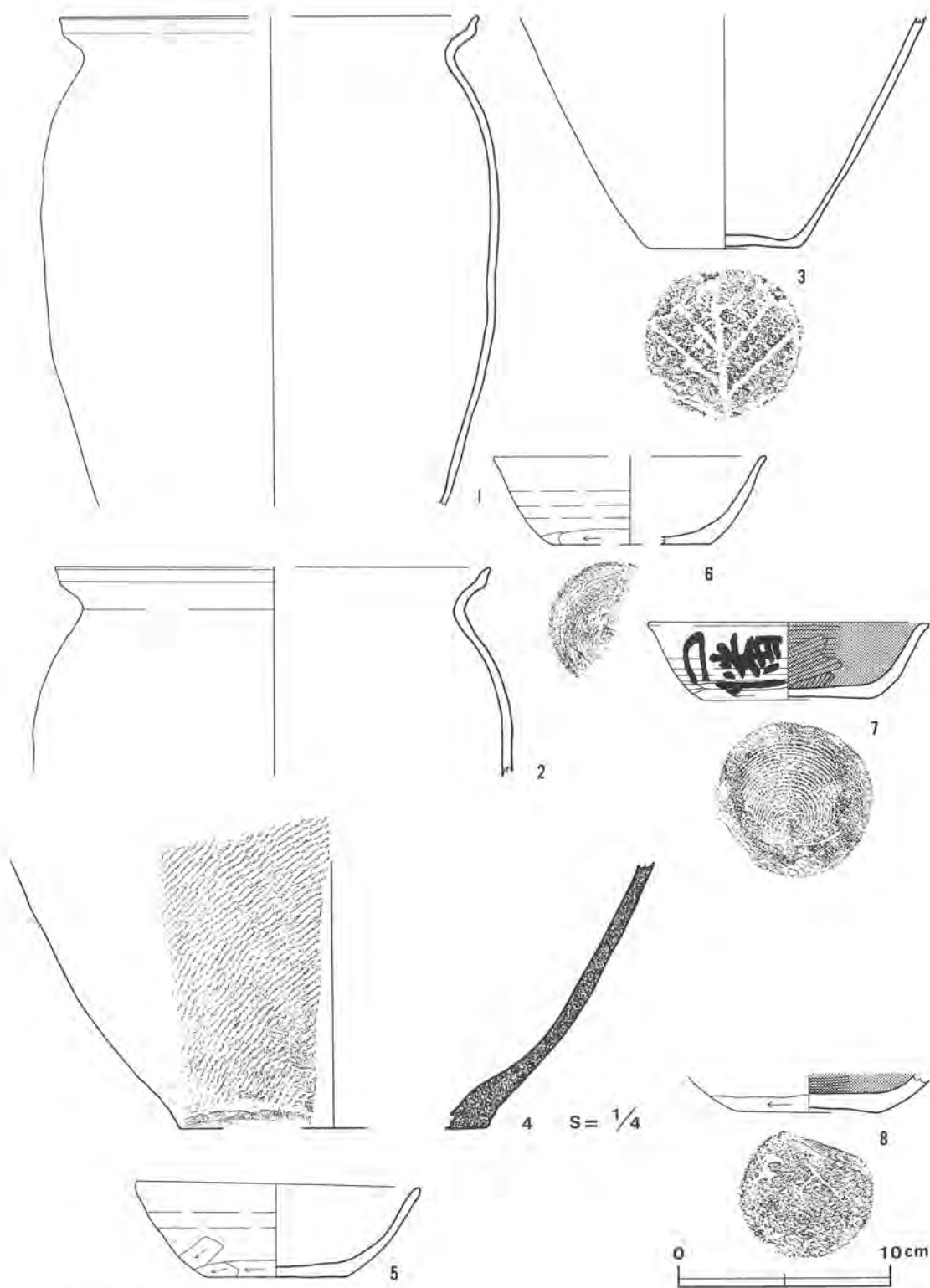


A 24.0m

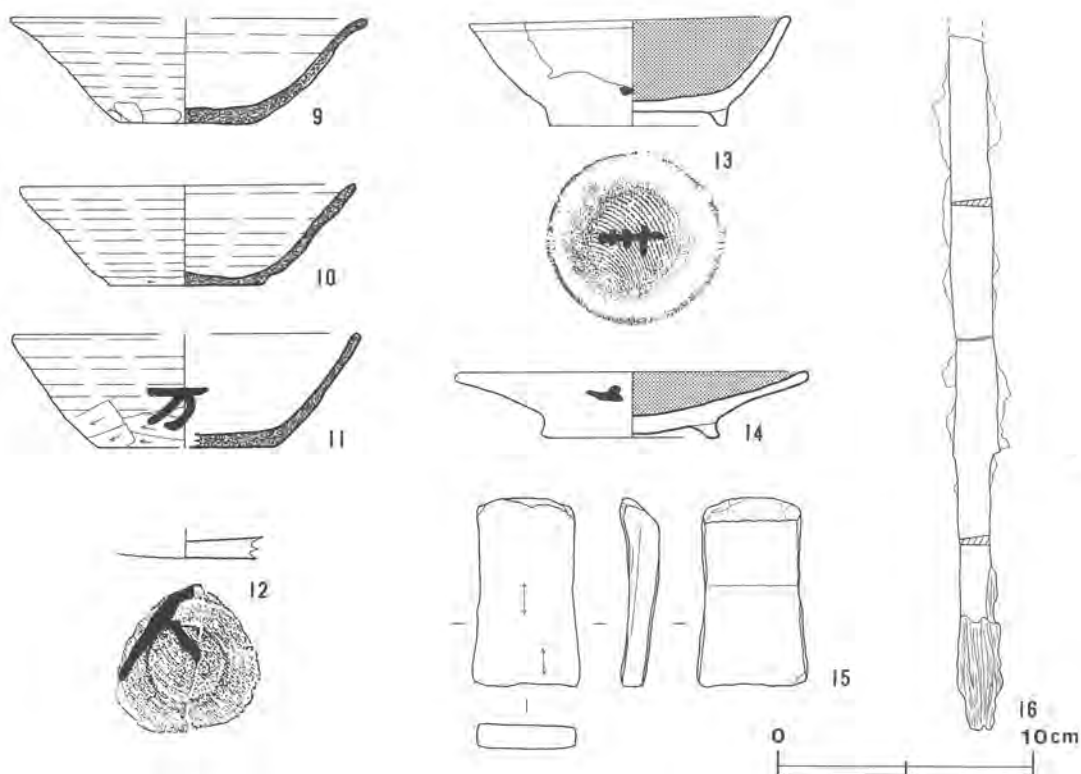


0 1m

第265図 第42号住居跡・カマド実測図



第266図 第42号住居跡出土遺物実測図(1)



第267図 第42号住居跡出土遺物実測図(2)

幅70cmで、壁面を35cmほど奥に掘り込み、焚口部から75cm奥には支脚が直立している。煙道部は奥壁をさらに15cmほど円筒形状に掘り込んで構築している。袖部・天井部及び煙道の一部は砂質の粘土によって構築され、カマド内には、焼土を多量に含む暗赤褐色土が主に堆積している。火床は、床面から15cm掘り込まれ赤褐色に変色している。

覆土は、上層と下層に暗褐色土、中層に極暗褐色土が堆積している。自然堆積層と思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片59点、須恵器及びその破片18点、砥石1点、鉄製品（刀子）1点と、カマド内から土師器及びその破片58点、須恵器片24点が出土している。本跡に伴う遺物は、カマド周辺と南西コーナー部付近に集中しており、その中には「人」・「卅」・「万」・「ㇿ」等の墨書を持つ土師器4点と、「人」の刻書を持つ土師器1点が含まれている。カマド周辺からは第266図7の坏（土師器）や4の甕（須恵器）、3の甕（土師器）、第267図15の砥石が、南西コーナー部からは10の坏（須恵器）、13の高台付坏（土師器）、14の高台付皿（土師器）が出土している。なお、カマド内に直立する支脚上には、第266図5の坏（土師器）と第267図9の坏（須恵器）が伏せた状態で重ねられ、支脚の高さを調節する役割を果たしている。

本跡は、遺物や遺構の形態等から9～10世紀代の住居跡と思われる。

第42号住居跡出土土器観察表

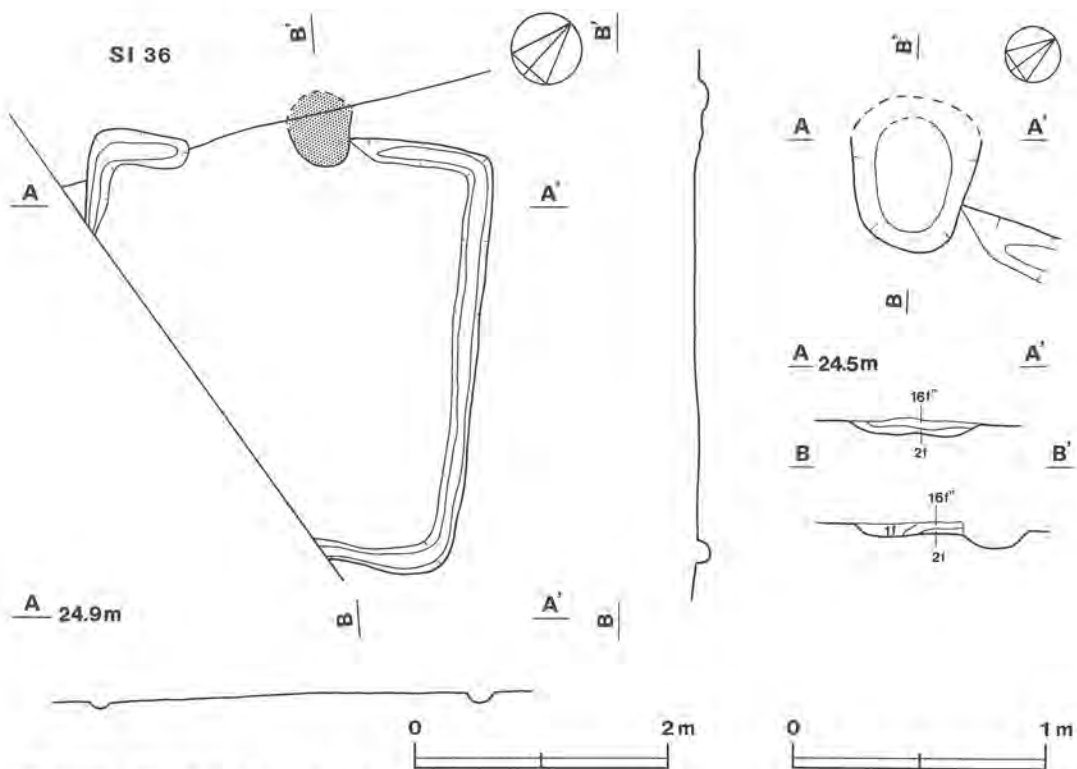
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第266図 1	甕 土師器	A (19.8) B (23.2)	底部欠損。胴部は長胴形である。 口縁部は外反し、端部を外上方 につまみ上げる。	器外面に焼土及び炭化物が付着 し、整形技法不明。内面上位は 篋ナデ整形。	砂粒・雲母・長石 にぶい赤褐色 良好	40% P197
2	甕 土師器	A (20.6) B (9.9)	口縁部片。口縁部は外反して開 き、端部を外上方につまみ上げ る。	口縁部横ナデ整形。	砂粒・雲母・石 英・長石 にぶい赤褐色 不良	20% P198
3	甕 土師器	B (11.0) C 7.0	平底。胴部は外傾して立ち上 がるが、上半部を欠損。	胴部内・外面ともナデ整形。底 部木葉痕。	砂粒・長石・雲母 灰赤色 良好	40% P199
4	甕 須恵器	B 16.8 C (19.0)	底部は引き締まり突出する。胴 部は内彎気味に外傾するが、上 半部を欠損。全体に厚手である。	胴部外面に斜位の平行叩き目整 形。	砂粒 (内)にぶい褐色 (外)赤褐色 良好	20% P209
5	坏 土師器	A 13.5 B 4.6 C 6.5	平底。体部は内彎して開き、口 縁部はわずかに外反する。口唇 部は丸い。	水挽き成形。体部下端篋削り。 底部は一定方向の手持ち篋削 り。	砂粒・スコリア 明褐色 普通	90% P200
6	坏 土師器	A (12.8) B 4.2 C (7.4)	平底。体部は内彎して開き、口 縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部下端篋削り。 底部は糸切り後、周囲を回転篋 削り。	砂粒 明赤褐色 良好	40% P201
7	坏 土師器	A 13.3 B 3.6 C 8.0	上げ底。体部は内彎気味に開き、 口縁部は外反する。口唇部は丸 い。	水挽き成形。体部下端篋削り。 内面は篋磨き。底部は回転糸切 り後、周囲を篋削り。	砂粒 にぶい褐色 良好	60% P204 PL91 内面黒色処理・ 体部墨書「〇楯」
8	坏 土師器	B (1.8) C 6.5	底部片。平底。	水挽き成形。体部下端は篋削り。 内面は篋磨き。底部は手持ち篋 削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% P205 PL94 内面黒色処理・ 底部に刻書「人」
第267図 9	坏 須恵器	A (14.0) B 4.2 C 5.1	平底。体部は内彎気味に開き、 口縁部は外反する。口唇部は丸 い。	水挽き成形。体部下端篋削り。 底部は回転篋削り後、手持ち篋 削り。	砂粒 オリーブ黒色 普通	30% P202
10	坏 須恵器	A 13.3 B 4.1 C (6.0)	平底。体部は外傾して開き、口 縁部に至る。口唇部はやや尖る。	水挽き成形。体部下端篋削り。 底部は一定方向の手持ち篋削 り。	砂粒・雲母 灰オリーブ色 普通	55% P207
11	坏 須恵器	A (13.8) B 4.5 C (6.5)	平底。体部は内彎気味に開き、 口縁部に至る。口唇部は平坦。	水挽き成形。体部外面下位篋削 り。底部は一定方向の手持ち篋 削り。	砂粒 にぶい黄色 良好	20% P208 体部に墨書「万」
12	坏 土師器	C (6.8)	底部片。平底。	底部内面篋磨き。外面は糸切り 後、周囲を回転篋削り。	砂粒・雲母 (内)橙色(外)灰褐色 普通	10% P264 底部に墨書「人」
13	高台付坏 土師器	A 12.7 B 4.3 D 0.8 E 6.9	平底。高台は短かく垂下し、接 地面は丸い。体部は内彎して開 き、口縁部はわずかに外反する。	水挽き成形。高台は貼り付け。 底部は静止糸切り後、周囲をナ デ整形。	砂粒・スコリア にぶい橙色 良好	80% P203 PL91・94 内面黒色処理・ 体部と底部墨書 「卍」

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第267図 14	高台付皿 土師器	A 13.9 B 2.6 D 0.6 E 7.0	底部は丸味を持つ。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は平坦。体部は外傾して大きく開き、口縁部に至る。口唇部は丸い。	木挽き成形。内面磨き。高台は貼り付け。底部は回転削り。	砂粒・雪母にふい、褐色良好	95% P206 内面黒色処理・ 体部に墨痕

第43号住居跡（第268図）

本跡は、調査区の南西端 O5j9 区を中心に確認された住居跡で、北壁の一部は第36号住居跡を掘り込み、南側半分は調査区外へ延びている。本跡の北東 4 m には第31号住居跡が存在している。

平面形は、調査できた部分から推定すると長軸3.4m、短軸3.19mの方形状を呈し、主軸方向は N-37°-Wを指すものと思われる。調査した床面積は7.4m²である。壁はローム面を掘り込んでいないため確認できないが、上幅20cm、深さ5~10cmの壁溝が本跡の範囲を周回している。床はロームで全体的に良く締まり、床面は平坦である。ピットは確認できなかった。カマドは、北西壁の北コーナー部寄りに付設されているが、燃焼部の掘り込み以外は全て消失していた。掘り込みは楕円形状を呈し、規模は長径60cm、短径50cm、深さ7cmである。火床は良く焼けてレンガ状を呈している。



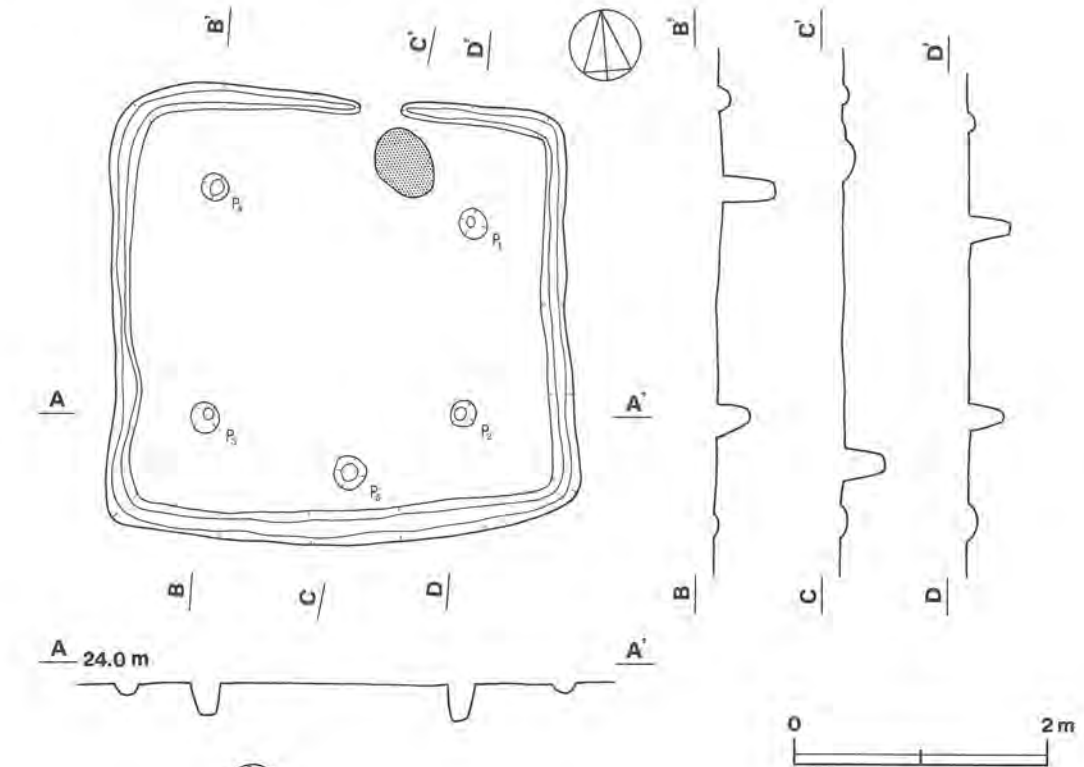
第268図 第43号住居跡・カマド実測図

覆土は観察できなかった。

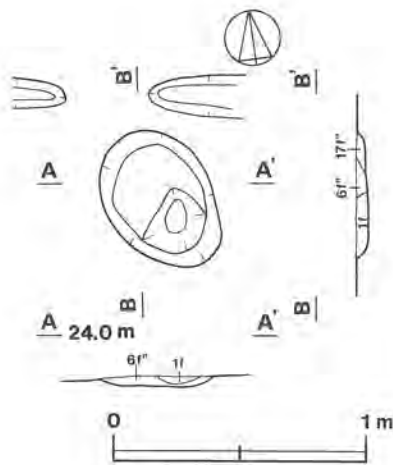
遺物は出土していないが、本跡は遺構の形態等から8～10世紀代の住居跡と思われる。

第45号住居跡（第269図）

本跡は、調査区の南東部 O7g7区を中心に確認された住居跡で、本跡の北西33m には第49号住居跡が、南18m には第52号住居跡が存在している。



第269図 第45号住居跡・カマド実測図



カマド実測図

平面形は、一辺3.58mの方形状を呈し、主軸方向はN-4°-Eを指している。床面積は11.7m²である。本跡はローム層を掘り込んでいないため、壁は確認はできなかったが、本跡の範囲は壁溝によって確認した。壁溝の規模は、上幅20cm、深さ4～6cmである。床はロームで、全体的に硬く締まり、床面は平坦である。ピットはP₁～P₅の5か所を確認した。ピットの規模は、上端直径が22～26cm、深さが27～43cmで、方形に配列されている

P₁～P₄が支柱穴、南壁際に位置している P₅が入口部施設に関する柱穴と思われる。カマドは、北壁の中央部からわずかに東に寄った位置に付設されており、燃焼部の掘り込み以外はすべて消失している。燃焼部の掘り込みは、直径25cm、深さ5cmの円形状を呈し、壁からわずかに内側に位置している。掘り込み内には、焼土を含む暗赤褐色土が主に堆積し、火床は良く焼けている。

覆土は観察できなかった。

遺物は出土していないが、本跡は遺構の形態等から8～10世紀代の住居跡と思われる。

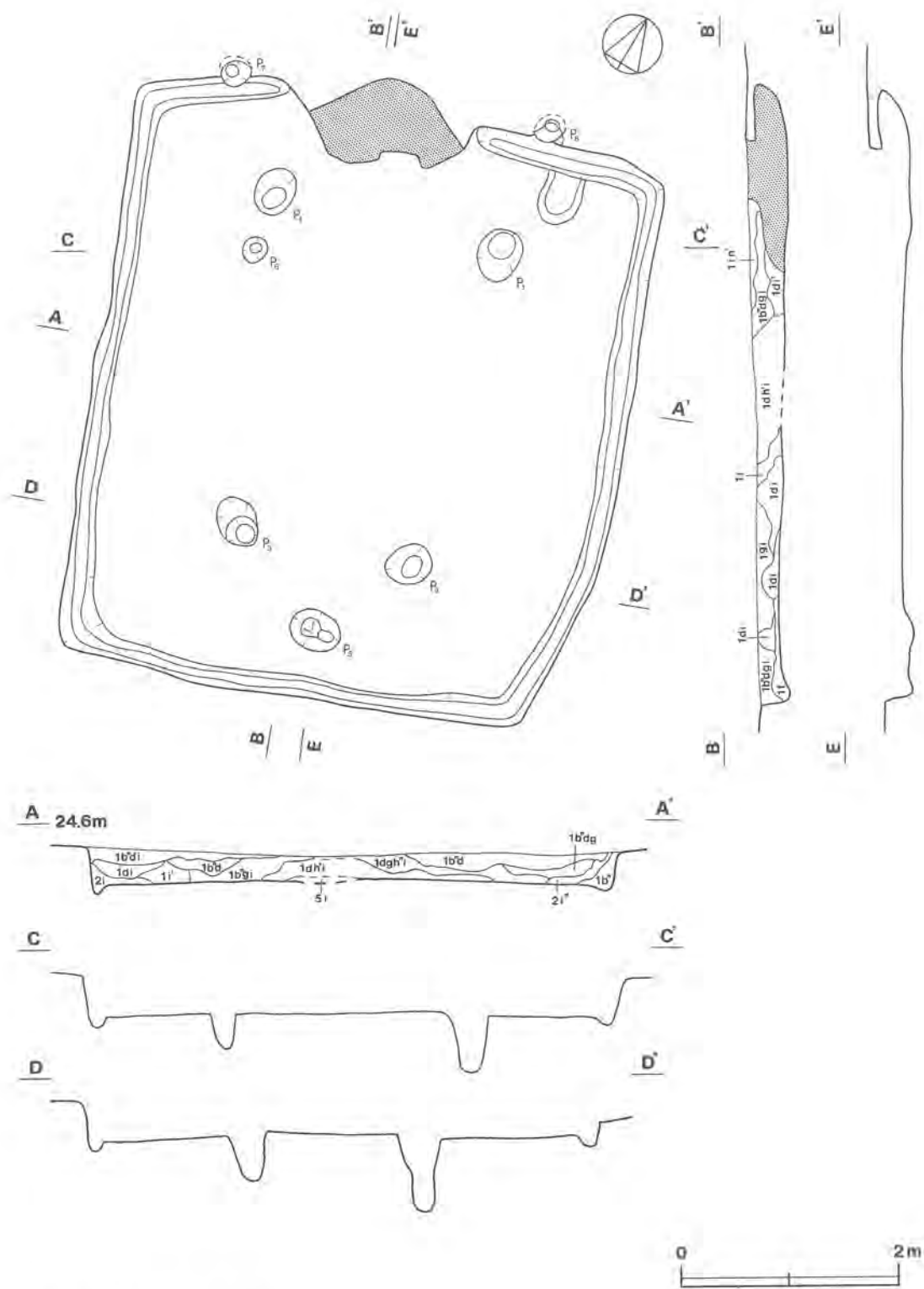
第46号住居跡（第270・271図）

本跡は、調査区の南部 O6f₅区を中心に確認された住居跡で、北壁側は同時期の第53号住居跡を掘り込んでいる。本跡の北3mには第34号住居跡が、南西2mには第47号住居跡が存在している。

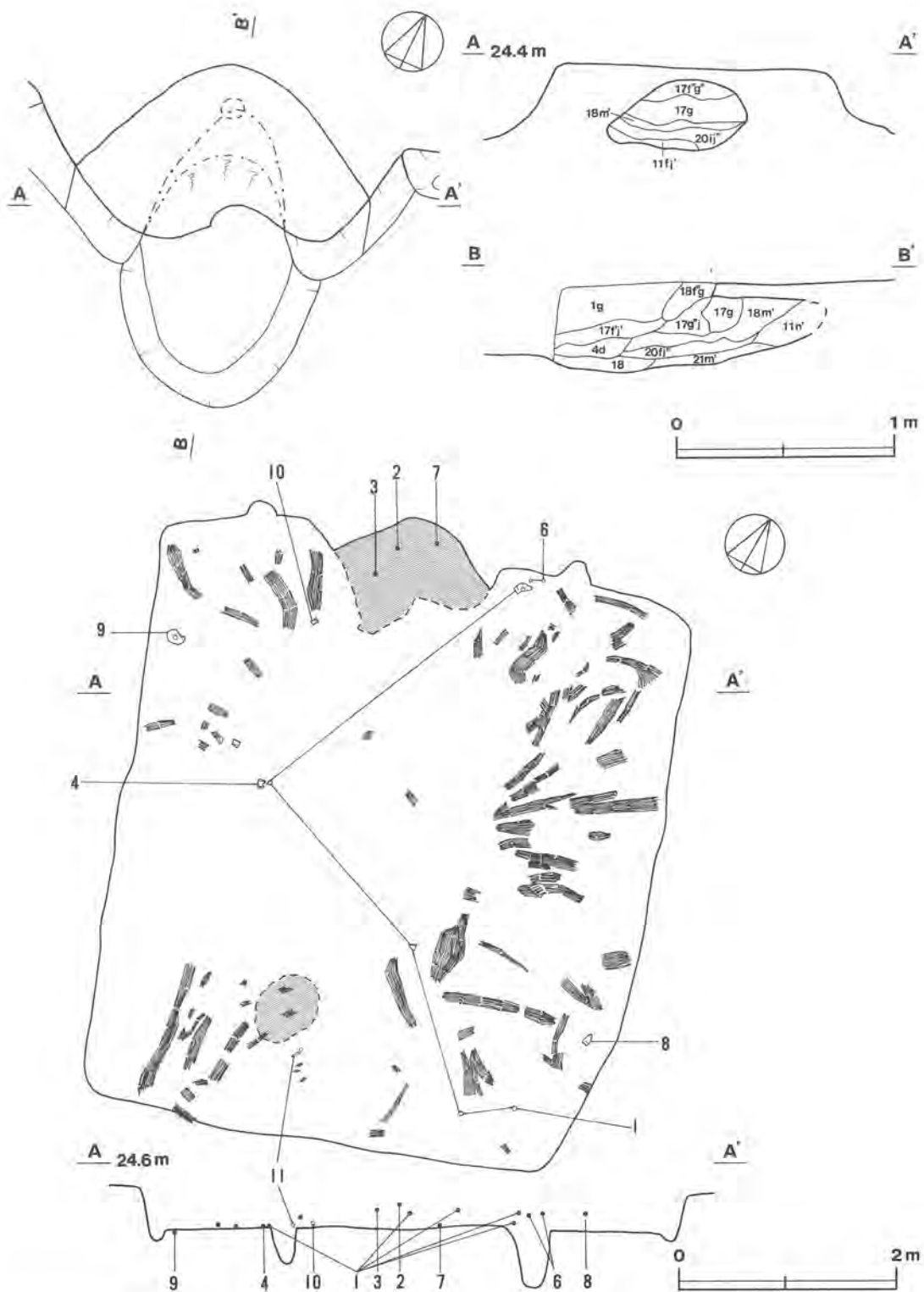
平面形は、長軸5.55m、短軸5mの方形状を呈し、主軸方向はN-18°-Wを指している。床面積は25.4m²である。壁はロームでほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は34cmで、壁直下には上幅15cm、深さ10cmの壁溝が全周している。床はロームで、壁際まで硬く締まり、床面は緩やかに起伏している。ピットはP₁～P₈の8か所を確認した。支柱穴と思われるP₁～P₄は、上端直径が35～42cm、深さが40～71cmで方形に配列されている。P₅は、上端直径が40cm、深さが20cmで南壁際に位置することから入口部施設に関する柱穴と思われる。P₆～P₈は上端直径が20～25cm、深さが26～33cmと小規模であり、覆土等からいずれも本跡に伴う補助的な柱穴と考えられる。カマドは、北壁の中央部が半島状に掘り残されて付設されているが、天井部・袖部のほとんどが崩壊している。カマドの全長は160cmで、横幅は不明である。焼燃部の規模は、長さ135cm、幅90cmほどで、壁面は掘り込んでいない。煙道部は奥壁をU字形に掘り窪めて構築されている。袖部・天井部及び煙道の上部は砂質の粘土によって構築されているが、粘土の中には藁状の物質が混入され、赤褐色に焼き固まっている。カマド内には、焼土ブロックや木灰を含む鈍い赤褐色土が主に堆積している。なお、覆土下層には細かい獣骨片を検出したが採集は不可能であった。火床は、床面からわずかに掘り込まれ、焼けてブロック状を呈している。

覆土は、ロームブロックを含む褐色土が堆積している。なお、床面近くには炭化材が多量に出土していることから、焼土の量は比較的少ないが、本跡は廃絶後に焼失し、人為的に埋め戻されたものと思われる。

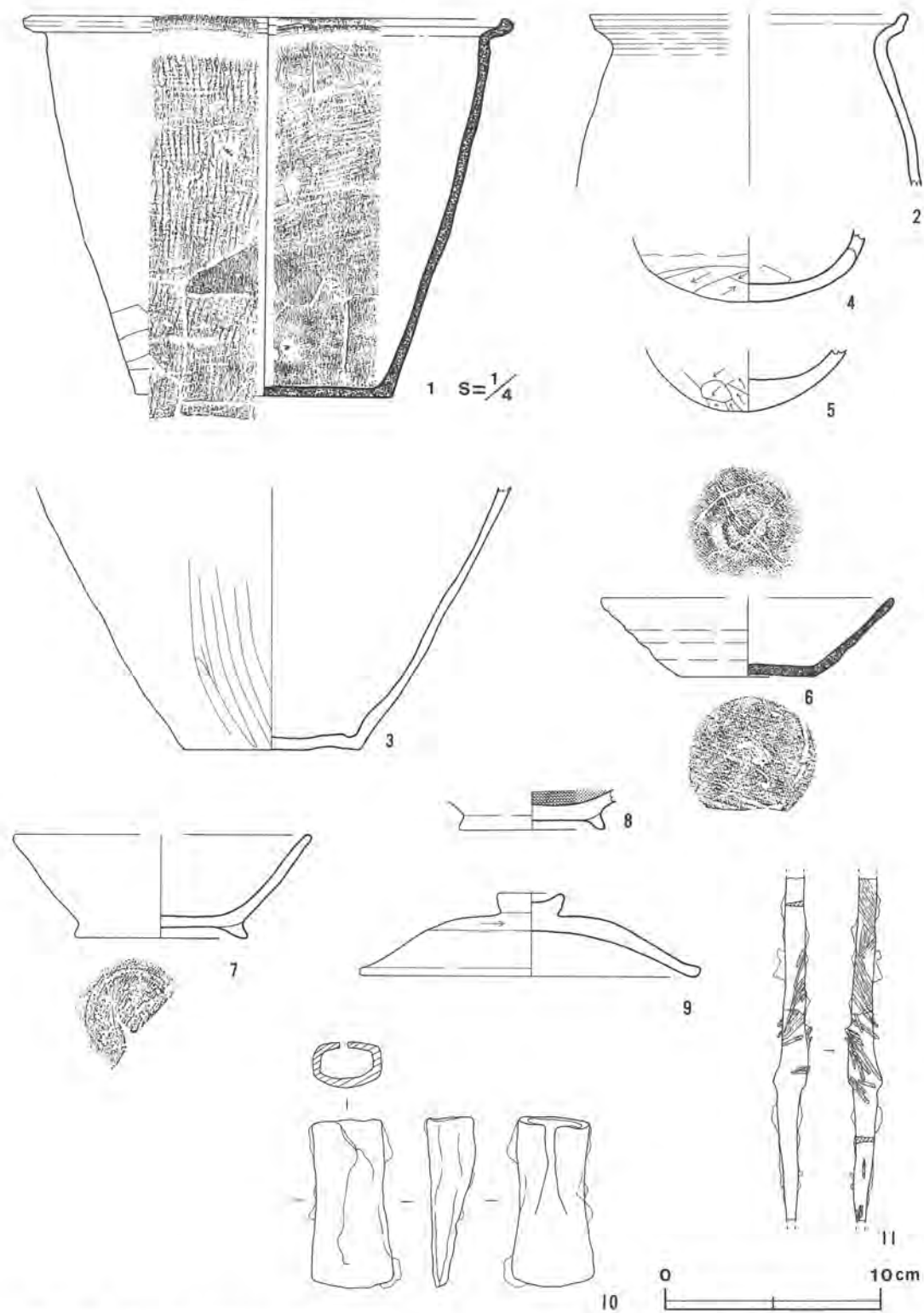
遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片136点、須恵器及びその破片179点、鉄製品（刀子、斧）2点と、カマド内から土師器及びその破片90点が出土している。本跡に伴う遺物は、北西部と南東部に多く散在しており「未」の刻書と意味不明の刻文を持つ土器2点が含まれている。北西部の床面からは第272図4・5の坏（土師器）、9の蓋（土師器）、10の鉄斧が、南東部からは



第270图 第46号住居跡実測图



第271図 第46号住居跡カマド実測図・炭化材・出土遺物位置図



第272图 第46号住居跡出土遺物実測図

1の甕(須恵器)、8の高台付坏(土師器)が出土している。なお、カマド内からは2・3の甕(土師器)、7の高台付坏(土師器)が、南側の床面から11の刀子が出土しており、これらも本跡に伴う遺物と考えられる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から9～10世紀代の住居跡と思われる。

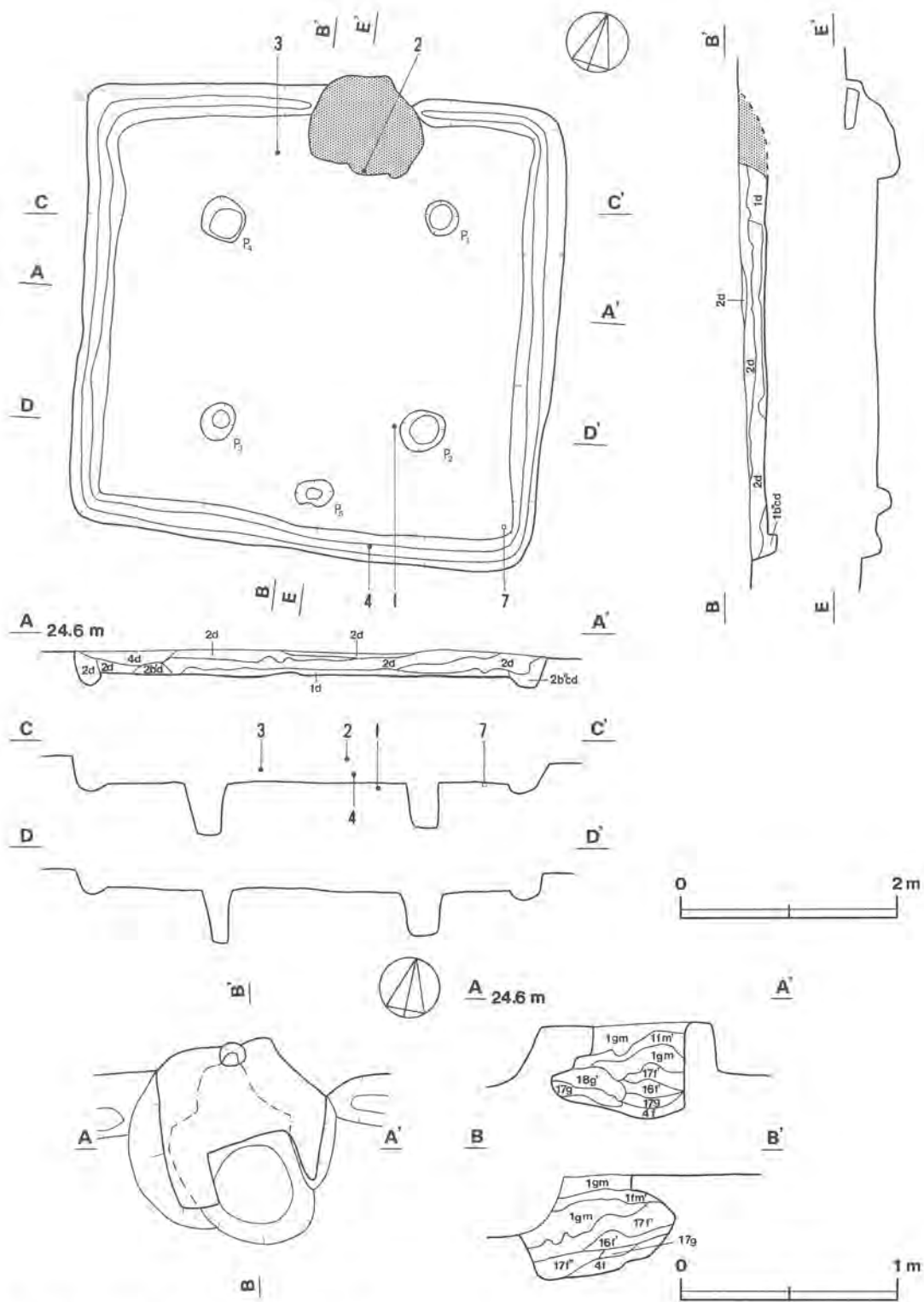
第46号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第272図 1	甕 須恵器	A [26.3] B 23.3 C [15.9]	胴部は外傾して立ち上がり、上位はわずかに内彎する。口縁部は強く外反し、端部をつまみ上げる。	胴部外面上位は格子状の叩き目整形で、下位は横位の篔削り。内面上位は斜位の平行叩き目で、下位は横ナデ整形。	砂粒・礫 灰色 普通	50% P218 PL88
2	甕 土師器	A [14.8] B (8.0)	胴下半部を欠損。口縁部は外反し、端部を外上方につまみ上げる。	口縁部外面横ナデ整形。他はナデ整形。	砂粒 にぶい赤褐色 良好	30% P210 PL88
3	甕 土師器	B (12.2) C [9.2]	薄手。底部は著しく歪み、胴部は外傾して立ち上がる。胴上半部を欠損。	胴部外面下位は縦位の篔磨き。内面は横位の篔ナデ整形。	砂粒・雲母 にぶい褐色 不良	20% P211
4	坏 土師器	B (3.4)	底部片。丸底。	内面篔ナデ整形。外面不定方向の手持ち篔削り。	砂粒・スコリア 橙色 普通	10% P213
5	坏 土師器	B (2.9)	底部片。丸底で、底部中央に厚みを持ち、底面は突出する。	内面篔ナデ整形。外面不定方向の手持ち篔削り。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	20% P212
6	坏 須恵器	A [13.6] B 3.7 C 6.2	上げ底。体部は外傾して開き、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部下端篔削り。底部は回転篔切り後、一定方向の手持ち篔削り。	砂粒・雲母 褐灰色 良好	25% P217 内面に刻文
7	高台付坏 土師器	A [13.9] B 4.8 D 0.5 E 8.0	平底。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は丸い。体部は内彎して開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。内面篔磨き。高台は貼り付け。底部回転篔削り。	砂粒・スコリア 雲母 にぶい赤褐色 良好	50% P214 PL91・94 底部に刻書「未口」
8	高台付坏 土師器	B (1.8) D 0.7 E 6.8	底部片。平底。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は丸い。	内面篔磨き。高台は貼り付け。底部回転篔削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% P215 内面黒色処理
9	蓋 土師器	A 15.8 B 3.9 F 1.1 G 3.1	つまみは環状で、中央部が凹む。天井部は丸味を持ち、段をもって口縁部に移行する。口唇部は丸い。	つまみは貼り付け。天井部上位は回転篔削り。内面は篔磨き。回転方向は右。	砂粒・スコリア 橙色 普通	75% P216 PL92

第47号住居跡 (第273図)

本跡は、調査区の南部O6g4区を中心に確認された住居跡で、北西部は古墳時代前期の第25号住居跡を大きく掘り込んでいる。本跡の北東2mには第48号住居跡が、南東3mには第38号住居跡が存在している。

平面形は、長軸4.35m、短軸4.32mの方形状を呈し、主軸方向はN-17-Wを指している。床



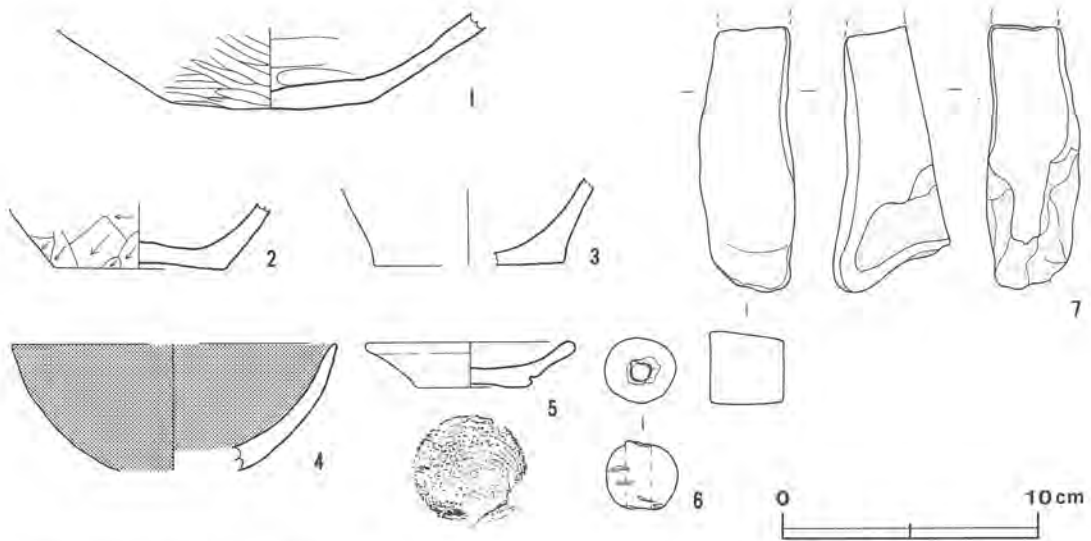
第273図 第47号住居跡・カマド実測図

面積は16.4m²である。壁はロームで、75度の角度で外傾して立ち上がっている。壁高は25cmであるが、第25号住居跡を掘り込む北西部の壁だけは、18cmと浅くなっている。壁直下には上幅25cm、深さ10cmの壁溝が全周している。床は、全体に硬く締まったロームであり、特にカマドの前方は踏み締まりにより一層硬化している。床面は平坦である。ピットはP₁~P₅の5か所を確認した。主柱穴と思われるP₁~P₄は、上端直径が30~40cm、深さが43~54cmで、方形に配列されている。P₅は、上端直径が30cm、深さが15cmと小規模で、南壁際に位置していることから入口部施設に関する柱穴と思われる。カマドは、北壁の中央からわずかに東に寄った位置に付設されており、天井部と袖部の一部は崩壊している。カマドの全長は95cm、横幅は100cmである。燃烧部の規模は長さ70cm、幅50cmで、壁面は掘り込んでいない。煙道部は奥壁をさらに20cmほど円筒状に掘り込んで構築されている。カマド内には、焼土を多量に含む暗赤褐色土が主に堆積し、内壁は赤く変色している。火床は、床面から20cmも掘り込まれ、焼けてレンガ状を呈している。

覆土は、上・中層に暗褐色土、下層に褐色土が堆積している。自然堆積層と思われる。

遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片38点、須恵器片10点、球状土錘1点、砥石1点が出土している。本跡に伴う遺物はカマド前方と南東コーナー付近に散在しており、カマド前方から第274図2・3の甕（土師器）底部が、南東コーナー付近から1の甕（土師器）底部と4の塊（土師器）、7の砥石が出土している。なお、5の小型の皿（土師器）と6の球状土錘は北西部の覆土中から出土したもので、本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から8世紀代の住居跡と思われる。



第274図 第47号住居跡出土遺物実測図

第47号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第274図 1	甕 土師器	B (3.8) C (7.8)	底部片。平底。胴部下端は著しく外側に開く。	胴部外面下端は斜位の篋磨き。内面は指ナデ整形。	石英・長石・雲母 黄褐色 普通	10% P219
2	甕 土師器	B (2.6) C (6.7)	底部片。上げ底。	胴部外面下端篋削り。底部篋削り。	砂粒・スコリア 明褐色 普通	10% P220
3	甕 土師器	B (3.4) C (7.5)	底部片。上げ底。	器内・外面ナデ整形。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	10% P221
4	埴 土師器	A [12.8] B (5.0)	丸底。体部は丸味を持ち、底部から連続して立ち上がる。口縁部はやや外反する。	口縁部内・外面横ナデ整形。体部内面篋磨き。	砂粒 黒色 普通	10% P222 内・外面黒色処理
5	皿 土師器	A 8.3 B 1.8 C 4.3	底部はわずかに引き締まり突出する。平底。体部は外傾して大きく開く。口唇部は膨らみ、丸い。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母 褐色 普通	55% P223

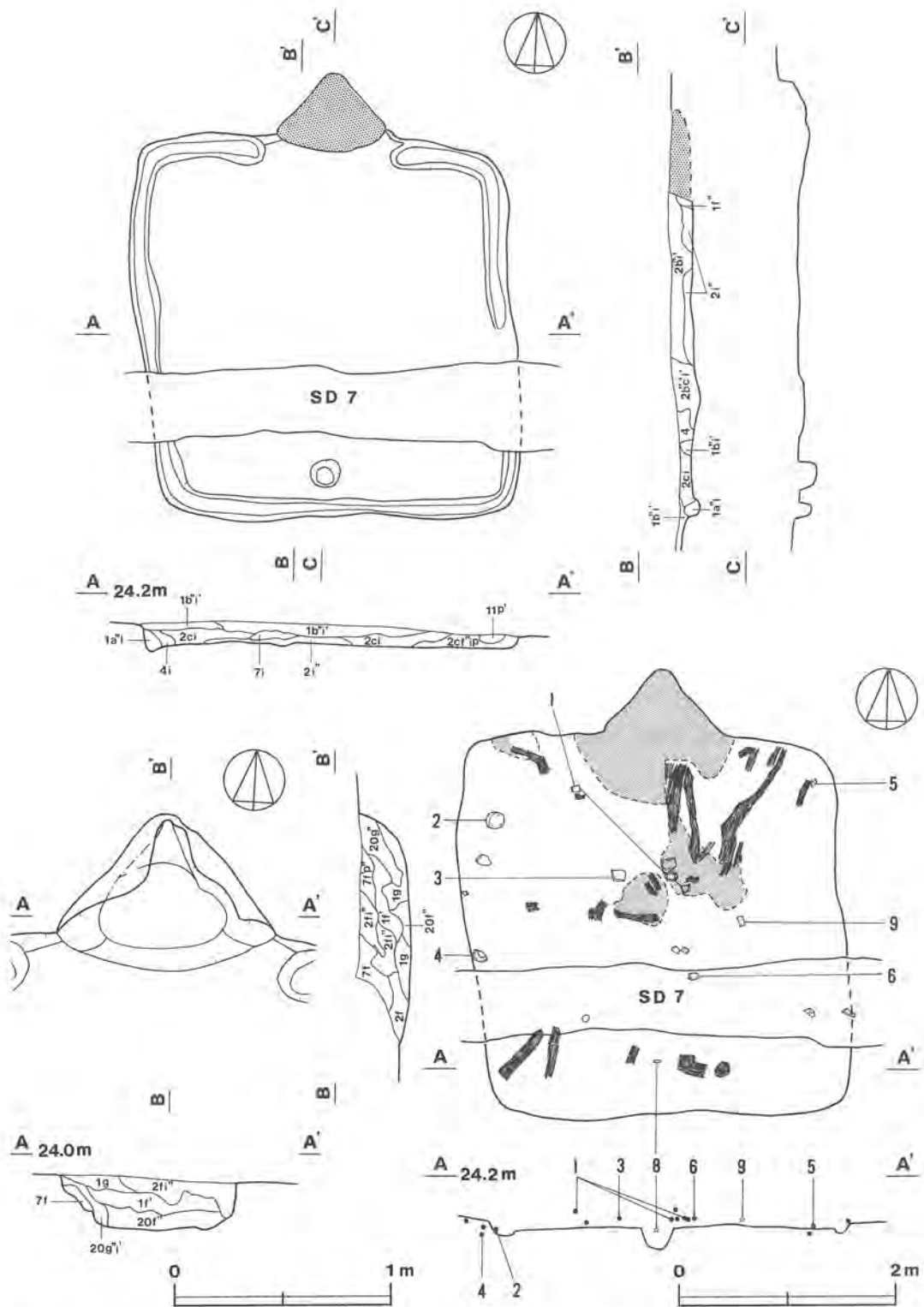
第49号住居跡 (第275図)

本跡は、調査区の南東部 N7j2区を中心に確認した住居跡で、南側の一部は東西に延びる第7号溝により60cmの幅で床面まで掘り込まれている。本跡の北2mには第41号住居跡が、西6mには第22号住居跡が存在している。

平面形は、長軸3.6m、短軸3.45mの方形状を呈し、主軸方向はN-8°-Wを指している。床面積は11.3m²である。壁はロームであるが、南側はローム面を掘り込んでいないため検出できなかった。北側の壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は16~24cmである。壁直下には上幅15cm、深さ5~10cmの壁溝が周回している。床はロームで、全体的に硬く締まり、緩やかに起伏している。ピットは、南壁際に1か所を確認した。上端直径は30cm、深さ19cmで入口部施設に関する柱穴と思われる。カマドは、北壁の中央部に付設されており、天井部・袖部の大部分が崩壊している。カマドの全長は75cm、横幅は100cmである。燃焼部の規模は、長さも幅も60cmで、壁面から40cm奥に掘り込み、煙道部は奥壁をさらに10cmほど掘り込んで構築されている。袖部・天井部及び煙道の上部は砂質の粘土によって構築され、カマド内には焼土を多量に含むにぶい赤褐色土が主に堆積している。火床は、床面からわずかに掘り込まれ、赤褐色に焼けている。

覆土は、上層に褐色土、下層に暗褐色土が堆積している。自然堆積層と思われる。

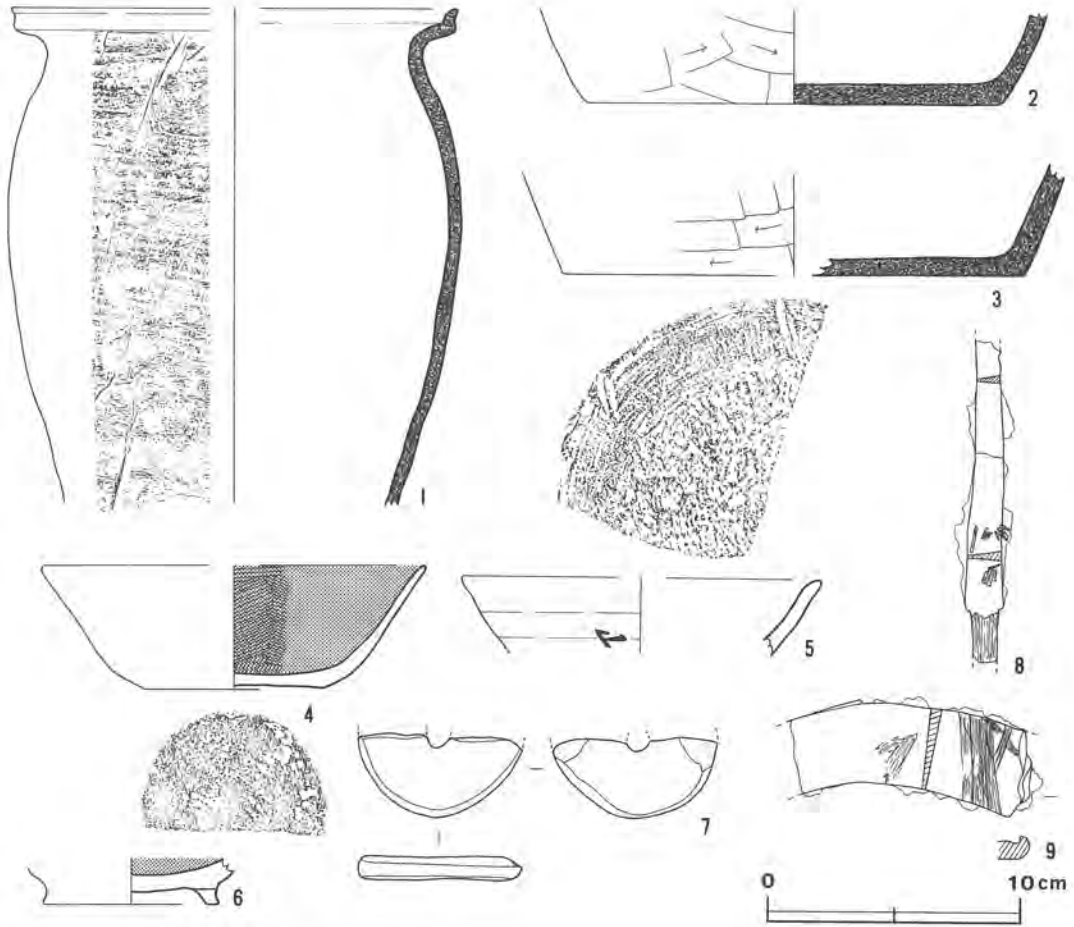
遺物は、床面や覆土中から土師器及びその破片95点、須恵器及びその破片25点、土製の紡錘車1点、鉄製品(刀子・鎌)2点、鉄滓1個と、カマド内から土師器片7点、須恵器片7点が出土している。本跡に伴う遺物は遺構の北部を中心に散在しており、北東コーナー部の床面から出土した第276図5の坏(土師器)体部片には墨書(破損のため解読不能)が認められる。遺構北部の



第275図 第49号住居跡・カマド実測図・炭化材・出土遺物位置図

床面からは9の鎌が出土しているほか、1・2・3の甕（須恵器）、4の坏（土師器）等も出土している。6の高台付坏（土師器）は本跡の床面を掘り込んで東西に延びる第7号溝の覆土中から出土したが、形態等から本跡に伴うものと推定される。なお、8の刀子は南壁際の床面から、7の紡錘車は南西部の覆土中から出土したもので、これらも本跡に伴う遺物と考えられる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から9～10世紀代の住居跡と思われる。



第276図 第49号住居跡出土遺物実測図

第49号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第276図 1	甕 須恵器	A (17.7) B (19.6)	薄手。胴部は長胴形で、下位を欠損。口縁部は外反し、端部を外反気味に高くつまみ上げる。	胴部外面は斜位の平行叩き目、内面は寛ナデ整形。	砂粒・雲母 橙色 普通	20% P224 PL88

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
2	甕 須恵器	B (3.7) C (16.2)	底部片。平底。	胴部外面下位は横位の篋削り。	砂粒・雲母・石英 にぶい褐色 不良	10% P227
3	甕 須恵器	B (4.0) C (18.4)	底部片。平底。	胴部外面下位は横位の篋削り。	砂粒・雲母・長石 暗灰黄色 良好	10% P228
4	坏 土師器	A (15.3) B 4.9 C (7.0)	上げ底。体部は内彎して開き、 口唇部はわずかに外反する。	水挽き成形。内面篋磨き。底部 は手持ち篋削り。	砂粒・スコリア にぶい橙色 不良	50% P225 PL91 内面黒色処理
5	坏 土師器	A (14.4) B (3.0)	口縁部片。口縁部は外反し、口 唇部は丸い。	水挽き成形。	砂粒・雲母・ス コリア にぶい橙色 良好	10% P265 体部に墨書(文字 不明)
6	高台付坏 土師器	B (1.9) D 0.7 E (6.9)	底部片。平底。高台は「ハ」の 字状に開き、接地面は平坦。	内面篋磨き。高台は貼り付け。 底部は回転糸切り後、周囲をナ デる。	砂粒 橙色 普通	10% P226 内面黒色処理

第52号住居跡 (第277図)

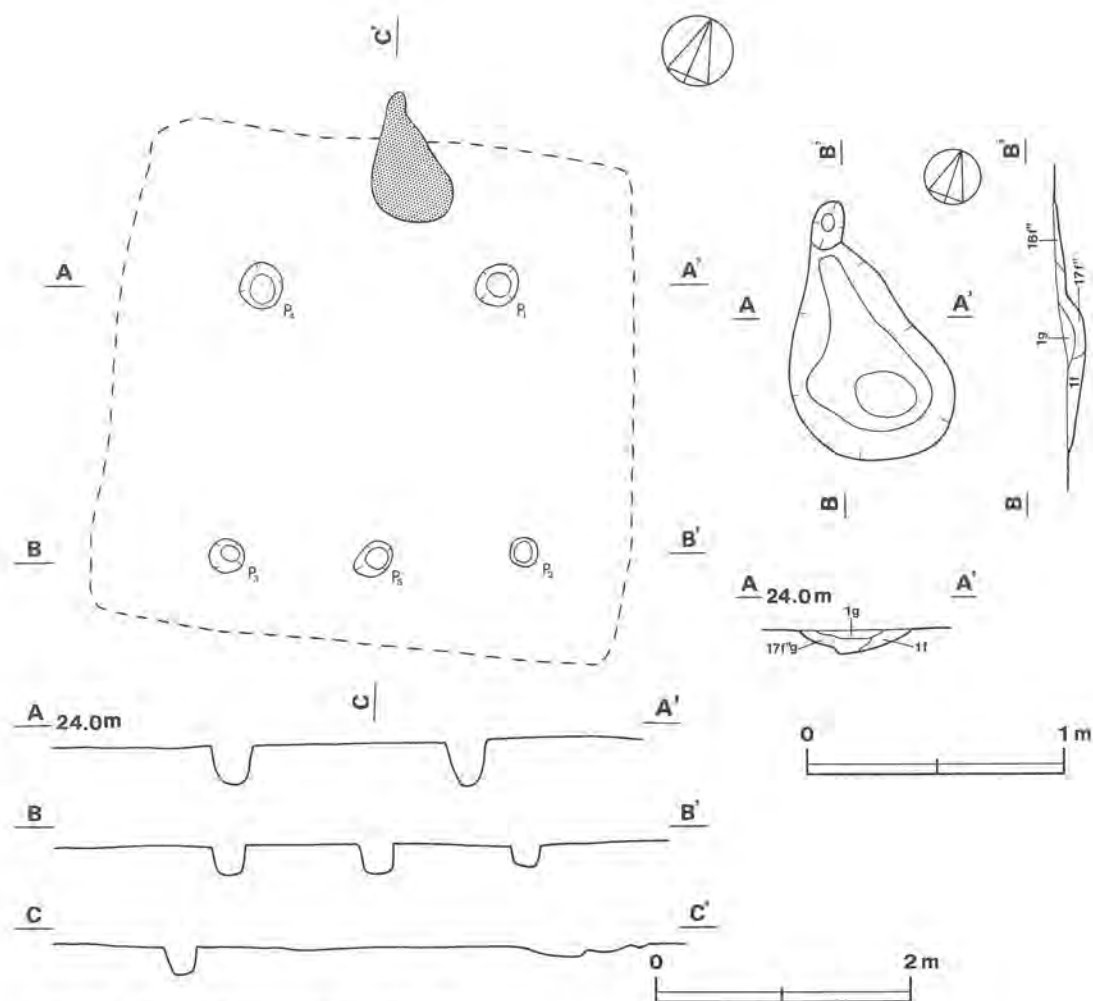
本跡は、調査区の南部 P7b7 区を中心に確認された住居跡で、本跡の北18m には第45号住居跡が、北西42m には第37号住居跡が存在している。

平面形は、一辺4.1m ほどの方形状を呈し、主軸方向はN-25°-Wを指すものと思われる。床面積は16m²と推定される。本跡はローム面を掘り込んでいないため、壁は検出できなかった。壁溝も確認できなかったため、本跡の範囲は床面の広がりから推定した。床はロームで全体的に硬く締まり、床面は平坦である。ピットは P₁~P₅の5か所を確認した。ピットの規模は、上端直径が20~35cm、深さが20~38cmで、方形に配列されている P₁~P₄が支柱穴、P₂と P₃の間に位置している P₅が入口部施設に関する柱穴と思われる。カマドは、北壁側の中央部に付設されているが、掘り込みだけしか確認できなかった。掘り込みは長軸105cmのナスビ形で、煙道部は住居跡の北辺から35cmほど奥に細長く掘り込んで構築している。掘り込み内には、焼土を含む赤褐色土や褐色土が堆積している。火床は床面からわずかに窪まり、赤褐色に変色している。

覆土は、観察できなかった。

遺物は極めて少なく、カマド前方の床面から土師器片8点、須恵器片1点が出土しただけである。出土した土器片はいずれも小片で実測可能なものは1点もなかった。

本跡は、遺物が少ないためその時期を明確にできないが、遺構の形態等から8~10世紀代の住居跡と思われる。

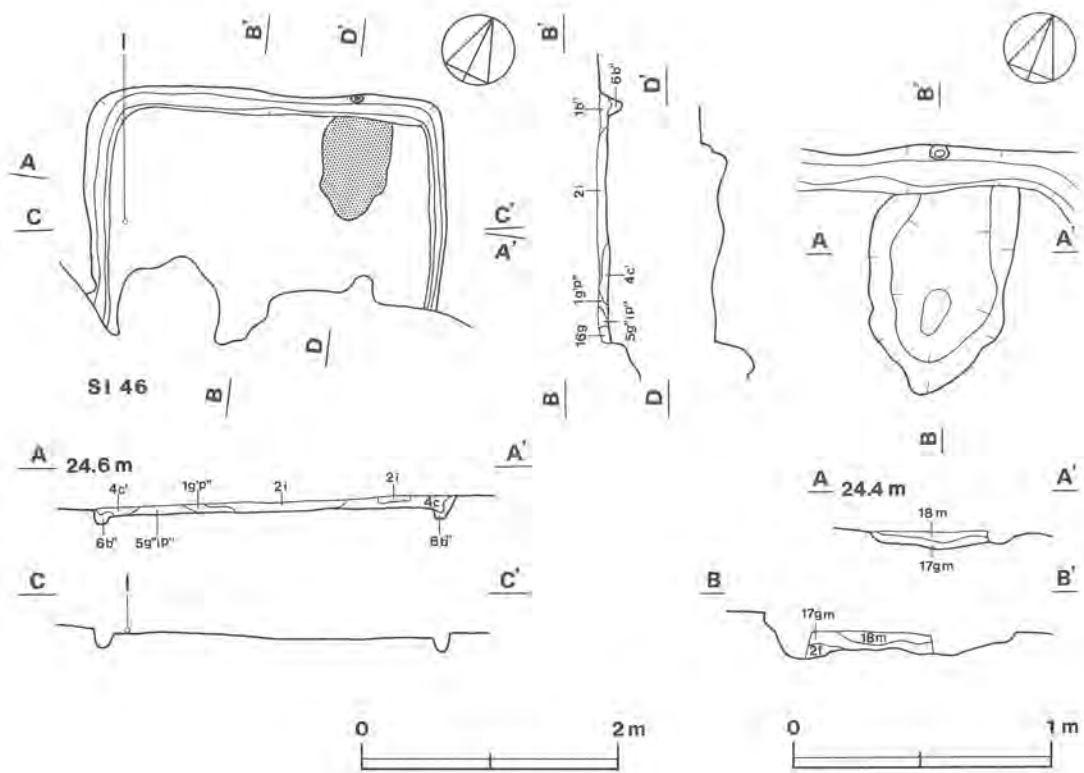


第277図 第52号住居跡・カマド実測図

第53号住居跡 (第278図)

本跡は、調査区の南部 O6e5区を中心に確認された住居跡で、南側半分は 8 世紀代の第46号住居跡によって掘り込まれている。本跡の北 2 m には第34号住居跡が、南西 6 m には第47号住居跡が存在している。

平面形は、南側半分が欠損しているため明らかではないが、一辺2.80m ほどの方形あるいは長方形状を呈し、主軸方向はN-20°-Wを指すものと思われる。残存する床面積は4.2㎡である。壁はロームであるが、壁高が2~5 cmと浅いため、立ち上がりの状況等については不明である。壁直下には上幅15cm、深さ10cmの壁溝が周回している。床は、締まりの弱いロームで、床面は平坦である。ピットは検出できなかった。カマドは、北西壁の北コーナー寄りに付設されている。残存状況は悪く、長径80cm、短径50cmの楕円形状の掘り込みしか検出できなかった。深さは20cmほ



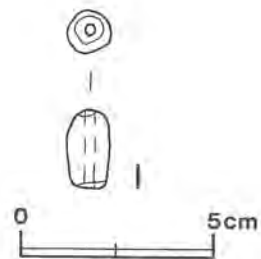
第278図 第53号住居跡・カマド実測図

どで、内部には焼土や砂質の粘土を含む暗赤褐色土が主に堆積している。火床は凹凸が激しく、赤褐色に変色している。

覆土は、暗褐色土や黒褐色土が堆積している。掘り込みが浅いため、堆積状況等については不明である。

遺物は極めて少なく、床面や覆土中から土師器片12点、管状土錘1点が出土しただけである。第279図1の管状土錘は、西壁際の床面から出土したもので、本跡に伴う遺物と思われる。

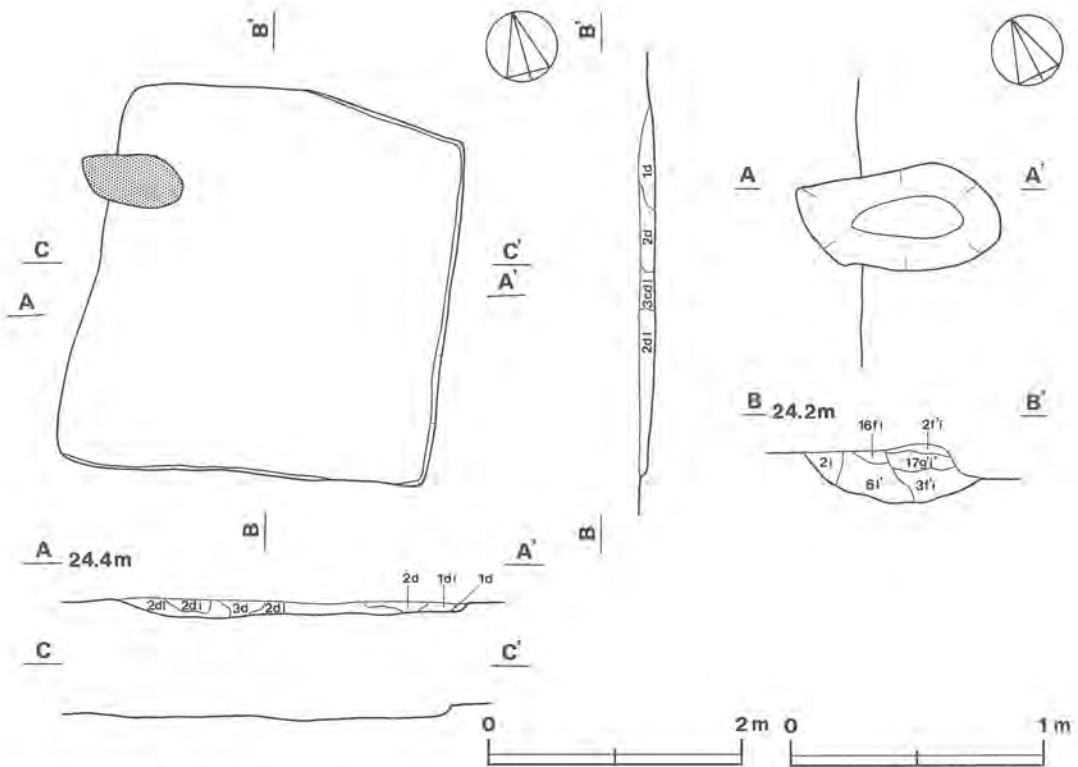
本跡は、遺物が少ないためその時期を明確にできないが、カマドの配置等から考えて9～10世紀代の住居跡と推定される。



第279図 第53号住居跡出土遺物実測図

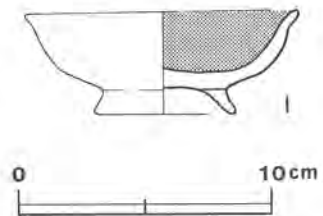
第54号住居跡 (第280図)

本跡は、調査区の南東部O7g₀区を中心に確認された住居跡で、古墳時代中期の第44号住居跡を掘り込んで作られている。本跡の西8mには第45号住居跡が、南西18mには第52号住居跡が存在している。



第280図 第54号住居跡・カマド実測図

平面形は、長軸3.05m、短軸2.8mの方形状を呈し、主軸方向はN-63°-Wを指している。床面積は6.1m²である。壁は第44号住居跡の床面を掘り込み、壁高は0~4cmと低いため立ち上がり等については不明である。床はロームで硬く締まり、床面はほぼ平坦である。本跡に伴うと思われるピットは確認できなかった。カマドは、北西壁の北コーナー部寄りに付設されている。残存状況は悪く、長径40cm、短径20cm、深さ10cmの楕円形の掘り込みが確認されただけである。掘り込み内には、焼土を含む暗褐色土や、褐色土が主に堆積しており、底面はあまり焼けていない。



第281図 第54号住居跡
出土遺物実測図

覆土は、暗褐色土や極暗褐色土がブロック状に堆積している。掘り込みが浅いため堆積状況については不明である。

遺物は極めて少なく、覆土中から土師器片5点が出土しただけである。第281図1の高台付坏(土師器)は北部の遺構外から完形のまま出土したものであるが、本跡の覆土が薄いため重機による表土除去の際移動したものと考え、本跡に伴う遺物として扱った。

本跡は、遺物や遺構の形態等から9~10世紀代の住居跡と思われる。

第54号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第281図 1	高台付坏 土師器	A 10.9 B 4.1 D 1.0 E 5.7	高台は「ハ」の字状に外反し、 接地面は平坦。体部は内彎して 開く。口縁部は外反し、口唇部 は丸い。	水挽き成形。内面篋磨き。	砂粒 浅黄橙色 普通	98% P236 PL91 内面黒色処理

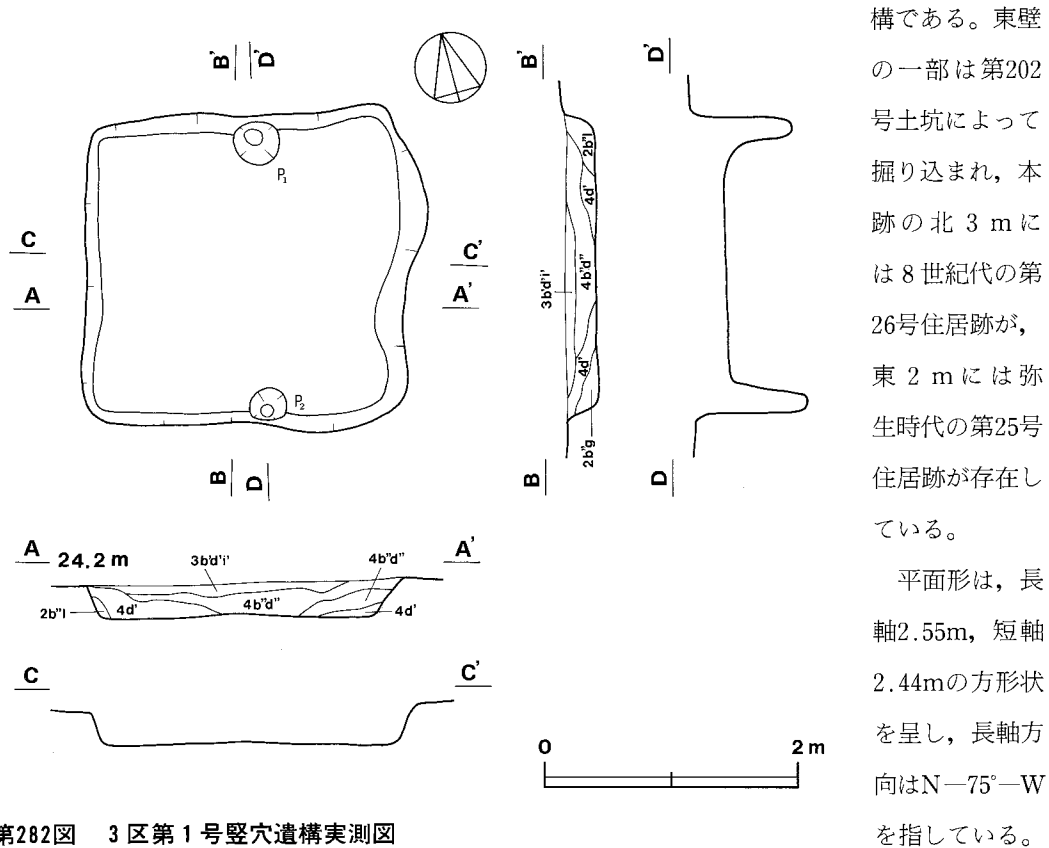
4 竪穴遺構

調査時には竪穴住居として付番し掘り込んだもののうち、炉やカマドを持たず、遺構の形態も不良で住居跡とは断定し難いものを本稿では竪穴遺構とし、新たに付番して記述した。

(1) 3 区

第1号竪穴遺構 (第282図)

本跡は、調査区の西部 L119区を中心に確認され、調査時には第24号住居跡として掘り込んだ遺



第282図 3区第1号竪穴遺構実測図

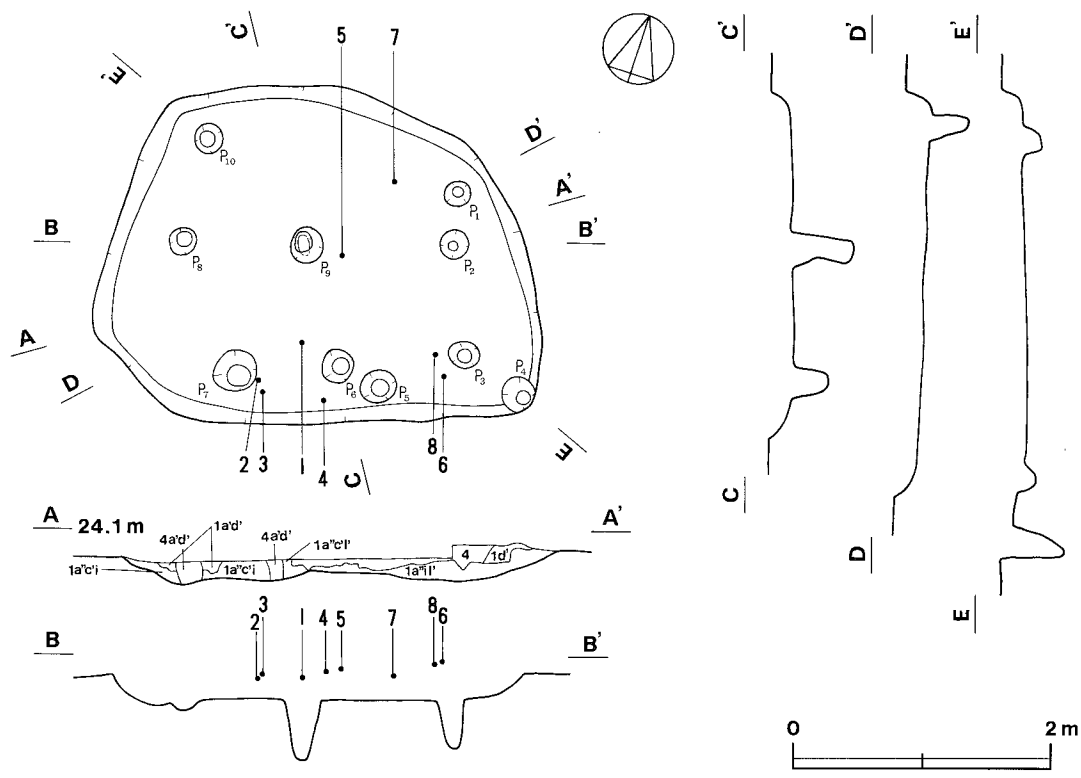
床面積は5.2m²である。壁はロームで、垂直に立ち上がり、壁高は28cmである。床はロームで硬く締まり、平坦である。ピットは、南・北の壁際に2か所確認した。P₁の上端直径は34cm、深さは53cm、P₂の上端直径は25cm、深さは65cmで、両ピットともわずかに内傾している。炉や貯蔵穴はない。

覆土は、上層から極暗褐色土・黒褐色土・暗褐色土がレンズ状に堆積しており、締まりは弱い自然堆積層と思われる。

出土遺物がないため本跡の時期は不明である。なお、小規模で炉もなく、居住施設としての住居跡とは考えられないことから竪穴遺構として扱った。

第2号竪穴遺構 (第283図)

本跡は、調査区の南東部 M4f3区を中心に位置し、古墳時代中期の第41号住居跡を調査中に検出された遺構で、調査時には第54号住居跡として掘り込んだ。本跡の上部は第41号住居跡によって削られ、西4mには第36号住居跡が、南5mには第42号住居跡が存在している。



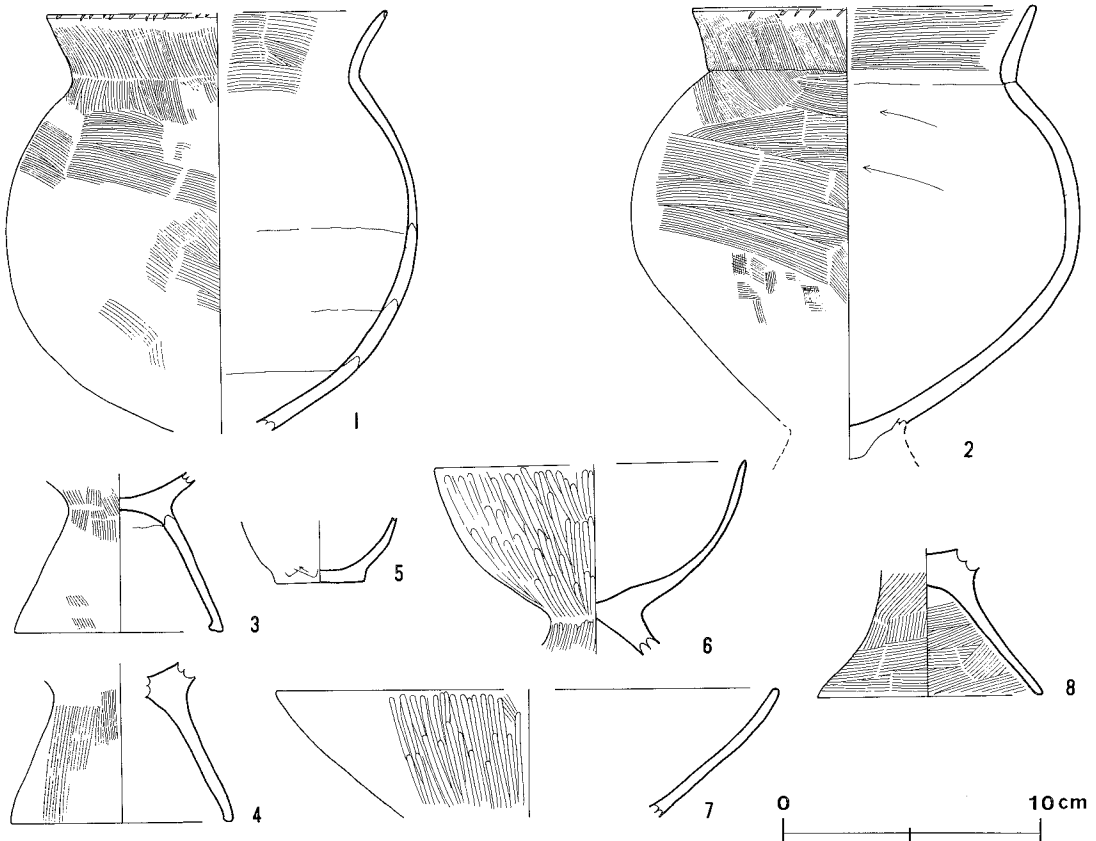
第283図 3区第2号竪穴遺構実測図

平面形は、長軸3.4m、短軸2.7mの隅丸方形を呈するが、北西と北東の壁はかなり胴張りしている。長軸方向はN-60°-Eを指し、床面積は6.8㎡である。壁はロームで、ほぼ垂直に立ち上がっているが締まりは弱い。壁高は19cmである。床は平坦で、締まりの弱いロームである。本跡の範囲内には10か所のピットが確認されている。本跡の柱穴と第41号住居跡の柱穴とを区別することは困難であるが、ほぼ方形に配列されているP₁・P₃・P₇・P₁₀の4本が本跡の支柱穴と思われる。支柱穴の上端直径は20~35cm、深さは20~30cmである。床面の北部にはわずかに焼土化している場所もあるが、炉とは考えられない。

覆土は、黒褐色土と褐色土の2層からなっている。上層が失われているため明かではないが、自然堆積層と思われる。

遺物は、覆土中から土師器及びその破片61点と、後世に流れ込んだと思われる須恵器片1点が出土している。これらの遺物は主に東側の覆土中から出土したもので、本跡が廃絶されて間もなく投棄されたものと思われる。

本跡は、小規模で炉もなく、形状も不良で居住施設とは考えられないことから、古墳時代前期の竪穴遺構として扱った。



第284図 3区第2号竪穴遺構出土遺物実測図

第2号竪穴遺構出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第284図 1	台付甕形土器 土師器	A [13.5] B (16.6)	脚台部欠損。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。	口唇部にキザミが施され、口縁部内・外面とも胴部外面はハケ目整形。	細砂粒・パミス 橙色 普通	80% P157 PL71
2	台付甕形土器 土師器	A [13.5] B (17.9)	脚台部欠損。胴下半部は外傾して立ち上がり、中位以上は強く内彎する。胴部最大径を中位に持つ。口縁部は外反して立ち上がり、頸部に接合痕を残す。	口唇部にキザミが施され、口縁部内・外面と胴部外面はハケ目整形、胴部内面は横位のナデ整形。	パミス 赤褐色 良好	70% P159 PL71
3	台付甕形土器 土師器	B (6.4) D 5.0 E 8.4	脚台部片。脚台部は「ハ」の字状に開く。	外面は縦位のハケ目整形が横位のナデにより磨り消され、内面は筥ナデ整形。	砂粒 暗赤褐色 普通	30% P161
4	台付甕形土器 土師器	B (6.3) D 5.0 E [8.8]	脚台部片。脚台部は「ハ」の字状に開き、裾部でわずかに内彎する。	外面は縦位のハケ目整形、内面は横位のナデ整形。	砂粒 明赤褐色 普通	20% P160
5	小型甕形土器 土師器	B (2.5) C 3.6	平底。胴部は内彎して立ち上がる。	内・外面とも粗雑なナデ整形。	細砂粒・スコリア ア 赤褐色 普通	30% P158
6	高坏形土器 土師器	A [12.2] B (7.6) D (1.7)	脚部は「ハ」の字状に開くが、中位以下欠損。坏部は強く内彎し、塊状を呈する。	外面と、坏部内面は筥磨き後、赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	30% P164
7	高坏形土器 土師器	A [20.0] B (5.0)	坏部片。坏部は内彎気味に開き、口縁部に至る。	内・外面とも縦位又は横位の筥磨き後、赤彩。	砂粒多量 赤褐色 普通	30% P163
8	高坏形土器 土師器	B (5.8) D 5.0 E 8.8	脚部片。脚部上位は円筒状を呈し、中位以下は内彎して開く。	内・外面ともハケ目整形。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	40% P162

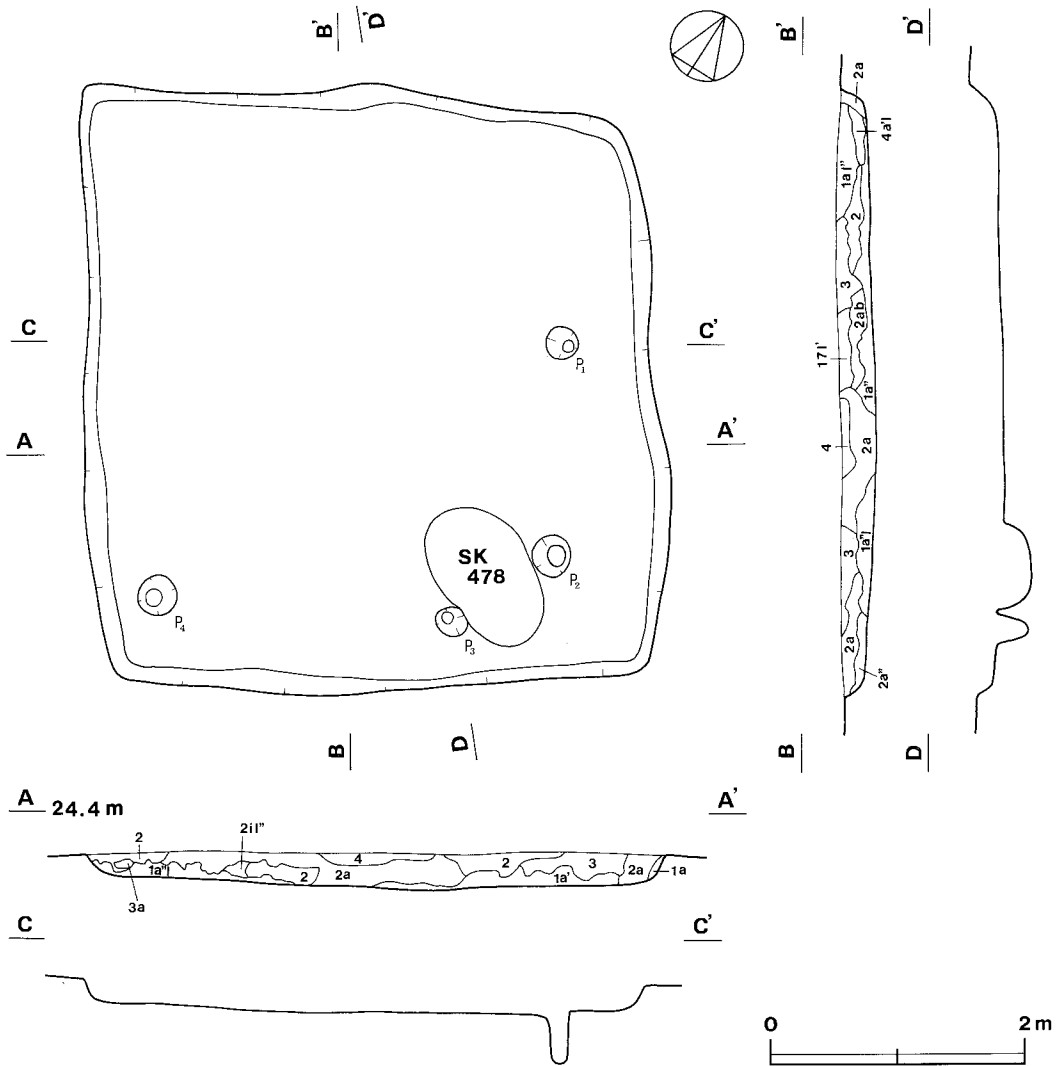
第3号竪穴遺構 (第285図)

本跡は、調査区の西部 L2is区を中心に確認され、調査時には第90号住居跡として掘り込んだ遺構である。本跡の南東コーナー一部付近は縄文時代早期の第478号土坑(炉穴)を掘り込み、北西2mには弥生時代の第25号住居跡が、東4mには8世紀代の第91号住居跡が存在している。

平面形は、長軸4.85m、短軸4.45mの方形状を呈し、長軸方向はN-33°-Wを指している。床面積は18.5m²である。壁はロームで、45~60度の角度で立ち上がり、締まりは弱い。壁高は20~25cmである。床は平坦なロームで、全体に軟弱である。ピットは4か所確認したが、規模も配置も不規則である。炉や貯蔵穴はない。

覆土は、上・中層に暗褐色土、下層に褐色土が堆積し、締まっている。自然堆積層と思われる。

遺物は、古墳時代前期の土師器片や9世紀代の須恵器片と土師器片が10点ほど出土している。いずれも覆土中から出土したもので、本跡の時期を決定する手がかりとはならない。



第285図 3区第3号竪穴遺構実測図

本跡は、炉もなく床面も軟弱であり、居住施設としての住居跡とは考えられないことから竪穴遺構として扱った。

(2) 4 区

第1号竪穴遺構 (第286図)

本跡は、調査区南部の緩傾斜面に位置する O7e1 区を中心に確認され、調査時には第51号住居跡として掘り込んだ遺構である。本跡の北18m には9世紀代の第49号住居跡が存在している。南部

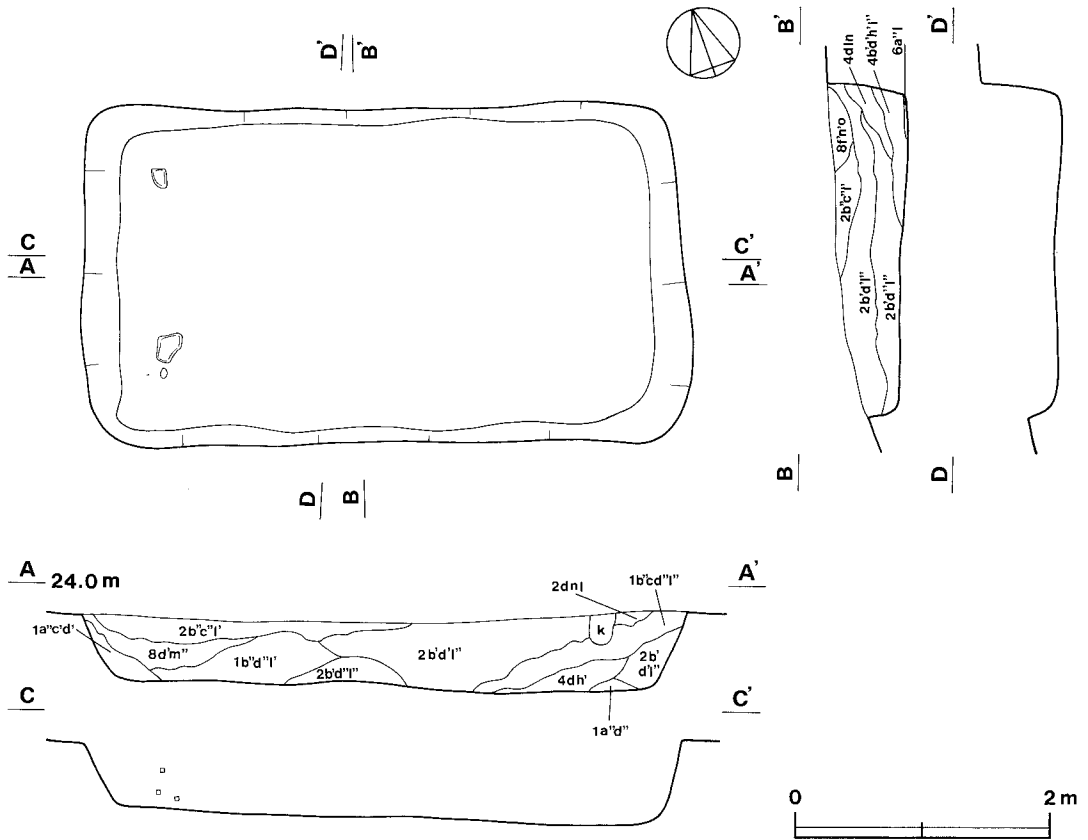
は急傾斜で1.5mほど下がり墓壙群が形成されている。

平面形は、長軸4.72m、短軸2.64mの長方形状を呈し、長軸方向はN-27°-Wを指している。床面積は11.3m²である。壁は締まったロームで、東・西の壁は70度の角度で外傾し、南・北の壁は垂直に立ち上がっている。壁高は、本跡が傾斜地に形成されているため、北壁が53~66cm、南壁が20cmと高低差が大きい。床はロームで緩やかに起伏し、硬く踏み締まっている。柱穴や炉はない。

覆土は一層で、ロームブロックを多量に含む締まりの弱い暗褐色土が堆積しており、人為的に埋め戻されたものと思われる。

遺物は、北西コーナー付近と南西コーナー付近の覆土中層から3個の石が出土しているが、いずれも本跡が埋め戻される過程で投棄されたものと思われる。

本跡は、小規模で炉もなく、居住施設としての住居跡とは考えられないことから竪穴遺構として扱った。時期は不明である。



第286図 4区第1号竪穴遺構実測図

第3節 土 坑

3・4区から検出された土坑は692基であるが、これらのうち縄文時代、及び縄文時代と考えられる土坑については、既刊の「茨城県教育財団文化財調査報告書第44集 南三島遺跡3・4区(I)」で報告した通りである。従って、本書では弥生時代以降と思われる土坑195基(3区120基・4区75基)について記載した。なお、土坑の解説は一覧表をもってそれに替えたが、粘土貼りの土坑、及び墓壇と思われる土坑については、文章で解説した。

1 粘土貼りの土坑

(1) 3 区

第97号土坑(第287図)

本跡は、調査区の北西部 K2i9区を中心に確認され、その東壁は縄文時代の第3号住居跡に接している。

平面形は、長軸1.75m、短軸1.04mの隅丸長方形状を呈し、長軸方向はN-70°-Wを指している。深さは28cmで、断面形は皿状である。底面は硬く締まり、凹凸は少ない。

土坑内には、にぶい黄橙色の粘土がびっしりと詰まっていた。

遺物は、粘土中から須恵器の小片が2点出土しただけで、本跡の時期を決定する手がかりとはならない。本跡はいわゆる粘土貼りの土坑ではなく、粘土を貯蔵するための土坑と思われる。

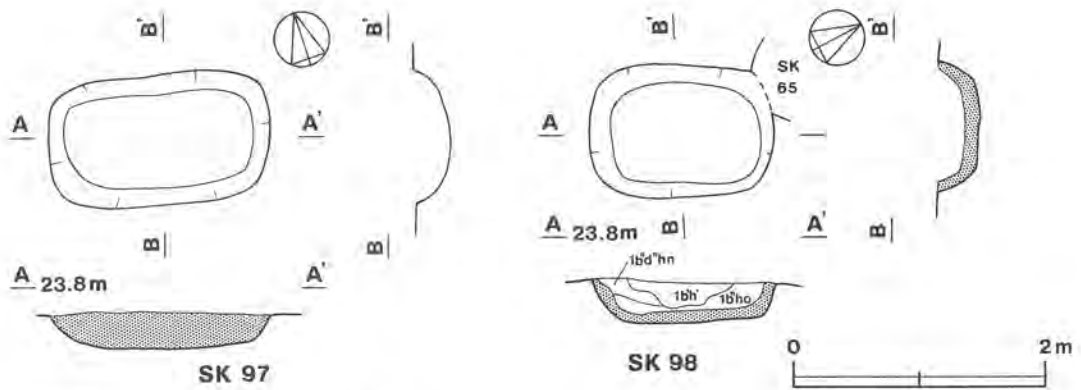
第98号土坑(第287図)

本跡は、調査区の北西部 K2g9区を中心に確認され、北壁は第65号土坑に接している。

平面形は、長軸1.46m、短軸1.06mの隅丸長方形状を呈し、長軸方向はN-25°-Eを指している。深さは32cmで、断面形は椀状である。土坑全体に、粘土が10cmの厚さで貼られている。

覆土は、ローム小ブロックや粘土ブロックを含む褐色土や暗褐色土が人為堆積の状況で堆積している。

遺物は、土師器の小片が2点出土しているが、いずれも覆土中から出土したもので本跡の時期を判定する手がかりとはならない。本跡は、周辺の地域で調査された粘土貼り土坑から考えて中世の遺構と思われる。



第287図 3区粘土貼り土坑実測図

(2) 4区

第88号土坑 (第288図)

本跡は、調査区南部の窪み地帯に位置する O6i9区を中心に確認され、本跡の南には第1号井戸状遺構が接し、周辺には本跡を含め8基の粘土貼り土坑が集中して存在している。

平面形は、長軸1.89m、短軸1.26mの隅丸長方形状を呈し、長軸方向はN-12°-Wを指している。深さは44cmで、断面形は椀状である。底面は硬く締まり、土坑全体に粘土が5~10cmの厚さで貼られている。

覆土は、粘土粒子を含む褐色土で、自然堆積層と思われる。

遺物は、土師器片29点、須恵器片5点、陶器片3点が出土している。いずれも覆土中から出土したものであるが、中世の陶器片(瀬戸)が混入していることから、本跡は中世の遺構と思われる。

第90号土坑 (第288図)

本跡は、調査区南部の窪み地帯に位置する P6c0区を中心に確認され、粘土貼りの土坑の中では最も南に存在している。

平面形は、長軸1.43m、短軸1.31mの隅丸方形状を呈し、長軸方向はN-0°を指している。深さは34cmである。断面形は箱形で、壁は外傾している。土坑全体に粘土が10cmの厚さで貼られている。

覆土は、粘土粒子を含む締まりの弱い褐色土や黒褐色土が人為堆積の状態で堆積している。

遺物は、土師器片が2点、須恵器片が3点と、灯明皿1点が出土している。いずれも覆土中から出土したものであるが、灯明皿が混入していることから本跡は中世の遺構と思われる。

第94号土坑 (第288図)

本跡は、調査区南西部に位置する O6d1区に確認され、本跡の北には第 6 号溝が東—西に延び、西 5 m には第24号住居跡が存在している。

平面形は、直径1.2m ほどの円形状を呈し、深さは50cmで、断面形は椀状である。土坑全体に粘土が10cmの厚さに貼られている。

覆土は、ロームブロックを含む締まりの弱い暗褐色土が人為堆積の状況で堆積している。

遺物は、覆土中から土師器片が 6 点と灯明皿の破片が 1 点出土している。灯明皿の破片が混入していることから、本跡は中世の遺構と思われる。

第95号土坑 (第288図)

本跡は、調査区南部の窪み地帯に位置する O6i0 区を中心に確認され、周辺には前述した第88号土坑をはじめ、8 基の粘土貼りの土坑が集中して存在している。

平面形は、長軸1.83m、短軸1.36m の隅丸長方形形状を呈し、長軸方向はN—17°—Wを指している。深さは49cmである。断面形は箱形で、壁は外傾して立ち上がっている。土坑全体に粘土が 6 cmの厚さで貼られている。

覆土は、ロームブロックを多量に含む褐色土が人為堆積の状況で堆積している。

遺物は、覆土中から内耳土器片12点が出土している。本跡は中世の遺構と思われる。

第96号土坑 (第288図)

本跡は、調査区南部の窪み地帯に位置する O6e0 区を中心に確認された遺構で、当調査区で検出された粘土貼りの土坑の中では最も北に存在している。

平面形は、長軸2.14m、短軸1.49m の隅丸長方形形状を呈し、長軸方向はN—5°—Eを指している。確認面が北から南に傾斜しているため、北壁は南壁より30cmも高くなっている。平均的な深さは 64cmである。断面形は皿状で、底面は比較的平坦である。土坑全体に粘土が10～15cmの厚さで貼られている。

覆土は、粘土ブロックを含む褐色土で、最下層には鉄分を多く含む粘土が堆積している。人為的な堆積と思われる。

遺物は出土していないが、周辺の地域で調査された粘土貼り土坑と同様に中世の遺構と思われる。

第99号土坑 (第288図)

本跡は、調査区南部の窪み地帯に位置する O7h1 区に確認され、周辺には第88号土坑をはじめ 8 基の粘土貼り土坑が集中して存在している。

平面形は、長軸2.15m、短軸1.91mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-87°-Wを指している。深さは67cmである。断面形は箱形で、壁は外傾して立ち上がっている。底面には粘土が5cmの厚さで貼られているが、壁面には検出できなかった。

覆土は、ロームブロックを多量に含む締まりの弱い褐色土で、人為堆積と思われる。

遺物は出土していないが、周辺の地域で調査された粘土貼り土坑と同様に中世の遺構と思われる。

第112号土坑（第288図）

本跡は、調査区南部の窪み地帯に位置するO6i₀区を中心に確認され、中世の墓塚と考えられる第111号土坑に掘り込まれている。本跡の周辺には第88号土坑をはじめ、8基の粘土貼り土坑が集中して存在している。

平面形は、直径1.4mほどの円形状であるが、底面は長軸1.15m、短軸85cmの隅丸長方形を呈している。深さは31cmで、断面形は皿状である。土坑全体に粘土が5～10cmの厚さで貼られている。

覆土は、上層に褐色土、下層に暗褐色土が堆積している。人為的な堆積と思われる。

遺物は、土師器片2点が出土している。2点とも覆土中から出土したもので時期判定の手がかりとはならないが、本跡は周辺の地域で調査された粘土貼り土坑と同様に中世の遺構と思われる。

第114号土坑（第288図）

本跡は、調査区南部の窪み地帯に位置するO7j₂区を中心に確認され、北東壁は時期不明の第156号土坑を掘り込んでいる。本跡の周辺には、第88号土坑をはじめ8基の粘土貼り土坑が集中して存在している。

平面形は、長径2.17m、短径1.85mの楕円形状を呈し、長径方向はN-70°-Wを指している。深さは84cmで、断面形は椀状を呈している。土坑全体に粘土が5～15cmの厚さで貼られている。

覆土は、ロームブロックを多量に含む褐色土が人為堆積の状況で堆積している。

遺物は、土師器片4点が出土している。いずれも覆土中から出土したもので、時期判定の手がかりとはならないが、本跡は周辺の地域で調査された粘土貼り土坑と同様に中世の遺構と思われる。

第121号土坑（第289図）

本跡は、調査区南部の窪み地帯に位置するO7i₂区に確認され、周辺には第88号土坑をはじめ8基の粘土貼り土坑が存在している。

平面形は、長軸1.85m、短軸1.25mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-88°-Eを指してい

る。深さは50cmである。断面形は箱形で、壁は外傾して立ち上がっている。土坑全体に粘土が10～20cmの厚さで貼られている。

覆土は、ロームブロックや粘土ブロックを含む褐色土が人為堆積の状況で堆積している。
遺物は出土していないが、周辺の地域で調査された粘土貼り土坑と同様に中世の遺構と思われる。

第123号土坑（第289図）

本跡は、調査区南部の窪み地帯に位置する O6j0区に確認され、西側を第155号土坑に掘り込まれている。本坑の周辺には、第88号土坑をはじめ 8 基の粘土貼り土坑が集中して存在している。

平面形は、長軸1.74m、短軸 1 m の隅丸長形状を呈し、長軸方向はN-20°-Eを指している。深さは66cmで、断面形は椀状である。土坑全体に粘土が10～20cmの厚さに貼られている。

覆土は、粘土ブロックを含む暗褐色土が人為堆積の状況で堆積している。

遺物は出土していないが、周辺の地域で調査された粘土貼り土坑と同様に中世の遺構と思われる。

第154号土坑（第289図）

本跡は、調査区の南西部 O6h1 区に確認された遺構である。第 5 号溝に上部を掘り込まれているほか、土坑の中央部は農耕によって底面まで攪乱されている。

平面形は、長軸92cm、短軸40cmの隅丸長形状を呈し、長軸方向はN-66°-Eを指している。深さは26cmである。断面形は箱形で、壁は垂直に立ち上がっている。攪乱された部分以外には全て粘土が 7 cmの厚さで貼られている。

覆土は、粘土ブロックを含む暗褐色土が人為堆積の状況で堆積している。

遺物は、覆土中から土師器片13点、陶器片 1 点が出土しているが、いずれも小片であり、本跡の時期を判定する材料とはならないが、周辺の地域で調査された粘土貼り土坑と同様に中世の遺構と思われる。

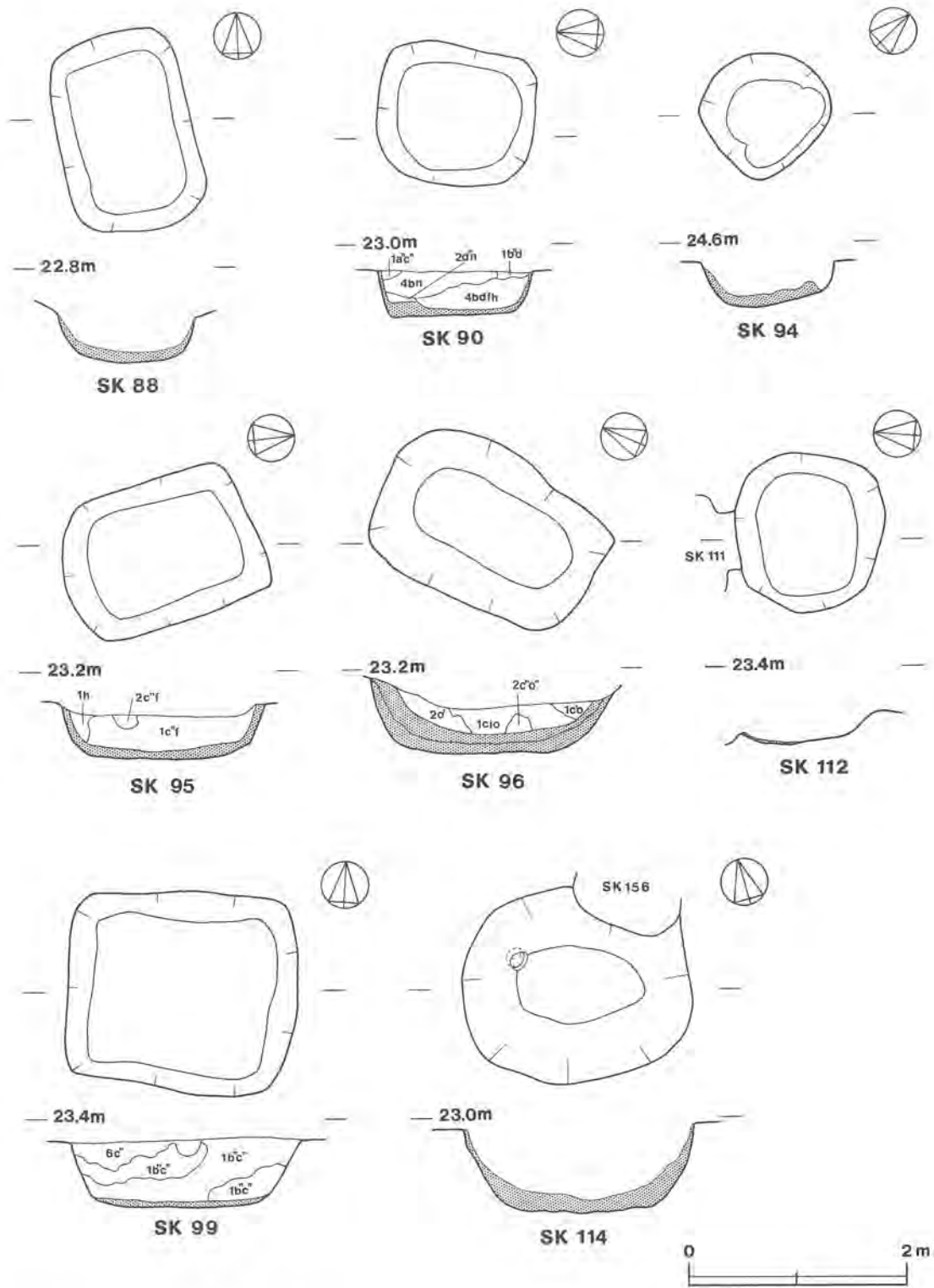
第155号土坑（第289図）

本跡は、調査区南部の窪み地帯に位置する O6j0区に確認され、中世の粘土貼り土坑である第123号土坑の西側を掘り込んでいます。本跡の周辺には、第88号土坑をはじめ 8 基の粘土貼り土坑が集中して存在している。

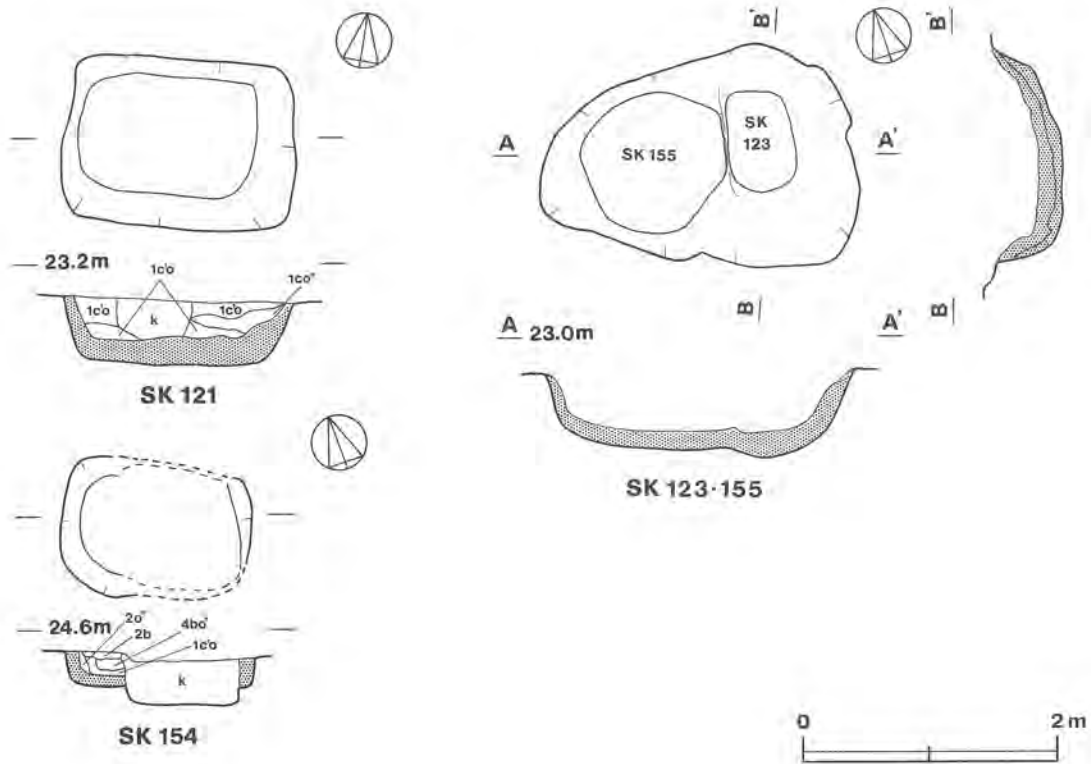
平面形は、直径1.5mの円形状を呈し、深さは60cmである。断面形は椀状で、土坑全体に粘土が10～15cmの厚さで貼られている。

覆土は、ロームブロックや粘土ブロックを含む暗褐色土が人為堆積の状況で堆積している。

遺物は出土していないが、周辺の地域で調査された粘土貼り土坑と同様に中世の遺構と思われる。



第288図 4区粘土貼り土坑実測図(1)



第289図 4区粘土貼り土坑実測図(2)

2 墓墳及び墓墳と思われる土坑

(1) 3区

第9号土坑 (第290図)

本跡は、調査区北西部のK2e4区に確認され、北方には5区の地下式坑群が存在している。

平面形は、長軸2.14m、短軸1.65mの隅丸長方形状を呈し、南東壁と北西壁には長さ70cm、幅60cm、深さ30~40cmの舌状の張り出し部を持っている。本跡の深さは74~90cmで、長軸方向はN-34°-Eを指している。断面形は箱形で、壁は垂直に立ち上がっている。底面は凸凹し、北東と南西の壁際には直径・深さとも25cmのピットが相対して掘られている。北東コーナー部の底面は円形状に3cmほど掘り窪められ、内部には厚さ4cmの灰層が検出されている。灰層下の土は焼けていない。

覆土は、ロームブロックを多量に含む褐色土と暗褐色土が人為堆積の状況で堆積している。

遺物は出土していないが、遺構の形態から本跡は中世の墓墳と思われる。

第43号土坑 (第290図)

本跡は、調査区北西部の K2h6 区に確認され、第 1 号溝に上部全体を掘り込まれている。

平面形は、長径90cm、短径77cmの楕円形状を呈し、長径方向はN-42°-Eを指している。壁高は46cmであるが、本来の深さは60cmを越えるものと思われる。断面形は椀状である。

覆土は、ロームブロックを含む褐色土が人為堆積の状況で堆積している。

本跡の底面近くから、人間の頭骨の一部が出土している。その他の部位は確認できなかったが、頭の出土地点が北東壁際であることから、本来、頭位を北東方向にして埋葬されていたものと思われる。伴出遺物は無く、時期については不明である。

第99号土坑 (第290図)

本跡は、調査区北西部の K2i3 区に確認され、北方には第 1 号溝が存在している。

平面形は、長軸1.28m、短軸99cmの方形形状を呈し、長軸方向はN-66°-Wを指している。壁高は48cmで、底面は平坦である。

覆土は、ロームブロックを含む暗褐色土が人為堆積の状況で堆積している。

坑底からは、頭位を西にし、北向きに屈葬された人骨 1 体分が出土している。伴出遺物はないが、人骨の遺存状況から考えて、近世以降のものと推定される。

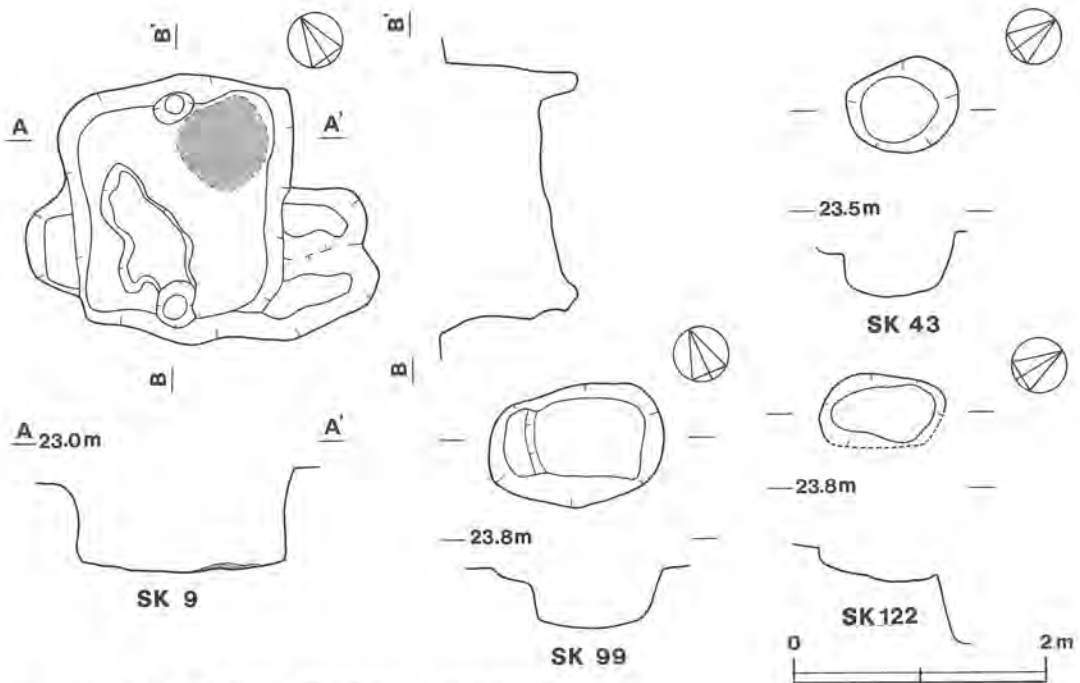
第122号土坑 (第290図)

本跡は、調査区北西部の K2g9 区に確認され、縄文時代の第60・100号土坑の一部を掘り込んでいる。

平面形は、長径 1 m、短径57cmの楕円形状を呈し、長径方向はN-33°-Wを指している。深さは30cmで、断面形は皿状である。

覆土は、締まりの弱い黒褐色土が人為堆積の状況で堆積している。

坑底からは、頭位を北にし、西向きに屈葬された人骨 1 体分が出土している。伴出遺物はないが、人骨の遺存状況が非常に良いことから考えて、近世以降のものと推定される。



第290図 3区墓墳及び墓墳と思われる土坑実測図

(2) 4区

第86号土坑 (第291図)

本跡は、調査区南部の窪み地帯に位置するO6g8区に確認され、本跡の南側は第87号土坑によって掘り込まれている。

平面形は、長軸2.48m、短軸1.05mの長方形状を呈し、長軸方向はN-19°-Eを指している。確認面からの深さは63cmである。断面形は箱形で、壁は垂直に立ち上がっている。

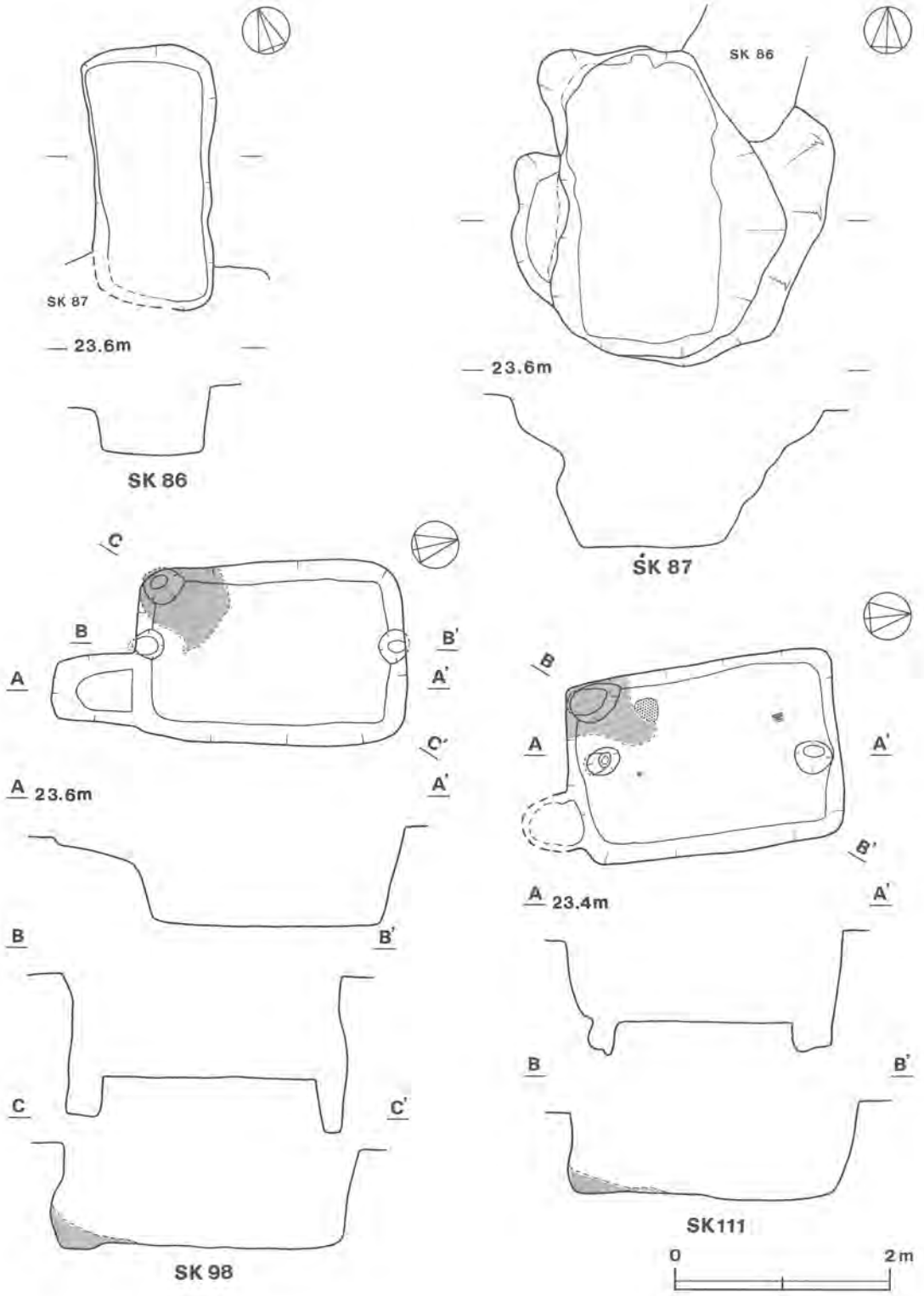
覆土は、ロームブロックを含む暗褐色土で、人為堆積の状況で堆積している。

遺物は、土師器片が10点出土しているが、いずれも覆土中から出土したもので時期判定の手がかりとはならない。本跡は、形態や位置から中世の墓墳と思われる。

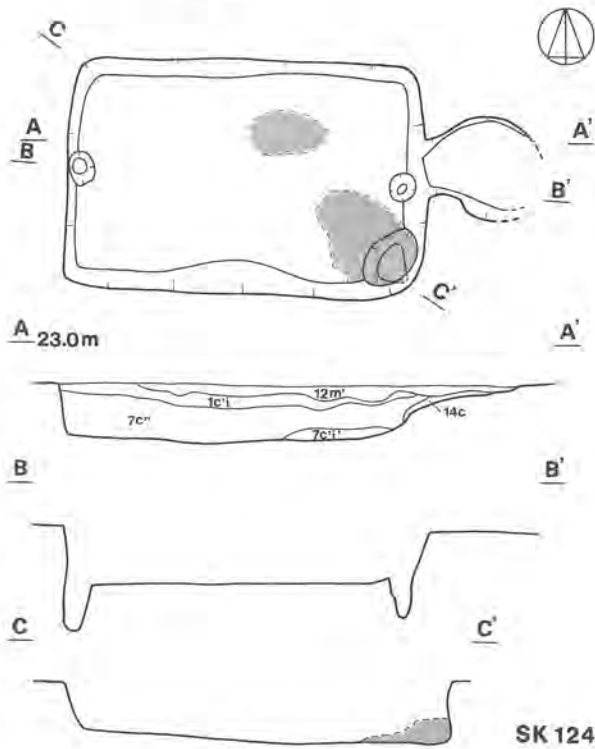
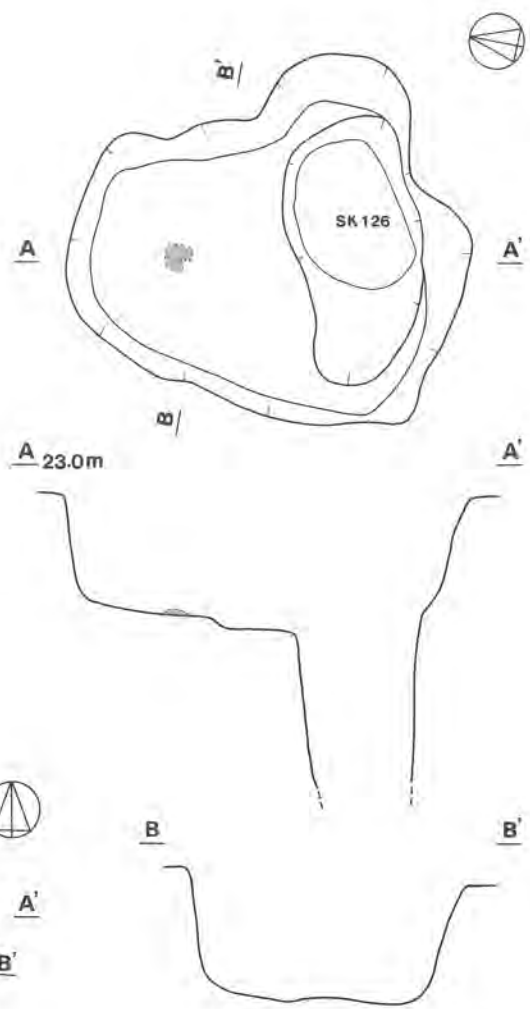
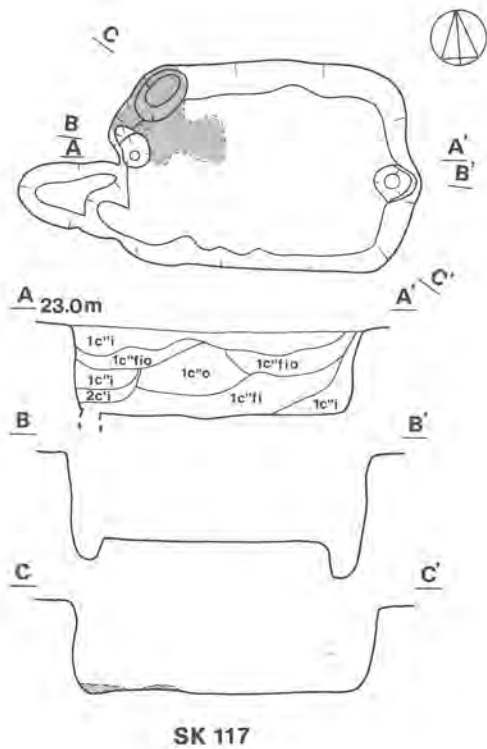
第87号土坑 (第291図)

本跡は、調査区南部の窪み地帯に位置するO6h8区を中心に確認され、本跡の北側は第86号土坑を掘り込んでいる。

平面形は、長軸2.85m、短軸1.3mの長方形状を呈し、西壁には半径50cm、深さ20cmの出入口部と思われる半円形の張り出し部を持っている。本跡の深さは、1.44mで、長軸方向はN-0°である。



第291図 4区墓墳及び墓墳と思われる土坑実測図(1)



第292図 4区墓壙及び墓壙と思われる土坑実測図(2)

断面形は、北・西・南の壁面がオーバーハングしているため袋状となっているが、底面は平坦である。

覆土は、ロームブロックを含む暗褐色土で、人為堆積の状況で堆積している。

遺物は、土師器片90点、須恵器片15点が出土しているが、いずれも覆土中から出土したもので、時期判定の手がかりとはならない。本跡は、形態や位置から中世の墓壇と思われる。

第98号土坑（第291図）

本跡は、調査区南部の窪み地帯に位置する O6f₉ 区を中心に確認され、周囲には本坑を取り巻くように第1～3号地下式坑が存在している。

平面形は、長軸2.53m、短軸1.7mの長方形を呈し、南壁には長さ75cm、幅65cm、深さ10～30cmの出入口部と思われる方形の張り出し部を持っている。本跡の深さは98cmで、長軸方向はN-10°-Eを指している。断面形は箱形で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は平坦でよく締まり、北と南の壁際には、直径25cm、深さ45cmのピットが相対して掘られている。南西コーナー部は円形状に8cmほど掘り窪められ、灰が24cmの厚さに堆積している。灰層下の土は焼けていない。

覆土は、ロームブロックを含む褐色土が人為堆積の状況で堆積している。

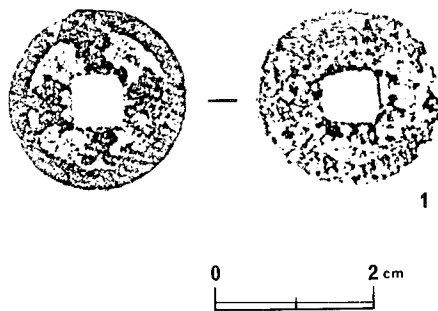
遺物は、土師器片3点、須恵器片1点と灯明皿の破片1点が出土している。いずれも覆土中から出土したもので、時期を断定することはできないが、灯明皿の破片が混入していることや、土坑の形態等から、本坑は中世の墓壇と思われる。

第111号土坑（第291図）

本跡は、調査区南部の窪み地帯に位置する O6i₀ 区を中心に確認され、張り出し部の一部は粘土貼りの第112号土坑を掘り込んでいる。

平面形は、長軸2.54m、短軸1.76mの長方形を呈し、南壁には長さ60cm、幅55cm、深さ20cmの出入口部と思われる舌状の張り出し部を持っている。本坑の深さは81cmで、長軸方向はN-15°-Wを指している。断面形は箱形で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面はよく締まり、北と南の壁際には直径30cm、深さ30cmの柱穴と思われるピットが相対して掘られている。南西コーナー部は円形状に3cmほど掘り窪められ、灰が15cmの厚さに堆積している。灰層下の土は焼けていない。

覆土は、ロームブロックを多量に含む褐色土や暗褐色土が、人為堆積の状況で堆積している。



第293図 第111号土坑出土遺物実測図

遺物は、南側の底面から「聖宋元宝」（北宋1101年初鑄）1点と、粘土及び木炭片が出土している。本跡は、「聖宋元宝」の初鑄年代から考えて12世紀以降の墓壇と思われる。

第117号土坑（第292図）

本跡は、調査区南部の窪み地帯に位置する P7c3区を中心に確認され、同様の土坑の中では最も南に存在している。

平面形は、長軸2.25m、短軸1.67mの隅丸長方形状を呈し、西壁には長さ55cm、幅50cm、深さ30cmの出入口部と思われる舌状の張り出し部を持っている。土坑の深さは73cmで、長軸方向はN-84°-Wを指している。断面形は箱形で、壁は垂直に立ち上がっている。底面はよく締まり、東と西の壁際には直径20cm、深さ25cmの柱穴と思われるピットが相対して掘られている。北西コーナー一部は円形状に5cmほど掘り窪められ、灰が10cmの厚さに堆積している。灰層下の土は焼けていない。

覆土は、ロームブロックを多量に含む褐色土が人為堆積の状況で堆積している。

遺物は、須恵器片2点が出土しているが、いずれも覆土中から出土したもので、時期判定の手がかりとはならない。本跡は、形態や所在する位置から考えて中世の墓壇と思われる。

第119号土坑（第292図）

本跡は、調査区南部の窪み地帯に位置する P6a8区を中心に確認され、南側は第2号井戸状遺構によって大きく掘り込まれている。

平面形は、長軸3.05m、短軸2.1mの隅丸長方形状を呈し、長軸方向はN-12°-Wを指している。確認面からの深さは98cmである。断面形は箱形で、壁は垂直に立ち上がり、底面は緩やかに起伏している。

覆土は、ロームブロックを含む暗褐色土で、人為堆積と思われる。

遺物は、土師器片10点が出土しているが、いずれも覆土中から出土したもので時期判定の手がかりとはならない。本跡は、形態や位置、そして床面の中央部に一つかみほどではあるが灰が堆積していることなどから、中世の墓壇と思われる。

第124号土坑（第292図）

本跡は、調査区南部の窪み地帯に位置する O6j9区を中心に確認され、第92号土坑を掘り込んでいる。

平面形は、長軸2.85m、短軸1.86mの隅丸長方形状を呈し、長軸方向はN-87°-Eを指している。東壁には幅70cm、深さ10~20cmの出入口部と思われる張り出し部を持つが、その長さについて

ては確認できなかった。本坑の深さは45cmと比較的浅く、断面形は箱形で、壁は外傾して立ち上がっている。底面はよく締まり、東と西の壁際には直径20cm、深さ35cmの柱穴と思われるピットが掘られている。南東コーナー部は円形状に3cmほど掘り窪められ、その内部と床面の北部には灰が10～15cmの厚さに堆積している。灰層下の土は焼けていない。

覆土は、ロームブロックを多量に含む褐色土で、人為堆積と思われる。

遺物は、覆土中から内耳土器片5点が出土している。本跡は内耳土器片が混入していることや土坑の形態等から中世以降の墓塚と思われる。

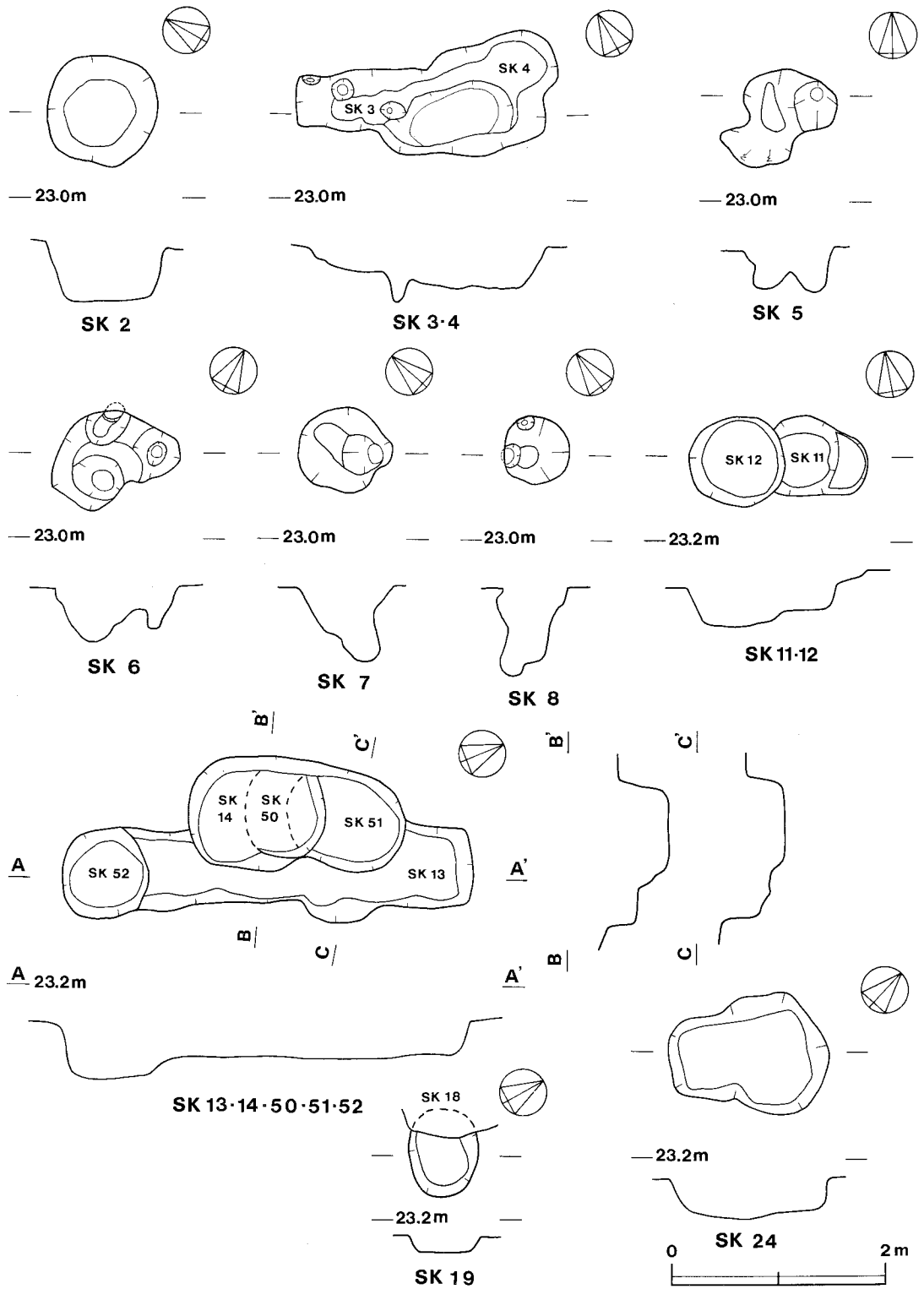
表2 南三島遺跡3区土坑一覧表

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版 番号
				長径×短径×深さ							
2	K2c ₂	——	円形	105 × 105 × 52	外傾	平坦	自然	IA2b	土師器片1点		第294図
3	K2d ₂	N-60°-E	不定形	(142) × 57 × 53	〃	凹凸	〃	VB2b			〃
4	K2d ₂	N-78°-E	〃	(154) × 99 × 40	ゆるやかに 外傾	平坦	〃	VB2a			〃
5	K2e ₂	N-44°-E	楕円形	107 × 69 × 42	外傾	凹凸	〃	II B2a			〃
6	K2f ₂	N-44°-E	不定形	123 × 81 × 74	〃	〃	人為	VB2b			〃
7	K2e ₂	N-33°-W	〃	88 × 79 × 71	〃	〃	自然	VB1b			〃
8	K2e ₂	——	円形	65 × 63 × 83	〃	〃	〃	IC1b			〃
9	K2e ₄	N-34°-E	隅丸長方形	214×165×74~90	垂直	〃	人為	VA3b		墓塚・中世	第290図
11	K2e ₄	N-53°-E	不定形	96 × 74 × 44	外傾	平坦	自然	VA1a			第294図
12	K2e ₄	——	円形	92 × 87 × 41	垂直	〃	〃	IB1a			〃
13	K2f ₄	N-21°-E	不定形	(369) × (76) × 40	外傾	〃	〃	VA3a			〃
14	K2f ₄	——	円形	— × 104 × 51	垂直	〃	〃	VA-b			〃
19	K2d ₆	N-11°-E	楕円形	83 × 66 × 17	〃	〃	〃	II B1a			〃
24	K2e ₆	N-46°-E	不定形	152 × 104 × 37	外傾	〃	〃	VB2a			〃
25	K2e ₆	N-12°-W	〃	102 × 70 × 70	垂直	〃	〃	VA2b			第295図
33	K2g ₆	N-63°-W	隅丸長方形	113 × 100 × 43	〃	〃	〃	IVA2a			〃
41	K2h ₆	N-29°-E	不定形	194 × 91 × 93	外傾	凹凸	〃	VB2b			〃
43	K2h ₆	N-42°-E	楕円形	90 × 77 × 46	〃	椀状	人為	II B1a	人骨	墓塚	第290図
46	K2h ₆	N-29°-E	不定形	— × 65 × 23	ゆるやかに 外傾	平坦	〃	VB-a			第295図
49	K2h ₅	——	円形	68 × 62 × 45	外傾	皿状	自然	IA1a			〃
50	K2f ₄	N-29°-E	楕円形	93 × 71 × 54	垂直	平坦	〃	II A1b			第294図
51	K2f ₄	N-29°-E	〃	112 × 93 × 39	〃	〃	〃	II A2a			〃
52	K2f ₄	——	円形	85 × 80 × 53	〃	〃	〃	IA1a			〃

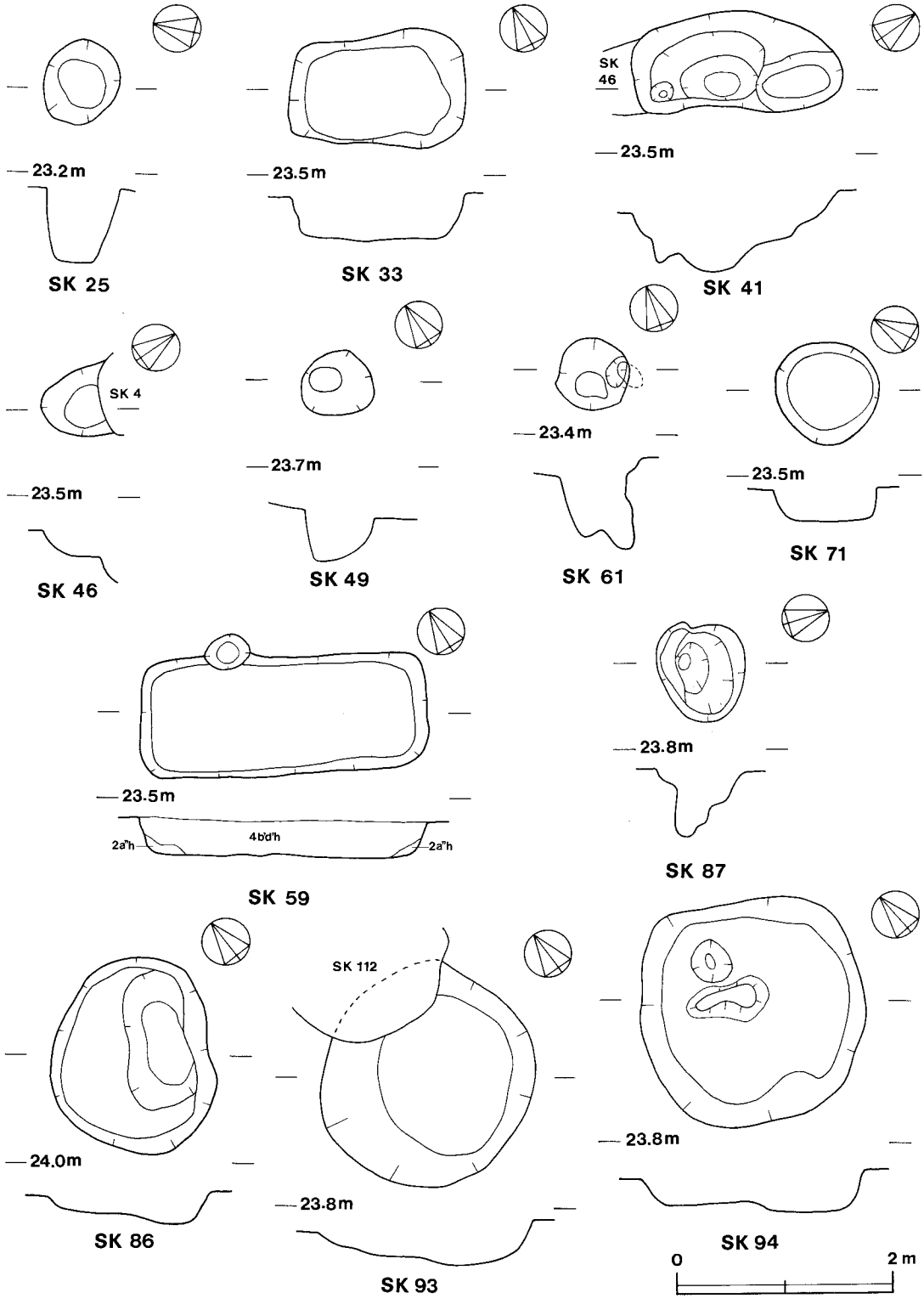
土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版 番号
				長径×短径×深さ							
59	K2f ₆	N-64°-W	隅丸長方形	256 × 110 × 35	外 傾	平坦	自然	IV A 3 a	土師器片 3 点 須惠器片 2 点		第295図
61	K2f ₇	——	円 形	66 × 63 × 85	〃	凹凸	〃	I B 1 b			〃
71	K2g ₇	——	〃	97 × 94 × 29	垂 直	平坦	〃	I A 1 a			〃
86	L2a ₈	N-42°-E	楕 円 形	182 × 146 × 30	ゆるやかに 外 傾	〃	〃	II B 2 a	土師器片 2 点 須惠器片 1 点		〃
87	L2h ₉	N-78°-E	不 定 形	98 × 80 × 62	〃	凹凸	〃	V B 1 b			〃
93	K2i ₃	——	円 形	213 × 195 × 38	〃	ゆるい 起伏	〃	I B 3 a			〃
94	K2i ₄	——	〃	209 × 207 × 40	〃	〃	〃	I B 3 a	陶器片 1 点		〃
97	K2i ₉	N-70°-W	隅丸長方形	175 × 104 × 28	外 傾	平坦	人為	IV B 2 a	須惠器片 2 点	粘土貯蔵穴	第287図
98	K2g ₉	N-25°-E	〃	146 × 106 × 32	〃	椀 状	〃	IV A 2 a	土師器片 2 点	粘土貼り・中世	〃
99	K2i ₃	N-66°-W	〃	128 × 99 × 48	ゆるやかに 外 傾	平坦	自然	IV b 2 a	人骨	墓墳・近世以降	第290図
118	L2j ₃	N-68°-W	長 方 形	389 × 78 × 20	〃	〃	〃	IV B 3 a			第296図
122	K2g ₉	N-33°-W	楕 円 形	100 × 57 × 30	外 傾	ゆるい 起伏	人為	IV B 2 a	人骨	墓墳・近世以降	第290図
125	K2j ₃	N-68°-W	長 方 形	156 × 103 × 61	〃	平坦	自然	IV A 2 b	土師器片 11 点 須惠器片 1 点 紡錘車 1 点		第296図
126	K2j ₃	N-31°-E	〃	140 × 126 × 60	〃	〃	〃	IV A 2 b	土師器片 10 点 坏 1 点		〃
128	L2d ₇	——	円 形	176 × 165 × 81	〃	〃	〃	I A 2 b	土師器片 15 点 弥生式土器片 2 点 須惠器片 6 点		〃
133	L3c ₆	——	〃	143 × 139 × 24	ゆるやかに 外 傾	〃	〃	I B 2 a	土師器片 2 点		〃
136	K3i ₅	N-39°-E	隅丸長方形	199 × 175 × 73	〃	凹凸	〃	IV B 2 b	土師器片 2 点 須惠器片 1 点		〃
142	L2a ₄	——	円 形	84 × 79 × 60	外 傾	平坦	〃	I B 1 b	土師器片 14 点		〃
146	L2e ₀	N-58°-E	楕 円 形	160 × 138 × 19	——	〃	〃	II B 2 a	土師器片 7 点 須惠器片 2 点		〃
147	L3e ₁	——	円 形	164 × 158 × 24	外 傾	〃	〃	I A 2 a			〃
152	L3d ₃	N-11°-E	隅丸長方形	139 × 98 × 55	ゆるやかに 外 傾	〃	〃	IV B 2 b	土師器片 3 点		〃
153	L3e ₄	N-64°-W	楕 円 形	125 × 107 × 21	〃	〃	〃	II B 2 a	土師器片 2 点		〃
155	L3e ₅	N-34°-E	〃	209 × 115 × 36	〃	ゆるい 起伏	〃	II B 3 a	土師器片 1 点		〃
168	K3h ₃	N-75°-W	長 方 形	106 × 87 × 48	外 傾	平坦	人為	IV B 2 a	土師器片 1 点 銅製品 1 点		第297図
186	K3f ₄	N-67°-E	不 定 形	113 × 107 × 45	〃	ゆるい 起伏	自然	V A 2 a			〃
187	K3g ₄	N-50°-E	楕 円 形	86 × 64 × 31	〃	凹凸	〃	II B 1 a			〃
189	L2g ₈	N-78°-W	不 定 形	92 × 64 × 59	〃	〃	〃	V B 1 b			〃
190	L3b ₁	N-24°-E	〃	263 × 89 × 33	〃	平坦	〃	V B 3 a			〃
199	M1a ₀	N-90°	隅丸方形	218 × 204 × 40	〃	〃	〃	III A 3 a	土師器片 6 点 須惠器片 4 点		〃
202	L1i ₀	N-19°-W	〃	145 × (143) × 28	〃	〃	〃	III A 2 a	土師器片 2 点		〃
204	M1a ₀	N-11°-E	〃	156 × 154 × 42	垂 直	〃	〃	III A 2 a	土師器片 6 点		〃
206	M2b ₀	N-43°-E	楕 円 形	106 × 95 × 30	外 傾	ゆるい 起伏	〃	I B 2 a	土師器片 4 点 須惠器片 1 点		〃
207	M1b ₀	N-55°-E	〃	141 × 121 × 55	〃	平坦	〃	I A 2 b	土師器片 3 点		〃

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版 番号
				長径×短径×深さ							
208	M2b ₁	N-63°-E	楕円形	99 × 87 × 52	外傾	平坦	自然	I A 1 b	土師器片 3点		第297図
209	M2c ₁	N-50°-W	〃	99 × 78 × 35	〃	ゆるい起伏	〃	I B 1 a	土師器片 4点 須恵器片 1点		〃
210	M2c ₁	N-40°-W	〃	104 × 94 × 30	〃	〃	〃	I A 2 a	土師器片 1点 須恵器片 3点		〃
212	M2c ₂	N-58°-E	〃	112 × 89 × 39	〃	〃	〃	II B 2 a	土師器片 1点 須恵器片 2点		〃
216	M2b ₁	N-19°-E	〃	100 × 87 × 41	〃	平坦	〃	I A 2 a	土師器片 6点 須恵器片 1点		〃
220	L2d ₄	N-85°-W	〃	77 × 70 × 23	〃	〃	〃	I B 1 a			〃
226	K1i ₆	N-54°-W	不定形	(451)×132 × 34	ゆるやかに外傾	〃	〃	V B 3 a	土師器片 1点 坏 1点 (墨書)		第298図
227	L1i ₇	——	円形	114 × (104) × 32	外傾	ゆるい起伏	〃	I B 2 a	土師器片 2点 須恵器片 1点		〃
235	K1i ₆	N-20°-E	長方形	259 × 91 × 29	垂直	平坦	〃	IV A 3 a	土師器片 3点 須恵器片 2点 陶器片 4点 泥函子 1点	近世	〃
236	K1i ₆	N-54°-W	不定形	(451)×132 × 34	ゆるやかに外傾	〃	〃	V B 3 a	土師器片 1点 陶器片 1点		〃
238	L2b ₂	N-19°-E	隅丸長方形	350 × 117 × 52	外傾	〃	〃	IV A 3 b	土師器 1点		〃
239	K1i ₆	N-54°-W	楕円形	(152)×115 × 46	〃	ゆるい起伏	〃	II B 2 a			〃
240	K1h ₆	N-17°-E	隅丸長方形	306 × 78 × 37	ゆるやかに外傾	〃	〃	IV B 3 a	土師器片 4点 須恵器片 3点 陶器片 2点 磁器片 1点	近世	〃
243	L2j ₅	N-0°	不定形	106 × 93 × 18	〃	皿状	〃	V B 2 a			〃
244	L2a ₆	——	円形	80 × 79 × 154	垂直	〃	〃	I A 1 b			〃
248	K2j ₆	——	〃	113 × 103 × 37	外傾	平坦	〃	I B 2 a			〃
257	K4i ₃	——	〃	55 × 54 × 32	〃	〃	〃	I B 1 a	土師器片 4点		〃
259	L1b ₇	N-74°-W	隅丸長方形	131 × 92 × 53	〃	〃	〃	IV A 2 b	土師器片 9点 須恵器片 1点		〃
296	M4b ₈	N-44°-E	〃	200 × 134 × 49	〃	凹凸	〃	IV B 3 a	土師器片 4点		第299図
298	M4b ₈	——	円形	108 × 99 × 22	ゆるやかに外傾	〃	〃	I B 2 a	土師器片 1点		〃
300	M5a ₂	N-50°-W	不定形	171 × 100 × 30	外傾	ゆるい起伏	〃	V B 2 a			〃
301	M5b ₁	N-15°-E	楕円形	137 × 115 × 21	〃	平坦	〃	II B 2 a	須恵器片 1点		〃
302	M5c ₁	N-52°-E	〃	130 × 88 × 37	ゆるやかに外傾	皿状	〃	II B 2 a	須恵器片 2点		〃
303	M4d ₆	N-59°-W	〃	132 × 114 × 18	外傾	平坦	〃	II B 2 a	土師器片 45点 塊 1点		〃
306	M5d ₂	N-19°-E	〃	140 × 101 × 53	〃	皿状	〃	II B 2 a	土師器片 1点		〃
318	M4f ₆	——	円形	95 × 90 × 21	〃	平坦	〃	I B 1 a	土師器片 1点		〃
324	L4h ₆	N-60°-W	楕円形	150 × 105 × 68	〃	凹凸	〃	II B 2 b	土師器片 1点		〃
358	K5g ₂	——	円形	142 × 135 × 59	〃	平坦	〃	I B 2 b	土師器片 2点		〃
364	M5i ₂	N-92°-W	楕円形	112 × 97 × 28	〃	ゆるい起伏	〃	I B 2 a	土師器片 5点		〃
365	M5j ₁	N-62°-W	隅丸長方形	255 × 203 × 43	〃	平坦	〃	IV A 3 a	土師器片 33点 須恵器片 3点		〃
388	L2c ₅	N-73°-E	楕円形	121 × 105 × 101	〃	凹凸	〃	II B 2 c			第300図
405	L1d ₆	——	不明	(106)×(48)×30	垂直	——	〃	-A 2 a			〃
410	L2d ₂	N-40°-E	隅丸長方形	116 × 100 × 43	外傾	平坦	〃	III A 2 a	陶器片 1点		〃

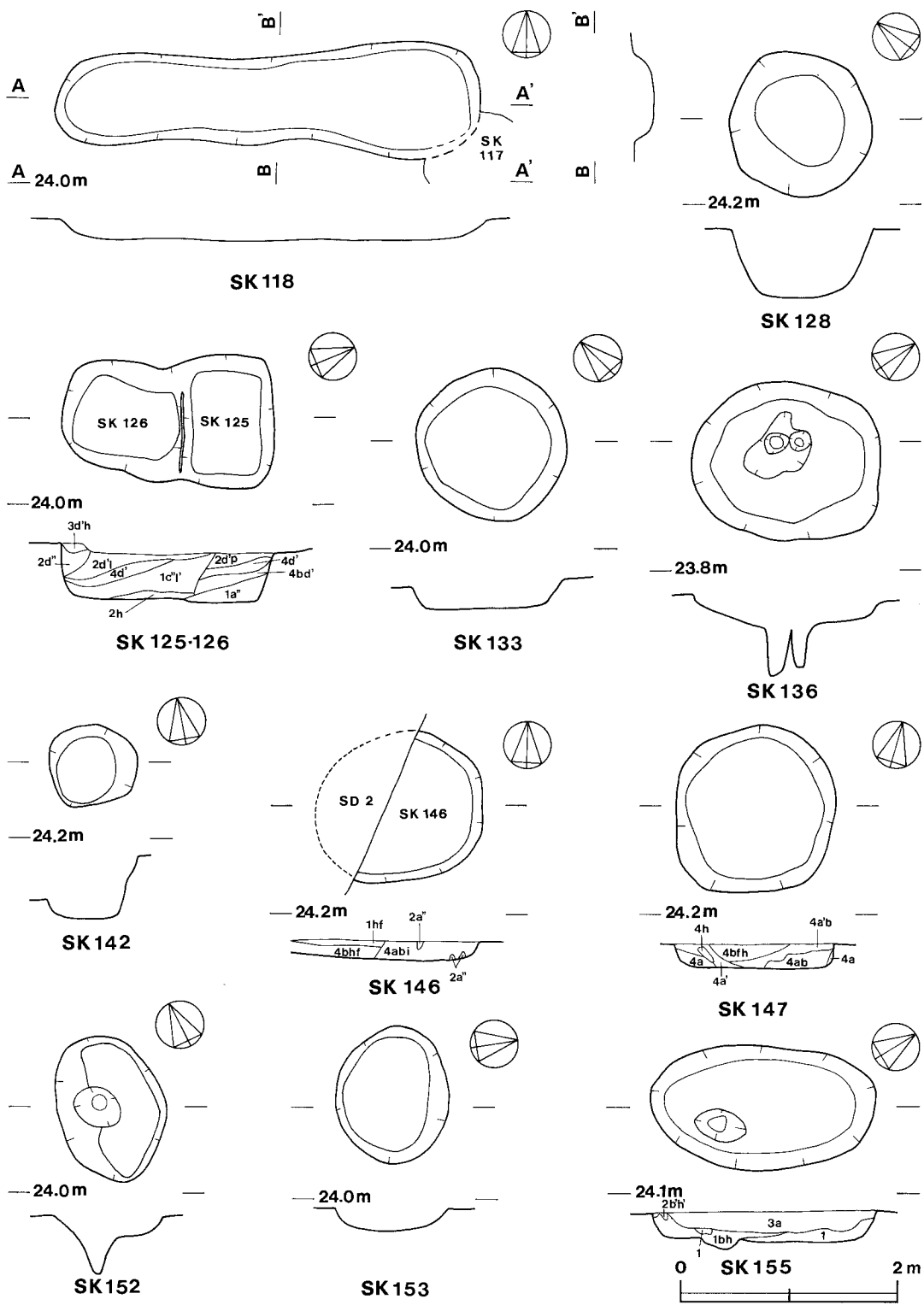
土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)	壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版 番号
				長径×短径×深さ							
419	L3h ₂	N-78°-E	橢円形	113 × 89 × 71	外傾	平坦	自然	II B 2 b	土師器片1点		第300図
429	L3g ₅	N-11°-E	不定形	139 × (116) × 64	〃	凹凸	〃	V B 2 b	土師器片4点		〃
442	L1d ₉	N-69°-W	長方形	164 × 68 × 37	垂直	平坦	〃	IV A 2 a	土師器片2点		〃
449	M3g ₇	——	円形	70 × 65 × 37	外傾	ゆるい起伏	〃	I B 1 a	土師器片2点 須恵器片1点		〃
459	K1j ₉	N-8°-E	隅丸長方形	(147) × (108) × 55	〃	平坦	〃	IV A 2 b			〃
479	N4d ₇	N-46°-E	長方形	(113) × (97) × 43	〃	ゆるい起伏	〃	IV A 2 a	須恵器片1点 壺(須恵器)1点		〃
487	M3e ₄	N-23°-E	橢円形	(94) × (82) × 48	垂直	皿状	〃	II B 1 a	土師器片14点		〃
492	M2i ₉	N-46°-W	〃	111 × 84 × 53	外傾	凹凸	〃	II B 2 b	土師器片11点 須恵器片1点		〃
496	M2i ₉	N-18°-E	〃	101 × 91 × 64	垂直	ゆるい起伏	〃	I A 2 b			〃
498	M2j ₉	N-38°-E	不定形	142 × 108 × 39	外傾	〃	〃	V B 2 a			〃
501	M2b ₅	N-25°-W	橢円形	145 × 81 × 62	垂直	皿状	〃	II A 2 b	坏1点(墨書)		〃
502	M2a ₅	N-70°-W	〃	(148) × 111 × 59	外傾	凹凸	〃	II B 2 b	坏1点(墨書)		〃
503	M2a ₄	——	円形	119 × 116 × 26	〃	平坦	〃	I B 2 a			第301図
504	M2a ₅	N-53°-W	橢円形	103 × 78 × 64	〃	〃	〃	II B 2 b	坏1点		〃
505	M2b ₅	N-49°-E	〃	115 × 99 × 58	〃	皿状	〃	II B 2 b			〃
506	M2a ₅	N-20°-W	〃	86 × 78 × 38	〃	平坦	〃	I A 1 a			〃
508	M2a ₅	N-4.5°-W	〃	(177) × 97 × 63	〃	〃	〃	II A 2 b			〃
509	M2b ₆	N-66°-E	〃	119 × 90 × 55	〃	〃	〃	II B 2 b	坏1点(墨書)		〃
510	L2j ₉	N-70°-W	〃	110 × 100 × 40	〃	凹凸	〃	I B 2 a			〃
514	L1e ₈	N-5.5°-E	〃	64 × 53 × 37	〃	平坦	〃	II B 1 a	坏1点(墨書)		〃
518	M2a ₅	N-7°-E	隅丸方形	103 × 99 × 50	垂直	ゆるい起伏	〃	III A 2 b			〃
521	M2a ₅	N-40°-E	隅丸長方形	188 × (121) × 23	外傾	〃	〃	III A 2 a	坏1点(墨書)		〃
524	N2a ₉	N-35°-E	橢円形	121 × 100 × 17	ゆるやかに外傾	皿状	〃	II B 2 a			〃
526	M3j ₃	——	円形	108 × 106 × 30	外傾	平坦	〃	I B 2 a			〃
527	M3j ₁	——	〃	153 × 143 × 48	〃	〃	〃	I A 2 a			〃
528	N2a ₉	N-27°-W	橢円形	127 × 108 × 13	ゆるやかに外傾	〃	〃	II B 2 a			〃
529	N2a ₉	N-72°-W	不定形	127 × 110 × 43	外傾	凹凸	〃	V B 2 a			〃
530	N2a ₉	N-25°-W	〃	141 × 96 × 15	ゆるやかに外傾	平坦	〃	V B 2 a			〃
534	M2g ₇	N-48°-E	橢円形	133 × 118 × 28	〃	〃	〃	I B 2 a			第302図
535	M2f ₆	N-85°-W	不定形	88 × 70 × 18	外傾	〃	〃	V B 1 a			〃
536	L3b ₁	N-40°-E	〃	320 × (314) × 59	ゆるやかに外傾	ゆるい起伏	〃	V B 3 b			〃



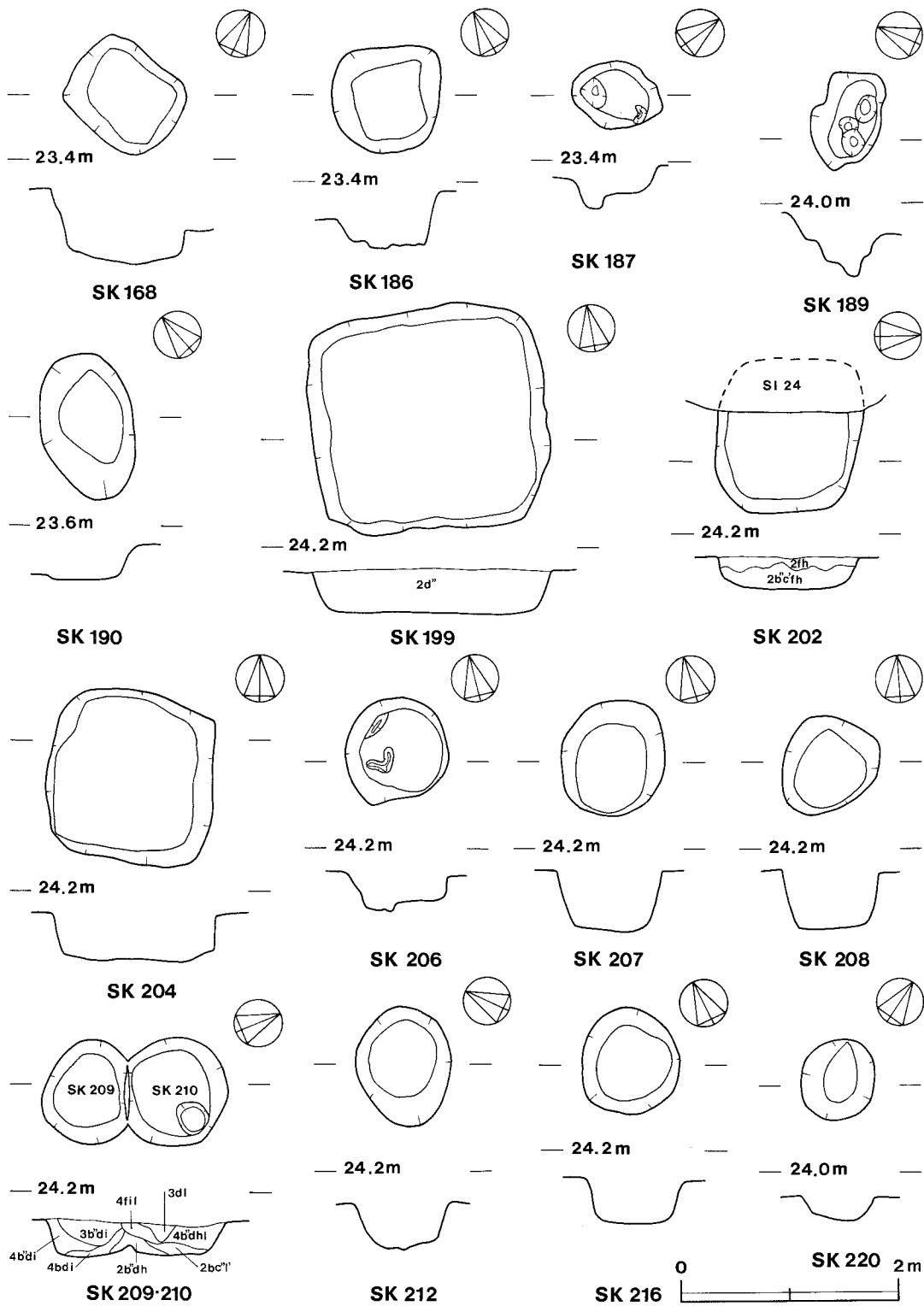
第294图 3区土坑实测图(1)



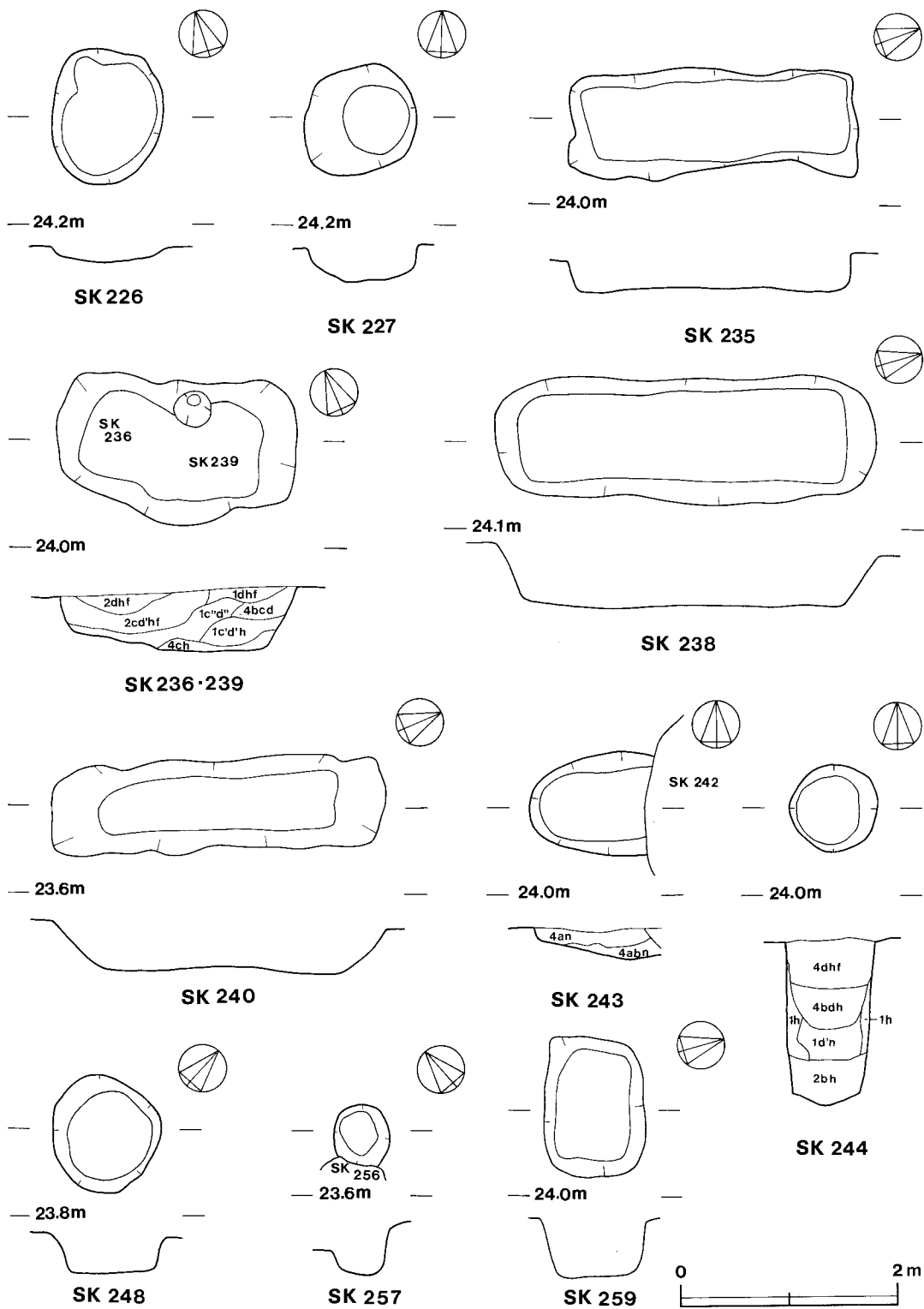
第295图 3区土坑实测图(2)



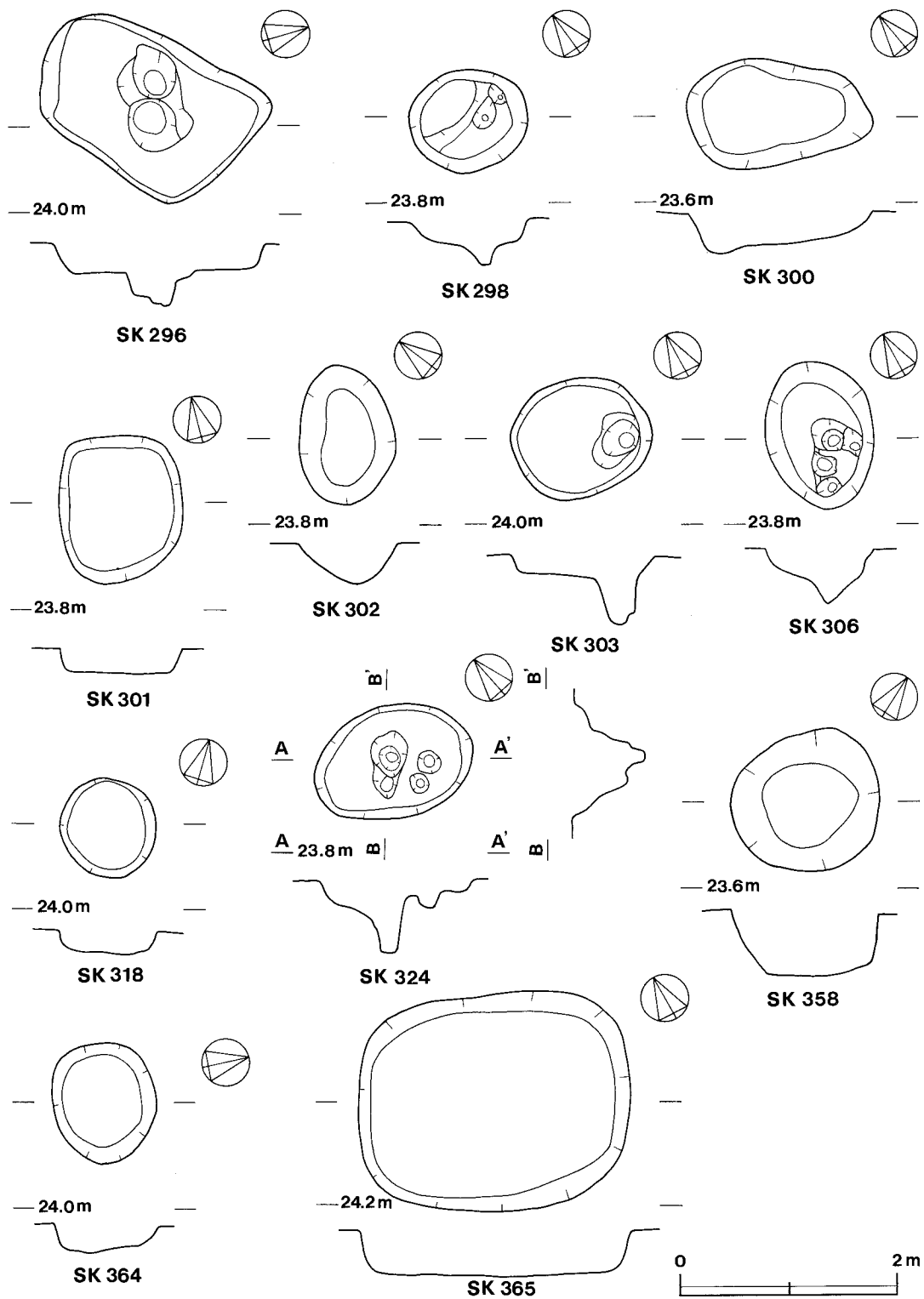
第296图 3区土坑实测图(3)



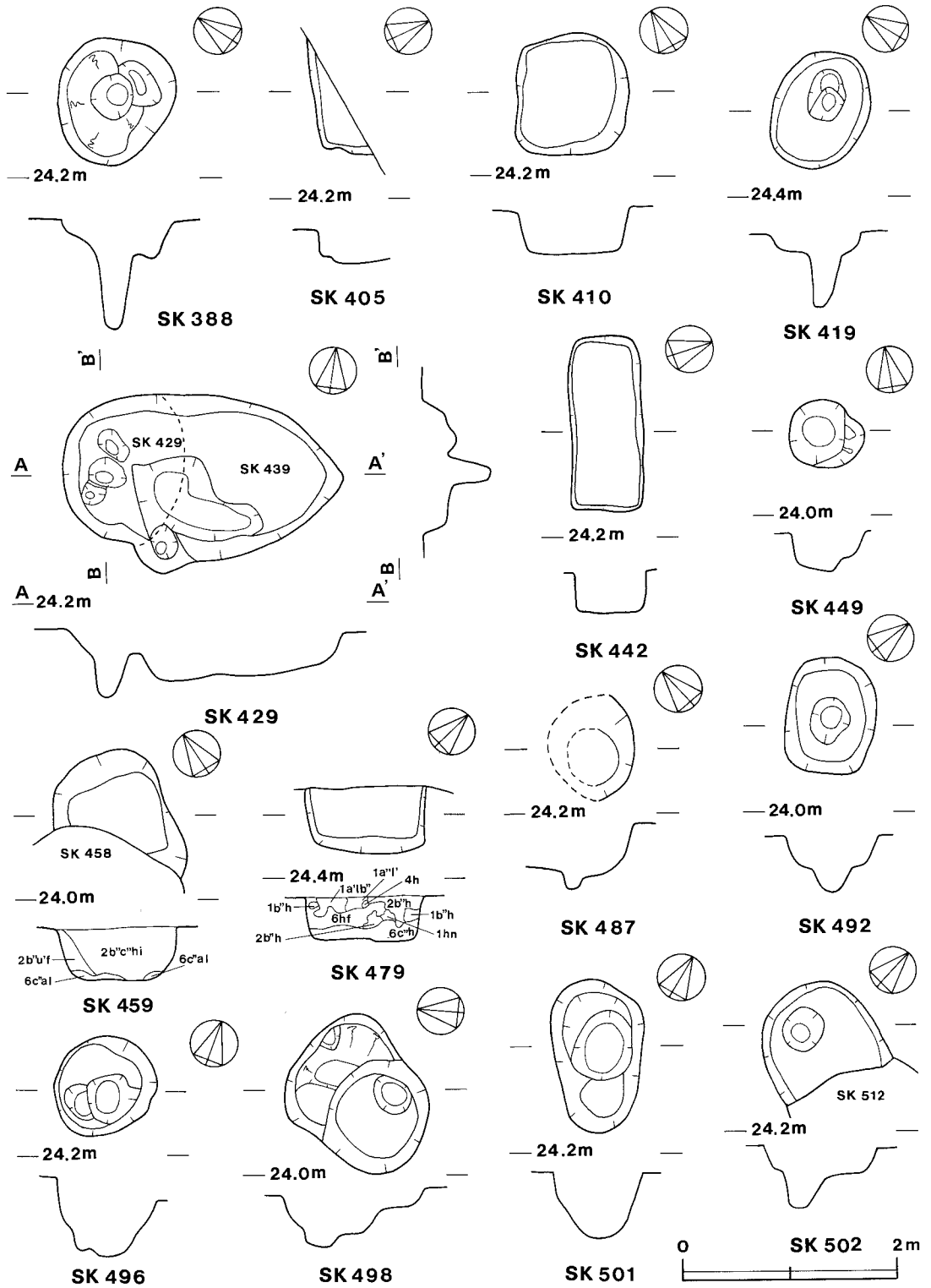
第297图 3区土坑实测图(4)



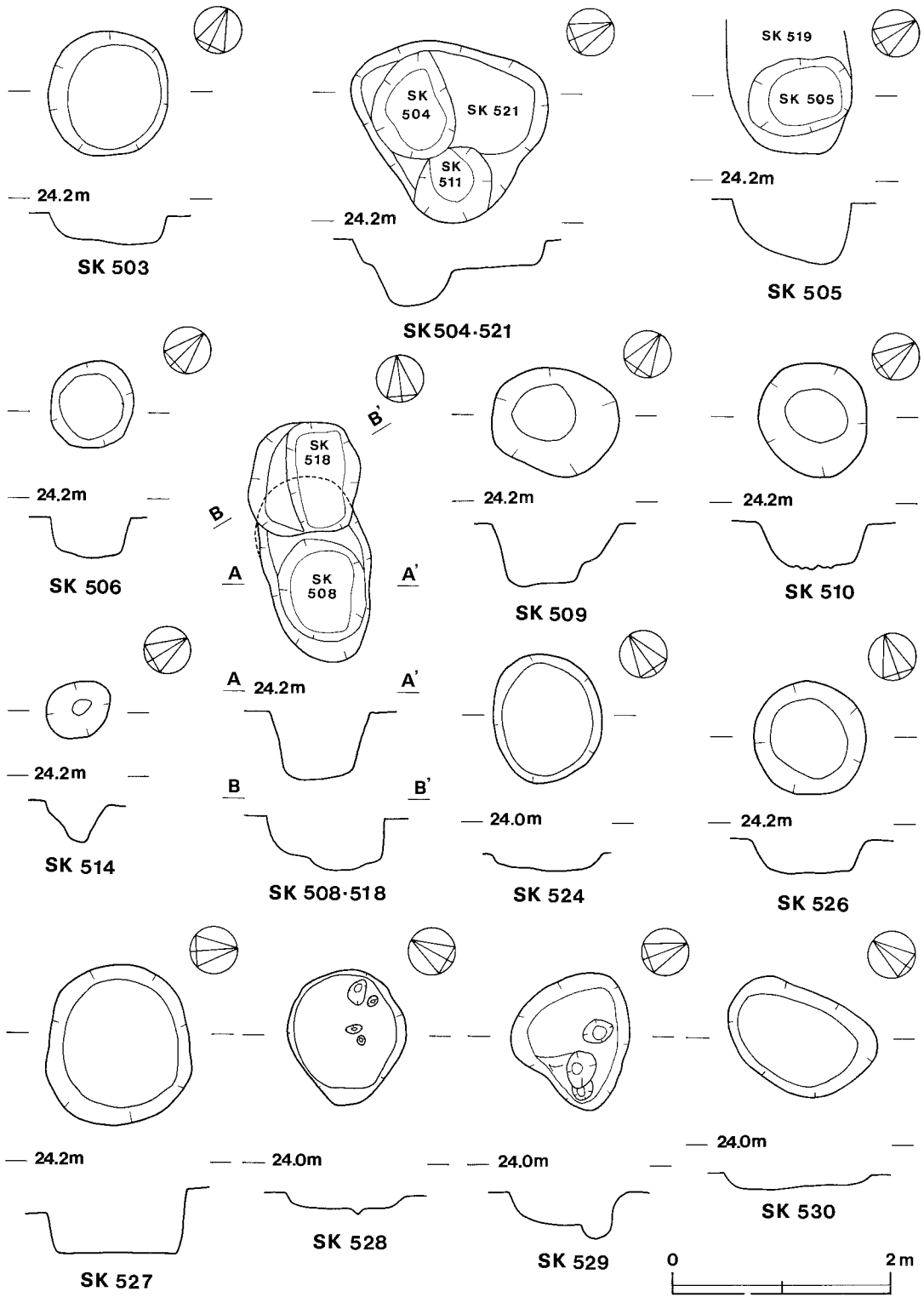
第298图 3区土坑实测图(5)



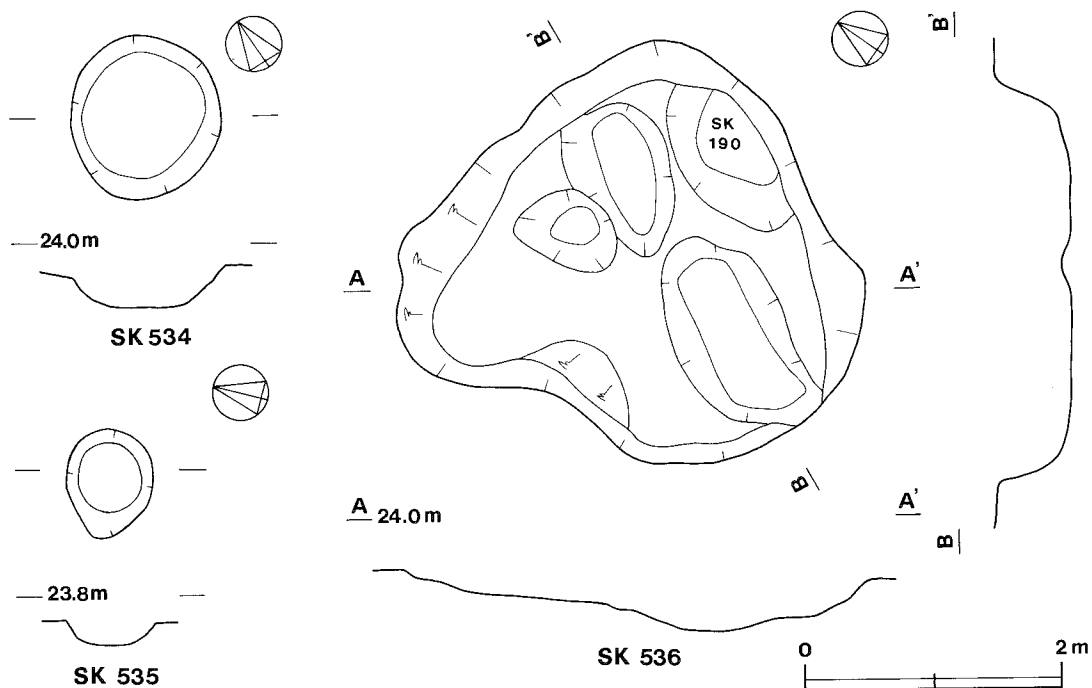
第299图 3区土坑实测图(6)



第300图 3区土坑实测图(7)



第301图 3区土坑实测图(8)



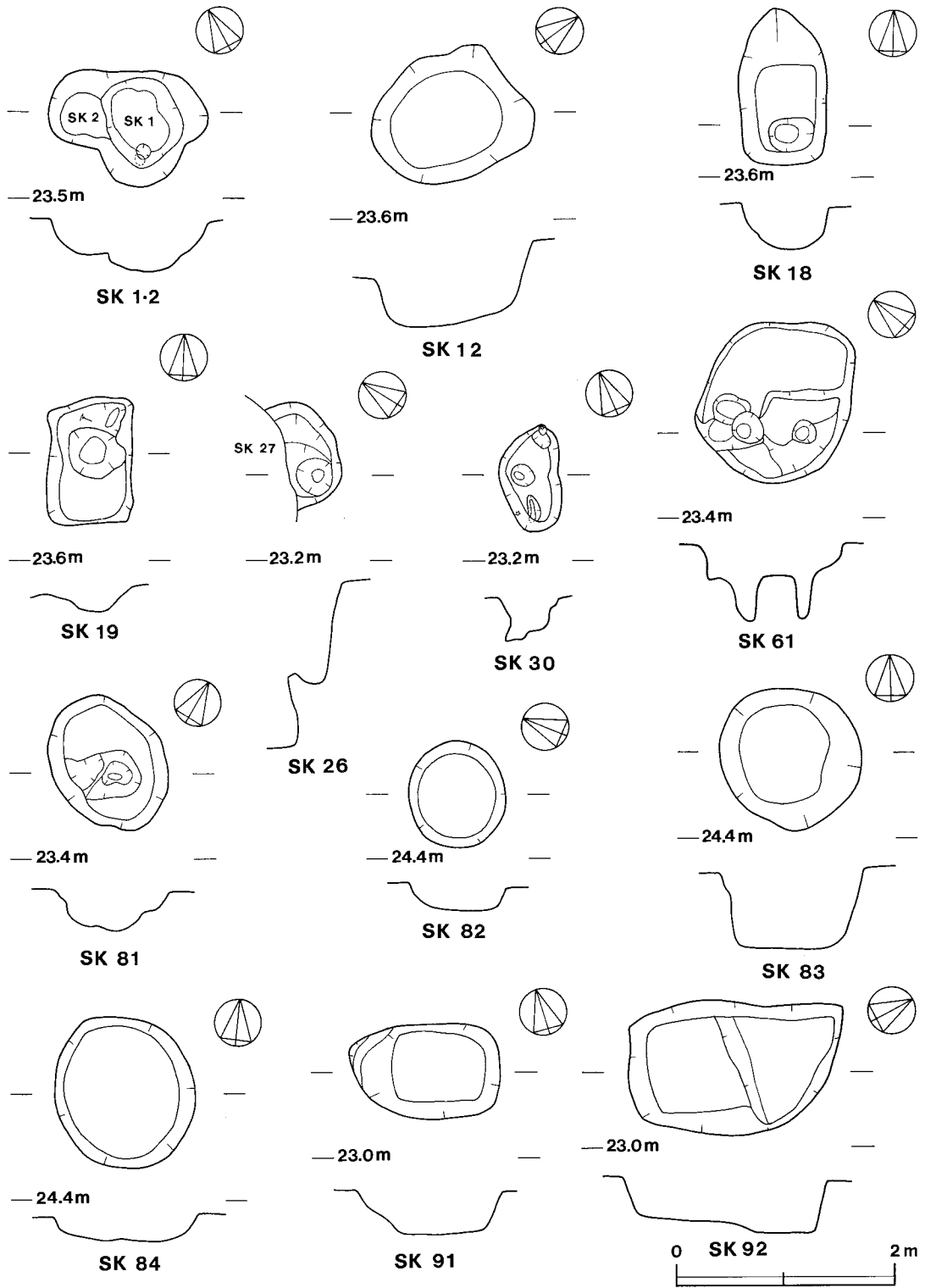
第302図 3区土坑実測図(9)

表3 南三島遺跡4区土坑一覽表

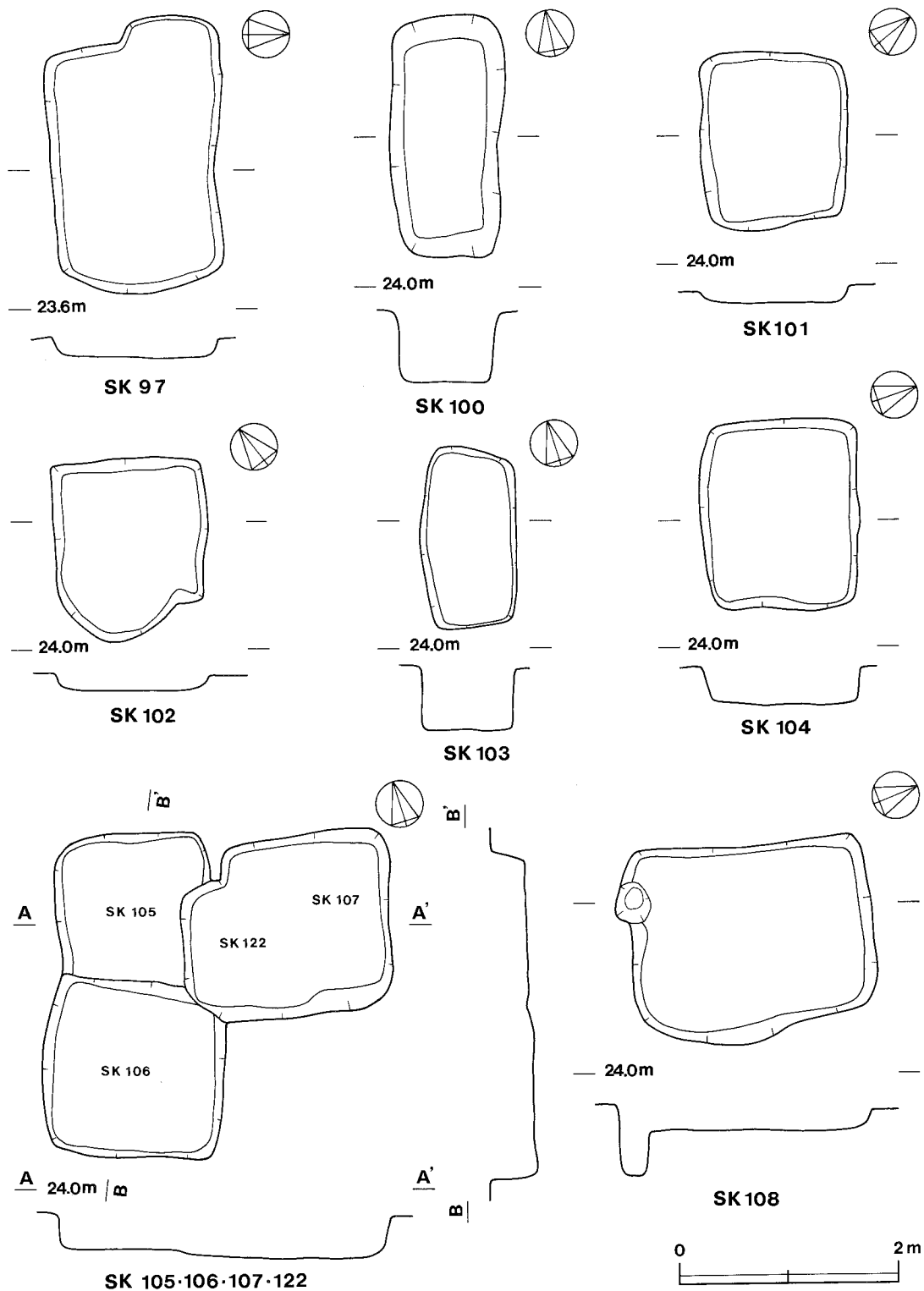
土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)		壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版 番号
				長径×短径×深さ								
1	M5f ₉	N-46°-E	不定形	110 × 100 × 49		ゆるやかに 外傾	皿状	自然	I B 2 a	土師器片 5 点		第303図
2	M5f ₈	N-32°-E	楕円形	72 × 49 × 34		〃	〃	〃	II B 1 a	土師器片 1 点 須恵器片 1 点		〃
12	N5a ₇	N-28°-E	〃	151 × 118 × 95		外傾	平坦	〃	II B 2 b			〃
18	M5j ₇	N-7°-W	〃	147 × 79 × 41		〃	皿状	〃	II B 2 a	土師器片 1 点 須恵器片 3 点		〃
19	M5j ₇	N-11°-W	隅丸長方形	118 × 76 × 22		ゆるやかに 外傾	〃	〃	IV B 2 a	土師器片 1 点 須恵器片 1 点		〃
26	L5g ₇	N-30°-E	楕円形	97 × 52 × 98		垂直	平坦	〃	II A 1 b	陶器片 1 点		〃
30	L5f ₈	N-37°-E	不定形	98 × 54 × 40		外傾	凹凸	〃	V B 1 a	古銭 2 点		〃
61	K5h ₆	N-57°-E	楕円形	152 × 134 × 32		ゆるやかに 外傾	ゆるい 起伏	〃	II B 2 a			〃
81	M5g ₉	N-54°-W	〃	133 × 104 × 39		〃	〃	〃	II B 2 a	土師器片 7 点		〃
82	N5g ₈	N-64°-E	〃	101 × 89 × 27		外傾	平坦	〃	I B 2 a	須恵器片 2 点		〃
83	N5g ₉	—	円形	135 × 128 × 78		〃	〃	〃	I A 2 b	土師器片 3 点 須恵器片 1 点		〃
84	N5h ₀	N-35°-W	楕円形	150 × 130 × 26		〃	〃	〃	II B 2 a	土師器片 7 点 須恵器片 1 点		〃
86	O6g ₈	N-19°-E	長方形	248 × 105 × 63		垂直	平坦	人為	IV A 3 b	土師器片 10 点	墓墳・中世	第291図
87	O6h ₈	N-0°	〃	285 × 130 × 144		内傾	〃	〃	I B 3 c	土師器片 90 点 須恵器片 15 点	墓墳・中世	〃

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)		壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版 番号
				長径×短径×深さ								
88	O6i ₉	N-19°-W	隅丸長方形	189 × 126 × 44	外傾	椀状	自然	IVB2a	土師器片29点 須恵器片5点 陶器3点	粘土貼り・中世	第288図	
90	P6c ₉	N-0°	隅丸方形	143 × 131 × 34	〃	平坦	人為	IA2a	土師器片2点 灯明皿1点 須恵器片3点	粘土貼り・中世	〃	
91	P6a ₉	N-72°-W	楕円形	140 × 90 × 41	〃	〃	自然	IIB2a	内耳土器片4点 小皿1点		第303図	
92	P6a ₉	N-25°-E	不定形	188 × 126 × 49	〃	〃	〃	VB2a	土師器片3点		〃	
94	O6d _i	——	円形	120 × 118 × 50	外傾	ゆるい起伏	人為	IB2a	土師器片6点 灯明皿片1点	粘土貼り・中世	第288図	
95	O6i ₉	N-17°-W	隅丸長方形	183 × 136 × 49	〃	平坦	〃	IVB2a	内耳土器片12点	粘土貼り・中世	〃	
96	O6e ₉	N-5°-E	〃	214 × 149 × 64	ゆるやかに外傾	〃	〃	IIB3b		粘土貼り・中世	〃	
97	O6g ₉	N-88°-E	〃	258 × 153 × 19	外傾	〃	自然	IVB3a	土師器片3点 須恵器片1点		第304図	
98	O6f ₉	N-10°-E	長方形	253 × 170 × 98	垂直	〃	人為	VA3b	土師器片3点 須恵器片1点 灯明皿片1点	墓墳・中世	第291図	
99	O7h _i	N-87°-W	隅丸長方形	215 × 191 × 67	外傾	〃	〃	IVB3b		粘土貼り・中世	第288図	
100	O7f _i	N-14°-E	〃	228 × 110 × 68	垂直	〃	自然	IVA3b			第304図	
101	O7f _i	N-36°-W	〃	164 × 133 × 12	ゆるやかに外傾	〃	〃	IVB2a	土師器片1点		〃	
102	O7f ₃	N-38°-E	不定形	172 × 144 × 15	〃	〃	〃	VB2a			〃	
103	O7e ₄	N-5°-E	隅丸長方形	172 × 89 × 58	垂直	〃	〃	IVA2b	土師器片2点		〃	
104	O7e ₅	N-73°-W	〃	168 × 145 × 34	外傾	〃	〃	IVB2a			〃	
105	O7e ₅	N-81°-W	隅丸方形	147 × (141) × 34	垂直	〃	〃	IVA2a			〃	
106	O7e ₅	N-67°-W	〃	170 × (167) × 39	外傾	〃	〃	IVA2a			〃	
107	O7e ₅	N-14°-E	隅丸長方形	170 × 146 × 40	〃	〃	〃	IVB2a			〃	
108	O7g ₅	N-18°-E	〃	245 × 185 × 24	〃	〃	〃	IVA3a	土師器片1点		〃	
109	O7h ₆	N-69°-W	〃	127 × 114 × 42	〃	〃	〃	IVB2a			第305図	
110	O7i ₆	N-15°-W	不定形	127 × 94 × 49	〃	凹凸	〃	VC2a			〃	
111	O6i ₉	N-15°-W	長方形	254 × 176 × 81	垂直	平坦	人為	IVA3b	古銭1点	墓墳・中世	第291図	
112	O6i ₉	——	円形	148 × 135 × 31	ゆるやかに外傾	〃	〃	IIB2a	土師器片2点	粘土貼り・中世	第288図	
113	P7a ₁	N-45°-E	楕円形	90 × 80 × 32	外傾	〃	自然	IB1a			第305図	
114	O7j ₂	N-70°-W	〃	217 × 185 × 84	ゆるやかに外傾	椀状	人為	IIB3b	土師器片4点	粘土貼り・中世	第288図	
116	P7a ₂	N-0°	〃	134 × 91 × 82	外傾	凹凸	自然	IIB2b	土師器片2点		第305図	
117	P7c ₃	N-84°-W	隅丸長方形	225 × 167 × 73	垂直	平坦	人為	VA3b	須恵器片2点	墓墳・中世	第292図	
119	P6a ₈	N-12°-W	〃	305 × 210 × 98	〃	ゆるい起伏	〃	VB3b	土師器片10点	墓墳・中世	〃	
121	O7i ₂	N-88°-E	〃	185 × 125 × 50	外傾	平坦	人為	IVB2a		粘土貼り・中世	第289図	
122	O7e ₅	N-13°-E	隅丸方形	(128) × (125) × 22	——	〃	自然	IV-2a			第304図	
123	O6j ₉	N-20°-E	隅丸長方形	174 × 100 × 66	外傾	椀状	人為	VB2a		粘土貼り・中世	第289図	
124	O6j ₉	N-87°-E	〃	285 × 186 × 45	〃	平坦	〃	VB3a	内耳土器片5点	墓墳・中世	第292図	
125	O6h ₈	——	円形	125 × 119 × 21	ゆるやかに外傾	〃	自然	IB2a			第305図	

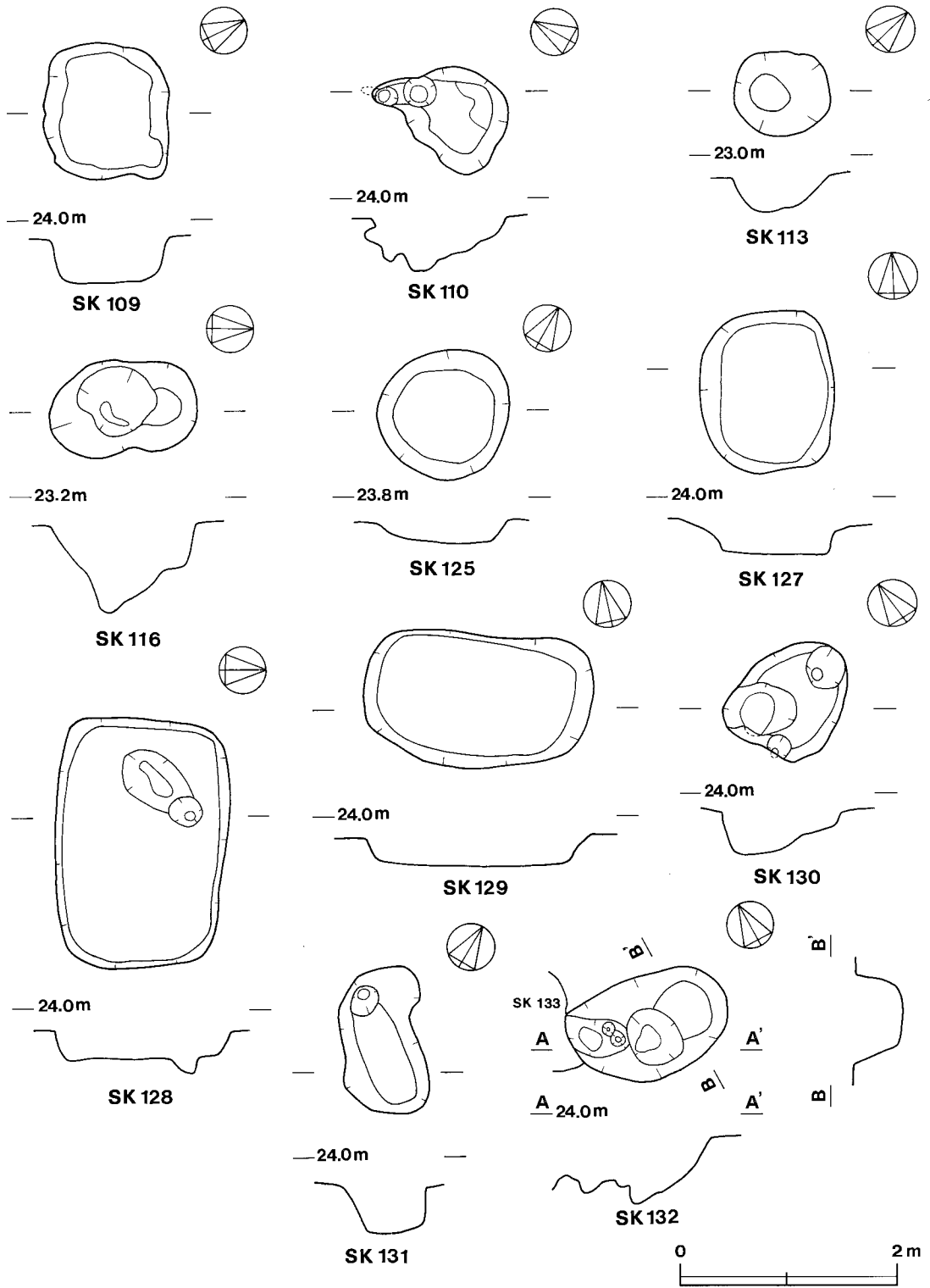
土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)		壁面	底面	覆土	形態	出土遺物	備考	図版 番号
				長径×短径×深さ								
127	O7d _c	N-4°-E	隅丸長方形	151 × 123 × 32		外傾	平坦	自然	IVB2a	土師器片1点		第305図
128	O7d _s	N-83°-W	〃	232 × 161 × 27		〃	〃	〃	IVB3a	土師器片4点 須惠器片1点		〃
129	O7c _s	N-70°-W	〃	211 × 125 × 30		〃	〃	〃	IVB3a			〃
130	N7j _s	N-85°-E	不定形	120 × 98 × 43		〃	凹凸	〃	VB2a			〃
131	N7h _s	N-44°-W	〃	135 × 69 × 47		垂直	平坦	〃	VA2a			〃
132	N7h ₄	N-71°-W	楕円形	152 × 97 × 65		ゆるやかに 外傾	凹凸	〃	II B2b			〃
133	N7h ₄	N-83°-E	不定形	173 × 84 × 85		外傾	〃	〃	VA2b	陶器1点		第307図
134	N7f ₄	N-85°-E	楕円形	130 × 112 × 27		〃	平坦	〃	II B2a	陶器片1点		〃
136	O7b _s	N-74°-W	隅丸長方形	(371)×255 × 34		〃	〃	〃	IVB3a	土師器片22点 須惠器片8点		第306図
137	O7b ₄	N-71°-W	〃	278 × 160 × 31		〃	〃	〃	IVB3a	土師器片2点		〃
138	O7c _s	N-28°-E	〃	267 × 151 × 24		垂直	〃	〃	IVA3a			〃
139	O7c _s	N-62°-W	不定形	178 × 159 × 20		〃	〃	〃	VA2a			〃
140	O7b ₄	N-66°-W	隅丸長方形	228 × 177 × 53		〃	〃	〃	IVA3b	土師器片1点		〃
141	O7b ₄	N-13°-E	〃	192 × 159 × 15		—	〃	〃	IV-2a			〃
142	O7b _s	N-17°-E	〃	185 × 148 × 23		外傾	〃	〃	IVB2a			〃
143	O7b _s	N-80°-W	〃	(136)×(106)×22		〃	〃	〃	III B2a	土師器片2点		〃
144	O7c _s	N-23°-E	〃	167 × 142 × 20		〃	〃	〃	IV-2a	土師器片2点		〃
145	O7c ₄	N-76°-W	〃	201 × 109 × 10		〃	〃	〃	IVB3a			〃
146	O7b ₄	N-73°-W	〃	156 × 104 × 19		〃	〃	〃	IV-2a			〃
147	O7c ₄	N-72°-W	〃	(357)×175 × 26		ゆるやかに 外傾	〃	〃	IVB3a			〃
148	O7b _s	N-12°-E	〃	195 × 163 × 39		〃	〃	〃	IVB2a			〃
152	N7g _s	N-29°-E	不定形	172 × 146 × 79		〃	凹凸	〃	VB2a			第307図
153	N7d _s	N-13°-E	楕円形	141 × 115 × 41		外傾	平坦	〃	II B2a	土師器片4点		〃
154	O6h ₁	N-66°-E	隅丸長方形	92 × 40 × 26		垂直	〃	人為	VA1a	土師器片13点 陶器片1点	粘土貼り・中世	第289図
155	O6j ₀	—	円形	150 × 150 × 60		外傾	碗状	〃	IB2a		粘土貼り・中世	〃
157	O7b _s	N-10°-E	隅丸長方形	250 × 190 × 30		〃	平坦	自然	IVB3a			第306図
165	M6g ₉	—	円形	123 × 120 × 31		ゆるやかに 外傾	皿状	〃	IB2a	土師器片1点		第307図
174	M6f ₃	N-49°-E	楕円形	107 × 94 × 18		〃	平坦	〃	IB2a	土師器片18点 坏1点 灯明皿1点		〃



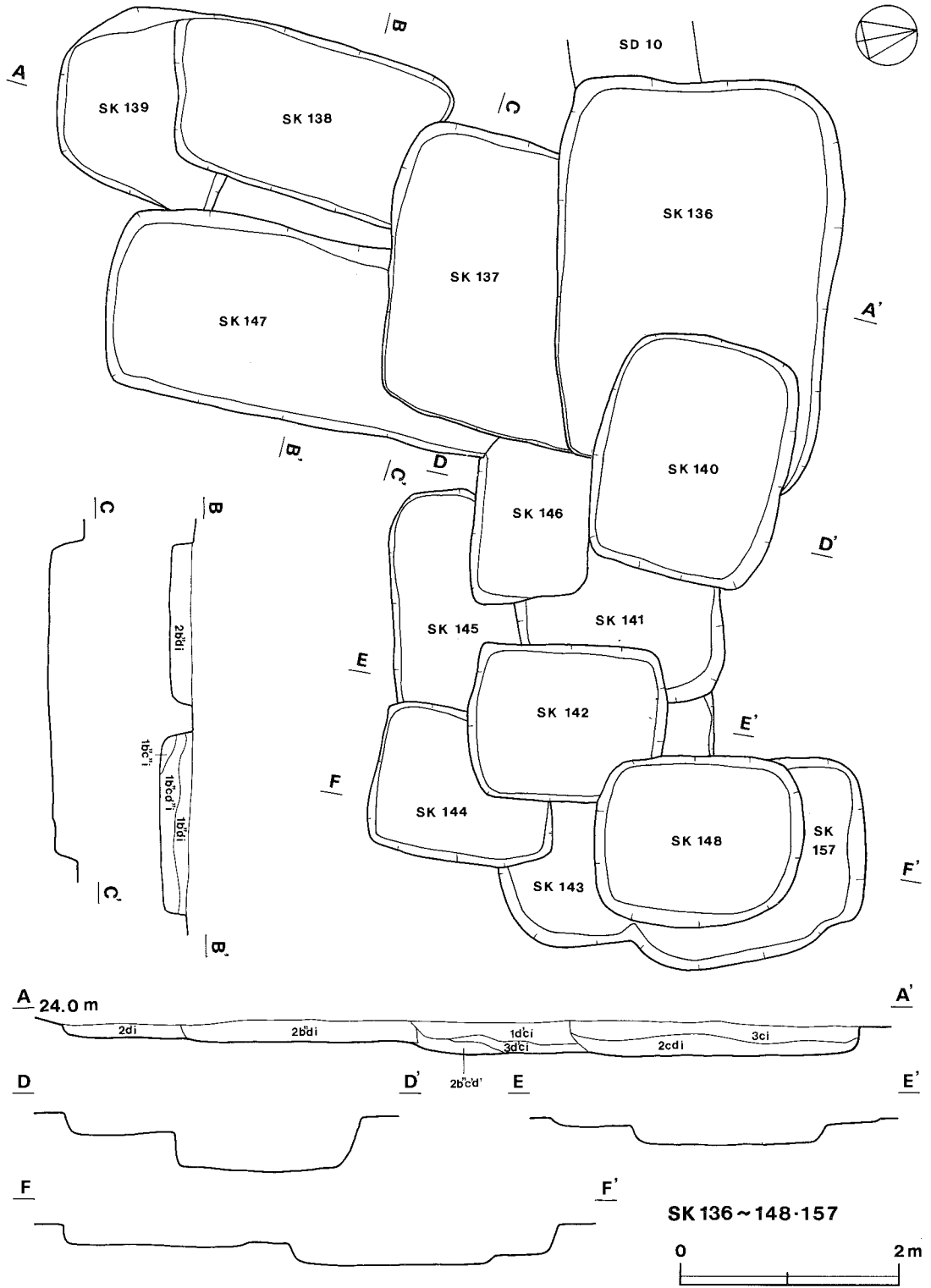
第303图 4区土坑实测图(1)



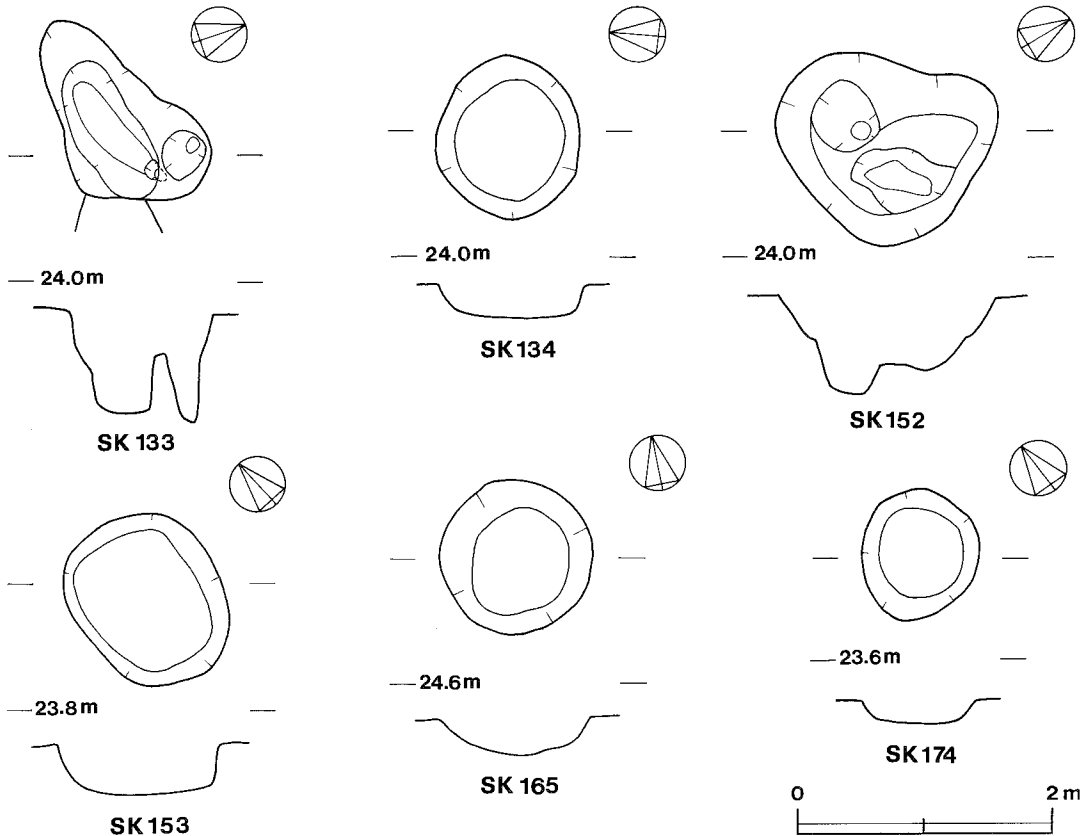
第304图 4区土坑实测图(2)



第305图 4区土坑实测图(3)



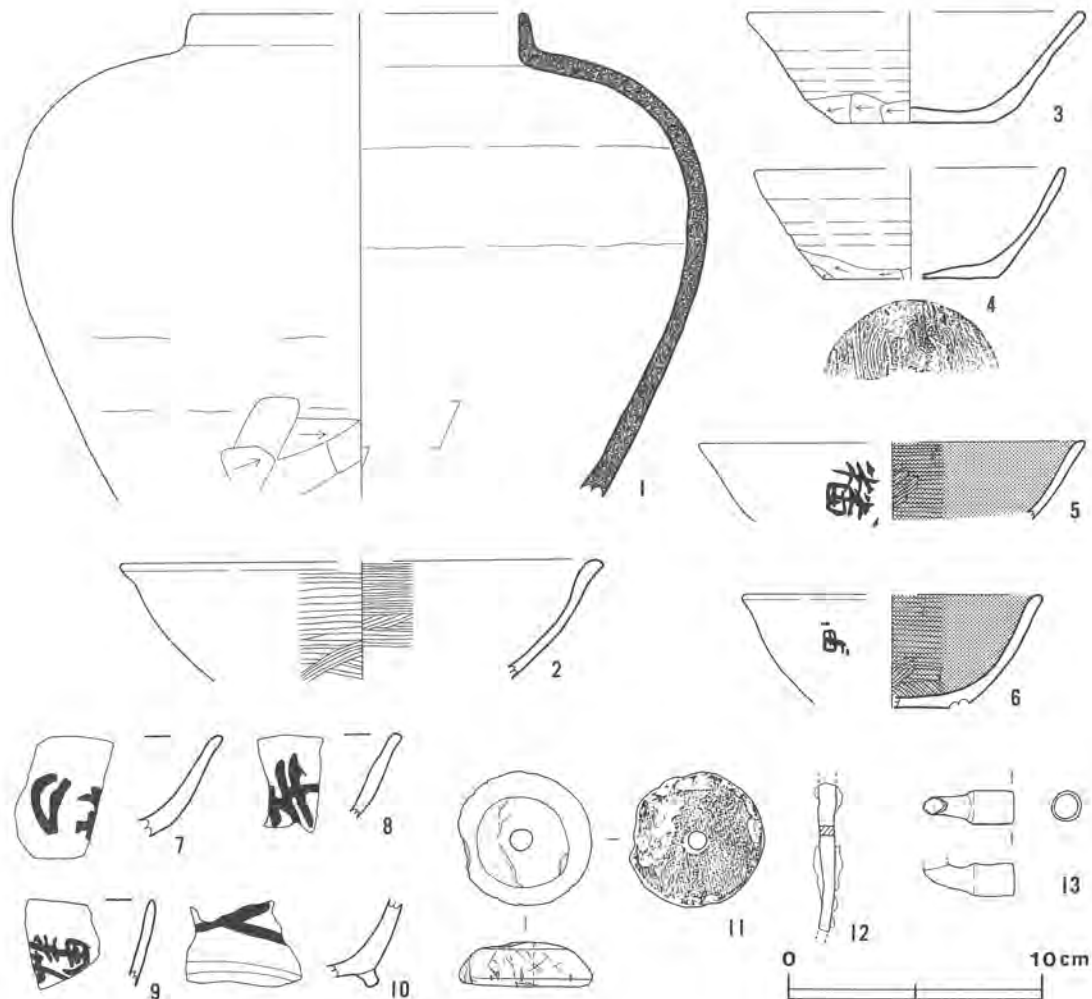
第306图 4区土坑实测图(4)



第307図 4区土坑実測図(5)

3区土坑出土土器観察表

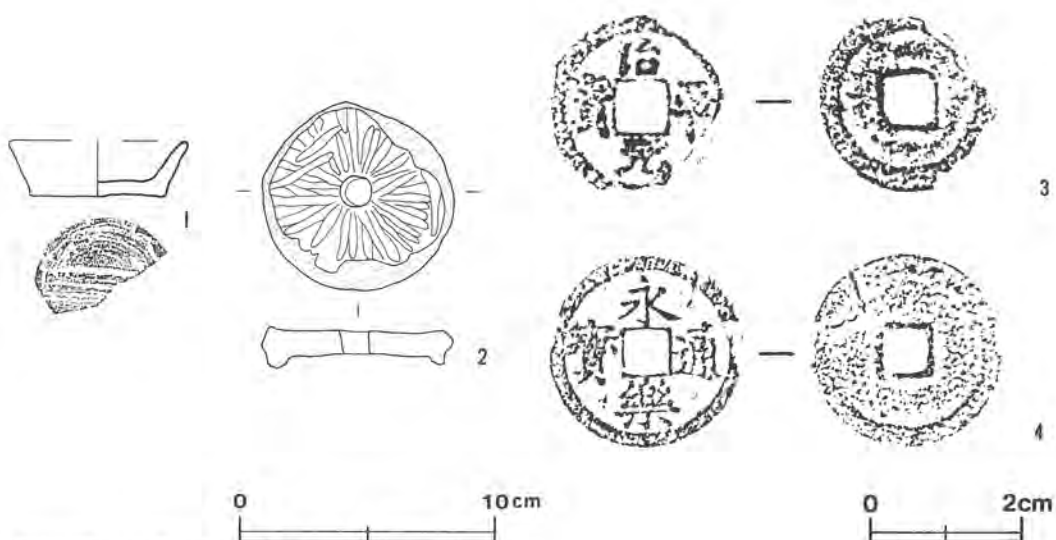
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第308図 1	短頸壺 須恵器	A (12.8) B (19.2)	底部欠損。胴部は大きく膨らみ、最大径を上位に持つ。口縁部は短く、内傾して立ち上がる。	口縁部から胴部上位にかけての内・外面は横ナデ整形。胴部外面下位は横位の篋削り。内面下位は横位の篋ナデ整形。	砂粒 灰色 良好	40% P 401 PL78 SK479
2	埴 土師器	A (19.0) B (4.8)	底部欠損。体部は内彎して開き、口縁部は外反する。口唇部は膨らみ丸い。	水挽き成形。内・外面とも篋磨き。	砂粒 にぶい橙色 良好	20% P 400 SK303
3	坏 土師器	A (13.4) B 4.4 C 6.3	上げ底。体部は外反気味に開き、口縁部に至る。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り。底部は一定方向の手持ち篋削り。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	50% P 402 SK504



第308図 3区土坑出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第308図 4	坏 土師器	A [12.4] B 4.4 C (6.9)	平底。体部は内彎して開き、口縁部に至る。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り。内面篋磨き。底部は回転糸切り後、周囲を手持ち篋削り。	砂粒 にぶい褐色 普通	15% P398 SK126
5	坏 土師器	A [15.4] B (3.1)	口縁部片。口縁部はわずかに外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。内面は篋磨き。	砂粒 浅黄橙色 普通	5% P436 PL94 内面黒色処理 墨書「口橋」か SK509
6	高台付坏 土師器	A [12.0] B (4.5)	上げ底。高台部欠損。体部は内彎して開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。内面は篋磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	15% P435 内面黒色処理 墨書「橋」 SK502

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第308図 7	坏 土師器	B (3.9)	体部片。体部は内彎気味に開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部外面下端は篋削り。内面は篋磨き。	砂粒 にぶい橙色 良好	5% P438 内面黒色処理・ 墨書「ハ」 SK521
8	坏 土師器	B (3.2)	口縁部片。口縁部はわずかに外反する。口唇部は平坦。	水挽き成形。内面篋磨き。	砂粒 橙色 良好	5% P433 PL94 内面黒色処理・ 体部に墨書「橋か」 SK226
9	坏 土師器	B (3.4)	口縁部片。口縁部は体部から連続して開く。口唇部は丸い。	水挽き成形。	砂粒 淡橙色 普通	5% P434 PL94 体部に墨書「橋」 SK501
10	高台付坏 土師器	B (3.5) D 0.7	底部片。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は平坦。体部は内彎して開く。上位を欠損。	水挽き成形。内面は篋磨き。高台は貼り付け。	砂粒 にぶい橙色 普通	5% P437 内面黒色処理・ 体部に墨書「人」 SK514



第309図 4区土坑出土遺物実測図

4区土坑出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第309図 1	小皿 土師質土器	A [7.2] B 2.2 C [5.4]	底部わずかに引き縮まり、突出する。体部は外傾して開き、口縁部に至る。	ナデ整形。底部は回転糸切り。	砂粒 浅黄橙色 普通	50% P239 SK91
2	高台付坏 土師器	B (1.5)	底部片。平底。高台部欠損。底面中央には、焼成後に径1.2cmの孔が穿たれる。	内面放射状の篋磨き。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	10% P240 紡錘車として利用 SK174

第4節 地下式坑

(1) 3 区

第1号地下式坑（第310図）

本跡は、調査区の北西部 K2e9を中心に確認され、第57号土坑として調査した遺構である。本跡の南西33m には第2号地下式坑が、北西4m には5区の第9号地下式坑が存在している。

竪坑と主室からなっているが、主室の大部分は本調査区と5区とを区画する農道の下に延びているため規模については不明である。主軸方向はN-22°-Eを指している。竪坑の確認面は、長径2.05m、短径1.5mの楕円形で、下位にいくに従って除々にすぼまり、底面は一辺70cmの方形状を呈している。竪坑の深さは1.5mで、底面は踏み締まり、主室方向に緩やかに傾斜している。北西と南東の壁は80度の角度で外傾して立ち上がり、南西壁は他の壁に比べやや緩やかに立ち上がっている。主室は、竪坑の底面から90cmほど急角度で落ち込み、青白色粘土層を掘り込んでいる。主室の大半は前述のごとく農道下に延びているため、規模等の詳細については不明である。東・西の壁は内彎して立ち上がり、底面から1.1mの所で強く内傾し、天井部に移行しはじめる。天井部は崩落している。

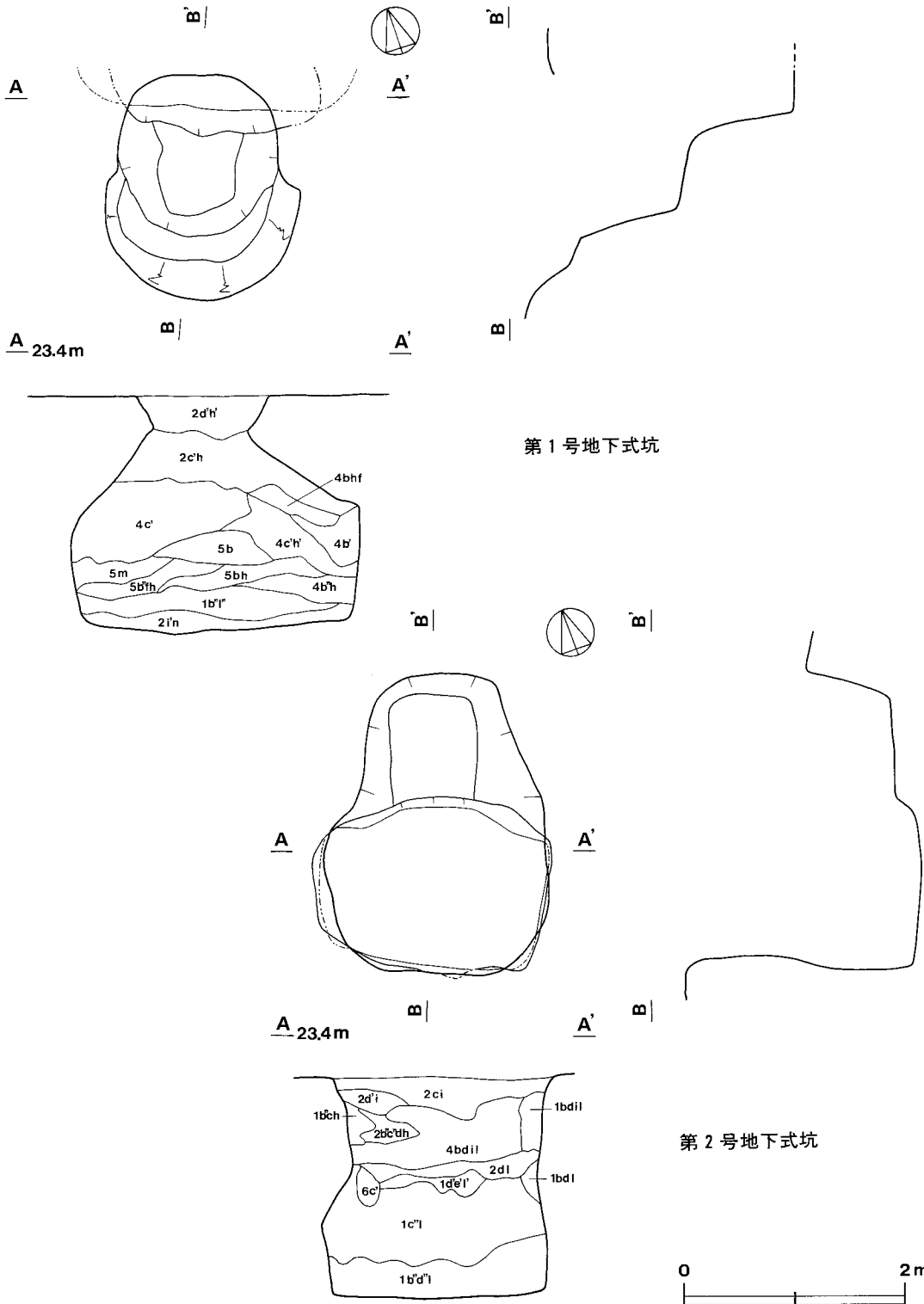
覆土は、上層に暗褐色土、中層に天井部の崩落土と思われるロームブロックを多量に含む黒褐色土が堆積している。下層は締まりの弱い黒褐色土や暗褐色土であり、天井部が崩落する以前に竪坑部から流れ込んだものと思われる。

遺物は、土師器片14点、須恵器片5点、陶器片1点が出土している。いずれも覆土中から出土したもので、本跡とは無関係である。本跡の時期等については不明である。

第2号地下式坑（第310図）

本跡は、調査区の北西部 K2g1区を中心に確認され、第469号土坑として調査した遺構である。竪坑の位置する部分は、周辺地域より60cmほど低い窪み地帯で、本跡の北東33m には第1号地下式坑が存在している。

竪坑と主室からなり、全長は2.78mで、主軸方向はN-22°-Eを指している。竪坑は長軸1.4m、短軸1.2mの方形状で、確認面からの深さは80cmである。竪坑の底面は、褐色粘土層に達し、平坦で締まっている。壁は65度の角度で外傾して立ち上がっている。主室の底面は、竪坑の底面から20cm落ち込み、青白色粘土層を掘り込んでいる。主室部の底面は、長軸が2.05m、短軸が1.45mで、主軸と直交する方向に長軸を持つ長形状を呈し、平坦である。壁は、底面から70cmほど垂直に立ち上がった後、内傾して天井部に移行する気配をみせるが、天井部は全て崩落している。



第310图 3区第1·2号地下式坑实测图

覆土は、上層に締まりの弱い暗褐色土や黒褐色土、中層から下層にかけては天井部の崩落によると思われるロームブロックを多量に含む褐色土が堆積している。堆積状況から考えて、本跡は天井部が崩落した後に、自然堆積したものと思われる。

遺物は出土しておらず、時期や性格は不明である。

(2) 4 区

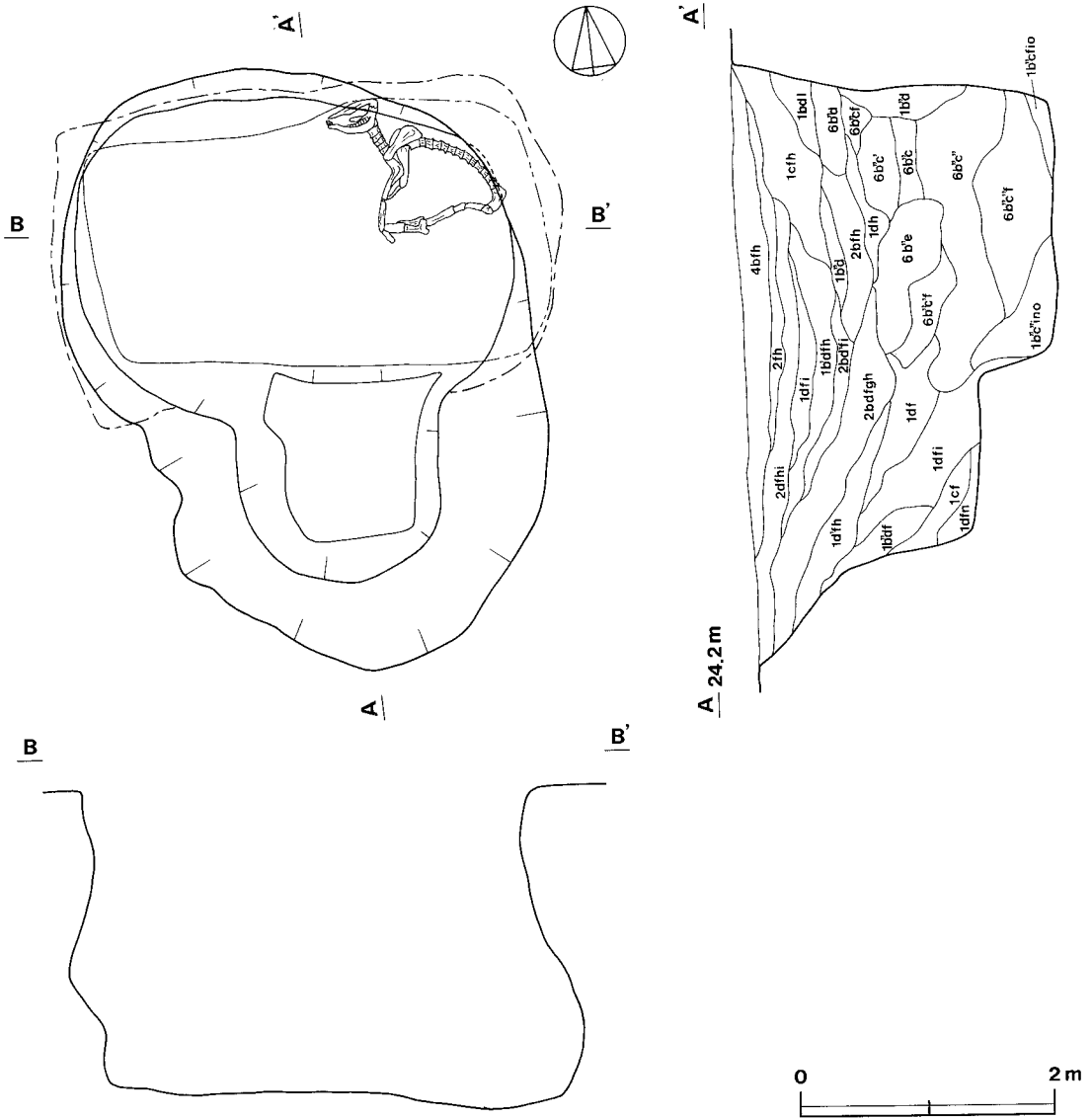
第1号地下式坑（第311図）

本跡は、調査区南部に広がる窪み地帯の傾斜面に位置する O6es 区を中心に確認され、第85号土坑として調査した遺構である。本跡の北東7mには第2号地下式坑が存在している。

竪坑と主室からなり、全長は4.7mで、主軸方向はN-7°-Eを指している。竪坑は、確認面では直径3mの半円形状であるが、下位にいくに従って徐々にすぼまり、底面は長軸1.25m、短軸1.05mの方形を呈している。竪坑の深さは1.7mで、青白色粘土層に達し、底面は主室に向かって緩やかに傾斜している。壁は、底面から1m上位まで75度の角度で、それ以上は緩やかに外傾して立ち上がっている。主室は、竪坑の底面から急傾斜で45cm落ち込み、その底面は起伏している。平面形は、主軸に直交する方向に長軸を持つ長方形で、長軸は3.6m、短軸は1.95mである。東側の底面は他に比べて20cmほど深く掘り込まれ、主室全体の形状がやや崩れていることから、主室の東側は後世に拡張されたことも考えられる。壁は、20~30cm垂直に立ち上がった後、外側に大きく張り出し、全体として袋状を呈している。天井部は全て崩落している。

覆土は、上・中層に黒褐色土と暗褐色土が、下層にはロームが大量に堆積している。堆積状況から考えて、本跡は天井部が陥没した後、自然堆積したものと思われる。

遺物は、覆土の上・中層から土師器片50点、須恵器片8点、内耳土器1点、鉄釘1点と馬骨が出土している。第315図1の内耳土器は、中層から数片の馬骨と共に出土したもので、天井部が陥没してできた窪地に投棄されたものと思われる。第311図に図示された一体分の馬骨は、主室の東側の床面上20~30cmからほぼ完全な状態で検出されており、本跡の使用が中止された後に埋葬されたものと思われる。本跡の使用時期は明らかではないが、少なくとも第315図1の内耳土器の使用時期よりは古いものと思われる。



第311図 4区第1号地下式坑実測図

第2号地下式坑 (第312図)

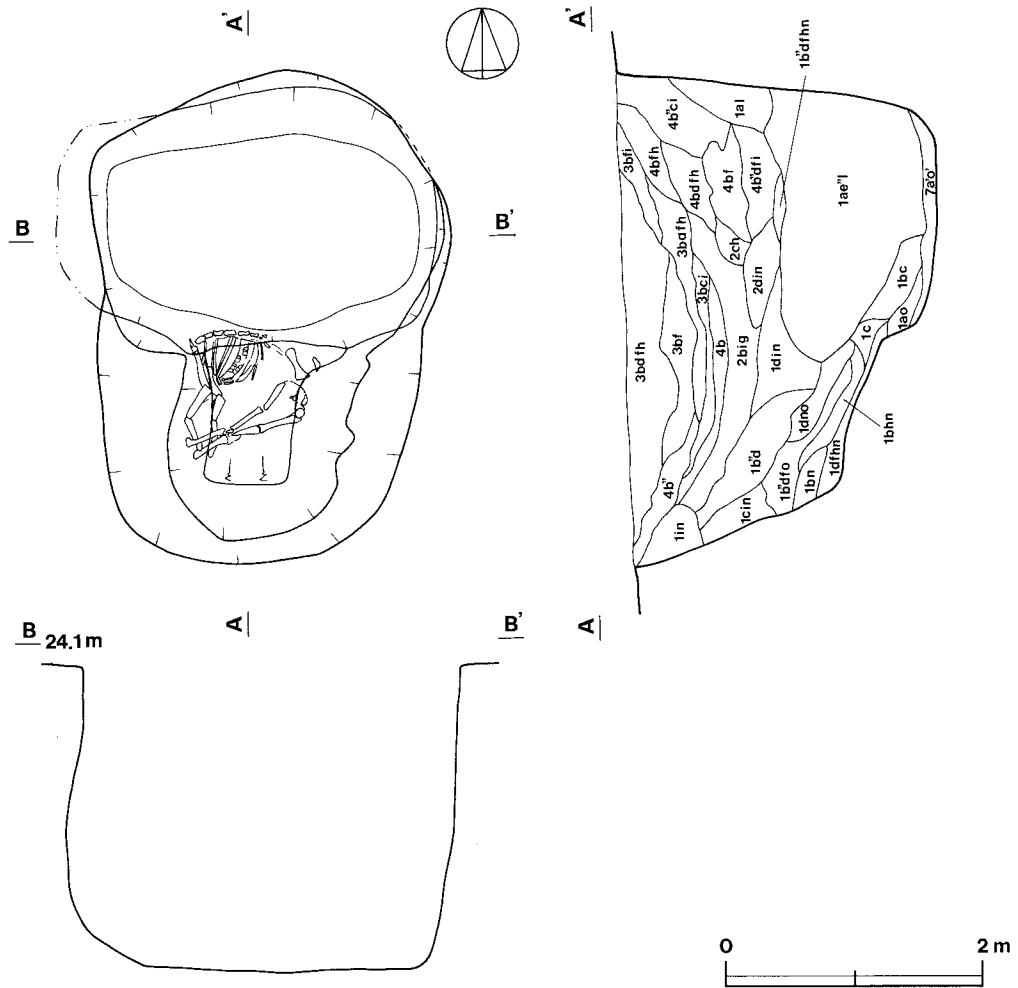
本跡は、調査区南部の窪み地帯の傾斜面に位置する O7d₁ 区を中心に確認され、第93号土坑として調査した遺構である。南東 7 m には第1号地下式坑が、南 5 m には第3号地下式坑が存在している。

竪坑と主室からなり、全長は3.95mで、主軸方向はN-7°-Eを指している。竪坑の確認面は、直径2.5mの半円形であるが、下位にいくに従って徐々にすぼまり、底面は長軸1.1m、短軸65cmの長方形を呈している。竪坑の深さは1.6~2 mで、底面は青白色粘土層に達し、主室に向って

緩やかに傾斜している。竪坑の壁は60度の角度で外傾して立ち上がっている。主室は、竪坑の底面から急角度で40cmほど落ち込み、底面は長径2.45m、短径1.5mの楕円形状を呈している。北壁と西壁は袋状に、東壁は垂直に立ち上がっている。天井部はすべて崩落し、壁と天井の境界は不明瞭である。

覆土の上層には、黒褐色土と極暗褐色土が自然堆積し、中層と下層には天井の崩落によると思われる明褐色のロームが堆積している。なお、竪坑の下層と主室の最下層には、天井が崩落する以前に流れ込んだと思われる褐色土が薄く堆積している。

遺物は、土師器片46点、須恵器片12点、陶器片7点と馬骨1体分が出土している。遺物の多くは、覆土の上層から出土したもので、本跡に伴うものではない。第315図2の高台付の碗と馬骨は、竪坑部から主室部に流れ込むような状態で覆土の下層から出土しており、これらが流れ込んだ時



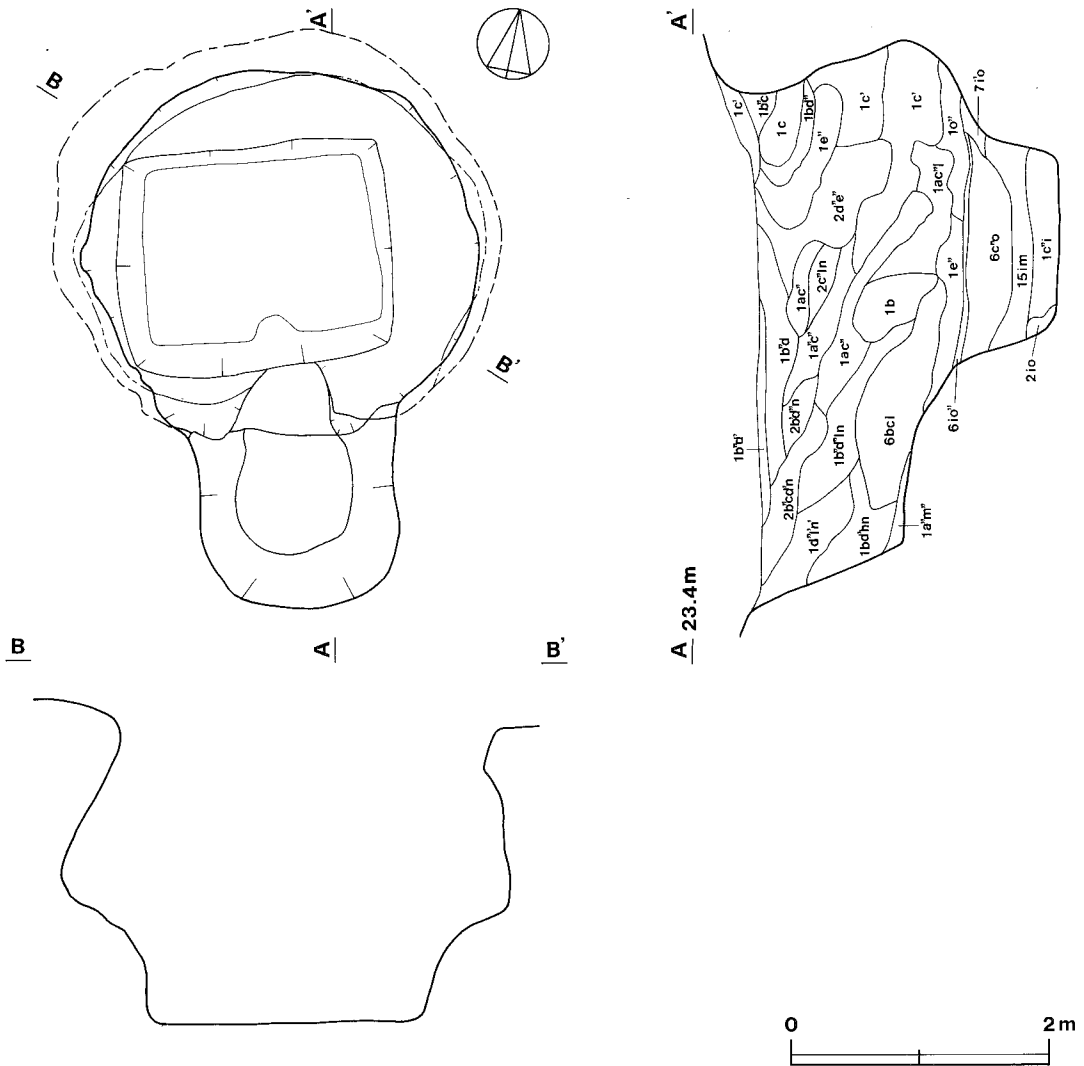
第312図 4区第2号地下式坑実測図

期は本跡が廃絶されて間もなくのことと思われる。本坑の時期は、2の高台付の碗から考えて室町時代初期と考えられる。

第3号地下式坑（第313図）

本跡は、調査区南部の窪み地帯の傾斜面に位置する O7f1 区を中心に確認され、第118号土坑として調査した遺構である。本跡の北 5 m には第2号地下式坑が、西 8 m には第1号地下式坑が存在している。

竪坑と主室からなり、全長は4.5m で、主軸方向はN-17°-Wを指している。竪坑の確認面は、一辺が1.5mの隅丸方形であるが、下位にいくに従って徐々にすぼまり、底面は直径90cmの円形状



第313図 4区第3号地下式坑実測図

を呈している。竪坑の深さは1.4mで、青白色粘土層に達しており、底面は主室部に向って緩やかに傾斜している。竪坑の壁は80度の角度で外反気味に立ち上がっている。主室は、竪坑の底面から緩やかな角度で落ち込み、直径3.15mの円形状を呈している。主室の底面には、長軸2.2m、短軸1.75m、深さ75cmの東・西方向に長軸を持つ長方形の掘り込みが確認され、その底面には少量の炭化物が検出された。掘り込み内の覆土は3層からなり、上層に明褐色のローム、中層に青白色粘土、下層に褐色土が堆積している。各層とも硬く締まっており、人為的に埋められたものと思われる。なお、掘り込みの確認面には、3～4cmの厚さで粘土を貼り、主室の底面としている。壁は袋状で、底面から40cm上位では20～50cmも外側に張り出している。天井はすべて崩落し、壁と天井の境界は不明瞭である。

覆土は、大・小のロームブロックを多量に含む褐色土や暗褐色土が大量に堆積しており、竪坑から土砂が流れ込む以前に天井部が崩落したものと思われる。

遺物は、土師器片6点、陶器片2点が出土している。いずれも覆土中から出土した小片で、本跡が埋没する過程で入ったものと思われる。従って、本跡の時期は不明である。

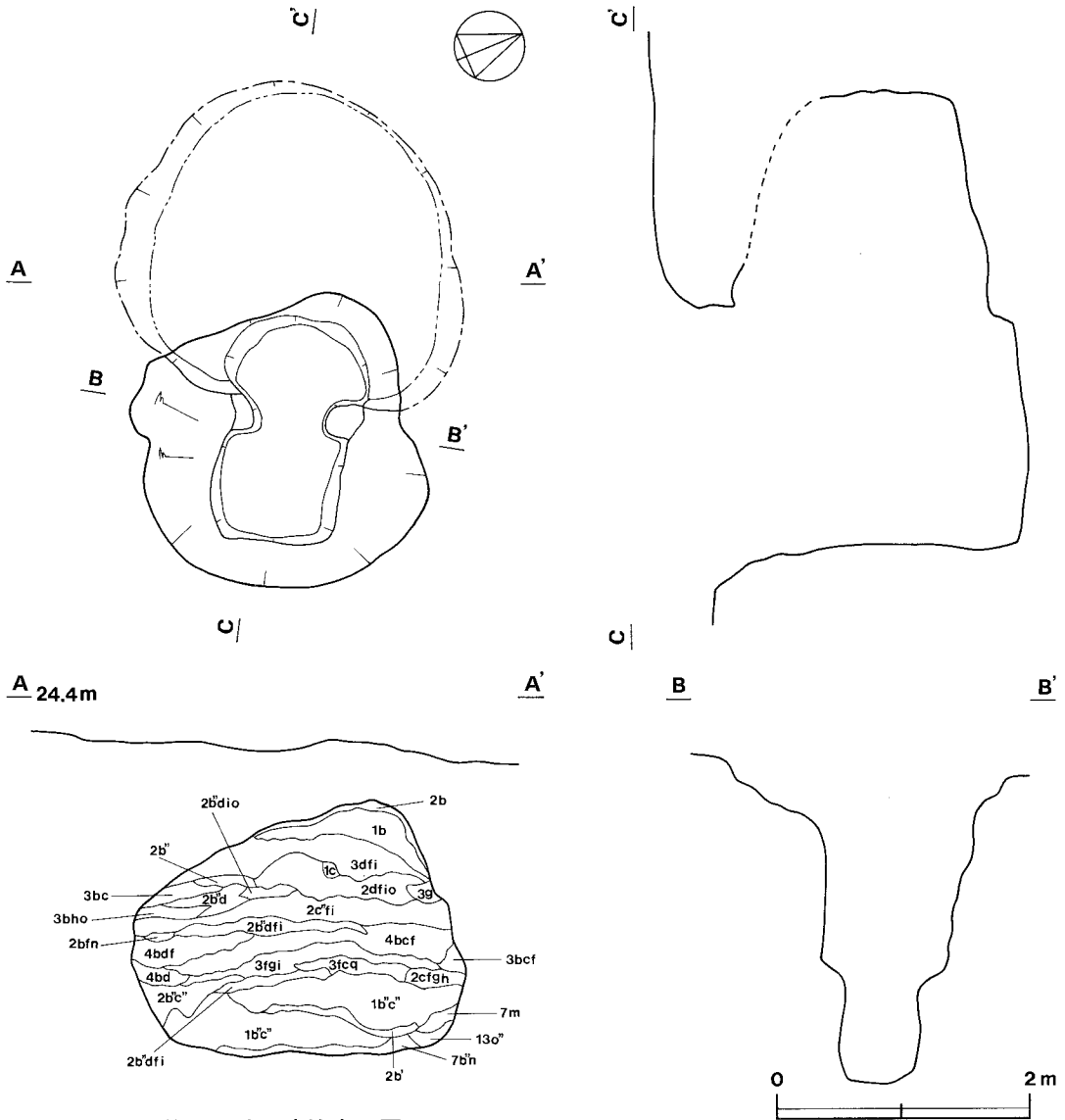
第4号地下式坑（第314図）

本跡は、調査区南部の窪み地帯の傾斜面に位置するO6is区を中心に確認され、第120号土坑として調査した遺構である。本跡の北東18mには第1号地下式坑が存在している。

竪坑、羨道、主室の3部からなり、全長は4.12mで、主軸方向はN-77°-Wを指している。竪坑の確認面は、直径2.2mの不整円形であるが、40cm下位では一辺1mの方形状を呈している。竪坑の深さは2.5mで、青白色粘土層を1.2mも掘り込んでいる。羨道は長さ25cmの形式的なもので、南・北の壁が20cmずつ掘り残され、幅は竪坑部底面より40cmも狭くなっている。主室は、直径2.5mの円形状を呈し、羨道部側は半径55cmの扇形に低まり前庭部が形成されている。竪坑の底面と羨道の底面及び前庭部は、同レベルで継続しており、平坦である。主室の底面は、前底部から20cmほど段状に上がり、壁際に向って除々に高まっていく。壁は袋状で、底面から1.1m上位で天井に移行している。天井は丸味を帯び、主室底面からの高さは1.8mである。

覆土は、締まりの弱い暗褐色土、極暗褐色土、黒褐色土が、竪坑から流れ込んだような状態で堆積している。

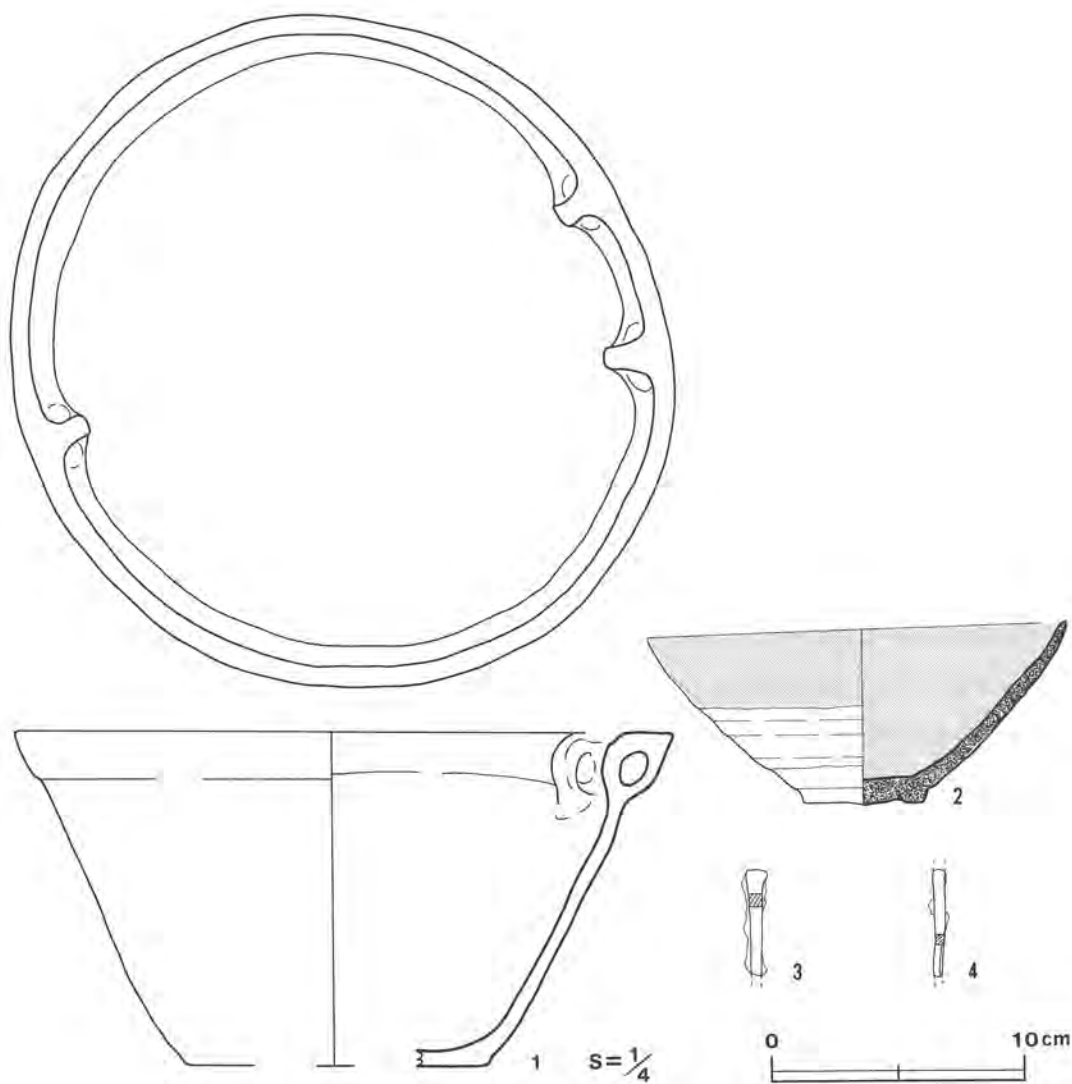
遺物は、覆土中から土師器片48点、須恵器片11点と内耳土器片1点が出土しているが、いずれも、埋没の過程で入ったものと思われる。従って、本坑の時期は不明である。



第314図 4区第4号地下式坑実測図

4区地下式坑出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第315図 1	内耳土器 土師質土器	A 34.6 B 17.5 C [15.8]	平底。体部は外傾して立ち上がる。口縁部は膨らむ。内面に3個の耳を有し、段を持って口縁部と体部を区画する。	内・外面ナデ整形。	砂粒・雲母 明赤褐色 良好	90% P231 PL93 体部外面に炭化物附着。SY 1
2	碗 陶器 (古瀬戸)	A 16.7 B 7.1 D 0.6 E 4.8	底部はわずかに突出し、高台は低い。体部は内彎気味に開き、口縁部に至る。	水挽き成形。体部下端は回転篋削り。高台は削り出し。底部は回転篋削り。	— 灰白色 良好	70% P268 外面上位と内面に灰釉かかる。 SY 2



第315図 4区地下式坑出土遺物実測図

第5節 井戸状遺構

(1) 3区

第1号井戸状遺構 (第316図)

本跡は、調査区北西部のK2i5区を中心に確認され、第47号土坑として調査した遺構である。本跡の上層は第1号溝に掘り込まれ、南8mには古墳時代前期の第21号住居跡が存在している。

平面形は、直径1.5mの円形状で、70cm下位までは漏斗状に、それ以下は直径95cmの円筒形に掘られている。確認面から3.3m下位まで調査を進めたが、崩落の恐れがあったため、それ以下の掘り込みを中止した。

覆土は、確認面から2m下まではローム粒子を多量に含む締まりの弱い褐色土や暗褐色土が、2～3m下にはローム小ブロックや粘土小ブロックを含む粘性の強い極暗褐色土が、3m以下にはロームブロックを多量に含む締まりの弱い褐色土が、それぞれ人為堆積の状態で見られる。

遺物は、覆土中から土師器片1点、陶器片1点が出土しているが、いずれも埋め戻しの際に混入したものと考えられる。本跡は近世以降の井戸と思われる。

第2号井戸状遺構（第316図）

本跡は、調査区の北西部K2i6区を中心に確認され、第89号土坑として調査した遺構である。本跡の西4mには、第1号井戸状遺構が存在している。

平面形は、直径2.3mの円形状を呈し、1m下位までは漏斗状に、それ以下は直径1mの円筒形に掘られている。確認面から3m下位まで調査を進めたが、壁面が著しく崩落し、危険であったため、それ以下の掘り込みを中止した。

覆土は、上層から下層まではローム小ブロックを含む締まりの弱い褐色土・暗褐色土・黒褐色土が人為堆積の状態で見られる。

遺物は、覆土中から土師器片11点、須恵器片6点・近世の陶磁器片4点・第317図1の獣形土製品1点、2の煙管が出土している。いずれも埋め戻しの際に混入したものと考えられるが、陶磁器片などから本跡は近世以降の井戸と思われる。

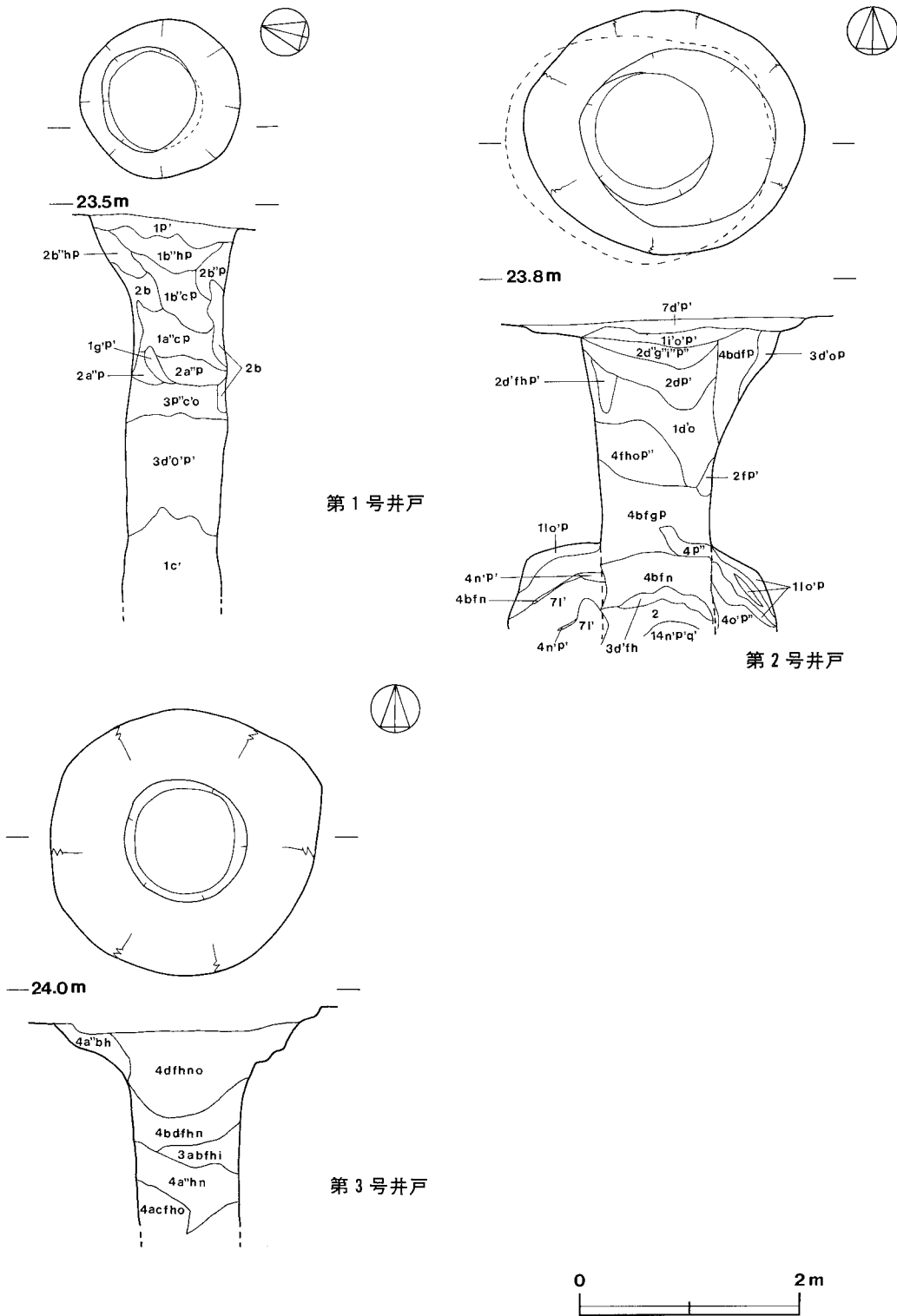
第3号井戸状遺構（第316図）

本跡は、調査区の北西部L2a5区を中心に確認され、第242号土坑として調査した遺構である。古墳時代前期の第21号住居跡の北西壁と、第243号土坑の東端を掘り込んでいる。本跡の北9mには第1号井戸状遺構が存在している。

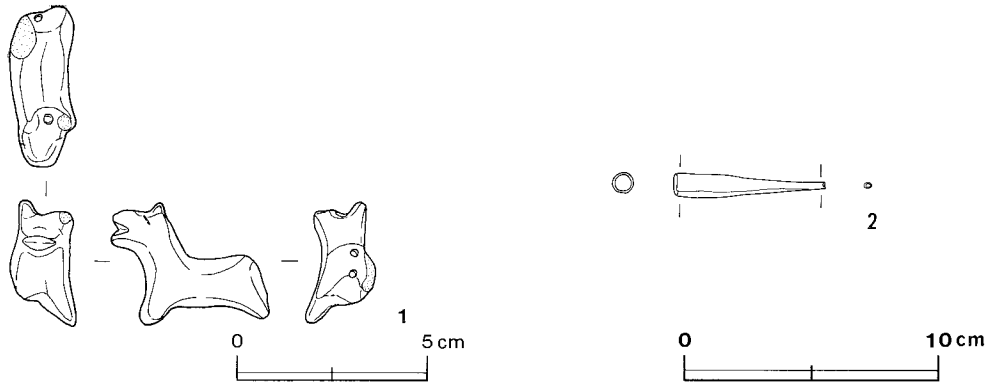
平面形は、直径2.5mの円形状を呈し、60cm下位までは漏斗状に、それ以下は直径95cmの円筒形に掘られている。確認面から2mの所まで調査を進めたが、それ以下は壁面が崩落する恐れがあったため掘り込みを中止した。

覆土は、ローム粒子やロームブロックを多量に含む締まりの弱い黒褐色土が人為堆積の状態で見られる。

遺物は、覆土中から土師器片3点、須恵器片2点、陶器片1点と内耳土器片1点が出土している。いずれも埋め戻しの際に入ったものと考えられる。本跡は近世以降の井戸と思われる。



第316图 3区第1・2・3号井戸状遺構実測図



第317図 3区井戸状遺構出土遺物実測図

(2) 4区

第1号井戸状遺構 (第318図)

本跡は、調査区南端の窪み地帯に位置するO6i9区を中心に確認され、第89号土坑として調査した遺構である。本跡の南西4mには第2号井戸状遺構が存在し、周囲には墓壇群が形成されている。

平面形は、直径4mの円形状を呈し、2m下位までは漏斗状に、それ以下は直径2.6mの円筒形に掘られている。確認面から2.4mの深さまで調査したが、壁面が崩落する恐れがあったためそれ以下の掘り込みを中止した。

覆土は、ロームブロックや粘土ブロックを含む締まりの弱い褐色土と黒褐色土が自然堆積の状態に堆積している。

遺物は、覆土中から土師器片167点、須恵器片38点、陶器片5点と内耳土器片20点が出土している。陶器片の中には、中世の片口付鉢（常滑）もあることから、本跡は中世以降の井戸と推定される。

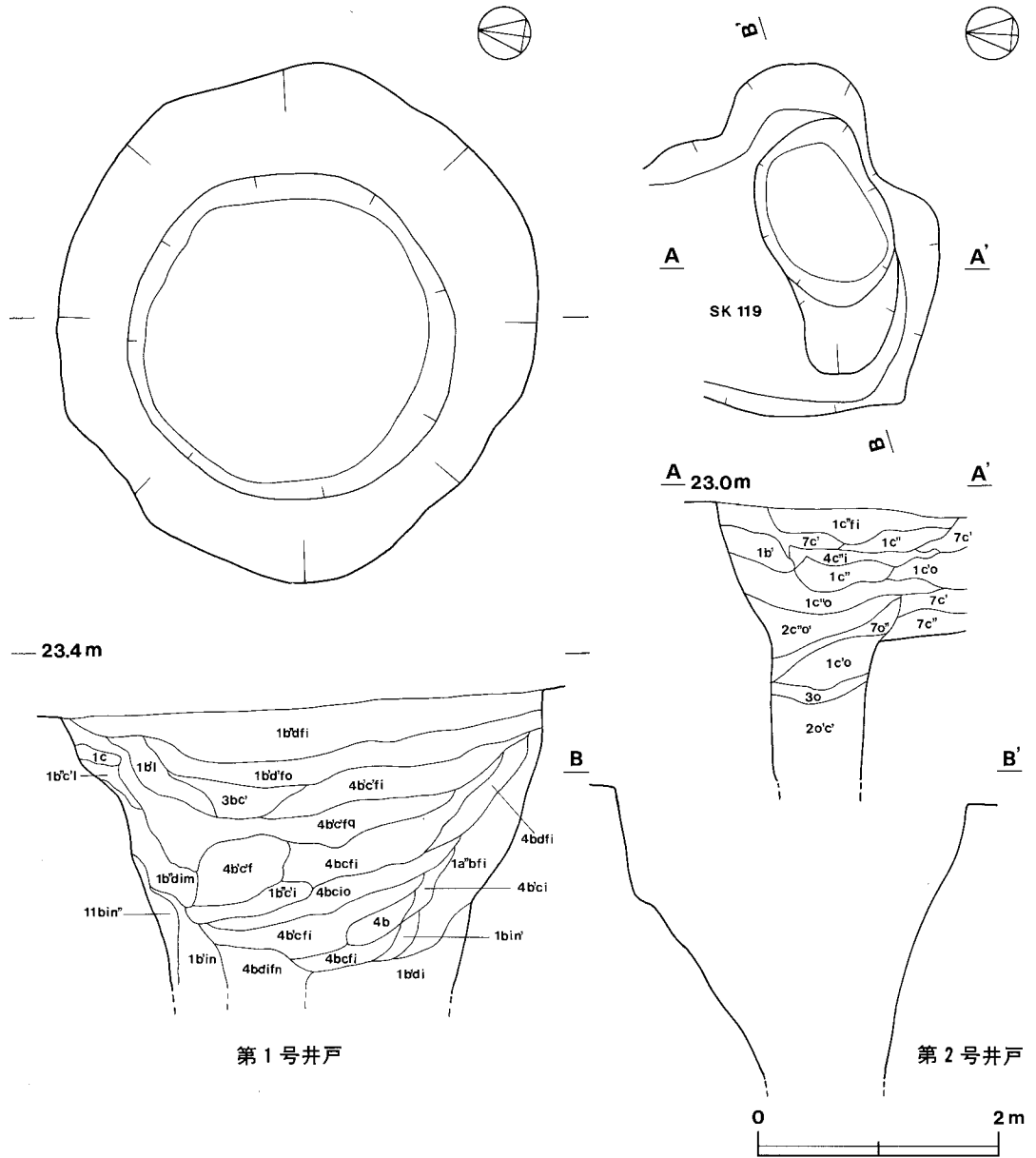
第2号井戸状遺構 (第318図)

本跡は、調査区南端の窪み地帯に位置するP6as区を中心に確認され、第126号土坑として調査した遺構である。第119号土坑の南側を掘り込み、本跡の北東4mには第1号井戸状遺構が存在している。

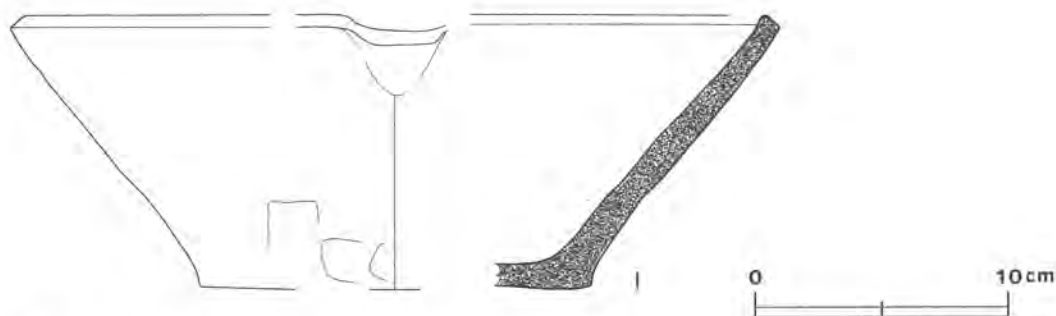
平面形は、長径2.1m、短径1mの長楕円形状を呈している。確認面から2.4mの深さまで調査を進めた。ボーリングステッキによる探査ではさらに1m以上の深さがあると思われたが、湧水が著しいため掘り込みを中止した。

覆土は、確認面から1 m 下位まではロームブロックを多量に含む褐色土と暗褐色土が、それ以下には粘土ブロックを含む湿った暗褐色土が堆積している。堆積状況は明らかでない。

遺物は出土していないため、本跡の時期は不明であるが、中世の第119号土坑を掘り込んでいることから、中世以降の井戸と推定される。



第318図 4区第1・2号井戸状遺構実測図



第319図 4区井戸状遺構出土遺物実測図

4区井戸状遺構出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第319図 1.	鉢(片口付) 陶器 (常滑)	A [30.6] B 10.9 C (15.6)	底部はわずかに突出。体部は外傾して開き、口縁部に至る。口唇部は平坦で、片口が付く。	内面と体部外面上位に横ナデ整形。体部外面下位は縦位の笠ナデ整形。	— にぶい褐色 普通	20% P238 SE 1

第6節 溝

(1) 3区

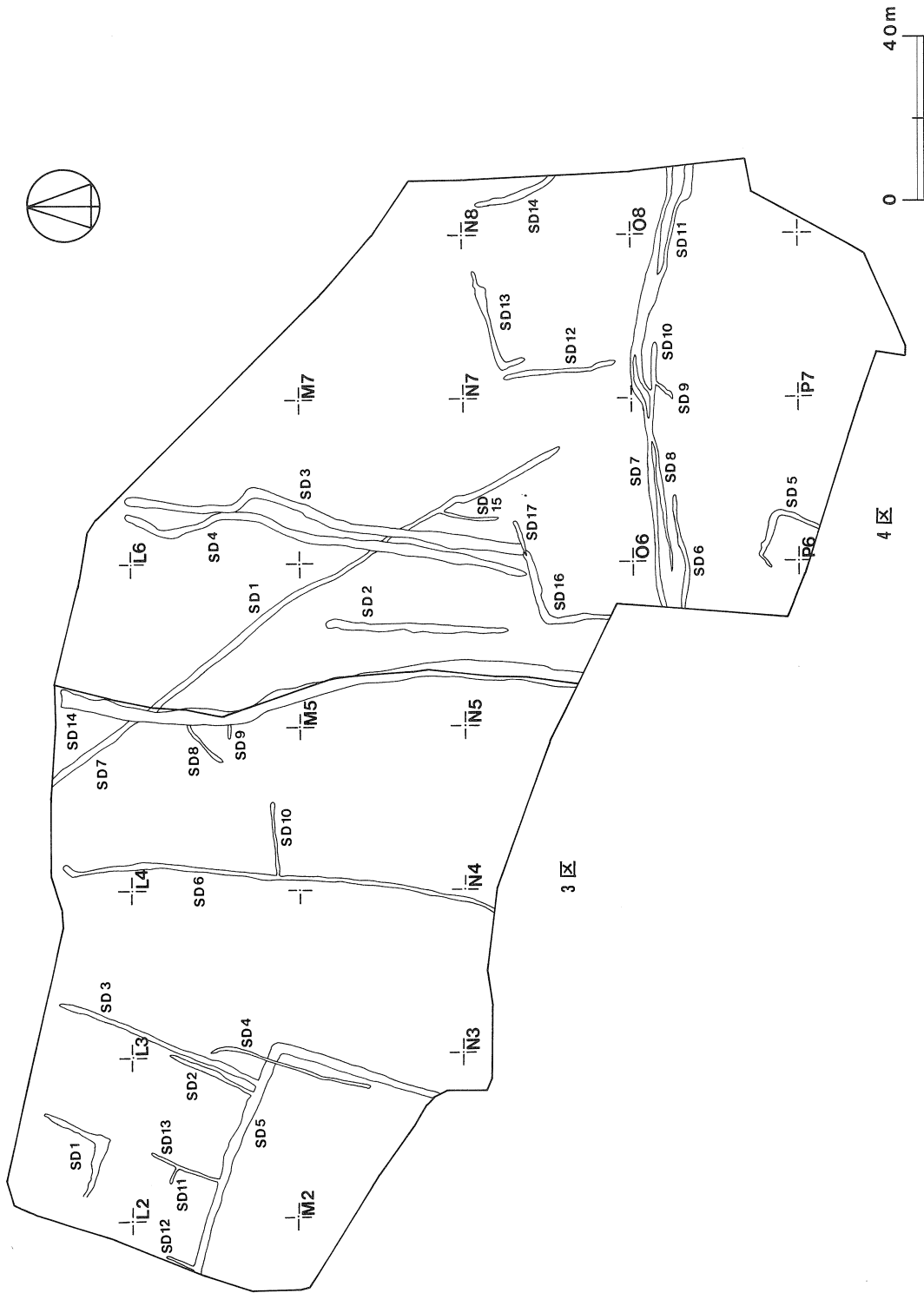
第1号溝 (第321図)

本跡は、調査区北西部の K2区に確認され、第61号土坑ほか13基の土坑の上層部と第1号井戸状遺構の上層部を掘り込んでいる。本跡の南東25mには、第2号溝が南—北に延びている。

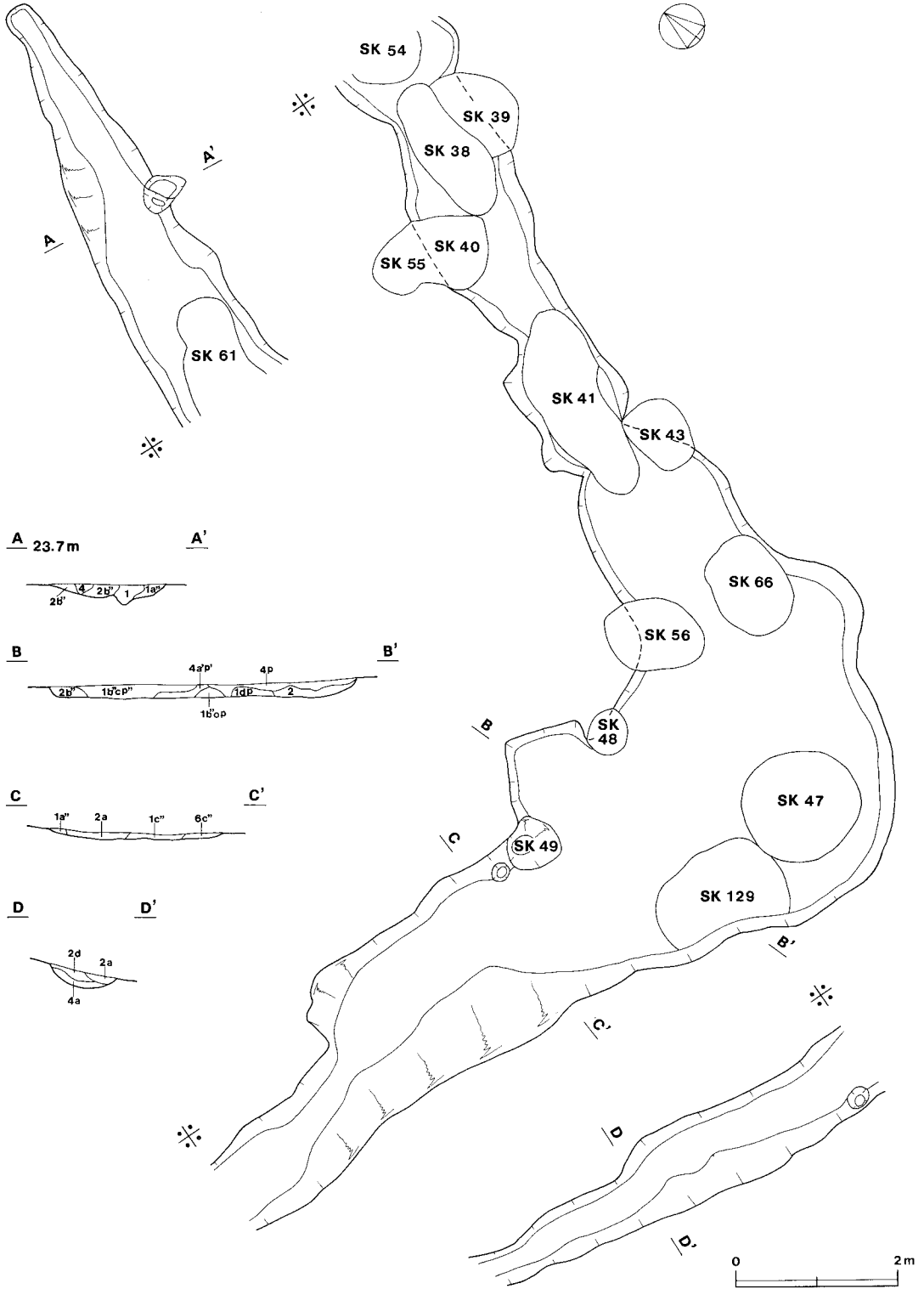
溝の総延長は29mで、北端の K2e7区から西端の K2h2区までかぎの手に延び、調査区北西端の窪み地帯に落ち込んでいる。主軸方向は K2e7区から K2i5区までが N-30°-E で、K2i5区で方向を変え、K2i5区から K2h2区までが N-72°-W である。溝の上幅は0.5~2.5mで、屈曲部の K2i5区付近が最も広く、北端と西端に向って徐々に狭まっていく。深さは16~24cmである。底面のレベルは、北部の K2f7区が23.1m、屈曲部の K2i5区が23.2m、西部の K2h3区が23.2mで、全体的に高低差は少ない。溝の断面形は皿状を呈している。

覆土は、暗褐色土又は黒褐色土で、自然堆積層と思われる。

遺物は、覆土中から土師器片 8点、須恵器片 2点、内耳土器片 1点と第330図1の灯明皿が出土している。



第320図 南三島遺跡3・4区溝配置図



第321图 3区第1号沟渠测图

第2号溝 (第322図)

本跡は、調査区中央部の L2・L3区にかけて確認され、縄文時代の第17号住居跡と時期不明の第146号土坑を掘り込んでいる。東1 mには、第3号溝が本跡と平行して延びている。

溝の総延長は22.2mで、北東端の L3c1区から南西端の L2h8区まで主軸方向N-25°-Eで直線的に掘られ、第5号溝に接続している。溝の上幅は1 mで、深さは12~22cmである。底面のレベルは、北東端が23.5m、中央部 L2f9区が23.8m、南西端が23.9mで、北に向って緩やかに下がっている。溝の断面形は皿状を呈している。

覆土は、上層の暗褐色土と下層の褐色土の2層から成っており、自然堆積層と思われる。

遺物は、覆土中から土師器片11点、須恵器片4点が出土している。

第3号溝 (第322図)

本跡は、調査区北部から中央部にかけての K3・L2・L3の3区にまたがって確認され、縄文時代の第79号住居跡、古墳時代前期の第7・13号住居跡と11基の土坑を掘り込んでいる。本跡の西1 mには、第2号溝が平行して延びている。

溝の総延長は51.6mで、北東端の K3f4区から南西端の L2h9区まで主軸方向N-25°-Eで直線的に掘られ、L2h9区で第5号溝に接続している。溝の上幅は1.2~1.7mで、深さは25~35cmである。底面のレベルは、北部の K3g4区が23.1m、中央部の L3d1区が23.7m、南部の L2b9区が23.8mで、北に向って緩やかに下がっている。溝の断面形は皿状を呈している。

覆土は、暗褐色土又は黒褐色土で、自然堆積層と思われる。

遺物は、覆土中から土師器片50点、須恵器片6点、内耳土器片3点と中世の瀬戸や常滑産の陶器片5点が出土している。

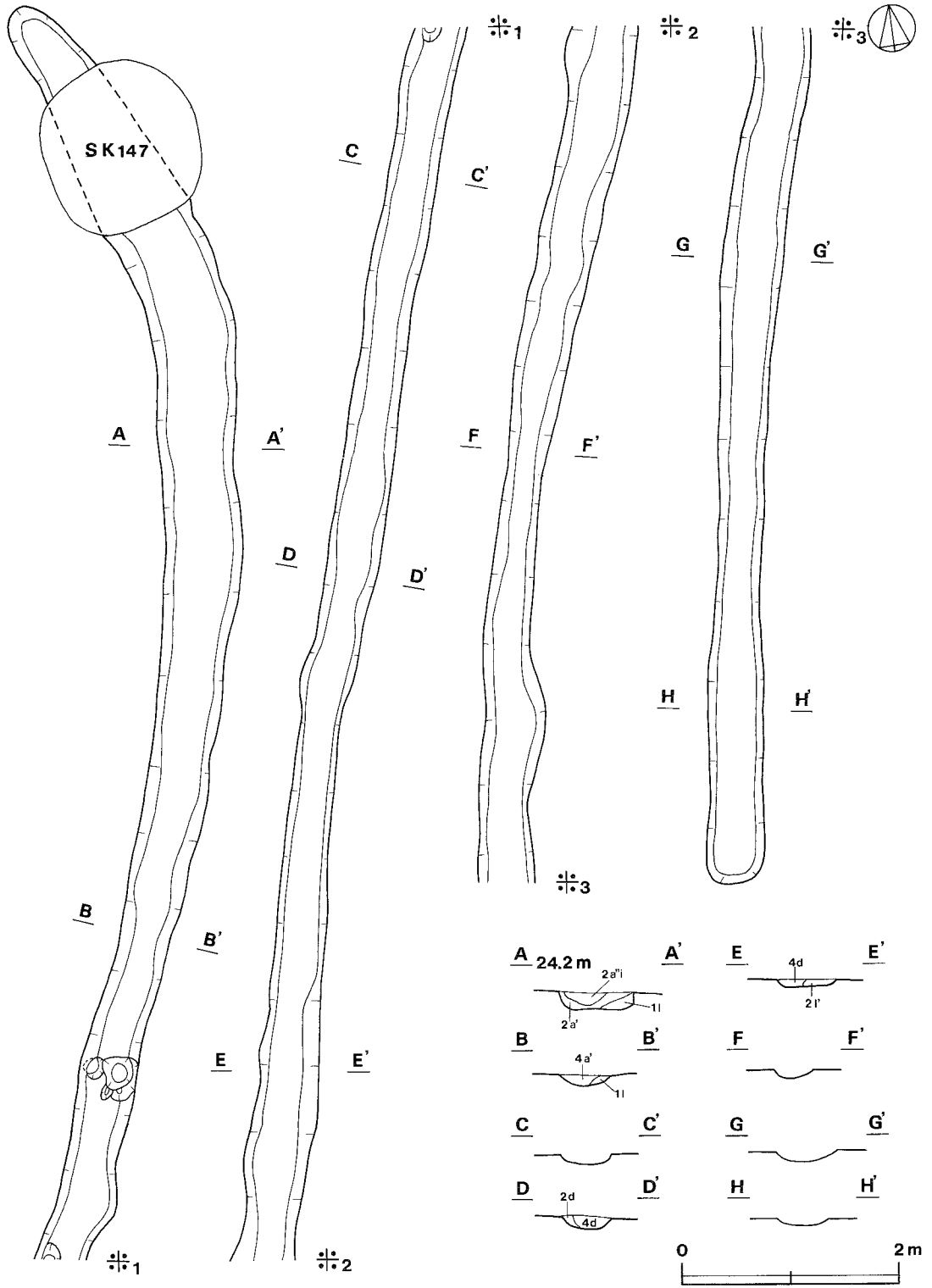
第4号溝 (第323図)

本跡は、調査区の中央部から南西部にかけての L2・L3・M2の3区にまたがって確認され、第5号溝の上層部や時期不明の第147号土坑を掘り込んでいる。本跡の西7 mには、第3号溝がほぼ平行して延びている。

溝の総延長は40.6mである。北端の L3e1区から L3f1区までの3.1mがN-23°-Wで掘られていて他は、N-15°-Eでほぼ直線的に延びて、南端の M2e9区に達している。溝の上幅は50~70cmで、深さは10~20cmである。底面のレベルは北部の L3f1区が23.8m、中央部の L2i0区が23.9m、南部の M2d9区が24.0mで、北に向って徐々に下がっている。溝の断面形は皿状を呈している。

覆土は、暗褐色土と黒褐色土で、自然堆積層と思われる。

遺物は、覆土中から土師器片7点が出土している。



第323图 3区第4号沟渠测图

第5号溝 (第324図)

本跡は、調査区の西部から南西部にかけての L1・L2・L3・M2・M3の5区にまたがって確認され、縄文時代の第83・87・117号住居跡、古墳時代の第14・15・104・107号住居跡ほか土坑5基を掘り込んでいる。北から第2・3・12・13号の4条の浅い溝が本跡の上位に接続し、第4号溝が本跡の覆土上層を北東から南西方向に掘り込んでいる。

溝の総延長は92.2mで、西端の L1d8区から南端の M2h8区までかぎの手に掘られており、両端とも調査区外へ延びている。主軸方向は、L1d8区から L3i1区までがN-70°-Wで、L3i1区から M2h8区までがN-18°-Eである。L2f4区以西は、上幅が1.5m、深さが40cmで断面形は椀状であるのに対し、L2f4区以东は、上幅が2.5m、深さが80~100cmで断面形は箱形である。このように本跡の形状や規模は、L2f4区を境に大きく変化しているが、これはL2f4区以东が、後日何らかの理由で拡張されたためと考えられる。底面のレベルは、L2f4区以西が23.3m、L2f4区以东が23.1mで、全体的に高低差は少ない。

覆土は、黒褐色土や暗褐色土で、自然堆積層と思われる。

遺物は、覆土中から土師器片770点、須恵器片160点、中世の瀬戸や常滑産の陶器片13点が出土している。

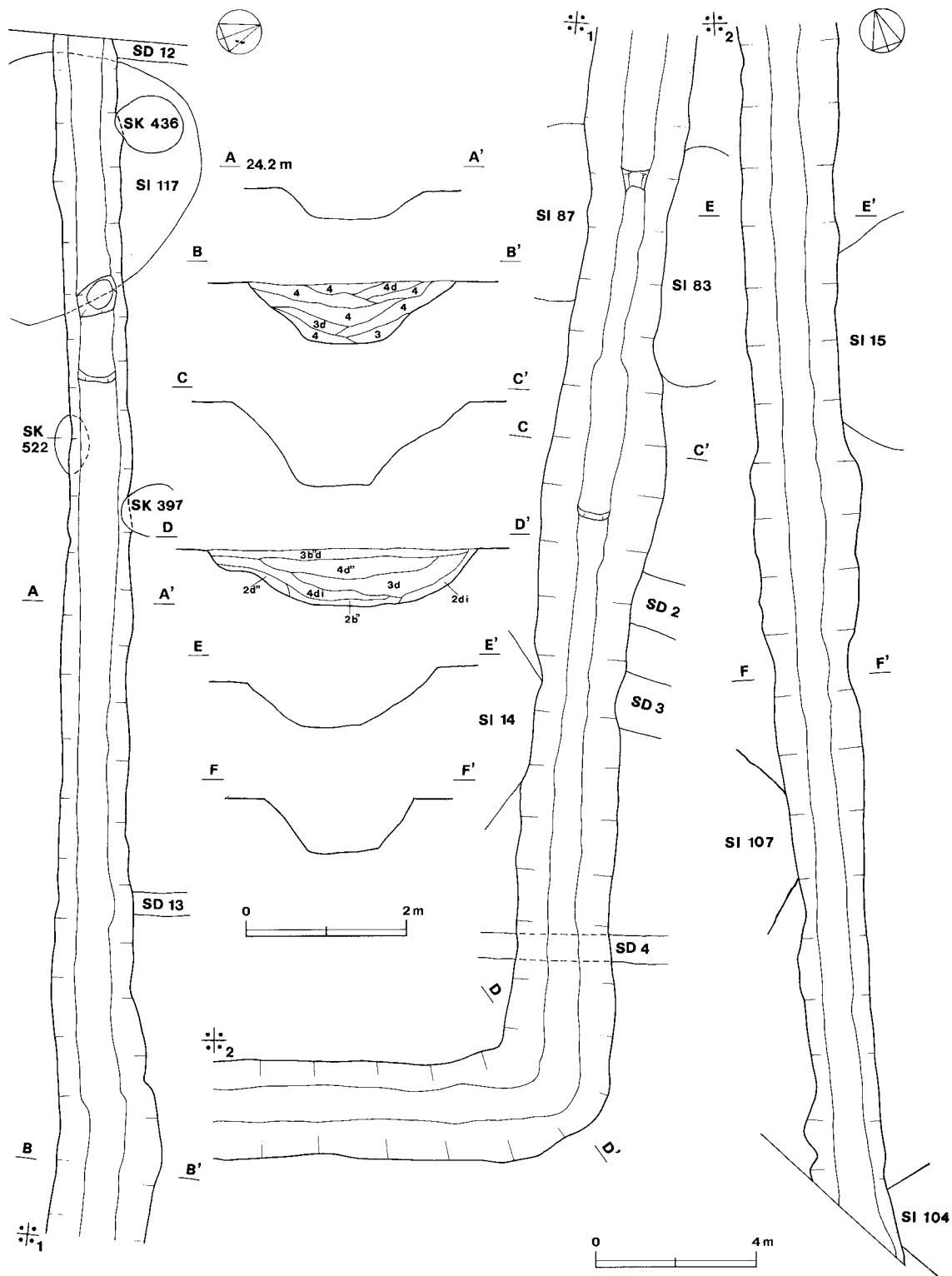
第6号溝 (第325図)

本跡は、調査区の北東部から南部にかけての K4・L4・M3・M4・N3の5区にまたがって確認され、縄文時代の第80号住居跡、古墳時代の第30・36・40・75号住居跡と時期不明の第260号土坑を掘り込んでいる。L4i1区では第10号溝が接続し、本跡の東40mには第4号溝が、ほぼ平行して延びている。

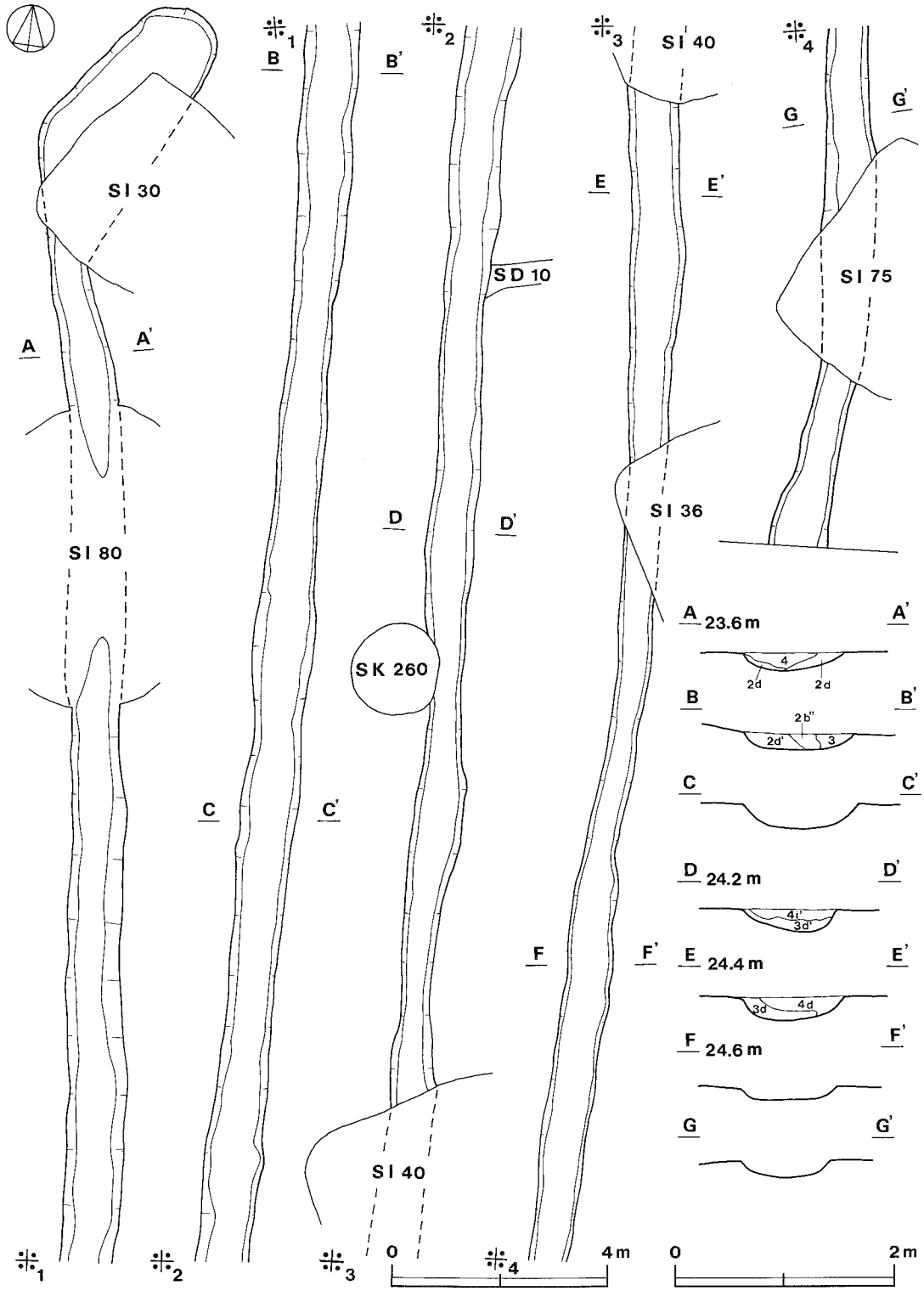
溝の総延長は104mで、北端の K4f2区から南端の N3a0区まで、主軸方向N-5°-Eで掘られ、南端は調査区外へと続いている。溝の上幅は1mで、深さは20cmである。底面のレベルは、北部の K4g2区が23.1m、中央部の L4g1区が23.7m、南部の N3a0区が24.3mで、北に向って下がっている。溝の断面形は皿状を呈している。

覆土は、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積している。自然堆積層と思われる。

遺物は、覆土中から土師器片49点が出土している。



第324图 3区第5号沟渠测图



第325图 3区第6号沟实测图

第7号溝 (第326図)

本跡は、調査区の北東部 K4・K5区に確認され、南東部は第14号溝に掘り込まれている。本跡の西28m には、第6号溝が南―北に延びている。

本調査区内における溝の長さは30m で、北西端の K4f7区から南東端の L5a2区まで主軸方向N―38°―Wで直線的に掘られている。さらに、北西端は2区の第5号溝に、南東端は4区の第1号溝に接続しており、総延長は約157m となる。溝の上幅は1.7m、深さは30～40cmである。底面のレベルは23.1m で、本調査区内において高低差は少ない。溝の断面形は皿状を呈している。

覆土は、上・中層が黒褐色土、下層が暗褐色土で、自然堆積層と思われる。

遺物は、土師器片2点、須恵器片1点が出土しているが、いずれも埋没の過程で流れ込んだもので時期判定の手がかりとはならない。本跡は、4区第1号溝に継続することから8世紀代の溝と思われる。

第8号溝 (第326図)

本跡は、調査区の東部 L4・L5区に確認され、その北東端は第14号溝に接続している。本跡の北16m には第7号溝が存在している。

溝の総延長は13m で、北東端の L5d1区から南西端の L4f8区まで主軸方向N―47°―Eでほぼ直線的に掘られている。溝の上幅は40～50cmで、深さは6～12cmと浅い。底面のレベルは、北東部の L4d0区が23.2m、南西部の L4f8区が23.4m で、北東に向かってわずかに傾斜している。溝の断面形は皿状を呈している。

覆土は、黒褐色土の一層で、自然堆積層と思われる。

遺物は出土していない。

第9号溝 (第327図)

本跡は、調査区東部の L4・L5区に確認され、東端は南―北に延びる第14号溝に接している。

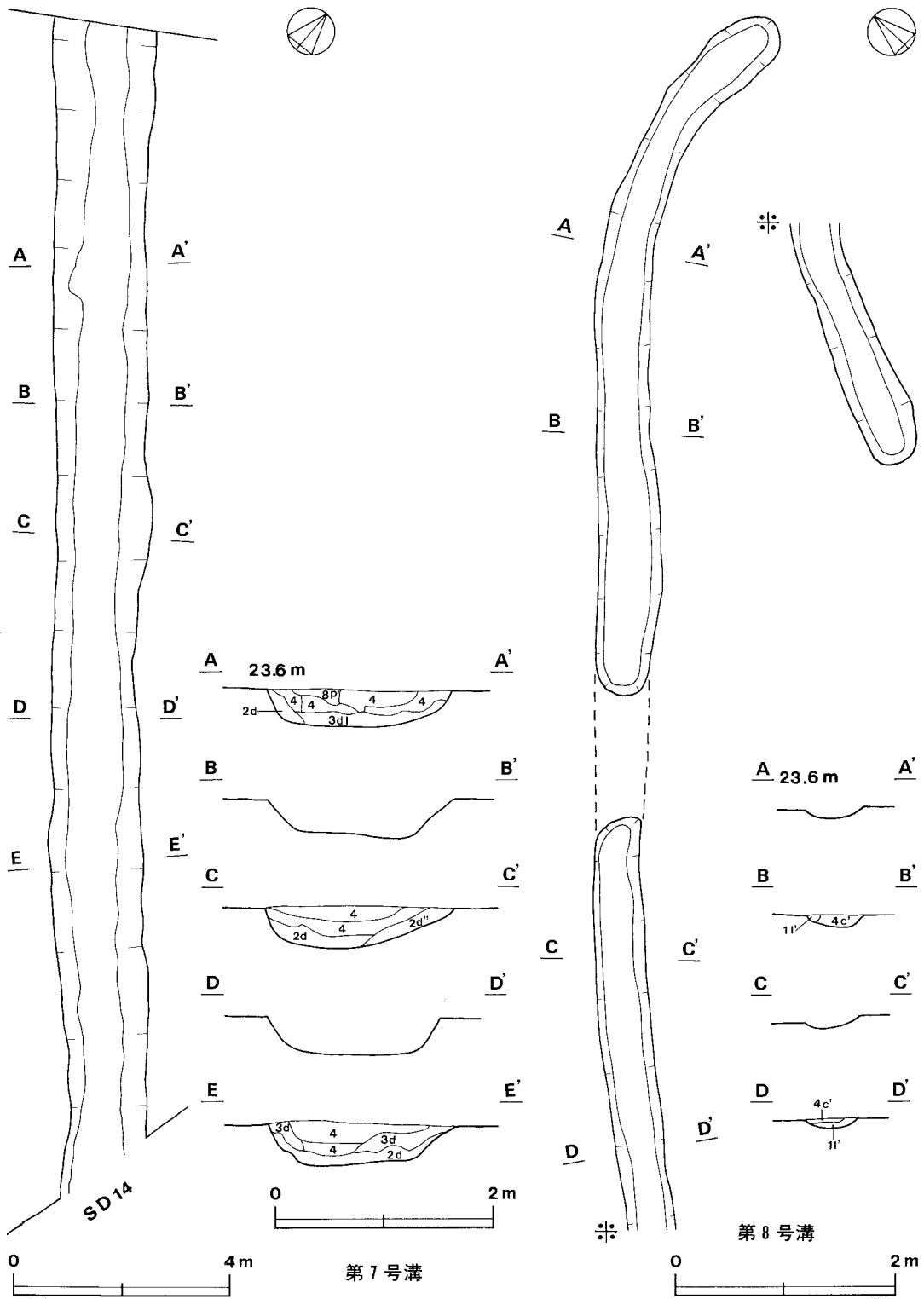
溝の総延長は4 m と短く、東端の L5f1区から西端の L4f0区まで主軸方向N―90°で掘られている。溝幅は70cmで、深さは20cmである。底面のレベルは、東端が23.1m、西端が23.4m で、東に向かって緩やかに下がっている。溝の断面形は皿状を呈する。

覆土は暗褐色土で、自然堆積層と思われる。

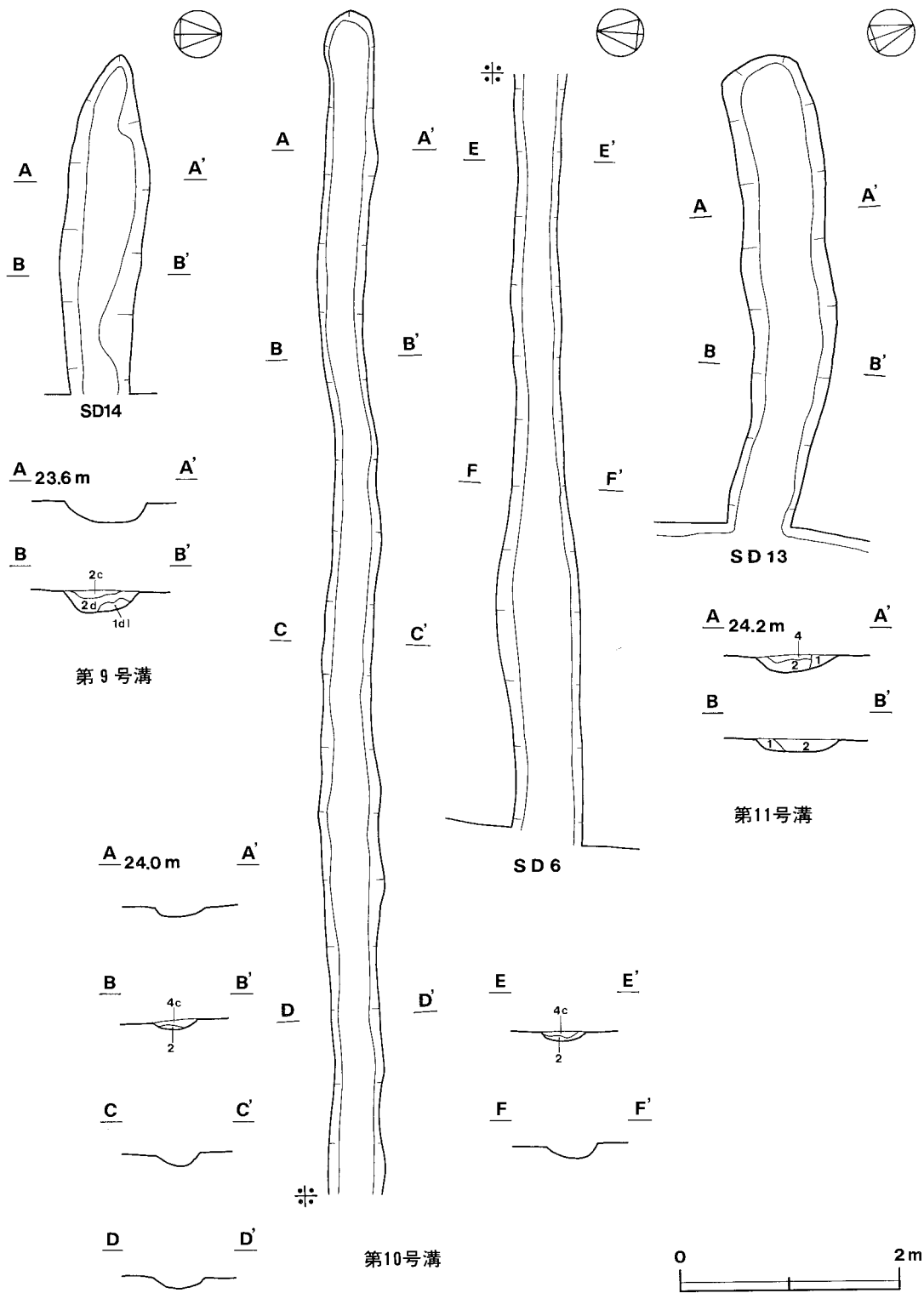
遺物は出土していない。

第10号溝 (第327図)

本跡は、調査区東部の L4区に確認され、その西端は第6号溝に接続している。



第326图 3区第7·8号沟实测图



第327图 3区第9·10·11号沟实测图

溝の総延長は18mで、東端のL4i6区から西端のL4i1区まで主軸方向N-90°で直線的に掘られている。溝幅は50~80cmで、深さは10cmである。底面のレベルは、東部・西部とも23.6mで、高低差はほとんど無い。溝の断面形は皿状を呈する。

覆土は黒褐色土で、自然堆積層と思われる。

遺物は、覆土中から土師器片3点が出土している。

第11号溝 (第327図)

本跡は、調査区北西部のL2区に確認され、時期不明の第471号土坑を掘り込んでいる。本跡の東端は、南-北に延びる第13号溝に接続している。

溝の総延長は4.5mと短く、東端のL2c4区から西端のL2c3区まで主軸方向N-67°-Wで掘られている。溝幅は70cmで、深さは10~14cmである。底面のレベルは、東部と西部が23.9m、中央部はわずかに低まり23.8mである。溝の断面形は皿状を呈している。

覆土は暗褐色土で、自然堆積層と思われる。

遺物は出土していない。

第12号溝 (第328図)

本跡は、調査区西端のL1区に確認され、縄文時代の第86号住居跡と第450~452・461号土坑を掘り込んでいる。本跡の南端は、第5号溝に接続している。

溝の総延長は7.1mで、北端のL1c8区から南端のL1d8区まで主軸方向N-20°-Eで直線的に掘られている。溝幅は50cmで、深さは14~20cmである。底面のレベルは、北部が23.8m、中央部が24m、南部が23.9mで、両端がわずかに低くなっている。溝の断面形は皿状である。

覆土は暗褐色土で、自然堆積層と思われる。

遺物は、覆土中から土師器片3点が出土している。

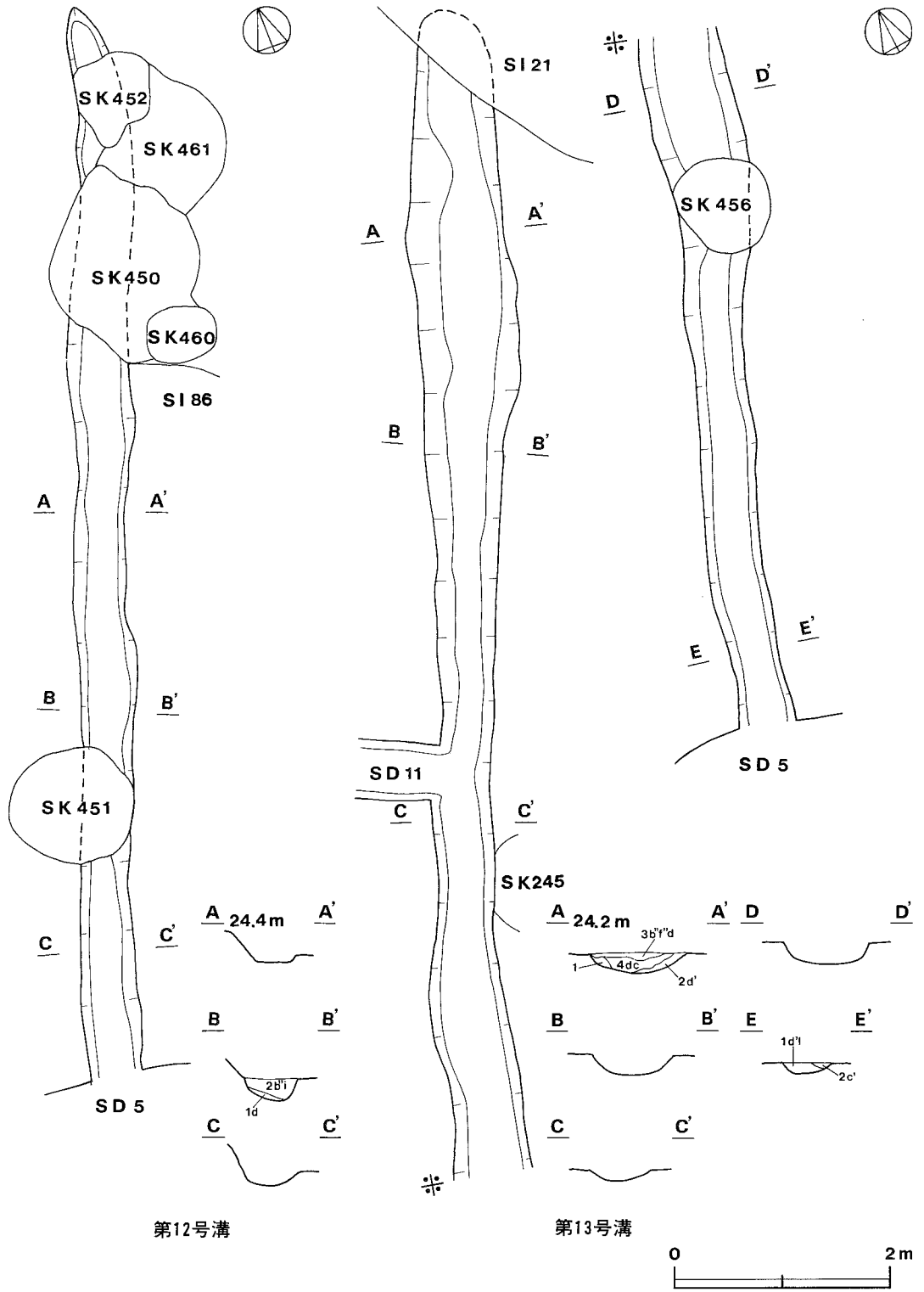
第13号溝 (第328図)

本跡は、調査区西部のL2区に確認され、縄文時代の第245・456号土坑を掘り込んでいる。本跡の南端は第5号溝に接続し、L2c4区では第11号溝が接続している。

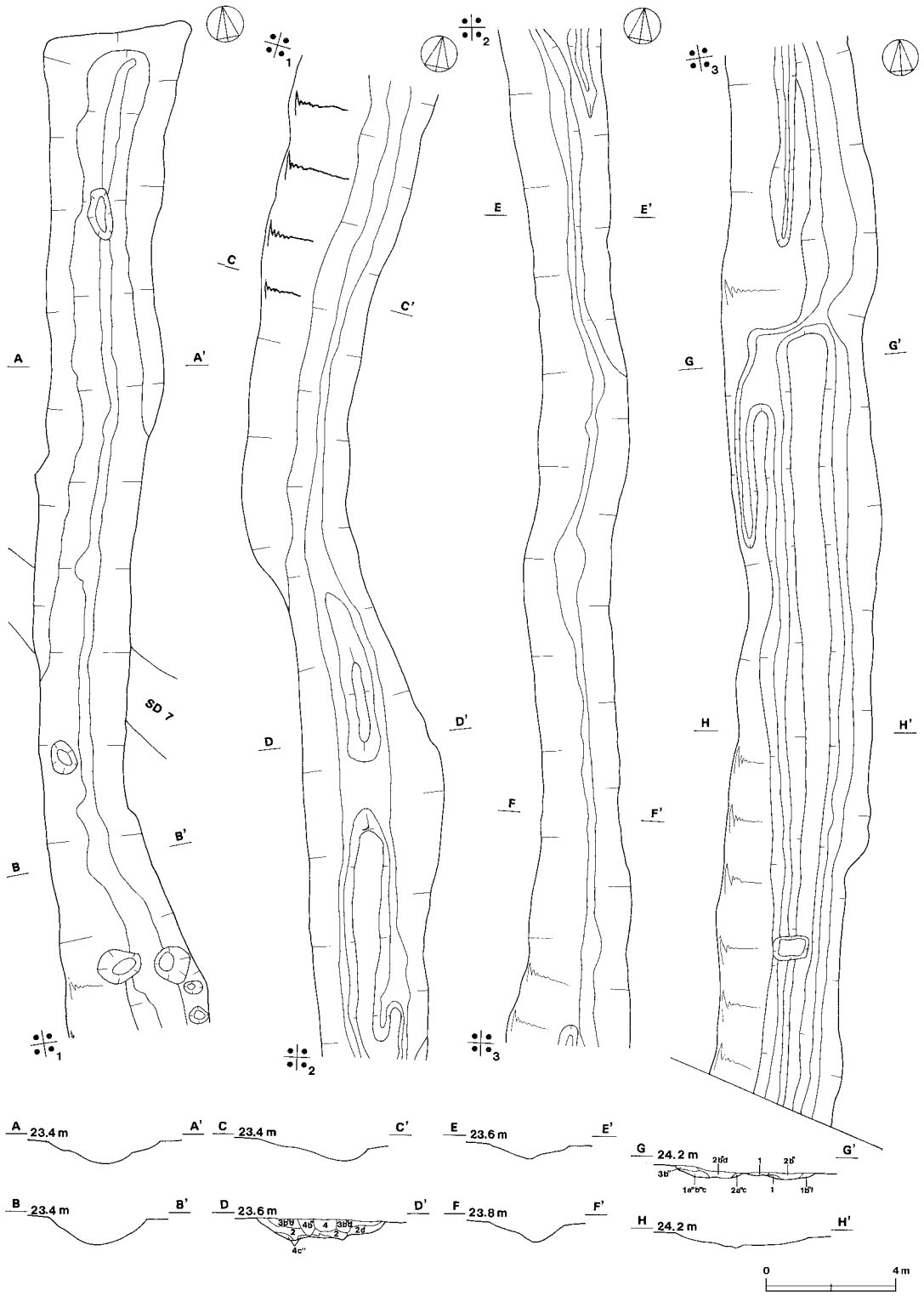
溝の総延長は17mで、北端のL2d5区から南端のL2f3区まで主軸方向N-20°-Eで直線的に掘られている。溝幅は40~100cmで、南にいくに従って徐々に狭まっている。深さは10~20cmである。底面のレベルは23.8mで、高低差は少ない。溝の断面形は皿状を呈している。

覆土は、黒褐色土又は極暗褐色土で、自然堆積層と思われる。

遺物は、覆土中から土師器片2点が出土している。



第328图 3区第12·13号沟实测图



第329图 3区第14号沟渠测图

第14号溝 (第329図)

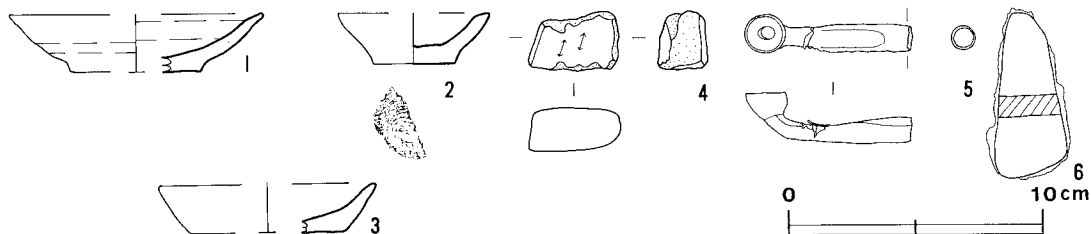
本跡は、調査区の北東端から南東端にかけての K5・L5・M5・N5区にまたがって確認され、4区との境界線に沿うように南―北に延びている。K5区では8世紀代の第7号溝と時期不明の第358号土坑を掘り込み、L5区では第8号溝が本跡に接続している。

溝の総延長は130mで、北端の K5f₂区から南端の N5g₃区まで主軸方向 N-2°-W で緩やかに蛇行して掘られ、南端は調査区外へ続いている。溝幅は3~4mと広く、深さは35~90cmで、北部ほど狭くそして深く掘られている。底面のレベルも、北部の M5h₂区が22.4m、中央部の M5a₂区が22.8m、南部の N5e₄区が23.6mで、北に向って除々に下がっている。溝の断面形は「V」字形である。

覆土は、黒褐色土と暗褐色土で、部分的に攪乱されているが、基本的には自然堆積層と思われる。

遺物は、覆土中から土師器片13点、須恵器片4点、内耳土器片3点、第330図2・3の灯明皿片と中世及び近世の陶器片7点が出土している。本跡は近世以降の溝と思われる。

3区溝出土遺物



第330図 3区溝出土遺物実測図

3区溝出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第330図 1	灯明皿 土師質土器	A (10.0) B 2.3 C (5.2)	底部は突出する。平底。体部は内彎気味に開き、口縁部に至る。	水挽き成形。底部は糸切り。	砂粒 浅黄橙色 普通	20% P404 口唇部にスス付着 SD 1
2	灯明皿 土師質土器	A (6.0) B 2.0 C 3.2	底部は突出する。平底。体部は内彎気味に開き、口縁部に至る。	器面は剝落し、整形技法不明。底部回転糸切り。	砂粒 にぶい橙色 良好	40% P405 SD14
3	灯明皿 土師質土器	A (8.5) B 1.9 C (6.0)	平底。体部は内彎して開き、口縁部に至る。	水挽き成形。底部は回転糸切り。	砂粒 明赤褐色 普通	10% P406 口縁部に油煙付着 SD14

〈 4 区 〉

第 1 号溝 (第331図)

本跡は、2区の第5号溝、そして3区の第7号溝から継続する溝で、調査区の北西端から中央部にかけてのL5・M5・M6・N7の4区にまたがって確認されている。縄文時代の第4号住居跡を掘り込み、南北に延びる第3・4号溝に掘り込まれている。

2区・3区・4区を合わせた溝の総延長は157mで、本調査区内での長さは121mである。北西端のL5b2区から南東端のN6f7区まで、M6j3区でクランク状に曲がるほかは主軸方向N-32°-Wでほぼ直線的に掘られている。溝幅は1.3mで、深さは20~30cmである。底面のレベルは、北西部のL5d3区が23m、中央部のM6h3区が23.3m、南東部のM6f7区が23.8mで、北西に向って下がっている。溝の断面形は皿状を呈している。

覆土は、黒褐色土及び暗褐色土で、自然堆積層と思われる。

遺物は、土師器片232点、須恵器片26点と中世及び近世の陶器片4点が出土している。土師器片や須恵器片の多くは、南端のN6区から出土している。特にN6d6・N6e7・N6f7区の底面と覆土下層には、第344図1~8など多量の土師器や須恵器が、投棄された状態で出土していることから、本跡は8世紀代の溝と思われる。

第 2 号溝 (第332図)

本跡は、調査区西部のM5・N5区に確認され、8世紀代の第2号住居跡や時期不明の第3・8~11号土坑を掘り込んでいる。

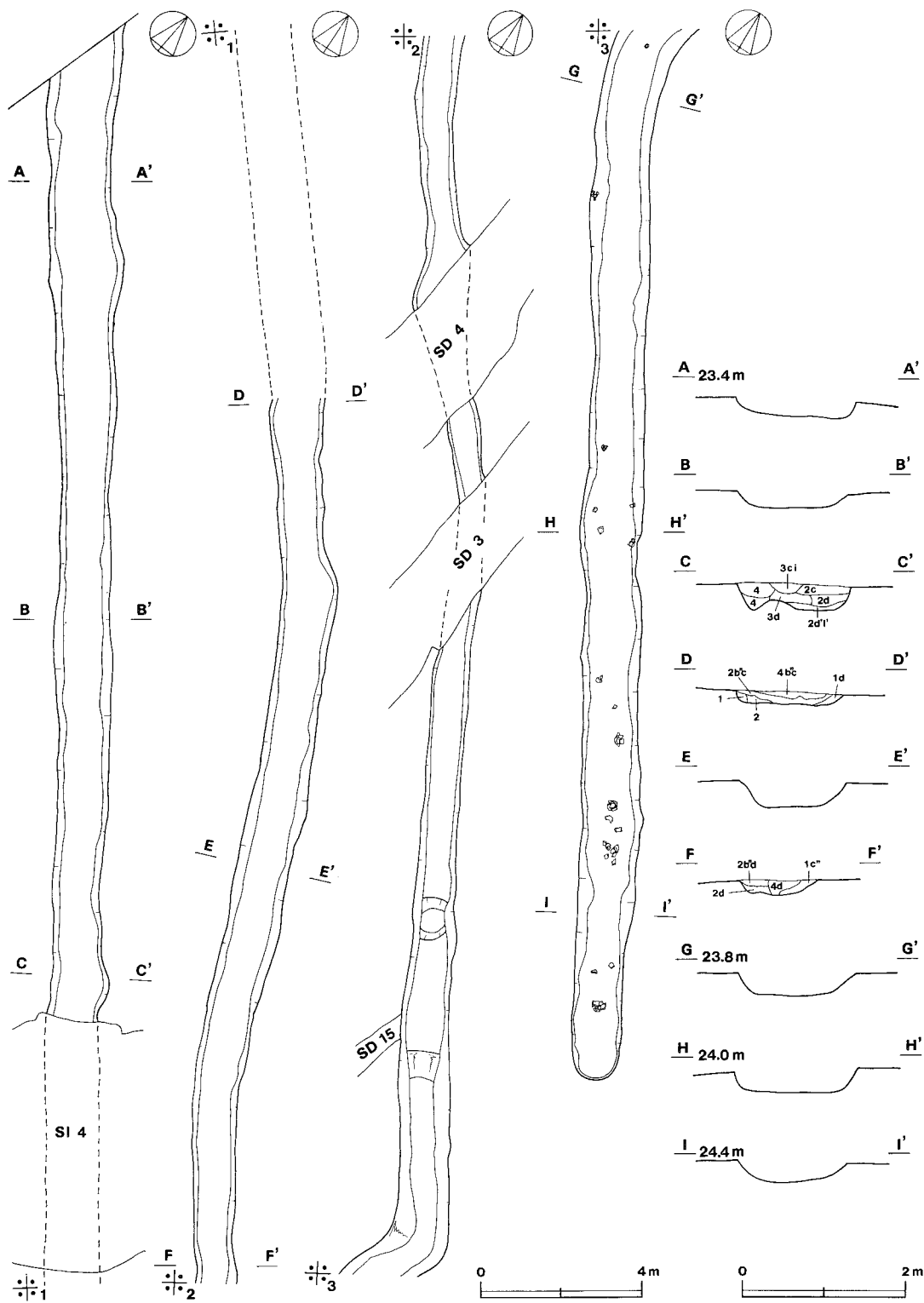
溝の総延長は44.3mで、北端のM5b7区から南端のN5c6区まで主軸方向N-2°-Eで、直線的に掘られている。溝幅は1.5~2mで、深さは20~35cmである。底面のレベルは、北部のM5c7区が23.1m、中央部のM5f7区が23.2m、南部のN5c6区が23.7mで、北に向って下がっている。溝の断面形は皿状を呈している。

覆土は、ロームブロックを含む暗褐色土と黒褐色土で、攪乱されている部分も多いが、自然堆積層と思われる。

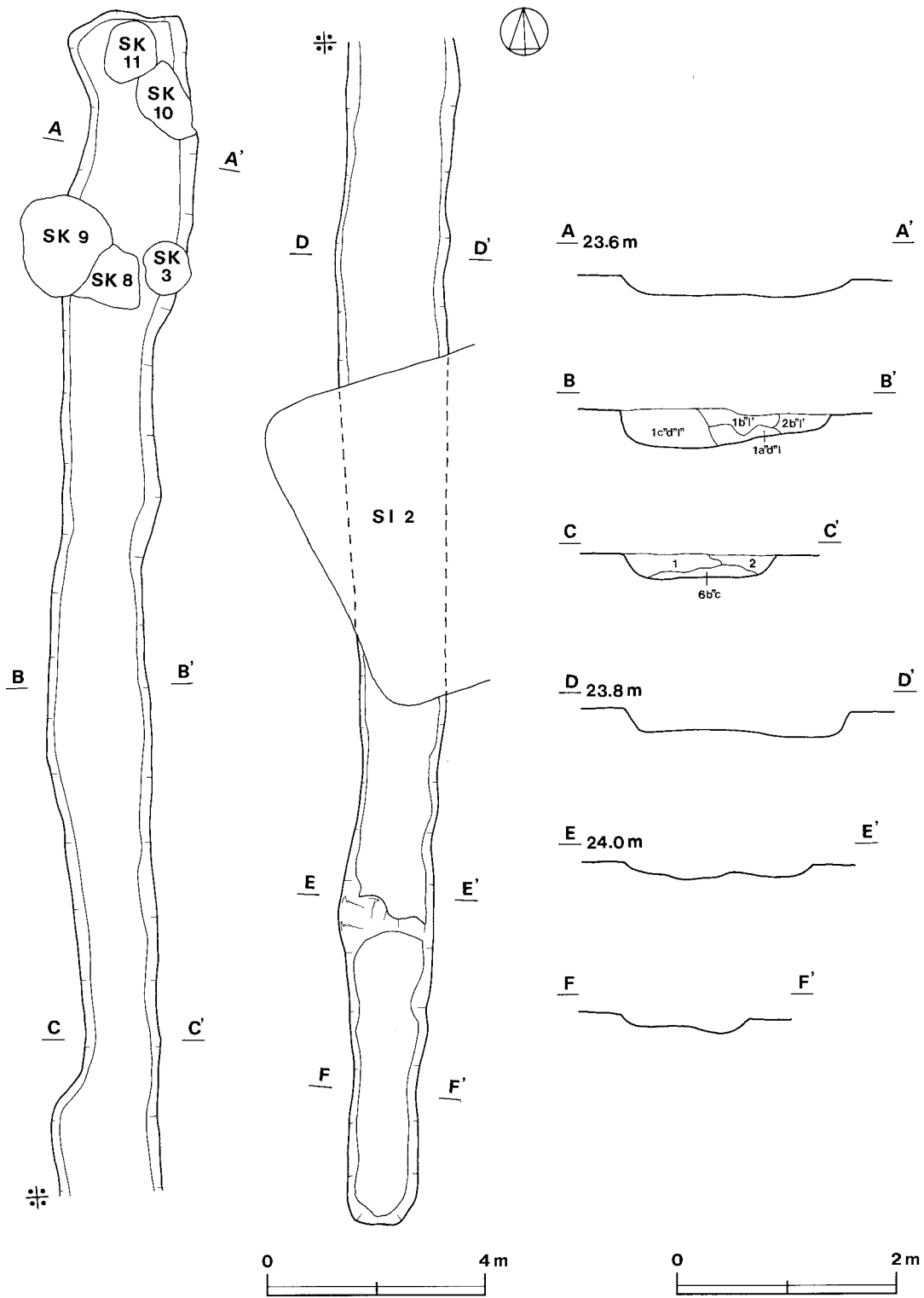
遺物は、覆土中から土師器片30点、須恵器片10点が出土している。

第 3 号溝 (第333図)

本跡は、調査区北部から西部にかけてのK6・L6・M6・N6の4区にまたがって確認され、時期不明の第44・181号土坑と8世紀代の第1号溝を掘り込んでいる。本跡の西1~4mには、第4号溝が平行に走っている。



第331图 4区第1号沟渠测图



第332图 4区第2号沟实测图

溝の総延長は103mである。北端のK6j4区からL6g4区までは主軸方向N-4°-Eで直線的に掘られ、L6g4区でクランク状に曲がった後、南端のN6d1区まで主軸方向N-13°-Eで直線的に掘られている。溝の南端は16号と17号溝に接続しているが、各溝間の新旧関係については不明である。溝幅は2～3mである。深さはM6c3区以北が50～60cmで、それ以南は30cmと急に浅くなる。断面形も同様にM6c3区以北が椀状で、それ以南は皿状を呈している。底面のレベルは、北部のL6a4区が22.5m、中央部のM6c3区が22.8m、南部のN6c1区が23.4mで、北部はN6c1区と比べて90cmも低くなっている。

覆土は、ローム粒子多量を含む暗褐色土で、自然堆積層と思われる。

遺物は、覆土中から土師器片28点、須恵器片5点、内耳土器片3点と陶器片3点が出土している。陶器片の中には15世紀代の菊皿が含まれている。

第4号溝 (第334図)

本跡は、調査区北部から西部にかけてのK6・L6・M6・N5・N6の5区にまたがって確認され、縄文時代の第6号住居跡や8世紀代の第1号溝、時期不明の第22号土坑を掘り込んでいる。本跡の西1～4mには、第3号溝が平行して延びている。

溝の総延長は116mで、北端のK6j4区から南端のN5d0区まで主軸方向N-10°-Eで蛇行して掘られている。溝幅は1.5mで、深さは40～60cmである。底面のレベルは、北端のK6j4区が22.1m、中央部のM6c2区が22.7m、南端のN5d0区が23.4mで、北部は南部に比べ1.3mも下がっている。溝の断面形は椀状を呈している。

覆土は、暗褐色土と褐色土で、自然堆積層と思われる。

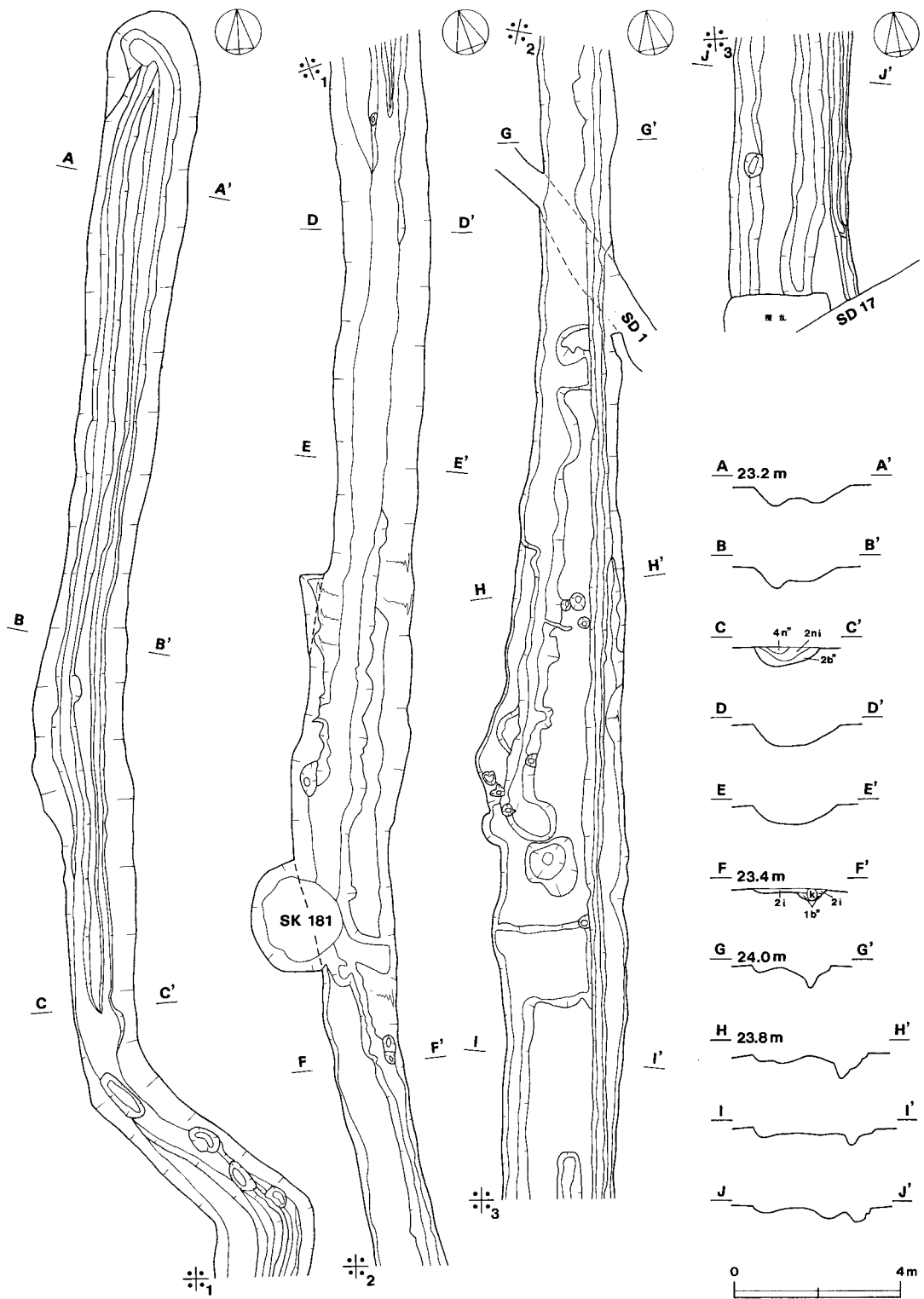
遺物は、覆土中から土師器片122点、須恵器片21点、内耳土器片15点、陶器片9点が出土している。陶器片の中には中世の瀬戸や常滑産の甕や壺が含まれている。

第5号溝 (第335図)

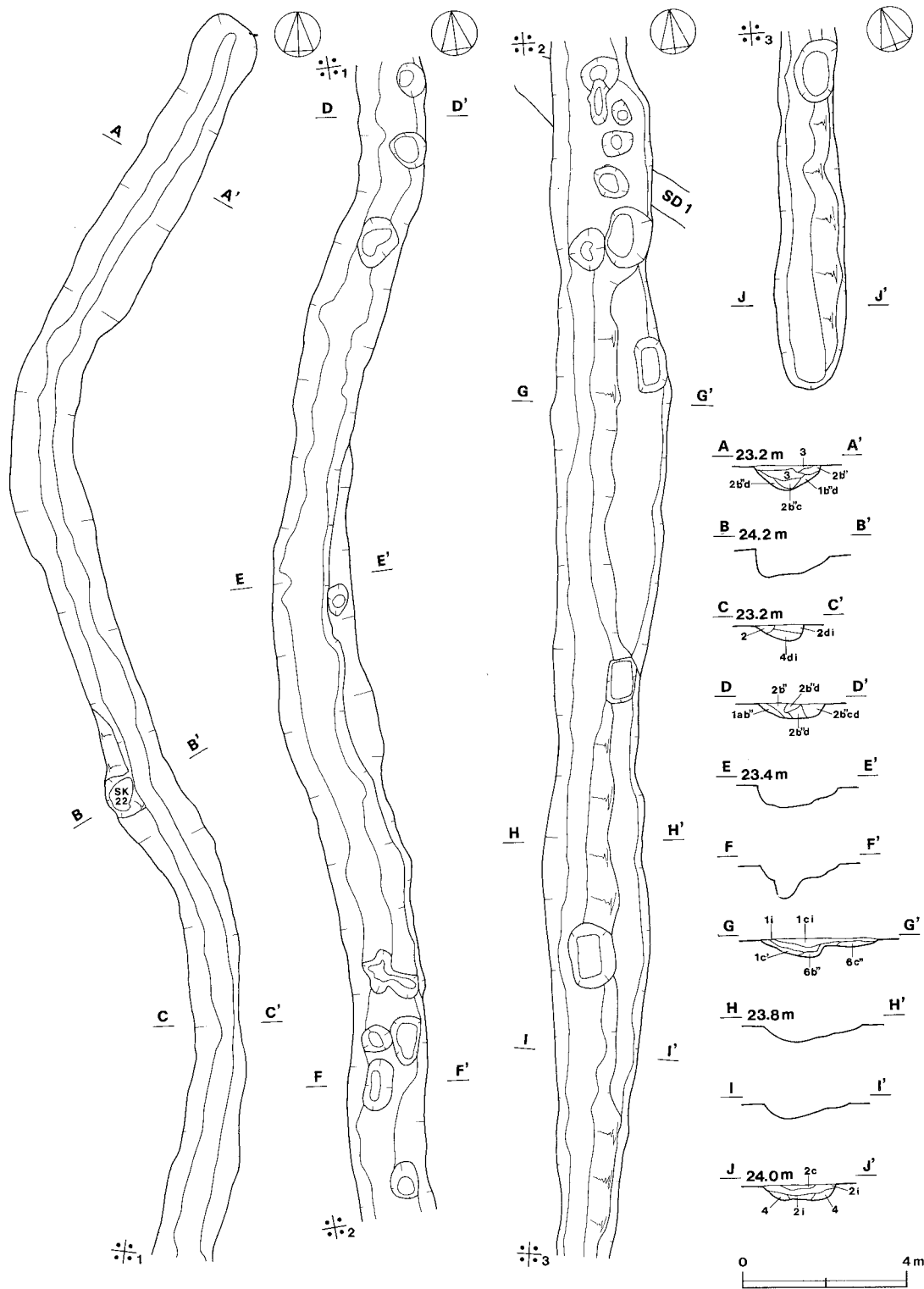
本跡は、調査区南部のO5・O6・P6区に確認され、中世の第154号土坑を掘り込んでいる。本跡の北18mには第6号溝が東-西に延びている。

溝の総延長は29mで、西端のO5i0区から北東へ4m掘られた後、東方に向きを変え主軸方向N-70°-WでO6i3区に達し、さらにそこから南方に向きを変えP6b3区まで主軸方向N-22°-Eで直線的に掘られている。溝の南端は、P6b3区から調査区外へと延びている。溝幅は1～1.5mで、深さは15～20cmである。底面のレベルは、西端のO5i0区が24.4m、中央部のO6i2区が24.3m、屈曲部のO6h4区が24.2m、南部のP6a3区が24.1mで、南にいくに従って緩やかに下がっている。

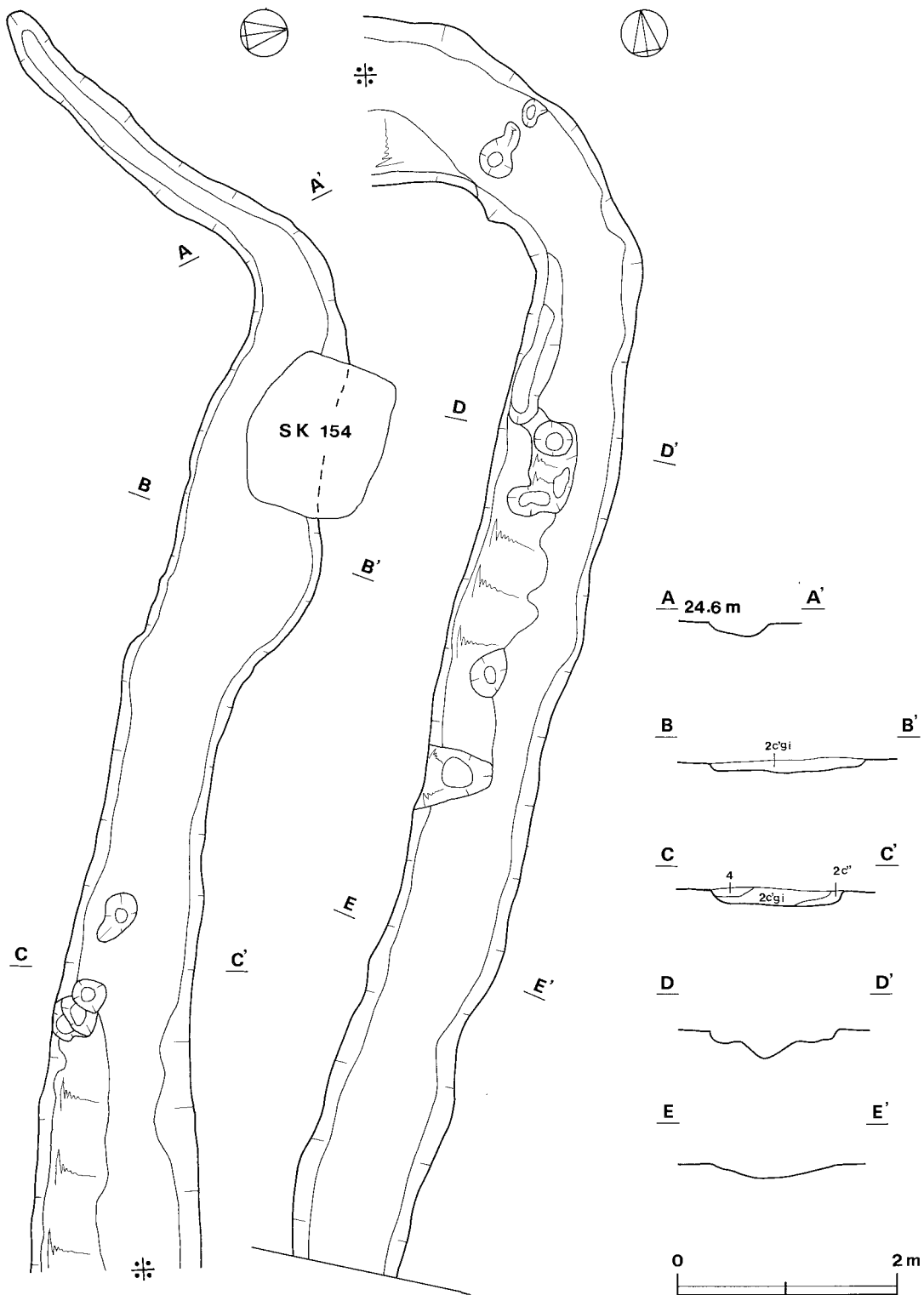
覆土は暗褐色土又は黒褐色土で、自然堆積層と思われる。



第333图 4区第3号沟实测图



第334图 4区第4号溝突测图



第335图 4区第5号沟渠测图

遺物は、覆土中から土師器片66点、須恵器片30点、内耳土器片1点、灯明皿の破片3点が出土している。

第6号溝 (第336図)

本跡は、調査区南西部のO5・O6区に確認され、古墳時代の第32号住居跡と8・9世紀代の第26・33・34号住居跡を掘り込んでいる。本跡の北2mには、第8号溝が本跡と平行して東—西に延びている。

溝の総延長は29mで、西端のO6d8区から東端のO6c5区まで主軸方向N—87°—Eで緩やかに蛇行して掘られている。溝幅は40～50cmで、深さは15cmである。底面のレベルは平均24.3mで、高低差は少ない。溝の断面形は、皿状を呈している。

覆土は、暗褐色土と黒褐色土が自然堆積の状態に堆積している。

遺物は、土師器片30点、須恵器片5点、灯明皿の破片1点が出土している。

第7号溝 (第337図)

本跡は、調査区西部から東部にかけてのO5・O6・O7・O8の4区にまたがって確認され、古墳時代の第32号住居跡を掘り込んでいる。本跡の南には第8・11号溝がほぼ平行に延びているが、両溝ともO6区で本跡と接続している。

溝の総延長は106mで、西端のO5b8区から東端のO8c4区まで主軸方向N—89°—Wで緩やかに蛇行して掘られ、両端とも調査区外へと延びている。溝幅は1mである。深さは10～30cmで、一般に東側は浅くなっている。底面のレベルは、西端のO5b9区が24.1m、中央部のO7a2区が23.6m、東部のO8c3区が23.8mである。溝の断面形は皿状を呈している。

覆土は暗褐色土で、自然堆積の状態に堆積している。

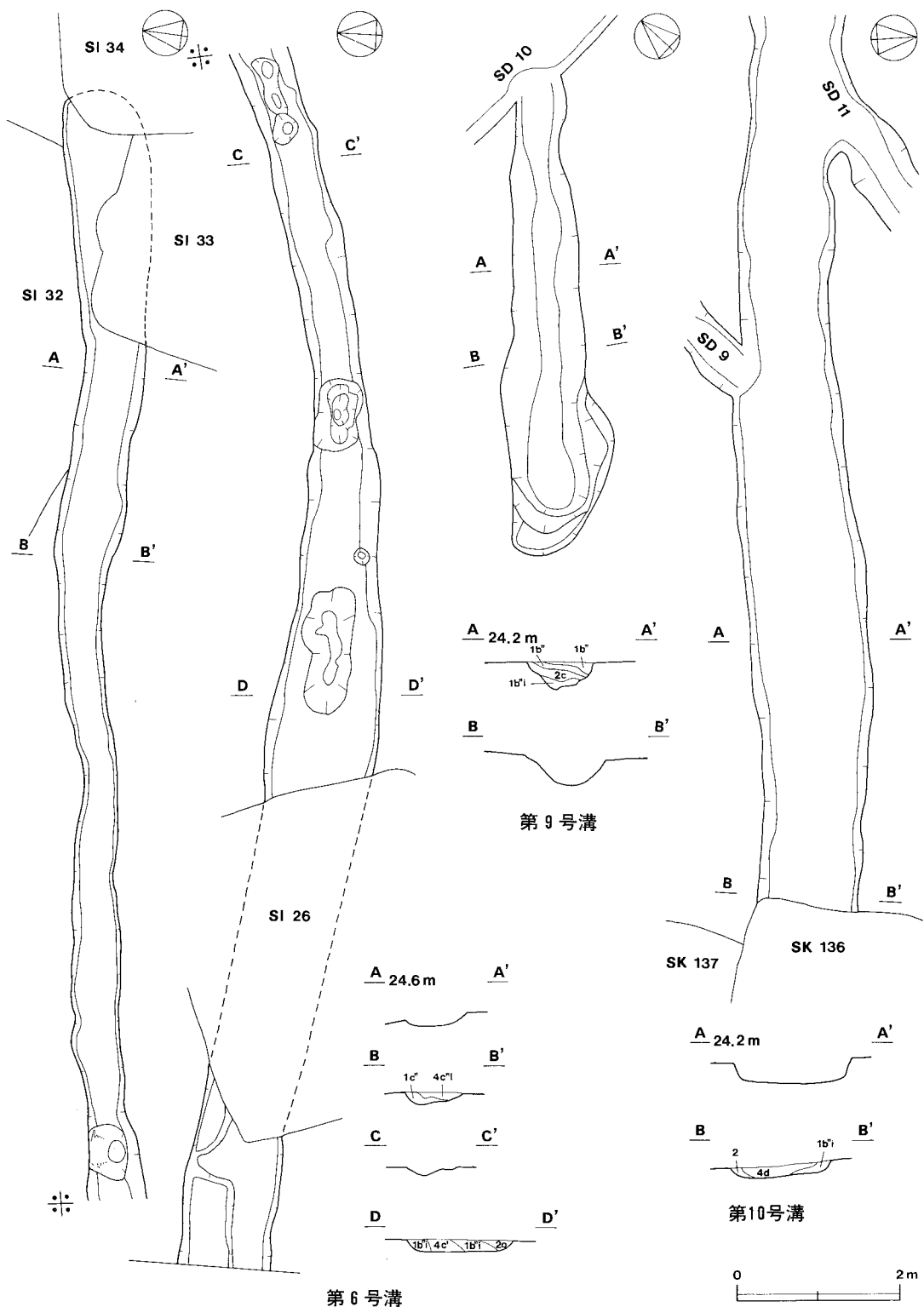
遺物は、土師器片120点、須恵器片2点、内耳土器片2点が出土している。

第8号溝 (第338図)

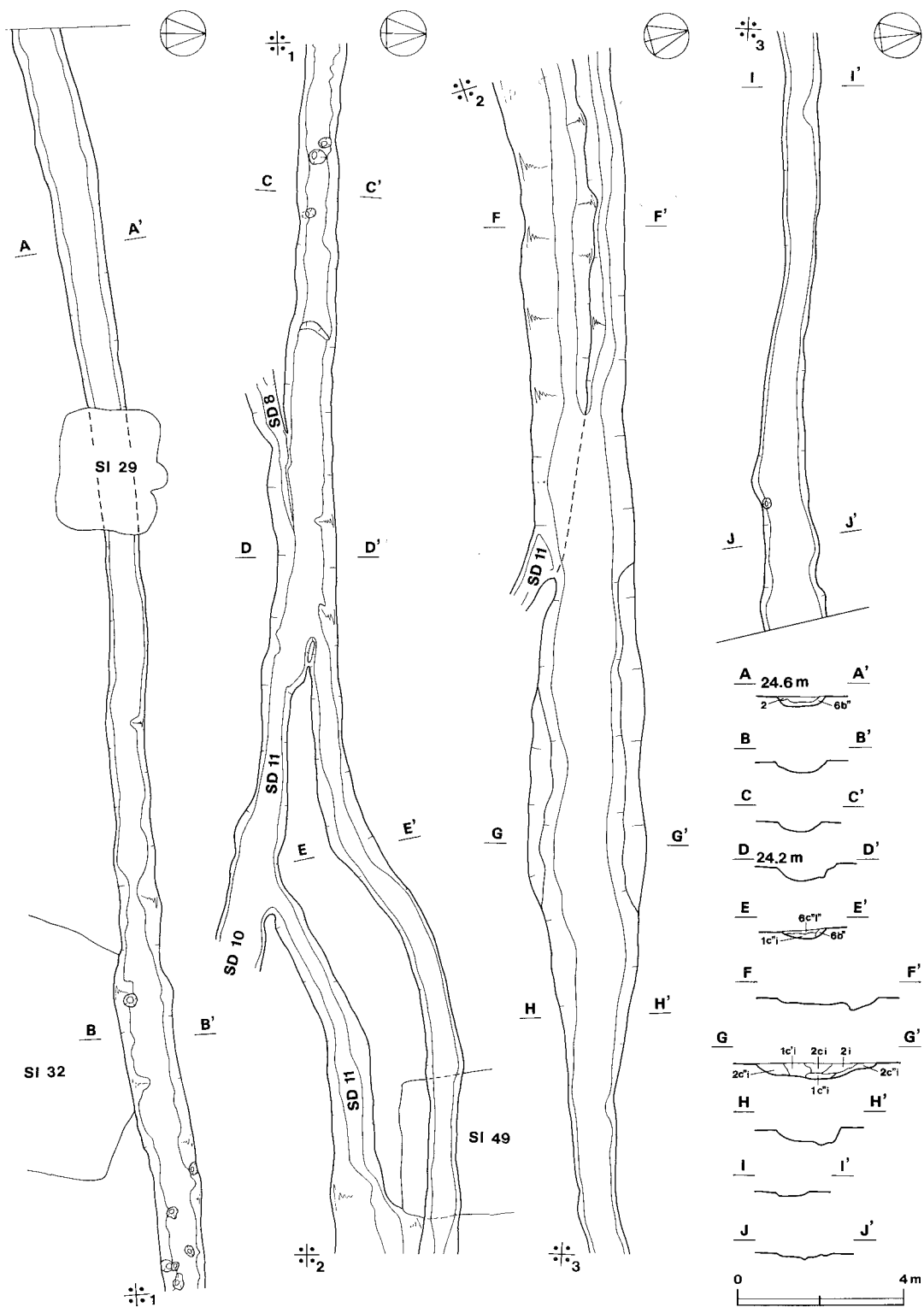
本跡は、調査区北西部から南部にかけてのO5・O6区に確認され、古墳時代の第32号住居跡を掘り込んでいる。本跡の北2mには第7号溝が平行して東—西に延びている。

溝の総延長は34mで、西端のO5c0区から東端のO6b8区まで主軸方向N—80°—Eで蛇行して掘られ、東端は第7号溝に接続している。溝幅は60～70cmで、深さは15～20cmである。底面のレベルは、西部のO5c0区が24.4m、中央部のO6b5区が24m、東部のO6b8区が23.8mで、東に向かって下がっている。溝の断面形は皿状を呈している。

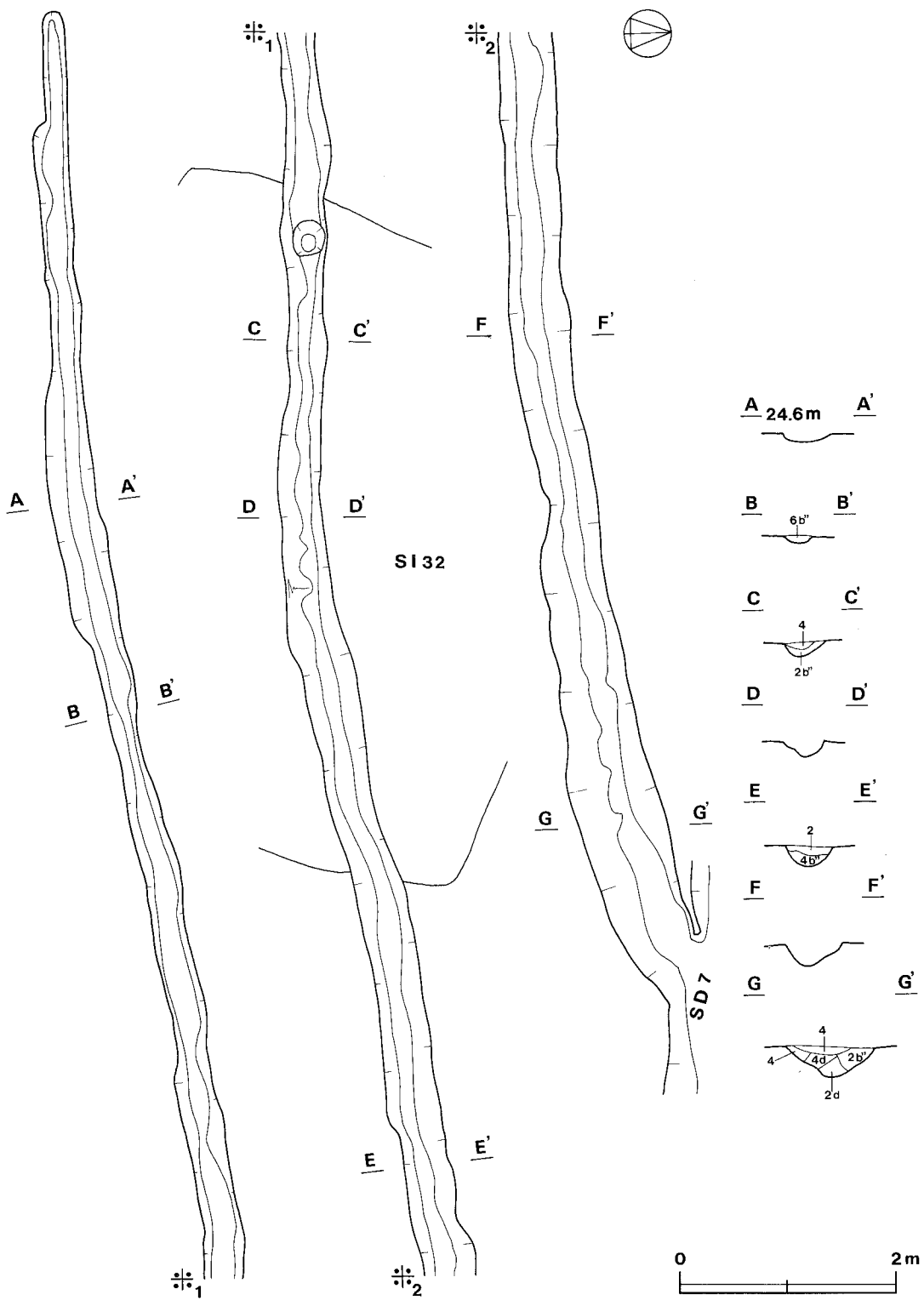
覆土は暗褐色土で、自然堆積層と思われる。



第336图 4区第6·9·10号沟实测图



第337图 4区第7号沟渠测图



第338图 4区第8号沟渠实测图

遺物は、土師器片10点、須恵器片1点、陶器片1点が出土している。

第9号溝（第336図）

本跡は、調査区南部のO7区に確認され、その北端は第10号溝に接続している。

溝の総延長は6mで、北端のO7b₂区から南端のO7c₁区まで主軸方向N-42°-Eで直線的に掘られている。溝幅は50~120cm、深さは15~30cmで、南部ほど広く、そして深くなっている。底面のレベルは、北部が23.6m、南部が23.5mで、南部に向って緩やかに下がっている。溝の断面形は椀状を呈している。

覆土は、ローム粒子を含む暗褐色土で、自然堆積層と思われる。

遺物は出土していない。

第10号溝（第336図）

本跡は、調査区南部のO7区に確認され、東端は第136号土坑を掘り込んでいる。本跡の西端は第11号溝に接続している。

溝の総延長は9mで、西端のO7b₁区から東端のO7b₃区まで主軸方向N-90°で直線的に掘られている。溝幅は1.2mで、深さは20~30cmである。底面のレベルは平均23.7mで、高低差は少ない。溝の断面形は皿状を呈している。

覆土は、黒褐色土と暗褐色土で、自然堆積層と思われる。

遺物は、土師器片5点、須恵器片1点が出土している。

第11号溝（第339図）

本跡は、調査区南部から南東部にかけてのO7・O8の2区にまたがって確認され、北2mに存在する第7号溝とほぼ平行して延び、O6区で同溝と接続している。

溝の総延長は65mで、西端のO7b₉区から東端のO8d₄区まで主軸方向N-80°-Wで弧状に掘られ、その東端は調査区外へと続いている。溝幅は40~70cmであるが、東端はやや幅広く掘られている。深さは10~15cmである。底面のレベルは平均23.8mで、高低差は少ない。溝の断面形は皿状を呈している。

覆土は、黒褐色土と暗褐色土が自然堆積の状態ですべて堆積している。

遺物は、土師器片7点、須恵器片1点、内耳土器片1点と近世の陶器片1点が出土している。

第12号溝（第340図）

本跡は、調査区中央部のN7区に確認され、北東2mには第13号溝が東-西に延びている。

溝の総延長は28mで、北端のN7c2区から南端のN7i3区まで主軸方向N-7°-Wで掘られている。溝幅は80~160cmで、深さは10~20cmである。底面のレベルは、北部のN7c2区が23.3m、中央部のN7g2区が23.5m、南部のN7i3区が23.7mで、北に向って除々に下がっている。溝の断面形は皿状を呈している。

覆土は、黒褐色土と暗褐色土で、自然堆積層と思われる。

遺物は、土師器片10点、須恵器片1点が出土している。

第13号溝 (第341図)

本跡は、調査区東部のN7区に確認され、西2mには第12号溝が南-北に延びている。

溝の総延長は31.5mで、南端のN7d3区から北西に6m掘られた後、東方に向きをかえ屈曲部のN7c2区から東端のN7a8区まで主軸方向N-72°-Eで直線的に掘られている。溝幅は1mであるが、N7b7区では攪乱を受け、やや幅広になっている。溝の深さは10~15cmで、断面形は皿状を呈している。

覆土は、黒褐色土と暗褐色土で、自然堆積層と思われる。

遺物は、覆土中から土師器片9点が出土している。

第14号溝 (第340図)

本跡は、調査区西部のN8区に確認され、本跡の西16mには第13号溝が東-西に延びている。

溝の総延長は18mで、北西端のN8a2区から南東端のN8f4区まで主軸方向N-16°-Wでほぼ直線的に掘られている。溝幅は1~1.5mで中央部が広がっている。深さは20cmである。底面のレベルは平均23.4mで、高低差は少ない。溝の断面形は皿状を呈している。

覆土は、黒褐色土と暗褐色土で、自然堆積層と思われる。

遺物は、覆土中から須恵器片2点が出土している。

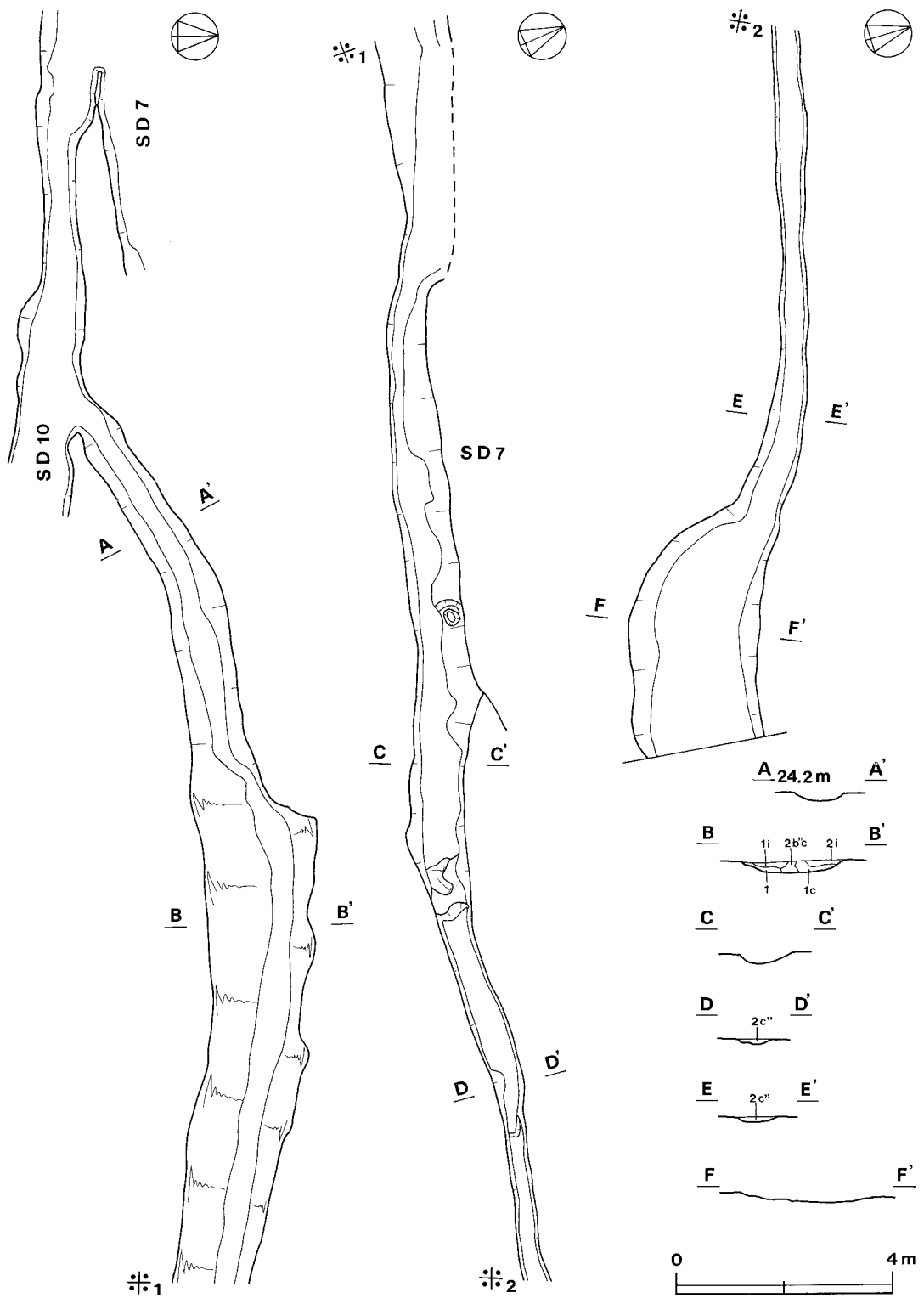
第15号溝 (第342図)

本跡は、調査区中央部のM6・N6区に確認され、北端は8世紀代の第1号溝に接続している。

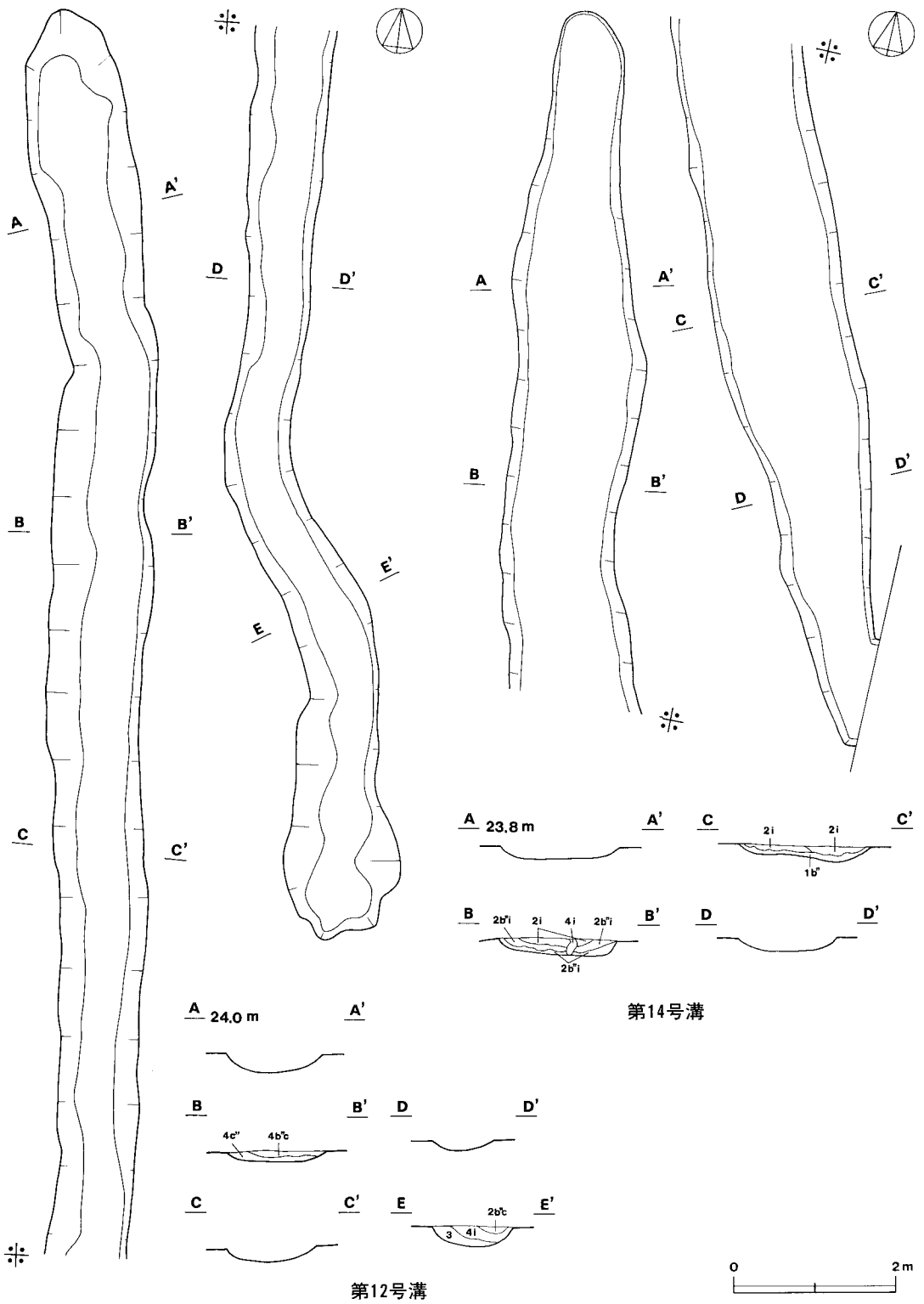
溝の総延長は14mで、北端のM6i4区から南端のM6c3区まで主軸方向N-9°-Eで掘られている。溝幅は60cmで、深さは10cmである。底面のレベルは、北端のM6i4区が23.5m、中央部のN6a4区が23.6m、南端のN6c3区が23.7mで、北に向って緩やかに下がっている。溝の断面形は、浅い皿状を呈している。

覆土は暗褐色土で、自然堆積層と思われる。

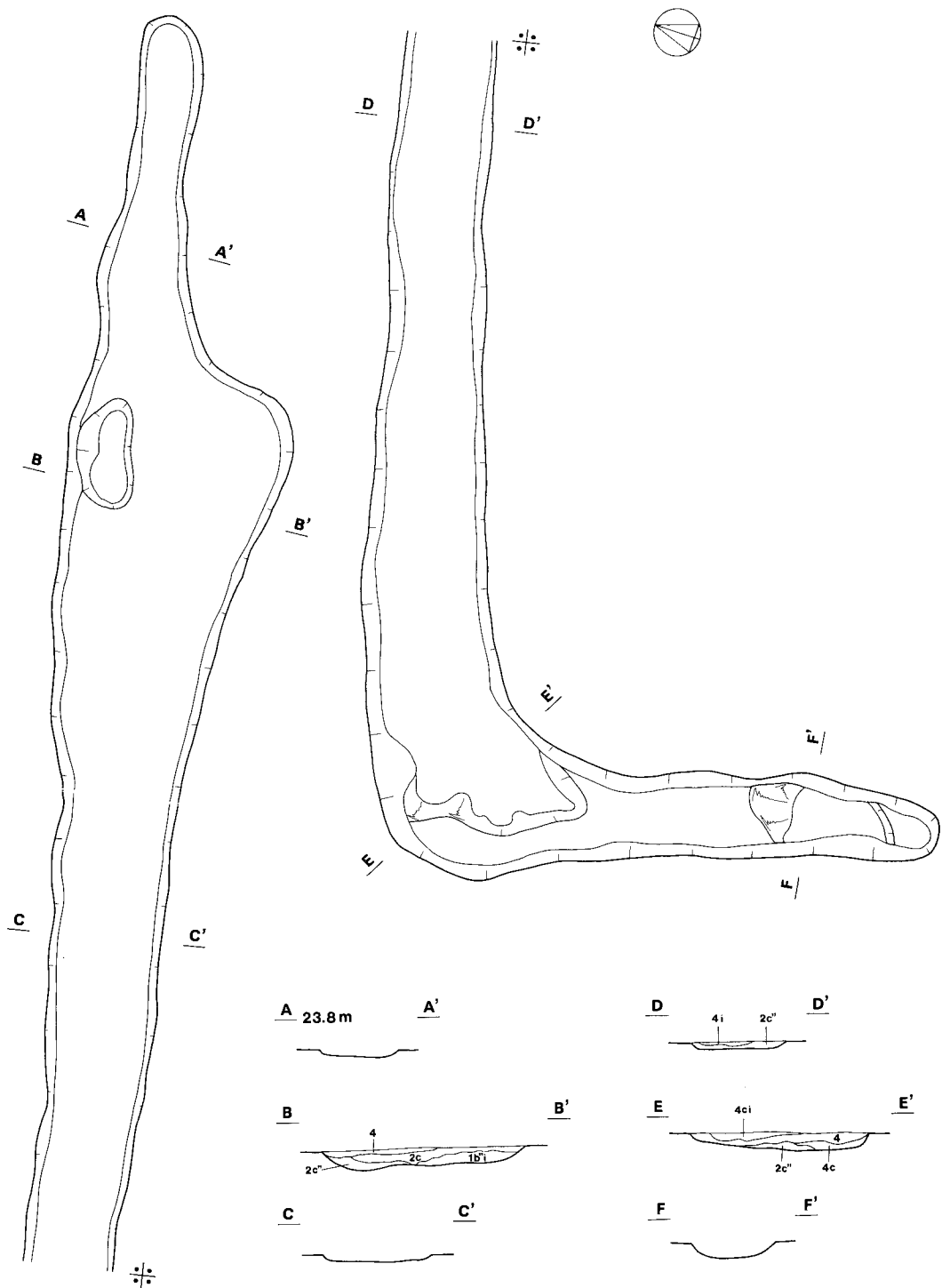
遺物は、覆土中から須恵器片2点が出土している。



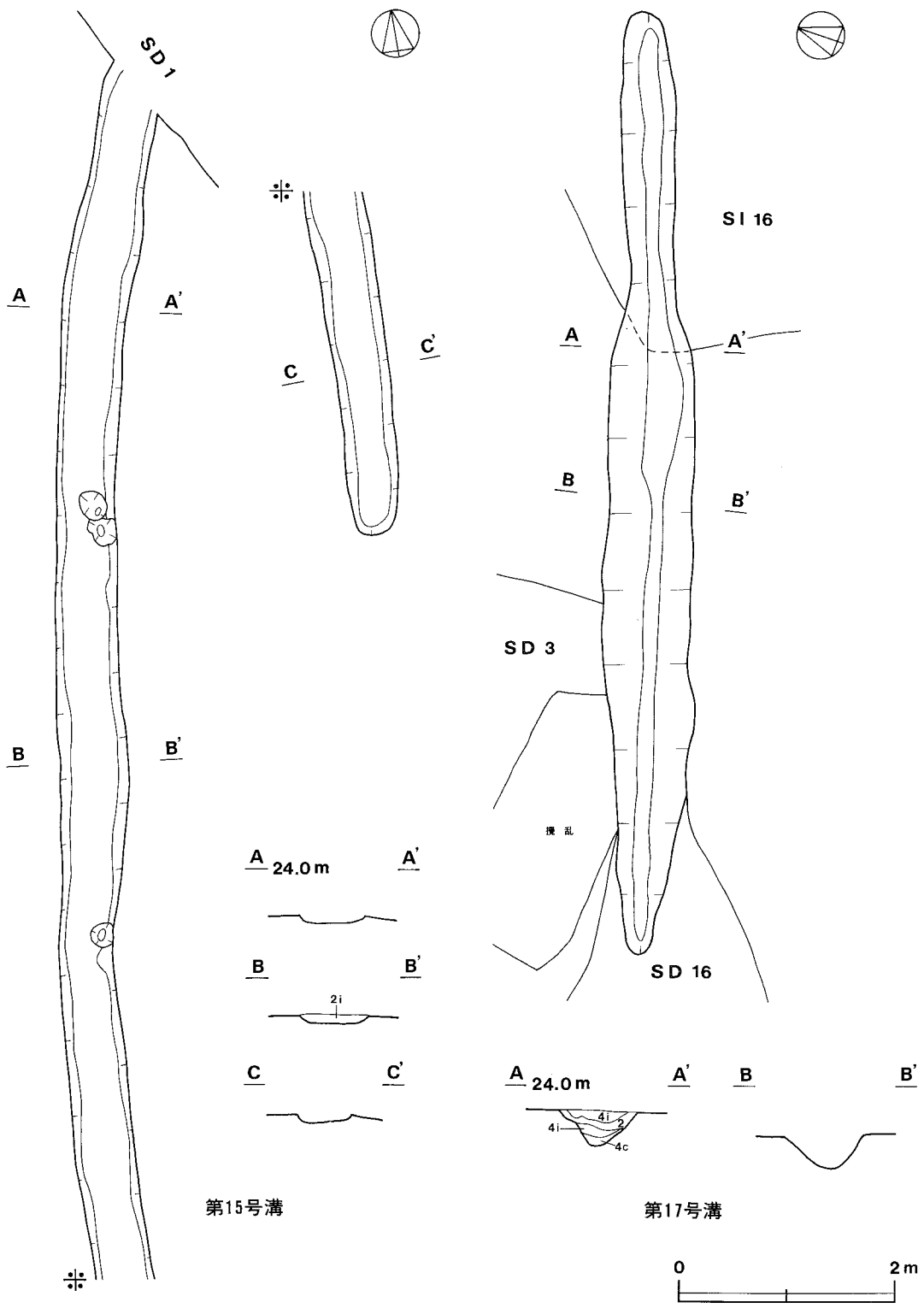
第339图 4区第11号溝突測図



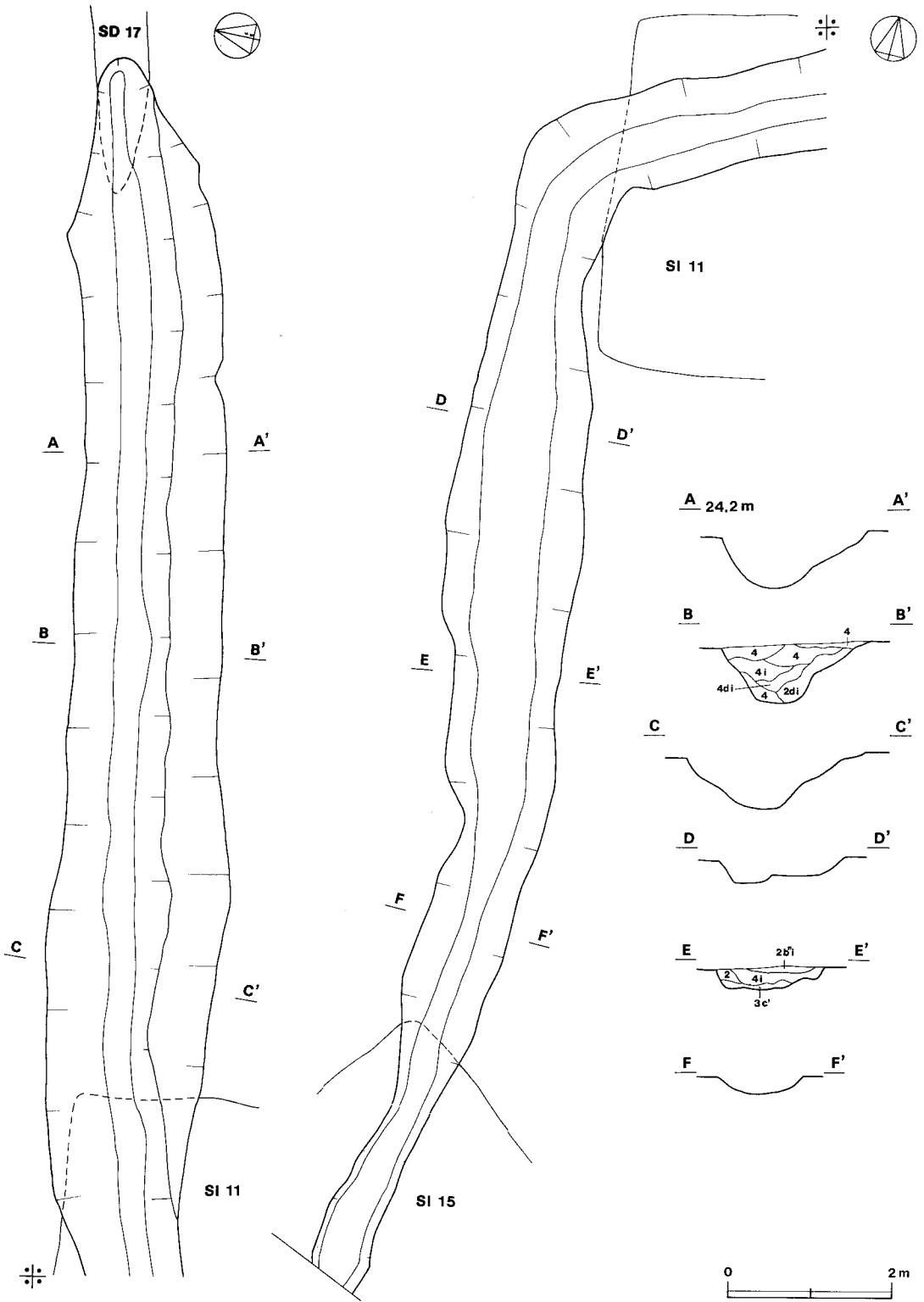
第340图 4区第12·14号沟实测图



第341图 4区第13号溝実測図



第342图 4区第15·17号溝実測图



第343图 4区第16号沟渠测图

第16号溝 (第343図)

本跡は、調査区西部の N5・N6区に確認され、古墳時代の第15号住居跡と 8 世紀代の第11号住居跡を掘り込んでいる。本跡の東端は、第 3 号溝や第17号溝に接続している。

溝の総延長は21m で、東端の N6d₁区から南端のN5i₇区までかぎの手に延び、さらに調査区外へと続いている。主軸方向は、N6d₁区から屈曲部の N5f₇区までがN-71°-Eで、N5f₇区から N5i₇区までがN-7°-Wである。溝の規模や断面形は屈曲部の N5f₇区を境に異なり、N5f₇区以東は溝幅が1.8m、深さが60cmで、断面形は箱形であるが、N5f₇区以南は溝幅が 1 m、深さが25cmとやや小規模で、断面形は皿状を呈している。底面のレベルは、東部の N5d₉区が23.2m、屈曲部のN5f₇区が 23.6m、南端の N5i₇区が 23.9m で、北から東に向って70cmも下がっている。

覆土は、黒褐色土と暗褐色土で、自然堆積層と思われる。

遺物は、土師器片37点、須恵器片 5 点、内耳土器片 1 点、近世の陶器片 3 点が出土している。

第17号溝 (第342図)

本跡は、調査区の中央部 N6区に確認され、東端は 8 世紀代の第16号住居跡を掘り込んでいる。本跡の西端は、第 3 号溝及び第16号溝に接続している。

溝の総延長は 9 m と短く、東端の N6d₃区から西端の N6d₁区まで主軸方向N-71°-Eで、ほぼ直線的に掘られている。溝幅は50~90cmで、深さは30cmである。底面のレベルは23.4m で、高低差は少ない。

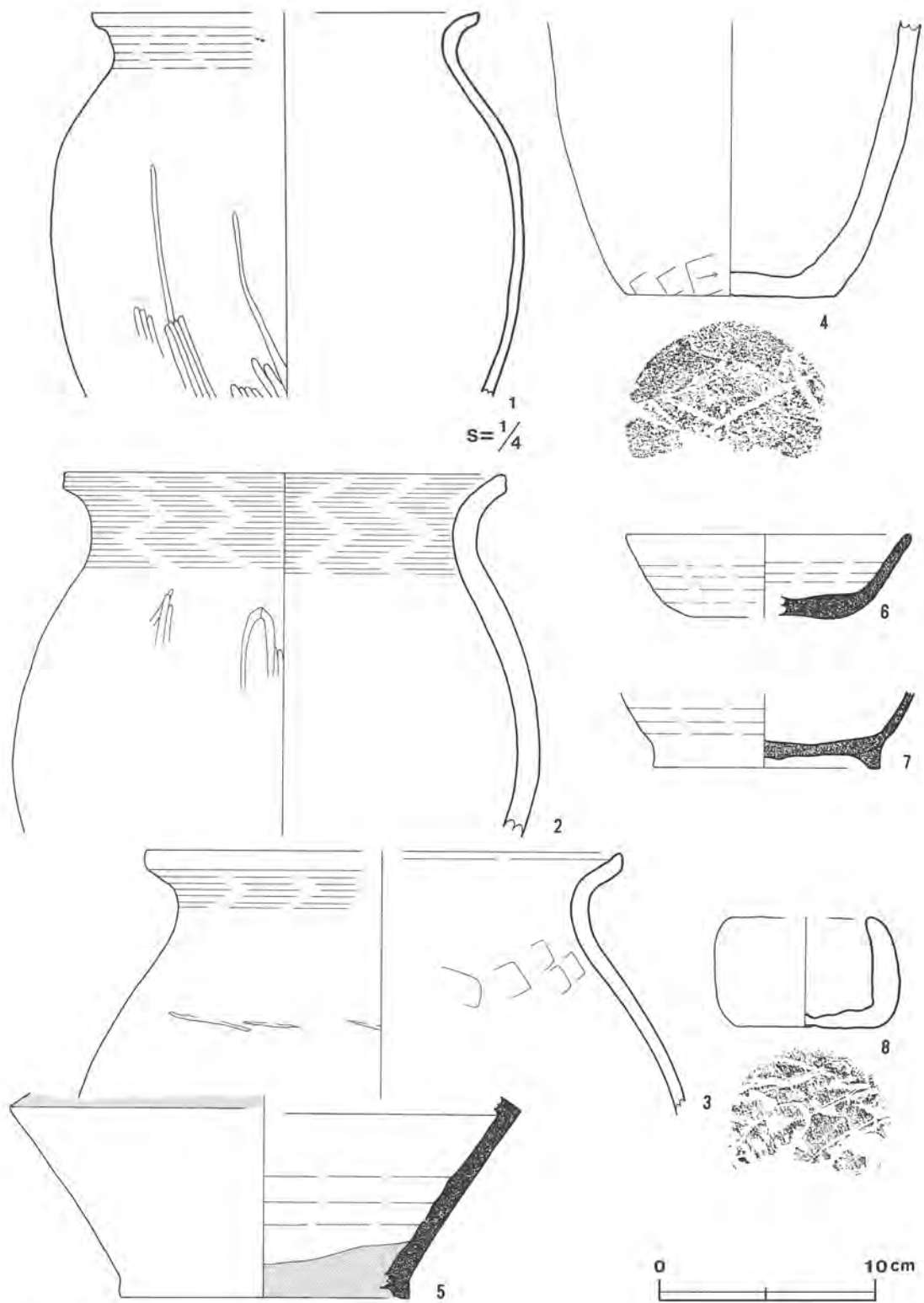
覆土は、黒褐色土と暗褐色土で、自然堆積層と思われる。

遺物が出土していないため本跡の時期は不明であるが、土層から考えて第16号溝よりは新しいものと思われる。

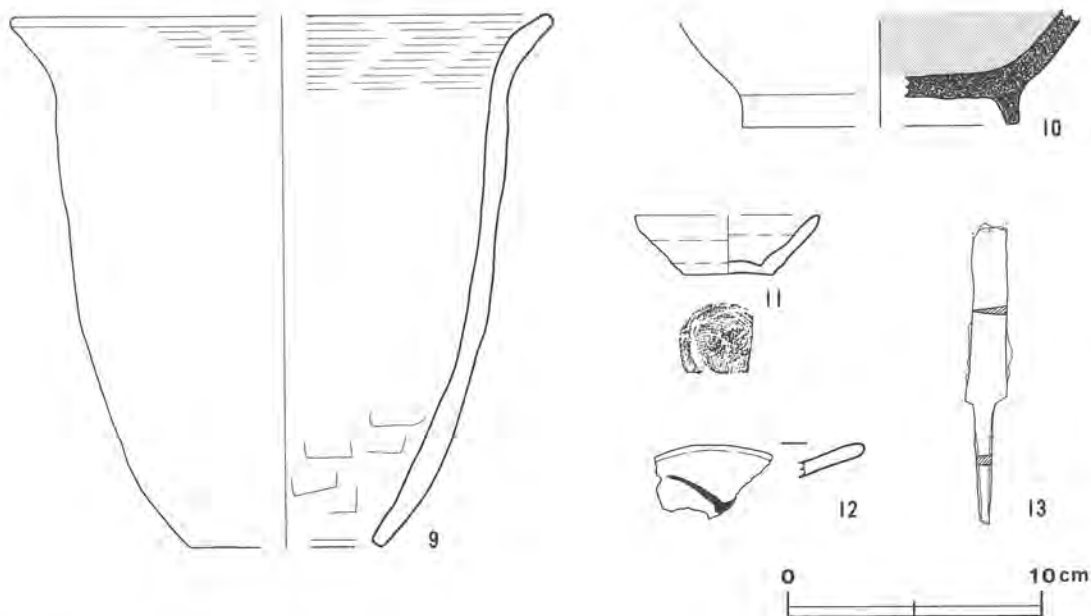
4 区溝出土遺物

4 区溝出土土器観察表

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第344図 1	甕 土 師 器	A 24.0 B (24.0)	胴下半部欠損。胴部は最大径を上位に持ち、膨らむ。口縁部は外反し、端部は直立する。	口縁部内・外面は横ナデ整形。胴部外面上位に甕当て痕。下位は甕磨き。	砂粒・雲母・長石 にぶい褐色 良好	20% P242 SD 1
2	甕 土 師 器	A 20.4 B (17.0)	胴下半部欠損。胴部は最大径を中位に持ち、膨らむ。口縁部は外反し、端部は直立する。	口縁部内・外面は横ナデ整形。胴部外面は甕磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	30% P241 SD 1
3	甕 土 師 器	A (22.2) B (12.3)	胴部中位以下欠損。口縁部は外反し、端部をつまみ上げる。	口縁部外面横ナデ整形。胴部外面上位に甕当て痕。内面は横位の甕ナデ整形。	砂粒・雲母・長石 にぶい赤褐色 普通	15% P243 SD 1



第344图 4区沟出土遗物实测图(1)



第345図 4区溝出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第344図 4	甕 土師器	B (12.8) C [9.8]	平底。胴部は内彎気味に立ち上がるが、上半部を欠損。厚手。	胴部外面縦位の篋削り、下端は横位の篋削り。底部木葉痕。	石英・長石多量 にふい赤褐色 普通	30% P244 SD 1
5	壺 須恵器	B (9.5) C (13.6)	底部欠損。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は平坦。胴部は直線的に外傾するが、上位を欠損。	水挽き成形。高台は貼り付け。	— 灰色 良好	10% P248 肩部に灰釉かかる SD 1
6	坏 須恵器	A 13.2 B 4.0 C [7.2]	底部は上げ底で、分厚い。体部は内彎して開き、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。底部は手持ち篋削り。	細砂 褐灰色 普通	70% P246 PL92 SD 1
7	高台付坏 須恵器	B (3.6) D 0.6 E 10.6	平底。高台は外反して垂下し、接地面は平坦。体部は外傾して立ち上がるが、上位を欠損。	水挽き成形。高台は貼り付け。底部は回転篋削り。回転方向は右。	長石 灰白色 普通	40% P247 SD 1
8	手捏土器 土師器	A 6.4 B 5.2 C 6.5	平底。体部は内彎して立ち上がり、塊状を呈する。	手捏成形。内面指ナデ整形。底部木葉痕。	砂粒 にふい赤褐色 普通	85% P245 PL90 SD 1
第345図 9	瓶 土師器	A [21.4] B 21.1 C [7.6]	底部は大きく開く。胴部は長胴形で、口縁部は外反する。	口縁部横ナデ整形。胴部内・外面はナデ整形。	砂粒 橙色 普通	40% P251 PL88 SD 7
10	高台付塊 灰釉陶器	B (4.6) D 1.2 E [11.0]	底部片。平底。高台は「ハ」の字状に開く。接地面は平坦。	水挽き成形。高台は貼り付け。	— 灰白色 良好	10% P250 内面に灰釉かかる SD 5

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第345図 11	灯明皿 土師質土器	A (7.2) B 2.4 C 3.6	平底。体部は内彎気味に開き、 口縁部に至る。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒 にぶい橙色 普通	30% P249 口縁部に油煙付着 SD 4
12	皿 土師器	B (1.3)	口縁部片。	水挽き成形。内面磨き。	砂粒 橙色 普通	5% P266 内面黒色処理・ 体部墨書「人」か SD 4

第7節 その他の遺構

〈 4 区 〉

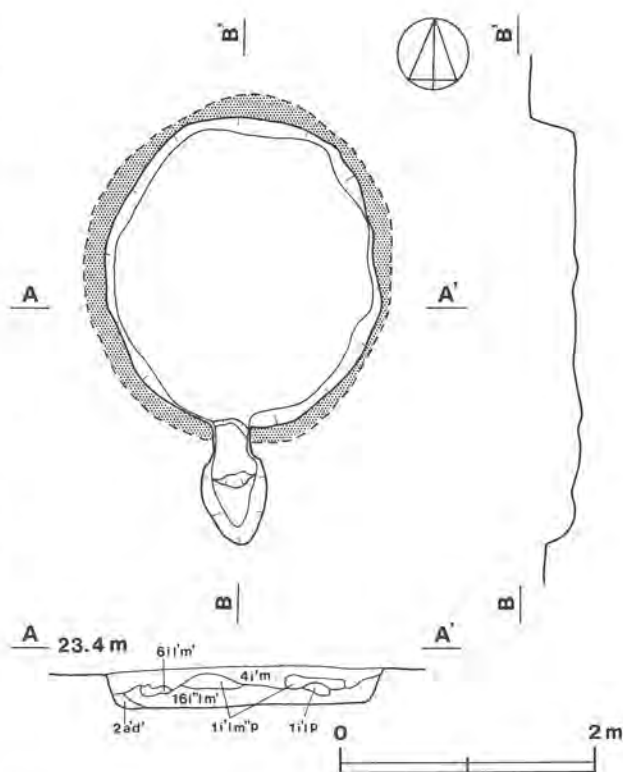
1. 炭窯 (第346図)

本跡は、調査区の北西部 M5b7区に確認され、確認面には赤褐色に焼けた粘土が広い範囲に散乱していたため、性格不明の遺構として調査したものである。

平面形は、長径2.8m、短径2.4mの整った楕円形で、南側には長さ1m、幅50cmの焚口部と思われる張り出し部を持っている。長軸方向はN-0°である。壁高は30~40cmで、壁面には砂質の粘土が15cmの厚さで貼られ、赤褐色に変色している。底面は平坦であるが、北部に向ってわずかに傾斜している。

覆土は、焼けた砂質粘土や炭化粒子を多量に含む褐色土と赤褐色土が堆積している。

底面から木炭がまとまって出土しており、遺構全体の規模や、壁面の粘土の厚さ等が、現在県北山間部に築かれている炭窯に類似することなどから、本跡は近世以降の炭窯と思われる。

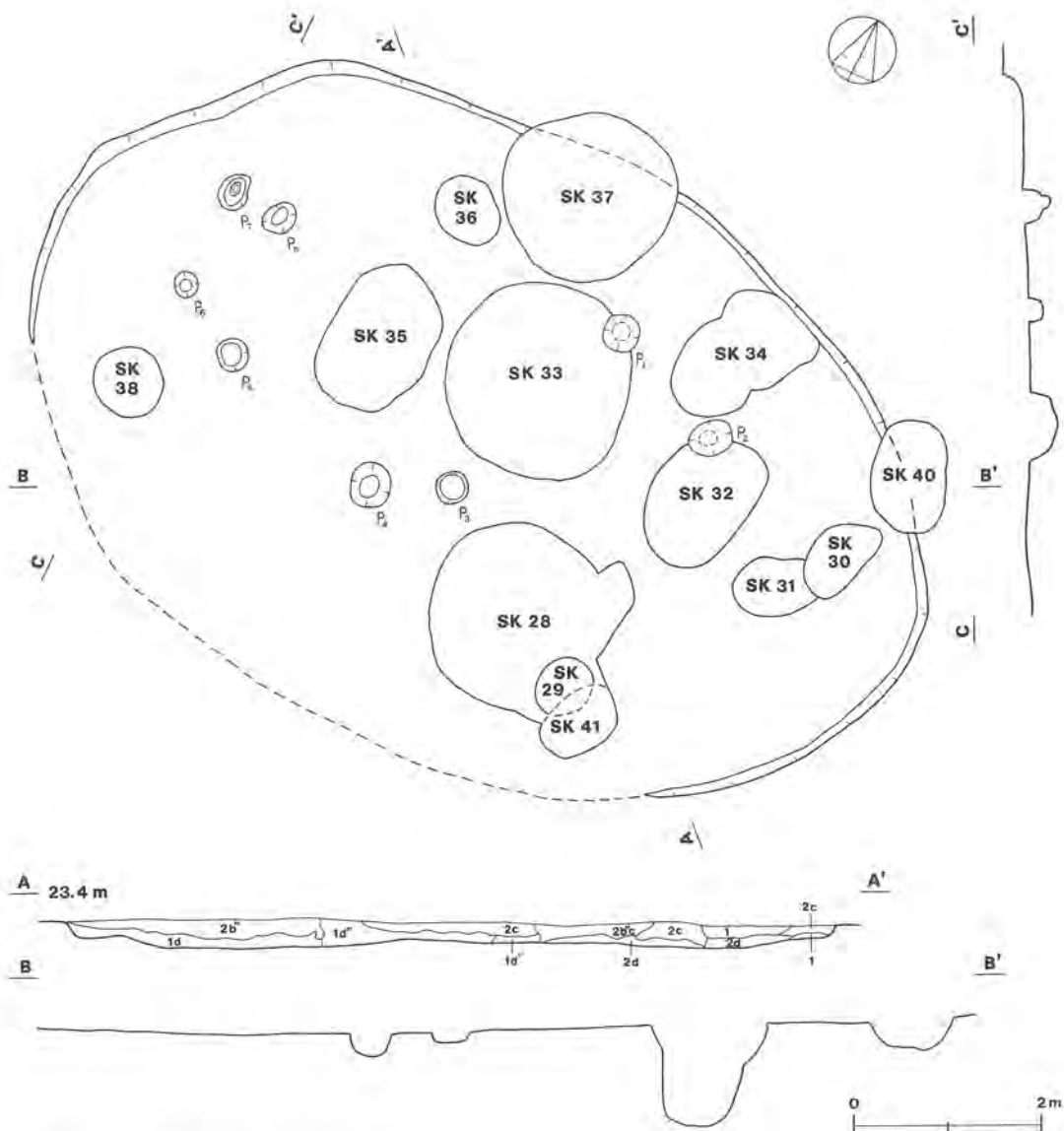


第346図 炭窯実測図

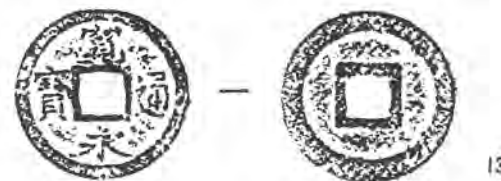
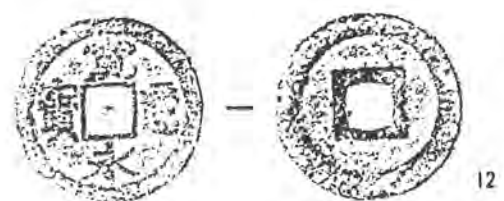
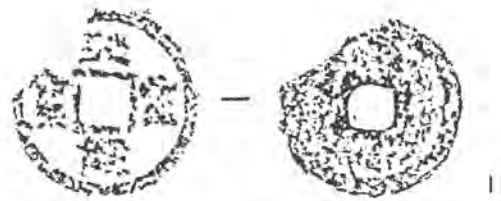
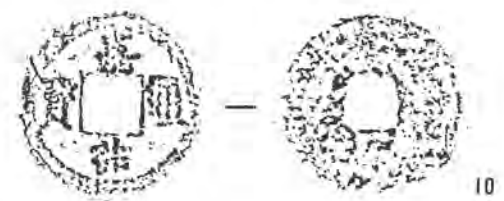
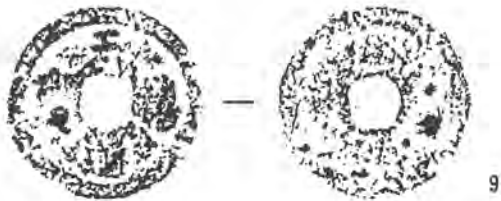
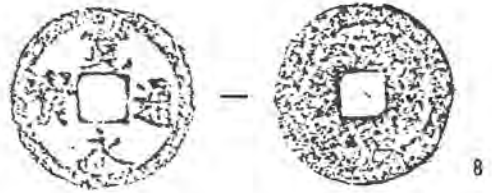
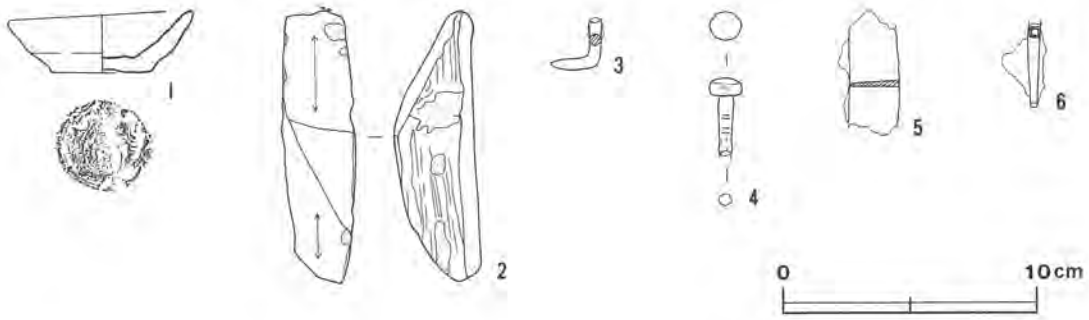
2. 性格不明の遺構 (第347図)

本跡は、調査区の北西部 L5e7区に確認され、縄文時代の第28・33・35・37号土坑等を掘り込み、本跡の底面からは合計13の土坑が確認されている。

平面形は、長径10.3m、短径6.8mの楕円形状を呈し、長径方向はN-90°を指している。遺構全体の面積は56.7m²ほどである。確認面から底面までの深さは20cmで、壁はなだらかに外傾して立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、8か所のピットが確認されているが、いずれも浅く、配置も不規則であることから、本跡に伴うものか否かは不明である。



第347図 性格不明の遺構実測図



第348図 性格不明の遺構出土遺物実測図

覆土は、ローム粒子を含む暗褐色土でよく締まっており、自然堆積層と思われる。

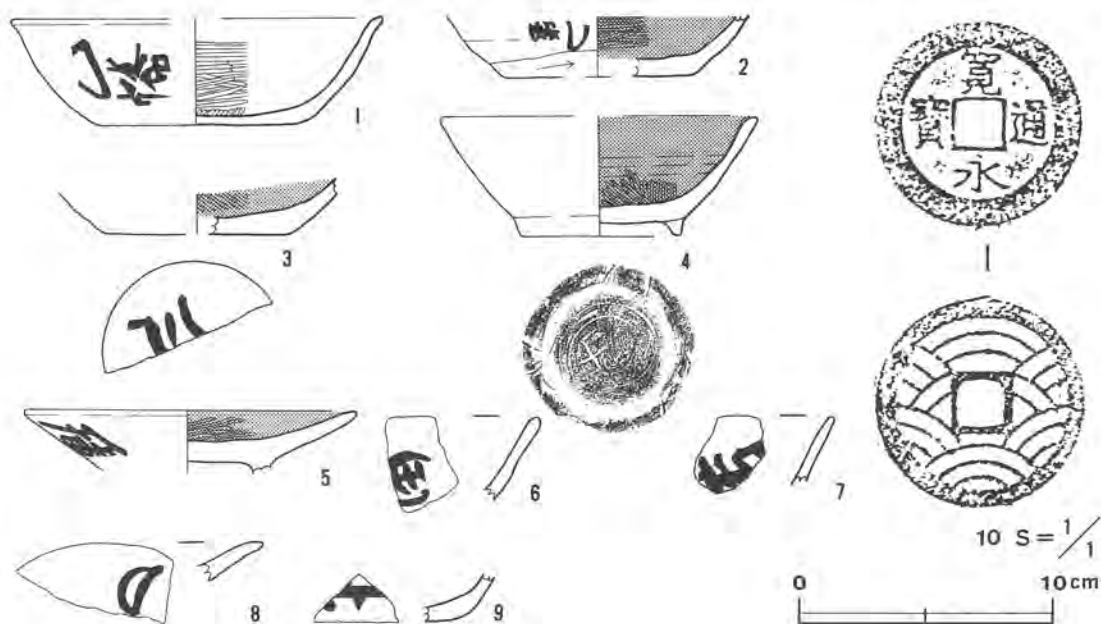
底面や覆土中から灯明皿3点、中・近世の陶磁器片11点、釘などの鉄製品8点、銅製品1点、古銭9点、砥石1点が出土している。古銭の種類は「嘉祐通宝」「治平元宝」「天聖元宝」「永樂通宝」「寛永通宝」の5種類が出土している。本跡は、「寛永通宝」が出土していることから江戸時代以降の遺構と思われる。

4区性格不明の遺構出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第348図 1	灯明皿 土師質土器	A 7.2 B 2.4 C 3.9	底部はわずかに引き締まり突出する。体部は内彎して開き、口縁部は外反する。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア 橙色 普通	100% P252 口縁内面に油煙 付着。

第8節 遺構外出土の遺物

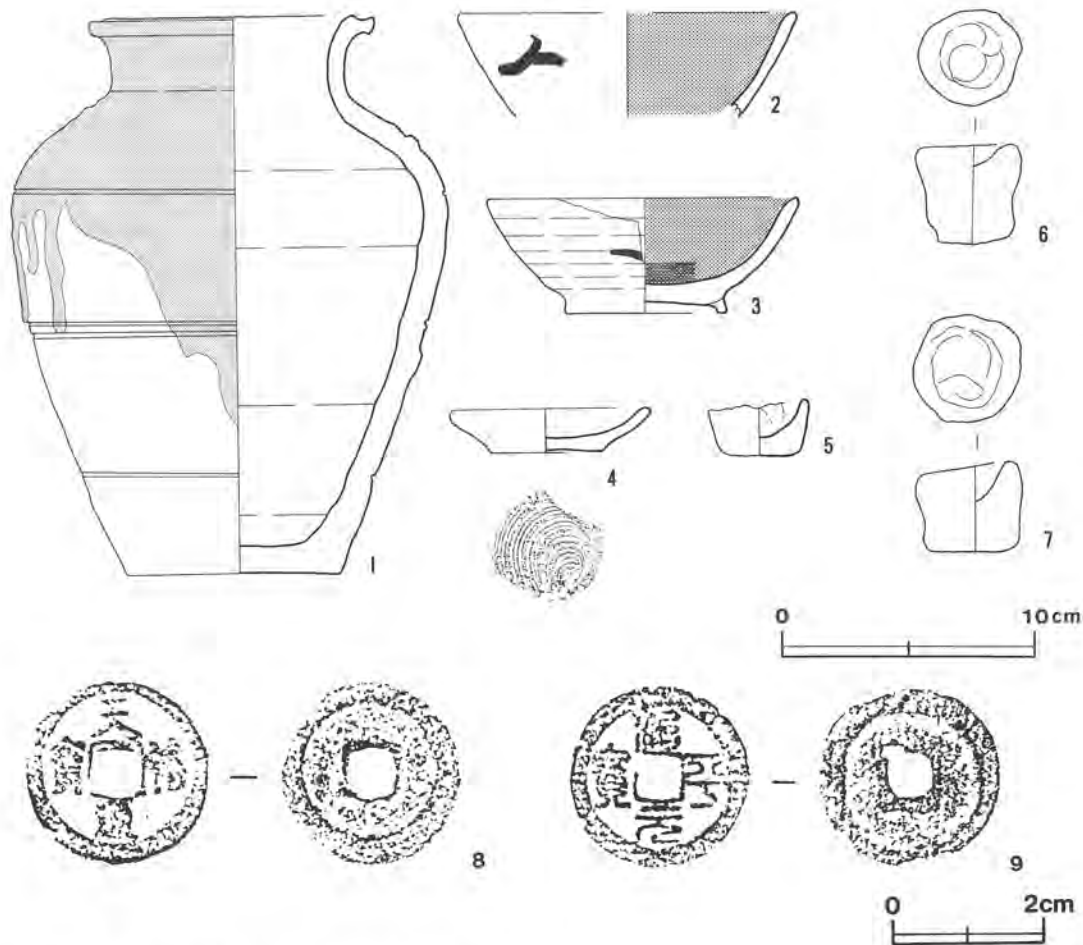
当遺跡3・4区では、遺構外からも若干の遺物が採集されている。それらは、本来いずれかの遺構に伴うものと思われるが、ここでは安易な推定をさけ、実測図をもってその一部を紹介するにとどめた。



第349図 3区遺構外出土遺物実測図

3 区遺構外出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第349図 1	坏 土師器	A〔14.8〕 B 4.2 C〔7.8〕	平底。体部は内彎して開き、口縁部は外反する。口唇部は丸い。	水挽き成形。体部下端篋削り。内面篋磨き。底部は回転糸切り後、手持ち篋削り。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	25% P439 体部墨書「一幡」 L2b ₄
2	坏 土師器	A〔12.0〕 B〔2.4〕 C〔7.4〕	平底。体部は内彎して開くが、上位を欠損。	水挽き成形。体部下端と底面は回転篋削り。内面は篋磨き。	砂粒 にぶい橙色 良好	15% P440 内面黒色処理・ 墨書 L2b ₄
3	坏 土師器	B〔2.3〕 C〔7.2〕	底部片。平底。体部は内彎して開くが、上位を欠損。	水挽き成形。内面篋磨き。底部回転篋削り。	砂粒・雲母・スコリア 明赤褐色 普通	30% P444 内面黒色処理・ 墨書文字不明 M2f ₃
4	高台付埴 土師器	A〔12.5〕 B 4.8 D 0.8 E 6.5	平底。高台は短く垂下する。接地面は丸い。体部は内彎して開き、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。内面は篋磨き。高台は貼り付け。底部は回転篋削り。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	30% P410 内面黒色処理・ 底部刻文「+」 L3a ₁
5	高台付皿 土師器	A 13.0 B〔2.5〕	平底。高台欠損。体部は外傾して大きく開き、口縁部に至る。口唇部は丸い。	水挽き成形。内面篋磨き。高台は貼り付け。底部は回転篋削り。	砂粒・雲母 浅黄橙色 良好	70% P445 内面黒色処理・ 墨書「一幡」 M1e ₀
6	坏 土師器	B〔3.4〕	体部片。口縁部はわずかに外反し、口唇部は丸い。	水挽き成形。	砂粒 橙色 普通	10% P446 墨書「幡」 N1a ₀
7	坏 土師器	B〔2.6〕	口縁部片。口唇部は丸い。	水挽き成形。内面篋磨き。	砂粒 橙色 良好	5% P442 内面黒色処理・ 体部墨書「幡」 L2b ₄
8	皿 土師器	B〔1.5〕	口縁部片。口縁部は外反し、口唇部は丸い。	水挽き成形。内面篋磨き。	スコリア・雲母・ 砂粒 にぶい橙色 良好	不明 P443 内面黒色処理・ 体部墨書「一」 M2d ₃
9	坏 土師器	B〔1.7〕	底部片。平底で、体部は内彎して開く。	水挽き成形。内面篋磨き。底部は糸切り後、手持ち篋削り。	砂粒 橙色 普通	5% P441 内面黒色処理・体 部墨書文字不明 L2b ₄



第350図 4区遺構外出土遺物実測図

4区遺構外出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第350図 1	壺 陶器 (常滑)	A 11.3 B 22.0 C 8.5	三筋壺。平底。最大径を胴部上位に持って膨らみ、肩が張る。頸部は直立し、口縁部は強く外反する。	粘土巻き上げ成形。外面ナデ整形で、胴部上位・中位・下位に横位の沈線を施す。	— 灰褐色 良好	100% P230 PL93 外面に灰軸かかる。
2	坏 土師器	A [13.5] B (4.1)	口縁部片。	水挽き成形。内面篋磨き。	砂粒 橙色 普通	15% P267 PL94 内面黒色処理・ 体部に墨書「人」 M6f。
3	高台付坏 土師器	A [12.4] B 4.6 D 0.6 E 6.4	上げ底。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は平坦。体部は内灣して開き、口縁部に至る。	水挽き成形。内面篋磨き。高台は貼り付け。底部は糸切り後ナデる。	砂粒 にぶい橙色 普通	70% P263 内面黒色処理・ 体部に墨書「人」か C7a。

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第350図 4	小皿 土師質土器	A 8.0	底部はわずかに引き締まり、体部は内彎して大きく開く。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア 橙色 普通	40% P253 M6e
		B 1.8				
		C 4.5				
5	手捏土器 (塊形) 土師器	A 4.0	平底。塊状を呈する。	手捏成形。内面指ナデ整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	100% P261 PL90 O6b
		B 2.2				
		C 2.8				

第9節 土器以外の出土遺物

本節では、3・4区から出土した土器以外の遺物と墨書・刻書について、土製品、石製品、金属製品、古銭、墨書・刻書にわけて、それぞれの法量、特徴等を一覧表にまとめて掲載した。

1 土製品

表4 3区土製品一覧表

図版番号	器種	台帳番号	長さ × 幅 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	出土地点	備考
第18図15	球状土錘	DP 4	3.0 × 3.0	0.7	26.2	SI 1	
第18図16	球状土錘	DP 5	2.9 × 3.1	0.6	20.9	SI 1	
第18図17	球状土錘	DP 6	3.3 × 2.7	0.6	23.3	SI 1	
第18図18	球状土錘	DP 7	3.2 × 2.9	0.7	23.0	SI 1	
第18図19	球状土錘	DP 8	2.1 × 2.7	0.7	11.4	SI 1	
第18図20	球状土錘	DP 9	2.8 × 2.6	0.7	15.3	SI 1	
第18図21	球状土錘	DP 10	2.8 × 3.1	0.6	19.6	SI 1	
第18図22	球状土錘	DP 11	3.2 × 2.7	0.8	20.8	SI 1	
第18図23	球状土錘	DP 12	2.8 × 3.3	0.7	21.9	SI 1	
第18図24	球状土錘	DP 13	2.9 × 2.9	0.7	21.4	SI 1	
第18図25	球状土錘	DP 14	3.0 × 2.7	0.6	16.0	SI 1	
第18図26	球状土錘	DP 15	3.1 × 2.6	0.5	16.8	SI 1	
第18図27	球状土錘	DP 16	2.7 × 2.9	0.7	15.3	SI 1	
第18図28	球状土錘	DP 17	2.6 × 2.9	0.6	19.1	SI 1	
第18図29	球状土錘	DP 18	2.7 × 2.9	0.7	15.0	SI 1	
第18図30	球状土錘	DP 19	2.4 × 2.9	0.7	16.6	SI 1	
第18図31	球状土錘	DP 20	3.1 × (2.3)	0.8	(15.0)	SI 1	欠損。
第18図32	球状土錘	DP 21	2.7 × 3.2	0.6	20.8	SI 1	

図版番号	器種	台帳番号	長さ × 幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点	備考
第18図33	球状土錘	DP 22	3.0 × 2.7	0.6	18.9	SI 1	
—	球状土錘	DP 23	3.3 × 2.7	0.5	20.1	SI 1	
—	球状土錘	DP 24	(2.9) × (1.7)	不明	(8.0)	SI 1	欠損。
—	球状土錘	DP 25	(1.3) × (0.9)	不明	(1.4)	SI 1	欠損。
第157図9	支脚	DP 138	(13.9) × 9.0	—	(764.8)	SI 6	欠損。
第161図4	支脚	DP 140	12.6 × 9.5	—	797.7	SI 12	
第28図9	球状土錘	DP 26	3.2 × 3.2	1.1	27.6	SI 15	
第28図10	球状土錘	DP 27	3.4 × 3.4	0.7	32.5	SI 15	
第28図11	球状土錘	DP 28	2.9 × 2.6	1.1	15.2	SI 15	
第30図4	不明	DP 141	(3.7) × (3.0)	—	(7.2)	SI 19	土器片を砥石に代用か。PL95
第32図3	球状土錘	DP 29	4.0 × 4.1	0.8	52.8	SI 21	
第42図10	球状土錘	DP 30	3.0 × 3.1	1.0	22.0	SI 33	
第44図9	球状土錘	DP 31	2.7 × 2.8	0.7	17.9	SI 36	
第44図10	球状土錘	DP 32	2.8 × 2.9	0.6	19.3	SI 36	
第44図11	球状土錘	DP 33	2.6 × 3.0	0.6	19.7	SI 36	
第44図12	球状土錘	DP 34	2.6 × 2.7	0.6	15.1	SI 36	
第44図13	球状土錘	DP 35	2.7 × 2.8	0.6	18.6	SI 36	
第44図14	球状土錘	DP 36	3.0 × 3.0	0.6	20.6	SI 36	
第44図15	球状土錘	DP 37	2.7 × 3.1	0.6	19.7	SI 36	
第44図16	球状土錘	DP 38	3.4 × 3.7	0.7	34.4	SI 36	
—	球状土錘	DP 143	2.8 × (1.8)	(0.6)	(7.3)	SI 37	欠損。
第49図27	球状土錘	DP 124	2.9 × 2.9	0.7	21.1	SI 38	
第49図26	不明	DP 125	(3.9) × (3.1)	—	(10.9)	SI 38	土器片を砥石に代用か。
第53図6	球状土錘	DP 39	3.1 × 2.7	0.6	18.5	SI 40	
第53図7	球状土錘	DP 40	2.4 × 2.8	0.7	(9.4)	SI 40	欠損。
第55図7	球状土錘	DP 126	(2.1) × (1.2)	不明	(3.2)	SI 41	欠損。
第55図8	不明	DP 127	(4.9) × (2.0)	—	(5.1)	SI 41	土器片を砥石に代用したものか。
第57図4	球状土錘	DP 41	3.0 × 3.3	0.7	25.6	SI 42	
第57図5	球状土錘	DP 42	3.4 × 3.5	0.7	37.2	SI 42	
第57図6	不明	DP 43	(0.5) × (3.9)	—	(5.6)	SI 42	土器片を砥石に代用か。
第60図18	球状土錘	DP 128	3.0 × 3.0	0.6	23.2	SI 43	
第60図19	不明	DP 129	(4.5) × (3.8)	—	(13.0)	SI 43	土器片利用。
第62図6	球状土錘	DP 44	2.6 × 2.5	0.7	14.2	SI 44	
第62図7	球状土錘	DP 45	3.2 × 3.1	0.6	24.3	SI 44	

図版番号	器種	台帳番号	長さ × 幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点	備考
第 62 図 8	管状土錘	DP 46	5.1 × 4.1	1.8	(32.6)	SI 44	欠損。
第 62 図 9	紡錘車	DP 47	2.2 × 5.8	0.7	64.9	SI 44	PL45
第 64 図 4	球状土錘	DP 130	3.2 × 3.1	0.6	21.3	SI 50	
第172 図 5	紡錘車	DP 144	2.1 × 4.6	0.9	(27.6)	SI 51	欠損。
第172 図 6	紡錘車	DP 145	1.9 × (3.6)	0.6	(12.8)	SI 51	欠損。
—	球状土錘	DP 146	(1.9) × (1.6)	(0.8)	(5.7)	SI 51	欠損。
第 66 図 5	球状土錘	DP 48	3.0 × 3.1	0.6	24.3	SI 52	
第 13 図 6	球状土錘	DP 1	3.0 × 3.1	0.7	23.0	SI 53	
第 68 図 6	紡錘車	DP 49	1.2 × 4.8	0.8	(17.0)	SI 55	欠損。PL95
第 76 図 3	球状土錘	DP 50	2.7 × 3.1	0.8	24.4	SI 61	
第 76 図 4	球状土錘	DP 51	3.4 × 3.4	0.6	33.0	SI 61	
第 76 図 5	球状土錘	DP 52	2.7 × 2.7	0.6	16.2	SI 61	
第 76 図 6	管状土錘	DP 53	6.0 × 4.4	1.2	138.7	SI 61	
第 76 図 7	管状土錘	DP 54	6.2 × 4.4	不明	(90.4)	SI 61	欠損。
第175 図14	臼形模造品	DP 166	4.5 × 5.8	—	101.6	SI 64	
第176 図15	紡錘車	DP 147	2.2 × 5.7	0.8	(33.3)	SI 64	欠損。PL95
第 82 図10	球状土錘	DP 55	2.8 × 3.0	0.6	22.4	SI 65	
第 82 図11	球状土錘	DP 56	3.5 × 3.3	0.6	36.2	SI 65	
第 82 図12	球状土錘	DP 57	(2.3) × 3.0	不明	(10.5)	SI 65	欠損。
第 82 図13	球状土錘	DP 58	2.3 × 2.8	0.8	14.9	SI 65	
第 82 図14	球状土錘	DP 59	2.4 × 3.0	0.6	17.6	SI 65	
第 82 図15	球状土錘	DP 60	2.1 × 2.8	0.6	13.7	SI 65	
第 82 図16	球状土錘	DP 61	2.4 × 3.0	1.1	17.9	SI 65	
第 82 図17	球状土錘	DP 62	2.2 × 3.0	0.6	14.8	SI 65	
第 82 図18	球状土錘	DP 63	2.3 × 2.8	0.8	15.9	SI 65	
第 82 図19	球状土錘	DP 64	2.4 × 3.1	0.6	19.8	SI 65	
第 82 図20	球状土製品	DP 65	2.2 × 2.8	—	12.4	SI 65	PL95
第178 図10	球状土錘	DP 148	2.7 × 2.6	0.7	17.4	SI 66	
第178 図11	球状土製品	DP 149	2.1 × 1.9	—	8.3	SI 66	
第178 図12	管状土錘	DP 150	3.3 × 2.3	0.6	22.9	SI 66	
第 86 図21	球状土錘	DP 66	3.1 × 3.1	0.5	26.6	SI 68	
第 86 図22	球状土錘	DP 67	3.3 × 3.3	0.6	27.2	SI 68	
第 86 図23	球状土錘	DP 68	2.8 × 3.3	0.6	25.2	SI 68	
第 86 図24	球状土錘	DP 69	2.9 × 3.1	0.7	(12.4)	SI 68	欠損。

図版番号	器種	台帳番号	長さ × 幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点	備考
第 86図25	球状土錘	DP 70	3.2 × (3.5)	(0.7)	(15.8)	SI 68	欠損。
第 86図26	球状土錘	DP 71	(3.1) × (3.0)	不明	(9.0)	SI 68	欠損。
第 86図27	球状土錘	DP 72	3.1 × (3.1)	不明	(12.9)	SI 68	欠損。
第 86図28	球状土錘	DP 73	2.8 × (2.8)	(0.5)	(10.6)	SI 68	欠損。
第 87図29	管状土錘	DP 74	3.5 × 2.6	0.6	27.9	SI 68	
第 87図30	管状土錘	DP 75	3.8 × 2.7	0.7	28.5	SI 68	
第 87図31	管状土錘	DP 76	3.4 × 2.7	0.6	(18.9)	SI 68	欠損。
第 87図32	管状土錘	DP 77	3.7 × 2.6	0.8	(19.5)	SI 68	欠損。
第 87図34	管状土錘	DP 78	3.6 × 2.5	0.7	(19.6)	SI 68	欠損。
第 87図34	管状土錘	DP 79	4.3 × 2.6	0.7	37.3	SI 68	
第 87図35	管状土錘	DP 80	3.6 × 2.8	0.7	28.1	SI 68	
第 87図36	管状土錘	DP 81	3.6 × 2.5	0.6	27.3	SI 68	
第 87図37	管状土錘	DP 82	3.1 × 2.7	0.7	22.3	SI 68	
第 87図38	管状土錘	DP 83	3.4 × 2.5	0.6	24.2	SI 68	
第 87図39	管状土錘	DP 84	3.7 × 2.4	0.6	22.9	SI 68	
第 87図40	管状土錘	DP 85	3.4 × 2.6	0.6	27.2	SI 68	
第 87図41	管状土錘	DP 86	3.4 × 2.3	0.6	19.5	SI 68	
第 87図42	管状土錘	DP 87	3.5 × (2.5)	(0.5)	(10.7)	SI 68	欠損。
第 89図 2	球状土錘	DP 88	3.0 × 3.5	0.8	29.5	SI 71	
第 89図 3	球状土錘	DP 89	3.2 × 3.1	0.6	21.4	SI 71	
第 89図 4	管状土錘	DP 90	5.2 × (4.7)	0.8	(59.0)	SI 71	欠損。
第 93図 6	球状土錘	DP 91	3.3 × 3.5	0.8	36.7	SI 75	
第 93図 7	球状土錘	DP 92	3.2 × 3.1	0.5	25.5	SI 75	
第 93図 8	球状土錘	DP 93	3.3 × 3.3	0.7	31.4	SI 75	
第 96図 4	球状土錘	DP 94	3.6 × 3.6	0.5	30.2	SI 77	
第184図 2	球状土錘	DP 151	2.7 × 2.5	0.4	12.0	SI 82	
第189図 8	球状土錘	DP 152	2.6 × 2.9	0.6	19.6	SI 91	
第193図 4	支脚	DP 153	(5.9) × (6.1)	—	(156.0)	SI 93	欠損。PL81
第 15図14	球状土錘	DP 2	4.0 × (3.1)	(0.5)	(27.1)	SI 94	欠損。
第 15図15	球状土錘	DP 3	2.9 × 3.2	0.5	26.9	SI 94	
第195図 8	球状土錘	DP 154	2.2 × 2.2	0.6	11.7	SI 97	
第100図 3	球状土錘	DP 95	2.5 × (3.1)	0.5	(10.6)	SI 98	欠損。
第102図 4	球状土錘	DP 96	3.0 × 2.9	0.9	24.6	SI 99	
第197図 4	紡錘車	DP 167	1.9 × 6.1	1.1	66.6	SI 100	須恵器。PL95

図版番号	器種	台帳番号	長さ × 幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点	備考
第202図9	支脚	DP 155	16.3 × 8.6	—	(998.9)	SI 102	欠損。
第109図22	球状土錘	DP 97	2.6 × 2.8	0.7	15.1	SI 107	
第109図23	球状土錘	DP 98	2.9 × 2.8	0.7	17.5	SI 107	
第109図24	球状土錘	DP 99	2.9 × 2.8	0.6	19.1	SI 107	
第109図25	球状土錘	DP 100	2.8 × 2.5	0.8	15.6	SI 107	
第109図26	球状土錘	DP 101	2.6 × 2.7	0.9	15.5	SI 107	
第109図27	球状土錘	DP 102	3.2 × 3.3	0.6	30.8	SI 107	
第109図28	球状土錘	DP 103	3.2 × 3.6	0.8	41.4	SI 107	
第109図29	球状土錘	DP 104	2.6 × 2.5	0.7	13.4	SI 107	
第109図30	球状土錘	DP 105	2.6 × 2.5	0.6	14.8	SI 107	
第109図31	球状土錘	DP 106	2.7 × 3.0	0.8	21.8	SI 107	
第109図32	球状土錘	DP 107	2.5 × 2.8	0.9	18.7	SI 107	
第109図33	球状土錘	DP 108	2.3 × 2.8	0.8	16.5	SI 107	
第109図34	球状土錘	DP 109	2.5 × 2.6	0.7	15.5	SI 107	
第109図35	球状土錘	DP 110	2.3 × 2.2	0.7	7.8	SI 107	
第109図36	球状土錘	DP 111	2.5 × 2.5	0.7	14.5	SI 107	
第109図37	球状土錘	DP 112	2.4 × 2.5	0.5	15.7	SI 107	
第109図38	球状土錘	DP 113	2.6 × 2.4	0.7	13.9	SI 107	
第109図39	球状土錘	DP 114	2.4 × 2.7	0.8	13.7	SI 107	
第109図40	球状土錘	DP 115	2.4 × 2.9	1.2	17.6	SI 107	
第109図41	球状土錘	DP 116	2.8 × 2.2	0.7	12.4	SI 107	
第109図42	球状土錘	DP 117	2.8 × (2.7)	0.8	(9.0)	SI 107	欠損。
第109図43	球状土錘	DP 118	2.7 × (2.8)	(0.7)	(9.3)	SI 107	欠損。
第109図44	球状土錘	DP 119	2.4 × (2.3)	(0.7)	(5.5)	SI 107	欠損。
第109図45	球状土錘	DP 120	3.1 × (3.4)	(0.9)	(15.2)	SI 107	欠損。
第109図46	管状土錘	DP 121	6.1 × 3.7	1.1	97.9	SI 107	
第112図4	支脚	DP 131	(14.4) × 5.9	—	(356.2)	SI 108	欠損。
第115図6	球状土錘	DP 132	2.2 × 2.3	0.6	12.2	SI 112	
第115図7	管状土錘	DP 133	6.2 × 4.9	1.8	150.4	SI 112	
第210図3	支脚	DP 156	(14.9) × 11.2	—	(1420.5)	SI 113	欠損。
第117図2	球状土錘	DP 122	2.4 × (1.3)	0.5	(3.8)	SI 114	欠損。
第117図3	管状土錘	DP 123	(2.7) × (1.8)	不明	(13.3)	SI 114	欠損。
第120図4	球状土錘	DP 134	2.9 × 3.1	0.7	23.3	SI 115	
第120図5	球状土錘	DP 135	2.6 × 2.5	0.7	14.5	SI 115	

図版番号	器種	台帳番号	長さ × 幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点	備考
第120図6	球状土錘	DP 136	3.2 × 3.2	1.0	30.3	SI 115	
第120図7	支脚	DP 137	14.8 × 10.1	—	677.9	SI 115	
第317図1	獣形土製品	DP 157	4.2 × 3.2	—	(12.0)	SE 2	犬か。頭頂部1孔,尻部に2孔を持つ。右側の前・後脚欠損。PL95
—	球状土錘	DP 158	(3.1) × (1.4)	(0.6)	(7.0)	L3h _a	欠損。
—	球状土錘	DP 159	3.0 × (2.2)	(0.7)	(14.6)	L4b _a	欠損。
—	球状土錘	DP 160	1.8 × 2.1	0.7	8.2	M2b _a	
—	管状土錘	DP 161	(3.4) × 3.8	0.7	(47.5)	M2d _a	欠損。
—	球状土錘	DP 162	2.9 × 1.7	0.6	10.0	M2f _a	
—	球状土錘	DP 163	2.6 × (2.9)	(0.5)	(20.6)	M2g ₂	欠損。
—	球状土錘	DP 164	1.4 × 1.6	0.3	3.0	M3j _a	
—	球状土錘	DP 165	2.6 × 2.5	0.6	16.1	M5d _a	

表5 4区土製品一覧表

図版番号	器種	台帳番号	長さ × 幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点	備考
第213図10	支脚	DP 13	(14.4) × 8.0	—	(670.6)	SI 1	欠損。
第123図4	球状土錘	DP 1	3.0 × 2.7	0.7	18.0	SI 8	
第123図5	球状土錘	DP 2	3.3 × 3.3	0.7	28.9	SI 8	
第219図8	支脚	DP 14	13.8 × 8.8	—	950.8	SI 10	
第129図7	管状土錘	DP 3	(6.2) × 4.9	(1.0)	(89.6)	SI 15	欠損。
第235図3	球状土製品	DP 15	1.3 × 1.2	—	1.9	SI 21	両端に直径3mm,深さ4mmの円錐形の窪みを持つが貫通せず。
第134図14	紡錘車	DP 16	2.3 × 5.2	0.9	73.7	SI 23	
第134図13	球状土錘	DP 17	1.4 × 1.6	0.2	3.3	SI 23	
第134図15	支脚	DP 18	(23.3) × 9.3	—	(1045.6)	SI 23	欠損。
第134図16	支脚	DP 19	(10.5) × 7.7	—	(410.2)	SI 23	欠損。
第136図5	球状土錘	DP 4	3.1 × 3.3	0.8	28.7	SI 24	
第136図6	球状土錘	DP 5	2.8 × 3.3	0.7	23.0	SI 24	
第136図7	球状土錘	DP 6	2.7 × 3.3	0.7	25.3	SI 24	
第139図21	球状土錘	DP 7	2.9 × 3.0	0.7	22.0	SI 25	
第139図22	球状土錘	DP 8	2.9 × 3.3	0.7	26.5	SI 25	
第139図23	球状土錘	DP 9	2.9 × 3.2	0.7	23.5	SI 25	
第246図6	白形模造品	DP 20	(5.2) × 4.5	—	(61.2)	SI 29	一部欠損。
第142図2	球状土錘	DP 10	3.2 × 3.4	0.6	30.1	SI 32	
第252図3	球状土錘	DP 21	3.5 × 2.9	1.0	29.5	SI 33	

図版番号	器種	台帳番号	長さ × 幅 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	出土地点	備考
第255図10	紡錘車	DP 22	2.7 × 6.1	1.1	68.3	SI 34	PL95
第144図2	塊状土製品	DP 11	3.9 × 4.3	—	44.1	SI 35	
第149図5	勾玉	DP 12	1.2 × 3.8	0.2	6.1	SI 39	
第262図6	球状土製品	DP 23	(1.9) × 2.4	—	(7.7)	SI 40	欠損。
第274図6	球状土錘	DP 24	2.7 × 2.6	1.0	17.2	SI 47	
第276図7	紡錘車	DP 25	1.1 × 6.6	(0.8)	(21.9)	SI 49	欠損。
第279図1	管状土錘	DP 26	2.1 × 1.1	0.3	2.9	SI 53	
—	球状土錘	DP 27	2.2 × (1.5)	0.5	(4.3)	SK 87	欠損。
—	球状土錘	DP 28	3.3 × (2.2)	0.7	(21.7)	SD 1	欠損。
—	球状土錘	DP 29	2.5 × (1.6)	0.6	(8.4)	SD 4	欠損。
—	球状土錘	DP 30	2.5 × 2.8	0.8	16.8	M5g ₄	
—	紡錘車	DP 31	1.2 × 3.5	0.7	15.7	M6e ₃	
第350図6	臼形模造品	DP 32	4.0 × 4.2	—	63.2	N7a ₄	
第350図7	臼形模造品	DP 33	3.6 × 4.3	—	62.2	N7a ₄	

2 石器・石製品

表6 3区石器・石製品一覧表

図版番号	器種	台帳番号	長さ × 幅 × 厚さ (cm)	重量 (g)	石質	出土地点	備考
第28図13	砥石	Q 3	(12.8) × 5.7 × 5.3	(300.3)	砂岩	SI 15	欠損。PL95
第28図12	砥石	Q 4	(6.9) × 2.6 × 1.7	(40.1)	砂岩	SI 15	欠損。
第166図3	砥石	Q 13	(5.6) × 4.3 × 2.0	(70.8)	凝灰岩	SI 26	欠損。
第49図28	紡錘車	Q 8	5.0 × 1.2	30.3	滑石	SI 38	孔径0.9cm。PL95
第49図29	石製模造品	Q 9	(2.5) × (2.1) × (0.4)	(1.7)	滑石	SI 38	欠損。
第49図30	台石	Q 10	(23.0) × (27.1) × (15.2)	(10.7kg)	硬砂岩	SI 38	欠損。
第55図9	砥石	Q 11	(3.9) × 5.2 × 1.2	(29.6)	頁岩	SI 41	孔径0.7cm。欠損。
第60図20	砥石	Q 12	(5.8) × 4.5 × 2.2	(110.5)	粘板岩	SI 43	
第172図7	砥石	Q 14	(3.6) × 3.9 × 1.1	(18.1)	凝灰岩	SI 51	欠損。
第13図7	勾玉	Q 1	2.8 × 1.8 × 1.2	6.8	ヒスイ	SI 53	孔径0.2cm。PL95
第176図16	砥石	Q 15	(7.6) × 4.8 × 3.1	(115.9)	凝灰岩	SI 64	欠損。
第96図5	剣形模造品	Q 5	4.3 × 2.0 × 0.6	6.3	滑石	SI 77	PL95
—	砥石	Q 2	(10.0) × 6.2 × 3.3	(181.8)	砂岩	SI 94	欠損。

図版番号	器種	台帳番号	長さ × 幅 × 厚さ (cm)	重量 (g)	石質	出土地点	備考
—	砥石	Q 6	(13.1) × 8.0 × 3.8	(431.8)	砂岩	SI 95	欠損。
第109図47	有孔円板	Q 7	3.7 × 0.5	13.4	滑石	SI 107	孔径0.2cm。
—	敲石	Q 17	11.6 × 7.2 × 4.7	(597.1)	閃緑岩	SI 113	欠損。
—	磔	Q 18	(7.1) × 6.5 × 4.4	(283.4)	石英斑岩	SI 115	欠損。
第308図11	紡錘車	Q 19	5.3 × 1.8	55.1	頁岩	SK 125	孔径1.0cm。
第330図4	砥石	Q 20	(2.3) × (3.6) × (1.9)	(20.5)	凝灰岩	SD 5	欠損。
—	砥石	Q 21	8.4 × 4.0 × 2.7	(102.6)	凝灰岩	SD 14	欠損。
—	砥石	Q 22	8.3 × 3.1 × 2.2	(95.9)	凝灰岩	K3f ₁	欠損。

表7 4区石器・石製品一覧表

図版番号	器種	台帳番号	長さ × 幅 × 厚さ (cm)	重量 (g)	石質	出土地点	備考
—	砥石	Q 1	(7.0) × 4.8 × (3.3)	(101.1)	凝灰岩	SI 8	欠損。
第123図6	石製模造品	Q 2	3.9 × 0.5 × 0.5	(1.4)	滑石	SI 8	針状。欠損。
第219図9	紡錘車	Q 3	(3.7) × 1.0	(8.8)	粘板岩	SI 10	孔径0.7cm。欠損。
第223図7	砥石	Q 4	16.6 × 7.0 × 6.7	(1219.4)	硬砂岩	SI 18	欠損。
第237図5	紡錘車	Q 5	4.9 × 5.0 × 1.6	56.3	粘板岩	SI 22	
—	磨石	Q 6	10.6 × 7.8 × 4.2	493.3	流紋岩	SI 23	
—	磨石	Q 7	(6.3) × 7.6 × 6.5	(368.4)	流紋岩	SI 23	欠損。
第134図17	砥石	Q 8	(22.2) × 6.2 × 6.3	(757.8)	凝灰岩	SI 23	欠損。PL95
—	磔	Q 9	9.9 × 5.0 × 2.7	186.4	砂岩	SI 24	欠損。
第255図11	磔	Q 10	(11.0) × 4.4 × 1.1	(93.0)	角閃片岩	SI 34	欠損。
第257図6	砥石	Q 11	(4.1) × 3.5 × 2.0	(36.3)	凝灰岩	SI 37	欠損。
第267図15	砥石	Q 12	(7.5) × 4.3 × 1.0	(58.5)	凝灰岩	SI 42	欠損。
第274図7	砥石	Q 13	(10.5) × (3.7) × 2.9	(184.6)	砂岩	SI 47	欠損。
—	砥石	Q 14	(8.9) × 4.0 × 2.4	(131.1)	凝灰岩	SD 3	欠損。PL95
—	砥石	Q 15	(9.0) × 2.9 × 3.3	(145.1)	凝灰岩	SD 3	欠損。PL95
第348図2	砥石	Q 16	10.8 × 2.9 × 3.3	(102.9)	凝灰岩	SX	欠損。PL95

3 金属製品

表8 3区金属製品一覧表

図版番号	器種	材質	台帳番号	長さ × 幅 × 厚さ (cm)	重量(g)	出土地点	備考
第154図4	釘	鉄	M8	3.7 × 1.3 × 0.4	3.8	SI2	断面四角形。基部折れ曲る。
第159図5	釘	鉄	M9	6.0 × 2.5 × 0.4	8.8	SI11	断面四角形。
第26図1	鎌	鉄	M1	(11.1) × 2.9 × 0.3	(40.1)	SI14	先端部欠損。
第167図1	刀子	鉄	M39	(11.0) × 2.2 × 0.3	(15.8)	SI37	茎に木片付着。
第49図31	鉄 鍬	鉄	M3	(8.9) × 1.6 × 0.3	(5.4)	SI38	篋代部。鍬身部欠損。
第51図9	鎌	鉄	M4	(9.2) × 4.6 × 0.1	(36.1)	SI39	先端部及び柄装着部を欠損。PL96
第51図10	不明	鉄	M5	(3.6) × 1.1 × 0.2	(1.9)	SI39	断面四角形。刀子の茎か。
第64図5	鍬 <small>カスガイ</small>	鉄	M7	4.0 × 1.8 × 0.5	(8.7)	SI50	断面四角形。欠損。
第176図17	不明	鉄	M11	2.1 × 2.0 × 0.1	2.9	SI64	板状で環状に折れ曲る。
第176図18	鉄 鍬	鉄	M12	(6.2) × (2.4) × 0.3	(6.2)	SI64	雁股式。鍬身の大部分を欠損。PL96
第176図19	刀子	鉄	M13	(6.3) × 1.3 × 0.4	(7.5)	SI64	茎及び刀身の先端部を欠損。
第176図20	不明	鉄	M14	19.5 × 1.2 × 0.8	95.9	SI64	断面四角形。棒状を呈する。
第178図13	刀子	鉄	M15	(5.0) × 1.2 × 0.2	(4.4)	SI66	茎の大部分と刀身の先端部を欠損。
第89図5	不明	鉄	M2	3.7 × 1.6 × 0.2	3.7	SI71	板状を呈す。
第191図5	不明	鉄	M16	(9.3) × 2.3 × 0.1	(16.1)	SI92	一端を欠損。板状で彎曲。片面に2本の突起を持つ。PL96
第193図5	刀子	鉄	M17	(6.5) × 1.0 × 0.3	(8.0)	SI93	先端部のみ残存。
第193図5	鎌	鉄	M18	(5.3) × 1.6 × 0.2	(6.9)	SI97	先端部のみ残存。「富壽神宝」に付着して出土。PL96
第195図9	刀子	鉄	M20	(17.7) × 1.6 × 3.0	(28.2)	SI101	先端部欠損。PL96
第200図13	刀子	鉄	M21	(6.3) × 1.5 × 3.5	(8.7)	SI101	区際のみ残存。
第200図14	釘	鉄	M22	7.1 × 1.4 × 0.5	20.4	SI101	断面四角形。基部折れ曲る。
第200図17	釘	鉄	M23	3.6 × 1.4 × 0.5	5.2	SI101	断面四角形。基部丸く膨らむ。木片付着。
第200図15	鉄 鍬	鉄	M24	(7.7) × 3.3 × 0.3	(28.0)	SI101	斧箭式。PL96
第200図16	不明	鉄	M25	5.5 × 1.9 × 0.4	(9.2)	SI101	断面四角形。先端部欠損。後端は環状を呈す。PL96
第115図8	釘	鉄	M6	(4.3) × 1.0 × 0.5	(3.9)	SI112	断面四角形。
第308図12	釘	鉄	M27	5.9 × 0.7 × 0.3	(6.4)	SK125	断面四角形。欠損。
第308図13	煙管	銅	M28	(3.6) × 1.4 × 1.1	(4.0)	SK168	雁首部。火皿欠損。
—	不明	鉄	M29	5.3 × 1.6 × 0.6	9.6	SK408	先端は偏平。
第317図2	煙管	銅	M26	5.5 × 0.9 × 0.6	3.2	SE2	吸口部。
第330図5	煙管	銅	M30	(6.6) × 1.5 × 1.0	(7.3)	SD5	雁首部。火皿は椀状を呈す。
第330図6	不明	鉄	M31	(6.8) × 3.3 × 0.8	(37.9)	SD5	三角形を呈する。PL96

図版番号	器種	材質	台帳番号	長さ × 幅 × 厚さ (cm)	重量(g)	出土地点	備考
—	刀子	鉄	M32	(1.3) × 14.4 × 0.4	(21.6)	C3g _s	先端部欠損。PL96
—	不明	鉄	M33	4.6 × 5.0 × 0.3	31.4	K2g _s	半円形。両側面は折れ曲る。
—	不明	鉄	M34	(6.3) × 0.4 × 3.5	(3.9)	K2i ₇	螺旋状にねじれる。鏃か。
—	不明	鉄	M35	3.4 × 4.6 × 0.3	18.0	K3f ₁	半円形。両側面は「コ」の字状に折れ曲がる。
—	つば	鉄	M36	6.4 × (3.8) × 0.9	(41.2)	K3i ₁	耳は土手状に高まる。欠損。
—	鉄鏃	鉄	M37	(5.3) × (2.7) × 0.3	(11.8)	K3i ₇	平根式。欠損。
—	不明	鉄	M38	(13.7) × 4.0 × 0.4	(133.5)	L2i _s	両端欠損。断面「カマボコ」状を呈する。

表9 4区金属製品一覧表

図版番号	器種	材質	台帳番号	長さ × 幅 × 厚さ (cm)	重量(g)	出土地点	備考
第216図12	刀子	鉄	M6	(11.9) × 1.6 × 0.3	(20.0)	SI2	先端部欠損。PL96
第216図13	不明	鉄	M7	6.1 × 4.4 × 0.2	17.4	SI2	三角形の板状を呈する。
—	釘	鉄	M1	(2.5) × 0.7 × (0.3)	(0.8)	SI8	基部折れ曲る。
—	金具	鉄	M2	2.6 × 2.6 × 0.1	1.4	SI8	円盤状で、中央に長方形の孔を持つ。
—	不明	鉄	M3	6.1 × 1.8 × 2.0	8.8	SI8	板状を呈する。
第219図10	不明	鉄	M12	7.3 × 2.7 × 2.1	13.9	SI10	断面長方形で、一端は尖り、一端は「J」字状に曲る。
第219図11	釘	鉄	M13	(7.4) × 0.6 × 0.4	(6.5)	SI10	断面四角形。基部欠損。
第231図5	釘	鉄	M9	(2.5) × 0.5 × 0.4	(2.1)	SI17	断面四角形。基部・先端部欠損。
第237図6	鎌	鉄	M10	(9.4) × 3.0 × 0.3	(26.7)	SI22	先端部欠損。
第244図7	不明	鉄	M11	2.8 × 2.4 × 1.1	7.1	SI28	櫛歯状を呈する。
第252図4	刀子	鉄	M14	(11.2) × 1.6 × 0.5	(14.5)	SI33	刀身と茎の両端を欠損。
第255図12	鍬先	鉄	M15	(10.7) × 5.7 × 0.4	(43.3)	SI34	断面Y字状を呈する。欠損。PL96
第255図13	鍬先	鉄	M17	(8.1) × 5.4 × 0.3	(34.8)	SI34	断面Y字状を呈する。欠損。
第255図14	鎌	鉄	M16	(7.0) × 3.2 × 0.2	(25.4)	SI34	先端部欠損。
第255図15	刀子	鉄	M18	(5.0) × 1.8 × 0.3	(8.4)	SI34	欠損。
第259図3	小型素文鏡	青銅	M19	径2.7,器厚0.12,総高0.6	5.6	SI38	鈕は円錐形で、孔径は0.23cm。鏡面は彎曲し凸面。
第267図16	刀子	鉄	M20	(27.7) × 1.6 × 0.4	(74.5)	SI42	刀身は長く「腰刀」に近いが、先端部欠損。PL96
第152図13	鎌	鉄	M4	(3.6) × (3.8) × (0.3)	(14.0)	SI44	接柄部のみ残存。
第272図11	刀子	鉄	M21	(15.9) × 1.1 × 0.3	(15.6)	SI46	先端部欠損。刀身に藁状物質付着。
第272図10	斧	鉄	M22	7.9 × 3.8 × 2.2	99.5	SI46	接柄部断面は「C」字状を呈する。PL96
第276図8	刀子	鉄	M23	(12.7) × 1.5 × 0.4	(21.0)	SI49	刀身と茎の両端を欠損。茎に木片付着。
第276図9	鎌	鉄	M24	(9.7) × 3.4 × 0.4	(49.1)	SI49	先端部欠損。接柄部に藁が巻き付けられる。

図版番号	器種	材質	台帳番号	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	出土地点	備考
第315図3	釘	鉄	M25	(4.2)×0.9×0.5	(3.9)	SY 1	両端を欠損。
第315図4	釘	鉄	M28	(4.3)×0.4×0.4	(2.3)	SY 1	断面四角形。両端を欠損。
—	碗状 ^{ワシ} 滓	鉄	M31	(5.6)×2.0	(22.9)	SD 5	欠損。
—	環状鉄製品	鉄	M32	4.7×4.7×0.6	18.9	SD16	断面円形。環状を呈する。
第345図13	刀子	鉄	M33	(12.0)×1.3×0.3	(20.7)	SD16	先端部欠損。
第348図3	釘	鉄	M35	2.2×0.5×0.4	1.3	SX	
第348図4	鋸状金具	銅	M36	(3.1)×1.2×0.5	(8.4)	SX	頭部は円形で膨らむ。
第348図5	刀子	鉄	M37	(5.0)×2.0×0.3	(6.7)	SX	欠損。
第348図6	鉄管	鉄	M38	(3.4)×0.5	4.5	SX	欠損。

4 古銭

表10 3区古銭一覧表

図版番号	名称	素材	初鑄年 (西歴)	鑄造地	出土地点	台帳番号	備考
第195図10	富壽神宝	銅	弘仁9年 818	日本	SI97	M19	PL96
第349図10	寛永通宝	銅	寛文8年以降 1668以降	日本	N6j	M10	背痕波型。

表11 4区古銭一覧表

図版番号	名称	素材	初鑄年 (西歴)	鑄造地	出土地点	台帳番号	備考
—	祥符元宝	銅	大中祥符元年 1008	北宋	SI44	M5	欠損。
第309図3	治平元宝	銅	治平元年 1064年頃	北宋	SK30	M26	PL97
第309図4	永樂通宝	銅	永樂6年 1408	明	SK30	M27	PL97
第293図1	聖宋元宝	銅	建中靖国元年 1101	北宋	SK111	M29	PL97
第348図7	永樂通宝	銅	永樂6年 1408	明	SX	M39	PL97
第348図8	寛永通宝	銅	寛永3年以降 1626以降	日本	SX	M40	古寛永通宝か。PL97
第348図9	天禧通宝	銅	天禧年間 1017頃	北宋	SX	M41	PL97
第348図10	嘉祐通宝	銅	嘉祐元年 1056頃	北宋	SX	M42	(真)PL97
第348図11	天聖元宝	銅	天聖元年 1023頃	北宋	SX	M43	(篆)PL97
第348図12	寛永通宝	銅	寛永3年以降 1626以降	日本	SX	M44	古寛永通宝か。PL97
第348図13	寛永通宝	銅	寛文8年以降 1668以降	日本	SX	M45	新寛永通宝。PL97
第350図8	天禧通宝	銅	天禧年間 1017頃	北宋	L4b	M46	PL97
第350図9	治平元宝	銅	治平元年 1064頃	北宋	N8b	M47	(篆)PL97

5 墨書・刻書

表12 3区墨書・刻書一覧表

No.	出土地点	釈文	種別	器形	器質	文字の位置	図版番号	備考
1	SI 6	路 □	墨書	坏	土師器	体部	第157図5	路大か
2	SI 6	幡	墨書	高台付皿	土師器(内黒)	体部	第157図6	
3	SI 6	□	墨書	坏	土師器(内黒)	体部	第157図7	幡か
4	SI 6	卅	墨書	坏	土師器(内黒)	体部	第157図8	
5	SI11	一 幡	墨書	坏	土師器(内黒)	底部	第159図4	
6	SI12	人	刻書	坏	土師器(内黒)	体部	第161図2	
7	SI51	㊦	墨書	坏	土師器(内黒)	体部	第172図2	
8	SI66	未	刻書	坏	須恵器	底部	第178図4	
9	SI70	大	刻書	坏	須恵器	底部	第180図5	
10	SI91	幡	墨書	坏	土師器(内黒)	体部	第189図4	
11	SI92	幡	墨書	坏	土師器(内黒)	体部	第191図2	
12	SI93	□	墨書	坏	土師器	体部	第193図3	惣か
13	SI97	一 幡	墨書	坏	土師器(内黒)	体部	第195図2	
14	SI97	人	刻書	高台付皿	土師器(内黒)	底部	第195図3	
15	SI97	一 幡	墨書	坏	土師器(内黒)	体部	第195図4	
16	SI97	幡	墨書	坏	土師器(内黒)	体部	第195図5	
17	SI97	一 □	墨書	坏	土師器(内黒)	体部	第195図6	一幡か
18	SI97	一 □	墨書	坏	土師器(内黒)	体部	第195図7	一幡か
19	SI100	一 □	墨書	坏	土師器(内黒)	体部	第197図3	一幡か
20	SI102	田	墨書	坏	土師器(内黒)	体部	第202図5	
21	SI102	ㇿ □	墨書	皿	土師器(内黒)	体部	第202図6	ㇿ幡か
22	SI102	永 幡	墨書	皿	土師器(内黒)	体部	第202図7	
23	SI102	□	墨書	坏	土師器(内黒)	体部	第202図8	幡か
24	SI103	□	墨書	坏	土師器(内黒)	体部	第204図1	幡か
25	SK226	□	墨書	坏	土師器(内黒)	体部	第308図8	幡か
26	SK501	幡	墨書	坏	土師器	体部	第308図5	
27	SK502	□	墨書	高台付坏	土師器(内黒)	体部	第308図6	幡か
28	SK509	幡	墨書	坏	土師器(内黒)	体部	第308図9	
29	SK514	人	墨書	高台付坏	土師器(内黒)	体部	第308図10	
30	SK521	□ □	墨書	坏	土師器(内黒)	体部	第308図7	ㇿ幡か

No.	出土地点	积文	種別	器形	器質	文字の位置	図版番号	備考	
31	L2b4	⊖ 幡	墨書	坏	土師器	体部	第349図1	幡か	
32	L2b4	⊖ 幡	墨書	坏	土師器(内黒)	体部	第349図2		
33	L2b4	□	墨書	坏	土師器(内黒)	体部	第349図7		
34	L2b4	□	墨書	坏	土師器(内黒)	体部	第349図9		
35	L3a4	+	刻書	高台付坑	土師器(内黒)	底部	第349図4		
36	M1e0	一 幡	墨書	高台付皿	土師器(内黒)	体部	第349図5		
37	M2d8	⊖ □	墨書	皿	土師器(内黒)	体部	第349図8		⊖幡か
38	M2fs	□	墨書	皿	土師器(内黒)	底部	第349図3		(不明瞭)
39	N1a9	□	墨書	皿	土師器	底部	第349図6		幡か

表13 4区墨書・刻書一覧表

No.	出土地点	积文	種別	器形	器質	文字の位置	図版番号	備考	
1	SI22	人	刻書	坏	須恵器	底部	第273図4	(不明瞭)	
2	SI34	□	墨書	高台付坏	土師器(内黒)	体部	第255図7		
3	SI34	人	墨書	高台付皿	土師器(内黒)	底部	第255図9		
4	SI37	人	刻書	坏	須恵器	体部	第257図1		
5	SI37	人	刻書	坏	須恵器	体部	第257図3		
6	SI38	人	墨書	坏	土師器(内黒)	内面底部	第259図1		
7	SI38	人	墨書	高台付坏	土師器(内黒)	底部	第259図2		
8	SI42	⊖ 幡	墨書	坏	土師器(内黒)	体部	第266図7		
9	SI42	人	刻書	坏	土師器(内黒)	底部	第266図8		
10	SI42	万	墨書	坏	須恵器	体部	第267図11		
11	SI42	人	墨書	坏	土師器	底部	第267図12		
12	SI42	卅	墨書	高台付坏	土師器(内黒)	体部・底部	第267図13		
13	SI42	□	墨書	高台付皿	土師器(内黒)	体部	第267図14		
14	SI46	未 □	刻書	高台付坏	土師器	底部	第272図7		
15	SI49	□	墨書	坏	土師器	体部	第276図5		
16	SD 4	人	墨書	皿	土師器(内黒)	体部	第345図12		
17	C7a2	□	墨書	高台付坏	土師器(内黒)	体部	第350図3		人か
18	M6fs	人	墨書	坏	土師器(内黒)	体部	第350図2		

第4章 まとめ

昭和56年4月から61年7月にかけて発掘調査を実施した南三島遺跡(100,311m²)から検出された遺構の総数と、各調査区ごとの内訳は下表の通りである。

遺 構	1区	2区	3区	4区	5区	6区	7区	合 計
竪穴住居跡	18	195	114	52	45	84	37	545
縄文時代	18	191	34	7	24	84	37	395
弥生時代	0	0	5	0	1	0	0	6
古墳時代	0	4	47	11	19	0	0	81
奈良時代	0	0	6	23	0	0	0	29
平安時代	0	0	22	11	1	0	0	34
竪穴遺構	0	13	3	1	0	0	0	17
土 坑	96	1088	517	175	113	422	470	2881
炉 穴	27	40	9	0	1	5	0	82
屋 外 炉	0	0	0	0	5	0	0	5
埋 甕 遺 構	0	14	18	0	14	6	5	57
地 下 式 坑	0	0	2	4	9	0	5	20
溝	8		14	17	12	25		76
井 戸	0	1	3	2	1	0	0	7
地 点 貝 塚	1	13	25	3	35	6	1	84
そ の 他	0	0	1	2	0	0	0	3

※・4区のカマドを持つ住居跡のうち、時期を明確にできなかった6軒については、奈良時代に含めて集計した。

・「その他」の項目には、性格不明の遺構と炭窯が含まれる。

本章では、これらの遺構のうち3・4区から検出された弥生時代以降の住居跡を中心に、そこから出土した土器に検討を加え、その特徴や時期を明らかにするとともに、南三島遺跡の弥生時代以降の集落変遷について若干の考察を試みた。

第1節 土器について

南三島遺跡3・4区からは、縄文時代から平安時代にかけての土器及び中世の陶器等が出土しており、これらの土器類のうち、縄文時代に該当するものについては、当教育財団報告書第44集「南三島遺跡3・4区(I)」にまとめられている。本節では、当調査区(3・4区)から出土した

弥生時代以降平安時代までの土器について、住居跡出土の一括資料をもとに、従来の編年資料等を参考にしながら全体を6群に分類し、その概略を述べることにする。なお、中世の陶器類については、出土量が少ないため割愛した。

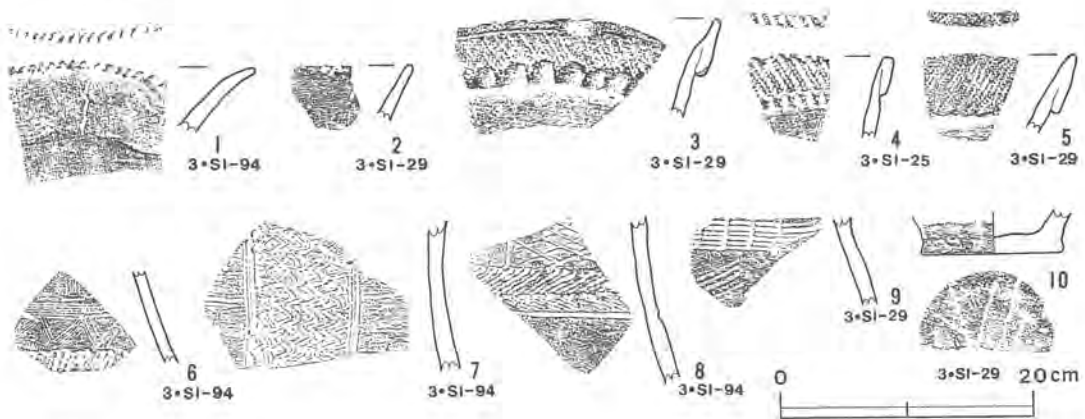
- 第1群 弥生時代後期の土器
- 第2群 古墳時代前期の土器
- 第3群 古墳時代中期の土器
- 第4群 古墳時代後期の土器
- 第5群 奈良時代（8世紀代）の土器
- 第6群 平安時代前期（9世紀後半～10世紀前半）の土器

第1群土器（第351図）

第1群土器は、弥生時代後期に位置付けられる土器群で、3区の第25・27・29・53・94号住居跡から出土した土器片をもって設定した。これらの中には、口縁部片・頸部片・胴部片・底部片が含まれているが、器形全体を実測できるまでに復元されたものは1点もなかった。

口縁部片には単口縁のもの（1・2）と複合口縁のもの（3・4・5）があり、単口縁1の口唇部には、細かな刻みが施されている。複合口縁のものには、折り返し部の下端が厚く、口唇部に向って徐々に薄くなるものと、頸部と口縁部の器厚がほとんど変わらずに口唇部に至るものがあり、どちらにも付加条縄文が施され、3・4の口縁下端には刺突あるいは指圧が連続して加えられている。頸部片には、櫛歯状工具による直線文や波状文等が施文されるもの（6・7）と、縦位の沈線区画内を篋状工具による格子目文で充填するもの（8）、廉状文が施されるもの（9）等がある。なお、胴部片の多くには付加条縄文（付加条1種）が施文され、裾広がり突出する

第1群土器



第351図 土器分類図(1)

底部には木葉痕が認められる。

第2群土器 (第352・353・354図)

第2群土器は、古墳時代前期の五領期に比定される土器群である。本群に属する土器は、3区では37軒の住居跡と第2号竪穴遺構から、4区では6軒の住居跡から出土しており、本節であつかう土器類の中では最も出土量の多いものである。ここでは、器形や整形技法、器種の構成等から、さらに5類に分けて、その特徴や各類型間の前後関係について解説する。

第1類 (第352図)

本類は、3区の第36・42・98号住居跡から出土した土器をもって設定した。器種としては、甕形土器、壺形土器、埴形土器、高环形土器、器台形土器が確認されている。本類は、甕形土器の口唇部に比較的しっかりとした刻みを有する点や、坏部が大きく開き、口唇部に内削ぎが認められる高环形土器、鼓状を呈する小型の器台形土器等から、当遺跡の第2群土器では最も古手のもので古墳時代前期の前葉に位置付けられるものと思われる。

甕形土器(11・12)は、胴部が球状を呈し、口縁部は頸部から「く」の字状に外傾し、口唇部には前述のごとく比較的しっかりとした刻みが存在する。なお、器外面にはハケ目整形が施されている。壺形土器には、胴部が下膨れで胴下半部に最大径を持ち、横位の篋削り整形が施されているもの(13)と、頸部に隆帯が巡るもの(14)とがある。埴形土器には、器高の高いもの(15)と器高が比較的浅く口縁部が内彎気味に大きく開くもの(16)とがある。16は口唇部に刻みが存在し、器内・外面には丁寧な篋磨きが施されている。高环形土器は、坏部のみが確認され、大口径で皿状を呈し、口唇部に内削ぎが認められるもの(17)と、それよりも僅かに口径が狭いもの(18)とがある。どちらの坏部も下位に稜を有し、器全体に丁寧な篋磨きが施されている。器台形土器(19)は、直線的に開く小さな器受部に、短く「ハ」の字状に開く脚部がついている。口径と脚部底径との比率は1:1.1、器受部高と脚部高との比率は1:1.7で、全体として鼓形を呈しているといえる。

第2類 (第352図)

本類は、4区の第24・25号住居跡から出土した土器をもって設定した。器種としては、甕形土器、壺形土器、器台形土器、炉器台形土器のほか、壺形、台付甕形・埴形・高环形等を呈する手捏土器が認められる。本類は、第1類と同様、甕形土器の口唇部に比較的しっかりとした刻みを有するが、器外面のハケ目がナデ整形により消される点や、器台形土器が第1類より大型になる点から設定したものである。第1類と大きな時間差は考えられないが、前述した特徴等から、第1類よりやや新しい時期に位置付けられるものと思われる。

甕形土器は、前述の第1類と同様に口唇部に刻みを持ち、器外面にナデ整形が施されるも

の(20・21)と、胴部中位の張りが強く、口唇部に刻みを持たないもの(22)とがある。壺形土器(23)は、口縁部付近のみが残存している。口縁部は外反して立ち上がり、口唇部の刻み、器外面のナデ整形等は、20・21の甕形土器と類似している。器台形土器も器受部のみが残存しているが、第1類に比べて口径が広がり大型化している。

第3類(第352図)

本類は、3区の第30・31・52・65・68号住居跡と第2号竪穴遺構から出土した土器をもって設定した。器種としては、甕形土器、台付甕形土器、壺形土器、埴形土器、高坏形土器、器台形土器があり、甕形土器の中にはミニチュア的な小型甕形土器が、台付甕形土器の中にはS字口縁を呈するものも含まれている。また、鉢形土器(第38図18)の存在も予想されるが、底部を欠損しているため甕形土器との判別は不可能である。本類は、台付甕形土器が器種全体に占める割合の高いことに特徴があり、その口唇部には、簡略化された刻みが施されていることから、当財団報告書第32集「南三島遺跡5区」で報告者が分類している第6群の第1類にほぼ対応するものと思われる。当調査区では第2類に次ぐ土器群で、S字口縁土器の口縁部^{注1)}形態等から、古墳時代前期の中頃に位置付けられるものと推定される。

甕形土器(25)は、頸部のくびれが少ない広口のもので、口縁部は複合口縁を呈し、器外面はハケ目整形後に篋磨きが施されている。台付甕形土器は、最大径を胴部上位に持ち、それ以下は直線的にすぼまる無花果形を呈するものを主体とし、口縁部は外傾するもの、外反するもの、S字状のもの3種類がある。S字状口縁を除く台付甕形土器の口縁部には、すべて簡略化された刻みが施されている。胴部は丁寧なハケ目整形が施され、中には下半部が篋削りされるもの(26)や、内面に篋磨きが施されるもの(27)もみられる。脚台部は「ハ」の字状に開き、内面は篋ナデ整形が施されている。なお、S字口縁の台付甕形土器(28)は、3区の第31号住居跡から出土したものであるが、器形や胎土等から東海地方で製作されたものとは考えられない。また、石英・長石粒を多量に含む胎土は、当調査区の土器にも類例が認められないことから、周辺地域で製作し搬入されたものと思われる。壺形土器には複合口縁のものと単口縁のものがある。胴部最大径は中位よりわずかに下がった位置にあり、頸部に向って直線的にすぼまるため下膨れの感が残る。29の口縁部は複合口縁で、頸部から強く外傾して開き、上位でわずかに内彎気味となる。30の口縁部は頸部から外傾して開き、頸部と胴部との境には低く鋭い稜を有している。器外面は、縦位の丁寧な篋磨きが施されている。甕形土器(31)は体部が半球状を呈し、口縁部がわずかに外傾する小型のもので、器外面にはハケ目整形が施され、底部には一孔が穿たれている。高坏形土器は、第1類の坏部に比べ口径が小さく、やや深目である。器台形土器は全体的に大型化する。特に脚部が高さを増し、裾広がりになる傾向が強く、器受部高と脚部高との比率は1:2.3、器受部径と脚部底径との比率は1:1.4ほどである。器台形土器の形態には、第31号住居跡出土の35にみられ

るように内彎して開く深目の器受部にがっしりとした脚部を持つものと、第68号住居跡出土の36に見られるように外傾して開く浅い器受部に「ハ」の字状に開くやや低目の脚部を持つものがある。この二つの形態が、時期差を表すものか、単なる手法の違いによるものかは不明であるが、第68号住居跡の所在する位置が、第1類の住居群に近いことや、36の形態が第1類により類似することから、第68号出土例は若干古手のものになる可能性もある。

第4類 (第353図)

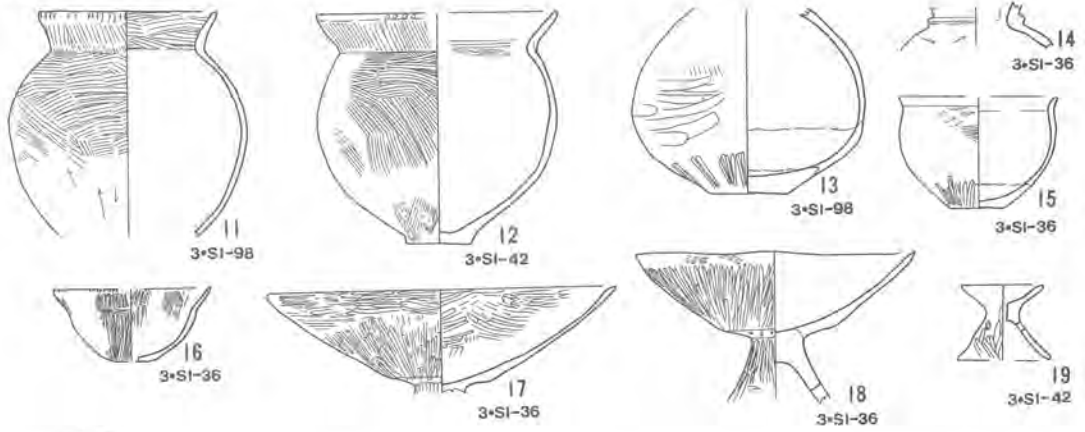
本類は、3区の第1・7・15・19・67・72・75号住居跡から出土した土器をもって設定した。器種としては、甕形土器、台付甕形土器、壺形土器、甑形土器、埴形土器、埴形土器、高坏形土器、器台形土器が確認されている。本類は、台付甕形土器の減少と、その口唇部の刻みが消失する点に特徴があり、前述の「南三島5区」の第6群土器の第2類にほぼ対応するものと考えられる。当調査区では第3類に後続する土器群で、古墳時代前期の中葉以降に位置付けられるものと思われる。

甕形土器 (39・40) は、胴部中位がかなり張り出した球形状で、口縁部は外傾あるいは外反気味に開いている。口縁部から胴部上半にかけては一般にハケ目整形が施されるが、39の口縁部には縦位の指ナデ整形が丁寧に施されている。台付甕形土器 (41) は、第3類に比べて胴下半部がやや膨らみ、全体的に丸味を持つ。台付甕形土器の器外面には、ハケ目整形を施すものと、ハケ目をナデ整形で消しているものがある。壺形土器 (42) は、第2群の中で最も球形に近い胴部を持っている。口縁部は外傾して開くものと、外反して開くものがある。甑形土器 (44) は、第3類に比べ体部が長く大型となり、器外面にはナデ整形が施されている。器台形土器 (48・49) は、裾部がさらに開き、中には脚部底径が11cmをこすものもみられる。

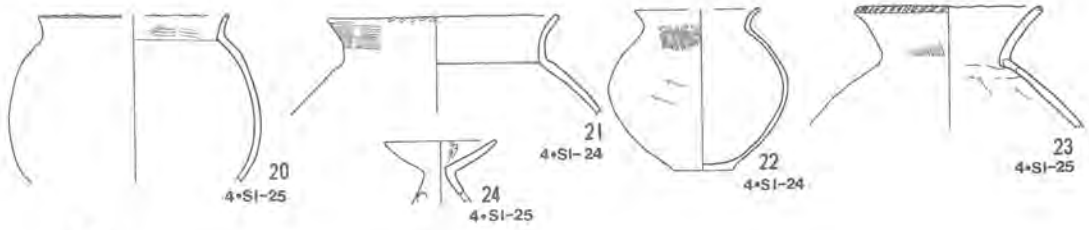
第5類 (第353・354図)

本類は、3区の第107号住居跡と4区の第9号住居跡から出土した土器をもって設定した。器種としては、壺形土器、甑形土器、埴形土器、埴形土器、高坏形土器、大型で粗雑な作りの器台形土器が確認されている。本類は、甕形土器の外面のハケ目がナデ整形によって消される点や、口縁部に横ナデ整形が施される点、長胴化する甕形土器等に特徴がある。また、第4類までみられた小型で丁寧な作りの器台形土器は確認されていない。このようなことから本類は第2群土器の中では最も新しい時期のものと考えられる。さらに、3区第107号住居跡が古墳時代中期和泉期の弧状を呈する住居群の西端に位置し、その1部を構成しているように思われることや、住居の平面形や規模が、古墳時代中期住居群の中心をなす第38号住居跡 (和泉期) に極めて似通っていることなどから、本類は、古墳時代前期の最終末に位置付けられる土器群と思われる。あるいは、古墳時代中期として第3群土器に分類することも可能であるかも知れないが、第38号住居跡から出土している和泉式土器に比べ、五領式土器の特徴を数多く残していることから、ここでは第2群土器として扱った。

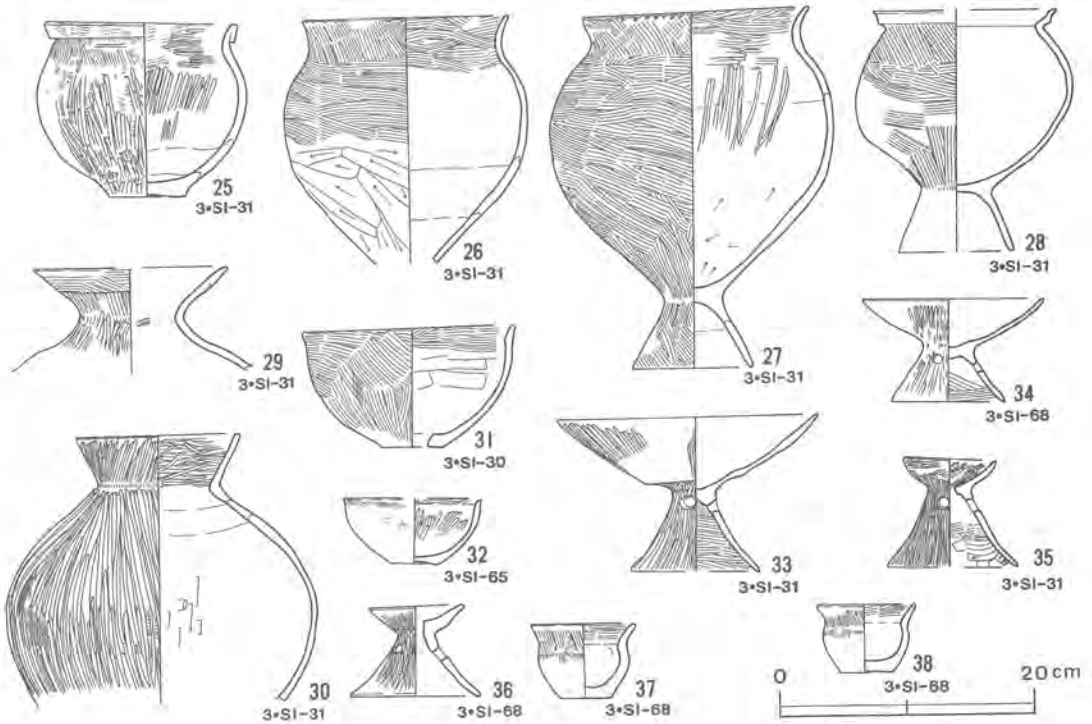
第2群土器1類



2類

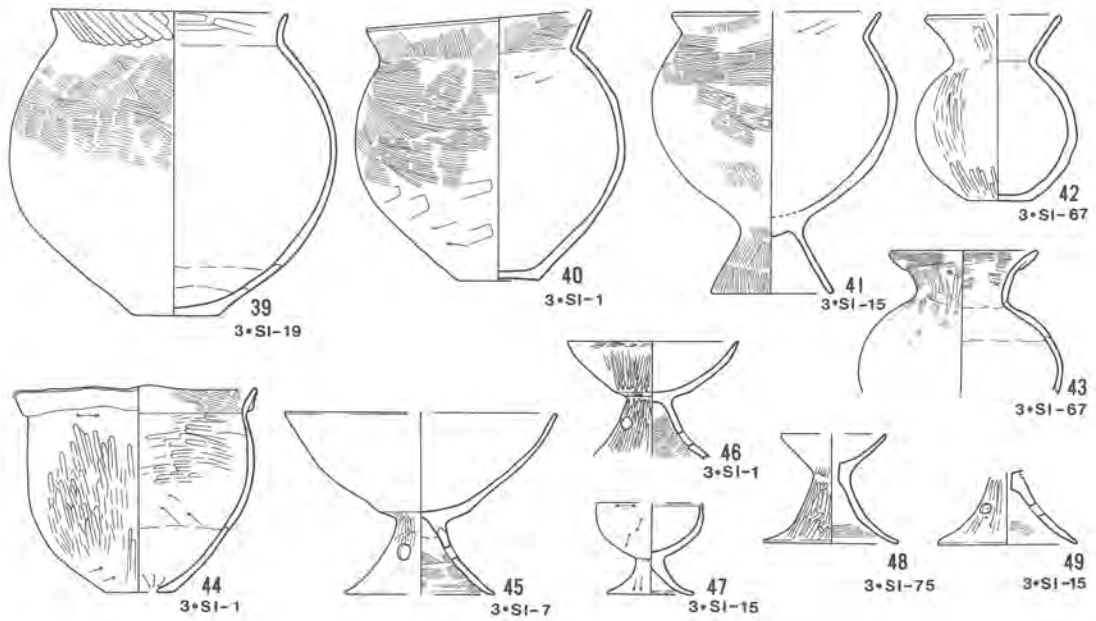


3類

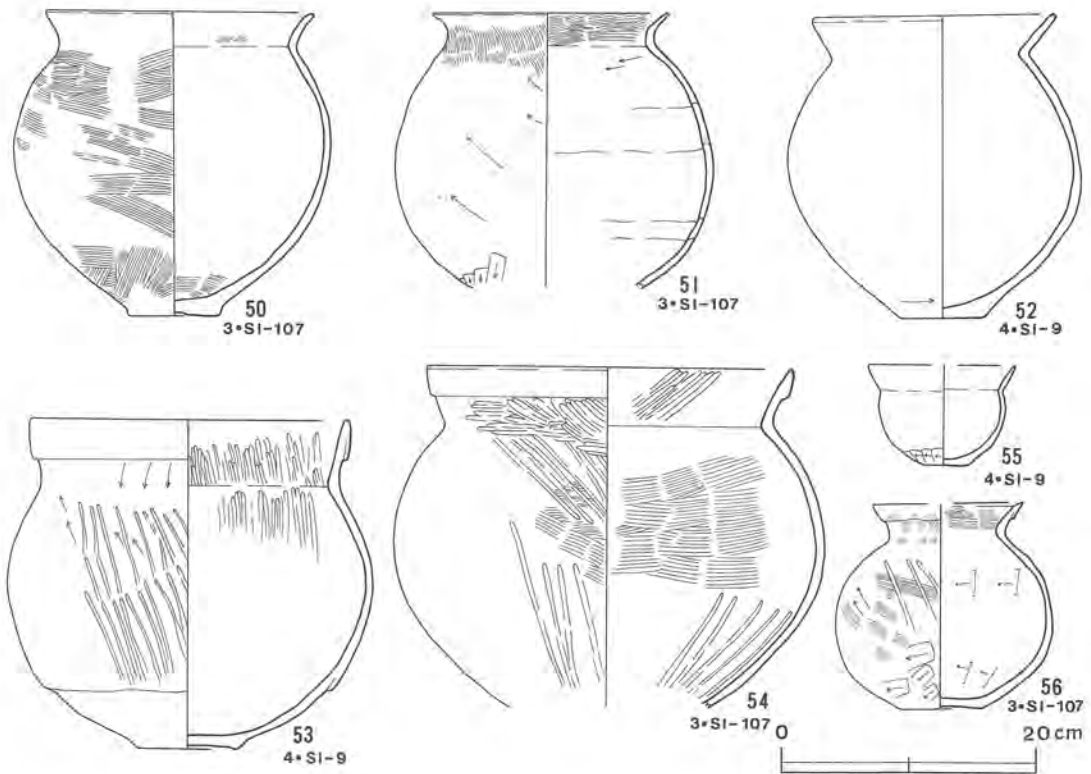


第352図 土器分類図(2)

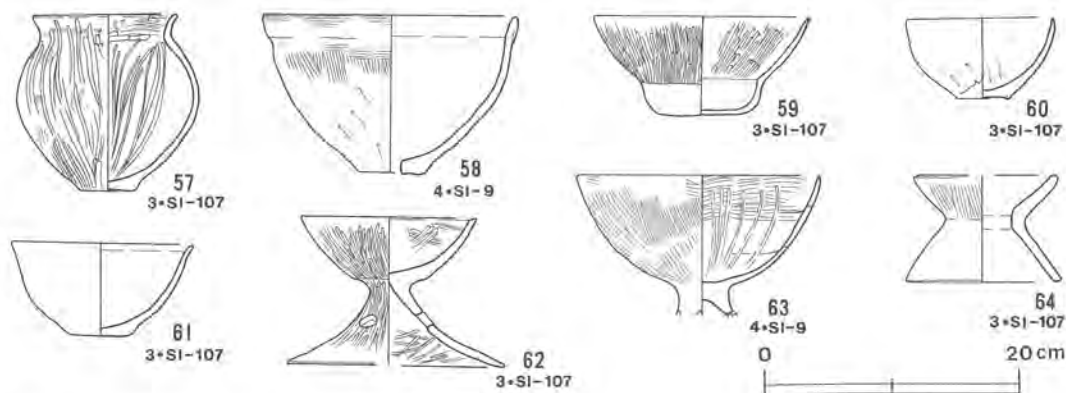
第2群土器4類



5類



第353図 土器分類図(3)



第354図 土器分類図(4)

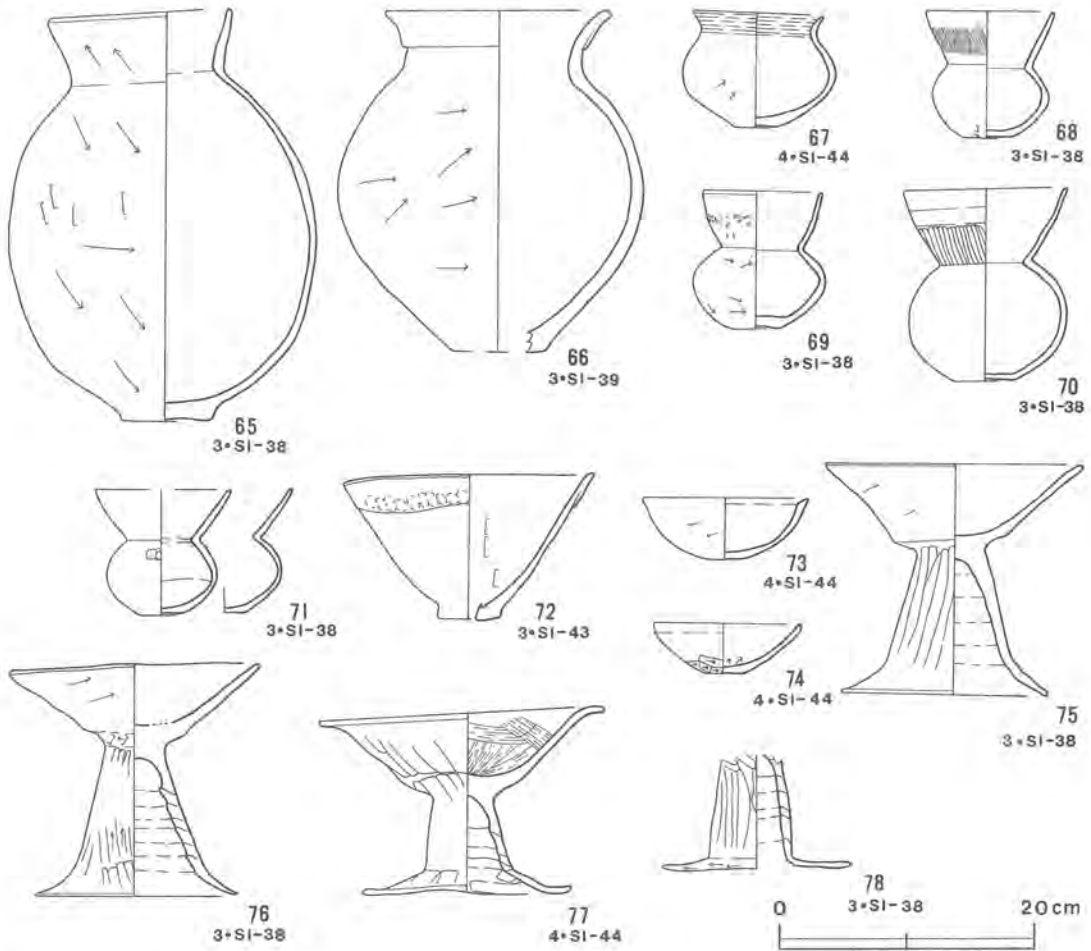
甕形土器は、脚部が球形状のもの(50)や、下膨れのもの(51)、長胴化するもの(52)などがあり、口縁部は一般に頸部から外反して開くものが多いが、中には51のように直立する頸部と外傾する口縁部を持ち全体として「コ」の字状を呈するものもある。器外面には、一応ハケ目整形が施されるが、口縁部は横ナデ、胴部はナデ整形によってハケ目が消されており、52のように全く認められないものもみられる。また複合口縁を呈する大型の甕形土器には、胴下半部に段を持つもの(53)と、持たないもの(54)とがあり、器内・外面はどちらにも篋磨きが施されている。壺形土器には胴部が球形状のものや袋状を呈するものがあり、口縁部は頸部から外反気味に開いている。甑形土器(58)は、最大径を口縁部に持ち、体部は内彎気味にすぼまって底部に至るもので、和泉期にみられる三角形状の甑形土器に近づく傾向が窺える。埴形土器は、浅い塊状の胴部に内彎気味に開く大きな口縁部が付くもので、極めて薄手で、丁寧な篋磨きが施されている。高坏形土器には坏部下位に稜を持つもの(62)と持たないもの(63)とがある。どちらの坏部も深く、塊状を呈している。

第3群土器(第355図)

第3群土器は、古墳時代中期の和泉式期に比定される土器群である。本群に属する土器は比較的少ない。本群は3区の第38・39・41・43・50・59・62・73号住居跡と、4区の第44号住居跡から出土した土器をもって設定した。器種としては、甕形土器、壺形土器、埴形土器、甑形土器、塊形土器、高坏形土器が認められる。本群は、埴形土器の器種全体に占める割合がこれまでより多いこと、厚手で長胴化した甕形土器、脚部が筒状で裾部で外反する高坏形土器等に特徴がある。また、この時期の住居群の中心になるとと思われる第38・41・73号の大形住居跡間には、そこから出土した甕形土器や高坏形土器の形態に若干の違いが認められることから、時期差も感じられるが、資料数が少なく比較検討が十分にできないので、あえて分類はしなかった。

甕形土器には、単口縁のものと複合口縁のものとが存在する。胴部は一般的に長胴化し、器外面にはナデ整形が施されている。中には65・66のように頸部がすぼまり、壺形土器との判別^{注(2)}に苦しむ器形のものも出現する。壺形土器には、外反して開く短い口縁部を持ち、全体として巾着形を呈するものもみられる。埴形土器は前述のごとく数が増加し、中位に張りを持つ球形状の胴部と、大きく開く口縁部が特徴的である。なお、口縁部には68にみられるような直線的に外傾するものと、69・70のように「く」の字状に内彎するものがある。埴形土器には、口縁部が弱い稜を持って体部と分かれ、垂直に立ち上がるもの(74)が出現する。甑形土器(72)は、この時期に特徴的な三角形を呈するものである。高坏形土器は、第2群に比べ大型で厚手のものが多く、坏部下位には稜、又は膨らみを持っている。口縁部は、体部から続いて直線的に開くもの(75・76)と、外反するもの(77)とがある。脚部はラッパ状に開き末端で外反するもの(75・

第3群土器



第355図 土器分類図(5)

76) と、筒状で裾部が大きく開くもの (77・78) とがあり、同一住居内に混在して出土している。なお、第38号住居跡から1点だけ土師器の甕形土器 (71) が出土している。器形は埴形土器と全く同じで、胴部上位に一孔が穿たれている。

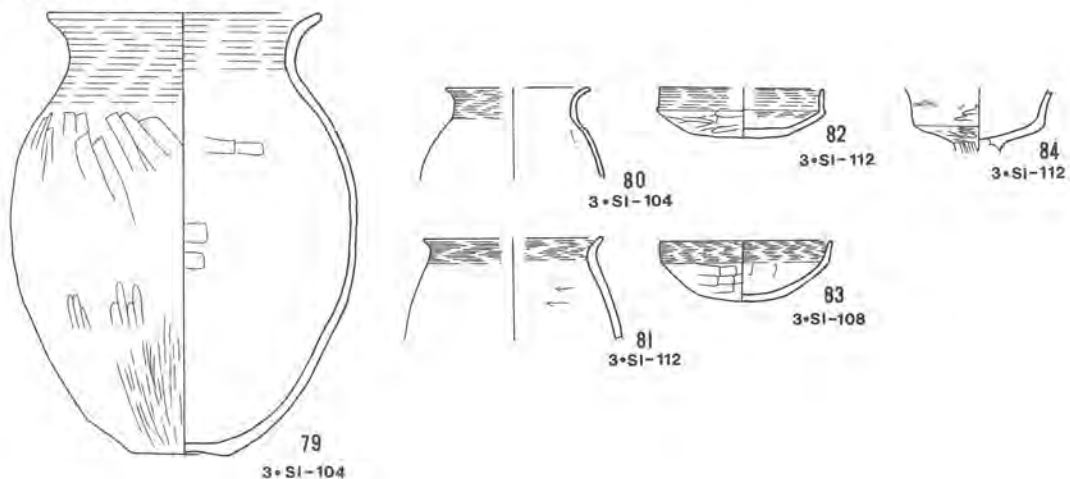
第4群土器 (第356図)

第4群土器は、古墳時代後期に位置付けられる土器群である。当調査区では本群に属する土器の出土量は少なく、3区で4軒、4区で5軒の計9軒から出土しただけである。ここでは、埴形土器の形態等から、さらに2類に分けて、その特徴や前後関係について解説する。

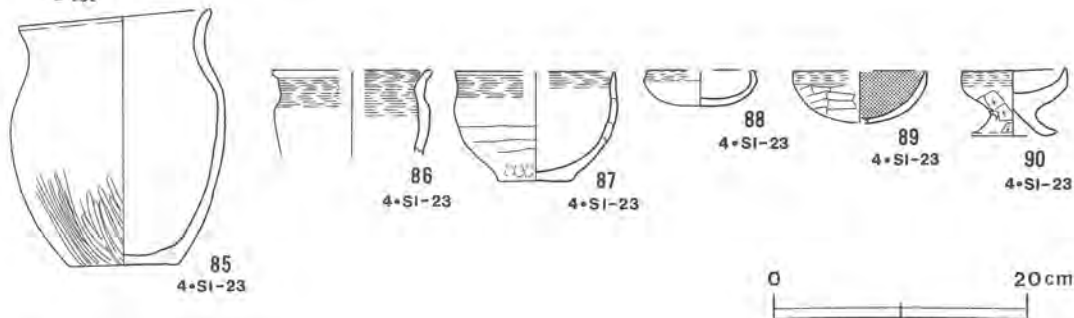
第1類 (第356図)

本類は、3区の第104・108・112・115号住居跡から出土した土器をもって設定した。器種としては、甕形土器、埴形土器、高埴形土器が確認されただけである。本類は、古墳時代後期鬼高期中頃に位置するものと思われる。

第4群土器1類



2類



第356図 土器分類図(6)

甕形土器は、胴部が長胴化し、口縁部は頸部から外反して開くもの(79)と、頸部は直立し口縁部が外反して開く「コ」の字状を呈するもの(80)とがある。どちらも口縁部は横ナデ整形、胴下半部には縦位の篋磨きが施されている。坏形土器は、器高の低いもの(92)と、高いもの(93)とがある。器高の低いもの(92)は、口縁部と体部との境に鋭い稜を持ち、口縁部は直立あるいは内傾気味に立ち上がっており、所謂模倣坏に分類されるものである。口縁部には横ナデ整形が施され、体部から底部にかけては篋削りが施されている。高坏形土器は破片のため、その存在を確認するにとどまった。

第2類(第356図)

本類は、4区の第20・23・35・36・39号住居跡から出土した土器をもって設定した。器種としては、甕形土器、鉢形土器、坏形土器、高坏形土器の他、坏形や埴形を呈する手捏土器も確認されている。本類は、坏形土器が第1類に比して丸味を持ち、口縁部と体部とを区分する稜にも鋭さが欠けるようになる等の特徴から、古墳時代後期鬼高期の後葉に位置するものと思われる。

甕形土器は、第1類の形態とほぼ同様であるが、86の頸部は、胴部との境に稜を持って直立している。坏形土器には口縁部と体部との境に稜をもつもの(88・89)のほか、稜を持たないものも存在する。高坏形土器(90)は、直立する口縁部を持つ坏部と、裾部が強く外反する短い脚部とからなる小型のものである。

第5群土器(第357・358図)

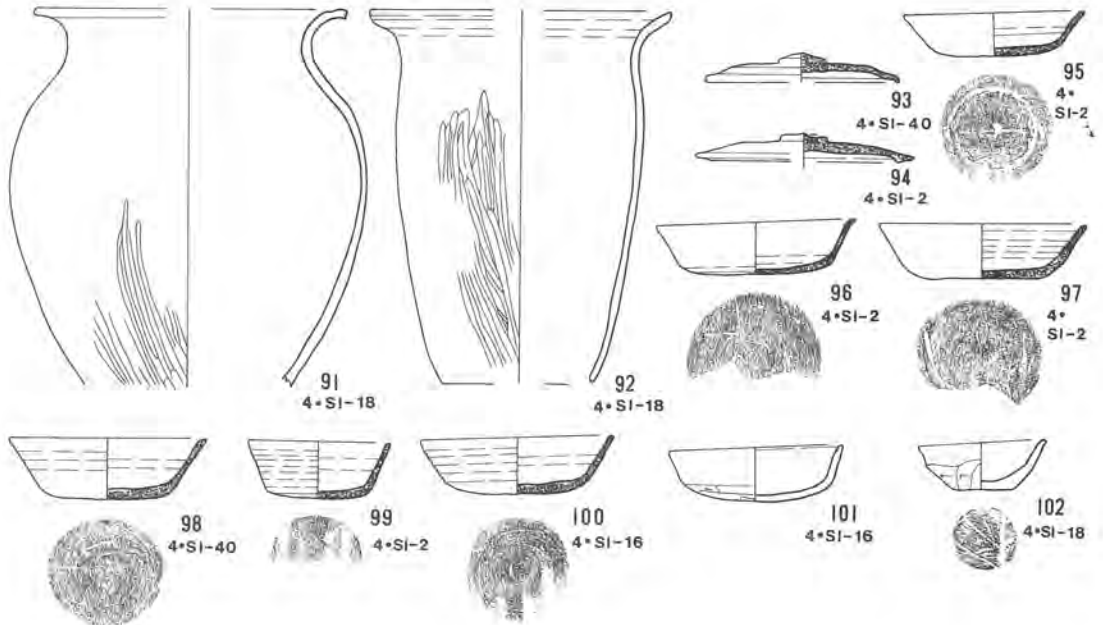
第5群土器は、8世紀代に位置付けられる土器群である。本群に属する土器類は、3区で6軒、4区で18軒の計24軒から出土している。ここでは、器形や整形技法、器種の構成等から、さらに3類に分けて、その特徴や年代について解説する。

第1類(第357図)

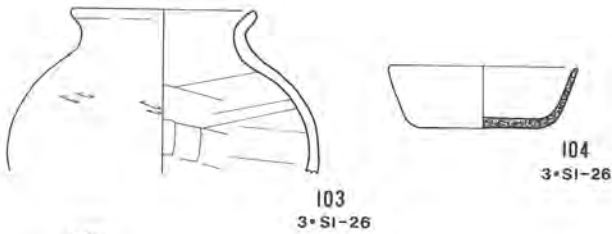
本類は、4区の第2・11・13・16・17・18・26・28・40・41号住居跡出土の土器をもって設定した。本類は当遺跡における須恵器の初現期で、器種としては土師器の甕、甑、鉢、坏と、須恵器の壺、蓋、坏が確認されている。これらの土師器や須恵器は、シンポジウム資料「房総における奈良・不安時代の土器」(史館同人発行)の中で、黒澤彰哉氏が編年している常陸における奈良・平安時代の土器(以下黒澤編年という)のII a期に比定されることから、8世紀の第2四半期前後に位置付けられるものと思われる。

土師器の甕(91)は、胴部最大径を上位に持つ長胴形のもので、口縁部は外反し、わずかにつまみ上げられている。口縁部には横ナデ整形が、胴下半部には篋磨きが施され、底部に木葉痕を持つ所謂常陸型甕が主体をなす。甑(92)は最大径を口縁部に持ち、胴部の膨みが弱いもので、底部は開口している。口縁部の形態、胴部の整形技法等は甕に類似している。土師器の坏は、丸

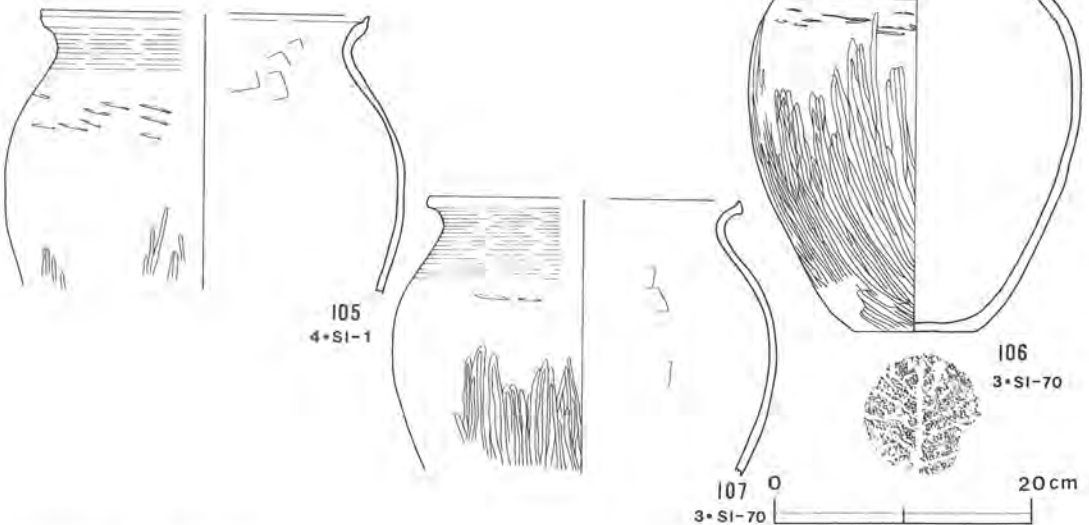
第5群土器1類



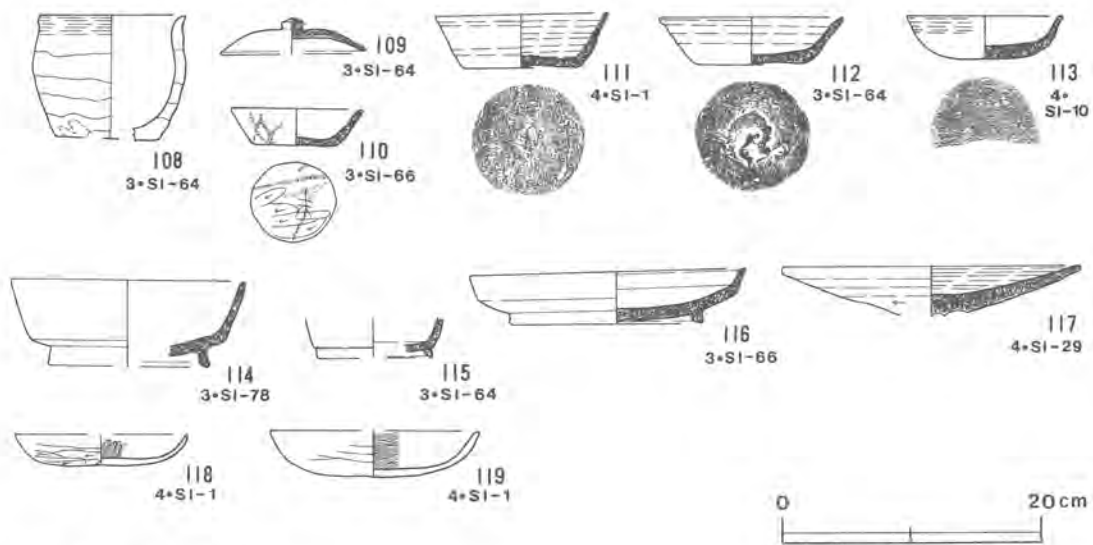
2類



3類



第357図 土器分類図(7)



第358図 土器分類図(8)

底で口縁部と体部との境に弱い稜を持ち、体部から底部にかけて篋削りが施される浅いもの(106)と、平底で、断面が逆台形状を呈し、底部に木葉痕を持つもの(102)とがある。

須恵器の蓋は、内面にかえりを持つもの(94)と、口縁部が折り返されるもの(93)とが存在する。蓋のつまみは環状を呈し、中央部が周辺よりわずかに高まっている。須恵器の坏は、丸底で、体部は外傾して立ち上がり口縁部に至るもので、底部には回転篋削りが施されている。

第2類(第357図)

本類は、3区の第26号住居跡から出土した土器をもって設定した。器種としては、土師器の甕と須恵器の坏が1点ずつ確認されている。本類は、黒澤編年のII b期に比定されることから、8世紀の第2～3四半期に位置付けられるものと思われる。

土師器の甕(103)は、外反して開く口縁部を持つが、胴部を欠損しているため詳細については不明である。

須恵器の坏(104)は平底で体部はやや直立気味に立ち上がる。底部は磨滅しているが、回転篋削りによって調整されている。

第3類(第357・358図)

本類は、3区の第64・66・70・78号住居跡と、4区の第1・10・27・29・31号住居跡から出土した土器をもって設定した。器種としては、土師器の甕、坏、鉢と、須恵器の蓋、坏、高台付坏、高台付盤、高盤が確認されている。本類は、黒澤編年のIII a期に比定されることから、8世紀の第3～4四半期に位置付けられるものと思われる。

土師器については、第1類と大きな違いは認められない。

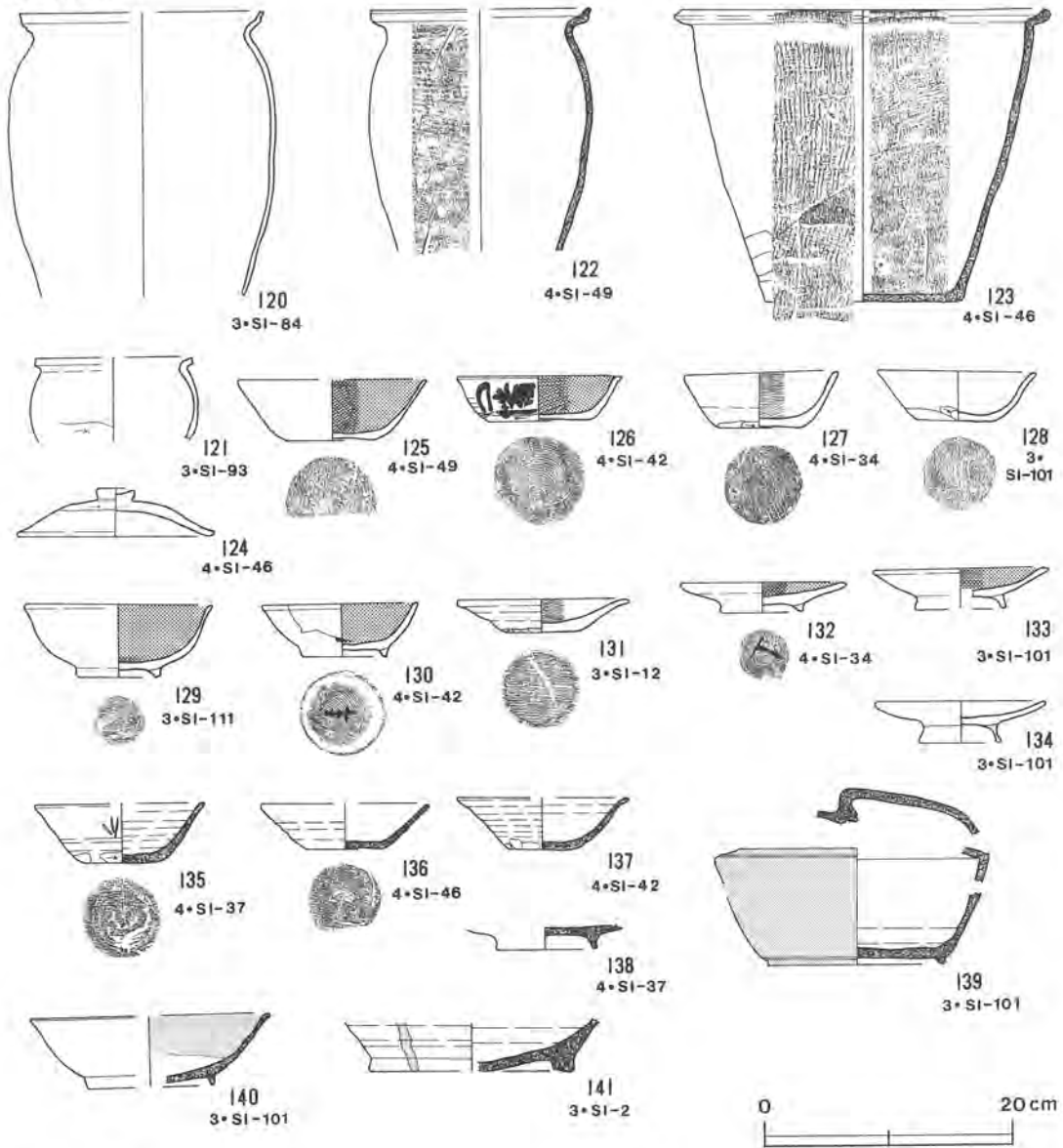
須恵器の蓋(109)は、口縁部が折り返され、つまみは柱状である。須恵器の坏(110・111・112)の底部は、基本的に平底であるが、切り離しによって上げ底風になるものが混入している。底部は回転篋切りのままのものと、回転篋切り後に一定又は不定方向の手持ち篋削りを施すものがある。体部は外傾して立ち上がり、そのまま口縁部に至るものと、わずかに外反するものがある。なお、113は丸底で、体部と口縁部の境に弱い稜を持ち、口縁部は横ナデされている。これは、古手の様相を残す坏であり、伝世品の可能性も考えられる。須恵器の高台付坏には大型のもの(114)と、小型のもの(115)とがあり、高台はいずれも貼り付けで、「ハ」の字状を呈している。高台付盤(116)は、底部がわずかに突出している。高盤(117)は、盤の体部が直線的に開くものであるが、脚部を欠損しているため全体の形態は不明である。

第6群土器(第359図)

第6群土器は、9世紀後半から10世紀前半に位置付けられる土器群で、3区の第2・4・6・11・12・37・45・51・82・84・85・91・92・93・97・100・101・102・103・110・111・113号住居跡と、4区の第21・22・34・37・38・42・46・49・54号住居跡から出土した土器をもって設定した。器種としては、土師器の甕、鉢、蓋、坏、高台付坏、皿、高台付皿、須恵器の甕、甑、坏、高台付盤、灰釉陶器の長頸壺、平瓶、高台付壺が認められる。本群は、ロクロ成形の土師器の坏や高台付皿、灰釉陶器を器種構成に持つこと、及び口径が底径の2倍以上になる須恵器の坏の存在等から、黒澤編年のV期に比定されるものと思われる。なお、住居跡の切り合い関係や配置等から考え、さらに2期あるいは3期に区分することも可能であるが、各々の住居から出土した土器類に大きな差違が認められないことから、ここでは一括して第6群土器として解説する。本群の年代を考える上で、決め手とはならないが、3区の第97号住居跡の壁溝中から「富壽神宝」が出土したことを上げておく。また、3区の第101号住居跡から出土した灰釉陶器の高台付壺は、その形態や器厚の薄さ、体部内面にのみ釉を薄く刷毛がけする手法等から猿投窯第V期のK-90に該当するもので、10世紀前半に編年されるものと考えられる。従って、当調査区第6群土器を出土する住居群は、その製作年代と同時期か、それより若干下るものと考えなければならない。

土師器の甕(120・121)は、肩部に最大径を持ち、底部に向って除々にすぼまる細長い胴部と、頸部から外反し、外上方へ摘み上げられる口縁部が特徴的である。土師器の蓋(124)は、4区の第46号住居跡から1点だけ出土している。内面は丁寧な篋磨きが施され、内面のかえりや口縁部の折り返し等はない。つまみは柱状に近く、頂部は凹んでいる。土師器の坏(125・126・128・129)には内面黒色処理が施されるものと、篋磨きだけのものとの存在するが、それぞれの器形に大きな違いは認められない。底部は平底のものと回転糸切りのために上げ底風になるものがある。体部は内彎気味に開き、口縁部は外反するものとししないものがある。成形はロクロを使用しての

第6群土器



第359図 土器分類図(9)

水挽き成形が行われ、体部下端には手持ち篋削りが施されている。底部の調整は回転糸切り後、周辺のみを手持ち篋削りするものと、全面に一定又は不定方向の手持ち篋削りを施すものとがある。周辺のみを手持ち篋削りを施す例が、全面を手持ち篋削りする例の約2倍の割合で出土している。上記のような形態や整形技法を持つ土師器の坏が同一住居跡に混在しており、これらによって本群を細分することは不可能である。土師器の高台付坏には、高台が「ハ」の字状に短く開き、体部下端に張りを持ち、口径が広いもの(129)と、高台が内傾気味に垂下し、体部下端の張

りが弱く、口径が比較的狭いもの(130)とがある。体部下端の張りが強く、口径の広い高台付坏は、3区南端の第110・111・113号住居跡から出土している。これらの住居跡は、当調査区では珍しく西壁側にカマドを持つ一群で、直径20cmほどの範囲に集中していることから、一時期の集落を形成するもので、そこから出土した土器は当然他の第6群の土器とは類別されるもの(若干年代は下がるか)と思われるが、伴出遺物が極めて少ないためあえて分類は行わなかった。皿は高台付皿が主流をなし、高台の無いもの(181)は1点しか出土していない。高台付皿(182・183・184)は、7割が内面黒色処理を施されたもので、口縁部は外反するものとししないものがある。これらも同一住居跡から混在して出土している。

須恵器の甕は、土師器の甕と形態や色調が類似し、器外面に平行叩き目を持つもの(122)と、口径と底径の差が少なく、やはり器外面に平行叩き目を持つもの(123)が確認されている。須恵器の甕は、胴部片と底部片だけが確認されている。底部は五孔式である。須恵器の坏(135・136・137)は、第5群と比べ極めて少なくなる傾向にある。形態は土師器の坏と類似し、口径は底径の2倍を越えている。体部は外傾して開くものと、内彎気味に開くものがある。体部下端には手持ち篋削りが施され、底部は一定又は不定方向の手持ち篋削りが施されるものが一般的であるが、4区の第37号住居跡から出土したもの(135)だけは回転篋削りのまま無調整である。高台付盤(138)は、薄手の坏形のもの1点だけ出土している。灰釉陶器は、3区の第2号住居跡から長頸壺の底部片(141)が、3区の第101号住居跡から前述の高台付碗(140)と、平瓶(139)が出土しており、これらはすべて、140の高台付碗と同様に10世紀前半に位置付けられるものと思われる。

なお、この時期の土師器や須恵器の坏には、墨書や刻書が数多く認められ、その数は小片まで含めると57点にも上る。判読できる文字では「幡」と「人」が最も多く、両者を合わせると全体の70%を越えている。

注

- (1) 赤塚 次郎 「S字甕」覚書'85 愛知県埋蔵文化財センター年報 1986
- (2) 同形態の土器を「房総における和泉式土器編年試案」では、頸部のくびれから壺形土器に分類している。
村山 好文 「房総における和泉式土器編年試案」日本考古学研究所集報V 日本考古学研究所 1983
- (3) 斎藤 孝正 「猿投窯における灰釉陶器の展開」月刊考古学ジャーナルNo.211 ニューサイエンス社 1982

主な参考文献（順不同）

- 大村 直 他 「神谷原Ⅲ」 八王字市櫛田遺跡調査会 1982
- 増田逸朗 他 「後張」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第15集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 村田健二 他 「小澤野」 茨城県教育委員会・東海村小沢野遺跡調査会 1978
- 黒澤彰哉 「常陸における奈良・平安時代の土器」 シンポジウム資料「房総における奈良・平安時代の土器」 史館同人・市立市川考古博物館 1983
- 茨城県教育財団 「屋代A遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告 第XIV集 1982
- 茨城県教育財団 「南三島遺跡5区」 茨城県教育財団文化財調査報告 第32集 1986

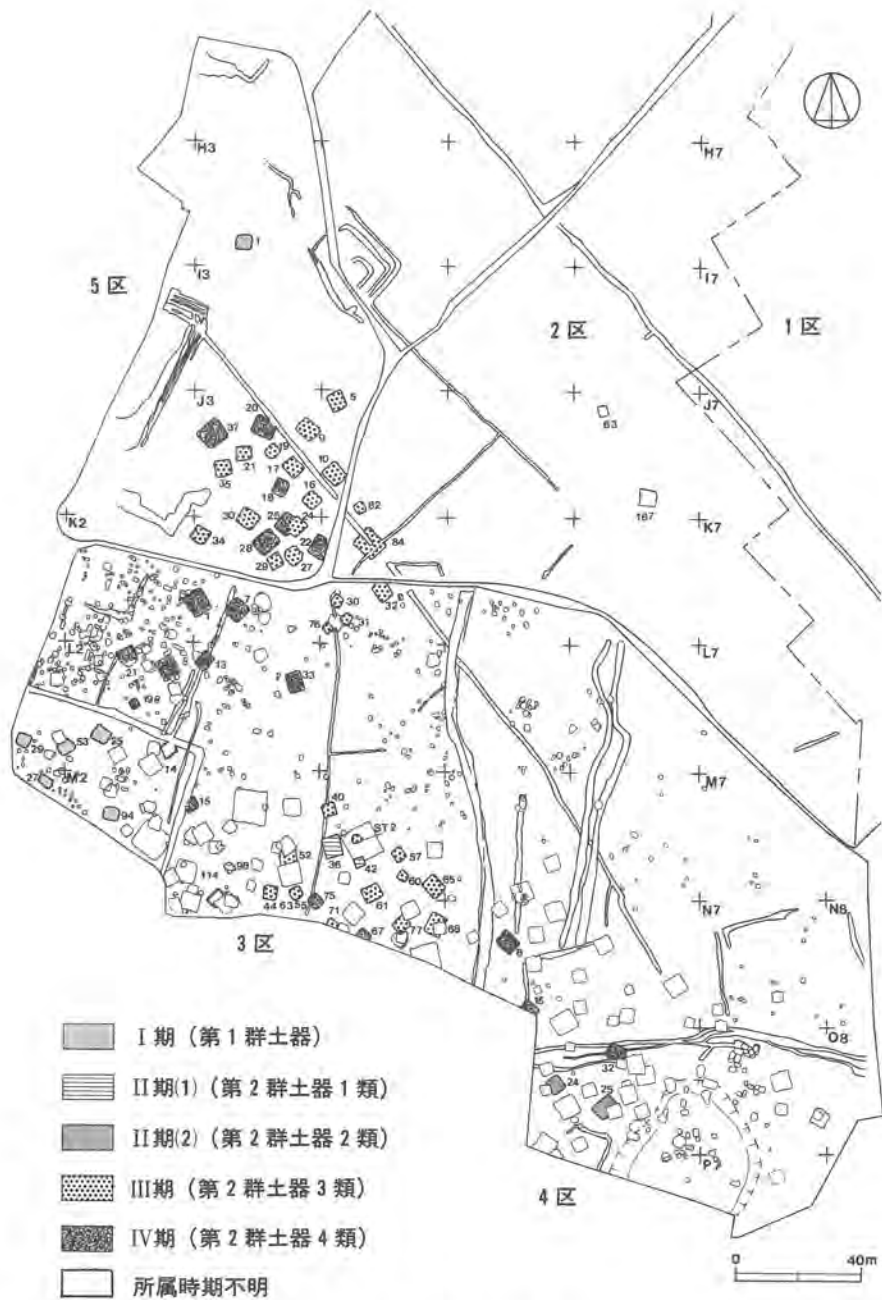
第2節 集落の変遷

本節では、前節の土器分類に基づき、3・4区から検出された弥生時代以降平安時代までの集落の特徴と変遷について全体をX期に分け若干の考察を加え記述した。なお、本節では他調査区の調査成果も取り入れ、南三島遺跡全体における弥生時代以降の集落の特徴と変遷についても、その概略を述べていきたい。

I期 弥生時代（第360図）

I期は、第1群土器が出土した住居群で、3区の第25・27・29・53・94号住居跡が該当する。これら5軒の住居跡は、3区西端の台地縁辺部に位置し、中央に広場を持つ直径約30mの環状に集落を形成している。住居跡間には切り合いはなく、各々が7m以上の間隔を持って存在していることや、出土遺物に時期差が認められないなどの理由から、単一時期に営まれた可能性が高い。住居跡の面積は、12～19m²の小型のものが一般的であるが、集落の北端に位置する第25号住居跡だけは26m²と飛び抜けており、集落の中心的な存在であったことが想定される。各住居跡の長軸方向はN-78°-WからN-58°-Eまでとかなり広範囲に散らばるが、これは集落が環状を呈するためと思われる。

南三島遺跡の東方700mには、屋代A・B遺跡が存在し、弥生時代中期から後期にかけて集落が継続的に営まれたことが確認されている。当遺跡3区の集落では、これらの遺跡と類似した文様構成を持つ土器が出土している。なお、5区にも弥生時代後期に位置付けられる住居跡(SI-1)が報告されているが、3区の集落とは120mも離れて位置していることや、そこから出土した土器が、3区から出土したものとは若干異なるように思われることから、同一集落に属するものとは



第360图 弥生時代後期・古墳時代前期住居跡分布图

表14 3区弥生時代住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	長軸方向 (主軸方向)	平面形	規 模		床 面	柱穴数	炉 カマド	覆土	出 土 遺 物	時 期	備 考
				長軸 × 短軸(m)	壁高(cm)							
25	L2h ₃	N-50°-W	隅丸長方形	5.97 × 4.98	23~40	ゆるい 起伏	4	地床炉	自然	弥生式土器片44点 土師器片55点	弥生後期	
27	M1a ₃	N-32°-W	隅丸長方形	4.59 × 3.08	23~30	ゆるい 起伏	5	地床炉	自然	土師器片1点 礫2個	弥生後期	SK211・230
29	L1h ₇	N-62°-W	隅丸長方形	4.60 × 4.32	5~19	平 坦	4	地床炉	自然	弥生式土器片15点・須恵器片9点 土師器片12点・礫1個	弥生後期	SK258・259
53	L1i ₆	N-58°-E	隅丸長方形	5.35 × 4.15	20~29	平 坦	6	地床炉	自然	弥生式土器片9点・須恵器片1点 土師器片68点・勾玉1点	弥生後期	SI26・SK268 ・275・276
94	M2d ₄	N-78°-W	楕 円 形	5.34 × 4.30	25~29	平 坦	2	地床炉	自然	弥生式土器片29点 土師器片28点・球状土錘2点	弥生後期	

考えられない。

II期 古墳時代前期(1) (第360図)

II期は、第2群土器の第1類と第2類が出土した住居群から構成される。第1類と第2類の間には、時期差が存在することは前述したが、それほど大きなものではないと考えII期としてまとめて記述した。第1類には3区の第36・42・98号住居跡が、第2類には4区の第24・25号住居跡が該当する。この2つの住居跡群は、お互いに90m程離れて存在し、それぞれが各調査区南部の台地縁辺部に小集落を形成している。3区の集落（II期(1)）は、床面積が32m²の比較的大形の第36号住居跡と、床面積が8m²と9m²の小形住居跡から成り、東・西50m程の範囲に1列に並んでいる。長軸方向はN-18°~45°-Wの範囲にまとまり、炉はすべて床面の北部に片寄って位置している。これらのことから、3軒の住居跡は、大形の第36号住居跡を中心に、それぞれが南東方向を向いた東・西に細長い集落を形成していたものと思われる。4区の集落（II期(2)）は、床面積が38m²の比較的大形の第25号住居跡と、中形の第24号住居跡から成っている。長軸方向は北西と南東に大きく分かれるが、第24号住居跡が方形であることや、第25号住居跡の短軸方向は、第24号住居跡の長軸とほぼ重なるN-40°-Wを指すこと、及び炉の位置が2軒とも床面の北西部に片寄ること等から、2軒の住居跡は南東方向を向いて構築されていた可能性が高い。なお、第25号住居跡は床面から炭化米や小礫、多量の手捏土器等を出土しており、極めて祭祀的な性格の強い住居跡であったと推定される。

II期の集落は、古墳時代前期の集落で、当遺跡の五領期の集落のなかでは最も早く形成されたものである。当初、3区側に集落が形成され、次に4区側の集落が形成されたものと推定される。どちらも、3軒程度の住居跡からなる小集落で、そこには、長方形のプランを持つ比較的大形の住居跡と、1~2軒の方形プランを持つ小形住居跡とが、各々南東向きに建てられていたものと思われる。

III期 古墳時代前期(2) (第360図)

III期は、第2群土器の第3類が出土した住居群で、3区の第30・31・32・40・44・52・55・57・60・61・65・68・71・76・77号住居跡が本類に該当するものと思われる。本期の住居跡は、3区の南部に位置するものと、北部に位置するものとに大別される。

南部の集落は、II期の小集落が形成されていたM4区を中心に直径60m程の範囲で形成されている。住居跡構成は、床面積33.37㎡の大形住居跡(第65・68号)と26㎡程度のやや大き目の住居跡(第52・61号)、16~20㎡の中形住居跡4軒、13~14㎡の小形住居跡2軒、8㎡の極小形の住居跡1軒と第2号竪穴遺構から成っている。大形住居跡2軒は集落の東端に位置し、その他の住居跡は、やや大き目の第61号住居跡を中央として、その周囲にほぼ環状に形成されている。(なお、この地区には第55号住居跡と重複して第63号住居跡が存在するが、時期的にはそれほど離れているとは考えられない。)住居跡の長軸方向は、ほとんどがN-15°~55°-Wの範囲に収まるが、第61・68・77号住居跡の長軸方向は、N-27°~60°-Eで、北東方向を向いている。このように長軸方向はかなり不規則であるが、各住居跡の炉は、いずれも床面の北西に片寄って位置しており、その対面に「入口部」又は「オモチ」を想定するならば、これらの住居跡は、すべて南東向きに建てられていたという事ができる。

北部の住居群に属する住居跡は、当調査区内に第30・31・32・76号住居跡の4軒しか検出されなかったが、2区の第82・84号、5区の第5・9・10・16・17・19・21・24・27・29・30・34・35号の住居跡も、土器分類の結果本期に該当するものと推定され、全体としては19軒の住居跡からなる集落と考えることができる。当集落は、南三島遺跡全体からみると、西側の台地縁辺部に位置し、J3区を中心に直径90m程の範囲に形成されている。住居跡構成は、床面積30㎡を越える大形住居跡4軒(2区第84号、5区第9・10・30号)、やや大き目の住居跡3軒(3区第32号、5区第5・17号)、中形住居跡8軒、小形住居跡3軒、極小形住居跡1軒から成っている。大形住居跡と、やや大き目の住居跡の平面形は長方形あるいはそれに近い方形で、中形や小形の住居跡は方形状を呈している。住居跡の配置は、東側に5区第9・10号と2区第84号の大形住居跡、3区第32号のやや大き目の住居跡が長軸方向N-41°~45°-Wで北西から南東にほぼ一列に並び、西側に7軒の中形住居跡と5区第17号のやや大き目の住居跡が南西方向に開口した環状に並んでいる。さらに、環状に並ぶ住居群の中央部には、5区第30号の大形住居跡が存在している。また、小形と極小形の3軒の住居跡は、環状に並ぶ住居群から20mほど南東に離れて存在している。環状に並ぶ住居跡の長軸方向は、ほとんどがN-9°~58°-Wの範囲に収まる。各住居跡の炉の位置を検討すると、北側の住居跡は床面の北寄りに、東側の住居跡は、床面の東寄りに、南側の住居跡は南あるいは北寄りに位置するのが一般的であり、全体として環状の開口部と同じく南西部を意識して集落が形成されているといえる。現在、この方向には台地下からの道が通っているが、当時にお

いても台地下と台地上とを結ぶ重要な地点であったと推定される。

Ⅲ期に形成された北部と南部の集落は、1列に並んだ2・3軒の大形住居跡と、中央部に1軒の住居跡を持つ環状あるいは半環状に並ぶ住居群という類似した集落形態を持つものである。しかし、第360図でみられるように、北部の集落はかなり整然と配列しており環状に配列する住居跡の規模も床面積20㎡前後に集中している。この違いが何を意味するかについては今の所不明であり、今後の検討課題としたい。

Ⅳ期 古墳時代前期(3) (第360図)

Ⅳ期は、第2群土器の第4類が出土した住居群で、3区の第1・5・7・13・15・19・21・33・67・75号住居跡と、4区の第8・15・32号住居跡が該当する。さらに、5区の第18・20・22・25・28・37号住居跡も本期に含められるものと考えられる。

本期の住居群は、3区西部の台地縁辺部に位置する集落と、4区南部の台地縁辺部に位置する集落に分かれる。4区の集落は、4区の第8・15・32号住居跡の3軒から成る小集落で、集落の一部は調査区外にも延びているものと思われる。住居跡の床面積は27～30㎡、長軸方向はN-42°～67°-Wの範囲に収まっている。3区西部の集落は、5区の6軒の住居跡も含めて、南北120mの広い範囲に形成されている。住居跡構成は、8軒の大形住居跡（3区第1・5・7号、5区第20・22・25・28・37号）と、4軒の中形住居跡、及び4軒の小形住居跡からなり、Ⅲ期に比べ大形住居跡が増える傾向がみられる。長軸方向は、ほとんどがN-15°～55°-Wの範囲に収まり、炉の位置も床面の北西部に片寄っていることから、当集落の住居群は南東向きに建てられていたことが推測できる。

本期の集落は、Ⅲ期の集落が規格的に形成されていたのに対し、規格性が崩れ大規模化する傾向にある。なお、3区西部の集落は、台地下から上がって来る現代の道路をかこむように住居跡が分布していることから、当時においてもその部分が台地下と台地上を結ぶ重要な意味を持っていたことが推測される。

Ⅴ期 古墳時代中期 (第361図)

Ⅴ期は、第2群土器の第5類と第3群土器が出土した住居跡で、3区の第38・39・41・43・50・59・62・73・95・99・107号住居跡と、4区の第9・44号住居跡が該当する。

3区の集落は、3区南端の台地縁辺部に位置し、Ⅲ期の南部集落と重複している。本期の集落の様相を遺構配置図でみると、床面積74～101㎡という極めて大形の住居跡4軒（第38・41・73・107号）が南部に開口した半円形に並び、大形住居跡間やその周辺に中・小形の住居跡7軒が散在している様子が観察できる。しかし、これら12軒の住居跡が一時期に営まれたものか否かについては若

干の検討の余地を残していると言えよう。まず第1に、西端に位置する大形住居跡第107号から出土した土器類は、前節の土器分類上第2群土器の第5類に分類されたもので、五領式土器の特徴を数多く残すものであり、第38・41・73号の大形住居跡から出土した明確な和泉式土器の特徴を有する第3群土器とは様相を異にし、そこには明らかな時期差が見い出せるという点である。次に、前節第3群土器の解説の中で記述したごとく、第38・41・73号住居跡から出土した甕形土器や高環形土器には、わずかずつではあるがそれぞれに形態差が認められ、それが若干の時間差を持つ可能性を示唆している点である。また、4軒の大形住居跡の中軸線を延長した結果、第73号を除く3軒の住居跡の中軸線の延長がN3a4区に集中するのに対し、東端の第73号住居跡だけは26mも南方に外れている。もし、同一時期に形成されたならば、このようなズレを生じることは少ないものと思われる。以上の点から考えて、これら4軒の大形住居跡は、西側の第107号住居跡からある程度の時間差を持って順次形成されたと考えるのが妥当ではないだろうか。

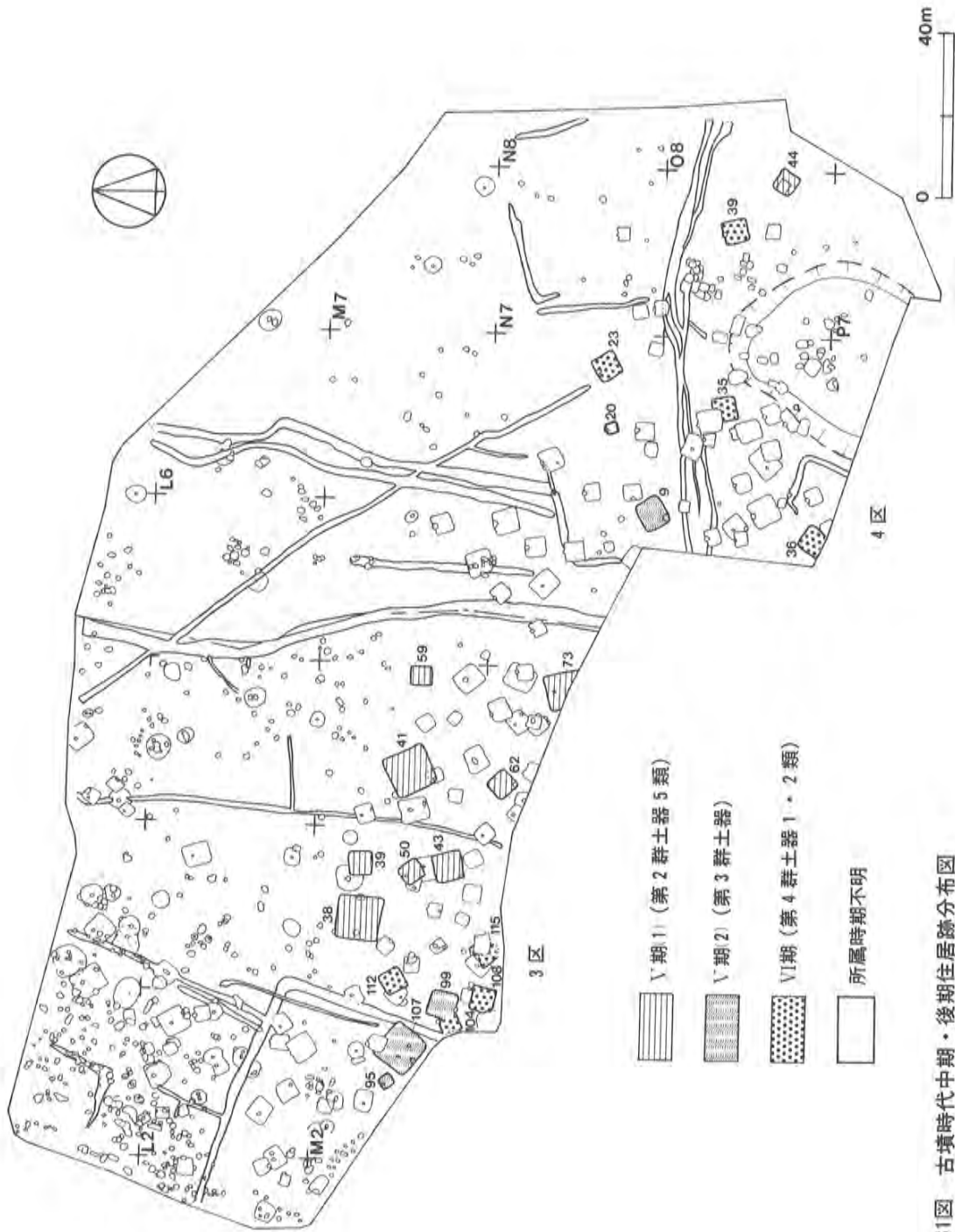
次に、上記の仮説に基づき、各住居跡をグルーピングしてみたい。出土土器の特徴から分類すると、第107号住居跡と第95・99号住居跡、第38号住居跡と第39・50号住居跡、第41号住居跡と第43・59・62号住居跡がグルーピングでき、第73号住居跡に類するものは、当調査区内には見当らなかつた。これらの住居跡を遺構配置図上に落としていくと、各大形住居跡の東・南・西の三方、もしくは、いずれかの2方向に中・小形の住居跡が配置されるという集落形態が明瞭に浮び上がってくる。

以上、V期の集落が各大形住居跡を1つの単位として、順次形成されたという仮説に基づいて解説してきたが、そこには、大形住居建設の為の労働力確保の問題や、住居跡解説の項でも触れたように大形住居そのものの明確な性格付け等の問題点も残されている。いずれにしろ、各大形住居の中軸線が交差するN3a4区が、本集落にとって常に意識されるべき地点であったことを考えた場合、その延長線上に広がる沖積低地と本集落とは何らかの密接な関係を有していたと推測される。なお、4区にもV期の住居跡が2軒存在しているが、本集落とは40～120mも離れており、その関係は不明である。

VI期 古墳時代後期 (第361図)

VI期は、第4群土器の第1類と第2類が出土した住居群で、第1類土器が出土した3区の第104・108・112・115号住居跡と、第2類土器が出土した4区の第23・35・36・39号住居跡が本期に該当する。出土土器の形態等から、3区の4軒は古墳時代後期の中頃、4区の4軒は古墳時代後期末のものと考えられる。

3区の集落は、3区南端の台地縁辺部に位置し、M312区を中心にして北東に開口部を持つ直径30m程の環状に形成されている。住居跡構成は、床面積19㎡の中形の住居跡1軒と、28～35㎡



第361图 古墳時代中期・後期住居跡分布図

表15 3区古墳時代住居跡一覽表

住居跡 番号	位置	長軸方向 (主軸方向)	平面形	規 模		床 面	柱穴数	炉 カマド	覆土	出 土 遺 物	時 期	備 考
				長軸 × 短軸(m)	壁高(cm)							
1	K3g ₁	N-32°-W	長 方 形	7.75 × 6.47	18~20	平 坦	16	地床炉	自然	土師器片672点 球状土錘22点	五領期	貯藏穴
5	L2b ₈	N-31°-W	長 方 形	6.66 × 5.81	26~28	平 坦	7	地床炉	自然	土師器片288点 須惠器片5点	五領期	貯藏穴
7	K3h ₁	N-48°-W	方 形	6.33 × 6.24	37~39	ゆるい 起 伏	7	地床炉	自然	土師器片327点・礫2個	五領期	SK148 貯藏穴
13	L3b ₁	N-40°-E	長 方 形	5.20 × 4.50	20~31	平 坦	2	地床炉	自然	土師器片128点・礫1個	五領期	SK171・190 SD 3
14	L2i ₉	N-32°-W	隅丸方形	4.47 × 4.39	24~26	ゆるい 起 伏	4	地床炉	自然	土師器片24点・鉄製品2点 礫1個	五領期	貯藏穴
15	M2c ₀	N-32°-W	長 方 形	4.50 × 2.60	20~37	平 坦	0	地床炉	自然	土師器片377点・須惠器片26点 球状土錘15点・砥石2点	五領期	SD 5 貯藏穴
19	L2e ₈	N-25°-W	(方 形)	3.74 × (3.60)	25~30	平 坦	5	地床炉	自然	土師器片104点・須惠器片1点 土製品1点	五領期	SI20
21	L2b ₅	N-30°-W	方 形	5.70 × 5.55	28	平 坦	1	地床炉	自然	土師器片56点・球状土錘1点	五領期	SI22 SK198
30	K4g ₂	N-55°-W	方 形	3.50 × 3.48	20~27	平 坦	3	地床炉	自然	土師器片136点・礫6個	五領期	貯藏穴
31	K4g ₂	N-55°-W	隅丸方形	3.75 × 3.50	30	平 坦	3	地床炉	自然	土師器片523点	五領期	SK256・257 貯藏穴
32	K4f ₅	N-36°-W	隅丸長方形	6.26 × 5.23	35~38	平 坦	4	地床炉	自然	土師器片210点・須惠器片2点	五領期	貯藏穴
33	L3d ₉	N-16°-W	長 方 形	6.40 × 5.20	35~43	平 坦	4	地床炉	自然	土師器片270点・球状土錘1点	五領期	貯藏穴
36	M4f ₁	N-18°-W	長 方 形	6.76 × 5.85	31~35	平 坦	4	地床炉	自然	土師器片554点・球状土錘8点	五領期	貯藏穴
38	M3c ₅	N-7°-E	方 形	10.80 × 9.20	22~35	平 坦	18	—	自然	土師器片137点・手捏土器6点 球状土錘1点・紡錘車1点	和泉期	SK265・266
39	M3c ₈	N-3°-W	方 形	5.96 × 5.60	32~40	平 坦	6	地床炉	自然	土師器片390点・手捏土器1点 鉄製品2点	和泉期	貯藏穴
40	M2c ₁	N-22°-W	方 形	4.53 × 4.47	25~30	平 坦	0	地床炉	自然	土師器片88点・球状土錘2点	五領期	SD 6 貯藏穴
41	M4f ₁	N-28°-W	方 形	10.40 × 10.10	12~20	平 坦	9	—	自然	土師器片301点・須惠器片7点 土製品1点・砥石1点	和泉期	SI42
42	M4h ₁	N-34°-W	方 形	3.55 × 3.22	35	平 坦	6	地床炉	自然	土師器片190点・須惠器片3点 土製品1点・鉄鏃1点	五領期	SI41 貯藏穴
43	M3i ₈	N-25°-W	方 形	7.20 × 6.80	25	ゆるい 起 伏	4	地床炉	自然	土師器片439点・土製品1点 球状土錘1点・砥石1点	和泉期	貯藏穴
44	M3i ₇	N-87°-W	隅丸方形	4.32 × 4.22	15	平 坦	2	—	自然	土師器片42点・弥生式土器片6点 管状土錘1点・紡錘車1点	五領期	
50	M3f ₈	N-38°-W	方 形	5.00 × 5.00	27~30	平 坦	7	地床炉	自然	土師器片484点・須惠器片6点 球状土錘1点・鉄製品1点	和泉期	
52	M3g ₅	N-15°-W	方 形	5.60 × 5.60	20	平 坦	7	不 明	自然	土師器片96点・球状土錘1点	五領期	貯藏穴
55	M3j ₈	N-23°-W	方 形	4.04 × 4.02	20	平 坦	4	不 明	自然	土師器片48点・弥生式土器片9点 紡錘車1点	五領期	SI63
57	M4g ₇	N-52°-W	方 形	3.92 × 3.75	17~20	平 坦	9	—	自然	土師器片114点・弥生式土器片2点	五領期	
59	M4g ₀	N-0°	方 形	5.00 × 4.90	34	ゆるい 起 伏	0	—	自然	土師器片148点	和泉期	
60	M4i ₇	N-50°-W	隅丸方形	3.15 × 2.95	10	平 坦	6	—	自然	土師器片8点	五領期	SK287
61	M4j ₅	N-60°-W	長 方 形	6.28 × 5.02	29	平 坦	5	地床炉	自然	土師器片504点・球状土錘3点 管状土錘2点	五領期	
62	N4b ₃	N-45°-W	方 形	5.62 × 5.60	29	ゆるい 起 伏	6	地床炉	自然	土師器片375点・手捏土器1点	和泉期	貯藏穴
63	M3j ₅	N-32°-W	隅丸方形	3.48 × 3.42	10	平 坦	8	—	不明	土師器片3点	五領期	
65	M4i ₀	N-42°-W	長 方 形	6.54 × 5.57	30~35	ゆるい 起 伏	4	地床炉	自然	土師器片413点・球状土錘10点 土製品1点	五領期	
67	N4c ₄	N-51°-W	(方 形)	4.20 × (2.65)	30~33	平 坦	0	不 明	自然	土師器片33点	五領期	
68	N4c ₀	N-27°-E	長 方 形	6.80 × 5.80	25	ゆるい 起 伏	5	地床炉	自然	土師器片166点・球状土錘9点 管状土錘14点・手捏土器片2点	五領期	SI66

住居跡 番号	位置	長軸方向 (主軸方向)	平面形	規 模		床 面	柱穴数	炉 カマド	覆土	出 土 遺 物	時 期	備 考
				長軸 × 短軸(m)	壁高(cm)							
71	N4b ₁	N-55°-W	(方 形)	3.50 × (2.39)	15	平 坦	2	地床炉	人為	土師器片29点・球状土錘2点 管状土錘1点・鉄製品1点	五領期	
73	N4e ₉	N-15°-W	(方 形)	8.70 × (7.55)	20	平 坦	2	地床炉	自然	土師器片280点・弥生式土器片16点	和泉期	
75	N3a ₀	N-47°-W	方 形	4.33 × 4.30	30~34	平 坦	0	地床炉	自然	土師器片61点・球状土錘3点	五領期	
76	K4i ₁	N-41°-W	方 形	3.00 × 2.84	11~14	平 坦	3	地床炉	自然	土師器片88点	五領期	貯蔵穴
77	N4b ₇	N-47°-E	方 形	4.87 × 4.60	20	平 坦	7	地床炉	自然	土師器片113点・球状土錘1点 剣形模造品1点	五領期	貯蔵穴
95	M2e ₄	N-36°-W	隅丸方形	3.45 × 3.35	13	ゆるい 起 伏	0	地床炉	不明	土師器片32点	五領期	貯蔵穴
98	M3h ₃	N-45°-W	台 形	3.20 × 2.70	13	ゆるい 起 伏	4	地床炉	自然	土師器片194点・球状土錘1点	五領期	
99	M2h ₀	N-15°-E	方 形	6.78 × 6.38	20	ゆるい 起 伏	4	地床炉	自然	土師器片110点・球状土錘1点	五領期	SK492・496 貯蔵穴
104	M2i ₉	N-60°-E	方 形	4.45 × 4.40	35~53	ゆるい 起 伏	4	カマド	自然	土師器片101点	鬼高期	SI99
107	M2f ₇	N-52°-W	方 形	10.20 × 9.30	30	平 坦	4	地床炉	自然	土師器片1002点・須惠器片29点 手捏土器2点・ミニチュア土器 片1点・有孔門板1点	五領期	SI102
108	N2a ₀	N-11°-E	方 形	6.08 × 5.93	20	平 坦	5	カマド	自然	土師器片190点	鬼高期	
112	M3e ₁	N-33°-W	方 形	5.70 × 5.40	50~65	平 坦	6	カマド	自然	土師器片249点・球状土錘1点 管状土錘1点	鬼高期	
114	M3j ₂	N-38°-E	長 方 形	5.58 × 4.32	10	平 坦	5	地床炉	不明	土師器片79点・球状土錘1点	五領期	SI115
115	N3a ₃	N-44°-W	方 形	6.15 × 6.15	30	平 坦	8	カマド	自然	土師器片168点・球状土錘3点	鬼高期	
116	N2b ₀	不 明	不 明	(1.60) × (1.60)	15~20	平 坦	0	不 明	自然		不 明	SI108・110

表16 4区古墳時代住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	長軸方向 (主軸方向)	平面形	規 模		床 面	柱穴数	炉 カマド	覆土	出 土 遺 物	時 期	備 考
				長軸 × 短軸(m)	壁高(cm)							
8	N5d ₆	N-43°-W	長 方 形	6.16 × 5.35	5~10	不 明	2	地床炉	不明	土師器片78点・球状土錘2点 石製品2点・鉄製品3点	五領期	
9	N5j ₀	N-57°-E	長 方 形	7.10 × 6.04	28~30	ゆるい 起 伏	5	地床炉	不明	土師器片137点・須惠器片13点 ミニチュア土器片1点	五領期	貯蔵穴
15	N5i ₈	不 明	不 明	5.30 × (3.22)	15~20	平 坦	1	不 明	自然	土師器片21点・管状土錘1点	五領期	
20	N6g ₅	N-21°-W	方 形	2.76 × 2.66	39~43	ゆるい 起 伏	1	カマド	人為	土師器片170点・須惠器片11点 手捏土器5点	不 明	
23	N6g ₉	N-35°-W	方 形	5.80 × 5.72	46	平 坦	5	カマド	自然	土師器片209点・須惠器片2点 手捏土器4点・砥石1点	鬼高期	
24	O5e ₉	N-36°-W	方 形	4.85 × 4.63	8	ゆるい 起 伏	1	地床炉	不明	土師器片156点・球状土錘2点 手捏土器2点	五領期	貯蔵穴
25	O6g ₃	N-51°-E	長 方 形	6.96 × 5.72	7~10	凹 凸	3	地床炉	不明	土師器片139点・球状土錘3点 手捏土器10点	五領期	
32	O6b ₄	N-66°-W	長 方 形	5.87 × 4.93	2~4	平 坦	3	地床炉	不明	土師器片16点・球状土錘1点	五領期	SD6・7・8
35	O6d ₇	N-11°-W	方 形	5.77 × 5.75	5~8	ゆるい 起 伏	5	カマド	自然	土師器片145点・須惠器片22点	鬼高期	SI34
36	O5j ₀	N-55°-W	方 形	6.00 × 5.80	0	平 坦	5	カマド	不明	土師器片9点・須惠器片2点	鬼高期	
39	O7e ₇	N-15°-W	方 形	5.82 × 5.77	20	凹 凸	5	カマド	自然	土師器片67点・須惠器片2点 勾玉1点・鉄滓2点	鬼高期	
44	O7h ₀	N-53°-W	方 形	5.09 × 4.98	5~10	凹 凸	13	地床炉	不明	土師器片43点・鉄製品1点	和泉期	貯蔵穴

の比較的大形の住居跡から成る。主軸方向は、N—44°—WからN—60°—Eの範囲に散らばり不規則であるが、入口部を想定した方向はすべて台地縁辺部に向いているといえる。

4区の集落は、4区南部のO7区を中心にして、南東方向に開く直径80m程の半月形に形成されている。住居跡構成は、床面積が30～32㎡の大形の住居跡4軒から成っている。主軸方向はN—12°～55°—Wの範囲に収まっている。カマドは北又は北西壁に構築され、入口部を想定した方向は南東を向いている。本集落の特徴として、各住居間の間隔が少なくとも24m以上離れていることが上げられる。このことは、この時期の住居跡が1軒でかなり広い土地を専有していたことを暗示するものではなかろうか。

当期の集落は、2例とも4軒からなる集落でありながら、お互いにその形態を違えている。後期中頃と思われる3区の集落は、各々の住居跡が接近し全体として環状に配置され中央部に広場を持つのに対し、後葉と思われる4区の集落は、住居跡間の間隔が広く、各々が広い敷地を所有していたと思われることである。このような事象が、当時の社会体制のどのような変化に基くのかという問題については、今後の検討課題としておきたい。

VII期 奈良時代(1) (第362図)

VII期は、第5群土器の第1類が出土した住居群で、4区の第2・11・13・16・17・18・26・28・40・41号住居跡が該当する。

VII期の集落は、4区南西部の台地縁辺部に集中しており、N6区を中心に南北80m程の範囲に住居跡が分布している。住居跡構成は、床面積32㎡と37㎡の大形住居跡2軒(第2・28号)と23㎡の中形住居跡1軒、10～18㎡の小形住居跡7軒から成り、大形住居2軒は集落の南端と北端に位置している。主軸方向は、N—0°～39°—Wの範囲にほとんどが収まり、住居跡の向きはかなり統一的であるといえる。なお、第18号住居跡だけは主軸方向がN—80°—Eを指し、本期の集落としては異例のものである。

本期の集落は、出土遺物等から8世紀の第2四半期前後に位置付けられるものである。集落の中心となっていたのは、南端の第28号住居跡や北端の第2号住居跡と考えられ、この2軒からは刀子等の鉄器が出土している。なお、第41号住居跡出土の土器には「V」の刻文が認められている。

VIII期 奈良時代(2) (第362図)

VIII期は、第5群土器の第2類が出土した住居群で、3区の第23・26号住居跡が該当する。

2軒の住居跡は、3区西端の台地縁辺部に位置し、L1区内の南北20mほどの範囲に並んでいる。住居跡の規模は10㎡と15㎡で、奈良時代としても小形の部類に入る。主軸方向はN—0°とN—28°—Wで、南及びやや南東向きに建てられていたものと思われる。

本期の集落は、8世紀の第2～3四半期に営まれた小集落と考えられる。

IX期 奈良時代(3) (第362図)

IX期は、第5群土器の第3類が出土した住居群で、3区の第64・66・70・78号住居跡と、4区の第1・10・27・29・31号住居跡が該当する。

IX期の集落は、当調査区南部の台地縁辺部に位置し、N6区を中心とするVIII期集落と重複し、西端はさらに3区側のN4区にまで延びている。住居跡構成は、床面積が30㎡の4区第10号住居跡、及び24㎡の3区第64号住居跡と19㎡以下の小形住居跡から成り、小形住居跡の中には6㎡と9㎡の極小形の住居跡2軒が含まれている。本期の中では大形の部類に入る4区の第10号と3区の第64号住居跡はやや内陸部に、その他の住居跡は台地縁辺部に添って半円形に配置している。各住居跡の主軸方向はN-9°-EからN-27°-Wの狭い範囲に収まることから、集落内の住居跡の向きはかなり規則的であったといえる。

本期は、出土遺物等から8世紀の第3～4四半期に位置付けられるものである。位置的に重複するVII期との間に土器分類上1類が設けられるが、南三島遺跡におけるVII期の集落と当集落は、お互いの住居跡間に切り合い関係を持たない事などから、かなり近接した時期に営まれていたものと推定される。なお、当該期集落の中では比較的大形の3区第64号住居跡からは、鉄鏃、刀子、棒状鉄製品など5点の鉄製品が、同じく大形の4区第10号住居跡からも、それぞれ2点の鉄製品が出土しており、集落の中心的な存在であったことを裏付けている。その他、3区の第66号住居跡からは、刀子及び、「未」の刻書や「凶」の刻文を有する土器が、第70号住居跡からは、「大」の刻書、4区第1号住居跡から「×」の刻文を有する土器が出土している。

X期 平安時代 (第363図)

X期は第6群土器が出土した住居群で、3区の第2・4・6・11・12・37・45・51・82・84・85・91・92・93・97・100・101・102・103・110・111・113号住居跡と、4区の第21・22・33・34・37・38・42・46・49・53・54号住居跡が該当する。これらの住居群は、X期間でも互いに切り合い関係を持つものが4か所程存在することから、2期又はそれ以上に分類できると思われる。

X期の住居群は、3区の西端から4区の東端に至る台地縁辺部の長さ300m程の範囲に3か所の大きなまとまりを持って存在している。ここでは、この位置的なまとまりに視点を置いて集落を解説していきたい。まず、住居群を3区と4区に大きく区分する。これは、位置的にみて、お互いの間に80mの空間地帯が存在することに所以する。次に、3区の住居跡群をM3a1区とN2a1区を結んだ線を境にして、台地西側の谷津に面する住居群と南側の沖積低地に面する住居群（以後便宜上前者を3区集落のAグループ、後者をBグループと仮称する）に区分した。これら3区の

住居群は大きな空間地帯もなく分布しているため、上記の線を持って区分するのは無謀とも思えるが、この地域が上記のように南方の沖積地と、西方の谷津との区分点にあることや、この地域に12m程の空間地帯があること、そして、ここを境に各住居跡の主軸方向が、北西向きを主にするものと北東向きを主にするものとに大別できること等の理由から、あえて大胆なグルーピングを試みた。

3区のAグループは、3区西端のL2区を中心に10軒の住居跡が西部に開口部を持つ直径50m程の半円形に配置している。住居跡構成は、床面積30㎡の第91号住居跡、10～14㎡の第6・92・93号住居跡、4～8㎡と極めて小形の第2・4・11・12・84・85号住居跡から成る。従って、大形住居跡1軒、小形住居跡3軒、極めて小形の住居跡6軒という住居跡構成が浮かび上がるが、第11号と12号間、第91号と第92号住居跡間には切り合い関係が認められることから、一時期には8軒程度の住居跡が存在したと推定される。住居跡の主軸方向はN-0°～35°-Wの狭い範囲に収まるものが全体の8割を占め、本グループの住居跡は全体として南あるいは南東向きに配置されていたといえる。ただ、第11号住居跡だけは、主軸方向がN-56°-Eを指し、Aグループの住居跡としては異例のものである。Bグループは、3区南部のM3区を中心に12軒の住居跡が東西80mの範囲に分布している。住居跡構成は、床面積17㎡の第101号住居跡と、それよりやや小さ目の10～15㎡の第37・45・82・97・102・103・110・111号住居跡、7～9㎡の第51・100・113号住居跡から成る。Aグループに比べると大形住居跡は見当たらず、Bグループ内では若干大き目の第101号住居跡を最大として、その他小形住居跡8軒、極めて小形の住居跡3軒からなる住居跡構成であることが分かる。各住居跡の主軸方向は、極端に東を向く第103・110・113号住居跡の4軒を除くと、すべてN-0°～41°-Wの範囲に収まり、Bグループの住居跡は全体として南あるいは南西向きに配置されていたといえる。なお、第103・110・111・113号住居跡の4軒は、主軸方向がN-70°～113°-Eの狭い範囲に収まるもので、いずれもN3a区を中心とする直径16mの範囲に集中して存在している。出土遺物は少ないが、第110・111・113号住居跡からは同形の高台付坏（土師器）が出土していることから、Bグループの他の住居跡からみると若干の時間差を持つと考えることも可能である。なお、当グループの中で比較的大形の第101号住居跡からは、灰釉陶器のほか鉄鏃・刀子などの鉄器が出土しており、グループの中心的存在であったことが窺える。また、第97号住居跡からは「富壽神宝」が出土している。

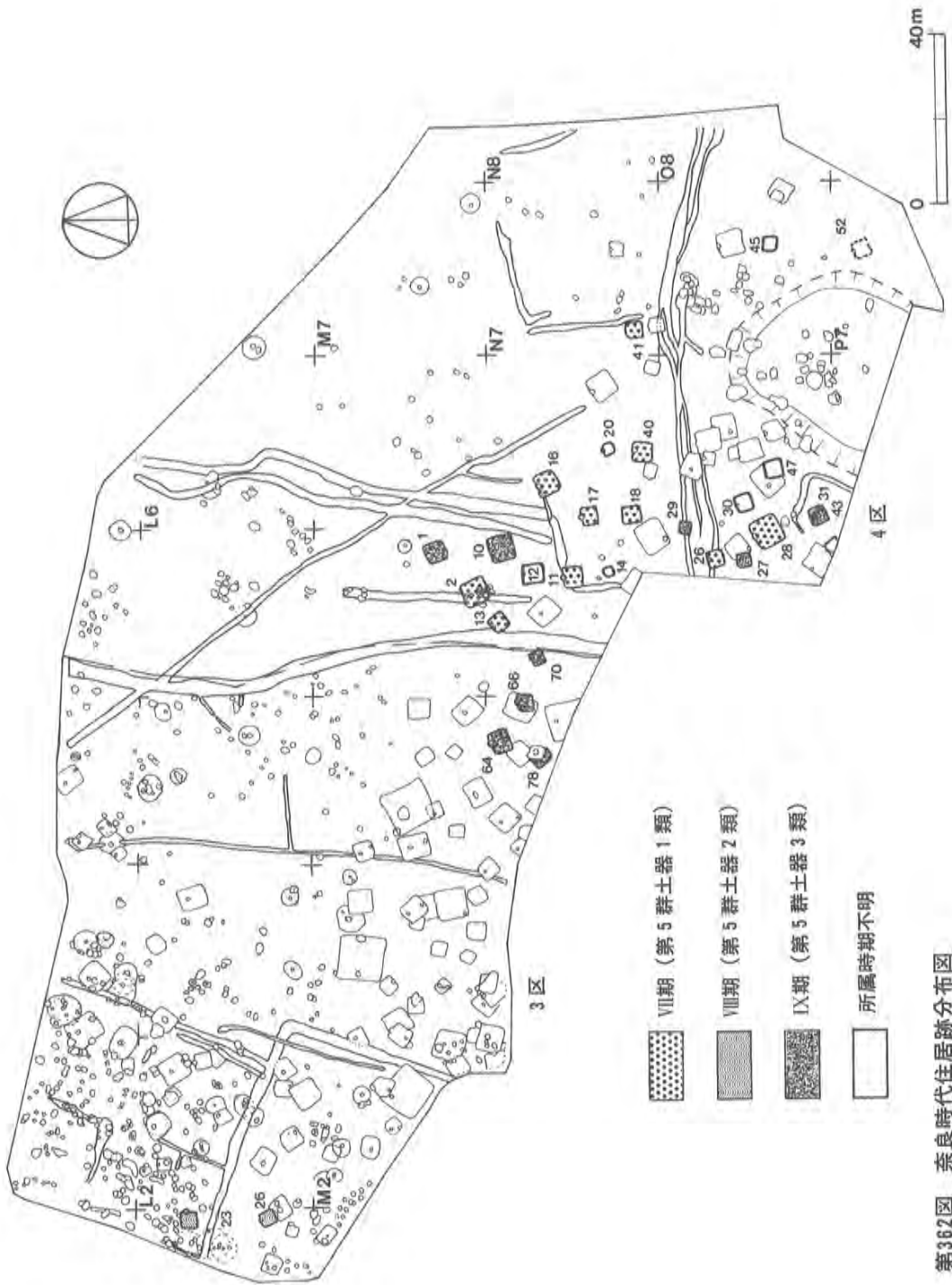
4区の集落は、4区南部のO6区を中心に広がり、南方に開く直径80m程の半円形状に形成されている。住居跡構成は、床面積29㎡の第34号住居跡と25㎡の第46号住居跡、11～17㎡の第37・38・49号住居跡、6～9㎡の第21・22・33・42・54号住居跡から成っている。ここでは、大形とやや大き目の住居跡2軒、小形及び中型の住居跡3軒、極めて小形の住居跡5軒という住居跡構成がみられる。なお、同地区には時期は不明ではあるが本期に属する可能性を持つ住居跡6軒が存在

しており、小形や極めて小形の住居跡の数は増えることが予想される。また、中形住居跡の第37号と38号住居跡、大形の第34号住居跡と極めて小形の第33号住居跡は、それぞれ切り合い関係を有し、第33・38号住居跡が新しく建てられていることから、一時期には10軒前後の住居跡が存在したものと考えられる。住居跡の主軸方向は、時期の明らかでないものも含めると、N-0°~35°-Wの範囲に収まるものが80%に達することから、本集落の住居跡は南から南東向きに配置されていたといえる。なお、第21号住居跡と第54号住居跡は主軸方向が極端に西を指すもので、当集落としては、カマドを北コーナー部に持つ第22号住居跡と共に異例のものである。なお、大形の第34号住居跡からは鉄製の鎌先・鎌・刀子が、やや大き目の第46号住居跡からは刀子・鉄斧が出土しており、これらが集落の中心的存在であったことを示唆している。また、第38号住居跡からは「小型素文鏡」が出土しており注目に値する。

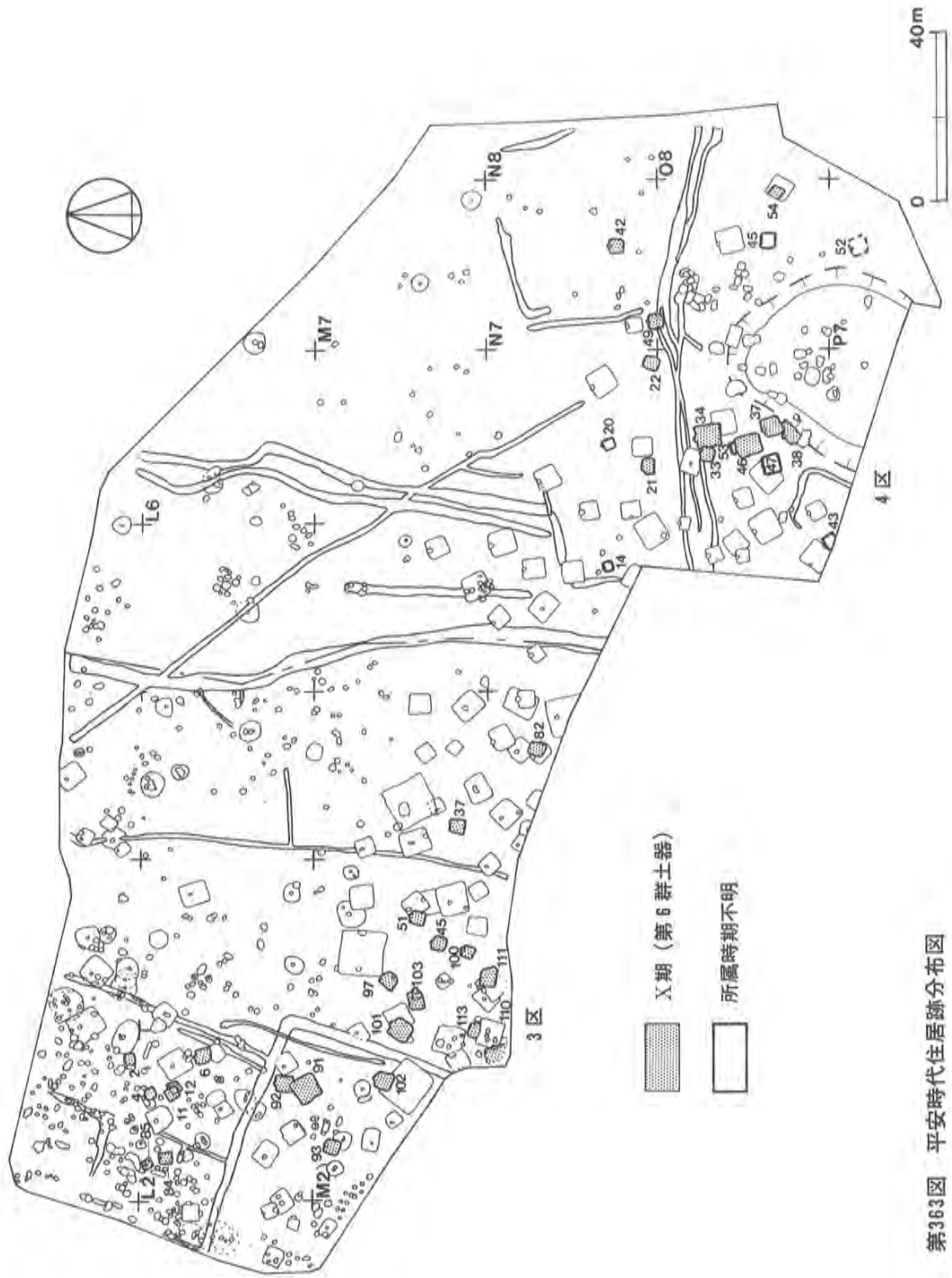
本期の集落は、9世紀後半から10世紀前半にかけての時期に位置付けられるものである。これまで、本期に属する住居群を3つのグループに分け、それぞれの住居群の在り方を検討してきた。その結果、3区集落のAグループは、南端に中心部を持って北西に広がり、Bグループは、Aグループと接する西端に中心部を持って東方に広がっていることが、4区集落は、西端に中心部を持って東方に広がっていること等が明らかになった。しかし、3区集落のAグループとBグループの関係、及び3区集落と4区集落の関係について触れることはしなかった。そこで、これらの関係について、本期の住居跡から出土している墨書土器や刻書土器をもとに若干の考察を加えてみたい。墨書・刻書を有する土器は、3区から22点（墨書20点、刻書2点）、4区から15点（墨書10点、刻書5点）が出土しており、「幡」「一幡」「△幡」「路大」「⊕」「人」「卅」「未」等の文字がみられる。これらの文字の中では、「幡」と「人」が最も多く、「幡」は全体の46%、「人」は全体の27%を占めている。この2つの文字の出土状況には、かなり特徴的な片寄りがみられ、3区集落では、Aグループから「幡」の墨書5点と「人」の刻書1点が、Bグループから「幡」の墨書10点と「人」の刻書1点が出土しているのに対し、4区集落からは「人」が8点（墨書4点、刻書4点）と「幡」の墨書1点が出土している。ちなみに、2つの文字が占める割合を各グループごとに算出してみると、Aグループは「幡」が56%に対し、「人」が11%（ただし1点のみ）、Bグループは「幡」が76%で、「人」は8%（ただし1点のみ）、4区集落は「人」が15%に対し、「幡」が7%（ただし1点のみ）という数値が得られる。これらの結果から、3区集落は共に「幡」文字を主に、4区集落は「人」文字を主に出土するという区分が成立する。また、これらの文字を出土する住居跡は、3区集落のAグループでは10軒中5軒、Bグループでは12軒中4軒で、4区集落は11軒中5軒である。以上のことから、3区集落のA・Bグループは、共に「幡」文字を何らかの共通的な付号とする集団で、4区集落は「人」文字を何らかの共通的な付号とする集団であったと推測される。さらに、3区集落のA・Bグループが共に「幡」文字を共

通的な付号にしているということは、両者が同一、あるいは極めて緊密な関係（もちろん時間差も含めて）にある集落であったと考えることができるのではないだろうか。また、3区集落に「人」文字が4区集落に「人」文字が互いに混入していることは、両集落間に何らかの交流が存在した事を窺わせるものである。

以上、南三島遺跡3・4区から検出された住居跡を中心に、遺跡全体を見通しながら弥生時代以降の集落の変遷について概要を述べてきたが、遺跡全体の持つ情報量が膨大なことを考えると、必ずしも十分な解説や考察がなされたとはいえない。むしろ、これらの作業を通して、解決されなければならない数々の問題点が浮かび上ってきたというべきであろう。今後、研究者による分析・検討がさらに進み、南三島遺跡の解明が少しでもなされることを熱望する次第である。



第302図 奈良時代居住跡分布図



第363図 平安時代居住跡分布図

表17 3区奈良・平安時代住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	長軸方向 (主軸方向)	平面形	規 模		床 面	柱穴数	炉 カマド	覆土	出 土 遺 物	時 期	備 考
				長軸 × 短軸(m)	壁高(cm)							
2	K2j _s	N-0°	楕円形	3.64 × 2.73	10	ゆるい 起伏	4	カマド	不明	土師器片102点・須惠器片10点 灰釉陶器片3点・鉄製品1点	9~10世紀	SI3・SK125 126・貯蔵穴
4	L2a _r	N-25°-W	方 形	2.80 × 2.50	10~15	ゆるい 起伏	0	カマド	不明	土師器片9点	9~10世紀	SK130・ 137・138
6	L2d _s	N-15°-W	方 形	3.70 × 3.50	35~40	ゆるい 起伏	3	カマド	自然	土師器片261点・須惠器片53点 支脚1点	9~10世紀	SI17
11	L2b _r	N-56°-E	方 形	3.30 × 3.05	30~40	凹 凸	8	カマド	人為	土師器片135点・須惠器片16点	9~10世紀	
12	L2b _r	N-30°-W	方 形	2.80 × 2.72	10	平 坦	2	カマド	不明	土師器片29点・須惠器片10点 鉄製品1点	9~10世紀	SI11
23	L1c _s	N-0°	方 形	4.30 × 4.00	30~40	凹 凸	5	カマド	不明	土師器片23点・須惠器片2点 陶器片1点・支脚片5点	8世紀	
26	L1h _s	N-28°-W	方 形	3.65 × 3.50	35	平 坦	4	カマド	自然	土師器片51点・須惠器片2点 砥石1点	8世紀	SI53
37	M4i _s	N-8°-E	方 形	3.46 × 3.37	45	平 坦	2	カマド	自然	土師器片94点・須惠器片5点 鉄製品1点	9~10世紀	
45	M3h _s	N-17°-E	方 形	3.40 × 3.38	30~40	平 坦	1	カマド	自然	土師器片261点・須惠器片28点	9~10世紀	
51	M3f _r	N-15°-E	方 形	3.30 × 3.30	35	平 坦	1	カマド	自然	土師器片196点・須惠器片42点 紡錘車2点・砥石1点	9~10世紀	SI50-52
64	N4a _s	N-25°-W	台 形	5.55 × 4.90	40~50	平 坦	5	カマド	自然	土師器片464点・須惠器片63点 紡錘車1点・鉄製品4点	8世紀	SI77
66	N4c _s	N-6°-W	方 形	4.08 × 3.70	30~40	平 坦	7	カマド	自然	土師器片162点・須惠器片74点 球状土錘2点・鉄製品1点	8世紀	SI68
70	N5c _s	N-30°-W	方 形	3.65 × 3.20	40~50	ゆるい 起伏	1	カマド	自然	土師器片84点・須惠器片9点	8世紀	
78	N4d _r	N-47°-W	方 形	4.41 × 4.30	54	凹 凸	3	カマド	自然	土師器片602点・須惠器片149点	8世紀	SI82
82	N4c _r	N-13°-E	(方 形)	(3.83) × (3.23)	50~60	ゆるい 起伏	4	—	自然	土師器片26点・須惠器片14点 球状土錘1点	9~10世紀	SI77-78
84	L2b _s	N-5°-W	方 形	3.15 × 2.85	10~15	平 坦	5	カマド	不明	土師器片9点・須惠器片3点	9~10世紀	SK441
85	L3a _r	N-27°-W	長 方 形	2.45 × 2.10	5	平 坦	4	カマド	不明	土師器片4点	9~10世紀	SK464・465
91	L2j _r	N-35°-W	方 形	6.00 × 6.00	60~70	平 坦	4	カマド	自然	土師器片148点・須惠器片43点 球状土錘1点・貝1点	9~10世紀	SI92
92	L2i _r	N-7°-E	方 形	4.20 × 3.80	25~40	平 坦	2	カマド	自然	土師器片249点・須惠器片35点 鉄製品1点・礫2点	9~10世紀	SI91
93	M2b _r	N-18°-E	方 形	3.43 × 3.42	10~15	平 坦	2	カマド	自然	土師器片205点・須惠器片6点 支脚1点・鉄製品1点	9~10世紀	SI105
97	M3e _s	N-41°-E	長 方 形	3.85 × 3.30	40	平 坦	1	カマド	自然	土師器片597点・須惠器片88点 鉄製品1点・古銭1点	9~10世紀	SK487
100	M3i _s	N-25°-E	方 形	3.00 × 2.85	10~20	平 坦	0	カマド	自然	土師器片133点・須惠器片21点 紡錘車1点・礫1点	9~10世紀	
101	M3e _i	N-35°-E	方 形	4.85 × 4.50	37~44	平 坦	5	カマド	人為	土師器片604点・須惠器片342点 灰釉陶器3点・鉄製品6点	9~10世紀	SI112
102	M2e _s	N-21°-E	台 形	4.20 × 3.88	40~45	平 坦	4	カマド	自然	土師器片213点・須惠器片119点 支脚1点	9~10世紀	SI107 SK525
103	M3f _s	N-90°-E	方 形	3.75 × 3.70	10	平 坦	2	カマド	不明	土師器片22点・須惠器片3点	9~10世紀	SK484~486 488~490
110	N2a _s	N-70°-E	不 明	(4.80) × (3.20)	0	平 坦	4	カマド	不明	土師器片18点・須惠器片1点	9~10世紀	SI108
111	M3a _s	N-83°-W	方 形	4.40 × 4.10	20	ゆるい 起伏	4	カマド	自然	土師器片155点・須惠器片12点	9~10世紀	SI115
113	M3a _i	N-77°-W	隅丸長方形	3.23 × 2.70	13~16	ゆるい 起伏	4	カマド	自然	土師器片145点・須惠器片23点 礫2個	9~10世紀	SI108 SK527

表18 4区奈良・平安時代住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	長軸方向 (主軸方向)	平面形	規 模		床 面	柱穴数	炉 カマド	覆土	出 土 遺 物	時 期	備 考
				長軸 × 短軸(m)	壁高(cm)							
1	M5g ₁	N-23°-W	方 形	4.74 × 4.57	38	ゆるい 起伏	5	カマド	自然	土師器片95点・須惠器片14点 支脚1点	8世紀	
2	M5i ₇	N-23°-W	方 形	5.95 × 5.71	27	平 坦	4	カマド	自然	土師器片185点・須惠器片69点 鉄製品2点	8世紀	SK12~20・ 23
10	N5a ₅	N-19°-W	方 形	6.00 × 5.73	37	平 坦	5	カマド	自然	土師器片506点・須惠器片154点 鉄製品2点・石製品1点	8世紀	
11	N5e ₅	N-4°-W	方 形	4.78 × 4.72	23~27	平 坦	5	不 明	人為	土師器片23点・手捏土器1点	8世紀	SD16
12	N5c ₅	N-5°-W	方 形	4.48 × 4.41	10	平 坦	5	カマド	不明	土師器片102点・須惠器片10点 手捏土器1点	8世紀	
13	N5a ₅	N-39°-W	方 形	4.24 × 4.23	22~25	ゆるい 起伏	5	カマド	自然	土師器片250点・須惠器片31点	8世紀	
14	N5g ₅	N-20°-W	方 形	2.31 × 2.20	20	平 坦	0	カマド	自然		8~10世紀	
16	N6d ₅	N-26°-W	方 形	5.13 × 4.90	20	ゆるい 起伏	5	カマド	自然	土師器片110点・須惠器片29点	8世紀	SD17
17	N6f ₁	N-8°-W	方 形	4.10 × 3.73	47	平 坦	5	カマド	自然	土師器片117点・須惠器片22点 鉄製品1点	8世紀	
18	N6h ₁	N-80°-E	方 形	4.21 × 3.76	20	平 坦	4	カマド	自然	土師器片67点・須惠器片4点 砥石1点	8世紀	
21	N6j ₁	N-77°-W	方 形	3.32 × 2.94	12~15	ゆるい 起伏	1	カマド	自然	土師器片24点・須惠器片4点 土製品1点	9~10世紀	
22	N6j ₉	N-16°-E	方 形	3.21 × 3.05	47	凹 凸	3	カマド	自然	土師器片70点・須惠器片11点 石製品1点・鉄製品1点	9~10世紀	
26	O5d ₅	N-19°-W	方 形	3.86 × 3.51	26~30	凹 凸	5	カマド	自然	土師器片38点・須惠器片17点	8世紀	SD 6
27	O5e ₅	N-13°-W	方 形	3.26 × 3.15	12~24	凹 凸	3	カマド	自然	土師器片37点・須惠器片4点	8世紀	SI24
28	O5g ₅	N-30°-W	方 形	6.45 × 6.30	30	ゆるい 起伏	6	カマド	自然	土師器片493点・須惠器片59点 鉄製品1点	8世紀	
29	O6b ₁	N-6°-E	長 方 形	2.97 × 2.40	5~10	凹 凸	0	カマド	自然	土師器片82点・須惠器片7点 手捏土器1点	8世紀	SD 7
30	O6e ₂	N-21°-W	方 形	4.25 × 4.08	20~25	平 坦	5	カマド	自然	土師器片126点・須惠器片10点	8世紀	
31	O6j ₁	N-27°-W	方 形	4.11 × 4.05	0	ゆるい 起伏	5	カマド	不明	土師器片31点・須惠器片11点	8世紀	
33	O6c ₄	N-86°-W	方 形	3.25 × 2.90	16	平 坦	0	カマド	不明	土師器片81点・須惠器片11点 球状土錘1点・鉄製品1点	9~10世紀	SD 6
34	O6c ₅	N-15°-W	方 形	5.55 × 5.43	8~14	ゆるい 起伏	6	カマド	不明	土師器片354点・須惠器片143点 紡錘車1点・鉄製品4点	9~10世紀	SI33・35
37	O6g ₅	N-22°-W	方 形	4.40 × 4.38	0	凹 凸	5	カマド	不明	土師器片52点・須惠器片64点 砥石1点	9~10世紀	SI38
38	O6h ₅	N-35°-W	方 形	5.20 × 5.20	20	平 坦	4	カマド	不明	土師器片15点・須惠器片10点 銅製品1点	9~10世紀	SI37・SK125 SY4
40	N6i ₅	N-0°	方 形	4.55 × 4.50	42	平 坦	5	カマド	自然	土師器片117点・須惠器片8点 土製品1点	8世紀	
41	N7i ₂	N-6°-W	方 形	3.53 × 3.47	33~37	ゆるい 起伏	5	カマド	自然	土師器片8点・須惠器片1点	8世紀	
42	N7h ₁	N-0°	方 形	3.33 × 3.25	30~35	凹 凸	0	カマド	自然	土師器片117点・須惠器片42点 砥石1点・鉄製品1点	9~10世紀	
43	O5j ₉	N-37°-W	方 形	3.40 × 3.19	0	平 坦	0	カマド	不明		8~10世紀	SI36
45	O7g ₇	N-4°-E	方 形	3.58 × 3.57	0	平 坦	5	カマド	不明		8~10世紀	
46	O6f ₅	N-18°-W	方 形	5.55 × 5.00	34	ゆるい 起伏	8	カマド	人為	土師器片226点・須惠器片179点 鉄製品2点	9~10世紀	SI53
47	O6g ₄	N-17°-W	方 形	4.35 × 4.32	25	平 坦	5	カマド	自然	土師器片38点・須惠器片10点 球状土錘1点・砥石1点	8世紀	SI25
49	N7j ₂	N-8°-W	方 形	3.60 × 3.45	16~24	ゆるい 起伏	1	カマド	自然	土師器片102点・須惠器片32点 鉄製品2点・鉄滓1点	9~10世紀	SD 7
52	P7b ₇	N-25°-W	方 形	(4.10) × (4.00)	0	平 坦	5	カマド	不明	土師器片8点・須惠器片1点	8~10世紀	
53	O6e ₅	N-20°-W	方 形	2.83 × 2.83	2~5	平 坦	0	カマド	不明	土師器片12点・管状土錘1点	9~10世紀	SI46

住居跡 番号	位置	長軸方向 (主軸方向)	平面形	規 模		床 面	柱穴数	炉 カマド	覆土	出 土 遺 物	時 期	備 考
				長軸 × 短軸(m)	壁高(cm)							
54	O7g ₀	N-63°-W	方 形	3.05 × 2.80	0~4	平 坦	0	カマド	不明	土師器片5点	9~10世紀	SI44

表19 3区竪穴遺構一覧表

遺 構 番 号	位置	長軸方向 (主軸方向)	平 面 形	規 模		床 面	柱穴数	炉 カマド	覆土	出 土 遺 物	時 期	備 考
				長軸 × 短軸(m)	壁高(cm)							
1	Lai ₃	N-75°-W	方 形	2.55 × 2.44	28	平 坦	2	—	自然		不 明	SK202
2	M4f ₃	N-60°-E	隅丸長方形	3.40 × 2.70	19	平 坦	10	—	自然	土師器片30点	五領期	
3	L2i ₃	N-33°-W	方 形	4.85 × 4.45	20~25	平 坦	4	—	自然	土師器片10点	不 明	

表20 4区竪穴遺構一覧表

遺 構 番 号	位置	長軸方向 (主軸方向)	平 面 形	規 模		床 面	柱穴数	炉 カマド	覆土	出 土 遺 物	時 期	備 考
				長軸 × 短軸(m)	壁高(cm)							
1	O7e ₁	N-27°-W	長 方 形	4.72 × 2.64	53~66	ゆるい 起 伏	0	な し	人為	石3個	不 明	

終章 むすび

昭和59年12月に着手した南三島遺跡3・4区の発掘調査は、住居跡166軒、土坑692基を含む多数の遺構・遺物を検出し、昭和61年7月31日に終了した。南三島遺跡全体100,311m²の発掘調査は、昭和56年4月に開始し5年4ヵ月を費して完了した。

この調査を通して、南三島遺跡は縄文時代早期から中世に及ぶ大規模な複合遺跡であることが明らかになった。縄文時代については、当教育財団報告書第44集「南三島遺跡3・4区(1)」に詳しく記述されており、特に、中期の住居跡が台地の内陸部に大規模な集落を形成しているのに対し、後期の住居跡が、西側の谷津に面した台地縁辺部に貝塚を伴う集落を形成していることは、生業の変化の一部を暗示するものとして興味深い。

弥生時代以降の集落については、本報告書で述べたように、遺跡の西部から南部にかけての台地縁辺部に帯状に分布しており、検出された住居跡は、各時期ごとに特色ある集落形態を示している。弥生時代から平安時代にかけての集落のほぼ全容が、このように明らかになった例は県内でも数少ないものである。今後、各時期の集落を研究するに当たり、貴重な資料となり得るものと思われる。

また、4区南部の窪み地帯には、地下式坑4基を含む中世の墓壇群が検出され、出入口部と2本の柱穴を持つ長方形の墓壇が調査されている。中世の墓壇の調査例は、近接する屋代B遺跡を始め、県内でも除々にその数を増しつつあるが、個々について十分な検討がなされているとは言い難い。葬送儀礼については、地域差や時代による差異も激しく、難解な面もあるが、数少ない中世の遺構であることから、文献資料や民族資料を取り入れつつ、今後解明を進めていかなければならない事項と思われる。

遺物としては、平安時代の集落から57点の墨書土器や刻書土器が出土した他、3区の第97号住居跡から皇朝十二銭の一つである「富壽神宝」が、4区の第38号住居跡から県内では3例目と思われる「小型素文鏡」が出土しており、注目に値する。

南三島遺跡3・4区の整理を担当し、幾らかでも南三島遺跡の解明に努めたいと微力を尽してきたが、南三島遺跡の持つ情報量の豊富さに圧倒され、不十分な結果に終わってしまった。今後、引き続き資料の分析・検討を行い、南三島遺跡とその周辺地帯の解明がより一層進展するよう努力していきたい。

なお、本報告書をまとめるにあたり、竜ヶ崎市教育委員会をはじめ、関係各位の御指導・御協力に対し、文末ながら深く感謝の意を表する次第である。

写 真 図 版

○出土遺物に付された数字，及び記号は，左から調査区，出土地点，実測図番号を表わす。

なお，同一地区から出土した遺物だけで，1枚の図版が構成されている場合は，調査区を表わす数字を省略した。



遺跡遠景

PL2

3区



遺跡全景



上物除去



試掘



遺構確認



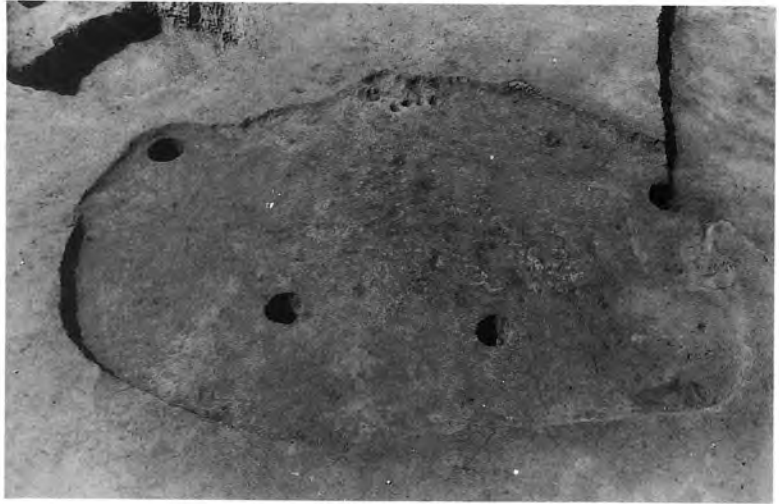
調査風景

3区

PL3



第1号住居跡



第2号住居跡



第4号住居跡

PL4

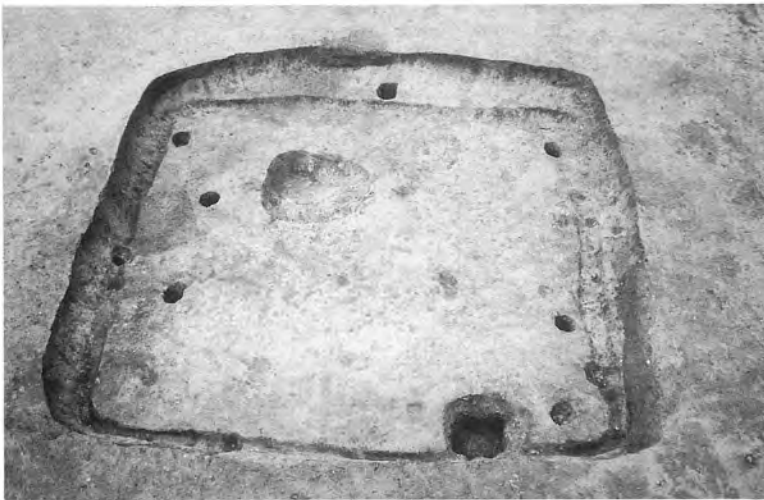
3区



第5号住居跡



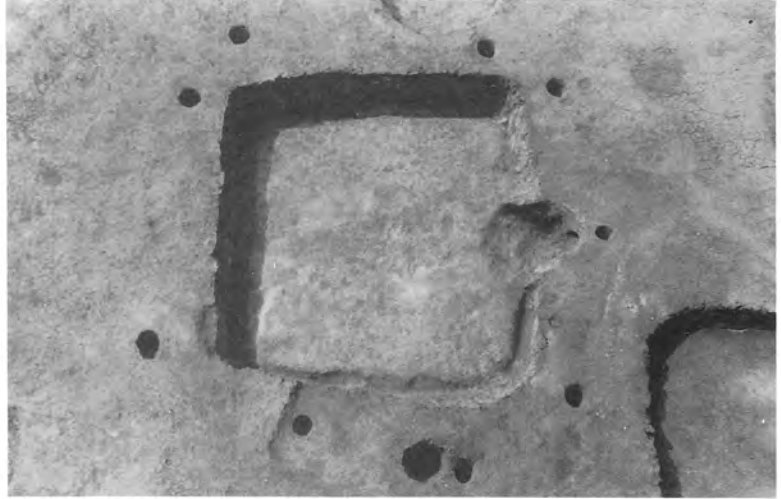
第6号住居跡



第7号住居跡

3区

PL5



第11号住居跡



第12号住居跡



第13号住居跡

PL6

3区



第14号住居跡



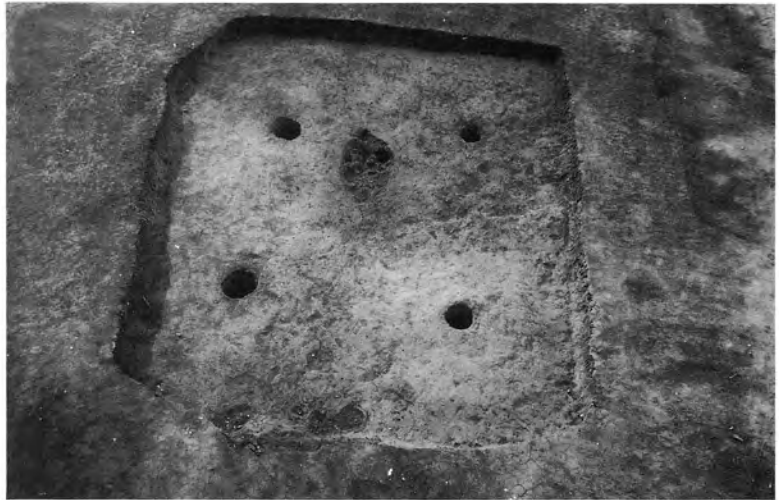
第19号住居跡



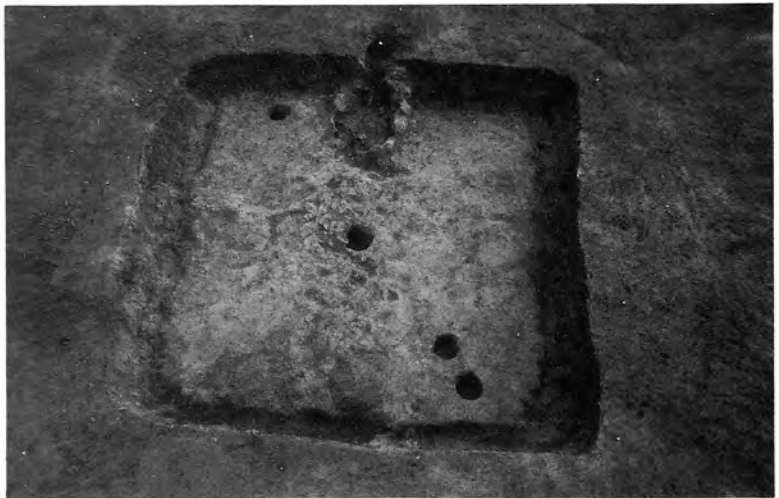
第21号住居跡



第23号住居跡



第25号住居跡



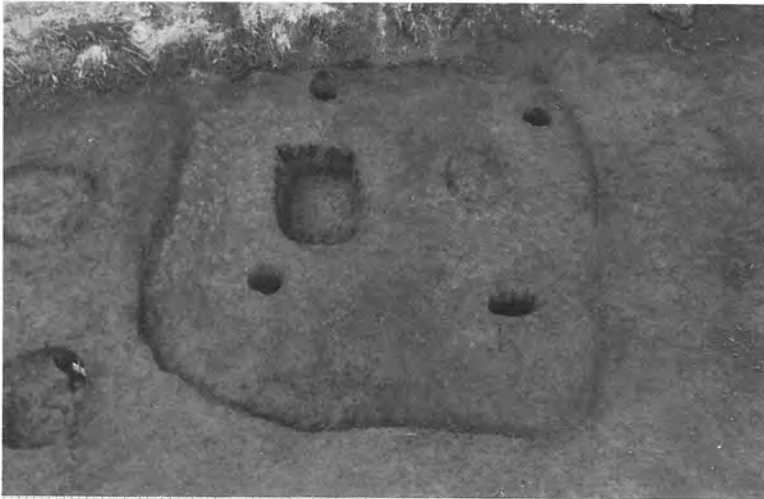
第26号住居跡

PL8

3区



第27号住居跡



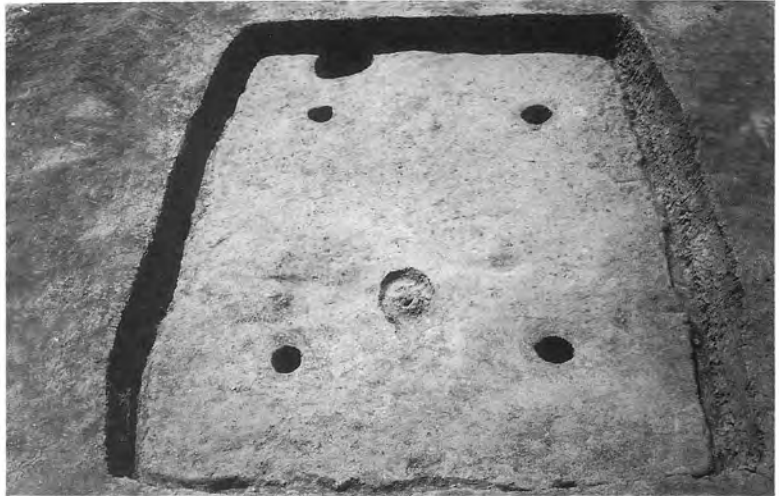
第29号住居跡



第31号住居跡



第32号住居跡



第33号住居跡



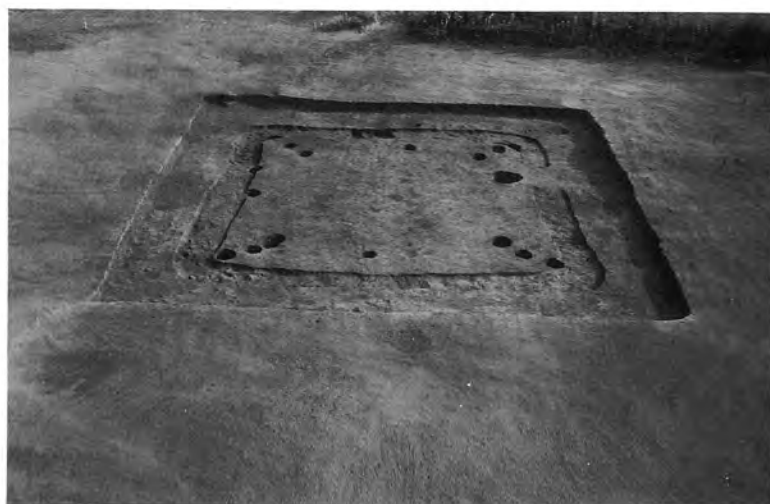
第36号住居跡

PL10

3区



第37号住居跡



第38号住居跡



第39号住居跡



第40号住居跡



第41号住居跡



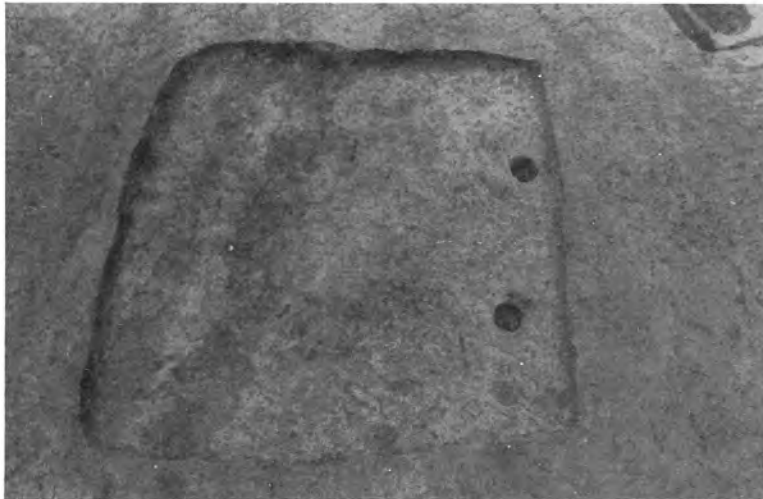
第42号住居跡

PL12

3区



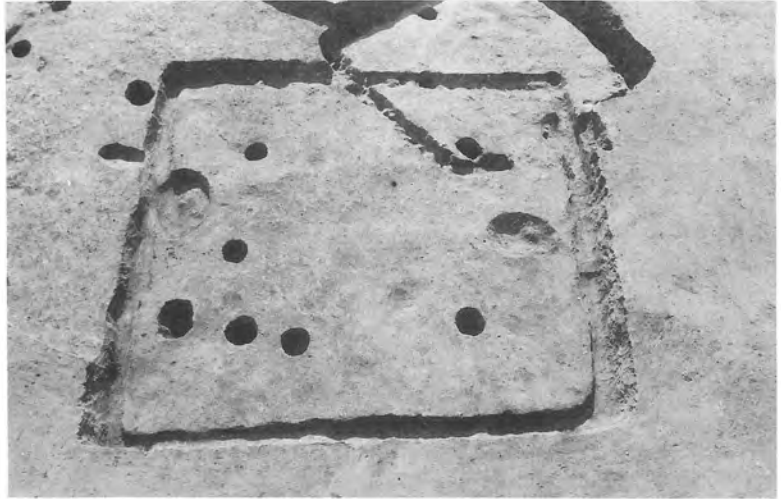
第43号住居跡



第44号住居跡



第45号住居跡



第50号住居跡



第51号住居跡



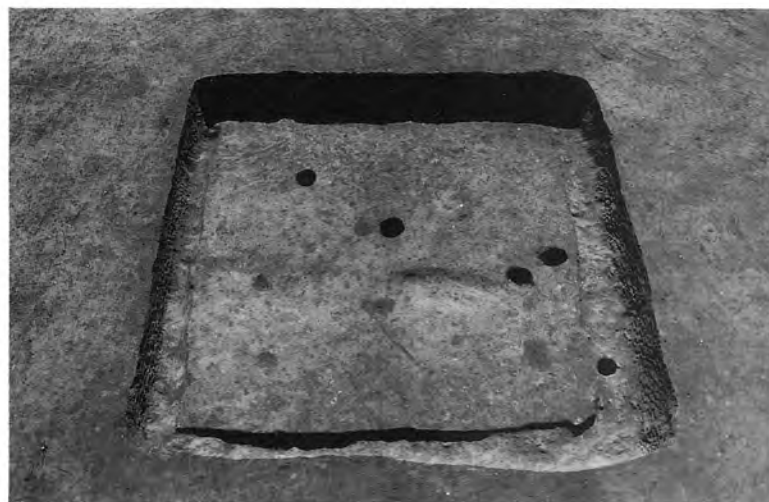
第55号住居跡

PL14

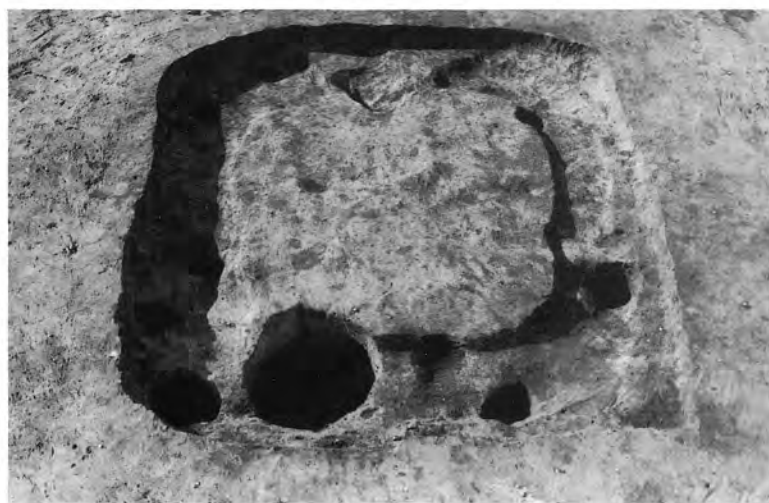
3区



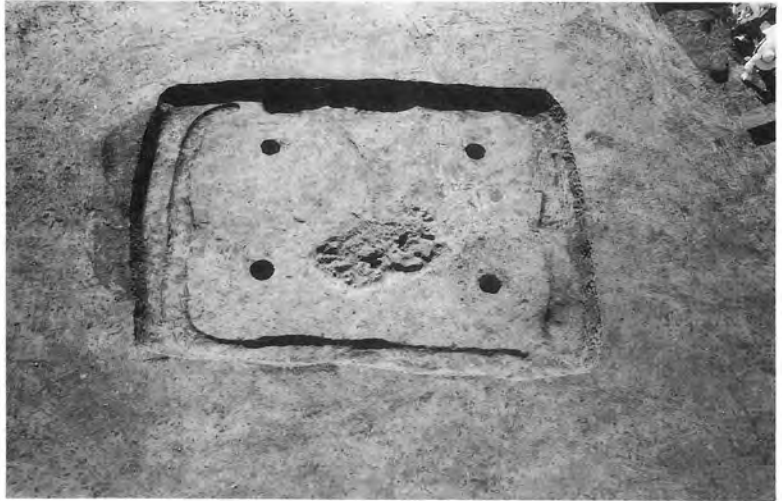
第57号住居跡



第59号住居跡



第60号住居跡



第61号住居跡



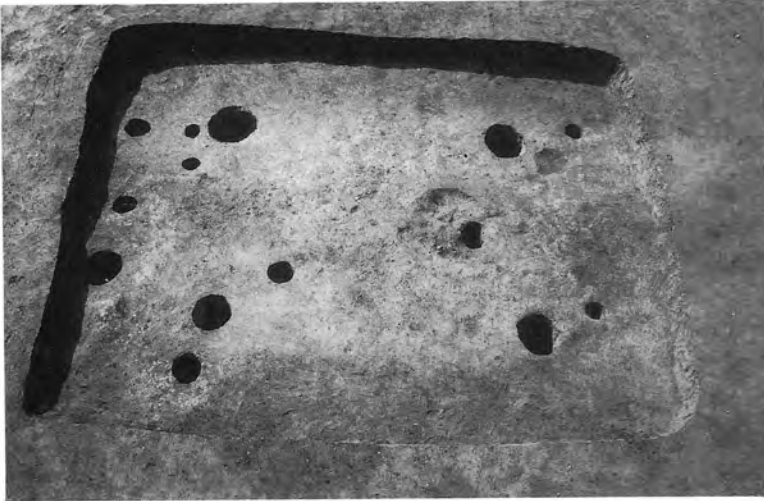
第63号住居跡



第64号住居跡

PL16

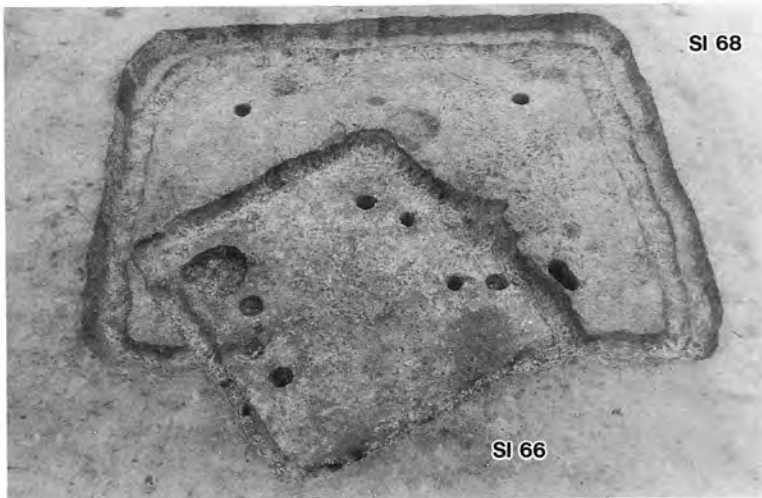
3区



第65号住居跡



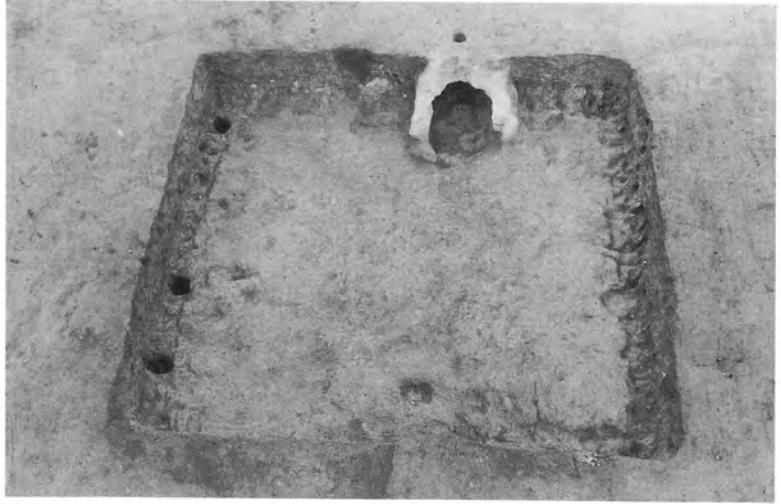
第67号住居跡



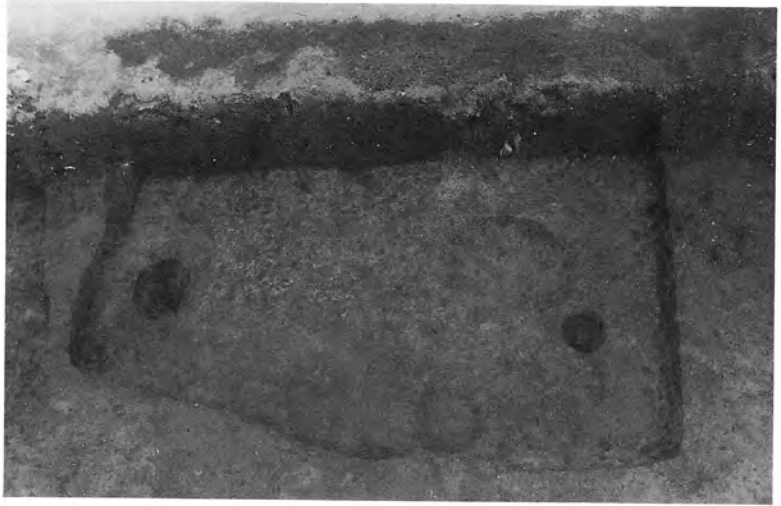
SI 68

SI 66

第66・68号住居跡



第70号住居跡



第71号住居跡



第73号住居跡

PL18

3区



第75号住居跡



第76号住居跡



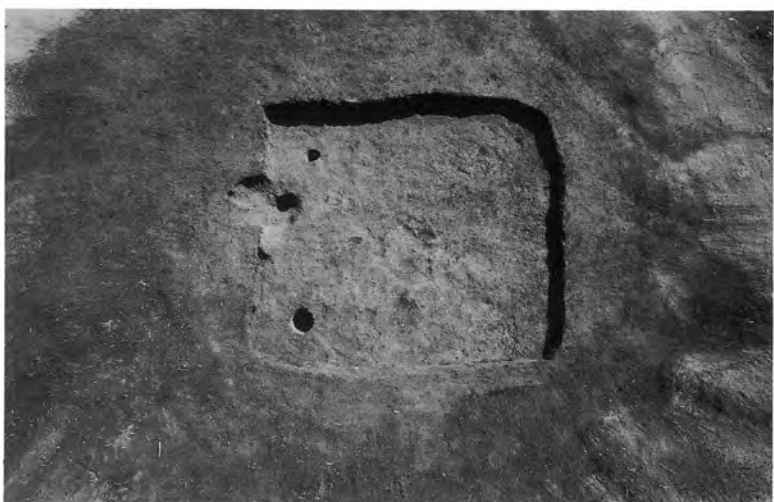
第78・82号住居跡



第84号住居跡



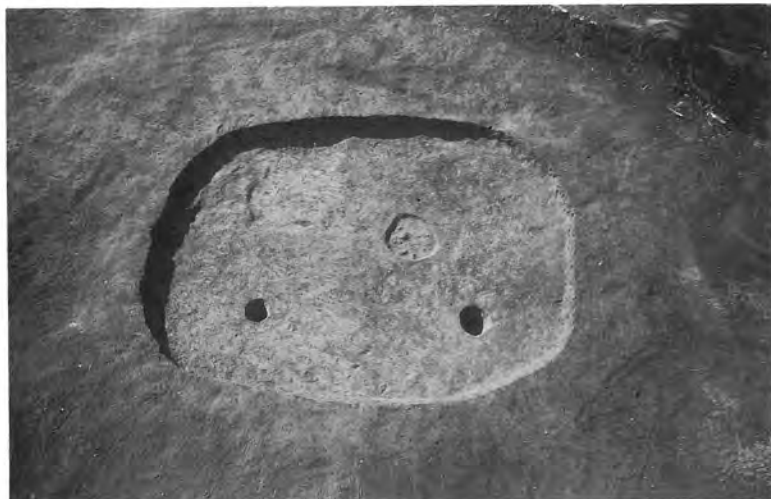
第92号住居跡



第93号住居跡

PL20

3区



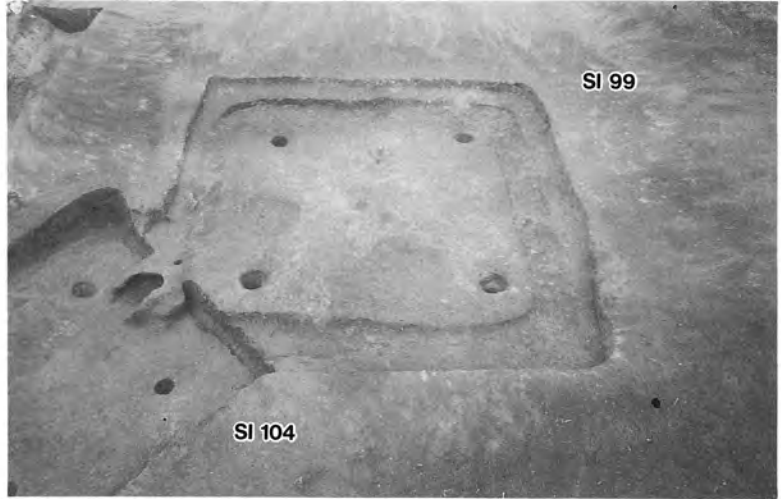
第94号住居跡



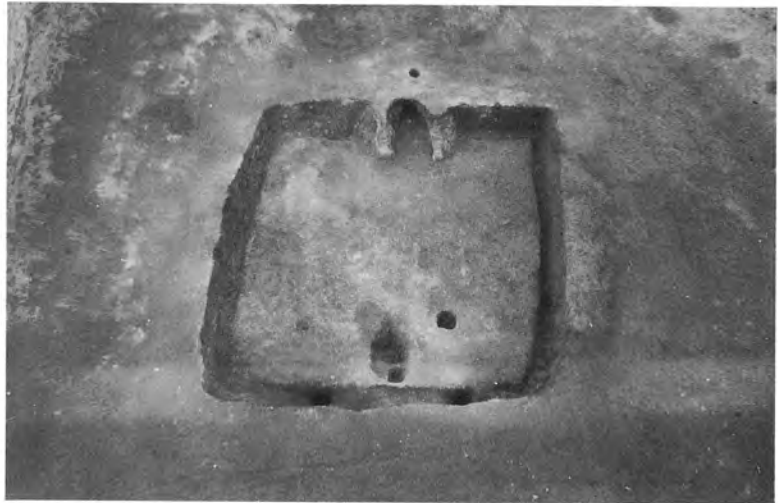
第95号住居跡



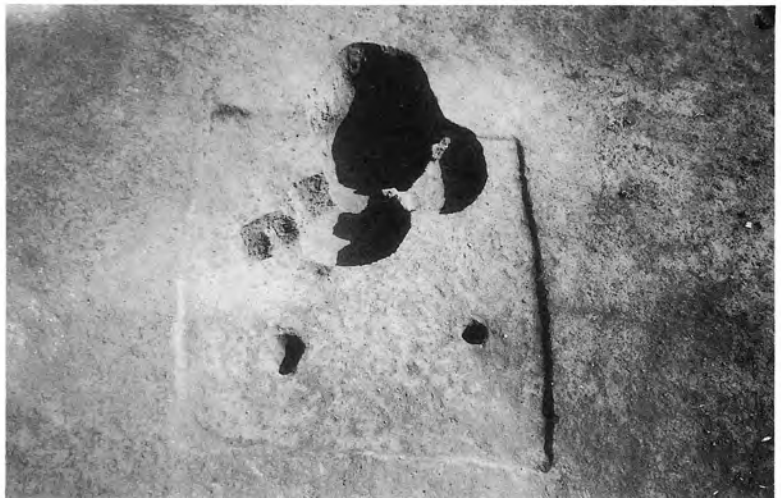
第97号住居跡



第99号住居跡



第101号住居跡



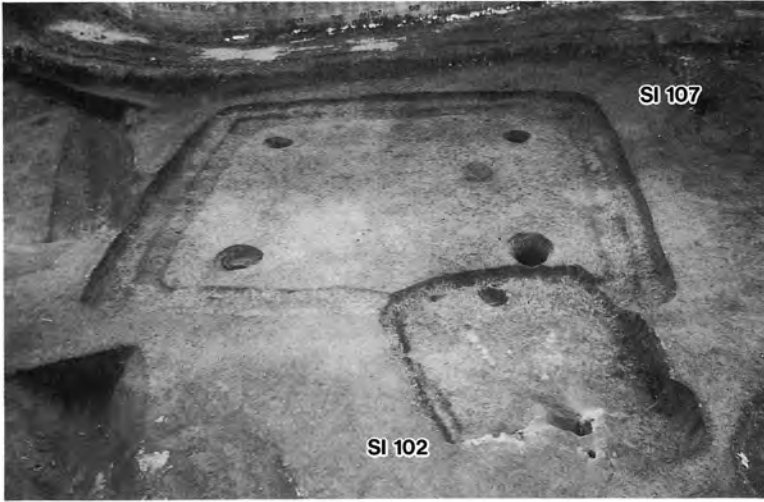
第103号住居跡

PL22

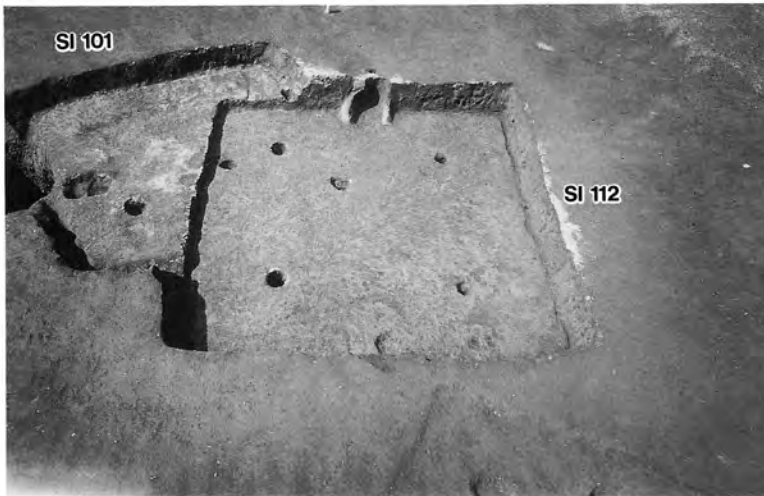
3区



第104号住居跡



第107号住居跡



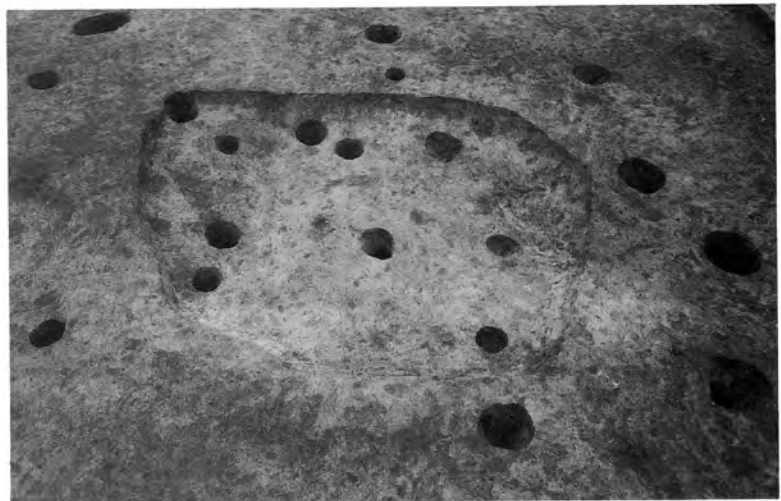
第112号住居跡



第114号住居跡



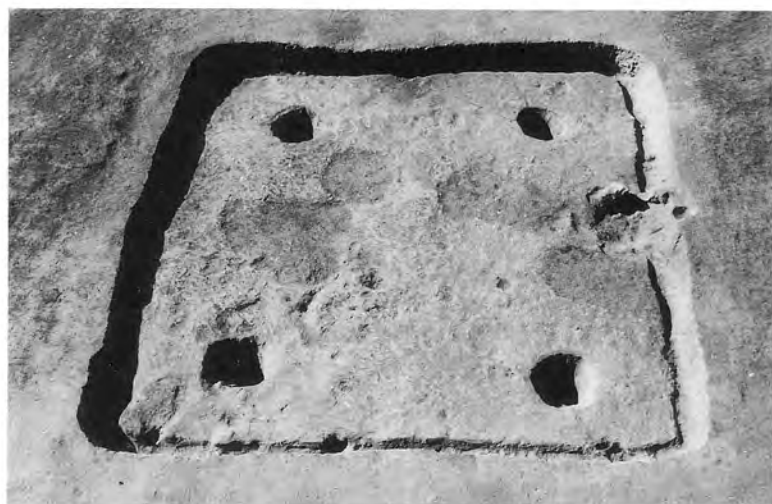
第115号住居跡



第2号竖穴遺構



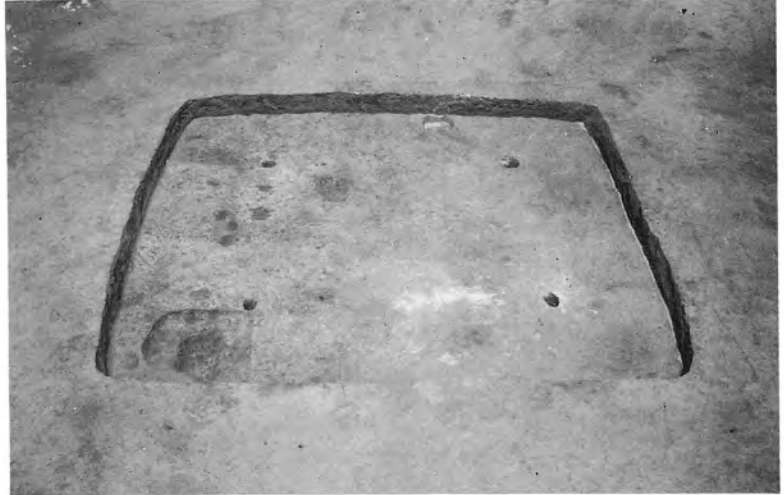
第1号住居跡



第2号住居跡



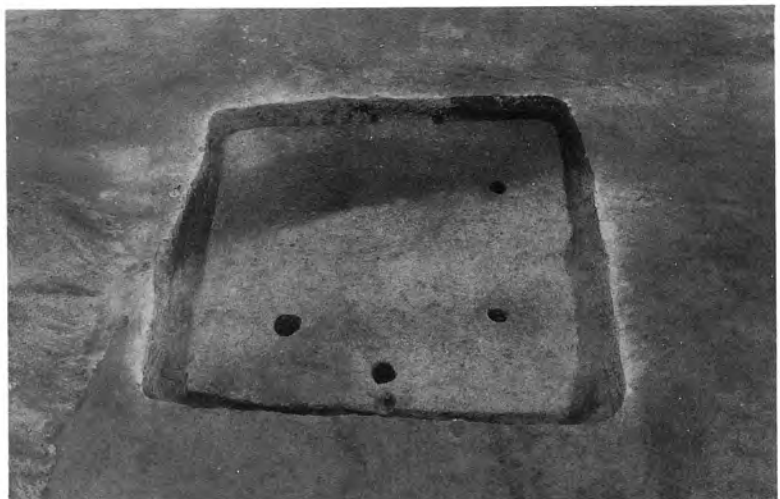
第8号住居跡



第 9 号住居跡



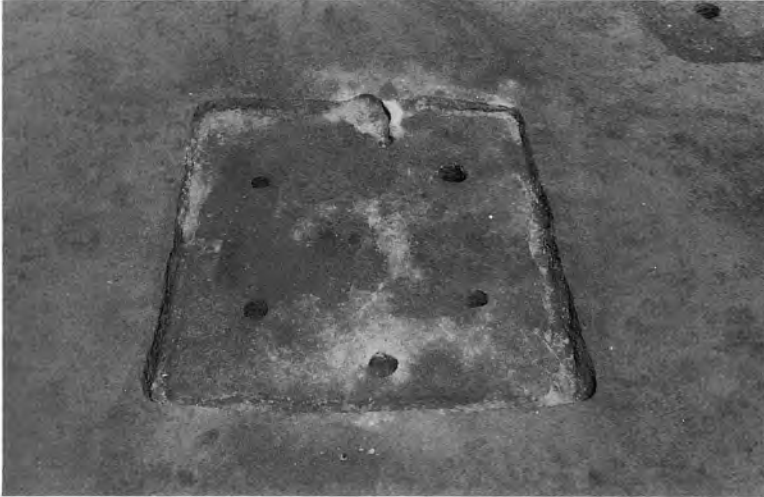
第10号住居跡



第11号住居跡

PL26

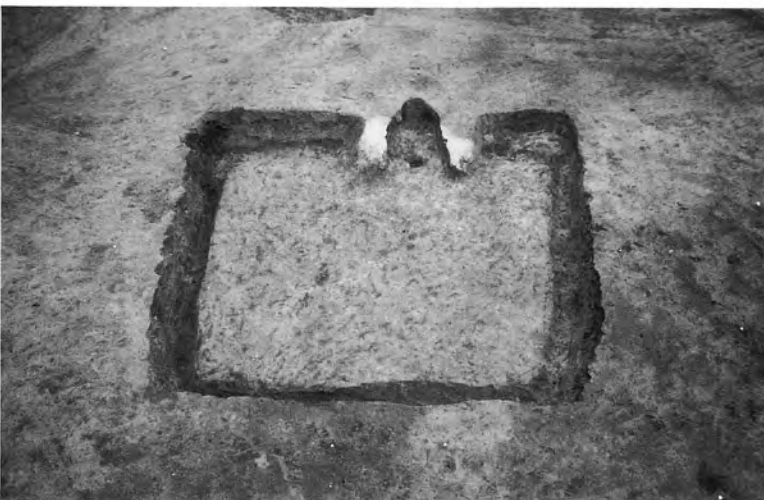
4区



第12号住居跡



第13号住居跡



第14号住居跡



第15号住居跡



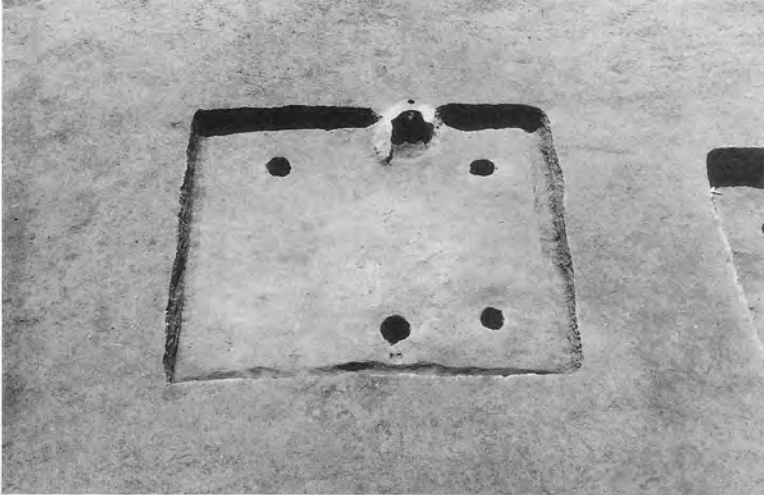
第16号住居跡



第17号住居跡

PL28

4区



第18号住居跡



第20号住居跡



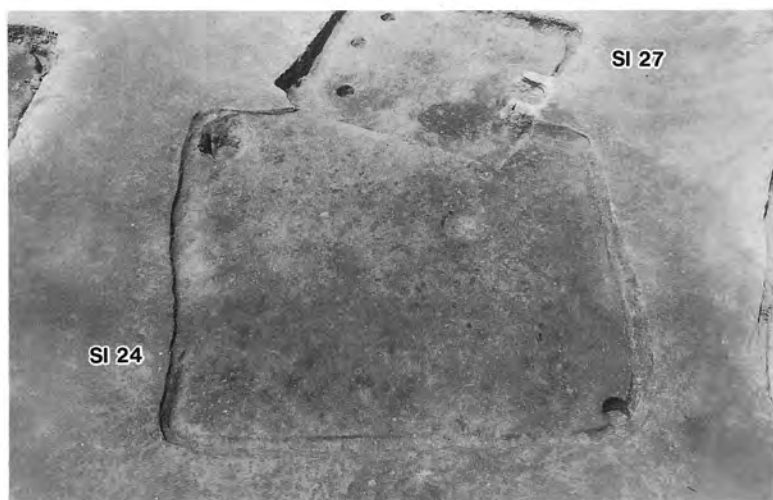
第21号住居跡



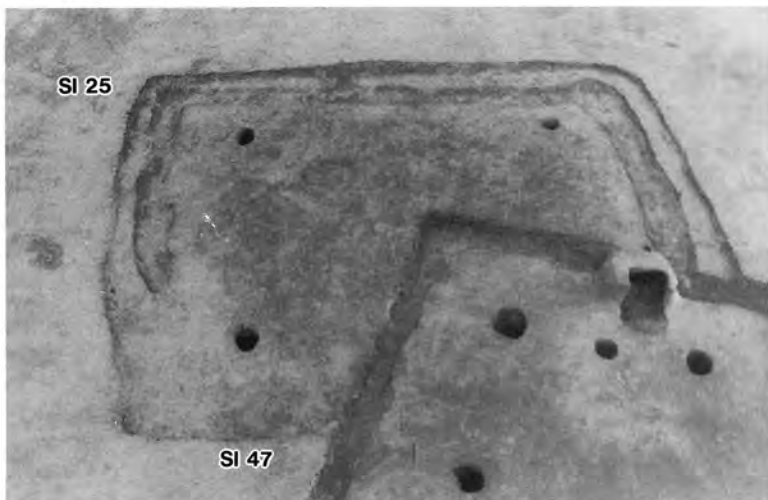
第22号住居跡



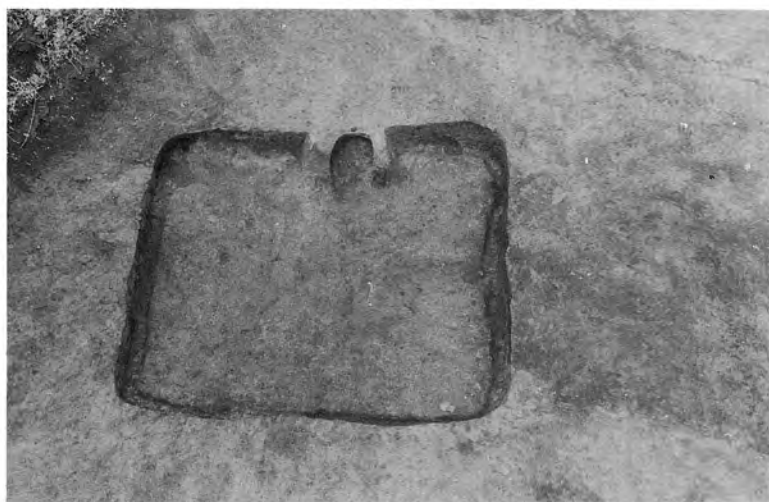
第23号住居跡



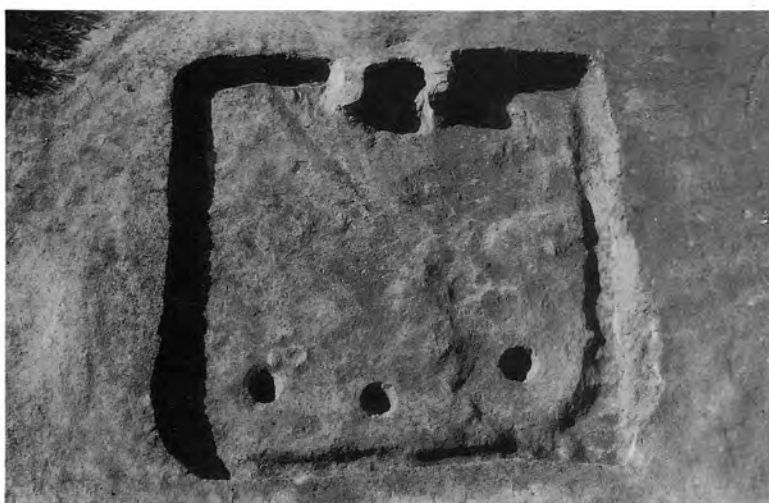
第24号住居跡



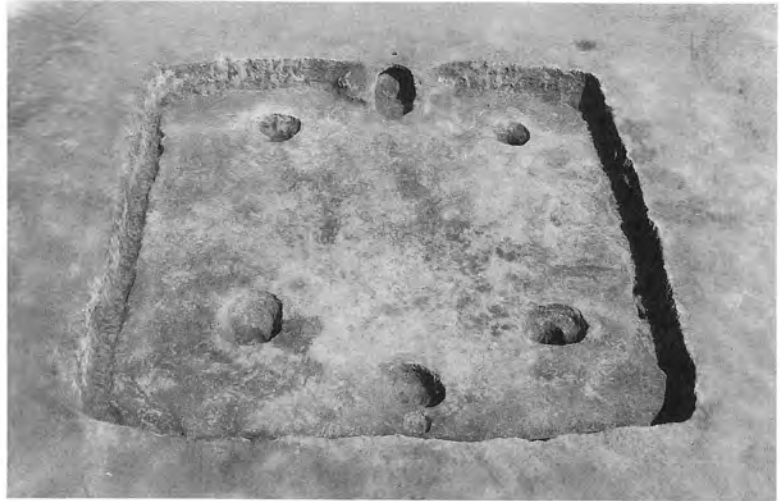
第25号住居跡



第26号住居跡



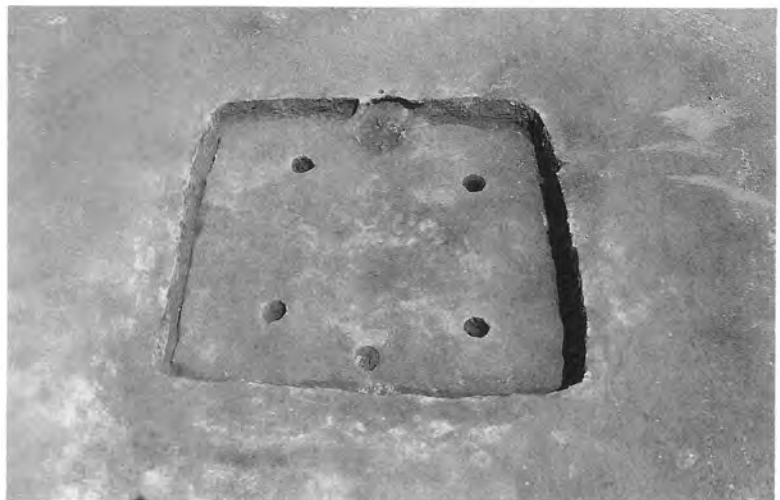
第27号住居跡



第28号住居跡



第29号住居跡



第30号住居跡

PL32

4区



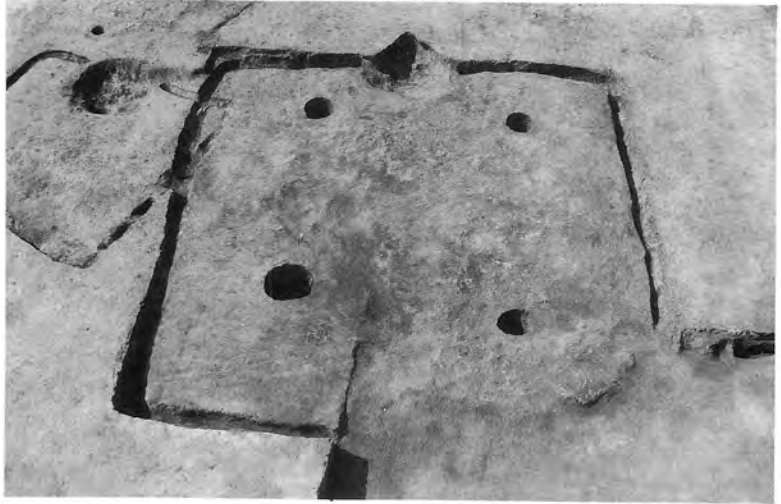
第31号住居跡



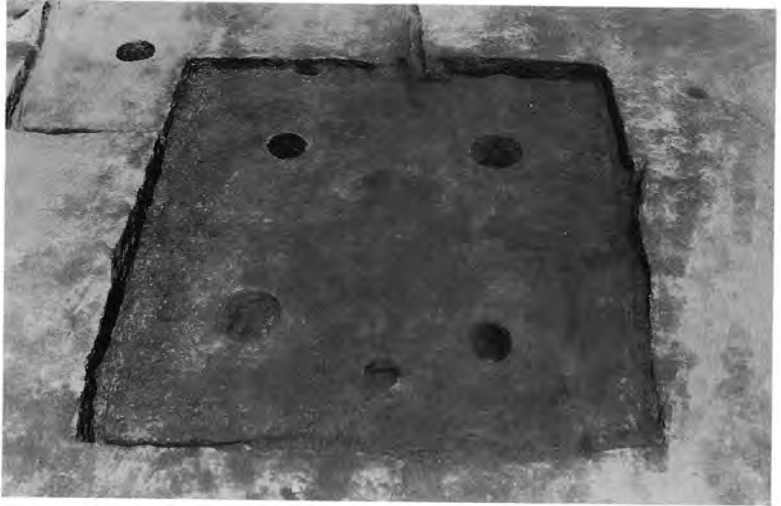
第32号住居跡



第33号住居跡



第34号住居跡



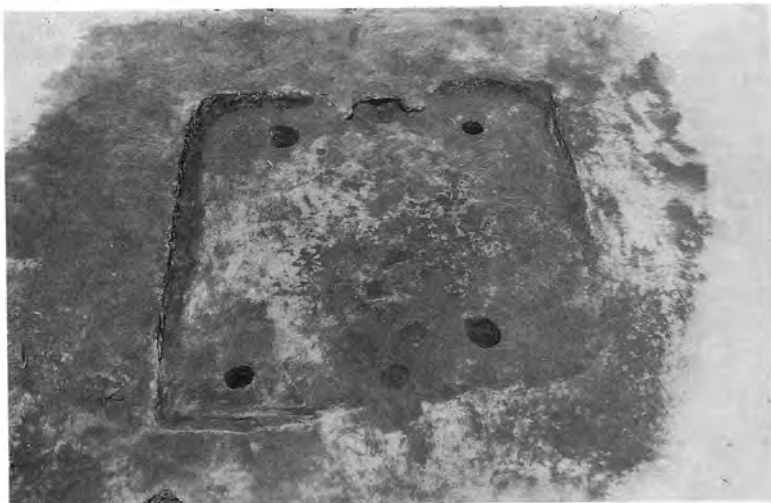
第35号住居跡



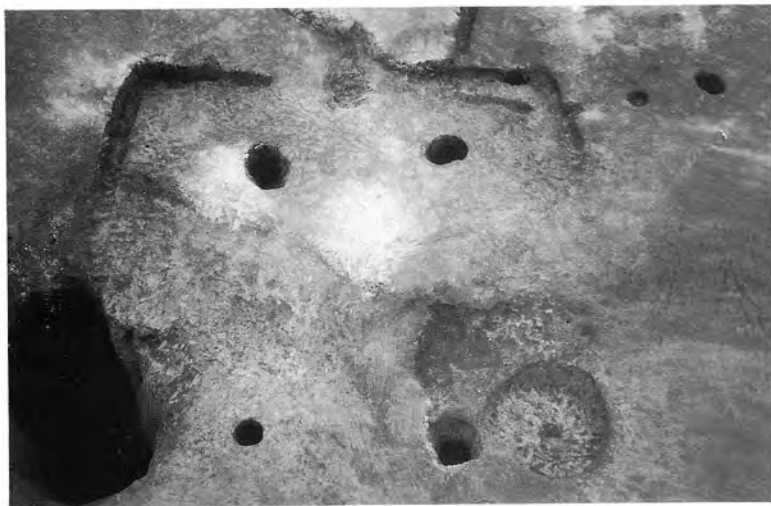
第36号住居跡

PL34

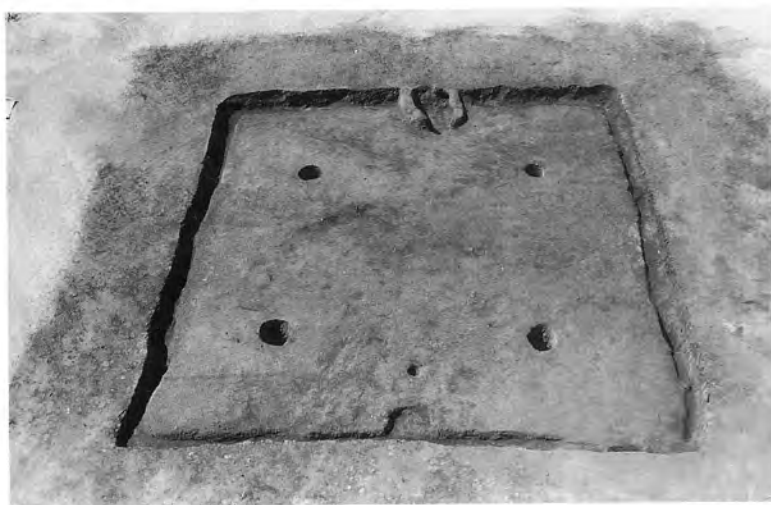
4区



第37号住居跡



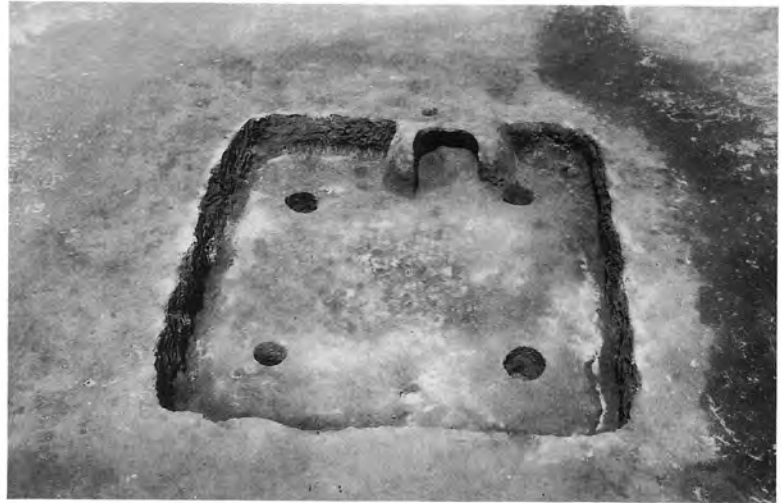
第38号住居跡



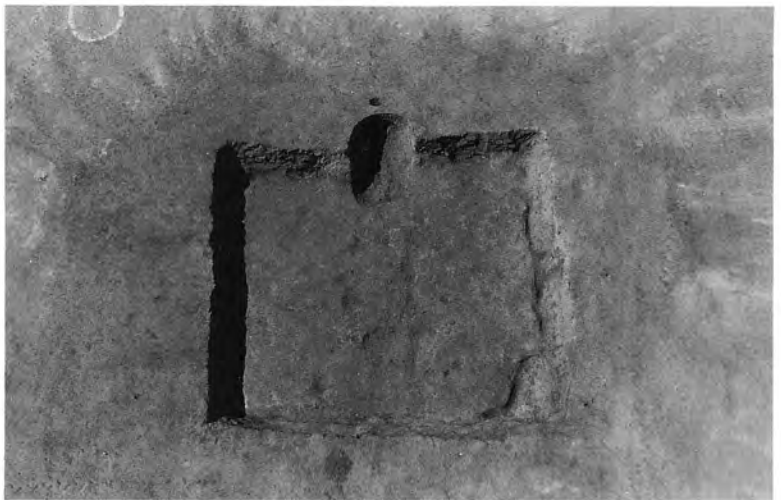
第39号住居跡



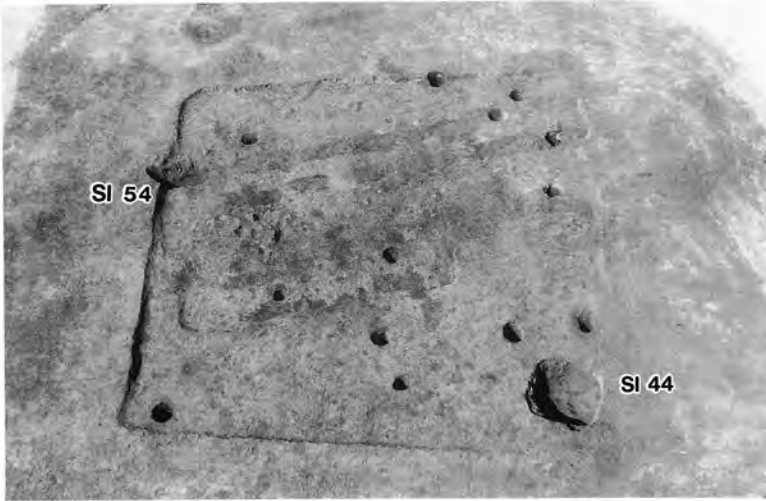
第40号住居跡



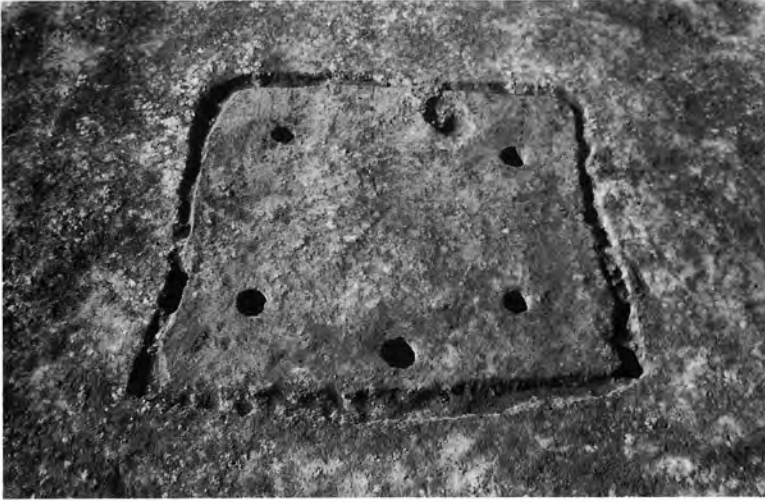
第41号住居跡



第42号住居跡



第54・44号住居跡



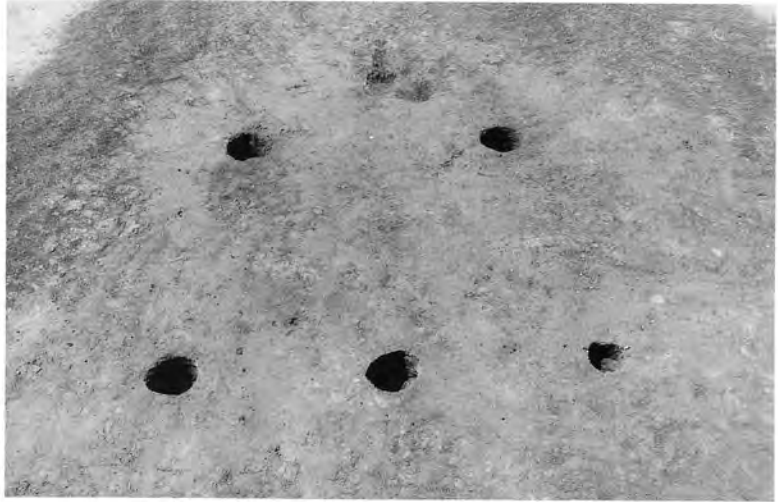
第45号住居跡



第46号住居跡



第47号住居跡



第52号住居跡



第53号住居跡



第6号住居跡
カマド



第23号住居跡
カマド



第64号住居跡
カマド

第66号住居跡
カマド



第70号住居跡
カマド



第91号住居跡
カマド





第101号住居跡
カマド



第104号住居跡
カマド



第112号住居跡
カマド



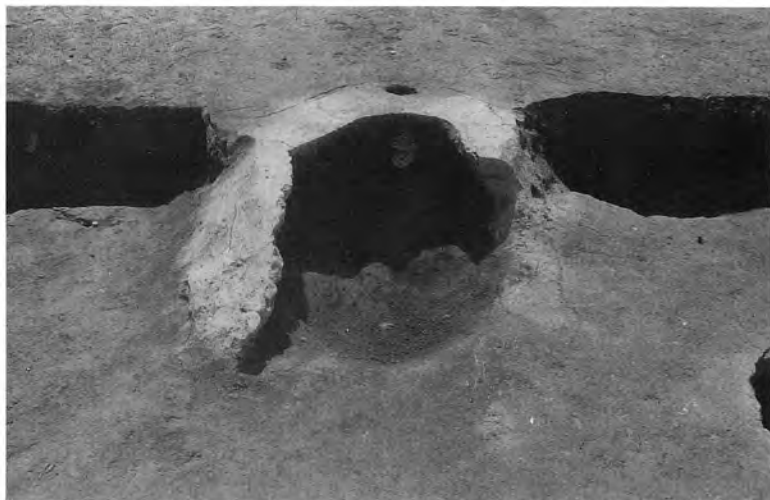
第10号住居跡
カマド



第16号住居跡
カマド



第17号住居跡
カマド



第18号住居跡
カマド



第22号住居跡
カマド



第23号住居跡
カマド



第26号住居跡
カマド



第27号住居跡
カマド



第28号住居跡
カマド

PL44

4区



第40号住居跡
カマド



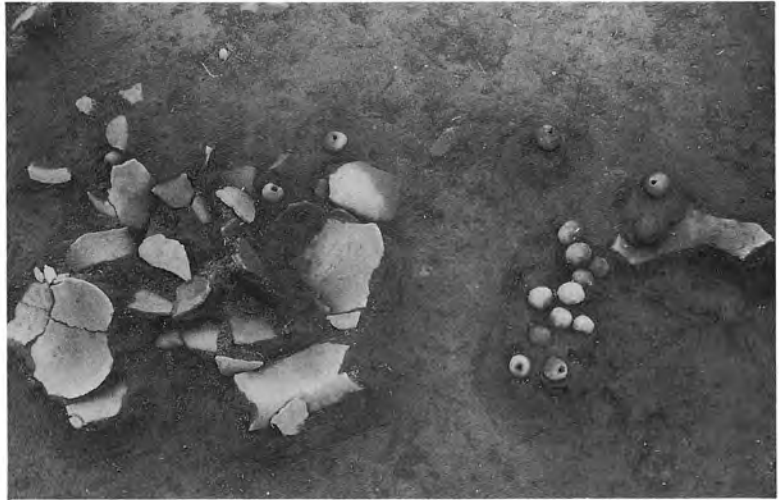
第42号住居跡
カマド



第47号住居跡
カマド



第 1 号住居跡
遺物出土狀況



第 1 号住居跡
遺物出土狀況



第 2 号住居跡
遺物出土狀況



第7号住居跡
遺物出土状況



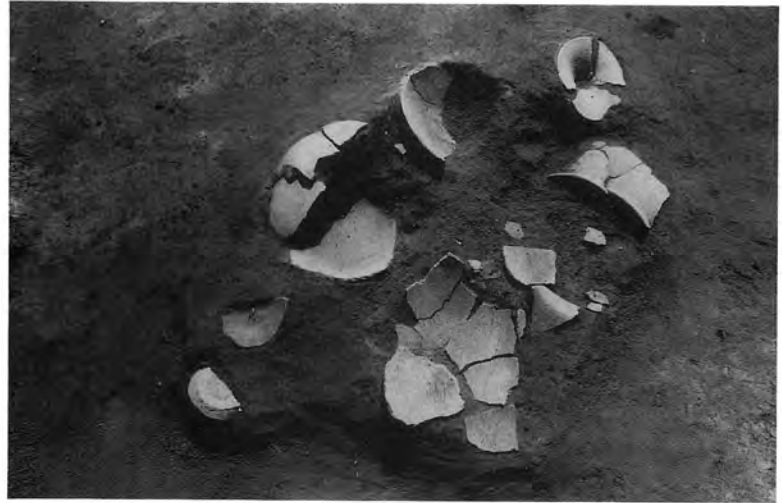
第11号住居跡
遺物出土状況



第11号住居跡
遺物出土状況



第15号住居跡
遺物出土状況



第19号住居跡
遺物出土状況



第30号住居跡
遺物出土状況



第31号住居跡
遺物出土状況



第31号住居跡
遺物出土状況

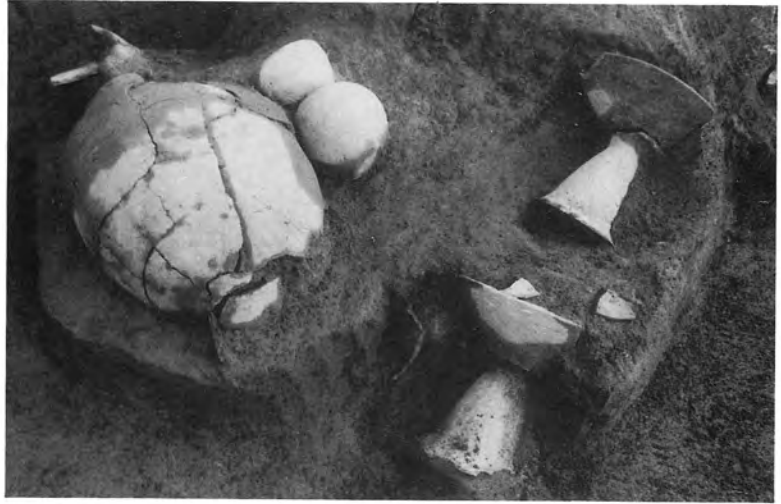


第32号住居跡
遺物出土状況

第38号住居跡
遺物出土状況



第38号住居跡
遺物出土状況



第39号住居跡
遺物出土状況



PL50

3区



第60号住居跡
遺物出土状況



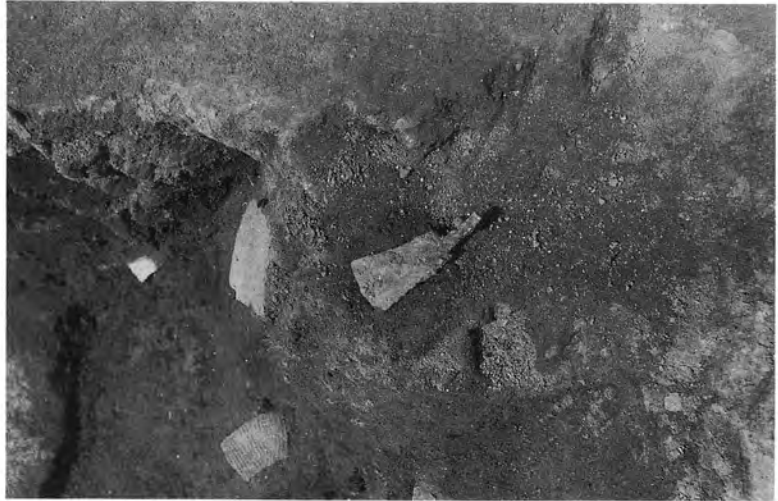
第68号住居跡
遺物出土状況



第68号住居跡
遺物出土状況



第101号住居跡
遺物出土状況



第101号住居跡
遺物出土状況



第107号住居跡
遺物出土状況



第1号住居跡
遺物出土状況



第9号住居跡
遺物出土状況



第9号住居跡
遺物出土状況



第9号住居跡
遺物出土状況



第16号住居跡
遺物出土状況



第16号住居跡
遺物出土状況



第23号住居跡
遺物出土状況



第24号住居跡
遺物出土状況



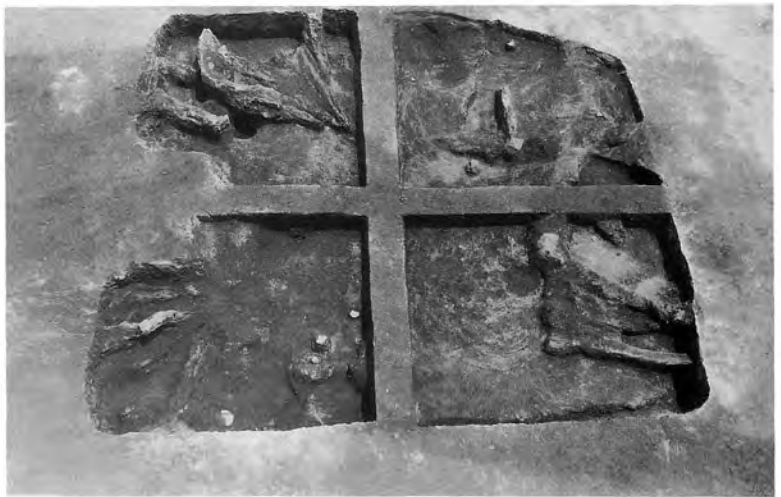
第25号住居跡
遺物出土状況



第38号住居跡
遺物出土状況



第44号住居跡
遺物出土状況



第46号住居跡
炭化材出土状況

PL56

3区



第9号土坑
(墓坑)



第43号土坑
(墓坑)



第122号土坑
(墓坑)



第87号土坑
(墓坑)



第98号土坑
(墓坑)



第111号土坑
(墓坑)

PL58

4区



第117号土坑
(墓塚)



第117号土坑
コーナー部の窪みとピット



第124号土坑
(墓塚)



第97号土坑
確認状況



第97号土坑
完掘状況



第98号土坑
粘土貼り切断状況

PL60

4区



第90号土坑
(粘土貼り)



第95号土坑
(粘土貼り)

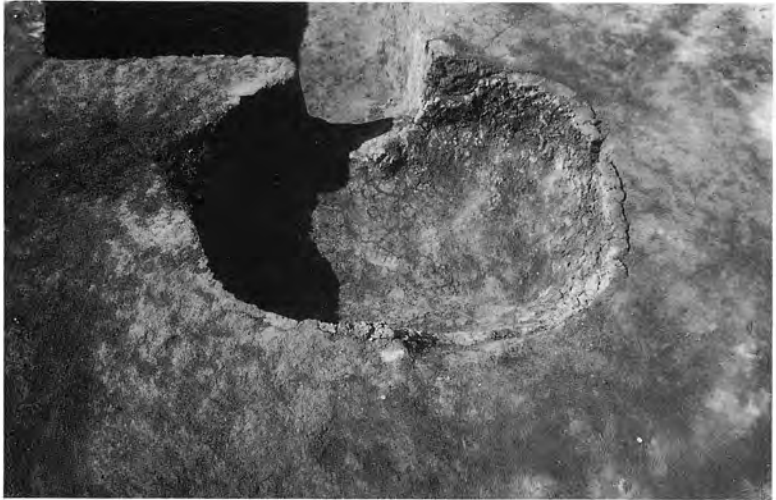


第96号土坑
(粘土貼り)

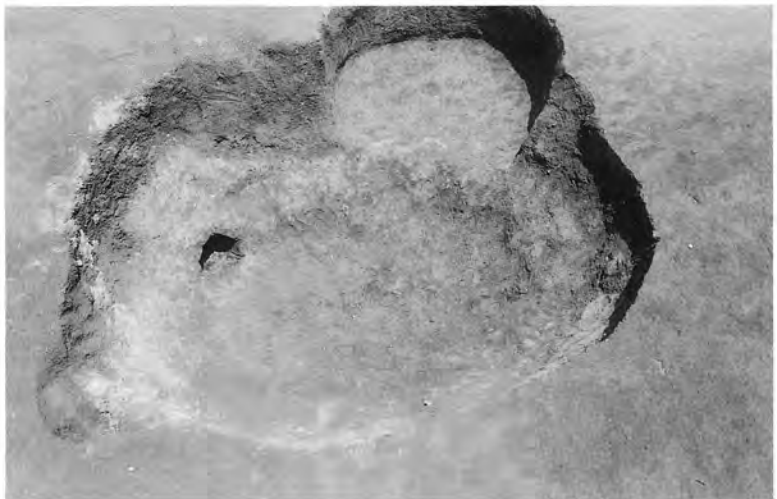
第99号土坑
(粘土貼り)



第112号土坑
(粘土貼り)

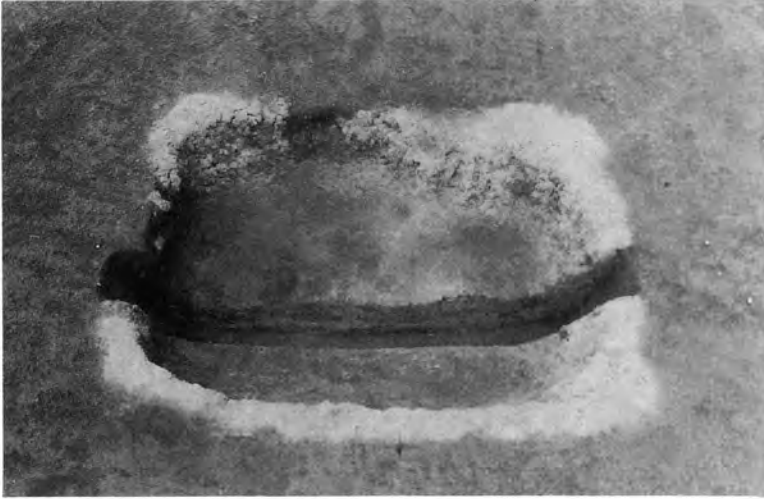


第114号土坑
(粘土貼り)



PL62

4区



第121号土坑
(粘土貼り)



第123号土坑
(粘土貼り)



第154号土坑
(粘土貼り)

3区
第1号地下式坑



4区
第1号地下式坑



4区
第1号地下式坑
遺物出土状況





第1号地下式坑
馬骨出土状況



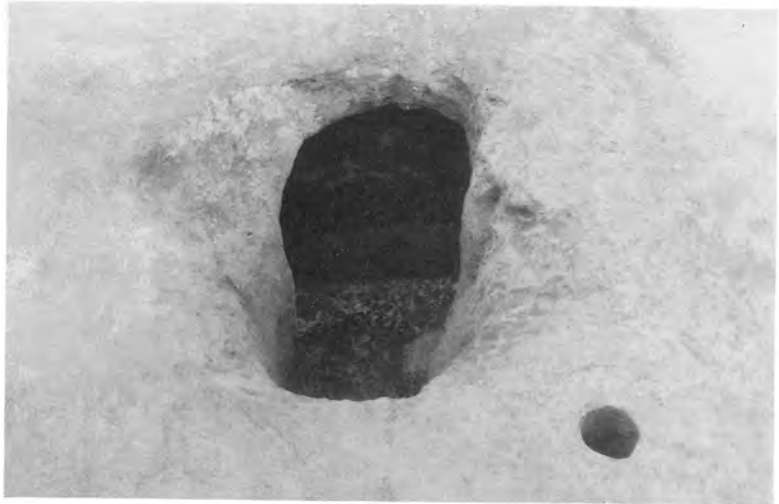
第2号地下式坑



第2号地下式坑
遺物出土状況



第 3 号地下式坑



第 4 号地下式坑
開口部



第 4 号地下式坑
完掘状況

PL66

3・4区



3区
第1号井戸状遺構



3区
第2号井戸状遺構



4区
第1号井戸状遺構



第2号溝 (北方向から撮影)



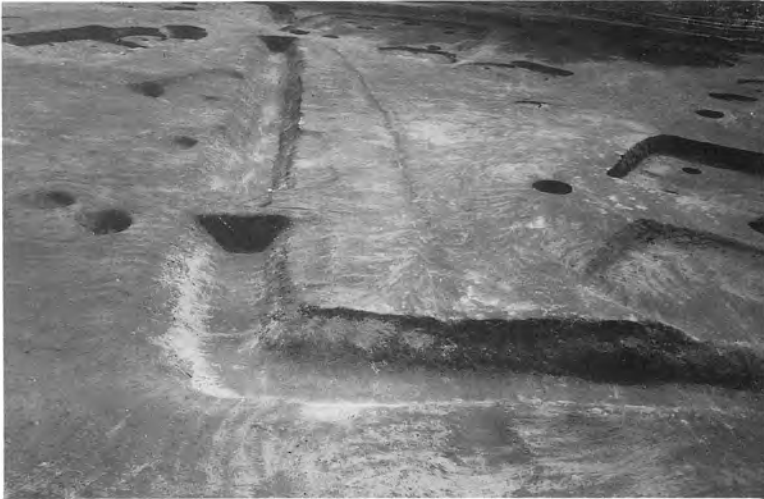
第3号溝 (北方向から撮影)



第6号溝 (北方向から撮影)



第14号溝 (北方向から撮影)



3区
第5号溝
(北方向から撮影)



3区
第5号溝
(東方向から撮影)



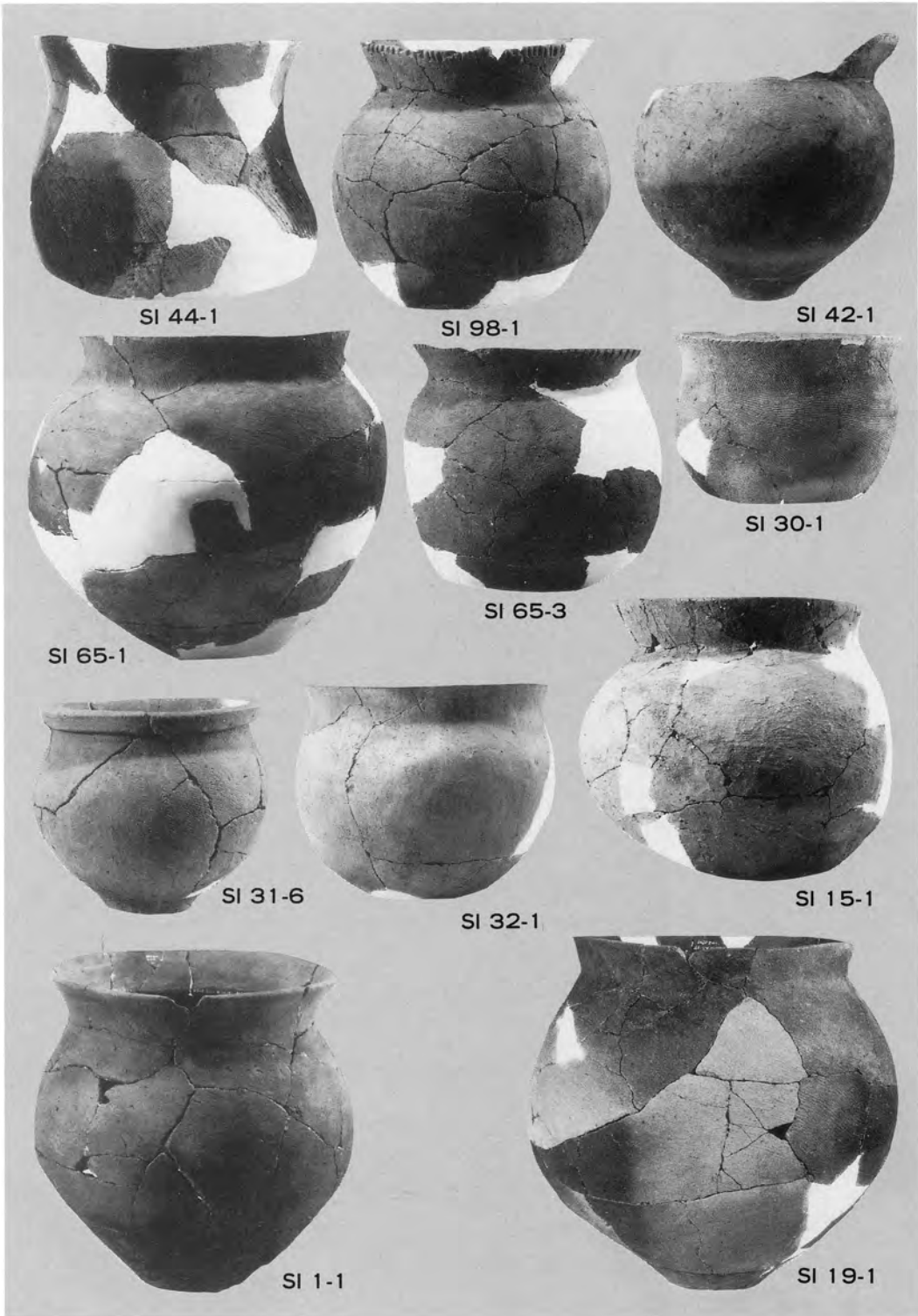
4区
第1号溝
(北方向から撮影)



第1号溝
(南方向から撮影)

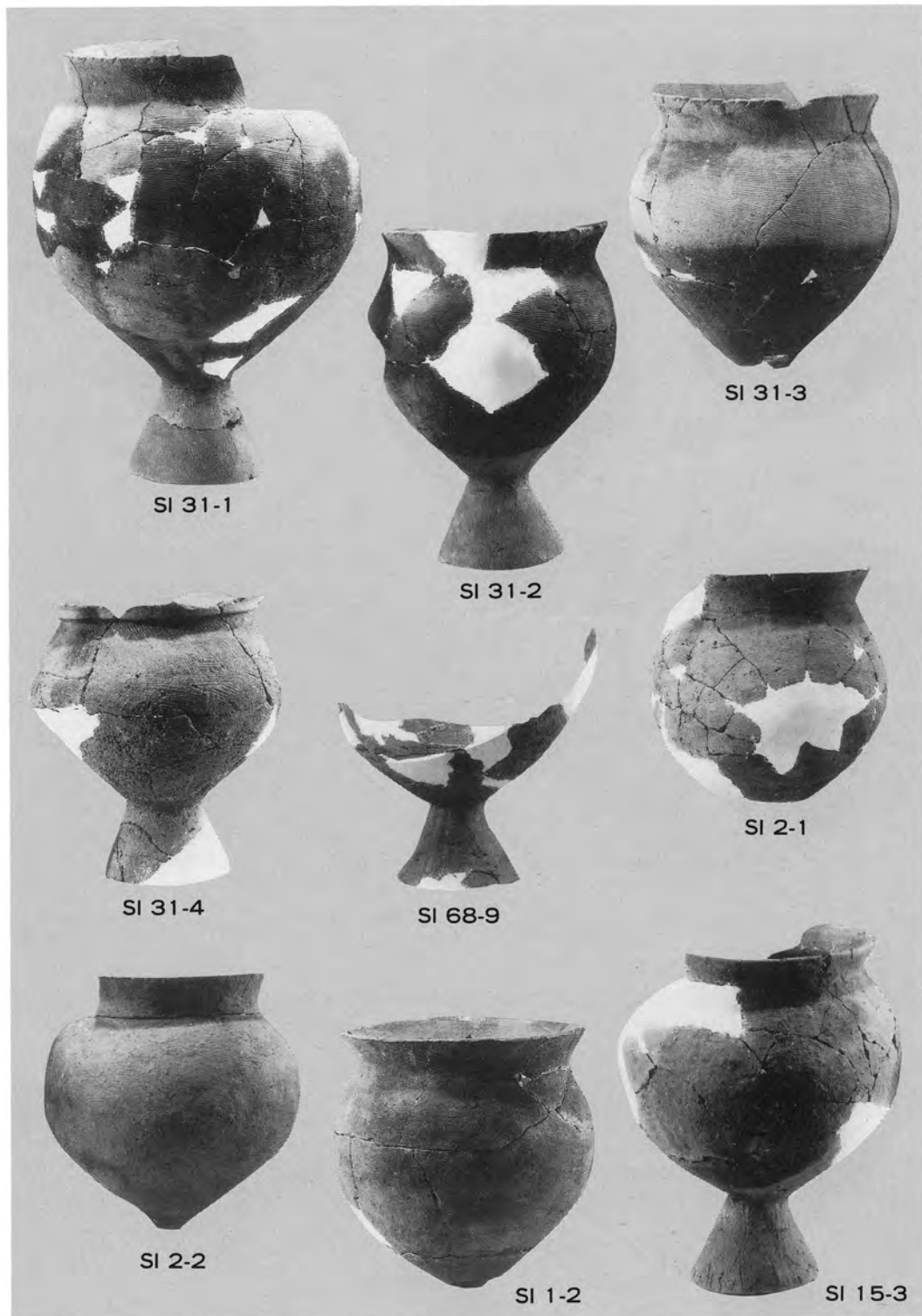


第1号溝
遺物出土状況
(南方向から撮影)



出土土器(1)

S = 1/4.5



出土土器(2)

S = 1/4.5



SI 107-1



SI 107-2 S = $\frac{1}{3}$



SI 107-3



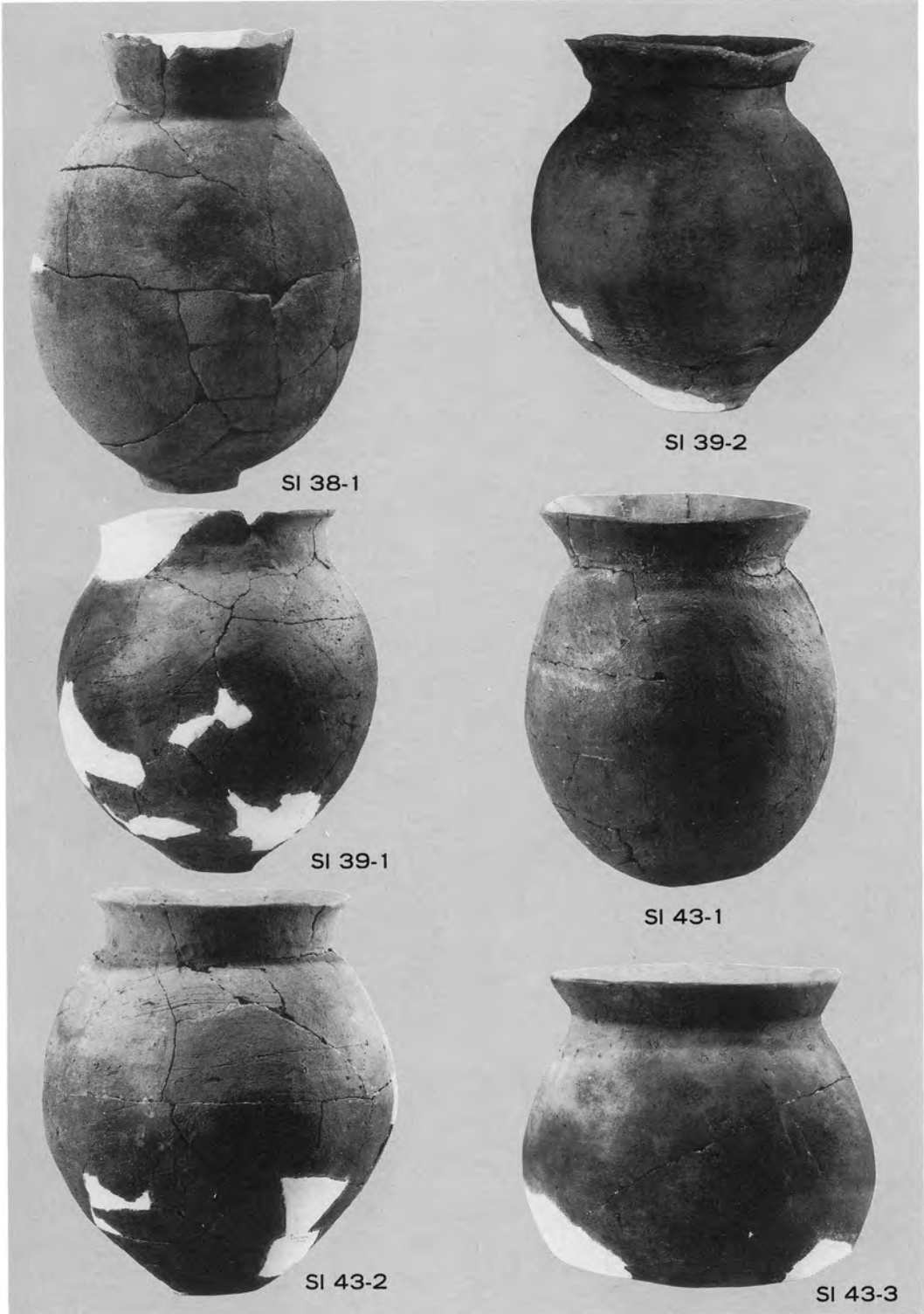
SI 107-4



SI 107-7

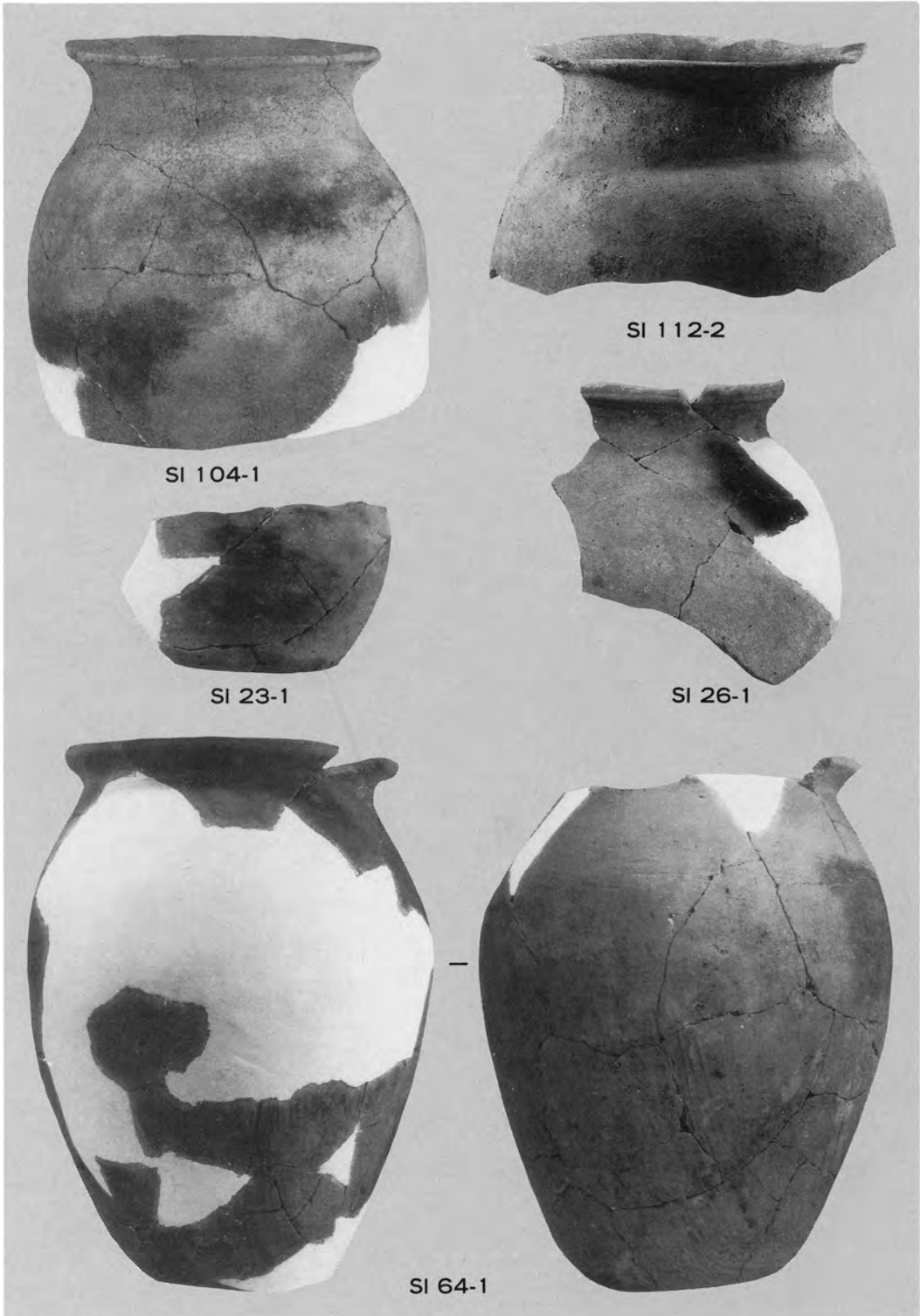


SI 107-12 S = $\frac{1}{3}$



出土土器(4)

S = 1/4.5





SI 64-4



SI 66-1



SI 70-4



SI 70-1



SI 70-3



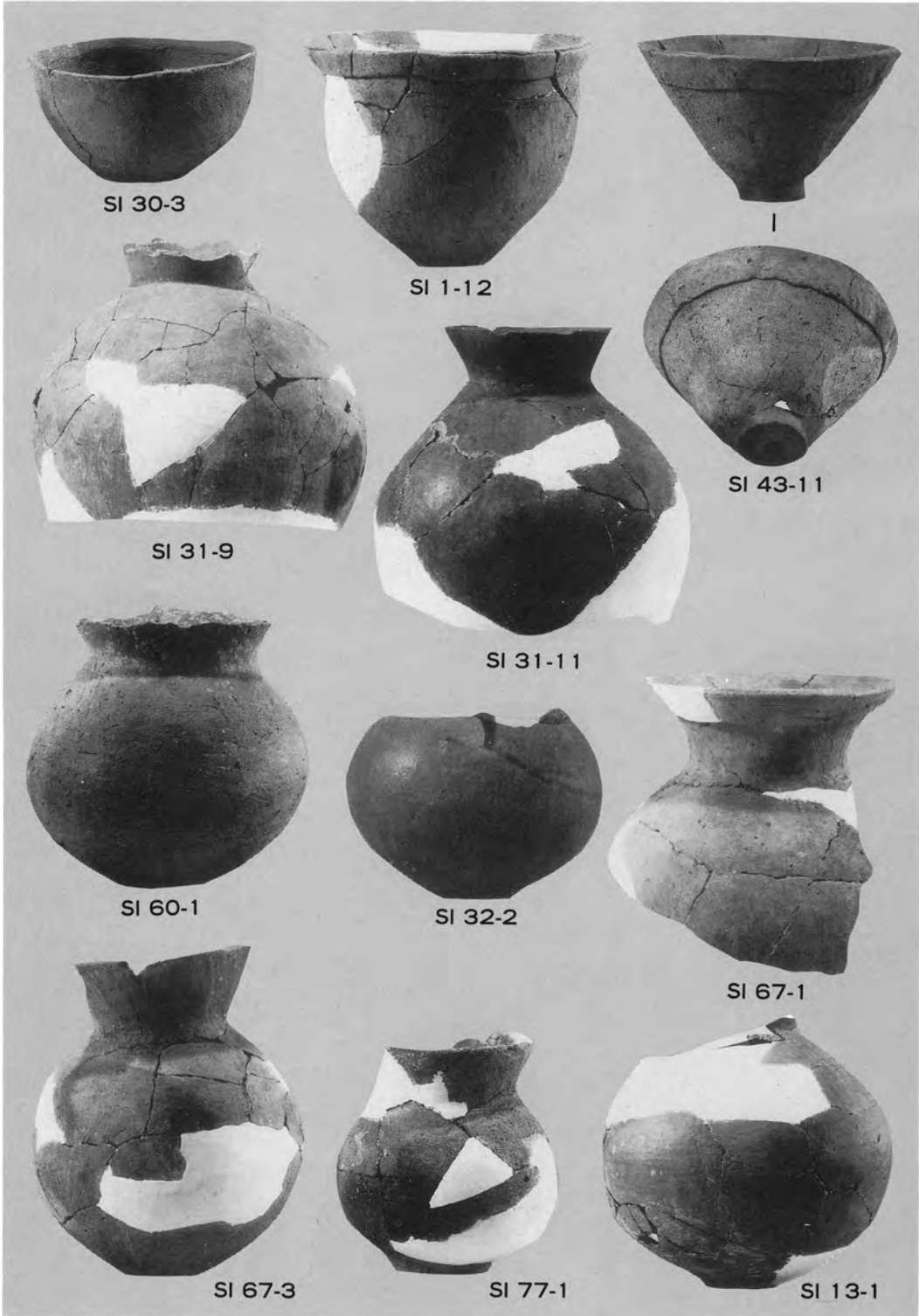
SI 92-1



SI 70-2

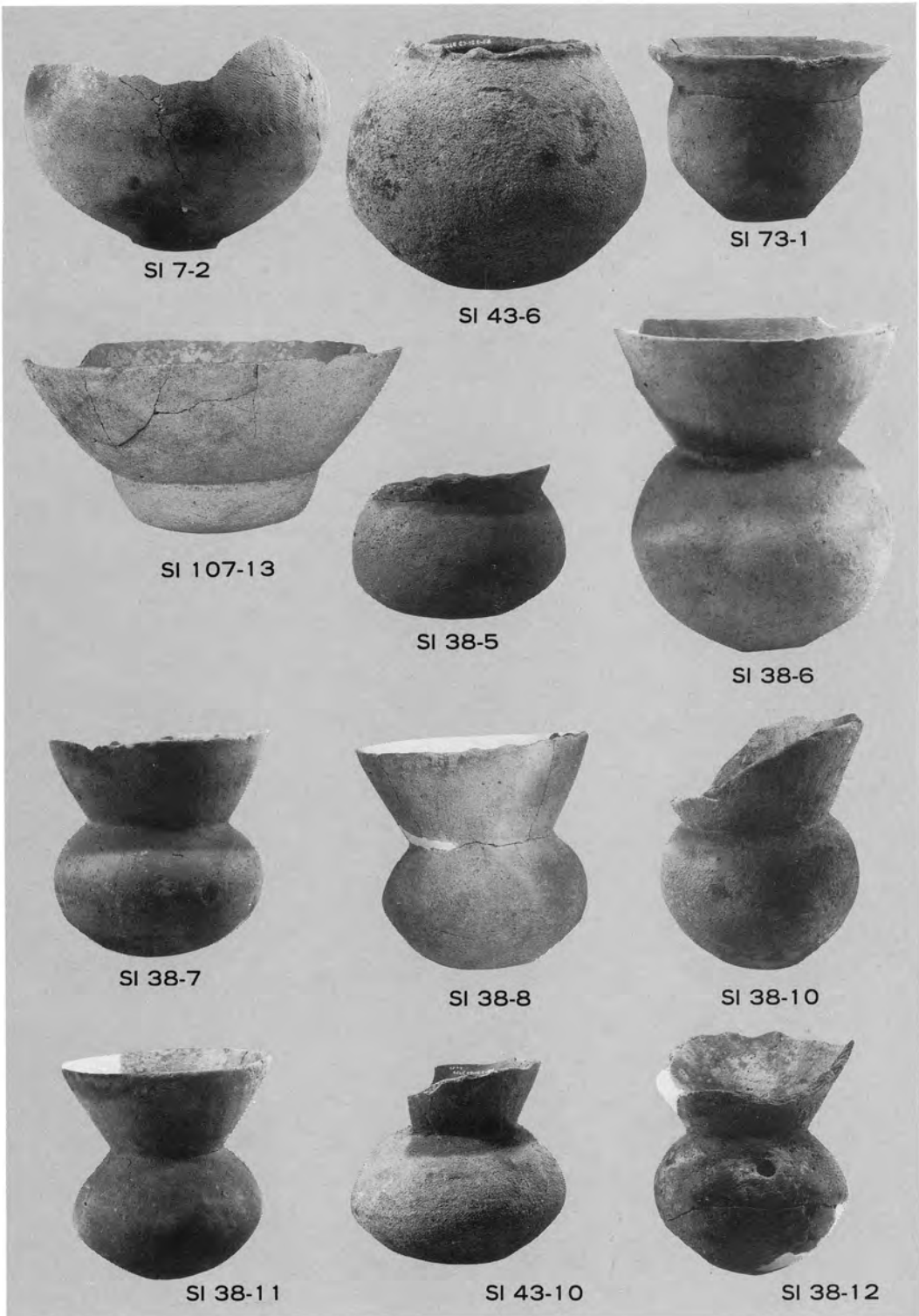


SI 101-1



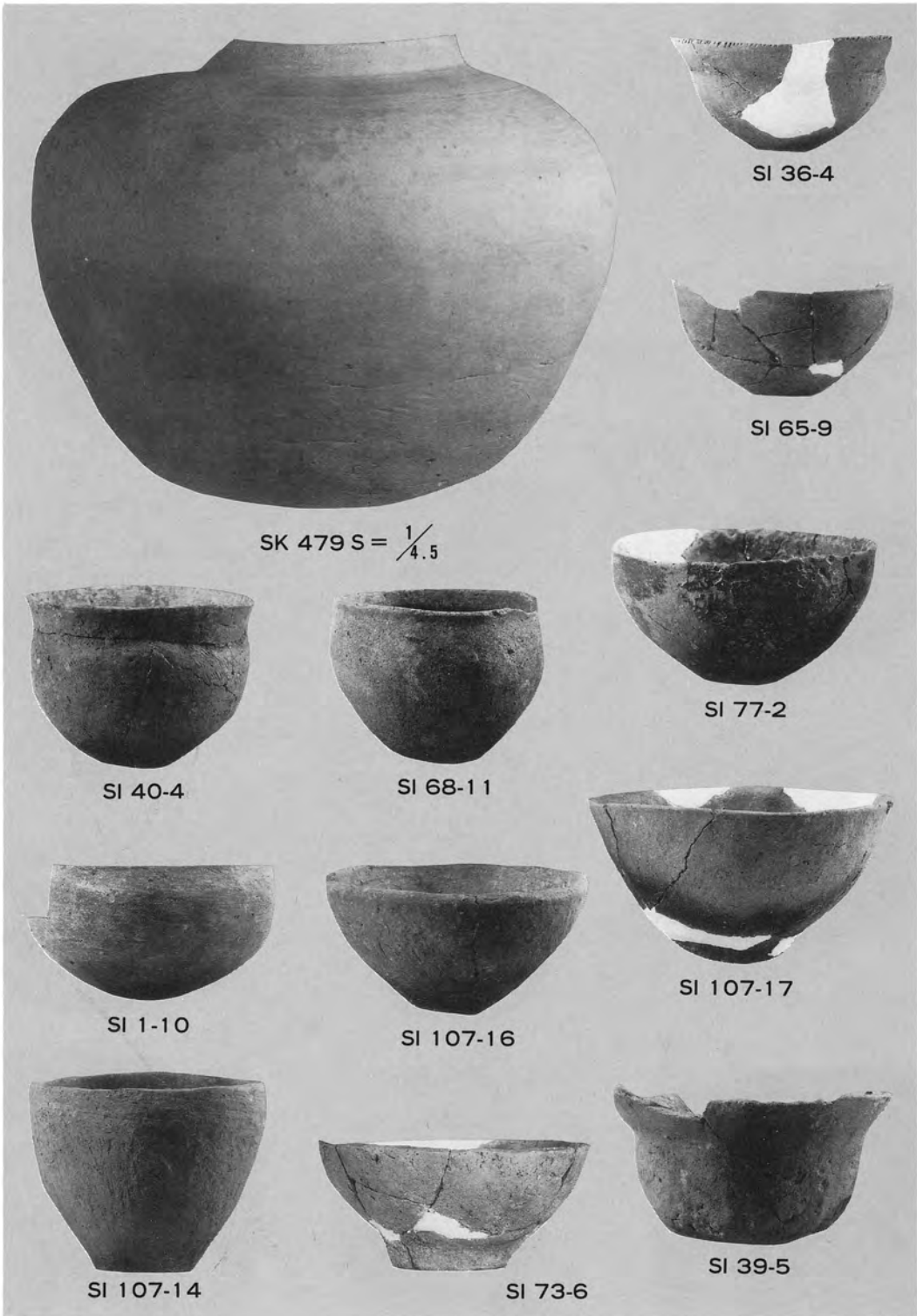
出土土器(7)

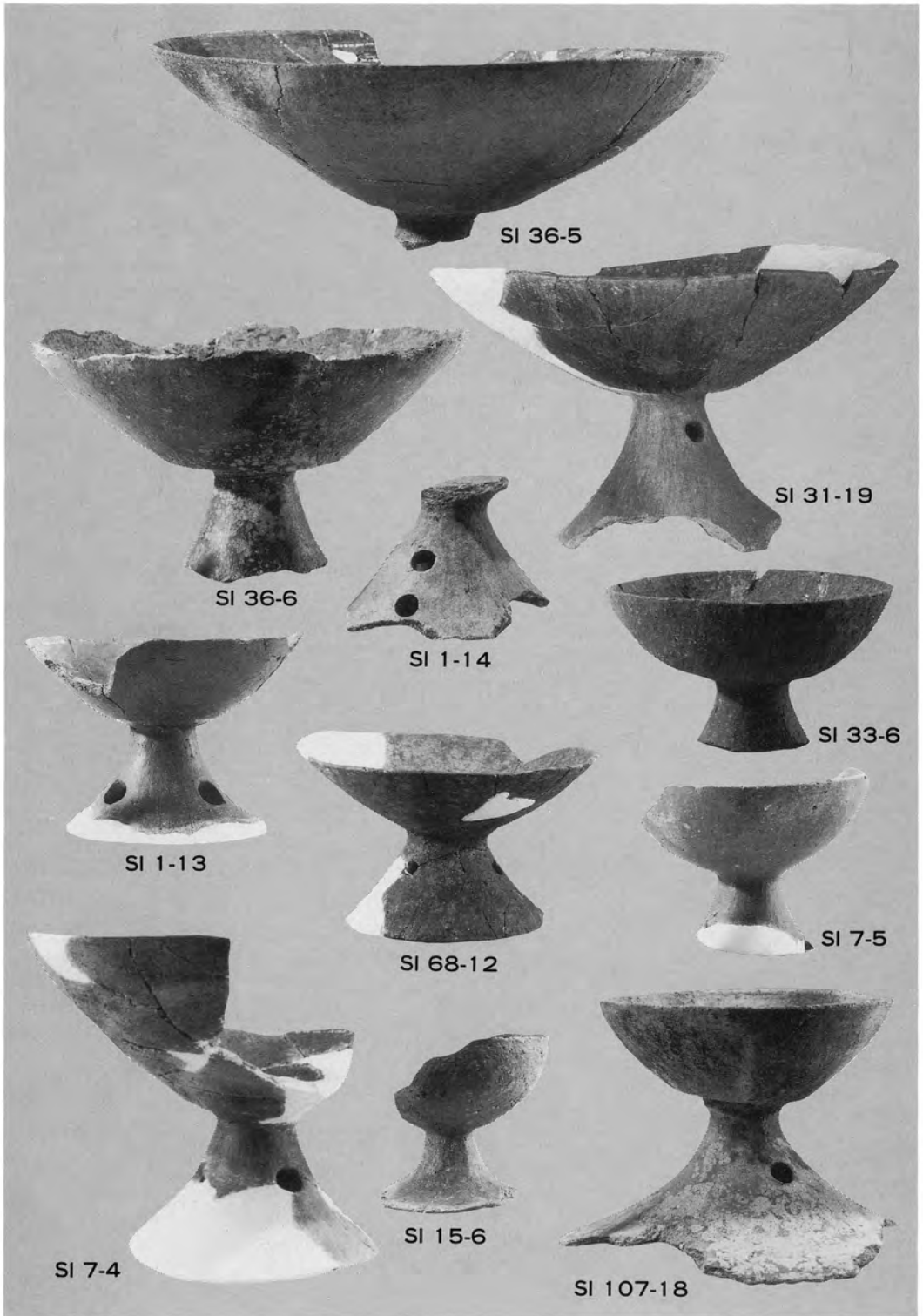
S = 1/4.5



出土土器(8)

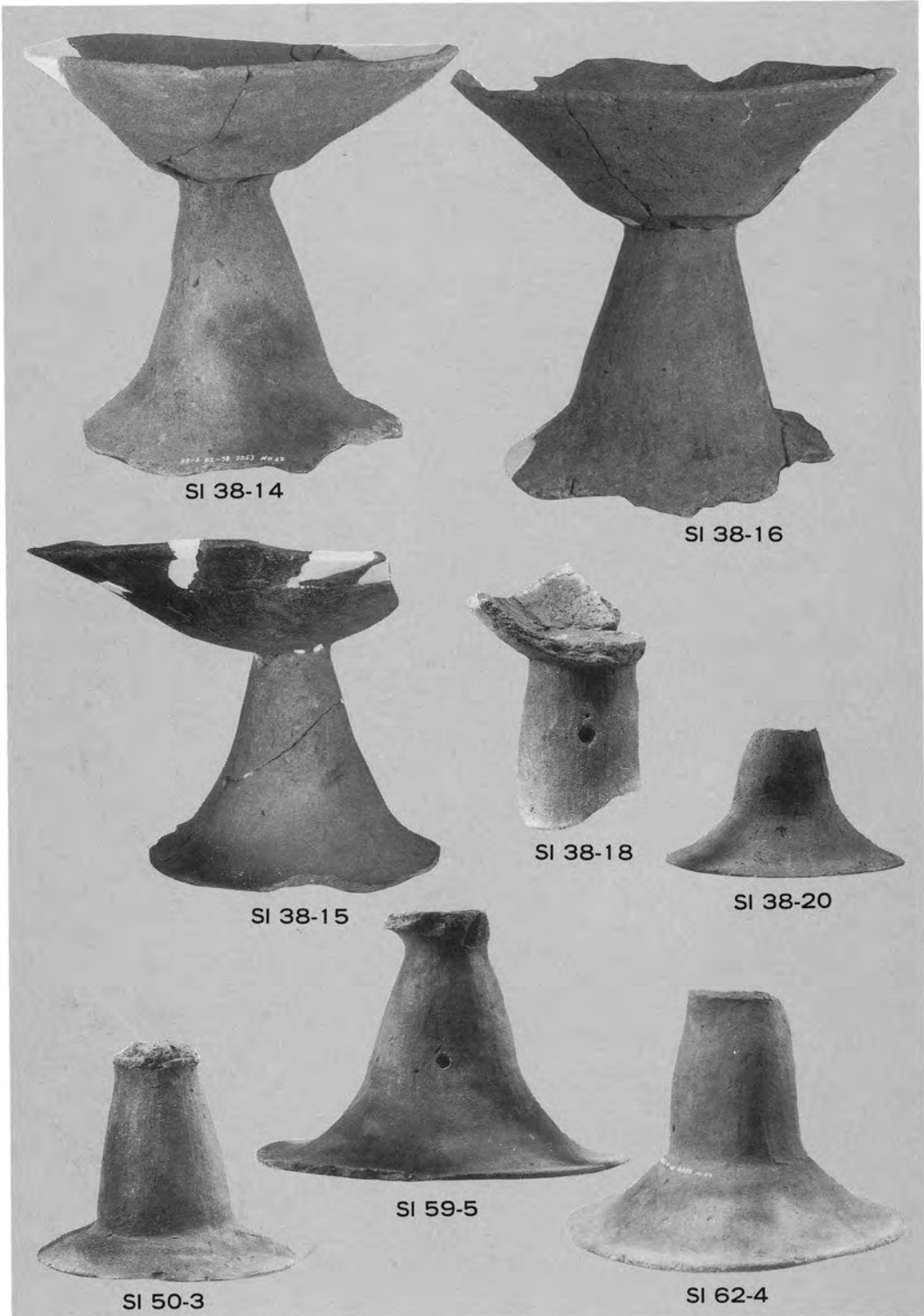
S = 1/3





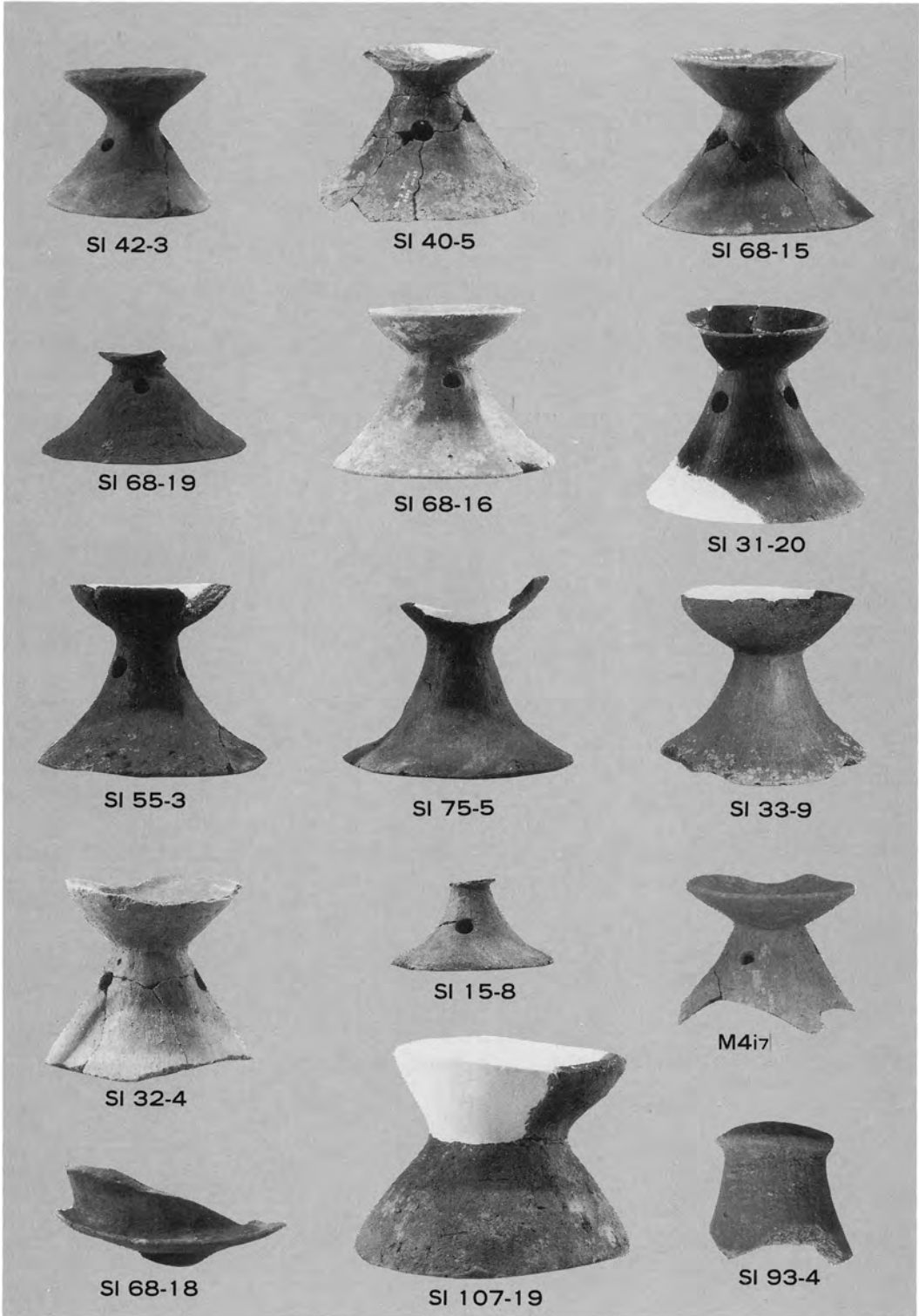
出土土器(10)

S = 1/3

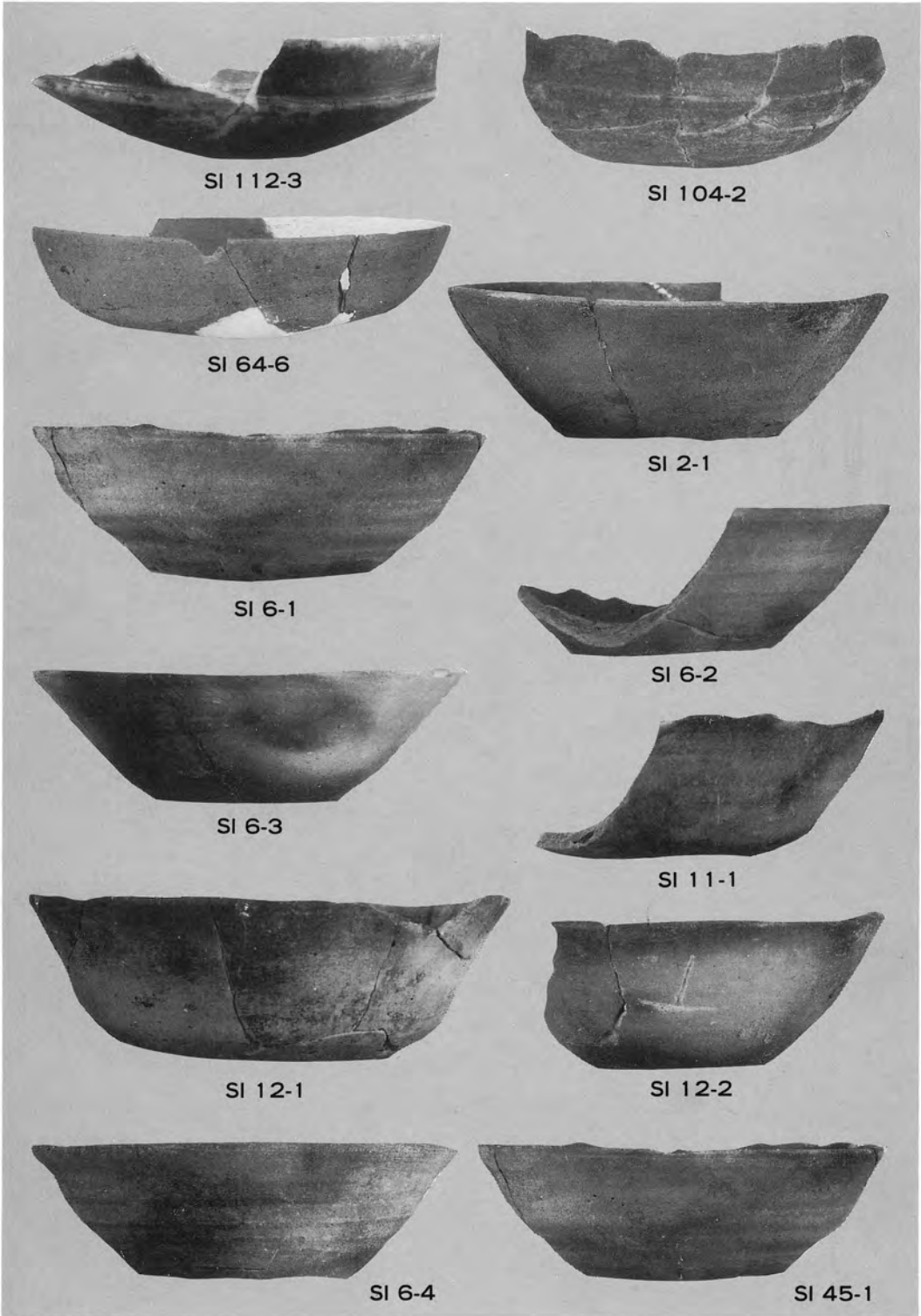


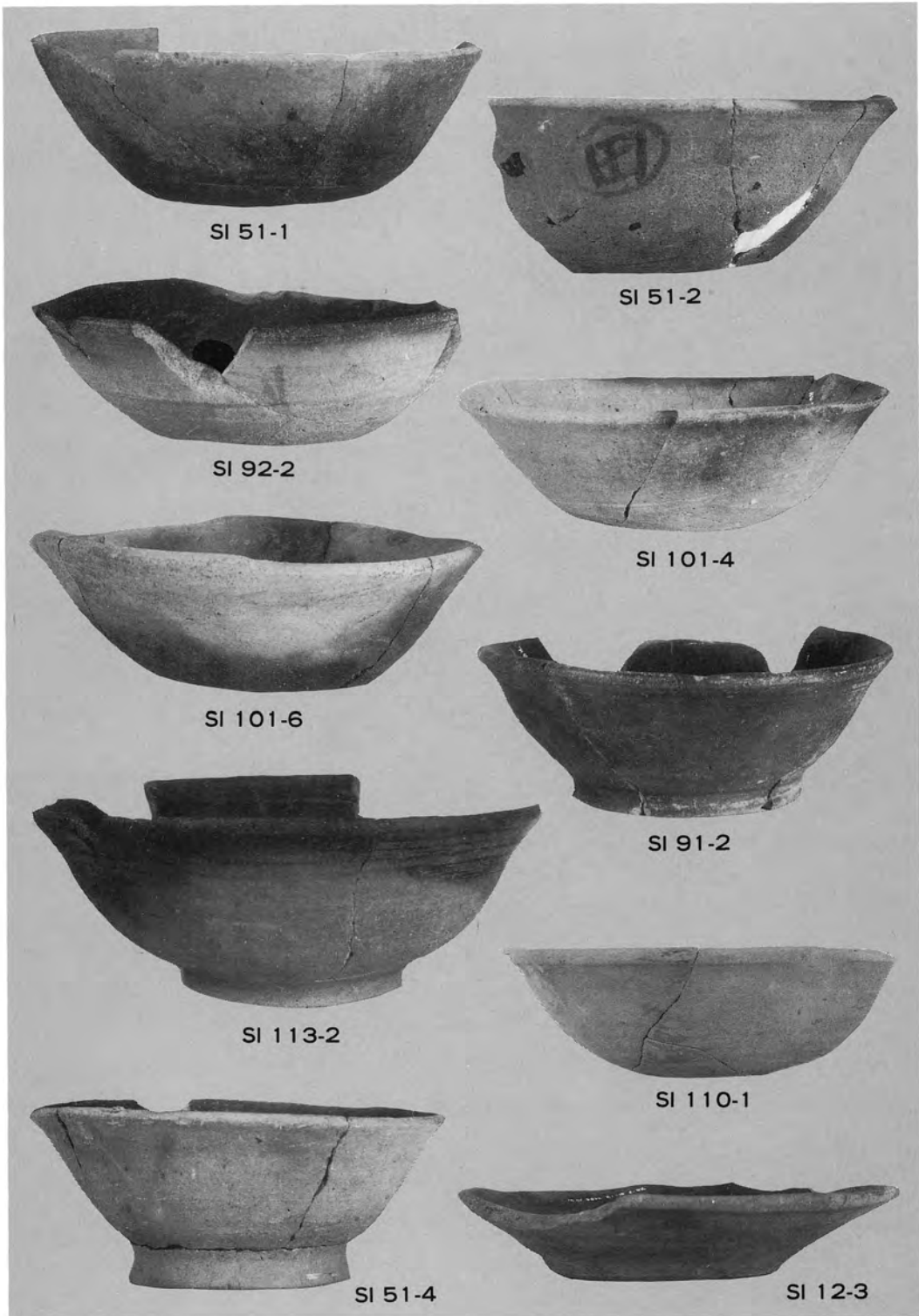
出土土器(11)

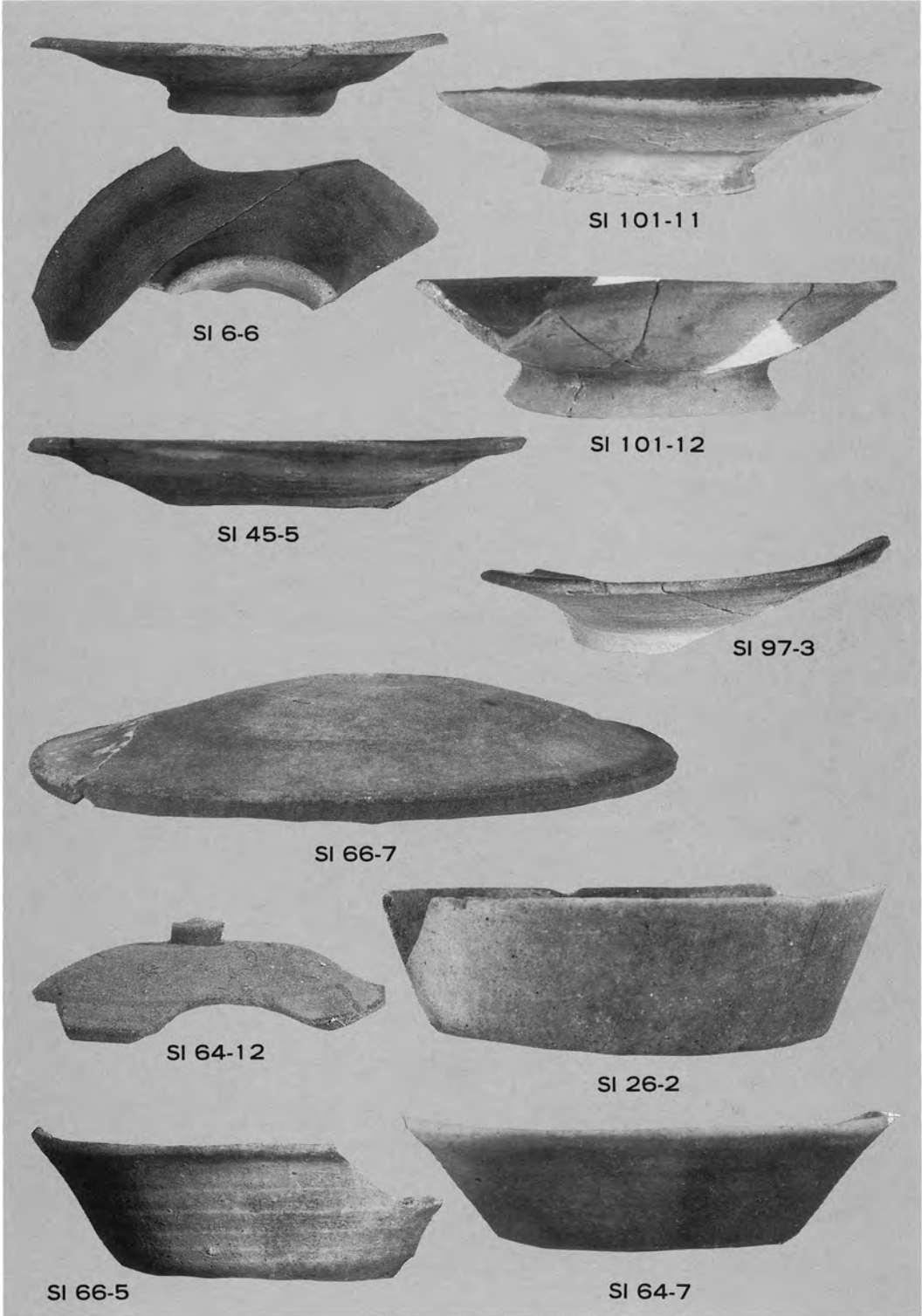
S = 1/3

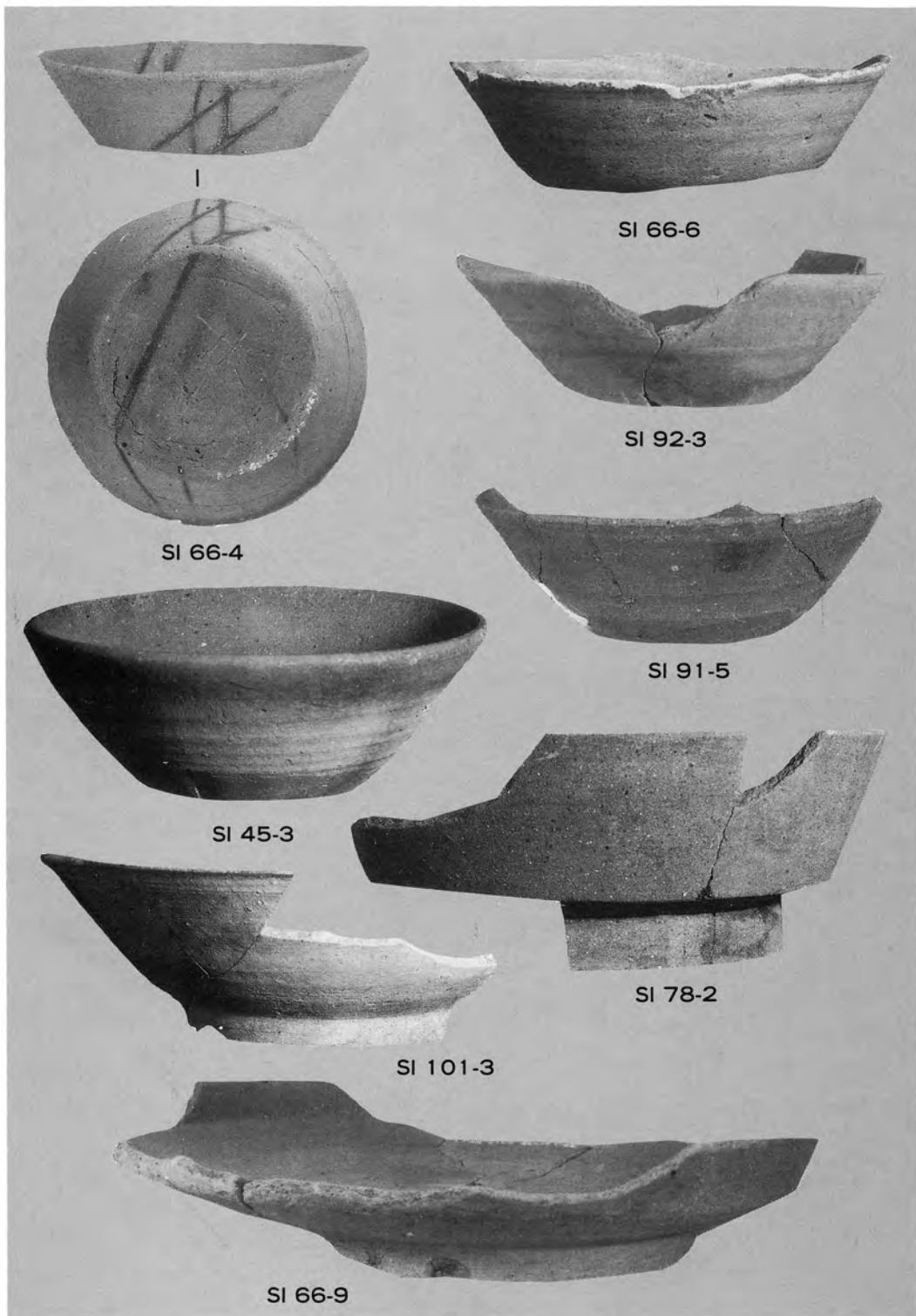


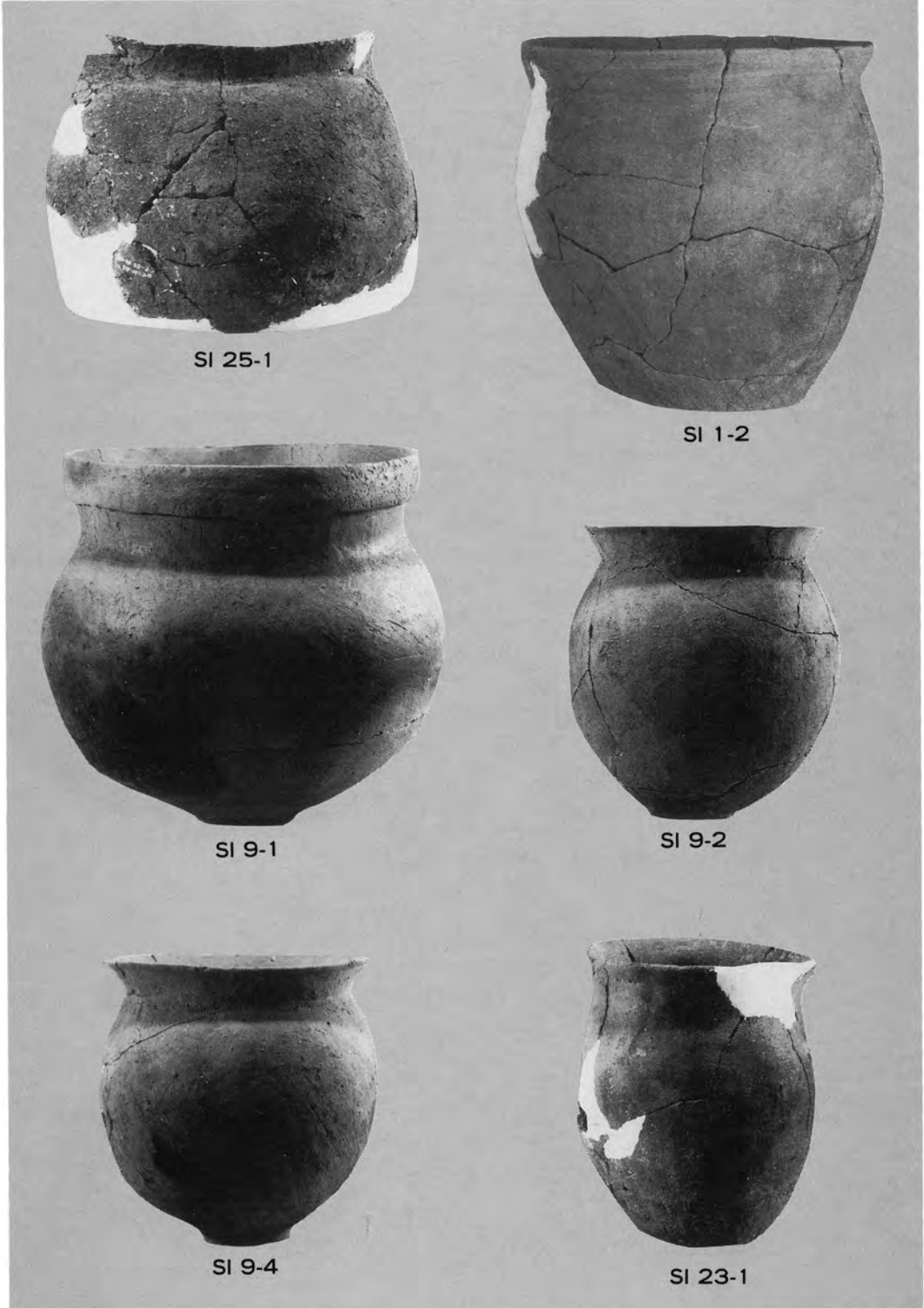






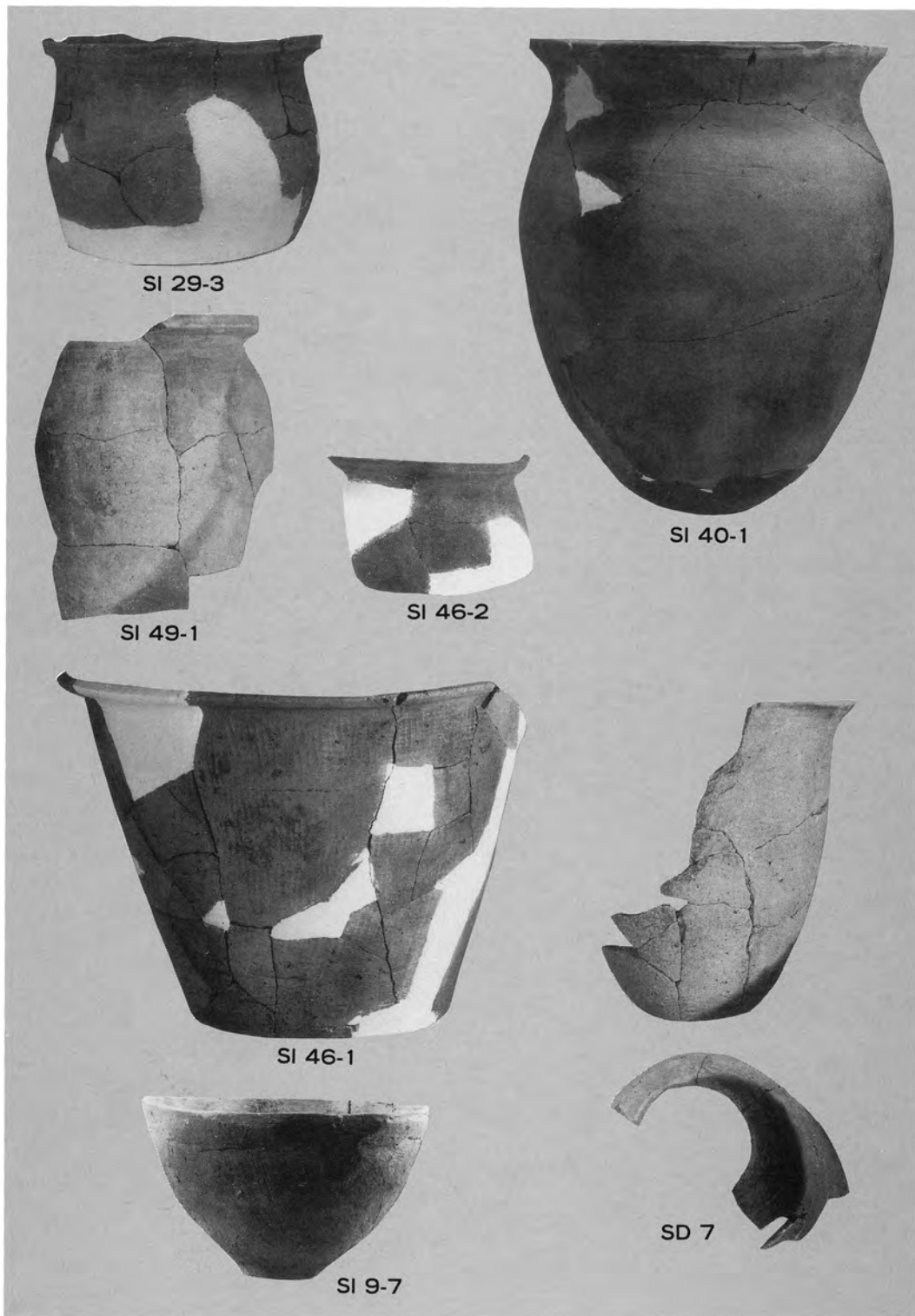






出土土器(1)

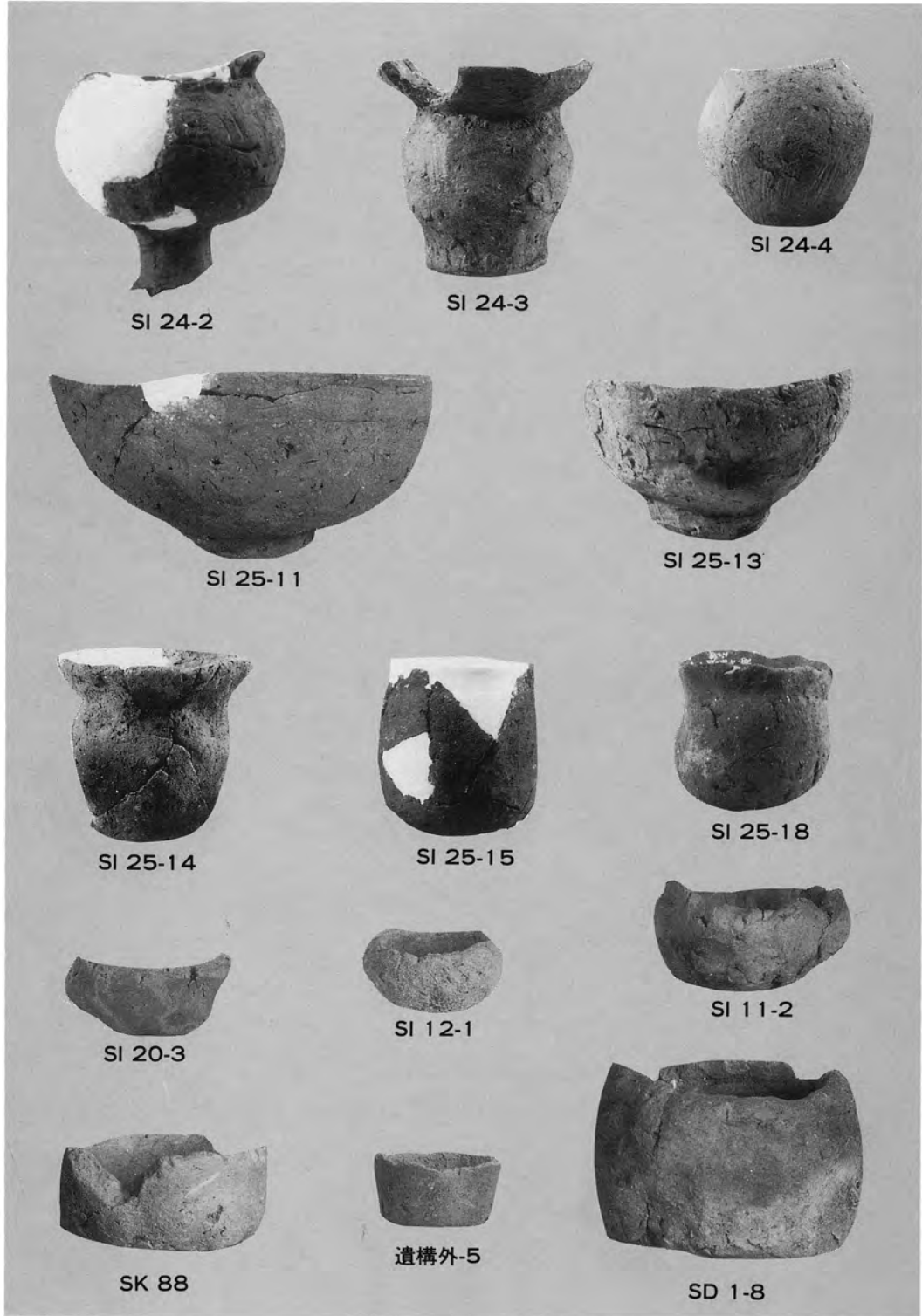
S = 1/4.5





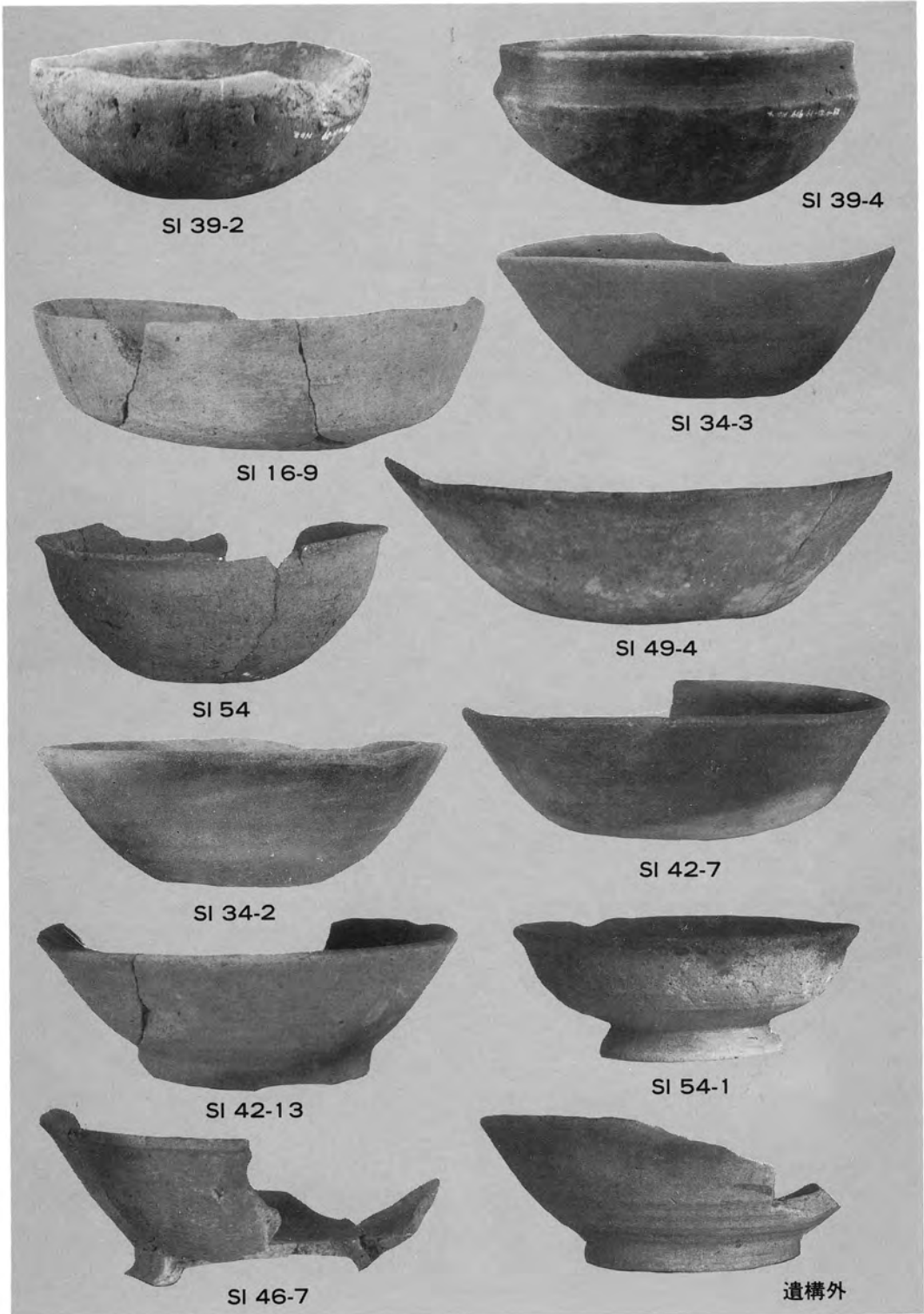
出土土器(3)

S = 1/3



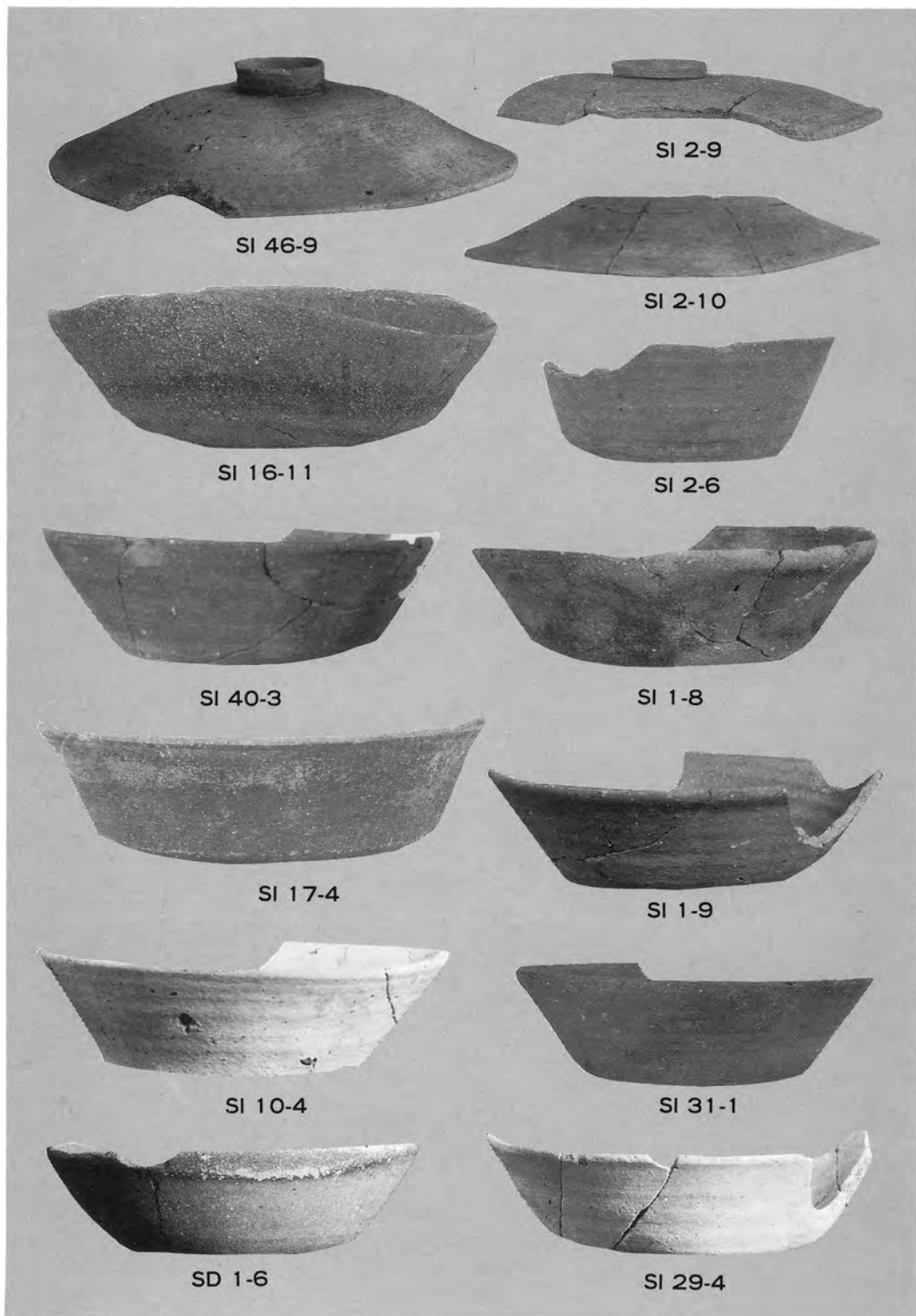
出土土器(4)

s = 1/2



出土土器(5)

S = 1/2



出土土器(6)

S = 1/2.3



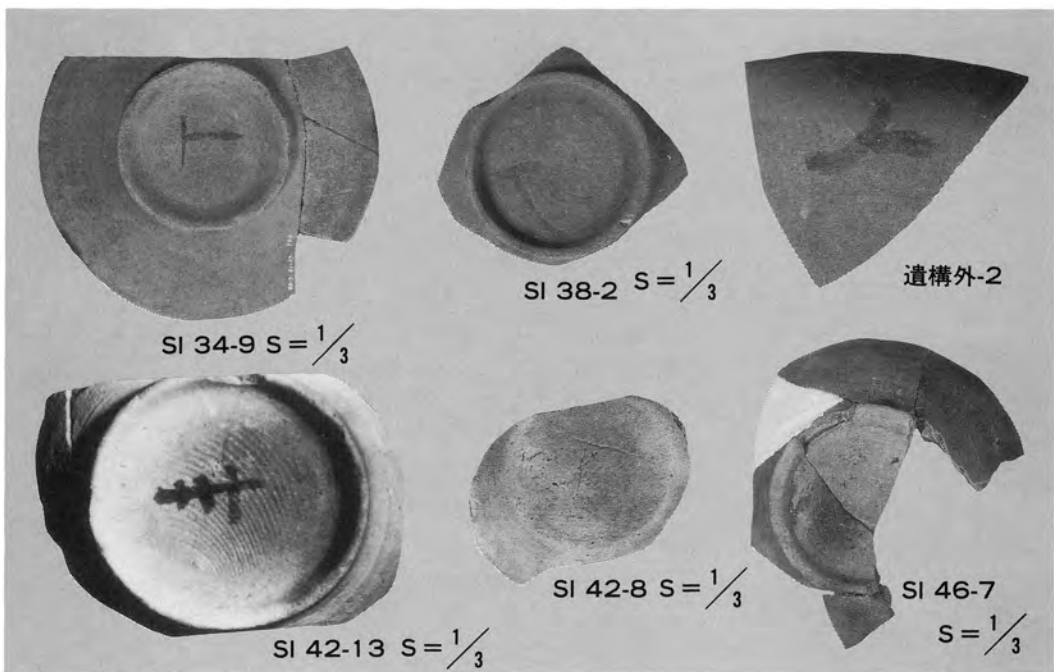
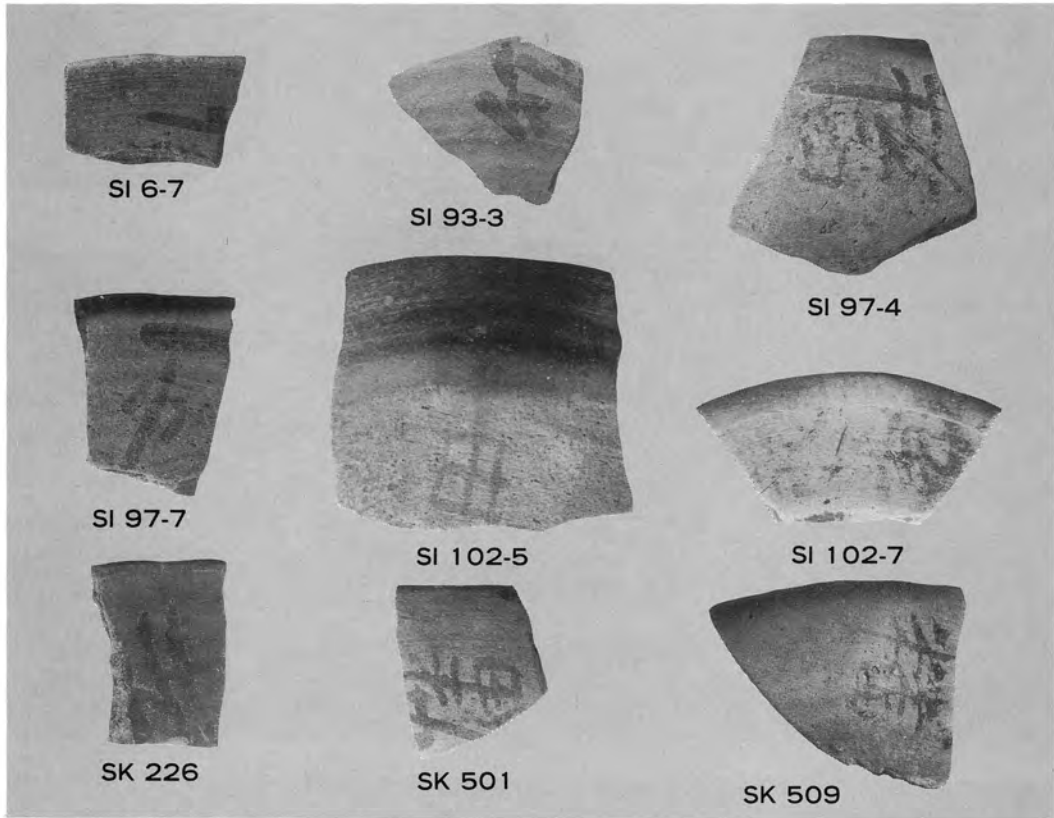
遺構外-1



SY1

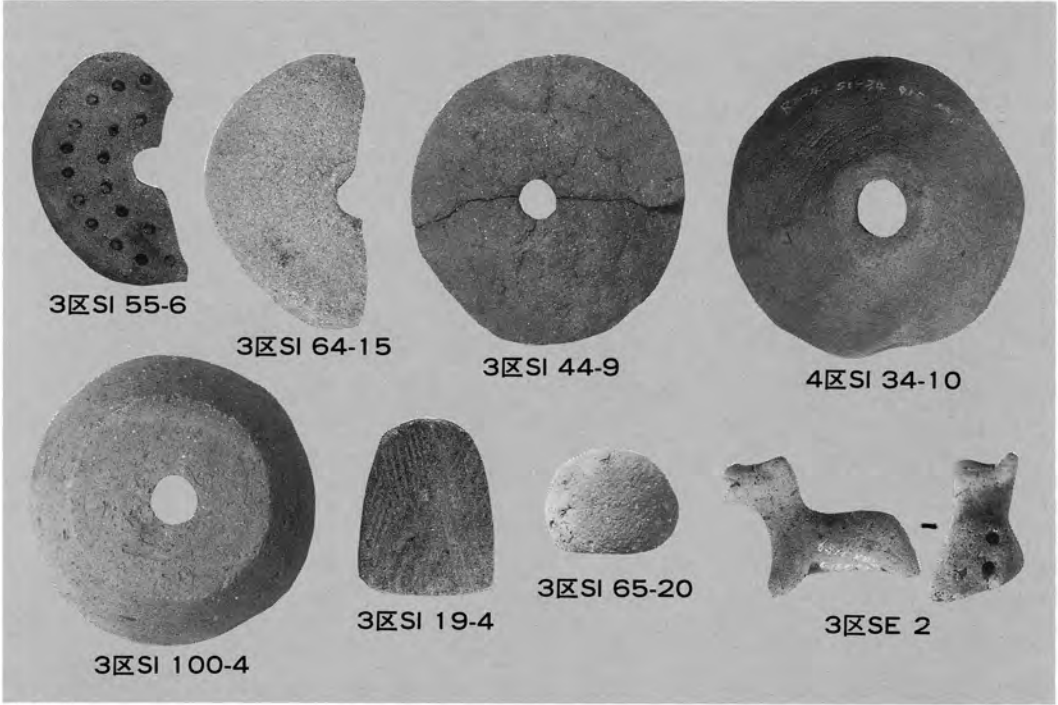
出土土器(7) 三筋壺・内耳土器

S = 1/3

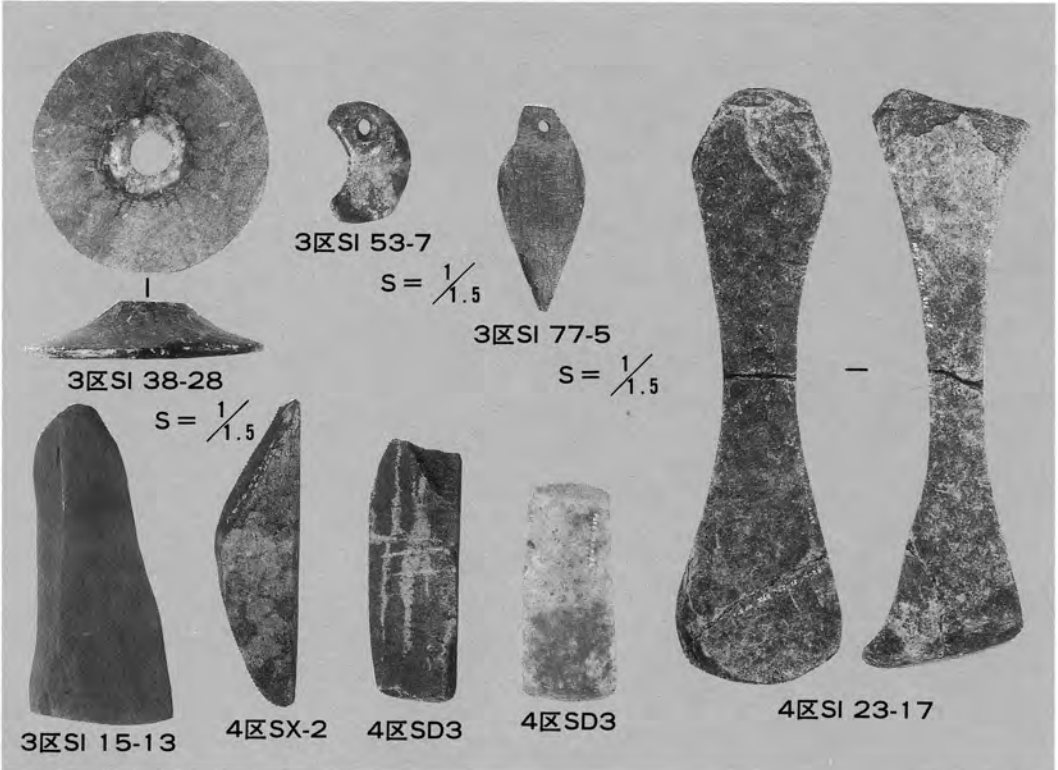


墨書・刻書土器 (上・3区, 下・4区)

S = 1/1.5

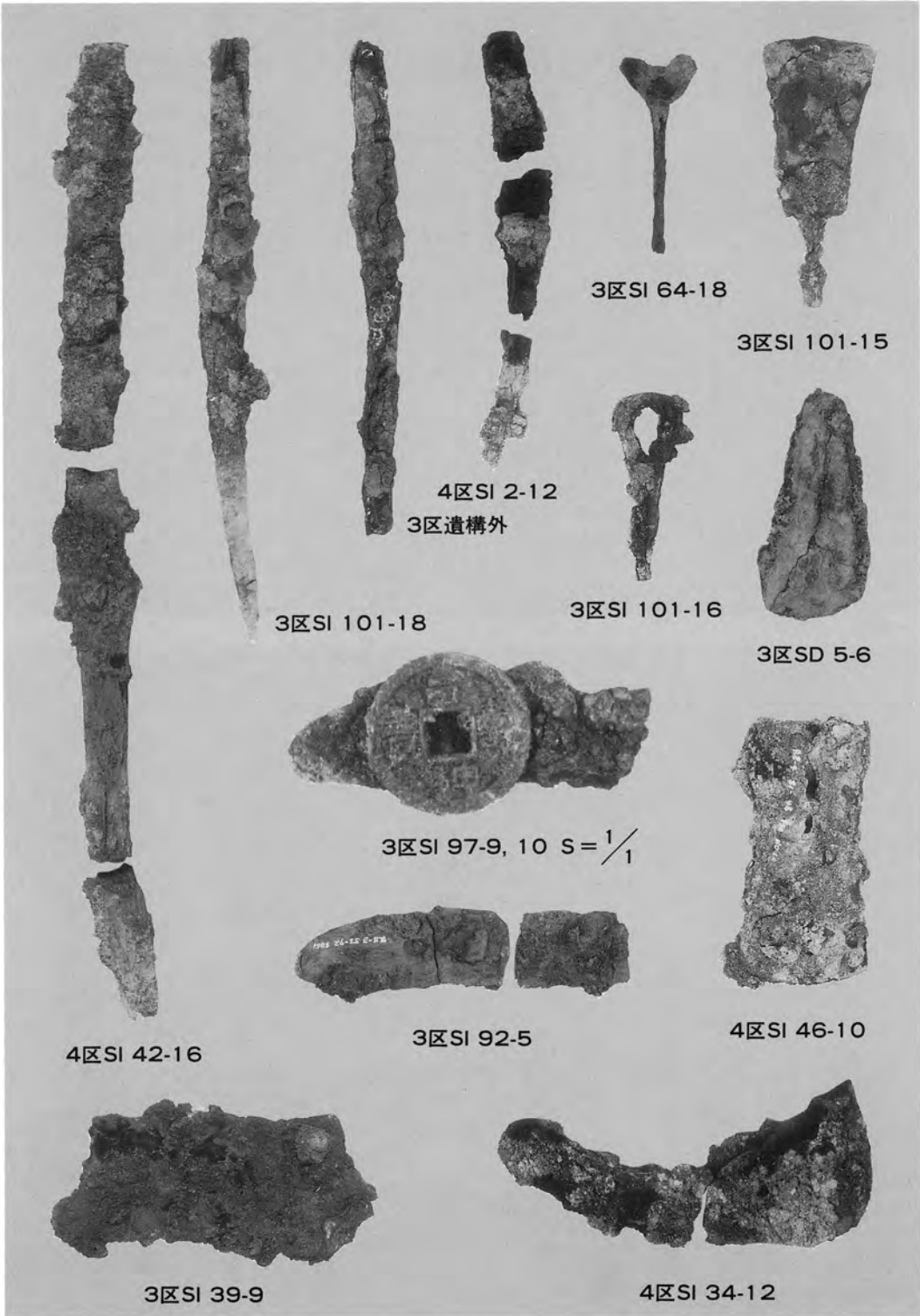


土製品



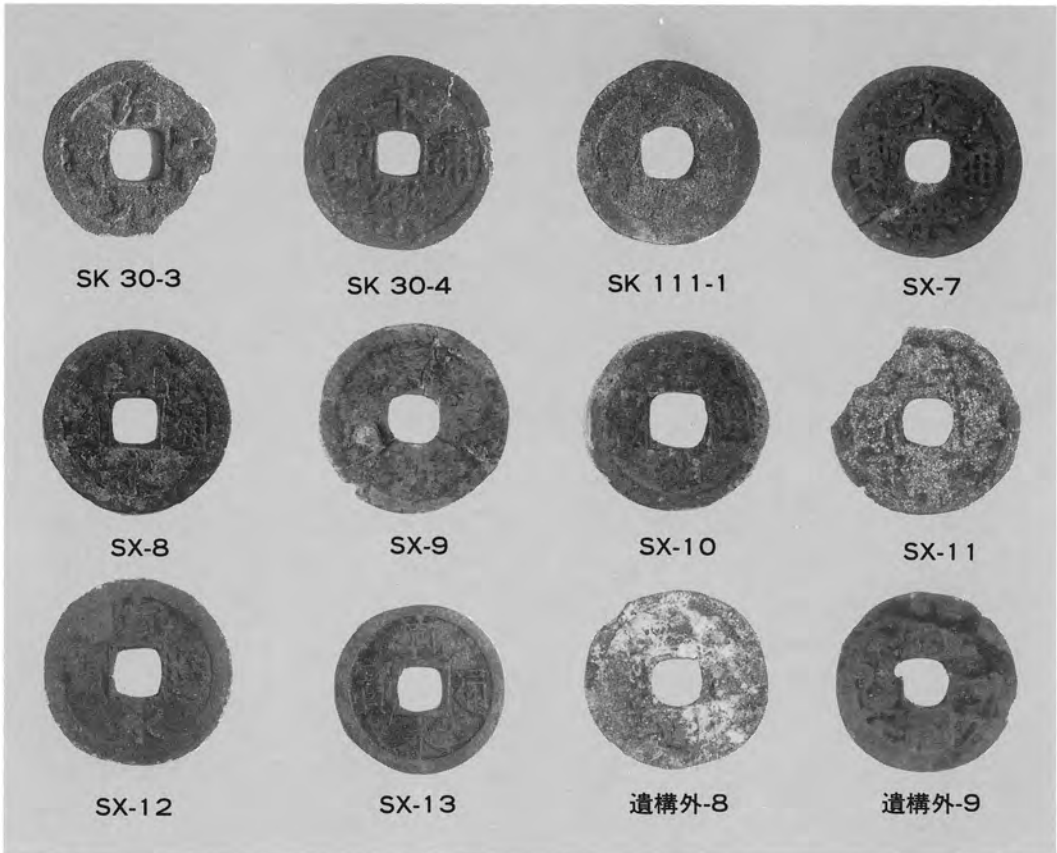
石製品

$S = \frac{1}{3}$



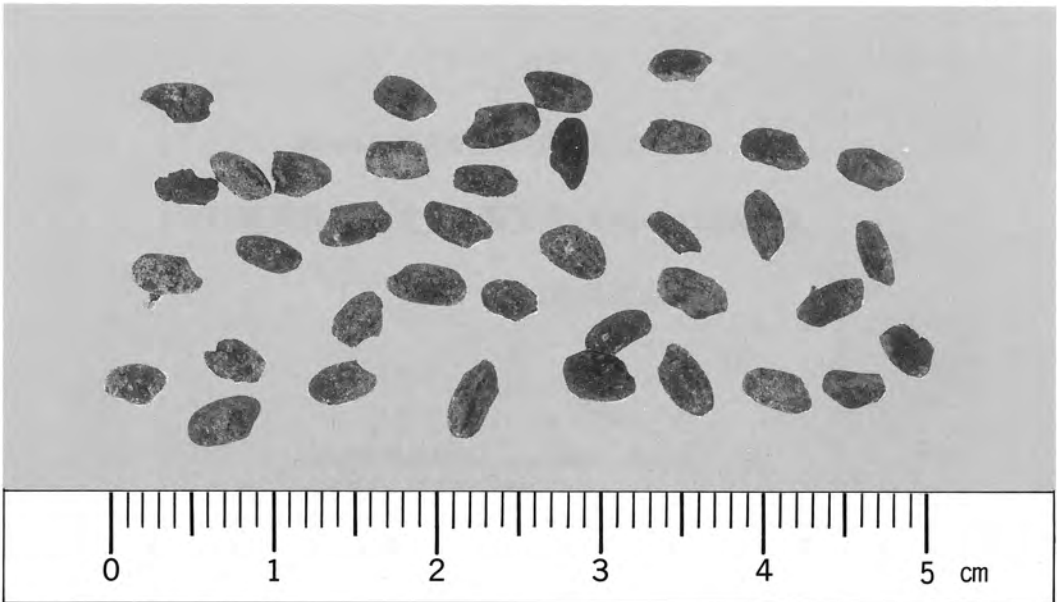
鉄製品

$s = \frac{1}{2}$



古銭

$s = \frac{1}{1}$



第25号住居跡出土炭化米

茨城県教育財団文化財調査報告第49集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書18

南三島遺跡 3・4区(II)

平成元年 3月25日 印刷

平成元年 3月31日 発行

発 行 財団法人 茨城県教育財団
水戸市南町 3丁目 4番57号

印 刷 株式会社 あけぼの印刷社
水戸市松が丘 2-6-24

